

I S ～現れたる神なる刃【凍結中】

混沌の魔法使い

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今回は夜天の守護者完結！という事で、アンケートで希望が多かった

ISの小説を新連載したいと思います。

基本的には原作通りですが、「夜天の守護者」のキャラが何人か登場しているのでそこまで原作通りではないと思いますが、どうかよろしくお願いします

目次

第24話	第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
232	223	212	202	190	184	174	165	151	136	124	111	100	89	81	71	55	42	34	27	17	11	8	1

第48話	正月記念	第47話	第46話	第45話	第44話	第43話	第42話	第41話	第40話	第39話	第38話	第37話	第36話	第35話	第34話	第33話	第32話	第31話	第30話	第29話	第28話	第27話	第26話	第25話
	偶には素直になってみよう																							
598	589	571	553	537	517	502	487	476	462	450	436	424	411	396	382	365	350	335	318	302	284	269	252	241

第 7 3 話
第 7 2 話
第 7 1 話
第 7 0 話
第 6 9 話
第 6 8 話
第 6 7 話
第 6 6 話
第 6 5 話
第 6 4 話
第 6 3 話
第 6 2 話
第 6 1 話
第 6 0 話
第 5 9 話
第 5 8 話
第 5 7 話
第 5 6 話
第 5 5 話
第 5 4 話
第 5 3 話
第 5 2 話
第 5 1 話
第 5 0 話
第 4 9 話

934 920 903 890 873 855 838 825 809 798 786 769 759 749 733 720 709 700 688 675 664 653 639 627 614

第9
8話

第9
7話

第9
6話

第9
5話

第9
4話

第9
3話

第9
2話

第9
1話

第8
9話

第8
8話

第8
7話

第8
6話

第8
5話

第8
4話

第8
3話

第8
2話

第8
1話

第8
0話

第7
9話

第7
8話

第7
7話

第7
6話

第7
5話

第7
4話

1253124312301217120511931175115911451127111411011090107910671052104110281014 999 986 976 966 952 943

第 1 3 3 話
第 1 3 2 話
第 1 3 1 話
第 1 3 0 話
第 1 2 9 話
第 1 2 8 話
第 1 2 7 話
第 1 2 6 話
第 1 2 5 話
第 1 2 4 話

1631162016101600158815801571156115521543

第1話

第1話

どうしてこうなった？俺は深い闇の中でそればかりを考えていた…千冬姉が出るISの世界大会「モンドグロツソ」を見る為に、ドイツまで来た…だが突然現れた黒い服の男達に連れ去れ、自分は今何処にいるかさえ判らない…どうすれば良いのか？これから自分はどうか？それだけを考えていると突然、建物が大きく揺れる

「な、なんだ!？」

地震ではない…もつと大きな爆発な様な衝撃に驚いていると。壁が突然切り裂かれ、黒い化け物が入ってきた…

「ヒヒ…見つけたあ。織斑千冬の弟…ヒヒヒ！」

俺を知ってるような、口調の化け物は笑いながら近付いてきて

「お前は役に立つ…殺して、俺の仲間にしてやる」

化け物が俺の首を掴もうと手を伸ばしてくる…逃げないといけな
いと判っているのに…意思に反して身体は動かない…

「千冬姉ッ！助けてッ!!」

思わずそう叫ぶ、その瞬間…

「一夏あッ!!」

千冬姉の声がしたと思った瞬間、俺の身体は真横に引っ張られた。それと同時に感じる浮遊感…ゆっくりと顔を上げると

「もう大丈夫だ、助けに来た」

今正に助けを求めた人…自身の姉である。織斑千冬が居た…

モンドグロツソ決勝の3時間前、一夏が誘拐された聞き、ドイツ軍に協力を頼み。辿り着いた研究所は既に何者かの襲撃を受けていた。建物の壁は崩壊し、あちこちから火の手が見える…その光景に一瞬最悪の結果を考えてしまうが…

「一夏…一夏は何処だ!？」

ただ1人の肉親の姿を求め、研究所の中に足を踏み入れた…

「何があつたんだ？」

研究所内のあちこちに血痕がある物の、負傷者や死者の姿は無い：もう脱出したのか？一瞬、この研究所の人間がどうなったのか考え込むが：

(今はそれ所ではない。一夏は何処だ)

ISのハイパーセンサーを最大にし、最愛の弟の姿を探し。明かりの消えた通路を進む：もつとも破壊の進んだフロアに差し掛かった時

「千冬姉ッ！助けてッ!!!」

一夏の悲鳴をセンサーが聞き取る、どうやら声は通路越しから聞こえてきたようだ：

「ここかつ!？」

他の通路より壁の薄い場所：倉庫か何かだろう：私は即座に雪片をコールし。その壁を切り裂いた：そして切り裂いた壁から私が見たのは：

(な、何だ！あれは!?)

思わず目を見開く、漆黒の鎧を身に纏う、人間ではない何かがそこに居た：一言で言うなら異形：そうとしか言いようが無い：それがゆっくりと一夏に手を伸ばす。全身の細胞が：戦士としての本能が叫ぶ。逃げる！この場から逃げろと！無意識に手が震える：だが：

(一夏を助けに来たんだろう！逃げるな織斑千冬！)

「一夏あッ!!」

異形に首を掴まれそうな、一夏の身体を自分の方に引き寄せ。そのまま雪片を向ける

「ち、千冬姉?」

「もう大丈夫だ、助けに来た」

そうは言った物の、ここから無事に逃げれる保障は何処にも無い：だが、せめて一夏だけが逃がしてみせる

「お前は何者だ?」

一夏の前に立ち塞がりながら、目の前に居る異形に雪片を向ける。「さあ?人間如きに名乗る名はねえな」

げらげらと笑いながら言う、異形はゆっくりと私の方を向いて

「織斑千冬、俺は貴様と弟を殺しに来たんだ…態々来てくれて感謝するぜえ？」

隙だらけの異形…今なら倒せる。私はそう判断し異形に斬りかかった…

「おお？」

スパン…

驚くほどあっさり、異形の左腕を切り落とせた…これなら勝てると思つた直後

「あーあー、俺の腕取れちやつたよ。まっいつか。自分でやる手間が省けた」

異形がそう言うと同時に、私が切り離れた腕が姿を変え襲ってくる。「な。何ッ!？」

腕は倍以上の大きさになり、私の身体に巻きつき。それと同時に凄まじい力で締め上げてくる

「が、がはっ!？」

「千冬姉ッ!？」

一夏の心配そうな声が聞こえる…だが…

(い…意識が…遠のく…)

凄まじいまでの力で意識が遠のいていく…それにISを持ってしても振り解けない力…

(こ、このま…までは…)

雪片で身体に巻きついてる物を切り落とそうとするが…

「おっと、そうは行かない」

異形が雪片を簡単に奪い、私の顔を覗き込んで

「折角捕まえたんだ…そう簡単には逃がさない。このままゆつくりと絞め殺してやるよ、お前もお前の弟も」

楽しそうに言う異形…このままでは私も一夏も殺される…せ、せめて…一夏だけでも…助けたいが…

「さて、そろそろ死んでもらおうか？」

ギユウウツ!!

「うっ！うわあああああッ!!」

更に凄まじい力で締め上げられる…それと同時に、バキツと言う鈍い音が全身から聞こえる…

「千冬姉ッ!?千冬姉ッ!?」

必死で呼びかけてくる一夏、それを見た異形は

「そうだ！先に弟を殺してやるよ。お前は絶望の中で死んでいきな」

異形が腰に下げた鞘から剣を抜き放つ…

「あ…ああ…」

一夏がよろよろと後退し、その場にへたり込む

「逃げなよ、その方が面白い。それとも怖くて逃げれないか…なら…死になよ!!」

異形が勢いよく剣を振り下ろそうとしたが…通路から投擲された剣に弾かれる…他の操者が来てくれたのか?薄れ行く意識の中、剣の飛んで来た方向を見ると

「そうはいかんよ、先のある子供をこんな所で死なせん」

燃えるような緋色の髪に、黄金色の甲冑を身に纏った男が居た…

「ば、馬鹿な!?な、何故貴様がここにッ!?」

動揺した素振りを見せる異形に男は

「答える義理は無い、滅びろッ!!」

一瞬の内に男は間合いを詰め、眩いばかりの光を纏った剣で異形の胴を穿った

「がっ!?ば…馬鹿な…この…俺が…」

異形はそう言うと、最初から存在しなかったように消え失せた

「げほっ(げほっ!!)」

拘束から解放され、激しく咳き込む

「大丈夫か?今治す」

男がそう言うと、男の掲げた左手から

「傷付いた戦士に天界の祝福を…ヘブンス・ヒール」

蒼い粒子が溢れ出し、私を包み込む…驚きその場から動こうとする
と

「動くな、治癒が遅れる」

男に強い口調で言われ、私は動くのをやめた…それほどまでの威圧

感のある声だった…

「千冬姉…」

心配そうな一夏に男は

「大丈夫、すぐによくなる」

「ほ、本当？」

一夏が涙目で尋ねると、男は

「ああ、本当だ。どうだ？まだ痛むか？」

「…何をしたんだ？」

さつきまで感じていた、全身の痛みは消え失せていた…それに驚きながら尋ねると

「悪いね。詳しく説明したいが…そうもいかん。まだ、この世界の人間に、私の存在を知られるわけにはいかないのでね」

男が私と一夏の頭に手を置いた直後、私は強烈な睡魔を感じ意識を失った…

「龍也さん、大丈夫ですか？」

姉弟の2人に睡眠魔法を掛けた所で、他のブロックを回っていたなのはが合流してくる

「問題ない、生存者は保護できたし。ネクロも倒せた、そっちはどうだった？」

「…こっちは生存者0です…」

暗い顔のなのはに

「仕方ない、私達は全力を尽くした。その上での結果だ…そうしよげるな」

「判ってます…判ってるんですけど…」

ぼんぼんとなのはの頭を撫で

「せめて、この2人が助かった事に感謝しよう。さてと…見たところ日本人だが…誰だろうか？」

眠っている2人をなのはに見せると

「あつ！この人あれですよ！IS世界大会の日本人選手」

「そうか、それなら大会の会場に連れて行けば良いか」

「そうですね。大会の開始時間まで後30分ありますし…充分ですね」

私はその言葉に頷き、転移魔法を発動させた…

『第2回モンドグロッソ優勝者は織斑千冬選手です!!』

会場の外の街頭TVを見てみると

「龍也さん、まだここに居るんですか?」

面白く無さそうなのにはにそう尋ねられ

「一応確認をな…ちゃんと記憶を消せてるかのな…」

あの姉弟の記憶をちゃんと消せたか、確認したいと言うとなのはは心配性ですね、最強の魔道師ともあろう人が…

その言葉に肩を竦める銀髪の男…実はこの2人はこの世界の人間ではない、魔法が発達した世界「ミッドチルダ」の魔道師で、その世界では知らぬ者が居ないほどの有名人。神王「八神龍也」と星光の女神「高町なのは」だ

「まあ念の為だよ。っと噂をすれば何とやら」

大会の会場から出てくる、先ほどの少年が見える…もしきっきの事を覚えてるなら。私達に気付くはずだが…暫く様子を伺っていたが

少年は何も言わずホテルの方へ歩き去っていく。どうやら記憶消去は上手く行ったようだ

「これで仕事は終わりですね!折角だから、このままデートと行きましょう!」

顔を覗きこみながら言うのはに

「やれやれ…仕方ないか。暫く観光でもするか?」

どうせまだ迎えは来ない、それまで遊んでいても良いだろう。だからそう呟くと

「い、良いんですか?」

驚いた表情のなのはに

「お前が言い出したんだろうが、行くぞ」

「は、はいッ!」

嬉しそうに歩き出すのはと街中に向かいながら

(まだ…終わってない、あの戦いは…)

半年前のヴェルガディオスとの戦いで全て終わったと思ったが、まだ
終わっていないネクロとの戦いは…

「龍也さん？どうしたんですか？」

立ち止まっている私を不審に思ったのか、立ち止まり尋ねてくるな
のはに

「ああ、悪い。少し考え事をな」

「自分で全部抱え込んだじゃ駄目ですよ？偶には私達を頼ってください
ね。その為の力は手にしたつもりです」

にこやかに微笑みながら言うのはに

「ああ、判ってる。頼りにしてるよ、なのは」

「はい！それじゃあ行きましょう！折角の2人きりなんですからっ
！」

私は今度こそ会場の前を歩き去った…そしてこの時から数年後…

私は再びこの世界に足を踏み入れることになる…

第2話に続く…

第2話

第2話

俺「織斑一夏」は悪友の「五反田弾」の自宅兼店舗の「五反田食堂」で

「お前、なんでISなんかに触ったんだよ」

「…場所間違えた」

「アホかつ!!おかしいと思わなかったのかよ!」

おかしいとは思ったさ。何で一番近い高校の試験で4駅も離れた場所に行かないといけないんだ?とか考えたさ

「でも、手紙でそこが指定されてたんだよ」

「そこでおかしいと思えよ。それでこんな様になってるんだろ?」

弾に差し出された新聞には「史上初!ISを動かせる男!

とデカデカと見出しがあり、俺の顔写真まで載せられていた

「で、しかも今日のはこれだ、「織斑一夏IS学園入学決定」だぜ?どうすんだよ。一級フラグ建築士がそんな所行って見ろ。お前月夜の晩に殺されるぞ?そもそもなんで入試場所間違えたんだよ?」

IS学園、10年前に発表された。最強の兵器なのだが、これは女にしか動かせない筈だった。だが試験会場におかれていたISに触れると、信じられないことにISが俺に反応したのだ。それからは怒涛の勢いで色んな事があつた。各国の大使にあつたり、日本のIS開発局に連れて行かれたり…とにかく大変だった。

「いや、IS学園と藍越学園って似てるよな?」

「似てねえよ!!所だよ、こんな都市伝説知ってるか?」

「突然だな、おい。で?どんな都市伝説だよ」

突然話を切り替えた弾に呆れながら、尋ねると

「黒い悪魔と黄金の騎士さ。聞いた事くらいあるだろ?この伝説」

「ああ、知ってる」

黒い悪魔と黄金の騎士。7年前ほど前からネット上で噂になっている伝説だ

「人を喰らう悪魔と、それと戦う黄金色の鎧を身に纏った騎士…一体何者なんだろうな？」

「…さあな。俺が聞きたいくらいだ」

「お前、この話し聞くと面白く無きそんな顔するな？何でだ？」

不思議そうに尋ねてくる弾。どうして俺がこの話を嫌いかというと…俺は会っているのだ。黄金の騎士にうつすらとしか覚えてないが、第2回モンドグロツソの開催地である、ドイツで確かに会っているのだ。緋色の髪をした精悍な顔つきの騎士に…

「まあ、良いや。それでその騎士なんだけどよ…」悪い、明日IS学園の入学式なんだ。ここら辺で帰るわ…そっか。悪いな引き止めて」
申し訳なそうに言う弾に

「いや、気にしなくて良い。じゃあな弾」

「良い子が居たら俺のこと紹介してくれよ」

楽しそうに言う弾に適当に返事を返し、五反田食堂を後にした

「黄金の騎士か…気になるよな…」

何者なのかとか？あの悪魔は何なんだとか？どうして俺を助けてくれたのか？とか聞きたいことは山ほどある。だから思う

「もう1回会って見たいな…あの騎士に…」

俺と千冬姉を助けてくれたあの騎士…俺はあの騎士を見てから強くなりたいたと願った。それから俺は身体を鍛えた、篠ノ之道場が閉じても剣術を続けた。強くなるために…そのせいか俺はかなりの体力と腕力を手にした…だがそれは俺の求める力ではない

「どこまで追いつけたんだ…それとも全く追いつけてないのか？」

天に昇る太陽に手を伸ばし握り締める。強さとは力では無い、それは判っている。だが強さとは何か？というのは何も判っていない
「届いてみせる、あんたの立つ高みに。そして手にしてみせる、誰かを護れる力を」

誰に聞かせるでもなく呟く。自分の願いを再確認するように呟き、俺は自宅へと戻った。

丁度その頃、IS学園では

「に…逃げ道が…ッ」

オレンジ色 I S 「ラファール」を纏った女性が壁際に追い詰められる。それを追撃するように煙を突っ切って男が飛び出してくる

「はああああッ!!」

美しい光沢を放つ漆黒の鎧、正確には I S なのだが…それを身に纏った男が剣を突き出す、それと同時に

「それまで!!64番合格だ!!」

その声を聞いた男は I S を解除すると

「それでは失礼します」

季節外れの黒いコートを翻し試験会場を後にした…それを見送る女性…黒のスーツにタイトスカートと女性の名は、織斑千冬と言った

「っ…強かったです…」

I S を解除し、座り込んだままそう呟く同僚を見ながら

「史上2人目の男の I S 操者か…」

彼女の手には先程の男だろうか?…その写真とプロフィールが収められていた…そこには『八神龍也 専用 I S 零式と書かれていた』

コツコツ…通路を歩く男の前に2人組みの美女が立つ。片方は白のワンピース、もう片方は黒のワンピース姿だ

「お疲れ、どうだった?」

「まあ、問題ないだろう。試験官は倒せたんだ、合格間違い無しだろう。お前達は?」

「私達も問題ないですよ。筆記も実技も完璧な出来です」

自信満々に言う2人の美女に

「そうか、それは何より。それでは行こうか…なのは、フエイト…」

「はいっ!!」

黒いコートの男は2人の美女を連れ、試験会場を後にした…そして明日 I S 学園で全てが始まる…

第3話に続く

第3話

第3話

俺は困り果てていた…クラスメイト（全て女子）の期待を込めた眼差しに…

（何をしろって言うんだよ…とりあえず状況を再確認しよう…）

心の中でそう溜め息を吐く、今日はIS学園の入学式。そして今は自己紹介の時、目の前に居るのは29名の女子、背後には恐らく涙目の副担任の「山田」先生が居る…状況確認は終了した。やるべき事は1つだ

「えーと、織斑一夏です。趣味は身体を鍛える事で、特技は剣術です。一年間よろしくお願ひします」

自己紹介を完璧にやり遂げる事だ。我ながら完璧な自己紹介だった筈だ…だが

パアンツ!!

後から凄まじい痛みを感じる…何だよ、自己紹介が不味かったのかよ…恨みがましい目で叩いた本人を見る。黒のスーツにタイトスカート…狼を連想させる鋭い眼差し…まあ俺の実姉の「織斑千冬」なんだけど。俺の視線を無視し、千冬姉は

「山田君、クラスの挨拶を押し付けて申し訳なかった。このクラスに入れる3人の手続きに少々手こずっていてな」

いつも通り冷静で威圧感のある声だ…もう少し優しさを…

パアンツ!!

「何か考えたか?」

「イイエ、何でもありませんママ。変な事を考えてすみませんでした」
これ以上変な事を考えれば、俺の頭蓋骨がいかれる。そう判断し謝ると千冬姉は判れば言いとってから、クラスメイトに

「諸君、私が君達の担任の織斑千冬だ。私は君たち新人を、1年で使い物になる操縦者にするのが仕事だ。私の言う事はよく聴き、理解しろ。逆らっても良いが…私の言う事は聞け。良いな?」

凄まじいまでの暴力宣言、だがクラスメイトの反応は違っていた

「キヤーツ!!千冬様ツ!!」

「ずっとファンだったんです!!」

「私、お姉さまのためになら、何でも出来ます!!」

とりあえず、一番最後発言者は千冬姉に近づけないようにしよう。

それが良い、なんかヤバイ気がする

「毎年よくこれだけ、馬鹿が集まる物だ。感心する、それとも私のクラスにだけ、馬鹿を集めてるのか?...まあ良い、貴様らに言っておくことがある」

千冬姉はそう言う俺を自分のほうに抱き寄せ

「コレは、私のものだ。もし色仕掛けなんぞ仕掛けてみる、地の果てまでも追い掛けて殺してやるからな」

：教室が静まり返る。そうだよ...これが千冬姉だよ、普段はクール美人だが、何かのスイッチが入ると途端に駄目なブラコンになる。つてそんな事を考えてる場合じゃない!!

「な、何言ってるんだよツ!!千冬姉ツ!!皆ドン引きしてるだろう!!つつうか放してくれツ!!」

クラスメイトの視線が痛い、特に幼馴染の篠ノ之箒の視線が死ぬほど痛い。何とかはなれようとするが

「だが断るッ!、お前は私のそばに居ればいいんだ...永遠に」

「いやいや、俺だって結婚とか、彼女とか考えたいから!永遠は無理だツ!!」

「私では駄目か?」

「無理だからツ!俺千冬姉嫌いじゃないけどツ!!俺達、姉弟だから!」

「愛さえあれば、問題ない」

「もうやだツ!!誰か俺を助けてくれツ!!」

何故かモンドグロツソ後から、こんな風になってしまった。何故なんだ?何故こんな風になってしまったのだ?あれか?あの黒い悪魔のせいか?千冬姉は何も覚えてないが、黄金の騎士と出会ってから超が付くブラコンになってしまった。一体何が原因なのか今も判らない。クラスメイトの反応は

「…姉と弟ってこういうのがあるって聞いたけど」

「初めて見ると結構引くね…」

「きつと外だから、織斑君も嫌がってるけど。満更じゃない筈よ」

「……ギロリッ!!」

ひそひそと話す女子の中から、凄まじいまでの殺気を感じる…間違いない筈だ、筈に違いない。だがここは俺の名誉の為にも言わなければ

「違う!!俺はノーマルだツ!!俺には好き…ツギヤアアアツ!!痛いッ!!痛いッ!!」

万力のような力で締め上げてくる、千冬姉を見ると

「私以外を女と見る事は許さん。指導室で教育してやる」

「嫌アアアアツ!!お願い!!誰か助けて!!俺の心に消えない傷がアアアアツ!!」

駄目だ!この状態の千冬姉と2人きりになれば、俺の全てが終る!

誰か助けて!そう思いクラスメイトの目を見ると

「「サッ!」」

「この薄情者達がアアアツ!!」

全員一気に目を逸らす。ちくしょう、誰でも良い助けてくれッ!!

「あのく織斑先生?手続きを終えた子は何時まで廊下で待たせるんですか?」

山田先生!貴方は俺の救世主だ!!よくこのブラコンモードの千冬姉に話しかけてくれた!!これで冷静になる

「むっ?忘れてた。とりあえず、一夏は席につけ。後でまた話し合おう、私達の今後について」

「絶対嫌だツ!!…ツギヤアアアツ!!話し合いますツ!!絶対に話し合いますっ!!だからアイアンクローは勘弁してくださいッ!!」

ギリギリと締め上げられる頭蓋骨、俺は痛みを屈しそう言うことしか出来なかった…

「絶対だからな?」

「はい、判つてます…」

しくしく…どうしてこんな事になってしまったんだろう?昔は格

好良かったのに…どうしてこんなブラコンになったの？俺は痛む頭を押さえながら、席に座った

「コホン、では新しい生徒を紹介する。入って来い」

咳払いしてから千冬姉が廊下に居る生徒を呼ぶ、がらりと戸を開けて入ってきたのは、男子が1人と女子が2人だったが…

「離れる、重い」

「嫌」

「嫌です」

何故か女子2人は、男子の背中にしがみ付いていた。とても幸せそうな顔をしているのが印象的だった、それに比べ男子は酷く消耗した顔をしていた

「何をしてる？」

「離れてくれないんです、助けてください」

男子がそう言うと、千冬姉が出席簿を男子の背中の女子2人に振り下ろす

パアンツ×2

「フギヤツ!!!」

十代乙女にあるまじき悲鳴を上げる。女子は頭が痛むのかその場に蹲る。背中から女子が離れた男子は

「助かりました。織斑先生」

「礼を言う暇があったら、自己紹介をしろ。HRの時間が無くなる」

HRの時間が無くなったのは。千冬姉のせいではないでしょうか？俺はそう思いながら、男子の顔を見て目を見開いた

「八神龍也だ。1年間よろしく頼む」

何故か黒いIS学園の制服に、黒のロングコート（暑くないのだろうか？）腰元まで伸びた銀髪に、右目の切り傷のある。凄まじいまでの美形だ…だが、俺が気になったのは容姿ではない（に、似てるッ!!）

その男子は恐ろしいまでに黄金の騎士に似ていた。記憶にある物より少し若いがそっくりだった…俺が混乱していると

「高町なのはです！好きなのは龍也さんで、嫌いなのは龍也さんに言

い寄る女です。よろしくお願いします」

「フェイト・T・ハラオウンです。好きなのは龍也、嫌いなのは龍也に色目を使う全ての存在です」

「………思わず黙り込む、何この2人？千冬姉と同類？そんな事を言つて恥かしくないの？」

「………もう嫌だ、私に平和な学生生活はありえないとでも言うのか？」
何かを堪えるように天井を見上げる、八神の姿を見て俺の脳裏に浮かんだのは

(苦勞人だ。俺と同じタイプの……)

きつと八神はあの2人を恋愛対象と見ていないのだろうか。それなのに言い寄られて困っている……同じだ、俺と全く同じだ

(きつと仲良くなれる。共感しあえるはずだ、放課になったらすぐ話し掛けよう。そうだ、それがいい)

この時、俺の頭の中から八神が黄金の騎士ではないのか？という考えは吹き飛んでいた。この時俺の頭の中にあつたのは同じ苦勞人に遭遇した事への喜びだった。そんな事を考えてるとチャイムが鳴つた

「さあ、SHRは終わりだ、諸君らには半月でISの基礎知識を覚えてもらう、その後は実践だが基本操作は半月で身体に染み込ませる良いな？良いなら返事をしろ、良くななくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

なんと言う鬼教官……目の前の姉は人の皮を被った悪魔なのだろうか？いや悪魔の方が融通が利くか？俺がそんな事を考えてると

「少なくともお前には優しいぞ、一夏♪」

俺を横目で見える千冬姉の言葉は聞かなかつた事にしよう。それがいい

「八神は一番後ろ、その両隣は高町とハラオウンだ。早く席に着け」

「はい……」

「はいっ♪」

悲しげに一番後ろの席に向かって行く八神と、それと正反対に、嬉しそうに歩いて行く2人が席に座つた所で

「それでは授業を始める、教科書16pを開け」
千冬姉の言葉と共に授業が始まった…

第4話に続く

第4話

第4話

「あー」

俺は机の上で死んでいた…1時間目のIS基礎理論の授業が終わって今は休み時間、けれどこの教室内の異様な雰囲気は正直居心地が悪い…ちなみにIS学園はIS関連教育をするために入学式から普通に授業がある、学校の案内？地図を見ろだそうだ

(だがしかし…どうにか成らないのか？これは…)

俺はISを使える1人目の男で、もう1人は教室の奥にいるが…

「……」

「ギロリツ!!」

本を読んでいる八神と、その両隣の…えーと、高町さんとハラオウンさんが近付いたら殺す！と言いたげな視線で周りを睨んでいる為、ぶつちやつつけ超怖い。だが俺にとっては頼もしい味方になってくれるかもしれない、八神…早目に話しかけたほうが良いと思い。俺は勇気を振り絞って八神の方に向かった、俺の接近に気付いた八神は読んでいた本を閉じた。ちなみに高町さんとハラオウンさんは、俺を止めはしなかった。男だから自分達の敵ではないと、判断してくれたのかもしれない

「何か用か？」

俺を真っ直ぐに見る蒼銀の瞳に一瞬身が竦むが何とか

「いや、ほら俺と八神って、クラスで…と言うかこの学園で唯一の男子だろ？だから仲良くしたいなって思ってたさ」

俺がそう言うと龍也、にこやかな笑みを浮かべながら

「龍也だ」

「はっ？」

突然そう言われ、俺が困惑すると龍也は

「龍也で良い、八神と言われるよりかはそっちが良い…私も一夏と呼ぶ、それで良いだろう？」

そう言って手を差し伸べてくる龍也に俺は

「ああ…ああよろしく！龍也」

俺は龍也と握手した瞬間強烈なシンパシーを感じた、俺は

「龍也って妹とか居ないか？」

「一夏は姉が居ないか？」

2人で同時に同じ質問をし、頷きあう

「それで姉に貞操を狙われてるとか？」

「妹に貞操を狙われてるとか？」

再び頷き会う。そして

ガッ！ガッ！！パン！パンツ！グッ！！

お互いの拳をぶつけ合い、最後にお互いに力強く握手する。こんな所に俺と同じ悩みを持つ男子が居るとは…IS学園も満更ではないな

「何してるんですか？龍也さん」

「なのは、ここに私と同じ悩みを持つ。男が居た、私はどうやら良き友人に出会えたようだ」

嬉しそうに言う龍也に

「姉弟なのに…異性として見られるって辛いよな」

「ああ、辛い。出来る事なら考え直して欲しいと常に思う」

2人でうんうんと頷きあっていると。ハラオウンさんが

「一夏、さつきから女子が凄い顔で見てるんだけど…知り合いじゃないの？」

そう言われて振り返るとそこには…

「…箒？」

六年ぶりの再会となる幼馴染の篠ノ之箒が居た、俺が通っていた剣道道場の子で髪型は今も変わらずポニーテール。

「廊下で良いか？」

そう尋ねてくる箒を見ながら横目で龍也を見ると

「私は気にしなくて良い」

本を読み始めた龍也に頷き俺は箒と一緒に廊下に出た…

織斑一夏、まさか私と同じ悩みを抱えているとは…この世界で私は

理解者を得た事に歓喜していた…

「まさか、龍也と同じ悩みを持つてる男子が居るなんてね」

「そうだよ。そんなのはやてちゃんくらいだと思ってたよ」

驚きという感じで言う2人と話していると、授業開始のベルが鳴った。私は読んでいた本を片付け、代わりに教科書を取り出した

(うん、読んでいて良かった。ある程度は判るぞ)

ISの本を読んでいて良かったと私が思っている

「織斑君、八神君、何か判らない点はありませんか？」

そう尋ねてくる山田先生、教師として合格点だ。悩んでいるかもしれない生徒に声を掛けるとは…私が感心していると、一夏が手を上げ

「先生…」

元氣よく言う一夏、やる気があるんだな、と思っただが…次の瞬間脱力した…

「殆ど全部判りません!!!」

私は思わず椅子から落ちかけた、殆ど判らないとはどういうことだ？私が困惑していると。山田先生が

「ぜ、全部ですか。も…もしかして八神君もですか？」

そう尋ねてくる山田先生に

「いえ、大丈夫です。ある程度は理解出来てますから」

私がそう返事を返すと

「そうですか…安心しました」

ほっとした表情の山田先生の後ろで織斑先生が

「織斑…参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました!」

私は一夏に少し呆れた、間違えるなよ…大事なものだぞ…

「織斑、好きな方を選ばしてやろう。私と放課後、マンツーマンで教えられるか。夜、私の部屋で勉強するか…どっちが良い？」

「それは選択肢がないと言うのと同じだツ!!」

放課後か夜か、位の差しかない…一夏がそう言うと、織斑先生は

「そうか、放課後、私と勉強して。夜も私と勉強したいと…お前はそう言うんだな？」

「違う！そんな事になったら千冬姉は俺を襲うだろう!!」

一夏がそう言うのと織斑先生は真顔で

「襲うのではない。捕食するのだ」

「余計酷いわッ!!!俺は龍也に教えてもらおう！良いだろ、龍也！」

助けてくれと視線で訴えてくる一夏に頷き

「男同士という事で私が責任を持って、一夏の勉強を教えます」

「ucci…そうか、それならお前に任せるぞ」

舌打ちしながら言う織斑先生…何故だろう？はやてがダブって見える…私はその事に戦慄しながら、教科書に視線を戻した。ちなみに山田先生は一夏に声を掛けようとして、織斑先生に睨まれ、びくびくしながら私の方へと方向転換して

「八神君ですよ、判らない事があつたら聞いてください…何でもないです」

「ギロリッ!!!」

両隣の魔王様2人に睨まれ、涙目で山田先生は教卓へと戻った…そんなハプニングがありながらも2時間目も終了した

2時間目の放課後

「助かったよ、龍也。下手をすれば俺は喰われていた」

心底安心したという表情の一夏に

「私も同じ様な危険が常に付き纏っている、いざとなつたら助けてくれ」

両隣の危険人物を指差しながら言う

「当然だ、必ず助ける」

グッ!

お互いに握手をしていると

「ちよつと、よろしくて?」

「へ?」

「何か?」

間抜けな返事をする一夏に呆れながら声を掛けて来た女子を見る、鮮やかな金髪に白人特有のブルーの瞳…そして僅かにロールが掛かった髪はいかにもお嬢様という感じだ(アリサに似てる気がする)

「訊いてます？お返事は？」

そう尋ねてくる女子に

「私は返事をしたか？」

私がそう言うと言女子は

「貴方ではないですわ、織斑君に言ってるのです」

そう言われた一夏は

「ああ、訊いてるけど。どういう用件だ？」

私は一夏の返答に呆れた。こういうタイプの女子はこういう反応をする……

「まあ！なんですよそのお返事、私に話しかけられただけでも光栄なのですから、それ相応の態度があると言うものではないのですか？」
やっぱりな、典型的なお嬢様か……どこにも居るんだな、こんなタイプ、私がそんな事を考えてると一夏が油に火を注ぐ

「悪いな、俺。君が誰か知らないし……」

目の前の女子の目が鋭くなる、明らかに怒っている。それに男を見下したよう口調で

「知らない？このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生にして、入試主席のこの私を？」

そう言うセシリアに一夏は

「あ、質問良いか？」

こいつまさか、私は嫌な予感がした……そしてそれは的中した。セシリアは少し気を良くした様で

「ふん、下々の者の要求に応えるのも貴族の務めですわ、よろしくてよ」

「代表候補生って何？」

私とクラスの数名の女子がずっこけた、こいつ本当に馬鹿か？スバル並みか？私がそんな事を考えているとき突進少女はくしゃみをしていた……

「あああ、貴方本気でおっしゃってますの!？」

怒ってる……むちゃくちゃ怒ってる。私はセシリアの怒声を聞きたくなくて、本を開きこのやり取りを脳の外に追い出す事にした。だが

それは直ぐにやめることになった、それはセシリアのある一言が原因だった：

「ふん。まあでも私は優秀ですから、貴方のような人間にも優しくしてあげますわよ」

この一言で私は激しく苛ついた、私はこういう高飛車な人間は嫌いだ。私が苛ついていっているとセシリアは胸を張りながら

「入試で唯一教官を倒したエリートなのですから」

私はその一夏が馬鹿を言う前に

「私も倒したぞ」

「俺も倒したぞ？」

「私も倒したよ？」

「私も」

なのはとフェイトも試験官を倒したと言うとセシリアは

「わ、私だけと聞きましたか？」

シヨックを受けるセシリアにフェイトが

「試験官が私にダメージを与えなかったから、学園側から言わないでくれて言われたし、ね。なのは」

「うん、あんまり強くなかったよね、あの試験官」

2人があははと笑いながら言うと、セシリアはよろ付きながら

「そ、そんな…馬鹿な…」

ピシ：何か嫌な音を聞いた、氷に輝が入るようなそんな音だ…恐らくこの高飛車なお嬢様のプライドに輝が入った音だろう

「つ、つまり私だけではないと？」

「いや、知らんよ」

「貴方達も教官を倒したって言うの!!」

なのはとフェイト、更に私を指差し激昂するセシリアに

「倒したぞ」

「そんなに威張る事じゃないと思うけどね」

「うん、だって弱かったし」

前線で戦い続けた、2人にとってこの世界の試験官は取るに足りない程度のレベルしかない…ネクロで言うといいところLV2…はつき

り言って雑魚だ…私がそんな事を考えていると、一夏は首を傾げながら

「うん…まあ、多分あれは倒したと言えると思う」

歯切れ悪く言う一夏にセシリアが

「多分!?多分ってどういう意味かしら!?!」

「落ち着け、怒ると身体に良くないぞ?」

「これが落ち着いていられ…」

セシリアがそう言いかけた所でチャイムが鳴る

「っ!また後で来ますわ!逃げない事ね」

そう言っって席に戻っていくセシリアを見ながら、なのはが

「なんか嫌な感じの子ですね」

「そうだな、だがああいうタイプは自滅するぞ」

教導中に何度かああいうタイプを見たので、2人で頷きあっている
と

「席につけ、授業を始めるぞ」

織斑先生が入ってきたので、私は席につき教科書の準備を始めた:

「それではこの時間は実戦で使う各種装備の特製について説明する」

1、2時間目と違って織斑先生は教壇に立っていた…よほど大事な事なのか山田先生もノートを取っていた

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦の代表を決めないといけないな」

思い出したように言う織斑先生は説明を続ける

「クラス代表はそのままの意味だ、対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や、委員会に出席してもらう…まあクラス長だな…ちなみにクラス対抗戦は、入学時点の各クラスの実力を測るためのものだ、勿論今の時点で対した差は無いが、競争は向上心を生む、一度決まると1年間変更は無いからそのつもりで」

私はその説明を受けていると女子が手を上げ

「はい!!織斑君を推薦します!!」

女子の1人が一夏を推薦する。何とまあ、可哀想なことだ…私がそんな事を考えていると、なのはが

「私は龍也さんを推薦します!!」

「私も龍也を推薦します!!」

「おい!私は面倒事は嫌いなんだぞ!」

私かなのはとフェイトに怒鳴っていると、織斑先生が

「代表候補は織斑一夏と八神龍也:他に居ないか?もし居ないなら、2人を多数決で決めるぞ?まあ私は一夏を推すが…」

さり気無く私情を挟む織斑先生にセシリアが

「このような選出は認められません!!大体男が、クラス代表だなんていい恥さらしですわ!私に!このセシリア・オルコットにそのような屈辱を1年間味わえと言うのですか!」

セシリアか:相当プライドが高いようだな:プライドなど何の役にも立たないのにな、それよりも今起きている問題は:セシリアよりも:

恥:?:龍也か?」

「ムカつくね。あの子…」

爆発寸前の爆弾が近くに出来た事だ:日本と男を馬鹿にするような事を、言い続けるセシリア、そろそろなのはとフェイトが爆発寸前のところで一夏が

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ?世界一不味い料理で何年覇者だよ」

どうやら一夏が先に切れたらしい、私は一夏が言ってるので、言う訳にもいかず椅子に深く座りなおした。セシリアは一夏を睨んで

「あ、あなたねえ!!私の祖国を侮辱するしますの!?!決闘ですわ!!」

バンと机を叩くセシリアに

「おう、良いぜ四の五の言うよりわかりやすい」

喧嘩を買うか、相当自信があるようだな。まあしなやかながらに鍛えられた体付きをしているから、何らかの格闘技をやっているのだろう:私がそう思っているとセシリアが

「何を知らん振りしてるのです!!貴方もですよ八神龍:ひつ!」

私を呼び捨てした事で、なのはとフェイトの我慢が限界を超えたらしく

「いい加減にしなよ？貴方なんか、龍也さんに掠る事さえ出来ないんだから…」

「自分が1番だ何て、自惚れが過ぎるんじゃない？命のやり取りもした事がない癖に…」

殺気を放ちながら立ち上がる、なのはとフェイト…完全に切れる。ハイライトの消えた目が死ぬほど恐ろしい

「自分の力量も判らず…龍也さんに勝負を挑む…身の程知らずにも程がある」

「私が叩き潰してあげようか？骨の1本や2本の怪我じゃすまないけどね？」

濃厚な殺気を撒き散らす。なのはとフェイト…それに対するセシリアは

「……」

瞬きも呼吸さえ出来ず、そこで硬直していた…私は溜め息を吐きながら

「そこまでしておけ。弱い者いじめはするな」

なのはとフェイトの頭の手を置きながら言うと、2人は

「でも…」

納得行かないらしく、反論する2人に

「気にしていない、私はここでは無名だ。だが1度戦えば判るだろう。自分がどういう存在に喧嘩を売ったのかをな…セシリア・オルコット！決闘をしようじゃないか。私が勝つのは目に見えているがな」

私がそう言うと、織斑先生は手をパンと叩き。充滿していた殺気を消し飛ばし

「さてと、話は纏まったな。それでは勝負は1週間後の月曜、放課後第3アリーナで行う、織斑と八神、それにセシリアはそれぞれ準備をしておけ。それでは授業を始める…」

そうしめてから、授業が始まった…私は授業を聞きながら

（一夏のレベルがどれほどか知りたいな、少しばかりは一緒に訓練した方が良さだろうし）

一夏の体付きからして、何らかの武術をしているのは一目で判る。

だからどれ程のレベルなのかを知りたいと思った。それに一緒に訓練できるレベルなら、訓練したほうが良いに決まってるし。レベルが足りないなら鍛えれば良い。私はそんな事を考えながら…シヤールペンを走らせた

第5話に続く

第5話

第5話

「うう…」

放課後、俺は机の上でぐったりしていた…

「い…意味がわからん、なんでこんなにややこしいんだ…」

俺はぐったりしながら後ろを見ると

「…離れる」

「いや♪」

「苛々したので、気分を落ち着ける必要があるんです♪」

龍也の両腕をがっちりとホルドしている、高町さんとハラオウンさんが見える。嬉しそうな2人と対照的に疲れた表情の龍也が可愛そうだった…

「織斑君、八神君。それに高町さんにハラオウンさん、まだ教室に居たんですね、良かったです、話があるのでこっちに来てくれますか？」
俺達を呼び寄せる山田先生。

「何の用でしょうか？」

俺が尋ねる前に尋ねる、龍也に山田先生は

「えつと…寮の部屋が決まりましたって言う話です。これが寮の鍵です。それと高町さんとハラオウンさんは希望通り、八神君と同じ部屋にしました」

さらりと問題発言する、山田先生に龍也が

「何故?!男と女ですよ!?!どうして一緒に部屋に!?!」

驚愕という表情で言う龍也に山田先生は目を逸らし

「断れば、惨殺されそうだったので…」

…惨殺?誰に…?俺が首を傾げているとハラオウンさんが

「山田先生?余計な事を言う…死期を早めますよ?」

ハイライトの消えた目で、山田先生を脅す…犯人はこの人か!?

「ちなみに織斑君は…織斑先生と同じ部屋です…」

「先生!あんたは俺を見捨てるのか!?!」

あのブラコンと同じ部屋だと!?!命が幾つあっても足りないぞ!?!俺

がそう怒鳴ると

「だ、だって！断れば撲殺されそうだったんです!!」

泣きながら言う山田先生に

「…すみません。あの人の危険性は俺が一番理解してるのに、責めてしまつて…」

「理解しているとは嬉しい事を言つてくれるじゃないか♪一夏」
後からギョツと抱きしめられる。

「放して！お願い！俺は禁断のラインを超える気はないから!!!」

必死にもがきながら言う、千冬姉は驚くほどあっさり、俺を手放し。溜息を吐きながら

「職権乱用だと怒られた。残念だが…お前は別の部屋だ…」

本当に残念そうに言う、千冬姉。ナイスだ！誰が怒つてくれたんだ？

「理事長め、首にされなくなつたら一夏との同室を諦めろ。等と言うんだぞ？酷いとは思わないか？山田君？」

ナイスだ理事長！名前も知らないが。俺は今あんに強烈に感謝してるぜ！

「そ、そうですね〜あはははは」

山田先生に同意を求めていたが、山田先生は目を逸らし笑うだけだった

「まあ、そう言うわけだ、寂しいと思うが我慢しろ一夏」

「いや、寧ろ嬉しい…ツギヤアアアツ!?肋骨が肋骨がミシミシと悲鳴をオオオ!!」

嬉しいといった瞬間、ベアハッグで締め上げられる

「寂しいよな?」

これで頷かなければ折られる、俺はそう判断し。痛みを我慢しながら

「は、はい!!お姉さまと離れ離れで寂しいです!!」

「そうだろう、そうだろう。私も寂しいが、我慢する。お前も我慢しろよ?」

「はい…我慢します」

俺は痛む脇腹を擦りながら頷いた…

「うむうむ、後で部屋に様子を見に行くから、ちゃんとしておけよう。」
嬉しそうな千冬姉から部屋の鍵を受け取り、俺達は教室を後にした
「折られると思った…」

「大変だなお前も」

しみじみ言う龍也に俺は

「お前ほどじゃないと思うぜ?とこで重くないのか?背中に2人も乗ってるが?」

背中にしがみ付いてる、高町さん達を指差しながら言う

「もう慣れた:最大で4人に同じ事をやられるから…」

「お前、一体何人に好かれてるんだ?」

俺がそう尋ねると、龍也は哀愁漂う表情で

「14人:その内11人は病んでる…」

「どんな状況なんだ!?お前は!」

半分以上ヤンデレと言う、下手をすれば殺されかねない状況の龍也にそう尋ねると

「常に唇を狙われているとだけ言っておこう。後は毎回風呂を覗かれる…」

悲しそうに言う龍也に

「逆だからな!それ普通は逆だからな!!俺も同じだけどつ!!」

千冬姉も同じ事をしようとするので、共感できるが。俺とは人数が違いすぎ、そう突っ込むと

「龍也さん、部屋こつちみたいですよ?」

高町さんが背中に乗ったまま、別の方向を指差す。

「どうやら私はこちらのようだ。ではな一夏また明日」

「おう…頑張れよ」

俺は龍也にそう返事を返し、自分の部屋へと向かった…

「さて…この部屋で暮らす上での取り決めをしようじゃないか」

「取り決め?」

首を傾げるのはとフェイトに

「この囲いの中が私の陣地だ。入ってくるなよ？」

パーティーションで自分のベッドと、小さな椅子と机を囲む

「そんな事しなくても良いよ。皆で使えば良いじゃない？」

フェイトがその囲いに手を伸ばしながら言うが

「これは私自身を守る為の物だ。勝手に外すな」

その手を掴んで、「良いか？」と前置きをしてから

「お前達は最近常識が無さ過ぎる。男を襲うなんて通常の思考回路とは思えない」

私がそう言うと2人は

「そうかな？」

「おかしいかな？」

「そこで本当に不思議そうな顔するの禁止ッ!!」

本当に不思議そうな顔をする2人にそう怒鳴る：前はもう少しだけまともだったのだが：どうしてこうなってしまったのだろうか

「そこでだ、ここで1度私はお前達から距離をとろうと思う。ここで暮らしてる以上、常識を伴った行動をするんだ良いな？」

「え〜」

「え〜ッじゃないっ!!」

不満そうな顔をするのはとフェイトに頭痛を覚えながら、説明を続ける

「この囲いの中にお前達が入るのは禁止だ。入ったら2時間口を利かない」

「横暴だ!」

「そして、寝てる間に私を襲おうとしたら、1週間口を聞かないし、ご飯も作らない」

「そんな! 生殺しだ!!」

頭痛が激しくなるな…：こいつらは一体何を考えているんだ

「そして、最後に私の服を勝手に回収したら：はやてに連絡する」

「卑怯者ッ!!」

口を揃えて言う2人の手元を指差し

「お前達が今その手に持つてるのは？」

「龍也さんのYシャツ」

「龍也のTシャツ」

「それが原因だ！この馬鹿どもがっ!!!」

2人の手からYシャツとTシャツを取り上げる

「一応警告したからな、今度は無いぞ」

取り上げた服を自分のベットのの上に投げ

「さて、話は決まった。夕食に行こう」

食堂に行こうと言いながら、自分の部屋の入り口を開ける

「「はっ?」」

薄着の女子たちの群れが見える

「……」

パタン…

見なかったことにして、扉を閉め

「なのは、フェイト…仕事だ。部屋の前に居る薄着の女子たちを部屋に戻せ」

「了解」

扉に向かうのはとフェイトと入れ違いで自分のベットに腰掛ける。暫くすると外から

「龍也は私の!!近寄るなーッ!!!」

「龍也さんは私の何です!!消えなさいっ!!!」

ガーツ!!!

凄まじいのはとフェイトの怒声を聞きながら

「女子って思ったより行動力があるのかな?」

私の中の女子のイメージが180度変わり始めていた…女子とはもつと恥じらいとかを持つてるものではないのか?どうしてあそこまで簡単に服を脱げるんだ?私には理解できない

「それとも、ここと六課が特殊なのか?そう言う人材ばかりが集まっているのか?どっちなんだ?」

私の知ってる女子だけがおかしいのか、このIS学園がおかしいのか、はたまた両方なのか?私には判らなかつた…

「龍也、女子を追い払ったよ」

「さっそく、夕食に行きましよう」

なのはとフェイトにそう声を掛けられ

「あ、ああ。今行く」

考え事を中断し、部屋の外に出ると

「「ゴメンナサイ：ゴメンナサイ：八神君に色目使ってゴメンナサイ
…」」

ぶつぶつと繰り返し呟く生徒の音が、あちこちから聞こえてくる

「…お前達…何をした？」

軽くトラウマになっていているだろうと思い、なのはとフェイトに何を
した？と尋ねると2人は私から目を逸らしながら

「少しお話を…」

「恐怖を教えてあげたんだよ？」

どうやら私の人選ミスだったようだ…心に外傷を負ったと思われる
女子たちに心の中で謝罪し。私は食堂に向かったのだが…その途
中で

「一夏！私以外の女に現を抜かすとはお話だ!!」

「いやあああ!?!これは事故！事故なんだ!!箒何とか言ってくれ!!」

「…プシューッ…」

「オーバーヒートしてる!?!」

「一夏!!くらえっ!!」

「ギヤアアアアアッ!!頭蓋骨から聞こえてはいけない音がアアアアッ
!?!」

「握り砕く!!」

「フギヤアアアアッ!!指が！食い込んでる!?!どんな握力をして…「ふ
んっ!!」…フギヤアアアアッ!?!」

一夏の悲鳴が途絶え、代わりに

「お前は私だけを見れば良いんだ…永遠に」

小さな声の筈なのによく聞こえた、織斑先生の呟きに

(この世界にもはやてに似た人が居るとは…恐ろしいな平行世界)

はやてに似たオーラに戦慄しながら私は1025室の前を通り過

ぎた…

(明日、一夏無事に授業に出れるだろうか?)

部屋の中から流れてくる赤い物を見て、私は一夏の無事を祈った…

第6話に続く

第6話

第6話

「一夏、昨日何があったんだ？」

頭に包帯を巻きぐったりしてる、一夏に尋ねると

「…箒は寝巻きは浴衣なんだ」

「それで？」

説明になつてないのでそう尋ねると一夏は。顔を赤くしながら

「足滑らせる↓俺を助けようと箒が来る↓俺の手が箒の帯を掴む↓浴

衣がはだけ押し倒してしまふ↓魔王光臨↓ゴッドフィンガー」

要点だけ言う一夏に

「そうか…災難だったな」

「おう…頭がまだ痛てえ…」

涙目の一夏と話をしていると

「……………」

無言で箒が一夏の前を通り、自分の席につく…頬は赤く、どこか落ち着きがない

「…怒ってるみたいなんだ…どうすればいいと思う？」

一夏がどうすれば良いかと？尋ねてくる。私は暫く考えてから

「そうだな…昼食にでも誘えば良いんじゃないのか？そこで謝るとか

？…。「はあ…」おい。何故そこで溜め息を吐くんだ、なのは・フェイ

ト」

大きく溜め息を吐く、なのはとフェイトに尋ねると

「別に何でもありません、ただ龍也さんと同レベルの人が居たことに驚いてるんです」

？…？という事だ？私と一夏が同レベル？なにが…？2人で首を傾げていると

「私、箒フォローしてくる。何か可哀想」

フェイトはそう言うと、箒の方に行ってしまった。残された私と一夏は

「私と一夏が同レベルってどういう事だ？」

「俺と龍也が同レベルってどういう事だ？」

なのはにそう尋ねた…なのはは溜め息を吐きながら

「自分で考えましょうね？胸に手を当てて良く考えてみてください」

そう言うとなのはも箒の方に行ってしまった。

「どういう意味だと思う？」

「判らん…」

鈍感男×2は授業の開始のチャイムが、なるまでしきりに首を傾げていた

キーンコーンカーンコーン

授業の終わりを告げる、チャイムが鳴ると山田先生が

「あつ…えつと次の時間では空中における。IS基本制動をやりますからね」

次の授業の事を言って、出て行く山田先生を見てると

「ねえねえ織斑君さあつ！」

「はいはい！質問しつもん!!」

「今日のお昼ヒマ？放課後ヒマ？夜ヒマ？」

俺がその怒涛の質問ラッシュに困って龍也を見ると、龍也は

「龍也、これお願い…破けちゃったの…直るかな？」

「んー？ああ、ちよつと待ってろ」

鞆から裁縫道具を取り出し

「全く、すぐに制服を破いてどうするんだ？」

「へへ…ごめんね？ちよつと、厄介事があつてね？」

そう笑うハラオウンさん…その厄介ごとがなんなのか。俺は激しく気になった…噂では昨日寮で金色の死神が出たらしく。それは十中八九ハラオウンさんだろう…当事者達は何も言わずただ、「ごめんなさい」と言うだけ…一体昨日何があったのか？それを気にせずにはいられない…

「織斑君？変な事を考えると…死期を早めるよ？」

ゾク…ささやく様な小さな声なのに、それは俺の耳に届いていた…

その声の方を見ると

「にこり…」

絶対零度の笑みを浮かべた。高町さんが居た…俺は無言で頷き。視線を戻した…

「千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの!?!」

俺が視線を戻した所で、1人の女子がそう尋ねてくる。俺は暫く考えた後で

「え?...案外だらし...ふっぎやああ!?!頭がアアアアツ!!!」

ムンズと頭を掴まれ持ち上げられる

「一夏?お前はまだ私とお話したいのか?」

後ろから聞こえてくる、魔王の囁き...俺の前で顔を青くし、ブルブル震えている女子...一体千冬姉はどんな顔をしてるんだ?気になるが後ろから頭を掴まれているので、振り返れない

「一夏?人に言えないような事をしてやろうか?」

その囁きを聞いて俺は

「すいませんでした。お姉さま...俺が悪かったです。ですから御許しください」

俺が即座に白旗を揚げると

「ふん...判れば良い、判ればな...さて...馬鹿ども、私は言ったよな?一夏に近付くなど...一度...死ぬか?」

「すいません!もう話しません!!」

バタバタと走り去る女子...千冬姉...生徒脅すの止めようよ

「私は教師の前に1人の女だ。自分の者を奪う奴に容赦はしない」

「...考え方を変えてください、俺と貴方は実の姉弟ですよ?」

獲物を見る目をしている千冬姉にそう言うと

「さてと...休み時間は終わりだ。授業を始めるぞ」

「無視?!俺の言葉を聞いてなかったような、リアクションは止めてくれ!!」

俺の言葉をとことんを無視し、授業を始めようとする千冬姉...どうして...どうしてこんなったんだ...

(世界はこんな事じゃなかった事ばかりだ...)

俺が絶望していると千冬姉が思い出したように

「所で一夏。お前のISだが準備まで時間が掛かる」

「へ?」

間拔けな声で返事を返すと、千冬姉はもう一度

「予備機が無いんだ、だから少し待て。学園で専用機を用意するそう
だ、良かったな一夏」

上機嫌で言う千冬姉…その背後では

「…弟の為に専用機を用意しろって…折角カスタム型の「打鉄」用意し
てたのに…はあ…また書類の作り直しです」

どこかの苦労人の呟きが聞こえていた…だが俺は

「??」

その言葉の意味が判らず、首を傾げると。周りの女子たちが俺に
答えをくれた

「せ…専用機!?1年のしかも、この時期に!」

「つまりそれって、政府からの支援が出てるって事で…」

「ああ…いいなあ…私も早く専用機欲しいな」

何か特別な事とは理解できた、しかしそれ以上が理解できず。首を
傾げていると

「教科書6ページ音読しろ」

言われた通り、ページを開く…長いので要約すると「IS」には数
に限りがあり、専用機とは1人の操縦者の為にカスタムされた特別な
機体との事だった

「お前の場合は、初の男性操縦者だ。データ収集を目的とし、護身用の
意味も兼ねて専用機が用意される事になった、理解できたか?」

その言葉に頷きながら

「な、なんと無く…でもそれじゃあ龍也は?」

俺がそう尋ねると千冬姉は

「八神は既に自分のISを持っている。勿論。高町とハラオウンの2
人もだ」

その言葉に教室がざわめく、既にISを持っているという事はかな
り衝撃的だった…その後。箒の事で一騒動あったが、後でフォローし

ておけば良いだろうと。俺は思つて授業を受けた…そして休み時間に

「龍也、お前のISってどんなのだよ?」

気になって尋ねると龍也コートの中に手を突っ込み中から

「これが私のIS…零式だ」

剣十字のクロスに白と黒の翼が交差したペンダントを見せてくれる。龍也…

「私達はこれだよ」

高町さんとハラオウンさんも、待機状態のISを見せてくれた、星と月をイメージしたのであろう、綺麗なペンダントだった…俺が3人のISを見ていると。後ろから

「安心しましたわ、まさか、訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

相変わらずですね…セシリアさん…休み時間に態々教室の奥の龍也の席まで来て言う…やほど暇なのだろうか?龍也は直ぐにコートの中に零式を戻した

「まあ?勝負は見えてますけど?流石にフェアではありませんものね」

そう言うセシリアは自信満々の表情をしていた

「何で?」

訳が判らなくてそう尋ねると

「あら?…存じないのね…良いですわ庶民の貴方には教えて差し上げましょう、この私、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生…つまり現時点で専用機を持っていますの」

自信満々に言うセシリアに

「へー、でも龍也達も持つてるぞ?」

専用機持ちがすぐ隣に3人居るので、そう言うと

「持っていても、つかいこなせなければ意味がありませんわ」

どうやら、返事が気に食わなかったようで。苛ついた素振りを見せるセシリアに

「いや、判らないだろ?戦ってみないと」

俺も武術をするからわかるが、3人とも恐らく何らかの武術をしている…それがISに反映するかどうか判らないが、強いのは間違いないだろう

「戦わなくても判りますわ！私の圧勝です！」

両手で龍也の机を叩く、龍也は少し嫌そうな顔をしていた…

「…こほん…話を戻しましょう。授業でも言ってたでしょう？世界でISは467機、つまりその中でも専用機を持つ者は、全人類60億人の中でもエリート中のエリートなのですわ！」

丁寧の説明するセシリアに

「そ…そうなのか」

「そうですわ」

「人類って今60億越えてたのか…」

素直に驚いて言うのとセシリアは

「そこは重要ではないでしょう!!」

再び龍也の机を叩く、やはり嫌そうな顔をする龍也…ちなみにその隣では高町さんとハラオウンさんが黒いオーラを出し始めていた…

「あなた！本当に馬鹿にしていますの！」

「いやそんな事はしてない」

「だったら何故棒読みなのかしら？」

セシリアに指摘されたがはて？何故だろう？

「何故だろうな？箒」

箒にそう尋ねると箒は

「……え？何か言ったか？」

ぼんやりとされていて。俺の言葉を聞いてなかった…よほど昨日のが嫌だったのだろうか…ちゃんと謝っておかないと

「良いですか！このクラスでクラス代表に相応しいのは私、セシリア・オルコットであるという事をお忘れなく！」

そう言って教室を後にするセシリア…やっと演説が終った…やれやれ…俺は溜め息を吐いてから。箒の机の傍に行つて

「箒」

「な…なんだ一夏？」

目をキョロキョロさせながら返事をする箒に

「一緒に昼飯に行かないか？色々話してみたいし」

主に昨日の事についての謝罪とかを…

「むっ…そ、そうだな…積もる話もある。一緒に行くとするか」

何度も頷いてから立ち上がる箒と共に俺は、食堂へ向かった…

「さーてと、私達も昼食にするか？」

一夏と箒が教室を出て行ったので、私達も昼食にしようという

「あつ、それなら屋上で食べよう！何か解放されてるんだって」

フェイトが楽しそうに言う、私はそれを聞きながら

「そうか…今日は良い天気だし。外で食べるのも良いかもな。よし良
くか」

「はーい」

私はなのはとフェイトと共に屋上に向かった…

「はー、美味しかった♪」

「ご馳走様でした♪」

笑顔で言うなのは、フェイトに

「うむ、気に入って貰えて何よりだ。昨日から作ってたしな」

今日の昼食のメニューは、ポテトサラダにローストビーフサンド、
後は卵とマヨネーズであえたパスタだ

「うーん。良い天気だし、ピクニックみたいですね」

「学校の屋上だがな？」

笑いながら3人で、談笑をしていると

「そう言えばさ、龍也。剣道場に行くとか言ってたけ？」

思い出したように言うフェイトに

「ああ、一夏がどうやら箒と試合するらしくてな。見に行くついでに
身体を動かしておこうと思ってな」

私のISは万能タイプだが、基本は近接だ、身体を動かして感覚を
掴んでおきたい

「ふーん。龍也でもそう思うことあるんだ？」

そう言うフェイトに

「ああ、私は非才の身だからな。色々工夫しないといけないのさ」

魔力は増えたが。基本的に私は一流には届かない。魔力と経験ではなのは、フエイトには勝てるが純粋な才能で言えば、私はかなり劣る…故に工夫が必要なのだ

「お父さんもそう言えばそんな事言っていましたね…龍也君は決して一流には届かないって…」

「一流になるには努力だけでは駄目なんだ。才能が必要になるのさ…だが二流が一流に勝てぬ道理はない。ありとあらゆるものを使えば二流でも一流に勝てる…私はそう思うよ…さてとそろそろ時間だ…教室に戻ろうか?」

広げていた弁当を片付けながら言うと

「そうですね、戻りましょうか」

「おくれると怖いもんね」

3人で弁当箱を片付け。私達は教室へと戻った…

第7話に続く

第7話

第7話

「勝負だ、一夏」

放課後の剣道場で箒と向かい合うが…

「その前に1つ言っとく事がある」

「なんだ？」

首を傾げる箒に俺は

「俺がやってるのは剣道じゃない…俺のは剣術だ。まあお前も同じだ
と思うが…」

「何が言いたい？」

「ああ、つまり俺が言いたいのは…剣道という型の中の動きを俺がす
ると思うな。という事だ」

胴や面、箒手しか攻撃しないけどなと付け足し。片手で竹刀を構え
る

「行くぜ、箒」

「ああ！」

さあ…見てもらおうか箒…俺がどれくらい強くなったのかを！

むっ…凄まじいまでの気迫だ…私は竹刀を両手で構え、そんな事を
考えていた…片手で竹刀を構える、一夏は隙だらけの様に見えるが…
その実際は殆どない…

(どうでる…)

本来私は二刀流だ…本来の動き・技には少々届かないかもしれん…
まずは様子見をと思っていると

「行くぜ!!」

シュツ!!

鋭い踏み込みと同時に一夏が突っ込んでくる

(突きか！)

踏み込みと鋭い腕の振りを組み合わせた、鋭い突きが放たれる。反

射的に横に半歩動くが

「甘い!!」

キュツ!!

一夏はそう言うのと強引に自分の動きを止め、そのまま半回転しながら横薙ぎの一撃を放ってくる

「くっ!!」

竹刀の柄でそれを受け止めるが…

(お…重い!?)

尋常ではない程に一夏の一撃は重かった…男と女とか…そう言うレベルではない重さだ…だがそれよりも

「おおおっ!!」

凄まじい気合と共に放たれる一撃。その全てが過去の一夏を上回っている…

(凄まじいまでの修練の結果だ…)

同じく剣を収める者だから判る…ここまで来るのに一夏がどれ程の努力をしたかが…

(だが私と負けはせんぞ!)

同じかそれ以上の相手との勝負は本当に久しぶりだ

「はあッ!!」

「!?」

攻撃の隙を突いて、突きを放つが。一夏はそれに気付き、自ら後ろに跳びそれを回避する

「漸く本気か?」

「ああ…」

防具越しだからよく判らないが、一夏は笑ってるのだろう

「お前も強くなつたな…6年前とは全然動きが違つてて驚いたぜ」
楽しげな一夏が片手ではなく両手で竹刀を構える

「お前もな…」

私も同じ様に正眼に竹刀を構え直し

「準備運動は充分だよな?」

「ああ…ここからは真剣勝負だ!!」

純粹にどちらの力が上なのか…今の私はそれを知りたかった…そして恐らく一夏も同じだろう…

「はあああッ!!」

渾身の力を込め。竹刀を振り下ろした

「くう…きつきまで三味線ひいてやがったな!!」

先ほどとは比べ物がない鋭い横薙ぎが放たれる

「っ…それはお前も同じだろう!!」

その一撃を柄で受け流し、そのまま面を狙って振り下ろすが

「ふんっ!!」

「なっ!？」

一夏は気合を入れた拳で私の一撃を叩き落す

「行った筈だぜ！俺のは剣術だつてな!!!」

「ぐっ!!!」

鋭い胴が放たれる。回避できずそれをもろに喰らう

「これで一本…もう終わりか？」

「冗談を言うな…次は私が一本を取る」

竹刀を肩に担ぎ笑う一夏に

「この負けず嫌いが」

「お前だって同じだろうが。6年前私に何度負けた？」

6年前の事を言うと一夏は

「まあ…沢山負けたな」

「そうだろう?」

はははは、昔を思い出しお互いに笑いあう

「でも。今は違うぜ?」

「ああ、それは判ってる」

お互いに正眼に竹刀を構え直す。こんなに楽しい勝負をこんなに早く終らせるつもりはない…一夏がそう言ってるような気がした…

「行くぞ、今度は私が一本を貰う」

「そうは行かないさ」

今の私には周りの目などどうでもよかった…この一時…この一瞬だけは一夏を独占できる。そう思うと不思議なほど気分が高揚し

た…

「行くぞ！一夏!!」

「ああ!!」

まだ、終らせたくない。終わりたくない…私はそんな事を考え一夏の勝負に臨んだ…

放課後、剣道場に行く…そこには

「俺の勝ちだ…」

「ああ。そうだな…」

箒の喉元に竹刀を突きつけている一夏がいた。2人とも目に見えて消耗していて、激しい試合だったのが一目で判る

「強くなったんだな…どうしてそこまで強くなれたんだ？」

箒が面を外しながら一夏に尋ねると一夏は

「箒…強いつて何だ？」

「？何を言っている？お前は強いではないか？私に勝ったんだぞ？」

箒がきよとんとした表情で尋ねると一夏は

「力はつけたつもりだ…でもこれは本当に強さか？力があることが強いのか？…違うだろう？…俺が求めている強さはこれじゃないんだ…」

一夏はどうやら、力と強さは別物だと考えてるようだ…これは良い傾向だ、力に溺れず。強さの意味を考える…それを考える事が出来るのなら、一夏はもっと強くなれるだろう

「ふむ、難しい事を考えているのだな。一夏」

「龍也！見てたのか？」

私に気付いたのか、そう尋ねてくる一夏に

「最後の方だけな？…しかし、強さか…難しい事を考えているな？」

「…おかしいと思うか？」

若干不安そうな一夏に

「いや、素晴らしい事だと思うよ。力はただ力に過ぎない。では強いとは何か？…それは誰にも判らんさ」

人それぞれ強さの定義は違う。私にとっての強さとは…誰かを護れる力…しかしそれが万人に当て嵌まるとは、限らない

「だが、私に言えるのはただ一つ「答えは己の中にある」…それ位のものさ」

「妙に達観してるな。龍也は」

「ふむ、年寄りくさいだけなのかも知れんぞ?」

座り込んでいる箒にそう言いながら

「悪い、少しばかり竹刀を貸してくれ」

「構わんが?」

箒の手から竹刀を借りる…少々短いが…まあ良いか

「一夏、ひとつゲームをしないか?」

「ゲーム?」

オウム返しに尋ねてくる一夏に

「簡単なゲームさ。私の一撃を受けれるかどうか?と言うな」

「へえ…面白そうだな。ルールは?」

「私の攻撃を止めれたらお前の勝ち。防がれたら私の負け…三本勝負でどうだ?」

「良いぜ、乗った!!」

乗り気な一夏…箒との勝負で気分が高まつてるのもあるのかもしれない。お互いに距離を取り

「では…行くぞ」

「ああ!!」

一夏が竹刀を構える…良い構えだ。自ら打って出るのも、相手の攻撃に反応するのも…自由自在の一般的な構え…だが…

「それでは私を止めれんよ」

スパーンツ!!

「?!?」

剣道場に鋭い音が響く…叩かれた本人は、驚いた表情をしている

「まずは一本…さて?一夏、私の攻撃が見えたかな?」

一夏の後ろから声を掛けると

「通り抜け様に…面…いや…胴か?…全然反応出来なかった」

ほう…私の動きは見えていたか…中々恐ろしい動体視力だな

「正解だ。だが外れでもある。私は面・胴・籠手の3連撃を打ち込ん

だ。速過ぎて判らなかつたかな？」

「っ!?…後2本だよな？」

やる気満々という表情の一夏…良いね、若者はこうでないよ（外見年齢16歳、内面24歳の達観している。龍也）

「ふふ…気が引き締まった様で何より。では2本目と行こうか？」

「おう」

一夏は言葉短くそう返事を返し、腰だめに竹刀を構えた

（ふむ…見えないのならカウンターで防ぐか…悪くない考え方だな）

目を閉じ、意識を集中してる一夏…気配を感じ取る為に視界を自ら閉じる…

「それで防げるかな？」

「！ふっ!!」

カッーン…

「ぐっ…手が痺れる…」

一夏の手から竹刀が弾け飛ぶ、私は一夏の前で

「居合いでのカウンター…狙いは良かったが。同じ事をされては耐えれまい？」

本来居合いとは待ちの剣技。だがやりようによっては自ら攻めにも使える…踏み込みや体重移動が難しいが。不可能ではないのだ

「一夏…これを」

「サンキュ」

箒が弾けとんだ竹刀を拾い、一夏に手渡す。一夏はそれを2度3度と振るい

「ふー…ツシヤッ!!今度は止めるぜ龍也！」

大きく息を吐き。気合をいれ構えを取る

（剣先を下に…軸足に体重を…？狙いは何だ？）

剣先を下にし体重を後ろに掛けている…これではカウンター狙いにしては、反応が遅れるし…防ぐにしても剣先が下なので対応が遅れるはず…

（狙いは何だ？…勝機があるのか？）

一夏の狙いがわからない…だがあの自信に満ちた表情。何らかの

勝機があるはず…

(さてさて…どんな事をしてくるのかな…楽しみだ)

「行くぞ」

「ああ」

考えるよりも行動。一夏の行動を考えるより、自ら動く…私はそう判断し竹刀を構え、大きく踏み込んだ

「ツ!!だあツ!!」

「?!?」

踏み込んだ直後、一夏が竹刀を私目掛けて投げつけてくる。咄嗟に竹刀をぶつけてそれを弾くが

「でやああツ!!」

「ちイツ!!」

突っ込んでくる一夏の拳を膝で防ぐ

「まだまだ!!」

初撃を防がれるのは予想通りだったのか。そのまま手刀を突き出してくる

「ふっ!」

「なっ!?!うお!?!」

それを掌で流し、そのまま一夏を背中に背負い投げ飛ばす

「痛てえ…」

腰を打ちつけたのか。腰を擦る一夏に

「残念だが…私の勝ちだな?」

「くー無手なら行けると思っただけだな」

竹刀を投げるとは正直驚いた。だが…

「少々踏み込みが甘かったな。もう少し踏み込んでいれば完全に1本取れたかもな」

竹刀を投げそのまま踏み込んできたが、そのせいか少々踏み込みが甘かった。もししっかりと踏み込んでいれば。1本取られてたかも知れない

「強いのだな、龍也は一夏がここまで手も足も出ないとは…少々驚きだ」

「時の運だよ。箒ありがとう」

借りていた竹刀を箒に返していると。一夏は

「……」

真剣な表情で何かを考え込み。私を見ていた…

「どうした？」

その余りに真剣な表情にそう尋ねると

「…いや…何でもない…箒。俺の腕が鈍ってないのは判ったよな？今日から放課後。剣道の練習とISの事を教えて欲しい。龍也も良かったら教えてくれないか？体捌きとかISの事を」

ふむ…セシリアに勝つ事を考えていたか…これはもしかすると、もしかするかもしれない

「構わんよ。私で良ければ付き合おう。まあ…私も勝負しないといけないしな」

セシリア・一夏・私で勝負する事になっているし、まあ私の負けはないと思うが、勝負は何かがあるか判らない…念の為に情報を集めておく必要がある

「約束だからな。私も付き合うぞ」

「助かる。んじゃ…俺は走ってくる。日課だから走らないと落ち着かないんだ」

一夏はそう言うのと剣道場を後にした

「さてと…では私も行くとしよう。調べたいことがあるのでね」

セシリアのISの情報・近接でのISの技能…調べる事は山ほどある…私はそう言うのと剣道場を後にしたのだが…

「…」

気配を押し殺し、ついて来る気配を感じていた…

タツタツタツタツ…

IS学園の敷地内を走りながら俺は

(あの動き…黄金の騎士の動きに似てた…)

記憶の中の騎士の動きと龍也の動きは酷似していた…まるで同一人物の様に…

(だけど…歳が違ふ…どういうことだ?)

騎士は恐らく20代前半から30手前くらいだろう…龍也が黄金の騎士とは考えにくい…だが

(似すぎている…動きも・顔つきも…)

剣を持つ動き・体捌き。更には顔つきや雰囲気まで良く似ている…だが龍也が騎士だとは思えない、だがまったく関係がないとも思えない…

「ふー…暫く龍也についてれば、何か判るかもな…」

龍也と騎士の関係…それがどうしても気になる、もし龍也が騎士の関係者なら…何とか騎士にもう一度会いたい。会って話をしてみたい…

「だけど…今は目先の勝負だよな」

月曜日に迫る、セシリアとの勝負…まずはそれに集中しないと…俺はそう考え

「さーてと。もうちよつと走ったら戻るか」

汗でべとべとだし。腹も減った…俺はそんな事を考えながらも一度走り出した…

ふむ…上手い尾行だ…剣道場から上手く気配を殺してついて来る人物に、私は感心していた…若いが良い腕をしている…ここまで気配を消せるとは正直驚きだ…だが…

(何時までもつけて来られると面倒だな…)

なのはとフェイトに妙な勘繰りを受けるのもいやだし…この生徒がなのはとフェイトに目をつけられるのも可哀想だ…

(ここいらで巻いておくか…)

寮の近くで完全に気配を消し、木の影に隠れると

「!?居なくなった…?どこへ…」

きよときよとと辺りを見回す、女生徒が走ってきた…美しい銀髪に右目を包帯で隠した。小柄な生徒だった

(…?純粋な人ではない…?)

気配がフェイトやセツテ達に良く似ている…純粋な人ではないと

気配で判る

(少し興味が沸いたな…)

本来ならここで気配を消したまま。部屋に帰るつもりだったが…気が変わった。私はその女子の背後に回りこんだ…

「まいった…クリーム餡蜜が貰えなくなる。作戦失敗か…」

クリーム餡蜜？甘いのが好きなのだろうか？

「だいたい、楯無は無茶を言う…あそこまでの熟練者を尾行するのは大変なのに…しかし、クリーム餡蜜の魅力には…」

ぶつぶつ言ってるその女子に

「誰かお探しかな？」

そう声を掛けた…

楯無は人の話を聞かないから困る。私は心の中でぶつぶつと文句を言っていた、1年1組の「八神龍也」をマークしてくれと、言われ最初は断ったが…

「クリーム餡蜜2杯」

「…引き受けましょう」

大好物を引き合いに出されて、簡単に引き受けてしまったが…正直失敗だったかもしれない…八神龍也は熟練した戦闘者だ。立ち振る舞い…脚捌きどれをとっても、実戦を経験しているとしか思えない…それに

(私の尾行にも多分気付いてる)

振り返るような真似はしませんが私の存在にも気付いてる…そんな事を考えていると

シュツ…

八神龍也の姿が掻き消える

「!?居なくなつた…?どこへ…」

慌てて八神龍也の居た場所に行くが、姿どころか気配の残りも感じられない…

「まいった…クリーム餡蜜が貰えなくなる。作戦失敗か…」

しまった…これではクリーム餡蜜がもらえない…

「だいたい、楯無は無茶を言う…あそこまでの熟練者を尾行するのは大変なのに…しかし、クリーム餡蜜の魅力には…」

「はあ…内心溜め息を吐き、ブツブツと文句を言っていると誰かお探しかな?」

「!!背後を完全に取られた!?これは不味い…反射的に懐のアーミーナイフに手を伸ばすが」

「まあまあ。落ち着きたまえよ。私は君に危害を加える気は無いよ、まあ攻撃されたらそれなりの対応はさせてもらうが…」

「くっ…完全に行動を読まれてる…私は懐のアーミーナイフから手を離れた。すると」

「うんうん。それで良いよ、私は何も君の敵ではないのだから…まあ座って話でもしないか?」

「…何が目的?」

振り返らずに尋ねると

「うん?ただの世間話だが?忙しいかね?」

少し考える…ここで忙しいと言って、帰るのは簡単だが…直接話を聞ける…これはどう見てもプラスだ…それに

(どんな顔をしてるかも気になる)

ずっと尾行をしていたが、直接顔は見えていない…クラスメイトは「イケメン」だと言っていた…どんな顔をしているのか実に気になる

…

「別に構わない…ひ…ま…だし…」

私は振り返りながらそう言ったが。徐々にその言葉は消えて行つた…

「おお、それは良かった」

にこにここと微笑む、八神龍也に完全に魅了されてしまった…

私と同じ銀髪に、右目の傷…見た目は少しばかり怖いが…それを補って余りある。優しさを全身から感じる…

(…はっ!?私は何を!?)

私も恋に憧れる16歳の乙女だ…今まで出会ったことの無いタイプの美形に思わず赤面し俯くと

「?…どうかしたかね？」

「な…何でもない！」

「それなら良いが…まあ座って話でもしようじゃないか」

そう言っつて寮の裏のベンチに腰掛ける、八神龍也…私も同じ様にベンチに腰掛けた

「私は八神龍也だ、君は？」

座るなりそう尋ねてくる八神龍也に

「エリス・V・アマノミヤ」

「エリスか。よろしく、私の事は龍也で良いよ」

事も無げに名前を呼んでくる、八神龍也に

(行き成り名前呼び?…馴れ馴れしいのかな…?)

私がそんな事を考えていると

「それでクラスは？」

「4組」

思わず質問に答えると

「4組か、道理で見たこと無い顔だと思ったよ。それで「V」って何の略だ？」

「ヴァンテイルグ」

「ふーん、ドイツ？」

「うん…」

って何で? 私はここまで素直に質問に答えてるの!? 逆じゃないの!? 自分が質問するつもりが逆に質問に答えてしまっている…その事に驚愕していると

「だからそんなに綺麗な髪と眼してるのか…」

「ふえ!？」

き…綺麗? そ…そんな事を言われたの初めて…思わず赤面している

「それに右目に傷か…そんなところも私に似てるな」

からから笑う龍也に…

「聞かないの? なんで目を隠してるのか？」

大抵の人はきくの…それを聞かない龍也にそう尋ねると

「誰にだつて言いたくない事はあるさ。だから私はそれを聞かない、エリスだつて私の目の傷の事を聞かないだろう？おあいこだよ」

邪気の無いその笑みに私は

(なんて優しい笑顔なんだろう…)

思わず惹き付けられるそんな笑み…思わず見惚れてしまう…

「さてと…少々調べたい事があるので失礼するよ。エリス、また会おう」

「あ…う、うん…」

そう言つて歩いて行つてしまった、龍也の後ろ背を見ながら

(…ぼー…格好良いなあ…好みだよ…でもなあ…)

噂にきく。金と白の悪魔…告白しようとした女子が酷いトラウマを与える、笑顔の鬼神の噂を思い出す

(…これは諦めた方が良いのかも…)

初恋だが、命は惜しい…この恋は諦めておこうと思い、私も寮に戻ろうと立ち上がった…

この時、私は笑顔の鬼神が怖いので初恋を諦めようと思つていたのだが…龍也という人を知るたびに…その優しさに触れるたびに…惹かれてしまい…本気になつてしまう事を私は知らなかった…

第8話に続く

第8話

第8話

日曜日…龍也の部屋にて

「さて、私が調べた「セシリア・オルコット」とその専用IS「ブルー・ティアーズ」についての事を話そう」

「その前に質問だ、何故お前のベッドは仕切りで囲われているんだ？」

俺がそう尋ねると龍也は悲しそうに

「下手をすると襲われるからだ。これが私の最後の防衛線だ」

「すまなかった」

聞いてはいけないことだった、予測できた答えに俺は即座に謝罪した

「まあ。それは置いといてだな。セシリアのIS「ブルー・ティアーズ」だが、中距離射撃戦特化型のISだ。武装は機体名にもなっている「ブルー・ティアーズ」というビットだ。これは6機あつて。4機は光学、残り2機はミサイルを放つ事が出来る。これは推測だが、恐らくこれとは別に「ビーム・ライフル」と近接用の剣を装備していると見て間違いないだろう」

龍也に公開されている「ブルー・ティアーズ」の情報を見せられながら、話を聞く

「ほうほう、んで？俺のISの武装は…？」

「知らん。お前が知ってるんじゃないのか？」

「…いや、俺も知らん。千冬姉は楽しみにしているとしたか教えてくれなかった」

「……」

2人して黙り込む…敵の情報が判っているのに、自分の機体の事が判らない…なんという事態だ…

「まあ…恐らく近接用だろう」

「かな？」

俺が自信無さげに尋ねると龍也は

「射撃武器は空気抵抗や・相手の武装との干渉とか、計算しないといけない事が多いからな。多分射撃型ではないだろう」

「そうか…ならそんなに不安に思うことは無いかな？」

接近戦には自信があるし、相手の情報もわかった。そこまで不安要素は無い筈だ

「まっ、そういう訳だ。怪我しない程度に頑張れ」

激励してくれる龍也に

「おうー」

俺はそう返事を返し、龍也の部屋を後にした…

龍也と一夏が話をしている頃、寮の一室では

「…失敗したの？珍しいわね。エリスちゃん」

「…さも当然という表情で私のベッドに寝転がらないで下さい。楯無。八神龍也は私達の予想を遥かに越える人物ですよ」

私が自室に帰ると青い髪の女生徒がさも当然という表情で居て、呆れながら言う

「んー良いじゃない。そんなに目くじら立てなくても♪」

この人は本当に…私の目の前に居る女生徒「更識楯無」はIS学園の生徒会長であり、私を無理やり自分の部下にした要注意人物だ…そのくせ人を魅了する才能を持つ、厄介極まりない人物だ

「それで、接触してみようだった？」

「…そうですね。本当に私と同じ歳かと思いましたよ。身のこなし・纏う雰囲気・達観した反応…どれも16歳で身に付けられる物ではないかと…」

客観的に見た龍也の事を話すと

「そう。それで私達の敵そう？」

「敵ではないでしょうね。もし敵なら私は排除されたでしょう」

ナイフを手に持った瞬間に殺されていただろう…

「ふーん…エリスちゃんにそこまで言わせるなんて…興味が沸いたわね」

「……これは私が依頼された事です。余計な茶々は入れないで欲しい

です」

私がそう言うのと楯無は

「んふふ♪なに？その乙女な反応…もしかして惚れた？」

「ぶふおっ!?!げほっ!?!げほっ!!!」

丁度紅茶を飲もうとした瞬間にそんな事を言われたので、思わずむせて咳き込む

「…えっ？本気なの？」

「勝手に自己完結しないで下さい!!!まあ…その龍也君は私の好みのタイプではありませんが…命の危険を晒すつもりは無いです」

金と白の悪魔さえ居なければ、本気に成っても良いかと思うほどの人物だが。如何せん金と白の悪魔が危険すぎる…

「でもさ、えーと…高町さんとハラオウンさんは八神君の彼女って訳じゃないんだし…アタクシしてみても良いんじゃない♪」

「…あの悪魔の目を見ればそんな事、言えないですよ」

あの敵を見るような目…そして圧倒的な負のオーラ…本能的な恐怖を感じる

「まあ、あの子は私と同じタイプだと思うけどね」

「…どういう意味ですか？」

意味ありげな笑みを浮かべる楯無に尋ねると

「人の心を掴む才能を持つって事よ♪きつとエリスちゃんも本気になっっちゃうんじゃない？」

「出てってください!!」

枕を投げつけると

「つとと。もうそんなに怒らなくても良いじゃない。恋せよ乙女って言うじゃない？」

楽しそうに笑う楯無

「殴りますよ？」

握り拳を作りながら言う

「あ、仕事が残ってたんだっ！戻らないと…じゃーねー!!」

ピューッと走り去る楯無を見送り、椅子に腰掛け

「全く…楯無は」

ぶつぶつ文句を言いながら、引き出しを開ける

「…試合のチケット買って良かったです」

月曜にある、1組の代表を決定する為の試合の最前列の席のチケット。少々割高だったが…買ってしまった

「…これは偵察なんです、龍也君の力量を確認する為のものでやましいことは何もないんです」

自分に言い聞かせるようにそう呟き、私は引き出しを元に戻した…

月曜日 ISアリーナ

「ISまだ来てないのか?」

私がそう尋ねると一夏は俯きながら

「ああ…まだ来てない」

一夏ではなく隣の筈が答えてくれる、一夏というと

「…全く山田君は何をしているのだ。一夏のISがまだ来てないとは」

「…千冬姉? いい加減俺を解放してくれないか?」

「だが断る」

織斑先生に抱き抱えられ疲れた表情を浮かべていた

「…あれ何時からだ?」

「1時間前からだな。実にうらやま…げふんげふん!」

「…まあ良いけどな」

羨ましいと良い掛け咳き込む筈を見ていると

「織斑君! 織斑君!! 織斑君!!」

山田先生が一夏の名を連呼しながら駆け込んでくる

「来ましたよ! 織斑君の専用IS!!」

「え?」

「そうか、ではすぐに準備をしろ、アリーナを使用できる時間は限られている、本番で物にしろ」

「はい?」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せろ」

「あの?」

困惑顔の一夏に捲くし立てるように言う山田先生達…

「いや…フォーマットとフィツテ…」

私が3人を止めようとした瞬間

ゴゴン…

重い駆動音を立てて、ゆつくりとピット搬入口が開き始めた…そして向こう側には「白」が居た。眩いばかり純白のISがその装甲を解放して操縦者を待っていた

「これが…」

「はい！これが織斑君の専用IS「白式」です!!」

一夏がゆつくりと白式に近付くが

「待って下さい！フォーマットとフィツティグもせずに、セシリアと戦わせるのは無謀です」

幾らなんでも無茶過ぎる、私が止めに入ろうとすると一夏が

「大丈夫だ。龍也」

「しかし…」

「筈が言ってただろ？」この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せろ」って…俺はこんな所で立ち止まれない、だから大丈夫だ」

一夏の目を見る、自信に満ち溢れたその瞳には強い決意の色が見て取れた

（本人が不安に思っていないのに…余計なお世話だったか…）

「触れば良いのか？」

「そうだ」

一夏が私の横を通り、白式の前に立ってその装甲に触れる…

カシュツ!!

音を立てて白式が一夏に装着されていく

「ISのハイパーセンサーは問題無く動いているな？気分はどうだ？」

心配そうに尋ねる織斑先生に一夏は

「大丈夫、千冬姉。行ける」

手を開いたり閉じたりしながら言う一夏に

「……」

箒は何かを言いかけ、それでも何を言えば良いのか判らず迷っている様な素振りを見せる。それに気付いた一夏は

「箒」

「な、なんだ？」

「行って来る」

「あ…ああ！勝って来い！！一夏！」

「おう！」

頷き。ピットゲートに進んで行く一夏は、私を見て

「龍也、次はお前も試合をするんだろ？」

私は勝った方と試合をするという話になっているので頷くと

「そうか…勝てるか判らないが…出来たらお前と勝負をしたいな」

「ふつ、気が早いな。今は目の前に集中しろ、足元をすくわれるぞ？」

私がそう言うで一夏は、それもそうだなと頷き。アリーナへと飛び出した…

「最後のチャンスを上げますわ」

俺がアリーナに飛び出すと同時にそう声を掛けてくる、セシリアは、鮮やかな青色のISを身に纏っていた、特徴的なフィン・アーマーを4枚従えどこかの騎士のようにも見える

「チャンスって？」

俺がそう尋ねるとセシリアは

「私が一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから今ここで謝るというのなら、許してあげないことも無くってよ？」

そう言うって笑うセシリア、それと同時に白式から、警告が入る…向こうは戦闘態勢に入ったみたいだな…俺は大きく息を吸い込み、集中する…湖面に落ちる一滴の雫をイメージする…それと同時に研ぎ澄まされていく感覚を全身で感じる

「そう言うのはチャンスとは言わないな」

「そう…残念ですわ…それなら…」

警告！敵IS射撃体勢に移行！トリガー確認、初弾エネルギー装填

「お別れですわね!!」

キュインッ!と言う音が聞こえると同時に俺は横に跳んでいた:
俺が居た場所にレーザーが突き刺さる

「避けた!」

驚くセシリアに

「悪いな、もうとつくに俺は臨戦体制だ!」

極限まで集中していて良かった。放たれたレーザーにもしつかり
と反応できた:

「そう、なら手加減は必要ないですわね!!」

放たれるレーザーを紙一重で回避する:

(くっ!白式が俺の反応についてこれてない!)

セシリアの手の動きと周囲の空気の流れで、何処を狙っているかは
判る、だが俺の反応に白式が反応できず。紙一重になってしまう:

(何か武器を!)

回避し続けるのも限界が来る、白式に装備を尋ねると。すぐに展開
可能な装備の一覧が現れる

「:一個しか無いんだが:??」

近接ブレードとしか表記されない:えっ?武器ってこれだけ?だ
がこの困惑が良くなかった

ズドンッ!!

「くっ!」

左肩をレーザーに撃ち抜かれる。相手は仮にも代表候補生:この
隙を見逃すわけが無い!しかも俺は1度集中力が切れてしまった:
切れてしまった集中力では:

キュイン!!キュイン!!!

連続して放たれるレーザーに反応しきれない!連続でレーザーを
喰らってしまう

「ふふ、どうやらそれが限界みたいですよわね?さあっ!!踊りなさい!!
私。セシリア・オルコットとブルー・ティアーズが奏でるワルツで!!!」

俺の動きを先読みして放たれるレーザーの嵐を回避しながら

「ええい!白式武器を展開してくれ!!」

キイイン…

高周波の音と共に、俺の右腕から光の粒子が放出される…それは手の中で集まり、すぐにその形を形成した…片刃のブレード…刃渡り1.6メートルはある刀…それが俺の武器

「中距離射撃型の私に。近距離格闘装備で挑もうだなんて…笑止ですわ！」

すぐさま放たれるレーザーを刀で弾く

「なっ!?先ほどまでと動きが違う!？」

驚くセシリアに刀を向け

「悪いな、剣士は刀一つで身のこなしが変わるんだよ…覚えとけ!!!」

レーザーを切り払いながらセシリアに接近戦を仕掛けようとするが…

「近付けさせなければいいのですわ!!!」

放たれるレーザーの嵐…

(引くわけにはいかない…)

俺はこんな所で立ち止まれない…俺は再び意識を集中し、試合に意識を向けた

「…35分…大分持ったほうですわね?褒めて差し上げますわ」

「そりやどうも…」

白式が俺の反応についてこれず、いくらか被弾しシールドエネルギーの残量は100ちよつと…実体ダメージはあと少しで中破というところだ…何度もレーザーを弾いた刀はとつくに大破していてもおかしくないが。まだその姿を保っていた…思ってたより頑丈な刀だ

「ブルー・ティアーズを所見でこうまで耐えたのはあなたが初めてですわね」

自分の周りに滞空するビットを撫でるセシリアはにっこりと笑い

「ですが、それもここまで…ファイナーレと参りましょう!!」

ビットが2機多角的な角度で迫ってくる

「くっ!」

上下に回ったビットから放たれるレーザー、そして回避先には既にセシリアのライフルの照準が合っている

「左足、いただきますわ!」

装甲の無い場所に照準があつてゐるが判る、そこに攻撃を喰らえば俺の負け…ならば

「ぜあああッ!!」

無理やり加速し、俺はセシリアのライフルの銃身にぶつかった。その衝撃で砲口がそれる

「なっ?!無茶苦茶しますわね!けれども無駄な足掻き」無駄じゃない!!!:ツ!」

距離を取りながら、左手を振るセシリア…やはり俺の考えは当たつてゐる!

「はっ!!」

放たれたレーザーを回避し、ビットを1機両断し、そのままの勢いで、セシリアに斬り込む

「くっ!」

後方に回避し、左手を振るセシリアに

「ただ闇雲に接近したんじゃない!お前のブルー・ティアーズは命令を送らないと動かない!!そして…」

ズガンツ!!!

今正にレーザーを放とうとしていたビットを撃墜しながら

「その時、お前はそれ以外の攻撃が出来ない!制御に集中しているからだ、どうだ?違うか?」

「……」

返答は沈黙…だが気配が大きく揺れた…動揺してるのは間違いない

「俺は勝つ、行くぞ!セシリア!!」

俺は刀の切っ先を下に向け、セシリアに向かって行った…

(見える…)

限界まで高まった集中力のおかげか、それとも白式のおかげか…放たれるレーザーがしっかりと見える

「はっー！」

突撃と共に振り下ろした刀でビットを撃墜し。回り込んできたビットに蹴りを叩き込み、弾き飛ばす

「はあああッ!!」

腰だめに刀を構え必殺の一撃を放とうとした直後

「かかりましたわね?」

セシリアが笑うのが見える…そしてセシリアのスカート状のアーマーの突起が外れ、宙に浮かぶ

「おあいにく様!ブルー・ティアーズは6機あつてよ!!!」

勝利を確信するセシリア…そして放たれるミサイル…

ドガアアアアンツ!!!

凄まじいまでの爆発音と共に俺の視界は遮られた…

ここまでやるとは…正直驚きですわ…6機のビットのうち3機は撃墜され、今も間合いに飛び込まれ、危ういところだった…

(ですが…私の勝ちですわ)

今まで使わずに隠していたミサイル…それが命中して。私の勝ち…私が勝利を確信していると

「悪いな…お前のビットが6機あるのは知ってるんだよ!!!」

煙を突き破り、織斑一夏が飛び出してくる

「なっ!?直撃の筈!どうして?…それにそのISは!?!」

思わずそう尋ねかけ気付いた…織斑一夏の纏うISの姿が変わっていることに…先ほどまでとは違うその装甲を見て気付いた…

「まさか…1次移行!?あ…あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたというの!?!」

初期化・最適化もしていない機体で…まだ自分用にもなっていない機体であそこまでの動きをしていたと言うのか?私は信じられないものを見たと感じていた…全てのISは初期化・最適化を経て、その人の専用の物になる、それをしなければ碌に動けない筈なのに…

(今まで回避や。迎撃は全てこの人の実力!?!)

素晴らしい回避を見て、きつとISの処理が高いおかげだと思つて

いたが。全て織斑一夏の実力だと知って驚愕していると

「俺は…世界で最高の姉さんを持ったよ」

「は…？あなた何を言ってるのですか？」

てに持つ刀を見て眩く、織斑一夏に尋ねると

「俺も、俺の家族を守る…取りあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

「だからさつきから何の話を…ああもう面倒ですわ！」

何を言っているのか判らない。それに下手に長引かせると不味い気がする…私はそう判断し、ビットを操作したが…

「遅い!!」

ザンツ!!

鋭い斬撃音と共に爆発する、ビット

「言った筈だ！刀一つで身のこなしが変わるってな!!」

刀を下段に構え突っ込んでくる織斑一夏…避けなければいけない…そう判っているのに

(何て…綺麗な目…)

強い意志の込められたその瞳に魅了され、私は動けずその場に浮かんでいるだけだった…

「おおおおッ!!」

裂帛の気合と共に放たれた斬撃が私を捉え次の瞬間、決着を告げるブザーが鳴り響いた…

「試合終了！勝者！織斑一夏！」

私の負けみたいですわね…それにしても…織斑一夏…ですか、興味が沸きましたわ…私は勝ち名乗りを受け喜んでいる、織斑一夏に背を向け、自分の来たピットに向かった…

「勝ったか…」

私はモニターを見ながらそう呟いた、僅かな勝機…それを残さず掴んだ一夏。どうやら一夏は私の予想を上回る潜在能力を秘めているようだ…

「龍也さん、凄く嬉しそうな顔をしていますよ？」

「ん？なのは、何時の間に…」

何時の間にかピットに来ていたなのはにそう尋ねると

「次は龍也さんの出番ですから、激励に」

ああ…そうか、次は私か…

「そんな必要はないがな。まっ、行って来るさ」

「行ってらっしゃい」

なのはに見送られながら、私はISを展開し。ピットから飛び出した…

「それがお前のISか…」

「そう、これ私のIS、零式さ」

黒い重厚な装甲と、張り出した大きなショルダーパーツを持つISを見ながら言うと

「ま、話はここまでだ…龍也。真剣勝負と行こうぜ」

「ふふ、ああ…その通りだな」

一夏はやる気満々という感じだ…これ以上待たせるのも悪い

「行くぞ！龍也！」

「来い！一夏！」

私達は試合開始のブザーを待たずに戦闘を開始した

「ドリルナツクル!!」

ギューーンツ!!!

両拳の装甲が変化し高速回転を始める。そして背中のブースターで接近し拳を突き出す

「でやああツ!!」

一夏は刀でそれを弾き、距離を取ろうとするが

「甘い！ドリル・ブーストナツクル!!」

「なあツ!?!…くうっ!!」

左拳を射出する、驚いた一夏はそれをまともに受け吹き飛ばされる

「おおおっ!!」

空中で射出した左拳を回収し、そのまま殴りつける

「おおおっ!!!」

ガギーンツ!!!

ドリルと刀が追突し火花を散らす

「オオオオオッ!!!」

お互いに押し切ろうとするが、力が拮抗し。お互いにそこから先に進めない

「でやあッ!!」

「むっ!」

一夏が隙を突いて蹴りを叩き込んでくる、咄嗟の事で反応できず蹴り飛ばされる

「くーなんて馬鹿力だ」

「悪いな、それが取り得の機体なんだよ」

零式は装甲と攻撃力に特化した機体だ。それについて文句を言われても困る

「はっ!それでこそだ!!」

刀を構え突っ込んで来る一夏

「バトルマニアかお前は?」

苦笑しながらその斬撃を受け流し。拳を振るう

「失礼な事を言うな!俺は別に争いごとが好きって訳じゃないぜ!」

「その割には楽しそうだが?」

振るわれる刀を両拳で防ぎ、反撃しながら言うと

「今の俺とお前、どれくらいの差があるのか…:それを知りたいだけだ!!!」

踏み込んで振るわれる刀…:それを回避し

「ふむ…:そうか…:では本気を出さないと失礼だな」

一夏がそう思っているのなら、全力を出すのが礼儀というもの…:それで一撃で終わったとしても、一夏も納得するだろう…:

「我は神なる剣なり!」

バキンッ…:

両肩の装甲が外れ1つなる。そしてそこから刃が形成され巨大なバスターソードになる

「我が眼前に立つものは全て打ち砕くのみ!!」

ブオンッ!!!

刃渡り3メートルはある、巨大な剣を振るい正眼に構える

「それが…お前の武器か」

「斬艦刀」…耐えられるかな？私の一撃を行くぞッ!!一夏あッ!!」
「来い龍也!!」

ブン

一夏の持つつ刀の刀身が開き、エネルギーの刃を展開する

「克つ目せよ！これぞ我が必殺の一撃!!斬艦刀！疾風迅雷ッ!!」

「おおおおっ!!!」

背中ブースターを全開にし。一夏日掛けて突っ込む

「なっ!?は、速い!？」

零式の速度に驚き一瞬硬直する一夏、その瞬間を見逃さず通り抜け
様に、斬艦刀を一閃する

「ぐっ!!!うオオオオッ!!!」

何とか直撃を防ごうとする一夏だが

「遅い!!!一刀両断ッ!!!」

迎撃に出るタイミングも、動き出すタイミングも全て遅れていた一
夏は、もろに斬艦刀の一撃を喰らい吹っ飛ば

ドゴンッ!!!

「ぐはっ!」

壁に叩き付けられ苦悶の声を上げる一夏と同時に

「我が斬艦刀に断てぬ物無しッ!!!」

斬艦刀を大きく振り上げ、私は勝ち名乗りを上げると同時に

「勝者！八神龍也!!」

織斑先生による私の勝利宣言が発せられた…

「一撃かよ…信じられねえ…」

ピットで着替えながら言う一夏に

「ふふふ、言っただろう？火力が取り得の機体だと」

「いやいや。尋常じゃねえって。あの破壊力、1発でシールドエネル
ギー持ってかれた上に身体も痛いんだが？」

脇腹を擦りながら文句を言う一夏に

「もつと早く動けば、耐えれたかもな」

直撃だったから一撃で決まったが、もし刀…雪片で止める事が出来

「たら、耐えれたかもしれないというと

「まだ。俺が未熟だったわけか…龍也…また勝負してくれよ」

「また勝負してくれと言う一夏に

「勿論だ」

「そう返事を返し、私は着替えを追いピットを後にした…

「何の用かな？ 箒」

「ピットから出ると同時に腕を組んで、私を睨んでいる箒にそう尋ねると

「お前に用は無い、私は一夏に用があるんだ」

「ぶすつとした表情でそう言う箒に

「そうか、それは悪かった…そうそう一夏は喉が渴いてると言っていたな…何か買って置いてやったらどうだ？」

「にやりと笑いながら言う箒は

「…そうか…それもそうだな、何か買って置いてやるか…」

「うんうんと頷く箒の横を通り抜け、私は寮へ戻った…寮へ戻る途中、小気味良いバシーンツ!!と言う音が響いてきたが、私は特に気にも留めず自室へと戻った…」

「…凄い」

「私は思わずそう呟いた…龍也君の実力を見ようと思ってみていたが…予想を遥かに越えていた…しかも

「あの子。まだ全力じゃないわね？」

「楯無？ 貴女も見てたの？」

「背後から言われ驚きながら振り返ると、

「当然よ。だって気になるじゃない。八神龍也君の実力、まあ今回の全力じゃなかったみたいだけどね？」

「上品な笑みを浮かべる楯無に

「やっぱりそう思う？」

「動きを見れば判るわよ、大分手加減してるってね？」

「どうやら私と同意見のようだ。楯無は私の隣に腰掛けながら

「見たところ、八神君のISは防御力・破壊力特化型ね。しかも操縦者

の剣技を100%トレースしてる。他にも技のバリエーションがあると見て良いでしょうね」

貴女と同じタイプね？と付け足す楯無、私のISも同じタイプだから良く判る

「うーん…私でも勝てないかも」

考え込みながら言う楯無…学園最強を持つてしても勝てないと言わしめる龍也君。一体どれ程の実力を秘めているのだろうか？

「まあ、長い目で調べていきましよう。八神龍也という人間をね？」

楽しげに笑う楯無はそう言うと、アリーナから出て行った…私は暫くその場にいたが、これ以上収穫は無いと判断しアリーナを後にした…

第9話に続く

第9話

第9話

龍也に負けた次の日、SHRで信じられないことが起こった

「では1年1組の代表は織斑一夏君に決定ですッ!!あ、1繋がりの良い感じですね」

笑顔で言う山田先生に

「先生、質問です、どうして負けた俺が代表なんですか?龍也じゃないんですか?」

俺がそう尋ねると山田先生ではなく龍也が答えてくれた

「いや、私は面倒くさいから辞退してセシリアに譲ると言ったら、セシリアが一夏に譲ると言うからお前になったのだが?」

そう言う龍也に続いてセシリアが

「龍也さんに代表を譲ると言われたのですが、IS操縦は実戦が何よりの糧ですから今回は一夏さんに代表の座を譲ることにしたのです」
腰に手を当てながら言うセシリア、うん…?今俺と龍也の事を名前
で呼んだ?…何か思うことがあったのかな?と考えていると

「それですね。私がこれから貴方のIS操縦を教えて差し上げよう
と思うのですが…どうでしょうか?」

俺が返事をする前に机を叩く音と同時に箒が立ち上がり

「生憎だが、一夏の教官は足りている、私が直接頼まれたからな」

睨みながら言う箒にセシリアは余裕という表情で

「あら?貴方はランクCの篠ノ之さん、Aの私に何か御用ですか」

小馬鹿にするような口調のセシリアに箒は

「ランクは関係ないッ!!私が頼まれたという事が重要なんだッ!!」

ランクについて言い争っているセシリアと箒を止めるべきか悩んで
いると

バシッ!バシッ!!

「ふぎやっ!?!」

2発の打撃音が響き、箒とセシリアが蹲る

「何時まで馬鹿騒ぎをしているつもりだ、もうとつくにSHRの時間は終わっているぞッ！クラス代表は織斑一夏に決定で良いな」

「はいと返事する皆（龍也は返事をしていなかった。良い奴だ）：団結は良い事だが俺にも良い事だと更に良かったなと心から思った：」

SHR後の授業にて

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実戦してもらおう。織斑、オルコット、八神試しに飛んで見せろ」

その言葉に頷きISを展開させる、私に遅れること数秒、セシリアと一夏もISを展開し、地面から10数センチ浮遊していた…

（セシリアと一夏はやはり少し遅いか、まあ無理も無いか…）

展開するイメージがしにくいのだろうなと思い、1人納得していると、織斑先生が

「よし飛べ」

そういわれると同時に急上昇し、セシリアと一夏が来るのを少し待つ、私から遅れること30秒ほどでセシリアが、更にそれに遅れる事1分ほどで一夏も上がってきた。私は一夏に

「遅かったな。まだイメージが掴めないか？」

大分訓練に付き合っているが、まだイメージが掴めないか？と尋ねると一夏は

「いや、自分の前方に角錐を展開させるイメージって言うのが良く判らないんだよ」

首を傾げながら言う一夏にセシリアが

「一夏さん、イメージは所詮イメージですわ。自分がやりやすい方法を考える方が良いですわよ？ね、龍也さん」

同意を求めてくるセシリアに

「まあ、そうだな、私の場合はそのイメージじゃないし…」

暫く上空で話しているとオープンチャンネルで

「織斑、オルコット、八神、急降下と完全停止をやって見ろ。目標は地表から10センチだ」

言われてすぐ実行しようとする、私の前に右手を出しセシリアが「いいえ、ここは私から行かせて貰いますわ」…判った。ではその後に行かせて貰うとするか」

私が頷くとセシリアの姿見る見る間に小さくなり、止まるハイパーセンサーで距離を測るとちょうど10センチ

「流石は代表候補生という所か、では一夏私も行くぞ」

私は一夏にその声を掛けてから、降下していった…

「セシリアも龍也も上手いもんだな…」

降下して行く龍也を見ながらそう呟いた、龍也もちょうど10センチの所でピツタリ停止していた。

「さてと、俺も行くか…」

背中の翼からロケットファイヤーが出てるイメージを浮かべ、それを地表に向けて傾けた…

ズドオオオンツ!!!

地上には着いた、だが龍也とセシリアと違い地面に追突するという形でだ…つまり何が言いたいかと言うと、俺は墜落したのだ…身体はGや衝撃からは守られていたが…

「はぁ…」

龍也の溜め息とクラスメイトのクスクス笑いで瀕死状態だった…できれば心も守って欲しかった、俺がそんな事を考えていると

「馬鹿者、誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴をあけてどうする?これは個人指導が必要か?」

怪しい笑みを浮かべる千冬姉に

「次はこんなミスをしません。ですので個人指導の必要はありません」

個人指導と言うなの、悪戯は回避したのでそう言うとう
「そうか?では次こんなミスをすれば、強制的に個人指導をしてやるう」

なんとしても覚えなければ…千冬姉に捕食される危険性が出てくる…俺が内心怯えていると

「情け無いぞ、一夏昨日私が教えてやっただろう」

腕を組み、怒りながら言ってくる箒、昨日のつてあれか…あの擬音の事か？そうか箒も冗談が言える様になったんだな…

「貴様何か失礼な事を考えているだろう」

殺し屋の目で見てくる箒

(どうしてバレるんだろうな…俺の考えてる事は…)

俺が黙り込んでいる事に腹を立てたのか箒が

「大体だな一夏。お前という奴は…」

「大丈夫ですか一夏さん？お怪我は無くて？」

箒の小言が始まるかと思ったら、セシリアが俺の前に立ち箒の姿を隠す。どうやら心配してくれてるようだ…だがその背後で

「一夏に色目か…ここいらで潰しておくべきか？」

「織斑先生!?!暴力はだめですよ!」

握り拳を作る千冬姉を止める山田先生が見えた…

(すいません。山田先生…頑張って千冬姉を宥めてください)

俺が心の中で山田先生に謝っていると、

「それよりもそろそろ黙った方が良いと思うぞ？授業中なんだしな」

ISを解除した龍也にそういわれる、あれ？なんでISを解除してるんだ？俺が疑問に思っていると

「なのはとフェイトと交代だ。あの2人も専用ISを持つてるんだな」

説明してくれた龍也に頷いていると

「織斑。武装を展開しろ。それくらいは出来るようになっただろう」

千冬姉の言葉に頷き、雪片式型を展開する、時間としては約1秒ほど…大分速くなったなと自己満足していると

「遅い。0.5秒で出せるようになれば、高町はそれが出来るぞ、高町見本を見せてやれ」

「はい」

高町さんはそう返事を返し、次の瞬間には大型のライフル銃をその手に構えていた。高町さんのISは桃色の機体にところどころに白いラインが入ったISだ、なんでも防御と射撃に特化したISらし

い、ちなみにハラオウンさんのは黄色にところどころに黒いラインが入った機体で。接近戦用…何でも2人1組で戦うように設計されてるらしい。

「流石だな。次セシリア、展開して見せろ」

「はい」

セシリアも一瞬で武装を展開したが、誰かに向けての展開なので千冬姉に

「横に向かつて銃身を展開させて誰を撃つつもりだ。高町の様に正面に展開出るようにしろ」

と手痛く怒られていた…なんというか千冬姉はセシリアと箒に厳しい気がする。何でだろう？

「ハラオウン、セシリア。次は近接武器を展開しろ」

俺は雪片しかないので見学だ…しかしハラオウンさんも高町さんも凄いな…

「ふっ…」

ハラオウンさんが軽く腕を振るうと、大型の鎌が握られていた…殆ど一瞬で展開している

(イメージが瞬時に出来てるって事なんだよな…どうしてあんな事ができるんだろうか?)

高町さん達の展開の早さに驚いていると、

【あなたの所為ですわよ!!】

なんでだよ

【あ、あなたが。私に飛び込んでくるから…】

そりゃ。近接の武装しかないISならそうなるだろう？

【せ、責任を取って頂きますわー!】

何の責任だよ

セシリアがプライベートチャンネルで文句を言ってくる、どうやら近接武器の展開の遅さを指摘されたようで怒ったような口調だが…俺は返事が出来ていない、なんでって?使い方が判らないんだよ…何だよ、頭の右後ろ側で通話するイメージって。俺がそんな事を考えながらセシリアの苦情を聞いているとチャイムが鳴る

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑グラントを片付けておけよ…私が手伝ってやっても良いが…それなりの見返りは頂くが…どうする?」

怪しい目で俺を見る千冬姉…俺は即座に

「大丈夫です!」

敬礼しながら返事をした、下手をすれば全てが終る…その事態はなんとしても回避したい…

「そうか…お前が言うなら良いが…言っておくが、篠ノ之とオルコツトに頼ってみろ。お話だからな?」

…先手を打たれてしまった…これで箒とセシリアに助けを求める事は出来ない…俺が途方にくれていると

「手伝うか?」

龍也は手伝うか?と声を掛けてきてくれたが俺は

「いや、いいよ。俺の自業自得だしな…自分でやるさ」

自分の操縦の未熟さゆえの失敗だ、龍也達に手伝わせるわけには行かずそう言う

「そうか、判った。ではまた夜の自主訓練の時にな」

「おう」

夕食後、龍也達と箒、それにセシリアの5人にIS操縦の事を教わっている。代表候補生のセシリアは優秀だし、箒も…まあ擬音は判り難いが、刀の使い方を教えるのは上手いし、龍也達は理論的かつ的確に教えてくれる。…3人とも超厳しいが、的確にレベルアップするといえるだろう…俺は龍也達を見送り、自分が作り上げたクレーターを見ながら

「さてと…グラウンドの土ってどこにあるんだっけ?」

グラウンドの補修作業は前途多難のようだった…

「ふうん…ここがそうなんだ…」

「あーあ、鈴が寄り道するからこんな時間になっちゃたよ」

IS学園のゲート前に立つ2人の少女、1人は美しい黒髪のツインテールの小柄な少女でもう1人は、肩幅で切り揃えられた金髪の少女

だった…

「あたしのせいだって言うの？シエン？」

「そうだよ、鈴のせいだよ。鈴が寄り道ばっかするから、こんな時間になっちゃったんだよ！」

金髪の少女が怒鳴ると鈴と呼ばれた少女は

「うるさいわね！一夏にプレゼント買ってたんだから仕方ないでしょ！」

「仕方なくないよ！私を巻き込まないでよ！もっと早く来てゆっくりするつもりだったのに!!」

口論をする、2人の少女…2人とも中国の代表候補生で。黒髪の少女は「鳳鈴音〔ファン・リンイン〕」と言い、金髪の方は「呂 神麗〔ルウ・シエンリー〕だ

「はあ…まあ良いや。受付に行こう、鈴…場所の紙は？」

このまま不毛な良い争いをしていても仕方ないと判断したシエンが尋ねると、鈴は

「…落とされた」

「なにやってるのよ！行き成りそれ!?!前途多難にも程があるよ!?!」

私が呆れながら言う

「人を探しましょう、それが良いわ」

「ねえ？人の話し聞いている？」

「さー誰か居ないかな？」

私を無視して歩き出す鈴…ここに居ても何も解決しないと判断し、

私も後を追って歩き出した

「職員室とかに行けばいいと思う？」

「…場所判るの？」

「判らない…」

「はあ…誰か案内できそうな人探そうよ。生徒でも先生でもいいからさ」

私がそう言うと鈴は

「…もう遅いから誰も居ないんじゃない？」

「…それを言う？鈴のせいなんだよ？」

誰のせいでこんな時間に到着になったと思っっているのだろうか？私
がそう言っていると鈴は

「飛んで探す？」

「勝手にIS展開したら怒られるよー！」

待機状態の甲龍を取り出そうとする鈴にそう怒鳴っていると

「何をしているんだ？」

背後から声を掛けられ、驚きながら振り返るとそこには、黒いIS
学園の制服に同じく黒いコートを羽織った銀髪の男子が私達を見下
ろしていた。かなりの長身に透き通るような蒼い瞳…街を歩けば1
0人が10人振り返るであろう、美しさを持った男子に、私は思わず
魅せられていた…

(ぽー…超美形…)

思わず見惚れてしまうほどの美形だった…私が見惚れて居る隣で
は

「一夏の方が良いわね」

幼馴染にぞっこんの鈴には魅力的には映らなかつた様で、平気そう
だった…

「あのさ、えーと…事務所とかって判る？」

「事務所？…判るが…転入生か何かか？」

そう尋ねてくる男子に頷くと

「ふむ…確か山田先生が転入生が来ないとか言ってたが…そうかお前
たちか」

…どうやら問題になっていったようだ…ちゃんと謝っておかないと
…私がそんな事を考えていると

「まあ、私もそっちの方に用事がある。良かったら案内しようか？」

案内してくれるという男子の言葉に頷き、私達はその男子の後を着
いて歩き始めた…暫く歩いたところで

「そう言えばお前達の名前は？」

気付いたように尋ねてくる男子に私は

「凰鈴音。鈴でいいわよ」

「私は呂 神麗 シェンって呼んでくれれば良いよ」

「そうか宜しく鈴にシエン。私は八神龍也という…龍也で良いぞ」

「そう、宜しく龍也」

「よろしくね、龍也君」

お互いに自己紹介をしたところで、ISの訓練施設が見えてくる…何処の国でも似たような形してるからすぐに判った…すると訓練施設の方から

「だから、お前の説明が独特すぎるんだよツ!!何だよ「くいって感じ」って」

「…くいって感じだ…」

「だからそれが判らないって言ってるんだよツ!!…っておい待ってって箒!!」

すたすたと歩いて行く女子を追いかけていく男子…それを見た龍也君が

「箒と一夏は相変わらずだな…仲がいいんだか悪いんだか…」

呆れたように呟いていた…ちなみに私の隣では

「一夏…あたしの他に女子と仲良く…ふふ…うふふふふ…」

ハイライトの消えた瞳で鈴が笑っていた…どうやらあれが鈴の話に良く出てくる、幼馴染の男の子のようだ…

「なあ?シエン、鈴が怖い顔してるんだが?」

「気にしなくて良いよ、よくある事だから」

結構鈴とは長い付き合いだが、良くこの状態になるのでほっておいで良いと言うと

「そうか、なら良いが…」

私が龍也君と話をしていると鈴が

「あんだ、一夏知ってるの?」

ハイライトの消えた瞳のまま龍也君に尋ねる鈴、龍也君は気にした素振りも見せずに

「知ってるも何も同じクラスだが?」

と返事を返した、すると鈴は

「じゃあさ、さっきの女子は?」

「箒か?...あー確か幼馴染とか何とか言ってたかな…」

あー鈴から聞いたことあるな、私がそんな事を考えていると鈴は「そう…あれが…あたしの潰すべき敵ね…」

黒い笑みで笑っていた…今下手に話しかけると飛び火するので無視しておこう…それが良い。私が頷いていると

「シエン、鈴、総合事務所に着いたぞ」

考え事してる間についたらしい、指差しながら教えてくれる龍也君に

「ありがと。こんどお礼はするわ」

一応礼を言うくらいのも理性は残っていたようだ。少しばかり安心した…私もちゃんとお礼を言っておかないとね

「助かったよ、ありがと。龍也君」

「気にしないでいいさ。ではな」

ひらひらと手を振りながら歩いて行く龍也君を見送ってから、私達は総合事務所へと足を踏み入れた…

第10話に続く

第10話

第10話

「というわけでツ!!織斑君クラス代表決定おめでとう〜」

「おめでとう〜」

夕食後の自由時間の食堂。1組は全員揃い皆飲み物を片手に盛り上がっている…

「いやーこれでクラス対抗戦も盛り上がるねえ〜」

「ほんとほんと」

「私としては龍也様が代表でも良かったわね〜」

「ほんとほんと」

俺もほんととは龍也が良かったよ、龍也強いからな…そしてその龍也はと言うと

「…強いんだね。龍也君は」

「見たたのか?エリス」

「うん、ちよつと興味があったから」

見たことの無い女生徒と談笑していた…綺麗な銀髪の少女だった…2人から離れたところでは高町さんとハラオウンさんが

「龍也を1人にしちゃいけないって判ったのに…」

「どこで、フラグ建てたんだろう?もつと警戒してないといけなかったのに…」

親の敵を見るような目で、その女子を見ていた…

「楽しそうだな、一夏」

「箒、ほんとにそう思うか?」

「ふん」

不機嫌そうに鼻を鳴らす箒、何でかしらんが不機嫌なようだ…俺がどうしようかと考えていると

「はいはい!!私新聞部2年の黛薫子。宜しくねこれ名刺」

俺と龍也に名刺を渡した黛先輩は

「では早速、代表になった織斑君。代表になった感想は!」

ボイスレコーダを向けながら、期待に瞳を光らせながら尋ねてくる
黛先輩に

「えーと…まあなんと言うか頑張りますよ」

なんとはいえ良いか判らずそう答えると黛先輩は

「えーもつと良いコメントちょうだいよく俺に触れると火傷するぜみ
たいな」

なんだそりや、えらい前時代的だな…

「まあ良いや。適当に捏造して書いてくね。じゃあ次は八神君ツ!!如
何して代表を辞退したの?」

俺も気になつていた事を尋ねてくれる黛先輩、さて龍也はなんて答
えるかな?俺も期待しながら聞いていると

「面倒くさいからだ、それにやっても勝つ勝負というのは好きじゃな
い。それが理由だな」

やっても勝つ勝負か…そりやそうだ、今龍也に勝てる1年なんて存
在し無いだろうな…何回か素手での組み手もしたが勝てる気がしな
い…はつきり言つて龍也は強すぎるしな…まあ納得だな

「うーん、確かにねくあの試合見たけど…私もそう思うなく八神君強
いもんね。じゃあ次はセシリアちゃんね?」

「私、こういうコメントはあまり好きでは無いですが、しょうがないで
すね…お答えしますわ」

嘘付け、髪とかめちやくちや気合入ってるじゃないか、俺はそう
思ったが口にはしなかった…言えばきつと怒るからだ

「では、どうして私は辞退したかというと…「ああ、長そうだから良い
や写真だけ撮らせて」

うわ…自分できいといてそれは無いだろう、セシリアもそう思った
のか少し怒った様子で

「さ、最後まで聞きなさいツ!!」

「いいよ、適当に捏造するから…よし織斑君に惚れた事にしよう」
「なっ…なっ…ななっ!!」

顔を真っ赤にしながら後退するセシリアに

「ほう、そうなのか…知らなかった」

龍也が真面目な表情で言う、ああ…セシリアに味方が居ないな…良し！…ここは日頃の感謝の意味を込めて援護射撃だ

「何を馬鹿な事を」

よし、これでこの話はうやむやになるぞ、ナイス俺。自分で自分を褒めてると

「何を持って馬鹿としているのですか！」

えっ嘘。何で俺が怒られてるの!?!つか目が凄い怖いんですけどツ!!

「はは、地雷を踏んだようだな？」

「笑ってないで助けるよツ!!」

笑っている龍也に怒鳴ると

「はいはい、とりあえず並んでね。写真撮るから」

「えっ!?!」

意外そうなでも貴職で弾んだ声色のセシリアに

「そりや、注目の専用機持ちだし。ツーショット撮らないと。えーと…セシリアちゃんと織斑君、んで八神君は1人の方が映えるからシングルで撮らせてね…あつ勿論、なのはちゃんとフェイトちゃんも写真撮らせてね?..」

写真の順番を楽しそうに言う黛先輩にセシリアが

「撮った写真は頂けますよね?..」

「そりやもちろん」

「では着替えて…」

「時間掛かるから駄目、はいさつさと並ぶ」

強引に俺とセシリアを握手させた黛先輩は

「それじゃあ、撮るよー。35×51÷24はく?..」

「えっと…2…?..」

「ぶー、74、375でした〜」

なんだそりや、俺がそんな事を考えてる内にシャッターが切れた…っつておい…

「何で全員入ってるんだよ?..」

恐るべき行動力で龍也達を除く全1組メンバーが俺とセシリアの

周りに集結していた…

「はは、私も動くべきだったかな？」

からからと笑う龍也に

「んじや次は八神君ね、笑顔で宜しく」

「はいはい」

次に龍也の写真では誰も動かなかった。やっぱり皆龍也は1人の方が映えると思ってるんだな

「はい、ありがとう。んじやねー」

ぱたぱたと戻って行く黛先輩…元気な人だな…ともあれこの「織斑一夏クラス代表就任パーティー」は10時過ぎまで続いた…恐るべし10台女子の行動力…俺はへとへとになりながら自室へと戻った…

「龍也、聞いた？なんか転入生が来るんだって」

パーティーの翌日、フェイトにそう言われ。私は鈴とシエンの事を思い出し

「ああ、知ってる。というか会ったな」

パーティーの前にあつたなというとフェイトは

「…ああ…またフラグ建ててる…」

絶望しているフェイトを見ながら、なのはに

「フラグ？…旗の事か？」

「あはは…気にしなくて良いですよ？龍也さん」

…時々なのは達が何を言っているのか判らない時があるなど思っている、一夏の方でも同じ様な話がされていた

「どんなやつなのかな？」

「む…気になるのか？」

「ん？…ああ、少しはな…龍也はどう思うよ？」

箒の反応に困ったのか私に助けを求めてくるが…

「龍也、あんまり1人で出歩いちゃだめ。判った？」

「約束してください、昨日の子とあんまり話さない…」

私の方も困っているので助ける事は不可能だ、諦める…と思っただけなのに…一夏はあろうことか、箒とセシリアを連れただけのほう

に來た：私を巻き込む気か!?なのはとフェイトで手一杯なのに!?だが、一夏の話の内容は私の予想したものと違っていた…

「なんか来月にクラス対抗戦って言うのがあるらしいんだが：どうだ？龍也から見て俺に勝機はあると思うか？」

「ふむ：即答は出来ないが：専用機持ちが確か：2組に1人と4組に1人の筈だから：ある程度は有利性があるんじゃないのか？」

集めた情報によると今のところ、1年全体で専用機持ちは私達含め全部で7人。各代表で5人、その内2人は専用機持ちだが、お互いにお互いを潰しあう可能性もある、それに一夏の近接技能なら、今から鍛えれば良い線を行く筈：私がそんな事を考えながら返事をするとしてその情報：古いよ」

「うん、ちよつと古いよ、龍也君？正しくは9人だよ」

教室の入り口から聞こえてくる声：そちらの方を見ると、昨日知り合った、鈴とシエンが居た。鈴は一夏をロックオンし、シエンは楽しみに私に向かって手を振っていた

「鈴：？お前、鈴か？」

「ふふ、久しぶりね一夏？元気してた？」

鈴が俯きながら一夏に尋ねると

「おう、俺はいつも通りだ：けど：？鈴：？なぜ？漆黒の目で俺を見るのでしよう？」

一夏の声が段々小さくなる：顔を上げた鈴の目からはハイライトが消え、漆黒の瘴気を放ち始めていたから

「：昨日：あたしIS学園に來ただけど：女の子と仲良くしてたよね？：あたしと約束しなかった？「女の子とあんまり仲良くしないって？」

漆黒の瘴気を撒き散らし始める鈴：これは間違いなく「魔王」の眷属だ。実に見慣れた漆黒の瘴気だ：はやてと比べるとその濃度は低いが。

「：……………」

クラスメイトを沈黙させるには充分すぎる濃度だ、皆が沈黙してるなか鈴がゆつくりと一夏に近付いていく

「ふふふ…ふふふふ…？一夏？少しお話ししない？」

「嫌だぞ！俺は悪くない！！殴られる理由も！関節技をかけられる理由も無いぞ！！」

「…あるのよ、一夏はあたしだけを見ないといけない…!？」

鈴が何かに気づき横に飛び退く。それと同時に放たれる鋭い突き…それを放った人物は鈴と一夏の間立ち

「一夏に近寄るな！化け猫!!」

我らがブラコン教師。織斑先生がそう言うのと、鈴は

「出たわね、ブラコン…色々言いたいことがあったのよ…」

不機嫌そうに織斑先生を見て

「なんでシエンが1組で！あたしが2組なのよ！普通逆じゃない!？」

シエンを指差し鈴が叫ぶと、シエンは

「えー…私を引き合いに出さないでよ」

「…って言うか、何時のまにここに？」

さも当然という感じで私の席に近くに来ているシエンに尋ねると

「いや、龍也君さ、鈴のオーラ平気そうだし。こっちの方が安全かな…って思ってたさ」

からからと笑うシエン…なんか、スバルとかウエンデイに似てる気がする…

「貴様を一夏の傍に置く気は無い！山田先生も最初はそうするつもりだったらしいが、私が猛反対した！」

「職権乱用！性悪ブラコン女!!」

「黙れ！化け猫！貴様に一夏は渡さん!!」

「渡してくれなくて良いわよ！奪い取るから!!」

激しい言いあいをする織斑先生と鈴…そしてその後ろでは

「…もうSHRの時間なんですけど…何時まで続くんですか？この言いあい…?」

山田先生は悲しげにそんな事を呟いていた…ご愁傷様です山田先生…私は沈黙している一夏に

「あの2人を止めろ」

「うえ!?お、俺がツ!？」

目に見えてうろたえる一夏に

「お前にしか出来ない仕事だ！頑張れッ！」

「…判ったよ、頑張るよ」

一夏は嫌々と言う感じで、魔王2人の元に行き

「えーとさ？もうSHRの時間だからさ、言いあいは止めた方が良くないかな？後で話はちゃんときくし」

「一夏、お前は私の味方だよな？」

「一夏、ちゃんと言いなさい。姉さんを恋愛対象にみないと」

言いあいを止めるように言ったのに。何故か話の方向がそれている…

「俺の話は微塵も聞いてないな！2人とも！」

一夏の鋭い突っ込みが今日も冴え渡っていた…結局のところ、一夏の提案は受け入れられた。これにより言いあいは終結したが…

「…一夏、今のは誰だ？知り合いか？偉く親しそうだったか？」

「い、一夏さん!?あの子とはどういう関係で…」

一夏は瘴気が消えたことで、動けるようになった女子に囲まれ質問の集中砲火を受けていたが…

バシンバシンバシンバシンツツ!!!!!!

何時もより2割増しの打撃音と共に

「席につけ、馬鹿ども！よりによってあの化け猫が来るとは…」

不機嫌そうに席につけと促す織斑先生…ただ打撃音が強かったのは。八つ当たりでしょうか？

「さてと、転入生。自己紹介をしろ」

「え…ああ！はい！呂 神麗（ルウ・シェンリー）です！シェンって呼んでくれれば良いです。一応、中国の代表候補生です、よろしくお願ひします!!」

急に話を振られたシェンは、多少困惑した素振りを見せたがすぐに笑顔で自己紹介をした

「それでは授業を始める、教科書18Pを開け」

そして、今日もまた1日、ISの訓練と学習が始まる

第11話に続く

第11話

第11話

昼休みになつてすぐ俺は…

「お前のせいだ!!」

「あなたのせいですわ!!」

箒とセシリアに怒鳴られていた。この2人午前中だけで山田先生に注意5回、千冬姉に6回叩かれていて、学習能力がないとしか良いようがない、俺は内心溜め息を吐きながら

「何でだよ…」

そう呟いた、千冬姉の前でボーっとするなんて、寧猛なトラの前で焼肉のタレを塗っているような者だ。「やってください」と全力アピールだ

「まあ、話ならメシ食いながら聞くから、とりあえず学食行こうぜ」

このまま文句を聞いていたら昼食の時間が無くなる、男子にはきつい事体なのでそう言うのと

「む…。まあお前がそう言うのなら、良いだろう」

「そ、そうですね。言つて差し上げましょう」

何でこう素直じゃないのだろうか？俺としては素直な方が良いと思うけど…俺がそんな事を考えていると

「どれ、今日は私も一緒に行くとするか」

龍也が近付いてきて言う。俺は首を傾げながら

「お前何時も弁当作つてるじゃないか？どうしたんだ？」

何時も弁当を作つてる龍也にそう尋ねると龍也は肩を竦め

「斬艦刀の重量にISが耐えれなくてな。調整し直していたから弁当を作つてる時間が無かつたんだ」

…ISでも耐えれない重量つてどんな武器なんだよ…

「つと言うわけで今回は私も食堂で昼食だ、なのはとフェイトも一緒だが。良いかね？」

「別に断る理由はないさ、一緒に行こうぜ」

偶には龍也達と一緒に昼食と言うの悪くない。俺が頷いていると「なになに、お昼？私も一緒に良いかな？」

転入生のシエンさんが尋ねてくる

「別に良いぞ。転入初日だし場所判らないだろう？案内してやるよ」俺が返事をする前に龍也が返事をする

「やり♪龍也君は優しいね〜」

にこにここと笑うシエンさんの斜め後ろでは…

「やっぱりフラグを…」

瘴気を放ち始めている高町さんとハラオウンさんが居るが、龍也はそれに気付いていなかった…

「ふむ…日替わりにするか」

龍也がメニユーを見ながら券売機から日替わりのチケットを買っている。俺も龍也と同じく日替わりで、箒と高町さんはきつねうどん。セシリアは洋食ランチで。ハラオウンさんとシエンさんがはクリームシチューセットを買っていた

「待つてたわよ！一夏!!」

俺達の前に立つ小柄な影：鈴だ、こいつ変わんないなー、髪型とか性格とか…俺はそんな事を考えながら

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし。通行の邪魔だし」

「う、うるさいわね！判ってるわよ！」

鈴がそう言ってから俺達の前から退く。その手には盆があり、ラーメンが湯気を立ててる

「鈴？…伸びるよ？」

「うっさいシエン！言われなくても判ってるわよ!!」

シエンさんに言われそう怒鳴る鈴…何時も通りで非常に懐かしい

「それにしても本当久しぶりだな、1年ぶりくらいか？元気してたか？」

「…げ、元気だったわよ…アンタの方は…どうなのよ？」

「んー、普段通りかな？鈴がいないから、油断していると千冬姉に襲われかける毎日だった」

鈴と千冬姉は非常に仲が悪い。顔をあわせると喧嘩ばかりだが、鈴は俺を助けてくれるので非常に助かっていた

「気をつけなさいよ、下手するとぱっくり食われるわよ？性的な意味で」

「…現実になりそうだな…警戒しとく」

鈴と話していると

「あーゴホンーゴホン!!!」

「ソソソッ!!一夏さん？注文の品出来てましてよ？」

箸とセシリアの大袈裟な咳払いで会話が中断される。おお！日替わりは鯖の塩焼きか！これは美味そうだな

「向こうのテーブルが空いてるな。行こうぜ」

鈴を含めた全員で奥の空きテーブルに向かう、人数が多いので移動するのも大変だ…でもすぐに席につけたから幸運だった。

「ん？おーい！エリス！こっち来いよー！」

席に座ったところで龍也が誰かを呼ぶ、思わず其方の方を見るとそこには、代表就任パーティーで龍也と話していた小柄な女子がいた。龍也に呼ばれたその女子は

「……」

黙り込んで何かを考えてる素振りを見せている。それは無理もないだろう、魔王様がこっちくるなのオーラを出している、これで平然とこれるのはさほどの大物だろう…暫く考える素振りを見せてからその女子はこちらに歩いて来て、盆を置いて空き席に腰掛け

「…恥かしいからそうやって呼ばないで」

「なんで？」

龍也に文句を言っていたが、龍也は首を傾げるだけ…なんとというか天然なのか？俺はそんな事を考えながら、昼食を食べ始めた…

…あんな大声で呼ぶなんて。信じられない…私はそんな事を考えながら、オムライスを口に運んだ…確かに空き席は探していた。だがあんな大声で呼ばれては目立って仕方ない…私はあんまり目立つの

が好きではないから、そう言うのは出来れば避けたかった…

「ふむ…絶妙な塩加減だな」

龍也君は味噌汁を呑みながら何かを考えている素振りを見せていた。私を呼んだことに特に他意は無さそうだが…

(それが逆に腹ただしいです)

…自分でも持て余す感情に眉を顰めてると

「なのは、フェイト、先日友達になった。エリス・V・アマノミヤだ」

「…何時私は知り合いから、友達にランクアップしたんですか？」

さも当然という感じで紹介され、私がそう尋ねると

「えっ？って顔をするのは止めてください！」

驚きという表情をする龍也君。この人の思考回路は一体どうなっているんだ？と思わずにはいられない

「いや、自己紹介したからもう友達だろ？」

「…それだけで友達にする人は初めて見ました」

普通はもう少し時間を置いてから友達になるのでは？

「じゃあ、私も友達だね！」

「そうそう、シエンも友達だな」

イエーツ！と手を叩きあう龍也君と金髪の女子…この2人は思考回路が似ているのか？それも私がおかしいのか？私が首を傾げていると

「こちら、昨日知り合った。呂 神麗（ルウ・シエンリー）だ」

「シエンって呼んでね？えーと…エリスさんで良いよね？」

間違いない、この2人の思考回路は同レベルだ。

「…馴れ馴れしくしないで下さい」

「えー、良いじゃん。友達で、ねー龍也君」

「そうだよな。友達で良いよな」

…この人達に突っ込んでいては日が暮れる…天然2人は思った以上に難敵だ。私は諦めの境地に達し

「もう友達で良いですよ」

自分が折れることにした、一々突っ込んでいては時間が掛かりすぎるからだ。私が妥協していると

「鈴と俺?…幼馴染だけど?」

「幼馴染?…」

向こうは向こうで色々と問題があるようだ、まあ私には関係ないが…

「えーと、エリスさんは日本?ドイツ?どっちの代表候補生なのかな?」

白い悪魔がそう尋ねてくる。目が据わってる上に殺気が半端ない
「…今のところはどちらでもないです。私は母が日本人で。父がドイツですから、色々と問題が多いんですよ」

どちらの国も自分の所の代表候補だと言いつているので。今の所私は代表候補ではない

「へー、大変なんだね。エリスも」

納得という感じの金の悪魔は白い悪魔と比べて殺気を出していない。何故だろう?」

「いや、友達が増えて良かったよ」

「だよな、友達が多いのは楽しいしな」

「本当!本当!」

…どうやら天然は2人ではなく。3人だったようだ…

「はあ…」

「苦労してるようですね、なのはさん」

「…判る?龍也さんの知り合いって天然ばかりだから。結構強引なんだよ」

「…ええ。判りますとも」

2人でうんうんと頷きあう。どうやらこの人も龍也君の天然具合に引つ張りまわされているようだ。

「アマノミヤさん、理解してくれてありがとう」

「エリスで良いですよ」

どうやら、この人とは仲良く出来そうです…私はそんな事を考えながら昼食を進めた…

「あーえつとだな。箒が引っ越していったのが小4の終わりだろ？ 鈴が引っ越してきたのは小5の頭でな。中2の終わりに国に帰ったから、あうのは1年ちよつとぶりなんだよ」

怪訝そうな箒に鈴の事を話していると

「シエンのISってどんなの？」

「んー？ 遠近万能型らしいけど、私馬鹿だから殆ど近接かな？」

「へー私はね〜鎌だよ」

「そうなんだー」

ハラオウンさんとシエンさんが仲良くなってる…一体この短い間に何が？

「…一夏？ 今はあたしと話をしてるんよ？ なんでシエンの方を見るのかな？」

「…気のせいですよ？ 鈴さん？」

「何で敬語なのよ」

ハイライトの消えた目の鈴が恐ろしい、鈴は俺を助けてくれるが基本的に千冬姉に近い性格だ。これ以上あちらを見ては命がない。

「で、こつちが箒。前に話したろ？ 小学校からの幼馴染で、俺が通っていた剣道場の娘」

話を戻した方が良く、俺はそう判断し。箒の紹介をした、すると鈴は

「ふうん…あんたが…」

敵意の色を見せる鈴…昔からこいつはこうだ、俺の友達の女友達を見ると敵意をむき出しにする。そんな所も千冬姉にそっくりだ。そんな事を言えば怒るので言わないが…

「初めまして。これからよろしく…一夏は渡さないわ」

「ああ、こちらこそ…負ける気は無い」

んん？ 2人が小声で何か言った気がするが…よく聞こえなかったな？ なんて言ってたんだらうか？ それに2人の間で火花が散ったように見えた…幻覚かな？ 俺は疲れているのだろうか？

「ンンンツツ！ 私を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生の

凰鈴音さん?」

「…誰?」

「なっ?! 私はイギリス代表候補生のセシリア・オルコットですよ!?
ご存じないのですか!」

セシリアがそう尋ねると鈴は

「うん、あたし他の国とか興味ないし、っていうか基本的には一夏以外
に興味ないから」

…鈴? 暫く会わないうちに千冬姉に似てきてないか?

「な…な…なっ!」

言葉に詰まりながら怒りで顔を赤くするセシリア

「い…い…言っておきますけどね! 私はあなたのような方には負けま
せんわ!」

「そ、でもね、あたしはISでも恋でも負ける気は無いわ。一夏はあた
しのよ」

いえ、俺は俺のものなのですが? といったらきつと騒動が大きくな
る。ここは黙っておこう

「……」

「いつ…言ってくれますわね?」

箒は無言で箸を止め、セシリアはわなわなと震えながら拳を握り締
める。

「一夏。アンタ代表候補なんだって? まあ…あんたの実力なら当然だ
と思うけどね…」

鈴は俺の剣の修行を良く見ていた、だから俺の強さは知っている、
確信とも言える表情で言う鈴に

「…まあセシリアには勝てたが、龍也には一撃で負けた」

「ふーん…やっぱ、龍也も強いよね?」

「いや、強いとかそう言う次元じゃない。3メートルはある馬鹿でか
い実体剣をぶんぶん振り回すんだぞ?」

何度かISで手合わせしたが、間合いに入り込めない。普通はあん
なでかい剣を振り回せば、隙のひとつやふたつありそうなものだが、
それが無いので、今の所負け越している

「…それはまた凄いわね？んであんたのISに射撃武器はないの？」

「俺のISの武器は剣だけだ」

「…なんで？」

「知らん、そう言う機体らしい」

追加装備もお断りの白式は完全近接特化の機体だ。自分の間合いにしないと勝ち目は無い

「1回ISの操縦見てあげようか？」

「おっ、そりゃ…」

代表候補生の鈴のアドバイスを聞くのも良いかもしれない。俺が助かると言おうとした瞬間

ダンツ!!2

力強くテールブルが叩かれた、思わずそちらの方を見ると箒とセシリアが怖い顔をしていた

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは私なのだから」

「あなたは2組でしょう？敵の施しは受けませんわ！」

2人が敵意の色を目に映して言うと言は

「…黙りなさい、あたしは一夏に言ってるの…関係のない人間は引込んでなさい…」

鈴が漆黒の瘴気を撒き散らし始める。その瘴気に一瞬箒とセシリアは怯んだもののすぐに

「私が！頼まれたのだ！お前が関わる必要はない！」

「1組の代表なのですから、1組の人間が教えるのは当然ですわ！後から出てきて何を…」

「…あたしの方がアンタより付き合いは長いわ。すこし黙りなさい。耳障りよ、セシリア・オルコット」

いかん…鈴がマジ切れ寸前だ。このままでは鈴が魔王になるそれは避けないと、止めれなくなる

「そっぴやさ、親父さん元気してるか？」

話題を変えるためにそう尋ねると鈴は

「…元気だと…思う」

魔王化の兆候は消えたが、若干気落ちした雰囲気を感じる…

「どうし…：そ、それより、一夏！今日の放課後って時間ある？あるわよね！久しぶりに何処か行かない？駅前ファミレスとか！」

俺の言葉を遮りそう言う鈴に

「あー、あそこ去年つぶれたぞ？」

「そ、そうなんだ…：じゃ、じゃあさ！学食でも良いから積もる話もあるでしょ？」

うーん…：ISとかの話題でよければ、聞きたいが…：果たしてそれで鈴が納得してくれるだろうか？

「…生憎だが、一夏は私とISの特訓をするのだ。放課後の予定は埋まっている」

「そうですね、クラス対抗戦に向けて、特訓が必要なのです。あなたに関わってる時間はありませんわ」

何故、2人が返事をする？俺の意見は無視なのか？久しぶりに会った幼馴染と話す時間さえ許されないのか？

「そう、じゃあ。放課後はあんた達にあげる。その後はあたしの時間よ？良いわね？それじゃあね一夏！シエン行くわよ！」

「えーもう少しフェイトとなのはと話したいんだけど？」

「良いから来なさい！」

「はいはい、判りましたよ。それじゃあね。また後で」

ひらひらと手を振り、鈴と共に食堂を出て行くシエンさんを見ながら

(断る事も出来なかったら絶対待ってるしなねえじゃないか…)

「一夏？当然特訓が優先だぞ？」

「一夏さん？私達の有意義な時間を使っているという事実をお忘れなく」

そしてこつちも断れる状況ではなかった…：俺は内心溜め息を吐きながら、頷く事しか出来なかった…

「シエン。クラスの状況を教えてくれないかしら？」

「…んー？一夏君と箒さんとセシリアさんとか？」

歩きながら言う鈴に尋ねると、鈴は頷き

「そうよ。一夏がああ2人になびいてそうだったら教えて」

怖い顔をする鈴に

「別に良いよ、同じクラスだしね」

友達の頼みを断る理由はない、2つ返事で引き受けると鈴は

「お願いよ……？シエン……一夏だけは……絶対に欲しいの」

さつきまでの怖い顔を一転させ不安げな表情の鈴に

「……大丈夫、私は鈴の味方。協力するよ」

鈴は非常に不安定な人格をしている、一夏君は知らないが、両親の離婚に一夏君から離れたこと……様々な要因が重なり、鈴は非常に危ういバランスで今の人格を維持している。なんらかの要因があれば容易く崩れるようなそんなバランスで……

「一夏……一夏……」

一夏君の名を繰り返して呟く鈴に

（これであの2人のうちどっちかどっついたりしたら、鈴は簡単に精神崩壊するわね）

今の鈴には一夏君の存在が必要だ。友達の精神が崩れるとこなんて見たくないし、鈴は私のライバル兼親友だ。あふ2人には悪いが一夏君と鈴がくつつくように助力させてもらおう

（んー私も難儀な性格だよな）

私と鈴が会った頃は、鈴はかなり荒んでいた。両親の離婚に、一夏君とはなれた事でかなりやばいところまで行っていた。私は同じ代表候補生という事で話す機会が多く、長い時間を掛けて鈴と今のような関係になったが。最初は険悪その物だった、誰も信じないそんな態度が目に見えていたから。それでも私は何度も話しかけ、鈴と打ち解けていった……そして理解したのだ

（鈴の話に良く出てくる、男の子に依存している事を……）

鈴のただ1つの心のより所……それを簡単に奪わせるわけには行かない

（さーと、どうやって鈴と一夏君をくつつけるかな）

私はそんな事を考えながら鈴と別れ、1組へと向かって行った……

第12話

第12話

「はー。凄いもんだな…」

俺はISスーツのままそう呟いた。今アリーナでは龍也VS高町さんとハラオウンさんのコンビの試合が行われているが、龍也が圧倒的に優勢だ

「むん!!」

ブースターを全開にし突っ込んでいく龍也を見て、即座に高町さんとハラオウンさんが

「フェイトちゃん！後退して！」

「判ってる!!」

龍也と斬り合っていたハラオウンさんと高町さんが素早く位置を変え

「星光壁ツ!!」

左手を突き出した、瞬間エネルギーのバリヤが発生し斬艦刀を止めるが

「無駄だツ!!」

ゴオツ!!!

背中のブースターが唸りを上げ、そのバリヤを砕かんとする

「よつと」

体を傾けバリヤの位置を変える。そのバリヤの軌道に沿って受け流される。斬艦刀

「むっ?」

龍也が一瞬バランスを崩した瞬間

「貫った！」

ハラオウンさんがコールした、大鎌が振り下ろされるが

「ふっ！」

「指の間でツ!?!」

人差し指と中指でその鎌の刃を防ぎ

「まだまだ甘いな」

ガシャンッ!!!

零式の脚部と腰周りの装甲が開き、そこから小型ミサイルが乱射される

「くうっ!!」

その勢いに押され、後退する高町さんとハラオウンさん目掛け

「斬艦刀!!! 大! 車! りいりいんツ!!!」

斬艦刀をブーメランの様に投げつける、それを見た瞬間、隣のセシリアと箒が

「トラウマになるな」

「ええ、斬艦刀でさえ凄まじいインパクトなのに、あれが高速回転しながら迫ってくるんですもの…悪夢に見ますわ」

その意見には同意しよう、3メートル近い斬艦刀が高速回転しながら迫ってくる光景は悪夢そのものだ

「嘘おおおッ!?!」

「避けれないよあんなのツ!?!」

ドゴンッ!

凄まじい音と共に斬艦刀が2人を捉え吹き飛ばす。アリーナの壁に叩き付けられ、シールドエネルギーが0になる2人のIS

「我が斬艦刀に断てぬ物無しッ!!!」

戻ってきた斬艦刀を片手で掴みそう叫ぶ龍也。もうあれは強いとかそう言う問題じゃないと思ったのは俺だけではないだろう…俺はそんな事を考えながら龍也達の元へと向かった

「むー、今度こそと思ったんだけど」

「読まれてたねー、一撃すら入らなかつたよ」

ISを展開したまま、模擬戦の反省をしている、高町さんとハラオウンさん、高町さんのISは桃色の装甲を中心に所々白いラインのISで大型のライフフルと、バリアー発生能力を持った、防御と射撃に特化したISで、ハラオウンさんのISは黄色の装甲に黒いラインが入り、加速用のブースターを随所に持ち、加速能力に特化させており、装甲も少ない。ヒット&アウェイをコンセプトに開発されたISで、2

人1組での運用が前提らしい

「そう簡単には一撃は貰わんよ」

からからと笑う龍也のシールドエネルギーは1ポイントも減っていない。2対1でノーダメージ：俺もきつき、不運が重なり箒とセシリア

の2人と模擬戦をする羽目になったが、フルボッコにされた。(意地で箒とセシリアに多少のダメージを与えるのが精一杯だった)

「いや、しかし龍也のISって第2と第3の間なんだろう？どうして第3世代のIS2機を相手にそこまで戦えるんだよ？」

俺がそう尋ねると龍也は

「そうだな…零式自体は第2世代の後期型だ、まあ古い型と言え扱うのは人間だ、技能でカバーすれば良い」

龍也はにやりと笑いながら言うと

「それにまだ切り札は切っていないしな」

どうやら龍也にはまだ札が残っているらしい。それがどんなものかは判らないが。あの言い方を見るとよほど強力なものなのだろう

「まだ隠してる手があるんですの？」

セシリアがそう尋ねると龍也は

「当然だよ、知らないのかね？良い男には秘密はつき物なのだよ？」

くつくつと笑う龍也。なんとと言うか、同性から見ても格好良いと思う。惚れっぽい女子なら簡単に惚れてしまうだろう

「龍也さんが言うとは異様に決まっているから不思議ですわ」

「ああ。聞くのが野暮の様に思える」

2人がそんな話を話していると龍也は

「ふーむ。やはり腕に過負荷になってるな。少しばかり調整が必要だな」

ISのパラメーターを見ながら呟いた龍也は

「うん、少しばかり整備室で調整してくる。後はなのは達にでも見て貰え。ではな一夏」

「えっ？俺をおいていくのか!？」

擬音だけの箒・例えが判りにくいセシリア・そして鬼のような指導

の高町さんとハラオウンさん：ストッパーである龍也が居ない以上。ボロボロになるのは目に見えているので俺がそう言うのと

「一夏、頑張れ」

「それだけ!?他に言うことは!?!」

「ない、では幸運を祈る」

そう言つて龍也はアリーナを出て行つてしまった：

「それでは今日の訓練を始めようか?一夏君?」

良い笑みの高町さん。射撃の嵐を避ける練習か?あれは死ぬる

「それとも私がやろうか?」

目にも止まらぬ速さの鎌を受け止める練習だろうか?絶対防御があつても痛い

「機動の練習が良いでしょうね」

右斜め45で半回転とか、理解しにくい事を要求してくるセシリア

「ではこの前の緊急回避の復習でもするか?」

くいつとか?ぎゅおんつて感じた、とか言う箒の指示に従うのも大変だ。間違えると怒るし

(は…ははは…もうどうとでもなれ)

俺は諦めの境地に達し。鬼教官達の指導を受け始めた：結論から言ううと精神疲労と肉体疲労で俺は凄まじく消耗する羽目になつた：

カタカタ…

「ふむ、斬艦刀の重量の問題か?」

ISの両腕のモーターの消耗具合が激しい：

「モーターを良いのに代えるかな」

斬艦刀がメイン武装なので、これを使えなければ意味が無い。それにまだ他の機能を使うつもりも無い、仕方ないので自分で調整しようと思ひ、工具を取りに行こうと立ち上がると

「……」

背後から視線を感じる、監視しているような：警戒してるようなそんな気配を感じる

「私に何かようかな？」

振り返らず尋ねると、その気配は徐々に遠のいて行った：

（何度か感じた気配だな？誰だ。織斑先生ではないが…どう考えたってプロのものだな）

隠密と陰行に長けた人間。しかも気配を隠すのも非常に巧い、どう考えてもその道のプロとしか思えない

（警戒されるとは思っていたが、予想より大分早いな。エリスの他にも私を調べてる人間が居るのか）

私を調べてる人間が他にも居るのかもしれない。まあ特に支障もないので無視しても良いか…

「さてと。工具でも取りに行くか」

私はそう呟き、工具置き場へと向かった…

「…気付かれた…」

コンテナの影に隠れ呟く1人の少女、ポニーテールにIS学園の制服を改造したアオザイ風の服に身を包んだ少女は、龍也を見ながらそう呟いた

「おう、アイアス、どうよ？監視の結果は？」

「…シエル。監視…ばれてる」

黒い男子の制服に身を包んだ、乱暴な口調の女子に、ポニーテールの女子がそう言う

「あーやっぱりか…そらバレルわな。あいつはどっちかって言うところたしたら側の人間だしな」

かつかと笑う女子「シエルニカ・オウレン」に

「…ばれるような真似はしてない」

少し怒ったような口調のポニーテールの女子「アイオス・ブルーライト」がそう言う

「まあ、良いじゃねえか。エリス様は気に入ってるみたいだぜ？まあいざとなりや戦えば判る、あいつが何者かってな」

「…シエルの脳筋思考にはついていけない」

「誰が脳筋だ！コラアツ!!!」

振るわれた拳を回避しながらボクは

「…バトル脳すぎる、もつと計算して動くべき…」

「そういうのはあれだ、あたしの仕事じゃねえ。お前たちの仕事だろ？あたしは動く、お前らは考える。ほれ、役割分担できてるだろ？」

そう笑うシエルに溜め息を吐き

「…まあ良い…フレイヤに報告する」

「あー堅物に？やめとけやめとけ、フレイヤ憤怒するぞ？」

しかめっ面をするシエルに

「…直接顔見て言う？」

後ろを見ながら言うと言いつつシエルは

「…居るのか？あたしのうし…フギヤツ!?」

ゴチン!!

凄まじい音と共に振り下ろされた拳骨にシエルが頭を押さええうずくまる

「誰が堅物だ、シエルニカ」

緋色の髪をした成人女性が蹲るシエルを見下ろしながら言う

「…フレイヤ…監視…ばれてる」

「アイアスの尾行に気付くとは相当な達人だな」

こくこくと頷く女性の名は「フレイヤ・スカーレット」特別な許可を得てIS学園に居る、更識家暗部の1人だ、シエルニカとボクもフレイヤと同じく暗部として活動している人間だ

「てめえーこら!!!何で行き成り殴るんだよ!!!いてえだろっがっ!!!」

「黙れシエルニカ。お前は騒がしすぎる」

「誰のせいだと思ってるんだよ!!!フギヤツ!!」

再び振り下ろされた拳骨に蹲るシエル…シエルは涙目で頭を押さえたま

「サーセン…」

「判れば良い、判ればな。それでアイアス、まだ調べる事は可能か？」

そう尋ねられたボクは

「…問題ない…ボクだけは学園の生徒だから。近付く機会はある…」

17歳のボクだけは生徒として学園に滞在している。話す機会は

あるというと

「そうか、では八神龍也の件はお前に任せる。では仕事に戻るぞシエルニカ」

「あーはいはいっと、エリス様の身辺警護ね」

シエルが立ち上がるとフレイヤはメモを渡し

「違う、お前は夕食の準備だ」

「あたしだけそんなにかよっ!!てめえらも料理くらい覚えろよ!!女だろっが!!!」

メモを受け取りながらも文句を言うシエルに

「私はずっと戦場育ちだからそんなのは知らん」

「…ボクが作っても良いなら作るけど?」

「てめえは駄目だ!この味覚音痴!!てめえのは辛いんだよ!!何だよ!どうしたらシチューが赤くなるんだよ!!」

「…普通に作ってたら」

ただシチューに母国、ベトナムの調味料を入れただけ。そしたらシチューが赤くなったと言うと

「あーもう!良いあたしが作れば良いんだろ…へいへい。材料買ってきますよ」

髪をがりがり掻き毟るシエルはメモを見て

「さてと、材料買ってくるか。んじゃ、あと任せるぜ」

そう言っ歩いて行くシエルを見送っていると、何時の間にかフレイヤの姿も無くなっていた

(…まっいつか…ボクはボクの仕事をするだけ)

くるりと回れ右をしてボクはそのまま、整備室を後にした…

(…もしも八神龍也が…エリス様の敵なら…消す…それだけのこと)

僕はそんな事を考えながら夕日を見ながら寮へと向かっていった

…

「あー死ぬかと思った」

鬼教官×4の訓練を終え、ISの展開を解除していると

「もう少し自然体で制御しろ、だから疲れるんだ」

何故か他の3人と違い、俺と同じピットで着替えている箒にそう言われるが

「うーん、意識しないようにしてるんだけどな」

そもそもISに触れ始めて僅か数日、自然体で制御しろというのは酷という物だろう：だがそれよりも今の俺はシャワーを浴びたくて仕方なかった：汗でベチョベチョで気持ち悪い、近くに部室棟のシャワールームがあるが。男女別ではないので入るのは不可能、もし仮に誰もいなくて使用出来たとしても

(そんな事をしようものなら、俺は問答無用で殺される)

箒と千冬姉によつて：いやもしかしたらISを展開しているセシリアと言う可能性もある。つまりは寮に戻るしかないのだ、と言つても箒が先で俺は気持ち悪いまま待つしかない。それは出来れば回避したい自体だ

「なあ、箒。今日先にシャワー使わせてくれよ。それにお前剣道部じゃなかったけ？訓練に付き合ってもらえるのはありがたいけど。部活で他の女子に出遅れるぞ？」

全国レベルの技術を持つてるのにもつたいないと付け加えながら言うと箒は

「お前が気にする必要は無い。：むしろこつちで出遅れるほうが問題だからな」

小声でボソボソと言う箒に

「まあお前が良いなら良いが、それでシャワーなんだが…」

再度シャワーに関する交渉を始めようとしたところで

「一夏!!」

バッシュ!!

勢い良くスライドドアが開かれ、鈴が飛び込んでくる

「おつかれさま、見てたわよ。大分絞られたみたいね。はい、タオルとスポーツドリンク」

手渡されたタオルで汗を拭い、スポーツドリンクを飲む。冷えてないドリンクだが、運動後はこれがいいのだ

「あんだ、爺くさい事考えてるでしょ？」

呆れたようなでもそれでも楽しそうな顔で言う鈴に

「不摂生してたら良くないんだぞ？あとで泣くのは自分と自分の家族だ」

タオルを首から下げながら言う

「変わらないわね…あんたは」

にやにやと楽しそうな表情の鈴…全てを見透かしているようなその目は見られていて落ち着かない。

「一夏つてさあ。私が居ないと寂しかった？私は寂しかったけど…一夏はどうだった？」

素直に寂しいといわれ一瞬どきりとしたものの俺は

「まあ、遊び相手が減るのは寂しかったかな？」

誤魔化すためにそう言うと言は

「そうじゃなくて…さあ。もつとこう何か無いの？」

上目目線の鈴…くっ！なんだ異様に可愛く見える。どうすればなんとはいえ…俺が混乱していると

「あーゴホンツッ！ゴホンツッ！」

箒がわざとらしい席でその雰囲気を消してから

「一夏、私は先に部屋に戻る。シャワーはお前が先で良い。ではなまた後で」

また後での部分を強調しピットを出て行く箒を見ていると

「…一夏？どういうことかな？なんでシャワーの話が出るの？」

ひいッ!?魔王化してる!?なんでどうして何が原因なんだ!?俺は混乱しながらも

「何時もは箒が先なんだが…「そう…そうなんだ…じゃあ何処の骨を折って欲しい？」

「待って!?待ってください鈴さん!?何事も無いように肘の関節を極めないで!?話を！話を聞いてください！」

無表情で俺の肘の関節を極める鈴、このままでは折られる!?慌てて話を聞いてくれという

「良いわ、話位聞いて上げる。その上で納得行かなかったら、へし折るわ」

これは重大なターニングポイントだ、鈴を納得させられるように話さなければ。俺は必死で言葉を考えながら

「あのですね。箒とは幼馴染なんですよ」

「うん、それは知ってる」

ギリギリ：ぐわ?! 関節がやばい音を立ててる!?

「そ、それですね? 俺、今：箒と同じ部屋なんですよ：」そう。判った。折るわ：」イダダダダダツ!! 最後! 最後まで聞いてください!!! 俺の入学はかなり特殊なこととして! 別の部屋を用意するまでの間、しかたなく箒と同室になってるんです!!」

捲くし立てるように言うと鈴は

「そう：つまり寝食を共にしてると?」

「はい、そうなり：幼馴染だから良かったと思つて：ギャアアアアツ!?! 痛い! 痛い!!! 肘の関節に加えて頭蓋骨が軋んでる音がする!!」

ギリギリと頭蓋骨が締め上げられる、どうして俺の周りには素手で人の命を絶てる人間が多いんだ!?! このままでは死ぬ! 鈴の手を叩いてタップしていると

「つたら、良いわけね?」

「鈴さーんっ!! せめてヘッドロックだけでも外してから話をしてくださいませんか!?!」

頭蓋骨から聞こえてはいけけないぱきぱきと言う音が聞こえる、本気で不味い

「だから幼馴染なら良いわけね!!!」

「ギャアアアアツ!!」

大声と共に俺の頭蓋骨を掴んでいた鈴の手の握力が増す、その痛みで絶叫していると

「判った、判ったわ、ええ、ええ、良く判ったわ」

「判ったのは良いですから! ヘッドロックを外してください!!! お願いします!!!」

俺が必死でそう言うのと鈴は肘の関節を極めるのをやめ。ヘッドロックも外して

「一夏!」

「はい！なんででしょうか!？」

思わず直立不動し鈴の言葉を待つ

「幼馴染は2人いるって事を、覚えておきなさい!!!」

「言われなくても忘れ：「そう言う事を言ってるんじゃない!!」ぐはっ
!？」

角度・速度・威力共に絶妙なボディブローが俺の脇腹を捉える、痛み
みの余り蹲ると

「じゃあね！また後で!!」

鈴はそう言うのとピットから飛び出していった：残された俺は脂汗
を流しながら立ち上がり

「何をあんなに怒ってたんだ？」

鈴が怒った理由を考えながら着替え、足を引き摺りながら自室へと
戻った：

第13話に続く

第13話

第13話

さて、人間はどうしようもない危機の時、思考を放棄するという今の俺が正しくそうであった…

「どうわけで部屋を代わって。一夏を寄越しなさい」

「ふ、ふざけるな!!100歩譲って、部屋は代わっても良い。だが何故一夏までお前に渡さなければならぬんだ!!」

時刻は夜8時、夕食後の楽しみとしてお茶を用意していると。鈴が来てこの状況：鈴と箒の相性が非常に悪いという事が判明したが。今はそれと違うところではない。2人の言い合いをどうやって止めるか？それが最重要課題だった

「だから。篠ノ之さんも男と同室なんて嫌でしょ？気を使うのんびり出来ないし、あたしはその点平気だし、一夏と一緒に入れるし。だから部屋を代わってあげるって言うてるの。だから今すぐ出て行きなさい。そして一夏をあたしに寄越しなさい」

「こ、断る！何故一夏をお前に渡さなければならぬんだ！」

もう部屋がどうかではなく、俺の所有権の話になっている。俺は俺のものです、と言ったらどうなるだろう？

「大丈夫よ、あたしも幼馴染だから」

「だから！それが何の理由になるというのだ！」

このやりとりが何度も続いている。箒は箒で頑固だし、鈴は我が道を行く性格。どう考えても話し合いで解決するとは思えない。どうか鈴は既に自分の荷物を持ってきてる気がするんだが？

「鈴？」

「うん？何一夏？」

こちらを見る鈴に

「それ、荷物全部か？」

「そうよ。一応あんたへのおみあげも持って来てるけど。基本あたしはポストンバッグ1つで何処でも行けるしね」

楽しそうに笑う鈴。なんとというかフットワークの軽いやつだ、俺も荷物は少ないほうだが、鈴は少なすぎではないだろうか？

「まあその話は後で良いわよね。というわけであたしもここで暮らすから」

荷物を部屋に入れようとする鈴に箒が

「ふ、ふぎけるな!!出て行け、ここは私の部屋だ!」

「そう、でも一夏の部屋でもあるでしょ?じゃあ問題ないじゃんねえ?」

同意を求めるような表情の鈴と俺を睨む箒:俺にどうしろと言っ
んだ?

「俺に話を振らないでくれ」

頭が痛い:半分が優しさで出来ている錠剤が今の俺には必要だ。
残念な事に手持ちは無いが:

「とにかく!部屋は代わらない!!出て行くのはそちらのほうだ!」

「所でさ、一夏約束覚えてる?」

もう箒との話は終わりと言いたげに話を代える鈴、

「む。無視するな!!ええい!こうなったら力づくで」

箒が竹刀を取り、振りかぶる

「あつ!馬鹿!!」

俺が止めるより早く、箒が鋭い腕の振りで竹刀を振り下ろす

バシインツ!!!

物凄い音が響いた、俺が思わず

「鈴大丈夫か!」

俺がそう尋ねると鈴は

「大丈夫に決まってるでしょ?今のあたしは代表候補生なのよ?」

鈴の頭に当たっていたと思う一撃は鈴が展開したISによって止
められていた:

「!」

箒が驚いているのが判る。無理もない幾らISの展開速度が速くても、その判断をくだすのは操縦者だ、つまり今の打撃を鈴は完全に
見切っていたことになる。鈴が強いのは知っていた。魔王モード(弾

命名)状態なら、なんせブラコンモードの全開の千冬姉と互角に戦えるのだから。だが今の鈴は俺の知る鈴よりはるかに強いと一目で判る

「つていうかき、あんたなに考えてるの？竹刀で無防備の人間殴るなんて正気？」

「うつ…」

鈴の指摘に言葉を詰まらせた箒が竹刀を壁に立てかけると鈴は

「ま。いいけどね、あんたの底が知れたしね」

鈴はISの展開を解除して、箒から視線を逸らす。まるでもう興味は無いと言いたげな表情だった

「え、えーと」

気まずい雰囲気部屋が包み込む、箒は失態引き摺って無言だし、鈴は勝ち誇った表情をしてるし

「鈴。約束とか言ってたよな？」

「う、うん覚えてるよね？」

上目遣いで俺を見る鈴に

「おうちゃんと覚えてるぞ。「料理が上達したら毎日あたしの酢豚食べてくれる？」つてやつだろ？」

「そうーそれ!!ちゃんと覚えてるじゃない!!えらいえらい」

鈴が背伸びして俺の頭を撫でようとするがギリギリ届いていない

「その話をよ、千冬姉にしたら、ぼこられた挙句、関節を極められてな…痛みと共に心に刻まれてんだ」

そのあまりの激痛にその約束は俺の魂の奥深くに刻まれていた。トラウマと共に

「よしよし、ブラコン今だけはおんたに感謝してあげるわ」

鈴がうんうんと頷くなか、俺は

「んでよ。俺はこう勘違いだと悪いんだが。毎日味噌汁をくつて話かな？つて千冬姉に話したら。顔を鷲掴みにされてな、「それは違う、お前を毒見役にするつもりだ。だから決して食うな」つて言われたんだけどよ。どっちが正しいんだ？」

俺としては出来れば前者が良い。だが後者の可能性も捨てきれな

いのでそう尋ねると鈴は

「あ…あのブラコン!!一夏に余計な事を!!」

鈴は握り拳を作り怒り心頭と言う様子だった…

「あれ?マジで毒見役なのか?」

「違うに決まってでしょ!!この馬鹿!!」

そう怒鳴る鈴に

「んじゃあれか?毎日味噌汁をくって話なのか?」

それってあれだよな?プロポーズの1つだったような気が…

「それもち、違う!!」

えーどつちなんだよ…毒見役でもなくてプロポーズでもなくて…

鈴は俺に何を要求してるのかさっぱり判らない

「じゃあ、どつちなんだ?教えてくれよ」

「む…むむむ!!ええい!!こ、今度説明する!!」

床においていた鞆を拾い、隣においてあった紙袋を俺に投げ渡し

「それおみあげだから!ありがたく受け取っておきなさい!!」

「おう、サンキュー」

鈴はそう言うのとバタバタと部屋から出て行った…俺は紙袋の中身を見ながら

「おつ、重り入りのリストバンドに俺の好きなミュージシャンのCDに饅頭か。俺の好み良く知ってるなあ」

感心しながらリストバンドを着けてみる、ずしっとくる手応え…これは身体を鍛えるのに良さそうだ

「箒、お茶淹れるから饅頭食うか?」

「…いらない」

不機嫌そうな箒…箒なら同性だし、鈴が言おうとしていた事も判るかも

「なあ、鈴は何を言いたかったのか判るか?」

「死ね」

「ぐはっ!」

即座に放たれる地獄突き、その痛みにのた打ち回っていると

「自分で考えろ、私はもう寝る!!」

不機嫌そうに布団に潜り込む筈…くっ幼馴染の…しかも女の考える事は判らん…俺はゆつくりと身を起こし

(ぐぐ…痛みで食欲でない…これしまつとこう)

饅頭を戸棚に仕舞い。俺は痛む喉を押さえながら布団に潜り込んだ…

(結局鈴は何を言いたかったのだろうか?)

俺はそんな事を考えながら眠りに落ちた…翌日 生徒玄関前廊下に大きく張り出された紙があった。表題は「クラス対抗戦日程表」

1回戦の相手は鈴だった…

バタン!!

勢い良く扉が開き鈴が飛び込んでくる

「あれ?一夏君の所に行くくんじゃなかったの?」

本を見ながら尋ねると鈴は、嬉しそうなでも複雑そうな表情を浮かべ

「一夏。約束覚えててくれた」

「おー味噌汁をつてやつの話したんだ。で?付き合ってくれるって?」

日本ではプロポーズの言葉として毎日味噌汁をくとか言う話があるらしい。だから交際の話になったのか?と尋ねると

「…逃げてきちゃった」

「なんで?」

予想外の返答にそう尋ねると鈴は、事情を説明してくれた…約束は覚えていてくれたが、織斑先生によって多少事実が捻じ曲げられていると

「なんとまあ…そこまで行っちゃってるんだ。どうしようか?」

超が付く有名人の織斑先生がやばいレベルのブラコンだと、鈴から聞いていたがまさか本当だったとは思っても寄らず、そう言う

「うー…一夏になんていえば良いか判らない。どうすれば良いとおもっうシエン?」

「そんなの私に言われてもわかんないよ。普通に好きです！付き合ってください！って言うのは？」

私がそう尋ねると鈴は

「無理！無理！！絶対無理！！恥かしくていえない！！」

何で妙なところで乙女なんだろうか？

「んじや。あれは？対抗戦で勝ったら言うこと1つ聞いてくれみたいな感じで。買い物に行つてそのまま崩し的に彼女の座を射止めるって言うのは…」

「2人きり？一夏と…それは良いかも」

「でしょ？だから今はさ対抗戦の事でも考えてたら？一夏君に上手く説明する方法も思いつくかもしれないし」

私が笑いながら言うのと鈴は

「そ…そうね。シエンの言う通りね…うん！考えてみる一夏に上手くあたしが何を言いたかったのか説明する方法を」

握り拳を作る親友を見ながら私は本のページをめくつた…楽しそうに笑う鈴の笑顔は久しぶりに見たような気がする。出来ればずっとああやって笑っていて欲しいものだ…

翌日 生徒玄関前廊下に大きく張り出された紙があった。表題は「クラス対抗戦日程表」

1回戦の鈴の相手は一夏君だった

「え？1回戦から？嘘…どうしよ？」

「説明する方法思いついた？」

私がそう尋ねると

「まだ…」

落ち込んだ様子の鈴に

「まあ。まだ時間あるしゆっくり考えようよ鈴」

「うん」

私と鈴はそこで判れ、それぞれの教室へと向かって行つた…結果論から言うとうと試合の日まで上手く一夏君に説明する方法は思いつかなかつた事をここに記す…

5月

あれから2週間たったが、鈴は俺にあの時の話を説明してくれない。俺には何が何だがさっぱり判らないままだ：偶に廊下であっても逃げてしまおうし。どうすれば良いのか俺には判らなかつた、とりあえず当面は対抗戦の事を考える事にした。俺は龍也や箒達にISの操縦の事を教わり、ゆつくりとだが着実に成長していた

「一夏。来週からいよいよクラス対抗戦が始まるな。自信のほうはどうかね？」

にこやかに尋ねてくる龍也に

「多分、大丈夫だと思うが：100%とはいえないな」

鈴の実力が判らないし、と付け加えながら言う龍也は

「箒・セシリア、悪いんだが。今日はアリーナの前に整備室に寄りたいのだが良いだろうか？」

2人にそう言う龍也、首を傾げる箒とセシリアに高町：いやなのはが（大分仲良くなり名前呼びになった）

「一夏君のIS少し調べてみたくない？一撃でシールドエネルギーを0にする雪片式型の事とかさ」

「確かに気になってましたわね：エネルギー刃にしても威力が高いですし、私のスターライトの銃撃も無効化してましたし：そう言われると気になりますわ」

「私も少し気になっていたことがある、なぜ白式に後付け装備が着けられないのかとか。疑問だらけだ」

箒の言った事は俺も気になっていた。普通ISにはイコライザと呼ばれる、後付け装備を装着するためのバススロットと言うのがあり。最低でも2個の武装を装備できるのだが、俺の白式はバススロットが無い。つまり近接ブレード1本と言うのが、今の白式の武器だ「まっ、刀1本あればどうとでもなるがな。そうだ一夏、大車輪覚えてみるか？」

「出来るのか!？」

雪片で大車輪：面白いかもしれない：俺が乗り気だと知った箒は慌てて

「待て一夏、あれは斬艦刀だから出来るんであつて。雪片では出来ないのではないか？」

確かに3メートルある斬艦刀だから、威力が出るんであつて。1メートルちよいの雪片では充分な威力が出ないかもしれない

「そつか…そうだよな…なんか残念な気分だ」

剣技に磨きをかける方法として良いアイデアだと思つたのだが…残念だ…そんな事を考えながら整備室に向かう

「さてと…では調べるか」

龍也が待機状態の白式にケーブルを繋いで調べ始める

「ふむ…ううん…各国の第2・第3には該当しないな…過去のモンドグロッソにエントリーしていた、機体の情報を照らし合わせてみるか」

カタカタと凄まじい速度でキーボードが叩かれる。その姿はどこぞの科学者と言つても通るだろう

「うーん…私は中国の「甲龍」「神武」に近いISだと思つてたんだがな…ドイツの「シユヴァルツエア・レーゲン」に近い概念なのか…」
ぶつぶつと呟く龍也にセシリアが

「開示情報から推測してるのですか？」

各国が開示している情報からの予測なのか？と尋ねられた龍也は

「まあな、後は公開されてる訓練記録とかからある程度、予測は立つ」

お前のはビットの兵器のプロトタイプって公開されてたし。中国とドイツは詳しくは判らんが。「空間」に作用する兵器らしいじゃないか？とか言いながら龍也はある1つのデータを呼び出す

「見つけた。白式と同じ性能を持ったIS…それは「暮桜」だ」

その言葉に筈が

「暮桜…？織斑先生の現役時代のISじゃなかったか？それにあれは第1世代のISだろう？」

その通りだ「暮桜」は第1世代のISだ。開発時期がかなり違う筈なのに同じ能力と言うのは違うのではないだろうか？

「いいや、間違いないな。これの記録と一夏の戦闘記録を照らし合わせる、合致する…そして「暮桜」の能力は…」

龍也がその先を言おうとしたところで

「バリアー無効化攻撃だ」

今までいなかった人物の声に驚き振り返る。そこには何時ものスーツ姿の千冬姉がいた

「驚きだな、少ない情報からの分析でその結論に至るとは」

睨むような視線の千冬姉に龍也は

「少ない情報から、有益なものを用意するのは当然ですよ」

笑みを浮かべる龍也は千冬姉を見て

「私が説明するよりも織斑先生が説明した方が良いのでは？」

「元よりそのつもりだ。一夏、お前のISの装備「雪片式型」の特殊能力は龍也が調べたとおり「バリアー無効化攻撃」だ。それがどういう意味か判るか？」

そう尋ねられた俺が首を傾げるとフェイトが

「バリアーを貫通して、直接本体にダメージを与えられるんだよ。そうなると思うと思う？」

「…絶対防御が発動して、大幅にシールドエネルギーを削れる？」

「その通りだ、かつて私が世界1に2度輝いたのも「雪片」のその特殊能力のおかげだ」

「だから一撃で勝てるのか…」

セシリアと箒には決めれば一撃で勝てるときもある。俺が納得し領いていると

「だが負けるときもある、それは何故か判るか？」

確かに負けるときもある、零落白夜が発動した時に即座に負けることもある。でも理由が判らず困っていた。俺の考えてる事に気付いた

千冬姉は

「雪片の特殊能力「零落白夜」を使うにはどれほどのエネルギーがいると思う？」

「…まさか…自分のシールドエネルギーを攻撃に転化してるのか？」

だから発動と同時に負けることがあるのか？と呟いていると、千冬姉は

「その通りだ。白式は、他のISより攻撃に特化してる。おおかたバスロットも埋まってるだろう?」

その言葉に頷くと千冬姉は

「つまり雪片を振るうには、本来イコライザの為に空いてるバスロットを全て使用しなければならぬ。だがその分その威力は全ISの中でも最強とも言える」

確かにうまく当たれば一撃で勝てるんだ、最強と言うのも納得だ

「それにお前は射撃等は向いてない、それにこう考えてみる。お前が長い時間を掛けて積み上げた剣の才を充分に使えと、そう考えたらメリットしかないだろう?」

俺が長い時間を掛けて積み上げてきた剣の技術…それを充分に発揮できるIS…確かに下手に射撃兵器があるよりいいかもしれない
「そうだ、お前は1つの事を極める方が向いてる。なにせ…私の最愛の弟なのだからな」

「最愛って言うのは姉弟って事だよな?」

「いや、寧ろ異性として愛してる」

最悪だ、途中まで良い姉だと思っていた分。この最後の一言のダメージは大きかった…それに

「……………」

筈とセシリアの刺すような視線も痛い…誰か助けて…

「さてと、一夏のISの特徴もわかったし、訓練に行くか」

龍也がこの空気に気付いていないのかしれっとそう言って立ち上がる

「ん?何で私は睨まれてるんだ?」

「…龍也。空気読もうよ?」

「??」

訳が判らないと言う表情の龍也…段々龍也が判ってきたが、龍也は超が付く天然だ。だがこの天然具合は今の俺には好都合だった

「そうだな!対抗戦もあるし行こうぜ!!」

俺は筈とセシリアの視線から逃げるように整備室を後にした…

整備室からアリーナに移動してきた私達を待っていたのは

「やつほー」

「一夏待つてたわよ」

シエンと鈴だった。鈴は真剣な表情で一夏を見ていて、シエンは何時を通りにこにこと笑っていた

「おー、シエンも訓練か？」

「あはは、私は違うよ。今日は鈴の付き添いなんだ、ほら鈴。ちゃんと話しないと」

シエンはそう言うのと鈴の背を押した

「うん、一夏…事情聞きたいって言うてたよね？」

事情?…ああ…一夏に相談されたあれか。私も判らなかつた…そう言うのと箒たちとなのは達に溜め息を吐かれ、私は自分が悪い事をしたわけでもないのに責められてるような気がして、居心地が悪かつたのだ…

「それ説明してあげるわ」

「おつ。気になつてたんだよ、それ」

一夏がそう言うと同時に

「一夏?何故嬉しそうなんだ？」

「一夏さん?どうして満面の笑みなんですか？」

怖い顔で言う2人に一夏は

「いや、判んない事は判った方が良いだろう?って言うかなんで怖い顔してるんだ？」

首を傾げる一夏に鈴が

「でも、ただじゃ教えてあげない。対抗戦の勝敗で決めよ？」

「勝つたらとかか？」

一夏がそう尋ねると鈴は

「その通り、あたしが勝つたら、今度の週末あたしに付き合いなさい、そして一夏が勝つたら約束の内容を話すわ」

鈴がそう言うのと箒とセシリアが

「お、お前は何を言ってるんだ!?!」

「そ、そうですわ!何を言ってるんですか!?!」

そう詰め寄ると鈴は

「うるさいわね、これはあたしと一夏の問題よ、脇役はひっこんでなさい」

鈴がそう言うのと隣のなのはが

「…はやてちゃんに似た雰囲気を感じるよ」

その意見には同意しよう。鈴もそうだが織斑先生もはやてに似てる気がする、まあお前たちもだがな。心の中でそうつけくわえた

「で、どうする?」

「乗った! ずっと気になってたからな」

一夏は2つ返事で鈴の提案を受けた

「そ、そう! それじゃあ! 言うことは言ったから! じゃあね!!」

「あー、待ってよ鈴! それじゃあね」

ヒラヒラと手を振り鈴を追って駆けて行くシエンを見送っている
と

「さーて、今日も訓練…を…? あの…箒さん? セシリアさん? どうして俺に武装を向けているのですか?」

一夏の喉元に打鉄の刀の切っ先が、そしてその頭部に照準を合わせているブルーティアーズのビット

「今日は徹底的に鍛えてやろう。感謝しろ」

「ええ、今までやった機動が全部できれば回避できる筈ですわ」

怖い顔で一夏を見る箒とセシリア…助けてくれと私を見る一夏、よし答えは決まった

「私は帰る、訓練の邪魔になりそうだし」

「龍也! ツ! 俺を見捨てるのか!」

いやだつてさ…? 大魔王状態のはやてとヴィータに似た気配を感じるんだよ? 君子あやうきに近寄らずって言うだろう?

私は一夏から目を逸らし

「それじゃあ、頑張れ」

私はそう言い残しアリーナを後にした…背後から

「薄情者ツ!!…あつ…ま、待て!! 無理だ! 2対1は無理だアアアアアッ!!!」

ドゴンツ!!ビュン!!!

聞こえてきたビームの発射音や鋭い風きり音と、一夏の悲鳴を聞きながら、私は全力でアリーナを後にした…

第14話に続く

第14話

第14話

試合当日、俺と鈴は試合開始の合図を待っていた…俺が鈴に本気で来いと言ったと同時に

『それでは両者試合を始めてください』

ブザーが切れると同時に一瞬で間合いを詰め斬りかかるが

「行き成り?…ずいぶんせっかちね?」

鈴が手に持った異形の青龍刀で雪片式型を弾き飛ばす、俺は間合いを取りながら

「圧倒的に戦闘経験で負けてるんだ…勝つには…速攻しかないだろ!!」

普通の剣での戦闘なら話は違うが、ISでの戦闘では圧倒的に鈴に劣ってる、だから速攻で攻め続ける。それが俺の出した勝つための作戦の1つ、即座に瞬時加速で間合いを詰め斬りかかる、最初こそ気が遠くなりそうだったが自主連のおかげで今は最高3回まで連発できる、その加速によって放たれた一撃は今度は直撃したようで僅かだがダメージを与えたようだが

「ふーん…ここまで動けるんだ…じゃあ手加減はいらないわね!」

甲龍の肩アーマーが開き中の球体が光るのが見えた瞬間、反射的に半歩身体をそらす、何か肩に当たりバランスを崩す

「な…なんだ?」

俺が驚いていると鈴はにやりと笑い

「今のはジャブだからね」

ドンツ!!先ほどとは比べられない衝撃で俺は殴り飛ばされた…直感で雪片式型を動かし直撃は避けたがそれでも40近いダメージを受けている

(これは…かなり不味いかもな…)

俺は心の中で呟いた、俺はその後も降り注ぐ見えない砲撃を回避しながら

(きつと…龍也なら…何も無い様に避けるんだろうな…)

正直な話龍也の戦闘技能は俺より遙かに上だ。だから経験と予測で龍也なら、例え見なくても簡単に避ける事が出来るだろう。前に見た龍也のISと龍也の技能ならそれくらい楽にやっつてのけるだろう…

「鈴…本気で行くからな」

水面に落ちる雫をイメージする…それと同時に研ぎ澄まされる感覚…世界がクリアに見えてくる

「漸く本気ね…でもあたしのほうがISの扱いが巧いって事を見せてあげるわよ」

鈴が衝撃砲の準備に入る前に瞬時加速で接近し雪片式型を振ろうとした直後

ズドオオオオンツ!!!

「!?!」

凄まじい衝撃がアリーナ全体に響いた、それと同時にプライベートチャンネルで

『一夏!試合は中止よ!すぐにピットに戻って!!』

俺が反論する前にISのハイパーセンサーが緊急通告を行ってきた

「ステージ中央に熱源、所属不明のISと断定…ロックされています!」

アリーナの遮断シールドはISと同じ物で作られている、つまりこの機体はそれを貫通するだけの攻撃力を持っていて…更にこちらをロックしている…一言で言えばピンチという奴だ…鈴が俺に何かを言おうとした瞬間、嫌な予感がし

「あぶねえッ!!」

鈴を抱き抱え横に飛ぶ、それと同時にさつきまで居た空間が熱線で砲撃されていた

「ビーム兵器かよ…しかもセシリアのISより出力が上だ…」

凄まじいまでの威力のビームの威力に驚いていると

「ちよつと…馬鹿!離しなさいよ!!」

腕の中で暴れる始める鈴に、凄まじい勢いで連続して放たれる速射

砲の様なパンチ…シールドエネルギーに守られているとはいえ。気分の良い物ではない

「おい、暴れるな…って馬鹿！蹴るな!!」

脚まで振るい始める鈴にそう言うが

「う…うるさい…うるさい!!大人しく殴られなさい!!!」

更に暴れる鈴は少し赤面しながら

「だ…大体どこ触って…」

どこを触ってるかなんかこの状況で考えてられるか!!

「!来るぞ!!」

鈴が言い終わる前に更に移動する…俺が居た空間をビームの連射が焼く…それを回避すると同時に、ビームを放ったISがふわりと浮かんだ…

「何なんだ、こいつ…」

俺は思わずそう呟いた、そのISは一言で言えば異形だった、灰色の装甲に…以上に長い腕…更には首が無く肩と頭が一体化しているような形になにより異質なのが全身装甲だった。通常ISは殆どシールドエネルギーによって護られている。なので装甲なんて飾りのような物の筈なのに…

「お前何者だよ…まあ、聞くまでも無いか…敵だよな」

ここに來て行き成りの攻撃、言うまでも無く敵だろう…俺が鈴を下ろすと同時にISが突っ込んで来る。それを横っ飛びで回避する、それと同時に鈴が

「向こうはやる気満々みたいね」

「そうだな」

鈴の横に立ちそれぞれ自信の獲物を持つ、鈴が隣で

「あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさいよ…武器それしかないんでしょ?」

そう尋ねてくる鈴に

「その通り、じゃあ…それで行くか!!」

俺と鈴はお互いの武器の切っ先を当て、それと同時に飛び出した…

タタタタ：

私はアリーナに向かう通路を回っていた：

「ここもロックがかかっているか…」

どこの電子扉もロックがかかっている、ハッキングすることは可能だが、それでは時間が掛かりすぎる

(…致し方ない…あれで行くでしょう)

多少目立つが仕方ない…そう判断し念話で別の通路を回っている、なのはとフェイトに

(なのは。フェイト、姿を隠しているネクロが居る可能性がある。先達や生徒に見つからないように学園外に移動して、警戒していきなれ)

ネクロが現れる可能性も考慮しなくてはいけない、その為にここに居るのだから

(了解、ステルスモードで警戒に回ります)

(気をつけてね、龍也)

そう言つて念話を切るなのはとフェイト、私はそのままアリーナを出ようと道を引き返そうとすると

「何してるの！早く避難しなさい！」

青い髪の2年生にそう怒鳴られる。見たところ私と同じ様に電子ロックを破れる場所を探していたのだろう

「悪いが、その指示には従えない…私には私のやるべき事があるんだな」

「ちよつ！ま、待ちなさい!!」

その女子の制止の声を無視し、私は階段を駆け上がった…

(最悪の結果になってくれるなよ…)

ここでネクロの襲撃だなんて起きてしまえば、騎士甲冑を展開する羽目になる。そうなれば姿を隠してIS学園に滞在する意味がなくなる。私はそんな事を考えながらアリーナの上層へと向かって行った…

残された女子は

「あれが…八神龍也か…報告には聞いてたけど…本当に歴戦の戦士み

たいな気配ね…」

扇子を開きそう呟いた女子「更識 楯無」は

「まっ。敵では無さそうだし…私も私のすべき事をしますか」

通路に閉じ込められている生徒の救出をするために、私は電子ロツクのハッキングを始めた…それと同時に激しく揺れる通路…

「どうしてこんなになっちゃったのかな…」

思わずそう呟き、何層にも掛けて掛けられているプロテクトの解除に取り掛かった…

「くっ…またか…」

一撃必殺の間合いのつもりだったが、俺の攻撃はするりとかわされてしまった、これで4度目のチャンスを逃した…それと同時に鈴が衝撃砲を放ちながら

「馬鹿！ちゃんと狙いなさいよ!!」

「狙ってるツーの!!」

俺がそう怒鳴ると鈴は

「一夏！離脱しなさい!!」

「お…おう！」

鈴の声に従って距離を取り、考えていた事を鈴に言う…最近妙に頭が冴える、身体を動かしている事で眠っていた脳神経も活発になつてのかもしれない

「あれ…多分無人機だ」

俺が確信を持って言うと

「無人機なんてあり無いわよ…?」

信じられないという表情の鈴に、確かにその通りだ、ISは人が乗らないと動かないだが…

「間違いない…あれは無人機だ」

何でかわからないが俺は確信していた、あれは無人機だと、俺は雪片式型を握り締め

「人が乗ってないなら容赦なく一撃必殺の一撃を叩き込める」

俺がそう言うと鈴は

「全力も何も攻撃が当たってないじゃない」

「次は当てる」

必ず当てる自信があつてそう言う鈴は

「言い切ったわね…じゃあ良いわ…あれが無人機だと仮定して攻めましようか」

不適に笑う鈴、あの顔は1年前に散々見た顔だった。もし外したらこれをネタに何か奢らされそうだな…

「それでどうしたら良いの？」

目と目で通じ合うと言うのだろうか…お互いの考えてる事がわかった、俺は笑みを零しながら

「俺が合図したら全力で衝撃砲を撃ってくれ」

俺がそう言う鈴は

「いいけど…当たらないわよ？」

「いいんだよ…当たらなくても」

俺に作戦がある、相手の予測を上回り、一撃必殺の一撃を叩き込む自信が俺にはあつた…

「じゃあ…早速」

俺は突撃準備に入ろうとした直後…

「一夏あ!!」

キーンとハウリングが起きる、その声は間違いなく箒の物だった…「男なら、男なら…そのくらいの敵に勝てなくてなんとするツ!!」

箒の顔は心配してるようにも焦ってるようにも見えた、だがそれは俺の注意を引くだけではなく、敵のISの注意をひきつけてしまっていた…

「…」

！まずいISが館内放送に興味を持ったのか、センサーレンズを俺達から逸らし箒の方を見ていた

「ちっ！鈴やれ!!」

逃げろなんていう間は無…ISは既に攻撃準備に入っている、鈴にそう言う鈴は最大出力の衝撃砲を撃つ体勢に入る、それと同時に

射線に飛び出す、それを見た鈴は

「馬鹿！何してるのよ!!退きなさいよ!!あんたにも当たるわよ!!」

射軸から退けと怒鳴る鈴に

「良いから撃て!!」

そう怒鳴ると鈴は

「どうなっても知らないわよ!!」

ゴオツ!!

轟音と共に放たれた衝撃砲のエネルギーを背中に受け、瞬時加速を
発動させる

「オオオオオツ!!」

右手の雪片式型が強く光を放つ、それと同時に中心の溝からエネルギー
ギアが展開され一回り大きなエネルギー状の刃を形成していた…

「はああああアツ!!!」

敵ISの頭上から雪片式型を振り下ろす

「!!」

両断され爆発するISから全力で離れ、鈴の近くにしゃがみ込み

「お…終わった…」

疲れ果てて俺がそう言うのと鈴は

「あ、あんた…無茶するわね…ちよつと大丈夫なの？怪我してない？」

ペタペタと俺の身体を触る鈴に

「あ、あんまり…大丈夫じゃない…」

一撃必殺の一撃を叩き込むために払った対価は思ったよりも大きく、
全身に走る激痛に俺の意識は途絶えそうだった…しかし、これで
終わりではなかった…

ズドオオオオツ!!!

さつきより凄まじい衝撃音が響く、それと同時に鈴が

「う…嘘でしょ…」

その声に振り向きたくないと思いつつ振り向き俺は

「マジかよ」

俺と鈴の視線の先には先ほどやつこの思いで倒したISが3機、し
かもそれぞれが最大出力モードで俺と鈴を狙っていた

「ちいッ!!」

痛む身体を無理やり動かして鈴を抱き抱えそのまま背中を反転させる、それと同時に

ゴウッ!!!

ビームが放たれた音がしたスピーカーから

「一夏!!」

箒の悲鳴にも似た声がする、いやそれだけではない

「一夏!!」

腕の中の鈴も悲鳴をあげる、俺は来るべき衝撃に歯を食いしばった

...

どうすれば良い?

私は通路に逃げる事も出来ず、観客席でどうすれば良いのか考えていた:電子ロックにより、通路に逃げる事は出来ず:この場で出来る事を考える...

(ISを展開し、扉を破壊する:これは駄目だ:)

今視界に降下していく3機のISを確認した。ここでISを展開すれば、敵がこちらに来てしまう可能性がある...

(フレイヤやシエルニカに助けを求める:これも駄目だ、暗部の3人を公に動かすわけには...)

自分の護衛権部下の3人の事を考えるが、ISを展開して公に行動できる3人ではないのでこれも駄目だ:そして今の手持ちの道具ではアリーナの電子ロックを破る事も破壊する事も出来ない、手のうち用がない:私がどうするか考えていると、隣に居た女子「更識簪」が「え、エリスあれ:八神君じゃ...」

「えっ?」

簪の指差す先には漆黒のISを展開した龍也君がアリーナを見下ろしていた:だが、既に敵のISはアリーナ内に飛び込んでいる、何をするつもりなんだろうか?何人かの生徒が同じ様に見上げていると

「我は悪を立つ剣なりッ!!!」

バキンッ!!!

凄まじい怒声と共に肩の装甲が外れ、合体し巨大なバスターソードになる…

「まさか…アリーナのシールドを破壊する気!？」

敵のISが侵入したシールドの破損箇所は既に修復されている。龍也君がアリーナに入るには同じ様にシールドを破壊する必要がある。幾ら斬艦刀でもあれだけの密度のシールドを破壊するのは無理だ

「伸びよッ!!!斬艦刀ッ!!!」

ゴオオオオッ!!!

斬艦刀の刀身を覆うようにエネルギー刃が展開される、刃渡り7メートル近い巨大過ぎる大剣を構え

「薙ぎ払えッ!!星ごとやつをつッ!!斬艦刀!!星薙ぎの太刀いいッ!!!」

ブースターを全開にしアリーナのシールド目掛け、斬艦刀を振り下ろす龍也君

ガキーンッ!!!

シールドに防がれる斬艦刀、当然だ破壊できるわけが…

「ぬおおおおおッ!!チェストオオオオッ!!!」

グンッ!!!

更にブースターの出力を上げる、それと同時に

ピシ…ピシッ!!バキヤアアアアンッ!!!

音を立ててアリーナのシールドが粉碎される

「…嘘…」

思わず私はそう呟いた、出来るわけが無いと思っていた事を平然とやってのけた龍也君はそのままアリーナの中に飛び込んで行った…

ドズンッ!!!

目の前に何かが落ちた音がする、驚いて目を開けるとそこには「間に合ったようだな」

龍也が斬艦刀を地面に突きたて、3機のISのビームを防いでいた

…

「龍也：助けに来てくれたのか？」

「当然だ：」

龍也はにっと笑うと

「ぬおおおっ!!!」

斬艦刀を振るいそのビームを弾き飛ばしたが

バキンツ：

音を立てて斬艦刀が刀身の半ばから折れ、アリーナの壁に突き刺さる

「むっ：流石に無茶が過ぎたか：」

龍也はそう言うのと斬艦刀を肩の装甲に戻した：俺は

「ど。どうすんだよ！幾ら龍也でも武器がなかったら」

零式の武装は斬艦刀にドリルつきの拳、それにミサイルとビーム砲：だが斬艦刀以外は威力が低く、とても3機のISを撃退できるとは思えずそう言うのと、龍也は

「問題ない、武器はまだある」

ガシャツ!!

左肩の装甲が開く、中には剣の柄の様な物が見える

「獅子王刀：いやはや保険として搭載していたが、使う事になるとは」

龍也が苦笑しながらそれを掴み引き抜く。赤い鞘に包まれたそれを腰部の装甲に下げ

「参る！地斬疾空刀ツ!!」

シャンツ!!

鋭い抜刀と共に青色のエネルギー刃が放たれる

「!!」

それは今正にビームを放とうとしていたISの腕に命中する。放たれるはずだったエネルギーが逆流し弾け飛ぶ

「せえいッ!!!」

ズドンツ!!!

態勢を崩したISの隙をのがさず龍也が踏み込み、ISを頭から真っ二つに切り裂く

「!!」

他の2機が警戒した様な素振りを見せるが

「遅いッ!!水流爪牙ッ!!」

瞬時加速で接近し、獅子王刀の打突から蹴り上げに繋ぎ

「一刀両断ッ!!」

ザンツ!!

ブースターで加速した上段からの切り下ろしが更にもう1機のI
Sを切り裂き破壊する

「す…すげえ…」

思わずそう呟く。剣を修めているから判る、龍也の斬撃の凄さが：
斬艦刀が質量で叩き切る力の剣なら。獅子王刀は無理なく、流れるよ
うに放たれる技の剣：方向性は違えどそれは確かに一撃必殺の太刀
筋、芸術とも言えるその素晴らしい剣筋に思わず見惚れる

「!」

残された1機が撤退する素振りを見せるが

「逃がさんよ…光の斬撃…お前に見切れるか?」

龍也が逆さに獅子王刀を持つ、鞘が重力に従い落ちると同時に

ザンツ!!!

「!」

思わず俺は目を見開いた。今までと違って全く見えないのだ。判
るのはただ1つ黒い閃光が走ったと思ったのと同時に、ISが切り裂
かれている。それだけだった

ザンツ!!ザンツ!!!ザンツ!!!

鋭い斬撃音が絶え間なく響く、しかしISのセンサーを持ってして
もその動きが見えない

「嘘…亜光速。瞬時加速の非じゃない…どんなスピードで動いてるの
よ」

鈴の驚愕と呟きと同時に見えなかった龍也の姿がISの先に現れ
る

「これぞ我が奥義…光刃閃ツ!!」

ドウツ!!!

凄まじい音と同時に再び龍也の姿が見えなくなったと思った瞬間

ズドーンツ!!

凄まじい音と主にISが両断され爆発する

「失せろ、目障りだ」

カシヤンツ…

龍也はそう言うと同時に獅子王刀を鞘に納めた…

「凄い…」

鈴が呆然と呟く中龍也がこっちに来て

「怪我は？」

そう尋ねてくる龍也に返事をしようとしたところで

(あ…れ…)

敵がいなくなった事への安心感と全身には知る激痛で。俺の意識

は急速に遠のき始めていた…

「い、一夏!?!」

「むっいかん、疲労で意識を失いかけている」

鈴の心配した声と、龍也の珍しく慌てた口調の声を聞きながら、俺は意識を失った…

第15話に続く

第15話

第15話

「う…」

俺は全身の痛み呼び起こされて目を覚ました…

「ここは…」

どうしてここに居るのか判らず辺りを見回す、白いカーテンに仕切られたここは恐らく保健室だろう…

（えーと…確か、捨て身でISを撃墜して。んでその後龍也が来て3機ISを撃墜して…んで俺は疲労で意識を失った…うん、問題ない思い出せる）

身を起こし拳を握ったり閉じたりする。少し身体に痛みは走る物の特に問題はない

「気が付いたか…心配したぞ」

シャツとカーテンが開く、そして姿を見せたのは予想とおり千冬姉だった

「致命的な傷はないが、軽い打撲が何箇所かあるはずだ。数日は痛みに苦しむだろうが…まあ我慢しろ、もし我慢できないというのなら、私が介護してやろう」

「いいえ、全く問題ありません。我慢できます」

チツと舌を鳴らした千冬姉。これで我慢できないとでも言おうものなら。介護という名目で色々と悪戯(性的)な物をされそうなので、俺の判断は正しいはずだ

「お前、衝撃砲の最大出力を背中に受けるなんて無茶を良くやるな？」

「あー、ほら、予想を上回る速度で攻撃すれば通るって思ったんだよ」

俺がそう言うのと呆れたように笑いながら

「まあそれは判るが、あまり無茶をして心配させないでくれ、お前は私のため一人の家族なんだからな」

優しく笑う千冬姉に

「判ってるよ、もんあんな無茶はしないとと思う」

「思うか…まあ良いだろう、無茶をするのもお前の良い所だ。ではな

「夏少し休んだら部屋にもどれよ」

千冬姉はそう言うのと保健室から出て行った

「あーゴホン。ゴホン」

千冬姉と入れ違いで誰か入ってきた、この業とらしい咳払いとは間違
いなく箒だ

ジャツ!!!

勢い良くカーテンが全て開かれる。なぜ全部開ける必要があった
のか俺には皆目見当が付かなかった

「よう、箒」

「うむ」

箒は腕組をして気難しそうな表情をしていた…

「あのだなー今日の戦いだが、なんだあれは！捨て身なんて何を考え
てるんだ！」

そう怒鳴る箒に

「いや、あの時はああするしかなかったんだって。そう怒鳴らないで
くれよ」

それにあのままだったら、箒があのISに狙われると思ったんだ
よ、と付け加えると

「私を護ろうとしてくれたのか？」

「ん？まあそんな所かな？」

箒が死ぬかもしれない。そう思った瞬間、俺は箒を助け、尚且つ敵
ISを倒す手段として、あの方法に出た…それは正しい選択ではな
かったのかもしれない、でもあのときの俺にはあれが最善の策だと思
えたのだ

「む…むうううう」

そして箒は何故か頬を赤くし唸っていた。何か気に触る事でも
言ってしまったのだろうか？俺が首を傾げていると

「まあ良い、だが2度とあんな無茶はしないと約束しろ、心配すること
ちのみにもなれ」

「あつ、心配してくれてたのか、ありがとう」

俺がそう言うのと箒はさっと目を逸らし。

「で、ではな…一夏。ゆっくり休んでから戻って来い」

箒は俺の顔を見ずにそう言うのと、早足で保健室を出て行った…

「ふあ…もうちょっと休むかな…」

俺は再度襲って来た眠気に身を任せ、眠りに落ちた…

「一夏…起きてる?」

太陽が沈んでから保健室に行き、声を掛けると

「んお?鈴か…起きてるぞ」

奥のベッドから一夏の声がする

「今良い?」

「ちよつと待ってくれ、上着を着替えてるから」

その言葉にわかったと返事をし、暫く待つと良いぞ。と一夏が言ったので、あたしはベッドのほうへ向かった…

「よう、なんのようだ?」

上半身を起こしながら尋ねてくる一夏に

「いや…ほら、事情説明するって言ったじゃない」

あたしがそう言うのと一夏は

「あーでも、あれって無効試合だろ?再戦の後で良いよ。勝てるかわかんないし」

一夏はそう笑うが、一夏の体調が万全で最初から集中していれば、あたしの方こそ勝てる目は少ないのは判りきっている、だから

「説明しておきたいの」

「ん?まあそう言うなら聞くけど…なんだ?」

首を傾げる一夏に

「こう…ほら。ほらあたし、料理へたくそだったでしょ?だから上手に料理作れるようになったら、一夏に食べて欲しいなって思ったのよ」

あたしがそう言うのと一夏は

「あーでもほら、確かに昔の鈴の料理はあんまり美味しくなかったけど…鈴が一生懸命作ってくれたから、嬉しかったぞ?」

そう笑う一夏。本当は違う…あたしは毎日味噌汁をく的なつもりで言ったのだが、今はまだこの友達以上恋人未満の場所に居たいと思っただから嘘を言う事にしたのだ、変に進む事を考えてこの居心地の良い場所を失うのも嫌だったし

「そっか、こっちは戻ってきたって事はまたお店やるのか？また親父さんの料理食べたいんだけど」

思い出したように言う一夏に

「店はやらないんだ…」

「なんで？」

首を傾げる一夏に

「あたしの両親…離婚しちゃったんだ…あたしが国に帰ることになったのもそれが理由なの…」

その内嫌でも知られてしまっ、ならの今のうちと思いうと

「そうなのか…すまん、変な事を聞いた」

謝る一夏に

「あー良いの、どうせ判る事だしね」

あたしがそう言う一夏は

「俺さ…両親知らないからなんともいえないけど…元気出せよ、なっ？俺は笑ってる鈴が好きだぞ」

うっ…どうして真顔でこういうこと言うかな？偶に判ってやってるんじゃないかと思うときがある、でもそれが一夏だ。優しくて鈍感だけどそこが良いのだ

「なあ。鈴、こんどどっか遊びに行かないか？」

「えっ!?それって…その」

突然の事にしどろもどろで返事をする一夏は

「1年ぶりだしさ、2人でブラブラ出かけないか？」

デート…だよ…いや…一夏にその気は無いと思うが、2人きりというのは嬉しかった

「うん…良いよ、行こう」

「おう、約束な」

にっとな笑う一夏…なんとと言うか表現しにくい空気を感じる、甘いよ

うなほの苦いような何とも言えない…でも心地良いそんな空気に浸っている

「一夏さん！具合は如何ですか！私が介護に来てあげましたわよ！」

セシリアが来てその空気が霧散する…せっかく良い感じだったのに…なんて事をしてくれるんだ、このお嬢様は

「あ…あんだねえっ!!!何邪魔してくれてんのよ!!!」

「邪魔？何の話ですか？私はただ一夏さんの身体が心配で来ただけですわ」

含みある笑みを浮かべるセシリア…こいつ絶対業とこのタイミングで入ってきたと判る。あたしも悪いがこいつも悪いに決まってる。いやそもそも一癖も二癖もあるやつばかり落してしまう、一夏に問題があると思う

「ささ、一夏さん、今日の戦闘の分析でも始めましょう。私の部屋で」

「何言ってるのよ、一夏はあたしと組んで戦ったんだから。あたしと分析するに決まってるでしょ？なにあんだこんな事もわからないほど馬鹿なの？」

「ぼっ!?!…フン。これだから品のない方は困りますわ」

「気取ってばかりのやつよりかはましよ」

売り言葉に買い言葉、あたしとセシリアはそのまま言いあいには達し、その隣で

「はあ…」

一夏がぼつんと溜め息を吐いていた…

「…零式…本当に第3世代か？」

私は学園の地下の研究施設で今日の戦闘記録、特に八神龍也の物を念入りに調べていた…アリーナのシールドを破壊した「星薙ぎの太刀」

これならまだ判るが。「光刃閃」の時の零式の速度は現段階で開発できるISが出せる速度ではない、それに

「あいつは一体何者なんだ？」

あれだけの戦闘力をたかだか16歳の人間が身に付けているとは思えないし、光速に近い速度を完璧に操っている龍也の技能は余りに高すぎる。それにその速度に耐えるだけの「零式」も本当に第3世代の物か怪しい。私が考えるには龍也・なのは・フェイトの3人のバツクにはよほど大きな組織が付いているとしか思えないのだ

「織斑先生？」

モニターを見て考え込んでいると、割り込みでウィンドウが開く。そこにはブック型端末を手にした山田先生が映っていた

「どうぞ」

モニターの下のボタンを押し、ドアを開き…再びモニターに視線を戻すと

「八神君の戦闘記録ですか…私は彼は悪い子じゃないと思うんですけどね」

モニターを見ながら言う山田君に

「それは判らない、私から見ても八神龍也と言う人間の考えてる事は判らない、むしろ今日のISの襲撃を指揮していたんじゃないか?とも思える」

龍也の経歴に妖しい点はない。だがそれゆえに怪しいと思う…戦士としての勘だが…あいつには何か裏がある…私の感がそう告げていた

「そうそう、あのISの解析結果が出ましたよ」

「零式か?それも敵機のほうか?どっちだ」

そう尋ねると山田君は

「両方です。まずは敵機のほうから、あれは無人機でした、どういう方法で動いていたかは判りませんが間違いなく無人機です」

「そうか…」

ISのまだ完成してない技術。遠隔操作と独立稼動…そのどちらかか、はたまた両方か…まだ開発されてない技術がああISに使われている、学園関係者全員に緘口令が敷かれるなど思っている

「そして八神君のISですけど…無登録のコアでした。それに遠隔での分析もブラックボックスだらけで、全てが謎の機体です」

これも予想とおりだ、あれだけハイスペックの機体、どこの国でも開発できない、出来るとすれば束だろうが：束と龍也には何の関係性もない：共通点が見出せないのだ：つまりは束クラスの天才が居る組織に所属している者としか言いようがない

「1回収して調べますか？」

「いや、止めて置こう。眠れる獅子を起こす必要はない」

下手に動くのは危険だ、龍也達が本性を出せば一夏が危ない。だからここは動かずに観察しようと言うと

「そうですね。下手に動くのは止めて置いたほうがいいですね」

「ああ、さてと1回休憩にしよう。見ても何の答えも出ないしな」

これ以上戦闘記録を見ても謎が深まるばかり、1度休憩にしようと言い、私は研究室を後にした：

「うーん：…凄いわね、このIS」

スーツの上に白衣という目立つ格好の女性がモニターを見ながら感心と言う感じで呟く。彼女の名は「ツバキ・V・アマノミヤ」名前から判るとおりエリスの母親で、ISの研究者として武装や設計を行っている科学者だ。

「本当、凄いわねどこで開発されたのかしら」

私はIS学園から送られてきた、第3世代の「零式」と言う機体の情報を見ていた。通常のISの2倍近くエネルギー総量に操縦者の錬度：いまモンドグロツソに出ても即座に優勝できるほどのレベルだ

「うーん：でもこんなISの開発データは無いしねー」

各国のデータを見ても該当する機体はなく。謎のISとしか言い様がない

「何してるツバキ」

背後から声を掛けられ振り返るとそこにはアッシュブロンドの髪をオールバックにした、サングラスの男が立っていた

「あらおかえりあなた、何時帰ったの？」

「たった今だ、珍しく休日が取れたのでな、戻ってきたんだ。メールを

送らなかつたか？」

言葉短く言う男：私の旦那様であり、ドイツの軍人の「オクト・V・アマノミヤ」だ。PCのメッセージボックスを見ると確かにメールが入っていた…

「あははは…見てなかつた」

苦笑しながら言うオクトはやれやれと肩を竦めながら

「そのISは？」

「これ？第3世代型らしいけど、機体の強度・エネルギー総量・反応速度・どれをとっても第3世代には思えないけどね」

高性能かつ安定した稼働効率、専門家から見ても第3世代です、と言われても信じられない

「IS学園の生徒か？」

画像を見ながら尋ねてくるオクトに

「ええ、しかも…シエルニカちゃんとアイオスちゃんの報告によると、エリスちゃんがちよつと惹かれてるみたいなの」

頬に手を当てながら言うと、オクトは

「そうか…何か複雑な気分だ…こう、こみ上げてくる何かを感じる、ツバキこれはなんだろうか？」

目が据わっているオクトに私は

「殺意じゃない？」

ほっておいたら今にも画像の男子を殺しに行きそうなオクトにそう言う

「殺意か…そうか、私はエリスが離れていく可能性を感じているのか」
納得という表情のオクト：まあそれは私も同意見だ、大切な養女がどこの馬の骨とも思わない男に惹かれると言うのは正直納得いかないう物がある、そんな事を考えてる内にモニターの画像が切り替わったところでオクトが

「!?この動き…見覚えがある。黄金の騎士だ」

「え？あの都市伝説の？」

表情を一変させるオクトにそう尋ねるとオクトは

「間違いない、ドイツ軍のデータベースの中に黄金の騎士に関する

データがあつた…この男の剣の振り方・間合いの詰め方…どれをとつても黄金の騎士に酷似している」

なんとまあ、都市伝説で聞いた事があつたがまさか本当に実在していたとは…でも

「でも、黄金の騎士って20代後半じゃないの？この子どうみて10代よ？」

顔つきは精悍だが、どうみても20代には見えそう言う

「黄金の騎士は不思議な能力を持つてるらしい、瞬間移動や瞬時に怪我を癒すことも出来ると聞く。姿形を変えることも出来るのではないか？」

「まるで魔法使いみたいねえ…」

話を聞くと魔法使いのような印象を受ける

「実際そうかも知れんぞ？黄金の騎士に出会ったやつらは皆断片的にしか覚えていない。案外魔法使いなのかも知れんぞ？」

軍人であるオクトがこんな事を言うとは…でも悪魔が居るくらいだから魔法使いがいてもおかしくないのかもしれない

「ねえ？IS学園に行つて見ない？学年別のトーナメントへの招待状が来てるんだけど。見に行つてみない？」

IS学園から送られてきた研究機関用のチケットを2枚取り出し見せると

「そうだな…この男を調べるいい機会だ」

「で、本音は？」

きりつとした表情でいうオクトにそう尋ねるとオクトは

「エリスに会いたい」

「最初からそう言いなさいよ。まっ、私も会いたいけどね。それじゃあ参加するって返事するわよ？」

「ああ、そうしてくれ。後車で待ってる。どうせ料理してないんだろ？」

「あは…研究に夢中になって…何の用意もしてない」

「外食で構わんさ、行こうツバキ」

そう笑うオクトに

「ごめんね？今度はちゃんと作っておくわ」

「ふっ、楽しみにしている」

オクトはそう言うのと鍵を持って再び出掛けて行った、私は

「さーて、エリスちゃんにメールを送ってつと…データも保存して」

学期末のトーナメントを見に行くとメールを送ってから、PCの電源を切り、私も出掛けて行った…

「腹減ったなあ…」

空腹を感じながら保健室を後にし自室に戻ると

「遅い!!」

部屋に戻るなり箒に怒られた…俺が何をしたというんだ…

「全く、私が空腹を我慢していたと言うのに、お前は何をしていたんだ」

「え?…まだ晩飯食ってないのか?」

俺がそう尋ねると箒は

「だから待っていたと言っている」

先に行ってくれてても良かったんだけどな…とは思ったが口にはしない、箒が怒りそうな気がしたからだ

「じゃあさ、食堂行こうぜ。時間ギリギリだし」

「ま。まて…そのだな…私が…その作った物がある…それを食べないか?」

テーブルの上にはチャーハンが置かれていた

「食って良いのか?」

見た所1人分しかない、だからそう尋ねると

「先に手を洗え、忘れずにうがいもだ」

流石箒すっかりしてる、俺は感心しながら洗面所に向かい、手洗いうがいを済ませ、席につき手を合わせ一礼してから、チャーハンを口に運んだ…

「うまいだろう?」

得意げな表情の箒…非常に言いにくいが…

「味が…しない…」

「な、なに貸してみろ！」

俺の手からレンゲを引ったくり、一口食べる筈…そして

「…味がしない」

「な？」

見た目は完璧なのだが…しかし味がしない…恐らく調味料が入ってないのが原因だろう

「これは…たまたまだ!! たまたま忘れたんだ」

「そっか、そう言うこともあるよな、ほれ返してくれ」

筈が頑張つて作ってくれたんだ味がしないくらいで食べないのは男がすたる。食べた瞬間に三途の河を見ないのなら可愛いものだ。ちなみに昔千冬姉が焼きそばを作ってくれたことがあったが、俺はそれを食べ三途の河を見た。どうやら何かと何か化学変化して危険な何かが発生してしまったのだろう。何を使ったのかは怖くて聞けなかったが…

「ぶちそうさま」

レンゲを置きそう言う筈は

「今回は偶然失敗しただけだ、普段は成功するんだ」

多分これが初めて作った料理だろう、筈の手に絆創膏が見えるから間違いない、でもそれに気付かない振りをして

「そっか。じゃあ次は成功品を食わしてくれよ。楽しみにしてるからよ」

「ああ、楽しみにしてるが良い」

女子は料理が上達するまでが速い、筈もきつとすぐに普通に料理が出来るようになるだろう。だからそれを楽しみに待っているとしてよう

コンコン

そんな事を考えていると軽いノック音と共に

「あの一、篠ノ之さんと織斑君、いますかー？」

山田先生が扉を開けながら言う

「どうしたんですか？先生」

何のようだろうかと思いながら尋ねると山田先生は

「はい、お引越しです」

「はい？」

引越し？誰が？俺が首を傾げていると箒が

「先生、主語をいれて喋ってください」

「は、はい！すみません」

箒が鋭く睨みながら山田先生に言う、山田先生はビクつと身体を竦めてから

「えっと。お引越しするのは篠ノ之さんです。部屋の調整が済んだので今日から同居しなくてもすみますよ」

ほう：山田先生も中々やる。ナチュラルにギャグを入れてくるとは感心だ

「一夏」

「お。おうっ！」

なんだ？ばれたのか？口にしてないのに怒られるのか？俺が身構えていると

「えっと、それじゃあ、お手伝いしますから。すぐに移動しましょうか？」

「まっ待ってください。それは今すぐでないといけませんか？」

あれ？箒が意外な事を言う。男と同室なんて嫌だと思ふのだが：俺が驚いていると山田先生が

「年頃の男女がいつまでも同室なんて、色々問題がありますし、今日中に引越しさせないと私が織斑先生に怒られますし。早く移動しましょう」

どうも後者のほうが大きそうだ：山田先生も苦勞してるようだ

「し、しかし私は…」

箒がちらちらと俺を見る。俺を心配してくれてるのかな？

「俺のことなら心配するなよ。箒がいなくてもちゃんと起きれるぞ」

俺が安心させようとそう言う

「!!」

あれ？いまカチン！って言う音が聞こえたような気がするんだが？

「先生、今すぐ部屋を移動します！」

「は、はい！じゃあ始めましょう」

山田先生が箒に促され慌てて引越しの準備をする

「俺も手伝おうか？」

1人より2人より3人だ、だから俺も手伝うかと尋ねると箒は

「いらん！」

なんか凄く怒ってる、俺何か言ったかな？

箒は起こった素振りのままてきぱきと荷物をまとめ出て行ってし

まった…

「うーん、部屋が広く感じるな」

1人になったことで部屋が2倍になった気がする。なんとなく寂

しいと思う

「ま、良いや寝よう」

シャワーもしたし寝巻きにも着替えてる、疲れてるし寝よう…俺が

布団にもぐりこむと

コンコン

ノックの音がする、もう布団に入ってるし…どうしよう…

ドンドントツ!!

ノックの音がまるで正拳突きのような音に変わった。慌てて布団か

ら飛び出しドアを開ける、そこにはむすつとした表情の箒がいた

「どうした？忘れ物か？」

俺がそう尋ねると

「…違う」

「じゃあ何か話でもあるのか？まあ入れよ」

部屋に招きいれようとする箒は

「いや、ここで良い」

「そうか」

「そうだ」

そう言う箒は黙り込む

「…用がないなら俺は寝るぞ？」

「よ、用ならある！」

箒は意を決したような表情で俺を指差し

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが。私が優勝したら…」

ここで言葉を切り箒は

「私と付き合って貰う!!」

「…はい?」

まるで宣戦布告な様な言葉を言い残し、箒は去っていった、何が何だかわからないが…また一悶着あるようなそんな気がした…

「うーん…ゴーレムの反応が途絶えちゃった…4機も送り込んだのに」

白いワンピースにウサ耳と言う1人、不思議な国のアリス状態の女性が呟く。彼女の名は篠ノ之束。ISを開発した人物だ

「なに、束、貴女の作った無人機、何の役にも立たないじゃない、あの男の実力を2割も出させてないじゃない。役に立たないにも程があるわ」

何時の間にか現れた赤と緑のオッドアイの女性の辛辣な言葉に束は

「いやね〜チートすぎるね〜ネルちゃんのくれた情報より、強いよ」

「言い訳は聞きたくないの。とにかくあの男の事をもっと調べて。その為に私が協力してるのよ」

「はいはい〜判ってるって。とにかく調べ直すから帰ってよ、邪魔だから」

邪魔といわれた女性は

「良いわ、今は帰るわ…でもこれ以上貴女が役に立たないのなら排除する事になるわ。覚えておいて」

そう言い残し空気に溶けるように消え失せた…

「束…またあの女とあっていたのか?」

暗がりから束と同じワンピースに黒いウサミミをつけた女性が現れ尋ねる

「そうだよ〜アズマちゃん、私の知らない事を教えてくれる、ネクロ側

の貴重な人物だからね」

「つつしと笑う束にアズマと言われた女性は

「引けるうちに手を引いたほうが良い。あの連中はお前のことなど使い捨ての駒程度にしか思っていない」

「それでもだよ。束さんは全てを知りたいのだよ。魔法世界・デバイス・ネクロ・そして夜天の守護者。知りたくて知りたくて仕方ないんだよ」

「どんよりとした目で言う束に

「好きにすれば良い。私は束の意向に従うまで」

「うん、そうするよ！アズマちゃん」

「そう言っつて鼻歌交じりでコンソールを叩く束…を尻目にアズマはその部屋を後にした…」

「丁度その頃束の研究室の外に転移した赤と緑のオッドアイの女性
は

「やっと…やっと来てくれた…会いたかったよ…お父さん」

「どこまでも歪んだ好意を瞳に映し狂ったように笑う」

「あの女にも誰にも渡さない…お父さんは…私の物なんだから」

「あははは狂ったように笑いながら、何事か呟く、すると女性の足元に魔法陣が展開される。…それはこの世界には存在しない筈のベルカ式の魔法陣だった…」

「愛してる…殺したいほどにね…でも、今はその時じゃないの…だから会える時を楽しみにしてる」

「女性がそう呟くと同時にその姿は掻き消えた…もし今ここに六課に関わる人物がいたらきつと驚いただろう…何故ならその女性の顔はヴィヴィオに瓜二つだったのだから…」

「第16話に続く」

第16話

第16話

「無駄が多い!」

バシンツ!!

「つうッ!!」

龍也の厳しい言葉と共に放たれた一撃が俺の手を叩く、その強烈な一撃に手が痺れ手から竹刀が落ちる

「隙を探そうとして、己が隙を作っているは意味がないぞ?」

喉元に突きつけられる竹刀を見ながら

「つつても、焦ってくるぞ? 探しても探しても隙がないからさ」

「心を研ぎ澄ませ。さすれば自然に見えてくるものだ」

しれっと言う龍也に

「いや、無理だつて」

正直な話龍也と俺では技能が違いすぎて、何を言ってるのか理解できない。箒は箒でちんぷんかんぷんな表情をしてるし、剣道場の娘がこれなら俺が理解出来ないのも無理はない。

「切り込みが速すぎますわ!」

「そつちの反応が遅いんだよッ!!」

アリーナではセシリアがフェイトに絞られている。間合いを詰められビットを出す隙もなく、近接戦闘に持ち込まれ苦戦している、反対側で

「ち、近づけない!」

「はいはい、ちゃんと見てね。よく見れば避けれるから」

左手にガトリング、右手にライフルを構えたなのは射撃の嵐を前に攻める事が出来ない、鈴の姿が見える

(あの2人も悲惨だな…)

何も出来ず負けるのは結構きつい。手も足も出ないうちに撃墜された鈴とセシリアを見ていると

「それでは休憩は終わりだ。次を始めるぞ」

「うえっ!?ま。マジか?」

3分ほどしか休めてない。幾らなんでも体力的にきつすぎる

「なんだ？この程度でギブアップか？やれやれ情けないな」

カチン…

龍也が挑発するように言う、安い挑発だと判っているが。それでも頭にくる

「なに言ってるんだよ！余裕だ！余裕!!!」

意地で立ち上がり竹刀を構える、隣で馬鹿かお前は？という感じで見ている筈。馬鹿で結構！男には意地がある！

「良い気迫だ、それでは今度こそ私に一撃入れて見せろ」

楽しそうに言う龍也に

「おうよ!!今度こそ一撃入れてみせる!!」

俺はそう叫んで龍也に向かって行つた…

〜数分後〜

「し…死ぬ…もう無理だ」

ぼこぼこに叩きのめされ、大の字で寝転がりながら言うと

「3分30秒…赤点だな。なのはでも7分は立ってられるぞ」

それはお前のしごきに馴れているからだ…俺はそう思ったが喋る体力もなく目で文句を言うことしか出来なかった

「はいはい！頑張る！頑張る！」

「お…鬼」

なのはに半分引き摺られるように連れて来られる鈴に

「あーあ。体力無いなあ」

「む…無茶を言わないで下さい」

フェイトに背負われ戻ってくるセシリア。どうやら2人とも体力の限界まで絞られたようだ

「わ…私も、もう無理だ…」

ぜえ…ぜえと肩で息をする筈、結局俺達は全員行動不能になり、鬼教官×3の地獄の訓練を途中リタイアする羽目になった

「では実戦訓練は止めて」

龍也が何処かから持って来た黒板を俺達の前に置き

「理論について話をしよう」

「『お前は鬼かッ!!』」

俺・箒・セシリア・鈴の悲鳴が重なった：俺の中で龍也の位置づけが鬼教官から悪魔へとランクアップした瞬間だった：

「では一夏、お前の白式から解説していかうか？」

「スルーツ!?俺達の叫びはスルーなのかッ!？」

「まず零落白夜についてだが…」

「聞いてるのか!？」

「これ以上文句を言うのなら、腕立て300回プレゼントするが？」

「…悪魔」

このボロボロの状態で300回も腕立ては出来ない。俺は観念し龍也の講義に耳を傾けた：

アリーナで龍也君達に指導を受けている鈴達の様子を見に行った私が見たのは

「『…頭痛い…』」

倒れ伏せそう呟いてる一夏君と箒さんそれに鈴の姿だった、気のせいではなければ頭から湯気が出てるように見える

「では次はブルーティアーズについてだ」

「うう…私の番なんですネ？」

観念したように言うセシリアさんに龍也君が

「では、お前の欠点のビットと本体の同時使用が出来ない点だが、それはお前の練度不足が原因だ」

「そ…そこまではつきり言いますか？」

「言う、欠点は欠点のままにしておかないことが大事なんだ。そこでマルチタスクが出来るようにする為の教材を用意した

龍也君は5×5のマス目に数字を書いた物をセシリアさんの前に差し出し

「では1〜25までである、それを順番に言いながら指差してもらおう。間違えたらその場で腕立て20回な」

「もう体力が限界なんですが？」

「仕方ない、では10回にしておいてやろう」

「腕立ては決定事項なんですの!？」

「はい、スタート」

「えっあつ…1・2・3・4」「はい、間違いそれ14、腕立て10回…鬼」

「20回するか？」

「1・2・3…」

素直に腕立てをし始めるセシリアさん。そして10回終わった所で

「はい、再スタート」

「きゅ、休憩は無しなんですの!？」

息も絶え絶えと言う様子で言うセシリアさんに龍也君は

「10・9・8…」

「ああ、もう!!1・2・3・4・5…」「はい。間違い、腕立て10回」
悪魔ツ!!」

「まだ余裕がありそうだな?15回な」

「ううう…やります、やればいいでしょう?」

うわあ…あれはきつい…私も見つかったら同じ事をされそう、戻ろう…私が振り返ろうとしたところで

「龍也さん?あそこにシエンさんがいますわ?どうでしょう?、シエンさんも一緒に教えて差し上げては?」

驚き振り返るとセシリアさんがお前も道ずれにしてやると言いたげな表情で私を見ていた

「ん?それもそうだな、よし、シエン来い」

龍也君が笑顔で私を呼ぶが、あそこに待ってるのは地獄だ…しかし見つかった以上逃げる事は出来ない

「…はい」

私はそう返事をし、肩を落としながら龍也君の元へ向かった…

シエンとは対戦経験がないので、まずは様子見という事で模擬戦をする事になった

「ふむ、初めて見るが、シエンのISは完全近接特化型だな」

鈴の甲龍に近いデザインだが、両腕の装甲が他の装甲より厚く、近

接系だと推測しそう眩くと

「ふっふー、神武（シエン・ウー）を見た目で判断すると痛い目見るよ！！」

ガシヤツ！！

腰の装甲から不可視の弾が放たれるが

「ふむ、遅い」

ジャカツ！！

肩から引き抜いた獅子王刀で切り払う

「…一応、私のも衝撃砲で見えない筈なんだけど？」

驚愕という表情のシエンに

「空気の歪みとかで射軸は予測できる、当たる道理はないな」

そういうと観客席の一夏達が

「反応速度まで化け物か!？」

「出来るとは思ってたが…こうしてみると龍也の技能の異常さが判る」

「あはは…龍也さん、目隠しして真剣白羽取りとかしてたから…」

「死ぬぞ普通」

「龍也は基本化け物だから」

私の評価がどんどん酷くなってる気がする…

「じゃあ…衝撃砲は駄目かーじゃあこれだね!!」

コールされた幅広の刀を両手で構えるシエン

「斬馬刀か…」

「へー武器にも詳しいだね!」

ガキーン!!

振り下ろされた斬馬刀を受け止めながら

「まあ、それなりにはな!!」

獅子王刀の峯でその刃を受け流し、拳を振るおうとして

「!!」

直感的に後ろに飛ぶ、私のいた場所を通る、円形の光刃…あれはチャクラムか!

「ちえー、当たったと思ったのに…」

左手の装甲に収納されていくチャクラム…

「なるほど…隠し武器か」

「まあね！本当は衝撃砲で牽制するつもりだったんだけど、見切られてるなら他の武器ってね！」

ヒュン!!ヒュン!!

コールしていた斬馬刀を待機状態にし、シエンは舞うように両手を振るう、それと同時に鋭い風切音を放ちながら、シエン・ウーの装甲から放たれたチャクラムが荒れ狂う

「ふっふー、私の間合いに入れるならどうぞ」

「むっ…」

確かにこれは厄介だ、荒れ狂うチャクラムはビームでコーティングされており、かすただけでもダメージは大きいだろう。それが有線で繋がれている為、軌道が読みにくく、回避も難しい…

(それに誘ってるようにも見える)

シエンはチャクラムを囿に私を懐に呼び寄せようとしてるように見える

(乗ってやるか)

その誘いに乗るのも悪くない

「では…行かせて貰おうか！」

ドンッ!!

瞬時加速ではなく、地面を踏みしめるイメージ…鋭い踏み込みでシエンの間合いに飛び込む

「よっほ!!」

「あまい！」

キン!!キン!!

鋭い音を立ててシエンのチャクラムを弾く、後2歩で完全にシエンの間合いだ…

(さあ!どうでる!私をここまで誘い込んで何を狙っている!)

次のシエンの1手を考え、微かに笑みを零しながら、間合いに入り込む

「私の距離!取った!!」

シエンが即座にチャクラムを収納し。膝を曲げる

「はああッ!!打ち抜くッ!!一撃必倒!!」

どこかで聞いたフレーズだな。そんな事を考えているとシエンウーの両拳の装甲の甲の部分が光る…一目で判る強大なエネルギーが収束されているのが、当たればガード越しでもKO出来るほどの威力があると…

「行けええッ!!」

踏み込み鋭い正拳突きを打ち込んでくる。それは中国の武術。八極拳に似た足運び。鋭くガードする隙も与えないそんな足運びだが

「甘いー」

「うえ!!嘘ッ!!」

獅子王刀を投げ捨て、シエンの突きに逆らわず、流れるように受け流す

「悪いが、私は武術には詳しいんだよ!」

軽く触れるようにシエンの腹に手を当てる

ドンッ!!

「こぶっ…寸勁って…嘘でしょ…」

ドシャツ…

膝から崩れ落ちるシエン…

「ふーむ。少しばかり強く打ちすぎたか…」

そこまでする気はなかったのだが…完全に意識を失っている

「どうしたものか…」

選択肢として、背負う・抱っこがあるが。果たして付き合いの短い人間が抱き上げたりして良いものか?と考え込んでいると

「うっわー手加減無しで打ち込んだのね」

「つい癖で」

鈴がやってきて。シエンの頬を突きながらいう…どうやら私が何をしたか理解した、鈴は慌ててシエンの様子を見に来たようだ

「まあ。シエンはシエンで鍛えてるから大丈夫だと思うけど…やりすぎよ馬鹿!!」

「面目ない…」

鈴にそう怒鳴られ。今日の訓練は終わりとなった…ちなみにその後、訓練の仕返しと言いたげな表情で箒達に吊るし上げられる事となった

「…」

質素な作りの墓の前で祈りを捧げる銀髪の男…その後ろから

「ユウリ、仕事よ」

スーツ姿にサングラスの女性がそう言う

「…：了解した、任務内容は？」

閉じていた目を開き立ち上がりながら尋ねると

「IS学園に入学している八神龍也の情報が欲しいの」

八神龍也…織斑一夏に続く男の操縦者。戦闘力が異常に高いと言うことくらいしか今のところ情報がない。情報を欲するのは当然だな

「IS学園に潜入しろと言うことか？スコール」

そう尋ねるとスコールは

「今はまだ良いわ、その代わり非合法の研究所が情報を集めてるらしいの。それを奪取してくれるかしら？」

「…：了解した、すぐに任務に入る」

「お願いね、ユウリ…いえ…黒武士？」

「…：どちらでも良い…ではな」

ワタシはもう一度墓を見てから俺はその場を歩き去った…

数時間後…

「ここか…」

渡されたデータに記された研究所を見下ろし呟く…地図にはない研究施設

「…：忌々しいな…全く」

こういう研究所は非合法な研究ばかりだ…ワタシはそういう研究施設が虫唾が走るほど嫌いだ。

「…：こんな施設があったから、ワタシやあいつは…」

ギリッ…

思わず拳を強く握り締め

「…完膚なきまで叩き潰す」

ワタシは崖の上から飛び降りた

「アマノミカゲ」

パアン…

光が弾けISが展開される、漆黒の独立式の装甲に可動式のウイングブースター、そして特徴的なフルフェイスを持つ。違法改造のワタシ専用IS…日本における鍛冶の神、天之御影神から名をとった近接特化型ISだ

「行くか…」

腰部右装甲に装着された日本刀型ブレードを抜き放ち。ワタシは研究所に向かった

ウーウーツ!!!

「侵入者あり！侵入者あり!!至急救援を…「失せろツ!!」ぐあつ!!」

警護兵を切り伏せ、スコールに渡された地図に従い、研究施設の奥へ奥へと向かう

「これと…これか…」

研究施設のPCにハッキングし、「八神龍也」と「零式」のデータを根こそぎ回収する

「…？これは本当に第3世代か」

装甲や武装データこそ第3世代の物だが、機体の反応速度やエネルギー総量…と言った機体面のスペックが高すぎる…第4世代と言っても通るレベルだ

「!!」

ダダダツ!!!

殺気を感じ急速反転で放たれた弾丸を回避する

「…何者だ」

「更識の当主と言えば判るかしら？」

その言葉に舌打ちする、何度もスコールから聞かされている。日本での活動を何度も妨害されたと

(シールドエネルギーとエネルギーは全開時の半分…それに比べて相

手は全開に近いと見える)

恐らく相手も八神龍也の情報を求めてきたのだろう。でなければこんな奥まで来る必要が無い

(撤退するにも退路はあちら側：攻め込みきれるか?)

俺が今居るフロアは研究所の一番奥、戻るには更識を突破する必要がある

(ユウリ?更識の当主と遭遇したらしいわね?良い機会だわ面倒だから潰しておいてくれるかしら?)

気楽に言ってくれる、だがクライアントの依頼だ出来るだけやってみるか。万全なら軽く倒せるが、今の状態では正直五分五分：いや正直こつちが分が悪い。相手のISの事が判らないが…

(その程度で引くワタシではない)

雷切を構え、更識の当主の方へ向かって行った

(くう…重い!)

黒武士と呼ばれる正体不明のIS、何度か戦闘は目撃した事があるがこうして戦ってみると、黒武士の強さが良く判る

「このっ!!」

蒼流旋に内蔵されたガトリングのトリガーを引く

「遅いッ!!」

ジャキン

鋭い音と共に腰の装甲の後ろから2本の刀が抜刀され。放ったガトリングの弾が全て斬りおとされる

(なっ!?!なんて反射神経なの!?)

思わず硬直すると同時に

「ふんっ!」

「げほっ!?!」

瞬時加速で接近され腹を蹴り上げられる

「くらえっ!!」

シュッ!!

右手の小太刀を捨て、右側装甲に装着された刀が抜刀される

「くうっ!!」

反射的に蒼流旋で受け止めようとするが、反応が送れ袈裟切りに水のヴェールが裂かれる。だがこれで良い

「このおっー!」

蒼流旋を手放し、一気に後退し待機状態にしていたラスティーネイルを呼び出す

「ちいっ!!」

ラスティーネイルで黒武士の特徴的なフルフェイスを切り裂く。そして切り裂いたフルフェイスから見えた操縦者の顔を見て

「男!?…それにその顔は!」

一瞬しか見えなかったが、あの顔は確かにエリスに瓜二つだった。私が思わず困惑し硬直してしまった…だがその隙を見逃す黒武士では無かった…ほんの一瞬。その一瞬が勝敗を決した…

「貴様アアッ!!!」

激昂した黒武士が瞬時加速で踏み込んでくる

「はあああッ!!!」

今まで一度も抜かれなかった左腰にマウントされた日本刀が抜刀される

「ツキやああッ!!!」

余りに速いその一撃を回避する事すら出来ず、アクアクリスタルごとヴェールが切り裂かれ、ミステリアス・レイディのシールドエネルギーが0になり、ISが強制解除され私は地面に倒れた

「…ちい…顔を見られるとは油断した」

まさか武器を捨て駒にして来るとは…思わず激昂して「禍ッ月」を放ってしまった…壊れたフェイスの代わりをコールし、それを再度装着しながらエネルギーの消費量等を考えると

(帰還するまでエネルギーが持つか?)

帰還するまで持つかどうかギリギリと言うところだ…禍ッ月、超高

速抜刀術…アマノミカゲの最強の技。シールドエネルギーが減っていれば減っているほど威力を増す、一撃必殺の抜刀術…しかし、
(浅かった…)

命中と同時に少しばかり後退された…決まりきらなかった…ISごと両断するつもりが、ISの機能を停止させる事しか出来なかった(まあ良い、ISは解除させた…後が面倒だ始末しておくか)

ここで殺しておいたほうが良い…ワタシはそう判断し倒れている女の元へ向かった

「依頼だから見逃す事は出来ん…だが、遺言くらいなら聞いてやろう。それくらい慈悲は持っている」

「慈悲って言うなら見逃して欲しいわね」

息も絶え絶えながら軽口を叩く女に

「…悪いが顔を見られた以上貴様を生かしておくつもりはない」

「まあこんな仕事をしてるから死ぬ覚悟は出来てるわ」

暗がりで見えませんが、ワタシを睨んでいるのは判る

「…命乞いをしないのか？」

今まで何人もの人間を切ってきた。その全てが皆みつともなく命乞いをしてきた。それをしない女にそう尋ねると

「命乞いしても殺すんですよ？無駄だって判ってる事はしないの」

「…死ぬのが恐ろしくないのか？」

「怖いに決まってるでしょ？なんでそんな事を聞くのよ？」

そうだ…死ぬのは怖い物だ。なのに何故笑っていられる

「…判らない、ワタシにはお前が判らない」

判らない…判らない…

「判らないんじゃないの、貴方は依頼だなんだって理由をつけて、考える事を放棄してるだけ」

考える事を放棄…

「だって貴方の目は死んでるもの…考える事を捨てて、生きる目的を持たず貴方は何処に行くの？」

何処へ…？ワタシは何処へ行きたかった？

(ユウリ、もしこの研究所を生きて出れたら何をしたい？)

(そうだね…太陽の下を歩きたいかな…セリナと一緒に)

脳裏に蘇るはただ一人のワタシの理解者の姿

(…ごめんね…ユウリ…私…ここまで見たい)

(セリナ！駄目だ…死んだら…駄目だ…)

ワタシはただ…生きたかった…セリナと共に…

「もう一度聞いわ、貴方は何処へ行きたく黙れ!!!これ以上ワタシの…心に入ってくるな!!」

駄目だ、この女と話してはいけない…何も判らないがそれだけは判る。ワタシは感情の赴くまま雷切を頭上に構え振り下ろした…

「…見逃さないんじゃないの?」

判らない、ワタシは振り切るつもりだった…なのにワタシの手は止まっていた…

「お嬢様!」

通路から青い髪の女が飛び出してくる

「ちいっ…この場は預ける!」

帰還するエネルギーが無くなるが致し方ない

ズガンツ!!

研究所の壁を切り裂きそのまま離脱する…だがワタシの脳裏にはあの女の言葉が繰り返えされていた…

「…お嬢様大丈夫ですか?」

「ああ、ありがとうアイアス、助かったわ」

本来ならエリスの護衛権部下として活動している、アイアスを念のため連れて来たのは正解だった

「はあ…疲れた」

何とか生き延びる方法を考え黒武士と話し続けたが、ギリギリだった

「…とりあえず帰還しましょう。骨に異常は無さそうですが打撲がひどいですから」

「ありがとう」

アイオスの手を借り立ち上がる…ズキンと脇腹が痛んだがまあ生

きてる証拠だ我慢しよう

「ん？」

つま先に何か当たる、何だろう？拾い上げるとそれは黒武士の仮面だった：

(仮面で心を隠して：何処へ行けるの？)

何となくだが黒武士は泣いているのだと思った。涙を拭ってくれる人もおらず仮面で顔を隠す事を選んだ：悲しい人

(敵なのにね：)

ここまで痛めつけられたのに黒武士の事を考えている事に苦笑しつつ、私はIS学園にへと戻った

第17話に続く

第17話

第17話

次の日のSHRで、2人の転校生が紹介されていた…

「シャルル・デュノアです、フランスから来ました、この国では不慣れな事も多いと思いますが皆さんよろしくお願ひします」

黒板の前で笑う見た目男を見ながら

（男装か…何か訳有とといった所か…）

姿こそ男だが心配が女性の物だ、その程度では私の感覚は誤魔化せない。まあ態々男装してるんだから相当の理由があると思ひ黙っていると

「男子！3人目の男子!!」

「美形！しかも守ってあげたくなる系の!!」

「地球に生まれてよかった」

興奮状態のクラス…まあ基本的に女子ばかりだからな男子の転校生ならテンションも上がると言うものか…織斑先生が

「あー騒ぐな、静かにしろ」

面倒くさそうに言う、それに続いて山田先生が

「み、皆さんお静かに、まだ自己紹介が終わってないですから」

もう1人の転校生、長い銀髪に眼帯。そして身に纏う雰囲気から

（軍人だな？私を見てる？何のつもりだ？）

一瞬だけ視線が合うがすぐに外れる。私は首を傾げながら深く椅子に腰掛けなおした

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

簡潔な自己紹介だな。何となくだが出会ったばかりのチンクに似てる気がする、その時某部隊での訓練中のちっちゃいお姉ちゃんぐくしやみをしていたりする、私がそんな事を考えてると…ラウラが一夏の前に立ち

「貴様が…教官の弟か？」

ジロジロと一夏の顔を見るラウラ。一夏は一夏で落ち着かない様子で

「な。なんだ？俺の顔に何か付いてるか？」

一夏がそう尋ねるとラウラは

「教官が何度も自慢していた。私の弟は世界一だと、どんな男か気になっただけだ」

興味津々と言う表情のラウラは

「ふーむ…どれ」

唸りながら突然、手刀を突き出すラウラ

「あ、危ねえ!？」

瞬間的にその攻撃を避ける一夏

「ほう…反射神経も中々…それに反撃にと突き出した拳も良い」

机の影で見ないが一夏の拳はラウラの腹部に当てられていた。もう一度攻撃に出るならすぐにも拳を打ち込める体勢だ

「教官、聞いたとおり貴方の弟は中々の強者のようですね」

「当然だ、この私の弟だぞ？だが1つ言いたい事がある」

織斑先生がラウラを指差し

「一夏に近すぎる！後2メートルは離れろ！」

「言うことはそれなのか!？」

「了解しました」

「お前もそれで良いのか!？」

一夏の突っ込みが冴え渡る、一夏はきつと突っ込み体質なんだろう「さてと、それではHRを終わる、各人はすぐに着替えて第2グラウンドに集合！」

そう言っただけで出て行くとした織斑先生は扉の前で立ち止まり

「織斑と八神はデュノアの面倒を見てやれ、同じ男子だろう」

そう言っただけで出て行く織斑先生を見ながら、私は

(取り合えず、挨拶はしておくか…)

私が席を立ち一夏の所に行く

「君が織斑君と八神君？初めまして、僕は…」

挨拶をしようとするシャルルの腕を掴む一夏は

「とにかく移動だ、話は後だ。遅れると何をされるか判らん」

「恐らく性的な何かだ」

「言うな！俺が認めたくない事実をさらりと言うな！」

「はは、気にするな。私も妹が来たら基本的にはお前と同じ立場になる」

「お前の妹も千冬姉の同類なのかよ!？」

「YES」

「何故に英語!？」

「何となくだ、それより見ろ。お前のせいでシャルルがきよとんとしてるぞ?。」

「俺だけのせいにするなよ!。」

ぼけと突っ込みの応酬をしながら教室の外へでる

「さー。今日も元気よくマラソンと行こうか?。」

「だよなあ。基本全力ダツシユだもんな」

2人でぐつぐつと足を伸ばす

「えっと何をしてるの?。」

きよとんとしてるシャルルに

「アリーナの更衣室に向かうのだが、私と一夏の場合深刻な問題がある」

「問題?。」

話しながら階段を下りる

「ああ！転校生発見!。」

「しかも織斑君と八神君も一緒!。」

HRが終わったと言うことは各学年・各クラスの尖兵が情報収集に来てるということ。捕まれば最後、私は特別カリキュラムを組まれ、一

夏は捕食される

「いたー!こっちよ!。」

「者ども出会え出会えい!。」

ここは何時から武家屋敷になったんだろうか?女子高ののりには付いて行けないな

「転校生君の金髪と八神君の銀髪サイコーッ!。」

「本当だよね〜でも一夏君の黒髪も良いよね〜」

どんどん女子が増えてくる

「ふむ：退路を絶たれるぞ一夏」

「だよなあ：プランBか？」

「お前は大丈夫だろうかシャルルはどうする？」
「????」

私と一夏の会話についていけず首を傾げるシャルルを見ながら一夏は

「プランAで行こう。向こうで俺が受け止める」

「一体何の話をしてるの？」

私と一夏の話が判らず首を傾げるシャルルに

「まあ更衣室に向かう為だ、一夏の行動を良く見ておけ」

タツタと後退する一夏

「行くぞ龍也！」

「おう！」

ダダダツ!!走ってくる一夏の前に手を出す

「よっ!!」

ダツ!!

タイミングよくジャンプした一夏を手の上に乗せ

「ぬうおおおおツ!!!」

身体を反転させ一夏を投擲する

「ええええ!!投げた！」

「またこのパターン!？」

「くうーこの規格外コンビー！」

驚いているシャルルと適応し始めている女子の差が激しい

「よっ」

クルン

前回り受身の要領で着地し即座に立ち上がり走り始める一夏を見ながら

「よし、では次はお前だ」

ガシツ!!

「あの…僕はなんで猫の様に持ち上げられてるのかな？」

私の目を見て尋ねてくるシャルルに

「一夏の真似できるか？」

「無理」

「なら投げる。上手く着地しろ」

「投げるのは決定事項なの!？」

「決定事項だ!ぬうおおおッ!!!」

「嘘オオオオッ!？」

そのまま振りかぶりシャルルを一夏の方目掛け投げる

「ナイス龍也!良い距離だ!」

「ナイスじゃないくッ!!!」

ガシッ!!

一夏が反転しシャルルを抱きとめる。良し次は私だな

「うし!行くぞシャルル」

抱き止めたシャルルを降ろしながらそう言うときシャルルは

「ええ?八神君は?」

龍也の方を指差すシャルルに

「もう来てる!あれをみる」

天井を指差すそこには

「天井を走ってる!?!忍者?忍者なの!?!」

ナイスリアクションだ、俺も最初は驚いた天井を走ってくる龍也、
どうしてあんな事が出来るのか?不思議で仕方ない

「待たせたな!行くぞ!」

「おう!」

俺達の前に着地しながら言う龍也に頷く

「待って!僕がおかしいの!?!日本ではこれが普通なの!?!」

「ははは!そんなわけないだろう?なあ一夏」

「ああ、龍也限定の話さ、気にするなよ」

笑いながら走る、シャルルも首も傾げながらも着いて走ってくる

「うーし到着!流石プランB到着が早いぜ」

「うむ。時間に余裕があるのは良い事だ」

「余裕はあるけどなにか釈然としないものが…」

良いじゃんかよ…時間に間に合えば

「ははは！最終手段のプランCで無くて良かったな」

「だよなあ。窓から飛び降りるのは結構きついからな」

龍也に投げ飛ばされるプランA、龍也の腕に着地し跳ぶプランB、そして龍也に担がれ窓から飛び降りる最終手段のプランC。それが囲まれる前に仕える俺と龍也の連携だ。ちなみ囲まれた場合は、龍也が俺を背負い天井を走るプランDがある

「…突っ込みべきなの？僕は八神君と織斑君の考え方に突っ込むべきなの？人を投げるのは普通じゃないっていうべきなの？」

「まあ細かい事は置いて着替えよう」

「細かいよ!?!結構凄い事だよ!?!」

「ははは。シャルルも龍也と一緒にいればこれが普通になるさ」

「それ違うからね!?!普通じゃないからね!?!」

「実に鋭い突っ込みだな、突っ込みマスター一夏から見ても何点だ？」

「そうだな、リアクションが薄い。65点」

もうちよつと手振りが入れば80点だ、少し勢いが足りないな

「誰か！誰かここに！突っ込みの出来る人を!!僕だけじゃ対処しきれない！」

はははは、1年で突っ込みが出来るのはあと、なのはとエリスさんだけだ、残念ながら女子なのでここにはこれないだろう

「まあ、着替えようぜ。ほら見てみるよ」

龍也がコートを身体に巻きつける、次の瞬間龍也はISスーツ姿になっっていた

「なんで!?!何でコートを身体に巻きつけた次の瞬間には着替え終わってるの!?!」

「はははは、ナイスリアクションだ。俺も最初は驚いたんだぞ」

最初見たときは目が飛び出るほど驚いた物だ

「便利だからな、色々と」

「便利なの!?!」

「ほら。シャルルも着替えろよ。時間無くなるぞ?」

「つて織斑君も着替え終わってる!?何時の間にも!」

「いや、面倒だから中に着てただけだ」

女子に囲まれる危険性を考慮して最初から着込んでいただけだ

「うーし。じゃあ先行って待ってるぞ」

「じゃあなく」

シャルルに手を振り俺と龍也はグラウンドに向かった：

「ちっ…時間通りか」

「千冬姉?なんで舌打ちするんですか?」

私と一夏が並んでいる事に気付いた織斑先生が舌打ちする

「あーだこーだといちゃもんをつけ、指導室に連れて行くつもりだったが失敗か…」

残念そうに言う織斑先生…ああ。本当はやてに似てる

「それは先生として言って良い事じゃないわよ!!ブラコン!」

「そうですねよ?先生ではないのですか…」

鈴とセシリアが文句を言った直後

バシーン!!

「私語は慎め。授業中だ」

「くううう…」

頭を押さえる鈴とセシリア…しかし私語を慎めと言いつつ自分は欲望に塗れた私語をぶつぶつと言っていたのは良いのだろうか?

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

仕切りなおしと言う表情で手を叩きながら言う織斑先生に

「「はいっ!!」」

気合の入った返事をするクラスの面々を見ながらちらりと横を見ると

「くう…何かとうとうすぐに人の頭をポンポンと…」

「くう…あのブラコン、今度殺す」

叩かれた場所が痛むのか涙目で言う2人を見ていると

「ああああーど…退いてください!!」

隣から空気を裂く音がする、嫌な予感がし横にずれるが反応が遅れた一夏は何か吹っ飛ばされた…

「…訓練2倍だな」

反応が鈍すぎる、これは要修行だ…いやその必要は無いか

「…殺そう」

「そうですわね」

どうやら一夏を吹っ飛ばしたのは山田先生で。現在一夏は山田先生を押し倒したように見える、それだけで鈴とセシリアを刺激するには充分すぎた

「はっ!？」

一夏が慌てて身を起こす。その直後一夏の頭部があつた場所をレーザーが通過する。うむ。あの反射速度は合格点だ

「ホホホ…外してしまいましたわ…」

怒っていますという表情のセシリアが再度ライフルを構える

「…殺す…」

単色の目で双天牙月を振りかぶる鈴…うむ。あの殺気セツテに順ずるものがあるな。そんな事を考えていると鈴が双天牙月を一夏目掛け投擲した

「うおおおおッ!？」

のけぞってそれを回避した一夏だが、双天牙月はブーメランの様に戻ってくる、次はかわせないな

「はっ!!」

ドンドンッ!!

火薬銃の音が響き、放たれた弾丸が双天牙月の軌道を変える…一夏を助けてたのは上半身を起こした。その状態で精密射撃を行った、山田先生だった…やはり…山田先生は一流の射撃タイプだったか、見る目があるほうとは言わないが、山田先生は相当な腕前だと判っていた。今のやり取りを見て私の予想は当たっていたようだ、唾然としている女子に、雰囲気判断するからだなど思っていると

「予想とおりですね、龍也さん」

何時の間にか隣に来ていたなのはにそう声を掛けられる。入試試

験では勝てたが、きつと山田先生は一流だと私達は判断していた

魔道師ランクで言えばCとBランクの間くらいだと予測していた、今の行動を見て私達の予想が当たっていたのが良く判る

「うーん…でもなんであんなに慌てちゃうんですかね？」

「性格的なものだろう？」

山田先生は確かに一流だが、性格的に争いには向いていないのだろう。だから凡ミスをしてしまう。まあ本人の上がり性なのも問題だと思うがな。私となのがそんな話をしている間に、織斑先生が話を進めていた…どうやら山田先生とセシリアと鈴で模擬戦をやるらしい、まあ見る間でもなく鈴とセシリアの敗北だったが…

「さて。これで諸君にもIS学園教諭の実力は判ってもらえたな？以後は敬意を持って接する事」

織斑先生が手を叩きながら言う

「専用機持ちの織斑、オルコット、デユノア、ボーデヴィツヒ、風、八神で、グループ分けをし実習を行う！グループリーダーは専用機持ちがやること！高町・ハラオウン・シエン・薄野は番号中でグループに別れる！」

実習が始まるようだ、私が移動しようとする

「八神君！一緒に頑張ろう！」

「あの剣捌きを教えて!!」

「悪を断つ剣様」

あつという間に女子に囲まれる、どうやら私だけではなく、シャルルと一夏も同様のようだ…私はどうして良いか判らず困惑している

「この馬鹿者どもがツ!!出席番号順に1人ずつグループに入れと言っただろう！順番はさつき言った通りだ！これ以上もたつくならISを背負わせて走らせるぞ!!」

その怒声に蜘蛛の子を散らすように散っていく女子を見ながら

(さてさて…どんなメンバーが来るかな?)

私はそんな事を考えながら、メンバーが集まるのを待っていた…

第18話に続く

第18話

第18話

ついでに、私はそんな事を考えながら、自分の番が来るのを待っていた。この班のグループリーダーは八神龍也だった

(箒から聞いてたが、どれ程の強さなんだろうか?)

箒からは化け物じみた強さと聞いているが、一体どれ程の強さなんだろうか?

(楽しみだなー本当にそんなに強いなら1度模擬戦してみたいな)

そんな事を考えている少女の名は「薄野 弥生」鈴と同じく2組の代表候補生だ、代表候補といっても日本ではなくギリシャの代表候補で、専用機持ちでもある。まあ調整中で前のクラス対抗は出場できなかったが

(あの時の剣筋…間違いなく強い!)

あの謎のISと対峙していた、八神龍也の剣捌きを見て私は興味を持った。そして今八神龍也のグループで実習と言うのは接点を作る良い機会だ

(大体なんだよ、箒のやつ。紹介してくれつつたら無理って即答しやがって)

剣道の全国大会決勝で戦い、紙一重の差で負けた物のお互いの強さは良く判った。それ以来友達の箒に大してブツブツと心の中で文句を言う

(魔王とか、私はまだ命が惜しいとか…:そんな言われてもわかんねーよ!)

箒の言い分が判らず文句を言ってる

「次、最後の1人は誰だ?…:おかしいな?もう終わりか?」

「薄野さんの番だよ?」

「あつ?…:悪い、教えてくれてサンキュー」

考え事に夢中になり周りが見えてなかった。教えてくれた同じクラスの女子に礼を言い。私は一歩前に出た

「私だ、薄野弥生。一応代表候補だからそこまで教えてくれなくても大丈夫だぜ？」

そう言うのと八神龍也は

「そっか、では早速。起動と歩行を頼む」

「いや。それは良いんだけどよ？なんで立ったままなんだ？」

私達の班のIS「ラファール」は立ったままであり。そう尋ねると

「弥生の前の前かな？立ったまま装着解除されてしまったんだ」

弥生って…名前呼びかよ…まあ良いけど…

「んで？どうやって乗れと？」

立ったままのISには流石に乗れない。なのでそう尋ねると

「抱き上げて乗せるつもりだが？」

「抱き上げる!?…私を？」

うんと頷いた八神龍也は

「あー、嫌なら踏み台とかでも良いけど？」

「いや。ちよつと待て、ちよつと考えさせてくれ」

抱き上げてあれか？振り返った私の視線の先では、織斑先生の弟である。織斑一夏が女生徒をお姫様抱っこで抱き上げていた

（伝説のあれか!?あれなのか!?似合わないにも程がある!?だが踏むのは駄目だよな）

むううう…と頭を抱えて唸る

（踏むのはやっぱ駄目だ。よし）

「あーじゃあ。その抱っこの方で」

「ん、了解」

さつと流れるような感じでお姫様抱っこで抱き上げられる

（うわっうわっ!?か、顔が近い!?）

あの整った顔が近くにあり。非常に落ち着かない…それに

（細身だけど…筋肉質なんだな…）

細身ながら鍛え抜かれた身体に触れていると

（!!殺気!）

凄まじいまでの殺気が2つ

「……」

ハイライトの消えたどんよりとした目で私を見ている。高町とハラオウン……殺気で人を殺されるなら私はもう死んでる。そんな風に思うほどの殺気だった……

「あれが魔王か!？」

魔王の意味を理解した、あれは確かに危険な存在だ

「弥生、コックピットに着いたぞ。乗り込んでくれ」

「あ……うん」

龍也に促されラファールに乗り込む。専用機の「デッドクリムゾン」と比べて

(安定してんなあ……物足りないけど)

軽く歩行をさせてから、蹴りや突きを試してみる

(反応が鈍いなあ……出力も物足りないし……)

量産型だからといえればそれだけだが。やはり物足りない気がする

「まあ。こんなもんか」

ラファールをしゃがませ降りると

「やるなあ、流石代表候補」

パチパチと手を叩く龍也に

「褒められるほどの事じゃねえ、それよりISの片付けしようぜ。私で最後なんだろう？ほれほれ！教えてくれた龍也に片付けさせるなんて真似すんじゃないやねえ。私達でやんぞ」

手を叩きながら私達の班の女子に声を掛ける

「うん。判ったよ薄野さん」

「判ってるって！丁寧に教えてくれたし。それくらいはしなないとね」

そう言っただけで笑う女子達と協力してISを運搬用カートに乗せる

「いや。私がやるぞ?」

そう言っただけで運ぼうとする龍也に

「良いから休んでろ！それ位は私達で出来る！」

少しだけ強い口調で言う龍也は何も言えず黙り込んだ。私はそれを確認してから、格納庫へと向かった

「なんと言うか、お姉さんと言う感じだったな」

弥生が先導し、ISを運んでいく様子を思い出しながらそう呟いた。何処と無くヴィータに似た雰囲気を持つ弥生は随分と私の印象に残っていた。

「さてと。行くか」

午後の授業はISの整備系の授業。またここに戻らなければならないので何時までものんびりしているわけにも行かない。私はそう判断し

アリーナを後にした

「龍也。良かったら一緒に昼にしないか？」

「別に構わんが、食堂か？」

私がそう尋ねると一夏は

「違う違う。屋上で箸たちと食べるんだけど。良かったら龍也達もどうかと思ってな」

「そう言うことならご一緒しよう」

どうせ屋上で食べるつもりだったし。大勢で食べたほうが楽しいし。断る理由も無く良いと言うと

「ほう、では私も良いか？織斑一夏？」

「ボーデヴィツヒさん、フルネームはちよつと」

フルネームで言われた一夏が複雑そうな表情で言う

「ふむ。ラウラと呼ぶのなら考えるが？」

顎の下に手を置き言うラウラに

「：ラウラさん？「ラウラだ」：はい、ラウラ。フルネームは止めて欲しい」

「一夏。で？私も良いか？ああ、勿論私の友人も一緒だが。構わんよな？」

そう尋ねてくるラウラに一夏は

「ああ、良いぜ。屋上はわかるよな？先に行って待ってる。行こうぜ龍也」

「ああ、なのは達には書き置きでも書いておくか」

今2人ははやてに今の所の調査結果の報告の為に自室に戻っている。私だと報告が大雑把で駄目だそうだが、まあ他にも理由はあるが（はやての暴走を未然に防ぐとか）なので机にメモを張って。

「シャルルも一緒にどうだ？」

「うん、ご一緒させてもらおうよ」

につこりと微笑むシャルルと共に私達は屋上へ向かった

「と言うわけだ。一緒に行くぞクリス」

「もう少し説明して欲しいんだけど？」

食堂に行こうと準備をしていると突然現れ屋上で昼食だと言うウラにそう尋ねると

「説明している時間は無い。行くぞ」

ぐいっと私の手を引くラウラ、内心溜め息を吐く。同じくシュヴァルツェ・ハーゼ隊の所属だが、そこは隊長と平隊員の差、強く出られると従うしかない

「はいはい、判りましたよ。隊長殿」

私がそう言っただけで立ち上がるとラウラは面白く無さそうな表情で

「ここはドイツじゃないんだ。隊長とは言わないで欲しい。私はお前を友人だと思っっているから一緒に来てもらったんだ。普通に同年代の友人として接して欲しい」

ラウラは一時期比べると丸くなった。織斑教官とアミノミヤ中佐のおかげだろう、まだ少し硬く天然気味だが、以前と比べれば大分丸くなり冗談を言ったり歳相応の反応をしてくれる。それが少しだけ嬉しくて

「はいはい、それじゃあ行こうかラウラ」

「うむ、行くとしよう」

上機嫌なラウラと共に階段を昇りながら

「織斑教官の弟さんってどんな感じだった？」

「あれは相当に鍛えてるな。私の手刀も難なく受け止めていたし、反応速度も素晴らしい、流石は教官の弟だ」

うむうむと頷きながら言うラウラに

「そういう言い方は良くないよ？例え教官の弟でも、織斑君は織斑君。ちゃんと分けて考えないと」

「むっ？そうか。それもそうだな…いかな私はどうもまだそう言うのが良く判らない」

首を振りながら反省しているとと言う素振りのラウラに

「ゆっくり行けばいいんじゃない？少しずつ理解していけば良いよ」

そう笑いかけるとラウラは

「うむ…そう言ってもらえると嬉しい。ありがとうクリス」

そう言つて礼を言えることがもう変わり始めてる証拠だよ、と心の中で呟き。私とラウラは屋上へ続く扉を開いた…その瞬間私は心臓を鷲掴みにされたようなプレッシャーを感じた。屋上の奥に腰掛ける黒いコートに目立つ銀髪の男…いや、あれは本当に私と同じ人間なのか？人の形をしているだけでもっと違う何かなのではないか？近付いてはいけない、私の本能がそう告げている。あれは人間じゃない、もっと上位の…言うならば天使や神に等しい何か…おかしな話だが、私はそう感じた

「ん？ああ、やっと来たかラウラ。隣が言っていた友人かね？」

にこやかに尋ねてくる男にラウラは

「ああ、私と同じドイツの軍属の「クリス・ファウスト」だ。私と同じく代表候補生でな、ずっと軍属だった私にとっては頼もしい友人だ」

ラウラが私を紹介してくれるが、私は沈黙したままだった。ここにいるてはいけない、それだけを感じる

「クリス？どうした…顔色が悪いが？また何かを感じたのか？」

ラウラが心配そうに尋ねてくる、私が代表候補生になったのは、高い感受性と非科学的だが第六感、俗に言う靈感や予知と言った能力があるからだ。故に強すぎる力を感じると硬直してしまう、それを知つて居るラウラがそう尋ねてくる。その直後、感じていたプレッシャーが霧散する…ゆっくりとだが私の体を抑えていたプレッシャーが消えていく…何事かと思ひ男を見ると

「……」

すまないなど言う感じのリアクションをしながら、片目を閉じていた……やはり、今の不調はあの男……八神龍也が原因だろうか……
(一体いまのプレッシャーは……)

今まで感じた事のないまでの凄まじいプレッシャー……彼が一体何者なのか？私はそればかりを考えていた……

ミスったなあ……まさかあそこまで感受性が高い子が居るとは……ラウラの隣でもくもくとサンドイッチを齧っている。クリスを見ながら私は自分の失態を悔いていた。無意識で垂れ流している、私達の魔力に当てられていたようで。慌てて魔力を抑えたが、もう完全に怪しまれているだろう……警戒するようなそんな気配を感じる

(ミスりましたねえ……私達の魔力を感じ取るなんて、もしかしてリンカーコア持ちでしょうか?)

食事をしながら尋ねてくるのはに

(いや、違うな。恐らくは人より感受性が高く、靈感が強いのだろう。だから私達の魔力を感じ取ったと言うところだな)

その証拠に彼女からは魔力を感じない。それが何よりの証拠だろう。私がそんな事を考えていると

「ほう……中々旨いな」

何時の間にかラウラが私が作ったサンドイッチに手を伸ばしていた

「むっ？駄目だったか？旨そうだったのでついな」

飲み込んでから駄目だったか？と尋ねてくるラウラに

「あ……ああいや構わない。ドンドン食べてくれて構わない。作りすぎてしまっているのにな」

私がそう言うのとシャルルが

「あ……あはは……確かに多いよね」

「作るのに夢中になってしまっただけ。良かったらシャルルも食べてくれ。残すのは勿体無い」

今日のメニューはハムサンドやフルーツサンドと言ったパン食を

メインにした弁当だ。おかずも唐揚げやパスタを用意しているが、少々多いのでそう言うよ

「あっそうなの？じゃあ、唐揚げもーらい」

「では私はフルーツサンドを」

バスケットに手を伸ばすセシリアと鈴、そしてそのまま手に取った物を口に運び

「あんたさあ？ISの操縦も上手い上に料理も完璧なの？弱点ないの？」

「これは……龍也さん、今度教えていただけないでしょうか？」

少しばかり悔しそうな顔を言う鈴とセシリアに頷いていると、なのはが

「龍也さんは基本なんでも出来るよ。指輪作りとか料理とか、裁縫とか、龍也さんは出来ない物の方が少ないんだよ」

「それは羨ましいな。俺なんか出来ない事ばかりだぜ」

箸が作ってくれた弁当を食べながら言う一夏に

「誰だつてやれば出来るものだ。諦めや自分はここまで何だと言う決め付け、それが成長を抑えるものだ。自分は出来るんだと思えば大概の事は出来る」

私がそう言うよと箸が

「想いの力と言うやつか」

「ああ、想いの力はどんな物より強い。自分を信じて、前を見るそれが一番大事なんだ」

まあ判つていても難しいがな？と付け加えると

「龍也はそうやって進んできたんだよね」

「まあな。言い換えると私はそれしか知らん。苦しくても悲しくても歯を食いしばって前に進むことしか出来ないんでな」

肩を竦めながら言うよと一夏が

「どうしてだ？相談に乗ってくれる人とか居なかったのか？」

「居るにはいたが、その人達に会ったのは割かし最近でな。親の居ない私と妹は家族間だけで生きていく必要があったのだよ」

苦笑しながら言うよとセシリアが

「親が居ない?……失礼ですが。龍也さんのご両親は?」

「私が6歳の時に死んだよ……それ以降私の家族は妹だけ、強くある必要が会ったんだ。妹の為に自分のももな、私が泣けば妹が不安がる。私は強くなければならなかった故にありとあらゆる物を学ぶ必要性があった。それだけの話だ」

肩を竦めながら言うと

「龍也って結構苦労してるんだね」

「そうでもない。私は苦労してるなんて思っていない。ただ、私が大切に思う者が笑っていてくれればいい。それだけが私の望みさ」

んん?何かしんみりしている?何でだ?

「何か龍也の強さの一部を垣間見た気がする」

うんうんと頷く筈達。そんな大した話はして無いと思うんだが……

「まあそうきにくれるな。ほれほれ、早く食べないと午後の授業に遅れるぞ」

時計を指差しながら言うと

「うわ!やべ!!早く食わないと!!」

ガツガツ!!

と急いで食べ始める一夏。ああ……そんなに慌てて食べると

「むぐう!」

どんどん!!

胸をドンドンと叩く一夏。案の定喉に詰まらせたか……

「わわ!大変!大丈夫?」

パンパンと一夏の背中を叩くシャルルと

「全くしようがないわねあんたは。ほら水」

鈴に差し出された水を勢いよく飲む一夏……騒がしくも平和な日常がそこにはあった……

(これだな。私が護りたいと思うのは、いつになっても変わらないただ1つの願い……)

私はそんな事を考えながら、ゆっくりと空を見上げた……雲ひとつない快晴がそこにはあった

第19話

第19話

都内某所の高級マンションの一室

(生きる意味か……)

研究室襲撃後から1週間。ワタシはそればかりを考えていた……あの研究室で遭遇した更識楯無の言葉が妙に心に引っ掛かる

(どこへ行くのか？何処へいけるのか？……ワタシは……)

自分が何の為に生きているのか？どうしてもそれを考えてしまう

「……何をしている。ユウリ」

窓の外を眺めながら考え事をしていると、背後から声を掛けられる。振り返りながら

「ふむ、考え事だよ。M」

ワタシより少しばかり年下の黒髪の少女。Mは少しばかり眉を顰め

「お前が考え事か、はっ明日は槍が降るか？」

「……酷い言い草だな。ワタシとて考え事くらいはする」

ワタシが肩を竦めるとMは

「貴様はいつでも任務だ、依頼だと言って何も考えず。対象を抹殺するのが仕事の筈……それが考え事とはどういう心境の変化だ？」

ワタシの前に座りながら尋ねてくるMに

「お前は考えた事は無いか？何故生きるのか？何のために生きるのか？」

私がそう尋ねるとMは軽く笑いながら

「愚問だな。お前は知っているだろう？タイプ00ファースト」その名でワタシを呼ぶな」……はっ！ようやくうれしい顔になったな」

即座に抜き放ったサバイバルナイフをMの喉元に突きつける。Mは突きつけられたナイフを見て

「それでいいんだ。ユウリ、貴様は何も考えず対象を殺すことだけを考えればいい。余計な事は考えるな」

ナイフに反射した自分の顔を見る。無表情で冷酷な暗殺者の顔

……そして自分か根っからの殺戮者なのだ……ナイフをMの首元から離しながら

「すまなかった」

「気にするな。その冷酷な顔……私はそれなりに好きだからな」

にいと邪悪な笑みを浮かべながらMは

「さて、話を戻すか。私の生きる意味だったな、私の目的は1つ。織斑一夏を殺し、私が私になる事それだけだ。お前も似たようなものだろう？アmanoミヤに保護されたタイプ00秒カンドの抹殺、それを目的とすれば良い、そうすれば貴様も貴様になれる。そうだろうか？」

そう笑ったMはそのまま立ち上がり

「では私はこれからイギリスに向かう。ロールアウトされたばかりのBT兵器搭載型の2号機を奪取してくる。貴様にカスタムしてもらったラファールも悪くないが、所詮は第2世代だからな」

違法改造を繰り返し第3世代並みの性能を持たせた。ラファールの改造機、アスモデウスの待機状態である。黒い十字架を見せるMに「言ってる。ISの整備所か料理も碌に作れんお前にはカスタム型のラファールがお似合いだ」

お互いに憎まれ口を叩くこの関係はそんなに嫌いではない。Mも同じ気持なのか少しだけ柔らかい笑みを浮かべ

「ではな、奪取してきた機体の整備は任せるぞ」

「ああ、判ってる。武運を祈っていよう」

最新型の機体だ。奪取は相当に難しいだろう。だからそう言うMは

「心配はない、ネルヴィオが幾つか手駒を出してくれるそうだ」

ネルヴィオ……あのネクロとか言う化け物集団の幹部か……

「ワタシは信用できるとは思わんがな」

光のない瞳と冷酷な笑みを思い出しそう呟くと

「どうでも良い。敵なら排除するそれだけだ」

Mはそう言う今度こそ、この部屋から出て行った……スコールもオータムも居ない部屋で1人再度窓の外を見つめ

「生きる意味か……セリナお前なら、ワタシに教えてくれたか？」

暗き闇の中でも笑顔を忘れなかった彼女の事を思い出し、ワタシは1人そう呟いた…

私は「ミスティアス・レイデイ」の修復具合と自身の身体の検査をしてもらう為に。街外れにあるツバキさんの個人ラボに来ていた。ツバキさんはエリスの母親であり優れたIS研究者でもあり、IS操縦者としても優秀な尊敬できる人だ。

「骨に異常はなし、もう大丈夫そうね」

「どうもありがとうございます。ツバキさん」

私がそう言うのとツバキさんは

「しかし、ミスティアス・レイデイのアクアクリスタルごと機体を引き裂くなんて…：…どういう性能なのかしら」

現在修復中のミスティアス・レイデイを見ながら言うツバキさんに「私個人の判断としては零式と同格か、それ以上の機体かと」

「出力や安定性は劣ってるみたいだけど。私も同意見よ。全く第3世代を軽く上回る機体が2機も今年はどうなったのかしらね？」

確かに今年は異常な数の専用機持ちに、異常な戦闘力を持つ者が4人…：…正直どうなっているのか？と私も思う

「うーん…：…修復はもう少しかかるわね。まあ修復が終わったら、持っけて上げるわ。暫くは暗部の活動は止めて、大人しく学生生活でもしてたら？」

まあISが無い内は大人しくしてるしかなないので頷いた

「それで…：…ツバキさん、聞きたい事があるんですけど？」

「うん？何？」

コーヒーを啜るツバキさんに

「あの違法研究所で黒武士に遭遇したとIS学園に報告しました。ですが貴女の耳だけ入れておきたいことがあるんです」

「何かしら？」

首を傾げるツバキさんにあの研究所で回収した、黒武士の仮面を見せながら

「これは黒武士が身に付けていた仮面です、ISは行動不能に追い込

まれましたが、辛うじて出来た唯一の反撃で、この仮面を落とす事が出来ました……」

ここで言葉を切り一度大きく息を吐いてから

「仮面の下は……男性の物でしたが……確かにエリスの顔でした」

一瞬見ただけだが見間違える筈がない。黒武士の仮面の下はエリスの物だったと告げると

「……そう、エリスの……」

「教えてください。エリスと黒武士の関係を」

私がそう言うのとツバキさんは

「悪いけど……教えられないわ。貴女には関係のない事だから」

「しかし！「黙りなさい、知るべきでは無いと言ってるの」……！」

凄まじい殺気に当てられ黙りこむと

「何も知らない学生如きが踏み込んで良い事じゃないの、ごめんなさいね」

形だけの謝罪をするツバキさんに

「いえ、こちらこそすいませんでした」

ツバキさんの酷く辛そうな顔を見て、私が聞いてはいけない事を聞いてしまったのだと理解した。私は謝罪しながら立ち上がり

「フレイアが待ってるのもう行きますね」

本来はエリスの護衛の1人だが、ここまで来るのに車で送ってきてもらった。何時までも待たせるわけには行かないのでそう言って立ち上がると

「そう、それじゃあね。楯無、早く簪ちゃんを仲直りしなさいよ？」

「うっ……はい」

聞いてはいけないことの逆襲だろうか、良いエガオでそう言うツバキさんに頷き、私はその場を後にした……

「どうでしたか？お怪我のほうは？」

「問題ないわ、ISはまだただだけどね？」

外で待っていたフレイアの車に乗り込みながら言う

「それなら良いのですが、余り無茶をなさならいように」

「判ってるって。じゃあ行きましようか？」

小言を言い出すと長いフレイアの言葉を途中で切り、発進するように促す。フレイアはまだまだ言いたりなような顔をしていたが。領き車を走らせた。流れていく景色を見ながら

(エリスには何か秘密がある……ツバキさんの反応で確信した……)

それが何なのか気にはなるが……そう簡単に踏み込んで良い話ではないことも理解した。懐にしまっている黒武士の仮面を触りながら

(はあ……あの研究所の一件から、何かとんでもない事が起きそうな気がするわね)

こういう嫌な予感当たるので内心溜め息を吐きながら、空を見上げた……雲一つない青空がそこに広がっていた

走り去る赤いスポーツカーを見ていたツバキは

(……タイプ00ファースト、サード……あの時保護できなかった2人……でも2人とも女の子の筈……男とはどういうこと?)

鋭い戦士の顔で思考の海に浸るツバキは、PCのロックデータを閲覧しながら、携帯を手に取り……

「もしもし? 轡木さんですか? 頼みたい事があるんですけど……」

IS学園の裏の運営者である。轡木 十蔵にへと電話を掛けた……

「いや、あれはマジでヤバイな。視線だけで人殺せるぞ?」

「だろう? 流石にあの域の魔王と敵対するのは避けたいんだ」

食堂で箒と前の授業で体験した魔王の事を話す、箒が避けるのも理解できた

「いや、でもお前も織斑先生と敵対するつもりだろ? じゃあ良いじゃん紹介してよ」

だが箒も箒で、一夏を物にするため。魔王と敵対する覚悟があるんだ。今更1人2人に睨まれても良いはず、そう思いそう言う箒は

「だから嫌だと言っている! あの2人は生身でも強いんだぞ! 下手をすると命に関わる」

ぶんぶんと首を振る箒。こりや駄目だ、何を言ってもうんとは言わないな。箒を経由して八神龍也と接点を造るのは諦めるか

「自分で話しかければ良いだろう！あれは見た目こそ怖いが温和で良いやつだぞ。……訓練時は悪魔だが」

「ん？何か言ったか？」

ボソリと呟いた箒の言葉がよく聞こえず、そう尋ねると

「いや、何でもない。お前は専用機があるんだ。確か今日は第2アリーナで龍也達が訓練をするそうだ。どうだ？お前も行って見ては？」

そう進めてくれる箒だが

(なんだ？妙に必死な表情をしてる気が)

何が何でも私を連れて行く。目がそう言っている……何か裏がありそうだが、今の私はとりあえず「八神龍也」との接点が欲しい。

例えそれが危険な橋だったとしても

「そうだなー、じゃあ今日の放課後私もその訓練に参加してみようかな」

丁度私の専用機の調整も終り手元に戻ってるし。1度動かして感触を確かめたい

「そうか！では今日の放課後、第2アリーナで待ってるぞ！良いな！絶対に来いよ！」

「おおぅ……判ってる」

何度も念を押す箒に頷き、私は食堂を後にした……だが後に私は知る事になる。悪魔と言うのは実在するのだと……

第20話に続く

第20話

第20話

「なあ？エリス様、何怒ってるんだ？」

メールを見てから不機嫌その物のエリス様にそう尋ねると

「お母さんが……龍也君がファントムタスク側かもしれないから気をつけなさいって」

そりやまた……ツバキ様も余計な事を……

「エリス様はどう思ってるんだ？」

「よく判らない……」

八神龍也と言う男は謎が多すぎる。高性能のISに歳と合わない戦闘技能……確かに怪しい人物だが、かといって敵とも味方とも思えない……

「そう言うときはあれだぜ。エリス様」

「こういうときの対処法は決まってる

「何をすれば良いの？シエルニカ」

「とりあえず戦えば判る！それに限る！」

剣筋や戦い方は己を映す鏡。だから戦えば判ると言うと

「シエルニカらしい……でもその通りかも……ちよつと行ってくる」

「そう言っ立ち上がるエリス様に

「今日は第2アリーナを使ってるらしいぜ」

「ありがとう」

「そう言っ部屋を出て行くエリス様を見送りながら。携帯を取り出し

「おーい、アイオス？なんかよ、第2アリーナでエリス様が龍也と戦うらしい。データ収集頼むわ」

「……何か余計な事吹き込んだの？」

「別にーちよつとアドバイスしただけ。んじやま頼むわ」

「そう言っ携帯を切る、切るまでの間アイオスが文句を行ったがスルーする」

「さてと……あたしも見るとするかねー」

あたしも1度見ておくべきだと判断し、第2アリーナの監視モニターにへとアクセスした……そこでは龍也と確か……

「あー2組のギリシヤの代表候補の……えーと」

フレイアから貰っていた代表候補生のファイルを見る

「ああ、あった。あった。薄野弥生、専用ISは完全近接特化型「死線の紅（デッドクリムゾン）」か……」

近接特化型同士……これは良いデータが取れるかもしれない。あたしはそんな事を考えながらモニターに視線を戻した……

（これは……）

私は対峙しているだけで流れる冷や汗に、戦う相手を間違えたかなと若干後悔していた。箒に連れられ第2アリーナまで来たが、まさかそのまま模擬戦をやる事になるとは思っても見なかった

（ええい!!やるだけやるだけだ!!）

拳を握り締め構えを取る。それを見た龍也は

「武装を展開しないのか？」

「悪いが私のISに武装は搭載されてねえ。強いて言うなら全身が武器だ」

私の専用ISデッドクリムゾンはその名の通り、紅い装甲を持つISで武装の類は一切装備されていない。その代わり機体性能が他のISより高い。それがデッドクリムゾンの特徴だ。私がそう言うとな龍也は

「そうか……では」

腰に下げていた刀と肩の装甲をパージし同じ様に拳を構える

「馬鹿にしてんのか？」

「そんなつもりはない。私とて武を修める者。同じ条件で戦いたいだけだ……」

鋭い眼光に少しばかり気圧されるが……

「はっ！後悔すんなよ!!」

気持ちで負けては勝ちはない。私はそう言うと同時に龍也の方に

向かって行った

「おらあッ!!」

「しっ!!!」

お互いに拳を繰り出す。装甲同士がぶつかり鈍い音が響き渡る

「はあッ!!!」

「よっ!」

即座に放たれた膝蹴りを無反動旋回で回避しそのまま踵落しを放つ

「甘いッ!!」

「うわっ!!」

足を掴まれそのまま投げ飛ばされる

「なろっ!!」

手を着きそのまま瞬時加速に入り。勢いを付けたまま手刀を突き出す。龍也はその攻撃を受け止めようとして顔を顰める

「はっ! 気付くのが遅えっ!! 喰らっどけ!!!」

手の装甲からエネルギー波が放たれる。必中のタイミングだと思っただが

「くっ!!」

龍也は信じられないことに拳でそれを弾き落した

「うおっ! すげえ!」

必中だと思っていただけに思わずそう呟くと

「装甲からエネルギーを打ち出す……それがお前のISの能力か」

「正解。武装はねえが……そこそこ使えるんだぜ? こんな風になッ!!

烈風拳ッ!!!」

腕を振りあげエネルギー波を飛ばす

「せえいっ!!!」

踏み込んで拳でそれを弾き飛ばす龍也……だが

「それはもう見たぜッ!! うらあっ!!!」

烈風拳を放つと同時に瞬時加速に入っていた私は拳を振り切った体勢の龍也の顎目掛けて拳を振りぬいた

「ぐっ……」

流石にその体勢から防御に入れなかったのか。その場でよろよろと後退する龍也

「すげえ！初めて龍也が態勢を崩したところを見たぞ！」

「行け弥生！龍也をダウンさせろ!!」

見ている筈達がそう言うが。私は追撃に動けずにいた

(な……何だ!?闘気が跳ね上がった!?)

私の攻撃が命中した瞬間。龍也の纏う空気が更に鋭さを増した。その凄まじい覇気に思わず硬直していると

「中々やるな……弥生。初戦で一撃を貰ったのは初めてだ」

龍也はやれやれと肩を竦め

「少しばかり甘く見ていた。ここからは本気で行かせて貰う」

構えを取っていた龍也が拳をダラリと下げる。隙だらけに見えるがその実

(まるで隙がねえ！)

何処を見ても隙がない……何処を攻撃しても手痛い反撃を受ける。

私は直感的にそれを感じていた

「来ないのか?……ならばこちらか行くぞ!!」

「くっ!!」

咄嗟に右手でその拳を受け止めようとするが

「なあっ!?!」

そのガードごと殴り飛ばされた

「そらそら!!」

「くっ!うおっ!?!」

連続で放たれる速射砲のような拳を必死で捌く

(くっ!これは……防ぎきれねえ!)

攻撃が重い上に速い。幾らなんでも捌ききれない……どうやら一撃入れたことで龍也の中でスイッチが入ってしまったようだ

「ふんっ!!」

「がっ!」

反応が遅れ、肩の装甲を殴られそのまま殴り飛ばされる

「つうう……手加減したのか?」

あのタイミングだったら顔を殴れた筈。なのに肩を殴った龍也に
そう尋ねると

「顔は女の命だ。殴りはしない……私の流儀に反する」

「はっ！そんな事言われたの初めてだ」

女扱いされた事はあんまり無かったので、正直少しばかり嬉しかつ
たが……

「だけど……絶対防御があるんだぜ？そんな事気にする必要はないだ
ろうが」

「そう言われてもな。出来ないものは出来ない」

フェミニニストなのか？この調子だと腹も狙いそうには無い
顔を狙わないって判ってるなら。ある程度予測はつくぞ？」

「構わんさ。私はそれでもお前に勝つ自信がある」

ほっほーう……言ってくれるじゃねえか……

「そうか……ならこっちは全力で叩き潰しに行くぞ!!」

「やってみたまえ。そう簡単に私を打倒できると思うなよ!」

ほぼ同時に瞬時加速に入りそのまま接近戦に入る

「おらあっ!!」

「甘いッ!!」

攻撃側と防御側が何度も何度も変わる……だが

(押されてる……)

龍也のほうが圧倒的に私より強い。私は必死だが、龍也の顔にはま
だまだ余裕の色が見える……

(持久戦なら負ける……なら。一気に決める)

龍也はまだ様子見とかそんな感じがする。なら一撃で決める

「はっ!!」

肩を狙って放たれた拳をヘッドスリップでかわし

「おらあッ!!」

胴の装甲を掴み瞬時加速に入る

「ぬ……ぐあっ!!」

そのまま勢いを付けて龍也をアリーナの壁に叩き付ける

「もういっちょっ!!」

即座に反転し反対側の壁目掛けて瞬時加速に入る

「おらあっ!!」

「ぐううー!」

もう1度最高速度のまま龍也を壁に叩き付ける

「これでラストだッ!!! インフェルノ・プレッシャーッ!!!」

「ぬおっ!!!」

もう1度瞬時加速に入りそのまま壁目掛けて龍也を投げ飛ばす

凄まじい轟音を立てて龍也がアリーナの壁に叩き付けられる

「どうだっ!!」

デッドクリムゾンの最高威力の技……これなら決まってる筈……

「お前の技は見せてもらった……なら今度はこちらの番だ!」

後ろッ?!

背後から龍也の声がし振り返るが、もう遅い。私は強烈な回し蹴りを喰らい思いつき蹴り飛ばされた

「ぐっー!」

体勢を…何とか体勢を立て直そうとするが

「遅いッ!!」

「がっ!?!」

それより速く龍也の追撃の蹴りをまともに喰らう

「ジョーカーを切らせてもらおう!」

「ぐっ!!」

吹っ飛んだ私に連続で蹴りと拳が叩き込まれる

「くはっ!」

アリーナの壁に叩き付けられそのまま身体が弾む

「せえいっ!!」

凄まじい風切り音と共に上空に蹴り飛ばされる

「全てを打ち砕け!! 神雷ッ!!!」

瞬時加速で回り込んでいた龍也が放った蹴りを喰らい。アリーナの床に叩き付けられる

「ぐっはっ……」

絶対防御ごしに感じる凄まじい衝撃と共に、デッドクリムゾンの

シールドエネルギーは底を突いた……私の完膚なきまでの敗北だった……

「くあーもう少し行けると思ってたんだけどな」

胡坐を掻いて髪を掻きながら言う

「まだまだそう簡単には負けん」

くーここまで完全に負けた後にこう言われると何か腹立つ！

「ええい！次は勝つからな!!」

「おお。楽しみにしておこうか」

完全に舐められてる……だがここまで実力差があるとこの反応は当然とも言える

「今度からは私も訓練に参加するからな!!次は勝つ覚えとけ!」

「はいはい。楽しみに待たせてもらう」

くーツ!!ム力つくーツ!!あの余裕綽々な態度絶対変えてやる!!!私はそのような事を考えながら箒達の待つ場所へ向かった

歩いてくる薄野さんと龍也を見ながら俺は

「なあ。箒、薄野さんって負けず嫌いか?」

「とんでもなく負けず嫌いだ」

ああ。なるほど、箒が薄野さんを連れて来た理由が判った

「悪魔に捧げる生贄の増加が狙いか?」

「正解だ」

なるほど。俺の予想は当たりようだ、後はシャルルとラウラ、クラスは違うがクリスも訓練に参加してくれれば。俺達の訓練時間は減少する(ここになのはとフェイトが居なくて良かった、もしこの会話を聞かれてたら更に訓練が厳しくなるのは必須だからだ)

「良いアイデアですわ。箒さん」

「褒めてあげるわ。箒」

「ふふ、そうだろうそうだろう」

悪魔にこっそり絞られているセシリアと鈴が箒を褒める。それを見たシエンさんは

「それで私も巻き込まれたんだ。恨むよ一夏君？」

「いや。俺のせいじゃないし」

最近ではシエンさんも訓練に巻き込まれがちだ。俺をジト目で睨むシエンさんから視線を逸らすと。アリーナの扉が開く

「龍也君、居る？」

「あれ？エリスさん。どうしたんですか？」

ISSスーツ姿のエリスさんを見ながらセシリアが尋ねると

「模擬戦の相手をして欲しい。ISSの調整を兼ねて実戦形式で」

その言葉に箒達が一瞬ニヤリと笑ったように見えた。願ってもない生贄の増加を喜んでいるに違いない。だが喜ぶ気持ちは判る、龍也達の訓練は超厳しいから俺も同じ気持ちだろう

「おお？エリスかどうした？」

龍也がピットに戻ってくる。それを見たエリスさんは

「私のISSの調整が終わったから実戦形式で模擬戦をして欲しい。同じタイプはISSだから龍也君に頼みたい」

「別に構わんよ？少し待ってくれエネルギーだけ補充させてもらう」

「アリーナで待ってる」

エリスさんはそう言うのとメタルブラックのISSを展開しアリーナへと飛び出していったが

(妙に殺気だった気がするけどなあ)

エリスさんの雰囲気は何時もと違う事に若干の違和感を感じながら、俺は再度アリーナに飛び出していく龍也の姿を見送った……

ふむ珍しい型のISSだな。私はエリスのISSを見てそう思った。他のISSとは違い翼を持たず、代わりに背中に背負う形のブースターが見える。恐らくあれで飛行するのだろう、それに装甲の随所にブースターが見える……その数からしてスピードも相当なものだろう。それに左肩の装甲が異様なほど大きい。あの形状からすると盾としても使用できるだろう。私がエリスのISSを観察していると

「行くよ」

コールした大型の突撃槍を構えるエリスに

「ふむ。掛かってきたまえ」

斬艦刀では取り回しが遅れるので、代わりに獅子王刀を抜き放った瞬間

「シッ!!」

鋭い踏み込みと同時に放たれた突きを刀身で受け流し

「はっ!」

胴を狙って刃を振るうが。エリスは槍の持ち手を使いそれを受け流し。距離を取った

「……」

槍を構え油断無くこちらを見るエリス……

(ふむ……様子見と言うところか)

どう見ても私の出方を伺っているようにしか見えない。

(では望み通りに動いてやるか)

自分から攻めるのではなく、どうやら私から攻め込ませてその動きを調べたいようなので。そのように動く

「避けれるかな?」

両足の装甲内に格納されていたミサイルを放ち、それと同時に左腕の装甲を飛ばす

「!!シッ!!」

即座に抜き放った日本刀型のブレードでミサイルの大半を切り落とし。ブーストナックルは左肩の装甲を上手く使い勢いを殺して受け流した

(素晴らしい技能だ。正直驚いた)

ミサイルを切り落としたのにも驚いたが、あの勢いのブーストナックルを肩の装甲で受け流すとは。動体視力がよくなければ絶対に出れない防御方法だ

「今度はこっちから」

瞬時加速!?!いや違う

(純粋な加速性能か!?)

一瞬瞬時加速と見違えるほどの加速を見せ。私の視界から消えるエリス

「! なっ!? 槍の穂先!」

後ろから飛んで来た何かの気配を感じ獅子王刀を振るったが、飛んできていたのは先ほどまでエリスが振るっていた槍の穂先だった

「貰った!」

「ちいっ!」

獅子王刀を振るった体勢の私の影からエリスが飛び出してきて、刀を振り下ろしてくる……迎撃は無理ならば

「せいっ!」

「白羽取り!? ツつうツ!!」

獅子王刀を投げ捨てそのまま両手の掌でエリスの刀を受け止める。驚愕と言う表情のエリスにそのまま肩からぶつかり蹴り飛ばす

「甘いです!!」

「ちいっ!」

どうやらさっきの弥生との模擬戦も見ていたのか。私の行動パターンを予測していたエリスは、器用にブースターを扱い蹴り飛ばされた勢いを利用し。こちらに向かって来る

（不味い!）

エリスは刀を鞘に仕舞っている……見たところ居合いの一種だと思うが。獲物が無ければ防ぐのは難しいだろう

（致し方ない……少しばかりインチキを使わせてもらう）

拳に魔力を通し装甲を強化する。そしてそのまま脚を引き拳を構える

（カウンター……意識を集中しろ）

意識をエリスの手元に集中させ、そのまま息を整える

（違う……このタイミングじゃない……）

向かって来るエリスの呼吸に合わせて……

「これで!! 亜流!!」

閃光が走る、普通なら反応しきれないほどの鋭い斬撃だが

「絶空ッ!!」

完全にエリスの呼吸に合わせていた。私はその斬撃と同時に拳を突き出した

「!!」

鋭い金属音を響かせてエリスの手から刀が弾け飛ぶ。待ちの一撃の私の一撃の方が重かったのだ。弾け飛んで刀を空中で掴み、そのままエリスの喉元に突きつける

「チエックメイト」

「くっ……私の……負けです」

エリスの手元にはコールされつつある武装があるが。もう遅い喉に突きつけられた自分の刀を見て負けを認めるエリスに

「やれやれ……少しばかり危なかったな」

肩を竦め手に持っていた刀をエリスに返しながら呟くと

「あそこまで余裕と言う表情でそれを言いますか？」

負けた事で少しばかり不機嫌なエリスに

「いやいや。本当ギリギリだったんだ、奥の手を切ったから防げたよ
うな物だよ」

魔力を使わなければ反応し切れなかった、それほどまでの一撃だった。
た。

「奥の手?……何かしたようには見えなかったけど?」

「企業秘密だ。聞かれても困る」

魔力とか言っても信じてもらえないだろうしな

「まあ良いです、私の知りたい事は判りました」

「?何のことだ?」

「こちらも企業秘密と言うわけでそれでは私はこれで。また模擬戦を
してくれると嬉しいですよ」

エリスはそう言うで一夏達が居ないほうのピットへと戻って行っ
た

(何を見極めたかったんだ?……エリスは)

何の為にエリスが私と模擬戦をしたのが判らず、私は首を傾
げながらエリスを見送った……

(私の負けだった……)

ピットに戻りシャワールームで汗を流す……短い試合だったが凄まじいまでの疲労感を感じていた。

(まるでお母さんと勝負したみたいなき感じだった)

私の剣の師であるお母さんに訓練をつけてもらったような感じだった……底が見えないどこまでも深い深遠を除いたようなそんな感覚。だが剣を交えた事で判った事があった

(龍也君はフアントムタスクじゃない……あの剣は優しい守護の剣だった)

龍也君の剣は誰かを護る為の剣であり。決して傷つける為の剣ではない……同じ剣を扱うものだから判る

(どれほど訓練をしたんだろう?)

あそこまで行くのは並大抵の訓練ではないだろう……私とは違う……純粹に努力で培われた剣

(綺麗な剣だった……)

龍也君の剣は芸術の域にまで鍛え上げられたそんな剣だ

「私の邪剣とは違う……」

シャワールームの鏡に映る。普段は隠している右目を見る……水晶のような冷たい光を放つ。自分の大嫌いな目を見ながら

「私は……結局。誰にもなれない……」

自分であつて自分じゃない……それがたまらなく悲しくて私は体を拭ってから、何時もの様に包帯を右目に巻き。シャワールームを後にした……私は誰になれば良いの? 何処へ行けば良いの?……この虚無感は……どうすれば無くなるの?……誰にも言えない闇を背負い私は何処へいけるのだろうか……誰か。答えを教えてください……

第21話に続く

第21話

第21話

薄暗い整備室の一角。組み立て途中のISを前に誰かと携帯で話している小柄な影。青いセミロングの髪を特徴的な髪留めで止めた眼鏡の少女の名は「更識簪」といった

「うん……うん。判った、体調には気をつけてねエリス」

『ごめんね。調整を手伝うって約束したのに』

電話越しに謝ってくるエリスに

「ううん。良いよ、どうせまだ完成には程遠いし」

目の前の自分のISを見る。配線が繋がってないところもあるし、完成にはまだまだ時間が掛かるのは目に見えている……だからそんなに気にしなくて良いと言ってから

「帰りに何か購買で買っていくよ。何が良い？」

『クリーム餡蜜を』

大好物を即座に告げるエリス

「うん、判った。じゃあね」

電話を切り携帯をポケットに仕舞う

「どうしようかな……」

1人ではやりたかった装甲とかの調整は出来ない。1人でも出来ること……

「火器慣性とかかな」

まだ完成していないマルチロックオン・システムとかの調整でもしようと思ひ。私がディスプレイの前に腰掛けた時

「ほう……ISを自分で組み立てているのか？」

感心と言う感じで話しかけられる。それは同性の者ではなく確かに男の声だった。驚きながら振り返るとそこには

「いや、凄いなここのまで1人で組み立てるとは」

打鉄式式を見ながら笑う長身の男子……黒いIS学園の制服に黒いコートを纏ったその男子を見て私は

「八神……龍也」

「うん？私を知ってるのかな？1組の生徒ではなかったと思うが？」

面識の無い私に名前を呼ばれ若干驚きと言う表情の八神君に

「あーえーと。1年4組 更識簪です」

「ご丁寧にも。1年1組 八神龍也だ」

にこりと微笑む手を差し出してくる……えーと握手って事？思わず手を凝視してしまうと

「あー、馴れ馴れしかったか。すまん」

手を引つ込めようとする八神君に

「驚いただけ。よろしく八神君」

「龍也で良い。私も簪と呼ぶしな」

私は慌ててその手を掴みながら宜しくと言った

「んで？ISの調整中のようだが……1人で大丈夫なのか？装甲とかは大変だろうか？」

外してある式式の装甲を見てそう言う龍也君に

「うん……本当は友達が手伝ってくれる筈だったんだけど……ちよつと調子が悪いらしくて今日は1人」

私がそう言うのと龍也君は

「それなら手伝おうか？私もISの調整に来たんだし。出来ることなら手伝うが？」

これは願ってもない申し出だが……

「良いの？」

「構わんよ。1人より2人のほうが効率が良いしな」

そう笑う龍也君に

「えつとじゃあ……取り付け手伝ってもらっても良い？」

「判った」

そうして私は龍也君に手伝って貰いながら式式の調整を始めた……

「配線はどれだ？」

「あ。これ」

装甲を取り付けながら尋ねてくる龍也君に配線を手渡す

「うん。ありがとう」

慣れた手つきで配線を繋ぐ

(凄い慣れてる……)

テキパキと配線を繋いで行く龍也君の手際を見ていると

「どうした?」

「あ。な何でもないよ!」

急に顔を上げた龍也君と目が合って、何でもないと言いながら手を振ると

「面白いやつだな簪は」

くすくすと笑う龍也君に何となく気恥ずかしい気分になった。同じ年の筈なのに何となく年上和話をしているようで落ち着かない。

「さてと、これで装甲の取り付けは終わったな。後は?」

道具を置いて尋ねてくる龍也君に

「えーと、今度は私が手伝いするよ」

「そっかじゃあ頼む」

龍也君が零式を展開する。重厚な黒い装甲は見た目のインパクトも凄い

「何をするの?」

「機体の反応速度と姿勢制御のプログラムの確認と、各部アクチュエータの確認だ」

各部のアクチュエータ……やっぱり斬艦刀の重量とかで不具合が出てるのかな?

「それじゃあ、私は反応速度とかの方を確認するよ」

「それは助かる。アクチュエータの方を集中して見れるからな。それじゃあ頼む」

「任せて」

私はそう返事を返し。零式の反応速度と機体制御のプログラムを呼び出した

(凄い……)

零式の反応速度と機体制御のプログラムはかなりの高性能の物だった

(参考になる……)

「このプログラムは式式にも流用できる……」

「龍也君。このプログラムコピーしても良い？」

「構わんが。零式ようだから調整しないと式式には使えんぞ？」

「うん。そっちの方は自分で調整する」

龍也君の許可を貰ってからプログラムをコピーしながら

「反応速どれくらい上げる？」

「今より20%くらい上げて貰えるか？」

「そんなに上げて大丈夫？」

反応速を上げすぎると機体に振り回されるのでそう尋ねると

「ああ。構わん頼む」

「判った」

言われた通り反応速を調整し直す。暫くそんな感じで龍也君とI
Sの調整をした

「すまん、私の方に掛かり切りにさせてしまったな」

夕食の時間になったので作業を終えたところで謝ってくる龍也君
に

「ううん、良い……参考になったから」

零式のプログラムはどれも素晴らしい物だった。それをコピーさ
せて貰っただけで式式の調整は大幅に進むので全然問題がない

「そっか……私は大概訓練の後はISの調整をするために整備室に来
る。また何か困った事があつたら相談に乗る」

そう笑う龍也君に

「ありがとう」

そう返事を返し私は購買部に向かった……

「はい。クリーム餡蜜買って来たよ」

「ありがとう簪」

嬉しそうな顔でその袋を受け取ったエリスは
「嬉しそうな顔してるね。簪何かあった？」

餡蜜の蓋を開けながら尋ねてくるエリスに

「えーと、今日ね整備室で龍也君と一緒に式式の調整をしたの」

「そうなんだ……」

龍也君と一緒にだったと言うとエリスは少しだけ顔を曇らせたが

「それでどうだった？調整は進んだ？」

「式式の調整はあんまり……進まなかったけど、その代わり零式のプログラムを幾つかコピーさせてもらったんだ。これを式式様に調整しようと思う」

「あんまり無茶しないでね簪」

心配そうに言うエリスに

「うん。大丈夫だよ」

私はそう返事を返し、零式のプログラムを呼び出した……

（あれ？……エネルギーバイパスが2通りある？）

整備室で見れなかったエネルギー関連のプログラムを見て。気付いたが何故かバイパスが2通り作られている

（それに……なにこの火器管制プログラム。こんなの零式の装備にな
い）

マルチロックオンシステムに射撃管制のプログラムがあり。それに驚きながら更にプログラムを解析しながら

（零式つてもしかして……ううん。考えすぎかな？）

一瞬ある仮説が思い浮かんだが、そんな事は在り得ない筈だ。考えすぎだと自分に言い聞かせ

（このマルチロックオンシステムを式式用に調整すれば）

なんであるかは判らないが、このマルチロックシステムは使える。そうすれば完成が大幅に近付く

（もしかすると今回の学年別には参加できるかも……）

私はそんな事を考えながらマルチロックシステムの調整を始めた
……

日本から遠く離れた、イギリスのISの研究施設は騒然としていた
「何なんだ！こいつらは!!」

大柄の軍人が悲鳴にも似た絶叫を上げる。その視線の先には

「ギシャアアアアツ!!」

不気味な咆哮を上げる、首のない黒いISの様な何か

「う、うわあああああッ!!」

錯乱状態になり銃を乱射するが

「グルルル」

それは謎の何かに当たる前にシールドのようなものに弾かれる

「シールドバリア……」

それは間違いなくISに標準装備されているバリア能力だった

「そ……そんな」

「ギシャアアアッ!!」

咆哮と共に放たれた拳を喰らい壁際まで吹き飛ばされた軍人は赤黒い泡を吐いて気絶した。間違いなく内臓の幾つかが深刻な損傷を受けたのは間違いない。それを冷めた目線で見ていたMは

「私の出番がないな」

ネルヴィオが貸し与えてくれた手駒は。先ほどの軍人を殴り飛ばした首のない異形「デュラハン」が4体だった。これだけで防衛が固な研究施設を襲うのか?と思っただが。あれほどの性能なら2体でも事足りたと思っただ

「ギシャアアアッ!!」

不気味な咆哮と共にデュラハンの肩が変形し、キャノン砲に変化する

「機械なのか、生体なのかどっちなんだ?」

機械と生物の中間の様なデュラハンを見て私はそう呟いた……

「ふふふ……デュラハンは生物でも機械でもないよ」

「ネルヴィオ。来てたのか?」

虚空から現れたネルヴィオはISを展開していた。右腕に漆黒のナックルガントレットを持ち両脚に脚甲。そして頭部に獣耳がある、普通のISと比べると異常なほど軽装だった

「まあね。暇つぶしだよ」

そう笑ったネルヴィオは邪悪な笑みを浮かべ

「ふふふ……人間の骨を踏む砕くのがって楽しいんだよ?」

倒れている軍人の胸部を容赦なく踏み砕くネルヴィオ

「がああああッ!!!」

その激痛に悲鳴を上げる軍人だが、ネルヴィオはそれを気に留めた様子も無く今度は

「次は……腕かな?」

脚を振り上げ踵で腕を踏み砕く。骨の折れる鈍い音を聞いたネルヴィオは

「あはは!!最ッ高!!人間を壊すのって本当に癖になる!!」

笑顔のまま骨を踏み砕いていくネルヴィオは本当に楽しそうに歩いて行く

「この化け物がッ!!!」

「ギアアアアアッ!!!」

鋭い斬撃音と共に何かが倒れる音がする。

「やられたんじゃないのか?」

「ふふふ……そう簡単にデュラハンは死なないよ」

にやりと笑うネルヴィオと共に通路を曲がるとそこには、青い装甲を持つISを展開した女と倒れたデュラハンの姿があった

「そう簡単にこの「サイレントゼフィルス」は渡さない!」

そう言ってレーザーをネルヴィオ目掛けて発射する女だったが

「遅いよ」

軽い動作でそれを弾き飛ばしたネルヴィオは

「それでこれを回収するの?マドカ」

「ああ、そうだが……」

私がそう返事を返すとネルヴィオは

「じゃあISは上げる。この女はこっちが貰うよ」

にやりと笑ったネルヴィオに

「貴方達頼みの化け物は全部倒したわ。第2世代でこの「サイレントゼフィルス」に勝てると思ってるの?」

「ははは!!デュラハンが死んだって?甘いよ人間」

ネルヴィオがそう笑った瞬間倒れていたデュラハン達から何かが射出される。それが私の足元に転がってきたのでそれを拾い上げる

「薬莢?」

それは間違いなく薬莢だった……一体なにをリロードしたんだ？
私が首を傾げていると。異変は突然起きたレーザーで蜂の巣にされたデユラハンがゆつくりと立ち上がったのだ
「なっ!？」

驚いている女の隣に倒れていた身体を両断されたデユラハンの上半身と下半身が一瞬で再生し、女の足を掴み逆さに吊り上げる

「そんな!？」

「グルルル……ギシャアアアッ!!!」

女の足を掴んでいたデユラハンの胴体がガバツ!!と音を立てて開く。そこには無数の鋭い牙があった。ガチガチと音を立てる牙……まさか……

「えっ!?嘘……イヤアアアアアアッ!!!」

女もその予想をしたのかじたばたと暴れるがもう全てが遅かった……

「ふふふ……食べていーよ。デユラハン?」

ネルヴィオの許可を得たデユラハンは一層大きく口を開き、女を一飲みにした

「ああ、ISは吐き出してね?」

カランカランと音を立てて吐き出される待機状態のISをネルヴィオが拾い上げ

「ああ。壊れちゃってる……まっいつか。ユウリが直してくれるでしょう?」

そう言つて私に待機状態の「サイレントゼファイルス」を渡したネルヴィオは異様に胴体の膨れたデユラハンに触れ

「ふふふ、また手駒が増える」

楽しげにそう笑ったネルヴィオが現れたときと同じ様に虚空に溶ける様に消え去った……私も目的の物は手に入れたので来た道に戻り始めたが

(化け物だな……)

ネルヴィオの手駒……何時まで味方なのか判らない。ネルヴィオ達に若干の危機感を感じながら私はその研究所を後にした

魔法陣の真ん中に横たわる金髪の女性。先ほどデュラハンに飲み込まれたISの操縦者だ。開かれた目に既に生氣は無く事切れているのが判る。私はその女の頬を撫でながら

「まだ生きてかかったでしょ？まだ完全に死にたくないでしょう？……だから私が貴女を生き返らせて上げる」

女の全身を漆黒の闇が包み込む

「我が声を聞け悲しき亡者よ。まだ生に執着するのならば我が声に従い我が元へ来い」

魔法陣が怪しい光を放つ

「汝の願いを聞き届けよう。しかしてその身は既に人ではない」

魔法陣から無数の闇の刃が現れ女を切り裂いていく

「汝は狂い、生者を襲う……それを契約とし再度命の鼓動を宿せ！」

詠唱を終えたと同時に女を覆っていた闇が弾け飛ぶ

「グルルル……」

「おはよう。デュラハン。行きなさいあつちに貴方の餌があるわ」

デュラハンは喉を鳴らしながら通路の奥へと歩き去っていた

「見事な手並みだな。ネルヴィオ」

「ひゃっははは!!最高だな!!貴様はツ!!」

通路の奥から姿を現した赤い身体を持つ骸骨の騎士と角と大きな蝙蝠の翼を持つ異形が姿を見せる

「ベリト、ベルフェ居たんだ」

LV4ネクロの2柱の魔神にそう話しかけると

「私は基本、ベエルゼ様の護衛が任務だ。滅多にここを離れる事は無い」

「ひゃっははは!!俺は人間狩りを終えて来たところだ!!」

血に濡れた剣の刃をべろりと舐めるベルフェを横目に見ながら

「私はもう休むわ、ベリト。後はお願い」

「心得た。デュラハンとディースの調整が私が受け持とう」

ベリトの言葉に頷き私は自分に与えられた部屋へと向かった

「ひび、あいつの目は何時見ても最高だな。絶望と狂気に満ちてるか

らな」

「貴様は悪趣味だなベルフエ……まあそれがやつ力の源だからな」

ベリトとベルフエが楽しげに笑う

「ひっひ!!神王を愛し憎む。相反する2つの心か!切り裂いたらどんな感じなんだろうなあ……」

「ネルヴィオはベエルゼ様のお気に入りだ。勝手にそんな真似はするなよ」

「わあーてる。俺様としては奴が神王側に寝返ってくれても良いんだがなあ?そうすれば任務で奴を切れる」

ひやはははと笑うベルフエ

「それもありえるか……ネルヴィオは完全なネクロではないからな」

「だろ?ひやははは!!どうなるか楽しみだぜええ」

「何処へ行くベルフエ」

「次の狩場を考えるんだよ!行きの良い獲物を狩るのが俺の楽しみなんだよ」

翼を翻し歩き去るベルフエを見ながらベリトもまた闇に溶けるように消えて行った

この世界にも闇の死者達の魔の手が確実に伸び始めていた……

第22話に続く

第22話

第22話

土曜日の午後の訓練の時間。今日は更に2人の参加者がいた

「一夏君が私や、デユノア君に勝てないのは武器の特徴を把握してないからだよ」

「うん、僕もそう思うよ」

なのはとシャルルの言葉を聞きながら俺は

「ちよつと待っていてくれるか?……死にそうなんだ」

ISでの戦闘訓練の後、龍也との組み手でポンポン投げられて体力が限界だった

「龍也、一夏をあれだけばいばい投げた技は何だ?」

「合気道と八極拳のミックスだ。体重移動とかで身長さと体格の差はカバー出来るしな。ラウラも判るだろ?」

「システマと似たような物か?」

「そんな感じだ」

龍也の技に興味を持ったラウラが繰り返し龍也に質問している。

取り分け徒手空拳での技能に興味を持ったようだ

「こう……やって、こうだ」

「むっ?…こうか?」

足捌きと体重移動をラウラに教えている龍也、普段なら俺の体力が回復した時点でまた無限組み手『龍也に一撃入れるか、5分間耐えると言うもの。5分経たずに倒れた場合カウントがリセットされる。しかも龍也は投げ技中心……苛めっ子か?と思わずにはいられない』

「こうやって、こうだ」

「こうだな」

鋭い踏み込みの音と凄まじい風切音が絶え間なく龍也とラウラの居るほうから聞こえてくる

(なんか弟子と師匠って感じだな)

そんな事を考えながら身体を起こす。組み手終了から10分、漸く

動けるほどに体力が回復した……視界の隅ではセシリア・箒・鈴がフェイトに絞られ行動不能になっている。しかし俺よりかは体力の減少は少ない筈だ。何せ龍也と無限組み手をするのは「俺・なのは・フェイト」位なものだ。だが最近訓練に顔を見せている弥生さんとシエンさんもその内参加しそうな感じだ

「おおッやるな!」

「そっちもな!」

鋭い打撃音と回避の音がする。何事だろうかと龍也とラウラの方を見ると

「シッ!」

「甘いッ!」

ラウラが突き出した手刀を掴み上に投げる龍也

「甘いのはどっちだ!」

「くっ!」

空中で上手く体勢を立て直し踵落としを叩き込むラウラ。

「くう、ちょこまかと」

「それが取り柄なんぞな」

龍也とラウラはかなり身長差がある。龍也は思うように動けず苦戦している様に見えたが

「だがね。私は身長差のある相手とも戦うのは慣れてるのだよ?」

「水面蹴り!」

しゃがみ込んだ龍也の水面蹴りで体勢を崩されたラウラの襟を掴み

「これでゲームセットだ!」

「うわッ!!」

まるで猫の様に掴み上げられ。投げられたラウラはそのまま倒れた

「惜しいな、後2分だったぞ」

「むうう……もう1回だ!!」

ラウラが跳ね起きもう1回組み手だと言うと

「続けてはやらん、少し休め。私は一夏も見ないといかんしな」

「そうか、ではその後にもう1度だ」

さてと名指しされたし、もう1回あの地獄に足を踏み入れるか

「そうそう、シャルルも来い」

「へっ?ぼ、僕も!」

あの無限組み手(苛めっ子仕様)を見ていたシャルルがビクンと身を竦めると

「ああ。違う違う、一夏に銃貸してやって欲しいんだ」

「銃?……これで良い?」

コールしたアサルトライフルを龍也に渡すシャルル

「うん、これで良い。私と一夏に使用許諾は出してくれたか?」

「ちゃんとしてあるよ」

龍也とシャルルが何の話をしているか判らないので首を傾げていると

「なに、近接だけと言うのも何だからな。少しは射撃の練習をさせてみようと思っただけだ」

手渡されたアサルトライフルを持ち構えてみる

「それじゃあ。駄目だよ一夏。脇を締めて。それと左腕はこっち」

シャルルが構え方を教えてくれる。言われたとおり構えてみる

「センサーリンクはどうだ?」

「探してるんだが無い」

白式のメニューにセンサーリンクが無い。俺がそう言うとな龍也は

「よし、では目測で行こう」

「大丈夫なのか?」

「何とでもなるだろ?では撃て」

龍也って結構大雑把だよな。俺はそんな事を考えながら渡されたアサルトライフルのトリガーを引いた……1マガジン撃ち切った所で龍也が

「ふむ。命中率2割。まあこんなものか?」

「じゃあ。お前もやってみろよ」

マガジンを付け替えライフルを渡す。すると龍也は「射撃は苦手なんだがなあ」

そう言いながらライフルを構えた。これは初めて龍也を馬鹿にする機会があるかもと俺はそんな事を考えながら。龍也から距離を取った

「ではまあ撃つか」

軽い呟きと共にライフルが火を噴いた、

「す、凄い!!全弾命中だよ!!しかも全部と真ん中!」

「お前これで苦手ってなんだよ!?嫌味かこんちきしょうっ!!!」

結論……龍也に弱点が無いと言うことが判っただけだった……

「さてと。今日の訓練はこれ位にしておくか」

「……………お、終わった」

「流石の私もしんどいぞ……」

息も絶え絶えと言う感じの一夏達と少しばかり疲労の色が見えるラウラを見ながら

「今日は軽めだったよな?」

今日は少し調べたい事があったので早めに切り上げた。だから軽かった筈と思ひ尋ねると

「龍也の視点ではね?龍也にとつての軽いつて事は普通の人にとつては拷問だよ?」

そんなことないだろ?エリオ達だって出来る

「それは慣れたからですよ?龍也さんの訓練は地獄への直行便ですからね」

「さてとではまた後でな」

「スルーしたツ!」

一夏達の突っ込みは無視して私はのはとフェイトと共にアーリーナを後にした

「で?実際のところどうだったんだ?」

シャワーで汗を流したところで部屋に防音結界を張ってから本題を切り出した

「イギリスで魔力反応があったのでサーチャーで調べた結果。ネクロらしき物を発見しました」

「らしきもの？デクスか？」

ネクロには派生体のデクスと言う、自己再生能力に特化した個体が居る。そのデクスか？と尋ねるとフェイトは

「うーん……私も最初はそうだと思ったんだけど。なんか違うみたいなんだ。とりあえずこれ見てよ」

ノイズの混じった画像が映し出される

「感じはLV2に近いな……」

ネクロはLV1〜LV4の段階で区分される。黒い亡霊のようなLV1に、ボロボロの鎧を身に纏ったLV2、LV2以降は個体差が激しいのでなんともいえないが、人に近いか人から遠くはなれた姿かのどちらかだ。画像のネクロはどちらかというとLV2だが

「首が無いな」

見た目の特徴としては首が無い。その代わりに胸部とクリスタルの様な物がある。恐らくあれが目の代わりなのだろう

「首が無いって言うのは初めてのタイプですね。LV2は基本同じ姿ですよ？」

「ああ、LV3までは意思が無い筈だ。こういう個体は居ない筈だな」

LV3から姿が変わるのは意思を持つからだ。その意思に応じて人型になったり、獣型になったりする。LV2でこうまで特徴が出ると言うのは今までに無いパターンだ

「あと特徴としては身体の即時組み替えですね」

なのはの言葉と同時に画像のネクロは肩の組織を組み替え、キャノン砲に変化した。更には腕が刃になる者や、ミサイルを作り出した個体もいた

「生体兵器としての特徴をより強化したと言う感じだな」

「ええ、私もそう思います。しかし……なんと言うか不気味ですね」

なのはの言いたい事は判る、LV1・2は上位の個体に統率され行動する。デクスは本能に従い破壊を繰り返す、画像のネクロはある程度は統率されているようだが、全部が全部好きかってに暴れ回っている。それは今までのネクロに無いパターンで何処と無く不気味な感

じだ

「うん？待てなのは画像を止めろ」

「えっ？はい」

画像が停止する、4体のネクロの奥に立つ1人の女性がいた

「LV4かな？かなり人に近いし」

「いや、判らんぞ。これはデバイスではないか？」

その女性の身体を覆っているのは騎士甲冑に近い物だった。確信は無いがデバイスだと思う

「デバイスを使うネクロなんかいませんよね？」

「基本使う必要ないはずだ」

ネクロは身体自体がデバイスと言っても良い、態々デバイスなどに魔力を使わずとも、そのまま戦ったほうが魔力効率が良いはずだ

「どうやらこいつが指揮を出しているようだが……何者だ？」

「デバイスを使ってるからネクロじゃないですよ？操られてるミッドの人ですかね？」

その可能性もあるか、しかし私達だけではなんとも言えないな

「とりあえず情報を纏めてジェイルに送っておくか」

戦闘特化型の私達ではよく判らない。ここは専門家のジェイルに任せておこう、奴がわからなくてもジェイルの中に居るヴェノムなら判るかも

「あれ？最初からヴェノムに頼んだほうが早くないか？」

ジェイルのクローンからネクロ化したヴェノムは幹部集団の1人だ。ネクロに1番詳しいのはヴェノムでは？と思いフェイトに尋ねると

「対価として色々されると思うよ？あれマッドだから」

「それもそうだな、藪を突付いてなんとやら。危険を冒すのはやめておくか」

何をされるか判らないので止めておこう。それが良い……私はそう判断してサーチャーの画像をジェイルのPCに送り

「漸くネクロが動き出したな」

「そうですね、やっつとですね」

学生生活と言うのも悪くはないが私達は仕事でIS学園に来て
いる。これで漸く本来の目的が果たされるだろう

「とりあえず、会議は終わりだ。後は好きにしてくれ」

「はい、フェイトちゃんカフェでお菓子でも食べに行こうよ」

「良いねー」

今までの雰囲気は何処へやら、女子高生のノリで出て行くのはと
フェイトを見送り。私はイスに腰掛け

(あの女性……何処かで見たとあるような気がする)

ネクロの奥にいた女性のことかどうしても引つ掛かっていた……

(気のせいかな?)

考えても判らないし、ここは向こうから仕掛けてくるのを待つべき
だ。私はそう判断しコートから読みかけの小説を取り出し読み始め
た……

龍也が辛気臭い顔で小説を読んでいる頃、一夏は首に手を置きこき
こきと鳴らしながら自室に戻っていた

「はー疲れた」

龍也の地獄の訓練の後、山田先生に呼ばれ職員室で書類にサインを
していたのだが。いかんせん枚数が多く非常に疲れた

「ただいまー。あれ? シャルルがいらない?」

男同士という事で現在俺はシャルルと同室なのだが、そのシャルル
の姿が無い一瞬首を傾げたが。すぐにシャワールームからの水音に
気付く

「ああ、シャワーか……そっぴやボディソープが無かったな。持つ
ててやるか」

予備のボディソープを取り出し、俺は洗面所に向かった。それと
同時にシャワールームの扉が開いた

「ああ、丁度良かった。これ替えの……」

「い……い……いち……か?」

「へ……?」

シャワールームから出てきたのは見たこともない女子だった。突

然の事に俺は視線を逸らさないといけないと判っているのに。その女子の裸体に目を奪われていた……

「きゃあッ!？」

先に再起動したのは女子のほうだった。慌ててシャワールームに引つ込み。扉を閉めるその音で俺も再起動し

「えーと……ボディーソープ、ここに置いておくから」

「う、うん」

ボディーソープをシャワールームの前に置き、俺は洗面所から出た「えーと……俺はシャルルと同室で、今シャワールームに居るのは女子……あれ?なんで?」

何故ここに女子が?つていうかあれは誰だ?ブロンド?……さっきのはシャルル?普段縛ってる髪を解けばあんな感じだろうか?……じゃあ今のシャルル?俺がぐるぐると考え事をしていると

「あ、上がったよ」

「お、おう」

背中越しに掛けられた声に頷き、俺はゆっくりと振り返った。そこには女子がいた……

「えと……なんで男の振りを?」

何も話さないわけにはいかないので俺がそう尋ねるとシャルルは気まずそうに

「それはその……実家のほうからそうしろって言われて」

「実家ってデュノア社の……?」

「そう僕の父がその社長。その人のからの命令なんだ」

シャルルは凄く辛そうな顔をしながら

「僕は……愛人の子なんだよ。お母さんが死んでから引き取られてそこでIS適正が高いのが判って。そのままテストパイロットをやる事になったんだ……」

言いたくない事であろう話をしてくれるシャルル。

「デュノア社でも第3世代型のISを開発してるんだけど、データも時間も不足してた。中々形にならなかつたんだ。それで政府からの通告で予算の大幅のカット。そして次のトライアルで選ばれなかつ

たらISの開発許可を剥奪するって流れになったんだ」

「それと男装に何の関係が？」

デュノア社の今の状態は判った。だがそれと男装に何の関係が？と尋ねるとシャルルは

「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔……それと織斑一夏と八神龍也のISデータの取得。僕はあの人にデータを盗んで来いって言われてIS学園に来たんだ」

凄く辛そうに言うシャルル……俺はやるせない怒りを感じていた。そして気が付いたら俺はシャルルの目を見て続けざまに言葉を投げかけていた

「親がいなければ子供は生まれない、けどな！その子供の生き方を好きにして良いわけがないだろツ!!!シャルルお前はお前の好きに生きれば良いんだツ!!!」

「どうしたの一夏？変だよ？」

困惑しながらそう言うシャルルに俺は

「俺は……俺と千冬姉は親に捨てられたんだ。だから親だからって子供の生き方に関わる奴が嫌いだ。シャルルはシャルルだ。お前の生き方はお前が決めれば良い！誰にもお前の生き方を邪魔する権利は無い!!!」

「一夏……」

シャルルみたいな善人がそんな目にあうのは間違っている。誰にだって幸せになる権利はある!!生まれがどうだとかそんなのは関係ない!!

「でも僕には選ぶ権利が無いんだ……でもそう言ってくれてありがとう。凄く嬉しいよ」

力なく微笑むシャルル……その笑みは痛々しくそして悲しい笑みだった。その笑みを見た瞬間俺は考える事も無く口を開いていた

「特記事項第21、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる。国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意の無い限りこれらの外的介入は原則として許可されないものとする」

これだ！これが使えぬ。暗記していた文章がすらすらと言えた。

「この学園にいれば3年は安全だ。それだけ時間があれば、何とかする方法だって見つけれられる。俺だけで無理なら龍也に力を借りる。きつと龍也も協力してくれるはずだ……だからそんな顔しないでくれよ」

俺には力もないし、何の後ろ盾も無い……本当に力の無い唯の子供だ、だけど友人の1人を救うくらいのはある筈だ。3年と言う時間の中でシャルルを救う方法を見つけてみせる。

「ふふ……ありがと一夏」

シャルルが楽しそうに笑う。それは屈託の無い15歳の女子そのものだった

「まあ……そのあーだこーだ言ったけど、決めるのはシャルルだ。俺の言った事も選択の1つとして覚えててくれよ」

「うん、ありがとう。そうするよ」

何か気まずくて切り上げてしまったが、もつと何か言っただけでよかったかもと後悔していると

『一夏さん？いらつしやいます？夕食をまだ取られてないようですか。宜しければご一緒はどうですか？』

廊下からセシリアの声がする

「不味い……今部屋に入られると不味い……シャルルちよつと行ってくる。帰りに何か貰ってくるから！」

「あ……うん。判った」

少し寂しそうに言うシャルルの声を聞きながら。俺は部屋を後にした……

「幸せになる権利か……」

一夏の居なくなつた部屋で僕は一夏に言われた言葉を思い返していた。

「あんなこと言われたこと無かつたなあ……」

僕は一夏に嫌われると思っていた、でも一夏は僕の手を掴んでくれた。助けてほしかった、ずっと1人で寂しかった僕に手を差し伸べて

くれた。そして幸せになる権利があると云ってくれた……

「欲しくなっちゃたなあ……」

生来シャルル……いやシャルロット・デュノアは独占欲が強い。だが母が死んで、デュノア社に引き取られてからの辛い生活で己の心に蓋をして暮らしていたせいで、それは自分でも知らぬうちに心の奥底に封じ込めていた。

「……くすくす。欲しいなあ……一夏が」

初めて感じるこの感覚がどうしようもなく心地良い……唯純粹に一夏が欲しい、その心を手にしたい……それだけが僕の心を埋め尽くす。凄まじいまでの幸福感と渴望……唯一人の人間がどうしても欲しい……初めて感じた狂おしいまでの感情の高ぶり、それはとても心地良く僕の身体を支配する……

「うん、僕は幸せになるよ。君を手に入れてね」

くすくす……狂おしげにしかし楽しげな笑い声は一夏が戻るまで止まる事は無かった……

第23話に続く

第23話

第23話

待ち合わせの時間より大分遅れてしまい、若干早足で私は待ち合わせのバーに向かった

「千冬こっちよ」

「どうもお待たせしました」

ひらひらと手を振る椿さんの所に向かう。周囲には誰も居ないその席に腰掛ける

「随分遅かったわね。どうしたの？」

「少しばかり情報の整理をしていたもので」

ふーんと言いながらカクテルを煽る椿さんに

「酔ってませんよね？」

「こんなのジュースと一緒に。こんなので酔い潰れはしないわ」

そうは言うが椿さんの飲んでいるカクテルはかなりアルコール度数の高い物の筈だが

「まあとりあえず千冬も何か頼みなさいよ」

「では黒ビールでも」

ウェイターに注文をし、持って来ていた鞆から書類を何枚か差し出す

「これがIS学園に提出された八神龍也の周辺の書類です」

「ふーん」

パラパラと書類を見ている椿さんを見ると

「お待たせしました、ご注文の黒ビールです」

「ありがとうございます」

ウェイターが運んできたビールを飲もうとした所で

「この私立聖祥大附属小学校って存在しないわよ？調べてみたけど巧妙なカモフラージュで存在してるように思わされたけど……実際は何処かのPCが処理して存在するように偽装してたわ」

「やっぱりですか？」

私と同じ結論を出した椿さんにそう尋ねると

「ええ、存在しない学校を卒業したと言う3人組。私としては亡国企業の可能性が高いと思うんだけどね」

「ですがそれでは辻褃が合いませんよ?」

仮に八神達が亡国企業側だと想定すると、辻褃の合わない事が多すぎ

「簪ちゃんのISを組み上げて、一夏君達を鍛える意味が無い物ね。何の為にそんな事をしてるのか全く理解できないわ」

そうそれだ。仮に八神達を亡国企業側の人間と仮定すると。八神達の行動は全く理解出来ないのだ。敵を態々鍛える価値は無いし、ISの調整を手伝う理由も無い

「全く何を考えてるか判らない人間ほど怖いものは無いわね」
「全くです」

私が頷くと椿さんは

「まあ、千冬の場合、愛しい弟が離れて行くのが怖いだけみたいだけだね」

「ぶふおー!げほっ!ごほごほっ!!!」

突然の言葉に驚き思わずむせて咳き込む

「な、何を言ってるんですか?」

「あら違うの?超ブラコンの織斑千冬?」

ぐぐぐぐ……あながち違うとも言えないのでなんとも言えない

「貴方のあり方は間違ってるとは思わないけどね。唯一人の肉親を大切に思うのは当然よ。まあ行き過ぎるのはどうかと思うけど……」

「良いじゃないですか、私は一夏が大切です。何よりも貴方も似たようなものでしょう?」

違いないわねと苦笑しつつカクテルを煽る、椿さんは

「ふう……何かこう私の知らない所で動く闇がどんどんエリスに近付いてる気がするのよね」

「判ります。私もそんな嫌な予感が何時まで経っても消えないのです」

どの国も伏せているが、最近元IS操縦者や最新型のISの操縦者

の失踪事件が多発している。表向きは療養となっているが、実際はどうだか

「イギリスがもう1人代表候補生をIS学園に編入するって言うのは聞いてる?」

「ええ。確か今日聞きました。それが何か?」

ビールを飲みながら尋ねると

「イギリスの最新機「サイレント・ゼフィルス」とその操縦者が行方不明になってるの。言いたい事は判るでしょう?」

「襲われたのですか?イギリスの研究所が?」

「まだ公表されてないけど。一昨日の深夜、亡国企業と黒い亡霊に研究所が襲撃されたらしいの。死者・負傷者含めて170名。その内60名は死亡してるわ」

そんな事件があったのに何故イギリスはその事を教えない?

「公にはISの暴走事故ってことで処理してるみたい。生存者全てに緘口令が引かれてるわ」

「何故その事を教えないのですか?」

私がそう尋ねると椿さんは

「何処の国も信じないでしょう?黒い亡霊に襲われたなんて」

「それは……そうでしょうね」

そんな事を発表しても何処の国も信じないだろう。だから事故と
言う形で処理をしたのか

「今の所黒い亡霊と遭遇したのは、イギリスとドイツの2国だけ。それを除けば……後はうちの旦那と貴女くらいでしょ?」

「ええ、そうなるでしょうね」

私は前回のモンドグロツソの時に黒い亡霊に襲われ、黄金の騎士に助けられた。だがその事は誰にも話していない、どうせ誰も信じないからだ

「その時からよね?貴女が一夏君を傍に置いて置こうとし始めたのは」

「ええ。正直……怖いんです。もしまた黒い亡霊に襲われた時に、私は一夏を護れるのかと」

私がああな事を思い出したのはモンドグロツソ終了から半年後の事だった。唐突に思い出したのだ自分と一夏が死に掛けた時の事を……不思議と黄金の騎士の事は思い出せなかったが、黒い亡霊のことだけは鮮明に思い出せた。怖かった……ただ一人の肉親が死に掛けるその時の事を思い出すだけで身体が震えた……夜中にその時の事を思い出し、一夏が息をしてるかどうか？何てくだらない事を確かめた事もあった……それほどまでに恐ろしいのだ。あの黒い亡霊の存在が……

「貴女ほどの戦士が恐れるなんてね……」

「あれは本能的な恐怖の塊と言っても良いですからね」

あれは人間とは根本的に何かが違う、それだけは確かに感じた……私個人の意見としては黒い亡霊より、黒い悪魔と言うほうがしっくり来る気がする

「ふう……ならやっぱり私もIS学園に居たほうが良いかもね」

「IS学園に？……どういうことですか？貴女はフリーのIS研究者じゃないですか？開発中のプロジェクトはどうするんですか？」

確か椿さんはオートクチュールとは違う自立式の強化パーツの開発をしていたはず、それはどうするのか？と尋ねると

「データだけならIS学園で作れるし、それにIS学園で組み上げれば公表の義務も無い。それにエリスちゃんを近くで護れると。1石3鳥じゃない。もう轡木さんに頼んでIS学園に臨時講師として働く事にしてるわ」

なんとまあ思い立ったらすぐ行動の椿さんらしくて思わず苦笑する

「笑う事無いじゃない、それだけエリスちゃんが心配なのよ、あの子は自分の生まれを知ってるわ、もしもあの子の心を壊すだけの事があつたらと思うと近くに居てあげたいのよ」

超極秘事項として一部の教員にのみ教えられている、エリス・V・アマノミヤの秘密。それは確かに15歳の女子が背負うには重すぎる

「そうですね、それが良いかもしれませんね」

「そう言うこと。じゃあ今日は私の奢りでじゃんじゃん行きましよう!!すいませーん!今日のオススメとカクテルお代わりお願いしまーす」

「急に元気になりましたね」

「まあね、気分転換が大事なのよ。暗いことだけ考えてても良い事無いしね」

にっと笑う椿さんに思わず苦笑する、自分とは違い切り替えが上手くて本当に羨ましい。私はそんな事を考えながら残りの黒ビールを飲み干した……

「サイレント・ゼフィルスの奪取に加えて操縦者の死亡。頭の痛い問題ばかりだ」

「ええ、念のために増やしておいた警備も何の役にも立ちませんでしたね」

「そう言うな。普通なら充分な警備体制だった。ラファール2機とサイレント・ゼフィルス。充分すぎるほどの備えだった。予想外だったのは黒い亡霊の襲撃だ」

そう言いながら書類を読み上げる。黒い亡霊、下記をゴーストと呼称する。再生能力と身体の即時変換によるマルチ対応の謎の生物。機械と生物の中間のような存在

「このままでは次期イグニッションプランの試作機制作に支障が出ますよ」

「判っている。予定とは違うがIS学園に保護要請と共に、ヴィクトリア・スミスの編入を頼んだ」

「通ったのですか?その要請が?」

不思議そうな顔の副官に

「ああ、私達の知りえたゴーストの情報の全ての提供の代わりに編入を受け入れてもらった」

「そうですか……ヴィクトリア嬢には既に話されたのですか」

「ああ、今日の昼に通達として使いを出した。ヴィクトリアの了承の

意もちゃんと聞いている。勿論それなりの条件を出されたがな」

行くのは構わない、だが条件があるとヴィクトリアは言った、その程度の事で了承を得れるのならそれくらいの条件は飲む

「条件？何だったのですか？ヴィクトリア嬢はイギリスを出るのを嫌がっていましたがそれと関係あるのですか？」

「ああ。彼女にとってはそれが気掛かりで本国を出るのを嫌がっていたんだ、本来ならセシリア・オルコットと同時にIS学園に行つて欲しかったものだよ」

ヴィクトリアはセシリアとはタイプが全く違う、ブルーティアーズモデルを駆る優秀な操縦者だ。

「そうですね、射撃型と近接型の両方のデータが取れますしね」

「まあそれもあるが、それだけではないさ」

私が思うにヴィクトリア嬢の世界は狭い。その世界を広げるためにもIS学園に向かつてもらいたかったのだ

「それでは出発の日時を連絡しておきましょうか？」

「いや、明日で良いさ。彼女も別れを告げたい人が居るだろうしな」

私はそう呟き窓の外を見つめた……

私は若干憂鬱な気持ちで家へと戻った。

「ただいま帰りました」

「おかえり、ヴィ。今日の訓練はどうだった？」

私を出迎えてくれたのは父の、ジョージ・スミスだった

「はい、特に問題なく終了いたしました。父上様」

「ははは、僕は様なんて付けられるほど偉くは無いけどね」

穏やかな笑みを浮かべる父上様、偉く無いと言うが私にとっては誰よりも尊敬できる偉大な人だ。スミス家は決して裕福な家庭ではなかった。それを一人で支え私をここまで育ててくれた父は誰よりも強く優しい自慢の父親だった

「さ、お風呂に入ってくると良い、その間に僕は夕食の準備をしておくよ」

「いえ、私が用意をしますので父上様はお休みになられていてもいいのですよ?」

「家で1日ごろごろしてるだけなんだ、仕事を終えて帰ってきた娘を苦労位はやらせておくれヴィ」

にこにここと笑う父上様の髪は全て白髪だ。まだ40を過ぎたばかりなのに鮮やかだった金髪は既にその色を失っていた。私を育てる為は無茶をし続けた父上様の体はボロボロだった。そんな父上様の背中を見ていた私はこう思う、今は女尊男卑で立場の弱い男が多いが、父上様は違う、どんな時も誇り高く、強かった今の時代にも強い男は居ると思っていた。だが実際は違った。入った軍の上官も私の様な小娘にペコペコと頭を下げ、媚をへつらう……私はそれがいやだった。そんな男と自分の自慢の父が同じ人種だと思ふ事すら嫌で仕方なかった

「ヴィ?どうしたんだい?気分でも悪いのかい?」

「あ、いえ。考え事をしていただけです、ではお言葉に甘えさせてもらって良いですか?」

「勿論さ。ゆつくりお風呂に入っておいで」

笑顔で言う父上様に頷き私は風呂場に向かった

「今上がりました」

「そうか、丁度良かった今準備が終わったところだよ。さ、一緒に夕食にしよう」

にこにここと笑う父上様に頷き私は椅子に座った

「?今日は何かのお祝いの日でしたか?」

テーブルには私の好物ばかり並べられていた。だからそう尋ねると父上様は

「聞いたよヴィ。明日日本に発つんだらう?だから激励の意味を込めて腕によりを掛けさせてもらったんだよ」

その言葉に私は内心舌打ちをした、自分で言いたかった……私は日本に行くとその勝手に伝えた上層部の連中に腹が立った

「日本には確か友達のセシリアさんが居たんだったかな?」

「別に私とあいつは友達という訳ではないですよ?」

私はあいつを好きにはなれない。セシリアは男を完全に見下し私の父を馬鹿にした。故に私はあいつとは仲良くなれない

「そう言うものじゃないよ？ ヴィ。同郷の人同士仲良くしておいたほうが良い」

「それでも好きになれない物はなれないんです」

幾ら父上様の言葉でもこれを変える事は出来ない

「やれやれ、ヴィは頑固だな。一体誰に似たんだが」

「私としては父上様だと思いますが？」

母は既に死去しあつた事がない。話によると優しい人だったらしいが詳しい事は知らない

「はははーこれは一本取られたな」

からからと笑う父上様……暫くはこの笑みを見ることは出来ない。しっかりと胸に刻んでおこう

「ご馳走様でした」

「うん、美味しかったかい？」

「はい、とても」

どんな高級店の料理よりも私は父が作ってくれた料理のほうが良い、私にとっての最高のご馳走だからだ

「父上様、私は明日日本に発ちます。暫くお会いする事は出来ませんがお身体には充分気をつけてください」

「大丈夫、大丈夫！ 最近は調子も良いんだから」

そうは言うが父の身体の調子は芳しくない。心配するなと言うのは無理と言うものだ

「父上様……私は」

本当なら日本になど行きたくはない。身体の調子の悪い父をイギリスに置いて行くのは正直不安で仕方ない。

「ヴィ、君は本当に僕には勿体無いくらいの娘だ、頭も良くて気立ても良い。今もこうして僕の事を心配してくれている。でもね、僕なら大丈夫。ヴィはヴィの行きたい道を進みなさい。僕の事は心配しなくて良い。君は何も心配せずにIS学園に行きなさい、そしてそこで広い世界を見てくると良い。そして3年の時間の中で成長した君を僕

に見せて欲しい」

私の考えている事などお見通しなのかそう笑う父上様。ここで日本に行きたくない等と言う我侭は言うものではない。私が言うことは1つだけ

「はい！行つて参ります」

「うん、それでこそ僕の自慢の娘だ」

やはり貴方は私にとって何時までも尊敬できる、強い父親だ……ならば私はその強い父の娘として強くあろう。

「ヴィクトリア嬢、向こうの空港でイギリス大使館の人間が待っている、そこでその人に指示を聞いてIS学園に向かつてくれ」

「判っている、何度も言わなくても理解している」

父は見送りにこなかつた。きつと情け無く泣いてしまうかもしれないから、来ないでくれと頼んだのだ

「それではな。日本での活躍を祈っている」

「そんな事言われるまでもない」

私はそう言い放ち飛行機に乗り込んだ

「やはり、会つて行くべきだったか……」

ゆっくりと滑走路に向かつていきながらそんな事を考えていると

「父上様!？」

窓の外から手を振っている父上様を見つける。手を大きく振りながら何かを言っている

「きをつけて……はい。父上様もお身体にお気をつけて」

口パクの父上様の言葉に頷き、私の乗り込んだ飛行機は日本に向かつて飛んで行つた……

第24話に続く

第24話

第24話

最近気になる事がある、これを鈴に報告するかどうか……私は真剣に悩む事となった。

「全く、一夏は駄目だね。もつとちゃんとしないと」

「んん？ おお悪い」

あれやこれやと一夏君の世話を焼くシャルル君の事だ、甲斐甲斐しい妻のような感じで一夏君に構っている

(私は興味ないけどあれがBLって奴？)

一部の女子に莫大な人気持つBLと言う奴なのかもしれない。現にそう言う趣味の女子は鼻息荒く2人を見ている

「シエン、私は一夏を叩きのめす権利があると思うのだがどうだろうか？」

「箒、落ち着こうよ」

血走った目で木刀を構えようとする箒を嗜める。ここで止めないと血の雨が降りかねない。すると箒の視線に気付いたシャルル君はふふんと勝ち誇った笑みを見せる、それはもう完全に箒を馬鹿にするような笑みだった

「くっ、何かムカつく」

「落ち着こうねっ？ 大丈夫一夏君はノーマルだよ」

私は鈴の味方のはずなのに、どうして箒のフォローをしてるんだろう？ やっぱり鈴の言うとおり私はお人好し属性なんだろうか

「あれ？ セシリアは？」

「うん？ 居ないのか？」

普段なら箒と一緒に暴走するセシリアの声がしない事気付き、辺りを見回すがセシリアの姿がない。箒もそれに気付いたのか辺りを見回している。

「おかしいなーセシリア何処行っただろ？」

箒とそんな話をしていると予鈴が鳴る。それから暫くし教室の戸

が開いた

「ああ、ここね」

誰？私が思わず首を傾げた、次は織斑先生の授業の筈だが、入ってきたのは見たこともない女の先生だった。フオーマルスーツに白衣と言う目立つ服装に長いロングストレートの黒髪の一部に銀のメッシュを入れた綺麗な人だった

「ツバキさん!? どうしてここに!？」

私達が首を傾げているとラウラが立ち上がりその女性に近寄る

「はい、ラウラ元気そうね」

「あ……はい。私は元気ですが。あの何故ここに？」

「後で教えてあげるわ。今は席に着いてなさい」

織斑先生と違う優しい声色だが。その声には妙に迫力があり思わず従ってしまいそうな感じになる

「ツバキさん、勝手にうるつかれては困ります」

「あら、早かったわね千冬。巻いたと思ったのに」

「大方ここだと思ってきましたから」

はあつと溜め息を吐く織斑先生、しかし織斑先生が敬語を使うとはこの人は一体？私が首を傾げていると本鈴が鳴る。あちやーセシリア遅刻か？私がそんな事を考えながら椅子に座ると

「ねえ？千冬。あそこの席空いてるけど遅刻？」

「オルコットは少々用事でIS学園の外に居ます。戻ってくるのは昼前かと」

ふーんと白衣の女性は頷き、黒板に名前を書き始める

「今日から臨時講師としてIS学園に来た。ツバキ・V・アマノミヤよ。ISの整備と近接戦闘には自信があるから判らない事はドンドン聞いてね」

にこつと微笑むツバキ先生は教科書を見て

「あー私こういうの使うの駄目だわ。教科書ってあんまり意味無いわよね?..」

「あの。そう言う発言は困るんですが?..」

「良いから良いから、はい、皆教科書は仕舞ってね。こんなの殆ど役

に立たないから」

「こんなの呼ばわり？ 一体この人は？ 私含め皆が同じ事を考えている事に気付いた、織斑先生が」

「ツバキさんはフリーのIS研究者だ、それにこと近接戦闘においては私より強い、皆敬意を払うように」

織斑先生より強い？ 嘘……私達の目が点になっていると

「いやねえ。私ももう30後半よ？ 20代前半の千冬には勝てないわよ」

からからと笑うツバキ先生。えっ？ いま30後半って言った？ ともそうは見えないくらい若いけど……

「さーてまずは近接戦闘の講義を始めましょうか。わからないところは質問してね。後急いでメモしないとドンドン消すからね」

そう言つてツバキ先生の授業が始まった

「はい、メモしたわね。消すわよー」

「ちよつとまってくださいー」

ドンドン理論を説明し黒板に書いていくが、それは2分と経たず消されてしまう。どれもこれも重要なので皆必死でメモを取る。何時もの倍くらいはメモを取った気がする

「はい、今日の授業はここまでにしようかしら」

残り5分のところで授業を終るといったツバキ先生はイスに腰掛け

「何か質問があるなら聞くけど？ あ、後仲良くなる為に授業の事じゃなくても良いわよ？」

ツバキ先生がそう言うとい人の女子が手を上げた

「はい！ ツバキ先生の若さの秘密って何ですか！」

「ははは、行き成り授業関係無いの来たねー、まあ良いけど。私の若さの秘密は簡単♪ 愛しい旦那と愛しい娘が傍に居てくれるのが一番若さを維持する秘訣よ。と言っても判らないだろうから……貴女もいい人を見つけると判るわよ。ん？ チャイム鳴ったわね。じゃあねー」

チャイムが鳴るとツバキ先生はパタパタと出て行ってしまった。

「また勝手に！ 職員室に顔を出してくださいー」

慌てて織斑先生が追いかけていくのを見ながら、私は
(ツバキ先生ってどつかで聞いた気がするんだけど……)

暫く何処で聞いたのか思い出そうとしていたが思い出せなかった
ので、まあ些細な事だと割り切り私は鈴の所に向かった

(一夏君がBL趣味の子に狙われてるって教えないと)

あのさっきのシャルル君の笑みは危険だと思った、これは早い内に
手を打っておいたほうが良さそうだ。一夏君が毒される前に手を打
とう

私はそんな事を考えながら教室を後にした……

IS学園の外れの小さなコテージの中で

「ねえーシエルニカちゃん、私何かエリスちゃんにしたかなー？なん
か避けられてるんだけど」

「ツバキさん、とりあえず自分が何をしたか考えようぜ？」

ザツザツとフライパンを振りながら言う、

「えーと、エリスちゃんに可愛い服送ったのが駄目だったのかしら？」

「ちげーよっ！八神龍也がファントムタスクかもってメール送ったの
が気に食わないんだよ！エリス様はー！」

見当違いな事を言うツバキさんにそう言う

「うーそれ？それが原因なの？」

「だと思っぜ？エリス様は相当八神龍也に入れ込んでるからな、ほい
！出来たぞ」

刻んだ焼き豚とネギと卵のチャーハンとスープを皿に入れてツバ
キさんの所に行く

「だっつゝエリスちゃんが心配だっただけで……悪意はなかったの
に」

「あーとりあえず飯にしよう」

ぶつぶつと呟いているツバキさん、この人のエリス様への溺愛具合
は知っているが、無視された位でここまで落ち込まなくても

「ほらー！今日の夜にでも話をして見たらエリス様も機嫌を直してくれ
るって」

「そうかなー」

「そうだって、エリス様もツバキさんの事好きだから。きっと時間が経てば許してくれるって」

励ますとツバキさんはそれもそうねと身を起こしチャーハンを食べた

「あー美味しいわね、これコツとかある？」

「チャーハンは炒めるくらいしかコツなんてないけど？」

「やってみただけだね、まる焦げになっちゃたの」

この人は本当IS以外の事はまるで駄目だな、こんなだからエリス様の方が料理上手なんだよな……

「はいはい、じゃあIS学園に居る間は何か簡単な料理なら教えるよ」

「あー、ありがとう、シエルニカちゃんは頼りになるわねー」

はいはいと返事を返し私も昼食を再開した

「んで？どうしてここに来たんです？」

「んー学園内での八神龍也の動きを監視しようかなーって思ってたね」

一応あつちこつちに監視カメラをつけているのでここでモニターできるが

「まだ疑ってるんですか？八神龍也がファントムタスク側って」

「ううん。違うわ。アイアスちゃんの送ってくれた戦闘データ見ただ、あれは人を護る剣よ、誰を傷つける剣じゃない」

きっぱりと断言したツバキさん、ではどうして八神龍也を監視するのか判らず私が首を傾げていると

「ファントムタスクではないのは確信したわ、でもそれと同時に彼が何者か判らない、だからそれを調べる為に監視するのよ。で？今八神龍也はどこ？」

「あーと、整備室みたいだな、お嬢とエリス様も一緒みたいだ」

「いくわ、大事な娘に悪い虫がつくまえに排除するわ」

「ダーツ！落ち着いてください！またエリス様に嫌われますよ！」

「そ、それもそうね」

シヨボーンとした様子でモニターの前に座ったツバキさんと共に八神龍也の監視を始めた

〜2時間後〜

「どこも怪しいところなんてないですねー」

「いえ、怪しいところならあるわ。彼の整備の技能は高すぎる。エリスちゃんも簪ちゃんが見てない隙に一気にプログラムを組んで。弐式に組み込んでるわ」

そういわれると一気にコンソールを叩くスピードが増してるところがあるなあ

「本当に何者かしらね。彼……」

「あつ、整備終るみたいだな。エリス様達と別れて自室に向かってますよ」

「そう見たいね、うん。じゃあ私はエリスちゃんのところに行くから。あとよろしくー!」

ピューと走っていくツバキさんを見ながら私は大きく溜め息を吐き

「はあーなんか疲れた。夕食の準備でもするか」

もう直ぐフレイアとアイアスが戻ってくる。それまでに夕食の準備をしようと思ひ。私はモニターの前から離れた

「遅くなりましたわね」

私は日が暮れる少し前にIS学園へと戻ってきた。本国からの指示で空港にヴィクトリアさんを迎えに行ったのだが。予想以上に時間が掛かってしまった。その理由は

「やはり日本製の服のほうが良いな」

「そうですねか……」

私服が無いとかでそのまま街に行くと言って聞かない、ヴィクトリアさんに振り回されたからだ

「さてとでは私は行く」

スタスタと歩いて行くヴィクトリアさんに

「お礼くらい言えないんですか!」

案内をしたのだから礼位言ってくれたっていいはずだと思ひそう

言う

「別に私が案内しろと言ったわけではない。だからお前に感謝する必要はない。それに私達は同じ国の代表候補として競い合う立場の間だ。必要以上に馴れ合う気は無い」

ぐう……この人は本当に……今思えばこの人とは本国に居た時からそりが合わない。彼女は近接先頭においては私より実力者だ。だが射撃線では私のほうが上。何度か対戦したから良く判っている、コンビを組めばお互いの欠点をカバーし合えるが、どうしてもそりが合わないのだ

「そういえばセシリア」

「なんですの？」

思い出したように振り返るヴィクトリアさんに尋ねると

「八神龍也と織斑一夏、どっちが強い？」

「質問の意味が判りませんわ」

本当は彼女が何を言いたいかわっているが、業とどぼける。彼女は貪欲なほどに力を欲する、ここで下手な事を言えば一夏さん達に迷惑がかかると思ったのだ

「まあ良いか。どの道、織斑一夏。八神龍也の2人と戦うつもりだからな」

しれっとそう言い放ったヴィクトリアさんはそのまま今度こそ振り返らず、歩き去った

「はあ………よりによってヴィクトリアさんですか。私彼女苦手なんですけどね」

どうも彼女の雰囲気は苦手だ、何処までも鋭い刃のような彼女はもうも苦手なのだ

「まあそうも言ってられないですわね。夕食にでもしましょう」

朝食食べたきりなので正直空腹だ。少し早い食堂に行くとしよう

「おっ？セシリアか？」

「い、一夏さん」

食堂に向かっていると一夏さんにばったり会いました

「俺さ今から食堂行くんだけど。良かったら一緒にどうだ？」

「あ、はいー」一緒にします」

今日1日ブルーな気分だったが、一夏さんから食事に誘われたという事で一気に幸せな気分になり。私は一夏さんと共に食堂に向かい

夕食を一緒に食べた、席が思いのほか埋まっており向かい合って食事にしたのだが

「ん？セシリアソースついてる」

さつと何気ない素振りでも口元を拭われ、一気に心臓が高鳴り結局その日の夕食に何を食べたかと言うのはうろ覚えとなった……ただ一夏に口を拭われたと感触だけはしっかりと覚えていた……

「はい」

「誰だ。お前？」

自室でくつろいでいると突然扉が開き、見知らぬ女子が入ってきた「私？私は更識楯無。2年で生徒会長ね。初めまして悪を立つ剣さん？」

パンと扇子を開いた楯無、笑みこそ浮かべているがその雰囲気は一般の生徒からかけ離れている

(直接アプローチを仕掛けてきたか。だがこいつは私を何時も監視してる奴とは違うようだが)

「今時間いいかしら？少し話をしたいのだけど？」

「構いませんよ、ここにですか？」

態々なのはとフェイトの居ないタイミングで来た。これは明らかに私が1人の時を狙ってきたとしか思えない、この時点でこの楯無と言う女性徒の思惑とおりになって居るだろう。このまま相手の思惑通りに事を進められると不味いので、部屋の中に招きいれようと思いきや言ったが、楯無はにこやかに微笑みながら

「いえ、私の部屋にしましょう。部屋に紅茶とか用意してるしね」

態々乗り込んできてそのまま話をするほど馬鹿ではないか……向こうは向こうで探りを入れに来たのだろう。私達の正体がばれる可能性は0だが、探られるのは正直鬱陶しいなら……は

「良いでしょう。どうせ暇ですしお付き合いしますよ」

ここは楯無の誘いに乗ろう、情報を得るにはとき自らを囿にしたほうが効率がいい。

「あら嬉しい♪八神君みたいな格好良い子連れてると目立って良いのよね」

にここにこと笑う楯無に連れられ、私は自室を後にした……

第25話に続く

第25話

第25話

「まあとりあえずそこに座つてよ」

私が部屋の奥のイスを指差すと八神龍也は

「そうですね、立ち話もなんですし」

一瞬考えた素振りを見せたが直ぐに奥のイスに腰掛けた。ここで私が奥の椅子に座るように八神龍也をうながしたのは、いざと言う場合私は逃げ易い位置を確保する為であり。天井裏に待機しているアイアスが行動し易い位置と言うわけで私とアイアスに都合のいい場所だからだ

「今年で最強つて言われてる君と話をしてみたのよね」

「そうですか。学園最強の座を脅かされる事でも危惧しました?」

にやりと笑いながら言う八神龍也に

「あら? 知ってるの? IS学園での生徒会長と言うのは最強と言う称号つて言う事を?」

「ええ。聞いてますよ、まあ自分で最強だのどうだの言う人は酷く幼稚だと思いますがね?」

ぐう……嫌味を折り混ぜてる……多分私の意図に気付きそれでもここに来て居ると言うのは間違いないだろう。

「まあ良いじゃない。強い相手が居ればお互いに切磋琢磨できるでしょう?」

「それもそうですね、目の前に強い相手が居ればそれを越えよう、もつと強くなるうと思う。そう言う面では最強を自負する意味はあると思いますよ。自分にプレッシャーを掛ける意味もありますしね?」

(何この子の目……何でもお見通しとでも言いたいのか?)

その余裕の色を消して崩さない八神龍也に対しての警戒の具合を上げる。ここは確かに私の部屋で天井には息を殺しているアイアスも居る。自分のほうが明らかに有利なのに優位に立ってる気がまるでしない、目の前の男の意図がまるで読めない。まるで深い闇を覗き込んでいるようなそんな不透明さを感じる

「しかし……この部屋はネズミでも居るのですか？どうにも何かの視線を感じるのですが？」

天上を一瞬見てそう告げる八神龍也

(アイアスにも気付いてる!?奇襲は無駄とでも言いたいの?)

あくまで余裕の色を崩さない八神龍也はそのまま、目の前の紅茶を飲み

「しかしですね。私はネズミは嫌いなのですよ、早く何処かに行ってくれると良いんですけどね。落ち着いて話も出来ないうすし」

(遠まわしにアイアスを離せと言ってるのね)

少し考えるアイアスはあくまで念のための護衛、離すかどうか考え……直ぐに判断を下した

(アイアス、撤退して頂戴)

(お嬢様!?!相手の言う事に従うのですか!?)

プライベートチャンネルでそう言うときアイアスは酷く動揺した声で言葉を返すが

(今は情報が欲しいの、ここは八神龍也の言うとおりにするわ)

(わ。判りました……このまま下がります、何かあればご連絡を)

そう言ってアイアスの気配は遠ざかって行った

「ふむ、ネズミは何処かに行ったようですね、これで落ち着いて話が出来ますね、更識会長？」

「ええ。そうね」

これ条件はイーブン、ここで私が八神龍也と話しているのは織斑先生達も知っている。いざとなれば連絡用のスイッチを押せば直ぐに駆けつけてくれる手筈になっているので特に心配は無い

「それで私に聞きたいことは？あつ、お代わり貰いますよ」

特に気兼ねした素振りも見せず目の前のティーポットから紅茶のお代わりを注いでいる八神龍也に

「如何してそんなに強いのかな？って思ってたね。何処かで訓練でも受けたの？」

「別に訓練なんか受けてないですけどね？基本は独学ですよ、ありとあらゆる剣術・武術の良い所を組み合わせてるだけですよ」

組み合わせてるだけと言うが実際はそんな簡単にできることではない。それを何でもないように言う八神龍也に

「へえーどうしてそこまで武術とかを教わったの？」

「強くなりたかった。何者にも屈しない強い力が欲しかった。大切な……自分の命よりも大切な者を護る為に、力を欲したそれだけですよ」

自分の命よりも？あの2人じゃないわよね？要注意人物の高町なのはとフェイト・T・ハラオウンの2人を一瞬思い浮かべたが、イントネーションからその2人ではないと感じた

「まあそう言うわけですよ、私は私の護りたい者を護り自身の正義を貫く為に力を得た。それだけですよ」

「じゃあ、聞くけど？君の正義って何？」

私がそう尋ねると八神龍也は軽く笑いながら

「己の大切な者を護る為なら大を切り捨てる正義……ですかね？」

「大より小を取ると？」

「そうですね？それが何か？だいたい自分の護りたい者を護れずなにが正義か？救えるなら救う、救えないなら救わない。まあ自分の大切な者なら何をしてでも護り抜きますよ？例えその行いが誰かを殺したとしても……私にとってはそれは正義だ」

揺るがない信念そして強い決意の込められた言葉だった

「貴女のような人にはわからないでしょうね？己のために妹を切り捨てるような人間には」

簪ちゃんのことを言われて一瞬頭に血が上るが、紅茶を飲み何とか気を静めてから

「私が簪ちゃんを蔑ろにしているの？」

「違うのですか？簪は助けを求めている、なのに貴女は何もしない。全く持って理解できない行動だ。兄や姉は何をしてでも下の者を守る者、それをしない貴女は正直軽蔑に値する」

「何も知らないくせに良く言うわね？」

「知らないですよ？でもね、簪が助けを求めている事はわかる。そして今の貴女に私は理解できない、そしてまた私も貴女を理解できない。

何故なら貴方の在り方と私の在り方は間逆の物だからだ」

八神龍也はそう言う立ち上がり

「お茶ご馳走様でした、申し訳ないがこれ以上私は貴女に話す事はない。貴女が自身の在り方を代えたのならその時また話し合いの場を設けよう。しかし……」

ここで言葉を切った八神龍也の雰囲気が変わる、どこまでも鋭く研ぎ澄まされた刃のような気配に……その何処までも鋭利な闘気に呑まれその場で動けずに居る私に

「それが出来無いのなら私とお前の道は決して交わらない。そしてお前は心から護りたい者も失い孤独になる、そしてその時に後悔するだろう。どうしてあの時私は行動しなかったのだろうか。そうなら全てはもう戻らない、戻れるうちに戻る事を勧める」

言うだけ言うと八神龍也は私の横をゆつくりと歩きながら出口に向かう。声を掛けようにも言葉が無い、今の私には八神龍也を呼びとめるだけの覚悟が無い。ここで呼び止めたら私は徹底的に言い負かされるだろう、私の間違い指摘される事を恐れ、私は開きかけた口を閉じた

「そうそう、最後に1つだけ言っておこう、私はお前達の敵ではない。今言えるのはそれだけだ、後は時を待て私が何者なのか？何の為にここに来たのか？それは時が来れば自ずと判る。それまでは余計な詮索をしないことだ」

そう言うと八神龍也は私の部屋から出て行った……残された私はイスに腰掛けたまま、八神龍也に言われた言葉を繰り返し思い出していた

時間の無駄か……私は自室に戻りながらそんな事を考えていた。更識楯無との話し合いで何か判るかと思ったが、正直時間の無駄も良い所だった。彼女の在り方は全く理解できない、最強だのなんだの言われ自惚れ、自分の妹が今どんな立場に居るのかも理解していない。(簪が可哀相だな。姉のついで代表候補になっただの、何の実力も無

い癖にとか陰口を言われ続けているのに良く耐える)

10代女子と言うのはどうもそう言うことばかり気にするから良くない、簪が代表候補になったのは実力だと私は考えていた。16歳であれだけISの知識、独学でISを組み上げる技術、それに冷静な判断力に柔軟な発想。どれも突き抜けるだけの才を秘めている、惜しむらくは

(自分には何も出来ないと思いついて入っている点か)

簪は楯無と比べられるのに耐えられなかったのだろう、だから自分はこのままでだと、自分には何も出来ないと思いついて入っている。それが簪の成長を妨げている。だがもしその壁を越えたのなら簪はもつと強くなる。そんな事を考えながら通路を曲がるとそこには

「簪? どうした?」

「あ……ちよつとね……」

簪が通路に背中を預け立っていた。その目は不安と恐怖の色を浮かべていた

「少し話してもするか?」

「あ……う、うん」

こくりと頷く簪と通路に備え付けられたソファアームに腰掛ける

「どうしてあんな所に居たんだ?」

「お、お姉ちゃん……龍也君が歩いてるのを見て……気になつて」

俯きながら言う簪に

「ふむ。お前の心配してるような話はしていない、私は私の意思でお前に協力しているんだぞ?」

「!?……本当?」

簪が考えているのは恐らく、姉に頼まれたから私に協力してくれていると言うところだろうか? だから私と楯無と一緒に居るところを見て不安になったのだと判った。だから安心させる為にそう言う簪は俯いていた顔を上げ私の顔を見る

「本当だ。私は嘘をつかない事を信条にしている、それに私は誰かに言われて動くような事はしない。私は純粹にお前を助けたいと思つたから協力している」

ぽんぽんと簪の頭に手を置きながら言う

「あ……」

「んん？ああ、悪いつい癖だな。すまん、嫌だったろ？」

「……いい、嫌じゃないよ？……えーと、えーと……安心する」

頬を赤らめ嫌じゃないと言う簪はきよろきよろと落ち着き無さそうにしながら

「えーと、明日、式式の飛行テストと稼動試験をするの、見に来てくれる？」

「もうそこまで行ったのか？」

「う、うん。エリスと龍也君のおかげ……思ったより速く形になった。後は稼動データを集めたいの」

嬉しそうに笑う簪に

「そうか、それなら見に行こう。私も式式がどうなったか気になってたしな、何時やるんだ？」

「あ、明日の放課後の……14時から。第6アリーナで」

「14時から第6アリーナだな、判った必ず見に行く」

ぱあつと華の咲くような笑みの簪を見て私は

「ああ、そうだ、良い物をやろう……右手を出してくれ」「？」

不思議そうな顔をしながら右手を差し出した簪の右手首に

「これはな私が作った御守りだ、身に付けてくればきつとこれがお前を護ってくれる。だからちゃんと身に付けておけよ？」

中心に蒼い魔力石を埋め込んだ金のブレスレットを巻いてやる。これは私が得意とするバリア系の術式を組み込んだ簡易型のデバイスといって良い代物だ。衝撃を和らげたり色んな効果を持っている。後基本的にはやて達に渡した物なので見た目もお洒落だ

「い、良いの！？こんな高そうなの」

目を白黒させる簪に

「おう、手作りだから殆ど唯だ。気に入らなかつたら捨ててくれても良いぞ？」

「す、捨てない！だ、大事にする！」

ギョウウとブレスレットを抱き抱えるように言う簪に苦笑しながら

「それじゃあな、また明日」

「う、うん。また明日」

ひらひらと手を振りながら私は簪と別れ自室に向かった。1人残った簪は鮮やかな紅い頬をしながら渡されたブレスレットを見つめ。嬉しそうに笑っていた

龍也がナチュラルにフラグを建てている頃一夏は、夕食後鈴に拉致され人気の無いアリーナに追い詰められていたりする……

「ま、待て！鈴！落ち着け話せば判る!!」

「ふーッ！ふーッ!!」

怒りのあまりか肩で息をし全身から殺気を放っている鈴を説得しようとしていた

「シエンに聞いたわよ……よりによって、よりによって男にだなんて……許さない……あたしに構わないところか男にあれこれやられ嬉しそうにしてるなんて……絶対に許さないッ!!」

濃厚な暗黒瘴気に押されそのまま数歩後退する

(やばい！やばい！鈴は勘違いしている!!)

どうやら俺がシャルルと仲が良いのを妙に勘繰っているようだ。そう男子としてその誤解は致命的な心傷を与える物だ

「よりによって男が好きだ何て、信じられない!!」

「誤解だーッ!!」

鈴に負けない!大声で叫ぶ鈴はシャルルを男だと思っている、だが実は女である事を知らない。そして俺とシャルルが仲が良いその事から、俺に男色の毛があると勘違いし俺をここまで拉致した上で制裁を加えようとしているのだ。

「あんたはあたしのなの。だから絶対に道を踏み外させたりしないんだから」

「いや、鈴さん。誤解です、俺は普通に女の子が好きです」

「あんたがそうでもシャルルに変な道に引きずりこまれる可能性があるんでしようが!!!」

「それは無いと思うんだが?」

「うっさい黙りなさい!!あんたにはちゃんと教えてあげないといけないんだから!……そ、その。お、女の子の身体の柔らかさとか?そう言うのを!!!」

リングかと言いたくなるくらい頬を赤らめた鈴は俺の逃げ道を塞ぐようにじりじりと摺り足で近付いてくる。ハイライトの消えた瞳が死ぬほど恐ろしく、なんとか逃れようと、隙を見て駆け出すが

「甘いわよー!」

「う、うおっ!?!」

俺の進行方向を読んでいた鈴は俺の腕を掴みそのまま流れるような体重移動をし、俺の足を払いそのまま床に叩き付けた

「いってえ……」

受身も何も取れず叩き付けられた為身体中が痛い。その痛みに顔を顰めていると

「ぐはっ!」

無言で鈴が俺の腹の上に座る、完全にマウントポジションを取られた

「あんたはあたしのなの……もうそれは決まりきってる事なの、それなのにシャルルに……男なんかにあんたを盗られるなんて耐えれない!」

ぶつぶつと呟く鈴が恐ろしい、しかも凄まじい力で俺の身体を押さえつけてる、とてもではないが振り切れそうに無い

「だから……印をつけるあんたが……あたしのだって印を……」

ぞくう……俺凄いピンチなんでは?貞操の危機をひしひしと感じる

ガシッ

鈴が俺の服の襟元を思いつきり掴む、そしてそのまま力任せに引つ張る

「ちよっ!?!何してるんだよ!!!」

首元と肩が完全に露出するそれを見た鈴がにやつと笑う。それはもう獲物を見つけた吸血鬼のような笑みだった

「じゃ……じゃあ。その……頂きます?」

「何をする気だお前は!!」

あーんと口を開きそのままゆっくり首元に近付いてくる、これはあれか? 昼ドラとかにあるあれか? ヤバイ!! ヤバイ!! あんなのされた千冬姉に殺される(千冬姉だけじゃなく箒とセシリアにも殺されそう)だが鈴の力は俺を上回っているので力付くで振り解く事も出来ない

(万事休すか!?)

誰かに助けて貰わなければ俺だけではこの状況を打破できない! だが時間が無いもう鈴の吐息が素肌に当たる所まで来ている。俺が目を閉じた瞬間

「私の物に何をしている、化け猫」

「ちい! ブラコン!」

高速の左フックを飛び跳ねるように回避し、獣の様に4つんばいで体勢を整えた鈴がキツと俺の目の前の人物を睨む

「千冬姉……」

千冬姉が俺の前に立ち鈴を遠ざけるように立っていた。流石は千冬姉だ。教員として助けに……

「一夏はね! あんたのじゃないの!! あたしのなのツ!!」

「はっ! 貴様なんぞに一夏はやらん!! これは私のものだ!」

ですよね。千冬姉も基本は鈴側の人間ですよね。

「うっさい! うっさい! うっさい!! 一夏はあたしのなの!! 誰にも奪わせないんだからツ!!」

素早い動きで肉薄する鈴だが

「甘い!」

「ふぎやっ!!」

貫き手のような鋭い鈴の一撃を脇で挟みそのまま投げ捨てるが

「そう簡単には!!」

投げ飛ばされながらも手を突きそのまま体勢を整え、蹴りを放つ鈴

だったが次の瞬間

「うつ……!?!」

「隙だらけだ」

ガクガクと失速し鈴が膝を着き倒れる、何が起こったのか判らず首を傾げていると

「あ、顎を……」

「顎先を打ち抜かれると三半規管が狂い動けなくなる。これでお前の負けだ」

その言葉通り鈴は動けないようだったが、その鋭い眼光で千冬姉を睨んでいる

「ふん、これは連れて帰る」

「あの小脇に抱えるの止めてくれない?」

がっとな脇に抱えられたので一応そう言う

「お姫様抱っこの方が良いか?」

「絶対嫌だ!!それ以前に俺は動ける!」

ジタバタともがいていると千冬姉は溜め息を吐きながら、俺の耳の後ろをついて

「これでも動けるか?」

「な、なあ!?!足が痺れて動けない!?!」

ビリビリと足が痺れまるで動かない、何をしたんだ!千冬姉は

「ふっふふ。動けなければ仕方ないよな?私の部屋で介抱してやろうではないか」

「あんただろ!俺を動けなくしたのは!!って言うかその獲物を見る目は止めてくれ!!」

鈴の比ではない貞操の危機を感じる

「さーて部屋でゆっくり休もうな?」

「ちよつ!待って!お願い!!放して!!誰でもいいから助けてーツ!!!」

俺の悲鳴は誰にも聞き入られる事は無く、しーんと木霊した

「篠ノ之は正拳を全力で打ち込んだし、オルコットは後ろから絞め落とした。ついでにシャルルはアップパーで意識を刈り取っておいた、お前を助けてくれる者は居ないぞ?」

「良いのか！教師が生徒に暴力を振るって!!」

「良いに決まっている、人の物を取ったら泥棒だ。悪党に掛ける情けは必要ない」

「駄目だ！この人教師に向いてない!!」

「仕事より私情を優先、教師としてどうかと思う」

「まあいいさ、私は仕事より恋に生きる」

「弟は恋愛対象に見ちゃいけません！」

「愛さえあれば良いのさ」

「駄目だ！この人俺の話聞いてない!!」

結論から言うと俺はこの後、編隊を組んだ教師陣によって回収された。ただ俺の見る限り7人の先生が千冬姉の狂拳に倒れていた。しかしそれでも俺を助けてくれた教師の皆さんには心から感謝したいと思う、もしあのまま俺が千冬姉の部屋に連れ込まれていたら……俺のENDは実姉ENDに決まっていただろうから……

第26話に続く

第26話

第26話

「じゃあ、今日は3組との合同演習ね。まずは、うん。オルコットさんとスミスさんに模擬戦してもらおうかしら？」

「あの、今日は基礎の予定で」

「良いの、良いの。10の訓練より1の実戦、これは本当の事よ」

織斑先生が振り回されている、何となくだがツバキ先生は私の苦手とするクイントさんやリンディに似ているような気がする

「模擬戦ですか……判りました」

頷いて前に出る3組の代表候補である、ヴィクトリア・スミスを見る。セシリアに聞いた話では、セシリアと同じくイギリスの代表候補で本国にいた時は一緒に訓練を受けていたそうだ。対戦成績は2勝5敗と負け越しているらしい。だがそれは無理も無いかと思う

(シグナムに似ているな)

凜とした雰囲気、鋭利な気配を持つヴィクトリアは何処と無くだがシグナムを連想させた。長い金髪を腰元で結び、他の女生徒より露出の少ないISスーツに身を包んだヴィクトリアはすぐにISを展開した

(ティアーズモデルと聞いていたが。これはセシリアのとは大分タイプが違うな)

セシリアのブルーティアーズより、装甲が厚く赤と金のカラーリングが施されたその機体は騎士の様に見えた

「私が不利だと思うのですが……」

珍しく気弱な発言と共にセシリアがISを展開する。2人がISを展開した所で

「模擬戦開始！」

パンッ!!

ツバキ先生の手を鳴り合わず音と同時にヴィクトリアが動いた

「ふっ」

機体に取り付けられたパーツが分離し宙に浮かぶ

(剣型のビットか？変わった物を装備しているな)

金色が基調で、黒い線が走る両刃剣だった。それが3本切っ先をセシリアに向け滞空する

「行けッー！」

パチンツッ!!!

ヴィクトリアが指を鳴らすとその内2本が弾丸さながらの勢いでセシリアに迫る

「インターセプターッ!!」

小型のショートブレードでそれを弾いたセシリアだが

「遅いッ!!!」

コールされたマシンガンで剣を振り切った体勢のセシリアを撃つ。

ヴィクトリア……タイミングとしては必中の間合いだが

「甘く見ないで欲しいですわ」

小刻みなスラスタ制御と自身の身を捻る事でその弾雨をかわしたセシリアはその勢いを利用して。インターセプターを投擲する

「ちっ」

滞空していた1本を掴み取りそのままインターセプターを弾く

(ふむ、直線だけだが射撃にも使えそのまま近接戦闘にも使えるビットか。これは少しばかり不利か?)

機体の性能面ではセシリアの方が若干不利そうだが

「機体の性能だけでは決まらん。龍也」

「ん？ラウラか珍しいな。どうした？」

珍しく一夏ではなく私の方に来たラウラにそう尋ねると

「お前の分析眼で解説してもらおうと思っただけ。それでお前から見てどっちに分がある？」

「ふむ。正直な話、ヴィクトリアの方が優性だろう。遠距離戦と接近戦両方に対応できるからな」

「確かにセシリアは近接はあまり得意ではなかったな。ではお前の予想ではヴィクトリアの勝ちか？」

マシンガンと両刃剣を巧みに操り華麗なヒット&アウェイをして

いるヴィクトリア。傍から見るとセシリアが押されているように見えるが

「まあ前のままでは負けだろうが……今のセシリアは面白い事をするぞ」

私となのはとフェイトに訓練を受けたセシリアは独自の新しい戦法を編み出していた

「シユートレイン。ぶっつけ本番で成功するかな？」

「するだろうよ。あいつは才能を過信せず、地道な訓練を積んでいる。それは何よりも強い力になるぞ」

何時の間にか近くに来ていたなのはにそう言う、セシリアの地道な努力は実を結ぶ。ふふふ……お前の知らないセシリアの戦法を見て驚くなよ、ヴィクトリア

やはり強い！

私は降り注ぐライフルの弾と時折飛んでくるグロリアス・ヴィクトリーの両方に意識をさきながら。タイミングを計っていた

(全く…あの人たちの考えたコンバットパターンは異常ですわ！)

龍也さんたちに教わったコンバットパターンは成功すれば勝利、失敗すれば自滅という極端な物だった

(でも……勝てるかもというのは頼もしいですわね)

モーシヨンを見せてもらい。自分の目でも確かめたが正直成功する自信はない、だが僅かでもある勝機と言えばこれしかなかった

(弾幕の雨 シユートレイン……賭けて見ますか)

どうせこのままでは負けるならば僅かな勝機に全てを賭けるのも悪くない

(龍也さんや一夏さんと関わっていると考え方が変わるのが不思議ですわ)

前の私だったらこんな無謀な選択はしない。それは確かな私の心境の変化だった

「何を考え込んでいる!!」

「ッ!!」

瞬時加速で切り込んできたヴィクトリアさんの一撃を紙一重でかわし、一気に後退しビットを射出する

「ふん。並行使用も出来ない武器を一斉展開してどうする気だ?」

「ええ、確かに私では全てのティアーズを同時に操作することはできませんわ。貴女と違って」

ヴィクトリアさんは3本までなら自分の行動と共にグロリアス・ヴィクトリーを操作できる、それが私と彼女の差だったでもそれを埋めるだけの一手があれば全て事足りる

「でもそれを補う戦術を教わりましたの」

「ほう?誰にだ」

興味が沸いたと言う表情のヴィクトリアさんに

「さあ?まあ1つ言えるのは魔王に師事するのは命懸けという事ですよ」

は?という顔をする3組の皆さんとうんうんとうなずく1組の皆さんの反応を見ながら。クスリと微笑む

「かわせる物ならかわしてください!」

ブースターを全開にし一気に間合いを詰めながらスターライトを連射する

「はっ!そんなも...正気か!?!お前!」

「勿論正気ですわ!!」

ティアーズに龍也さん達が組み込んだプログラム。組み込んだパターン内で自立射撃を行うプログラム。それに従い私の背後からティアーズのビームの雨が降り注ぐ

(掠った!?!私の頬に掠ってます!?!)

後ろから無数に迫るビームが数発、ティアーズに当たり私のシールドエネルギーを削っていく

(特攻もいい所ですわ!!!)

心の中で龍也さん達に文句を言う、自立だから大丈夫?私に思いつきり当たってます!!絶対当たるように設定してますわこれ!?

「馬鹿か!お前!?!」

「ええい！お黙りなさい!!」

もうここまで来たら最後までやりきるしかない。じゃないと……

(自分のISのビームで蜂の巣ですわ)

ここで止まったりして見ろ。容赦なく自立行動のティアーズのビームで蜂の巣になる。止まる訳には行かないのだ

「接近戦だと！甘く見るなよ！」

このままだと接近戦になる、滞空していたグロリアス・ヴィクトリーを掴んだヴィクトリアさんの前でPICを解除する

「なっ?」

「くううッ!!」

急にPICを解除した事でティアーズが急激に失速し地面に着地……いや墜落する。それを手と足のスラストを手動で操作し無理矢理ヴィクトリアさんの背後に回りながら、腰のミサイルビットを打ち出す

「挟まされた!？」

ビームとミサイルに挟まれ碌に回避などで切るわけがない。直撃を受け爆炎に飲まれるヴィクトリアさんだったが、すぐに飛び出してくる。だがこれは計算のうちだ

「まだだ！まだ……!？」

「チェックメイトですわ」

戻したティアーズとスターライトの銃口がヴィクトリアさんを包囲している。まだ動く素振りを見せるのなら即座に一斉射撃を放てる位置だ

「降参だ」

「そうですね」

ISを解除したヴィクトリアさんを確認してから、私もISを解除し

「貴方は何を考えてますの!!」

「はっはっは!!」

あのプログラムを組んだ龍也さんの胸倉を掴む

「何が大丈夫ですか!!思いつきり当たりましたわよ!!」

「それはお前が未熟だからだ」

くうふう!!それはそうですけど！

「危険性を言ってください!!」

「リスクのない勝利などない。多少のリスクは受け止めたまえ」

「多少!?あれが多少のリスクですって!?止まったら私自分のI Sの武装で蜂の巣になるところでしたわよ!」

がくがくと龍也さんの襟を掴み揺さぶるが。龍也さんは笑っているだけで余計腹が立つ

「あのプログラムを凍結してください!!」

「良いのか?マルチタスクが出来ない以上それに変わる物をとわざわざ組んでやったのにな?使いこなせないから凍結?はっ代表候補生が聞いて呆れるな」

挑発と判っていた。これが私の反骨精神を煽っているのは良く判っていたのだが

「ふざけないで下さい!私はイギリスの代表候補生です!あれくらい使いこなして見せますわ!!」

「そうか、では凍結出来ないようにプログラムを細工しておこう。何があってもこのプログラムは解除できないぞ」

え?ええ!?解除できない!?あの自殺に等しいコンバットパターンが!?

「あのやっぱりもう少し熟練度が「良し凍結完了だ」人の話聞いてます!?!」

プログラムが細工され解除できなくなってしまった……悪魔だ。悪魔がいる……

「悪魔ーッ!!」

「何を判りきったことを言ってるんだ?セシリア。龍也は悪魔だ」
「酷い言われようだ」

からからと笑う龍也さんと一夏さんを見て

「一発殴らせてください!!」

「殴れるものなら殴ってみたまえ」

はははと笑う龍也さんに拳を振るうがかわされ続ける。

「何時までじやれあうつもりだ！授業の進行の邪魔だ」
バシーンツ!!!

いつもの五割増しの打撃を受け頭を抑え蹲る。龍也さんも同じ目にあうのなら帳消しに……

「お前もだ!!!」

パシツ!!!

「ほっ!」

「くっ!」

私は直撃を喰らい、龍也さんがギリギリで白羽取りをしノーダメー
ジだったのが非常に理不尽だと思いました

「手筈通りに頼む」

「はいはい。判ってます」

授業後。私はなのはとフェイトに頼み事をしてから第6アリーナ
に向かった、勿論簪の式式の飛行テストを見るためだ

「ん?なんだエリスも居たのか」

「うん、同じ部屋だし。私も協力したから見ておきたい」

ちよこんと座るエリスを見ながらカタパルトの前で式式のパラ
メータを見ている簪に近付く

「どうだ?上手くいきそうか?」

「た、多分。大丈夫……龍也君もエリスも手伝ってくれたから」

おどおどした様子で喋る簪に

「ふむ。一応私もISを展開しておくか」

「ふえ?」

意味が判らないと言う表情の簪に

「万が一に備えてな。もし途中でスラスターの調子が悪くなったら不
味いだろ?」

そう言う簪はもじもじと落ち着きなさそうに

「そ。それじゃあ……一緒に飛んでくれる?」

「うむ。元よりそのつもりだ。では先に出るタワーの上で合流しよう」

零式を展開しそのままカタパルトに乗り。飛び出し簪が上がってくるのを待つ。

（ふむ。中々の速度だ、それに飛行しながらのプログラムの書き換えか……やはり才ある者は違うな）

努力しても1に届かぬものと努力せずとも1に成れる者の差か……そんな事を考えながら苦笑する。万能だのなんだの言われるが結局の所私は数え切れないほどの修練や実戦の上で得た経験から人並み以上の事を出来るだけであり。天才と言われるものとは違う。まあそう簡単に天才に負けるつもりは無いが、同じスタート位置で始めたとするややはり私は才ある者には決して届かない。その面簪は天才と言える部類の人間だ1を教えれば10を理解する。惜しむらくは自分に自信が無い事だがそれは時と共に解決するだろう

「何を笑っているの？」

何時の間にか近くに来ていた簪にそう尋ねられ

「ん？いや才ある者と無い者の差について考えていた」

「やっぱり……私は才能がないんだ……」

何故か自分の事を言われたと感じたのかしよんぼりする簪に

「違う違う。才が無いのは私の方だ、私は決して一流には成れぬ者だからな。簪が羨ましいと思ったただけだ」

「違う、私には才能なんて無い」

しよぼーんとする簪に

「違うさ。お前には才能がある、後はきっかけがあれば全てが変わるさ」

「そうかな？」

「そうともさ。私が保証しよう」

じーッと私の顔を見ながら言う簪に

「？何か顔についてるか？」

「ち、違うよ！。じゃあ今度は私が先に行くから!!」

そう言うのと降下していく簪の後ろにつき飛んでいると

(む？何かおかしい)

脚部のブースターがぱっぱとちらついている。何か嫌な予感が……

「!?」

声を掛けようとした瞬間、式式の脚部のブースターが爆発し、簪がバランスを崩し落下していく

「ちいッ!!」

舌打ちと共に瞬時加速を使い回り込もうとするが

(ぎりぎり届かん！)

あと1歩届かない、このままでは簪が地面に叩き付けられるようなれば大怪我所の話ではない

(致し方ない。クイックムーブを使うか)

仕方なく魔法を使い加速する。ギリギリのタイミングで簪の下に回りこむが体勢を立て直している時間は無く

「ぐっ!!」

「ああ……」

機体の正面で簪を抱きとめそのまま背中からアリーナの床に叩き付けられる

「だ、大丈夫!?」

心配そうに顔を覗き込んでくる簪に

「問題ない。多少フィードバックがきついただけだ」

身体が多少軋むが問題は無いゆっくりとスラスターを吹かし。身体を起こす

「ご、ごめんね！わ、私のせいで」

おろおろしている簪に

「問題ないと言っている、それより簪は大丈夫なのか？」
結構な衝撃だった。なので簪は大丈夫か？と尋ねると

「う、うん。私は大丈夫だけど龍也君が……」

「こんなの軽い打撲だ。まるで問題ない」

そう言ってから零式を解除し式式を見る

「ふむ。出力のバランスがあつてなかったか。再調整が必要だな」

「う、うん……そうみたい」

しよんぼりしている簪に

「何次がある。そうしよんぼりするな。失敗があるから成功がある次があるさ」

ぼんぽんと肩を叩き簪を励ましていると

「だ、大丈夫!? 簪、龍也君」

パタパタと走って来るエリスに

「だ、大丈夫……龍也君が助けてくれたから」

「私も問題ない」

これくらいの打撲で痛いと言うほど柔な鍛え方はしていないので全く持つて問題ない

「そ、そう。よかった」

ほっとした表情のエリスと違い、落ち込んだ表情の簪に

「ふむ。1度気分転換をしたほうが良いな。食堂に行ってお茶にしよ
う」

目に見えて気落ちしている簪が可哀相なので食堂に誘う

「う、うん……判った」

コクリと頷く簪達と別れ私は自室に戻った。勿論この日の為に用意していた物を準備する為に

「よーし。今日はここまでにしようか」

何時もより早めに訓練を切り上げると言うのはに

「何でだ? まだ始めたばかりだろ?」

1時間とちよつと何時もの半分もやってないのでそう言うてフェイトが

「ふっふー今日は龍也からの指示でね。軽めにしておけてさ。何時も厳しいだけじゃ張り合いが無いだろうから今日はご褒美があるんだよ」

嬉しそうなフェイトに首を傾げていると簪が

「ご褒美? ……それは何だ?」

「私も気になるな。龍也のご褒美って何？」

箒の疑問に鈴も乗っかりそう尋ねる。2人の問いかけを聞いたなのはとフェイトは

「もう、天国かって言いたくなるほどの幸福感が待ってるよ！」

天国？一体なんだろう？しかし嬉しそうな顔をしているフェイトとは対照的に

「後で地獄を見るんだけどね……」

後で地獄を見る？一体何が待っているとどうなんだ

「食堂で待ってるよ！」

きやつほー

と上機嫌で走って行くフェイトを見ているとなのはが箒達に

「今日は夕食を食べない心構えで来たほうがいいよ？」

「え？なんで？」

「とにかくそういう心構えの方が良いよ。後で後悔する前にね」

そう言ってるのはは歩いて行った残された俺達は

「何が待ってるんだ？」

「食堂って言ってたな、食べる物と言うことか？」

「しかし夕食を食べない覚悟とはどういう意味でしょう？」

「まあ考えるより行った方が良いだろう？」

「うん。僕もそう思うよ」

「何かなー？お菓子かなー？」

不安になる様な事を言われて判れた事に首を傾げながら。俺達はピットに戻りシャワーを浴びてから食堂に向かった

「おう。来たかきさてとでは準備をするか」

テーブル一つを確保していた龍也が立ち上がり歩いて行く。それを見ながら椅子に座ると

「あ……えつと」

「座ってて言いつて言ってたから座れば良い」

エリスさんと青い髪で眼鏡を掛けた小柄な女子が来て同じ様に椅子に腰掛けた。龍也の知り合いだろうか？エリスさんは冷静な表情で紅茶を淹れて飲んでいたがその隣の女子はおどおどと落ち着き無

さそうにしていた。その理由は明白で

「またフラグを……」

「龍也さんを1人にするのは危険すぎる……」

ぶつぶつと呟いている魔王2人のせいだろう。俺がそんな事を考えていると龍也がカートを押して来た

「さて今日の訓練ご苦労様。今日は気持ちばかりの労いの品を用意させてもらった」

龍也はカートから大皿を取り。俺達の前に置いて行った

「では存分に食べてくれ」

龍也が大皿に掛かっていた布巾を外すと

「「うわあ」」

箒達が嬉しそうな声を出す。それもそのはず4枚の大皿にはそれぞれ、ショートケーキ・チーズケーキ・ガトーショコラにシュークリーム。女子が喜ぶであろう甘味が所狭しと置かれていた

「私はこれでも御菓子作りが得意でね。喜んで貰えたかね？」

龍也に問いかけにうんうんと頷いた箒達は配られた小皿に好きなケーキを取ってから

「いや、龍也は厳しいだけかと思っていたがそれは私の誤解だったようだな」

「そうですわね♪悪魔だ何て悪かったですわ」

「こういうのがあるならあの地獄の訓練も悪くないわね」

「そうだねー」

思い思いに龍也に感謝の言葉を告げてから箒達はケーキを口にした

「美味しい……うむ。これは美味しいな」

「このガトーショコラは絶品だな。甘さと苦さが実にちょうど良い」

「ダブルシュークリーム好き何だよねえ」

もぐもぐとスイーツを食べる機嫌な箒達を見ながら俺も目の前にあったショートケーキを取り口に運ぶ

(うわマジで美味い。専門店にも引けを取らないぞこのケーキ)

「美味しい……何か元気出るな」

「ええ、そうですね。クリーム餡蜜が無いのは残念ですが」

もくもくと食べる小動物コンビもご機嫌な様子だが

「まだこれスタートだよね？」

「何時ものパターンならそろそろ追加が……」

なのはとフェイトがぼそぼそと喋っていると。龍也が再度カードを押しきてまた机の上に並べる

「ふえ？追加？」

「え？嘘」

きよとんとする箒達に龍也は

「今度はイチゴのタルトとブルーベリーのタルト。後はレアチーズケーキにクリーム餡蜜だ」

今度も売り物と大差ないタルトが並べられる。クリーム餡蜜だけはエリスさんの前に置かれたが

「さてとでは次を……」

「ちよつと待って。龍也君……もしかしてこれまだあるの？」

シエンさんがそう尋ねると龍也は頷きながら

「うん。今クッキーとシフォンケーキを焼いてるし。タルトの追加もあるし……まだ幾らでもあるぞ？全部3ホールずつ位」

ピシッ……

箒達が凍りついた。それに気付かない龍也は

「えーとチョコソースがいいかな？ブルーベリーのソースもいいよな」

龍也には他意はない、だがこう立て続けに甘い物を食べるのは女子にとつては致命的だ

「なのは……これ後どれくらい続くんだ？」

「少なくとも見ても30分、長くて1時間……でも龍也さんが凄く上機嫌だから1時間半くらい続くかも……プリンとかも作ってたし」

箒達が引き攣った顔をする中フェイトが

「んー美味しい♪幾らでも食べれるな」

もくもくとケーキを食べ進めている。そんなフェイトに鈴が「あんた、体重怖くないの？」

そう尋ねられたフエイトは悟りきった表情で

「怖いよ。でもね……これだけ美味しいケーキに抗う事なんて出来な
いんだよ!!体重が何だ!!運動すれば良い!ただそれだけ!だから私
は食べる!!!」

もう境界線の向こう側の悟りを開いているようだ。

「ははは……天国のような地獄とはこの事ですか……」

「くっだが。この誘惑には勝てん」

葛藤しながらケーキを食べている箒達に

「好きな物位好きに食べればいいだろ?」

思わず思った事を口にした瞬間

「男にはこの悩みはわからん!」

「軽く酷なこと言わないでくれる!」

「そうですわ!一夏さんには私達の悩みなんて判りませんわ!!!」

箒達に口々に文句を言われ俺が小さくなっていると

「はい追加できたぞー」

龍也が再度お菓子を持ってくる。出来たてのクッキーとシフォン

ケーキを見た箒達は

「私。今日は夕食食べない」

「箒さん。奇遇ですわね……私もその覚悟をしましたわ」

「暫く甘い物控えないと」

「ん?箒達は一体何を悩んでいるんだ?おお。そうだクリスマスも呼んで
やろう。あいつも甘い物好きだからな」

ラウラが小首を傾げながら思い出したようにクリスマスさんに連絡を
取る。それを見た箒とセシリアは

「弥生も道ずれだ!」

「ヴィクトリアさんもこの地獄へ!!!」

それから数分後……やってきた弥生さんとヴィクトリアさんも目
の前のケーキに目を輝かせたが、次々運ばれてくるお菓子の量に

「あいつ何考えてるんだ?私達を太らせる気か?」

「……私はこれ位で……」逃がしませんわ。貴女も最後までこの地獄

に居てもらいますわ」……くっ!」

帰ろうとしたヴィクトリアさんはセシリアにガツチリ手を掴まれ逃げる事が出来ず。再び椅子に座らせられる

「プリンとか凄い量……」

クリスさんはエリスさんの隣に座りもくもくとプリンを食べていた。更にエリスさんは

「クリーム餡蜜く♪」

もくもくとクリーム餡蜜を食べ続けている

「えつと……わ、私もう帰る」

「ん?そっか。じゃあこれな」

青い髪の女子が時計を見て何かを思い出したようで帰ると言う。龍也は箱にケーキを数個いれ手渡した

「あ、ありがとう」

ペこりと頭を下げ帰って行く女子を見送っている龍也になのはが

「あの子は?」

「んー?整備室で会った子でな。簪というのだが?」

「簪……はい、覚えておきます」

怖い顔で頷いていた。敵として認識されたのだろうか?あの青い髪の子に今度あったら気をつけるように言っておこう、だが俺にはまだ今はそれを言いにいく事はできない

「あの?一夏君?私に恨みでもある?」

シエンさんの更に容赦なくケーキを載せなければならぬのだ

「恨み?ははHA……あるに決まってるだろうが……変なことを鈴に吹き込みやがって……危うく俺は拉致られた上に喰われかけたんだぞ!!責任を持って地獄に墜ちろ」

「ひ、酷い!鈴に言ったのは私じゃない!」

「白を切るか?鈴本人が言っていたので嘘だとバレバレだ。さあお代わりを喰え」

「悪魔ー」

シエンさんの更に追加のレアチーズケーキを載せる。あと等達に睨まれない様に等達の皿にも載せていると

「たつやん、私も食べて良いかなー」

「おう、食べる食べる。まだまだお代わりはあるしな」

「わーい♪」

何時の間にかのほほんさんが椅子に座りケーキを食べている

「おいしい♪たつやんお菓子作り上手なんだねー」

上機嫌でケーキを頬張るのはほんさんは凄い勢いでケーキを食べ進めている。俺？俺は……

「体重が……」

口から魂が出かけているシエンさんを見て気が晴れたので。俺も適当にケーキを取り食っていると

「ほい。サンドイッチ。お前はこっちの方が良いよな」

「おお！俺はやっぱケーキとかよりこっちだな!!」

卵とチーズのベーコンのサンドイッチ。やっぱ俺はこういう物の方がいい。渡されたサンドイッチに齧り付き

「うん。美味い！やっぱ運動の後の食事っていいな」

そんな事を呟きながら。暗い表情でケーキを食べ進めている筈達を見ていた。これは全くの余談だが、この面々でも龍也が作るケーキ全てを食べきる事は出来ず。残った物の半分は職員室へ、残りの半分は食券と交換と言う形で食堂で販売された、尚2日後、大浴場の脱衣所で何名かの女子が悲鳴を上げる事になるが……そこには触れないのが優しさと言うものだろう……

「ねえ。千冬、学年末のトーナメントのルールを変えたいんだけどさ良いかな？」

「良いも何も無いでしょう。もうそこまでルールを変えてるのを今更戻せとは言えませんよ」

龍也に差し入れされたシュークリームを頬張りながら

「んーやっぱもう少し実践的な物にしたほうが良いと思うんだ、何か嫌な予感がするから」

「私も同意します。今度の学年末トーナメントできっと何かがある。

そんな気がします」

千冬に同意されたので考えていたとおり学年末のトーナメントのルールをシングルからペアにルール変更し。大きく伸びをする

「しっかし近くで見ると感じるわね。八神龍也の違和感を」

「ええ。あれは生死を懸けた戦いを潜り抜けた者だけが持つ空気……とても16歳で身に付けられるものではないと思いますね」

「まあゆつくり観察しましょうよ。もし敵なら倒せば良い事だしね」
「それはそれで大変だと思えますけどね」

千冬と苦笑しながら監視モニターを見た。エリスちゃん達にケークを振舞っている八神龍也はとても優しい顔をしていて。とても何かを企んでいるようには見えなかったが。

そのそこが見えない笑みに私は警戒心を解く事が出来なかった。もし敵でないのなら何を目的としI S学園に来たのかそれだけでも突き止めたい。そうでなければ安心できない

いからだ

(まあ長い目で見ますか)

私はそんな事を考えながら監視モニターに視線を戻した。そこに映し出される八神龍也はとても楽しそうに笑っていて。とても何か悪巧みをしているようには見えなかった

(どちらが本当の顔なのかしら)

優しい顔と戦闘時の厳しい戦士の顔……どちらが八神龍也の本当の顔なのかを考えながら、私は思考の海へと浸っていた

第27話に続く

第27話

第27話

さていつもの訓練の時間を言いたいところだが、今日はどうもいつもと感じが違った

「……」

龍也が難しい顔をして唸っている。これはとても珍しい様子なので

「どうしたんだよ？そんなに難しい顔して？」

俺がそう尋ねると龍也は

「ああ、自分の軽率さとかに苛立つてな。らしくない……全くらしくない事をした」

ぶつぶつと呟く龍也は小声で（精神は肉体に引つ張られると言うが、これは酷い）とか（年下相手に何を苛立つてるんだ私の馬鹿）とか訳の判らない事を言っていた

「龍也が苛立つって事は家族とかの事？」

「ん？ああ。どうにも納得行かなくな。家族とか兄弟の問題になると感情的になってしまるのが私の欠点だな。後で後悔すると判ってるのになあ……」

長い付き合いらしいフェイトらしく龍也が何に苛立つているのか即座に言い当てる、龍也は苦笑しながら頬をかきながら龍也は一言ことう告げた

「私自身拾われ子だからなあ……家族というのは良く判らん……私自身血の繋がりが絶対とは思ってないが……血の繋がりとというのは強い物ではないのか？だからこそ血縁関係があるのにいがみ合うとか全く理解できん……」

え？拾われた子供？俺達が驚きに目を見開きながら龍也を見る、それに気付いた龍也は

「ん？どうした？そんな不思議そうな顔をして？」

「いや……普通は驚くぞ？」

声もない箒達に代わり俺がそう言うと言龍也は

「ふむ、そういう物か……私はどうもそういうのは疎い。過去などどうでもいいものだ、必要なのは現在。後ろを見る必要はない……まあ偶には振り返りたくなるときもあるが……きつとそんな事したらあいつが怒るだろうからなあ」

くつくと喉を鳴らした龍也は己の長い銀髪を見ながら笑う。

「またそういうこという。偶には振り返ればいいじゃないですか。想い出は大事なんですよ？セレスさんの事偶には思い返せばいいのに」
セレス？誰だ？初めて聞く名に俺が首を傾げていると龍也は

「それは出来んき、何せセレスとの約束だ。立ち止まらない歩き続けるとな……その先に何があるかは知らんが。進むだけだ痛みも絶望も乗り越えてな」

くつくと再度喉を鳴らした龍也はそのまま振り返り

「すまん、私は今日の訓練はパスだ。少々考え事をしたい」

「はいはい、判ってますよ。好きにしてください、1つ言っておきますけどあんまり女の子に優しくしない事。良いですね？」

「お前の言うことは良く判らん」

「理解してください、頑張つて」

？マークを頭の上に掲げて歩いていく龍也を見送っているとなのはとフェイトが

「相変わらずだよねえ。偶には振り返ったりすればいいのに」

「それが出来ないんだよ、龍也は不器用だから」

幼馴染2人組みが苦笑しているとセシリアが

「あのこんなのを聞くのはどうかと思うのですが……龍也さんは……その……どんな風に生きてきたのですか？」

龍也はこう言った「立ち止まらない歩き続けると……その先に何かあるかは知らんが。進むだけだ痛みも絶望も乗り越えてな」と。俺も気になったあのどこまでも優しい龍也がどんな人生を歩んできたのか

「それは自分で聞けば良い。聞けば答えてくれるよ。でも聞いたら後悔するから聞かないほうが良い……きつと龍也の過去に押しつぶさ

れる一夏達は」

その声色はいつもの明るい口調とは違い、どこまでも重く俺達に押し掛かった。

(そういうえば龍也は肌を見せるのを嫌がってる。それに目の傷もサングラスとかで隠してる)

龍也はISスーツに着替える時絶対に肌を見せない、それに目の傷もラウラが言うには失明レベルの傷だと言っていた。それによく考えると俺達は龍也の事を何にも知らない……

(龍也は一体どんな人生を……)

俺が顎の下に手を置き考え込んでいると

パンパンツ!!

「はい、今は訓練の時間。龍也さんの事を考えてる時間じゃないよ。それとフェイトちゃんも口が軽いよ。はやてちゃんに聞かれてたら殺されてるよ、本気で」

「う……ぶめん、つい口が滑った」

なのはに睨まれたフェイトはしよぼーんとしている、なのははなのはで俺達を見て

「あんまり人の過去を詮索しない事。そういうのは嫌われるよ」

いつもの温和な表情ではなく鋭利な視線で俺達を睨む、どうやらそう簡単に聞いていい話題ではないようだ。そもそも家族の事や目の傷の事をそう簡単に聞いて良い筈がない。いやそもそも……龍也は聞けば答えてくれるが自分からは自分の事を話さない。それは

(俺達を信用してないって事か?)

暗らい考えになりかけている俺にフェイトが

「違う、違うよ。龍也は一夏達を信用してないわけじゃない。龍也は昔から自分で背負い込んで誰にも言わない。そういう不器用な人なの、だから嫌ってるって訳じゃないそれだけは判って」

フェイトの言いたい事はわかる、付き合いは短いが八神龍也がどんな人間かと言うのは俺達も理解し始めていた。どこまでも優しく人の為に動く奴、それが八神龍也だ……

「判ってる、んじゃ!今日の訓練も気合入れて始めるか!!龍也に勝て

るように!!」

「そうだな！何時までも負けっぱなしというのも癪だしな！」

俺の言葉に筈が反応し気合を入れる、龍也は龍也だと思いを切り替え。俺達はいつも通り放課後の訓練を始めた……

その頃龍也はと言うと

「どうしてこんなことになったんだろうなッ!!!」

バスンツ!!バスンツ!!!

続けざまに打ち込まれる弾丸から身を翻し全力疾走していた……

(ちっ！追い込まれてるな)

森の方に追いやられている、まあ防弾性能があるコートなので直撃しても痛い程度だが。

(狙いが正確すぎる。確実にコートを外すように撃つて来ている。この腕……プロだな)

このまま誘い通りに行くのは正直不快だが、致し方ない

(そもそも私は楯無に謝りたかっただけなんだが……)

らしくないことを言った。そのことを謝りたかっただけなんだが

……狙撃犯の気配はあの時楯無の部屋の天井に居た人物だろう

(きつと私の言い分が気に食わなかったんだろうなあ……とりあえずケーキはコートの中に仕舞ってと)

お詫びの品である、昨日大量に作ったケーキを入れた箱をコートの中にしまい。私はそんな事を考えながら森の中へ向かっていった。

「で？なんでこうなった？」

「大人しく斬られる！」

「いやーすまん、フレイアがお前を殴るといって聞かないんだよ」

ラファールのカスタム機らしき物を見に纏った2人の女性に襲われていた。一応念の為に零式を展開してはいるが……

「いや。本当何故私が襲われるのか教えてくれないか？」

「黙れ！死ねッ!!」

炎の様に波打った剣を捌きながら交渉を試みるが全く私の話を聞

いてくれない。

「悪い……こいつきれると人の話し聞かないからさ。まあそういうわけです大人しく殴られるか斬られてくれ、まあその後は縛り上げてお嬢の所に連れてくからそこで詳しく聞いてくれや。ああ、あたし達が悪かったらちゃんと謝るから」

緋色の髪の方は完全に切れていて話にならない。だが激昂こそしているがその剣筋は鋭い。そして身に纏うラファールはかなり改造されたものだ。と判る。左肩装甲が真紅で後は全装甲部分が漆黒で、本来4枚の翼が3対6枚となっており、見た目通り機動力が高い、後は左腕にカイトシールドを装備しているのが特徴的だ。更に頭部は兜型の装甲があり。左側にはアンテナが見える。見た目通りなら指揮官方だろうが

「お嬢様の事を知らず好き勝手に！許せん!!」

完全に目がいつてしまっている。あれは不味い本能的に恐怖を感じる、思わずその隣の黄色い髪の女性を見る、彼女の身体を覆っているのもまた改造型のラファールだ。基本的な装甲などは変わらずだが全体的に丸いフォルムを持ち。左肩装甲が黄土で後は全装甲部分が漆黒という目立つカラーリングをしたラファールを駆る彼女は多少冷静のようで、話を聞いてくれそうな雰囲気だが

「いやな、アイアスとフレイヤがぶち切れててな。怪我したくねえならあたしの拳で昏倒した方が痛みが少ないぞ」

どうもこの女性と私を執拗に狙撃している人物とに板挟みになっているようで、交渉の余地はないようだ

「ふーではまずは貴方達の怒りを受けよう

ISを解除し両手を挙げる

「良い覚悟だ死ねえッ!!」

「STOP!!STOPだ!!!まじで死ぬって!!!」

黄色い髪の女性が緋色の髪の女性を殴り倒し私の方を見る

「お前正気か？普通やらないぞ？ISで襲ってくる相手の前でISを解除するなんてよ？」

呆れたように言う女性に私は

「ふむ。それは道理だが。私自身痛みには慣れてる。腕一本切り落とされたくらいではどうとも思わんし、それで冷静になるならそれでもいいかと」

義手なら代えが利くしなと思いつながらそう言う

「このど馬鹿ッ!!」

ブンッ!

全力フルスイングの平手を受け止めながら

「いやいや馬鹿だと言うのは嫌って程判ってる。更識の事を知らずに好き勝手言っただけで正直悪かったと思っただけで殴られる覚悟で謝りに行く所だったんだが……こんな目に会うならちやんと考えてから言うべきだったなあ」

「え?お嬢の所に謝りに行くつもりだったのか?」

「そうだが?自分が悪いと認めたら素直に謝るさ。そこところはちやんとしてるつも……ふぐっ!」

黄色い髪の女性と話していると肩に銃弾が撃ち込まれる。実弾ではないだろうが正直痛い

「アイアス!STOP!STOPだ!!麻醉弾を撃つのやめろ!!」

オーブンチャンネルで叫ぶ女性の声を聞きながら

(あー麻醉弾か……どうりで意識が……途絶えかけるわけだ……)

どうもこのIS学園で居る間に随分気が緩んだものだ……

(やれ……やれ……修行が……足りんな)

もう立ってるのも辛い、私は膝から崩れ落ちそのまま地面に倒れかけたが

「ちよっ!不味い!不味いつて!ツバキさんとかエリス様に殺される!?!」

妙に慌てる黄色い髪の女性に抱きとめられそのまま意識を失った

私は慌ててフレリア達が待機しているログハウスに向かっていった。八神龍也を独断で襲撃し無抵抗な彼を麻醉弾で撃ち昏倒させた

シエルニカから報告が入った時、私は酷く慌てた……前の対談で判ったが彼は誰かのために怒れる人だ。だから簪ちゃんが寂しそうなのをどうしても我慢できなかったのだろう。それに話を聞けば私に謝りに来る途中だったらしく。お詫びの品と思われるケーキを持っていたそうだ

(ああ！もう！どうして勝手なことするかな!?)

私自身もう1度話をしなければと思っていた……それがこんな事になるなんて……

「八神君！大丈夫？」

バン！

ログハウスの戸を開けてながらそう言った私は目を見開いた

「ここでこのガーリックパウダーを入れると味わい深くなるんだ」

「おお!?なるほど！その発想は無かったな！」

シエルニカと料理をしている八神君の姿を見たからだ？あれ？麻酔弾で撃たれたんじや？

「なんか、数分で目を覚ましたみたいですよ？像でも昏倒する麻酔弾を数分です。信じられないですけどね」

「あれ？エリスちゃんも来てたん……何してるの？」

エリスちゃんの前には

『私は独断で無抵抗な人を襲撃した悪い人です』

と書かれた看板を首から下げ正座している。フレイアとアイアスの姿があった。ちなみに頭には漫画で見るようなたんこぶが数個見える。恐らくエリスちゃんにやられたんだろう

「あの私は良かれと思つてですね……「無抵抗の人襲つて何が良い物ですか！」……はい、すいませんでした」

フレイアの言葉はエリスちゃんの一喝でしょんぼりするフレイア、22歳のフレイアがしょぼーんとしているのはどうにもシユールだった

「まあそんなに怒らなくても……うん？ああ。来たのか楯無、丁度いい所に……シエルニカあと5分したら弱火に変えてくれるか？焦げるから」

私の方に歩いてきた八神君は

「すまなかつた、何も知らないのに好き勝手な事を言って」

深く頭を下げる八神君にこっちが慌てた

「いや。あの……そのとりあえず顔を上げて貰えないかしら」

誠意を見せてくれるのは判る。だがここまで深く頭を下げられると寧ろこちらが慌ててしまい。そう言うのと八神君は不服そうな顔で顔を挙げ

「エリスから更識家のことは大まかに聞いた。そう言う事情があつたとは知らなかつた。本当に申し訳なかつた」

「あの龍也君も結構気にしてるみたいなんで許して上げて貰えると私も嬉しいんですけど」

エリスちゃんにも許してあげて欲しいと言われた私は頬をかきながら

「いや。許すも何もこっちも悪い事をしたなと思ってるんだけど。まさか暗部の3人が勝手に動いて八神君を襲撃するなんて思つてなかつたし……それに麻酔弾とは言え撃つたのはこっちの人間だし……謝るべきなのはこっちだと思っただけ」

寧ろ私が責められるべきで。謝るほうと許すほうが完全に逆転している

「いや、悪いのは私だ私が軽はずみな事を言ったのが全ての原因だ」

「いやだからこっちが悪いんだって！」

きっかけは八神君かも知れない、だが手を出した以上こっちの方が悪いのだ

「だから悪いのは私だと言っているだろう！」

「だから手を出したこっちの方が悪いんだって!!」

平行線……全くの平行線だ。どっちもどっちでお互いに譲れず、自分が悪い、いやこっちが悪いと言い合っている

「ぷっ…なんか似てますね。楯無と龍也君」

「どっこがっ!？」

思わず声が重なる。そして互いに顔を見合わせるが何を言って良

いか判らずお互いに黙り込んでいると

「そう言うところが似てるんですよ。責任感が強い所とか、底抜けに優しい所とか」

くすくすと笑うエリスちゃんに完全に毒気が抜かれた。それは八神君も同じのようで

「今回はとりあえずお互い様ってことにしない？」

「納得はいかんが……この場はそれで終わりにしよう」

不服そうな八神君に

「そういえば撃たれたんでしよう？大丈夫なの？」

私がそう尋ねると八神君はコートの裾を掴んで

「対刃・対弾の特殊繊維のコートだ、衝撃はあったが痛みはそんなに無い」

対刃・対弾の特殊繊維のコートって……ここは戦場でもないのに何でそんなの着てるの？

「どうしてそんなの着てるのよ？ここ学校で平和でしょう？」

「うむ、そうなのだが……脱ぐと落ち着かないんだ。身体が軽くなりすぎて」

ン？軽くなりすぎて？どういうこと？私が首を傾げていると八神君はコートを脱ぎ

「良く見てろよ」

そう言うってからログハウスの床にコートを置いた、すると

メキ！メキメキツ!!!

床が凄いい音を立てて軋み始める。え？ええ？コートだよ？なんでこんな音がするの!？私とエリスちゃんが絶句していると

「身体を鍛える為に友人に作ってもらったんだが。重量が400キロあってな……その重さに慣れきってしまったので。脱ぐと落ち着かないんだ……身体が軽くなりすぎて」

びっくり人間が居る……400？普通の人間なら動くことさえままならないはず……それをずっと身に付けて平然と歩いてるとんでも人間が居る。

「ああ、そうそうこれお詫びの品だ」

「ごそごそとコートを探り始める八神君。そしてコートの中からケーキの箱が出るわ出るわ……その数約6個

「どこに入ってたんです？このケーキの箱？」

「どう見ても質量的におかしい。この大きさの箱が6個もコートに入ってるわけが無い。エリスちゃんがそう尋ねると

「エリス、ちよつとこの中見てみる」

「コートをバサと半分広げる。エリスちゃんがゆっくりそのコートの中を覗き込んで。直ぐ離れた

「中に冷蔵庫と本棚が……」

「はい？コートの中に冷蔵庫と本棚？何を言ってるんだ？そんなの在り得ない

「私も見てみていい？」

「どうぞ」

「断りを入れてからコートの中を覗き込み離れる

「冷蔵庫と本棚。後机と椅子が……」

「どうなってるの!?このコート!？」

「面白いものを見せてやろう」

「龍也がエリスちゃんにコートを被せると。ストンとコートが下に落ちた

「はい!?エリスちゃんはどこへ!？」

「コートの中なんだな、これが」

「嘘オオオオツ!?何!?何なのこのコート!?人一人収納可能!？」

「よいしょつと」

「コートに手を突っ込み中からエリスちゃんを引っ張り出す八神君。エリスちゃんはエリスちゃんて信じられないものを見たと言う表情で

「コートの中に家が……家があったんです楯無」

「はああああ!?家!?家って何!？」

「私の中でコートに対する常識が崩れつつある

「お前も見えてみるか？」

「やめとく……なんか私の中の常識が木っ端微塵にされそうだから」

楽しそうな八神君はそうかと言うと

「その反応を見るのは何時見ても飽きんな」

はっはっはと楽しそうに笑う。そんな八神君にエリスちゃんが「そのコート、どうなってるんですか？」

「ん？えーと確か知り合いの天災科学者が子供の様に輝いた顔で。4次元とかどうか？不思議なコートで♪とか歌いながら作ってくれた物だが……詳しくは私も知らん」

青いネコ型ロボットの歌!?何か言わなければならぬ気がする

「たつえもん。空を自由に飛びたいな」

「はい、タケコ〇〇ー」

あるの!?差し出された黄色い竹とんぼのようなもの受け取る

「え？うそ？これ本当に使えるの？」

「うん、使えるぞ。操作難しいけど」

……まじまじとタケコ〇〇ーを見る漫画と同じだ

「ああ、広い所で使ったほうが良いぞ？操作ミスすると天井に突き刺さるから」

「あー使用上の注意？」

「うんや。実体験だ、胴の半分くらいまで天上に突き刺さった事があるんだな。これが」

「……怖いからやめとく」

タケコ〇〇ーを返す。興味はあるがリスクの方が高いので使用で
きかない

「たつえもん。私クリーム餡蜜が食べたいです」

「あつたかなー？ちよつと待ってくれるか？」

……ごそごそとコートの中から机・椅子・本・自転車・後漫画で見たピンク色のドアとかが姿を見せる。そもそもたつえもんと言う呼び名に突っ込みを入れない八神君も気になるのだが……

「おお！あつたぞ！クリーム餡蜜！」

「素晴らしいコートですね！」

なんかエリスちゃんが八神君の非常識さに順応してる……

(つて言うか。八神君って全然邪気の無い子ね)

大人びているようでもその実子供のような八神君は掴み所が無い。ただ判るのは真面目で誠実な人物と言うことだ。本当なら八神君は私を殴るだけの権利がある、銃で狙撃されたのをお互い様だと言って笑い飛ばさせる人間はそうはいないだろう

「あ、そうそう。なあ楯無もしもだが……簪と仲直りしたいと言うのなら及ばずながら協力させて貰うぞ？ 私は姉妹は仲が良い方が良いと思うしな」

からからと笑う八神君に私は

「どうしてそこまで気にするの？ おかしいじゃない」

八神君にはそこまで私と簪ちゃんを気に掛けるだけの理由が無い。だからそう尋ねると八神君は

「んー私には家族と呼べるのは妹だけだったし……そのせいか仲違いしてる姉妹とかを見るのが嫌いなんだよな。エゴだとは判ってるけど」

「失礼だけど……八神君のご両親は？」

聞くのは失礼だと思つた、でもその言葉の中に感じた事を尋ねると八神君は少しだけ悲しそうな顔をして

「生みの親は顔所か名前も知らん、私に名前をくれた人達は事故で亡くなったし……身寄りの無い私を引き取ってくれた人達も私が7歳の時に死んでしまったよ」

「ごめんなさい。無神経だったわね」

「別に気にしてない。いや……気にして無いと言えば嘘になるが……過去はどうにもならない事だし。謝られても困る、まあそう言う訳でな仲違いしてる者を見るのは嫌いなんだよ」

家族が妹だけ。だから……簪ちゃんをほっておけなかった。つまるところ八神君とは

(どこまでも底抜けの善人なのね)

あの鋭利な空気を纏うのも八神君だが。この優しい空気を纏うのも八神君だ……

「じゃあさ。下に妹を持つ者として八神君に聞くけど……行動だけで自分の想いが全部伝わると思う？」

「無理だろ？私も同じ様な事をして妹と喧嘩した事がある……言葉だけでも行動だけでも駄目なんだよ。話さないと判らない事もあるし。行動しないと判らない事もあると思うぞ？まあ傷付くのも傷つけるのも怖い物だ。でもそうしないと分かり合えないのが人間だよなあ……傷付いて傷つけてそうしないと仲良くなれないのは愚かだと思っうけどなあ」

その言葉には妙な重みがあった。深く胸に刻み込まれたようなそんな気がした。でも

「言いたい事は判るけど……でもやつぱり怖いかな」

「まあそうだよな。兄ちゃんなんか嫌いだ！って言われた時はかなりショックだったしなあ。私も」

ははははと苦笑する八神君に

「どうやって仲直りしたの？」

そう尋ねると八神君はうーんと思いつくように

「プレゼント買って、抱きしめて大事だよって言った」

それは正解なのだろうか？どこかが間違ってるような気がする

「あの……私それ間違いだと思うんですけど？」

「そうかな？嬉しそうにしてたけど？」

うん、間違いない。八神君の妹は織斑先生と同類の様な気がする

「八神君の妹ってどんな子？」

「よく笑う奴で、運動も勉強も得意だ。でも機嫌が悪いと笑顔でニコニコしながら人の首を絞めれる人間かな？ああ、後投げナイフが得意」

超一級品の危険人物だ。私とエリスちゃんが絶句していると

「ああ、あと。私と結婚すると公言する様な奴だ。いい加減兄離れして欲しいんだがな」

「龍也君の妹はなのはとフェイトと仲が良いんですか？」

「ん？仲は良いと思うぞ？たしか大好きで大嫌いとか何とか？」

……間違いない危険域のブラコンでヤンデレだ。もしかするとピリオドの向こう側に行ってる可能性もある

「所でさ？良いのかエリス様。フレリアとアイアスの顔色が青を通り

越して白くなってるんだけどよ?」

え?と振り返るとそこにはプルプルと震えながら白い顔をしている。2人と目が合った

「ああ!?」、「ごめんね!もう正座止めて良いよ!」

どさつと崩れ落ちた2人は

「し、痺れて動けません」

「くううう……足が」

足を押さえて悶えていた。それを見て八神君はおかしそうに笑いながら

「ふふふ。ここに私がいては話しにくいだろうからもう戻るよ。ではな楯無・エリス。それと楯無さっきの話考えておいてくれ。あと後日謝罪をさせて頂く。ではな」

そう言うとう手を振りログハウスを出て行く八神君を見ながら

(もしかすると八神君が私と簪ちゃんを繋いでくれるかもね)

私は八神君が亡国企業かそれに順ずる物に属していると疑っていた筈なのに。こうして顔を合わせて話し合うとそんな事は無いのでは?と思い始めていた。確かに彼は何かを隠している。でもそれは決して悪い事ではないだろう。その目は澄んでいてどうも悪事を考えて居る人間には思えなかった

(ちよつと信用してみたいかもしれないわね)

更識家の当主としては甘い考えだと言わざるを得ない。でも信用したいと思わせるだけの誠実さも見せてくれた……私は少しばかり八神龍也に対する警戒心が薄れた事を感じながら。足が痺れて悶えている2人を見て笑みを浮かべた

「簪、調子はどうだ?」

「うん。良い調子だよ」

整備室で式式を組み直していると龍也君が来て尋ねて来る。その言葉に笑顔で返事を返すと

「そうか。それは良かったな。どうだ？今度の学年末のトーナメントには間に合いそうか？」

「うん。大丈夫そう。でも多分初戦敗退だと思うけどね」

勝ちたいとは思う。でも稼動データが無い。私自身の戦闘経験が無い……多分専用機があつても勝てないと言うと

「じゃあさ。何かやる気になるようなことがあつたら。気合も入るだろう？何かしてほしい事はあるか？私に出来る事なら叶えるが？」

え？思わず龍也君の顔を見てしまう。もしも……もしもだ。彼と一緒に街を歩いたらきつと楽しいに違いない

「えと……良いの？」

「構わんさ。それで簪がやる気になるならな。言っただろ？何かきつかけがあればお前は変われると。なら私はその切っ掛けになろうかと思っただけだ」

……他意はないのだろう。そ……その

(私が好きだとかそう言うのは無いよね)

でもそれでもその誘いは魅力的だった

「じゃ。じゃあ！もしも私が優勝できたら！一緒に遊びに行こう！」

可能性は限りなく低いでもそれくらいのほうがやる気になる

「よし。約束だ」

「う、うん!!!約束！」

その小さな可能性と自分と龍也君だけの約束と言うのはとても大切な物に思えた

「さてと。それじゃあ整備を手伝おう。機体を万全にしないとトーナメントに勝てないからな」

「う、うん！」

龍也君に手伝って貰いながら私は式式の調整を始めた。それはとても楽しい時間でこの時間が長く続けば良いと私はそう思った……

第28話に続く

第28話

第28話

セシリアとの模擬戦の次の日の夜 寮のロビー

(負けた?この私が?セシリアに……ありえない)

本国にいた時は5勝2敗と勝ち越していた。しかも2敗というのは父上様見に来ていて必要以上に力が入りミスしたもので、私の自滅点と言っても良い

(魔王に師事するのも命懸けとかいってたな?魔王とは誰だ?)

転入した来たばかりでこの学園のことは良く知らない。だが魔王と呼ばれるやつがいてそれがセシリアを強くしたと言うのは判る

(魔王を探すのが強くなる近道か?)

私がそんな事を考えていると

「あーちくしょう!!!また勝てなかった!!!」

「強いよねー龍也君達は」

「魔王って言うのは冗談でも無い物だな」

青い髪と金髪の女子と

(あれは確か欧州連合のトライアルのラウラ・ボーデヴィツヒだな)

ラウラは何度か顔を合わせているし模擬戦もしたこともある。あいつになら話しやすいか……私はそんな事を考え掛けていたソファアから立ち上がった

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。少し良いか?」

「ん?ヴィクトリアか。フルネーム呼びは感心せんな、ラウラかボーデヴィツヒと呼べ」

話を中断させられ面白く無さそうなラウラに

「では。ラウラ、1つ聞きたい魔王とは誰の事を指している?」

私がそう尋ねるとラウラは

「1組の高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、の両名を指す。何でも試作型のISのテストパイロットらしいが。技量・操縦技術は1年の中でもトップクラスだろうな」

「なのはが射撃。フエイトが近接特化でね。勉強になるんだよねえ……訓練は殆ど拷問だけだ」

金髪がからからと笑う

(ルウ・シエンリーか？何故金髪になってる？)

中国の代表候補生の筈だが……確かデータでは黒髪だったと思うが……

「では龍也というのは？」

私がそう尋ねるとラウラは

「一言で言うのなら悪魔だ」

「だね、大体体力が限界になるようにトレーニングメニュー組むの止めて欲しい……死んじゃう」

「だーッ!!!!んなのどうだっていいんだよ!!!!どうやったらあの無限組み手を突破できるかを考えるんじゃないのかよ!!」

青い髪の女子が怒鳴る

(こいつも見覚えが……！そうだ！ギリシャの代表候補の薄野弥生だ)

射撃とかはからきし駄目だが、こと近接においては天才と称される近接戦闘のエキスパートだった筈。それが勝てないという八神龍也

「そうだったな。弥生少し待て、もう少しすればクリスが来る。戦闘モーションの解析ならクリスの力を借りるのが一番だ」

ラウラがそう言うると小型のPCを脇に抱えた黒髪の女子が歩いてくるのが見えた

「？1人多い？」

「イギリスの代表候補生のヴィクトリア・スミスだ。お前は？」

「クリス、クリス・ファウスト。まだ専用機は準備中だけど一応代表候補。宜しくヴィクトリア」

クリスはそう言うると私達の向井側に座り

「まず、渡されたデータを分析してみた。ある程度パターンがあることが判った」

モニターには4つのパターンが映し出される

「まず彼は女性の「顔・腹・髪」を狙わない、だから主に肩や足を狙う

がそれも跡にならない場所を選んで打撃している」

「だがそのパターンに当て嵌まらないパターンも多いようだが？」

「うん。八神龍也は中国拳法・護身術・合気道・ムエタイ・バリツツ・総合格闘技（CQC）考えうる限りの武術を学んでいる、足・手どこでも掴まれれば。そこから投げ技に持ち込まれて、無限組み手のルールに乗っ取りカウンターがリセットされる。それを繰り返されるうちに体力が無くなり、自動的に負けになる」

「では勝つには掴まれない様に間合いを取っていれば良いのか？」

「それも駄目。これを見て」

クリスがキーボードを叩く。ズームである動きが再生される。5メートル近い間合いを一步で詰めている

「なんだ？この歩法は？」

「一步で5メートルとは驚きだ」

私とラウラが驚いているのに大してシエンと弥生は

「中国拳法の1つ、八極拳の奥義の歩法「活歩」かな？」

「私は剣術の縮地法に似てると思う」

「どっちも外れ。これは八神龍也独自の歩法。名前は判らないけど何の予備動作も無く突っ込んでくる。これがあるから間合いを離して戦うと言うのは駄目。そもそも」

「あの長身からはそう簡単には逃げられんか」

「そう言うこと。でも彼は必ず反撃と言う形で行動する。そこを突きなおかつ5分立ち続ける方法は1つだけ。判る？」

クリスの問いかけにラウラは

「掴まれない様に気をつけ、あえてインファイトで龍也の攻撃をかわし続けるか？」

「正解、むしろ無限組み手はそうしないとクリアできないようになってる。つまり無限組み手とは」

「挑戦者の勇気を試すものか？」

「鋭いねヴィクトリア。そうあの無限組み手は挑戦者の勇気を試す物と言う役割が強い、まあある程度の技能が無いと突破できない物みただけだね。どこへ行くの？ヴィクトリア」

話を一通り聞いた所で私は立ち上がった

「私は強くなりたいたい誰よりも、その為に八神龍也と模擬戦をする事には意味があると判断する。強者の情報感謝する」

もうラウラ達に用は無い。彼女達よりも強い者を見つけた……私がより強くなるために必要な敵。それを見つけたことに感謝し私は自室へと戻った

「面白く無さそうだね。ラウラ」

「ああ、ヴィクトリアは正直嫌いだ」

モニターを切ったクリスに尋ねられ私は即座にそう返事をした
「なんで？」

「かつての私を見るようだ。強さが全てと考えていた嫌な私を」

教官や、ツバキさんにオクト中佐……彼らに会わなければ私はヴィクトリアの様になっていたかもしれない。そう思うとヴィクトリアの存在は過去を思い出す様で嫌だった

「今は違う？」

「違うに決まってるだろう？クリス」

判って聞いているクリスを軽く睨むと

「ふふふ。変なこと聞いたねごめん」

「良いさ。変わったと思うが確たる確信は無い。まだまだ私は迷っている途中だ」

強さとは？その答えを探して彷徨う。だが最近はおぼろげだが強さが何か？と見え始めて来ていた

「何時か見つかるの良いね。ラウラ」

「ああ。そうだな」

私はそう返事をしたが、心のどこかで感じていた近いうちに強さが何か判ると何の確証も無いのに私はそれを理解していた。それはきっと女の感とでも言うべき何かなのかもしれない

どこかかもしれない山中の秘密ラボで

「やつほーネルちゃん♪」

「うざい、束」

抱きついてきた束を片手でいなす。この女頭が良いくせに如何してこう子供っぽいのだろう

「ねえねえー！今日は何を見せてくれるの？ベルカ式？それともミッド式？どっちの魔法を見せてくれるの？」

楽しそうな束に私は

「今日は魔法を見せに来たんじゃない。仕事の具合を見に來ただけ」

「えーつまらないなー。また見たいのに収束砲って奴」

1度こいつに魔法を見せたのは失敗だった。会うたびに魔法を見せろ、魔法を見せろとうるさい事だ

「ちゃんと仕事が出来てたら見せてやる」

「本当♪じゃあ渡しちゃうもんねー」

ぽいつー！ぽいつーと何かが投げ渡される。盾と剣を模したアクセサリーにも見えるそれを受け取る

「性能は？」

「んー時間が無かったから急いで作ったけど第3世代くらい能力ならあるよ？もー3日でIS2機作れなんて無茶苦茶だなー」

これはベエルゼにもベリトにも内緒で作らせた物だ。計画にある襲撃時に間に合うように私が無理に作らせた物だ

「でもさーなんで今回はベエルゼ？だっけ？それに秘密で動いてるのさ？あれの部下じゃないの？ネルちゃんは」

首を傾げる束に私は

「私は私の目的で動いてる。ベエルゼもベリトもベルフェも関係ない……私は私の好きにやる」

指示を受ければそれには従うし、命令も聞く。でも私の目的を邪魔するのは許さない

「じゃあさ？ネルちゃんの目的ってなーに？」

「今回の目的は1つ。この愚かで憐れな世界に！私の！私だけの！お父さんの強さを本当の姿を見せ付けるの！そしてこの世界の人間が以下に愚かで取るに足らない存在なのか！それを理解させるの」

それだけ、それだけが望み。あの偉大な姿を世界に見せてやって欲しい

「じゃあさ？…なんで会いに行かないの？行けば良いじゃん？」

「ふふふふ。まだ早いよ、出来るなら直ぐにでも飛んで行って会いたいでもまだ早いの」

「まだ時期じゃない。時期がくれば会いに良く。だってあの人は私だけのお父さんなんだもの私の傍にいてくれるのが当然でしょ？」

「私じゃなくてあの出来損ないが娘なら。私も同じはず……だからあの人は私のお父さん」

「ネルヴィオ？」

「ふふふ……モメモノもお父さんに会いたいよね？」

何時の間にか私の服の裾を掴んでいたモメモノを抱き上げる。

「あいたい……モモもパパにあいたい」

「そうだよね？あの子だけなんてずるいよね？」

あの子だけがお父さんの愛情を受けるなんて間違ってる。そうに決まってる

「ふーん……まあ良いけどね。で束さんはどうすれば良いのかなー？」

「時期が来たら合図する。その合図を切つ掛けに2機のISを暴走させて欲しい」

「どのIS？」

「ヤタガラスとドイツのレーゲン。レーゲンは簡単でしょう？」

「あーあの出来損ないのVTシステム？あれを外からの介入で起動させるの？」

「そう。出来るでしょ？」

まあねーと頷く束は

「でもさヤタガラスはVT積んでないよ？」

「ヤタガラスの方は私が動く。だから何の心配も無い」

ISの暴走は難しいでもその中身を弄るのは簡単な事

「ふーんOK、じゃあ約束の魔法見せてよ」

「外で待つてなさい。ラボじゃ危ないから」

「OK、じゃあ外で待つてるよー」

タタタタと駆けて行く束を見ながら、背後に居る

「何のつもり？私は束の協力者よ？」

「私はお前たちは好かない。束に近寄るな」

がシャンツ!!

長大なロケットキャノンの砲口を向ける人間に

「悪いけど。そんなんじや魔導師には何の手傷も負わせられないわよ？」

「それでもだ。私には私の目的がある、その為に貴様らの存在は害悪だ」

揺るがない敵意を見せる人間に

「ふう仕方ないわね。モモメノ」

「うん」

「ユニゾンイン」

モモメノが私の中に吸収されそれと同時に武装が展開される

「言っておくけど。ISなんて私達にとっては子供の遊び同然よ」

腕を振るうと同時にゴトンと音を立てて私の方を向いていたキャノン砲の砲身が地面に落ちる

「なっ!? フォールディングランチャーが……」

「不可視の槍グランギニョル……これ以上刃向かうのならその心臓抉り取ってあげるけど？」

「くっ」

ISを解除した気配がするので私もユニゾンを解除する

「ふふ、賢い選択ね……どうせもうじき燃え尽きる命、大事にしなさい
アズマ・ワンイレイサ」

どうせほっておいても1年も生きられない人間を態々手にかける
必要は無い

「それじゃあね？アズマ」

「死ね。ネルヴィオ」

「ふふふ。その反抗的な態度嫌いじゃないわよ？人間？」

「がはっ!？」

フラッシュムーブからの蹴り上げを叩き込む

「良い? 私が束と貴女達を生かしているのは役に立つからよ? 道具は大人しく道具として扱われなさい? いいわね?」

アズマの頭を踏みつけながら告げる

「くっ……」

頭を踏まれながらも敵意の色を消さないアズマに

「ふふふ。精々憎みなさい。その憎悪……上質なネクロには必要なものよ」

「私は……ネクロなんかにならない! 私は……私は最後まで人間だ!!」

「そう、それならそれでもいいわ」

ドゴツ!!

力なく倒れているアズマを蹴り上げ壁へと叩き付ける。そのショックで意識を失ったアズマに治癒の魔法を施す。下手に怪我をさせたままだと束が勘ぐるから

「ふふふ。貴女は私に良く似てる、だから好きよ……だから貴女もいずれ私の仲間にして上げる。ねえ? 出来損ないの人間?」

崩れ落ちたアズマの顔に月の光が当たる。それは稀代の天才、篠ノ之束に酷似していた……

「さてと面倒だけど魔法を見せに行きましょう」

私か気絶しているアズマを最後に一度だけ一瞥し、ラボの外へと向かった……

何時もの放課後の訓練の時間

「俺。死ぬ、死んでしまう」

「おお、一夏、死んでしまうとは情け無い」

倒れている一夏を見下ろして居る龍也。一夏は無限組み手の後で動く気力も無く死んでいる。あと3人ほど倒れているが、喋る気力も

動く気力も無くピクリとも動かない。ラウラ・シエン・弥生の3名。私も誘われたが断った。あれは真正銘の地獄だ

「お前のせいだろうか!!」

「まあ落ち着け一夏」

ドビシツ!!

「ふぐおう!?」デコピンがとんでもなく重い!! 額が! 額がアアアアツ!!」

額を押さえ転げまわっている一夏……気のせいかあのデコピンの瞬間、一瞬一夏の額が陥没したような……一夏は暫く悶えていたがそのうちピクリとも動かなくなつた。体力の限界が来たのだろう少し休ませてやろう

「そういえばさ。もう直ぐ学年末トーナメントの日よねえ」

「そうですね」

倒れている一夏達を無視して喋りだす鈴。下手に近付こうものならそのまま崩しで無限組み手になる。それを理解しきつたものの行動だ

「なのは達は参加するの?」

「うーん、今のところは参加する気は無いかな。多分教師側から前みたいに待ったが掛かると思うし」

まあ妥当といえれば妥当なところだ。正直龍也達を相手にするなら10人くらいいて漸く対等くらいかもしれない

「おーい、一夏? 立てー訓練を続けるぞ」

「俺、今日、無理。もう動けない」

片言の一夏はもうぐったりとしているもうとてもではないが訓練は無理だ

「致し方ない。訓練はここまでにしよう。ではまた明日」

くるりと背を向け龍也が歩いていこうとして立ち止まる……いやそのまま後退する

ドスツ!! ドスツ!!

2本の剣が龍也の居た所に突き刺さる

「やれやれ。非礼が過ぎるんじゃないかね? お嬢さん?」

「お前の力見せてもらおうか？」

赤い装甲を持つIS……たしか3組の代表候補生のISだった筈

「ヴィクトリアさん!!行き成りそれは無いんじゃないですか!」

「この程度かわせないのなら興味は無い。それを確かめたただけだ」

一瞥し龍也を見るヴィクトリアに龍也は

「やれやれ。無粋な輩だ、イギリスの人間は如何してこうも高慢なのかね?」

「構えなければ死ぬぞ!」

瞬時加速で龍也に向かつて切り込む。やばい龍也はISを展開していかないぞ

「龍也さん!逃げてください!!」

セシリアがそう叫んだが次の瞬間

「止まって見えるぞ?ヴィクトリア?」

「なっ?!」

ISを展開すらしていない龍也が瞬時加速の一撃をかわし、そのままヴィクトリアの手首を掴んでいた

「くっ!!」

ヒュン!!!

滞空していた剣を掴み龍也に切りかかるがそれは紙一重でかわされる。だが僅かに切っ先が龍也の頬を捉え肌を裂く

「やれやれISの操縦者と言うのは剣の扱いも知らないのかね?」

「くっ!馬鹿にするな!!!」

二刀流になり龍也に切りかかる、その速度は常人が反応できるものではない筈なのに龍也は笑みを浮かべたまま、その斬撃をかわし続けていた

「信じられない。龍也は一体何者よ」

鈴がそう呟いた、それを聞き届けたかどうか判らないが龍也はにやりと笑い

「どこにでも居る。ただの高校生さ」

お前のような高校生が何にもいて堪るか。私は即座に心の中でそう突っ込んだ

「くっ!!舐めるな!!」

上段から切りかかるヴィクトリアだったがそれはかわされ勢いあまり地面に突き刺さる切っ先、龍也はその上に爪先で乗り

「そこから辺で引きたまえ。私は弱い者いじめは好きではないのだよ?」

「ふざけるなアツ!!!」

更に2本ソードビットを射出し龍也に切っ先を向ける。流石の龍也も4本のソードビットに2本の剣の攻撃はかわせない

「箒!龍也を!」

身を起こそうとして無理だと判断したのか一夏がそう叫ぶ。

「鈴!セシリア!」

「言われなくても!」

「判つてますわ!!」

疲労困憊で動けない一夏達は駄目だ。動ける私達が何とかしなければ。私達がISを展開しようとした所で

「やれやれ……あまり私を怒らせないでくれないかね?」

ゾクウ……

動かなければならないのに私達は凍りついたように動けなくなつた

「模擬戦をしたいのなら相手になる。訓練をしたいと言うのなら訓練にも付き合おう。しかしただの独りよがりの強さの証明をする相手になるほど私は暇じゃない」

「あ……ああ」

ヴィクトリアがそのまま後退する。圧倒的なまでの闘気。ただ存在するだけでその場を制圧する存在

「そんな力が強さだと思っているのなら……貴様はいずれ誰からも見放され死ぬぞ?ヴィクトリア」

ゆっくりと歩き滞空していた剣を掴み取りその切っ先をヴィクトリアに向けた龍也は

「もう1度言う。私を怒らせるな」

「あああ……うわあああアツ!!!」

パニックになったヴィクトリアが剣を振りかぶる

「ふー致し方ないな。少々痛い目に会ってもらおうか」

龍也が居合いの構えを取り一閃しようとしたところで

「やれやれ……これだからガキの相手は疲れる」

「千冬姉!？」

「織斑先生」

龍也とヴィクトリアの間に織斑先生が割り込みその一撃を防いでいた

「ISも展開して無い人間に切りかかるか？代表候補生」

「え……あ、その」

しどろもどろで目に見えてうろたえるヴィクトリア

「そしてお前もお前だ。ISくらい展開しろ」

「どうにもその余裕が無かったもので」

「そうは見えなかったがな」

にらまれた龍也は

「買い被りですよ」

「どうだかな。まあ良い、模擬戦をするなど言わんがこんな事をされては困る。学年末トーナメントまで一切の私闘を禁じる。いいな？

スミス、八神」

「は……はい」

「別に私は争いたかったわけじゃないんですけどね」

しよぼんと頷くヴィクトリアとやれやれと肩を竦める龍也を見ながら

「では解散!!ああ、それとスミスは職員室に來い説教だ」

「はい……」

パンと織斑先生が手を鳴らしたのを合図に一夏が立ち上がり龍也に駆け寄る

「だ、大丈夫か？」

「この程度と言うことは無い」

血がポタポタと垂れている。見かけよりは浅いだろうが怪我は怪我だ

「大変。早く保健室に行かないと」

「問題ないと言っているシャルル」

「駄目だよ！化膿とかするかもしれないじゃない!!ほら早く保健室に行くよ!!」

龍也の手を取り強引に引つ張っていくシャルルと一夏を見ながら私も後を追った

「問題ないと言っているだろうか？」

「駄目だっ！止血位しろ!!」

「そうだよ!!」

むうう……これくらい本当にどうでもないのだが頬にガーゼを当てられながら唸る。ヴィクトリアの一撃をかわせなかったのは私のミスだし。それにそもそもこれくらいの怪我で大袈裟だと思う

「これでよしっ」と

パチン

シャルルがテープを切りながら言う

「礼は言う、ありがとう」

「どういたしまして」

シャルルがハサミをしまいながら言う、人数オーバーなので今保健室に居るのは、私と一夏とシャルルとセシリアだった

「申し訳ありません、ヴィクトリアさんが失礼な事を」

「お前が謝る事じゃない。怪我も大事無いし気にしないでいいさ」

ISを展開しなかった私のせいでもあるし。どうにも私は魔道師として生きた時間が長すぎた。あの程度態々特別な武装を展開しなくて良いと判断してしまった、その慢心が怪我の原因となった。全く持って私の自業自得だ。まあ1つ幸運なのは。なのはとフェイトが居なかった事だ。あの2人がいればヴィクトリアは間違い無く半殺しになった筈だ。そんな事を考えていると保健室の外からズドドッ!!と走って来る音がする

「何の音だ？」

「さあ？」

私と一夏が首を傾げていると保健室の扉が吹き飛びそして

「織斑君！」

「デュノア君！」

「八神君！」

うお!? 視界が一瞬で手で覆い尽くされる、正直軽いホラーだ

「な。なんだ？」

「どうしたの皆、落ち着いて！」

「「これ見て!!!」」

動揺している私達の前に1枚のプリントが差し出される。1番近くにいた一夏が代表して読み上げる

「今月末の学年末トーナメントはより実践的な模擬戦闘を行うため。2人組みでの参加を必須とする。なおペアが出来なかったものは抽選で決定する」

「そう! だから!!!」

女子達が手を伸ばし

「私と組んで! 織斑君!」

「一緒に頑張ろう! デュノア君!!!」

「お願いします! 私と組んでください!!!」

手が無数に差し伸べられる。はつきり言って超怖い。ネクロ300体に囲まれた時でもこんな恐怖は感じなかったぞ……

「悪いな! 俺はシャルルと組む!! だから龍也を誘ってくれ!!!」

「な! 一夏! 私を見捨てるというのか!!!」

そう言われた女子達が一斉に私を見る。こうなったら即座にコートを脱ぎ

「私も組む相手に心当たりがあるので失礼する!」

コートを頭から被り転移する。消えた後の保健室から

「き、消えた!?!」

「マジック!?! それとも忍術!?! どっちなの!?!」

と言う声が聞こえて来たが私は知らん……見つかると厄介そうなので転移した場所から走り整備室に逃げ込む。

「お前何してるんだ?」

簪がいつも陣取っている整備室の一角を指し移動していると、近くのコンテナの陰に見知った人物を見つけた

「うっ……あのね？簪ちゃんと話をしようと思ったんだけどね？怖くて動けないのよ」

「お前。それでも学園最強を名乗ってるのか？」

「それとこれは別の話なのよ」

「こっち見つかると話も出来ん」

簪から離れたコンテナに楯無と並んで座る

「私はさ、小さい頃から当主になるべく育てられたのよ、完璧で強くないきやいけなかったの……だから苦手な勉強もしたし料理も出来るようになった。でもね……何より大切な妹と疎遠になった……正直辛いよね。大切な妹に頼られないのって」

「その気持ちは判らんでもないな。私も妹が居るし」

「あははは。お兄ちゃんとお姉ちゃんって共通点ね」

あはははと乾いた笑い声を上げていた楯無は

「はあ……もう簪ちゃんは私を頼ってくれないのかな？」

「馬鹿かお前？」

「何よう。これでも私貴方の先輩よ？馬鹿は無いでしょ？馬鹿は？」

「そんなくだらん事を考えるお前は馬鹿者だ。大体血を分けた姉妹だろうよ？仲違いも些細な事なら仲直りも些細な事で出来るものだ」

よつと座っていたコンテナから飛び降りる

「どこ行くのよ」

「学年末のトーナメントのパートナーに簪を誘おうと思ってな。そもそも私はその為に整備室に来たんだし」

「高町さんとハラオウンさんは良いの？」

「良いさ、そもそも私も協力したISだやはり近くで見たいだろう？」

なのはとフェイトは恐らく2人で組むだろうし。私はどの道別のパートナーを探すつもりだったし、そう言う面で簪はベストパートナーとも言える

「簪ちゃんを虐めたら許さないわよ」

「そう言うのは普通に話せるようになってから言え」

「言うこときついわねー」

がっくり肩を落す楯無に

「人間本当に助けて欲しい時は心から助けて欲しい人物の名を呼ぶものさ」

「それが私だと?」

「さあな?」

「貴方。私を慰めたいの?とどめ刺したいの?どっち?」

「お前の受け止め方次第だ」

「じゃあとどめ刺したいのね?」

「案外ネガティブなんだな、お前」

私がそう言うのと楯無もコンテナから飛び降り

「じょーだんよ、じょーだん。一応慰めてもらったって受け止めとくわ」

「どこへ行く?」

「私も私で用事があつてね?じゃあねー簪ちゃんを宜しく」

そう言つて整備室を去つていく楯無を見ながら

「変わった奴だな。本当に」

どうにも掴み所の無い奴だ。だがまあ嫌いなタイプではないなと思いつつながら私はさつき保健室で拾った、ペアの申し込みの紙を持って簪の所へ向かった

「えつと照準値を+30……あと機動力を10%上げて」

トーナメントに向けて私は式式の最終調整をしていた。

(優勝できたら、龍也君と遊びに……つて違う!違う!!やるからには勝つつもりで行くんだ)

一瞬本音が出かけたがそこは頭を振り、その考えを飛ばすそんな不純な考えでは駄目だ

「よう。簪調子はどうだ?」

「ふえ？ たたた。 龍也君？」

気が付いたら隣に龍也君がいて驚きのあまり椅子から落ちかける
「おいおい、 慌てすぎだ」

龍也君が即座に私の手を掴み椅子に引き戻し、私の前に紙を置く

「これは？」

「ペアトーナメントの申込書」

「へ？ ペア？ シングルじゃなくて？」

初耳の事だったので聞き返すと

「何でもルール変更があつたらしくてな。 ペアになったらしい、でど
うだ簪。 私と組まないか？」

「え、 ええ!? で、 でも優勝出来たら約束はどうなるの？」

「うーん……私と組んでも優勝は優勝だろ？ 約束は護るぞ？」

……どどどどど、 どうしよう!! 優勝なんて無理だと思つてたからの
約束で龍也君と組むと優勝の目が見えてくる。 で、 でもそうになると

(龍也君とデートするってことに!?)

嬉しいような、 恥かしいような……

「あーもしかして嫌か？」

「嫌じゃない! 嫌じゃないよ!!!」

私が手を振りながらそう言う

「そつかそれならよかつた、 じゃあこれにサインしてくれ。 後は私が
職員室に持っていくから」

「う、 うん」

渡された紙に自分の名前を書く

「よし、 これでOKと。 じゃあ明日からトーナメントに向けて準備し
ような」

その言葉に頷き

「よ、 宜しく願います! 龍也君!!」

「その君付けは止めて欲しいな。 君付けには馴れてない。 龍也でい
い。 ほれ言ってみろ」

え……えええええ!? 男の子を呼び捨てなんてした事無い

「う……ううう。 た、 たた、 龍也」

「うんOKだ。じゃあ明日から宜しく頼む」

そう言つて整備室を出て行く龍也君……いや龍也の背を見ながら。高鳴る自分の心臓を宥めるのに一苦労していた……

「頑張ろう……龍也の足を引っ張らないように」

私はそんな事を考えながら式式の調整を再開した

第29話に続く

第29話

第29話

「ユウリ、少し付き合ってくれるかしら？」

「また面倒ごとか？ワタシはサイレント・ゼフィルスの調整があるのだが？」

「持っていたスパナを床に置きながら言うと」

「そう言わないで頂戴。今回はオータムやMじや駄目なのよ。なんせあのネクロの幹部との対談だからそれなりに準備をしたいのよ」

ネクロ……あの化け物集団か

「そう言うことなら話は別だ付き合おう。しかし何時裏切られるかもわからん奴と良く手が組めるな」

「敵の敵は味方、手を組んでいられるうちは手を組むわ」

「寝首をかかられんと良いがな」

サイレントゼフィルスを待機状態に戻し戸棚に置く

「着替えてくる。出発は何時だ？」

「今から1時間後、汗臭いからちやんとシャワーを浴びてから着替えるのよ」

スコールに判った、判ったと返事を返しワタシはシャワールームに向かった

「この身体にも馴れた者だな」

最初は戸惑ったがまあそれも良い思い出か。まあ出来る事なら（元の身体に戻りたいがな）

素肌についた傷を撫でながらそんな事を考える。まあ今更もとの身体に戻るのも考え物だがな。身体を拭いて何時もの様に首元で髪を縛り黒いノースリーブの上着を着込み。スコールの元へ向かう
「あら早かったのね？もう少しゆっくりシャワーを浴びるかと思ったわ」

「汗と油を流せばそれで良い。行くぞ」

「自分の身体には馴れた？」

「嫌味かそれは？」

ワタシの経歴を知るこいつが偶に憎い時がある。

「そう言うつもりじゃないけどね。じゃあ行きましよう？街のカフェテリアで待ち合わせなの」

「……あの化け物が？カフエで？」

1度ネクロを見たことがあるがどう見ても騒ぎになるとしか思えないのだが

「向こうが指定してきたの。何でもいろんなタイプが居て人と同じ姿のも居るそうなのよ」

つくづく信じられんな……ワタシはそんな事を考えながらスコールと共にマンションを後にした

「貴女かしら？ファントムは？」

カフエの一角に座る女に話しかけるスコール見た目は完全な人間だが

「そうよ、ファントムタスクのスコール・ミューゼル。そしてユウリ・クロガネ。いえ黒武士と呼ぼうかしら」

ワタシの事もお見通しか、ワタシは椅子に腰掛けたスコールの後ろに立ち警戒しながら2人の話に耳を傾けた

「確認しましたか？お嬢様」

「ええ。亡国企業のスコール。そして黒武士。確かに確認したわ」

通信機から聞こえてくるフレシアに返事をする。街を見張っていたフレシアからの報告でスコールを見つけたと聞いた私はIS学園を抜け出し、監視に来ていた

「それでやはりあの男が黒武士ですか？」

「後姿だけじゃ確信できないけど、多分ね髪の色が同じだし」

あのと時の研究所で見た顔を確認して無いからなんとも言えないが。恐らく同一人物

「近くに盗聴器は？」

「仕掛けてあります。ただ私の位置では周波数が合いません。お嬢様しか話を聞けないかと」

「OK。じゃあ私に近寄る敵が居たら教えて。私は話と黒武士に集中するから」

盗聴器の電波が悪い。その話に集中して無いと聞き逃す可能性がある、こういう時1人では無いと言うのは心強い。背中を護つてくれるからだ、私はそんな事を考えながら盗聴器から聞こえてくるスコール達の話に耳を傾けた

『どうも……ネル……が、勝手に……てるみたいなの』

『……は、貴方達には……ごうなのかしら?』

通信が乱れて何を言ってるか良く聞こえない

『あの子は……天の……護者……に執着……してるから、……こつちにの……画なんて。おかまいなしなの……』

『夜……守……貴女達の敵……やはり……威なのかしら?』

『ええ、……守護者……は私……達の仲間を……1人……3000体………したの』

聞き取れた単語をメモする

『夜天の守護者……。もしかして黄金の騎士のことかしら』

都市伝説でまことしやかに語られる存在の事かもしれない。ではスコールと話しているのは

「黒い悪魔なのかもね」

黄金の騎士と対成す黒い悪魔なのかもしれない

『私達は……ぎで……園を……撃する……魔はしないで欲しい』

『判ったわ……イナリ……こつちは……まだ……ける段階じゃないし』

園?……IS学園のこと!?襲撃計画!これは連絡しないと

『貴女……の……画は。判ったわ……何時……かしら?』

襲撃の日時!これだけはちゃんと聞かないと

『教えたいけど……駄目……ネズミが……てるから』

「お嬢様!!早くその場を離れてください!!急に貴女の背後に!!!」

フレリアの言葉を最後まで聞く事無く反射的に飛び退きミステリ

アス・レイディを展開する

「ほほう、ネズミかと思えば小癩な牙を隠した猫であつたか。くつく」
「なっ!？」

私が居た場所に振り下ろされたシャムシール。それを手にしていたのは

(ば。化け物!?)

黒い身体を持ち左胸を覆うグレーのブレストプレートを身に着けた。狼の様な顔をした異形がそこにはいた

「ふふん。良い反応だ。やはり戦いとはこうでなくてはな。詰まらんイナリに着いて来て意味があると言うもの。さあ剣を取れ強者よ。このLV3アヌビスが貴様の命を刈り取ってやろう」

その言葉を聞く前に私はビルから飛び降りた、本能的に理解したあれには勝てないと

「逃げるか……貴様は強者などでは無く弱者であつたか。ならば早々に死ね!!」

空気が爆発した音と共に後追ってくる異形の気配を感じる。なんとか振り切らないと下の交差点に着地した私は思わず我が目を疑った

「なっ!?!時間が止まつてる!?!」

人が……車が……舞い散る花びらが全て空中で静止している。何が起きていると言うの

「静止結界。私の存在はまだ知られるわけにはいかないのな。張らせて貰った」

「っ!?!」

瞬時加速で一氣に後退しながらラスティーネイルを展開する

「ほう。剣か、良いぞ我が剣をその程度のおもちやで受けられると思うなよ!!」

一氣に間合いを詰めたアヌビスとか言う異形が上段からシャムシールを振り下ろす

「な!?!」

ラスティーネイルが一瞬で砕かれ粒子に還る

「ふん、一合とも打ちあえんとは興ざめだ。やはりこの世界の人間は余りに脆い」

この世界!? 訳が判らないだが逃げないと私はそれだけを頭にアヌビスから背を向け逃げ始めた

(ふ、振り切れない!)

ブースターを全開にしても振り切れないそれ所か

「逃げれるものなら逃げてみよ! 我を楽しませれば見逃してやらん事も無いぞ!」

時折黒い光弾を放ち、私を追いかけてくる……どう見ても遊ばれている

(私1人じゃ逃げ切れない)

「何だ。この程度か……」

「!?」

何時の間!? 何時の間にか私の進行方向に回りこみ剣を振りかぶっているアヌビスが見える

「死ぬ。人間」

アヌビスが無慈悲にシャムシールを振り下ろす、それはやけにゆっくりに見えて

(ここで死ぬの?)

避けれないそれが判った。単純な話だ私とアヌビスの力量さがありすぎる。

(簪ちゃんと仲直り出来ずに死ぬなんて……)

仲直りしなかった最愛の妹と……でもそれは無理な話。何故なら私はここで死ぬから

「ええい! 何をしている! 更識家当主! とつと逃げろ!!!」

ヒュンヒュン

音を立てて飛んで来た剣がアヌビスのシャムシールを弾く。驚きに目を見開き剣の飛んで来た方向を見るそこには黒いISを展開した黒武士の姿があった

(くっ。ワタシは何をしている)

自分の行動が理解出来ず、心の中で自分を叱咤する。更識の当主を助ける事にワタシに何のメリットも無い。いや寧ろデメリットしかないのにワタシはスコールの元を離れ。更識の当主の元へ向かっていた

(理解できん。ワタシは何をしている)

「貴様は……確かイナリが手を組んだ組織の黒武士だったか？なぜ我の邪魔をする」

異形がシヤムシールを向けそう尋ねてくる

「悪いが……今のワタシは黒武士ではなく。ユウリだ、黒武士でないワタシはお前達とは何の関係も無い。ワタシの意思で邪魔させてもらう」

瞬時加速で倒れている更識の当主をかつさらいそのまま逃走する

「ほう。よほどこの世界の人間は追いかけてつこが好きなのだ。ならばそれに乗るのも一興。我から逃げ押せて見よ」

異形の声聞きながらワタシは再度瞬時加速を発動させた

「どうして私を助けたの？」

「助けたわけじゃない。お前はワタシの獲物だ、横から攫われるのは納得いかないそれだけだ」

同じ様に瞬時加速しながら尋ねてくる。更識の当主に

「この先にワタシが来た道がある。それでここから出れるはずだ」

「答って……確信は無いの？」

その問いかけに無言で返答する。あのネクロとか言うのにワタシ達の常識は通用しない。どれも憶測でしかない

「嫌なら1人で戦え。ワタシは知らん」

「じょーだん。あんなのに1人で立ち向かうなんて自殺行為よ」

ちらりと後ろを見る。シヤムシールで車やビル、街頭を切り裂き瞬時加速に迫る勢いで追って来るネクロの姿

「ワタシもそう思う」

「なら早く逃げましょう」

その言葉に頷き再度瞬時加速に入るが

「それはもう何度も見たぞ。人間」

!!

瞬時加速と同等だと!?振り切るために使った瞬時加速だがそのスピードに軽々ついてくるネクロ

(つくづく化け物だな!こいつらは)

見た目通りの化け物具合に舌打ちしながら

(この先だ。次の通路の右に曲がって2ブロック先の交差点だ)

(本当なら短いと思う距離なだけどねえ)

ISなら一瞬とも言える距離だがネクロのせいでもなく遠く見える

「興醒めだ。もうお前達は死ね」

腰の鞘から抜刀されたシャムシールが更識の当主に向かって振られる。やけにゆっくり見えるその瞬間ワタシは初めてしつかり更識の当主の顔を見た。その顔はワタシが護れなかった■■■と同じ顔をしていた。それを見たワタシは

「ちいッ!!」

「えっ!?!」

反射的に更識の当主の腕を掴み自らの胸の中に抱き抱えた

バキヤン

「ぐうッ!!」

振り下ろされたシャムシールの刃がアマノミカゲの装甲を砕く。

(何をしてるんだかわタシは!!!)

ターゲットだった筈の女を助けて負傷するなんて間抜けにも程がある。今の一撃でブースターがやられた失速しながら腕の中の更識の当主に

「ブースターが死んだ。もうさつきまでのスピードは無い、先に行け……」

「そんなの聞けるわけ無いでしょ!後少しなんだから!!」

逆にワタシを抱え直し飛翔する更識の当主に

「お前は馬鹿か?敵を助けて何の意味がある?」

「貴方は言ったわよね?黒武士じゃなくてユウリとして邪魔をするっ

て。ならば私は当主としてじゃなく更識楯無として貴方を助ける」

「つつと笑う楯無の顔がまた■■■■に見えて。思わずそっぽを向きながら」

「逃げ切れんと思つたらワタシを捨てろ」

「残念♪最後まで逃げ切るわよ。運びにくいからIS解除してくれない?」

「ああ」

アマノミカゲを待機状態に戻す

「それじゃあ敵さんの距離とか宜しく」

「お前こそ行き成り回りこまれたとか止めてくれよ」

こうしてワタシと楯無の奇妙な共同戦線が始まった

「右後ろ75!シヤムシール来るぞ!!」

「右75ね!」

急旋回でシヤムシールをかわすがその旋回でスピードが著しく落ちる。その隙を狙って加速してくるネクロ目掛け

「射撃は苦手なんだが。致し方ない」

ガウンツ!!ガウンツ!!

「コルトパイソンって……随分古い銃ね」

「ふん。特製の弾丸を撃つのに普通の銃じゃ駄目なんだよ」

「こんなものがツ!!なにッ!!」

銃弾が途中で螺旋状に開きネクロの身体にめり込む

「なにあれ?」

「弾丸の持つ慣性エネルギーでその銃弾自身を変形させ爆発的に威力を高める物だ。まあ材料がISの装甲なんでそうは作れんがな」

「あと何発ある?」

「あと2発だ。それまでに辿り着け」

「無理を言ってくれるわね!!」

投擲された街頭を避けながら言う楯無に

「死にたくないだろう?なら頑張れ」

「当然!」

距離は後700Mと言った所か……ワタシは自分が来た場所を見

ようとして

「なっ！急げ！！閉じかけてるぞ！！」

「嘘？！」

ワタシが来た時より狭間が狭くなってる。このままでは脱出は無理だ

「逃がさんさ。ここで狩らせて貰う！」

そうかこの世界はやつの世界。出口を閉じるのは道理か！どうする！どうやって逃げる！ワタシが必死に頭を回転させ脱出方法を考えていると

「そのまま進め。結界は私が壊す」

何処かから知らない声がある、アマノミカゲを部分展開しハイパーセンサーでその声の主を探す

（居た！何者だ？）

太陽を背に弓を引き絞る男の姿がビルの屋上にあつた。だがその顔は見る事が出来なかつた、太陽の光ぐらいでハイパーセンサーの視覚は乱れない筈なのだが

「我が骨子は捻れ狂う……写・螺旋剣ツ！！」

ゴウツ！！

空気を引き裂き剣が弾丸となり閉じかけていた結界に突き刺さる

ギヤリギヤリツ！！

耳障りな音を立てて剣が螺旋回転しながら進んで行く

「馬鹿な！あの剣はー」

ネクロがその剣を見て驚愕の声を上げる中剣が爆発し。ワタシと楯無が脱出できるだけの穴が開くワタシと楯無はそのままその穴へと飛び込み結界の外へと逃げ出した

「貴様……何故ここに居る？」

「ふむ。貴様らの思惑通りに行かせるわけないだろう？」

2人が脱出したのを確認してからネクロの前に飛び降りる。街中にネクロの気配を感じ教室に幻術を施し、そのまま転移してきたがまさか楯無が居るとは思ってた。少々焦ったが間に合ったので

無問題の筈だ

「さて？見たところLV3の様だが……戦うというのなら相手になるぞ」

投影でグラムとレーヴァティンを呼び出し構えると

「流石に分が悪い。取引をしないか？」

「ほう？取引？私がそんなのを受けるとでも？」

ネクロ相手にかける情けはない。取引など受ける気はない

「あの2人が逃げた先にはLV4の1体が居る、我が連絡すればすぐに2人に襲い掛かるだろう。我を見逃すと言うのなら連絡はしない。どうだ？守護者」

「その程度にブラフに引っ掛かるとでも思っているのか？街中にお前以外のネクロは反応はなかった。そんな取引に乗る理由はない」

グラムを向けるとネクロは

「お前は忘れていないか？人間にネクロの細胞を植え付けネクロ化させる事を？我らがどれだけの世界に渡り手を伸ばしているか判らぬお前ではないだろう？」

人からネクロ化した者は活動を開始しないとネクロだと判らない。こいつのいう事は一応的を射ている

「なるほど、確かにお前の言う事は判る。だがお前を見逃したところでお前が約束を護る保証はない、貴様を倒しすぐに2人の元へ向かうのが最善だと思うが？」

「はっ！我は自らの剣に誇りを持っている。嘘はつかんし誓いも破る気はない。我はネクロだがそれと同時に誇り高い戦士だ。その誇りに賭け嘘偽りは言わん」

にらみ合うこと数秒、私は投影していた剣を破棄した

「とっとと行け、次ぎ会えばお前の命はない」

「その台詞そっくりそのまま貴様に返すぞ、守護者」

ネクロはそういうと転移して消えた。私はそれを確認してから2人の気配を探ったが。2人のそばにネクロの気配はない、どうやらあのネクロは嘘は言っていなかったようだ

「やれやれ。本格的にやつらが動き出したか。これは警戒のレベルを

上げる必要があるな」

私はそう眩きその場から転移した。太陽を背にしてたし幻術も使ってたからばれてないとは思うが……まあその時はその時考えるでしょう

「た、助かった」

私は思わずへたり込んでそう眩いた。あの異形との戦闘は正直きつかった……その極度の緊張から開放され思わず気が緩む

ヒタ

「何のつもり？」

「言った筈だお前はワタシのターゲットだと」

喉に突き当てられたサバイバルナイフを見ながら

「へー助けられた恩を仇で返すんだ。男らしくないんじゃない？」

「そんなのは気にしない。ワタシは依頼を遂行するだけだ」

冷静な物言いだ

「その割には手が震えてるんじゃないやなくて？」

「くっ黙れ」

「貴方は私に誰を見たのかしら？」

さつきユウリの首元から鎖が切れ落ちたロケットペンダントを見せる

「お前！中を見たのか!？」

「失礼ねー、幾ら興味があっても他人のロケットの中なんか見ないわよ。さつきのブラフだったけど凶星だったみたいね。ユウリ」

私の喉に突き当てていたサバイバルナイフを元の腰の鞘に戻しながらユウリは

「返せ。それは大事なものだ」

「それは黒武士にとって？それともユウリにとって？どっちかしら？」

あの能面のような顔が歳相応の顔に変化する。今彼は亡国企業の黒武士と私を助けたユウリの狭間にいる。今は武器による戦いでは

なく話による戦いをするべきだ

「……ユウリにとつて大事な物だ」

「じゃあ依頼は関係ないわよね？」

「……そうなる」

「もう私を攻撃しない？」

「ユウリとしてのワタシにお前を攻撃する理由は無い」

殺意が消えた事を確認してから立ち上がり

「じゃあ。お茶でもしない？」

「はっ？」

「だからお茶しない？疲れたし、喉渴いたし、お腹空いたし、ちよつと休みたいし。だからお茶しよ？」

「ワタシを誘っているのか？生憎だがそんなものに付き合う気は「これ捨てちやおうかなー？」

川に向けてロケットを投げる振りをする

「判った!!付き合う!!だからそれを返せ!!」

「お茶が終つたらね？」

ロケットを胸の中に突っ込む。これでユウリは力づくで奪い返す事ができない

「性悪女」

うらめしそうな目で私を見ながらユウリがそう言うので

「捨てるわよ」

「判った！悪かった!!謝る!!」

なんとなーくこのユウリと言う少年のあしらい方が判つてきた。

「じゃあいきましょう、近くに美味しいケーキを出すつて評判のカフェがあるのよ」

「……何が如何してこうなった」

がつくりと項垂れるユウリを引き連れ私はお目当てのカフェに向かった

「で、改めて自己紹介するわね。私は更識楯無。ご存知の通り更識家の現当主よ、で貴方の名前は？」

「ユウリ」

「苗字は？」

「どうしてそこまで言う必要がある？ワタシはまたお前の敵になるかもしれないのだぞ？」

「それでもよ。ほら早く言いなさい」

「クロガネ。ユウリ・クロガネだ」

不貞腐れたように名乗るユウリに

「私は季節のタルトを頼むけど、ユウリは？」

「……同じで良い」

「はいはい。すいませーん！季節のタルト2つ。あとレモンティー2つ」

頼んだ品が来るまでの間。私とユウリは何でもない話をしていた

「そういえばさ。前研究所であった時。生きる目的について話したわよね？」

「……………」

「捨てるわよ」

「まだだ。そう簡単に見つかるものか」

観念した様子で喋るユウリに

「じゃあさ。夢とか無かったの？」

「……夢はあったが……もう叶わない。ワタシは何も護れなかった弱い人間だ……約束1つ護れなかった」

とても辛そうなユウリ……変な事を聞いてしまったかも

「お前はどうか？何よりも護りたいものはあるか？」

「あるけど……ちよつと複雑なのよね。私の場合」

苦笑するとユウリは

「当主として育てられ。完璧であり続けなければ無かったゆえのこじれか？」

「……結構詳しいのね？更識家の事」

「工作上。情報は嫌と言うほど頭に叩き込んでいる」

無表情でそう言うユウリは

「失言だった。謝ろう」

「あーううん。良いの私も変な事聞いたし」

……

この沈黙が痛い……何か話題は無いのか？

「ワタシから1つアドバイスをしよう。家族や姉妹は大事な物だ、大切にしろ。何もかも失った後では遅いぞ」

「それと似たような事を言われたわ」

あー誰かに似てると思ったたら八神君に似てるのね。雰囲気とか喋り方とか

「嫌がられてもその手を掴め。決して離すな。ワタシはその手を離してしまったお前はこうはなるな」

「1つ聞いてもいいかしら？エリス・V・アマノミヤと貴方の顔は良く似てるけどなんで？」

「他人の空似だ。ピピピ……呼び出しか。悪いが戻らなければならぬペンダントを返せ」

「あ、うん」

隠していたペンダントを返す、ユウリは馴れた手付きでそれを首から下げた

「ねえ？依頼で動くって言ってたわよね？もし私が貴方を雇うって言ったらどうする？」

「そうだな。引き受けるかもな……あそこに居てもワタシの探す物は見つからないだろうしな」

空を見上げるユウリに

「じゃあ。私が今度雇うわ。それで見つけましょう？貴方の生きる目的を」

「次があればな。ワタシにはもう次の仕事の依頼が入ってるんでな。運があればまたあおう」

ひらひらと手を振り歩いて行くユウリを見送り私は深く椅子に腰掛けた

(どうにもユウリはほっておけないのよね)

どこまでも落ちていく、彼の手は誰かが掴まなければならぬ……そんな気がしてならない

(変なの……自分の命を狙った相手なのよね)

どうしてそんな事を考えたのか判らず私は溜め息を吐いた

「お待たせしました。季節のタルトになります」

丁度その時店員がタルトを持って来てくれたが……もう1つ食べる予定だったユウリの姿は無い

(太るかしら?)

私はそんな事を考えながら2人分のタルトに手を伸ばしかけ

「そういえばあの人は?」

ビルの上で弓を構えていた男の事を思いだす。あの異形は男の事を知っているようだったが

「考えても仕方ないか」

正体不明の男として報告しよう、もしかすると黄金の騎士の可能性があると加えて。私はそんな事を考えタルトを食べていたのが数分後、血相を変えて走ってきたフレイアに物凄く怒られる事になるのだが。それはまた今度語るとしよう

「セリナ……空は青いな」

離れたところではぼんやりと空を見上げる

「闇に居ては見れぬ光。1度は諦めたが……また探してみるのも悪くないかもな」

楯無と居るとどうにも素が出てしまう。それはワタシにとって珍しい事だ。仮面を被り続けたワタシにとっては……

「闇の中で見た光……もう1度掴んでみたい物だ」

「貴方がスクールに紹介された黒武士ね?」

「そうだ。フロントム、仕事の内容を聞こう」

「話が早くて助かるわ。貴方の仕事は1つ、エリス・V・アマノミヤに貴方の素顔を見せるだけ。簡単でしょう?」

「報酬は?」

「欲しいと言っていたマルチタスクのプログラムの廃棄データを上げましょう。それを好きにカスタムすれば良いわ」

「確かに引き受けた。だが何故顔を見せる必要がある?」

「ふふふ……それは貴方には関係ないわ、プロは仕事の内容を詮索しない事よ」

確かにその通りだな

「決行はI S学園の学年末トーナメントの日よ。それじゃあちやんと仕事をしてね」

手を振ったと思つたら空気に溶けるように消えたファントムを見ながら

「さてと……次の仕事は……どこのを請けるかな」

そうは言いつつ。ワタシは次の依頼主はもうスコールではないと感じていた……そうきつとワタシが今度依頼を受けるのは……あいつに違いない

そして各々の策謀が巡る中学年末トーナメントの日が来た……

第30話に続く

第30話

第30話

「だ、大丈夫かな？……私なんかで大丈夫かな？」

自分達の出番を待っていると簪が落ち着き無さそうに尋ねてくる

「大丈夫だ。落ち着け簪。動揺と不安はいらぬミスを招く。気を落ち着ける、大丈夫私がフォローする」

「う、うん……」

落ち着け私。大丈夫ちゃんとできる、自分に言い聞かせるように咳く簪。トーナメントまで大分一緒に訓練をしたりしたがどうもまだ自分に自信が無いようで落ち着きが無い。まあ無理も無い。これが初めての正式な試合でしかも一夏達と同時に試合開始で緊張するなと言うのが

無理な話だろう

「さてと、私達の試合の相手だが。エリスとヴィクトリアのペアか。遠近のバランスが取れてるので正直不安はあるか」

抽選で決定したエリスとヴィクトリアのペア、エリスは完全近接特化でヴィクトリアは遠近万能型。タイプで言えば私と簪のコンビに近いが簪の錬度が低い分正直不安はある

「だがまあそう不安がる事もない。あーだこーだ考えるよりいざ始まってみれば何とでもなる」

考えても切りのないことは考えない。なるようになるさと開き直れと言うと

「そうだね。頑張る」

「その息だ簪。不安がるなどは言わん、勇気を持ってそうすればそれが翼となり道は開ける」

諦めや恐怖は何も生まない。必要なのは怖くても前を見ることだと告げる

「勇気を持つ……そうすれば前に進める……うん！やるだけやってみる!!!」

元気よく返事をする簪を見ながら、反対側のピットで待機している

エリスとヴィクトリアの事を考えていた

(馬は合わないだろうなあ……大丈夫かね？あの2人は)

エリスとヴィクトリアでは全く馬が合わないだろう。そうなるのは仲間割れだが、まあ代表候補生なので大丈夫だろうと思ひ。私は自分の出番を待っていた

「私の邪魔をしなければいい。アマノミヤ」

「ほかに言うことは無いですか？スミスさん」

腕組しながらそう言うヴィクトリアさんにそう言うが返答はなし。こんなことになるのなら誰か別の人を見つけたペアを組みば良かった。力だけが全てと思っているヴィクトリアさんとは壊滅的に馬が合わない。こんな状況で龍也君と戦えるわけが無い。しつかりとコンビネーションを決め隙を突かないと碌にダメージも与えられないだろう。このヴィクトリアは自分の力に自信を持ちすぎていて私の話はまるで聞いてくれない。斬艦刀の破壊力、獅子王刀による剣技の数と言った事を教えようとしても聞く耳持たず

(はあ……これならラウラと組んだほうが良かった)

ドイツの黒兎隊と一緒に訓練したラウラとなら馬が合うし。お互いの戦闘スタイルも判っている。

(でもラウラは箒と組んだしなあ)

あのラウラが自ら進んでコンビを組むのなら私かクリスだと思っていたが、まさか箒とは思っていなかった

(でも結構いい感じだね)

試合が始まっている。一夏君とシャルル君。それにラウラと箒のコンビは思ひのほか型に嵌まっていた。と言うのもラウラがワイヤーブレードとAICを駆使し箒が戦いやすいように戦況を整えつつ、一夏君と戦っているからだ

(前よりもっと戦い方の幅が広がってるね。ラウラ)

遠近万能は元よりだったが。今はそれより遥かに完成度が上がっている。でも今はラウラの事を考えている場合ではない。馬の合わないヴィクトリアさんとのペアで龍也君と簪のペアをどうやって打

破するか？それを考えなければならぬ

(さてとこの人と顔を見合わせても何も始まらないし。少し一人で考えよう)

私はそう考え控え室を後にした……

「やるな！一夏！」

「そいつはどうも！」

ラウラのプラズマ手刀を雪片と足で弾きながら自分の間合いを取ろうと加速を繰り返す

「10のワイヤーブレードの内3本を破壊されるとは予想外だった」

「俺こそ、お前と箒があそこまで相性がいいとは思わなかったぜ!!!」

キンツ!!!キンツ!!!

視界の隅ではシャルルと箒が斬り合っているが、シャルルは自分の流れを引き寄せることが出来ず苦戦の様子を見せている。

「箒！さがれ！」

「判っている！」

俺の間についてラウラがシャルルにAICを放ち動きを封じる

「貫った!!!」

「くっ!!!」

拘束された動きの中で上手く身を振り箒の一撃を交わすシャルルだがシールドエネルギーは大分減ってるだろう

「隙だらけだ!!!」

「ふっ！甘いぞ一夏」

雪片の攻撃をISの腕の装甲で受け流し。するりと俺の間合いに入り込んだラウラは

「龍也に教わった武術はどれも興味深いな！全く！」

ヒュウウウウ

ラウラが息を吸い込むのが判るそしてISの足元に地面があると仮定したのか、ISを身に纏ったラウラは

ズダンツ!!!

鋭い踏み込みと共に掌打を叩き込んできた

「かつかは?」

ISにダメージを与えるのではなく俺にダメージを与える拳法。SEこそ減ってないがダメージは深刻だ。

「くらえっ!!!」

ジャキンッ!!!

ラウラの肩のレールガンが俺を捕らえるが

「させないよ!!!」

「ちい!やはり専用機の無い筈では無理があつたか!」

ラウラは俺に集中してる間にシャルルが筈を戦闘不能に追い込んだ様でこつちに合流してくる

「すまん!ラウラ」

片膝を着き謝る筈にラウラは

「こつちのフォローが悪かった。少し休んでいろ。私は1対多にはなれている!」

その言葉に嘘は無い、ラウラは1対多の戦闘に馴れている。つまり筈が脱落した事で本来のスタイルに戻ったラウラは俺とシャルルのペアでも苦戦する事は間違いない

「どうした?来ないのか?」

「何、お前が体勢を立て直すのを待ってたんだよ」

レールガンを粉碎されバランスを崩したラウラを倒すのは容易い。だがそれでは意味が無いのだから

「ふっ、お前は教官の言っていた通りの人間だな」

「何だっつて?」

「愚直で真っ直ぐ……そして道を踏み誤らない強さを持っていると聞いている。だからだ……だからこそ私がお前と戦うには意味がある」

ラウラは両腕にプラズマブレードを展開し

「私が捜し求めた強さの答え。お前と戦えば判ると思ったのは間違いではなかった!!」

「そうかい!それは買い被りだと思っけどな!!!」

俺にそんな事を期待されても困るが。出来るだけ期待には応えな

いな！俺は雪片を構えラウラへと向かった。

「ほう、エリスか。どうした？」

「龍也君。貴方とどうすれば戦えば良いのか考えていたのですよ」

通路でバツタリ龍也君に出会いそのまま話し込んでいた

「ふむ、ヴィクトリアとは馬が合わないか？」

「ええ。どうにも考え方が随分と違ってるので」

「そうか、それは苦勞するな。後5分で試合開始だがそんな様子で大丈夫か？」

「敵を心配するのはどうかと思いますが？」

私がそう言うのと龍也君は違いないと笑った。暫く2人で話しながらピットに戻っていると

「誰か居る」

「ええ。判ります」

ここはピットで私達以外の人間は居ないはずなのだが。

「誰ですか？そこに居るのは？」

通路の影に誰かが居る。私と龍也君で警戒しながら訪ねると

「久しぶりといっておこう、エリス」

通路の影から顔を見せたのは……

「私？……!？」

私より背が高く力強いシルエットからして男性、しかも私と同じ顔をした少年が私を見ていた

「……その様子では記憶はないか。まあそれはそれでいいか」

私はその瞬間理解した。私は知っている私が純粋な人間ではなく。第一世代のIS操縦者の中でとりわけ優秀だった、人間のクローンであるという事を……そして同じ顔をした人物がいるそれは……

(私と同じクローン……!?!?どうしてここに!?!?何で私の前に現れた!?!?)

訳がわからずパニックに陥る

「さて、仕事は済んだ。帰る」

くるりと背を向ける黒武士に

「待つて！貴方は……貴方は誰？」

「お前が知る必要はない。大まかな予想は付いてるんだろう？それを答えとしろ」

突き放す言葉、これで私はわかった。お互いの出自など探るなど言っていることが、だがここには一番居てほしくない人が私の隣に居た

「お前達は……いや……あえて問うまい」

龍也君がそう言うのと黒武士は

「察していただき感謝を。神の王とお呼びすれば？」

「ふっ、そんな大層な者ではないさ。しかし何故その名を知っている？」

神の王？龍也君のこと？私が首を傾げていると、頭の中に声が響いた

「ねえ！ねえ！！作られた人間の気分はどう！本当の親もない！ただの培養液の中から生まれた気分はどんな感じ？」

楽しそうでしかしそれでいて狂気の色をにじませた声が頭の中を絶え間なく響き渡る

「無数の死の上で成立した命！欠けた心！それで貴方は何を見れるの！どこへ行けるの！ねえ！！」

声を出そうにも声が出ない……動くことも出来ずその残虐な言葉に心をえぐられる

「足元見てみなよ？造られた人間。貴女ができるまで死んだ皆が貴女を呼んでるよ？」

足元を見る、そこには身体が欠けた同じ顔が無数に転がり、その腕を、腕のないものは視線を……私に向ける

「どうして？お前だけが？」

「同じワタシなのに？」

「憎い！妬ましい」

怨嗟の声が絶え間なく私を襲う

「ねえ？貴女に生きてる価値はないの？だから……こつちにおいで

？」

目の前の闇から無数の黒い手が私を掴んだ……

「神の王、気をつける死霊使いの小娘がお前を狙っている」

「何故そんな事を教える？」

黒武士が告げるネクロの情報を聞きながら尋ねると

「ワタシはやつらが気に食わない、それが理由だ」

「まともな人格者のようだな」

私と黒武士が話をしていると突然

「あああああアツ?!?!」

エリスが絶叫すると同時にヤタガラスが展開されるが。何時もの美しい黒い装甲は赤黒く変色し、エリスの顔にマスクが現れていた

「!?なぜだ!?なぜ暴走している!?何が起こっている!?!」

「嫌だ!!私は!ワタシはわたしわたし!!ワタシは誰!?ワタシはなに!?ワタシワタシ!?!」

壊れた機械の様に頭を抑え絶叫を繰り返すエリス

【あはは!!簡単だねえ!?人の心を壊すのは!!!】

楽しそうな女の声が辺りに響き渡る。その時に気付いた

(魔力!?しかもエリスだけに指向性の……ちい!!そう言うことか!?)

私とあの少年が話しているうちにネクロが魔法を使いエリスにか言い続けていたのだ

「ああああ!!もう全部どうでも良い!!ヤタガラス!!全部!!全部私も何もかも壊して!!もう嫌だ!!生きてたくなんかない!!」

エリスの顔を覆い隠した仮面の目が紅く輝く

「あ……あああああアツ!?!?!」

一際大きな絶叫と共にヤタガラスが当たり一面にエネルギーを撒

き散らす

「ちい！あの女！ワタシを騙したな！！くそがッ！！」

ユウリは舌打ちと共に通路を走っていく

「……」

ヤタガラスは私に目もくれずピットに向かっていく

「簪が！くそ！ネクロどもめ！やっかいな搦め手を！！」

子供の精神ほど壊し易いものはない、それが奴らの常套手段だとは知っていた。

「くっ間に合え！！」

今のヤタガラスは暴走状態と見て間違いない。こんな状態のISと簪が戦えるわけが無い！それにエネルギーに引き寄せられて一夏の所に行かれても困る。私は零式を展開しヤタガラスの後を追った

ドガンッ！！！！

ピットの壁が破壊されてそこからエリスが姿を見せる

「え。エリス？」

「■■■■ッ！！！！」

咆哮と共に腰の刀を抜き襲い掛かってくるエリス

「零式！！」

緊急展開をしつつアリーナに飛び出す、何が原因かはわからないがISが暴走してるのは判る

(龍也は?)

通路に出ていた龍也がどうなったのか判らない。通信を繋げたいが通信はジャミングされていて使用できない

武装をコールしようとするが

「は、はやッ！！かはっ！！」

ドゴンッ！！！！

凄まじい破壊力の蹴りと叩き込まれアリーナの壁に叩き付けられる

「げほっ!!ごほっ!!」

「何だ!?何ごとだ!？」

その衝撃音に気付いたのか隣のピットに居たヴィクトリアさんが飛び出してくる

「■■■■ッ!!!」

「なっ!?ぐあッ!!!」

ヤタガラスがコールした槍の直撃を喰らい吹っ飛ぶヴィクトリアさん

『なんだ!?何が起こっている!?IS2機の同時暴走だ!?くっ!山田君来賓を避難させろ!!私は一夏のほうへ向かう!!』

アリーナに向けてのオープンチャンネルで来賓達に避難勧告が出される

『簪ちゃん!ヴィクトリアと一緒に隣のピットまで逃げて!!今のヤタガラスには勝てない!!』

ツバキさんの警告は聞こえたが

「くっ!!は。速い!」

常に瞬時加速しているようなスピードで私とヴィクトリアさんに襲い掛かってくるヤタガラス

『嘘?ステータスブーステッド発動中!?駄目!!駄目よ!!エリスちゃん!!それを続けたら死んじゃうわよ!!!』

ステータスブーステッド!?それって確かヤタガラスのワンオフアビリティの!?ISの性能を爆発的に上げる代わりに操縦者の神経を極度に圧迫して、しまいには操縦者の精神をズタズタにして廃人にしてしまう危険性のある奴……エリスがその危険性を言っていて発動しようと思わないと言っていたワンオフアビリティが発動している!?

『山田先生!訓練用の打鉄を回してください!!私が出てエリスちゃんを止めるから!!!』

『駄目です!!アリーナにロックが掛かって解除できません!!!』

動揺するツバキさんと山田先生の話に気を取られた瞬間

「■■■■ッ!!!」

ヤタガラスが腰の鞘に刀を仕舞う

(清流ッ!? 駄目避けれない!!!)

エリスの得意技の抜刀術。それをステータスブーステッド中に喰らえば。それで式は動けなくなる。いやそれで済めばいい、下手をすれば絶対防衛が発動していても重症になりかねない。思わず目を硬く瞑ってしまう、だが来る筈の衝撃は来なかった

「!? 龍也……」

「ぐッ……威力が桁違いすぎる……」

零式が一撃で大破しPICも不調になったのか崩れ落ちる、それをヤタガラスが追撃する

「くっ!! 逃げる!! 簪、ヴィクトリア!! あっちのアリーナのロックは外れてる! 逃げるまで時間を稼ぐ」

PICが死んでるので着地し刀を構える龍也に

「で、でも!?」良いから逃げろ!!! PICがやられてる以上長くは持たん!!! 行くぞ更識!! 「は、放して!! 龍也とエリスが!?!」

私の腕を掴み隣のアリーナに引っ張っていくヴィクトリアさんに

「私のISも半壊だ! このままいても足手纏いになるだけだ!!」

強引に連れられ私は隣のアリーナへと連れて行かれた

「くそ!! 何だよ!! 何が起きてるんだ!!!」

ラウラが突然咆哮を上げたかたと思うとラウラは自らのISに取り込まれたのか、その姿を変えたそれは千冬姉の駆ったISに酷似しそしてその剣術も間違い無く千冬姉の物だった。俺はその攻撃を防ぐので手一杯で碌な反撃も出来なかった

「くっ!?! こっちのISも暴走してるのか!?!」

「は、放して!!」

俺とラウラが戦っているアリーナにヴィクトリアさんと簪さんが入ってくる。簪のISは無傷だが、ヴィクトリアさんのISは半壊していた

「一夏! 危ない!!!」

「な!?!ぐっ!?!」

気を取られた一瞬で間合いを詰められ黒いISの一撃を喰らい箒のほうに弾き飛ばされる

「一夏!!」

「す、すまん箒!」

弾き飛ばされた俺を箒が受け止めてくれるが、パワーアシストに切れたISでは完全に衝撃を殺しきれず倒れる。白式はさっきの一撃でシールドエネルギーが底を着いたのかその姿を消した

「くっ!もう来たのか!?!」

ヴィクトリアさんの焦った声がしたと思うと2人が来た方向から赤黒いISが姿を見せる

「ヤタガラス?……エリスさんか!?!」

それは多少形状こそ違うが間違いなくエリスさんのISだった

「■■■■!?!」

そのISの腕の中にあるのは

「斬艦刀!?!」

龍也のISの武器の斬艦刀の折れた切っ先だった

「くそ!!ぐあっ!!」

ラウラとエリスさんのISの一撃を喰らい弾き飛ばされるヴィクトリアさん、その一撃でSEが尽きたのかISが強制解除される

「な。なんてパワーだ一撃だシールドエネルギーを持っていかれた!?!」

これで戦えるISは箒さんとシャルルのISだけだが、暴走状態の2機のIS相手に戦えるとは思えない

「ひっ!?!」

2機のISがその切っ先を箒さんに向ける。

「くそ!!逃げろ!!箒さん!!」

そう叫ぶが箒さんはAICに拘束され動けない……

「あ……ああ……」

エリスさんのISがゆっくり刀を振りかぶる。助けに行こうにも

俺のISはエネルギー切れで動けない。せめてもの救いはラウラのISが動いてない事だが。今の状況では何の救いにもならない
「なんとかならないのか!？」

「方法が無いわけじゃないけど間に合わない!!」

俺とシャルルの悲鳴にも似た叫びが重なった瞬間。簪さんが

「けて……助けて……」

弱弱しい声で助けてと言い始める

「助けて……助けて!!!お姉ちゃんツ!!!」

涙と共に簪さんがそう叫んだ瞬間……

ガキーン!!!

「助けに来たわよ……簪ちゃん」

「お、お姉ちゃん?」

水のドレスを纏った様に見える見たことも無いISを展開した女生徒が簪さんとエリスさんの間に割り込んでいた……

時間は少し遡る

「ユウリ! 貴方!」

「ええい! 邪魔だ! 楯無!! ワタシはエリスを助けないといけないんだ!!!」

通路を走るユウリを見つけ声を掛けようとするが、ユウリはそれを無視して走り去った

「ユウリがエリスちゃんを暴走させたわけじゃなかったのね。なら私は!」

龍也君達が戦う予定だった、アリーナに向かうそこには

「ぐっ……流石に不味いな」

「龍也君!？」

ほぼ全壊と言う感じの零式を纏った龍也君が片膝を付いていた

「楯無か! 私は良い! 早く隣のアリーナへ行け!!」

「でも貴方はどうするのよ!」

見たところ怪我をしている龍也君をほっておけずそう言うのと

「隣で簪がヤタガラスに襲われてる。あいつを助けるのは私じゃない

い。お前だ」

「でも。私は……簪ちゃんに嫌われてるし」

「ここになって弱気の虫が騒ぐ。そんな私に

「ふざけるな!!お前は簪の姉だろう!!なら何があっても!嫌われても!憎まれても!!自分の妹は自分で護れ!!」

「……判った!直ぐに戻るから!!」

「気にしないで良い。私も直ぐに行く、ラウラのISも暴走してるのなら戦力の出し惜しみはしない」

何かまだ戦う手段を残しているのか自信に満ちた表情でそう言う龍也君に頷き。私は隣のアリーナに向かった。そこではヤタガラスがその武装であるルナライトを簪ちゃんに向けて振りかぶっていたそして簪ちゃんは目に涙を溜めたまま

「助けて……助けて!!お姉ちゃんツ!!!」

嫌われているかと思っていた。もう!私の事をお姉ちゃんと呼んでくれないかと思っていた。そんな簪ちゃんから逃げていた私はその叫びを聞いた瞬間。ラストイーネイルをコールして咄嗟にヤタガラスと簪ちゃんの間割り込んでいた

「助けに来たわよ……簪ちゃん」

「お、お姉ちゃん?」

弱弱しい声で私を呼ぶ簪ちゃんに背中を向けたまま

「エリスちゃん?自分を見失って暴走するなんてらしくないわよ?早く正気に戻りなさい!!!」

ラストイーネイルを振るうが

ザンツ!!!

「嘘……」

凄まじいまでの反射速度でラストイーネイルを中程で切り落としヤタガラスはそのままルナライトを私に向ける

(話には聞いてたけど、これは不味いわね)

エリスちゃんのワンオフアビリティは聞いていたが。ここまでとは思って見なかった、直接戦って倒せる自信は無い。ここで出来るのは時間を稼いでヤタガラスがエリスちゃんの神経を破壊するのを

待つことだがそんな事はしたくない

(手詰まりね。こんなときにフレイア達が居たら)

全く同時刻にIS学園に襲撃を仕掛けてきた一団があり、そっちの迎撃に回っているフレイア達が居れば何とでもなるのにと歯噛みしている

シャ!!!

「くっ!!」

半壊したミステリアス・レイディの修復は完全ではなく。反応が遅れる放たれた斬撃に態勢を崩す

「一夏。ラファールのエネルギーは全部渡したよ!武器と腕しか構築できなかったけど」

「いや。これで充分だ」

ラウラの方は一夏君に任せても大丈夫そうね。ただ問題はこっちか

(エリスちゃんを見捨てるのが正解なんでしょうね。多分)

逃げ回るのが正解だろうがエリスちゃんを見捨てたくは無いが半壊したミステリアス・レイディでは対処法が無い

「■■■■ツ!!!」

ヤタガラスが再度斬りかかって来るのを簪ちゃんを抱きしめ回避する

「くっ!!」

バキャン!!

「お姉ちゃん!?!」

脚部の装甲が粉碎される。不味い完全に性能負けしてる……このままでは私もやられエリスちゃんも死ぬという結末しかない

(奇跡でも起きないと何も変わらない!)

私がそう思った瞬間再度ヤタガラスの姿が消える。そして現れたのは私の背後

避けられない!?私がそう思った瞬間

「やせんよ」

バキャンツ!!!

両腕をクロスさせた龍也君が割り込みその一撃を防いでくれるが。そのせいで零式の両腕は完全に破壊された

「くっさすがに無茶が過ぎたか」

龍也君が現れたことでヤタガラスが距離を取る、彼の危険性はヤタガラスも知っている。だから真つ先に彼を行動不能にしたのだと思っていた

「闇に飲まれたか……だがまだ間に合う。まだ救える……私なら」

「何を言ってるの!?!この状況で!奇跡も起きないとエリスちゃんは救えない!」

私のISと零式は半壊しまともな機動は出来ない。それなのにエリスちゃんを救うと言う龍也君にそう言うとは

「お前は何も判ってない。奇跡はな起こるものじゃない。起こすものなんだよ」

強い意志の光を宿した目で私と簪ちゃんを見る龍也君は簪ちゃんに

「簪、お前はエリスが廃人になったとして笑えるか?」

「……そんなの……笑えるわけが無い!エリスは!私の大事な友達なんだよ?そんなエリスが笑えなくなるなんて嫌だ!!」

「いい返事だ。私もそう思うよ……だから私は彼女を救う為の奇跡を起こそう」

「■■■■ツ!!!」

ヤタガラスが龍也君に切りかかる

「龍也君!!!」

私が思わずそう叫んだ瞬間、龍也君とヤタガラスの前に光輝くバリアが現れヤタガラスを弾き飛ばす

「それは……」

零式の黒い装甲の下から光輝く白銀の装甲が見える

「やれやれ、こんな所で使うつもりはなかったんだが……仕方ない。出番だ!目覚めろインフィニティアツ!!!」

零式の装甲が弾け飛びその下から光り輝く白銀の装甲が姿を現す。それと同時に4枚の翼型のスラスタが現れ再び龍也君の体が宙に

浮かぶ

「セカンドシフトを終えたインファイニティアの性能は高すぎた。だからその性能を抑えるために零式と言う高速具を身に着け性能を落としました」

ゆつくりと語る龍也君の体を徐々に白銀の装甲が覆い隠していく

「お前はまだ引き返せる。エリス……闇を彷徨うのは私の様な壊れた男でだけ充分だ。だからエリスは返してもらおうぞ!!黒き狂鳥よ!!」

「■■■■ツ!!!」

龍也君の叫びが合図となり。白銀のISと赤黒いISが光を纏い、同時に姿を消した……

「いくぜ、偽者野郎」

エリスさんも気になるが。今は目の前のラウラだ。俺にはラウラが助けて欲しいと言ってる様にしか見えない

「零落白夜……発動」

雪片の刀身が開き零落白夜の輝きが発せられる

(今回は大きい刃は必要ないぜ。必要なのは鋭く振りぬける刃だ)

俺の声に呼応するかのように零落白夜が変化する、日本刀の形をした刃が雪片を覆う

「……」

黒いISが俺目掛け刀を振り下ろす。鋭く力強い袈裟切り……だがそれには魂が無い。誇りが無い……ならばそれは……

「ただの真似事だ」

振り下ろされた刀を弾き即座に上段に構え振り下ろす。千冬に教わり、箒の姿に学んだ一閃二断の一撃

「ギ……ギ……」

紫電が走り黒いISが両断される。そしてラウラが俺目掛けて手を伸ばす。

「ちゃんと聞こえてたぜ。お前の声」

「……」

助けてくれと叫ぶラウラの声はちゃんと聞こえていた。そして俺とシャルルがコアバイパスを構築する間も必死に暴走しようとするISを抑えてくれていたのも俺には判っていた。俺は気を失ったラウラを抱き寄せ、エリスさんの方を見た。出来るなら彼女も助けたいがもう白式は限界でその姿を粒子に変えてしまった。俺がエリスさんの方を見た瞬間

「だからエリスは返してもらおうぞ!!黒き狂鳥よ!!」

白銀の装甲に4枚の翼を持つISを身に纏った龍也の姿が目映った。それは

(黄金の騎士!?)

鎧の色、翼の色こそ違えど。それは俺の記憶に焼きついてはなれない黄金の騎士に瓜二つだった

(なんで龍也と黄金の騎士の姿がだぶる?どうしてなんだ?)

俺はそんな事を考えながら龍也とエリスさんの戦いに巻き込まれないように簪さん達の方へと向かった

第31話に続く

第31話

第31話

「ちっ！あの化け物どもめ！どこへ行った！」

報酬を受け取り予定の場所へ向かったがそこにネクロの姿はなかった

「どうする戻ってエリスの暴走を食い止めるか？」

「ええーそんなつまらない事しないでよー！」

空間が引き裂かれネルヴィオが笑いながら顔をだけ出して笑いかけてくる

「貴様がエリスのISを？」

「そーだよ？お父さんの実力を世界に見せ付けてその上であの子が死ぬばー石二鳥！手駒も増えて私は大満足」

にやにや笑うネルヴィオに腹が立ち。懐の試作型武器の柄を意識してしまう

(提供されたAMFの応用したナイフならコイツに手傷を……)

ダメージを与えた後なら話を聞きだすのはたやすいはずだ。タイミングが問題だが……

「あ。そうそう？早く離れたほうが良いよ？エースオブエースと雷光の戦乙女がこっちに近付いてきてるんだよね？」

この場を見られればワタシは奴等の敵と誤解されるだろう、それはタイミングが不味い……

「ふふふ？スコールを裏切る算段をしてるときに体力の消耗は避けたいよね？」

「ちっ。お見通しか」

確かにワタシは今タスクを抜けるタイミングを計っている。だがコイツが知っているという事はスコールにも筒抜けという事か？

「あーううん？スコールには言っていないよ？だって言ったら面白くないしね」

からからと楽しそうに笑うネルヴィオは

「おっと、あいつらが来るちゃう。ここは撤退。撤退♪」

こつちに向かってくる白と黒の影が見える。もう数分で補足されるだろう

「デコイが会って助かった」

煙幕を発生させる機械を設置し2人が来ている方向に向かって走る

(エリスを助ける為ならば。ここで正体を見せるのも何の問題もない)

たとえエリスがワタシを知らなくても構わない。ワタシにはエリスを助ける義務がある。

そんな事を考えながら走っていると携帯になる。嫌々携帯をとる

「もしもし?ユウリ。貴方の報酬はこちらで受け取ったわ。そろそろ帰還して頂戴」

案の定電話の相手はスコール……

「しかしワタシは!?!」

「今の貴方は私に雇われてるの。もう1度言うわ帰還しなさい」

ぐっ……くそ!エリスも心配だがこれ以上この場に残ってネクロをけしかけられても困る。ワタシは渋々撤退準備を始めた……

(頼む。エリスを救ってやってくれ)

今恐らくエリスと対峙しているであろう八神龍也がエリスを救ってくれる事を願う。ワタシはIS学園を後にした

(だが、そうそう全て思い通りに行くと思うなよ、ネルヴィオツ!!!)

ワタシは一通のメールをIS学園のメインコンピュータへと送信した

「さっきまで誰か居ただけどね」

煙幕を発生させる機械の電源を切り切り回りを見回すが

「龍也がインフィニティアを使った見たい」

「それだけの自体が起きてるって事だね」

インフィニティアはデバイスだ。それを起動したのは直ぐに判った。

「どうする？戻る？」

「戻りたいけど警戒もしないと」

この騒動に合わせてネクロが襲撃してくるかもしれない。それを危惧した龍也さんの指示でIS学園の外を見張っていると

ヒュンツ!!!

無数の矢が降り注ぐ、咄嗟にプロテクションを発動させ防ぐと

「流星はエースオブエースそして、雷光の戦乙女。奇襲は無駄でしたか」

赤い甲冑に法衣を身に纏ったネクロが弓を構えていた。あの姿からしてLV4なのは間違いない

「まさかこんな魔素が薄い世界にLV4が居るなんてね」

LV4はその身を維持するだけで莫大な魔力を必要とする。そんなネクロがこんな魔素の薄い世界に居るとは予想外だった

「なに。魔力だけが糧ではない。魂食いでも充分な糧になる」

なるほどね……魔力が無いなら人間の魂でか……しかもネクロの仲間も増えやせる1石二鳥って訳ね

「さて。申し訳ないのですが。あの子の目的が済むまで私と踊って頂きましょうか？」

パチン

ネクロが指を鳴らすとLV2が10体ほど姿を見せ。更に空間が歪んだ……

「結界ね……」

かなり強固な結界だ。そう簡単には敗れそうに無い

「ええ。邪魔をされては元もこもないのでね。それでは始めましょうか？」

ネクロが再度弓矢を番えるのを見ながら。私とフェイトちゃんはネクロへと向かっていった……

「なによ。あれ……」

黒い閃光と白い閃光が何度も何度もぶつかっては離れる。とんで

もない速度だ

「あれが……龍也さんの本当のIS。信じられないくらい高性能ですわ」

加速力だけ見れば第3世代型を大幅に上待っているし、4基のスタターでの個別瞬時加速なんて。たしかアメリカのファングクエイクに試験的に搭載されている機能のはず。しかし龍也のはそれを完全に使いこなしている

「どこのIS科学者も完成させてない機能を龍也君のISは搭載してる。誰が作ったの？あのIS」

シエンが驚いた様子で呟く。あたし達のISよりも高性能なそのISに驚いていると

「皆。ロックが外れた」

アリーナの観客席のロックを外していたクリスに言われ

「とりあえず管制室へ！そこで織斑先生の指示を！」

いかに代表候補とはいえ勝手にISを起動するわけにも行かない。あたし達は急いで教師達が集まっている管制室へと向かった……だがロックを解除したクリスは首を傾げていた

（おかしい、ピットや観客席のロックはかなり弱かったのに、アリーナのロックは異常なほど固かった……一体なぜ？）

その小さな疑問を抱えたままクリスは管制室へと向かった

ちい！思ったより速い！

暴走状態のヤタガラスは思いのほか厄介だった。暴走の原因として恐らく僅かながらにISに付着したネクロの細胞が空気中にある魔力を無尽蔵に吸い上げ。シールドエネルギーと機体のエネルギーに回している。つまり今のヤタガラスはほぼ無尽蔵のエネルギーを持っている

と言っても良い

（それに剣技もエリスと同じ物。厄介だよ全く！）

ガキーン

獅子王刀で死角から突き出された槍を弾く。ヤタガラスは今右手

に突撃槍を持ち右手にルナライトを構え槍と刀の間合いの違いと無
尽蔵のエネルギーに後押しされた瞬時加速を連続で使用してくる。
これは正直持久戦に持ち込まれると不味い。私自身も魔力を使いイ
ンフィニティアのエネルギーをカバーしているのでエネルギー面に
不安は無い。だが持久戦になればなるほどエリスの生命反応は弱く
なっている。恐らくなんらかの力を使ってISを強化してるのだろ
うが、このままでは不味い

エリスの生命反応が低くなれば一気にネクロの細胞が活性化する。
そうなればエリスは……ネクロと化す

(そうなれば私はエリスを殺すしか無くなる。その前にネクロの細胞
だけをピンポイントで消滅させなければならぬが……)

(どこに寄生している?)

エリスの身体を見るがそれらしい物は見つからない。となるとI
Sの装甲と生身の身体の間だと思いがそれがどこか判らない

(普通に考えるのならば、頭部もしくは胸部だが……)

嵐の様なヤタガラスの連撃を獅子王刀で防ぎ目を凝らすかスピー
ドのせい目星が付かない

(かと言ってナイトヘブンスやレーヴァティンを使うわけにも行かな
いしな)

今のヤタガラスに下手にダメージを与えるとネクロの細胞が活性
化しかねない。つまりは

(ジリ貧か)

防ぐしかないが、かと言って時間を掛ければエリスがネクロと化す
し、かと言って攻撃する事も出来ない

(勘でいくか?)

頭か心臓か……どちらかだ……今までの経験からすると頭部の可
能性が高い

(一か八か……勝負をかけるか!?)

だがエリスのあとの人生がかかっている。そう簡単には決断できな
い

(どうする!?)

攻撃に出るかももう少し侵食が進みネクロの魔力を認識出来るまで待つか!?

くそ!全くネクロどもの性格の悪さには毎回呆れ果てるな!!私は放たれた槍の穂先を斬り飛ばし、ヤタガラスの装甲を注意深く調べ始めた

「どうして攻勢に出ない?あれほどのISならヤタガラスを制圧できるだろうに」

モニターを見ながら呟く千冬を見ながら遠隔スキャンでヤタガラスを調べる

(幾らなんでもおかしい、もうとつくにエネルギー切れを起こしてる筈なのに)

暴走を始めて既に5分、その間も連続で瞬時加速を使い、エネルギー消費の激しいハーミットを振るい続けるヤタガラス、とつくにエネルギー切れを起こしても不思議は無いのにまだその予兆は無い。考えられるのは

(何か外付けのパーツで無理やりエネルギーを補充してるとしか思えない)

エリスちゃんに何が合ったのか判らないが。私が目を離してる隙に何かがあったに違いない。スキャンを繰り返していると私の使っているPCにメールが届く

(何!この忙しい時に!!)

苛々しながらメールを見る。差出人は……ユウリ・クロガネ!?名前だけは知っているエリスちゃんを保護した際。片っ端から回収したクローンプロジェクトの完成体の1人の名前が確かユウリ!生きていたの?メールを見る

『エリスの心臓の辺りをスキャンしろ。そしてそれを八神龍也に伝えろ』

短い文面に目を通しそのまま熱スキャンでエリスちゃんの胸部を見る。そこには

(何よこれ!?)

黒い脈打つ何かの影が丁度心臓の斜め上に張り付いている。丁度ISとISスーツの間の何ミリと言う隙間に。それが脈打つたびにヤタガラスにエネルギーが補給されている

(これね!?これを取り除けば!エリスちゃんは助かる!!)

ステータスブーステッドの維持限界は7分。あと2分間に合うかどうかは正直言つてギリギリだ。しかしこれを伝えるにも、オープンチャンネルは不味い高速戦闘中の八神龍也に伝えれば集中力が途切れかねないならば!

「楯無!聞こえる?八神龍也に伝えて!心臓の右斜め上に何か脈打つ物があるって!」

『判りました!!龍也君!心臓の右斜め上を狙って!』

これで私に出来る限りの手は打った。あとは彼が上手くエリスちゃんを救ってくれる事を願うだけ……

(あれだけ疑つて都合の良い事を言ってるのは判ってる。でもお願い私の大事な義娘を助けて)

「龍也君!心臓の右斜め上を狙って!!」

楯無の言葉が聞こえる。危ない所だった私は頭部を狙うつもりだったが、どうやら頭部を狙わなくて正解だった。しかし

(ただネクロの細胞を狙うだけでは駄目だ、少しでもエネルギーがあればそこから再生する。ISを行動不能にし尚且つネクロの細胞を打ち抜き、エリスの精神が崩壊する前に助ける)

なんとまあ悪い状況だ。だが……

「分の悪い賭けは嫌いじゃない、一撃で決める」

狙う場所は判った。そしてヤタガラスも一撃で沈めれるだけの攻撃力もある

「ジョーカー切らせて貰う!!!」

バシユ!!!

背中翼はナイトヘブンスと呼ばれる特殊兵装。本来ならこんなところ出来るつもりは無いが出し惜しみは無しだ

「行けッ!!!」

ヒュン!!ヒュヒュンッ!!!

分離した翼が変形しビームと実弾を放つビットになる

「どんな装甲だろうとただ撃ち抜くのみ!!!」

ビットの射撃の嵐に合わせて瞬時加速でその弾幕を突っ切る

「!!」

「逃がしはしない!!!」

ガシヤッ!!!

腰の装甲に収納されたビームライフルを両手に持ちヤタガラスの退路を絶つ

「続けて行くぞ!!!」

ビームと実弾をバレルロールで回避しながら両肩の装甲に搭載されたミサイルをヤタガラスの足元目掛け撃ち込む。連続でミサイルが爆発しヤタガラスの視界を奪う。

「ブースト！行けえッ!!!」

瞬時加速でヤタガラスの間合いに飛び込みブースターで破壊力を増加させた回し蹴りを叩き込む

バキヤンッ!!!

咄嗟に腕に付いた盾で防いだヤタガラスを上空へと蹴り上げる

「射撃は苦手だがこれくらいは出来る!!!」

実弾を放つナイトヘブンスのビットが更に変形しハンドガンになり私の手に収まる

ミサイルとビームの嵐で碌な機動ができないヤタガラスに1マガジン分の弾丸をフルオート射撃で打ち込む

ガン!!ガンッ!!!ガガガンッ!!!

狙いは機体の各所に付けられたブースター。自立制御のヤタガラスは被弾しながらも弾丸の幾つかを回避するがブースターの大半をやられ空中での機動が取れず落下してくるヤタガラスの腹部の装甲に

「貫った!!!」

右腕を叩き付ける、インフィニティアの右腕には近接用の武装。通

称ニーベルングアイゼンが搭載されている

「!!」

「全弾持って行け!!」

ズガンツ!!!ズガンツ!!!ズガンツ!!!ズガンツ!!!

それはリボルバー式の回転機構を搭載した爆裂式手甲。6発全弾打ち込んだがヤタガラスは行動を止めず。暴れバンカーから抜け出した。間合いを取るヤタガラス今の内に弾をリロードしようとしリッダーを開放した瞬間

シュツ!!!

「ちいっ!!!」

ヤタガラスがさつきまで振るっていたビームエッジを投げつけ私の手から換えの弾がはじけ飛ぶ

カララン……カラカラ

乾いた音を立てて転がっていく弾の音を聞きながら

(ちいッ!あと一歩だと言うのに!!)

破壊した装甲の下からネクロの細胞を確認した。あれを貫けばエリスを助けられる。だが剣や銃ではエリスの心臓を傷つける可能性が高く使うに使えない。心臓を傷つけずネクロの細胞を破壊するにはニーベルングアイゼンが必要だと言うのに

(最後の最後でミスをしやばり鈍っていたか!)

この世界で学生をしたのが間違いだった。気が緩んでいた……くっ……私は歯噛みしながらどうするか必死で考え始めた

龍也が歯を噛み締めているのが見える。最後の最後でミスをした自分を恥じているのが一目で見えた。龍也の手から弾け飛んだ弾……あれが必要なんだと判った私は即座に転がって行った弾を捜し始めた……

(弾け飛んだのは3発……どこ?!どこにある!?)

ハイパーセンサーで探す、1発目……駄目だあれは2人の激突で発生した炎の近くに落ちていているあれは使い物にならない。2発目……あれも駄目だ距離がありすぎる……となると私が取れるのは

(あの崩れ落ちそうな瓦礫の下にある。最後の弾丸……)

今にも崩れ落ちそうな瓦礫の下に光る弾丸を見る。あれを取れたら龍也を助けられる、でもそうすると私が瓦礫の下敷きになるかもしれない……そうなればISがあっても危険だ……怖い……死ぬかもしれない……その一念が私の体を縛る。助けたいでも死ぬのが怪我をするのが怖い……私の背を押してくれた龍也を助けたいのに

「ギ……ギギギッ!!!」

ダメージのせいかぎこちなく動くヤタガラスはそのまま腰の鞘にルナライトを収めた。最後に抜刀術で勝負に出ようとしているのが見える

「ちっ!!こうなつたら一か八かだ!!」

ヒュウウウウ

龍也が息を吸い込む音が聞こえる。徒手空拳でヤタガラスを戦闘不能に追い込もうとしている。だがそれは無謀すぎる、私が何かを言う前にお姉ちゃんが

「龍也君!!無茶よ!!そんな事したら下手したら大怪我じゃすまないわよ!!!」

エリスの抜刀術はISの装甲さえ引き裂く。そんなの相手に無手なんて正気の沙汰ではない。だが龍也は前を見たまま強い意志の込められた言葉で

「だが。私は簪と約束した……エリスを助けると、なら私は命を賭ける。死を必ずすればすなわち生く、覚悟を決めれば運が良ければ生き残れるさ」

ダンッ!!!

PICを解除して自らの足で地面に立った龍也はは足を踏み変え「恐れが人を殺す……ならば私は恐れない。歯食いしばって前を見る。何故なら……エリスをここで見捨てたら……私はもう私に戻れないからだ」

空気が軋む程の闘気を纏いながら静かにそう告げる龍也の言葉を聞いて

(私のお願いを聞いて命を賭けてくれてるのに!私は自分の事ばかり

考えてっ!!!)

情けなかった……自分が傷付くのを恐れ動かない弱い自分が……
龍也が命を賭けるのなら私も命を賭ける

「簪ちゃん!」

「簪さん!」

驚くお姉ちゃんと織斑君の声を聞きながら、瓦礫の下に向かい落ちて
ている弾丸を拾い上げ

「龍也君ッ!!!」

ブンッ!!!

そのまま反転し龍也目掛けて拾い上げた弾丸を投げる。それと同
時に瓦礫が崩れ私を押しつぶそうと迫る

(やっぱり……私はこれが限界か……)

弾丸を拾って投げる。それだけ出来れば十分……多少の怪我は覚
悟の上、あとは全部龍也がうまくやってくれる

(私は……変わったかな?)

もう弱い自分は居ない、今私の中にあるのはどんなに怖くても前に
進めるようになった。自分……それがとても誇らしかった

「簪ちゃん!!!」

「お、お姉ちゃん?」

ゆっくり目を閉じた私を抱き上げ瓦礫の下から抜け出したお姉
ちゃんはそのまま私を抱き抱えごろごろと地面を転がり出た

「お姉ちゃん」

「簪ちゃん!!何やってるの!!死ぬ気!!」

本気でお姉ちゃんが怒ってるのが判る、でも私は少しだけ笑いなが
ら

「ねえ、私……前に進めた、怖いけど……前に進めたよ」

「何を?」

困惑してるおねえちゃんに私は笑いかけながら

「死ぬのも怪我するのも怖かった。でも……龍也が私とエリスの為に
頑張ってくれてるから。私も勇気が出せた……もう私は弱虫じゃな
いよね?」

もう限界だった、ゆつくり意識が闇に沈んでいくのを感じながら私がそう尋ねると。お姉ちゃんは

「ええ、簪ちゃんはまだ弱虫じゃないわ……だから今は休みなさい」

優しく頭を撫でてくれるお姉ちゃんの手の温もりを感じながら私は意識を失った……目が覚めたらきつと……私は昨日までの私とは違う私になっているそんな気がした……

パシッ!!

簪が投げ渡してくれた弾丸を掴む。楯無に抱きとめられ眠っている簪、怖かっただろうに……本当の命のやり取りに自分が死ぬかもしれないと言う恐怖……それを超えて行動をした簪が私にくれたチャンス……

「これに答えれんのなら男じゃないな」

簪は命を賭けて私にチャンスくれた、ならばそのチャンスに全てを賭ける!!!

ガチャン……

右腕のシリンドーから最後の弾丸を抜き左手に持つ

「賭けるか？お前の抜刀術が上か。私の一撃が上か……勿論私は自分の勝ちに全賭けだ！」

ブースターがやられたヤタガラスは地面に両足を着け腰を深く落とす

「ジジジ!!!」

紫電を巻き散らしながら間合いを計るヤタガラス。私もまたエリスの心臓の右上に狙いを定める

(装甲を破壊したおかげでネクロの細胞が見えた)

弱々しく脈打つネクロの細胞。あれをピンポイントで打ち抜く……

「勝負だ!!」

キンッ!!!

最後の弾丸を指で弾く。全てがスローモーションで動く中、右腕の

装甲を開き最後の弾丸を空中で装填する

ドウツ!!!

ヤタガラスと同時に瞬時加速に入る

「!!!」

「悪いな、如何にお前の抜刀術が速かろうと……そこにエリスの魂は無い、ならばそんな紛い物の剣で……」

神速の抜刀を首を捻る事で交わし。そのままカウンターに右腕をネクロの細胞に叩き付ける

「私を切れる等思うな!!!」

ズガンツ!!!

最後の弾丸でネクロの細胞を打ち貫き消滅させる……

キン……

排出された葉莢が軽い金属音を辺りに響かせる

「言っただろう？エリスは返して貰うとな」

ISが強制解除され何時も目を覆っている包帯が外れたエリスと目が合う、包帯で隠された右目は水晶の様に光り輝いていた。震える手で手を伸ばすエリスの腕を掴みそのまま身体を反転させる

「賭けは私の勝ちだ」

操縦者と切り離されたヤタガラスが紫電を撒き散らしながら待機状態に戻る。メタルブラックのリボン止めがアリーナの床で跳ねるのを空いている右手で拾い

「コード、ワイルドジョーカー……確かに切らせて貰った」

多少派手に立ち回ったがまあエリスを助ける為だ、別に良いだろ……疲労とダメージで眠りに落ちるエリスをしっかりと抱きしめ。私は楯無達の元へ向かった。

「す、すげえ……」

俺は思わずそう呟いた。射撃・高速機動・ゼロ距離での近接戦闘にビットとの並行突撃。どれも俺が見たことの無い戦術だった。長いように思えた戦闘時間は約1分……1分で龍也は暴走したヤタガラスを止め操縦者であるエリスさんを助けたのだ

「楯無、ヴィクトリア。エリスを頼む。そして……早く逃げろ」

龍也は気絶したエリスさんを2人の前に寝かせ、空中を睨んだ
「どうして逃げろなんて言うの？もう敵は……」

シャルルがそう尋ねる中龍也は

「来る……敵が来るんだ。もう時間が無い」

龍也がそう言った瞬間

バシユツ!!!

アリーナの床に黒い穴が無数に現れ。その中から

「ギシャアアアアッ!!!」

「グルルルッ!!!」

不気味な唸り声を上げて無数の異形達が姿を見せる

「ば……馬鹿な。あれは!?」

俺には見覚えが合ったそれは過去に俺と千冬姉を殺そうとした黒
い亡霊達だった

「な。何でここに……居るんだよ」

俺の恐怖が目の前に現れたそして1番最後に現れた2体の異形を
見て更に俺は驚いた

「IS!?!」

黒い亡霊達の一番奥に居る2体がISを展開していたのだ、打鉄と
ラファールに酷似した物を展開していたのだ

「ふーどうやら、まだ私は戦わないといけないようだ。楯無、皆を頼む
……何心配するな……私の後ろには……」

両手にビームの刃を持つ剣を持った龍也は振り返らずに

「唯の1発の弾丸さえ通さん!!!」

ゴオオオオツ!!!

空気が軋む、龍也の全身から湯気のような闘気が吹き上がる

「無茶よ！あれにはISの武器は通用しないわよー」

楯無と呼ばれた女性徒がそう言うと言った龍也は

「だから？だから退けと言うのか？残念だが私にはその選択肢は無
い、それにどうもあいつらが用があるのは私のようにだしな」

「ギシャアアアアッ!!!」

唸り声を上げ身体を引き摺るように龍也の方に向かっていく異形達

「た、龍也！駄目だ!!死んじまうぞ!逃げるんだ」

「その通りだ!八神龍也!私はあれを知っている!あれにはISは通用しない!!!」

俺とヴィクトリアさんがそう言うが龍也は平然と歩いて行く

「ギシャアアアツ!!!」

咆哮を上げ異形の1体が飛び掛るが

「ぎゃあぎゃあとうるさい事だ」

バンツ!!!

振り上げた龍也の足が異形を蹴り上げ。宙に浮いた異形をその手にした剣で両断する

「来い化け物ども。そう簡単にこの私を倒せると思うなよ」

にやりと笑った龍也は鋭い視線で異形達を睨み

「私の後ろに居る者に貴様らは触れることなど出来はしない、なぜなら……護る戦いなら私に敗北の二文字は……」

ビットが変形したハンドガンを両手に構えた龍也は

「——ない!!」

龍也はそう言うのと異形達へと向かって行った……

第32話に続く

第32話

第32話

「やれやれつと……これだけ女性に囲まれるとは私もまだまだ捨てたもんじゃないなあ」

くつくつと笑いながら龍也は笑う。確かにあの異形は女性のような姿をしているが笑いながら言うことではないだろう

「しかしね。残念ながら貴方は私の好みじゃないんでね。早々に帰って貰えるかね？」

あくまで余裕の色を崩さない龍也。なぜあんなに余裕なんだ？見たことも無い化け物に囲まれていると言うのに

「ギシャアアアッ!!」

「やれやれ……振られたら襲い掛かるとは、そんなんじゃあ男にはもてないぞ」

何気なく言った龍也の腕がゆつくりと照準を合わせ異形を打ち抜く

「グオオオオッ!!」

「もう少し静かにしたまえ、うるさくてかなわん」

飛び掛る異形達の間を縫うように駆け抜け。両手のハンドガンを縦横無尽に振りかざす

「ガン!!カタと言うらしいが。中々いけてるだろう？」

蹴り・打撃・銃撃縦横無尽に異形達の間を駆け抜けていく

だが銃である以上絶対に避けられないものがある。それは……

「おや、弾切れか？まいったねえ？」

からからと笑う龍也に異形達が襲いかかる。

「箒、ヴィクトリアさん！何か武器は無いのか!？」

「私のブレードならコールしたまままだ!」

箒の指差す先には打鉄の近接ブレードが落ちていた

「シャルル!!」

「判ってる!」

2人で駆け出しそのブレードを2人で引き摺り楯無さんの所へ運び

「投げ渡してくれ!!」

生身ではとても投げ渡せない。ISを展開している楯無さんの近くに運びそう叫ぶ

「判ってる!!!」

楯無さんがブレードを掴んだ瞬間龍也は

「まあどうとでもなるがね」

4方向から放たれた攻撃を空中で自在にスラスターを使い回転しながらかわす。だがそれだけでは終わらない

「弾?」

肩の装甲からハンドガンの弾が零れ落ちる

「瞬間装填と言う。真似できるかね?」

空中で叩き付けるように弾を拾い上げ

「シヨータイムだ」

高速で回転しながら両手のハンドガンを乱射する龍也、それに打ち抜かれ倒れ伏せる異形達を見据え。龍也は

「言っただろう? 護る戦いにおいて私に敗北の二文字は無いと」

自信に満ちた表情で龍也が奥のほうに居た2体の異形の銃口を向けると

「ギシャアアアツ!!!」

「来い。格の違いと言うの物を教えてやる」

襲い掛かってくる異形達に一步も退かず龍也はそう告げた

(おかしい、ネクロにしては再生力が低すぎる)

倒した首無しネクロ達が再生してない事に私は不信感を覚えていた、ネクロの最大の特徴はその高い再生能力それが無いと言うのはどうしても府に落ちない。何か裏があると見て間違いない、となると何時までも一夏達がここに居るのは危険だ

「ギシャアアア!!!」

「遅いッ!!」

振り下ろされた剣を受け流しそのまま懐に入り込み。拳を打ち込む

む
ドンッ!!!

「グルルル」

弾け飛んだ物の直ぐに体勢を立て直す打鉄を身に纏ったネクロの影から

「オオオオオッ!!!」

「ちっ!!!」

両手に持った銃を乱射してくるネクロ。本能で動いている割には統率が取れている、どうも近く上位ネクロが居ると見ていいだろう。(なのは達と連絡が取れん。あっちもネクロと戦闘中か?)

連絡が取れない、つまり結界内に引きずり込まれていると見て間違いないだろう。

「グオオオオッ!!!」

「少しは黙りたまえ!!!」

踏み込み空の抜刀で打鉄を纏ったほうのネクロを両断する、時間が経てば再生するだろうが暫くは動けない筈だ

「ギイツ!?!」

「隙だらけだ戯け!!」

即座に間合いを取ろうとするラファールを身に纏った異形との間合いを詰め。頭から両断する

「ギヤア……」

耳障りな鳴声を上げて倒れるネクロ。これで一息つけるか……そう思った瞬間、ガシヤンと聞き覚えのあるリロード音がした……それは魔導師になら馴染みの深いカートリッジシステムの音……そして次の瞬間

「がふっ……ちっ……油断したわ」

貫通された腕を引き抜かれ噴出した血をみながら私はそう呟いた

「!?龍也が」

私はアリーナの扉のロックを外そうとハツキングしながら見ていたモニターを見て絶句した。倒したと思われた異形が一瞬で再生し背後から八神龍也の腹を貫いたのだ。あれは不味い臓器は外しているだろうが、もう動けるレベルの傷ではない

「ツバキさん!私が出ます。フォローを!」

千冬が教員用の打鉄を持って出て行こうとするが

「駄目!まだロックが外れない!」

解除しても解除してもロックが再構築され全くロックが解除される心配がない

「くっ!散々疑った相手が一夏達を護る為に戦っていると言うのに私は!!」

散々疑った、敵だと……危険な相手だと。だが龍也は自身が怪我を負いながらも一夏君達やエリスちゃんを護る為に戦い続けている

(私も焼きが回ったものね)

ここまで誰かを護ろうとする子が敵な訳が無い。散々彼を疑った自分が情け無くなる、だが後悔するのは後で良い今は一秒で早く彼の元に援軍を送ることが優先事項だ

(全部終わったら謝らせてもらおうわ、だから死んだら駄目よ!!!)

私はロックの解除しながらアリーナの中で孤軍奮闘する彼の姿を見ながらそんな事を考えていた

「あ……きやあああああッ!!!」

アリーナ席に居た女性徒が悲鳴を上げるのがどこか遠くに聞こえた。龍也が倒したと思った異形が一瞬で再生しその腕で龍也の腹を貫いたのだ

「くっ!?!舐めるな!!!」

血を流しながら龍也は自身の腹を貫いた異形の腕を切り裂き、そのまま蹴り上げ容赦なく銃弾を打ち込むが次々異形の身体から何か飛び出し再生していく

「フツ……死んだ振りとは恐れ入る……ぐつ……致命傷ではないがどこまで持つか」

龍也は血を流したまま二刀を構える、それを見た筈が

「馬鹿な！まだ戦う気か！どう見てももうお前は戦えない!! 私達はいから逃げろ!!」

留めなく溢れ出る血……あの出血量では出血死もそう遠くない。だから筈が逃げろと叫ぶが

「どこへ逃げろと言うんだ？アリーナの出入り口はロックされ、アリーナを囲うシールドは今の私の装備では破壊できない。なら……戦うしかないだろう？」

「ギシャアアアアツ!!」

咆哮を上げ死角から襲い掛かる異形を振り返らず両断した龍也は「言っておこう。腹を裂いた位で私が止まると思うなよ。私を止めなければ……」

にやりと笑いながら自分の頭を指で突き龍也は

「この頭蓋を打ち砕くほか無いぞ？」

血を流しているのにその姿は威厳と自信に満ち溢れ、決して退かないと言う意思が伝わってくる

「来い。それとも死に掛けの小僧一匹が恐ろしいかね？」

あくまで余裕の色を崩さない龍也がそう言い放つと同時に異形達

が
「ギシャアアアアアツ!!」

一斉に咆哮を上げ龍也に殺到した

「おおおおおッ!!」

龍也を包囲し襲い掛かる異形達に一步も退かず龍也は自身の怪我などまるで気にして無い様子で剣を振るい続ける。だが剣を振るうたびに血が舞う……当然だ素人の俺でも判るあの腹の傷は致命傷ではないが、もう動けるような傷でもないのだ

「どうしてあそこまで戦えるの？激痛でもう動けない筈なのに」

楯無さんがそう呟く中龍也はその長い銀髪を自らの鮮血で真紅に染めながら戦い続ける。自信の傷などどうでも良い……ただ俺達を

護る為に1人で戦い続けている

(俺は……強くなつたんじゃないのか?)

俺は力をつけたはずだった。だが実際は龍也に護られて、怪我をしている龍也を見ることしか出来ない。なんて無力なんだ……

「狙いは外さん!!!」

龍也の背中の翼が分離しビツトへと変形し。光弾と実弾の雨を絶え間なく降らせる。龍也はそれを掻い潜りながら異形に接近し剣を振るう。武装自体はセシリアと同じものだが本体の動きと同時行動をしている。それはセシリア以上の空間把握能力を龍也が持っているという証明だった……俺は1人で戦い続ける龍也の背中を見るとしか出来ない……その悔しさに歯噛みしていると

「お前で最後だ……化け物」

「グルルル……」

最初に両断された異形に迫る龍也、気が付けば残る異形はその1体だけだった

「これで止め……むっ!?!」

龍也が飛び退く、異形の身体から無数の触手が飛び出したからだ、だがその触手は龍也ではなく龍也が倒した異形達に向かって行き。動かないその身体を絡め取り本体の元へ戻っていく。そして

異形の体から目が現れ、それと同時に異形の胴体に口が現れたと思った瞬間

メキョツ!!!グシャツ!!!

「くっ、喰ってる……うえ……」

思わず吐きそうになる光景だった。異形が異形を喰らいその身体を補填しているのだ

「悪趣味な……」

瞬く間に異形が再生していくがそれはさつきまでの姿を違い、不気味なほど巨大で全身に現れた目玉が俺達を見据える

「うっわ……」

シャルルがへたり込みそのまま下がる。あれは本能的に恐怖を感じる俺もその場で無意識に後退していた。それほどまでにあれには

恐怖を感じた

「ギシャアアア」

異形が纏っていた装甲が開き中から無数の棘が姿を見せる。それを見た龍也は

「ちいつ!!そう来たか!!」

瞬時加速で俺達の前に移動した、その直後異形が俺達に向けた棘が一斉に俺達に向かって放たれた……それは黒い雨だった、ISも無い俺達を殺すには充分すぎるだけの凶器だった、俺は思わず箒とシャルルを抱き寄せ目を閉じた、こんな何の役にも立たないと判っていた。でも皆を護らないと思ったから……だが異形の放った棘はただの一発も俺達には届いていなかった

「いつ……言った筈だ……私の後ろには……唯の1発の弾丸さえ通さない」と

「た、龍也君……」

楯無さんの驚いた声と龍也の声を聞いた俺がゆっくり目を開くとそこには

「あ……」

両肩・両足……それに腹に4本の棘を生やした龍也が俺達を護るように立ち塞がっていた

なぜだ……なぜあの男はあそこまで戦える？私は目の前の光景が信じられなかった。全身に棘を生やしそれでも倒れない八神龍也は剣を向け

「この……程度で……私は……倒れない。……私の後ろに居る者は……絶対に傷つけさせない」

全身から血を流しそれでも全く萎えない闘気に思わず萎縮する。それほどに強い闘気だった

「グオオオオッ!!」

再度異形が棘を放つ体勢に入る

「龍也君……こっちへ!」

私達を護るように展開されている水の幕の内側から更識が叫ぶが

「必要……ない。ここで全て打ち落とす」

八神龍也が再度剣を構えた瞬間、異形が再び棘を放つ

「う……ウオオオオツ!!!」

雄たけびと共に剣を縦横無尽に振るい放たれた棘を迎撃し始めるが雨のように降り注ぐ棘を弾き続ける棘全てを弾く事は出来ず、その身体を棘が抉っていくのだがそれを全く気にも留めず剣を振るい続ける

「くっ!!!」

だが何十発目かの棘を弾いた瞬間ビームソードが砕け龍也が一瞬無防備になる、その瞬間八神龍也が何事か呟いたのが見えた

「投影開始」

粒子が集まり八神龍也の手に2振りの中華刀が現れた。イコライザの様にも見えるが、何かおかしい気もする……

両手の剣を縦横無尽に振るい棘を弾き始める八神龍也だが、何発かは鈍い音を立てて棘が八神龍也を抉るが、私達にはただの一発の棘は届いていない。それで気付いた

(私達を護る為に自分に当たる物を無視しているのか!?)

八神龍也は自分に当たるものは弾いていない。弾いているのは私達に当たるものだけ……

「ぐ……ぐうっ」

全てを弾いたがその勢いに押され八神龍也が私達の前に弾き飛ばされてくる

「は……は……無事か?」

「無事か? じゃないわよ!!! そんなに怪我して……」

更識がそう叫ぶのを聞きながら私は

「なぜそこまでする!!! お前に私達を護っても何の益も無い筈だ!!! それともあれか私達に恩を売るつもりか!? それとも博愛主義だとしても言うのか!!!」

「ヴィクトリアさん! 何言ってるんだあんたは!! 龍也が俺達を護ろうとしてくれるのに! 自分が何を言ってるのか理解してるのか!!!」

織斑一夏が私を掴み上げようとするがそれを弾き、八神龍也に近寄

り

「答えろ！なぜ！そこまで私達を護る!!私はお前を不意打ちで襲ったんだぞ!!そんな私を護る意味がどこにある!!」

私がそう叫ぶと八神龍也は

「この状況で……良く口が回るな……ヴィクトリア……まあいい……答えてやるよ……私はお前達に恩を売る気も……ましてや博愛主義を語る気も無い……ただ……私は……」

肩を押さえながら奴は

「くだらない事も……嬉しい事も……腹の立つ事も全部……自分で決めて……何時だって……後悔しない選択をしてるだけだ……」

私達に背を向けてそう言う奴の背中がとても大きく見えた。まるで父上様の様な大きな背中だった

「ギシャアアッ!!」

「!?」

私目掛けて異形が剣を投げつけてくるのが見えた、駄目だこのタイミングでは八神龍也でも防げない……咄嗟の事で反応出来ずに居ると

「させん!!ぐ……」

八神龍也が左腕を伸ばしその投げられた剣を自らの腕で受け止めた……だがそれは二の腕を完全に貫通し、左腕が力無く垂れる腱が切られたのか動く気配がまるで無い

「カカカカッ!!」

異形が耳障りな笑い声を上げる中八神龍也は動かない左腕を見て。即座に右手に握った剣を振り上げた

ザンツ!!

「?!?!」

何のためらいも無く奴は自分の左腕を切り落とした

「な、何をしてるのよ!!!自分の腕を！自分で切り落とすなんて!!」

「義手だ。切り落とした所で何の痛手もない。動かないなら邪魔なだけだ」

平然とそう言い放つがどうみてもあの義手は神経接続型の義手だ。

それをあれだけ無造作に切り落とすなんて普通なら出来ない

「あとは……ぐっ!？」

「何をやる気だ、龍也!!」

腹に突き刺さった棘を右手で掴み

「う……うおおおおおッ!!」

ズルズル……ザシユ……

自分でその棘を引き抜き無造作に投げ捨てる

「これで剣が振れる……な」

八神龍也はそう言うとうちで自分で切り捨てた腕を拾い上げ異形めがけ
投げつけると同時に、腰のビームライフルを抜き放ち宙を舞う腕を射
抜いた

「ギギッ!？」

ビームで貫かれた腕が爆発し異形を吹き飛ばす、その隙に八神龍也
は背中の中を浮かび上がり

「こんな所で私は終れないんでな……そろそろ決めさせてもらう」

強い意思の込められた言葉でそう言い放った……

「織斑先生！私達は……ひっ!？」

アリーナの完成質に飛び込んだ私達は思わず息を呑んだ。ほぼ全
壊のI Sを身に纏い、左腕が無い龍也さんが全身から血を流しながら
剣を構えていたのだ

「先生！如何して援護に……うっ!？」

織斑先生に詰め寄って気付いた自分の手から血が出るほどに拳を
握り締めている事に

「何だ?」

「いえ。何でもありません」

それだけで判った。織斑先生も助けに行きたいのにいけない自分
の不甲斐なさを悔いているのだと

「悪いが……目が霞んできた……これで決めさせてもらう」

龍也さんがそう言うとうちの背中が分離しビッドになる

「行くぞ!!」

龍也さんが手を翳すと異形が凍りついたように動かなくなる、それを見たクリスさんが

「A I C ツ!?なんで!？」

A I C を搭載した I S を駆るクリスさんが言うのなら間違いないだろう

「次はこれだ!!!」

翼が大きく開かれると同時に不可視の何かが放たれて異形を弾き飛ばす。それは間違いなく

「衝撃砲……」

鈴さん達の I S に搭載された衝撃砲だった……

吹き飛んだ異形を追い抜いて分離したビットが弾丸とビームを撒き散らす。

「私よりも高い空間認識能力……」

ビットが4基多角機動を描き異形の背後に回り込み的確に異形にダメージを与える。だがそれで終わりではない

「射撃は苦手なんだが……この腕じゃ4の5の言ってるのでない!!!」

ビット目掛けライフルを放つ。それはビットに当たり明後日の方向に兆弾する。兆弾したさきには更に別のビットがあり更に兆弾する

「同時多角射撃……見切れるなら見切ってみろ!!!」

ダンダンッ!!!

更に2発の銃弾が放たれ1発目と同じ様に兆弾を繰り返す

「ここからが本番だ!!」

パチン

龍也さんが指を鳴らすと兆弾を繰り返していた弾丸が弾かれたように異形に殺到していく、だがそれは僅かに異形から外れている

「流石にあの出血では照準がずれて……」
「違う!彼の目的は当てるところじゃない!!」

クリスさんがそういった瞬間。龍也さんが何をしようとしていたのかを理解した

ガガガッ!!!

兆弾した弾丸は異形の動きを完全に束縛していた。そして龍也さんは高速機動で異形の周りを回転飛行しながら

「円の動きで追い込み……そしてそのまま速やかに火力を集中!!」

異形の周りを円の動きで高速で移動しながら銃を乱射し、今度は両腰のビームライフルを連結させ高出力のビームを撃つ。その容赦の無い連続攻撃に射抜かれ異形がその動きを鈍らせる、これが龍也さんの狙い

「高速機動による……連続射撃……」

最初の兆弾はおとりだったのだ……それだけで理解する私以上の射撃のセンスを龍也さんが持っていることを……

「そして最後は中央突破ッ!!!」

ダンッ!!!ダンッ!!!

ビームキャノンを乱射しながら異形を通り過ぎる龍也さんだが

「ちっっ!回復力が高すぎる」

蜂の巣にされた異形は次の瞬間、再生しその腕を龍也さんに向けて延ばしていた

「一撃で決めなければ駄目か……ならば……咲き誇れ!木花咲耶ッ!!!」

龍也さんがそう叫ぶと手に持った剣が真ん中から開き凄まじい光を伴った白刃を作り出した。それを見た私達は言葉を失ったそれは間違いなく

「『零落白夜……』」

白式の単一技能、零落白夜だった……

「嘘だろ?」

俺は思わずそう呟いた、龍也の剣が開いたと思った瞬間現れた刃は間違いなく零落白夜の物だったからだ

「行くぞ……交わせる物なら交わして見せろ!!」

龍也がそう言うとその姿が掻き消え、異形の背後に現れる

ザンッ!!!ザンッ!!!

龍也の姿が現れては着えを繰り返し異形を引き裂いていく……

「月詠の夜桜」

最後に4メートルほどに巨大化した白刃を振るい異形を両断する。その一撃は異形の再生能力を持ってしても防ぐことの出来ない物で異形はその一撃で、完全に切り裂かれ消滅した……

「私に護れぬ者無しッ!!」

その刃を振るい龍也はそう言うのと地面に降り立ち

「とは言った物の……少々……無茶が過ぎた……な」

龍也の血に塗れた身体ゆつくりと傾き、血の中に沈んで動かなくなった……まさか……死……慌てて駆け寄ると

「スー……スー……」

「ね。寝てる」

思わず脱力仕掛けるがあれだけ血を流せば当然の事だと思い。うつ伏せの龍也を動かそうとすると

「馬鹿!!今龍也を動かすな!!」

千冬姉と先生達が走ってきて慌てて龍也の止血を始める

「バイタルは?」

「安定してます。でも出血が多いです早く医療室に運ばないと」

手早く応急処置を施し龍也をストレッチャーに乗せて運んでいく先生達を見ながら。俺は龍也の戦う姿と記憶の中の黄金の騎士が酷く似ている事を思い出し

(龍也は一体何者なんだろうか?)

俺から見ても龍也の戦闘能力は異常だ。そしてあの姿がどうしても俺に黄金の騎士を連想させる

(龍也と黄金の騎士は知り合いなんだろうか?)

俺はそんな事を考えながら先生達に指示に従い、気絶しているラウラを背負い医療室へと向かった……

「何時までこんな事を繰り返すつもり?」

「全てが終るまで」

L V 1と2を差し向け、適度に自分も攻撃し私達を足止めしてるL V 4にそう訪ねると、L V 4はにやりと笑い再び弓矢を放ってきた。無理をすれば突破できない事は無いが

相手の考えが判らないので無理に仕掛ける事も出来ず、私とフェイトちゃんはL V 4の作戦通りこの場で完全に足止めをされていた。私とフェイトちゃんが突破口を探していると

「ベリト。撤退しよ！作戦終了したし」

声だけが辺りに響き渡る。私とフェイトちゃんが辺りを見回していると

「もう終わったのですか？ネルヴィオ」

「うん♪もう最高ッ!!血まみれに八神龍也を見れて私大満足!!出来るなら私が傷つけたかったけどね♪」

L V 4の背後の空間が引き裂かれそこから1人の女性が見せる。ネクロの援軍かと思ったがその女性の顔を見て私とフェイトちゃんは絶句した。それは成長しているが

「ヴィヴィオ!?!」

間違いなくヴィヴィオと同じ顔をしていた。ネルヴィオと呼ばれた女性は

「その名で呼ばないでくれる? 私はネルヴィオ、ネルヴィオ・カオステイラって言う名前があるんだから」

絶対零度の視線をこちらに向けるネルヴィオは

「仕事も終わったし帰ろ、八神龍也は血まみれの上に左腕もぶっ壊したし暫くはまともに活動できないだろうしね」

血まみれ!?!それに左腕を壊した!?!どういうこと!?!私とフェイトちゃんが困惑していると

「そのまんま。死んではないけど結構重傷。まあ治癒魔法が得意だから直ぐに回復するだろうけどね」

からから笑うネルヴィオはそのまま転移魔法を発動させようとする

「させない！デイバインバスターツ!!!」

収束砲を打ち出すのが次の瞬間

「甘いよ、デイバインバスターツ!!」

「えっ!？」

私と同じ魔法を発動させて相殺するネルヴィオは嘲るように笑いながら

「収束砲が自分の専売特許だと思わないことだね。誰にだって使えるんだから。じゃあね、今度会ったら……私が殺してあげるよ」

にいつと笑いネルヴィオはLV4と共に姿を消した。

「何者？あのネルヴィオって」

ヴィヴィオと同じ顔。そして私の魔法を使うネルヴィオの正体が判らないが今は

「龍也が重傷だって早く戻ろう!!」

「判ってる」

ネルヴィオの事は後で良い。今は龍也さんが心配だ、私とフェイトちゃんは転移を発動させこの場を後にした……

第32話

第33話

第33話

観客席のIS関連の会社と各国のスカウトは一切に携帯を取り出し連絡を取り始めた。異常なまでの性能を持つISを操縦する男性操縦者。そしてどこの国にも所属していない……これは充分に騒動を引き起こすだけの話題だった

「2人目の男性操縦者の戦闘技能とISの性能は今からでも充分な戦力になる!!すぐにスカウトの準備を!!アメリカや中国に遅れをとるな!!!」

「聞こえますか!会長!!凄い生徒が居ます!!!1年とは信じられない戦闘技能と操縦技能を持って居る子です!!すぐにスカウトの準備をしてください!!!」

どこのスカウトも連絡を取り合ってる中ゆっくりと歩き出す女性の姿があった。スコールだ

(信じられない。片腕でしかもあれだけ重症を負って。化け物相手にたった一人で勝つなんて)

話には聞いていた神王 八神龍也。あの化け物達の天敵で今の容姿は偽りの者で実年齢は25と聞いていたが、それにしても異常すぎる戦闘能力だ

(でもあの力は必要だわ。全てを変えるには)

この世界で動くと言っていたベエルゼ、その目的を防ぐ為にも戦力が必要だ。例えこの手を血に染めたとしても私には成さねば成らぬことがある

(なんとか接触をしたいわ……この世界を護る為に)

ベエルゼ……形だけの協力者。今は何をしてもやつらから情報を引き出す必要がある

(正義の味方の真似事なんて……何をやってるのかしらね)

スコールは現在亡国企業からの連絡を一切絶ち独自の行動を取っていた。それはMもオータムも知らない事実、トップ達はベエルゼの言葉を信じているがとても私には信じられる内容ではない

(協力すれば世界をやる？そんなの嘘に決まってる)

優れたIS操縦者を殺し自らの手駒にするベエルゼ。そして見たこともない動物が苦しみ悶えながら化け物へと姿を変えていくのを目の当たりにして。そんな言葉を信じる程私は愚かではない。今はプライドも何もかも捨てて少しでも多くの情報を手にする。それがスコールがベエルゼ達と手を組んでいる理由だ。私はどうやって八神龍也と連絡を取るか考えながら。IS学園を後にした……丁度その頃IS学園の医療室では

「で？八神龍也はどこへ行った？山田君」

「し、知らないですよ!!!この有様なにやっただんですか八神君は!!!」

医療室で安静にしているはずの八神龍也の姿はそこに無く。代わりに粉碎された医療室の壁が大穴を明けていた

夢を見た……

赤い大地……崩れ果てた廃墟……そして墓標の様に立ち並ぶ剣の群れ……その真ん中で全身を刃で貫かれた青年が仁王立ちしている

燃える様な緋色の髪

身を包む黄金の甲冑

背中しか見えないがそれは広く見えそしてとても小さく見えた……後悔、絶望を背負いそして……何も救えない自分を恥じて……それでも彼は立ち上がり進んでいく

強い風が吹く……それと同時に青年が振り返る

顔はよく見えなかった……でもその口元に浮かんだ儂げなそれでも優しい笑みを私は見た……

「私は……」

「よう。目が覚めたか。エリス」

うつすら目を開けた私にそう問いかける声、この声は間違いなく龍也君だ。私がゆっくり両目を開いてみたのは、揺れる左袖だった……肩から先は無くそして頭に包帯を巻いた龍也君が椅子に座って居た「そ……その腕は？」

暴走したヤタガラスが切り落としたのかもしれない……震える声

で尋ねると

「ん？これか？なにお前のせいじゃない。お前のISの暴走を止めた後。化け物が現れてなそれに腕を切り落とされたんだ。邪魔だったから肩から先を切り落とすだけだ。あーそんなに青い顔するな義手だから換えは利く」

かっかと笑った龍也君は

「悪いとは思ったがお前の眼の包帯取らせてもらった」

「みたんですか……人なざるこの眼を」

ナノマシンにより水晶の様に変化したこの目が嫌いだった。言外にそういうと

「馬鹿か？自分の身体を嫌って何の得があるよ？」

その言葉に私は

「なにも!!何も知らないくせに!!!何勝手なことを言うんですか!!私は消えたかった!!死にたかった!!なのになんで私を助けたんですか!!!」
思わず自分の中にあつた醜い感情を全て龍也君にぶつけていた。
クローンである事……純粹な人じゃない私が何を出来る……死にたかつた、生きてる価値なんてないから。感情に身を任せ怒鳴り続ける。龍也君は無言で私の罵倒を聞き続け、そして話が終わったと同時に

「馬鹿が」

何が起きたか判らなかつた、急に視点が変わり混乱する私に鈍い右頬の痛みが教えてくれる……頬を叩かれたのだと理解しまた怒鳴ろうとする

「死にたい？消えたい？甘ったれるな!!!世の中には生きたいのに生きられない人間がどれだけ居ると思ってる!!!」

その怒声に思わず身が竦む。

「生きる事を捨てるな戯けッ!!その戯言をお前はツバキさんの前で言えるのか!!!」

!?

お義母さん、お義父さん……私をあの研究所から救い出して私の名前と暖かい場所をくれた人たち。

「そ……それは……」

言えない。言える訳が無い自分達が怪我をしつつ私をあ闇の中から引き上げてくれた恩人にそんな事は言えない

「エリス・V・アマノミヤツ!!!」

「は、はいっ!!!」

突然大声で自分の名を呼ばれ思わず返事をする

「返事をしたな?ならばお前はエリス・V・アマノミヤだ。それ以上でもそれ以下でもない……ましてや既にいない人間でも無い。現在を生きるエリス・V・アマノミヤに他ならない、それでももし自分が自分であると言えないのなら」

そこで言葉を切った龍也君はにこりと微笑み

「お前は今からエリス・V・アマノミヤになれば良い。何、お前には優しい母も居る。頼りになる友も居る……時間はある自分が誇れる自分になれば良い」

心臓が一際激しく高鳴った。龍也君の笑みはいつもと違い儂く今にも消えてしまいそうで、でもそれでも強く心に残る笑顔だった。どこも無くさっきの夢で見た赤い大地を歩く青年の笑みによく似ているその笑顔は私を赤面させるには充分すぎた。だがそれはすぐに消えた

「居たか!」

「居ません!!腹に風穴開いてるのに何考えてるんですか!八神君は」

教師陣の怒声を聞いた私は

「え?腹に風穴?」

「うん。後ろから化け物に貫かれてな。正直血が出てる」

龍也君が足元を見るのでそれにつられて下を見ると。血だまりが出来ていた……

「つきやツ!むぐつ!!!」

「しー、静かに見つかると不味いんだよ。医療室でジーとしてるなんて性に合わないんだよ。後で治療用のナノマシンを過剰投与として直すから問題ない」

いえ。それはかなり問題があると思うのだが

「ではな！私は逃げる」

「ちよっ！何してるんですか!?!」

私の制止など知らないとしても言いたげに龍也君は窓へと駆け出し。右腕で頭を覆いそのまま窓ガラスを突き破って外に飛び出していく龍也君と入れ違いで

「八神か!?!」

「織斑先生!?!」

血相を変えて飛び込んできた織斑先生は割られた窓を見て

「ちっ!!今度は外か！外を監視してる連中に伝えろ！腹に風穴開けて、出血死寸前のだ馬鹿を捕まえろと!!」

出血死寸前!?そんな状況で私の所に来てたの!?携帯を取り出し連絡を取り合っている教師陣の会話が聞こえる

「発見しました!!医療室で保管されてた医療用ナノマシンを大量に強奪して走ってます!!」

「捕まえろ!!過剰投与で死ぬぞ!!」

「ダメです!!走りながらナノマシン投与してます!!」

「あのだ馬鹿を捕まえて私の前に連れて来い。本気でぶん殴ってやる!!」

「ああ!?!壁を垂直に走って屋上に!?!」

「あの人外め!!あれだけ麻酔薬投与して何故動ける!?!ええい！私が屋上に行く!!」

私に何の声も掛けず走っていく織斑先生を見て思わず笑い声がこみ上げてくる。

何なんだ彼は……嵐めいた強引きで人の心に踏み込んで……

言いたい事だけ言って去って……

そしてそれでいてとても優しく……

「本気になっちゃうじゃないですか……」

きつと2人の魔王もこれにやられたんだ。

「あははは……」

なんて……なんて心地よいのだろう……自分の生まれを知って同情するわけでもなく、慰めるわけでもなく。怒鳴り本気で怒られたの

は初めてだ

「恋しちゃうじゃないですか……」

魔王と相対するのは怖ろしいのに、それでも彼に惹かれている自分が何故か誇らしかった

「ふはははは!!!」

「なんであんなハイなんですか!？」

「出血のせいで何処かおかしくなっただらうよ!!とにかく捕まえろ!!!」

騒がしい捕り物の音に私は更に笑いがこみ上げてきて笑い声を上げて笑った。傷に響き痛いながらも私の笑いを抑えることはできなかった……

さて出血のせいでハイになっていた私だが。それももう冷めた、何故かって?そんなの簡単だ

「龍也?何してるの?」

「龍也さん?お話しましょう?」

ハイライトが消え漆黒のオーラを撒き散らすのはとフェイトの前にそんなテンションが維持できるわけが無いだろう?

「はははは……山田先生、大人しくするんでこの2人から保護してくれませんか?」

「む、無理ですよ怖すぎますから!!」

頼りにならない先生だ、生徒の危機を見逃すとは

「そうですか……なら……」

冷静に戦況を分析する。

なのは・フェイト

体力全開・魔力やや減り

私

体力・魔力共にレッドゾーン。更に出血のせいで立ちくらみ

今までの戦闘経験から推測される自分の勝率……0%……

「反省はしている、だが後悔はしていない!!」

「後悔してください!!龍也さんの馬鹿ツ!!」

「どこかで絶対フラグを立ててるでしょ!!龍也の馬鹿!!」

ソニックブームかと言いたくなるほどの大声を近距離で出された私は、出血のせいもあり意識を完全に吹き飛ばされた……

翌日、食堂に向かっていると視界に入るのは何時もの黒コートと、何時もと違う揺れる左袖……お姉ちゃんに義手を自分で切り落としたと聞いていたが。こうして目の当たりになると言葉が無い。それに龍也君を見ると青い顔をして顔をそむける女子も多数居る、聞いただけでどれほど龍也君が重傷を負ったか判らないが、この反応を見ると相当酷い怪我だったようだ

「あ……龍也君」

「おう、簪。君付けに戻ってるぞ?」

そうは言われてもやはり君付けしてしまうのでどうしようもない

「腕……大丈夫?」

「何が?」

訳が解らないと言う表情でいわれ逆に困惑する

「不便じゃない?」

「隻腕には慣れてる。それに最近手術で視力を取り戻したが右目も見えなかったんだ。今更どうこう思わん。まあトレーを運ぶときは不便だな」

くつくと笑う龍也君は本当にそれだけと言う感じだった

「やつほー♪」

「やあ。楯無元気そうだな」

はははははと笑いあうお姉ちゃんと龍也君が何故か面白くなかった。

「なのはちゃんとフェイトちゃんは?」

「ああ、何か私の世話をするとか言ってるさから逃げてきた。隻腕には慣れてるしどうという事はないしな」

「普通は支障しかないわよ?」

呆れ半分のお姉ちゃんに龍也君は

「ふむ、では簪悪いがトレーを持ってもらっても良いかね？」

「ふえ？」

急に話を振られ困惑するが

「う、うん……それくらい良いよ」

こくりと頷くと

「それは助かる。簪は優しいな」

ぽふん……

頭から湯気が出るかと思った。何でこう龍也君は平然と言えるんだろう？漫画とかアニメの主人公のようだ

「あのさ？龍也君って何時もそんな感じで女の子落としてるの？」

「落とす？失礼な、私は女性を落としたことなど無いよ？背負うにしても抱き上げるにしても落としたことなど無い」

うん。絶対落とすの意味を理解してない。

「君いつか刺されるよ？」

「良く言われる。後刺された事は無いが監禁は良くされる」

……一体龍也君はどんな生活を送ってきたのだろう？それが激しく気になった

「びっくりするぞー？朝起きたら窓1つ無い鉄の部屋に居るのは。

まあ鉄を粉碎して逃げるんだが」

「それはそんな普通の顔で言うことじゃないわよ？」

ははははと乾いた笑い声を上げた龍也君は上を向き

「判ってる、判ってるんだ……でもそれを受け入れないと私はやって行けないんだ。だって一週間の内5日は監禁されるから」

本当にどんな生活を送ってるの？その余りに憂いに満ちた表情に私は何も尋ねる事が出来なかった

「それは……とりあえず頑張ってる」

「ありがとう。ところで何か用があってきたんじゃないのか？」

龍也君にそう尋ねられたお姉ちゃんは

「えーとね。予定してた事情聴取とI Sについての説明はとりあえず延期にする。ってさ」

「何故？面倒ごとは先に済ませたいのだが？」

お姉ちゃんは大きいため息を吐いて

「どうもねー昨日の龍也君流血と腕を切り落とす所を見てた生徒の大半がちよつとね、そのフオローで忙しいらしいのよ先生方が」

ふーんと言いながら龍也君は

「やれやれメンタルが弱いんじゃないのか？たかが腹を背後から貫かれ、2メートルほどの槍7本が身体に刺さって、腕を切り落としただけじゃないか」

「それはだけとは言わないわ。下手すれば一生物のトラウマよ」

お姉ちゃんの意見に全面的に賛同。私も多分見てたら龍也君と話せなくなつたかもしれない。

「でもな、ああしなかつたら。お前ら死んでたぞ？」

「まあそうよね。そういう面では龍也君に助けられたし、私たちを助けてくれてありがとう」

ぺこりと頭を下げたお姉ちゃんだったが

「だけど……自分の命は大切にしなさいよ？」

「判つてる。あれはああしないと駄目だったからそうしただけで。何も好き好んで傷つこうなんて思わんさ」

そう笑う龍也君だったが、その顔は空虚で空っぽに見えた、何か言わないと思うが何を言えば良いのか。判らなくて開いた口を閉じようとした瞬間

「龍也どこ行つたー!?」

「龍也さーん!!!その状態で出歩くんなんて正気ですかー!!!」

廊下の後ろから聞こえてくる魔王×2の声

「……凄く、逃げたいです」

「判るわ。あれは本能的な恐怖を感じる」

ゴゴゴゴゴゴッ!!!

という擬音が聞こえてきそうな負のオーラだ。下手すると魔王にロックオンされかねない状況。足が震えるのは当然だと言える

「見つけたー!!!」

「見つかったッ!?」

魔王に捕捉された龍也君が全力逃亡を始め。それを凄まじい勢いで追走していく魔王2人

「あんな風に追い回したらダメよ、簪ちゃん」

「判ってるよ。お姉ちゃん」

何だかんだ合った者の姉妹の距離感は少し近付いていた……

翌日……

「龍也……それ……」

揺れる左袖に包帯が服の下から見え隠れしてる龍也を見てなんと言えば判らず言葉に詰まっていると

「私が選んでやった事だ。何も気にするな」

「でも……痛てえ!?!」

突然放たれたデコピンに思わずそう言う

「余計な気遣いは必要ない。義手職人にも連絡したし直ぐに替えが来る」

良いな? 余計な気遣いはするなよ? と言う龍也の後ろから

「そう言う問題じゃないよ? 龍也」

「そうですよ? あんだけ出血して。その上隻腕なの見たら誰だって気にしますよ」

ぜえぜえと酷く疲れた感じのなのはとフェイトに龍也はのほほんとした表情で

「撒いたと思ったのに。随分早いな2人とも」

荒い呼吸を整えている2人は

「壁を垂直に走って逃げます? 普通?」

「おっ? HRが始まるな。席に着くか」

さっと椅子に向かっていく龍也。どうも自分に都合が悪いと判断したのだろう。龍也が席に着くと山田先生がふらふらと入ってくる、どうしたんだろう? ああ……昨日の教師陣全員が駆り出された龍也の捕り物で疲れてるんだろうと俺が思っていると

「残念ですけど。そうじゃないです、それも原因なんですけどね」

覇気の無い声で言う山田先生は

「今日はですね、皆さんの転校生を紹介します。いえ転校生と言いますか既に紹介は済んでるんですけどね……」

何か山田先生の説明は判りにくい。転校生なのに紹介は済んでい
る？何を言いたい……

「じゃあ入ってきてください」

「はい、失礼します」

あれ？この声聞き覚えがあるぞ？そしてとてつもない嫌な予感
が俺を襲い始める。

「シャルロット・デュノアです。皆さん改めて宜しく願います」

スカート姿のシャルロットがぺこりと礼をする。皆がはッ？と言
う顔をしながらも頭を下げる

「デュノア君はデュノアさんでした、と言うことです皆さん仲良くし
てくださいね。あと織斑君は死なないで下さい」

不吉な言葉そして騒然となるクラス

「え？デュノア君って女？」

「ああ。やっぱりか。気配が違うから男装してるかと思っていたが予
想とおりだな」

「つて！織斑君。同室だから知らないって事は無いよね！」

「ちよつと待って。昨日って確か男子が大浴場使ってた？」

「シエン、違うよ。龍也は出血多量で死に掛けてたからお風呂は入っ
てないよ？入ったのは一夏とシャルロット」

フェイトのその言葉がきっかけで教室が騒然となる中、山田先生が
織斑君。強く生きてください」

「そんな事言うなら助けてください!!」

遠い目をして言う山田先生にそう叫んだ瞬間

「一夏あッ!!!」

ズドンッ!!!

扉を蹴り破り鈴が登場。その顔は怒り一色と思いきや慈愛に満ち
たような表情に見えるが。その実鈴が纏う殺気がびしびしと俺に叩

きつけられている。ああ……怒りすぎて色々新しい境地を開いたんだな鈴

「死ねッ!!浮気者!!」

「俺は浮気なんかしてねえッ!!」

思わずそう叫んだがそんな事を言っている場合ではない。

ジャカッ!!

ISアーマー展開そして衝撃砲がフルパワーチャージを終えて俺に狙いを定め、そして不可視の弾丸が放たれた……

(あーこれは死んだなあ……)

どこか達観した気持ちになった俺はそんな事を考え、凄まじい衝撃音に思わず目を閉じた

ズドドドドオンッ!!

「ふーッ!!ふーッ!!ふーッ!!」

怒りのあまり肩で息している鈴が居る。その姿は猫に見えなくも無い……あれ?俺生きてる!?俺と鈴の間に割り込んでいたのは黒いISとラウラの姿。

「ラウラ!助けてくれたのか!」

「当然だ、折角得た答えを失い気は無い」

答え?何を言ってる?あれ?もしかしてあれか?暴走したレーゲンとの戦闘を終え医務室で少し寝た時に見た、ラウラと白い世界で話したのは俺の夢じゃなかったのか?

満足気に笑い答えを得たと言っていたが、何の事だか俺には判らなかつたので夢だと思っていたのだが

「答えてな……むぐうっ!」

ラウラが得た答えとは何かと思ひ尋ねようとした俺の襟を掴み、ぐいっと引き寄せるラウラそして俺は突然ラウラに唇を奪われた

「!?!」

「おーい?何故目を塞ぐんだ?なのは何?」

「龍也さんは見なくていいんです」

驚いているクラスと同級生の声にならない叫びと、どこか間延びした龍也の声が聞こえる中、ラウラは

「お前は私の嫁にする！それが駄目なら私の婿になれ！！一夏！！」

「それ意味合い同じだろ」

あまりに驚きすぎてそんなコメントが出てしまう

「私の副官が日本では気に入った相手を選んだと言うと言っていた、だがツバキさんが婿にすると言うのが一般的だと言っていた、だから両方言わせて貰った」

ツバキ先生、どうせなら最初の方を訂正してください、

「あ……あ……あんだねええええッ！！」

ジャキンッ！！

鈴が再度衝撃砲の砲門を開き

「ラウラを嫁にする位なら！！あたしを嫁にしなさいよ！！」

「混乱するな鈴！！落ち着け！！」

「うるさいーうるさい！！あんたはあたしのなのに！！キスしちゃうなんて許せないんだからーッ！！」

「俺は被害者だーッ！！」

何この修羅場誰か助けてくれよ

「おい？フェイトなんで私の耳を塞ぐんだ？」

「龍也が聞くべきことじゃないからだよ」

この龍也の間延びした声が無性に腹立つ、だがそんな事を言ってる場合でないこのままここにいたら殺される！何とか脱出を！！

ビシュン

脱出先を探していた俺の鼻先を掠めていくレーザー。恐る恐る

レーザーが飛んで来た方向を見る

「一夏さん？すっかりどういいうことか話して下さいますわよね？大浴場の件そして今のキスの件、全て貴方の言葉で説明してください」

言葉使いは冷静だが目が単色になってる。あれはなのは達特有の魔王の目線！セシリアが魔王化しつつあるのか!?だが今はそんな事を考えてる場合ではない！逃げなければ命が無い。窓だ！窓から逃げれば何とか……

ダンッ！！

突然目の前に日本刀が突き立った……これ筈の持ってた日本刀だ

よな。と言うことは

「説明してもらおうか?一夏」

「俺だって説明して……のおおおッ?!?」

ブンッ!!ブンッ!!

鋭い踏み込みで放たれる斬撃を頭を抱えて回避する

「なあ?何時まで私は目と耳を塞がれたままなんだ?」

「全部が終るまで(一夏が処刑されるまで)」

龍也はまだ目と耳を塞がれてるし。それ以前に隻腕かつ出血のせいで顔が青い龍也に助けを求める事は出来ない。ならば自力で逃げるしかない

ぼすっ

「ほへ?」

誰かにぶつかり思わず頭を上げる

「……」

そこにいたのはシャルロットだったが、その目に光は無く冷たい視線で俺を見下ろし

「一夏は……僕のものに……僕のぼくのボクの……」

えっ?なにこれ?シャルロットが何時の間にかとんでもない魔王と化してる!?

「一夏が僕のものになってくれないなら……潰すしかないよね?大丈夫ぼくも死ぬ」

ヤバイってええええええ?!?!なにこれ!?今まで俺の周りにいないタイプの魔王に進化してるうううう?!?

「グレースケールなら一発だから痛くないよ?」

「即死だからな!!というか正気に戻ってくれよ!!!」

「僕は正気さ。やっと見つけた僕の居場所……絶対に失いたくないんだッ!!」

ジャキン!!!

グレースケールが何のためらいも無く心臓に向けられる。ヤバイ……ヤバ過ぎる。シャルは本気だだって切っ先が震えてるから

「お、落ち着け!!シャルロット。いくらなんでも心臓狙いは不味い」

「そ、そうですね！落ち着いてください！シャルロットさん!!」

流石にシャルロットの表情から本気で俺を殺めかねないと判断した、箒とセシリアが止めに入るが、遅い

「ごめんね?」

心臓に向かってくるバンカーがゆつくりに見える、俺が目を閉じようとした瞬間

「何をしてる戯け」

「ふえ?うわあああッ!?」

その腕を掴みそのまま窓の外に投げ捨てる黒いスーツの腕

「千冬姉……」

「大丈夫か?少し待ってる。すぐこの戯けどもをぶちのめす。特にラウラ!お前は念入りにな!!!」

ブンッ!!!

風切音を立てて千冬姉が構えるのは異形の日本刀

「それは?」

「ん?ああ、折れた零式の斬艦刀をツバキさんが打ち直してくれてな。さてこれならIS装甲でも引き裂くぞ。さあ私の一夏を奪おうとした罪。死を持って償えッ!!!」

近くに浮いていたタイヤーズが両断される、えーと生身ですよね? ISの補助とかないよね?え?それでこの威力?箒達も目を見開き額から滝の様な汗を流し、回れ右して全力逃亡を始めた

「逃がすかアアアアッ!!!一度三途の川に叩き込んでやる!!特にラウラアアアアッ!!!」

ああ……脳内リミッターがもう完全に意味を成してないんですね。だって目に光ないし徒歩でISに追いつくってどんな脚力してるの?

「うわあああッ!!ドイツでの悪夢がッ!!!」

「■■■■ッ!!!」

凶化がログインしてる!?もうあれは鬼神だ、誰も止める事など出来はしない。世界最強が凶化?誰が止めれるというのだ?

「織斑君。止めて来てください」

「山田先生!?!あなたは俺に死ねとツ!?!」

外の音を聞けば、あそこは死地としか思えない

「衝撃砲を弾き飛ばした!?!」

「ISでも抑えれない!?!」

「■■■■ツ!!!」

理性など無いとしか思えない、あんな千冬姉の前に出てみる。食されて終わりだ

「それもそうですねー。では代表候補生へと特別訓練という事で……処理しましょう」

「良いんですか?」

「織斑君?今の織斑先生を止めれると思いますか?」

「無理ですね」

すまない。箒・鈴・セシリア・ラウラ・シャルロット……俺は無力量だからお前達を助けられない。俺が心の中で謝っていると龍也が窓際に立つ

「私が止める」

「どうやって?」

隻腕・出血多量で瀕死の龍也では止めようがない筈だが

「まあ見てろ」

龍也が大きく息を吸い込み叫んだ

「俺は優しい千冬姉が大好きだーツ!!!」

俺と全く瓜二つの声で

「うおおおいつ?!?!なんで俺の声が出せるんだよ!!!」

「ふっ!物真似などたやすい!」

「そういう問題じゃねえよ!!!」

「逃げないと死ぬぞ?社会的にか肉体的にか。どちらかだな」

運動場を見る。箒達の絶対零度の視線+千冬姉の肉食獣の目が俺を捉えている。そして一斉に走ってくる

「嘘だろおおおツ!?!?」

「強く生きろ、一夏」

「一応出席という形にはしておきますんで。頑張って逃げ延びてくだ

さっ

ドドドドツ!!!

「凄い音が近付いてくる!? くそー! 死んでたまるか!!!」

俺はその日。極限状態になるまで千冬姉達に追い掛け回される羽目になった。この恨み……いつか必ず晴らしてやるぞ龍也!!!

第34話に続く

第34話

第34話

放課後、剣道場で俺は身体を持ってある事を実感していた

「龍也。お前隻腕でも充分強いのかな」

「当然だ、たわけ」

昨日生死をかけた追いかけてこをやらされた復讐にと。今なら勝てるかと踏んで組み手を頼んだが結果は何時もと同じく俺の負けだった

「卑怯な事は良くないよ？一夏」

見学していたフェイトにそういわれ。ぐうの音も出ない。俺が卑怯な事をしたと言うことは俺も判っているからだ

「いや、一概にも卑怯とは言えないのではないか？敵のウィークポイントを突くのは当然だ」

「良い事言うな、ラウラ。私も同意見だ、だがあからさまにそれを狙えば対応されるのは当然だがな」

フォローのつもりなんだろうか？だがその一言で俺のプライドはズタボロだ、更に

「……」

無言だが、明らかに怒った表情で俺を見てる簪さんの視線が痛い、視線が威力を持つていれば俺は当の昔に蜂の巣だろう、俺がそんな事を考えているとラウラと同じドイツの軍属のクリスさんがPCを操作しながら

「でも八神龍也。貴方の動きは隻腕だけで無く隻眼で動く事を前提にしているように見える」

PCを操作し何かの画面を出す。

「この時も。この時も足の運び方腕の動かし方、両方とも右目・左腕が使えない事を前提にしているように見える。それは何故？」

「何故って。義手を付けて貰ったのは2年前だし、右目が視力を取り戻したのも最近の事だし。もう習慣になってるんだよ、その動き方

額を押さえたまま立ち上がったヴィクトリアさんは

「私は強いと言う意味を履き違えていた。それはあの時のお前の戦う姿を見てそう実感した。強さとは力のことではない、その在り方だと。だから私は弱い、弱すぎて話にならない」

ヴィクトリアさんの話を聞きながら俺は

「なあ？あの人本当にイギリス人か？俺には一昔前の日本人の様に思えるんだが？」

「私もだ、あれはどちらかと言うと侍のような印象を受けるぞ？」

俺と筈の意見を聞いたセシリアは

「ヴィクトリアさんは、本当真面目な方でして。悪い人じゃないんですよ？ただ超がつく頑固者で融通が利かないだけですの」

「それは欠点だろ？」

どうもヴィクトリアという人物は生まれてくる人種を間違えたタイプの人間らしい。日本人ならあの言い回しとかも納得なのだが

「ここでだ弱い私が強くなるにはお前に指示するのが一番早いと判断する。気が向いた時でいい私にも訓練をつけてくれないだろうか？」
「別に良いぞ？放課後大体私は一夏達に訓練つけてるし。参加したいなら参加すればいい……まあ一回参加表明したら逃げるのは認めんがな」

来るもの拒まず、去る者は追うか。つまり俺が逃げ出そうとすれば追いかけて捕まえると言うことか。

「頑張るしかないな、筈」

「そうだな……」

厳しい訓練だが耐えれば強くなれる、なら耐えて耐えて強くなるう。俺がそんな事を考えていると山田先生が来て

「八神君。えーと義手を届けに来たって人が来ました。とりあえず入校許可を出す為に今職員室に居るんで。食堂に案内するんでそこで待ってて貰えますか？」

「はい、判りました」

龍也が返事をするると山田先生は

「ただ、その……来た人なんですけど……」

「若すぎると言いたいんでしょう？大丈夫ですよ。若いですが良い腕をしてるやつらなんで」

「それならいいんですけど……じゃあ伝えましたからね」

そう言って戻っていく山田先生を見ながら龍也は

「そう言うことらしい。私は食堂に行くが、お前たちはどうする？」

訓練を始めたばかりだが、龍也の義手職人と言うのも気になる俺達も一緒に食堂にへと向かった

「お、来た来た、おーいチンクー」

食堂に入ってきたのは私達と同年代の少女だった。小柄でどこも無くラウラに似ているその少女は無言で龍也君に近づく

「?どうし……ふぐおうっ!!!」

「龍也ーッ!!!」

ボディブローから顎へのアッパーに流れるように繋いだ少女は

「この大馬鹿者がッ!!!」

でかいスパナを持ち龍也君の頭蓋に振り下ろそうとする

「スパナッ！スパナは駄目だッ!!!チンク姉!!!」

「落ち着いて！落ち着いてください!!チンクさん!!」

その少女より年下そうな青い髪と赤い髪をした少女がそれを必死で止めるが

「ええい!!一発だけだ！一発だけ殴らせろ!!!」

暴れてその拘束を振り解き。スパナを振り下ろす

「ふんッ!!!」

「へもっ!?!」

龍也君は奇声を発して倒れこみ。その少女は龍也君の前にしやがみ込み

「おい八神、どういう両見だお前は。私が丹精込めて作った義手を半年も経たず壊すとは、3徹して作った私を馬鹿にしてるのか?」

ゴンッ!!ゴンッ!!

しやがみ込み龍也君の頭を殴り続ける少女は傍目から見ても凄く

怒ってる

「いえ。悪いとは思っていますし……馬鹿にもしていません。ただ人命救助のために必要な犠牲でして」

「どうせ義手だから替えがきくとかそんな理由だろ？作るのにどれだけ時間がかかっていると思ってるんだお前は？」

「うっ!？」

「まあ良いんだがな？どうせお前は義手を直ぐ壊すと思っていたさ。私が怒ってるのはな八神」

ぐいっと龍也君の襟元を掴んだ少女は

「大怪我をしてまだ動き続けたお前に対してだ。大馬鹿者め、長い付き合いだお前の考えてる事や行動パターンは判ってるさ。だが自分の身体も大事にしろ良いな」

「検討します」

龍也君の返答を聞いた少女は無言で持っていた工具箱から馬鹿でかいレンチを取り出し両手で構えた

「駄目だつて!!それは流石に不味い!!」

「馬鹿は死なないと治らないと言う。ならば1度三途の川に送るべきだろう?」

「龍也さん!死ぬ気で謝ってください!!チンクさん本気です!!!」

「チンク!落ち着いて!!流石に龍也もそれで殴られたら死ぬツ!!」

「放せツ!!あのど馬鹿を殴らせろ!!!」

「すまん!すまなかつた!!チンク!!」

ギャーッ!!ギャーッ!!

龍也君をレンチで撲殺しようとする少女とそれを止めようとするフェイトやなのはに見知らぬ少女2人。なんと言うかとても混沌としていた

〜30分後〜

「すまない。少々取り乱した」

「いや、こっちが悪かったんだ。チンク」

冷静さを取り戻したのか謝るチンクと言う少女とそんな彼女に謝っている龍也君

「まあ良い。私はお前をサポートすると決めたんだ。こんなことで怒っているのは話にならん、ほれ直ぐに調整に入るが良いか？」

「頼む」

椅子に座る龍也君の左袖から手を入れるチンクさん

「え？なにしてるんだ？」

「静かにしてくれ。配線を探してるだけだ」

「ごそごそと龍也君の腕の付け根を触っていたチンクさんは

「ん。あった」

何かの配線を引っ張り出し机の上置いた。

「どれ？配線に傷は……」

「ゴークルをつけて配線を見つめながら

「傷はないな。直ぐに接続準備をするか。ノーヴェ、5番と9番のレンチを。それとスバルは持って来た義手を出してくれ」

「あいよ」

「はい」

「どうやらあの2人は助手のようでテキパキとチンクさんに工具を渡している

「よし、では一時的に義手と繋ぐぞ」

機械の骨組みが剥き出しの義手に配線を繋いだチンクさんは

「拳を作ってみろ」

「モーター音を立てて動く義手の指。なんか凄いな、色々聞いてみたいが集中してるようなので皆黙って見てる

「少し反応が鈍い」

「10・09のずれか。調整する」

「PCを操作しながら

「これでどうだ？」

「良い感じだ。前よりもスムーズに動く」

「色々改造したからな。モーターも制御基盤も新しい物に変えたり、耐久力も以前の物より20%アップに成功しつつ、重量は以前のままだ」

「どうも若いが優秀なメカニックのようだ」

「すまん、いつも迷惑を掛ける」

「気にするな」

言葉数は少ないが判る。この2人がとても仲が良いと。だがそれは私にとって面白い物ではなかった

「よし、調整終り。神経接続するぞ」

チンクさんがそう言うのと龍也君は心底嫌そうな顔をした

「どうしたの?」

私がそう尋ねると龍也君は

「神経を接続する時のビリッ!て感じが嫌なんだよ。簪」

「我俣を言うな、神経接続タイプでは無いと動きにタイムラグが出る。それを少なくする為の神経接続だ。服を捲れ。ああコートで身体を隠せば良い」

黒いコートで肌を隠す龍也君。やっぱり恥かしいのかな?

「判ってる。わかっているが苦手なものは苦手なんだ」

龍也君はぶつぶつ言いながら右手で服を捲り上げ左肩を出した。金属のパーツで出来た接続部に調整の終わった義手を接続した。チンクさんは

「ノーヴェ、6番のレンチだ。それを接続部、上部の出っ張りに」

「ここか?」

「そうだ、そこだ。でスバル。お前は2番のレンチで肘の所の接続部に出っ張りをしめてくれ」

「こ、ここですか?」

「違う、もう少ししたの……そう、それだ」

「(そこ)そとコートの中で動く気配がする

「OKだ、1・2・3でしめるぞ」

「……」

龍也君が物凄く嫌そうな顔をしている。それを見た織斑君は「ぷっ!すっげえ嫌そうな顔してるぞ?」

「実際痛いし、嫌なんだよ」

「1・2・3」

ボルトがしまる音と同時に

「つうっ!？」

ビクンと身体を竦める龍也君は

「うー痛てて。何度もやって貰ってるが、どうしてもこれには慣れん」
「ふっ。ならば壊さないように気をつけるんだな。壊れたら直してもやるし調整もしてやる。だがこの痛みが嫌なら、それはおまえ自身で気をつけることだ」

「へいへい。判ってる」

コートを着直す龍也君の左腕は機械のフォームがむき出しの人間とは思えない物だ。これからどうなると前みたいな腕になるんだろう？

「人工皮膚の原液に浸して義手の熱で乾燥させる」

「え？」

「声に出てたぞ？簪だったか？興味があるなら聞け答えてやる」

ふっと笑ったチンクさんは何かのカプセルを机の上に置いた。龍也君はそれに義手を入れた

「良いぞ。抜いてくれ」

引き抜かれた義手は肌色に覆われていたが、少々不恰好な物だった
「さてと、次は……と」

工具箱からナイフを取り出したチンクさんに

「それで何するんですか？」

「これで余分な人工皮膚を切り落として形を整えるんだよ、不器用なスバルとノーヴェじゃ出来ないからな」

シャツ！シャツ！と皮膚を削り落とし形を整えながらチンクさんは

「お前は相変わらず無茶をする。替えがきくとは言え、正規の切断方法をしないで切り落とせばダメージはあるんだぞ？常人ならショック死するレベルの痛みをどうしたら我慢できるっ？」

「さあな……痛みにはもう嫌と言うほど慣れた。きつとそれでだろう？」

「我慢になってないぞ馬鹿者」

ふふふと笑うチンクさんに龍也君は

「すまんね。私はどうも馬鹿らしい」

「そうだ、お前は大馬鹿者だ」

「そこまで言うか?」

「言うさ……ほれ。終わったぞ」

最後の皮を切り落としたチンクさんに頷き龍也君が手を動かす。もうモータ音も聞こえず動きもスムーズで本当の腕の様にしか見えない

「うーしッ!!じゃあこっからが私達の出番だな!」

「そうだね、よっと」

スバルとノーヴェエが立ち上がり腕を回す

「何するんだ?龍也」

「義手の連動確認だ。その為にスバルとノーヴェエが来た」

「だから何するんだよ。連動確認て?」

織斑君がそう尋ねると龍也君は

「見てれば判るさ。そうだ、一夏、鈴とか呼んでくれ。きっと良い勉強になる、第2アリーナに集合とな」

そう笑って出て行く龍也君と

「よし、調整だからな。直ぐに倒れるなよ2人とも」

「無茶言うぜ、チンク姉」

「そうだよねーでも。大丈夫ですよ。すぐに終る気はないですから」

一体何を?俺はそんな事を考えながらアリーナに向かった

「で?なのは。これから何が始まるの?」

鈴がそう尋ねるとなのはは

「スバルとノーヴェエのタッグと龍也さんの模擬戦。スバルとノーヴェエは格闘技やつてるからね、義手の確認にいつも模擬戦してるんだよ」

それを聞いた私は

「ええ?無茶じゃない?龍也君無茶苦茶強いよ?」

偶に4対1とかで模擬戦をするが、まるで勝ち目なんてない。私達より年下の女の子が勝てるわけが無いと思う

「見てれば判るよ。あの2人は……凄く強いよシエンさん」

なのはに言われアリーナを見る

「ではまずは無限組み手から。制限時間は……15分でどうだ?」

「良いですよ。それでお願いします」

15分!?5分でも難しいのに3倍なんて絶対無理だよ

「いやいや!無理だろ!格闘技に自身のある私だって3分ちよつとしか立ってられないのに」

弥生の言うとおりでと思う。

「良いから見てなよ。大体あの2人は昔から龍也に稽古をつけられてるんだ……こと身体能力なら大人でも勝てないよ」

そう笑うフェイトに言われアリーナの中を見る

「右から。私は逆方向から回りこむ」

「OK。スバル」

龍也君を両サイドから挟み撃ちにするべく走り出す2人に

「シッ!!」

するりと地面を滑るように龍也君がスバルに迫り拳を繰り出す。

私はあれで吹き飛ばされて何時もダウンするんだけど

「よっ!!」

左腕でその拳を受け流し、そのまま絡みつくように龍也君の懐に入り込み

「ふっ!!」

鋭い踏み込みから肘打ちを叩き込もうとするが

「甘い!」

「イタタツ!!」

膝でその打撃を受け止めた龍也君は痛いというスバルの腕を掴み投げ飛ばす

「あーあ、15分なんて無理なんだよ」

これでダウン。カウントもリセットだ

「よっ」

「嘘おっ!」

投げ飛ばされる途中で片手を突きそのままクルンと回転し。その

勢いそのまま飛び蹴りを放つスバルと

「おらあッ!!」

龍也君に似た足裁きで移動し飛び膝蹴りを放つノーヴェ。完全な挟み撃ちの形だが

「やれやれ、飛びながらの攻撃は隙だらけだと何といえ判るのだ?」

がっ!

スバルの足とノーヴェの膝を掴み、そのまま2人を無造作に投げ飛ばそうとした龍也君だが

「むっ?」

「もうりかいしてますよーだッ!!」

自分を投げ飛ばそうとした腕を掴みその腕を軸に半回転し回し蹴りを叩き込むスバル

「ぐっ」

それは龍也君の顔を捉え数歩後退させる

「嘘。あたし達より年下が龍也に攻撃を当てた!」

鈴が驚いている。かと言う私も驚いた。私より年下でリーチもパワーもないのに……

「そらよっ!!」

「水面蹴りかッ!」

ノーヴェが水面蹴りを放ち龍也君のバランスを崩し

「ヒュウウウッ!!」

ダンッ!!!

鋭い踏み込みの音を立ててスバルが拳を繰り出す

「ちっ!」

それを弾いた龍也君の死角からノーヴェがしっかり体重を乗せた回し蹴りを叩き込む

「むっ」

ガードした物のそのまま後ろに飛んで一旦距離を取る龍也君。その顔に何時もの余裕の色は無く真剣そのものだ

「なんでだ?なんであの2人は龍也と同等に戦えるんだ!?なのは、フエイト」

一夏君がそう尋ねる。多分今ここであの組み手を見ている全員が思っている事を

「私達が住んでいた街で昔、大きな空港火災があった。その時スバルを助けたのが当時11歳の八神。そして私の父は優れた科学者だった。だからその頭脳に目を付けた組織に私達が誘拐され、そしてそれを助けたのはやはり当時12歳の八神。あの2人は絶対に忘れられんのさ、八神が自分達を助けてくれた事をそして、その時に願った。自分達も八神の様に誰かを助けられる人間になりたいと願い。八神に師事し八神の戦い方。格闘技を覚えたあの2人は、お前たちより遙かに強い。それが答えだ」

願いと覚悟。その違いとでも言うのだろうか？だがチンクさんが言った事が事実なら、あの2人の脳裏には今でも鮮明に焼きついているのだろう。自分達を助けてくれた龍也君の姿が。そんな龍也君に追いつきたくて、認められたくて2人は必死であの厳しい龍也君の訓練について行き。今の力を得たのだろうか

「そっか……それは強いのも当然だよね」

15分と言うのは無茶でも何でもないんだ、あの2人は私達より強い15分なんて楽に立ってられるんだろう

「4……3……2……1……0！15分経過！」

なのはがそう叫ぶ、不可能だと思われた15分の無限組み手を終えた3人は

「さて？ウォームアップは充分か？」

「ええ、良い感じに温まりましたよ」

はあ!?無限組み手がウォームアップってどういうこと？皆が絶句してる中。龍也君が何時も着てるコートを脱いだ。それはゆっくりとアリーナの床に落ちめり込んだ

「はあああアッ!?!」

あり得ない音を立てて落ちるコート、え？あれ何キロあるの？

「400キロ。龍也のコートの重量は400キロ、あれは龍也の動きをセーブする枷、それを外した龍也は速いし強い」

どこの漫画ですか!?普通ありえないでしょう!?!

「んじやま、私もと」

「どっこいしょ」

「嘘だろオオオツ!？」

スバルとノーヴェもリストバンドと足のバンドを外す。やはりこれもあり得ない音を立てて地面に落ちる

「2人のは4つ合計で100キロ丁度。八神の真似をするといつて聞かない者だから私が作った」

お姉さんなら止めましょうよ! チンクさん!!

「さて、どこまで着いて来れるか。見てやろう、スバル・ノーヴェ」
ゆらり……

何時も構えを取る龍也君がだらりと両手を下げ、足を肩幅に開いて立つ。だがそれは自然体には見えない、だが対峙している2人は真剣な表情で構えを取っている

「龍也さんに構えなんて必要ない。ただ闘うと決めればそれで全部事足りる」

なのはがそう言うのと龍也君がユラリと体を前傾にさせ……

「消えた!？」

シュツ!と言う踏み込みの音と共にその姿を消した

「機神拳」

「うっ!？」

一瞬でスバルとノーヴェの背後を取った龍也君が軽い素振りです拳を叩き込む

「見えなかった。龍也は何をしたんだ!？」

箒が驚き叫ぶとフェイトが

「何にも、ただ踏み込んで2人の背後を取っただけ。私達が見えないスピードでつて付け加えないといけいけないけどね」

それだけつてことじゃない、認識させさせない歩法。そんなの相手に勝てる訳がない

乾いた打撃音と共にスバルとノーヴェの身体が浮き上がり

「羅刹剛手甲ツ!!」

鋭い踏み込みの音から2連続の裏拳が放たれる、2人の小柄な体が

思いつきり吹っ飛ぶ、だがそれをした龍也君は自分の腕を見て

「自ら飛んだか。衝撃は7割減と言った所か？」

「それは行きすぎ、良いところ4割減がやつとだけ」

「っー手痺れたーッ!!!」

2人とも上手く態勢を立て直し着地するが、手や足を動かして痺れを確認してる

「ヒットポイントをずらせばダメージは減る。龍也に教えてもらった事は忘れてねえ」

「そうか。では今度はお前達から攻めて来い。どれほど私の考えた機神拳を使えるようになったか見てやろう」

「驚きますよーッ！絶対」

「ああ!!」

2人が同時に駆け出す。龍也君はそんな2人の様子を見て軽く微笑み。拳を握り締めたのが見えた

第35話に続く

第35話

第35話

「このっ!!」

「貫ったッ!!」

「まだまだ甘い、甘い」

しつかりと体重移動しくりだされたスバルの正拳とノーヴェの上段回し蹴りを受け流し捌きながら

(感覚は駄目そうか?)

恐らくジェイル作の幻術発生器で姿を誤魔化しているであろう2人にそう尋ねると

(はい、どうもラグがあつて動きにくいですね)

(私もそう思う、ちよつと身体が硬い感じ)

そうは言いながらも鋭い風切り音を立てて迫る2人の拳を左手で防ぎながら

(となるとそこまで本気は不味いなー。ガードまにあわんだらう?)

剛手甲が当たった時の手応えがおかしかったので気になったいた事を探ねると。目線だけで領く2人、こと受身と防御が上手いの完全に命中した手応えにどこか不調もしくは幻術との同期が上手く行っていないと思っていたがやはりか

(では、基礎の体捌きと攻撃。体重移動がちゃんと出来てるか見せてもらうぞ、それくらいなら大丈夫だろ?)

(はい!)

(まあそんなくらいならいつも通りかな?)

念話を止め、そのまま2人から距離を取り

「義手のテストだ。全力で打ち込んできてくれ」

となれば義手の耐久度。神経伝達のラグを確認する事を最優先にしよう。いぎネクロと戦って壊れました、反応が遅れましたじゃ、笑い話にもならないからな

「あれさー、凄げえな。フレイア」

アリーナを監視してるモニターを見ながら呟く、龍也と戦ってる女の子……見た所12〜14くらいだろうが、驚くほど技量が高い

「私は剣士だ闘士の戦い方を見ても強いかどうか位しか判らん、どこが凄いんだ？」

まあ。そりやそうか。フレイアは剣をメインし、後は補助程度に射撃が少し、主な役割が現場指揮だからそう言われても判らないか

「まずは体重移動だな。攻撃にしろ防御にしろきっちり体重移動してやってる。あれなら軸がずれないから反撃に出やすいし、連打も出る。多分足腰がかなり強いんだろうよ。良い拳打は足腰の強さで決まるからな」

あたしはどつちかかって言うのと突っ込んで殴る。とシンプルな戦闘しか出来ないから良く判る

「ノーキンだからなお前は」

「黙れ、暴走特急」

思い込んだら一直線かつ人の話を聞かないフレイアにそういわれるのは納得行かない、って言うか

「なんでお前が脳筋なんて言葉知ってるんだよ？」

「アイアスがな。教えてくれた」

「あの味覚音痴！いっぺん殴る!!!」

辛味と甘味に酸味にくらいにしか反応しない、あの毒舌はいっぺん殴るべきだそうに違いない

「全く、少しは落ち着け馬鹿者」

「ああ……っっておめえ！なに食ってんだよ!？」

「何って、八神龍也が置いていったチーズケーキだが？」

「数少なくなってるのに食うんじゃねえよ！ああーもういいあたしも食う」

冷蔵庫から龍也が置いて行ったケーキの箱から

「やっぱ、チョコだろ、チョコ」

チョコケーキを取り出し、ふと隣を見ると

『エリスの食べるな!!』

とご丁寧に見板がかかったクリーム餡蜜が

「これって?」

「ツバキ殿がやっていかれた」

殿って何だよ、殿ってお前どこの人間だよ、スペイン人

「そうよ、だから食べちゃ駄目よ? 医療室でもエリスちゃんに気がしてたから」

「うわあッ!?!」

突然聞こえたツバキさんの声に驚き、振り返ると

「ほう、悪くない」

「でしょ? あの子。芸達者よねー」

アツシユブロンドの髪をオールバックにした男性とツバキさんが普通にケーキを食べていた

「…………え?」

何で居るの? ツバキさんは判る、だが

「何故そんな不思議そうな顔をする。シエルニカ」

「いや…………オクトさん? 何で日本に?」

ドイツ軍に所属し男性でありながら中佐の地位を持つ。ツバキさんの夫である。オクト・V・アマノミヤが居ることに驚きながら尋ねると

「エリスが怪我をしたと聞いて黙っていられると思うか?」

「あ、はい。返答ありがとうございます、よく判りました」

ツバキさんもオクトさんもある共通点がある。エリス様を溺愛してると言う点だ

「しかし、こうして見ると八神龍也と言うのは中々に出来る奴だな」

「そうね。今回は徒手空拳だけど、剣を使わせるともつと凄いわよ」

モニターを見る2人に

「えと、来た理由って何なんですか?」

アリーナを見たいのなら管制室にでも行けば良い。ここに来たと言ふことは何か理由があるはず。そう思って尋ねると

「トーナメントでの黒い亡霊の襲撃の映像を見たい。IS学園は特記

事項として閲覧を許可しなかったのよな」

「私も持ち出せたのってこれだけなのよね」

空の葉莢が2つ、それと砕けたISコアの破片？でもあれって

「あのツバキ殿、それ色がおかしくないですか？」

赤黒くまるで血のような輝きを持つISコアは見る角度によってその色を変え続けている

「そっ。それがおかしいから画像で見に来たの。この破片とこの葉莢が何なのか知りたいからね」

何か危ない橋のような……まっ今更か、親も名も知らず戦場を渡り歩いてきたあたしを保護した、更識家。そして目的も無くただ与えられた事をこなすあたしに自分の意思で考える事を教えてくれた、ツバキさん。あたしは更識家とアマノミヤ家の為に動く。もうずっと前にそう決めた。今更危ない橋だから退くだなんてことはしない

「判りましたIS学園に提出する前にコピーしてます。少し画像は荒いですけど……そこは勘弁してください」

あたしは隠していたアリーナの監視カメラのデータを再生し始めた

「強いねースバル!!」

「ずっと頑張っていましたからね」

ははははッ!!!

バンバンと背中を叩きあう、シエンとスバルを見ながらあたしは「つうか、2対1でノーダメージどういうことよ?」

あの模擬戦は30分ほどで終わった、スバル・ノーヴェ。(スバル・ナカジマとノーヴェ・スカリエツティの体力切れとなり終了になった)「馴れだな、馴れ。私は1対多の戦い方に慣れてるからな」

「いや。私も慣れていると言う自信はあるが。お前のは完成度が高いぞ。龍也」

ラウラがそう言うのと龍也は遠い目をして

「昔、武術の奥義の制空権を身に付けようとして1対40とかの組み手をしたのが良かったのかもしれない。なんせあつちは皆。刀を持ってたから」

「二」お前は何をしてるんだ!!」「三」

本当龍也つて何やってきたのよ。

「うーん、いやほら。あの当時は目見えなかったし。腕ないし、それをフォローする答えがそれだったてことで」

「なあ箒。俺が強くなるには龍也みたいな無茶をしないと駄目なのか？」

「一夏!? それは違うぞ! 生き死にを賭けた修行は止めろ!」

箒ががくがくと肩を揺するが一夏は

「それも1つの方法か」

「あんたはアホかツ!!」

いっぺん殴つて正気に戻そう。思いっきり踏み込み一夏の横っ面に拳を叩き込む

「はっ!? お、俺は !? つうか右頬がむちゃくちゃ痛いんだけど何があつた!?!」

「何もないわ、ちよつとどつかの馬鹿が変な結論だしそうだったんでそれを引き戻しただけよ」

拳を振る……硬かった、思ったより手首に反動が来て痺れてしまっている

「そうか、お前はそう言うのが好きなのか箒」

「う、うん、おかしいかな? チンクさん」

「いいや、そうは思わない。私の父もそんな感じだ、暇があれば変な口ポを作ってる、だからそう言うのが好きと言うのは理解できる」

箒が和らいだ笑みで笑い

「初めて理解された……なんか嬉しい」

「そうか。では友達だな、私とお前は」

「うん、うん! 友達」

……えーと、龍也の知り合いって皆あんなん?

「なあ? 何でお前リボン手にまいてんの?」

「うえ!? えっと、これはその……あの」

ノーヴェが物凄い勢いできよどつてる、それであたしとシエンの中で何かが光った気がした

「もしかして〜好きな人からのプレゼントだったりして〜」

「そうなの? 誰よ。教えなさいよ」

「おい!? なんだその絶妙なコンビネーション!?」

逃がせないように2人で問い詰める。龍也は

「だから、ここで剣を振る時に力任せにするから次の行動が遅れるんだ」

「む。そうなのか……」

「力任せだとその分身体が硬くなる。しなやかに振るうべき」

分析が得意なクリスと一緒にヴィクトリアと話をしてる、で一夏は

「はい、一夏。これ食べてね♪」

「あ、うん。ありがとうシャルロット」

「へへ♪」

シャルロットに色々やつてもらって締まりのない顔してる。うん。後で死刑決定。ていうか気付きなさいよ。シャルロットはどう見てもあたし側の人間よ。同属だから判る者。必要ならば手段を選ばない人間だと、まそれは後で良いわ今はノーヴェを……

「まあ。ほら言っちゃおうぜ?」

「大丈夫♪ だいじょーぶっ♪ 馬鹿になんかしないから」

「信じられねえよ! つうか来るな! 目が怖いんだよ!!!」

ノーヴェがそう言つて逃げようとするが、あたし。弥生。シエンからどうやって逃げれると言うのだ?

「あれ? まだ龍也さんに貰ったリボンしてないの? ノーヴェ、龍也さんにみ……もがもが」

「黙れええええッ!! この天然馬鹿!!!」

ノーヴェが赤面しスバルの口を塞ぐが遅い

「へえーノーヴェは龍也君狙いか〜」

「まあ判らんでもないか。龍也格良いしな」

「ちよつとハードル高そうだけどね」

魔王×2のハードルはとても高いと思うが、本人がやる気なら大丈夫。あたしも越えるあのブラコン・ヤンデレを！

「ちなみに私も好きですよ、あとチンクさん……もごもご」
「てめえは頭沸いてんのか!？」

へー今日来た3人も龍也狙いかー、これは良い事聞いたかも。

「でね。私の知ってる限りでは16人くらい龍也さんのことが好きな人がいますよ?」

「……え? 何人つて?」

聞き違いだろ? 幾らなんでも二桁はあり得ない

「いや。だから16人」

「どこのハーレム王だ」

「……16人かあ……」

シエンがぼそつと呟く、んん?もしかして……まあ良いや、一夏に惹かれるくらいなら龍也の方に行って貰えば良い

「龍也さんの妹さん達がえーと。4人で、ノーヴェの姉妹が6人で、後は私とギン姉とティアナになのはさんたちで……ああ、15人でしたね」

「呼んだ?」

「いえ。呼んでないですよ?」

龍也がこつちを向いて尋ね。直ぐまた簪やヴィクトリアと話してる

「モテモテ?」

「モテモテツて言うより。うーん?なんて言えば良いのかなノーヴェ?」

「龍也は困ってる人を見捨てられない。それでどんどん人を惹き付ける。龍也は人誑しって言うのかな?こーう、暖かいんだよ……龍也の近くは」

よく判らない例えだが、人誑しと言うのは判る。

「1回あの暖かい場所知っちゃうと離れたくなくなるんだよ」

「春の陽だまり見たいに暖かいんだよな」

きつと2人が言ってるのはまだあたしが知らない龍也の一面と言

う事になるんだろう。それを知って2人は惹かれたのだろう

「ふーん、じゃあがんばんなさいよ。頑張つてあの朴念仁に気付かせてやれば良いのよ、自分達の良さをさ」

なーんかこの2人、気に入ったかも……それはきつとあたしと同じ想いを得てその人を好きになった、2人だからだろう……あたしも一夏の傍は暖かくて心地良い……その暖かさの正体はきつと優しさなのだと思う……

「いやー結構良い人達でしたね」

「まあな、ちよつと魔王化しかけてるのが居ただけだな」

のほほんと喋るノーヴェとスバルを見てみると

「はい、終わったよ。チンク姉」

「ご苦労、セイン」

今回私達が3人で来たのは理由がある、IS学園の地下にあるという研究施設そこにセインを潜り込ませる為に目くらましとしての役割だ

「回収は？」

「んーカートリッジの空薬莢が1個とネクロの細胞が付着してると思えるなんかの部品が2個かな？」

「ごそごそと魔力で構成されたケージの中に収納されたものを見せるセイン。確かにこの黒く変色した部品には魔力を感じるが、ネクロの物かはわからない」

「あーでもなー、私も龍也に会いたかったなー。頭とかなでて……ふえ？」

「よし、よし、良い子だセイン」

IS学園に居るはずの八神が本来の姿で現れ、セインの頭を優しく撫でていた

「ふん、幻術か？」

「IS学園のほうにな。ずっと幻術維持も疲れるんだよ」

肩を竦める八神にセインは

「頑張ったんだよ！ 苦手なハッキングとかももつと褒めて」

「よしよし。セインは頑張った」

にへらとだらしない顔で笑うセイン。近いうちに完全に落ちるかも知れない。まあそれはそれで良いのかもしれないが

「それと態々来てくれてありがとう、チンク、スバル、ノーヴェ」

そのままよしよしと私達の頭も撫でる八神。こういう何気なきはきつと自分よりも幼い妹を褒めるような感覚なのかもしれないが

(何時までもそれは嫌だな)

何時までもそれは嫌だ、それはきつと六課で八神の事を想っている全員が感じている事だろう

「チンク、ジェイルに伝えておいてくれ。どうもこの世界でのネクロとの戦いは激しくなると」

「お前らしくないな、なぜそこまでこの世界のネクロを危惧する？」

私がそう尋ねると八神は

「カートリッジシステム内臓型の新種のネクロ。それにガセかも知れんが、人からネクロ化した者も居るらしい」

「？ 人からって、普通なんじゃ？」

スバルがそう尋ねると八神は

「基本は遺体や魂からネクロは生まれる。しかし例外的に高い魔力や身体能力を持つ者にネクロの細胞を植え付けネクロ化する方法がある。シグナムがそれをやられて体調を崩していたんだろう？」

確かにパンデモニウム事変の時、シグナムはネクロ化させられかけ、半年の間魔力を使えず、筋力も落ち杖を使っていた

「私自身10年の間に2・3回しか遭遇してないが、恐ろしく強かった。どうもそのタイプが居るらしくてな。警戒を強める必要がある」

八神がそう言うのなら装備の充実を父さんに言っておく必要があるだろう

「悪いが頼む。また近いうちに奴らは仕掛けてくる、そんな気がするんだ」

「判った。必ず伝えておく、ではな八神」

はやてにも報告しないといけない、このままダラダラと長話をするのもよくない。私はそう判断し話を切り上げ転送ポートへと向かった

「むうう……身体が重い」

治癒魔法で回復させれば良いのだが、筋疲労まで治すと流石に怪しまれる。そこは我慢だ、あと投与した医療用ナノマシンは結論から言って私には合わない事が判った。

どうも私の中の高密度の魔力にナノマシンが耐え切れず消滅してしまっただようだ。なのでナノマシンで回復するように見せかけるためにゆつくりと再生させた

「うーむむ、治癒魔法に如何に依存していたか判るな」

体の重さとダルさを感じながら首を鳴らしていると、ドアをノックする音が聞こえ

「龍也君。居る?」

「どうぞ」

この声は楯無だ、包帯を巻きなおしてる振りをしてながら出迎えると「事情聴取の準備が整ったらしいの、悪いけど来てくれるかしら?」

「判った。少し待ってくれ」

包帯を巻きかえ立ち上がる

「悪いわね、こつちよ」

楯無に先導され部屋を出ると

「よっ」

「……」

シエルニカとアイアスが居て私の背後を取る

「まるで犯罪者のような扱いだな?」

「気を悪くしないで、そう言う指示なのよ」

申し訳無いと言う顔をする楯無に

「まっ、良いがね。今の自分の立場は理解してるつもりだからな」

「そう言ってくれれば気が楽だわ」

そう笑う楯無に先導され私はIS学園の地下へと連れて行かれた

「悪いな、八神こんなところに呼び出して」

「いいえ。構いませんよ。警戒されて当然ですからね私は」

そこは多数の機械に囲まれた研究室のようなフロアだった

「話が終われば戻ってくれて構わないわ」

ツバキさんか。これで部屋には織斑先生・ツバキさん。フレイア・シエルニカ・アイアスと戦闘力の高い面々が居る、まあ普通の人間相手なら十分な戦力だろう

「では聞こう、お前のISは何だ？ 他のISの武装のコピー、それに在り得ない筈の単一技能の重複。一体誰が作った？」

「話は答えますよ？でもね……非礼が過ぎるんじゃないですかね？ここまで犯罪者同然に連れて来られ、こうして囲まれるのも良いでしょう。しかしね？ 姿を隠して監視するような、人間の前で話すことは無いですよ。そこにいる2人も顔を見せるのが礼儀ってもんじゃないですか？」

闇の中から感じる2つの気配、どちらも常人の者ではない、戦闘経験者もしくは人を殺めた事のある人間だ

「それは……」

「いぎ、私が逃げ出した時の備えと言うのなら無意味だ、私はここに居る全員を倒して逃げる事が出来る自信がある。偉そうですが……あまり私を怒らせないで欲しい。なのはとフェイトに課題を出して遠ざけ、私1人にすると言う根回しにも腹を立てず、私は貴方達に従った。だがこれ以上の非礼は流石に度が過ぎるのでは？」

事実私にはそれだけの力がある。仮に魔力変換素質の雷を使えばショック死させることも出来れば。炎で火達磨にすることも出来る。僅かばかり殺気を放ちながらいうと

「失礼した、八神龍也君。非礼を詫びよう」

「私も謝罪をさせていただくよ、八神君」

闇の中から姿を見せたのは

「轡木さんでしたね？ 確か……事務員といいつつその実IS学園の

最高責任者。貴方が居られる事は判っていました。貴方は?」

「オクト・V・アマノミヤ……エリスの父でドイツ軍中佐だ」

エリスの……なるほど道理でエリスの動きが軍属の物な訳だ

「さて、私からも非礼は詫びさせてもらう、そして改めて教えてくれ。お前のI Sは何だ?」

「私専用I S インフィニティア。世代は判りませんが、現存するI Sでは止められないでしょうね。だってインフィニティアは戦ったI Sの武装・単一技能をコピーする。単一技能を持つI Sですから」

まあ本当は私の右目の効果なのだが、それは言わないで置こう

「だがそれだけの性能、何らかのデメリットがあると思うのだけど?」

「あれは私にしか動かせず、他の人間が触れば脳の回路を焼ききられ廃人と化すでしょう。そう言うI Sなんです」

「では何故? 君は動かせるんだ? 君とて条件は一緒だろうか?」

オクトさんに言われた私は

「前の私の戦闘記録は見ていただけましたね? 臓器は外しつつも腹を貫通するだけの傷、さらに4分の2の血液を失い。動けるレベルの怪我ではなかった筈です」

「ええ、確かに医学的に見れば君は腹を貫かれた時点でもう動けない筈ですから」

轡木さんにそういわれた私は

「ええ、そうでしょうね。でもね……人として欠陥を持った人間ならそんなのは些細な問題だ」

「欠陥?」

「私は死が怖くない、痛みや自らの死に対する認識が無いんですよ。だから私は自分がどうなろうと動く事が出来る。そういう壊れた人間だからインフィニティアを動かせる。それでは説明が足りないですかな?」

顔を強張らせる織斑先生達は

「そんな危険なI Sの使用許可は出せない。コアを凍結する」

「ははは、思っても無い事は言っては駄目ですよ?あの化け物と戦うのにインフィニティアは絶対必要、その高出力の正体を分析し他のI

Sに流用したいのでしょうか？言っておきます、止めた方が良い貴重なISコアが2度と使い物になら無くなりますよ？」

インフィニティアの出力の正体は魔力とデバイスコア。そう言う面で言えば姿こそISだが、インフィニティアはデバイスなのだ。根本的に技術が違う流用など出来る訳が無い

「それほどの危険な技術と言うことかしら？」

「いえ、全く概念の違う技術だから流用できないと言ってるんですよ？」

「どう違うのかしら？」

「カバラ……セフィロトの樹……錬金術。インフィニティアを作った科学者はそういった物の研究者でしてね。科学と魔術は違う物とし自らの研究結果の集大成としてインフィニティアを造った。そして今の時代に魔術を信じる者など居ない。そう言う面で概念が違うと言ってるんです」

「……私も少し昔調べた事があったけど。断念したわね。なるほど判り易い説明どうも」

そう笑うツバキさんはこほんと咳払いし

「じゃあ次の質問。あの化け物は明らかに君を狙っていたわ。何か心当たりは？」

「さあ？ 皆目見当が付きませんね」

これは本当の事だ。あいつらがこのタイミングで仕掛けてきた意味が判らない。手駒も少なく、上位ネクロも居ない状態で私に仕掛けてきた意味が判らない

「なるほどそれでは仕方ないな、やつらの目的が判らないのなら仕方ない」

ちっ、思いのほか鋭いもう少しぼやかすべきだった。言葉の中から違和感を感じとられた。最強の名は伊達ではないか

「ええ、すいませんね。今はお力になれません。今はね」

「いや構わんさ。今はなんだろう？ 今は？」

騙しあい・腹の探り合い。適度に情報を与えるのも必要な事だ

「では最後に八神君。貴方は私達の敵ですか？」

「違う、私は貴方達の味方だ。そして目的がありここに居る、しかし誓いましょう。私はここの学園の生徒を傷つける気も無ければ裏切る気も無い。しかし今は話せません」

「誓うとは何にですか？」

「私の誇りと魂に」

静まり返る部屋の中でオクトさんが笑い出した

「誇りと魂にか、それは十分に信じるに値するな。なんせお前の目は子供の物じゃない。ならば私はお前の言葉と目を信じよう」

「オクトが信じるのなら私も。そして待つわ貴方が話してくれるのを」

「ご理解感謝します。そしてこちらからも一つお願いが」

「なんですかね？八神君」

「インフィニティア。これは各国に見せるには余りに過ぎたISです。しかし不本意ながら私は各国のスカウトの前でインフィニティアを使ってしまった。となると各国のスカウトがうるさいでしょう。それを何とかしていただきたい」

「ふーむ。良いでしょう、暫くは八神君に掛かるスカウトはIS審議会を通して止めていただく様に伝えましょう。本人が怪我をしていると言う理由でね」

これでは何とか暫くは今まで通りに動けるだろう

「それでは寮に戻っていただいて結構です。えーと楯無君、おくつて……」

「いえ、私が行きます」

「ツバキさんがですか？しかし貴女にはまだ仕事が」

「直ぐに戻りますので。こっちよ龍也君」

ツバキさんに案内されエレベータに戻る

「エリスちゃんに聞いたけど。頬を叩いて叱ったんですって？」

むうう………なんと言えば

「ああ、良いのよ怒ってるわけじゃないわ。エリスちゃんが最近良く話をしてくれるの、悩みとかね？前までのエリスちゃんはどこか私とオクトに遠慮があつて悩みなんか言ってくれなかった。でも最近は

そう言う話もしてくれて……君がエリスちゃんを変えてくれたのになって思うの

「そんな大層な事はしてないですけどね？」

「ううん、エリスちゃんにとって叱られたのは嬉しかったのよ、私達は接し方を間違えてたのかもね。時に怒る事も大事なのね」

そう笑うツバキさんは

「だから私はエリスちゃんが君を信じる限り、私も信じる……だけど君がエリスちゃんを裏切れば……私は貴方を一生許さない」

「肝に銘じておきます。では失礼を」

閉まって行くエレベーターを見ながら

「夜の守護者」

「え？」

「ヒントですよ。私の正体に近づく為のね？ではおやすみなさい」

地下に戻っていくエレベーターから背を向け

「さて。辿り着けるかな？ツバキさんは」

偽造履歴が破られたのは知ってる、だがそれはあくまで表面上の物、更に奥くがありそこに私達の本当の情報が記されている

「時間はあまり残されてないような気がするからな」

今回の襲撃がもし、威力偵察だとしたら？近いうち本隊が出てくるはずだ。その時に供え準備をする必要がある

「私はまだ負けられんのさ」

ネクロにもこの世界の事情にも負けるつもりは無い、なぜなら私は全てを護ると決めたのだから

第36話に続く

第36話

第36話

「どうしようかな」

「どうしたのエリスちゃん？」

医療室の先生の許可が出たので今日で自室に戻る。そのための準備をしながらふと考える。お義母さんに

「包帯、どうしようかなって」

「その目？」

ナノマシンの影響で水晶に様に輝く青い目。私はこの目が嫌いだったが、龍也君に言われたしどうしようかと悩む

「ん、巻かない」

「良いの？」

「この目で何か言われるかもしれない。だけど」

「自分の身体を嫌っても良い事ないしね、私はもう目を隠さない」

包帯を鞆に仕舞う。やっぱり視界が広い方が良い

「よしと鞆置いたらちよつと行きたい所あるから」

また話さないといけない、龍也君と……自分の中のあやふやなままの想いを形にする為に

「そう、好きにすると良いわ。エリスちゃんのしたいことは自分で決めると良い」

「ありがと、お義母さん」

前よりお義母さんとお義父さんと話しやすくなった、色々心境の變化あったからかもしれない

「荷物、持ってあげる、さつき屋上に行く龍也君をすれ違ったから急いだほうが良いわ、部屋に行かれると話しにくいでしょう？」

なのはとフェイトがいては話に難い。お義母さんの言うとおりで

「お願いしても良い？」

「ええ」

笑顔で頷いてくれるお義母さんに鞆を渡し。私は屋上へと足を向

けた。それを見ていたツバキは

「足取り軽く、笑顔でか……エリスちゃん、恋しちやったのかしら」
大事な娘が自分から離れていくのを少しだけ寂しい気持ちで見
ていた

「どっか？」

屋上に居るとお義母さんは行っていたが龍也君の姿は無い。辺り
を見回していると

「夕日は美しいと思わないか？エリス」

上？給水塔の辺りに龍也君が腰掛けているのが見える

「ほれ、昇ってこれんだろう？」

差し出された手を暫く見る、小さいと遠まわしに言われているの
か、危ないからと言う意味で手を出してくれてるのか、少し考えたが
私はその腕を掴んだ

「よっ」

ぐいっと引き寄せられ給水塔の前に立つ。そこから見る夕日は確
かに美しかった

「消え去る間際の美しき、少ししか見ることが出来ないからこそそれ
はより輝いて見える」

夕日を見る龍也君の横顔が何時か夢で見た、赤い大地に立つ騎士に
重なって見えた

「何のようかね？ エリス」

「用って程じゃないけど、色々とうって伝えたくて。龍也君
に叱られてから色々今まで悩んでた事が馬鹿らしく思えてきてね」

隣座るよ？と言ってから隣に腰掛ける

「だからありがとう。私の世界を変えてくれて」

「大袈裟だ、お前が思いお前が行動した。それでお前の世界は変わっ
た。私は何もしていない」

そう笑う龍也君は夕日を見ながら

「私は夜明けと夕日が好きだ。決して忘れてはいけない思い出を呼び
起こしてくれるからな。私だけじゃ思い出せないんだ」

「どうして？思い出せないの？」

矛盾してる。忘れてはいけないのに、思い出せないなんて、変だ
「ふー私は弱いから、1人で思い出すとその思いに潰されてしまう。
だからこういうときにしか思い出さないんだ」

自嘲の笑みを浮かべる龍也君は自分の右目と髪に触れながら

「この髪と目は、あるやつが私に残してくれたものだ」

「あるやつ？」

「そつ、私が迷い闇を彷徨った時にまた背中を押ししてくれた人、セレス
と言うとても美しい女性だった」

龍也君がコートの中から写真を取り出し見せてくれた、龍也君がま
だもうちよつと幼くて黒い髪と黒い目をしていて、その隣に居る女性
は蒼銀の瞳と銀の髪を持ったとても美しい神秘的な雰囲気をした女
性だった

「この人は？」

「死んだ、私が殺したも同然にな。彼女は身体が弱かった、それでも強
い人だった。私が事故で目と腕を失いなのは達も私が死んだと思っ
ていたときに出会った。色んな話をした彼女は狭い世界しか知らず、
私の話をとても楽しそうに聞いていた」

思い出に浸るように遠くを見る龍也君の顔はとても悲しそうで寂
しそうだった

「私が目と腕を失った際に、どうも身体の中に金属片が埋まっていた
らしくてな、それが内臓を傷つけ死に掛けた事がある。手術をしなけ
ればならなかった、だが私の血液型はとても珍しく輸血など出来な
かった。聞いてないか？私と血液型が変わらず輸血できなかったと」

うんと頷く。お義母さんから聞いている。龍也君が特殊な血液型で
輸血できないから増血剤や医療用のナノマシンを使ったと

「そしたらあいつはこう言った。私の血液が同じだ。私の血を使え
と。それだけ血を抜けば自分が死ぬと知りつつセレスは私に血をく
れた。それで私は何とか回復したんだがセレスは弱っていき寝たき
りになった。私のせいだと悔いたよ、それなりに仲が良かったから
な」

龍也君は自分の右目を触りながら

「死ぬ間際に私はセレスとあった。弱ってもう立つ事も出来ないセレスは私にこう言ったんだ。「幸せに生きろと、後ろを見るな」とな？だから私は振り向かない前だけ見て進んでいくと決めたのさ。たまには感傷に浸りたくなる時もあるがね？」

「好きだったの？」

私がそう尋ねると龍也君はきよんとした顔になり笑い出した

「ははははー！ 違う違う。私とセレスはそんなじゃない、まあ友人と言うにはおかしく、恋人と言えぬ……そうだな。半身とでも言うべきか？ 大体普通輸血したところで輸血者の髪と目の色に変化するわけが無いだろう？ だからきつとセレスは私と良く似たそんなやつだったんだろうな」

「悲しい？」

「悲しいとかは無いかな？ セレスの髪と目が私はここに居ると言ってる。だから寂しくはないかな」

ぼんやりと空を見上げた龍也君は

「天空の風は常に私と共にある」

「？」

意味が判らず首を傾げると龍也君は立ち上がり

「セレスの名の意味さ、空の上から見守る者、天界の青き風と言う意味だったらしい。さてと、感傷に浸るのは終りだ。何のようだった？

くだらん昔話で時間を取らせてすまなかったな」

「くだらないなんて事はなかったよ？」

少しだけ龍也君が判った気がした。とても脆く弱い心の人……でも強い想いでそれを支えているのだと

「ついでだ。このまま食堂で夕食にするか？ 簪となのはとフェイト誘って」

「良いですね。そうしましょう。私は簪を呼んできます……下りれないですねこれ」

引き上げられたんだ、自分では下りれない

「ああ、心配ない」

「ふえ？」

ひよいと横抱きで抱えられる。いわゆる乙女の憧れお姫様抱っこ

「お、おとお下ろして」

「下りれないんだろ？ ならこれが速い」

そのまま飛び降りる。着地の音が余りに小さい膝で完全に衝撃を殺したんだ

「ほい」

「あ。ああ……はい」

物凄く近くにある龍也君の横顔にドキドキしながら頷き。自分の足で立つ

「さーて、行くかー。久しぶりに肉でも食わんとやってれん」

首を鳴らしながら言う龍也君。赤面してる私に対して何でもない態度、普通の事だと思ってるのだろうか？

「どうした？」

「あ、いえ。今行きます」

彼が気にしてないならこつちも気にしない。それで良い……と言いたいのが心臓が痛いくらいに暴れている。その痛みは私の中にある想いが間違いでは無いと言う確かな痛みで。少しだけ自分が誇らしくなれる痛みだった

ちなみにこの光景を見ていた、暗部3人娘はと言うと……

「殺しに！ 殺しに行く！ エリスちゃんに恋はまだ早いわッ!!」

「つ、ツバキ殿！ IS用ブレードを振り回さないで下さい!!」

「てめえ！ 手伝えよ！ アイアス!!」

「僕、死にたくないから……」

バーサーカーモードになりかけている、ツバキを止める為に奮闘していたりする

トーナメントが中止になり。タッグでは無く各々の戦闘技能を把握す為の試合を見る。見ているのは私と龍也君と織斑君と篠ノ之さんとボーデヴィツヒさんとヴィクトリアさんにデュノアさんにエリスだ

「このー！」

「遅い……」

凰さんとクリスさんの戦いだが。常にクリスさんが先手を取り続けている。クリスさんのISは黒い装甲を持ち大振りなショルダーパーツにブースターとスラスターを装備して滑らかなフォルムの機体だ

「直情的な鈴では勝てないな」

「うん、私もそう思う」

ボーデヴィツヒさんとエリスがそんな話をしてるので

「どういうこと？ボーデヴィツヒさん」

「簪。ラウラで良い、ラウラと呼べ」

「え……えーと。ラウラさん？どういうことですか？」

私がそう言うのとラウラさんは

「クリスを取り分け身体能力が高いわけじゃない。クリスの最大の武器は優れた解析能力と第六感。いわゆるオカルトな話になるが、クリスは空気の流れや相手の動きで、行動パターンを予測し戦う持久戦に特化した操縦者だ、そして機動力の高いメフィスト……正直言ったら鈴の勝利は2割以下だ」

「ですね。クリスが本気で逃げに回れば捉えるのも難しいしね」

ドイツ軍に所属しているエリスのお父さんの繋がりでエリスはラウラさんとクリスさんと顔見知りらしく仲が良い。私と違って交友関係が広いんだろうなと思っていると

「だからエリスの友達のお前も私の友だな」

「……ラウラ、いつそんな短絡的思考に？ 昔はもつと警戒心があつたじゃないですか？」

「警戒などして何になる？ 私は友達が欲しい。だから簪も友達にする。それで良いじゃないか？」

直球勝負!! ストレートど真ん中にも程がある!?

「このちよこまかとっ!!」

「……気が短いのは良くない」

ワイヤーブレードで当てては離れ。離れては当てるを繰り返すク

リスさんに切れたのか、凰さんが瞬時加速の体勢に入るが

「……何回も貴女の瞬時加速の予備動作は見た」

「なあ!？」

メフィストの姿を見失ったと思った瞬間。凰さんの後ろに現れたメフィストが肩に装備していたマシンガンを乱射する

「タイムラグが殆ど無い瞬時加速か」

「そのようだ。相手の行動を読み出鼻を挫く。これはかなりややこしいタイプだな」

龍也君とヴィクトリアさんはクリスさんの行動パターンを話していた

「AICと装備してるワイヤーブレード。それにミサイルでヒット&アウェイを繰り返し、相手が頭に来たら瞬時加速を使って高速戦闘。チーム戦だともっと活躍の場が広いだろうな」

「うーん。クリスさんは敵に回すと鬱陶しいね。行動パターンを読んで相手が頭に来るように射撃か。僕とはタイプが違うかな」

えーと。かく乱と支援型? つてことで良いのかな?

「チェックメイト」

「うっ……」

凰さんの喉にビームブレードを突きつけるクリスさん

「詰んだな」

「うん。あれは詰んだね」

龍也君とデユノアさんがそういった瞬間。凰さんが

「あ、あたしは……こんな! ……こんなところで負けないのよツ!!」

こんな所と言うが準々決勝でそこそこ勝ち進んでいるはずだが

「優勝。優勝優勝して!! あたしはあッ!! ……一夏と付き合うのよ!!」

「!？」

ブレードを素手で掴み強引に投げ飛ばす。うわ……あれ絶対シールドエネルギー貫通してる

「ぐおおおッ!!! 超痛てえええええッ!!!」

「どういうことかな? ……かな? ……一夏は死にたいのかな?」

凄、デユノアさんが片手で織斑君を吊り上げてる。

「どうして？鈴と付き合うことになってるのかな？ことと次第によつては……殺すよっ！」

「え。ええええエリス!! 怖い!私怖いよ!!」

「落ち着いて簪、今近付けば殺されるー!」

エリスに手を引かれデュノアさんから離れる

「さっ早く説明をしてくれるかな? 一夏?」

「お、俺はああ?! 箒と箒が優勝したら買物付き合うつて約束しただけだアアアッ!」

その絶叫に篠ノ之さんががっくりと肩を落とす

「ど、どうせ……そんな認識だと思つてたさ……でも直接言われるときつい」

「さ、箒。これを飲め、私のおごりだ。一夏は少しだけ。いやかなり教官に洗脳されてる、大丈夫時間をかければ何とでもなる。まっ私も狙っているので塩ばかり送る気はないがな」

「ラウラ、お前は面白い奴だな。自分が失恋するかもしれないのに恋敵に塩を送るのか?」

「うむ。一夏は素晴らしい奴だ、惹かれるのは当然のこと。そして私の他に一夏に惹かれる奴がいるというのは……とても好ましい」

「好ましい?この状況が?」

「そうだ、恋敵がいるのならその恋敵より、一夏の気を惹ける人間になれば良い。明確な目標があるというのはとても良い」

凄いな自信だ、私には到底無理そうだ

「おお!スゴいな鈴! マシンガンで双天牙月で切り払つて進んでるぞー!」

「凄いな理性が飛んだのか野生的な身のこなしだ」

どんな動きを……

「ふうふうふうッ!!」

なにあれ?猫科の動物の様に唸りながら体制を低くし。射軸を外してる

「なに!? なんなの!?」

クリスさんが凄く動揺してる。私も間近で見れば凄く混乱するだ

ろう

「なんだあ。買い物かあ……僕ってばうつかりしてたなあ?……そうだよ。幼馴染なら買い物くらい一緒に行くよね?」

「わ、判ってくれて何よりだ」

肩で息をする織斑君を甲斐甲斐しく介抱する、デュノアさんだがそれをやったのはデュノアさんなのでどうかと思う

「行動パターンが読めない!」

「きしやあああッ!!!」

「なんかあれだな。鈴が大切な物を失って強くなってる気がする」

もう獣同然に手足を地面につけ……と言ってもPICで浮遊するのでそれもおかしな表現だが、そんな感じで高速移動する凰さん

「もう手遅れだよ、中国では皆知ってる。鈴を怒らせるな、凶暴化するから」

「鈴さんが理性飛ぶと大変ですわね」

試合を終えたシエンさんとオルコットさんが来る。試合後なので少し疲れた様子だ

「おう、お疲れ様。そこに私が作ったクッキーが……」

皆で揃んでいたクッキーの皿を指差さそうとする龍也君だが「ん?」

今正に最後の1枚を飲み込んだ。ラウラさんがきよとんとこつちを見ていた

「ラウラ……全部食ったのか?」

「うむ! とても美味だった」

コーヒーを飲みながら言うラウラさんに

「ラウラあ!! ずるい! 私も食べたかったのに!!」

「そうですね! 疲れるだろうから作っておいてくれると言った物をどうして全部食べてしまうんですか!」

2人が詰め寄るがラウラさんは

「とても美味だった」

「それは知ってるよ!!!」

「それは知ってますわ!!!」

女子といえれば甘い物それを失った2人がそう怒鳴る中

「たつえもーん！ お菓子の代わりに欲しいなー」

「しかたないなーエリス君は〜」

国民的アニメのくだりを真似する龍也君とエリス。何してるの？

「てつれっててー♪ チョコップクッキーとストロベリークッキー」

コートからまた出て来るお菓子の数々、どう見てもコートに収まる量ではない

「えーと……色々突っ込みたい事あるんだけど？」

「ちよつと待ってくれ、決着が着きそうだ」

龍也君がモニターを見るのでつられてモニターを見る

「■■■■ーッ!!!」

「け、獣!? 獣がアアアアアッ!?」

きつとこれは放送規制がかかりそうなシーンだ。獣同然の叫びを上げ組み付いた風さんが両手の双天牙月を振り下ろし続けている

「昔何かで見た獣の捕食シーンのようだ」

「ああ、どこかで見たと思ったらそれか」

マイペースな龍也君とラウラがそんな話をしている

「勝者！ 凰鈴音!!」

良いのか？ いや……良いんだろううちやんとした？ IS戦闘だし

「で？ 龍也君のコートからなんでそんなお菓子が出てくるの？」

シエンさんが尋ねると龍也君は

「まあまあ。ちよつとこっちこい」

「？」

不思議そうな顔をして近付いたシエンさんに脱いだコートを被せる

「?!?!」

コートがそのまま地面に落ちる。シエンさんはどこに!?!

「しえ、シエンさんはどこへ!?!」

「マジック!? マジックなの!?!」

「まあまあ落ち着け」

龍也君がコートに手を入れて

「よいしょ」

まるで物を出すようにシエンさんをコートの中から引きずり出した

「?!?!」

「それを見るのも2回目ですね」

とんでもない衝撃シーンに皆絶句する。エリスだけはクツキを齧っていたが

「コートの中に家が……で、女の子がいて。お茶でも如何ですか？
って笑ってた」

「ああ、それはきつとクレアだな」

誰!? クレアって誰!? そもそもコートの中に家って何!?

龍也君の謎が深まった瞬間だった……

1年の能力把握の試合が全部終わった午後。夕食時の食堂で

「つ、付き合うって買物!? あ、あたしは何のために」

「まあまあ落ち着けよ、鈴。一夏が泡吹いてるぞ?」

力なく垂れる腕を白い顔。死ぬ一歩手前にしか見えない

「あ……一夏く一夏大丈夫?」

おどおどと鈴が声を掛けると一夏が

「はっ!? ふうーセーフ。変な川のほとりで爺さんと将棋してたぜ」

臨死体験か、一夏もタフだな

「あー。ちよつとミスったなあ」

「私はいあまり成績良く無かったかな?」

なのはとフェイトはそれぞれ学年7位と5位、これは私が頼んだ事だ。あんまり目立つと行動しにくくなるからある程度抑えろと頼んだのでこんな物だろう。

「……まあ、夢だったと思えば」

簪がその身体を更に小さくしてとぼとぼと歩いてくる

「おーい! 簪もこっち来いー」

あのままふらふらと窓際の席に行ってしまうそうだったので呼ぶと簪はかるく頷きこつちに歩いてくる

「しかし、まあまあではないか？ セシリア、学年9位。良い成績だ……何だその顔は？」

ヴィクトリアにそういわれたセシリアはきよとんとした顔をしながら

「いえ。まさかヴィクトリアさんにそんな事を言われるとは思っても見なかったもので」

「ふん。一人でいても良い事は無い。それに色々判った事があるんでな、少し自分の在り方を代えようと思っただけだ」

らしくない事をしたとそっぽを向く、ヴィクトリア……照れ隠しのだろう。昔のチンクを思い出して思わず笑みを浮かべていると。

簪が前に座った

「元氣ないな？ どうした？」

「な、何でも無いよ？」

何でもないって顔じゃないけどな

「ああ。そうだ、今度の週末あいてるか？」

「ふえ？」

「だってほら約束しただろ？ 頑張ったら一緒に遊びに行くって」

「でも、私……何にもしてない」

「何もしてないってことは無いだろう？ 私に最後の弾丸を投げてくれただろ。自分が怪我するかもしれないと言う恐怖を超えて、それは凄く頑張った事だと思うぞ？」

欠陥のある人間ならまだしも正常な簪ではあの瓦礫の下にある弾を取るのには非常に勇気の居る決断だった筈だ、だから私はそれを評価しただけ。なのだが……

「龍也さん！ そう言うの駄目って言ってますよね私!？」

「約束は約束だ。私は嘘はつかない事を信条にしてる、だから約束は護る」

約束した以上約束は護る

「それとも何か用事があるか？ それなら無理には言わないが

……」

「行く！ 行きます!!」

今までの打って変わったの笑顔を見せる簪に

「では週末に、待ち合わせ場所は後で連絡しよう。追跡者が居るからな2名程?」

「うっ!?!」

目を逸らす2人に呆れながら溜め息を吐き

「あんまりそういう事するなよ?ではな、後でメールする」

「う、うん!! 楽しみにしてる!!」

ここで1つ問題がある、それは龍也と簪の受け取り方の違いだ

龍也は実年齢23歳で面倒見の良い上官として、労いやリフレッシユの為に良くスバルやエリオ達を連れて遊びに行く事が多い。つまり龍也にとっては頑張った簪へのご褒美のつもりなのだが

簪にとっては同年代でしかも色々と助けてくれ相談に乗ってくれた少年で、惹かれ始めていることも自覚しており、そんな龍也と出かけることはもうデートと言えるだろう

つまり致命的なまでに両者の受け取り方が違ったのだ……方や労い、方やデート……

この致命的なすれ違いを持ったまま週末が訪れる……

第37話に続く

第37話

第37話

「もう1度言っして下さい簪。そして良く考えるんです自分が何を言ってるかを」

仲の良い友人のエリスが目には巻いていた包帯の下。水晶の様な左目に射抜かれながら私はエリスの手を掴み

「今度の週末エリスも一緒に!!」

「だから! 何で自分のデートの私を連れて行くという発想が出来るんですか!?!」

いつもの冷静な態度ではなく動揺した様子のエリスに

「1人だと怖いので……だから。お願い」

いぎ、週末に近付いてくると怖くなり始めた、龍也君と出掛けられるのは良い、だが2人きりと言うのは怖いのだ

「まあ判らない事も無いですけど……なんで私なんですか?」

「エリスも好きでしょ?」

「……………ナニヲバカナ」

「うん、動揺してるのがバレバレだよ?」

目が泳ぎ、読んでいた本を取り落としたエリスに

「お願い、エリス」

「……………まあ……龍也君が良いと言うのなら考えなくもないですが。多分駄目と……」

「良いって言ってるよ?」

メールを見せる。エリスに言う前に龍也君には相談してる

「……………なるほど、私はもう詰んでましたか」

そういつたエリスは立ち上がり。

「で? 明日着ていく服は決めてるんですか?」

「え? 適当に……痛い!! 痛いよ!! 無言でウメボシなんて酷い!?!」

その激痛に耐えながら言うとエリスは

「簪の女子力の低さには呆れますね。何時もロボットアニメとか変身ヒーローとかのTVを見てるからですよ」

苦笑しながらいうエリスは

「まあ幸いにも私と簪は体型が似通ってますし。本音とかの服も借りれば良いでしょう」

「胸のサイズが合わないよ?」

お互い無言の時間が3分ほど……さきに現実と向き合ったのはエリスだった

「……そうですね。私と簪ので何とかしましょう。必要なら楯無にアイデアを借りますよ」

「そうだね」

お姉ちゃんのアイデアを借りるのも悪くない

「変わりましたね。簪は楯無が苦手だったのでは?」

「うん。苦手だったよ? 私自身が作った勝手なお姉ちゃんのイメージが」

あの暴走事件の後何度かお姉ちゃんと話した。それで判ったのだお姉ちゃんは完璧などでは無く欠点もあり苦手なものもある。私と同じ人間なのだと、それが分かったら今までお姉ちゃんから逃げてた自分の愚かさが判った。やっぱり話し合うと言うのは大事な事だ

「そうですね、それは良かったですね。では準備をしますか」
「うん」

エリスのクローゼットと自分のクローゼットから服を取り出して週末に着て行く物を考え始めた……

「大体安請け合いも考え物ですよ」

「良いじゃないか。ちょっと簪に付き合うだけだ、どこに問題がある?」

よくスバルとかとも出かけるし大したこと無い。と付け加えると

「はあ……はやてが全部悪い、龍也の異性に対する反応の鈍さは全部

はやてのせいだ」

「あんまり居ない人間を悪く言うなよ?」

「ほらやっぱりはやてのせいだ」

なんで私の言った事がはやてのせいになるんだ?

「まあちよつと遊ぶだけだ。何にも無いから心配ないって」

「そう思ってるのは龍也さんだけですよ」

全く如何してこうも私は信用がないかね?

「ちよつとした気分転換に付き合うだけさ。お前らが心配する事など何も起きないさ。じゃあ私は寝る」

魔力もまだ本調子じゃないし血も流しすぎたダメージも残ってるし早く寝るに限る。私はそんな事を考え布団に潜り込んだ

ザワザワ……

「何か騒がしいですね?」

「そうだね」

日曜の朝。待ち合わせの駅前広場に向かいながら簪とそんな話をする。服については色々悩んだ結果。私がワンピース。簪はブラウスに丈の長いスカートに決めた

待ち合わせより早めにと20分前に来たのだが。そこには既に龍也君の姿があつた……壁に背中を預けジーンズと黒いシャツに何時もの黒いコート。長い銀髪は首元で結び、大き目のサングラスをかけた龍也君の周りには誰も居ない。そこだけ時間と外界から切り離されたか

のような錯覚を受ける。きっと彼の存在が騒がしさの原因だろう

「……早いな、エリス、簪」

私と簪に気付いたのか龍也君が背中を預けていた壁から離れ近付いてくる。そしてそれに伴い周りの人の視線が全て私達に集中する。凄く……気まずい。だが何時までもここに居るわけにも行かないの

で

「行きましようか」

「ああ」

そう返事をして歩き出す龍也君だったが、数歩歩いたところで立ち止まり

「所でどこへ行くんだ？」

「……まあ着いて来て下さい」

昨日の龍也君のメールには自分は遊びには疎いので、其方で考えてくれると助かると言う一文があった。それからは楯無に相談し今日の計画を練った

「龍也君、服のセンス良いんだね」

簪が何か話題をとそう言うのと龍也君は頬を掻きながら

「適当に着てきただけなのだが」

世の中にはただ服を着るだけでも様になるタイプ人間が居る。私の知る限りでは楯無と龍也君がこのタイプだが。実際こう言われると複雑な気分だ。2時間ほど掛けて服を選んだ自分達馬鹿に……

「それを言うのなら簪とエリスのほうがセンスが良いだろう？ 2人の雰囲気によく似合っていると思う」

全然馬鹿じゃない！ 時間をかけて選んで正解だった!!

「あ、ありがとう」

「何が？」

お礼を言われる理由が判らないのか首を傾げる龍也君に

「時間に遅れるんで早く行きましよう」

今日の予定は映画↓買い物↓昼食↓カラオケかボーリングで回るともりだ、普通の遊びと言う感じで……

「うわああああんツ!!! フーセン」

映画館に向かう途中で風船を手放して泣いてしまっている幼稚園くらいの子が居た。近くなら取って上げたいが、街路樹の天辺くらいにまで上がってるので私では取れない

(どこで風船を配ってるんでしょうか?)

風船を配ってる場所を探して新しい風船を貰って……

「ふっ！」

軽い音を立てて壁を2回蹴った龍也君が手を伸ばし風船の紐を掴み着地し

「はい、もう手を放したら駄目だよ」

「うん！　ありがとう!!　お兄ちゃん」

そう笑い走っていく少年を笑顔で見送った龍也君は

「どうも子供が泣いてると無視できなくてな。悪いな」

そう笑う龍也君に

「良い事をしたと思うよ」

「そう言ってもらえると助かる」

簪が笑いながら言った。私も同感だあれだけ泣いてる子を無視するという事はしたくないし

「じゃあ、行こう！　映画に遅れるから」

やっぱり龍也君は良い人だ。私と簪は改めて龍也君の良い所を知り。少しだけ軽い歩調で歩き出した

先導するかのように歩く簪とエリス、その後ろを歩く龍也を見る影楯無。ターゲットの好感度が上がっているようです」

「良いわ、そのまま監視。変な事しそうだったら撃ちなさい」

「了解」

「なんであたし達がこんな事を……」

「お嬢様の命令……拒否権はない」

暗部3人娘の内、スナイプが得意なアイアスと、成り行きでつれてこられたシエルニカが溜め息を吐きながら。3人を監視していた

……

「つまらなかった？」

「いや？　そこそこ面白かったが？」

私が見たかった映画。世界を渡る仮面の戦士の映画。すこし子

供っぽかったかなあと思いながら尋ねると。龍也君は面白かったぞ？ とは言ってくれてるので「安心？だが」

「……良く判らなかつたですね。まあ面白い？ といえば面白いんですけど……興味がないからいっぱいキャラクターが出て来ても判りませんし」

あの映画のウリは今までTVで放送されたシリーズのキャラクターが全部出てくることだが。どうも知らないエリスには判らなかつたらしい

「では次は買物ですね。ちよつと見たいものがあるんですよ」

今私達が居るのは駅前と言うにはおかしいが。駅と一つになった大型ショッピングモールの「レゾナンス」だ。映画館や各種レジャーにレストランやその他の店も完備のここなら1日過ごせるといったエリスの提案でここにしたので

「買いたいものとは？」

「あはは、見るだけですよ。服は高いですからね」

それにウインドウショッピングも楽しいものだし

「買うのは小物の類で服は見るだけですよ。さっ行きましょう」

今度は服飾品店が揃ってる2階へと向かった

「簪はこういうのは如何ですか？」

「う、うーん……あんまり似合わないと思うよ？ エリスはこの白い

ワンピースとかどう？」

「私の銀髪とは合わないですね。この銀髪は好きですけどインパクトが強すぎて合う服が少ないんですよ。でもこう言うのなら似合うかもしれないですね」

エリスが服を進めてくれるが、きつと私には似合わない……でも薄い水色のワンピースは髪にとは合うかも。でも値段がなあ……女性優遇でそれなりに値引きされているが額はそれなりにする。とても手の出る物ではない。エリスもエリスで自分に合う服が少ないので良く見て髪

と合うのを見ている

「今度買いに来れば良いじゃないですか。その時の為に欲しい物は見

ておいたほうが良いですよ」

「う、うん」

エリスに頷き、斜め後ろを見る。こう言った話題は駄目だと言いたげに肩を竦める龍也君に

「龍也君も服見れば良いじゃないですか」

「私はそう言うのはてんで疎いんだ。大体服なんて自分で選んだ事ないぞ？ 私が選ぶと黒一色になるから駄目だってよく言われるからな」

えっじゃあ？ あのセンスの良い服とかは……休日に龍也君が来てるのはお洒落な服が多いのに自分で選んだ事がないってどういうこと？

「いやなあ？ 私の服は大体なのはとかフェイトとか妹が選んでくれたものでな。私的には服など着れば良い程度の認識しかないんだな、これが」

それを聞いたエリスは

「確かこの通りの奥に、安い量販店がありました。龍也君の服を見に行きますよ」

「うん」

龍也君は格好良いんだから、ちゃんとお洒落しないと、私とエリスは嫌そうな顔の龍也君の手を引き。奥の店に向かった

一通り買い物を終えカフェで昼食を摂りながらエリスが

「結局良いのはありませんでしたね」

「すまん」

この上背では合う服のほうが少ない。選ぶのだけでも大変なのだ
「龍也君が謝る事じゃないですよ。また今度見に来れば良いんです」

「うん。もうちょっと予算とか考えてからね」

別に私の服なんか選ばなくても良いだろうに……

エリスと簪にしてみれば自分の選んだ服を着て貰いたいと言うの

があるが。龍也にしてみれば服など着れば良いという認識だ。その認識の違いは大きい

そんな話をしながら仲良く昼食を食べている3人を見る影

「ああー乙女みたいな顔をして。まあ良いけどな」

監視中のシエルニカとアイアスは持ち込んでいたサンドイッチを食べながらそんな話をしていた

「僕は気に入らないけど。エリス様とお嬢様が好きなら文句は言わない」

サンドイッチを両手で持ちゆつくり咀嚼するアイアスに対して。シエルニカは一気に半分ほど噛み切り咀嚼していた。これも性格の違いと言えば違いなのだが。

この食べ方のせいでシエルニカは地獄を見る

「ふぐつ!? 辛ッ!! 辛いッ!!! 何だこれ!? あたしはこんなの作ってないぞ!」

赤い鶏肉の挟まれたサンドイッチを見て絶叫するシエルニカにアイアスが

「僕が作った奴。唐辛子とかの辛い香辛料を適当にヨーグルトに混ぜて。鶏肉をつけて焼いた奴。美味しいでしょ?」

「この味覚音痴がアアア!? もう何食つても味しねえよ!! 人の味覚崩壊させてんじやねえよ!!!」

「乱暴は良くない、そんなんだから脳筋なんだよ」

「黙れええ!! この味覚音痴がアアア!!!」

平和な食事をしている龍也達と比べシエルニカとアイアスの食事風景は殺伐とされていた

昼食の後ボーリングとカラオケをやり、門限の前にとIS学園へのバス乗り場に向かう途中で

「悪いが、少し買う物がある先に行っててくれ」

今日はそれなりに楽しかった。やはりこうして私も楽しめるように考えてくれた2人にはお礼をするべきだ、私は早足で2人から離れた

「今日は楽しかったね」

「そうか、それなら良いのだが。悪いなあ私はここら辺の地理は詳しくないし、誘っておいて2人に任せてしまっただけ」

「いえいえ、そんなの気にしないで良いですよ。私達も楽しかったですし」

簪をうんうんと頷きながら話をしながらゲートを潜った所で、龍也君が

「今日は楽しかったからお礼だ。気に入って貰えれば良いんだが」

「はあ……綺麗ですね」

水晶が埋め込まれたブレスレットを手渡される、そういえばこれ簪がつけてるのとおんなじ意匠だ

「これ手作りですか？」

「これと言ってとりえのない私の数少ない特技だ。気に入らなければ捨ててくれて構わない」

そんな事ない。銀細工のフレームに埋め込まれた蒼い水晶はとても美しく。私は一目で気に入った、大切にしよう

「良かったね、エリス」

「ん。これは簪とエリスに」

コートから出されたのは午前中に見た服屋の袋が2つ

「これは？」

「2人が見てた服だ。私では判らんからそれを買った」

「わ、悪いよ!! だってあの服1万くらいの」

「気にしなくて良い。礼だからな、じゃあまた明日」

強引に手渡し寮に戻っていく龍也君を見ながら

「これどうしよう……」

「返品は出来ませんしね」

プレゼントとして貰った物をつき返すなんて失礼な事は出来ないが、もらい物にしては高価すぎる……

「と、とりあえず!! 大切に仕舞っておきましょう!」

「そ、そうだね」

貰ったブレスレットは何時も見につけておけるが。この服はここ

ぞど言うときにだけ着よう……私と簪はどう扱って良いか良く判らない服を大事に抱え込み、自室へと戻った……これはまた今度龍也君と遊びに行く時に着ようと思いながら……

エリスと簪がIS学園に戻ってきた頃ツバキは自分の研究を進めていた

「むー。どうしたら自立式に出来るのかしら？」

大破した無人のISを調べるがどうしたら自立式に出来るのかわからない

「他の方法で代用してみようかしら？」

幾つかプログラムを組み、思考ルーチンを与え、ビット兵器に似た特性を与えれば……

「駄目ね。それじゃあジャミングとかに弱い。やっぱりなんとかして自立稼動の方法を調べないと」

今回のヤタガラスの暴走の原因は、コアネットワークを介してのハッキングが原因だった。その対策としてIS自身を保護し、ハッキングに耐性を与え、機動力や火力を上昇させる物

「独立可動式パッケージ……何かヒントがあれば良いんだけど」

外装と武装だけは完成しているが今のままでは精々普通のパッケージとしての使用が限度。私の求めるものには程遠い

「とりあえずは思考ルーチンで代用しましょうか。テストは……アイアスちゃんにお願いしよう」

シエルニカやフレリアでは表立ってISを起動させれないし。適任なのはアイアスちゃんだろう

「そうと決まれば早速テストしてもらいましょう」

本当ならエリスちゃんの専用のパッケージだが。今の段階では他のISに搭載する事もできる。データ取りは重要だから業と他のISにも装備できるように調整してある

「エリスちゃんのはサポートの処理と飛び道具だけだけど、折角データを取るんだから射撃とか近接武器のデータも欲しいわね」

別にエリスちゃんだけの為のものじゃない。黒い悪魔に対する私

の出した答えとして、この自立式パッケージの完成は急がなければならぬ

(次は貴方たちの思い通りにはさせない)

トーナメント時に乱入してきた黒い悪魔に私達は何も出来なかった。ただ1人だけ怪我を負ってまでも戦ってくれた龍也君は既に信用に値する。それに回収したコアとパーツの部品。それにエリスちゃんの暴走の時の黒い細胞

(黒い悪魔は人を侵食する)

悪魔とは良く言ったものだが。まさか人間に寄生し凶暴性やISの動力を回復させるなんて夢にも思わなかった。もし何の備えも無く遭遇すればIS事侵食される。推測だがあの時現れた悪魔がISを身に纏っていたのは。侵食され黒い悪魔と化したIS操縦者だと私は見ている

「この学園の生徒を守る為にもエリスちゃんを守る為にも。このパッケージの制作は必要不可欠、急がないと」

粒子化した武装データとパッケージの試作型を待機状態に戻し。

私は地下の研究所を後にした

『エリスの無事も確認したし、暫くこの街で情報を集めてからドイツに帰る』

夫からのメールにも気付かずに……しかもアイアスはアイアスでデータ取りとの為にはほぼ徹夜で武装等の稼働データを取らせることになる……

その頃機動六課では

「ほほう？ 兄ちゃんは向こうでもフラグを立ててるど？」

「まあそうなるなあ。見たところ妹系の子だったか？」

ふんふん……：：

「決めた。私も兄ちゃんの居るところに行くわ」

「はっ!? 仕事は？」

「知らん、私の進む道は誰にも邪魔させん。それになのはちやんと
フェイトちゃんじゃ兄ちゃんのフラグ生成能力を防げんのなら私が
行くしかないやろ?」

魔王が動き出そうとしていた……

第38話に続く

第38話

第38話

俺は未だかつてない危機を食堂で味わっていた

「さあ、食べる一夏」

「い、嫌に決まってるだろ!! 湯気だけでも痛い物を食える訳ないだろう!!!」

不気味にあぶくを出す赤黒い料理。否こんなものを断じて料理などとは認めない。

「聞いたか楯無? 箸は食べたというのに何と情けない」

「ええ、チキン野郎ね」

龍也と楯無さんがぱつと扇子を開く、そこには「臆病者」の二文字。なんだこの抜群のコンビネーションは!? それに

「食べた箸が瀕死じゃないですか!? これを見てどうやって食べろと!?!」

机に突っ伏しビクンビクン痙攣してる箸を見てどうして食べる事が出来るというのだ

「ではパスだな? 一夏パスだ、次ぎ負けたら2倍だからな? では最終戦に入ろうか?、次は何にしようか楯無」

「そうねえ……ダーツとか?」

「良しではダーツを用意しよう」

龍也がコートからダーツセットを取り出しセットするのを見ながら

(ど、どうしてこんな事に……)

全ては30分前の俺の一言が原因だった。俺は自分の言動がこんな大惨事を生み出した事を心底後悔していた

「しっかし、今日は暇だな。アリーナも使用禁止だし」

なんでもメンテナンスとかでアリーナも使用禁止だし、まあ半日だが外出許可がでたので外出している生徒もいたが、俺は出かける気になれず食堂で箸達と雑談していた

「龍也何か良い暇つぶしはないか?」

本を読み紅茶を飲んでいる龍也（異様に様になっている一言で言うならそう……優雅だ

「暇つぶしとは？」

「簡単な罰ゲームとかありのトランプとか？」

鈴がそういうと龍也は

「ふむ。良いだろう、何か用意しよう」

立ち上がる龍也の顔にはにやりと言う感じの笑みを浮かべて歩いていった。それを見たラウラは

「なんだ？ 強烈に嫌な予感がするのだが？」

「大丈夫だろ？ 龍也は真面目だしそんなに酷い罰ゲームは用意しないだろ？」

俺はそんな話をしながら龍也が戻ってくるまでの間、ラウラ達と雑談しながら待っていた

「うつ!? 何これ？ 眼が痛い!？」

調理室から漂ってくる何かで目が強烈に痛む、私はハンカチで鼻と口を押さえ調理室に向かった

「ふむ。こんな物か」

「龍也君？ な、何してるの?？」

ゴーグル・マスクと完全防備の龍也くんがなべをかき回している。その余りに異様な光景にそう尋ねると

「ん？ 楯無か。罰ゲームの用意をしてるのだよ」

「ば、罰ゲーム?？」

くくつと笑う龍也君。悪戯や悪ふざけをしているとしか見えないその笑みに私は

「面白そうね。何罰ゲーム者にはそれを食べさせるの?？」

湯気だけでも目と鼻が痛む鍋の中身を覗き込む

「麻婆豆腐?？」

「そう。一口食べれば味覚が全て消し飛ぶ究極のマーボー。名付けて「この世全ての辛味くアンリマユ」だ」

「ゾロアスター?」

「そうだ」

ゾロアスターの悪神の名前を関するマーボー一体どんな自体を起すのか。私はそれに強烈に興味を持った

「興味を持ったな? このマーボーが何を引き起こすか? そう食べれば悶絶必須に加えとても面白い事になるだろう。そしてそれをお前は見たいと思っってしまったな? さてこのマーボーを食べるかどうか罰ゲーム、勝てば無問題悶える一夏達を見れるだろう。しかし負ければ私とお前が悶える事になる。このゲーム、乗るか? 楯無」

興味はある、しかしリスクもある……乗るか否か即断は出来ない。私が迷っているとオーブンレンジがチンと音を立てる

「おつ、焼けたな……糖質70%させつつ、胃にもたれず甘すぎない、究極のシュークリームが。夏前の時期にこれは効くぞ。ふつつふ……」

これはあれだ。私の同類だ、普段は真面目だが羽目を外すときは外し思いつきり楽しむ。そういう人種だ

「さて? どうする? このゲーム乗るか?」

2度目の問い掛けに私は

「ええ、乗らせてもらおうわ」

こんな面白い物を見て載らないという選択肢は既に私にはなく、にやりと不信感を煽る笑みを浮かべる龍也君に笑みを返すという形で参戦の意図を伝えた……今日は暇だったがどうやらとても面白い物を見れそうだ

史上最悪の悪戯コンビが結成された瞬間だった……

「ねえ? 一夏。龍也は?」

食堂で暇つぶしをしようと出て行った達也の姿がないのでそう尋ねると

「いや、暇だから何か罰ゲームつきのゲームでもと……」

「何て事を!」

大変だ急いで逃げなければ!!! 私となのはが回れ右した瞬間

「準備が出来たぞ。おや？　なのはとフェイトも居るのかこれは面白い事になりそうだ」

にやりと不信感を煽る笑みを浮かべる龍也に皆も嫌な予感がしたのか

(あれ？　すつごいイイカオしてるけどなんで？)

(龍也は……悪戯好きなんだ)

何を用意してるかわからない。以前不死身に近い体力を持つスカリエッティを1口でKOさせた。この世全ての辛味でなければ良いのだが……

「さてと丁度12人居るから3グループに分かれてダウトでもやるか」

トランプを3組出す龍也と楯無。

今食堂に居るのは。龍也・楯無・なのは・フェイト・一夏・箒・シャルロット・鈴・セシリア・ラウラ・シエン・ヴィクトリア・エリス。簪で14人の筈だが……

「あ、あの罰ゲームって何？」

簪とエリスが尋ねると

「簪ちゃんは危ないからスコア係で、エリスちゃんは退院したばかりだからゲーム進行してね」

危険……あああ、やっぱりあれ？　あれなの？

「ではトランプを配ろうか」

トランプを配る龍也。この勝負負ける＝死だ……私は震える手でトランプを見つめた

(生き残るには誰かを蹴落とさないといけない)

4人での対戦で、私の居る組は「ラウラ・シエン・箒」だ。龍也の方は、「楯無・一夏・セシリア」そしてなのは「ヴィクトリア・弥生・鈴」だ。

1番不利なのはどう見ても。一夏とセシリアだ、龍也と楯無はグルだ、何が何でもセシリアか一夏を潰すだろう。では私はどうすると考え

(ごめん……箒)

嘘とかが苦手そんな箒を標的とした……

〜数分後〜

「フェイトの組は、箒。龍也の組はセシリア、なのはの組は弥生がドベになりました」

何で私がこんな事を？　と言う顔で司会をしているエリスだが。

彼女が1番安全だ

「では罰ゲームを……」

ゴゴゴツ!!

この威圧感間違いない！　あれだ!!

「罰ゲームの食品は2つ用意してある。好きなほうを選ぶといい」

箒達の前に2つずつ箱を置き

「最初取った方から変えるのは禁止だ、さあ選べ」

箒・セシリア・弥生がそれぞれ自分のほうに箱を引き寄せたところで

「開けて良いわよ？」

楯無の言葉で3人が蓋を開けた。箒の前には赤黒い何かに乗った皿が。セシリアと弥生はシュークリームだ

「ちよつと待て!?　私だけじゃないか罰ゲームは!!　セシリアと弥生だけシュークリームって納得いかん!!」

箒がそう怒鳴ると龍也が

「いや。いやそのシュークリームはれっきとした罰ゲームだ。味わいはそのままに糖質70%アップのシュークリームだ。ちなみに食べたのはとフェイトの申告によると1つで〇キロ増加するらしい」「そんなこと言わないでください!!」

「悪夢がーッ!!!」

糖質70%の言葉と〇キロ増加という言葉にセシリアと弥生の顔色が悪くなる。夏前にこれはない、っていうか1個で〇キロってなんで?とか良いながらシュークリームを見つめている

「ではこれは？」

「この世全ての辛味〜アンリマユ〜だ」

ぼこぼこ煮立つ赤いなにか、差し詰め血の池地獄と言ったところだろう……

「何だその不吉なネーミングは!？」

ラウラがそう叫ぶ中

「まあ食べたまえよ。パスしても良いが後2回のゲームを下りる権利を捨てる事になるが、どうする?」

パスすれば、食べなくても良いが。敗北者とすればあれを食べてこのゲームから抜ける権利が得られる。

「ええい! 私を食べる!!」

レンゲでマーボーを掬い取る箸は

「うぐ!? 目が痛い」

そのマーボーが放つ激辛の匂いで顔を顰めたものの。覚悟を決めた表情でマーボーを口にした

「ふぐうツ!」

目を見開きジタバタと足を動かす箸、だが吐き出すと言う選択はなのか無理に飲み込み

「けひゃっ!?! ふっひひいッ!?!」

机に突っ伏し奇声を発しながら痙攣し始めた

「二箸が壊れたアアアアアッ!?!」

絶叫する一夏たちを見て龍也は

「ああ。愉悦はこれなのか」

「おもしろー!」

くすくすと笑う2人は

「さて、パスすれば、あれを食べなければならぬ可能性が出てくるが……どうするね?」

その問いかけに2人は無言でシュークリームを手にするという形で返答し、それを食べた……半分泣きそうな顔で

「では第2回戦と言いたいが同じゲームだと詰まらん。何かアイデアは無いか?」

「そうねえ、黒髭危機一髪とかは?」

「良いなそれ」

龍也がコートの中から黒髭危機一髪を取り出し。私達の机に1つずつおく

「では飛ばした奴が、罰ゲームで」

にいつと笑う龍也に頷き神妙な顔でナイフを取るラウラ

「やれる、私なら!」

ラウラが躊躇い無くナイフを突き立てる。黒髭は飛ばないセーフだ

「俺は出来る! 出来る……ビヨン……嘘だろおおおッ?!?!」

「ぷふッ!! 面白すぎ!!」

「全くだ!!」

一発目から黒髭を飛ばす一夏を見て、楯無と龍也が笑ってる。その手には愉悦と書かれた扇子が握られていた

「あああッ!」

なのはの絶叫に振り返るとポーンと黒髭が宙を舞っていた

「嘘ッ!!」

そして今度はシエンの悲鳴に前を見ると同じく宙を舞う黒髭が

……

「では選べ」

龍也の物凄く楽しそうな顔の前に3人はガツクリと肩を落とし箱を選んだ

「あつ、セーフ」

「体重が増えるという面ではアウトだけどね」

「マーボーがああッ?!?!」

なのはとシエンは鬼畜仕様のシュークリーム。前に私が食べた時は体重が○キロ増えた。死にたくなった……なんで一個のシュークリームで○キロってありえない

「ちなみにこれは改良型なのでどれほどカロリーがあるか判らない」

もしかすると前より体重が増えるかもしれない。なのはは

「しくしく……夏前なのに……」

「せ、折角体重落としたばかりなのに」

涙を流しながらシュークリームを頬張るシエンとなのはに

「あの、これ」

「ありがとう。簪」

「凄く嬉しいよ」

紅茶を入れて渡す簪。さつきシユークリームを食べたセシリアと弥生にも紅茶を入れていた、結構気づかい出来る性格なのかも知れない

「さあ、食べろ一夏」

「い、嫌に決まってるだろ!!! 湯気だけでも痛い物を食える訳ないだろう!!!」

「聞いたか楯無? 簪は食べたというのに何と情けない」

「ええ、チキン野郎ね」

龍也と楯無が挑発するが、一夏は断固拒否する

「ではパスだな? 一夏パスだ、次ぎ負けたら2倍だからな? では最終戦に入ろうか?、次は何にしようか楯無」

「そうねえ……全員参加のダーツとか?」

「良しではダーツを用意しよう」

龍也がコートからダーツセットを取り出しセットするのを見ながら

(なんとしても一夏を潰さないと)

(え? 何で一夏を狙うのよ?)

(僕は嫌だよ)」

(私も余り気が進まない)

乗り気ではない鈴達に

(一夏がパスしたら辛さを2倍にされるんだよ!? 簪が瀕死になったの更に2倍! 普通なら死んじゃうよ!)

まだ奇声を発している簪。あれの2倍と聞いた鈴達は無言で頷き、一夏を狙って行動し始めた

〜数分後〜

「嫌だーッ!!!」

「逃がすか!」

当然全員に蹴落とす対象と見られた一夏が勝てるわけもなく、敗北

が決定した瞬間逃げ出す一夏を捕獲しようとする龍也だったが

「はあ……お腹すきました。お嬢様、これ貰いますよ」

「え？アイアス！駄目!？」

「アイアス、死ぬよ!？」

見覚えのないアオザイによく似た服を着た2年生がこの世全ての辛味にへと手を伸ばしていた……

あ、アイアスちゃん、これちゃんとテストしておいてね？ あとこれとこれ

「ツバキさんもちよつとお使いを見たいなのりで無茶を言ってくれ
る」

ツバキさんが開発している。自立式の特殊兵装の起動データを取る為に1日使ってしまった

「今日に限ってシエルニカは居ませんしね」

自分で作つても良いが、疲れているのでそれはパスだ

「仕方ない。食堂に行こう」

大量の香辛料を制服のポケットに入れ私は食堂に向かった。

「なに、この良い匂いは」

鼻を突き刺すような刺激臭、だがこれは僕にとっては良い匂いと思える物だった。その匂いにつられるように食堂に行くと

「嫌だー!!!」

「往生際が悪いぞ!!」

一夏を捕まえようとしている八神龍也とお嬢様達の姿が見える。そしてその前におかれた赤黒いマーボー。

くう……

可愛らしくお腹が鳴る、今の僕に必要なのはあれだ

「はあ……お腹すきました。お嬢様、これ貰いますよ」

「え？アイアス！駄目!？」

「アイアス、死ぬよ!？」

お嬢様とエリス様が止めるのも気に留めず、僕はそのマーボーを口

に運んだ

「うっ!？」

「ああ、早く水を」

「美味しい!! この脳を突き刺すような辛味と喉焼き尽くすような辛さ!! 実に美味しいです!!」

ああ、こんなに美味しいマーボーを食べたのは初めてだ、一口ごとに口が痛むがまたそれが良い。僕が笑顔でそれを食べていると

「お、美味しいの? アイアス」

「ええ、とても美味しいですよ。この脳が吐き出せと叫ぶ感覚と喉を焼き尽くすような激痛はとても美味です」

「それは世間一般的には美味の表現じゃない」

失礼なこれとはんでもない美食ですよ

「た、助かった……てっあれえ!?!目の前にマーボーが!?!」

「逃がすと思っているのか?」

一夏を捕獲し椅子に縛り付ける八神龍也

「さ、食べ」

マーボーを掬い実にイイエガオで

「い、いや……ふぐううううッ!?!」

マーボーを口に突っ込まれ悶絶する一夏を見て

(こんなに美味しいのに、この美味が判らぬとは何と勿体無い)

僕はそんな事を考えながらマーボーを食べ終え。目の前のシュークリームを頬張った

「!?!?!?!」

「なにか?」

皆が驚きという表情で僕を見るなか。僕は立ち上がりあくびをしながら

「昨日から徹夜だったから。もう寝ないときついね……流石に」

OFFになりかける意識を必死でつなぎとめ自室へと戻った……のだが翌日の夜

「!?!?!?!?!」

口から魂が出ているような箒・弥生・セシリア・なのは・シエンの

姿を見ながら体重計に乗る

……え？ 嘘？ なんで〇キロも？

おかしい節制はしていたはず。それなのに体重増加って何で僕が混乱していると

「やっぱあれ！ 絶対あれのせい!! 糖質70%アップとかいうシュークリームのせい!!」

僕が食べたあれのせい？

「あ……あははは。体重落とさない」と

「付き合うぞ、シエン」

何か決意を決めた表情の箒達を見ながら

(明日からシエルニカの走りこみに付き合おう)

夏前の乙女には致命的な体重増加。何が何でも落とさしきる……そのひ大浴場に居た女子はこう語る。修羅が居たと……

「おつかしいなー。このカートリッジ」

「どこがおかしいんですか？ ドクター」

休憩にと紅茶とクッキーを持って来たウーノに

「うん。これはカートリッジであるのは間違いないんだ。だがこの型番のカートリッジなんて製造されてないし」

おかしい。確かに最新の技術が使われているカートリッジだが。こんな型番はないし

「それにそもそもこれは使用者の負担を度外視にしてる」

魔力の増幅量とかが明らかにおかしい、こんなカートリッジを使用すればどんなリバウンドがあるか

「どうやら私もはやて君と共に動くべきかもな」

「はっ?」

訳がわからないという表情のウーノに

「だからはやて君の擬似ISを完成させて。はやて君をあの世界に連れて行ったら私もそこで少し情報収集でもしようかなと思ってね」

規格外のカートリッジ、考えうるは

(別世界のミッドチルダで製造されたもの……)

世界は無数に枝分かれしている、その1つで作られたカートリッジの可能性が高い。だがその割にはどれも型番がばらばらだし、製造年数すらバラバラだ。

(どうにも厄介なネクロが居るかもしれないな)

私の中で自堕落な生活をしている。元ダークマスターズにして私のクローンのネクロ、ヴェノムの知識には時空や時間の狭間に幽閉されたタイプのネクロも居るとの事

(はーまだまだ平和は遠いねえ?)

IS用ハンガーに吊るした漆黒の機体を見ながら私はため息を吐いた

情報をとにかく取得しておこう。スコールがネクロどもと交渉し手にした情報を片っ端からアノミカゲにコピーしていく

(タスクに未練はない。ワタシはワタシの道をまた探す)

更識楯無との会話。そしてエリスが傷つくのを見てワタシが本当にしたいたい事を思い出した、今ここに残る道理はない

「抜けるつもり？ ユウリ」

「スコール」

後ろを完全に取られた。おかしい警戒していたのに何故？

「抜けるなどとは言わないわ。でもその前の約束を憶えているかしら？」

「ああ……ちゃんと覚えてる」

あの闇の中でスコールと交わした一番最初の契約だ

「そう、なら何も言うことはないわ。好きならデータを持っていけば良い、無事にIS学園に辿り着ける可能性なんてないもの」

「辿り着く、ワタシの求める答えを手にする為に」

スコールの目に揺らぎが現れたがすぐに消え

「後日こつちから連絡するわ、それまで貴方はここから出ることを禁

止します」

「構わん、もとより覚悟の上だ」

ワタシがそう言うのとスコールは背を向けて出口に向かいながら

「ユウリ。貴方がどこで死のうが何をしようが私には興味はないわ。でも……長い事協力してくれた貴方に聞いわ、考え直す事はできない？」

「無理だ」

もうワタシの心は答えを出している。今更揺らぐ事ではない。そもそもファントムタスクに協力者などという制度はない、所属する全員になんらかの処理が施されている。マドカで言えば監視用ナノマシンと言った風に。だが私はそういった処理を受けていない。この身体の特異さでそれをまのがれたのだが……タスクで活動しえた知識、タスクの拠点の位置などを知ったワタシを簡単に逃がすわけがない、それは判っている。それを判った上でワタシの心は言っているここにいるなど

「そう、それじゃあね。ユウリ……貴方は退ける内に退きなさい……そして生きなさい」

「なに？」

ぼそりと呟かれた言葉を最後にスコールは後手に何かをワタシの足元に投げ。部屋を出て外から鍵をかけた

「USBメモリ？」

ワタシはこのメモリを渡したスコールの真意が判らず、首を傾げながらそのメモリをPCに読み込ませたのだが

「ロックが……」

ロックが掛かっただけで中のデータが読み込めない。

「この絵がヒントだと思うが……何なんだこれは？」

白と黒の翼に剣で出来た十字架

「一体何を考えてスコールはこれを？」

スコールの真意がまるでわからない。だが何か意味がある筈だ……それに奴は生きろと言った

「生きてやるさ……答えを見つかるまでは死ねんからな」

今は時間が来るのを待つしかない、ワタシはそのままベッドに寝転がり。眠りに落ちた……

第39話に続く

第39話

第39話

「はやて君……いい加減、私を簀巻きにして引きずるの止めてもらえ……」「黙れ」はい、すいません」

六課に所属する魔導師達は額から大粒の汗を流しながら集まり。嵐の過ぎ去るのを待っていた

「部隊長が切れてますね」

「ええ、チンク姉様の報告が原因でしょう」

普段は犬猿の仲のティアナとセツテでさえ協力体制にある、六課での暗黙のルール。ブチ切れ状態の八神はやてに逆らうな……言動と考え方こそあれだが、その戦闘能力は、はやては龍也の次に強い。しかもあの状態では魔法を放つ事に何の躊躇いもないだろう。だって……

「ろ、労災出るんですか……これ？」

「さ、さあな……出ると良いなあ……」

不機嫌だという理由だけでラグナロクを喰らい壁にめり込んでいる、ヴァイスとグリフィスがボロボロの状態で労災について話しているからだ

「はよ、私のIS作れ」

「いやね？ 君の希望通りにはもう少し時間が」

無言で放たれた閃光が六課の壁を打ち抜く

「次は……頭や」

「すぐ作ります！」

「んじゃ、ラボ行くで」

「痛たたた!! 通路の壁が頭に!? あが!? 階段の段差がああ!」

鈍い音と悲鳴と共に薄れていく魔王の瘴気。それが消えた所で固まっていた六課メンバーはゆっくりと立ち上がり。身体をほぐしながら

「えーと、レジアス中將に修理費まだ経費で下りるか聞かないと」

「そうだな。何だかんだに半壊してるもんな。演習場」

六課の魔導師は皆たくましい、だって大半が魔王で怒れば魔法をぶっ放す連中ばかりなのだから……

「うーし、手分けして片付けな！、エリオとかは壁に埋まってるヴァイスとグリフィス救助してくれ。私たちはとりあえず半壊した通路と演習場を片付けるぞー」

ヴィータの号令と共に散っていく六課メンバー。これが彼女等の日常である……

「なあ。なのは、今日凄い怖い夢見たよ」

「どんな夢ですか？」

「半壊した六課と高笑いするはやて」

「……私も見たよ」

部屋を沈黙が包み込む……

「はやてって人の夢操作できたっけ？」

「……どうだったかな？ 闇と風を応用すればどうとか言ってた様な……」

はやてはなにがあったのか知らんが12属性の複合、しかもそれらを組み合わせる事で色んなバリエーションを持った魔法を独自に作り出している。もしかすると夢に関するのも使えるのかも

「まあ……はやてははやてで忙しいし、来ないだろ？」

そう言いながら靴を履く

「紐切れた」

「私も……」

「新品なのに……」

……まあ何かの偶然だろ。そう笑い予備の靴を取り出しそれを履いて部屋を出る

「「ニャー！ニャー!!!」」

「く、黒猫……」

どこから迷い込んだのか黒いネコが3匹鳴いてる

「「……不吉すぎる」」

私達の声が重なった。どう考えても不吉な出来事の予兆にしか思えない。私達は脳裏を過ぎる今朝の夢を思い出しながら、教室へ向かった

「おはようございます。今日は……また転入生の紹介を……したいと思えます」

ルルーと涙を流す山田先生だ、また寮の部屋の割り振りで悩まされるのだろう。頑張ってくださいと言いたいが。廊下から黒い瘴気が見える

「……大魔王。襲来？」

「言うな。まだ現実として認められない」

誰にだって認めたくない現実がある。まだ少し時間が欲しい

「でははいつて……あれ？」

山田先生が扉を開けるがそこに居る筈の人物がおらず首を傾げるのが見える。とそこまで認識したところで

「うーん。ラブーツ!!!」

「ふぐう!?! 肋骨が!」

メキメキと軋む肋骨と聞きおぼえのある声。痛みを耐えながら視線だけで後ろを見ると案の定。はやての姿がそこにある

「ぐあつ!?! 私をへし折る気か! お前は」

「とりあえず肋骨の1〜2本は折る気や」

「離れるーツ!!!」

「嫌や♪」

声は可愛らしいが腕に込められる力はそんなものじゃない、骨を折ろうとする明確な悪意を感じる。激痛に耐えながらはやてを引き離そうとするが魔力で強化してるのか、引き離すのは難しい

「え?え?知り合い?」

「凄く親しそうだけど」

「これが親しそうに見えるやつらは全員眼科に行けええ!!!」

「んー好きー大好き」

「マジで折れる! 骨が軋んでる!!!」

尋常じゃない力だ。こういう時頼りになるのは

「はやてちゃん！ 離れる！」

「折るのは駄目だよ！ 流石に！」

なのはとフェイトが止めに入ろうとした瞬間。はやては私を締め上げるのを止め。流れるような足捌きで懐から2本のナイフを取り出し

「あんたらがおって。なんで義手が壊れた？ なんで怪我しとる？」

周囲が凍りついたように静まり返る。はやての本気の殺気に当てられて硬直しているのだ

「死ぬか？」

「やーめーとーけ」

はやての頭に手を置きそのまま撫でる

「幼馴染だろ？ 簡単に殺すとか言うな」

「……でも」

「でも、何も無い。ほらナイフしまう」

「うん」

どこにしまってるのか判らないが、はやての手に今ナイフはない。それに安心していると

「んー」

「何してる？」

目を閉じ爪先立ちのはやてにそう尋ねると

「再会のチューを」

頭痛が……最初からエンジン全開にも程がある

「お前に倫理観はないのか？」

「倫理観？ なにそれ？ おいしいんか？」

頭痛が更に酷くなった

「はあ。頭痛が」

「それはきつと恋」

「絶対に違う」

このやりとりも懐かしい物だ。だがはやての思惑に乗る気はない

「とつとと自己紹介しろ」

「チューしたらする」

「お前はアホか!？」

話が丸で噛み合っていない……それに周りの女生徒と一夏の視線が痛い。その理由は判ってるんだがな

「チューー!」

「いい加減にしろよ」

はやての額を抑えるがはやては無理にでも言いたげに力を込めて近付いてくる。グググ……押し返されての攻防を繰り返す。

「あの、そういうのは自室で……」

「黙れ。死ね、殺すぞ」

目に光なし、殺気MAX、ナイフ装備のはやてに睨まれた山田先生は

「は、はい!!すいませんでした!」

殺し屋の目で睨むはやてに1秒で山田先生は降参した

「愛の証を〜」

周りにひそひそ話も辛いし。これ以上はやての暴走を進めさせると何をしでかすか判ららん

「いい加減にしろよ!! はやて!! 私とお前は兄妹だろうがーツ!!!」

部屋を揺るがすほどの叫びにクラスの面々がびくりと身を竦めた。ついでになのはとフェイトは至近距離でその叫びを聞いてふらふらしてるがどうでも良い。変な誤解が広がる前にそれを断つのが重要だ

「ちえー、ネタバレ早いなー。つまらへん」

ぶつくさ言いながら教卓に向かうはやてを見ながら。椅子に座り

(はあ……さらば平和な学園生活よ)

平穏と幸福が全力で走り去る音を聞きながら。私は大きいため息を吐いた……窓から見た空は憎いほどに青かった……

あれが? 龍也の妹? 俺は教卓の前に立つ女生徒を見て首をかしげた。龍也と違い茶色の髪に人の良い笑みを浮かべているが。

さっきの行動を見ると相当凶悪な性格の様だが

「八神はやてです。名前から判るとおり兄ちゃんの妹です。好きな者は兄ちゃんと嫌いなのは兄ちゃんを奪おうとするもの、あと兄ちゃんに色目使う女は皆死ね、って思ってます」

……すっげえ。目が本気だ。本気でそう思ってる目だ

「特技は投げナイフ、10本までなら物陰に隠れてる人間にも当てれるで」

危険人物だ。しかも一級品の……

「というわけでよろしゅう。あとなのはちゃんとフェイトちゃんは1回死ね」

凄い、全然動きが見えなかった気が付いたらはやてさんはなのはとフェイトの後ろにいた

「なんで!?!」

そう叫ぶなのはとフェイトの首根っこを掴んだはやてさんは

「HHHHH、ちよつと気分悪いんで保健室行って来ますね」

「や、やめ! ひきずらないで!! 暗いところは嫌だ!!」

「た、助けて!!! 誰か!!」

だが、誰も目を合わせない。勿論龍也でさえ目を逸らしている

「ナイフは不味いから……とりあえず骨は5〜10本は覚悟してな?」

「こ、殺されるーツ!!!」

その絶叫と共になのは達の姿は消え、代わりに鈍い音と悲鳴が……

「では授業を……」

山田先生も見捨てるという選択を取った。それは教師としては間違いだが人間としては正解だ。 なんてかって?

「速い!? 逃げ切れない!?!」

「なんで、バーサーカーモードなのーツ!?!」

あの絶叫と走る音を聞けば誰だって命は惜しいさ。

〜休憩時間〜

「裏切り者……今日の訓練で地獄を見せてやる」

机に突っ伏し8割がた魂が出てるのにもかかわらず、憎悪の目で俺

を見るなのとはとフェイト。今日の訓練逃げようかな？

「逃げたら追いかけて殺す」

うん、逃げ道ないね、死なない程度に手加減して貰えると良いんだけど

「うーん、ラブー」

「はぁ頭痛が」

幸せそうなのはやてさんに抱きつかれ頭を抱える龍也、その顔は疲労一色だ

「えーと、はやてさん？」

「んーはやてで良いで」

龍也の背中に顔を埋め幸せそうなのはやてに

「えーと、ずっとこんな感じ？」

「そうや。兄ちゃんがおれば私ほかになんもいらんし、こうしてれば幸せやし」

箒達が沈黙し龍也を見ると。龍也は

「はやては世間の常識と倫理に喧嘩を売ってるだけだ、何そのうち兄離れするさ。……望み薄だがな……」

その諦観と絶望が入り混じった声に俺達は何も言えなかった

「ふう、良いんだ、笑え。笑えよ」

目に光のない顔で笑えと言う龍也

「すまん。とてもではないが笑えん」

ラウラがそう言った、とても笑える状況ではない。俺も似たような境遇だし

「そーいや兄ちゃん。簪いうのとエリスいうのは誰や？」

「？簪とエリスがどうした？」

「いや。チンクさんがきつと惚れてる言うてたからいつペン地獄に送ろうと」

目に光がない本気で臨死体験させる気だ

「やめんか。ていうか惚れるとかどういう意味だ？」

「兄ちゃんが永遠に知らんで良い言葉や」

「そうか。なら聞かないで良いな」

それで良いのか!? 龍也は!?

「よいしょつと」

「何故私の耳をふさぐ?」

「ちよつとだけやから」

はやてに耳を塞がれた龍也は不思議そうな顔をしながらも本を取り出し読み始めた。

「ふっふー、私の計画の逆・光源氏は大成功や。ありとあらゆる面で完璧、多少天然も良いスパイスやろ? ちなみに私が小学校1年の時から計画がスタートしました」

なにやってんの!? この人!?

「まあ自分好みに仕立てるのも大事やと思うんやけど。どう思う?

私とよう似とるあんたなら判らんか? シャルロット」

にいと不安感を煽る笑みを浮かべるはやてにシャルロットは

「判ります!! その考え実に素晴らしいです!!」

共感してる!? シャルロットがはやての考え方に共感してる!?

「今からでも間に合うかしら?」

「間に合うやろ? えーと」

「凰 鈴音、鈴で良いわ。あたしもはやてって呼ぶし。で? その逆光源氏はどうすれば良いのかしら?」

鈴までもが!?

「参考までに聞いておこうか」

「ええ、あくまで参考としてですけど」

「知識は多いほうが良い」

皆まで!?! なにこのカリスマ性!?! やっぱ龍也の妹だけあるわこのカリスマ性! 龍也とは全然方向性違うけど! あと

「私は何時まで耳塞がれてるんだ?」

のんびりとした口調の龍也が腹立つ! つていうか

「本人の前でそういう話を……「ちよつと寝とれ」はぐつ!」

神速の地獄突きを喰らい俺の意識は闇に沈んだ……

「ちよつ!?! いきなり地獄突きって!?! 大丈夫一夏君?」

心配そうなシエンさんの声が聞こえたのが唯一の俺の救いだった

……

授業を終え。食堂に集まり下らない世間話をしていた、今日もアリーナが使用禁止なので致し方ない。

「はやても専用機あるの？」

「あるけど、調整中。まだ手元にはないんや、今度の臨海学校の時に持ってきてくれるらしいけどな」

はやては言動こそあれだが意外と社交性があり。友人を作るのが上手い、それが魔王の因子を持つタイプならすぐにだ。つまりはやては鈴とシャルロットと凄く仲良くなっていた

「俺、すっげえ怖い。はやてと千冬姉があつたらと思うと」

「まあ間違いなく魔王化が進むな。かなりの速さで」

「ですよー。だってもう鈴とシャルロットの目に光ないからな」

凄い勢いで鈴とシャルロットの魔王化が進行しているが、それは一夏の問題で私には関係ない

「まあ、箒とかが魔王化しないように気をつけとけ」

「なにをどう気をつけろと？」

うん。具体的には何にも言えんな。まあ十中八九箒達も魔王化するって見て良いだろう。魔王化は伝染するし

「龍也さーん。頭痛いんです、頭撫でてください」

「タンコブが……」

魔王強襲のダメージが抜け切っていないのか涙目のなのはとフェイトに

「いたいのがいたいのとんでけー」

弱めの治癒魔法を施しながらそういう、アギトとか雷華達によくやっている。子供は元気な方が良いが怪我をするのは可哀想だし

「変なところでお前子供っぽいな」

まあこれは癖の様なものだからそういういわれると恥ずかしいが今更治らん

「あ、龍也君」

「どうも、失礼しますよ」

簪とエリスも暇なのか食堂に来ていたが、間が悪すぎる……恐らくチンクから2人の特徴を聞いていたはやてはシャルロットと鈴との話を止めさつと立ち上がり

「どうも、はじめまして。八神はやてです、今日転入してきました。よろしゅうな」

笑っているが笑っていない。はやてはこの2人を決して認めはしないだろう、はやては容姿や助けられたという理由だけで自分の他に、私に近寄る女性が嫌いだ、だからこうして威圧をかけている。少しでもだけ目に魔力を込めているので暗示でもかけるつもりだろう

「どうも。エリス・V・アマノミヤです。はやてとお呼びしても？」
「え、えと……さ、更識簪です」

しかし2人は臆せず名前を名乗った。それにはやては一瞬驚きの表情を見せたがすぐに笑みを浮かべ

「簪とエリスやね。私もそうやって呼ぶではやてって呼んでくれたら良いで」

「ええ、では宜しくお願いしますね」
「えと、はやて……さん」

エリスは真つ向からはやてを見つめ、簪は少し気後れした素振りを見せながらもぺこりと会釈した。

「ん、よろしゅう」

人の良い笑みを浮かべながらもどこか引つ掛かるという表情をしていたが

「やつほー、お菓子持ってきたよ」

「私もだ」

「……ビクリ」

シエンとヴィクトリアがお菓子を持ってきて座談会に加わる。クリスだけは私達同様またはやての違和感に気付いたようで、少しビクビクしながらラウラの横に腰掛、私たちを横目で見ていた。どうもこのままなし崩し的にはやてとエリスとかの会話は消え。皆共通の話題になりそうだ。それを感じ取ったはやては魔力を霧散させ椅子に

座った。感情的に見えがちだがはやては仮にも部隊を持つ隊長格。引き際はちゃんと見極めている

「シエン。よくお菓子食べる気になるね。あのシュークリーム食べて」

「今日でお菓子は最後。後は地獄のダイエットをするだけ。今日だけは思いつきり食べる」

覚悟を決めた表情のシエン達を見て私は

(少しはしやぎすぎたか)

100%太るシュークリームは少しやりすぎたかと後悔しながら紅茶を飲んだ。

「で？ 暗示掛けたのか？」

「んー掛けるつもりやったんやけど。レジストされた」

夕食後、はやても何食わぬ顔で私たちの部屋に私物を持ち込み。寝る用意を整えていた。あえてそのことには突っ込まず話を切り出すと、はやては不思議そうな顔でそう言った

「レジストされた？ ありえんだろ？ あの2人には魔法の素質はないぞ？」

「うん。そうやけど……弾かれたんや……魔力の練りこみが甘かったせいやと思うで」

魔力対抗のない人間を甘く見ていたということか

「まあそうなるか、明日も早いし寝よう、この囲いの中に入るなよ？」
「チツ」

「舌打ちするな、はやて。明日からはIS学園で暮らすんだ。ちゃんと学生らしい振る舞いをする事」

「具体的には？ 投げナイフとか関節技はOK？」

「ちよつとお前正座」

「はい……」

どうもはやてには少しIS学園で生活する上の注意をしておかないと不味いようだ。六課と同じ感覚でいられると不味い

(しかし。なぜエリスと簪がレジスト出来たんだ?)

魔素が薄い世界Ⅱ0ではない……

(考えすぎか？ 仮に魔導師の素質があつたら気付くはずだしな)

私は自分の考えすぎだと思ひ、そのことを思考の隅に追いやつた。しかしそれが間違いであるという事に気付くのはそう遠い先の話ではない……

夢を見る……

赤い大地と無数の剣の突き立った世界を……

(またこの夢……)

ヤタガラスが暴走してから3日に1度はこの夢を見る。一体これが何を意味するのかわからない

(そして夢はいつもここで終わる)

黄金の甲冑の青年が振り返り、一際強い風が吹きつけるその瞬間に私の意識は夢から覚めるのだが。

(しかし、この剣や槍は一体なんでしょう?)

意識が消えるまでの僅かな時間、あたりに突き立った剣や槍を見る、どれも美しい装飾を施され美しい輝きを放っている。その中に1本だけあるひび割れ、錆びた剣がやけに目に止まる、周りの美しい剣や槍と違い無骨で何の輝きもないこの剣に私は目を奪われ。その剣の柄に手を掛けたところで私の意識はこの赤い大地から消えた……

(この夢は……何なんでしょう?)

目覚めても決して頭から離れる事のない夢、私はそれが意味する事を考えながら再度眠りに落ちて行つた

しかし彼女は知らない。自分が唯一友人と思える女生徒もまたこの夢を見ていることを……

ゆつくりと運命の歯車は回る……

唯一つの運命に導かれ……

そして時と共に新しい運命の幕を開くだろう……

第40話に続く

第40話

第40話

チウンチウン

「ん……」

朝かゆっくり目を開きかけまた閉じる。朝のまどろみタイムは最高だもう少しだけ……

「これが至福の時というものか？」

んん？ 誰かの声があるが1人部屋だし気のせいだよな

「記録……記録を」

おかしい明らかに第三者の声がある。

「ん？ うおうツ!？」

「起きてしまったか残念だ」

マウントポジションを取りカメラを構えていたラウラに心底驚き、思わず布団で自分の身体を隠し

「な、ななな、何してるんだよ!？」

「うむ。お前の寝顔をカメラに収めに来たのだ。教官の依頼でな、それに私も欲しかった」

何してるんだよ!? 千冬姉! ドイツで何を教えてたんだ!？」

「折角教官にもらった一夏写真集に種類が増えると思ったのだが」

「折角じゃないし! それ盗撮だし! っていうかなんでそんなものがあるんだよ!!!」

ラウラの手にはカメラと分厚いアルバムがあり、表紙には

「一夏 写真集く犯罪紛い編く」と銘打たれていた。紛いどころか犯罪行為そのものだ

「まあ気にするな、教官はこれより厚いのを10冊持つてるぞ」

「知りたく無かったよ! 千冬姉のそんな痛い事実!!!」

なんで朝から心が砕けかける事実をカミングアウトされないいけないんだ

「ちなみにその写真集を使って、我が部隊の全員にブラコンの素晴ら

しさと一夏の愛らしさを布教していた」

「そんな過去聞きたくねえええ!!」

自分の姉がそんな事をしているなんて信じたくなかった。

「まあその話は金輪際しないでくれ。俺の中の常識が砕け散るからな、じゃあ顔洗うからどいてくれ」

俺がそう言うのとラウラははっとした表情になり

「私の上でお前が下と……つまり私が絶対的に有利な訳だ」

「はっ!?!」

う
足で腹を挟まれ肩の関節を押さえられ動くに動けなくなってしまう

「前の様に突然ではなく、今度はちゃんとした形で接吻しようではないか」

「アウト!! ラウラアウトだツ!!」

「私的にはセーフだ」

しれっというラウラ、くつまともだと思っていたが我が道を行く性格か!?

「ではまあ頂くと……」

「何をしておるかあアツ!!」

扉が吹っ飛びラウラに向かっていく

「ちっ」

「へぶっ!?!」

ラウラは回避したが俺はその扉の直撃を喰らった。痛む額を押さえながら入り口を見ると

「ラウラ、お前は何をしている!」

真剣を構えた箒がいた……箒は真剣を鞘に収め

「何故、お前が一夏の部屋にいる?」

「寝顔を写真に収めようと思つてな。その前に起きてしまったので失敗し残念な気持ちで下を見れば。私のせいで身動き取れぬ一夏が……ここで我慢するのもどうかと思ひ行動に出た」

真顔且つ冷静な口調のラウラに

「それは犯罪だろう!?!」

「だが逆に聞こう箒。お前が同じ立場ならどうする?」

ズバッと喋ってくれ箒

「……………犯罪だ」

「その間は何だ! 箒!!」

幼馴染が少しわからなくなった……箒はばつが悪そうな顔をして

「助けてやったのにその顔はなんだ?」

「お前が即答で犯罪だって言ってくれたらもつと良い顔が出来たと思う」

ちよつと色々整理したい、ラウラのストレートすぎる思考回路とか、千冬姉がドイツで何をしてたとか、微妙に目を逸らしてる箒が実は魔王化してるんじゃないか?とか考える事は山ほどあるが

「貴様ら何をしている?」

「?!?」

降臨した魔王がハイライトのない目で異形の日本刀を構え箒とラウラを睨みつつ

「さて一夏。不純異性交遊の現行犯として今日から私の部屋で暮らせ」

「嫌だーッ!!!」

肉食獣と同じ部屋なんて1秒でも拒否だ! 心が休まる時間なんて無いじゃないか!!

「まあ拒否権は認めん。そして篠ノ之とボーデヴィツヒは一度地獄叩き込んでやる!!」

鞘から抜刀する千冬姉、あれって確か折れた斬艦刀だったよな……人間なんて頭から真つ二つじゃ……

「箒!」

「ああ! 今行く!」

窓を開き、そのまま外へと駆け出す箒とラウラに

「ま、待て!! 俺を置いてくな!!」

俺もあとを追って窓から外に飛び出し、横目で後ろを見る

「……………そうか、お前はあの2人を選ぶとならば一度お前も地獄に落ちろ!!!」

鬼神モードの千冬姉の無慈悲な宣告を聞き、俺はそのまま全力逃亡を開始した……

結論から言うと俺達は無事生還した、途中で千冬姉の携帯がなり。職員会議らしく非常に不機嫌そうな顔で職員室に戻っていた……

「「た、助かった……」」

体力は限界まで削られたが命があることに暫くへたり込んだままで感謝していたが

「って飯食わないと遅刻する!!」

「そうだ!? 急がないと!!」

急いで部屋に戻り着替え食堂へと走り出した。朝からこんなに疲れるなんて不幸すぎる

一夏達が決死の鬼ごっこをしている頃龍也達はジェルからの新型のネクロとカートリッジについてのレポートが来ていたのでそれに目を通していた

「素体はIS操縦者の可能性が高く、そのせいでISを展開できる。なるほどね、だからラファールと打鉄を纏っていたのか」

「でもそのせいで回復力が低く、カートリッジによる回復を主にしてると。なんでそこまでにしてこの世界の人間を素体にするのに拘ったんだろ?」

なのはに問いにはやてが

「並行世界間を自在に移動できるようなネクロがおらんのやろ。高位のネクロがそうだった能力を持つ可能性が高いとは言ってもそうそう都合よくおらんってことやろ?」

「そっか。転移はどのネクロも共通だけど世界間移動できるネクロってそうはいないもんね」

遭遇した200体近いLV4ネクロのライブラリーの中でも世界間移動できるネクロは全体の約2割ほど。数はそう多くは無い

「となればまたIS関連の基地を襲撃する可能性が高いと」

「だな。今度は軍事関連のISを狙うかもな」

もとより戦闘型のISを狙ったほうが手間が少ないだろうしな

「そろそろ食堂行かないとHRに遅れるね」

「ん？ そうだな」

フエイトに言われ時計を見るとどうも話しこんでる間に大分時間が経った様で、そろそろ出ないと不味い

「んじや行こう」

「で、お前はナチュラルに背中に乗るんだな」

「へへ。駄目？」

可愛らしい声でそう尋ねてくるはやてに

「好きにすればいい」

駄目と言っても降りる訳無いと判ってるし。私はそのまま背中にはやてを背負ったまま自室を後にし、食堂に向かった

「ん？ 何か疲れた様子だな？ 一夏」

「お前にだけは言われたくない。何なんだその状況は？」

状況？ 背中にはやてがいて。それを親の敵を見るような目で睨んでいるのはとフエイト

「何時も通りだが？」

「お前の日常がどうなってるのか気になるな。本当に」

私の日常なんて、何時も魔王に強襲されてドタバタと大騒ぎする物だ。

「で、お前は何故そんなに疲れた顔をしてる？」

まるで寝起きから全力ダッシュをしたような顔の一夏に尋ねると

「いろいろあつてな。詳しくは聞いてくれるな」

どこか影のある一夏にこれ以上聞くのは得策ではないと判断し、自分達の分のトレーを持って一夏達の座る机の空き席に腰掛け朝食を食べ始めた

「しかし珍しいな龍也達もシャルロットも遅れるなんて」

時間にしっかりしてる龍也とシャルロット達らしくないと思いなから尋ねると

「なに。少し調べ物をしていてね。時間を気にしてなかったんだ」
「ぼ、僕はその二度寝しちやって……」

言いにくそうに言うシャルロットだが、どうも少し俺から距離を取ってるように見え

「なあ。俺のこと避けてないか？」

「うん？ そんな事無いよ。うん、無いよ？……って言うか今一夏に近寄られると理性がログアウトしそうだし」

うん？ ぼそぼそとなんか言ってるけど良く聞こえなかったな。まあ小声で言うって事は大した事じゃないんだろ。そんな事を考えながらシャルロットの箸の使い方を見る

まあと比べて格段に上達している。箸で魚の骨も取るのも朝飯前といった感じだ

「兄ちゃん。あーん」

「自分の分あるだろうよ。まあ良いがはい、あーん」

ナチュラルにあーんをしているはやてにそれに何気ない感じでの要求を呑む龍也

(なんか。龍也ってはやてに甘いような気がするな、でも家族と言えるのがお互いだけならこういうものなのかな？)

千冬姉もあんな感じだし、と思いこれ以上考えるのをやめる。複雑な家庭事情があるんだそう簡単に足を踏み入れて良い事ではない。

「い。一夏？ ずっと僕のほう見てるけど、どうかした？ ね、寝癖でもついでるかな？」

落ち着き無さそうに尋ねて来るシャルロットに

「いや。ほらなんだ……先月はずっと男子の制服だったからさ。女子の制服のシャルロットは何か新鮮で可愛いなと」

「か、可愛い……そう言うこと言われると……我慢が……」

ん？ 何か地雷踏んだ？ シャルロットが肉食獣の目で俺を見てるんだけど……まあ気のせいかな、俺はそんな事を考えながら食後のお茶に手を伸ばし

「いてえ!？」

行き成り足に踵落しを叩き込まれ更に頬をつねり上げられる

「人におしとやかな女が良いと言っておいてお前はずいぶん軽薄だな」

「一夏。シャルロットだけを褒めるんじゃない。私も褒めろ」

足をぐりぐりと力を込める筈とすこし面白く無さそうに頬を抓るラウラ。くっ? 何だこの地獄は、どうすれば脱出できるんだよ

「全くそう言う事を言うものじゃないらしいぞ? 一夏、ん。出来たぞはやて」

「おおきに♪」

食事を終えはやての髪を整えている龍也にだけは言われたくなかった

キーンコーンカーンコーン

つておい!? 今の予鈴だよな……えっ? 予鈴?

「うわあつ! い。今の予鈴だぞ! 急げ!」

慌てて立ち上がるテーブルには既に俺1人。箒・ラウラ・シャルロットは既に猛ダツシュを始め。龍也に至っては背中に3人背負い猛ダツシュ。相変わらずの人外さだ……

「お。俺を見捨てるのか! 今日には千冬姉のSHRだろ?」

遅刻Ⅱ死OR捕食である。どちらも死亡フラグだ

「私はまだ死にたくない」

「右に同じく」

「ごめんね。一夏」

「犠牲者は最小限でいい」

俺を見捨て走っていく龍也達の後を追って走り出す。生徒玄関で上履きに履き替えていると

「ほら、一夏」

上履きに履き替えたと同時に誰かに手を握られる。誰かと思ったらシャルロットだ。一緒に死んでくれるのか!?

「飛ぶよ、一夏」

「へ?」

俺の手を握りそのままISを部分展開し飛び上がる

「おわっ!」

その強い力に引つ張られあつと言う間に3階に到着。しかしそのスカートで飛ぶのは止めた方がいい。その下着が見えて

「一夏だから見せたんだよ? 「死ね」 つつつう!」

そう笑ったシャルロットの頭を鷲掴みにし吊り上げる腕

「敷地内での……ああ、IS展開についてはどうでもいいんだ。一夏に色仕掛けをした罪死を持って償え」

「あいたたたた!?! 頭蓋骨が軋んでる!!」

シャルロットの頭を容赦なく締め上げる千冬姉は

「全く一夏、お前は私のものであると言う自覚を……」「一夏は。先生の何かじゃない。僕のだ!!」ほう? よほど死にたいのか?」

ギリギリと締め上げられつつも目だけは決して屈服せず睨み返すシャルロット。どうしようこの修羅場

ガラ

「よし。セーフ」

「「は?」」

背中に3人の美少女を背負い、のほほんと言う龍也登場……窓から「八神。お前何をした?」

「壁を垂直に歩いてきただけです?」

「何でもないように言う龍也は窓を閉めながら言うがそれを絶対に普通じゃない。」

「なにか氣勢がそがれたな。今日はまあ目を瞑ってやろう」

シャルロットを降ろした千冬姉は

「だが罰は与える。織斑とデュノアは校則違反として放課後教室を掃除しておけ。良いな?」

「はい……」

それくらいですんで良かったと思うべきだな。そうは思うがどうしても意気消沈してしまう

「さて、今日は通常授業の日だな。赤点等取らないようにちゃんと勉強に励むように。それと来週から始まる校外特別実習期間だが。全員忘れずに準備をしておくように。ではSHRを終る。各人今日もしっかり勉学に励めよ」

そう締めくくる千冬姉に

「あの山田先生は今日はお休みですか？」

何時も居る山田先生がいないことを尋ねる鷹月さんに千冬姉はそういえばと言ってから

「山田先生は今日は現地視察に行っているので今日は不在だ。なので今日は私が1日担当する」

おもいつきり忘れたと言う表情を見て。いつも苦勞してる山田先生が不便に思えた……

そして今日も何時もと同じ日常が暮を……

「ああ、一夏、お前は最前列に來い。私がちやんとみてやろう」

訂正、肉食獸の目の前でびくびくしながら授業を受けることになり
そうだ……

なんだ、あの3人組は？ 基地内を巡回中に見慣れない3人組を見つけた俺達は隊長に連絡を入れようとして、

「小隊長急いでください、あいつらシルバリオゴスペルのハンガーに向かっています」

イスラエルとの共同開発の軍事用ISを奪取されるわけには行かない

「判った、こっちは倍の6人だ、あの女がISを使えたとしても仲間を人質にすれば投降するだろう」

俺はそう判断し3人の後を追った

「急げラクシユミ。あのウサミミ女に渡されたプログラムをインストールしろ」

「無理を言わないで……プロテクトを突破して、偽装には時間が掛かる。気が短いのは損をする」

「いや、もう損をしてるようですよ。人間です」

赤紫の髪と青紫と普通の人間ではありえない目と髪を持つ黒い服の男と、額にΣのマークが刻まれふわりとした緑色の和服を纏った女と長い黒髪にコバルトブルーの目をしたカソツクの男が振り返る。

見た目は何の変哲も無いが、俺達は無意識に数歩後ずさった

(なんだあの目は!?)

瞳孔が縦に割れた明らかに普通ではない6つの目に見つめられ、本能的に感じ取ったのだただの人間ではないと

「捕獲を断念。射殺する、構え!!」

アサルトライフルを構えると赤紫の髪の男がその手に何時の前にか現れた剣を構えこつちを睨んでいる

「ここは私がいきましょう。ペガサスはラクシユミの護衛を頼みます。彼女は戦闘能力が無いですから……それにそろそろ交換の時期なんですよ」

「ヴォドウン、判った」

ペガサスと呼ばれた男がその手の剣を消し女の横にしゃがみこむ。その2人の前にヴォドウンと呼ばれた男が立ち

「貴方たちは神を信じますか?」

「は?」

「ですから神を信じますか? と問うているのですよ?」

ここにこのこという男に

「俺達は軍人だ、祈る神などいない」

「そうですね、なら丁度良いですね。我が神にその命を捧げれる事に感謝なさい」

にやりと笑うカソツクの男は懐から何かの機械を取り出し腰に当てる。すると機械からベルトの様なものが現れカソツクの男に腰に装着される

「その命、神に捧げなさい!」

【プロヴィデンス】

金色のUSBメモリの様な物のボタンを押すと機械合成音でプロヴィデンスとコールされる、それを腰のベルトのスロットにセットし「変身」

ベルトのスロットを傾けると凄まじい風が男から放たれ一瞬視界をふさがれる。そして俺たちが視界を取り戻したときそこに男の姿は無く代わりに

「ふふふ、では参りましょう」

カソックの男は黒い装甲に包まれ。黄色の複眼、漆黒のマントを纏った異形の戦士がそこには居た。

「な。なに……。「遅いですよ」ぐぼっ!？」

その異形の姿が掻き消え離れた所に居た曹長の身体を腕で突き破っていた

「ふむ、残念貴方には適性がなかったようですね。ではその罪を地獄で償いなさい」

異形が曹長の頭を踏み抜くとそこから曹長の身体が腐り見る見る間に身体を溶かし消えていった

「ば、化け物おとおおッ!!!」

「誰が化け物ですか。私は神の使徒ですよ」

また異形の姿が掻き消え、仲間の一人の首を手刀で切り落とし、もう1人には強烈な蹴りを叩き込み6Mほど蹴り飛ばした。蹴り飛ばされた男は血の泡を吹き数回痙攣したかと思うと、曹長と同じ様に身体が腐敗し消え去った

「うわあああッ!!!」

錯乱状態になった軍曹がアサルトライフルを乱射するが異形のマントに阻まれ一発たりとも命中していない

「司令官、援軍……通じない?」

通信機に声を掛けるが何の反応何処かザーツと耳障りな音を返すだけだった

「結界を張らせて頂きました。貴方がたはもうどこにも逃げられない。我が神の愛を受け入れるのです」

【プロヴィデンス マキシマムドライブッ!!】

腰のメモリを足にあったスロットに填めると異形が姿を変えたと同じ声がし

「はああああッ!!」

異形の右足に黒いオーラが集まり、それと同時に辺りがその黒いオーラに侵食され腐り始める

「はっ!!」

金属性の床を溶かしながら異形が走る。狙いは俺!? 逃げないと
ならないとわかっているのに身体動かない

「隊長!!」

「うお!!」

横から突き飛ばされ尻餅をうつそして

「うが……ううあああああッ?!?!?」

異形の蹴りを喰らった陸尉は今までの非ではない悲鳴を上げる

「おお、貴方は神の愛を受け入れたのですね!」

異形が嬉しそうにそう言うのと陸尉の身体は闇に包まれる

「貴様陸尉に何をした!!」

「何って聖痕を刻んだんですよ。すぐに彼は新しい進化した人間になる」

「ぎ……ギアアアアッ!!」

凄まじい咆哮と共に陸尉を覆っていた闇が弾き飛びそこから黒い異形が姿を見せた

「くろい……悪魔」

報告であったイギリスのISを奪取したという悪魔。嘘だと思っていたが目の前で見ると信じるしかない

「ご存知でしたか? しかし正式には我らはネクロと言います。まあすぐにそんな事など判らなくなりますがね? しかし少しお待ちを」

異形は左腰に下げた銃を取り出しそれに足のメモリをセットする、その銃口は逃げ出した陸尉の背中を狙っている

【プロヴィデンス マキシマムドライブ】

「神の愛を受けなさい」

俺が止めるまもなく異形はトリガーを引き漆黒の弾丸を打ち出した

「ぐ。ぐはっ……」

背中から打ち抜かれた陸尉はそこから一気に腐食し地面に倒れるまでの僅かな時間で骨になり、地面に当たると同時に骨が砕け散り灰となった

「なにを……」

「私の能力、「腐敗の教義」はISであれ機械であれ、人間であれ、魂さえも腐食し腐らせる。これが神に与えられた私の能力ですよ人間」

腰のベルトのメモリを外したカソツクの男は袖を巻くりあげ

「うっ!？」

そこには腐り骨が見えている腕があつた

「この身体はもう限界なんですよ。だから新しいからだだが欲しいんです」

「あつ」

理解したこの男は俺の身体を

「ああああッ!!」

男が叫ぶと男の背中から骸骨が現れその腕で俺を掴む。今までの男の身体は灰となっている

「新しい身体を持って私は更に神の愛を世界に伝えるのです」

「うっぐ……ぐああああ!!」

俺の身体に異形の骨が突き刺さりそこから異形が俺の身体に入り込んでくる。痛い魂が消えていく……

ただ感じる激痛と自分が消えていく感覚それが俺が最後に考えた事だった……

「ふう。やはり新しい身体はいい」

灰の中のカソツクを取り出しそれに付いた灰を払ってから着込みラクシユミの元へ向かう

「どうですか?」

「完了した……」

「それは結構。ところでペガサスは?」

「帰った……もう敵も居ないから俺の仕事はないと」

「全く彼は」

神の徒としての自覚が無さ過ぎる。ベルフェ様やネルヴィオ様の様に積極的に神の愛を布教してくれば良いのに

「帰ろう。証拠隠滅は?」

「やりましたよ？　6名の軍人は最初からこの基地には居なかったとね？」

全ての者に神の愛を教えたいがやりすぎるなとベリト様に注意されていたので精神操作をし、そこからあの6人の前に現れたのだ

「ではそろそろ帰りたい。私は現場に出るタイプじゃないから」

「ありがとうございます、ラクシユミ。さて貴方もこちらへ」
「グルルル」

ネクロと化した軍人をこちらに招き寄せ

「貴方もエデンに入る資格を得たのです。さあ参りましょう」

新しい神の徒も増えた、これで私達の今回の仕事は終わりだが

(しかしなぜベエルゼ様があのだとか言う人間に力を貸すのか判りません)

もつとも神に近い神格を持つベエルゼ様の指示なら私に逆らう理由はないのだが。どうにもそれだけが気がかりになっていた

「どうしたの？」

「いえ。なんでもありません。戻りましょう」

ラクシユミの声に我を取り戻し私は神の居城へと転移した……

人気の無くなったISハンガーではシルバリオゴスペルのヘッドバイザーが不気味な赤い光を放っていた……

第41話に続く

第41話

第41話

臨海学校前の休み、私ははやて達と共に街に来ていた

「いやーギリギリで準備は好きやないんやけどしょうがないよなー」
「そうだね」

フェイトとはやてが話すのを見ながら歩いていると見覚えのある、ツインテールと金髪、それにその後ろに銀髪の子が植木の影に居るのが見えた

「なのは、あれ……」

「ですよ。私もそう思いますよ」

私となのはの視線に気付いたはやても其方を見て笑いながら、3人の後ろに近付き

「ストーリーキングか？」

「?!?!」

気配を殺していたはやての接近に気付かなかった3人が驚いて振り返り、私達を見て

「なんだ。龍也達か」

「驚きましたわ」

「まだまだ未熟だな」

三者三様の反応をする鈴達に

「何してるんだ？」

そう尋ねると鈴が手に持っていた空き缶の残骸をゴミ箱に放り投げながら

「一夏とシャルロットが2人だけで出かけてる……だから一夏を……」

「一夏を……」

瘴気を撒き散らす鈴は無視しラウラに

「一夏とシャルロットが出掛けているを見つけたからつけて来たのか？」

「うむ、それもあるが、水着も買いに来たと言うのが本来の目的だ。お

「前達は？」

「私はなのは達に誘われたから着いて来ただけだ。海で泳ぐ気はないからな」

肩を竦めながら言うとセシリアが

「何故ですか？」

「あのな？ 私は前の襲撃の時に身体に穴空いたんだぞ？ まだ塞がりきってない傷跡を見たいか？」

顔を青褪める鈴とセシリア。いかん……トラウマになってるのかもしれない

「と、言うわけだ。残念ながら泳ぐわけにはいかないので、釣りでも思い竿を買いに来た」

私の目的は水着ではなく釣竿にある。そう言いながら横断歩道の先を指差し

「一夏とシャルロットを見失うぞ？」

既に人ごみに紛れ始めてる2人を指差しながら言うと。3人はじやあと言ってから一夏達の後を追って移動を始めた

「いや、積極性高いよなー」

「大体お前のせいだと思いがな？」

そんな話をしながら私達もレゾナンスに向かって歩き出した

俺は今、人生最大の危機を迎えていた

「一夏、10秒やろう。納得の行く説明をしろ」

鬼神のオーラを纏う千冬姉と

「いい加減に弟離れしたらどうでしょ？ ブラコン」

魔王のオーラを纏うシャルそして

「あわわわわ」

2大魔王のオーラにやられて涙目でブルブル震えてる山田先生。

とても混沌とした状況だった……

(どうしてこうなった……？)

多分20分前のシャルの行動が全ての始まりだったと思う

「あの、シャルさん？ 水着を持って試着室に行くのは判ります。ですが何故に俺の手を引くのですか？」

万力かと言いたいくらいの力で俺の手を握り締めるシャルにそう尋ねると。シャルはにこりと微笑み

「水着って着て見ないと判らないでしょ？ だから来て見るから見てもらおうっと思っただけ」

それはそうだろうが、何故に俺まで試着室に連れて行かれる必要があるんだ

「すぐ、着替えるから！」

「それなら俺は外で待ってる!!」

「それは駄目」

外に出ようとするがシャルがバツと服に手を掛ける

「うおっ!」

慌てて背を向けて目を閉じる。退路を絶つたためとはいえ行き成り服を脱ぎ始めるシャルに驚きながら

(鈴や箒に見つかつたら殺される……)

女子と2人きりで試着室に居るところを見られたら、弁明の余地も無く処刑に決定するだろう。俺は今日ここに鈴や箒がいない事を祈りながらシャルの着替えが終るのを待ったのだが

(お、落ちつかねえ……)

女子特有の甘い香りと衣擦れの音……この状況で落ち着ける男がいたら見て見たいものだ

「着替え終わったよ」

シャルの声と共に振り返り絶句する。

(やっぱシャルは美人だよな)

シャルの着ている水着はセパレートとワンピースの中間のようなもので、色は夏を意識にしたのか黄色。そして胸の谷間を強調するようなデザインをしている

「どうかな？ 似合うかな？」

少しだけ恥かしそうに尋ねてくるシャルに

「えと、凄いい合ってると思うし、綺麗だと……うおっ!？」

シャルがどんと手で俺の退路を塞ぎ光の無い目で俺を見る

「一夏……駄目だよ、そんな事言ったら……我慢が出来なくなるじゃないか」

魔王モードッ!? シャルが光の無いままの目で淡々と

「もう良いよね? 食べちゃっても良いよね?」

「だ、誰……むぐうッ!？」

口を塞がれ叫び声すらあげれない。そして魔王化による身体強化で振り解く事も出来ない

「ちよつと、ちよつと味見するだけだから」

イヤアアアアッ!!! 誰か! 誰か助けてーッ!!!

俺が心の中でそう叫んだ瞬間、ジャツと試着室の扉が開き

「何をしている貴様!」

「ちいッ!!」

千冬姉降臨、救世主だ

「一夏。不純異性交遊の現行犯として……捕食する」

「アウトーッ!!!」

救世主なんかじゃない、悪魔だった!!!

そして冒頭に戻る。

着替えたシャルと腕組してる千冬姉に睨まれ小さくなる俺、下手な事を言えば死亡フラグだ、慎重に何を言うか考えていると

「一夏あッ!!!」

水着の山の影から鈴登場、確率変動で修羅場に発展しそうだ

「おろ? 何の騒ぎや?」

「あ、織斑先生と何時もの面子だ」

「そうだね」

魔王軍襲来。超高確率で魔王ファイバーに発展

「ん? 何の騒ぎだね?」

帽子。クーラーボックス、釣竿が入っているであろうロッドケース

装備の龍也登場

「助けて! 龍也!!!」

救世主は彼しかいない、俺はそう判断し、龍也に助けを求めた

「では一夏が悪いという事でこの議題は可決します。良いですね」

「『意義なし』」

「意義有あり！」

事情を聞いた私がなぜか裁判官となり互いの話を聞くことになった、水着売り場でする話題ではないと思うが、これは100%一夏が悪いと思う

「良いかね？ 倫理観の問題だ。2人で試着室に入った時点でお前は有罪だ。諦めろ」

「そんな無慈悲な!?!」

涙目の一夏を無視しクーラーボックスを叩いて

「では織斑先生の意見を通し。一夏に織斑先生の水着を選ばせるという事でこの議題を終了します。ただしRな展開は認めません。良いですね？ そして公平なるジャンケンに負けた鈴たちは大人しく自分の買物をする事。織斑先生の邪魔をしないと約束できるな？」

「多少不服だが、良いだろう」

「すっごい、不本意だけど良いわ」

「中立の方の意見ですから。異論は無いですわ」

「俺は嫌だ！」

一夏が嫌だと言うので

「ならば全員の水着を選び、そしてシャルロットと同じ様にする意見を出した。鈴の意見を採用しよう」

「ごめんなさい。心の底からゴメンナサイ」

恥も外聞も無く土下座する一夏を見ながら

「ではこれにて本法廷を閉廷します」

私はそう言ってからクーラーボックスとロッドケースを肩に提げ

「よし、では大人しく引き下がった鈴とセシリアにスイーツをご馳走

しよう。アットクルーズとやらの一番高いパフェでどうかね？ はやてが食べたいそうなので今から行くが。お前たちもどうだ？」

「え、良いの？ 確か3000円でしょ？ あれ」

「構わん。大勢で食べたほうが楽しかろう」

うーんと暫く考える素振りを見せた鈴達だが頷いたので

「では私はアットクルーズに居るので。それは失礼を」

「では行くぞ一夏」

「はい……」

はんば連行される形で水着売り場に戻っていく一夏を見ながら私達はアットクルーズに向かった

「うわあ。良いねえこれ」

「そうだね」

パフェを見て嬉しそうなはやて達を見ながら自分で注文した紅茶を飲む

「あの、龍也さんはなにか食べる物は頼まないんですの？」

自分達だけと言うのが気掛かりなのかそう尋ねてくるセシリアに

「私は甘い物は好かん。気にしなくて良い」

良い紅茶だ。今度また飲みに来よう、そんな事を考えながらふと気付いた

「ところでラウラは？」

「あつ」

どうやらラウラとはぐれたようだったが……

「まつ、いつか今はパフェの方が大事だし」

「そうですね、後で探せば良いですわ」

友達より食欲か……まあ良いがね。私はそんな事を考えながら紅茶のお代わりを注文した

その頃ラウラはと言うと

「千冬姉はラウラに少し甘くないか？」

「ん？ そうかもな、あいつは仮にだ、仮にお前と結婚したとしても私

を尊敬してくれるだろうし、私の考えも理解してる。そう言う面では気に入っているぞ」

「珍しいな、千冬姉がそんな事言うなんて」

教官と一夏の話聞きながら水着を選んでいると

「で、お前的にはラウラはどう見える」

「ん？ 突然どうしたんだ千冬姉、何時もなら私以外を見るのは許さんとか言うのにな？」

「なに。ただの気まぐれだ、で？ どうだ？」

私の事を話していることに気付き悪い事だと思いつつも聞き耳を立てると

「そうだな……まあ、可愛いとは思……ぐあああッ!? 頭蓋骨が

アアアア!? 自分で聞いてそれかアアア!」

「やはり不快だな」

一夏を片手で吊り上げているであろう教官の姿が目には浮かぶようだ。私はそんな事を考えながら

(か、可愛い……つまりはあれだ、一夏は私に対してそれなりに好感を持っていると……)

バクバクと高鳴る胸を押さえこういふときに頼りになる人物に相談する為にI Sのプライベートチャンネルを開いた

『受諾。クラリツサ・ハルフォーフ大尉です』

「わ、私だ」

即座に通信に応じてくれたクラリツサにそう言う

『ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長、何か問題が起きたのですか?』

「その大した問題ではないのだが。その……私は……可愛い……らしい」

『はい?』

間の抜けた返事をするクラリツサに

「その一夏がそう言っていてな……」

『一夏きゅんにですか!? なんと羨ましい』

興奮した声で言うクラリツサ、教官の布教はクラリツサに多大な影響を与えていると思う

「そ、それでだな、私はどうすれば良いのだ？」

『教官は？』

「教官は今……」

聞き耳を立ててみる

「少し仕置が必要か」

「ぎゃあああッ!!! 頭蓋骨がアアア!」

「一夏をアイアンクローで吊り上げている」

『どういう状況なんですか？ そちらは？』

混乱しているクラリツサニ状況を説明すると

『なるほど、つまりは向こうは隊長が居ると思ってるんですね？』

「そうなる」

『それは最高の状況ですね、本人のいない場所でされる褒め言葉に嘘はありませんから』

自信に満ちた口調のクラリツサに

「それで今私は水着売り場に居るのだが」

『そう言えば来週は臨海学校でしたね。 隊長はどのような水着を？』

「指定の水着にするつもりだが？」

『何を馬鹿な!? IS学園の指定水着はスクール水着でしたよね？』

それはたしかに強力なものですが、それでは色物の域を出ません！

ここは勇気を出して一歩踏み込むのです!!』

熱弁を振るうクラリツサに

「ではどうすればいい？」

『私に秘策があります』

私はクラリツサのアドバイス通りの水着を探し購入することにした。クラリツサに礼を言うとクラリツサは

『いいえ、礼には及びません。しかし出来るなら……一夏きゅんの写真を数枚送って欲しいのですが……』

「判った、近いうちに送ろう、ではこれ以上プライベートチャンネルを使うのも不味いので切るぞ」

『はい、判りました。それでは武運を』

「うむ」

私はそう返事を返してISのプライベートチャンネルを切断し水着売り場を後にした。

丁度その頃ドイツの黒ウサギ隊では

「近いうちに隊長が一夏きゆんの写真を送ってくれるそうだ！」

「やったーッ!!」

黒ウサギ隊……各国には最強部隊として知られているが、ドイツ本国では織斑千冬に洗脳された部隊として有名だ

「一夏きゆんにあつて見たいな♪」

「王子様みたいなのかな？」

「ワイルド系なのかも？」

あつた事の無い一夏に対する妄想が爆発していたりするのだが……それを一夏が知る事は恐らく無いだろう……

「うん？ エリス。簪は？」

集合場所に簪がないことが気になりそう尋ねるとエリスは

「なんか行きたくないって駄々捏ねてるんですよ」

やれやれと肩を竦めるエリス……よしならば。荷物をバスの荷台

に乗せ山田先生に

「私は自分の足で行くんで先に行つて下さい」

「え？ 八神君どこへ行くんですか?!」

「龍也君どうするつもりなんですか」

「迎えに行つて連れて来る。後で旅館で合流しよう、ではな」

私はそう言つと簪を迎えに行く為に寮に向かった

「おーい。簪いるか？」

「な、なに？」

ひよこつとドアの隙間から顔を出した簪に

「臨海学校に行くぞ」

「ええ？ 私は良いよ……」

首を振る簪に

「きつと面白い。だから行こう」

「うう……でも……」

乗り気じゃない簪に

「エリスも待つてる、だから行こう」

な？　と言いながら手を伸ばすと

「うー、じゃあ行こうか……な？」

おずおずと言う簪に

「決まりだな、では荷物を用意しろ」

「今からで間に合うかな？」

バスの出発時間まで後5分しかない事を言う簪に

「心配ない、ちゃんと足は用意してある」

「足？」

首を傾げる簪に

「見れば判るさ。だから安心して準備するといい。寮の外で待つてる」

「う、うん」

部屋に戻った簪、暫くすると部屋の中からドタバタと言う音が聞こえて繰る慌てて準備をしているのだろう。私はクスリと微笑み寮の外へ向かった

「誰もいないな？」

念の為に辺りを見回してから寮の影で

「ベヒーモス」

バイク型のデバイスを呼び出し、それを押しながら寮の入り口に向かうと

「へえ、随分とごついバイクね」

「楯無か」

「はい」

入り口のところに腰掛けている楯無に声を掛けられる。展開するところは見られてないよな？

「バイクの免許まで持つてるんだ」

「必要だからな」

サイドカーに簪の荷物を乗せれば良いだろう。サイドカーの中身を整理しながら返事を返すと

「なんで簪ちゃんを誘いに行ったの？」

「思い出と言うのは大事なものだと思う。だからかな？」

サイドカーの整理を終えたところで慌てた様子で簪が来てベヒーモスを見て

「凄いな……バイクだね」

「うむ。私のISを造った変人科学者が造った物だ。MAXで700キロでる」

「……本当？」

「バイクで耐えられる速度なの？」

驚いた様子の簪と楯無に

「ギリギリ耐えられるそうだが乗ってる人間がブラックアウトする危険性がある、だから通常運転で行く」

ベヒーモスに乗りサイドカーを指差す

「サイドカーに荷物を乗せて乗れ。二人用のサイドカーだから余裕はある筈だ」

サイドカーに荷物を乗せ乗り込んだ簪にスペアのヘルメットを渡しエンジンを掛ける

「事故らないでよっ」

「ふっ、そんな心配は必要ない、ではな楯無」

私はそう返事を返しバスの後を追って走り出した……

第42話に続く

第42話

第42話

「あれ？ はやてさん、龍也居ないけどどうしたんだ？」

バスに龍也が居ない事に気付きそう尋ねると

「ん？ 簪迎えに行つてから来るつてさ。もう追いついてくるんや無
いかな？」

「はやて、ここは高速道路だよ？ どうやって追いついてくるの？」

シエンさんが呆れたように呟く中、バスの外からバイクのエンジン音がする。窓の外を見ると

グツ！

サムズアップする、バイク乗りと目が合う、かなり大型のサイドカー付きの漆黒のバイクに跨り風に靡く銀髪……ぶつちやつけ龍也だった

「おおい!? なんだあの大型バイク!？」

「なんだ。どうしたんだ……あれは龍也か？」

「凄いですわね、物凄く絵になってますわ」

「市販のものでは無いな？ 改造品か？」

俺の声につられて窓の外を見る箒達、バスの横を追走する大型バイクを見ていると

「おっ、電話や。もしもし?」

はやてさんが電話に出ると

「ああ、兄ちゃん。どうしたんや?」

「っておい!? バイク運転中に電話かよ!? サイドカーの簪さんが
あたふたと慌てているのが見える

「ふんふん、ホイ。一夏電話や」

「俺に?」

渡された携帯を受け取る

『よお、一夏何をそんなに慌ててるんだ?』

『ハンドル片手じゃ危ないよツ!!!』

のんびりした口調の龍也と慌てている簪さんの声を聞きながら

「危ないだろうが！ 早く電話を切れよ!!」

『ああ、判っている。次のサービスエリアで簪をバスに乗せる、山田先生が付き添いのツバキさんニそう言っておいてくれ、ではな私は先に行く』

そう言うのと電話は切れ、バスの外のバイクのエンジン音が更に高まり急加速していく、一瞬目が合った涙目の簪さんが酷く可哀相に見えた

「次のサービスエリア」

「吐く……」

「大丈夫かあ?」

気持ち悪そうに目を回している簪さんの背中を撫でている龍也が駐車場に居た

「おっ、バスが来た見たいだぞ? 乗り換えるか?」

「うん……」

フラフラと歩き4組のバスに乗り込む簪さんを見ながら龍也のところにいく

「随分ごついバイクだな」

「ああ、私のISの製作者策の700万馬力のモンスターマシンだからな」

どんな方法で作られたんだよそれ……俺が呆れていると龍也はコートを脱ぎサイドカーに被せる。するとサイドカーが消える

「それ本当にコートなのか疑いたくなる」

「一応コートだ。気にするなよ? 細かい事を気にすると早く年を取るぞ」

からから笑う龍也はペットボトルのスポーツドリンクを飲みながら

「それにたまには気分転換しないと潰れそうなんだ」

「……どんまい」

そうだった特上級の魔王に悩まされている龍也には気分転換が必要なのだろう

「ほれ、さっさとバスにもどれ。乗り遅れるぞ」

「ああ、じゃあ、海でな」

「おう」

バスに戻り暫くすると走り始めるバス。龍也はのんびりと景色を見ながら休憩していた。バイクだから直ぐに追いつけるのだろうと考え俺はまた窓の外を見始めた。何でかって？

「……………」

「にー」

俺の隣で勝ち誇った笑みのシャルとそれを親の敵でも見るような目で見ている箒達と視線を合わせるのが恐ろしかったからだ

「あつ、龍也さんだ」

「本当だね」

のんびりとしたなのはとフェイトの声と同時に俺の隣に着く漆黒の大型バイク。窓越しでも魔王の瘴気を感じ取ったのか龍也は頑張れとでも言いたげにサムズアップをし一気に加速しあつと言う間に見えなくなつた。俺はそれを見ながら

(俺もバイクがあつたらなあ)

意図的に視界に入れぬようにしている魔王同士のにらみ合いの気配を感じながら俺は深く溜め息を吐いた。

「何かえらく疲れてるな。一夏」

一足早く旅館に来て、一夏たちを待っていたのだが、疲労困憊と言う感じの一夏にそう尋ねると

「魔王が…………魔王が」

「そうか。良く頑張ったな」

うわごとの様に呟く一夏を労い集合場所に向かう

「それでは、ここが今日から3日間お世話になる花月荘だ、全員従業員の邪魔にならないように注意しろ」

「宜しくお願ひします」

旅館の女将さんに挨拶をすると女将さんが私と一夏を見て

「こちらが噂の？」

「ええ。まあ、今年は男子が2人いるせいで浴場わけが難しくなつてしまいました。申し訳ありません」

「いえいえ。それに中々しつかりしてそうじゃないですか」

「そう見えるだけです。私の弟は、ほら挨拶をしろ」

「お、織斑一夏です。宜しくお願いします」

「八神龍也です。3日間お世話になります」

一通り挨拶を終えた所で旅館に入り、荷物を置きに行く所からだろう

「ね。ね、おりむーとたつやん」

のそーと歩いてきたのは本音だ。にこにこ笑いながら本音は

「おりむーとたつやんの部屋ってどこ？ 遊びに行くから教えて」

その問いかけに私は

「私は嫌々ながらはやて達と同室になのだが、おかしいと思わないかね？ 本音普通は私と一夏で部屋を使えば良いと思うんだがね？」

うんうんと頷く一夏、やはり同じ意見か……

「所で一夏お前の部屋は？」

私は名前が書いて無いだけではやて達と同じ部屋だが、一夏の部屋はどこか知らず尋ねると

「お前の部屋はこつちだ、こい」

にいと魔王の笑みの織斑先生を見て一夏は

「すっげえ。嫌な予感がする」

「まあ頑張れ一夏」

一夏と別れ自身の部屋に向かい。まずは線引きと衝立を用意しながら

「良いか、こつちから先に来るなよ？」

はやて・なのは・フェイトが凄い不満そうに私を見るので

「なんだ不服か？ なら私は外でテントでもはって寝よう。それならいいだろう？」

「不満なんてとんでもない。全然OKです」

声を揃えるはやて達に苦笑しながら持ち込んだ釣竿とクーラー

ボックスを担ぎ。

「では私は釣りでもしてくる。お前達は泳ぐなり何なりすればいい」

「龍也さんも泳げば良いじゃないですか?」

水着を用意しながら尋ねて来るのはに

「あれだけ傷のある肌をさらせと?」

「あーそうでした。すいません」

幻術を使っても隠し切れぬほど私の身体には傷がある、中には貫通し背中にまで傷跡のある物もある、そんなのを見せればまたトラウマになる生徒が居てもおかしくない。そういった面も考慮してこそその大人だといえるだろう。

「ではな。海でまた会おう」

なのは達も着替えるだろうし再度、旅館の入り口に向かい靴に履き替え。砂浜に出る、砂浜の先に岩場があるのでそこならなんらかしの魚が釣れるだろう

「で? 行き成り何があったんだ?」

砂浜では鈴を肩車する一夏と、それを睨むセシリアの姿があり困惑しながら尋ねると

「まあ昔から鈴はこんな感じだな。引っ付いて来るんだ。そしてそれを見てセシリアが憤怒して居る、それだけさ」

そう苦笑する一夏を見ていると

「あ……そっか。うん……殺しちゃおう」

「鈴・セシリア逃げろ、シャルロットが魔王モードのスイッチを入れたぞ」

黒い笑みでフフフと笑うシャルロットに恥かしいのかパーカーを着ているラウラ。箒だけは姿が見えないがきつとその内来るだろう

「元気な事で何より、では私は釣りにでも」

回れ右して岩場に向かおうとすると

「龍也君は泳がないの?」

「どうして私服なんでしょうか?」

ワンピースタイプの水着の簪とエリスに尋ねられ、私は肩を竦めながら

「腹に開いた傷跡があるんでな。そう言うのを考慮した結果だ」

なるほどと頷く簪とエリスを見てみると。水着に着替えたなのは達も砂浜に出て来る。私が露出の多い服を好まないのを知っているのは達は露出の少ない水着を着ている。やれやれ全員集合かと思っていると携帯がなる。誰だ

「ジェイル？　なんだ？」

この世界に来てしていると聞いていたが、突然の電話に驚いていると『あと3分ほどで其方につく。空を見ろ』

空を見上げると飛行機から飛び降りてくる白衣の男の姿

『あの飛行機は？』

『ステルスでもぐりこんでいただけだ気にするな』

上機嫌のジェイルの声を聞きながら

「はやて」

「んーなんや？」

空を指差し

「天災が来るぞ」

「お。早かったなあ」

からからと笑うはやてに簪が

「天災って？」

「私達のISの製作者や。私のISを届けに来る言うてたから」

へーと話をするはやて達の話を聞いていると携帯から

『しまったああああッ!!!』

「なんだどうした？」

その慌てた声にそう尋ねるとジェイルは

『パラシュート忘れたアアアア!?』

「そうか、でもお前なら大丈夫だろ？」

『大丈夫だが。危険だ、近くに居る生徒達を避難させてくれ』

ジェイルが落下予定の辺りを見る

「大丈夫だ。生徒は居ない」

『そっか、なら安心して墜落できる』

「ああ、心配ない。では切るぞ」

『また後でな』

携帯の電源を切り、近くの一夏達と今正に別館から出て来た弥生達に

「危ないから少し離れてろ」

「なんでだ?」

不思議そうな顔をする弥生に

「馬鹿が落ちてくる」

はっ?と言う顔をする一夏達を見ながら

「5・4・3・2・1……」のわあああッ!! へぷろぷっ!!!」0、言っ

ただろ? 馬鹿が落ちてくるってな」

砂浜に逆さ向きでめり込んで足をバタバタさせているジエイルを見ながら私はそう呟いた

なんだ。あれ?

砂浜に突き刺さる白衣の男に絶句していると龍也が近付き

「おう、久しぶりだな」

足をばたばたさせていた男が足を器用に動かし始める、それを見たラウラは

「器用だな、足でヘルプと叫んでいるぞ」

やっぱそうか。足で文字を書いていると思ったよ

「OKだ。では少し息を止めていろ」

龍也が肩から下げたクレーラーとロッドケースを地面に置き。数歩下がり

「ふんっ!!」

「ぐふっうううッ!!!」

助走をつけたサッカーボールキックで男の腹を蹴る。その凄まじい威力に砂浜から引き抜かれた男は回転しながら海に蹴り飛ばされた

「たたた、龍也君!? なにやってるの!?!」

驚いた様子でそう尋ねる簪さん、って言うか俺たちも驚いている

「大丈夫。奴はあの程度どうという事は無い」

龍也の言葉から数分後、海からザバザバと出て来る白衣の男は頭から出血しながら

「ふー。死ぬかと思った。流石にあれだな、龍也上空4000Mからのフリーフォールは死ぬるな」

「ははは、冗談抜かせ、その程度でお前が死ぬものか」

「それもそうだな。はははは」

頭から噴水の様に血を噴出し笑っている男の姿、どう見てもトラウマものだ

「おい、ジェイル、皆が鈍引きしているぞ、血くらい拭け」

「それもそうだ」

笑いながら血を拭くと噴水の様に噴出していた血は嘘の様に止まっていた

「えーと？ あの怪我は？」

驚いた様子で話しかけるシェンさんに白衣の男は

「うん？ ああ、あの程度なら直ぐ治るよ。私は骨折でも1時間もあれば治るからね」

……人間ですか？ 貴方は……普通骨折は1時間じゃ治らないです

「ジェイル、皆驚いている自己紹介くらいするべきだろう？」

「おお、それもそうだね」

違います。俺たちが驚いているのはそんな些細なことではないです。

「初めまして、代表候補生の皆さん。私の名はジェイル・スカリエツティだ。気軽にドクターでも呼んでくれたまえ」

からから笑うスカリエツティさんは面白い物を見たと言う表情で「さて。龍也、IS学園で落とした女生徒はだ……へぶうつ!？」

神速の裏拳で地面に突っ伏すスカリエツティさんに龍也が

「お前は何を言っている？」

「ん？ 嫌ね。龍也は呼吸するが如くフラグを乱り……」どっこしよへぶうつ!？」

スープレックスで地面に突き刺さるスカリエッティさん

「お前は頭が沸いてるのかね？」

龍也がげしげしと頭を蹴っている、こんな龍也初めて見た

「だって君はナチュラルボンフラグメーカーじゃないか？ きつと面白い事になっていいると思っただがね？……龍也その振りかぶった金属バットは何かね？」

龍也が金属バットを思いつき振りかぶっている。龍也はイイエガオで

「スイカ割りをしよう。だがスイカが無いのでお前の頭をかち割つてやろう」

「ははは、冗談きつい……ぐあつ!? 本気か!? 本気で私をオオオツ!? ぎやあああああツ!!!」

断続的に響く鈍い音に思わず顔を背ける、しばらくすると悲鳴が聞こえなくなる。恐る恐る目を開くと

「すまないな、馬鹿の処刑は終わった」

ピクピクと痙攣してるスカリエッティさんだったものから意図的に視線を逸らす

「え？ えーとあれ死んでるんじゃない？」

弥生さんがそう尋ねると

「はっはっは！ 私はこの程度では死ね無いよ」

ゾンビ宜しく立ち上がるスカリエッティさんは

「私の予想では2人から3人だと……ぎやーつ!!! 折れる！ 折れる

!!! 私の右腕がアアア!?!」

関節技を極められ地面に転がされたスカリエッティさんが悲鳴を上げる中。はやてさんが

「大丈夫、大丈夫。あれは兄ちゃんとスカリエッティさんのスキンシップやから」

その割には龍也が本気で腕をへし折ろうとしてるように見えるんだが

「やあ、お嬢さん方、君達だね？ 龍也を好いているのは目を見れば判るよ」

「!?!?」

驚く簪さんとエリスさんを見て関節を極められながらスカリエツティさんは良い笑顔で

「なに恥じる事は無いさ。恋に恋愛大いに結構。それが人が成長するのに必要なフアクターだよ」

「どつんいしょ」

龍也は腕の関節を極めるのを止め、アルゼンチンバックブリーカーの態勢に入る

「だからこういうだろう？ 恋せよ乙女と……ぎやあああああ!?! 背骨！ 背骨が折れるううう!?!」

「戯けめ、1度三途の川に叩き込んでやる」

ゆつさゆつさとスカリエツティさんを揺らす龍也、そして悲鳴を上げるスカリエツティさんを無視して、泳ぐ準備をするのはさん達に「良いの？ 助けなくて」

「良いの、良いの。あの人タフだから」

そう言つて泳ぎに行くのはさん達を見ていると

「やあ。君が織斑一夏だね？ ふむふむ。剣を振るうのに理想的な筋肉の付き方をしているね」

「!?!」

平然とそう笑いかけてくるスカリエツティさんは俺に次にセシリア・シャル・ラウラ・鈴・弥生さん・エリスさん・簪さんと次々顔を見て

「ふむふむ。代表候補生の諸君だね。ブルーティアーズにラファール・リバイブ君達のISの情報は知っているよ。なにせ、なのは君とフェイト君のISのベースに使わせてもらったからね。それに君達のISもね」

からからと笑うスカリエツティさんにセシリアが

「え？ 知っていると？」

「んー？ だから開示されている情報と衛星にハッキングして得た稼動データを元にね、作ったのだよ。なのは君の桃花にフェイト君のライトニングはね？ まあ零式とインフィニティアを重点的に作つて

いたからね。片手間で作ったから完成度は6割程度だがね？」

もしかして凄い科学者なのでは

「いやねーはやて君のISを作ったのは良いんだがね。フィツティグとかしないといけないことが多くてね。直接来たんだよ。本当はISコアの研究を進めたかったんだがね？」

からから笑うスカリエツティさんにラウラが

「待て。それでは貴様がISコアを作れるような口振りだぞ？」

そう尋ねられたスカリエツティさんは

「どうだろうね？そこは君達の想像に任せるよ。ではね」

ひらひらと手を振るスカリエツティさんは龍也と肩を組んで

「で？ 本当の所はどうかね？ あの子らの事をどう思……げふつ！？」

リバーブローで蹲ったスカリエツティさんに振り下ろしの拳を叩き込み意識を刈り取った龍也はロープでスカリエツティさんを縛り上げ、砂浜に埋まっていた岩を持ち上げそれに縛ったロープの先を縛り、それを抱えて回転を始めた

「まさか……龍也の奴？」

「いやーまさか、流石にそんな事しないでしょ？」

ラウラとシャルがそんな話をする中龍也は

「いっぺん死んでこいっ！！」

躊躇う事無く重石付きのロープを投げ捨てた。重石に引かれ海に向かっていくスカリエツティさんは沖の方に水音を立てて、水没していった

「ふう」

「「ふうじゃないっ！！」」

良い仕事をしたと言いたげに額の汗を拭う龍也にそう叫ぶ。今の殺人現場なんじや

「なに心配ないき、あの程度で奴は死なん。前に惚れ葉を作って大騒動を起こした時、手足を縛って高層ビルの天辺から突き落としたがピンピンして、死ぬかと思ったと笑っていたからな」

龍也も大概だが、やはりそんな龍也の知り合いと言うだけあって普

通では無いらしい。それ以前に惚れ薬という言葉に突っ込みを入れたいが、下手をすれば地雷と化すので黙っておこう

「どれ海岸で奴が来るのを待つか」

クーラーボックスに座る龍也を見ながら、俺は引き攣った笑みで「とりあえず。俺たちも泳ぐか?」

「あーうん、そうだね」

同じく引き攣った笑みで返事を返すシャルたちと海に入りながらクーラーボックスに腰掛ける龍也を見る

「ああ、そういえば言い忘れてた」

「?」

不思議そうな顔をする簪さんとエリスさんに龍也は笑いながら「いいな。その水着にあっているとと思うよ?」

真っ赤で龍也から逃げさる簪さんとエリスさんを見ながら

(なんかスカリエツティさんが言ってた事が判るような気がする)

俺がそんな事を考えていると沖のほうからバシャバシャ音を立てて泳いでくる何者かの姿

「ふー、死ぬかと思つたよ。あと沖の方に鮪が居たから」

ずるずると何かを引き摺りながら上陸するスカリエツティさんの手には巨大な魚の尻尾

「鮪を捕まえてきたよ、龍也」

「大漁かつ!」

かなり大きい鮪をまるでぬいぐるみでも引っ張るようにして引き摺ってくるスカリエツティさんにそう突っ込む

「ほう、良い鮪だ。解体するか」

「いいね。今日の昼は鮪の海鮮バーベキューと行こうじゃないか龍也」

はっははと笑いあう龍也とスカリエツティさんだが龍也が

「折角だあつちの磯で貝とか探しに行くか?」

「いいね、確か近くに料金を払えば、アサリとか取らせてくれる場所があつたと思うぞ」

「それは良い。貝を餌にすれば黒鯛とかも釣れるな」

肩を組んで歩いて行く2人の姿を見ながら、俺は龍也達の人外さに呆れ果てていると

「ほら、一夏行くよ!」

「うおっ!? 手を胸に抱え込むな」

自分の胸元に俺の手を引きよせるシャルにそう言うのと

「ふっふー良いんだよ? 胸を触っても?」

悪戯っぽく笑うシャルに

「ば、馬鹿言うな! って痛てえ!」

「一夏の浮気者。スケベ」

鈴が踵で俺の足を踏み抜いている。ぐりぐりと足を捻る鈴

「痛い! 痛たって!」

「女は胸だけじゃないのに。スケベ・馬鹿・浮気者」

鈴は一切俺の話を聞いていない、最近はやてさんと仲良いと思っていたが。一気に魔王化が進行している。この危機をどうすれば脱出する事が出来るのだろうか?

「一夏、お前はまだ私の言う事を何一つ理解して無いようだな?」

はい、死んだー。俺死んだー、黒いビキニの千冬姉降臨。確率変動で三途の川直行もしくは捕食エンドのフラグ発生ですね。判ります

「やはりお前には1度、イロイロと身体に教えてやらねばいかんようだな?」

ハイ捕食エンドのフラグのほうですか。これなら三途の川ルートのほうがましです

「ブラコン。変態女」

「一夏は僕のだ」

「はっ、死ぬか小娘ども?」

あー確率変化で、捕食エンドから魔王大戦に巻き込まれるか……
まあ何とか生き残れるかな?

「「あっ」」

「げふうっ!」

それぞれを狙った攻撃が外れ俺を捕らえる。宙を舞いながら

(本当最近こんなんばっか)

俺はそのまま背中から海に落ちた、意識を失う直前に

「一夏ーッ!!!」

ラウラの物凄く心配そうな声が俺が聞いた最後の言葉だった

「なにかようか?」

ウキを見ながら尋ねると

「何でわかったの?」

「別に気配でだな。で? 何の用だ簪?」

折角の海なのに私の所に来て何の得があるかね? と思いつつ尋ねると

「見に……来ただけ。あの人は?」

「ん? ジェイルか? 奴なら貝を採りに行ってる。奴は貝が好きなんだ……と来た」

ウキが沈み合わせを入れるが

「外したか……」

どうもタイミングがあわなかったようで空振り、エサを付け直していると隣にちよこんと座る簪に

「どうした?」

「見てる。泳ぐのは好きじゃないから」

そうかと頷き。餌を付け直し投げ入れる

「釣れないな」

簪が来る前に釣れたカサゴが2匹とセイゴが1匹、場所が悪いのかもしれない

「あのさ……」

「んー何だ?」

ウキを見ながら返事を返すと。簪は嬉しそうに

「お姉ちゃんと仲直りできたんだよ」

「ほう、それは何より。姉妹なんだから仲良くしないとな」

「うん♪ 龍世君。私も釣って見ていい?」

「良いぞ」

竿を手渡し隣でのんびりと海を見つめる。まあ偶にはこういうのも良い物だ……

「何か出にくい雰囲気だ」

貝を採るのから戻った事を報告しようとしたジェルがどうしよう、頭を悩ませているのだが……それに気付かない、簪と龍也であつた……

第43話に続く

第43話

第43話

「龍也、スカリエツティさんは？」

昼間であつたちよつと変わった科学者の事を尋ねると

「んー。空き部屋が無いから外にテントを張って寝るって言ったぞ。昼間捕った鮪と貝のバーベキューにして食うって言った」

向かい側に座る龍也、その右隣はなのは、左隣ははやてさん。更にその隣にフェイトとなっている

「しっかし、お前芸達者だな。その着物お前が作ったんだろ？」

「ああ、そうだ」

旅館での食事中は浴衣着用が義務付けられているが。龍也達は持ち込みの浴衣を着ていた、なのは白をベースに花の刺繍が入ったもので、フェイトは濃紺に黄色の帯。はやてさんは龍也とおそろいの黒い着物に白い帯、龍也は

「しっかしなぜに背中に春一番？」

「なんとなくかな？」

龍也は黒い着物に紅い帯に加え背中には春の一字。明らかに派手すぎるのだが、なぜか龍也が着ると様になっているから不思議だ。俺はそんな事を考えながら夕食に舌鼓を打っていたのだが、刺すような視線で俺を見る隣のセシリア

（あーやっぱあれか。昼間に約束した事守らなかったからか）

日焼け止めを塗ってやる約束だったが。シャル・鈴・千冬姉の一撃で意識を失った俺が意識を取り戻したのは3時ごろで、もうセシリアは自分で日焼け止めを塗ったと怒っていた、それが原因で不機嫌なのだろう、何か宥める手は無いかと思いきやアイディアを思いついた「なあ、セシリア。代わりといたらなんだけど、後で部屋に来てくれよ」

「あとで部屋に？……それは」

なんだセシリアのオーラが急にピンク色になったような？

「はい、判りました！ あとで必ず行かせていただきますわ♪」

何はともあれ機嫌を直してくれたみたいで何よりだ。そんな事を考えながら鍋を口にする

「うーん、美味しい。この鍋の下味って何だろうな？」

「しようが。山椒、あとは日本酒かな？」

「あーそんなきがするなあ？」

龍也は料理上手なだけあり俺と同じく鍋の下味を考えていた、やはり美味しい料理を食べるとその味付けが気になるものだ、俺はそんな事を考えながら夕食を食べ進めた。ちなみに

「ねえ、シエン。あたし、シャルロットとセシリアを殺したい」

「あ、ははは。ナイスジョーク」

「木刀と金属バットどっちがいいと思う？」

「ははは……鈴ってば冗談がきついなあ？」

「弥生ってメリケンサック持ってたわよね？ 貸してくれない？」

「え……いや、流石にそんなのは持ってないぞ？」

「冗談がきついね。本当。そんな話してないでご飯にしようよ」

「じゃあクリス。アーミナイフ貸してよ」

「持ってない。ラウラなら持つてるかも」

「お願いだから!! 冗談って言ってるよ!! 鈴!! へぶっ!」

「食事中は静かにしろ。ルウ」

「り、理不尽すぎる……」

千冬姉の投げたお椀の蓋が額に直撃し、涙を流しながら崩れ落ちた……ああ！ 数少ない常識人が!?

「やっぱ闇討ちかなー」

鈴の暗殺計画が実行されるかどうかはシエンさんにかかっている、無事に鈴を宥めてくれると良いのだが……

「かんちゃん顔赤いね。何かあった？」

「な。なにも!」

本音にそういわれおろおろしてる簪に

「そう言えばお昼から見ませんでしたね。どこにいたんです？」

「えと。……えと……」

明らかに挙動不審だ。一体何が……

「たつやんと一緒？」

「ち、違うよ!? 龍也君の釣りを見てなんかないよ……あ」

自爆だ。盛大に自爆してる……

「「これは面白い事を聞いたね」」

「はっ!？」

恋話と言えば私にとっても興味のある話。しかも私の意中の相手でもあるわけで……

「これは是非詳しく聞きたいですね、皆さん」

「だね。更識さんは八神君狙いかー。勇者だね」

「うん、勇者」

魔王に挑む時点で勇者認定を受けた簪はおろおろしているが、既に囲まれているので退路はなく。そして夕食後、強制連行後何があったのか説明させられていた。要約すると

1 龍也君の釣りを見ている

2 波の音と余りに釣れないので眠くなってきた

3 気が付いたら龍也君の膝を枕代わりに寝ていた

4 起きた時に笑われ凄く恥ずかしかった

との事。それを聞いた4組の女子はなんて羨ましいといつて簪に詰め寄り。簪は布団にもぐって隠れてしまい出てこなくなった。それを微笑ましい気持ちで見ていると

「えーちゃん。凄く悔しそうな顔してる」

そんな事実は認めませんよ、本音……だがこの本音の発言で私もまた女子に囲まれる事になる……初めて同姓が怖いと思った瞬間でした……

「んあ？　なんだあれ？」

「おろ？　何してるんやろか？」

夕食後ブラブラとはやて達と旅館内に防護結界の術式を刻んでいると、1つの部屋の前で扉に張り付いている。箒達を見つけ首を傾げていると、フェイトがこっそり近付き

「わっ！」

「「?!?!」」

驚き振り返る箒達に近付き

「何してるんだお前ら？」

「んー教員の部屋やね、あーなるほど、織斑先生と一夏の部屋か、なんや一夏が心配できたんか？」

「ばれたら怒られるよ？」

くすくすと笑うはやてとなのはと共に苦笑していると、勢い良く扉が開き箒達がドアに殴られ

「「へぶっ!!」」

10代乙女らしからぬ悲鳴を上げる箒達の前に
「何してる戯けども、それに龍也まで何してる？」

不審そうな顔をする織斑先生に

「いえ、ドアに張り付いていた不審者が気になりました」

「まあ当然だな。ドアに張り付いている不審者が居れば気にもなるだろう」

そう苦笑する織斑先生は

「ついでだ。偶には話でもするか。少し上がっていけ」

箒達にその声を掛ける織斑先生に私は肩を竦め

「私は部屋に戻りますか」

「ほう何故だ？」

そう尋ねてくる織斑先生に

「これだけ女性が密集してる部屋に入れるのは相当な馬鹿か勇者でしょう？　私は残念ながらそのどちらでも無いので。失礼しますよ」

「じゃあ、私達も」

着いてこようとするはやて達に

「偶には同年代の人間と話すのも悪くなかろう？ ゆっくり話して来いよ」

ウインクしながらそう言うとかすりと笑うはやて達に

「では、またあとで私はこのまま外でテントを張っているジェイルと話して来るよ」

私はヒラヒラと手を振り外に出た

「よう、馬鹿元気か？」

「それなりにね。どうだい一杯？」

「未成年に酒を勧めるな戯け」

くつくつくと互いに笑いあい、差し出されたグラスを手に満天の星空を見上げ

「何に乾杯するね？」

「束の間の平穏にだな」

「違うないと笑い互いにグラスをぶつけ合い

「乾杯ツ!!」

偶にはこう言うのも悪くない……と思ったのだが

「ういー。いい加減に結婚したらどうだね？ はやて君になのは君、それにスバルやオットー。同年代から年下まで選り取りみどり……ぐはっ」

酔って戯けた事を言い出したジェイルにリバーブロー↓ガゼルパンチと繋ぎ意識を刈り取り

「全く……こいつは」

気絶しているジェイルをみて苦笑しながら、私は星空を見上げウイスキーを煽っていた

なにこれ……あたしは目の前の光景に絶句していた

「ブラコンと言うのは掛替えの無いギフトだと思うんだ」

「あー判ります、判ります！ 私もおなじ考えですから!!」

ブラコンとはやてが妙に仲良くなっている、さつきからブラコンについて熱く語り合っている2人を見てみると。何かを思い出したようにブラコンが

「そう言えばはやてと高町とテストタロツサは八神のどこが良いんだ？」

そう尋ねられたはやて達は

「んー私は兄ちゃんしか頼れる人居らんかったし。兄ちゃんは優しいし。いいことも私のこと心配してくれるし。良い所しか無いですよ」

「私はあれですね、昔転んで泣いてる時に龍也さんに助けてもらってから好きですね」

「うん。私もそうかな、車に轢かれかけたときに龍也に助けてもらっただよな」

と龍也を如何して好きになったのかを語るはやて達は神妙な顔をして

「でもそれだけや無い、兄ちゃんは誰のかのためにしか生きて無い。それが嫌やから一緒に居るんや」

「何時か龍也さんが自分を愛せるようになるまで」

「龍也が自分の幸福を見つけられるようになるように」

龍也が自分のために生きていない？ 自分を愛せるように？ 自分の幸福を？ 意味が判らず首を傾げているとはやてが

「兄ちゃんは私のお父さんのお兄ちゃんの息子やった。でも兄ちゃんが3歳の時に死んで、兄ちゃんは遺産目当ての親戚に引き取られ、遺産が無くなったら施設に預けられた……兄ちゃんは誰も信じないで死ぬ事を望んでいた、兄ちゃんに会ったのは私が6歳の時、どこまで

もからっぽで、泣きも笑いもしなかった。それが私が始めてあった時の兄ちゃんやった」

今の龍也からは想像も出来ないわね。

「何回も何回も話しかけて、半年くらいでやっと思ったり笑ったりしてくるようになったんや……でもその代わり私の足は生まれつきの病気で動かなくなり始めとった。でもまあ兄ちゃんが笑ってくれ

とるからいいかな？　と思つてたら……今度は交通事故で私のお父さんとお母さ

んが死んだ。私には兄ちゃんだけが家族になつて。兄ちゃんには私だけが家族になつた……」

からつぽの笑みを顔に貼り付け遠くを見るはやての言葉を聞く。

「そつから兄ちゃんは自分の事は何にもし無くなつた、足の動かない私を第1に考えて……遺産目当てで来る腐つた大人に負けないように知識をつけて、私を守るために強くなつた。その日から兄ちゃんの生きる目的は私を守ることだけになつた。自分の夢も何もかも捨てて……」

生きてる、それを見るのが嫌やから……兄ちゃんにも幸せになつて欲しいし……なにより自分のために生きて欲しい。それが私の願いかな」

からからと笑うはやてに筈が

「龍也だつて自分の好きな事をしてるんじや？」

「いや、何にもしてへんよ。私の学費は私の遺産から、自分の学費はアルバイトで稼いで、生活費も全部兄ちゃんだけが働いて。学校のほうは特待生になるくらい勉強して運動も出来るようにして……兄ちゃんの寝てる時間は2時間程度やつた。生きるために必死……いや

……私を生かすために必死やつた。まああんたらには判らんと思ふけどな」

暗い笑みを浮かべたはやてはしんみりした雰囲気のアたし達を見て

「あーべつにへこませようとか考えたわけで行つたわけじやないで？

ただ私のブラコンにはちゃんと理由があるつて事で」

あははと笑うはやては

「んじやさ？　鈴とかは何で一夏が好きになつたんか教えてえな？」

「え、なんであたしを名指しするのよ!!」

逃げようとするがなのはとフェイトに既に挟まれ逃げ道は絶たれている

「はやて、私はそう言うのを聞くのは不快だが？」

「偶にはそういうのを聞くのも良いですよ？ 負けて堪るかと言う黒い炎が胸に灯る感じがして」

「駄目だろ!?! そんな炎は!?!」

常識人(?)の箒がそう突っ込むとなのはが

「嫉妬って強いんだよ？ 箒、こっどす黒い感情が無限の力を……」

嫉妬を強さに変えるのは判るが。それは正直どうかと思う

「そう、殺してやりたいと思う殺意が……魔王に続く道を開く」

「……友達なんですよね？」

セシリアが顔を青褪めさせながら尋ねるとはやて達は楽しそうに笑いながら

「友達やけど……死ねって思ってる」

「大好きだけと大嫌い何だよねえ」

「そうそう、好きだけど嫌いなんだよね」

あはははと笑いあうはやて達、とても笑いながら言える内容ではないと思うのだが？

「と言うわけで、更なる魔王化のススメという事でやってみたら良いやん?」

「私は別に魔王化したいわけでは……」

「私もそこまでする気は」

箒とセシリアがそう言うとなのはが

「じゃあ、シャルロットとラウラと鈴と織斑先生が更に魔王化が進むって事で」

その言葉に暫く黙り込んだ箒とセシリアは

「良いだろう。私もその話を聞こうじゃないか」

「敵を前に退くなんて情け無い真似は致しませんわ」

強い意志の光を瞳に映す箒とセシリアを見ながら。あたしは

「んじゃ。まずあたしからね」

そう前振りしてから話を始めた……夜はまだ始まったばかりだ
……

「あのさ……その捕食者の笑み止めてくれないかな？」

「だが断る」

魔王化のススメ会議終了後に部屋に戻ってきた一夏はライオンも真つ青な笑みを浮かべる。千冬達とエンカウントしダラダラと冷や汗を流していたが。話題を変えれば助かると本能的に理解し

「そう言えばさ！ 都市伝説の黄金の騎士ってどう思う!? 本当にいると思うか?」

ん? と言う顔をした魔王達は

「そう言えば色々聞くな」

「ええ、私も聞いた事がありますわ」

「え? 何あんた達も? あたしも何回か聞いた事あるわ」

「皆も? 実は僕も聞いた事あるんだよね」

「私もだ」

そしてそのまま無し崩れ的に魔王化は解除され、全員で自分が聞いた事のある黄金の騎士の話話し始めた、そして5分後

「で、纏めるとこうなるな」

黄金の鎧もしくはは紅い外套を纏い、緋色の髪を持ち、左目が蒼銀。右目が真紅のオツドアイ

虚空から剣や斧を取り出し大多数相手でも互角以上に戦う。そして弓から剣や斧を飛ばす

龍の様な鎧と翼を持つてるときもある

魔法陣を作り出し、ビーム? を撃つ。天が2つに分かれるほどの威力らしい

「……こんな奴本当にいるのか?」

「「「「さあ……」」」」

一夏達が首を傾げている頃、龍也はくしゃみをしているのだが……それは全く関係ないことなので割愛しておこう

なお、魔王な姉は飲み過ぎで眠っていたりする……

合宿2日目。ISの装備とデータ取りの準備をしていると千冬姉

が

「ああ、篠ノ之。お前はちよつとこつちに来い」

「はい」

打鉄の装備を運んでいた箒を呼び寄せる千冬姉。その直後

「ちーちやーんッ!!!」

砂煙を上げて走ってくる人影。それは間違いなく箒の姉さんの束さんだ

「やあやあ！ 会いたかったよ、ちーちゃん！ それに箒ちゃん」

箒に声を掛ける束さんに山田先生が

「あの、この合宿では関係者以外は」

「ん？ おかしな事を言うね？ ISの関係者といえば私以外の人物はいないよ？ だって製作者だしね？」

からからと笑う束さんに毒気を抜かれた山田先生を見ながら千冬姉が

「おい、束。自己紹介しろ」

「んーちよつと待って、1人話してみたい子が居るんだよね」

そう笑って束さんはするりと千冬姉の横を通り

「君が八神龍也かい？ 初めまして」

そう笑って龍也をジロジロと見た束さんはやりと悪い笑みを浮かべ

「君は君の正義の為に何人人を殺してきたのかな？」

え？ 何を言ってる？ 俺が首を傾げていると龍也は

「さあ？ ここに居る全員の手でも数え切れないんじゃないですかね？ だから私は」

コートの中からサバイバルナイフを抜き放った龍也は束さんの喉元にそれを突き付け

「ここで更に手が血で塗れる事など気にしない」

「ふふ……良いねえ？ その冷酷な目。流星は夜天の……おおう。怖い怖い」

龍也が無言で振るったナイフをばく転で交わした束さん、それは奇しくも千冬姉の近くで

「お前……本当に束か？」

そう尋ねられた束さんはふつふと笑い

「……やっぱりばれた。幼馴染には負ける」

声の感じが変わった、冷たさしか感じないそんな声に思わず背筋を伸ばし、警戒の態勢に入るが当の束さん(?)はカチーシヤを操作していた。すると束さんの髪の色が更に濃い紫になり。髪とは対照的に目の色が薄くなり、着ていたワンピースのスカートの丈が短くなり胸回りの

生地が大きく張る

「……初めまして、織斑千冬。私はアズマ、アズマ・ワンイレイサ。束のお遊びで束の真似をしていた」

白ウサミミを外して投げるアズマと名乗った女性、するとウサミミが飛んだ方向から

「もー。もっと引つ張ってよ！ アズマちゃん!!」

虚空から今度こそ本物の束さんが姿を見せる。2人並ぶと全くの同一人物に見える

「どういうことだ？ 束？」

「んー前にね。どっかの国で束さんと勘違いされて追いかけてまわされたのが、アズマちゃんなのでーす!! はい拍手ーッ！」

「鬱陶しい」

「酷い!? アズマちゃんてば酷い！」

よよよと崩れ落ちる束さんとふんとそっぽを向くアズマ。何だこのやり取り。俺と箒が困惑してる中、束さんとアズマは

「アズマちゃん、ハグ。ハグしてよ」

「断る」

「そ。そんなあ」

そんなやり取りをしていた。アズマの後ろに回り込もうとする束さんとそれを回避するアズマを見ていると

「あの。頼んでいたものは？」

「あ、ああ。そうだね!! それはね既に準備済みだよ! さあ! 大空を見上げてごらん」

束さんが空を指差すと黒い戦車のようなものが落ちてくる

「あ、あれ？」

困惑している束さん、あれじゃないのか？ それから時間差でコンテナが落ちてくる

「ま。まああの戦車は無視して。じゃーん!! これぞ箒ちゃん
専用機「紅椿」！ 全スペックが現存するISを上回る束さんのお手
製ISだよ!!」

紅い装甲に太陽の光が反射して輝くISに見とれていると

「ふいー死ぬかと思った」

戦車からスカリエッティさんが出て来て

「やつ、はやて君。頼まれていた通りISを完成させて届けにきたよ
!! 名付けて「夜風」君の腹黒い感じに合わせて真っ黒に……「死ぬ」
……げふうっ!!」

はやてさんのボディイブローで蹲るスカリエッティさんの上に

「あ。あれ？ 不味いな。私の上にISが……のっぎやあああッ
!!!」

戦車から降ろされたISがスカリエッティさんの上に乗る。その
あまりの重さに悶絶するスカリエッティさんが

「ヘルプ！ ヘルプミーツ!!!」

「やれやれ」

龍也がしやうがないなあと言う感じでスカリエッティさんの腕を
引いて引っ張り出す

「あー死ぬかと思ったよ。内臓破裂で♪」

はははと笑うスカリエッティさん等どうでも良いと言う感じで束
さんが

「じゃあ、今からフィッティングとパーソナライズを始めようか！

アズマちゃん手伝ってね♪」

「判っている」

空中投影型のキーボードを展開し微調整を始める束さんとアズマ

「あとなのは君とフェイト君の搭載できなかった武装も持って来たか
ら。ISを貸してくれるかな？」

戦車の横のボタンを押すと戦車が展開しISハンガーが3つ搭載された研究所に変形する

「夜風は真ん中。右隣に桃花、左隣にライトニングを置いてくれる？
調整始めるから」

鼻歌交じりに準備を始めるスカリエッツィさんに山田先生が

「えーと貴方は？」

「初めまして。私の名はジェイル・スカリエッツィ。ちゃんとIS学園に書類を出してこの臨海学校に参加できるように手筈をしていたと思うが。聞いてないかね？」

「あ、貴方が。はい確かに聞いてます」

納得と言う感じの山田先生を見ながらスカリエッツィさんは

「じゃあちよつと一休み」

研究所の中の椅子に座り

「おい、α。コーヒー」

「カシコマリマシタ」

「二?!」

犬のような機械が変形し二足歩行になり、コーヒーとクッキーを運んでくる

「偉い偉い。さすがαだ」

にこにこ笑いそれを受け取ったスカリエッツィさんを見ていると

「ん？αがそんなに不思議かね？ ただの自立式のロボットさ。誰だつて作れるだろう？」

そう笑うスカリエッツィさんだがそんなロボット聞いた事も見たことも無い。本当は凄い科学者なんじゃ

「ぶふう!? α! これ砂糖じゃなくて塩だ!」

「モウシワケゴザイマセン」

塩入コーヒーを噴出しているスカリエッツィさんを見て、実際のところどうなのか判らなくなった。俺やシャルル達が首を傾げている中東さんは

「ん〜♪ 箒ちゃんまた剣の腕前があがった見たいだね。筋肉の付き

方で判るよ。お姉ちゃんは鼻が高いなあ」

「……」

「あらら。無視されちゃった。束さん寂しいー、だからアズマちゃんハグして」

「嫌だ、きつさと終らせよう」

ちえーと舌打ちした後

「はいフィッティング終了。後はパーソナライズは自動処理で終わるから待っててね。じゃあ、その間にいっくん、白式見せて」

「はい」

白式を展開すると束さんが白式にぶつといケーブルを差し、表示されたフラグメントマップを見ながら

「んー不思議な成長をしてるねえ？ やっぱ一君が男の子だからかな？」

そう呟くのを聞きながら反対側で3機のISを同時にいじっているスカリエツティさんが見える

「ふっふーん♪なのは君のISにはビット兵器と装甲の追加、フェイト君には加速用のウイングとアーマーと一体型のブレードとレールガンを設置して。はやて君フィッティングは終わったから、後1分で動かせるようになるからね？ 後で動かしてみてね？」

束さんとスカリエツティさんは同じくらい頭がいいようだが、全く感じが違う。スカリエツティさんは社交性があるように見える。俺はそんな事を考えながら束さんの白式の操作が終るのを待った……

くハワイ沖の軍事基地く

試験稼動を予定されていた白銀のIS「シルバリオゴスペル」の登録操縦者、ナターシャ・ファイルスが乗り込んだ直後

シルバリオゴスペルのバイザーが紅く輝き。拘束していたハンガーを破壊し翼を大きく広げる

「な、ナターシャ!? 何をしている!?!」

「そ、操作が出来ない!? ほ、暴走……」

シルバリオゴスペルの全身を紫電が走り、その直後ナターシャの首

が力無く下を向く。意識を失っているのは明白だが

「アアアアアアッ!!!」

全身から光を放つシルバリオゴスペルは独りでに稼動し、基地の壁をぶち抜いて何処へと飛び去った

「な……なんてことだ」

茫然自失と言う軍の研究者を冷めた目で見る。赤紫の髪の男は数体のネクロを連れ闇に溶ける様に姿を消した……

第44話に続く

第44話

第44話

(なんとまあ、典型的な力に溺れるタイプだな)

高速で空を舞う真紅の機体を見ながら、夜風の調整を進める。見たところ剣と言う形を取っているが、その本質は重火器に近いものを見ていいだろう。

「やれるー、この紅椿なら!!」

自信満々にそう言い放ち空裂と言う刀を振るう。箒君、どうみてもその威力を楽しんでいるようにしか見えない。これがもし六課所属の魔導師や騎士ならば、龍也に拳骨と説教。さらにはデバイスの没収くらいされてもおかしく無いだろう。

(過剰な力はより騒乱を巻き起こすと知らんのかね? あの手とか言う女は)

確かに天才といえるだけの頭脳を持ち主である事は認めよう、このISコアと言うのは原理こそ違えど、デバイス、それもアームドデバイスに極めて近い特性を持っている。

それを自分で編み出したその科学力には素直に賞賛に値すると思うが、いかんせん人格が歪みきっている。そのような人間とは到底仲良く出来ないだろう

「馬鹿が」

「おや? 龍也も同意見かね?」

吐き捨てるように呟く龍也にそう尋ねると龍也は面白く無いと言う表情で

「あれだけ剣に拘っているのだから、自制心くらいあると期待していたんだが、点で期待はずれだな」

「子供だからねえ」

そう笑い夜風・ライトニング・桃花の調整を終え。空を見上げてみるとふと気付いた。織斑千冬が射抜くような視線で紅椿と束を見ていることに、流石は最強といわれるだけはあるかと思っていたらふと念話で

(ジェイル。アズマを捕捉しているか?)

紅椿の試運転が始まると同時に姿を消した、アズマを名乗る女性……どうにも私達の事を知っている素振りからネクロに關係があるのでは?　と思った人物

(ん。その筈だが……ば、馬鹿な、センサーの反応が無い!?)

気配からして純粋な人間で無いと気付いた私と龍也はアズマにセンサーをつけていたのだが、その反応が無い

(なるほど、どうやらあいつらはある程度、私達の事情を知っていると
言うわけか)

(そのようだね、油断したよ)

龍也の推測ではネクロ側についているこの世界の人間が居るとの事だが、どうやらあの2人は限りなく黒に近いと見ていいだろう

「どうだい?　束さんの渾身の力作の「紅椿」とお前の「夜風」だっけ?
?　性能比べして見る?」

挑戦的な顔でそう尋ねてくる束に私は

「必要ない」

「あ、やる前に負けを認めるのかな?　やっぱ束さんは天才」

嬉しそうに笑う束に

「比べる価値も無い、操縦者に力が何たるかを忘れさせるような不様な機体と夜風は全く違う、勝ち負け以前の問題だ」

箒君とはやて君では、覚悟が違う、信念が違う、性能は見たところ互角か少し夜風が劣るかどうかだが、操縦者の錬度の差が出る。比べるまでも無い

「言ってくれるね」

怒りに顔を歪める束を無視して、

「はやて君。夜風のテストを頼むよ」

「うん」

夜風を展開するはやて君

「どうかね?」

「んーデザインが微妙」

「酷いッ!?　気に掛けるのそこ!?!」

性能は間違いないく一級品のはずなのだが、見た目を気にすると予想外だ

「まあ良い感じそうやけどな」

足回りと背部装甲はレーゲンをモチーフにし胴体及び腕部装甲はラファールを参考にした。カラーリングは黒を基調に銀のワンピーストを入れた。

「じゃあ武装テストね。ターゲット出すから宜しく」

ガジェットを4機射出する

「プログラムは単純だけど、攻撃してくるからね」

「オーライ」

飛び立つ夜風をモニターしながら

(さて、見て頂こうか。自称天才の愚か者さん)

鋭い眼光で夜風を睨む束を見ながら私は夜風のデータをとり始めた

(んー鈍いな)

デバイスと比べるとどうも反応が鈍い。まあこの程度は誤差の範囲やけど煩わしい

「ピピッ!!」

センサーアイを光らせるガジェットの横をすり抜ける。攻撃態勢に入るガジェット4機を見て

「遅いで」

コールしたビームライフル「ナハト」の照準を合わせ、6連射する
「!?」

センサーアイを失いおろおろするガジェット目掛け瞬時加速に入ると同時に、両手足の装甲からビームエッジを作り出す

「黄泉舞い……」

ガジェットの武装と推進装置だけを通り抜けざまに破壊する。推進力を失い地に落ちるガジェットと今の私の機動を見て驚くI S学園の生徒を見ながら

「つまらへん。反応鈍すぎ、もうちょい数出して」

反応テストにしても鈍すぎ話にならん

「じゃあ次14機ね」

「オーライ」

今度は14機浮かび上がるガジェットを見据え

「ほいー!」

両手の指の間の呼び出した投擲用ダガーを回転しながら放つ

「んでもって」

明後日の方向に飛んでいるダガーの進路に重なる様に更に6本投擲する

「チェック……」

ダガーとダガーがぶつかり進路を変える。ガジェットの背後に殺到する刃を見ながら

「メイトツー!」

手を閉じると同時にダガーが背後からガジェットを刺し貫くが

「あちやーミスったな」

14機の内撃墜は6機、思いの他IS型と言うのは反応が鈍いよう
だ

「じゃーしゃーないな」

音を立てて射出される4機のビット

「ビット!?!」

驚くセシリアだが、マルチタスクが基本の魔導師にとってはそんなに珍しい武器ではない

「逃がさへんで……いけっ!!」

ビット4機の同時操作に加え両手に実弾銃「ノワール」を呼び出し、同時多角射撃でガジェットを打ち落とす

「んーまあこんなもんかな?」

そう呟いているとスカリエッティさんが念話で

(悪いが、ここで機体トラブルの振りして墜落してくれるか? まだ調整中という事にしたいんだ)

(了解、その代わり兄ちゃんに抱きとめるように言っただろ?)

(言われなくともだ。判ってる)

念話に割り込んだ兄ちゃんに笑みを零し

「ツとと」

幻術で足と腰回りのブースターから火花を出す

「むっ!? 流石に調整不足だったか!」

慌てる演技をするスカリエツティさんが領いたタイミングで夜風を解除する

「「きゃあああッ!!!」」

悲鳴を上げる生徒。まあ空中で突然IS解除になったら、悲鳴ものだ……地面に向かって落ちていく途中で箒がこっちにくるのが見えるが。そんな必要は無い、何故ならば……

地面に叩きつけれる前に横抱きで私を抱きとめてくれる人が居るのだから

「大丈夫か?」

「おおきに♪」

よつと兄ちゃんの腕の中から下りて、待機状態の夜風を振りかぶり

「欠陥品やないかいっ!!!」

「ごふっ!!!」

全力で投げつけた。演出としてはこんなものだろう

「大丈夫?」

「しかしはやて、悲鳴とか上げなかったわね? なんで?」

駆け寄って尋ねてくるシャルロットと鈴に

「だって兄ちゃんおるんやし、心配することなんてなんも無いもん。

兄ちゃんが絶対助けてくれるって判ってるから♪」

凄いい信頼関係と眩くシャルロットと鈴を見ていると

「け、ケガは?」

「大丈夫です、でも少し休ませてもらいますね」

山田先生に許可を取り、私は少し離れたところで休み始めた……

いやー痛いね。全力で投げられた夜風の待機形態を再度PCにセツトし、調整し直している振りをしていて

「たつ、た、大変です！ お、おお、織斑先生ッ!!」

切羽詰った山田と言う女性の声がする、それを聞いた私は

(どうやら、動いたようだね。ネクロが)

ネクロもしくはネクロと協力関係にある、何者かが動いたと判断した私は

(警戒と索敵の魔法を展開しておくか)

キーボードを叩き魔法を展開したところで

「スカリエツティとやら、その3機のISは使用できるのか？」

そう尋ねられ私は顎の下に手を置き

「不可能だ、現在調整の第2段階だ、碌に動かぬ機体を使用させるわけにはいかない。それに夜風はさっきの有様なんでね、そんな機体を実戦に出す事は科学者として認められない」

本当は使用できるが、使わせない。何か裏があると見て間違いない状況ではやて君達をこの旅館から遠ざけるのは得策とはいえない。

「ばーか」

ただ、あの間抜け面してるウサミミ女は物凄く腹が立つが、我慢する

「判ったならば。織斑、オルコット、デュノア、ボーデイヴィツヒ、風、龍也、更識、ファウスト……それと篠ノ之も来い、呼ばれなかった専用機持ちは教員の指示に従い。いつでも出撃できるように準備！」

その他の生徒はISの装備を撤収後、旅館の自室で待機！」

てきぱきと指示を出す織斑千冬。その指示の早さは中々のものだ。評価に値する

「では解散！ これ以降許可無く室外に出たものは我々で身柄を拘束する！ 良いな!!」

その一喝に身を竦め走っていく生徒を見ていると

「申し訳ないですが、一時貴方を拘束することになります。宜しいですか？」

「ふむ、何があったかは知らんが、構わんよ。私はなんにもやましい事はして無いしね」

恐らくはISの暴走、確か軍用用のISのテストがあったはず、そ

れに関連している可能性があると言うことだろう。両脇に立つ教員2人に連れられ私は旅館にへと向かった

「2時間前。ハワイ沖で試験稼動にあつた軍用IS「銀の福音」が制御下を離れ暴走している」

行き成りの説明にほうけていると俺と箒を除いたメンバーは厳しい顔付きで説明を聞いていた

「その後、衛星による解析の結果。福音はここから2キロ先の空域を通過することが判明した。よって我々がこの事態に当たる事になった。教員は学園の訓練機と機動性に劣る、神武・死線の紅・グロリアス・ヴィクトリーそして調整中のヤタガラスは教員の指示に従い、海域の封鎖に回る。そして高町・ハラオウン・はやてはこの場で教員と共にデータの分析に回ってもらう。そしてその他の専用機持ちは銀の福音の鹵獲に回ってもらう」

はっ？ 俺達が暴走したISを止めるって事か？

「それでは作戦会議を始める。意見がある者は挙手を」

その言葉に真つ先に手を上げたのはクリスさんだった

「目標ISのスペックデータ及び武装データの開示、更に暴走時に幾つか武装を使用したはずです、その武装による被害を教えてください判った、ただしこれらのデータは最重要軍事機密だ。決して口外はするな。もし情報が漏洩した場合、諸君らには査問委員会による裁判と監視が付けられる」

「了解しました」

クリスさんが頷いたところでモニターに情報が開示される

「基地の被害は研究所の周囲含む2ブロックが半壊ですか、龍也さんはどう見ますか？」

「ミサイル、もしくは着弾と同時にエネルギーを炸裂させるタイプの射撃兵器と推測されるが、どう思う簪は？」

「被害映像に火薬等の爆発痕が無いから、ミサイルじゃないと思う」

武装に関する分析を始める龍也とクリスさん。そしてシャルル達

は

「攻撃・機動に特化したタイプね、スペック上では甲龍よりを上回っているから、エネルギー切れは期待できないわね」

「それに龍也達の解析によると相当火力が高そう。丁度本国から防御用のパッケージが来てるけど。連続しての防御は難しそうだね」

「格闘戦のデータは無いのですか？　もしくは威力偵察は？」

ラウラの問いかけに千冬姉は

「可能だろうが、もしその偵察でこの海域から離れられたら不味い、一度のアプローチで確実に仕留める必要がある」

「となると、可能なのは。一撃必殺の破壊力を持つISに限られますね」

俺と龍也を見る山田先生

「織斑君の零落白夜。もしくは八神君の木花咲耶を使うしかないですね」

え？

「となると、どうやって一夏と龍也をそこまで運ぶか、だね」

「エネルギーを全て攻撃に回すと全てのエネルギーを温存させなければ成らない。それに目標に追いつける速度を出せて、補足できるセンサーを搭載できる機体となると、パッケージつきのISしか無いだろう？」

俺を置いてドンドン話が進む、ことに焦り俺は

「ちよっ、ちよっと待ってくれ！　お、俺が行くのか!？」

「お前か龍也になる。お前がいやならまだ傷が完治していない、龍也に頼む事になるな」

前の黒い悪魔の一件での傷は完全に完治していないと龍也は言っていた、あまりに激しい運動をすると傷が開くとも。ならば……

「やります！　俺がやって見せます」

前は龍也に救われた、ならば今度は俺の番だ

「よし、では具体的な作戦に入る。現在の専用機でもっともスピードが出るのは？」

「私のブルーティアーズが最高速度です。更に本国から強襲用のパッ

ケージが送られてきていますし、超高感度センサーも搭載しています」

セシリアが作戦に立候補したところで、束さんが乱入してきて紅椿のスペックならパツケージなど必要ないと熱弁を振るい、30分で準備を終え出撃できると千冬姉に語って聞かせ

「判ったでは、織斑・篠ノ之の両名と念のためにフォローとして更識・龍也の計4名で作戦に当たってもらおう」

「えーちーちゃんといっくんだけで充分だよ」

不満そうに言う束さんを無視した千冬姉に龍也が

「恐縮ながら、その作戦には賛同できません」

「ほう、なぜだ？」

千冬姉に睨まれた龍也はモニターの隅を指差し

「ここを拡大してください」

言われたとおり山田先生がそこを拡大すると

「なっ!？」

トーナメント時に乱入してきた黒い悪魔の姿がはつきりと映し出されていた

「もしも奴らが居た場合、4名では離脱すら困難、最低でも逃亡用の支援の役割をしてくれるIS、エネルギーを使い切った白式を運べるだけパワーのある甲龍・加速力に長けるブルーティーズ。離脱までの殿を勤める者。これは私が引き受けるとして。更に最短ルートでの逃亡をサポートしてくれる人物。この場合判断力・及び戦況判断に長けた、クリス・ファウストを追加して最低でも7名の人員が必要となります」

堂々と言い切った龍也に束さんが

「でもさー、ここに映っているのが銀の福音と行動してるとは限らないでしょ？ 他のメンバーの準備中に海域を突破されたら意味無いじゃん。だから君の発案は全却下だよね！ ちーちゃん？」

「確かに束の言い分は判る、だが龍也の言い分も判る、だが全員が準備している時間は無い、凰のみを支援としてつかせる。増設のプロペラントタンクを2基搭載して、作戦に参加しろ」

龍也の言い分を却下した千冬姉、龍也は何も言わなかったが、明らかに反抗的な色を目に宿し

「判りました、では私は簪と海岸で待機してます、一夏と箒それに鈴の準備が終るまで衛星によるデータを元に逃走経路を考えたいので、クリスを連れて行っても宜しいですか？」

「却下だ、ファウストはここで解析に回ってもらおう」

「またも自身の意見を却下された龍也はそうですかと呟き。千冬姉から背を向けて作戦室を出て行った」

紅椿の背に載る白式を見ながら、私は鈴と簪に

「良いか、もし黒い悪魔が出た場合、私が殿を勤める。私のことは無視して自分達だけの帰還を考えろいいな？」

「あんたはどうすんのよ、その場合」

鈴のその問いかけに

「心配無用だ、インフィニティアならエネルギーも加速力も充分だ、お前達の脱出するまでの時間を稼いだら離脱する」

「大丈夫なの？」

心配そうな簪に

「問題ない。良いな？ 覚えておけ」

私だけならどうやっても逃げられる、問題は一夏達をどう逃がすかだ。安全に離脱して貰うためには私が囹になればいい

『では、始め!!』

織斑先生の作戦開始の合図を聞いて、真っ先に飛び出す紅椿、その後甲龍、式式、私と続く。作戦では認識範囲外で待機しろと念を押されたので、最悪のケースになるまで動く気は無い。

(私の思い過ぎしならいいんだがね)

だが私の感は良く当たる、特に嫌な予感はずによく当たる。それは今回も例外とは言えなかった。一夏と箒は銀の福音の機動に翻弄され、苦戦こそしていた物の良い連携を組み追い詰めていた居た。これなら何の心配も無いと思っただ瞬間それは起きた。福音が全砲門を開

き全方位に向けての一斉射撃を放つ。箒はそれを回避し福音の懐に飛び込む。そしてそこで一夏の攻撃が当たれば戦況終了と言う場面で、一夏は下の方向に向かって瞬時加速を行った

「何やってるのよ。一夏は!?」

「ちっ！ 密漁船だ!!」

海面に浮かぶ船。ちいつ!! 愚図どもが！ 自分らの仕事くらいちやんとしろ！

「馬鹿者！ 犯罪者などかばって！ そんなやつらは!!」

「箒!!」

箒の言葉を遮って叫ぶ一夏、そしてその直後周囲に張り巡らせていたセンサーに反応が2つ、両者ともLV4クラス

(くそっ!! やはりか!!!)

私の予想では銀の福音の撃破、もしくは作戦の失敗時に仕掛けてくると踏んでいたが。正しくその通りの展開だ

「鈴、簪！ 一夏達と合流する！ その後は言ってた通りにしろ!!」

2人の返事を待たず、警告する本部の連中の指示も無視して。私は福音が居る空域にへと飛び込んだ

「箒！ そんな……そんな寂しい事は言うな！ 言うなよ……力を手に入れた途端周りが見えなくなるなんて……どうしたんだよ、箒。らしくない、全然らしく無いぜ」

もう作戦は失敗だ、後方に待機している鈴たちと合流して撤退するしかない。だがこれだけは言わなければならない、らしくないと

「わ、私、は……」

箒が顔を手で覆い隠した瞬間、虚空から

「ははははっ!! 滑稽！ 実に滑稽！ 力を手に入れ周りを見えなくなるとはなんと不様な事か！」

「趣味が悪いぞ、ヴォドウン」

カソツクの男と剣を構える男が、何も無い空中に浮かびニヤニヤと

俺と箒を見ていた。そして攻撃態勢に入っていた福音は空中で片膝立ちとなり。カソツクの男の後ろに回る

「な、なんだよ！ お前らはッ!!」

ISも無しに空中に浮かぶなんてあり得ない、俺が雪片を構えながら叫ぶと

「私ですか？ 私は貴方達が黒い悪魔と呼ぶ者ですよ、そのような無粋な呼び名は大変に不快です。我らの名はネクロ。覚えておきなさい、憐れな人間」

「余計な事をベラベラと喋るな」

「は？ 黒い悪魔？ 冗談だろ？ 俺がそう考えているのに気付いたカソツクの男が」

「では証拠を」

パチンと指を鳴らすと虚空から次々と黒い悪魔が姿を見せ、翼を羽ばたかせる

「そしてこれもまた証拠です」

カソツクの男が被っていた帽子を脱ぐ、それと同時に顔がしつかりと見え、思わず後退した、男の瞳孔は縦に割れ人間の物ではなかった

「ほ、箒、に、逃げる！」

「え」

駄目だ、箒だけでも逃がさなければ、もう直ぐ龍也達が来る。だがそれが間に合うとは思えない。震える手で雪片を構える。ぶるぶると剣先が震えるみつもないくらいに震える身体。でも視線だけは決して逸らさず抵抗の意思を示す。

「で、でも一夏は……」

「良いから！ とつとと逃げる!! 馬鹿やろう!! 死にたいのか!!」

箒を突き飛ばし両手で剣を構えながら

「逃げてくれ、少しくらいなら時間を稼げる。 龍也が来るまで粘れば俺も助かる。だから行け、箒」

にやにやと笑うカソツクの男と鋭い眼光を向ける赤紫の髪を持った男を威嚇しながら、再度逃げるように言う

「……す、直ぐに戻る!!」

背中を向けて後方に向かっっていく筈に一安心し

「こっから先は通さねえ」

ブルブルと震える切っ先を向けると

「興味が沸いたぞ、小僧。少しばかり遊んでやろう」

肩を半分まで隠すアンダーウェアを身に着け。両腕にガントレットそして、漆黒のサツシユで武装していた男はニヤリと笑い

「ペガサス・ダウンフィールド。小僧貴様の名は？」

「織斑一夏!!」

その気迫に飲まれないように叫ぶと

「そうか、では1分くらいは粘って見せろよ」

ペガサスの身体を炎が覆い隠し次の瞬間には、漆黒のフルスキンに見えるISを身に纏ったペガサスが腰の鞘から片刃の西洋剣を抜き放ち切りかかってくる

(止めれる!)

確かに早い止めれない事は無い。雪片で受け止めようとした瞬間

「え?」

「戯けめ」

剣が雪片をすり抜け白式の装甲を切り落とす

「な、!?!」

「ほら、ドンドン行くぞー!」

嵐の様な連撃を防ごうとするが大半は俺のガードをすり抜け白式の装甲を引き裂き。偶に防げれたと思つた一撃は

「がっ!?!」

受けたそこからとんでもない衝撃が走り、身体の中から破壊されるような激痛が走る

「つまらん。興奮めにも程がある」

「まあ、たかが人間、それが限界でしょう?」

もう俺に興味など無いと言いたげなペガサスに

「黙れよ、俺は、俺は……仲間を護るんだよ!!!」

俺がそう言つて振るえる手で剣を構えると

「護る？　貴様が言っても軽い戯言にしか聞こえんよ」

「んだと!!　がっ！　ぐあっ!!」

劍の柄による打撃と振るわれる拳を避ける事も出来ず無防備に喰らい続ける

「吼える事しか出来ず！　俺に何の手傷も負わせる事が出来ない貴様が何を護れる！　どうせ何も護れず!!」

「がっ!!」

鳩尾に突き刺さった膝蹴りに視界が歪む

「涙するだけだ！　ならば貴様はここで死ね!!」

俺を両断しようとする振るわれる剣を

「うっせえ!!」

「!!」

渾身の力でそれを弾く、するとペガサスが初めてその顔色を変えた、まるで信じられない物でも見たかのように

「貴様何をした？」

「ああ……何もしてねえよ」

ただ渾身の力を込めてあいつの剣を弾いただけだ

「そうか、まあ良い、どうせこれで終わりだ!!」

心臓目掛け放たれる突き。避けるのも防衛も間に合わない

(箒はちゃんと逃げれたよな？　それとごめん……千冬姉、俺もう死ぬみたいだ)

自分でも驚くくらいあっさりと死を受け入れ、目を閉じた瞬間

「諦めるのが早いぞー」

その声と共に鋭い金属音が響く、目を開くと龍也がペガサスの一撃を防ぎ俺を護るように立ち塞がっていた。

「一夏!!　逃げるわよ!!」

「こっち!!」

鈴と簪さんが来て、鈴が俺を掴み後退していく、

「お、おい！　龍也はどうするんだよ!!」

あの化け物相手に1人で残すなんて

「うっさい!!　あいつの命令よ!!　一夏を回収してとつと逃げろっ

て!!」

悔しそうに唇を噛み締める鈴、鈴だつて納得しての撤退では無いんだ

「ごめん」

「いいから掴まってなさい、簪も！ 瞬時加速するわよ」

「うん!!」

俺は鈴と簪さんに連れられ、この空域から離脱していった……

「よし！ 簪に追いついた、後はそのままセシリアとシャルロットと合流して旅館に戻るわよ」

そう言う鈴、俺は今胸を甲龍のごついでて掴まれ、まるで海で溺れたのを救助されるかの形で運ばれていた。だがそのせいで見てしまった。空中を駆けて来るカソツクの男と福音の姿に、男は俺と目が合った瞬間にやりと笑い、腰に何かの機械をセットしそれにメモリのような物を差し込んだ。そして次の瞬間男の姿は異形にへと姿を変えていた

(やばい！ やばい！ やばい!!)

脳の中に警報が鳴り響く、とにかくやばい、俺は鈴の腕から強引に抜け出し。そのまま瞬時加速に入った、全てがスローモーションの世界で俺は見た。こつちに向かつてくるセシリアとシャル、ラウラ。必死な表所で喋る簪。驚きに顔をゆがめる鈴、そして

【プロヴィデンス マキシマムドライブッ!!】

機械合成音と共に何かのエネルギーが収束していく、異形の手の中の銃。そして何もかもが腐る嫌な臭い。その銃口の先は簪、俺は瞬時加速のまま簪を抱きしめ身体を反転させる。その瞬間、全ての時間が元に戻った……背中で何かが爆発したような激痛に

「がっ!!」

そしてそこから身体がバラバラになるような痛み、魂が軋むようなそんな感覚。何が起こったのか理解していない簪と目が合う、涙に濡れた頬と赤い目……

(何泣いてるんだよ。らしくねえな……あ、リボンが焼けちまってるな。ふーん……髪を下ろしたのも悪くねえなあ)

「一夏ッ！ 一夏ッ！ 一夏あッ!!!」
「う……あ」

世界が揺れる、もう駄目だ、意識が途切れる……でも護れた、箒だけは。セシリアとシャルルが必死に手を伸ばしてくるのが見えるが、もう俺にその手を掴むだけの力は無く。

「一夏ッ!」

向かってくるシャルルに目掛け、最後の力で箒を突き飛ばし、俺は頭から海面に叩き付けられた。海面越しに見える異形と福音の姿を見ながら、俺の意識は闇にと沈んだ……

「……」

海岸で龍也君が残っているであろう空域を見つめながら、さっきまでの騒動を思い返していた。旅館の近くで黒い悪魔、いやネクロに追いつかれ背後から撃ち抜かれた織斑君を回収したが、信じられない現象が織斑君を襲っていた

「な、なんだこれは!」

背中・両腕・そして顔が腐り始めていたのだ。どす黒い煙を上げて広がっていく傷、そして

「があああああッ!!!」

喉も裂けんばかりに絶叫し、暴れる織斑君。暴れるごとに血が噴出し傷が広がる。それを織斑先生を中心に無理やり押さえ込み、鎮痛剤と麻酔薬で眠らせたのがつい30分前。そして魂さえも抜け落ちた表情の篠ノ之さんと、掴めなかった手を柱に打ち付けるデュノアさんとオルコットさん。そして織斑君が横たわったストレッチャーに縋りつき泣き崩れる、凰さん……皆が取り乱している中

「作戦は失敗だ、次の作戦が決まるまで会議室で待機している」

そう言って部屋を出て行く織斑先生、ここであえて冷たく突き放されたことで冷静になった……だが暗い雰囲気は消えることなく解散となり。私は海岸で龍也君が戻ってくるのを待っていた。

「簪」

「エリス……」

缶コーヒ―を持って来てくれたエリスと一緒に近くの流木の腰掛け

「失敗の上に織斑君は重傷。専用機持ちの大半は茫然自失、福音はネクロと共に姿を消して。全部から回りだったね」

もし龍也君の意見を聞いていたらまた違った結果があったのかもしれない。でもそれはもう後の祭りだ……これからどうなるかが重要だ。そんな事を考え空を見上げると

「やれ……やれ、流石に骨が折れたな」

被弾し装甲も輝だらけのインフイニティアがふらふらと飛んでくる、それをみて携帯で即座に教員に帰還したと伝える。龍也君は砂浜に着地すると同時に装甲は粒子となり消え

「すまん……あ……とは任せた」

ゆつくりと倒れこんでくる龍也君をエリスと共に受け止めようとするが、支えきれない。多分あれだISの最終防衛機能、それで意識を失ったに違いない

「無理に動かすな！」

その声と共に龍也君を支える腕、白衣が血に汚れるのも気にせず受け止めたのは、スカリエツティさんだった。ゆつくり龍也君を寝かせ手際よく手当てをする、それは本職の医者と大差ない

「これでも医師免許と教員免許を持つてるんだ、手当てなんて朝飯前さ。よいしょ」

包帯で止血した龍也君を担いだスカリエツティさんの元に先生方が来て

「彼の手当ては私たちが」

「断る。龍也とは10年来の付き合いだ、それに龍也の血液型は特殊でね、普通の人間じゃ輸血すら出来ないよ。ちゃんと用意して来る。だから貴方達にできるのは手当て出来る場所を提供してくれるば良い」

そう言つて歩くスカリエツティさんに

「しかし」

「黙れ。龍也を見れるのは私だけだ」

「そうね、確かに前に見たときにそれは実感したわ」

ツバキさんだ、前にそういえば手当てするのも苦戦したって言うってたっけ

「龍也君が寝れる部屋を用意して、ここは彼に任せましょう」

「どうも、話が分かる人がいて助かりましたよ」

そう笑うスカリエツティさんを先導して歩くツバキさんを見てみると。ツバキさんが振り返り

「自室待機よ、いくら心配でも命令は護って頂戴」

「は、はい」

笑っているが目が笑っていないツバキさんに震えながら頷き、走って自室にへと戻った……

「ずいぶんとやられたな？」

「黙れ」

目を開くなりそう笑うジェイルに

「予想も無い攻撃をされた、あれを見たのは久しぶりだ」

身体を起こす。治療で痛みは無い直ぐにでも動ける。投影した剣を爆破し、その隙にペガサスの胴を一閃したまでは良かったのだが（鋭い一撃だった）

フラッシュムーブ……いやおそらくは違う、何らかの体術だろう。それで二閃めを回避し反撃に放たれた袈裟斬りの一撃をkarouうじて回避したが肩から脇にかけて斬られたが、その瞬間投影した剣を上空から降らし、切っ先がペガサスの肩に刺さったタイミングで爆破し。その勢いで離脱してきたが。ISに外見を似せたデバイスではやはり全力は出せなかったようだ

「何を見たんだ？」

黙り込んでいる私にそう尋ねてくるジェイルに

「ふー思わず我が目を疑ったよ」

幻術で自分のコピーを作り布団に寝かせ、代わりに自分に掛けていた幻術を解除しリミッターであるブレスレットを外す

「リミッターが無くても苦戦は必須だった」

「だから何を見たんだ？」

そう尋ねてくるジェイルに私は

「ペガサスとか言うネクロの剣は……」

そこまで言って黙り込んだ、確証が無いし余計なことか。

「どうした？」

「気にするな、思い過ぎしだ。はやて達は」

姿の見えないはやて達のことを尋ねると

「作戦室に籠りきりにされてるよ、可哀想にねえ、本来は自分達が立案を聞く側なのに」

はやて達は恐らく怪しいという事で監視下に置かれたのだろう、ジェイルも同じくそれにこの部屋には監視カメラもある、まあ幻術で誤魔化しているのだから事はないが

「そう言うな、所で一夏は」

私がそう尋ねるとジェイルは気まずそうに

「ヴオドウンの腐敗の教義を喰らっている……」

「侵食度は？」

腐敗の教義、ヴオドウンが持つ特殊能力。ヴオドウンと闘い、自身もまた死に掛けになりながらも、陸戦魔導師達が必死に持ち帰った。破壊されたデバイスと証言によって判明した。余りに凶悪な能力、触れた物をすべて腐敗させる力……無機物だろうが有機物だろうが関係なく腐敗させる。そして傷は徐々に広がり最終的には全身が腐敗し骨すら残さず死に至る。

「75%、後1、2時間で死ぬ」

ヴオドウンの腐敗の教義から逃れる手ははっきり言っていないに等しい……腕とかだけなら切り落とせば助かるが、70%とならば死に至る

「一夏の生命力に賭けるか」

「何をする気だ」

呼び止めるジェイル。研究者として医者として私がやろうとしていることに気付き止めたのだろう。

「白式にデバイスコアを埋め込んで、私の魔力で一夏の生命力を活性化させる」

「下手をすれば拒絶反応で死ぬぞ」

一夏にはリンカーコアは無い、成功する確率の方が低い……だが「何もしなくても死ぬんだ、なら一割でも一夏が助かる方法に賭けて見よう」

分の悪いかけにも程があるがなと肩を竦めて、窓の外を見る

「あの馬鹿どもが！」

飛び去るISの気配がする。数は……5機……いや待て。それを追うISの気配が4つ。誰だ？ 意識を集中させて気配を探る

(簪とエリス……それにヴィクトリアとクリス)

シエンと弥生は恐らく誘わなかったのだろう。いや、シエンと弥生は誘えなかったというべきだな。あの2人は中々頭が固い命令違反をすると知れば直ぐに先生に報告すると判断したのだろうか……ネクロしかもLV4相手にISが9機居た所で勝率は2割あれば良い所。直ぐに追いつかなければ……

「ジェイル、私も直ぐに出る」

「了解、上手く誤魔化しておくよ」

まずは一夏の蘇生と箒達の後を追う、やる事が多すぎだ。だが……「護って見せるさ」

手の届く全ては救ってみせる。それが私の生きる意味だ

第45話に続く

第45話

第45話

「酷い物だな」

一夏の体を覆う腐食を見て顔を歪める。侵食度70……魔導師でも死ぬか生きるか？ という瀬戸際。そして一夏は魔導師ではない生存率は0と言つてもいいだろう

「な!? や、八神」

「失礼」

見張りの先生の首筋を叩き昏倒させる。今騒がれると不味いので不本意だが仕方ない

「……ぐ、うううう」

「抗うか。良い根性してるぞ。お前」

意識が無いながらも戦うという意志を見せる一夏にそう声を掛ける、天雷の書に記録されたデバイスを取り出そうとしたところで

「! ふっふふ……そうか、お前が助けたいというのか」

開かれたページから剣型デバイスが具現化し、そのままコアだけの姿に変化する

「良いだろう。お前が助けてやれ……この世界の希望をな」

デバイスコアが粒子となり待機形態の白式に吸い込まれるようにして消える

「あとは……耐えろよ」

一夏の頭に手を置き、白式の中のデバイスコアに強引に魔力を通す
「ぐ……ぐがあああああッ!!!」

魔力と腐敗の教義の苦痛に絶叫する一夏に

「ではな……死ぬなよ」

このままではどうせ死ぬ、ならば1%でも生き残れる可能性を与えてやる。

「戦え。でなければ……生き残ることなど出来はしないぞ。一夏」

後は箒達だ、戦闘は既に始まっている。直ぐに追いつかなければ、

私はそう判断し一夏の眠る部屋を後にした

「敵反応……1シルバリオゴスベルと断定。更に周囲にペガサス。ヴオドウンと名乗るネクロの反応はありません」

クリスの報告を聞きながら、簪とエリスに

「戻るなら今だぞ？」

「ここまで来てそれは無いですね。と言うかほぼ強引に連れて来た簪が可哀想です」

ど、どうしてこんな事にとプルプル震えている簪。そして私を連れて来たクリスにそう言うのと

「必要な戦力。遠距離特化かつ、高威力のミサイルポッドを搭載した式式は必要だった。エリスは近距離に強いので必須。そしてヴィクトリアは遠近万能なので必要だった」

クリスは戦闘用に意識を切り替えたのか淡々と語る。軍人にとってこういう意識の切替は必須技能だ。心は熱く頭は冷ややかに。これが戦闘の基本だ

「気持ちには落ち着いたか？」

「ああ、大丈夫だ。多少頬は痛いかな」

そう笑う箒。確かにあれは強烈だったと思う。一夏の眠る部屋の前で落ち込んでいる箒をグーパンで殴り飛ばし全力フルスイングのビンタを叩き込み。更に発破を掛ける為の罵倒。と言う見事なコンボを披露した鈴は

「殺す……殺す……殺す」

瘴気を撒き散らし、エンジン全開だ……敵の陣営が判れば今すぐにも切り込んでいきそうな雰囲気だ。まあ

「……………」

無言で武装およびパッケージの点検をしているシャルロットも、やばそうな感じだが。まあ大丈夫だろう

「言っておくけどラウラ。ネクロタイプ出現時しか私達は動かないよ

？」

「構わん」

一夏を撃墜される切っ掛けとなったシルバリオゴスペルを落とす為に命令違反をしてきた。クリス達はいざと言うときの離脱援護もしくは勝手に出撃した私達を連れ戻す為に来た、と言えはなんとでも言い訳出来る(殴られる可能性はあるが、そこまで酷くはないと思う)「か、帰りたい」

「頑張れ」

簪は殆ど拉致に近い感じで連れて来た。エリスはそれに気付追いかけてきた。計画通りに来ている、
「では作戦通り配置についてくれ」

その言葉に頷き散開する箒達。箒と鈴は海面近くで奇襲のタイミングを待ち、セシリアとシャルロットはステルスモードで待機。私は海面近くで休んでいるシルバリオゴスペルの注意を引く。そしてそこから作戦決行だ……

真剣な表情で作戦を話すラウラ達を上空から見つめる4つの瞳、ペガサスとヴォドウンだ

「こんな簡単なステルスで誤魔化せるとは予想外です」

「魔法と科学の差だろうか？」

確かにISの性能は素晴らしい、だがネクロにとっては子供の遊びと同意義だ……

「しかし、負傷とは珍しいですね？」

「黙れ」

ペガサスの胸には一文字の切り傷と肩から脇にかけての裂傷があった

「相打ちだった……いや、俺の負けか」

「流石は守護者と言うべきですね」

やれやれと肩を竦めたヴォドウンは

「さて、勇ましいお嬢様方。早くシルバリオゴスペルを撃墜してくださいね。全てはそこからです」

ふふふと笑うヴォドウンと傷を癒しているペガサスはつまらなそ

うに鼻を鳴らし、沈み始めた太陽を見ていた……

「……は……」

俺は気が付いたら砂浜を歩いていたら。聞こえる波の音は知らずの内に俺の心を穏やかな物にしてくれる。

「ん？ 誰か居るのか？」

聞こえてくる歌声に導かれるように歩き出した。暫く歩くと一人の少女が歌いながら……跳ねるように踊っていた。白いワンピースの少女、彼女の歌はどこかで聞いた事があるような気がして、とても落ち着いた気分にしてくれた。俺は近くの流木に腰掛けその歌と踊りを見ていると

「傷つくのは怖い？」

凜としてそして透き通るような声がして驚いて隣を見ると。黒いゴスロリ服の少女がいつの間にか隣に座っていた

「護ると言うのは聞こえがいい。でもその反面誰かを……傷つけ、何かを壊す事と同意義。護ると破壊は同じ事。貴方は護ると言うけれどそれは同時に何かを傷付けている」

その少女の言葉は鋭く、俺の心に突き刺さる

「それでも……貴方は誰かを護りたい？ 救いたい？」

「そりゃ、助けられるなら助けたいし、護れるなら護りたい。そう思っちゃいけないのか？」

俺がそう返事を返すと少女は

「それでは駄目。貴方の護るには中身が無い。覚悟無い。そんな人間には誰も救えない」

その余りの言葉に

「それは酷いんじゃないか？」

「酷くない。中身の無い言葉に価値は無い、そしてそんな半端な覚悟じゃ誰も護れない。でも……護りたいと願うその心はとても大事。その思いはずっと忘れないで……そしてあの人みたいに壊れた守護

者にならないで。その為なら……私は貴方に何時もで力を貸すから、憶えていて私の名前は■■……」

そう言った少女の名は不思議と聞こえなかった、いや確かに聞こえたんだ、でも俺にその言葉は届かなかった……少女はにこりと微笑みながら流木の上に立ちふわりとドレスの裾を広げながら跳んだ……

「あ、あれ？ 俺誰と話していたんだ？」

誰かと話していたのは覚えている、でも肝心の話の内容とどんな人と話していたのかが思い出せない

「う……うーん」

俺は必死に首を傾げるがどうしても思い出せない。とても大事な話だというのは判るのに……だがそんな疑問も自然と消える

「あ、あれ？ 2人だったけ？」

白いワンピースの少女と黒いゴスロリ服の少女が手を繋ぎ、歌いながら踊っている……何かさつきと違うと判るのに、その何かが判らない……そしてそんな疑問も消え俺は少女2人の歌と踊りをぼんやりと見ていた……

「ん？ どうしたんだ？」

何時の間にか歌が終わっている事に気づき、そう尋ねるが……

（あれ？ 1人？ 誰かと一緒じゃなかったか？ いや……最初から彼女1人だったな）

白いワンピースの少女にそう尋ねると

「行かないと……」

「どこへ？」

空を見上げている少女につられて空を見るが何も無い。少女の方を見ると

「あ。あれ？」

少女の姿が無く慌てて辺りを見ていると

「力を欲しますか？」

「え？」

白い甲冑の女性が剣の柄に両手を預けて立っていた

「力を欲しますか？ 何の為に？」

もう1度そう尋ねられた俺は

「そりゃ。友達を……いや仲間を護る為かな？」

「仲間を……」

俺の言葉を呟き返す女性に

「仲間を護りたいんだ……色んな不条理とか……道理の無い暴力とかから……俺は仲間を護りたい。この世界で一緒に戦ってくれる、一緒に居てくれる。大事な仲間たちを……」

知らずの内に脳裏に浮かぶ箒達の顔。そして背中を向けて立っている龍也の姿。俺は護りたい、俺の仲間を……友を

「そう」

女性がそう頷くと同時に

「だったら行かなきゃね？」

「え？」

後ろから声をかけられ振り返るとそこには白いワンピースの少女の姿

「ほら……行こう」

伸ばされた手を握り締める。そうだ俺は行かなければならない

……

「大事なものは折れない剣じゃない……必要なのは……揺るがぬ想い。さっきの答え……絶対に忘れたら駄目だよ」

振り返ると白いワンピースの少女の隣に黒いゴスロリ服の少女が腕組して立っていた。何か怒ったような表情の彼女は俺の顔を指差し

「今度は特別に私の力を貸してあげます。相手が相手ですし……でも！今回だけですからね！次はちゃんと……私達の名前を呼んでください、良いですね」

その剣幕に押され頷くとゴスロリ服の少女はくるりと回転し姿を消した。それと同時に空が光り……季節はずれの雪が降る……季節はずれの雪の中。白いワンピースの少女は

「私の名前は■■■■じゃない。私の名前は■■■■……待ってるから、あの子と一緒に名前を読んでくれるのをずっと待ってるから、今度はちや

んと……私達の名前を呼んでね？

少しだけ悲しそうな声でそう言った少女の泣きそうな、でも嬉しそうに笑う彼女に手を伸ばそうとした瞬間、俺の意識は雪の降る砂浜から遠ざかっていった……

「……行かないと」

行かなければならない。俺はそれだけを感じ旅館の外へと飛び出し、白式を展開し呼ぶ声のする方へと向かった……

「なに？　一夏が居ない？」

一夏が負傷した事で表面上は冷静さを保っていた千冬だったが、その報告を聞き、もう体裁などどうでも良くなったのか。凄まじい殺気を纏い。殺し屋の目で山田を睨んでいた

「は、はいいい……気が付いたら部屋に居なかつたんですう……」

重態である筈の一夏の姿が消え、更には代表候補生の大半が居なくなった事で軽いパニックになっていた旅館には表現しがたい空気が漂っていた……主に危険域のブラコンのリミッターが外れたことが原因で……

「山田さん。訓練用のISを全部ロックして。千冬まで飛び出されたら困るから」

「は、はいいい!!」

ダツシユでIS保管庫に向かう山田先生

「キシャアアアア」

「落ち着きなさい！　千冬ー！」

リミッターを外し人語まで失った千冬とそれを宥めるツバキと旅館は旅館で非常に混沌としていた……

「なんか同類の気配がするなあ……ほい、4、なのはちやんどうする？」

「はやてちゃんの同類というと……織斑先生だね。はい5、フェイトちゃんどうぞ」

「嫌な気配だねー。6」

「「ダウト」」

「何で判るの!？」

「フェイトちゃんは顔に出るからなー」

「うん。正直ダウトには向いてないよ」

ほのぼのとした雰囲気です。ダウトをするはやて達に

「良いのかい？ 龍也の援護をしなくて？」

「動くなって念を押されたしなー」

「陽動だと不味いしね」

「私は行ってもいいよ。でも幻術使えないから速攻でバレるよ。正体」

最高位の魔導師が揃っているが幻術と戦闘用魔法の並行使用が出来る人間は龍也位しかない……ジエイルは大きく溜息を吐き

「はあークアットロでも連れて来れば良かった。もしくはティアナ君を連れて来るべきだった」

100%戦闘系しか使えないのはとフェイト……それ以外も出来るが腹黒いことにしか使う気の無いはやて。支援系の面子が居ないことに絶望しているジエイルだった……

闇の中でもしつかりと見える銀髪を確認し、その進路を塞ぐように立つ

「そこを退いてくれないかね？ アズマ」

私に気付き立ち止まった八神龍也に

「だが断る」

私の目的は八神龍也の足止め、ここで退いては意味が無い。無人機ISゴーレムIを改良し人が乗り込めるようにした。私のIS「血染めの兎」を展開する

「束の目的の為にここで足止めさせてもらうぞ。神王」

「やれやれ、予想通り過ぎて呆れる」

肩を竦める八神龍也は

「大方、前回のネクロが使っていたISはあの馬鹿兎が作ったんだろ？ ISコアを作れるのはあの馬鹿兎だけらしいからな」

「束を馬鹿と言うな」

武装を展開しその銃口を八神龍也に向ける

「退け。私はここを通さないぞ」

「そうか。だがな……」

一歩踏み出した八神龍也は

「私は無理にでも通るがね!!」

普通の人間とは思えない速度で踏み込んでくる八神龍也に

「甘いな」

コールしたライフルの照準を合わせ引き金を引く。ビームが八神龍也を捉えたと思った瞬間

「投影開始!!」

八神龍也の手に光が集まり。次の瞬間には一振りの西洋剣がその手に握られていた

「写・無毀なる湖光（アロンダイト）!!」

アロンダイト……確かアーサー王の伝承の中の裏切りの騎士の剣の名前。話には聞いていた八神龍也は伝説の武器を具現化させて扱うと……それを今まで忘れていた私の完全な誤算だった

「はっ!!」

ビームを弾き飛ばした八神龍也は

「ビームの見た目の癖に実弾とは恐れ入る」

私の呼び出したハイマニユートライフルはエネルギーを収束し放つエネルギー物理弾だ。それを初見で見破られるとは誤算だったが

「だが私のやる事は変わらない!」

左手だけでハイマニユートライフルを構え。右手の掌に仕込まれたレーザー砲の照準を合わせ放つ

「そうか、だが私のやる事も変わりはない!」

実弾とレーザーを無毀なる湖光（アロンダイト）で弾き続ける八神龍也。だが威勢こそ良いがその場から踏み込めていない。このまま時間がある程度稼げば

「シッ!!」

「な!」

アロンダイトを私目掛けて投げつけてきた、確かに私はこんな攻撃

を予想だにしていなかったが

「馬鹿者が！」

アロンダイトを失った八神龍也に向かうレーザーと実弾はまだ続いている。私は投擲された剣を避け無防備な八神龍也を確実に射抜けば良い。簡単な事だ

「馬鹿はお前だ、私の戦い方をネクロどもから一切聞いていないな？」

投影開始!!」

「なっ。何!?!」

連続で投影できるなんて聞いていない。あれだけの質量だ。そう何度も出来るわけがないと思っていた

「写・干将・莫耶ツ!!」

黒と白の中華剣で私の攻撃を弾き飛ばす八神龍也、私は投擲された剣を避ける為に上空へと向かった瞬間

「戯けめ。壊れた幻想（ブロークンファンタズム）

「なっ!・ぐうツ!!」

アロンダイトが爆発し血染めの兎のコントロールを一瞬失う。更にシールドエネルギーも300ほど削り取られている。更に煙幕で視界が遮られる。本来ISならこの程度の煙幕なんてどうという事は無いが、魔力とやらのせいで完全に視界を奪われた

（上空に逃れていてこのダメーシ、だが次で仕留める!）

上空からの一点射撃、ハイマニユートライフルを構え煙が晴れるのと同時に照準を合わせようとして

（い、居ない!?!）

八神龍也の姿が無い。そして動揺した瞬間上空から

「甘い事だ。たかがISの1機で私を止めれると思うとはな」

剣を弓に番えている八神龍也と目が合う

「残念だがゲームオーバーだ。アズマ、我が骨子は捻れ狂う……」

剣が捻れ矢にと変化する

「写・螺旋剣（カラドボルグ）ツ!!!」

嵐を纏い迫る螺旋剣。回避は間に合わない。仮に回避できたとしても爆発でやられる。ならば!

「上腕部装甲・肩部装甲パージ。デザイン・メルト・ニューテラーコー
ル」

威力を和らげるしかない。ISの装甲をパージし更に私の身長より3倍も大きい巨大な衝撃砲を盾とし。残りのエネルギーを全部防
御に回す

「壊れた幻想（ブロークンファンタズム）」

再度聞こえたその呟きと共に凄まじい爆風が私を襲う

「があ!？」

その爆風に吹き飛ばされ地面に思いつきり叩き付けられる、ダメー
ジがあまりに大きかったせいでISが強制解除される

「ぐうう」

ダメージのせいで消えかける意識を必死で繋ぎとめ、護衛用のハン
ドガン八神龍也に向ける

「無駄だ、ハンドガン程度で手傷を負うほど私は未熟では無い。それ
に少なくとも2箇所は骨が折れてるはずだ、これ以上の戦闘は無意味
だ」

「黙れ」

自分の身体だ自分が1番判っている。肋骨が2本、左上腕部にヒビ
それに右足首は完全に砕けている、だがこの程度では退かない

「束の邪魔は許さない。束は私が護るんだ」

束は私が護る。ネクロからも他の人間からも

「護るか……その心構えは良いが」

「うるさい！ お前に何がわかる！」

ハンドガンの引き金を引いた瞬間。八神龍也の姿が掻き消える

「ゴフツ!!」

岩の塊のような拳が私の腹を捉える

「大切な奴が道を踏み外しそうなのには止めないのは愛じゃない、お前
のそれは単なる依存でしかないんだよ！」

振りかぶられた右拳が私の頬を捉え。思いつきり殴り飛ばされる

「グア……ぐううう」

「良いか。アズマ、手が退けるうちにネクロとは縁を切れ。あいつら

は人間なんてただの駒程度の認識だぞ。何時裏切られて殺されるかわからん、だから手を退けるうちに退け」

私を見下ろしそう言う八神龍也。何か反論しようにももう意識が……強烈なまでの打撃を2回も喰らってよく意識を保てた……がもう限界だ

「気絶したか」

力なく垂れる頭を見てそう呟く龍也はアズマを近くの木にもたれさせ

「くだらないことで時間を取られた」

微弱ながら魔力反応が出始めている海域を見つめ

「手遅れにならないければ良いが」

騎士甲冑と翼を展開しその場を飛び去った……

「アズマ。今連れて行く」

闇の中から現れた少女はアズマを担ぎまた闇に紛れようとして

「八神龍也。貴方のいう事は判る。でも……人間はそんなに簡単じゃない」

彼女とアズマは知っている。束がどんな人生を歩んできたか、だからこそネクロと手を組んだ、今度こそ完全な形で世界に自分の有能さを指し示す為に

「行く。アズマ……休まない」と

気絶しているアズマを引きつれ今度こそ少女は闇の中にへと消えて行った……

「ぜらあああッ!!!」

零落白夜の光刃がセカンドシフトをしたシルバリオゴスペルのエネルギー翼を絶つ。しかし両方の翼を同時に斬るのは難しく、片方を切り落とす事が出来ても2撃目はかわされ。その間に切り落とした翼が再生する

(くそ。このままじゃ不味い)

白式のエネルギー残量は残り20% 予測稼働時間は3分と言っ

た所……それに白式を再起動出来たのは良いがエネルギーが全開ではない上にブースターが1つ死んでるのが痛い。シルバリオゴスペルが完全に逃げに廻ると追いつけない。何時またペガサスとヴォドウン、それにネクロが現れるかもしれないと言うこの状況。焦りが大振りを呼び、大振りがミスを呼ぶ完全な悪循環に嵌まってしまっている

「一夏!!」

視界の隅に紅いISが飛び込んでくる

「箒!? お前。ダメージは……」

俺がこの空域に来たとき、ラウラ・シャル・セシリア・鈴の姿は無く、箒もまた危ない状況だった。箒がこっちにきたときに驚きそう尋ねると

「大丈夫だ!! それよりも、これを受け取れ!!」

箒の手が、白式に触れると同時に白式に電流のような衝撃と、炎のような熱が走る

「な、なんだ? エネルギーが回復!? 箒、これは」

「今は考えるな!! 行くぞ一夏!」

箒の声に頷く、確かに今はシルバリオゴスペルを沈める事が先決だ。零落白夜のエネルギー刃を最大にし両腕で構える

「うおおおッ!!」

俺の横薙ぎを1回転し回避。そして翼を向けて射撃の態勢に入る

「箒!」

「任せろ!!」

俺のほうに向けられた翼を紅椿の2刀が1断の斬撃で断ち切る。そして

「逃がすかアアアアッ!!!」

更に脚部展開装甲による加速を付加した回し蹴りがシルバリオゴスペルを捉え、大きく態勢を崩す

「おおおッ!!!」

その隙を突いて最期の1突きを繰り出そうとしたが

「キアアアアアアッ!!!」

咆哮と共に放たれた衝撃波に弾き飛ばされる

「な、なんだ？ ……嘘だろ…!!？」

シルバリオゴスペルのバイザーが紅く輝くそれと同時に、装甲が音を立って変形していく

「アキアアアア…ギアアアアアアッ!!」

美しい白金の装甲は一切の光を持たない黒い装甲に変化し、背中には悪魔を思わせる4枚の翼。そしてバイザーと同時にフェイスマスクが展開される

「ギ。ギシヤアアアアアアッ!!!」

4枚の翼を大きく広げ誕生した事を喜ぶような雄叫び。

「ハアアアアアッ!!!」

獣のような荒い呼吸…

「ISが…ネクロになった!？」

「不味い！ 離脱…」「キシヤアアアアッ!!!」ぐあっ

「箒!!」

瞬時加速!? いやただの加速だ。それで一瞬で間合いを詰めた悪魔はそのまま箒の首を掴み

「ギアアアアアッ!!!」

「う、うあっ!？」

力任せに海面にへと叩きつけた。俺が回り込もうとしたところで海面のほうから

「ラウラー!」

「判ってる!」

パッケージを分離し、ISを通常形態に戻したシャルとラウラーが叩き付けられる寸前の箒を受け止める

「突撃なんて性じゃないんですけどね!!!」

ブルーティアーズがステルスモードからの突撃をするが

「ギイ」

「な、嘘でしょう!？」

最高加速のブルーティアーズを片手で掴み。ゆっくりと左手でパッケージであるストライクガンナーを掴んだ福音は

「ギイイイイッ!!!」

「な、素手で!? きゃあッ!!!」

力任せにパッケージを引き剥がし始めた。強引な行動で火花を散らすパッケージ

「セシリアを放せッ!!」

雪片を叩き付けようとするが、

「ギョロツ!!!」

「なっうわ!!」

翼から目が飛び出すと同時に無数の触手が飛び出してくる。それに弾き飛ばされセシリアの方に近づけない

「でりゃあああッ!!!」

ステルスモードだった鈴が瞬時加速で切り込み、福音の腕を引き裂く

「セシリア! 早く!」

「助かりましたわ! 鈴さん!」

その間に離脱したセシリアだが、反撃に繰り出された豪腕が甲龍のパッケージの右半分を押しつぶす

「この馬鹿力が!!!」

零距离で衝撃砲を放ち離脱する鈴。海面近くにいたシャル達もこっちに向かってくる

「……」

握り潰した甲龍とブルーティアーズのパッケージを見つめている福音を見ながら、どうやって離脱するか考えていると

「行って! 山嵐」

「撤収してください!!」

「こっちだ!! 急げ!」

この声は簪さんとクリスさんにヴィクトリアさんか!? 振り返るとやはり3人の姿がある、後方には遠距離攻撃手段を持たないエリスさんが3人の前で剣を構えていた。

俺たちの撤退を助ける為のミサイルとビームガトリングが福音に当たろうかと言う瞬間

「遅い」

冷たい声と共にミサイルとガトリングが全て明後日の方向に斬り飛ばされる

「ペガサス……」

「また会ったな、小僧」

片刃の西洋剣を肩に当てるペガサス、そして俺達の背後に回りこんだ福音。逃げ道は完全に絶たれた

「福音。貴様はその女達の相手をしろ。俺はこの小僧に用がある。邪魔をするなよ」

「ギイ」

翼を展開する福音は爪を箒達に向け、今にも飛び掛ろうとしているのがよく判る、だが俺は俺で

「この短時間で腐敗の教義から逃れるとは驚きだ。今度は俺自らが貴様の首を断ってやろう」

ペガサスから視線を逸らす事が出来ない、幸いにも福音とペガサスを分ける事が出来た事を喜ぶべきか

「行くぞ小僧。今度は一太刀くらい俺に当てて見せろ！」

「ギシャアアアアッ!!!」

ペガサスと福音の叫びが重なる、それが絶望的な戦いが始まる合図だった……

第46話に続く

第46話

第46話

「どうやって腐敗の教義から逃れたかは知らんが……その命狩らせてもらうぞ」

クラウソラスでは無く巨大な両刃刃を持った大剣。アヴェンジャーを構え。小僧を見据える

「……悪いが、今度はそう簡単には諦めねえ。俺は仲間を護るんだ」

前はみつともないくらい剣先が震えていたが、今は剣先は震えがしつかりと俺に向けた小僧の目は澄んでいて……それでいて決して退かないと言う闘志が見て取れた

「良い目だ、少しは抗って見せろよ」

踏み込み上段からアヴェンジャーを振り下ろす

「くうっ!!」

「ほう止めたか……だが甘い!!」

受け止めるので必死な表情の小僧の腹に蹴りを叩き込み

「ぐはっ……」

「ぬんっ!!」

身体が折れた所で横薙ぎの一撃を放つが小僧は

「このっ!!」

剣の側面でそれを受け流し、身体が泳いだ俺に蹴りを入れて距離を取った

「中々良い反応だと言いたいが……甘いな」

生前修めた剣術の奥義の1つ■■を使い一瞬で間合いを詰め、突きを放った

(これで決まりだ)

俺の剣なら絶対防御など簡単に貫き絶命させる、一瞬勝利を確信した瞬間

「おりゃあああッ!!!」

「なに？」

「おかしいISとやらの反応速度では■■には対応できない筈だ

「おおおおッ!!」

「ぐうっ!？」

「一瞬反応が鈍った俺に拳を叩き込み小僧は

「くらえっ！」

「瞬時加速とやらで切り込んできたが

「甘いんだよ!!」

「それを敢えて素手で受け止める、ネクロである俺のは不死とも言える回復能力があるこの程度のダメージなら問題ない

「がっ!!」

「お返しにと顔面に拳を叩き込み殴り飛ばすが

「ぐっ!？」

「ブースターで速度を増した回し蹴りが左腕にめり込む。致命傷ではないが多少剣の振りが遅れるくらいには深い傷だ

「肉を切らせて骨を断つか……」

「あの小僧の狙いは多少のダメージ覚悟で俺の動きを鈍くする事。中々思い切った作戦と褒めてやりたいが

「アヴェンジャーでなければ良いだけの話だ」

「アヴェンジャーは両手剣なので必然的に両腕での振り抜きが必要になる、だが俺にはまだ剣がある。アヴェンジャーを収納し代わりに鞘に収めたクラウソラスを抜き放す

「行くぞ。小僧、俺にクラウソラスを抜かせた事を後悔しろ」

「俺は踏み込み■を放った……これなら機械であれ生身であれ致命傷を与えられる剣技なのだが

「でやあああッ!!」

「気合を込めた一撃でそれを弾く。まただ……また相殺した。コイツは俺の剣など知らない筈なのに

「ふっ……面白い!!」どこまでついて来られるか見せて貰うぞ!!」

「どうにも血が滾る……遠い昔に捨てたはずの剣士としての自分が蘇る。そして見極めたいと言う感情が沸く……見せて貰うぞ! お

前の力を！

「戦闘タイプ……予測不可。 簪、私と貴女は後方からの支援射撃に徹します。良いですね」

「判った」

簪とクリスが後退しそれに代わってエリスとヴィクトリアが前に来る

「ギイイイツ!!!」

不気味な呻き声を上げる福音を見据え、隣の箒と鈴に

「あれはISとして考えるべきか？ それともネクロとして考えるべきか？ どっちだと思う」

動く気配の無い福音から視線を外さず尋ねると

「A I C試してみたらどうだ？ ISなら動きを束縛できる筈だが？」

それもそうかとA I Cを発動させようとしたら鈴が私の腕を掴む

「やめなさい、エネルギーの無駄使いよ……あれはもうISじゃない。見れば判るでしょう？」

冷静に観察していた鈴は

「生物として考えるわよ。 それにこっちエネルギーは有限だけど……あつちはどうかしらね？ ヴィクトリアと箒は中距離援護宜しく。 あたしは近接を仕掛けるわ。 シャルロット・セシリアはバックアップ。 ラウラとエリスは軍隊仕込みの観察眼で分析宜しく」

「捨て駒になる気か？」

私がそう尋ねると鈴はにっこり笑い

「はあ？ 何言ってるのよ？ あたしはね……とつとこんな化け物ぶっ潰して一夏を助けに行きたいだけよ、じゃあちゃんとフォローよろしく！」

青龍刀を構え福音の射程距離に鈴が入った瞬間

「キアアアアアアアッ!!!」

福音が突然奇声を発し猫背になり、両手の爪を鈴に向ける

「つたく！ うるさいわね!!」

鈴がそう怒鳴り福音に切りかかろうとする。そのタイミングに合わせてクリス・簪がビームガトリングとミサイルを放った瞬間

「えっ?」

鈴の攻撃は誰もいない空を裂き。福音は姿を消した

「ギシャアアアア」

その不気味な声で振り返ると

「な。なに!? うあっ!!」

何時の間にか私の背後にいた福音が爪でレーゲンの装甲を引き裂く

「ぐっ。馬鹿な!?!」

絶対防御なんて何の意味も無いと言いたげに爪を向けた福音はまた姿を消し

「ど、どいへ!?!」

センサーにも視界にも反応が無い。エリスが

「鈴、戻って！ 背中合わせで周囲を見ますよ！」

5人で互いに互いの背中を護りセンサーを最大にし索敵するが姿を確認できない。一体どこへ

「……皆散開して!! 後ろ!!」

シャルロットの叫びに何を馬鹿なと思いながら振り返ると

「ギイイイイ」

「な、何だと……」

何も無い空間が開きそこから福音の赤いセンサーアイと目が合う。

(空間の中に紛れ込むだ?!)

別次元に隠れていたとでも言うのか!?

「反応が補足出来ない!!」 ラウラ！ 皆警戒を緩めないで!! 簪はハイパーセンサーを最大にして、私と同期させて！ 2人なら補足出来るかもしれない!」

「う、うん!」

クリスの悲鳴にも似た声にうなづく簪。補足出来なければ話にな

らない

「うあつ!？」

「キシヤアアアアツ!!」

シャルロットの背後から現れ蹴りを叩き込む福音。また！ 発見が遅れた！ 反撃にと銃口を向けるがまた福音は姿を消す

「クリス！ 補足は!？」

「駄目！ 速過ぎて何処に現れるか判らない!」

2機のISを探索に回しても補足出来ない……

(ネクロというのはこれほどまでに強いのか!?)

出来る事は互いに互いの背後を護り。姿を見せた一瞬に攻撃を叩き込むこと……だがそれはあまりに分の悪い勝負だった……

ラウラ達は知る由も無いが、ネクロ化した福音が取得した能力は次元と次元の裂け目に隠れる事だった……軸がずれた同じ世界に隠れる事で己が存在を認識できなくなる。デバイスなら探知できるがISではその反応は察知できない。

「後ろ！ 皆逃げてツ!!」

クリスの警告の声も、もう遅いラウラ達の背後をとった福音は

「キ、キシヤアアアアアアツ!!」

大きく翼を広げ周囲に出鱈目にエネルギー弾を撒き散らした

「うっぐ!？」

「ヴィクトリア！ 鈴のフォローを！ 私はラウラを!」

ダメージのせいで反応が鈍い鈴と私を素早く掴んで離脱するヴィクトリアとエリス。箒だけはエネルギーが満タンなので展開装甲でその弾雨を防いでいた

「くっ！ なによあれ!？ 見た目通り化け物じゃない!？」

「信じられん……悪魔と言うのは伊達では無いのか」

私達の常識が一切通用しない相手を前に私は

(全滅するかもしれん)

全滅の可能性を感じていた……

「お久しぶりですね。守護者」

「ヴオドウン。貴様と遊んでいる時間は無い」

一夏達の居る海域の手前でヴオドウンに邪魔され剣を構えながら言うと

「貴方に無くとも私には時間は山ほどあるんでね。邪魔させていただきます」

【プロヴィデンス】

「変身」

ベルトのスロットにUSBメモリを差し込んで傾けると同時に魔力がヴオドウンを覆い隠し、その姿を作り変える

「さあ。その命神に捧げなさい！」

黒い髑髏を模した甲冑と王冠の様な頭部。そして漆黒のマントを身に付けたヴオドウン

「断る。貴様の信じる神など碌な物じゃない」

ネクロが信奉する神といえば「ヴェルガディオス」に他ならない。あんな化け物を信仰するなんて死んでもごめんだね

「ふん、神の奇跡を無にする愚か者め。その罪死んで償いなさい」

腰のベルトにセットされたダガーを構えるヴオドウンに

「そうか……だが私はまだ死ねん、死ぬのは貴様のほうだ」

遊んでいる時間は無いがここで足止めをしておかないと不味い

「それはどうでしょうね？ 守護者。私はそう簡単には行きませんよ」

「知ってるさ。狂信者 ヴオドウン」

急いで片付ける。だからそれまで死んでくれるなよ……一夏

くっ！ 何なんだよ！ こいつの剣は！

「中々に粘るな！ 小僧！」

受けたと思っただけに抜き抜ける。受け止めても衝撃で身体がバラバラになるような激痛が走る。見たことも無い剣術を駆使するペガサ

スの攻撃は防ぐだけで手一杯だ。なのにペガサスは感心するように「まだ防ぐか！ 全く驚きだ！」

横薙ぎ……これは

(すり抜けて来る！ 受けるな避ける！)

直感を信じ素早く後退しその一撃を避け、そのまま雪片を振るう

「はっ！」

「ぐうっ!!」

だがその一撃はペガサスの剣によつて防がれ、代わりに全身がバラバラになる様な衝撃が雪片を伝わってくる。

「このっ！」

「甘いな！」

直感的に振るつた雪片とペガサスの剣が甲高い金属音を響かせる。ペガサスは打ち合うごとに何かを確かめるように攻撃の勢いを増させる

「天性の剣の才か！ よくもまあここまで避けるな！」

突き・薙ぎ・袈裟切りと絶え間なく放たれる攻撃を必死でさばく。

(衝撃が来るのはこの際我慢だ！ すり抜けるやつだけ避ける！)

衝撃は我慢すればいい。ただガードをすり抜けるやつだけはなんとしても避けないと不味い。自身の感を信じ攻撃を防ぎ避けさばく

「はああああッ!!!」

「このおとおッ!!!」

上段からの一撃を切り上げで弾こうとして

「なにいい？」

「え？」

放つた自分が驚いた、ペガサスの剣を雪片がすり抜けかけたのだ……だがそれはかたけただけであり、雪片はペガサスには届いていない、だが確かに雪片はペガサスの剣の様に何かをすり抜けようとしていた……

「ちっ!!」

「ぐあっ!!」

その光景に一瞬動きが止まった瞬間に前蹴りで弾き飛ばされる。

間合いを再度計りなおしながら手の中の雪片を見る。

(今のはなんだよ……)

ただ必死で防いだけ……それだけだ。自分でも訳の判らない現象だ……唯1つわかっているのは……

「……貴様。余程死にたいらしいな……」

今の一瞬のやりとりでペガサスを本気にさせてしまったと言うことだけだ。

無意識に手が震える。そしてこの場から逃げ出したいという気持ちがあつて俺を支配する。このままでは死ぬ、それが理解できてしまったから……

「あ……」

その目に見据えられた瞬間。俺は何も出来なくなった……蛇に睨まれたカエルというのはこんな感じなのだろうか？ 逃げろ、生きなければこの場を離れなければならぬと判っているのに。全く動けない……

今までペガサスは振るっていた剣を鞘に収める。すると鞘が光を放ち2本に分裂する

「……俺に二刀流を使わせた事を後悔しろ。織斑一夏！」

避けなれば、防がなければ、逃げなくてはならない。手にした雪片で防ごうとした瞬間

「えっ……？」

何時の間にかペガサスが俺の後ろに居る……それに気付いたと同時にハイパーセンサーに表示されていたSEが0になっている事に気付いた

「奥義の伍・花菱」

ペガサスが鞘に剣を収める音と共に白式が碎け散る。一体何が起きたのかそれさえも判らず、海面に向かって落ちていく

「やはり貴様には何も護る事など出来はしない。己が無力を悔いろ」

海面に向かって落ちる中全てがスローモーションに見える。福音に良い様に攻撃されている箒達、落胆したと言う目で俺を見るペガサス

(まだまだ！ まだ！ 俺は負けられない！……俺は護りたいんだ！
仲間を！ だから頼む！ もう1度！ もう1度俺に飛ぶ為の力を
！)

待機状態に戻ってしまった白式を握り締め必死にもう1度展開し
ようと意識を集中させる。だが白式は俺の願いを叶えてはくれない
その間に福音の手から伸びた触手に首を絞められている鈴や箒達
の顔が見える……

(駄目だ！ 俺はいかないといけないんだ！ 俺はまだ！ こんなと
ころじゃ……終れない!!!)

届かない、届かないと判っているそれでも手を伸ばす、助けたいと、
護りたいと願う皆に手を伸ばす。だが俺の身体は海面に向かつてい
くだけで何も出来ない。悔しさに唇を噛み締めた瞬間

(どうして名前を呼ばないの？ 私は言ったわ。1度だけ力を貸して
あげるって)

脳裏に静かに……でもそれでいて透き通るような声が響く

(呼んで……名前を知らなくても……貴方は知っている。私の名前
を)

言葉にならない言葉……知らないのに知ってる言葉……それが知
らずのうちに俺の口から発せられた

「■■■■ツ!!!」

俺が行った言葉なのに俺の耳には届かない、そんな不思議な言葉と
共に俺の身体を光が覆い隠す

(行くわよ……貴方の望むまま……行きたいと願うところへ導く為に
……私は貴方の翼となる!!!)

眩い光の中、俺は見た……光の中で俺に背を向ける誰かの姿……
知らないのに知ってる、そんな誰かの姿……

「アア？」

箒と鈴の首を締め上げていた福音が急に海面を見る。じつと海面

を見つめ動かない福音を見た私は

「エリス！ ヴィクトリア！ 同時攻撃だ！ 触手を切り落とすぞ！」

「はい！」

「判った！」

シャルロットとクリスの支援はもう期待できない。エネルギーがもう殆ど残っていないせいで、PICで浮遊しているのがやっと。使えて実弾兵装のみと言う状況

「ヴィクトリアさん！ 銃を！」

「僕にも！」

「判ってる！」

コールした銃のロックを解除しセシリアとシャルロットに投げ渡す。ヴィクトリアを見ながら最後の攻撃にまわせるエネルギーでビームブレードを発生させる

「弾幕とまでは行きませんが。行きますわよ！ 簪さん！ シャルロットさん！」

「うん！」

「タイミングを合わせるよ！」

「私を忘れないください！」

福音が私とエリスに気付いたタイミングで4人の同時射撃が福音を襲う。発生した煙幕に紛れ筈と鈴の首を絞めている触手を切り落とし、残っているエネルギーを使い瞬時加速で離脱する

「……げほっ！ ごほっ!! すまない、助かった」

「……げほ！ はあ……はあ……窒息するところだったわ」

だがこの奇襲で私達のISはPICを維持するだけのエネルギーのみになってしまった。あと一撃でもくればISは解除され海面に向かって落ちるだけ

（くそ！ 命令違反の挙句。こんな所で死ぬのか？）

私になんとか少数でも良いから逃がす方法は無いかと考えた瞬間

「ギンシャアアアア!!」

福音が海面に向かって吼える、そして次の瞬間海面の方から飛んで

きた粒子砲に吹っ飛ばされる福音

（一夏か!? いや……もうこんな高火力射撃を使えるエネルギーは無
いはず、誰だ!?）

思わず海面を見た瞬間。光を纏い高速で飛翔してくる白銀の機体
が視界に飛び込んで来て。箒目掛けて剣を突き出す

「な!？」

驚く箒が目を閉じた瞬間

「ギンチャアアアア!!」

箒の背後から現れた福音の肩に深く食い込む剣。苦悶の悲鳴を上
げる福音を回し蹴りで吹っ飛ばした白銀のISは私達の前に回り込
む

「い、一夏?」

鈴がそう呟くが……白銀のISの操縦者は何も言わないで雪片に
酷似した剣を福音に向けている。

「白式……? いえ……でも姿が」

セシリアがそう呟く。私達の前の白銀のISは白式に似てはいる
が全くの別物に見える。全身の装甲が一回り大型になり。背中には
2門のエネルギーカノン。そして両腕には大型の箒手に似た装備が
装着されていた。

「大丈夫か、皆」

福音のほうを向いたままそう尋ねてくる声、間違いなく一夏の声だ

……

「キシヤアアアアッ!!!」

「行くぜッ!! 福音!!」

両手にビームクローを発生させ斬りかかる一夏。福音がまた姿を
消す

「一夏! 奇襲が……」

「そこだあああ!!」

「ギアッ!」

何も無い空間にエネルギークローを突き刺し、そこから福音を強引
に引きずり出し、背中エネルギーカノンで吹っ飛ばす

(な。何故判る!?)

私たちが散々苦しめられた福音の能力に即座に対応する、一夏……セカンドシフトした白式の性能か?

「一気に行くぜツッ! 雪華構築開始」

右手に光が集まり剣となる、それは雪片に似た剣と雪片式型を構えた一夏に襲い掛かる福音。最高加速からの爪の振り下ろし……遠い距離にいる私たちには見えだが……距離の近い一夏には見えな……

「遅い」

「ギア!?!」

自然体のまま右手の剣を振るい福音を切り飛ばし、追撃に蹴りを叩き込む一夏

「シャアアアアッ!!!」

「だから遅いと言っている」

両手の剣で福音の攻撃を受け流し。胴に手を当ててそこから放った粒子砲で福音を再度吹き飛ばす

「完全に見切ってる……どうして?」

分析が専門のクリスが驚いたという表情で呟く。自分でも碌に分析しれなかった福音の動きを一夏が見切っていることが納得できないという表情だ。

(何という性能だ……)

火力・加速力どれをとっても今まで見た。どのISを上回……いや待て

(インフィニティアと同格か?)

少しだけ見た見た龍也のISに近い物があると。観察をしていると

「だ、誰か手伝って!」

「ぼ、僕達のエネルギーも……もう無いんだけど! 残ってるなら助けてよ!!」

簪とシャルロットが必死で箒と鈴を抱えて飛んでいるが、式式もエネルギーの限界が近いので助けてと叫ぶ。それにはつとなり簪の隣に行き箒を抱える

「零落白夜起動ッ!」

雪片と雪華を連結させると同時に零落白夜を発動させる一夏、それに伴い白式の装甲の一部が展開する

「て、展開装甲!？」

確かにそれは紅椿と同じ展開装甲にも見えるが……

「違う……あれは展開装甲じゃない！」

そこから更に白式の装甲が変化をはじめのを見たエリスの聲がどこか遠くに聞こえた

(あ……)

思わず目を奪われた……いや私だけじゃない、一夏に思いを寄せている全員が恐らく目を奪われたに違いない。全身の装甲から眩いばかりの白銀の光を放ち。背中の装甲からはエネルギーの翼が4枚発生する。それは天使に似た姿だった

「うおおおッ!!！」

白銀の閃光が奔る……そして

「ギアアアアアッ!!！」

福音が悲鳴を上げる。そして零落白夜の刃が福音の身体を両断していた

「アアアアアア……」

徐々に叫び声は小さくなり、漆黒の装甲が弾けるように消え操縦者が落ちていくのを片手で掴み、ヴィクトリアに投げ渡した一夏……恐らく白式のエネルギーが不味いので見掛けが1番軽傷なヴィクトリアに渡したのだろう

「これでやっと終わりだな……」

そう言うと同時に白式の装甲がまた変化する。胸部と背部を覆っていた装甲が消え、一回り大きくなっていった装甲も元の白式に似た大きさにまで戻っていた。白式が更に変化した事やネクロの存在、気になる事はまだ残ってはいるが……

福音を撃退し戦況終了……と私が言い掛けた瞬間。悲鳴にも似た声でエリスが

「避けて！一夏君！」

え？ 思わず一夏の方を見ると福音から切り離された黒い塊が触

手を一夏目掛けて伸ばしていた

「え？ うぐああああッ!!」

ISを貫通し突き刺さる触手

「くっ！ させるか！」

福音の暴走はあれが原因のはずだ。このままでは一夏が危ない！

私だけではなく箒達もそう考えたのか触手を切り離そうとした瞬間

「上から何か来る!? 皆離れてください！」

レーゲンにも反応があつた上空から高速で飛来する何か

黄金の閃光が私達の前を駆け抜け抜け一夏の身体を縛り上げていた触手を切り払う

「あ……」

「う、うそ……」

一夏を救った何者かはそのまま剣を振るい、黒い塊の様なものを両断し消滅させた者は剣を構え。私達とペガサスの間に立ち塞がっていた

「伝説じゃなかったんだ……」

「黒い悪魔がいるのなら、居てもおかしくないと思ってましたけど……」

燃え盛る炎の翼と眩いばかりに輝く黄金の鎧。そして風に靡く緋色の髪

「黄金の……騎士」

誰が呟いたか判らない……もしかすると私が呟いたのかもしれない……圧倒的までの存在感と神々しさを持った男は空中を歩くように私達の前に立った。その背はあまりに大きくそしてあまりに遠くに見えた……

「ふっ……まさかこんな場にお前が現れるとは思ってなかったぞ」

そう言うペガサス。さつきまで一夏を観察していたようだったが私が来た瞬間、転移してきた……目的が済んだのかそれとも私を警戒

してかは判らない

「邪魔者は居たが……1人で私を足止めしようなどと不可能な事だ」

倒しきる時間がなかったので両手足に投影したハルペーで回復を阻害し離脱してきた。そう簡単にはこの場には来れない筈だ、まあ手足を破棄する可能性も在るがそれでもすぐには活動を再開出来ないはずだ

「ここで仕留めさせてもらうぞ。ペガサス」

LV4は早急に仕留めておきたい。剣を構えたところで気付いた。上空に佇む何者かの姿に……顔は見えないが姿からして女性だ、彼女は弓を構えた

「おちて……シユゴシヤ……」

だがモーシヨンが大きい。このタイミングなら迎撃できる

「投影開始……無駄なし弓（フェイルノート）」

一瞬でもペガサスから視線をそらすのは不味いとは思ったが上空からの狙撃は不味い。更に剣を投影しようとしたところで女性の顔がはつきりと見えた

（なっ!? 楯無!?)

楯無と瓜二つの女性の顔に驚き一瞬動きが止まった瞬間

「スター……ダスト!」

上空目掛け大型の光矢を放つ。それは空中で炸裂し、無数に枝分かれして降り注ぐ

（ちいっ! 判断を誤った!）

顔を見せなかったのも全てアイツの計算の上だったのだと悟り。自らの判断ミスに舌打ちしながら

「投影破棄! 投影開始!」

タイミングが不味い。自分だけならプロテクションで防げるが、一夏達までカバーしようと思うとプロテクションでは駄目だ

「写・熾天覆う七つの円環（ローアイアスツ!!）」

本来なら7つ出る花卉は3つまでしか構築できなかった。後は強引に魔力を通して強度を増加させる

「え!?! 上から!」

「避けられない!？」

勝手に動こうとする一夏達に

「動くな! 戯けども!!」

そう怒鳴り、驚き動きを止めた一夏達。そしてその直後無数の光の矢が降り注いだ。そしてそれを受け止めた瞬間、更なる自分の失態を理解した

(見かけだけ!? しまっ)

振り返ると既にペガサスは別のネクロが保護し離脱していた。完全に私の性格を逆手に取られた。弾雨が止んだ所で投影を破棄し気配を探るが、既にネクロの気配は周辺に無い完全に見失った
(やはり鈍ったか)

学園生活という中で気が緩んでいたと舌打ちし転移しようとしたところで

「貴方は……あの時に俺を助けてくれた人ですよね？」

このまま去るといふ訳にはいかんか……

「そうだ、久しいな少年」

「貴方はあの時のまま何も変わってない。どうしてですか!」

一夏がそう尋ねるのを聞いた箒達は

「どうした。一夏は知ってるのか? 黄金の騎士を」

「どういふことか説明して」

そう言われた一夏は

「モンドグロツソ決勝の日。俺は誘拐されて、そこで黒い悪魔に千冬姉と一緒に殺されかけた。その時助けてくれたのが……この人だ」

記憶抹消をしても覚えているとは……よほど心に強く残ったんだな……認識障害で顔は認識出来ないはずなんだが……今日の前にいる一夏達には私が緋色の髪をしているということと目の色が違う、という事しか認識出来ない。私の正体がバレル心配も無いし。少しは質問に

答えてやるか

「どうして。貴方は歳を取っていないんですか?」

「私にとって時間とはあってなき物という事だ……どうせ理解出来ない

いだろうがな」

そう言つて背中に翼を具現化させ一夏達から離れる

「運命は廻る……いずれ決断を迫られることになるだろう」

戦うか否か……それを一夏達は決断せねばならなくなるだろう

……今日ネクロと戦つた事で運命は変わる

「どういう意味だ！」

「いずれ判る、いずれな……ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「何故私の名を!？」

驚くラウラに内心笑いながら。

「お前だけじゃない。私は全てを知っている。そういう存在なのさ」

神の右目をつかえば全ての並行世界を見ることが出来る、それ故に

私は全てを知つてると同時に全てを知らない

「では……いずれまた会おう。運命が交差する夜に……」

これ以上答えられることは無いので転移ではなくステルスで姿を消

し、一夏達が旅館にへと戻つたのを確認してから、もう一度姿を現し

「いい月夜だ……」

偶にはこういうのも悪くないと思ひ暫くその場で満月を見つめて

いた……

「アブナイところダッタネ……」

守護者が姿を消したところでそう尋ねてくる。女に

「一応礼は言つておくが……ネルヴィオの差し金か？」

「ソーダよ」

まだネテタカツタけどね、ネルのタノミだからシカタナイよね？

この女の名は知らんがどうも苦手だ。この生気の無い目に見られる

と無性に苛々する

「ふん、ではな、俺は帰る」

「ジャアね……」

空っぽの笑みを浮かべる女に

「お前も……抗え」

「ナニに？」

首を傾げる女……俺と同じ完全な人型だから判ると思ったが、どうやらこいつは違うみたいだ

「判らんならいい……じゃあな」

その場を転移し、この世界に来てからよく来ている丘にある木に背中を預ける

「ぐっ……ぐうううう」

斬られた腕が再生する際に俺の中のネクロの因子が力を増す。破壊しろ、壊せという声に

「だまれ……俺は、俺だ……貴様らの思い通りになどならん」

拳を地面にたたきつける。こうして身体こそくれてやったが……魂までは捨てたつもりは無い……俺は絶え間なく走る激痛に耐えながら空を見上げ意識を失った……

第47話に続く

第47話

第47話

「作戦終了と言いたいが……お前達は独自行動で重大な違反を犯した。帰ったらすぐに反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるからそのつもりでいろ」

「……………はい」

勝手に出撃した一夏達……無事に帰ってきてくれたことは嬉しいが、違反は違反。しっかりと罰を与えなくてはいけない

「まあまあ、説教はそれくらいにしてあげたら？ 怪我人もいるしね？」

ツバキさんはそう言ってから拉致され半場無理矢理福音と戦わせられた、更識とアマノミヤの前に立ち

「じゃあ、貴女達はこれね」

メシツ!!!

ありえない音を立てる手刀。それを喰らった更識とアマノミヤは涙目で

「ツツ!!!」

ごろごろと転がり悶絶していた……

「じゃ、じゃあ、1度休憩してから怪我の診断をしましょう。 織斑君は別部屋ですよ？ 判ってますね？」

「山田先生、あんたは俺をなんだと思ってる」

流石の一夏もその言い方は傷ついたのか、刺々しい口調だった。そして私も腹が立ったので

スパーンツ!!!

「ツ!!!」

山田先生の頭に出席簿を叩き込む。涙目で悶絶する山田先生を見下ろしながら

「それじゃあ、各自水分補給をして診断を待て、一夏は別室に行け。良いな？ それと八神達は部屋に戻り休め。今までご苦労だった」

「それじゃあ、お先に」

「頑張つてね〜」

「ばいばーい」

一夏達に手を振り部屋を出て行く3人はそのまま、龍也が眠る部屋に足を向けたのか、部屋とは違う方向に向かって歩いていった。

「では後はお願いします」

「は、はい。判りました」

ツバキさんは各自ISに記録されたネクロとの戦闘データを分析するといってISを持って部屋を後にしている。後は山田先生に任せれば良い。私はそう判断して部屋を出ようとして近くにいた一夏を見た。腐食していた部分は無くなっている事に確認する為にじつと見ていると

「な、なんですか?」

怒られるのかと勘違いした一夏に

「……いや、なんでもない。全員が無事に戻れてよかった」

それだけ言って部屋を後にした……恐らく今回の福音の暴走とネクロの出現に係っているであろう人物に会う為にそのまま旅館を後にした

「ふう……」

夕食後俺は旅館を抜け出して夜の海に来ていた。色々考えたいこともあったし気分転換も兼ねてだ。見つければ当然怒られるがそれでも少し泳ぎたかった

(何か夢を見た気がするんだけどな……)

起きた直後はしつかりと覚えていたのに、今は内容さえはつきりと思いつけない。何か大切なことだったと思うのだが……

「い、一夏?」

名前を呼ばれ驚きながら振り返る。そこには水着姿の箒がいた

「箒か? そういえば昨日は海で見なかった」

「あんまり見ないで欲しい。落ち着かないから」

「そ、それは悪かった」

もじもじしてる箒から視線をそらすと、箒は俺が腰掛けている岩場

に座る

(な。何か凄い気まずい)

話す話題も思いつかないし、何となく居心地悪い気分にも動揺し。色々話すことを考えてから俺は口を開いた

「その水着いいな。よく似合ってる」

何故か俺の口から出た言葉は考えていたものとは明後日の方向のものだった……

「こ。これは……その勢いで買ってしまった……いざ着ようと思うと。恥ずかしくてな……」

だから初日の自由時間で見なかったのか……と納得し。次に気になっただけのことを尋ねてみた

「その変な敬語は何なんだ?」

「う……それは」

恥ずかしいのか俯いた筈はぼつぽつと

「い、一夏が……おしとやかな女が良いと言うから……」

そ、それかよ!?! 俺は予想だにしなかった返答に驚きながら

「いや……まあ、何だ。筈はいつも通りの方が良いと思うぞ? そ

んなに無理して口調を変える事も無いだろう?」

「う……む。そうだな……これでいいか?」

いつも通りの口調の筈に

「おう、何時もの筈だな。　　そういえば髪大丈夫だったか?　　ちよつ

と焼けてただらろ?」

「あ、ああ。リボンが無くなったただけだ……大事な。それに新しいリボンも貰ったしな」

「そっかそれなら良かった。それと改めて誕生日おめでとう」

「う、うむ。　　あ……ありが……とう」

ぼそぼそという筈。確かに聞こえにくかったが言いたい事は判った。

「そ、それより。お前こそ大丈夫だったのか?」

「なにが?」

目が覚めたら包帯でぐるぐる巻きだったけど。怪我のあとは無

かった……火傷でもしてたのかなと箒に尋ねると。

「腕とか背中とか腐り始めてた……から」

顔を青ざめながらそういう箒に思わず絶句しながら

「マジかよ……」

ネクロというのはどんだけ出鱈目なんだ……

「まあ良いんじゃないか？ 治ってるし」

こうしてピンピンしてるからいいだろ？ という箒は

「良くない！」

「ええ？ 何でだよ」

言ってから箒は……

「わ、私のせいで怪我をされて……し、死に掛けたのを……そんな感じ
で許されると、困る」

はあ……どうしてこう箒は頭が固いのかね？ 俺は苦笑しながら

「じゃあ箒、今から罰をやる」

「う、うむ」

目を閉じる箒の額を指で弾き

「はい、終わり。これに懲りたら、自信過剰と独断専行を控えろよ？」

「な、なに？」

困惑顔だった箒は、数回瞬きした後俺に詰め寄り

「ば、馬鹿にしているのか！ あ、あんなデコピンくらいで」

じゃあ何をしろっていうんだよ。俺に女を殴るような趣味は無いぞ

「まあまあ落ち着け。興奮するな」

「だ、黙れ！ 誇りを汚されて落ち……」

「いや……さ。当たってるんだけど」

密着されてるせいで胸が当たって落ち着かないのでそう言う

「!!……お前は人が真面目に話してるのに……ふ、不埒だぞ！」

そうは言われても困るんだが……

「その、なんだ……意識するのか？」

「はい？」

なんだ話の方向性が180度変わったぞ

「だから！　い、異性として意識するのかと聞いているんだ」
「えと……う、うん」

勢いに押されて頷く。箒は間違いなく可愛いし、意識するかどうか？　なら意識しないほうがおかしいだろう

「そ、そうか……うんうん」

何度も頷く箒……そしてふと目が合う

（あ……）

月明かりに照らされた箒の顔があまりに綺麗で俺は見惚れてしまった。丁度その時

「せ、セシリア!?　なんでこんなところにいんのよ！　てっつか良く生きてたわね。命門をピンポイントで蹴り抜いたと思っただけど……」

「り、鈴さんこそ！　というかさつきいきなり背中に飛び蹴りとか良くもやってくれましたわね!!」

「そうだぞ！　いきなり人中強打とか何を考えている!!」

「しんじやえって思ってた。今では仕留め切れなかった自分の甘さを痛感してるわ。シャルロットには防がれたし」

「考えてること一緒だからね。今日辺り闇討ちが来ると思ってたよ」

あんな事件の後でも決してブレない魔王×2とセシリアとラウラの声がする

（ヤバイ）

今は箒と二人きりだ何を言われるか……いや、何をされるか判らない

（人中と命門って……急所じゃん）

下手をすればショック死もしくは一生車椅子生活になりかねない急所を躊躇い無く攻撃する。鈴に戦慄し

「向こうに行こう……」

「え?」

すぐ近くまで来ているのが判る、どこかに隠れないと不味い……暫く歩き大きな石を見つけてその影に隠れる

（少しここで時間を潰してから旅館に戻ればいいだろう）

俺が安堵の溜息を吐いていると

「い、一夏……いきなりこんな人気の無いところにつれてこられては困る」

「うん？」

箒が何か言ってるので振り返ると

「ん……」

待て待て待て!! 何故に唇を突き出すんですか!?

(まずい……これは引き込まれる)

そのあまりに美しい様子に吸い寄せられるように顔を近づけたところ

「はっ!?!」

俺の顔面の前に突き刺さるクナイにも似た武器とサバイバルナイフ。そして

「ほう……」

「よし、殺す。手を貸しなさい、箒も一夏も殺すわよ」

「OK、でも一夏は半殺しね」

「ふふふふふふ!!」

魔王襲来……しかも皆様殺るき満々という表情

「ほ。箒！ 逃げるぞ!!!」

「えっ？ あっ!」

驚く箒の手を引いて脱兎へとジョブチェンジ。ISは使用できない代わりに武器を持ってきていたのか、俺の背後から迫る無数のナイフやダガー

(なんか先月も……うお!? 掠った!? 今掠ったぞ!!)

頬を掠めたナイフに顔を青ざめ。俺は全力で逃げ出した……止め
てお願い、死ぬ、死んじゃうから……

「話は終わった？」

「ツバキさん、どうしてここに？」

東と話していた岬に姿を見せたツバキさんに尋ねると

「匿名でメールがね。『今宵、岬に守護者が舞い降りる』 てね……」
守護者？ 私为首を傾げていると背後に人の気配を感じ振り返ると、そこには

「黄金の……騎士」

「こうしてみるの初めてね」

燃え盛る炎の翼と緋色の髪を持った男が宙に浮いていた

「どうも態々こんな所にお呼びして申し訳ない」

そう笑いながら着地すると翼が変化し赤いマントとなる

「今まで碌に姿も見せないのに急にどういいうつもりなのかしら？ 黄金の騎士さん？」

ツバキさんがそう尋ねると黄金の騎士は

「はっははは!! これは傑作。くつくく……私はもう何度も貴女達の前に姿を見せているが？」

おかしそうに笑う黄金の騎士に

「お前は何者だ、ネクロと何の関係がある？」

私がそう尋ねると黄金の騎士は笑うのをやめ

「10年戦い続けている敵だ。何処の世界にもどんな時間軸にも現れるのでな。中々対処が間に合わない……そういう面ではお前と一夏はついていたと言うべきだな」

何処の世界？ どんな時間軸？ 何を言っているんだ？

「ふふふ、判らないという顔をしているな。では説明してやろう」

黄金の騎士が指を鳴らすと無数の球体が浮かび上がる。それには

様々な景色や場所が映し出されていた

「世界は数多の姿を持つ、例えばこの世界の様にISが開発され、女尊男卑となった世界。そして魔法という文明が発達した世界。世界は1つとて同じ歩みすることは無い」

「並行世界の理論ね。じゃあネクロとは何かしら？」

ツバキさんがそう尋ねるが

「それは今の貴方達に知る権利は無い、私は暫くの間邪魔をするな、と言いに来たに過ぎない。つまりは貴女方には今全てを知る権利は無

い。今の所はね……」

「ふぎ……」「黙れ小娘」うつ……」

そのあまりの言い方に怒鳴り胸倉を掴もうとした瞬間。黄金の騎士の手には美しい装飾が施された西洋剣が握られており、それが私の喉元に突きつけられていた。だがそれ以上に強烈なまでの闘気に呑まれ完全に動けなくなる

「人は全てを知りたがる、それは罪では無い。しかしそれは時が来たときのみ、知ることが許されるもの……今はまだ早い。時を待つこともまた必要なことだ」

穏やかだが強い口調で言われた言葉に頷くと

「結構、物分りが良くて助かる」

やれやれ、女性に剣を向けるのは嫌いなんだがね。と肩を竦めると黄金の騎士の手の中に剣は空気に溶けるように消えた

「それが魔法かしら？」

「当たらずも遠からずとだけ答えておこう。今は知る権利が無いと言ったよな？」

表面上は穏やかだがこれ以上は聞くなと無言の拒絶をする。黄金の騎士にツバキさんは

「時を待てば教えていただけられるのかしら？」

「知りたくない」と望んでも教える。時が来れば貴女達の力を借りなければならぬからな……でも暫くは……黄金の騎士としてではなく」

黄金の騎士の身体を虹色の炎が覆う。思わず息を呑むとすぐに炎は弾け、そこから見慣れたIS学園の制服と黒いコートを纏った少年が姿を見せる。今旅館で眠っているはずの八神龍也だった

「IS学園の生徒として過ごさせて貰いますよ」

「驚いた……正体を教えてくれるとはね」

「別にこれが正体という訳ではない。ただIS学園にいるのはこちらの方が都合が良いと言うだけだ……」

そう笑う龍也だったが私を見ると鋭い視線になる。その眼光は鋭く凄まじいまでの威圧感を持っていた

「今回はまあ私の事を疑っていたから、私の意見を聞かなかったというのは判るが。そのせいで一夏は死に掛けた……次同じことになったら救える保障は無い。それに2度も邪魔されてまで人を救うほど私はお人好しじゃない、次邪魔をしたら私は一夏は救わない。良いな……」

「あ……ああ」

一夏を救ってくれたのは龍也だったのか……その事実には驚きながら

「すまなかった……」

「別に謝る必要は無い。疑わしきは罰せよともいうからな……まあ今回は正体を教えなかった事による不信が原因だったという事で水に流そう」

涼しい顔をしながら私達の横を通り過ぎながら

「ではいずれ……時が来たときにこの話の続きをしましょうか」

「ま……いない？」

待てと言おうと振り返った瞬間。その姿は無く……残滓の様な蒼い光が漂っているだけだった

「無駄よ。ああいうタイプは自分が話す時と決めるときしか話してくれないわ。姿を教えてくださいただけで感謝すべきよ」

「随分と冷静ですね……ツバキさん」

色々あって混乱してる私と比べて随分と冷静なツバキさんにそう言うとう

「これでも結構驚いてるのよ。でもまあ味方とみて間違い無さそうだし、そう気にすることもないかなって」

これは経験の差ということかと溜息を吐き、私とツバキさんは旅館にへと戻った……

「あつ！ 織斑先生、それにアマノミヤさん。ついさつき八神君が……」

「知ってる」

「え？」

驚く山田先生の横を通り部屋に戻ろうとしたところで

「二」待てーッ!!」

「誰が待つか!! 殺されると判って止まる馬鹿はいねえッ!!」

篠ノ之のお姫様抱っこし激走する一夏が見える

「少し話をしてきます」

「程ほどにね」

そして千冬が外に出てから数秒後

「殺す!!」

「二」逃げるーッ!!」

一夏含め全員が鬼神から逃げる為に全力疾走する事となる……

日付が変わる前、私は龍也君の所に訪れていた……先程ロビーで月を見上げているのを見たのでどうしても聞きたいことがあったのだ……

「少し聞きたいことがあるのだけど……」

「魔法についてなら答えませんよ」

そう笑う龍也君に

「これ……見てくれるかしら?」

砕け散ったISコアを見せると

「ふう……良い月夜そして……操縦者を最後まで護りきった福音に敬意を示すという事で答えましょう」

そう前置きしてから龍也君は

「ネクロは無機物・有機物関係なく寄生し・浸食する。普通ならば操縦者はISごとネクロ化していたでしょう……しかしそのコアは己を捨て最後まで操縦者を護った。砕けるのは当然の結果ですね」

紅茶を飲みながら龍也君の言葉をしっかりと記憶する。有機・無機物を関係なく浸食し同族と化す……つまり私が考えていた事は正解だったのだ。現存のISでは碌に戦えないというのは……

「ISコアには意思がある。そしてそのコアは自らの操縦者をネクロ化から護る為に自らを差し出した……そのおかげで操縦者はネクロ化から護られ。コアは砕け散った……普通ならネクロ化してて当然の操縦者が無事に生還したという奇跡。奇跡に対価はつき物……故

に当然の結果ですよ」

もう答えることは無いと言いたげに窓の外を見る龍也君にありがとうと声を掛け。旅館の奥の部屋に向かった

龍也君との会話から1時間後。旅館の一番奥で寝かされていた、銀の福音の操縦者のナターシャ・ファイルスが目を覚ましていた……

「気分はどうかしら？ ナターシャさん？」

「最悪の気分です」

「うつ……」

身体を動かし顔を顰めるナターシャに私は

「動かないほうが良いわ。全身の筋肉の損傷が酷いから。特に両手と右足の腱は完全に千切れてる」

回収されたナターシャの容態は酷い物だった……異常なまでの筋肉疲労に加え全身の骨に輝が入っている。少なく見積もっても全治半年は下らないだろう……

「あの子は……？」

福音の事……私はひび割れ砕け散ったコアを彼女の前に置く

「ネクロという化け物の浸食から貴方を護って……眠りについたわ」

砕け散ったコアを見て嗚咽を漏らすナターシャに

「これ……」

殆ど形を残さず砕けたコアを加工した、ペンダントを枕元に置く

「アメリカには報告したわ、ネクロにより銀の福音は完全消滅したつて」

最初は軍のお偉いさん方は私の話を信じなかったが。各I Sに記録されたネクロ化する福音を見たことでやっと私の話を信じた……と言っても最初にネクロに襲われたイギリスと同じく、アメリカもイヌラエルも自体を公には公開しないだろうが……

「とりあえず、今は休みなさい。ナターシャさん」

布団を被せながら言うナターシャさんは

「ありがとうございます」

とにかく今のナターシャには休息が必要だ……ナターシャが寝た

のを確認してから私は部屋を後にし自分の部屋に向かいながら
(急がないと……)

考えていたパッケージを発展進化させた。自立式の特殊兵装の完成を急がなければならぬと私は感じていた……

「教えないと言ったのに……気が変わってしまったよ。セレス、あまりに良い月夜だったから」

私は月を見上げながらそう呟き

「お前にダブって見えたのかもな。福音のコアが」

全てを見通す私の目にはちゃんと見えていた。ネクロの闇の侵されながらも操縦者を護ろうとしていた、福音の意思が

「やれやれ……まだまだ私も若い」

苦笑しながらセレスが再び与えてくれた右目を触る

「少々冷えてきたか……戻るとしよう」

月は好きだ、それは……

「きつと私が1人では駄目な人間だから……」

月は太陽が無ければ輝くことは無い。それは私もまた同じ……だからこそ私は月が好きだ。自分が今どれ程恵まれているのかを教えしてくれるから

「全てが終わり、私が眠りにつくときにまた会おうな。セレス」

窓に映る、セレスが残した髪と目を見て。そう呟き私は部屋に戻っていった……

「で？ 部屋に戻った目にするのがこれか？」

「「うーん」」

目を回しダウンしてるなのは・フェイト・はやて。3人が3人頭にタンコブを作っている。

「なのはとフェイトとが善戦したという所か」

全く二十歳を過ぎてるのに何時までも落ち着かないな。私は苦笑しながら3人に布団を被せ自分の布団に潜り込んだ

振り回される毎日もそう悪くは無いなと呟きながら眠りに落ちた

……

夢を見る……

赤い大地……

荒れ果てた街……

そして墓標の様に立ち並ぶ無数の剣……

(またこの夢……)

私は最近この夢をよく見る……何かの暗示なのか……それともただの夢なのか？

そしてこの夢は何時もここで終わる。

無数の剣の中で唯一と言っていいだろう、何の装飾も施されていない錆びだらけの剣その前で何時も夢は醒める、なのに……今日は少し変わっていた。剣に触れると同時に景色が変わったのだ……

「あり……がとう……殺して……くれて」

え？ 何この声……

廃墟の中に肩膝立ちで誰かを支えている人の背中が見える。

その人の腕の中を見て

(うっ!?)

思わず吐きそうになった……

片目を失い。左腕は根元から切り落とされている……しかもつとも私の目を引いたのは身体の半分を覆っている黒い細胞……

(ネクロ……なの……)

「家族には……言わないで……くれますか？」

「判った。お前はちゃんと職務を果たしたと伝える……」

「あり……がとう……**■** **■**大将」

そう笑うと男の人の体は粒子になり消えた……

「まただ!! また私は!!!」

その突然の大声に驚いた……膝を着いていた男の人は何度も何度も拳を地面に打ちつけ叫ぶ

「また護りたかった命は……私の手から落ちていった……何も！ 誰も私は護れてなんかいない!!!」

深い慟哭と絶望……皮が裂け血が噴出しても拳を打ち付けるのを止めない……

「キキ」

「グルルル」

破壊されたビルの影から無数のネクロがまた姿を見せる

「私は……私に出来るのは……貴様らを倒す事だけだ……その為になら……私は全てを捨てる……感情も夢も……そして命さえも……」

「In itself, a life does not have
itself in a sake. (己が命が己が為に
あらず)」

感情の抜け落ちた声で淡々と言葉が紡がれていく……

「The body does not have
itself to people. (己が体は人にあらず)」

・
・
・
・

(あつ……)

夢なのに……悲しくて涙が溢れる……

この人は凄く優しいんだ……

それが判るから……

自分を追い詰めているのを感じるから……

「that time — all feeling —
laughs at hidden self(その時まで感情全
て隠し我は笑う)」

「Because the way of life is
just my only one obtained answer
(その生き方こそが我が得た唯一つの答えなのだから)」

「The grave marker of the sword
of 1000 (千の剣の墓標) ツ!!!」

炎が奔る……そして世界が変わった。夢で見る赤い大地の世界に

と……

風が吹く……

何処までも透き通った風が……

「あ」

唐突に目を覚ました……もう少しであの人の顔が見えたと思ったのに。

「かんちゃん、なんで泣いてるの？」

「えっ？」

本音に言われて気付いた私が泣いている事にそれを拭いながら

「ううん、なんでもないよ」

どうして自分で泣いてたのか判らない……いや原因は判っている。
あの赤い大地と剣の墓標の数々……

そしてその世界で己の無力さを嘆き、全てを捨てると言った人の言葉
葉があまりに悲しくて寂しくて……

顔を洗ってふと隣を見る、エリスも同じ様に顔を洗っていた……

少しだけ目が赤い気もするが……気のせいだろうと思い

「おはよう、エリス」

「おはよう、簪」

さて今日で臨海学校は終わりだが……

「ねえ、エリス」

「なんですか？」

「懲罰トレーニングってどんなのだと思う？」

そう尋ねるとエリスは遠い目をして

「私が昔、お母さんにそれをされた時は……」

「時は？」

「気絶したいのに気絶できない地獄を見ました」

ああ……嫌だなあ……私拉致されただけなのに……

「まあ、私も同じなので頑張りましょう」

「うん」

そういつてロビーに出るとそこには

【反省中】

の看板の前に正座している織斑君達の姿が、全員が全員殴られたのか頭にタンコブを作っていた……

「裏切り者め」

「あのさ？ 人の鳩尾にいきなり肘鉄叩き込んで気絶させた後にいうのがそれ？」

シエンさんが呆れながらそう呟くのが見える、その反対側では

「ラウラ、こんど絶対お前をぶちのめす」

「根に持っているのか？ 仕方なかったんだ。許せ」

「いきなりボディからのアツパーのコンボをしておいて何言ってる！！」

弥生さんが朝からヒートアップして

「朝からやかましいぞ、薄野」

スパーンツ!!!

出席簿アタックが弥生さんの頭を捉えるのを見ながら、私とエリスは広間に向かって歩き出した。そしてその途中で外を見て

「あつ……」

龍也君が外に居た、制服の間から見える包帯、そして朝の潮風に靡く銀髪と黒いコート。太陽に向かって左手を伸ばすその背中は何故か、夢で見たあの男の人を連想させた……

(変なの……)

龍也君は私と同じ歳の16歳、あの夢の人はどう見ても二十代前半。同じに見えるのはおかしいと苦笑し私は広間に向かって歩き出した……

一夏達が臨海学校の後片付けをしている頃。 都内某所の無人島に作られたフロントムタスクの基地で

「ユウリ。お前の脱退試験の内容が決まったぞ」

「そうか……やっとか」

ワタシが軟禁されて今日で2週間。漸くか……身体を起こしたところだ

「何か言いたいことでもあるのか？ マドカ？」

用件を言ったからもういないと思ったマドカが居たのでそう尋ねると。マドカは

「今からでも遅くない。スコールに頼めば……」

「もう遅い、ワタシの心は決まっている。もうタスクに用は無い。それにお前のISの調整も、アラクネの調整も終えた。ワタシにもうタスクでやる事は無い」

最後にと頼まれたタスクの所有するISの整備は全て終えた。あとは向こうのメカニックが何とかするだろう

「試験と言うが、あれは突破できるものではない！ 試験の前にスコールに言え！ 残ると」

「何故そんなにワタシを引き止める？」

必死な形相のマドカにそう尋ねると、マドカは

「試験は……20体のディースと20匹のガルムを倒せだぞ？ こんなのは試験でもなんでもない！」

ディースとガルム。ネルヴィオの手駒の化け物達か……確かにそれだけ大群と1人で戦い生き残るのは無茶としか言いようが無いが

「それで良い……死んだら所詮ワタシはそこまでだったという事だ」

「ユウリ……」

「良い情報ありがとう。アイツ等用にアミノミカゲを再調整をしておく。もう行け……ここだって安全とは言えないからな」

この基地はネクロによって提供された。そんな場所が安全な訳が無い。もう何を言っても無駄と判断し部屋を出て行こうとするマドカを見ながら

(心配してくれるのはありがたいが……もう決めた事だ)

ワタシはタスクを抜ける。そして更識楯無にもう1度会う……探し続けた答えを得る為に……

「ずっと使わなかったが……単一技能を使わなければならないかもな」

アマノミカゲの単一技能は諸刃の剣だ……下手をすればショック死しかねないものだ。それ故に封印してきたが……そうも言ってもらえない

「それに……奥の手もあるしな」

アマノミカゲの胸部装甲に触れる

「死ぬならワタシも一緒だ……だから最後まで付き合ってくれよ」

死ぬつもりは無いがもしもと言うことはある……

「ふっ、くだらないな……」

弱気になってどうする？ そんな後ろ向きな考えでは勝てるものも勝てなくなる

「……よし、これで調整は終了だ」

プログラムの調整は終わった……後は試験の日を待つのみ……ワタシはそう呟きベッドに寝転んだ。そして2日後……命を懸けた脱退試験の幕が開ける……

第48話に続く

正月記念 偶には素直になってみよう

正月記念番外編 偶には素直になってみよう♪

全てのきつかけは私の不注意だった。夏休み中の義務となつてい
る訓練を終つたあと……訓練を頑張つた一夏達を労う為にアイス
ティーとケーキの準備をしながら

「おつと……茶菓子が無いな。しまった」

毎日毎日。お菓子を振舞っていたら、流石に作りおきが無くなつて
しまった

「何かなかつたかな」

食料とかの保存も兼ねている、黒いコートの中を探りお菓子を探す
「おつ。あつた……？ これなんだつたけな？」

買った覚えのないクツキーの箱を目にして。暫く考え込むが……
「まついつか。クツキーには間違いだろうし」

皿に取り分け。アイスティーのポットをカートに載せて。私は生
徒会室に向かつた……だがここで私は気付くべきだったのだ、クツ
キーの箱の裏にかかれた

【J・S特製。自分に素直になれるクツキー♪】

「お。何時もと違うクツキーだな」

「ああ。流石に作りおきが無くなつたからな。今度また作らんどいか
んな」

そう笑いながら。クツキーを配る龍也にシエンさんが

「あーそうなんだ、あのクツキー美味しいから食べすぎちゃんだよ
ねー」

「そうだな。売ってるクツキーと比べても遥かに美味しい」

確かに、あのクツキー美味しいもんなと思つていと

「あれさ、今度作りかた教えて欲しいな」

「ん？ 構わんよ。暇だしな」

からからと笑う龍也を見ながら、配られたクッキーを齧りながら。皆で雑談をしていたのだが、ふと生徒会室の空気が凍った

「でもさー。シャルロットも鈴も、あんな力づくをしてて良いと思うの? ……つてあれえ!」

シエンさんが発言した後慌てて口を塞ぐ。シャルと鈴は少しだけ怖い顔をしたが、気を取り直した様子で

「まー本当等は駄目だと思ってるんだけどね……あれ?」

「そうそう、他の方法が思いつかないっていうか……あれ?」

どうしたんだ? 何でそんなにしきりに首を

「じゃあ、やめてくれよ。俺毎回到死に掛けるの正直嫌なんだけど……あれ?」

言いたい事とは別の言葉が俺の口から飛び出した。反対側では

「見てる分には面白いんですけどね……え?」

「うむ、止める事で一夏の評価も上がるしな……ん?」

ラウラとクリスさんが首を傾げている……その様子を見ていた龍也は

「ま……まさか……」

クッキーの箱を引つ繰り返し。心底しまったという顔をしながら

「すまん……これ……ジェイルの薬入りクッキーだった」

「……はああああー……!?!?!?!」

前の臨海学校で出合った。色々つぶつ飛んだ科学者のイイ笑顔が一瞬脳裏に浮かぶ。え? 薬って何の薬を……まさか自白剤とかか? と考えていると

「いやー自分に素直になる薬とかでな。質問とかに全部素直に答えちやんだな……これが」

あはははと笑う龍也に

「笑い事じゃない!! 何て事をしてくれたんだ!!」

「龍也君。少々それはうっかりが過ぎます!!」

「でも龍也君は天然なのが良いと思う……ツうううツ?!?!」

「そくだよねー天然系王子様は需要が……あああ。違う!! 違うのーツ!!」

簪さんとシエンさんが爆発してる。慌てて口を塞ぐ俺達を見ながら龍也は

「まあ。きまわずかったら、自分の部屋でジツとしてれば良い。1時間くらいで効果は切れるから」

その言葉に我先にと口を押さえ部屋を出ようとするが

「駄目よ、駄目♪ そんな面白い事見逃すわけにはいかないわ」

楯無さんが生徒会室の扉の鍵を閉める。俺達は絶望な気分でもう1度椅子に座り。あはははと笑う龍也に

「「「この天然ど馬鹿ーッ!!!」」」」

声を揃えてそう叫んだ……これくらい言っても罰は当たらない筈だ

「じゃあ。皆名前書いてね? その紙を箱に入れて私が引くわ。名前が書いてある人は潔く口を開く事、いいわね?」

生徒会長がからから笑うのを見ながら。自分の名前が引かれない事を祈る

「龍也君も食べたら? 連帯責任でさ」

それは良いと私達全員で龍也君を見るが

「そのクッキーってあれなんだよ。私が誰を好きか? 自白させるつもりで作られたらしいんだがな、私って毒物と薬物耐性があるから、効かないんだ」

龍也君のチート能力が1つ判明した瞬間だった。もう龍也君を

巻き込むことは出来ない……その事に絶望していると龍也君は

「あと、あんまりプライベートな事を質問したら、楯無よ」

「なに?」

真剣な顔で龍也君はクッキーを纏めて5個持ち

「お前にこれを食わせる。私は10個食べても平気だったが、お前はどうかだろうね? 折角だからお前が隠している事を全部聞くのも面白いとは思わないか?」

目が笑ってない笑みに生徒会長が

「あ……あははは。そんな事しないわよ」

「そうかい？ それなら良いがね？」

絶対聞く気だったと私は思った。多分皆も同じ……

「じゃあ最初はだーれだ」

生徒会長が名前を読み上げた

「シエンちゃん♪」

開かれた紙には私の字で私の名前が書いてあった

「不幸だ！ 何で私なの!?!」

何時もどうしてこんな目にと泣きたい気持ちで一杯だった……

「じゃあ。龍也君をどう思っていますか？」

「……ぐっ！」

慌てて口を塞ぐ。それは絶対に言いたくない、魔王に目をつけられるなんていう事態は回避したい。なので口を塞ぐが

「駄目じゃない。シエン、ルール違反よ」

「そうだ、暴露するが良い」

ヴェクトリアさんと鈴に手を無理やり口から退かされた。もう駄目だ……私は泣きそうになりながら

「まあ……優しいし、格好良いとは思うけど……友達かな？」

もうやだ……手で顔を押しさえないけど、押しえられてるから顔も隠せない

「龍也君的にシエンちゃんはどうか？」

何でそんな事聞くな!?! 慌てて龍也君を見ると

「活動的だし。性格もさっぱりしてるから、割と好きかな？」

絶対顔紅い……鈴が凄い良い笑顔をしているのが無茶苦茶腹立つ

……

「ナイスリアクションね！ 良いわ。じゃあ次の人はー」

「……そと箱をあさる。生徒会長を見ながら私は椅子に座り。全員を見ながら

「皆も自爆しちやえ。絶対許さないから……」

この恥辱。絶対に忘れる物か……絶対皆も同じくらい。恥かしい目に合ってしまった。特に……

「よし、じゃあシエンは龍也にぶつけよう。魔王に挑む常識人。きつと面白いわ」

「そうだね。それでシエンさんが魔王になっても面白いよね」
くすくすと悪巧みしてる。鈴とシャルロットさんを見て

(駄目だね。あの2人は常にエンジン全開だから。この程度じゃ動揺しない)

魔王という渾名は伊達でもなんでもないわけだ……

「……勇者になるの?」

「無謀ですが、私も同類なので応援……忘れてください」

恐らく龍也君に想いを寄せているであろう。エリスさんと簪さんは出来れば。くじを引かれないといいな……数少ない常識人だし……となれば

(ヴィクトリアさん……貴女も地獄に堕ちなさい)

私の手を掴んだヴィクトリアさんを睨みながら……

(私明日からどんな顔をして龍也君の顔を見れば良いんだろう?)

友人ともいえる男子生徒との付き合い方を考えていた……

凄い目をしているな。私は明らかに怒っているシエンの目を見てそう思った。ノリでシエンの腕を掴んだの不味かったかもしれない。

「つぎはーあつ、ヴィクトリアちゃん♪」

「何故だ!? シエンの腕を掴んだからか!」

因果応報って奴か!? もしこうなると判つていれば絶対そんな事をしなかったのに……

「じゃあ、ヴィクトリアちゃんの理想の異性像は?」

口を塞いでしやがみ込む。この質問にだけは答えたくない

「爆発しなよ」

「はぐっ!」

しやがみ込んだ、シエンが私の両脇を突く。その突然の奇襲に驚き立ち上がると、シエンは素早く私の手を押さえ

「許さないから。指差して笑われなよ」

因果応報だ。これは間違いない、因果応報つて奴だ

「わ、わ……私が……好きなのは……ち……父上様のような人だ……」
生徒会室が静まり返る……そりやそうだ。この歳でファザコンなんてありえない

「笑え……笑えよ」

笑われたほうがましだと思い。全員を見るが皆気まずそうに目をそらす

「……そのごめんなさい。ヴィクトリアちゃん」

心底申し訳無きそうな顔をして、手を合わせる楯無に

「そんな顔をするなら最初から聞くなああアア!!!」

もう嫌だ。泣きたい……私はシエンに

「すまなかつた……」

「死ぬほど恥かしいでしょ？ 嫌がることはやめようよ」

その言葉に頷き。私は体育座りでいじけ始めた……

うわ……悲惨だな。あたしはどんよりとしたオーラを纏う。シエンとヴィクトリアを見てそう思った。

ISを動かせる男子への自分の気持ちとファザコンであることがばれたヴィクトリアの精神ダメージはきつと凄い事になっているだろう。

その有様を見て全員が全員、自分の名前が呼ばれませんようにと祈っている。そして楯無先輩が次の紙を引いた

「弥生ちゃん」

「何でだよ!! 何であたしなんだよ!!!」

思わずそう叫んでしまうほどのショックだった……そして楯無先輩のあたしへの質問は

「ギリシャ代表候補生の貴女から見えて。龍也君はどう思う？」

しにてえ……あたしはそう思ったし、絶対喋るものかと思うのだが。意に反してあたしの口は開き

「結構好きだな。強いし……優しいし……あぐう……憧れてはいる……うがあああ!! 殺せ! もういつそあたしを殺してくれ!!!」

顔が熱い。しかも龍也の目を見ていたから。もう恥かしくて死にたい

「どんまい。弥生」

「優しい目であたしを見るな!!」

とんでもなく優しい目であたしをみる。箒の手を振り払っている
と楯無先輩は

「熱烈告白ね。龍也君的にはどう？」

「そんな事聞くなあアアア!!」

予想だにしない事で振られて。笑われ者になるなんてあり得ない
「そうだな」

「お前も答えてんじやねえええ!!」

あたしはそう叫ぶが龍也はごく普通の表情で

「真面目だし、訓練も真剣にやってるし、良い子だと思うけどな。面倒
見も良いし弥生はやっぱ良い子だと思う」

もういやだ……あたしは体育座りしている。ヴィクトリアの隣に
同じ様に体育座りをして現実逃避を始めた……

生徒会室の一角は暗黒空間と化していた……シエンさん、ヴィクト
リアさん、弥生さんと来て。全員が全員深い闇のオーラを纏ってい
る。

「なあ？ 楯無何故あの3人は落ち込んでいるんだ？」

そして龍也の鈍感具合は凄まじい。3人のうち2人を再起不能に
した張本人はのほほんとした顔をしている。流石にあんまりだと思
う

「君が魔王を量産する理由が判ったわ」

俺も判った。龍也の周りが魔王ばかりの理由が

「そろそろ1時間ね、じゃあ最後の1人は……」

楯無さんが最後の紙を引いて。あはっ♪ と笑い

「最後は一夏君でーす♪」

逃げようとするが、即座にシャルと鈴に腕を掴まれ。無理やり座ら

せられる

「じゃあ一夏君が1番好きなのは誰ですか？」

その質問に鈴とシャル腕を振り払い。机の下に隠れる

「ちよつと！ 隠れるなんて男らしくないわよ！」

「そうだ一夏出て来い！ 出てこないと殴るぞ！」

「ほら……教えてよ。 僕の名前を言ってくれなかったら。首へし折る」

皆俺を殺す気満々だ。俺は絶対出てくるものかと机の脚にしがみ付く。あと数分で1時間だ、何が何でも隠れきると思っっていると

「どけ。机を破壊する」

「そうだね、それが速いね」

「ええ。一夏ならすぐ回復するわ」

ドゴン!! ドゴン!!

躊躇い無く学校の備品を破壊しに来てる!!

「備品を破壊されたら困るのよ」

「うおっ!？」

楯無さんの声がしたと思ったら。おれは机の下から引きずり出され。鈴達の前に強制的に立たされた

「さあ……答えて。一夏……酷い事しないから」

「ええ。教えてくれるだけで良いのよ。 大丈夫何もしないから」

その言葉に俺は気付いた、さっきまで感じていた違和感がない

「お？ 時間切れだな」

「た、助かったー!!」

龍也のその言葉に思わず、そう叫んだが

「まあいいわ、無理に吐かせれば良いだけの話だし」

「うん。そうだね。腕の一本でも極めれば教えてくれるよね？」

鈴とシャルがそう言っただけで俺の腕を掴もうとする。俺は開いていた窓を見て

「死んで堪るかアアア!？」

そう叫んで窓から外へと飛び出し。全力で走り出した、掴まれば死が待っている。それが判っていた俺の足は今まで以上に速かったが

…

ドドドドドツツ!!!

「つて来たあ!? もう追いついてきたあ!?」

魔王の速力は俺の数倍速く。あつというまに追いつかれた……そしてこの後の地獄は俺の精神衛生上の問題で決して思い出さたくないトラウマとして心に刻まれる事となる……

正月記念番外編 偶には素直になってみよう♪ 終り

第48話

第48話

「準備は出来てるかしら？」

部屋に来るなりそう尋ねてくるスコールに

「出来る限りの準備はした。後は天のみぞ知るといった所だな」

そう返事を返し、数週間ぶりに部屋を出る。外に向かってスコールと歩いていると

「恨まないのかしら？」

「何をだ？」

突然の事に訳が判らずそう尋ねると

「今まで色々とさせて、その挙句生存率の殆どない物を脱退試験として出した私をよ」

「なに。そうは思っていない……戦闘技術とISの整備の技術を教わった。それに何より……確率は低いがワタシをここから逃げれる方法を提示してくれた。感謝する理由はあっても恨む理由はない……」

そうといって黙り込んだスコールと暫く歩き。ワタシの脱退試験会場に続く通路の前でスコールが立ち止まる

「生き残れたら……貴方に渡したUSBメモリを八神龍也に渡して。彼ならあの暗号の意味が判るから」

そう言ってワタシを通路の方に向けて押した、そしてシャッターが閉まりスコールの姿は見えなくなった

「スコール……お前は……」

何らかの意図があってネクロに従ってると言うわけか……あいつが何をワタシ託したかは知らんが……

「期待には応えよう……ワタシもまだこんな所で死ぬ気は無いからな」

漸く見つけることが出来るかもしれない答えを前に死ぬ気は無い。

「さあ……行くか。アマノミカゲ」

空中から降りてくる首無しネクロ、デイスはそれぞれ打鉄やラ

ファールを展開している。その数約20……そして影から次々と現われ出る獣の様な異形

「グルルルッ!!」

ガラムとか呼ばれている。狼に似た魔法生物のネクロ化した物……数は20。マドカの言っていたことが本当ならばの話だがな……

「来い！ ワタシの進む道は誰にも邪魔させん!!」

この戦いを超えて。ワタシはワタシ自身の生きる意味を……捜し求めた答えを得る。それまでは死ぬわけには行かない……ワタシは腰部後側に帯刀された、長曾禰虎徹を抜き放ちディースへと向かっていった……

「ネル。ネル！ ユウリ、ゆうり！ 私のユウリ!!」

嬉しそうに笑うセリナの手を引いて私の隣に座らせる

「セリナはユウリが欲しいんだよね？」

「ホシい！ ユウリユウリ！ ワタシのわたしのユウリ!!」

狂ったようにただ1人の名を呼ぶセリナの頭を撫でる

「大丈夫。ちゃんとしてディース達はユウリを殺してくれるわ。そしてたユウリも貴女と同じにしてあげる。そしてたら貴女は永遠にユウリと一緒に生きていられるわよ？」

「うん！ うん!! ユウリはずっとワタシのソバにいてくれた！ ユウリ！ だいすきなダイスキナワタシのユウリ」

くすくすと笑いながらこの子を作り出したときのことを思い出す……暗い研究室の中で身体の半分を瓦礫の下敷きにされ。命が尽きるのも時間の問題という状況でも、生に執着し私の足を掴んだ被験体の1人。

「い……いきたい……し、死にたく……ない、た……助けて……」

他の2人の被験体はそれぞれ別々に回収された。しかしこの子だけは別の研究室に居たからか助けられる事の無かった

「死にたくないの？」

「し、しに……たくない……私は……まだ……何も伝え……てない。死にたく……ない……生きたい……生き……たい」

その生に必死にしがみ付く少女の姿はかつての私を思い出させた……

『どうして……パパはネルを助けに来てくれないの?』

私じゃない私は助けたのに。私は助けてくれないの? ただそれだけを考えた。そして判った

『パパの周りに人が居るのがいけないんだ。ネルのパパはネルだけを護りたいのに他の人が居るから駄目なんだ……じゃあ……全部壊しちゃえば良いんだ』

この時初めて私は私になった。その時の私に似ている……

「良いわ、助けてあげる。その代わり貴女は人では無くなるわよ?」

「……か、かまわない……生きて……居られるなら……私は、人じゃなくても……良い」

そう言いきった少女はそこで事切れた……空虚な紅い目と伸ばされた手を握り

「貴女は私と同じ。だから一緒に行きましょう?」

彼女を押しつぶしていた瓦礫を退け。ぐしゃぐしゃに潰れた右半身にネクロの細胞を埋め込む、直ぐにネクロの細胞は潰れた半身を復元した

「あ……アア?」

言葉を失っている少女の頬に触れる。ひんやりと冷たいでもそれでも彼女は生きている。死体にネクロの細胞を植え付けてのネクロ化は色々と弊害があったようだが無事に成功した

「行きましょう。私と共に」

「アウ……」

これが私とセリナの出会い。私と良く似たセリナは死んだ時こそ子供の姿だったが、直ぐにネクロの力を使えるように身体を成長させた……そしてその中に眠る狂気はよち強く。より私好みになった……それでも不安定なセリナは寝たり起きたりの繰り返しだったが、ここ最近はこうして私と行動を共にしている事が多い

「ユウリ……わたしのゆうり」

狂おしいまでの感情を込めた呟きを繰り返すセリナ

「大丈夫。デイスが駄目だったら、私が殺して上げる……」

「ゆうり……わたしのゆうり……はやくあいたい」

「大丈夫……すぐにユウリは貴女の物、もしデイスが駄目でも大丈夫。ちゃんと私が殺して貴女の元に連れて来て上げる」

セリナの頭を撫でながらユウリの戦いを見る。デイスは念の為に連れて来たが、ISでは碌にダメージは与えられないからガラムだけで充分だろうと思っていたが……

「AMF!? なんてあいつが」

ユウリが手に持った日本刀型ブレードの刀身の刃がうつすらとコーティングされているのが見える。それは紛れも無くAMFの輝き、ネクロは常に魔力障壁を張っているISでは何も出来ず死ぬはずだったのに、ユウリは次々と大型ネクロを屠っている

「まさかあの時の……」

前の仕事の時に渡したマルチタスクのプログラムの基礎とかを集めたジャンクデータの中にAMFのデータが混じっていたの？

「仕方ないわ……セリナはここに居なさい」

「うん……判った。ネル」

セリナは不安定だ、ユウリに会うことで何か影響があるかもしれない。まだ目覚めたばかりのセリナにユウリと接触させるのは得策とは言えない

「おいでモモメノ」

「うん……」

虚空から現れたモモメノを私の膝の上に座らせ

「もしデイスが全部やられて逃げられたら困るから。準備してて」

「うん……判った。ネルヴィオ」

「モモ、ひさしぶりだね？ げんきだった？」

「うん。セリナも元気そうだね」

セリナとモモメノの会話を聞きながら、ユウリを見据え

(これだけの才能。埋もれてさせるにはあまりに惜しい)

全く概念の違う技術なのにAMFをISに展開させるなんて……認めるのは癪だけど。ユウリは天才と言わざるを得ない、束とは全く方向性が違う天才だ……セリナが欲しい、欲しいと言っているのでネクロ化させるつもりだったが……気が変わった

(ユウリはネクロにする、そのほうが役に立つ)

デイスにはガラムが全滅するまで動くなど指示を出していたが、もう手加減は必要ない。

(好きに暴れなさい。デイスッ!!)

停止していたデイスが動き出し、ユウリにへと斬りかかつて行った……デイス相手にISでどこまで抵抗できるのか楽しみね……

(解析出来ていて本当に良かった)

ネルヴィオがワタシに寄越したマルチタスクの雛形とも言えるプログラムのジャンク。詳しくは判らないがデバイスと言う魔導師の持つISの様な物に組み込まれていたプログラムの残骸を組み上げ。再構築した擬似AMFは問題なく稼動している

(しかし……長くは持たんな)

「ガールルッ!!」

大口を開けて噛み付いてきたガラムの顎を蹴り上げ

「はっ!!」

怯んだ隙に長曾禰虎徹で頭から両断し、そのまま距離を取り手の中の長曾禰虎徹を見る

(ちっ……流石に刃毀れして来たか)

ISの武器に施した。擬似AMFのコーティングが崩れて来ている、流石に異なる世界の技術となると解析が難しく。長い時間掛けて漸く長曾禰虎徹2振りにコーティングすることに成功した……だがあくまでこれは粗悪な模造品。使用すればするほど長曾禰虎徹の刀身にダメージを与える、トドメにしか使っていないが。倒したガラムは9体……残りは10匹、その背後に打鉄とラファールを纏ったデイスがそれぞれ6体ずつ。残りはISは展開していないが……

(ちっ！ ネクロというのは何処まで出鱈目なんだ!!)

思わず舌打ちする。さつきまで、両腕をだらりと下げてディース達
の肩や腕が変形し砲門やブレードに変化する。それと同時に強烈な
殺気が放たれ始める

「っ!!」

何の予備動作も無く突っ込んでくる。打鉄を展開したディースは、
両手のブレードでワタシに飛び掛かろうとしたガルムを薙ぎ払い。
返す刀で私を頭から両断せんと振り下ろしてくる。それを後退の瞬
時加速で回避しようとするが……

「くッ!!」

既にラファールが2機銃を構えている。後退すれば一斉に引き金
を引くだろう。いやそれだけじゃない。打鉄を展開したのが3機待
ち構えている

(急にやる気になった! どういう事だ!)

今まで動く気配なんて微塵も見せなかったディースが攻撃態勢に
入ったのが気になる……

「アアアアアッ!!」

「くっ!」

咆哮と共に振り下ろされるブレードは長曾禰虎徹では受けられな
い。右側の腰にマウントしていた日本刀を抜き放つ。レーザーを斬
れる能力を持つ特殊機構を内蔵した刀。「雷切」

「はあああっ!!」

長さも重さも日本刀に近い雷切はもつとも剣技を使うのに適して
いる。力任せに振り下ろされたブレードを刀の腹で受けそのまま受
け流しながら懐に入り込み

「まずはーッ!!」

両足の装甲に搭載されている隠し武器「鎧通」でディースの胴体か
ら両断する

「ぐぎやあッ!!」

「トドメだ!!」

長曾禰虎徹でディースの胸元を貫く。硬い何かの手応え
「シャアアアア……」

貫かれた場所から消滅するデイス。長曾禰虎徹の刀身には何かの欠片が付着していた。

「ワタシの感も捨てたものじゃないなッ!!」

背中の旋回式特殊ブースターで加速しながらの側転でその場を離れる。それと同時に雨霰の様に降り注ぐ銃弾の嵐を横目に……さつき消滅したデイスが手にしていた剣を蹴る

「グギャアアアッー」

それは回転しながら今正にワタシに飛び掛ろうとしていたガルムの口に突き刺さった

「はっ!!」

間合いを詰めガルムの口の中の剣の柄を掴んで真上に振り上げ、ガルムを両断すると同時に一気に後退し戦況を確認する

(ガルムは……後4匹。デイスは……)

ワタシを一瞬見失い辺りを見ているデイス達は打鉄装着が残り5体。ラファールが6体。通常体が9体……

(ほぼ万全と言ったところか)

それに比べてワタシは……

(出血は軽いが動けは出血は激しくなるのは当然……それにアミノミカゲのエネルギーは残り約半分……武装は……長曾禰虎徹の損傷は甚大、使用出来る回数は良くて9回……)

他にAMFの加工が出来た武器はない。ここでという場面で使ったとしても全てのデイスは倒せない……となれば回復量を上回るダメージを叩き込むか、コアを粉碎するしかない……

「良いさ……ワタシのやることは変わらない……抜けさせてもらおうッ!!」

漸く見つけた答えを目前に死ぬわけには行かない……なんとしなくてもこの場を切り抜ける!

「無理だ……」

私はユウリとネクロの戦いを見てそう呟いた。確かにユウリは

数体のネクロを仕留めているが、まだ敵には全く損傷の無いネクロも居る。それに比べユウリは

「くっ……まだまだっ!!!」

両手に持っていたブレード。確か長曾禰虎徹とか言う刀の内一本が碎け。背中にある特徴的な可動式のウィングブースター半壊し。目に見えて機動力が落ちている

「シャアアアアッ!!!」

「くっ……があっ……」

ラファールを纏ったデイスが切り裂かれた打鉄の影から飛び出し。その腕に搭載された第二世代最強と言われた兵装「盾殺し」をアノミカゲに突き立てる。次の瞬間パイルバンカーが打ち出されアノミカゲが弾き飛ばされる

「が……んほっ?」

その勢いで壁に叩きつけられ咳き込むユウリに半壊した打鉄を纏ったデイスが迫る

「舐めるなアッ!!! 人形がッ!!!」

手にしていた長曾禰虎徹を投げつけると同時に瞬時加速に入り。

長曾禰虎徹が打鉄の装甲に突き立った瞬間

「おおおおっ!!!」

ブースターで加速した拳で柄を殴り長曾禰虎徹を深くめり込ませる

「ギャアアアアアッ!!!」

断末魔の悲鳴を上げ消滅するデイス。だが……

パキャン……

無茶をした長曾禰虎徹は中ほどから碎け粒子に還った……

「これでAMFの武器は無くなった……」

ユウリでもAMFの加工を施すのは長曾禰虎徹2本が限界だったはず……もうデイス達に有効なダメージを与えられる武器は無い。となればデイスを倒すには回復されるよりも早く畳み掛けるしかない、だがそれをするには

「数が多すぎる……」

打鉄を展開したのは残り1体だが。ラファールは3機。ISを展開していないデイスは7体。今のこの状況では何一つ勝てる要素は無い

「……残り1体か……」

度重なる打撃でアマノミカゲの特徴的なフルフェイスの頭部装甲はひび割れ、右目が露になっている……だがその目を見て私は驚いた（まだ諦めていない!?)

その真紅の瞳に諦めの色は無く。まだ勝つ事を諦めてはいない……何故そんな目が出る？

「ふー……単一能力。核同調（コアトレース）……起動（ドライブ）ツ!!!」

フルフェイスが變形し、美しい銀髪がフルフェイスの下から現れ、フルフェイスだった装甲は仮面の様に変化する

「単一技能!」

アマノミカゲがセカンドシフトを終えた機体だとは知らなかった……それにも驚かされたが

「は、速い!」

今までの機動とは明らかに違う……一瞬で間合いを詰め童子切安綱でラファールを両断し消滅させる。ラファールの手から零れ落ちたアサルトライフルを構え後退しながら引き金を引き続ける。弾が無くなると同時にそれを投げつけ

「シッ!!」

両腕部から逆手で脇差に似たブレードを抜き放ち、瞬時加速でISを展開していないデイスを通り抜けざまに斬り付け、そのまま最高速度を維持したまま上空に逃れるユウリの姿を見て

（……本当にユウリはタスクを抜けるつもりなんだな）

あれだけの機動力とタイムラグなしの瞬時加速。そしてSEが減れば減るほど威力を増す童子切安綱を抜いた以上。ユウリは恐らくデイス達を全て倒し試験に合格する……そうなればユウリは私の敵となる

「僅かでも情報を取らせてもらおうぞ……ユウリ」

タスクで唯一友人と言えたユウリ。それがもしタスクを抜け敵に回ると言うのならかつての友として私が討つのが道理。オータムにもスコールにもやらせはしない、私がやるべきことだ……その為に私は初めてユウリを敵とし戦う為のデータ取りを始めた……

(世界がクリアに見える……)

風の流れも大気の唸りまで見えるようだ……アマノミカゲの単一技能。「核同調」は言うならばISと操縦者の一体化。つまりISサイズの人間とする技能と言える。行動までのラグや本来なら複雑な制御を持つて為される操縦も難なくこなすことが可能になる。

「くっ!?」

両腕と両肩を生態砲に変化させワタシを狙い撃ちしようとする。デイスから距離を取り。腰の鞘に収められているアマノミカゲ最大の武器。SEが減るほど威力を増す童子切安綱を見る

(エネルギー回復まであと2分)

童子切安綱は威力の秘密は鞘にある。SEが減れば減るほど鞘はエネルギーを蓄える、抜刀時にそれを解放することで溜め込んだエネルギーを加速力に転化し。破壊力を上昇させる能力を持つ……今のままでも普通の対人戦には十分なエネルギーを蓄えているが、デイスを一撃で倒すにはもっとエネルギーをチャージしなければならぬ

「シャアアアアッ!!」

「はっ!!」

背中の装甲を翼に変化させた追いついてきたデイス目掛け。胸部装甲に収められている投擲用ブレード「飛針牙」を3本抜き投げつける

ドンッ!!

命中と同時に爆発する飛針牙。デイスが怯んだ隙に瞬時加速に入りその横を最高速度で通り過ぎる

「ギギャア……」

アマノミカゲのウイングブースターには翼に見せかけた七支刀「天叢雲劍」がある。それで斬り付けだけのつもりだったが……

(ついでるよ。本当になー！)

その一撃は運良くコアを砕いていた。牽制のつもりが1体を仕留めた。運が良いにも程がある……だが天叢雲劍は中程から輝が入りもう使い物にはならないだろう……

(残りは9体……童子切安綱は3度振れる、それで行けば残り6体……何とかなるか?)

しかしこの樂觀が良くなかった

「!? なにイツ!?」

地面に居たディースの腕が遙か上空まで伸びてきてアマノミカゲの脚部に絡み付いている

「ま……まず……うぐっ!」

そのまま地面に向かって引き寄せられ。勢いをつけて地面に叩きつけられた

「ぐはっ!」

その衝撃に思わず息が詰まるが、足に絡み付いていた腕を切り裂きそのまま距離を取る

(ぐっ……肋骨をまとめてやられた……それに左足は完全に砕けたか)

核同調には致命的なデメリットがある。それは受けたダメージが完全に操縦者に跳ね返ることだ。この状態で絶対防御が発動しようものならばその瞬間にショック死する可能性もある。だから今まで使わなかった……

(切り抜ける為とは余りに分の悪い賭けだな)

ダメージが思ったよりも大きい。シールドエネルギーは残り100ちよつと……直撃を喰らえば即アウト……だが今のダメージで靴のエネルギーは最大になった。今ならば鞘に収めればすぐにチャージが終わる

「一撃喰らえばアウト……だがこちらの攻撃でもあいつらを一撃で倒せる……良い条件じゃないか」

簡単なこと、一撃喰らえばアウトなら全部避ければ良い、核同調している今ならば全てを見切ることも不可能では無い。そしてこちらは抜刀術で一撃必殺でデイス達を切り捨てれば良い。これほど判りやすい状況は無い

「今のワタシの剣筋を見切れると思うなよ。人形共……」

身体のダメージは深刻だが、それ以上に気力が充実している……今ならば出来る

「シャアアッ!!」

さつきまでは速いと感じていたデイスのスピードでさえ遅くスローモーションに見える

「禍ッ月……」

ザンツ!!

振り下ろされる爪をまずは横薙ぎで切り払い。踏み込みながら童子切安綱でデイスを頭から両断し、鞘に収め

「はっ!!」

背後から迫ってきていた最後の打鉄を展開したデイスを胴体から両断し、頭部を踏み潰し。

「グルルルツ!!」

「遅いッ!!」

地面に突き立ったままの打鉄用ブレードを蹴り上げ右手で掴み、アサルトライフルを構えていたラファール目掛け投げつける。それは高速回転しながらアサルトライフルの銃口に突き刺さる

ドンツ!

銃口が塞がれているのに引き金を引いた瞬間。アサルトライフルが暴発する……だがネックであるこの2機には何の支障もない、しかし一瞬怯んだ隙に

「ふっ!!」

瞬時加速で切り込み2体を纏めて両断する……しかし奥に居た方のデイスのコアには届かなかったのか。その腕を伸ばしてくるのが見える

「甘いッ!!」

右側の腰に納めたままの雷切を抜刀し、露出しているコアに突き立てる。それと同時に手の中の雷切から嫌な音がする

「グギャアアア……」

コアと同時に砕け散る雷切。ネクロのコアの強度は非常に高い、同時打ちと考えれば善戦してくれたほうだ。これで残りはISを展開していないデイスが5体。ISを展開してないとは言え脅威である事は間違いないが……

「今のワタシを止めれると思うなよ」

ISを展開しているのならばいざ知らず、ISすら展開していないデイスに負ける気がしない。それほどまでにワタシの集中力は増していた……

・
・
・
・
・

ザンツ!!!

「貴様で終わりだ」

最後の1体を両断する……ダメージはかなり大きい、そのおかげでデイスのバリヤを貫通するだけの攻撃力を得る事が出来た……

「試験は終わりだろう！ バリヤを解除しろスコール！」

海に面した側のバリヤが解除される。そこから出て行けということとか……

(出血も多い……骨も折れている……だがワタシはやりきった……)

核同調を解除しバリヤが解除された所に向かって……

『ユウリ！ 避けなさい!!!』

スコールの怒声に従い横に飛ぶと。ワタシの居たところに巨大なレーザーの様な光の柱が突き立つ

「何のつもりだ？ ネルヴィオ？」

ナツクルガントレットを展開しクスクスと笑っているネルヴィオは

「うん。脱退おめでどう……じゃあ死んでよ。タスクの人間は殺さないと言ったけど抜けたんだよね？　じゃあ殺しても何の問題も無いよね？」

邪気の無い笑みを浮かべるネルヴィオに

『ネルヴィオ！　約束が違う！』

「スコール……約束は破るものなんだよ……それにここまで強くて魔法を独学で解析する天才を手放すほど私達は馬鹿じゃあない……」

左手から放たれた光弾がスピーカーを砕く

「じゃあ。邪魔者の声も聞こえなくなつたし……さくつと死んじやつてよ♪」

ヒュッ

「なっ!?　ぐふっ!」

「あはっ♪　肋骨頂きッ♪」

一瞬でワタシの間合いに入り込んだネルヴィオの肘鉄がワタシの肋骨を纏めてぶち砕く

「じゃあ次は顔かな!」

「くっ!」

顔目掛けて振るわれた拳を防ぐが……

「はい、右足もーらいつ♪」

「ツ!?　ぐあっ!?!」

ISの装甲ごと右足が蹴り碎かれる……身体がくの字に折れたワタシの腹に

「滅殺無拳……懺拳拷破「バイウエルガイスト」

闇色の輝きを放つネルヴィオの拳が腹に突き刺さる

「ぐふっ……ぐはッ……」

肺から強制的に酸素が吐き出される。そしてそのまま殴り飛ばされる

「ぐうう……化け物め」

「酷いなーこんな美女に化け物は無いんじゃない♪」

にこにここと笑いながらネルヴィオは

「ユウリのISのデータも欲しいし、ユウリの身体も欲しい。きつと

貴方は良いネクロになる。もしかするとこの世界初のLV4に成れるかも……だから早く死んでよ」

「ふーなるほど……お前の言いたい事は判った」

「じゃあ死んでくれるのかな？」

「ここにこと笑うネルヴィオに

「ああ、降伏しよう……今のワタシではお前に一矢報いることすら出来ん」

ISはかろうじて展開を維持してる状態、ワタシ自身もう既に剣を振るだけの体力もない……

「ふっふー♪ 素直なのは良いことだよ。じゃあ殺してあげるよ♪ 苦しまないように一撃でね！」

「裝飾もなにも施されていない無骨な剣を取り出し構えるネルヴィオに

「降伏はする。だがアマノミカゲもワタシも貴様の思い通りにはならん」

握りこんでいたスイッチを顔の前に持つてくる

「もう1度言う……降伏はする。だがアマノミカゲもワタシも貴様の思い通りにはならん」

「まさかっ!？」

ワタシのやろうとしている事に気付いたネルヴィオが飛び掛つてくるが

「もう遅い……」

カチッ!

アマノミカゲの装甲に搭載されていた、2キロにも及ぶ高性能爆薬が一斉に炸裂した……

凄まじいまでの爆発に流石のネルヴィオもプロテクションを張つて耐えるしかなかった……

「くっ……ユウリ・クロガネえッ!!」

爆風が収まると既にユウリの姿は無かった。残っていたのは罅割れたアマノミカゲの装甲と、血痕のみ……怒りが収まらない表情でネルヴィオは

「折角私が！ ネクロにしてやるって言ったのに!!」

どす黒い炎をその目に宿しながら残ったアミノミカゲの装甲を全て踏み砕き

「もう良い！ 帰るッ!!」

そう怒鳴りネルヴィオは闇に呑まれる様に姿を消した……1人残されたセリナは

「……判る。ユウリは生きてる……ちゃんと逃げてね……ユウリ」

さつきまでとは違い、落ち着いた声でそう呟くと立ち上がり

「……もう……無理みたいね。……あ？……ネルウ？ ネルどこ？」
かえったのかわくじゃあワタシもかえろう♪」

急に淀んだ目になりネルヴィオと同じ様に闇に溶け込むように消えていった……

～I S 学園近くの海上～

「うつ……」

自爆したはずのユウリは生きていた。ユウリはAMFだけではなく1度だけの使いきりになるが、プロテクションの発生装置の作成にも成功していた。それが爆発のショックを和らげ彼を海の方に向かって弾き飛ばした。

だが彼は紛れも無く重症で意識を失ったまま海面を漂っていた……そんな彼を見つめる蒼い目

「……貴方にはまだやるべきことがある。ここで死んだら駄目」

静かにそう呟いた何者かは海面に浮かぶユウリを抱えその場を飛び去った……

第49話に続く

第49話

第49話

「セカンドシフト 白式・白雪」

ネクロ化した福音を倒した形態はもつと大きく重厚な物だったが、戦闘終了と共に姿を変えた白式の解析をしながら私は

「うーん。あの形態と比べると出力は劣ってるけど……それでもかなりの性能ね」

記録されていた形態では全身の装甲が大きくなり、ぱつとみフルスキンに近い形状をし、顔にはバイザーが装着されていた。それに武装面では背中に二門のエネルギーカノンと、雪片と同じ能力を持ったブレード。更には展開装甲らしき物も搭載されていた。しかし今の白式は

「両腕に零落白夜のエネルギークローとバリヤを展開出来る装甲と、脚部・肩部の装甲が強化されブースターも追加。格闘戦に特化してるわね」

背中の中二門のエネルギーカノンと各部の装甲の一部がオミットされ。展開装甲らしきものが排除され。近く中の格闘戦に特化した機体になっている。エネルギーも増え確かに強化されているが、福音を撃退した形態とは比べるまでも無く弱体化している

「どうしてかしら？」

セカンドシフト態が2つというので既に異常なのに。何故可弱体化をしている白式・白雪には判らない事があまりに多すぎる

「龍也君だったら判るのかしら？」

何でも知ってそうだが、決して私達に話す事は無いという態度を貫いている龍也君の事を思い出す。知りたいと願う事は罪ではないと言っていたが時が来るまで知るのは許されないとでも言っていた、今聞きに行った所で何も答えてはくれないだろう

「千冬もねえ……戦闘者だからこういうときには役に立たないし」

下手をすると折角の貴重なデータを間違えて消去されかねない。

それに他にも気になる点がある

「操縦者が碌に憶えてないってのが引つ掛かるのよね……」

一夏君は自分が福音を倒したことは覚えていた。しかしどうやって倒したのか？ 自分が何をしたのか？ と言うのがすっぱり抜け落ちていたのだ。黄金の騎士と話した事は覚えていると証言している、ちなみに黄金の騎士と接触し会話したと言う事実は緘口令が引かれた。どこの組織にしても黄金の騎士の情報を求めている中、そんな事を迂闊に発言されると不味い事になると判断した千冬の指示だ。「しかし、対応も予想通り過ぎて困るわ」

銀の福音については暴走の末コアが破損し、ハワイ沖の海溝に福音のコアが沈んだとアメリカとイスラエルは共同で発表しネクロの事は伏せられた。当然と言えば当然の結果だけど……余りにお粗末過ぎる。

(今度は本国を強襲されたらどうするつもりなのかしらね)

ネクロはISでさえ寄生することが今回の暴走事件で判った。それなのに情報を隠蔽することに呆れながら。福音を撃退した時の白式と現在の白式のデータ比較を続けるが

「うーん。訳が判らないわ」

1度一夏君に頼んで実験してみたが、白式の姿は変わらず。結局福音を倒したときの白式のデータは各々のISに記録されたものを集計した物しかない。それではまともなデータも集まらず完全に行き詰ってしまった

「んーちよつと休憩しようかしら」

そう言つてログハウス内の研究室から出ると

「うおっ!? ウマツ!? これどうやって作ってるんだ!？」

「赤ワインがポイントだ。後はスパイス……数があるから分けてやるう」

銀髪黒コートといつもと同じ格好の龍也君がシエルニカと一緒に料理をしていた

「な、何をしているの?？」

「あ、ツバキさん。聞いてくれよ、龍也ってすごい料理上手なんだぜ

！ このビーフカレーなんてもう絶品だ。あたしじゃこうはいかないんだ」

ビーフカレーを味見しているシエルニカとその隣でどうもと頭を下げる龍也君に軽い頭痛がした

「僕はそのマーボーが食べたいんだけど？」

「ああ、アンリマユこの世全ての辛味かく 良いぞ。作ろう」

「兵器を作るなあ!!! お前料理人の癖にあれを料理を認めるのか!？」

「良いんだ、食べる人が美味いと思えば。一口で人を三途の川に送るマーボーだつて、ご飯に大量の小豆を乗つけた物だつて料理になる」
「それで良いのかあ!？」

「なんだろう？ 龍也君がシエルニカとなんか仲良くなってる。」

「マーボー♪」

しかもアイアスちゃんとも何時の間にか知り合い……いや餌付けされてる……

「つて痛いッ！ 目が痛い!？」

急に厨房から漂ってきた刺激臭に目と鼻をやられ、思わずそう叫ぶと

「ツバキ殿。これをどうぞ」

「ふ、フレイア？」

水泳ゴーグルとマスクを手渡される。フレイアは既に装備している

「目と鼻が完全にやられる前にどうぞ」

それを受取りながら

「偶にここに来てるの？ 龍也君」

「ええ、シエルニカが自分の料理のバリエーションを増やしたいとかで……」

一応護衛任務についてる人間のコメントでは無いと思う

「では、これを一煮立ちさせて、豆腐を入れれば完成だ。あとは自分でやってくれ」

そう言つて龍也君はログハウスを出て行こうとする。それを
「何処に行くのかしら?。」

「4時間目は一夏達の懲罰トレーニングだそうで、私が監督するように命じられているのですよ。まだ時間があるとは言え戻らなければ……織斑先生に地獄に落とせと言われていたのでね」

苛めっ子の笑みを浮かべる龍也君、まさか簪ちゃんとエリスちゃんもと不安に思っている

「ああ。簪とエリスは通常授業ですよ？ 簪は拉致されましたから。なんでも部屋から出た瞬間に鳩尾を強打され気絶し、そのまま肩に担がれて連れて行かれたそうです。首謀者はラウラとクリスでした。なので2人のトレーニングは2倍です」

イイ笑顔だ……余程ストレスがたまっているに違いない
「という訳なので失礼します」

そう言って出て行くこうとした龍也君だが途中で立ち止まり

「興味が沸いたから行ってアンリマユくこの世全ての辛味は食べない方が良いですよ。一口で臨死体験しますから」

どんなマーボーよ。それ……私はそう思ったがそこまで言われて食べるほど馬鹿では無いので。シエルニカが絶賛していたビーフカレーを昼食にし。その余りの美味しさに驚愕することになるのだが、それはまた別の話になる

……アリーナで俺達は震えていた

「あつ……」

「はい、アウトーツ！」

「バチーンツ!!!」

「ツ?!?!」

「ゴロゴロツ!!!」

デコピンをされ。額を押さえ悶絶するラウラ。

「じゃあ、次一夏」

「うつ……ああ」

懲罰トレーニング、その教官には龍也が選ばれていた、何故かって

？ 教員に手が空いてる者がいないこと、そして龍也自身のISの深い理解と訓練内容の濃さで罰に丁度良いとの事で千冬姉が任命した。夏休みまで1日1時間。それと放課後の1時間の計2時間龍也の訓練を受けなければならないのだが……その内容がとんでもなくハードなのだ。「マルチタスクの練習だ。1〜25までを良いながら指差すこと良いな？ 間違えたらデコピンだ」

これで箒・鈴・シャル・ラウラ・セシリア・クリスさんが餌食になっている、全員涙目で額を押さえ蹲っている

「い、痛い……」

「頭蓋骨が陥没したかと思った」

「ううう……織斑先生に指示とは言え手加減が無いにも程がありますわ」

文句を言う面々（箒・鈴・セシリア）

「……」

言葉も無く蹲る面々（シャル・ラウラ・クリスさん）

「はい。スタート」

ああなるまいと気合を入れて

「1……あっ」

俺が1と宣言して指差したのは11

「アウト……お前」

「言うな……」

しょうもないにも程がある。緊張しすぎてどしよっぱちから凡ミス

「まあ良い。デコピンだ」

バシッ!!!

「?!?!?!」

絶対頭蓋骨陥没したと思うほどの衝撃。額を押さえゴロゴロと転げまわる。今のデコピン千冬姉と良い勝負だ……

「じゃあ次ヴィクトリア」

「ああ……」

そうしてヴィクトリアさんの番になったが。16でアウトになる、

デコピンで悶絶だなど思ってみていると

「待て」

「ん？ なんだ」

ヴィクトリアさんは龍也の顔を見て

「私はデコピンではなく。無限組み手を希望する」

「ほう。何故だ？」

龍也がそう尋ねるとヴィクトリアさんは

「デコピンで終わるよりも、無限組み手で体捌きを覚えたほうが有意義だ」

「良いだろう。相手をしてやる、ルールはいつもと同じでいいな？」

「ああ」

頷き龍也に抜き手を放つヴィクトリアさんが

「見よう見真似は止めた方がいいな」

パシツと軽い音を立てて弾かれ、そのまま足払いが放たれる

「それは何度も見た」

ヴィクトリアさんはそれを軽い跳躍で回避し、着地と同時に肘打ちを放つ

「甘い」

それは掌で受け止められたが、そこからヴィクトリアさんは自ら間合いに入り込み拳打や蹴りを連続で放ち、有効打を取ろうとするが

……

「届かない！ こんなに近いのに」

「まだまだ、甘いことだ」

顔への正拳をすりと掴まれそのまま右手が振るわれると

「うおっ!？」

ヴィクトリアさんはポーンと宙を舞った……

「凄いな……どうやってるんだあれ？」

「私の見たところ合気道に見えるが……」

「え？ 中国拳法でしょあれ？」

「バリツツに見えるのですが？」

「僕もそう思う」

と俺達が龍也が使う体術について話し合っていると

「あれは……合気道でも、中国拳法でも、バリツツでもない」

デコピンで悶絶してたクリスさんが復活してそう言う。涙目の上に額を押さえながら

「その全てのミックスとも言えるしそうも言えない。とりあえず言えるのは龍也の独自の体術という所。あとカポエラ・CQC・システマ・とにかく何でもあり」

「うむ……そうだ」

涙目のラウラにちよつと萌えた。何度も額を擦る姿が猫の様に見える可愛

「一夏？　今何か変なこと考えた？」

「イイエ。何も考えておりません」

鈴がこきこきと拳を鳴らしている。俺が何か気に障ることを言うものなら即座に命を狩に来る。しかしそれは鈴だけでは無い

「はい」

とんでもなく綺麗な笑顔のシャルルも危険だ。俺の身近の魔王で一番危険なのは言うまでもなく千冬姉。次に鈴、シャルル、箒と続く……

「痛い……」

「だから猪突猛進は止めろ。まあその思い切りの良さは買う。一夏の様にギリギリから牽制を繰り返すよりかは余程ました」

俺遠回しに臆病者といわれてる？　俺がそんな事を考えているとクリスさんが

「でもどうして後ろからや死角からの攻撃を弾けるの？　感が良いというだけで片付けられない」

そう尋ねられた龍也はふむと言ってから、コートから2本の木剣を取り出し

「ラウラはこれを使え、それと箒は竹刀を使うと良い」

突然の事に首を傾げる俺達に龍也は

「説明するより見たほうが早い。2人で好きに打ってきてくれて構わない」

そういつて目隠しする龍也

「目隠ししてどうやって避ける気だ？ 怪我をするぞ」

「良いから、良いから打って来い、どうせお前らの攻撃は当たらん」

自信満々にそう言う龍也にむっとした表情で箒とラウラがそれぞれ竹刀と木剣を構え、すり足で近付き同時に突きを放つ。ラウラは横から、箒は正面から

「ふっー！」

目隠ししたまま龍也は左手でラウラの突きを弾き。円を描くように右手を動かし竹刀を明後日の方向に受け流した

「ええ？ なんで？」

驚く俺達。完全な死角のはず……それなのに何故弾ける？

「ラウラ」

「ああ」

2人が正面から攻撃を繰り出す。ラウラは両手の木剣での連撃を、箒は龍也が攻撃を弾いた隙を狙っての大振りな一撃でそれぞれ攻撃を当てようとするが

「甘い甘い」

「くっ!? 何故だ？ 何故当たら……ぬおっ!？」

ラウラの何回目かの横薙ぎを受け止めた龍也はそれを捻るようになじり上げる、手首を掴まれているのでラウラも体を捻るしかない。体勢を崩されたラウラは足払いを仕掛けられそのまま転倒し。

「もらっ……なっ!？」

「だから。甘いと言っている」

人差し指と中指で竹刀を受け止め、地面に転がっていた木剣を蹴り上げ空いている右手で掴み、箒の喉に突きつける

「ゲームオーバー。まだまだ甘いな」

目隠しを外しながら龍也は

「八極拳とか形意拳とか、まあとにかく色んな武術を収めた結果。空気とか気配の流れで攻撃を予測して弾ける様になったと言うわけだ。視覚に頼らなくても良いし、1体多でも戦えるので便利だ」

便利の一言で纏められても訳が判らない。俺が首を傾げていると

「まあそう言われても判らないだろうな。ようは慣れと場数だ、実戦や組稽古をしてれば自然と判る様になる。いずれな」

その歳でどんだけ場数踏めば出来る様になるんだよ。そんな離れ業

「私の場合10人くらい囲まれて真剣を避けるという方法で覚えた」

「「お前は何をやってる!!」「」」

その言葉に突っ込んだ俺達は悪くない。そんな非常識をやった龍也が悪いに決まっている

「もしかしてその目の傷って……」

あの深い傷つてもしかしてその時にと思ったのかシャルルがそう尋ねると

「いや。これは車に引かれ掛けたのはを助けた時に切ったというか潰れた。いやなのは突き飛ばすのには成功したんだがトラックに突っ込まれてな」

はっははは。あの時はマジで死ぬと思ったな。とか笑ってる龍也、常識人なのか変人なのか判断に迷う

「おや。チャイムだな……じゃあ食堂で」

スタスタと歩いていく龍也を見ながら俺は

「なあ。龍也つてかなりマイペースだよな？」

うんうんと頷く箒達……やっぱりそう思うよなあ……

「あつ、そうそう」

「ぬわっ!？」

いなくなつたと思つたら何時の間にか俺の隣にいた龍也は

「今日の放課後は全員無限組み手な。逃げたら……判ってるよな？」

この時の龍也の笑みはとても怖ろしい物だったと後にこの場にいる全員がそう語った……

貴女は行かなければならない……

誰? 誰なの?

早く……ここへ……

脳裏に浮かぶのは I S 学園の近くにある海岸

貴女しか救うことの出来ない人がここに居る……

「はっ!? ゆ、夢?」

海岸に打ち上げられていた何者かの姿を見たところで私は目を覚ました。福音の暴走事件のフォルダは特 A の禁止事項で私では閲覧することが出来なかった。それでも何があったのか知りたくて朝方までハツキングに挑戦したのだが、結局何の情報も得ることも出来ず……寝不足のまま登校し放課後のなっただことで気が緩み眠ってしまっただようだ……

「……妙にハッキリした夢ね」

しかも起きてからもしっかり覚えている……打ち上げられていたのは……一瞬だったが見間違えるはずがない

「ユウリだった……」

ファントムタスクの 1 人……1 度目は殺されかけて、2 回目は助けられた……

(もしかして……裏切ったの?)

もし本当に夢で見た場所にユウリがいるとしたら。それはファントムタスクを裏切り組織を抜けようとした際に襲われたのでは無いか? もしそうだとしたら重傷を負っているかもしれない……

「……行かないと」

ユウリはどうしてもほっておけない。前にあったときからずっとそう思っていた……そして今見た夢が私の不安を煽る……

「フレリア! すぐ車出して! ゲートの前で落ち合いましょう!」

廊下に飛び出し走りながらフレリアに連絡を取り、私は外に飛び出した

「お嬢様、何があったのですか?」

車を出して待っていたフレリアが不思議そうに尋ねてくるのを

「良いから早く! 車出して! 場所は近くの海岸!」

そう怒鳴りながら、フレリアのスポーツカーに乗り込む。フレリアははあ? と不思議そうな顔をしながらも領き車を走らせた……

「ちよつと(こ)で待ってて!」

砂浜が見えたところでそう叫んで車から飛び降りる。

「お嬢様あッ!？」

悲鳴にも似たフレイアの声は無視する。下は砂浜だ……衝撃を殺す事などわけない。前回り受身の要領で衝撃を殺し走り出す

「……あ」

夢で見た場所……そこにユウリはいた……美しい光沢を放つ銀髪は血で汚れ。ISスーツもボロボロで素肌が見えている場所もある

「死んで……」

思わず近くにしゃがみこみ頬に触れる……ひんやりと冷たい、だがまだぬくもりがある……夏場とはいえ海水は冷たい。それで身体が冷え出血が抑えられたのだろう、死に掛けではあるがまだユウリは生きていた

「うっ……」

腕に触れるとユウリが顔を歪める……余程痛むのだろうか、悪いとは思ったが軽く触診してみても

「? あれ?……どういうこと? 出血の跡の割りには傷が浅い……それに腕も」

明らかに骨折した形跡があるのに骨は折れていない……それに切り傷もあるが、命に関わるレベルの傷ではない……勿論このままにしておいたら命に関わるが、今しつかりと手当てをすれば何の問題もない。だが何よりも気になったのは

(何者かに手当てされた後があるということ)

今のユウリは間違いなく手当てを施された後だろう。どういう手段を使ったかは判らないが、包帯などの医療具を一切使っていないのに関わらず。的確な処置が施されている。だがそれなら手当てした人物はこの場にユウリを放置した? 思わず思考の海に浸っていると

「お嬢様………そいつは!？」

フレイアに声をかけられはつとなる、今は考え事をしてる場合ではない……

「フレイア、丁度良い所に反対側お願い。ユウリを貴方達のログハウスマで運ぶわよ」

「しかし、そいつはファントムタスクの構成員で……」

「でもユウリは私を助けてくれた！ 借りを作りっぱなしって言うのは嫌なのよー！」

それもあるが、ユウリをほっておけないというのも大きい

「では……ツバキ殿に連絡を……」

「それもなし」

しかしというフレイアに

「今のIS学園の状況がわからないフレイアじゃないでしょう？ 報告は後でも出来るわ。いざとなれば私が責任を取るわ」

福音の暴走。セカンドシフトした白式。第4世代に該当する紅椿。今IS学園の教師陣はこれらの問題で手一杯、だからこそ極秘裏にユウリを匿える。

「判るわね？ フレイア。今IS学園は色々と問題が起こってる。

そこにユウリの事を話せば余計な騒ぎになるわ……でも貴方達のログハウスならIS学園の管轄外よね？」

あのログハウスは更識家と天乃宮家両家がセーフティハウスとして作った物、轡木さんや織斑先生でなければ入室は許可されていない。それに見た目こそログハウスだが地下にはISのハンガーや隠し部屋もある。ツバキさんからは何時までも隠し通すことは出来ないが、意識を取り戻すまでは騒がしくさせたくない

「お嬢様……判りました。ただし目を覚ましましたらツバキ殿に連絡を」

「ええ、判ってる。じゃあ手を貸して」

私とフレイアで意識を失っているユウリを担ぎ、近くに停めてある車の方へと歩き出した……

(やっぱり、ユウリとエリスはよく似てる)

他人の空似では片付けることの出来ないほどに……ユウリとエリスは似ていた。それに前にそのことを聞いたら温厚なツバキさんが怒った

(つまり。ユウリとエリスはなんらかの関係があるということ……)

どうも、きな臭くなって来た……何かという確証は無いが近いうち

に何か大変なことが起こる……そんな気がする。でも今は……ユウ
リを休ませることが先決だ。

歩き去る楯無とフレイアの背中を見る何者かの姿

「……行きましたか」

少女は歩いていく2人を姿を見ながらそう呟き

「……本当なら龍也様と少し話をしたかったです……今回は諦め
ることにしましょう……」

哀しそうにでもまた会えるという確信を込めた声でそう呟いた少

女は

「……いずれまたお会いしましょうね。龍也様……」

そう笑い少女は闇に溶けるように消えた……最初から存在しな
かったように……だが彼女は確かに存在していた。その証拠に黒い
翼が少女に立っていた場所に残されていた……

第50話に続く

第50話

第50話

フレイア達のログハウスの地下の一室に眠っているユウリは、寝返りも打たずずっと眠り続けている。

「まるで起きる気配がないわね」

寝息を立てているので、死んでいるという事は無いが。流石に少し心配だ

「お嬢様。そろそろ予鈴が鳴りますが?」

「ありがと、フレイア。悪いけどユウリ見ていてあげて。もし起きたら連絡頂戴」

そうお願いして。私はログハウスを後にし、校舎に向かいながら(どうしてあんな夢を見たのかしら?)

まるで予知夢の様な夢だった……あの時は無我夢中だったが。ふと冷静になるとどうしてあんな夢を見たのかが、どうしても気になる(世の中に不思議な事は沢山あるとは思うけど……あの夢は本当になんだったのかしらね)

「もしかして私ってエスパー? なわけないか……」

とりあえず考えていても仕方ない。ユウリが起きるのを待って、そこから事情を聞けばいいか……考え事を中断して私は校舎へと走り出した……

「ここを……こう来ると。こう来るから……駄目。捕まった」

ここ3日分の龍也の戦闘パターンを集計して。何とか行動予測を作ろうとしていたのだが、やはり駄目だ。どのパターンでも捕まってしまう

「珍しいな。お前がこうまで相手のパターンを読みきれんとは」

差し入れた。と渡されたコーヒーを飲みながら

「拳打からの派生が全部で7つ。蹴り技も6つ。読みきれるものじゃ

ない」

どの打撃からも色んな派生があり。これだと特定が出来ない

「だが。意外と懐に入れてるんじゃないのか？」

横からノートPCを覗き込んでいたラウラに

「これ見てみて」

画面に映し出されるのは9つの画像。懐に入った場合に龍也が繰り出してくる反撃のパターンだ

「投げに受け流し。合気道にシステマ、バリツツ、中国拳法……後は何だ？ 見たこともない動きだが？」

その内6つは誰もが見たことのある。体術だが、残りの3つが難問なのだ

「どんな武術と当て嵌めても合致しない。この3つの動きが解明できないと勝ち目はない」

地面を滑走するような滑らかな足裁きからの、払いや投げはどの体術にも当て嵌まらない。

（本当に彼は何者なんだろうか？ 同年代の筈なのにこうまで差があるのは明らかに異常）

仮にも軍属である。私とラウラは体力や体術は並みの同年代の非ではない。更に言えば

（弥生が勝てないと言うのも理解に苦しむ）

薄野弥生。生粋の日本人だがその運動神経と動体視力。更に高校生としては破格の体術の技量を買われて、ギリシャの代表候補になった。彼女がただの一撃もいれることが出来ない、と言うことがどうしても腑に落ちない

「ねえ。ラウラ……彼って本当に同年代なのかな？」

「何を馬鹿な事を。同年代に決まっているだろう？」

ラウラにそう笑われるが。どうしても彼が同年代とは思えない。それに初めてあった時の不思議な感覚……本当に彼は何者なんだろうか？ 私はあの組み手をクリアするには、彼が何者なのか？ と言うのを知るのが最も近道ではないのか？ と考え始めていた……

「あー今日も無限組み手かー」

放課後。憂鬱そうに言う鈴に

「しようがないでしょ？ 命令違反の罰なんだからさ？ それに私も付き合っただけでしょ？」

私は別に参加しなくても良いのだが。私自身もまだまだ近接技能の向上は必要だと判っているので、鈴達に付き合っただけで無限組み手に参加してはダメでしょ？ と言うと

「あんたはただ龍也に会いたいだけじゃないの？」

からかうように言う鈴に

「帰るよ？ 私。部屋でのんびりTVとか見てもいいんだよね？」

「ご、ごめん!! じよーだん、じよーだんだから!!」

慌てて私の服を掴む鈴に

「あのね？ 私は魔王と張り合うなんて命知らずな真似はしないの。判る？」

うんうんと頷く鈴。長い事鈴と一緒に居たから魔王の恐怖と言うのは良く知っている。以前鈴が大事にしていた一夏君の写真を取り上げた、2歳年上の代表候補生は鈴との模擬戦で、もうISに関わるのも嫌だと言うレベルになるまで。蹴られ、殴られ、吹き飛ばされ再起不能になっている。今は政府の役員として働いているが、鈴を見るだけで半狂乱になるほど鈴を恐れている。その光景を見ていた私は、魔王には進んで関わらないと決めたのだ

「ほら、行こう。無限組み手は大変だけど、ちゃんと教えてくれるんだし。そう悪い物じゃないでしょ？」

無限組み手はあくまで訓練の最後にやるもので、それ以外はちゃんと徒手での格闘術等をしつかり教えてくれる。射撃タイプのセシリアさんやクリスさんは、なのはさんやフェイトさんが教えてくれる。教え方こそ厳しいがそう悪いものじゃない筈だ

「まあね。それは認めるわよ」

「そうそう、ほら。今日も頑張っただけで訓練に行こうよ」

嫌そうではあるが頷いた鈴と一緒に私はアリーナにと向かって歩き出した

「うっしー！ 今日勝つぞ!! 龍也」

返事のない屍（一夏・箒・鈴・ラウラ・クリス・シエン・ヴィクトリア・エリス）を横目に腕をブンブンと回しながら言う

「今日もやる気満々だな。お前は別に参加しなくても良いのに」

何時もと同じ涼しい顔でそう笑う龍也に

「なーに。まだあたしは候補生だからな。やるなら代表にならなきゃ意味がないんだよ」

日本国籍でギリシャの代表候補と言うのは、実は色々やっかみがある。それでもあたしはギリシャの代表候補生の話を受けた。並の人間じゃ扱えないと言われ渡された。死線の赤（デッドクリムゾン）はとんでもないじゃじゃ馬だった。だがそれで良かった……デッドクリムゾンを使いこなす。国家代表になるという新しい目標を得れたからだ。

そしてその為には。龍也と戦い、勝つとまでは言わないが、無限組み手に耐えられるようにならなければ。代表なんて夢のまた夢だと判っているからだ

「行くぜー」

「どうぞ」

拳を構え肩幅に足を開く。それに対して龍也はダラリと腕を下げるだけ、一見隙だらけだがその実

（隙なんてまるでないんだよな。あれ）

どこまでも自然体で。攻めも護りも自由自在、しかし攻める方と言えば、不規則に揺れる両腕とリズムを取る軸足が気になり攻め難い

（さーて今日はどう行くか）

前は正面から真っ向勝負。その次はステップを多用してのヒット&アウェイを試したが

（全部潰されてるんだよなー）

真っ向勝負は力で押し負け。ヒット&アウェイはスピードで負け

た。今日はどうするかと考えていると

「来ないのならこっちから行くぞ」

地面を滑るように踏み込んできて、一瞬で懐を取られる。

「しまっ！ このっ!!」

そしてその長身から放たれる拳打を自らの腕を叩き付けて。強引に弾く

(っ！っ!! どんな構造してるんだよ！ こいつの身体は!!)

腕がジンジンと痺れるのを感じながら。間合いを離そうとするが

「呼び動作が丸見えだ」

「くっ！ くそ!!」

距離を離そうと軸足に力を入れた瞬間。また間合いを取られ思うように動けない

「顔は狙わんから上手く護れよ」

その言葉と同時に放たれる。速射砲のような左

「くっ！ この！ 舐めてんのか！」

顔は狙わないの言葉にそう怒鳴ると

「女の顔を殴る趣味は無いんだよ」

からからと笑いながらも、繰り出され続ける左は速く重い

(くっ……もう手が痺れてきやがった)

受け止めたのは、僅か5回。たったそれだけで手が痺れてくる。だが

(ここでパターンを変えれば、いける)

上半身を狙った。左の差しあいの途中に蹴りを入れれば取れる。リズムを急に変えると反応しきれない、その一瞬の隙を狙う。龍也が2回繰り出す間に1回しかあたしは攻撃できないが。繰り返し同じ所を狙い続ける。

(今だ！)

龍也の身体の軸が右にずれた所で踏み込み。勢いを付けた上段蹴りを放つ。これは当たったと確信していたのだが

「惜しい。視線でそれだけ見てたら嫌でも判るぞ？」

「うっ？ うおっ!?!」

あたしが放った蹴りは鮮やかに絡め取られ。何が起きたか判らないうちに、あたしは強かに背中を打ちつける羽目になった……

「いたた……何したんだ？」

打ちつけた背中をさすりながら尋ねると

「蹴りを受け止めて、軽く手前に引いてから押し返したんだ。軸がずれてバランスが崩れる。それを身体が咄嗟になおそうとすると今みたいひっくり返るって事だ」

そう言われても訳わかんねえ。え？ どういうこと？

「無意識に身体が姿勢を直そうとする。しかし片足は私が掴んでいるし、この上背を蹴ろうとすれば自然と爪先立ちになる。そんな状況で身体を動かせばどうなるか判るだろう？」

「あー合気とかの一種ってことは判った」

詳しくは判らなかったがそれだけは判った。

「そうか。じゃあまた明日頑張れ。クリスが戦闘データを取ってくれてるだろ？ それを見てまた頑張れ」

からからと笑う龍也に礼を言いながら立ち上がり。箒達の方に向かいながら

(ぜってー今度は一撃入れてやるからな)

暫く感じていなかった。燃え盛るような闘志がふつふつと湧き上がるのを感じる。何時までも負けっぱなしは性じゃない、今度こそ絶対一撃入れてやる……

今しがた龍也君に負けて戻ってきた。弥生さんはピンピンしているそれを見て

(お、おかしいですね？……組み手の時間は同じだった筈なんです) 私は竹刀を使つての剣での無限組み手だったが、何度も何度も喉元に竹刀の切っ先を突きつけられ。箒手で何度も竹刀を取り落とし、しまいには徒手では軽く投げられ宙を舞った……空回りの繰り返しで体力なんかろくに残っていないのだが。同じくらい空回りしていたはずの弥生さんが元氣一杯なのが不思議だ

「なあ？ 弥生……なんでお前そんなに元気なんだ？」

「逆に聞くぞ箒。何でそんなにへばってるんだ？」

不思議そうな顔をしている弥生さんに箒さんは

「少し……修練をサボったからかな……？」

「なにやっつてんだよ。箒、あたしなんか毎朝4キロ走ってるぞ？ だらけんなよらしくないぞ」

はっはと笑う弥生さんの言葉を聞いて

(な、なるほど……根本的に体力が違いましたか……納得です)

漸く起き上がるだけの体力が回復したので身を起こし、龍也君を見る

「薙刀は取り回しが悪いから。基本は自分の間合いを維持するのが重要になる、判るか？」

「う……うん」

箒とセシリアさんは致命的に欠けている。近接武器の使い方をおわっている、箒は薙刀を構えて

「こ、こう？」

「もう少しだな。それで振ってみてどうだ？」

龍也君に言われて薙刀を振るった箒は

「なんか……振りにくい」

「持ち手が悪い。それと足の開きもな」

どうも龍也君は武器と言う武器に精通しているのか。薙刀の扱いも上手い。運動音痴の箒が振るう薙刀の軌道が徐々に鋭く早くなつて行くのが判る

「よしよし。今の感じだな、式式は間合いを取られると弱いから。リーチの長い薙刀の扱いはちゃんと覚えておけよ」

運動が苦手な箒が張り切っているのを見て

(本当に箒は龍也君が好きなんですわね)

そのキラキラした眼を見ると本当にそう思う。優しく、格好良く、料理や裁縫も得意と悪いところを探すほうが難しい

「で、セシリアはこれな、木剣持ってみろ」

「け、結構重いですわね」

日本刀より長くて、西洋剣よりかは短い。その木剣を片手で持つてよろめいている。セシリアさんに

「ちがう、ちがう。両手で持つて切っ先は下に向けて。で姿勢は低く構えろ」

「こ、こうですか？」

不格好ながら構えを取るセシリアさん。その構えを見た私は（？ 何の構えですかね？ あれ）

私の知る剣術とは全く当て嵌まらない構えだ。

「なあ？ 箒。あんな構え見たことあるか？」

「いや、ない。どこぞの古武術か？」

限界ギリギリまで振り回されていた。一夏君も視線だけで見たことないと告げている

「じゃあ、ちよつと見てろよ？ 簪好きに打ってきてくれ」

「う……うん」

上段からの勢いに載せた。一撃は木剣の切り上げで弾かれ。横薙ぎの一撃は刀身にそって受け流され、明後日の方向に流れる。それから突きを放てば、正眼に構えられた木剣で下に叩き落される。それは完全な防御の剣、自ら攻めるのではなく相手の攻撃を防ぎ。いなし、チャンスを待つ護りの剣。何回も空回りさせられ簪が息を切らした所で

「とつまあ。こんな感じだ、セシリアは護る為の剣術を覚えればいい。動体視力はいいから出来るだろ。じゃ早速実践な」

龍也君は木剣から柔らかい素材で出来た。スポーツチャンバラ用の剣をコートから取り出し

「良いか？ 良く見て防御するんだ。ただで防ぐんじゃないぞ？ 相手を振り回す事を考えろ」

「そう、言われても判りませんわ」

「理解するんじゃない、感じる。そういうものだ……まあまずは打つて来い。それで私の動きを見て覚えろ」

時に理論では無く感じるとか言い始めるが、それでもその指導は的を得ている。その訓練は剣を扱う私達には興味深い物だった

「箒さん、あの足捌きに見覚えは？」

「ない。変わった足の運びだ」

剣道場の娘の箒さんが判らないと言うのは珍しい

「相手の動きに合わせて、どんどん足場を変えてるな」

「それに切っ先を動かして、リズムを取ってるな。ボクシングに見えなくもないか？」

弥生さんと箒さんの話を聞きながら。私も龍也君の動きをよく観察する

「このっ！」

「上からの一撃は下からの切り上げで弾く。横薙ぎは刀身を使って流す良いな？」

「は、はい！」

何度も繰り返し攻撃を弾かれている。セシリアさんは若干息切れしているが、どんどん打ち込んで龍也君の動きを良く見ている

「……カウンターの剣か？」

「復活したのか？」

「おう、なんとかな」

息も絶え絶えだった一夏君が身を起こし。龍也君の姿勢を見て自分の考えを話し始めた

「体勢を低くしてるから打ち込むところが少ない。その護りを抜けようとして大振りな攻撃をしても弾かれる。そして相手はドンドン消耗していく、そして弱りに弱った所を……」

「はあ……はあ……あいた！」

息切れして剣が下がったセシリアさんの頭をぽこんと叩く、龍也君は息も絶え絶えのセシリアさんにスポーツドリンクを手渡しながら

「今日の訓練は終り。〴〵苦労様、明日もまた宜しくな」

そう言っ歩いて行く龍也君を見ながら。

「じゃあ、クリスさん。今日の龍也の戦闘パターン解説宜しく」

そして私達は何時もの訓練終りにする。龍也君の戦闘パターンまとめをする為に、アリーナの管制室に向かった

「はー終り。終わりっ」と

銀の福音との戦闘で酷いダメージを受けていた、各代表候補のISの修復がやっと終り。私は大きく息を吐いて伸びをしながら

「あーもしもし？ 山田先生？ 各代表候補のISの修理が終ったから取りに来て。そうそう……貴方の手から皆に返してあげて」

山田先生にそう連絡を入れてから。自分の研究データを呼ぶ出す

「……このままじゃただのパッケージなのよね」

このままでは、普通のパッケージと変わらない。ここから自立思考プログラムとネクロの浸食に対するプロテクトを作成しなければならぬ

「それが難題なんだけどね」

自立思考は今の所は何十パターンも、思考ルーチンを作ってそれを搭載する事で何とかなるだろうが。ネクロに対するプロテクトと言うのは、正直どうすれば良いのか判らない

「はー龍也君が言うときが来れば、協力要請が出来るんだけどね」

今はまだきつと何の協力もしてくれないだろう。今出来る事といえば、パッケージの作成と武装の構築。そして思考ルーチンの作成だけだ

「まだまだ実用段階には程遠いわね……」

普通のパッケージと考えれば。性能は2割増の能力はある、だがネクロと言う人知を越えた存在相手では不安しかない。

「でも……負けないわよ」

今のままで駄目ならその先を行くだけだ……

「取りあえずは試作パッケージのスペリオンとヒエンの完成を第一にしましょうか」

エリスちゃんとアイアスちゃん用のパッケージの試作型。これをベースに仕上げていけばいい、私はスペリオンとヒエンの調整を始めた……

「山田先生。丁度良い所に」

「はい？　なんですか。八神君」

職員室に向かう途中で山田先生を見つけ声をかける

「あの。明日アリーナでタッグでの模擬戦をしたいので、アリーナの使用許可を頂きたいのです」

「それは構いませんが……模擬戦をするのは八神君達と高町さん達ですか？」

人員を聞かないと許可できないのかそう尋ねてくる山田先生に

「私とはやてと一夏と箒です。はやてと箒は専用機を手にしたばかりですし、一夏はセカンドシフトした白式に馴れる為にも。許可を頂きたいのです」

そう説明すると山田先生は納得したようで

「判りました。では明日の放課後に第一アリーナの使用許可を出してあげますね」

「ありがとうございます。では失礼致します」

生身での訓練も必要だが、ISの訓練も必要だ。特に戦闘経験は必要だ。それが最新鋭機とセカンドシフト体なら尚の事。それは山田先生も理解していたのかすぐに許可を出してくれた事に安心し。私は寮の部屋にと戻り

「うー」

「お前らは馬鹿なのか？」

うーと唸りあい。掴みかかるタイミングを計っている。はやて達見て頭痛がした……

どこにいてもこいつらは……私が呆れ果て大きく溜め息を吐いた……

どこぞと知らぬ闇の中で1体の異形が目を覚ましていた

「あ……アガ。ウルオオオオオオオツ!!!」

獣にも似た咆哮を上げる。その異形は漆黒のフルプレートに身を包み。その背には棺おけに似た形の4つの盾が浮かび、両腰には禍々しいとも言える装飾が施された2振りの西洋剣を携えていた

「目覚めたか。ハーデス」

私がそう尋ねるとハーデスは焦点の合っていない目で

「あー。ベエルゼか？　ここはどこだ？　随分と魔力がないが」

「ああ。ここは魔力のない世界だ。お前には少々辛いか？」

いや。別にと言いながらハーデスは

「魔力がないなら。人間を喰うだけだ……」

獰猛な獣を思わせる笑みを浮かべるハーデスに

「なぜ、世界も狭間で眠っていたんだ？」

私がこの世界に来る間に時間の狭間で眠っていた。ハーデスを見つければ回収した、だが何故そこで眠っていたのか気になり尋ねると

「目覚めたら異世界のミッドチルダだった。起きたばかりだったから、全員皆殺しにしてリンカーコアを喰った。だが皆殺してしまつたから、魔力が補給できなくなったから眠っていた」

ハーデス、とりわけ異質なLV4ネクロ。その能力を危険視され封印されていた、だが神王が居る世界でハーデスの力は必要だ

「こつちだ。僅かながらだが持つてきていた、ジュエルシードとレリックがある。それで魔力を補給すると良い」

「そうか。助かる」

隣を歩くハーデスを見ながら

（これでこちらの札は大半が揃つたか……もうじき切り捨てるものを選ぶときだな）

この世界で見つけた協力者も、そろそろ必要なくなるか……より有効なほうを選んで、もう片方には死んでもらうとしよう

誰も知らないところで闇は着実に世界を飲み込み始めていた……

第51話に続く

第51話

第51話

福音事件の件で手元に無かった白式が戻ってきた。その日の放課後、俺と箒はそれぞれのISを展開し。己の敵を見据えていた

「まーそんな気張らんで楽に♪ 楽に♪」

「その通りだ。下手に力むと全力が出せないぞ」

4枚の機械翼と美しい白銀のIS「インフィニティア」を展開した龍也と、闇その物を連想させる漆黒のIS「夜風」を展開したはやてさん。俺と箒は既に武器を構えて臨戦体勢に入っているが、2人は無手でリラックスした体勢で戦闘開始の合図を待っていると、管制室から

「それでは今から。八神龍也・はやてペアと織斑一夏・篠ノ之箒ペアの模擬戦を始めます！」

シャルの合図と同時に瞬時加速で龍也の間合いに飛び込み、雪片を振るおうとして

「遅いわ。たわけ」

「うおッ!？」

投げつけられた4本の剣を雪片で弾く、その間に龍也が俺の横を通り抜けて行く。後を追おうにも

「初手での瞬時加速の切り込みはどうかと思うぞ？」

からからと笑い。両手に投擲用ブレードを構えているはやてさんが俺の前に立ち塞がる

「二刀流とは1度勝負してみたかったんだ」

「そうか。だがそう簡単には行かんぞ」

箒の方には龍也が立ち塞がり。獅子王刀を構えている

「分断は戦闘の基本や。悪う思わんといてな」

にこにここと笑っているが肌に刺すような殺気を感じる

「ほな……行くぞ?」

その言葉と共に投げつけられた剣が、俺とはやてさんの戦いの始ま

りの合図となった

「ふっ!!」

間合いを詰められ、振り下ろされた獅子王刀を雨月で弾き

「はっ!!」

空裂で胴を切り払おうとするが

「甘いな」

右腕のバンカーで打ち落とされる。

「二刀の扱いが少々甘いではないのかね？」

「ふっ。まだまだ小手調べだ」

そうは言ったが、龍也の剣技は正直言つて私より上だ。自分の力がどれくらい通じるのかを知るには丁度いい

「行くぞ!!」

突きと同時に雨突から赤いレーザーを打ち出し、間合いを離そうとするが

「忘れてないか？」

龍也が左手を突き出すと蒼く輝く光の壁が発生し。レーザーを防ぐ、そして空いている右手で腰のライフルを抜き放ち。両肩を狙ってビームが放たれる

「ちっー!」

展開装甲を使えば楽に避けれるが。それでは先にこちらのエネルギーが底を着くと判断し、身体を反転させる事でビームを避けるが

「ビームの雨に打たれてみるかね？」

「ぐっ!?!」

体勢を治した所に、追撃にと放たれるビームが絶え間なく私を襲う

(スラスター狙いか!?)

その射撃は出鱈目ではなく。各四肢の関節部や紅椿のスラスターを狙う、正確な射撃だった

(攻め込もうにもこれでは!?)

切り込もうと瞬時加速に入ろうとするとき、雨突の射撃を行おうと

するとき、その両方の時は必ずと言って良い出鼻を挫くように。正確無比な射撃が放たれる、避けなければごつそりSEが奪われるので回避するが。回避すればすればでまた振り出しに戻される

(攻め方が判らない……どうすればいいんだ)

攻め込もうにも攻め込めず、避ける事しか出来ないこの状況をどうすれば切り抜けるのか。判らず

(今は回避に徹するしかない)

ビームライフルにも使用制限はある。それを待つて勝負するしかない……そう判断し。私は両腰に雨突と空裂を戻し回避に集中しようとして

「たわけが」

「なっ……ぐっ!?!」

瞬時加速。いや……唯の加速で紅椿に追いついた龍也の拳が肩を捉える

「逃げに徹して勝てると思っているのか？」

「くっ……」

何とか体勢を立て直し。腰から雨突と空裂を抜き放ち構える

(この位置は不味い。何とか距離を……)

アリーナの壁がすぐ後ろにある。この位置でビットや胸の荷電粒子を砲を喰らうと不味い。何とかこの位置を脱しようと考えていると

「剣ではなく、射撃武器を使うか？ それでは永遠に私を捉えることは無いぞ」

「なごっ？」

龍也は獅子王刀を正眼に構え。私の出方を待っている……

(あ……そういうことか)

龍也が何を言いたいのか理解した。使い慣れた篠ノ之流の構えを取り

「手にした目先の力に頼っていいは勝てないのは道理だな」

真正面に龍也を見据えそう言くと。龍也はにやりと笑い

「そう言う事だ。剣士なら剣士らしく……正々堂々……刀で勝負しよ

うじゃないか」

「ふっ……そうだな。行くぞ!!!」

射撃など私には出来ん。私に出来るのは長年修めた剣による、真つ向勝負……それしかない！ 私はそう判断し真つ向から龍也にと斬りかかって行つた

「ショータイムや♪」

指を鳴らすと同時にビットを展開する

「ビットかっ!？」

4機のビットを見てそう叫ぶ一夏に

「ビットだけちやうでー」

両手にダガーをそれぞれ4本ずつコールし

「なんと剣の雨もサービス♪」

「そんなサービスいるか!!!」

冗談のつうじんやっちゃな。面白くないで

(まーそう簡単には懐には入れさせへんでなー)

白式・白雪は近く中距離型のISだ、つまりは間合いの取り合いになる。遠距離なら私、近距離では一夏が有利。非常に判り易い

「ほな。行くでー♪」

ダガーとビットの射撃を同時に行う。防ぐか、避けるかどっちかなー。判断能力を見る為の攻撃、どう出るか観察していると

「ならこうだ!!」

雪片を粒子に返し。両手の雪羅にビームブレードを展開して弾き始める一夏

(なんや、随分と思いい切りの良い事するな)

一夏は発生したビームブレードを振るい。私の放ったビームとダガーを弾き始める。避けるか防御するかと思っていたのに、まさかまさかの前進に驚いていると

「いっけえ!!」

「おおっ!？」

ビームブレードを発生させていた装甲が変形し。荷電粒子砲を放ってくる、慌てて旋回しそれを避けて正面を見ると

(おらん!? 上かっ!?)

上を見ると両手でしつかりと雪片を構え降下している一夏の姿がある

「おりやああ!!」

裂帛の気合と共に放たれた一撃をバックステップで回避し。再び剣をコールして投げつけるが

「はっ! はっ!」

雪片で迎撃される。本気での投擲ではないが少々驚いた

(思い切りだけじゃなく、技術もそこそこか……まっ、その思い切りの良さは買うけど……)

切り払われたダガーが宙を舞うのを見ながら

「それはちよーと失敗やったな」

「えっ? うおっ!?!」

私が指を鳴らすと爆発する無数のダガー。ブラッディダガーをI S版にしたものなのでこれは当然の能力や

(兄ちゃん。そっちはどう?)

念話で箒と対峙してる兄ちゃんにそう尋ねると

(まあ。悪くは無いかな? 両腕の展開装甲を開いて防御と突撃を同時にしてくる。思い切りの良さは良いとおもうぞ)

チラリと兄ちゃんの方を見ると。箒は背部の展開装甲を開き、加速力と破壊力を生かしての高速戦を仕掛けていた

「ほー随分と思い切ったことするな……「はっ!」甘いでー?」

よそ見している私目掛けて放たれた突きを指の間で受け止め。

「奇襲するならちゃんと奇襲しいや? 声に出すなんて意味ないで」

「うおっ!?! がはっ!?!」

引っ張り寄せてからの裏拳で一夏を弾き飛ばす

「思い切りの良さだけでは勝てんぞ。箒」

「ぐうう!?!」

荷電粒子砲で吹っ飛ばされた筈。2人は背中合わせにぶつかり

「イテテテ。今絶対SE貫通した」

「くっ手の上で踊らされていたと言うわけか」

ISの性能に振り回されてるようじゃ、私と兄ちゃんには勝つことは出来ない。そんな甘い戦い方で魔導師に勝てる訳が無いのだから

(んじやま。止めといこか?)

(まあ課題点は判ったしな。いいだろう次の一撃で決めるぞ)

「強いね。龍也君もはやてさんも」

管制室で見えていた私は思わずそう呟いた。組み手でも判っていたが、2人とも抜群に相手の動きを読むのが上手い。戦いにおいて相手の動きが読めると言うのは圧倒的に有利だ。しかもそれでいて実力差があるのなら尚の事だ。

「ん、そろそろ仕掛けるみたいだね」

「そうだね」

なのはさんとフェイトさんが。龍也君とはやてさんを見ながら。そう呟く

「え? 何かまだあるの? 龍也とはやてに」

鈴さんがそう尋ねると2人は、心底面白くないって顔をしながら「あの2人つてずっと一緒だったから。態々口にしたたり、目を見なくても大概のことは判るんだよ」

「そうなんだよね。面白くないんだけどさ」

何を言っているのか判らない。

「見てれば判るよ。すっごい不快なんだけどね。私は」

「まあまあ。落ち着こうよ、フェイトちゃん」

何でこんなにフェイトさんは不機嫌なんだろうか? そしてすぐにフェイトさんが不機嫌な理由が判った

「仕掛けるぞ。タイミングは任せる」

「OK♪ んじゃま。愛の力で」

「……」

龍也君が無視してブーストして突っ込んでいく。それを見たはやてさんが慌てて

「ちよつと!?! あわせてくれるんやないの!?!」

そう言いながらISを操作したのか。背部の装甲が展開されそこから。一対の蝙蝠を思わせる翼が現れ。それと同時に剣と槍が一体化したような変わった形のライフルがその手に握られており。はやてさんは瞬時加速を繰り返しながら射撃を繰り返す

「うわ……なにあれ」

「龍也さん怖くないのですか?」

鈴さんとセシリアさんがそう呟くのは無理も無い。弾幕というには激しく、下手をすれば龍也君を撃墜しかねない凄まじいまでのビームの雨が一夏君と箒さんに向かって放たれたからだ。

「なにが愛の力だ」

その弾幕の雨を振り返ること無く回避しながら。一夏君と箒さんに獅子王刀による打撃と強烈な膝蹴りを叩き込み。蹴り飛ばす

「あぐつ!?!」

ビームの雨と強烈な打撃にうめき声を上げて吹っ飛ぶ2人の先には、はやてさんが待ち構えていて

「だってー2人の共同作業やろ♪」

フルパワーのビームで2人を纏めて押し返すとその先には。両肩の12連装のミサイルポッドを展開した龍也君が待ち構えていた

「……処刑?」

「私もそう思うな」

下手をすれば処刑、もしくは死刑としか思えない光景だ……そしてなのはさんとフェイトさんは

「私だって頑張ればあれ出来る!」

「落ち着こうフェイトちゃん。ヒートアップしないで」

どうにも自分にも出来るのに。はやてさんと一緒に連携攻撃をしているのはどうしても気に入らないようだ

「……」

次に龍也君がするであろう行動を理解した。2人の顔が面白いくらい青褪めてる……

「遠慮はいらん。全弾持っていけッ!!」

24発のミサイルがビームに押されて来た2人にミサイルが殺到する

「このまま行くかあ!」

箒さんが展開装甲でミサイルの爆風を防ぐが

「フッ……判断を誤ったな」

「ぐうっ!?!」

ミサイルに紛れ突っ込んできていた、龍也君の右手のバンカーが2人を纏めて貫く

「良いぞはやて。打ち込め!」

「OK♪」

2人を貫いたまま姿勢を変えた、龍也君の視線の先には既に最大出力モードのライフルの照準を合わせている。はやてさんの姿が……

「……しんだ」

もう自分達がどうあがこうが助からないと理解した2人の小さな声。管制室に響き渡る

「何かジュースを買ってきてあげよう」

「お菓子も必要ですわ。あれはもう精神的に死を迎えていますわ」

「必要なはあれね、購買の激レアシュークリーム」

「僕はチーズケーキを買ってきてあげようと思うよ」

皆が口々にそういう中。極太のビームが箒さんと一夏君を飲み込み

「これで極める」

「OKーッ!!」

バンカーで貫いたまま、ビームを押し返しながら、はやてさんに接近していく。そしてはやてさんもビームを放ったまま龍也君に近付いていき……2人の姿が交差した……

「ぐううううッ!?!?!」

0距離でのバンカーと長時間ビームに晒された。2人のSEは当然ながら0になり……もう殆ど機能してないPICで降下していく。箒さんと一夏君を見ながら、龍也君とはやてさんが

「これが」

「私達のジョーカーや♪」

龍也君の右肩の上に浮かび、笑いながら言うはやてさんは酷く満足げな表情をしていた……

「……」

訓練の後。机の上で一夏と箒は死んでいた。目に光が無くぐったりしている

「大丈夫か？」

そう尋ねると一夏は

「……なんとかな。すげえな……あれ。死んだと思ったぜ」

「大袈裟だなー」

そう笑いながら。ティーポットの中を見る……葉が開くまであと少しか、クツキーとビスケットでも用意しよう。ごそごそとコートの中を探っていると

「あれだけの連携攻撃……いくらISの補助があるとは言え……プログラムを組むのは大変だったんじゃないんですか？」

「ほえ？ 何言ってるん？ あれ全部マニュアルやで？ なあ兄ちゃん」

「んー？ ああ、そうだぞ？ 幾らなんでもあれはプログラムじゃ出来なからな……おつあつたあつた」

クツキーの箱を取り出して机の上に置くと。セシリア達の顔が凍りついている

「どうかした？」

なのはが自分のカップに紅茶を入れながら尋ねると

「どうかしたではない。龍也、それにはやて。お前たちはあれだけの軌道を全部マニュアルでやっていたと言うのか？」

信じられないという顔のラウラに

「私も、なのはもフェイトもはやてもずっとISの操縦はマニュアルだぞ？ セミオートというのはどうも好かん」

感覚が狂うし、戦闘の間合いの計りなおしも面倒くさいしなーっとそんな事を考えながら、全員にクッキーを配っていると

「龍也」

「龍也さん」

セシリアとヴィクトリアが同時に声を掛けてくる。あんまり見たこと無いくらい真剣な顔をしているな……

「龍也さんが私たちにやれと言っている。マルチタスクの練習をすれば、ああいう動きが出来る様になるのですか？」

「なると言うか……自然となるな」

「うん。なるよね」

「同時に別々の事を考えて指とか動かせるようになれば。誰だって出来るで？」

自然と身体が適応して、そういうことが出来るようになるということ。セシリア達は

「そうなのですね！ 今まであれの意味が判りませんでした。そういう事なら早く出来るように頑張ろうと思いますわ」

「そうだな。ビットと通常の動きの併用は早く出来るようにならねばならんしな」

何かやる気が出たみたいだな。良かった、良かったと思いつつ皆で訓練後の和やかな時間を過ごし、解散となり皆が自室に戻っているのを見ながら。私達も自室に戻った

「ん？ メールか」

PCに来ていたメールの差出人はジェイル。タイトルは

『新型ネクロの調査結果と魔法生物型ネクロとの遭遇情報』

椅子に座りメールを開く

『その世界に現れた新型のネクロは。既存のネクロと比べると再生能力が低い、その分身体能力が高い。また首なしネクロとISを展開したネクロは、基本的に同じタイプのネクロではあるが。ISを展開した個体は上位種であり。首無しのネクロを取り込むことで、よりネ

クロに近く変化する』

報告書には今までのネクロとデクスと比較したデータも添付されていた。魔力量と再生能力は劣っているが、汎用性と筋力や速力は個体差こそあるが。LV4に近い者もいる

「これってあれかな？ 身体に蓄えられる魔力が少ない代わりに基礎能力を向上させたってことかな？」

分析データを見ながら尋ねてくるフェイトに

「ネクロはその世界に適応して進化しているからな。魔力が少ないなら少ないなりの進化を遂げたタイプと見て間違いないな」

「となると、見たことの無いタイプのネクロも現れる可能性があると言ふことやね」

はやてのいう事は正しい。世界が変わればネクロも変わる。今まで交戦した事無いタイプに進化するネクロがいてもおかしくは無い

『そのネクロにカートリッジシステムを導入する事により。足りない再生能力をカバーしている、なおそのカートリッジはかなり新しい物だが。使用者に掛かる負担を度外視したものであり。私達の世界には存在しない型番なので、恐らく平行世界で製造された。対ネクロ用カートリッジであると推測される。物は試しと同じ用に作ったカートリッジを使用してみたが。使用后、吐血及び右足の腱の断裂と強烈な反動があつたため。2度と製造しない事を決めた』

あいつは何をやっているんだ？ 調べて危険と判つたものを製造するなよと呆れながら。ページをスクロールとすると

『なお、ミッドチルダに新型のネクロが10体ほど出現した。狼型のネクロで再生能力は通常のネクロと同等だが。獣同然であり狼のよくな集団での戦闘を仕掛けてきた。今回出現したのは小型の群れであり。恐らくはその世界で使用する前のテストケースとして使用されたのだと推測される』

どんどんネクロも戦い方や陣形を工夫してきてるな。ネクロはほとんどん知識をつけて、様々なタイプに分かれて来ている

「近いうちに本格的に仕掛けてきそうですね」

「だな。この獣型を先鋒にして。IS非展開を中軸。後衛に指揮を出

すネクロかIS展開のネクロ。色んな戦術を組んでくるだろうな。この世界に居るLV4がどんなタイプかは判らんから。予測も着かないしな」

ヴォドウン・ベリトはどう見ても。指示を受けて行動するタイプで、自ら作戦を考えて動くタイプではない。ペガサスに至っては何を考えているかは判らない。どういう戦術で来るのか。何を企んでいるのが全く判らない

「とりあえず今出来るのは、一夏達代表候補生の護衛と周囲にサーチャーを設置する事だな。サーチャーの数の増加と、IS学園全体に對ネクロのセンサーを張っておいてくれ」

そう指示を出して。深く椅子に腰掛ける

(手が見えないのは本当に不安だな)

相手の出方がまるで見えない。だが確実にデータを集めているのが判る、それが余計に不安を煽る

(仕掛けるのなら仕掛けられたほうが気が楽なんだがな)

せめてこの世界に居座り。指揮を取っているLV4ネクロの正体さえ分かれば何とでもやりようはあるんだが……

私は深く溜め息を吐き。もう1度ジェイルの送ってきたネクロの資料を読み返し始めた……

龍也が深く溜め息を吐いた頃。IS学園の外れのログハウスの地下で

「うっ……ぐ……んこは」

全身が軋んでいるが、何とか生きている……身体を起こそうとして気付いた

(肋骨が痛まない？ それに)

寝転んだまま右足に力を入れてみる。若干の痛みこそあるが問題なく動く

(おかしい。右足は砕け散った筈だが……)

ネルヴィオに砕かれた右足が動く事に疑問を感じながら。視線だけで辺りを見回す

(窓は無し。家具はベッドと机のみ……壁は……木? どこだここは?)

とりあえず今のところ。タスクが隠れ家をしている基地では無いと言っているのは確かだ。辺りを窺っていると

ガチャ

「!?」

扉が開き誰かが入ってくる。驚きながら音のしたほうを見ると

「た、楯無……?」

「起きたんだ。久しぶりね、ユウリ」

にこやかに笑う楯無……楯無がいるという事はIS学園か……?

それとも更識家の手が掛かった場所だろうか? と色々考えたが。

まずは……

「お前がワタシを助けたのか?」

「んーこつそりとここに連れて来たのは私よ? 近くの砂浜に打ち揚

げられていたのを回収して、手当てはしたわ」

近くの砂浜? おかしい確かにワタシがいた無人島はIS学園の

近くだが、潮の流れ的に打ち揚げられる事は無いと思うのだが

「とりあえずもう少し休んで、次ぎ起きたら色々聞きたい事がある

るんだけど。良いかしら」

そう尋ねてくる楯無に

「そうだな……考えておく。まだボーとしていて考えが纏まっていな

いからな」

寝すぎたからか、それとも出血しすぎたからかは判らないが。頭が

ボーツとしている、もう少し休みながら考え事をしたい

「そう。じゃあまた後で聞きに来るわ」

部屋を出て行くこうとした楯無は扉の前で

「そう言えば。前に言っていた生きる意味は見つかった?」

振り返りながらそう尋ねてくる楯無に

「まだだ……だがここにいれば、何か判るかもな」

「そう。見つかるといいわね」

そう笑って出て行く楯無を見ながら。布団を被りなおし

(今はとりあえず……休むとしよう)

どうして、粉々に砕けたはずの右足が治っているのか？ 砕けた肋骨が治っているのか？ なぜIS学園の近くに流れ着いていたのか？ 考える事はこれでもかとおあるが。考えが纏まらない。いまはとりあえず休むとしよう。

身体は休息を欲していたのか。驚くほど早くワタシの意識はまどろみの中にと落ちていった……

第52話に続く

第52話

第52話

ワタシが目覚めてから2日経った。今だ部屋から出る許可はもらえないが、取りあえずは自由と言える……

(しかし……時間が経って冷静になればなるほど、腑に落ちん)

折れた筈の右足に肋骨は何故か再生している。若干のうずきと痛みはあるが、それだけだ……それに

(全身打撲にはなったと思っていたんだが……な)

多少の身体の軋みと貧血による。目眩こそあれ健康体だ……しかしそんな事はありません

(ワタシの作った……疑似プロテクション発生装置は使いきりで、しかも効果はそんなに高い物ではない。あれだけの高性能爆薬の直撃の衝撃を完全に殺すことなど出来ない……それなのに。ワタシは五体満足でしかも骨折も打撲も無い。こんなことはあり得ない……)

考えれば考えるほど判らない。治っているから良いと言う問題ではない……

(考えられるのは、八神龍也に治癒を施された可能性だ)

ネクロから聞いた話によれば。八神龍也は死者蘇生や時間移動と言った奇跡も可能とするらしい、ならばワタシを治癒するなどわけない筈だが……

(それならば。ワタシは楯無達に回収された？ 八神龍也がワタシを治したのならば、ワタシは八神龍也の元にいる筈)

(判らん……何とかして奴に接触できればいいんだがな)

スコールから託された。USBメモリの暗号は八神龍也なら判ると言っていた。

(抜け出すわけにはいかんしな)

常に部屋の外に監視役がいるのは判っている。無理に抜け出すのも無理。アマノミカゲはダメージレベルDで起動させる訳にはいかない

(次に楯無が来たら、交渉するしかないか)

ワタシはどうにもならない状況に溜め息を吐いて。もう1度ベッドに腰掛けた

ユウリが溜め息を吐き。ベッドに寝転んだ頃、IS学園地下の研究室で

「あのくツバキさん？ 少しお時間宜しいですか？」

楯無が私の機嫌を伺うように尋ねてくる。

「何？ 丁度一区切りついた所よ？」

ヒエンパックと汎用バックパックスペリオンシリーズの調整を丁度終えたところだ。データを保存しながら振り返ると

「あ、ああ！ そうだったんですね！ 良かったです。購買でケーキ買って来たんですけど……どうです？」

なんか怪しいわねー。何かまた勝手な行動でもしたのかしら？

楯無は私の視線に気付いたのかきよときよとしながら

「はい！ これ好きなチョコケーキです！」

大きな声で私の前にチョコケーキを置いて。反対側に座る楯無

「ありがと、疲れたときには甘いものよね」

楯無が持って来たチョコケーキと紅茶で。3時の休憩としながら「で？ また何かやっちゃったの？ 簪ちゃんと喧嘩したとか？ 龍也君と模擬戦して負けたとか？」

考えられる事を言うが。楯無は

「あーいや？ 別にそういう事じゃなくてですね？ そのー実はですね」

もごもごといいにくそうにしている。楯無に

「怒らないから言ってみなさいよ」

別に子供のやる事で怒るほど気は短くない

「えーと……実は……そのー」

「怒らないから言ってみなさいって」

おどおどしている楯無にそう言いながら、紅茶を飲んだところで「あのですね！ ファントムタスクの黒武士を保護したんですけど

……」

楯無がにへらと笑いながら言った言葉に

「ぼふっ!? げほっ!? げほっ!? なななな、何でそんな大事な事を言わないの!! 何時! 何時保護したの!!!」

「お、怒らないって言ったじゃないですか!?! 「それとこれとは話が違
うわよ!!」 いひゃい!?! いひゃいですー!!!」

楯無の頬を掴んで引っ張る。あら? 思ったより良く伸びるわね
? 涙目の楯無の頬から手を離し

「で? 何時、どこで保護したの? 学園の外に出るような任務はな
かった筈だけど?」

楯無がIS学園から離れるような任務は無かった筈、ではどこで保
護したのか気になり尋ねると

「えーと2日前の……ちよっ!?! 握り拳作るの止めて下さい!」

2日前と聞いて咄嗟に握り拳を作ってしまった。でもこんな大
事な事を黙っていた、楯無には拳骨の一つくらい落しても良いと思う

「2日前の放課後。学園の近くの砂浜に打ち上げられていたんです」
「打ち上げられてた? 怪我とかはしてたの?」

黒武士と言えば、裏世界ではそれなりに名の通った暗殺者だ。そん
な彼をタスクが手放すとは思えないんだけど……

「えーと。全身に細かい切り傷と打撲。あとは骨折した形跡があるの
に、折れていない右足と肋骨って言う不可思議な現象がありました」
折れた形跡があるのに折れてない? どういうことよ?」

「黒武士と話は出来る?」

とりあえず話を聞かないと何も判らない。話が出るなら話がし
たいと思ひ尋ねると

「えーと、ユウリ・クロガネって言うんですけど? 黒武士の名前つ
て」

「何で知ってるのよ?」

私がそう尋ねると楯無は

「え、えーとですね!?! そのですね!?! えーとえーと……なんて言え
ば良いんでしょうか!?!」

あたふたしてる楯無にまさかと思いながら

「惚れた？ え!? 嘘！ 本当なの!？」

冗談のつもりで尋ねたのに楯無は真っ赤になってしまった

「ま、まあ……その……そんな所ですね。え、えーと！ フレイア達のログハウスにいるんで！ 自分で行つてください！ それでは!!!」

「ああ！ 待ちなさい楯無!! 話は……」

呼び止めようとしたが楯無は走り出して。すぐに見えなくなってしまう……私は溜め息を吐きながら、PCのキーボードを押してあるファイルを呼び出す

(ユウリ……エリスちゃんと双子とも言える、クローンの名前)

ある違法研究所で進められていた。第一世代のISで最も適正の高かったドイツ人のクローンプロジェクト。そのタイプ00ファースト ユウリ タイプ00セカンド エリス タイプ00サード セリナ 私が現役時代に保護しようとして出来なかった2人のうち1人。

(もしも、ユウリがあユウリなら……私は向き合えないといけない) ずっと心に残り続けていた。後悔と無念……そして償わなければならぬ罪。

(行かないと)

研究用のPCにロックをかけて、私は学園の外れのログハウスにと出掛けて行つた……

「そう言えば……龍也さん。2日前に何か気になることがあるって言つてましたけど……なんだつたんですか？」

放課後の訓練の準備をしていると。なのはが思い出した様に尋ねてくる。

「ああ、前のISの暴走事件の時に色々と情報を教えてくれた。人間の気配が2日前から学園内にあるんだ」

あの時私に接触して来た。エリスと瓜二つの顔をした少年の気配が先日から学園内にある

「それってネクロを裏切つたって事？」

「その可能性が高いんだが……話を聞かないとどうにもならん」

気配があるのは、学園の外れのログハウスの中から。そこには3人の暗部の人間がいるから潜入と言うのも難しい。

「でも兄ちゃんが行かないって事はあれか？ 意識が無いとか？」

話を聞いていたはやてがそう尋ねてくる。私は首を傾げながら

「それが良く判らないんだな。これが……気配がどうも安定しないんだ」

「？ どういうことや？ 兄ちゃんは一度覚えた気配はまちがえんやろ？」

不思議そうな顔をしているはやて達に

「うーん。何か変な気配と混ざっててな？ 掴みきれないんだよ」

私がそう言うのとフェイトが

「変な気配って？」

不思議そうな顔をしながら尋ねて来る。私は頭を掻きながら

「ネクロと魔導師に……時空の狭間だな。あれは」

「ネクロと魔導師は判るけど。時空の狭間って何ですか？」

訳が判らないと言う表情のなのはに

「私が並行世界に転移したりする時に発生する物だ。時空間を移動すると残滓としてそういうのが残る」

納得と言う表情をするはやて達は

「じゃあネクロ化してるんか？」

「いや。していないな……徐々にだがネクロとかの魔力は霧散している」

ただ少しだけ接触されて。魔力の残滓が残っていると言う感じなんだが……

「おかしんじゃないですか？ 魔力が残っててネクロ化させてないって」

「そうなんだよ。それが気になってな」

ネクロが接触して。ネクロ化させない……それがどうしても気になる……

「まあ考えてても仕方ない。時間を見て会いに行つて見る」

ネクロ化の予兆は無いし。会って話をするのが良いだろう

「さてと。話は終わりだ、今日も一夏達の訓練を見に行くとしよう」

もう一夏達がアリーナで待ってる時間だ。私達は作った訓練用のプログラムを持って、アリーナに向かって行った

「……ツバキ・V・アマノミヤ……ふっ。まさかお前に会う事になるとは……思っても見なかったぞ」

部屋の入り口で硬直している、ツバキ・V・アマノミヤにそう言う
と

「……や、やっぱり……君はあの時の……」

青い顔をしてるツバキに

「あの場合はああするしかなかった。お前の選択は正しかった」

研究成果を奪われるくらいならと、研究所の自爆装置が起動した中で、別々の場所で実験されていた。ワタシとセリナを保護することは限りなく不可能に近い。

「どうやって助かったの……？ セリナはどうなったの？」

「フロントムタスクのスコールと名乗る女にな。保護された……セリナは……死んだ」

スコールは保護出来なかったと言っていた……つまりは死んだという事だ

「ご、ごめんなさい……私は……」謝るな。そんなことをしても何も変わらない。それにそんな話をしに来たんじやないだろう？ さっさと本題を言え」

過去は過去だ。どうにもならん……何時までもそんな話をして時間を潰すつもりはない

「……強いよね……君は」

「まあ。言いたい事もあるが……裏世界とは言え自由を手に出れた。そういう面ではそれなりには感謝してる」

フロントムタスクでの生活のおかげで、ISの整備の技術や暗殺に

長けた技能も身に付けることが出来た。恨む事でもない

「あの……言いくいかもしれないんだけど……データでは貴女はエリスちゃんの双子の姉の筈じゃ？」

言われるとは思っていた……ワタシは深く椅子に腰掛け。少し考えてから口を開いた

「あの研究所では……人造の男性操縦者の実験を行っていた。だが起動出来たとしてもそれは僅かに数分……これでは駄目だと判断した。あの屑どもは……女性体のクローンに男性のクローンの遺伝子データとナノマシンの大量投与によって……性別を変えと言う実験をしていた……ここまで言えば判るだろう？」

女性より男性のほうが身体能力に優れる。だが男ではISを起動できない、ならばと女性に男性の遺伝子データを組み込み。ナノマシンで身体を作り変える事で男性のIS操縦者を作る事を目標にしていたらしい。

「そんな事まで……人を何だと思ってるの!？」

「ふん。知らんな? モルモット程度の認識だろ? まあ全員殺したかな」

タスクに保護されてから2年後。ワタシは別の研究所で同じ事をしていたあの屑どもを皆殺しにした。あいつらだけは許せなかった……スコールには研究データを回収しろといわれていたが。ワタシと同じ様な存在をこれ以上増やすわけには行かない……ワタシはその研究データを全て破壊した

「だがどの道。完成はしなかつただろうな……ワタシの様に実験に成功した例は無い。あいつらが持っていた研究データを見て驚いたよ。ワタシは奇跡と言えるバランスで生きていたんだからな」

どうも他にも同じ実験を受けたクローンが居たらしいが、全員死亡とあつた……だからこそ

「だからこそあの外道どもはワタシで何年も何年も実験をしたんだ……身体を引き裂き。遺伝子データと血液データ……更には骨髓まで抜き取って。ワタシと同じ存在を大量に生産するつもりだったらしい……自分らを神だの何だの言っていたよ」

「本当に……ごめんなさい……」

「謝られてもどうにもならん……まあ最初こそ身体の作りに困惑したが。今では馴れた物だ」

今更元の身体に戻っても困るし。この身体はそれなりに気に入っている

「さて……ワタシの話は終わりだ。これからワタシはどうなる？」

「あ。ええっと……その前に聞いてもいいかしら？ ファントムタスクはどうしたの？」

「抜けてきた。ワタシはどの道協力者と言う形だったからな。まあ脱退試験とかでネクロと戦わせられて死に掛けたがな」

ワタシがそう言うとなツバキは

「！ タスクはやっぱりネクロと協力体制にあるの!？」

ある程度こちらでも予測していたのか。ネクロとタスクの関係を尋ねてくるツバキに

「あれは協力と言うものじゃないな……利用されてると言う感じだな。上層部はそれに気付いていないがな」

どうせ奴らはその内切り捨てられて。殺されると思うがなと笑うと

「そうなの……ネクロの計画って知ってる？」

「知らん。あいつらはスコールとしか話してなかったからな。殆ど力になれることは無い……」

ワタシはあくまで下っ端だ。あいつらの計画までは知らない

「そう……ありがとう。タスクとネクロが一時的にでも協力体制にあると言うだけでもいい情報だわ」

そう笑うツバキに

「ところでワタシはこれからどうなる？」

「え、えーと。そうね……3人目の男性操縦者としてIS学園に入学になるかな？」

まあ予想とおりだな……だが

「戸籍も何も無い人間をどうするつもりだ？」

クローンのワタシに戸籍も何も無い。そんな人間をどうやって入

学させるつもりだ？ と尋ねると

「更識家か天乃宮家がバックに付くと思うけど……どうかしら？ 天乃宮家に来るなら、すぐに手続きするけど……」断る。ワタシがどうするかはワタシで決める」

憎んでいる訳じゃないが、どうにも納得行かない部分がある……だから天乃宮の人間になる気は無いと言うと

「そう……じゃあ。どうするか決めたら教えて？ じゃあね。おやすみ」

部屋を出て行こうとするツバキに

「1つ聞きたい……エリスはワタシの事を覚えているか？」

長年気掛かりだった事を尋ねると

「……いいえ。エリスちゃんは研究所の事と自分の姉妹の事は覚えてないわ。知ってるのは自分がクローンと言うだけよ」

「そうか。それは良かった……あの研究所の事など覚えて無くてよかった」

あいつはもう。エリス・V・アマノミヤで良い。あんなことは忘れていいんだ……

「ユウリ……もう寝る……じゃあな」

何か言おうとした。ツバキの言葉を遮りワタシは布団に潜り込んだ……暫くワタシを見ているツバキの気配を感じていたが、暫くするとその気配は無くなった……しかしそれから僅か5分ほどでまた何者かの気配を感じ。布団から顔を出すと

「起こしてしまっただかね？」

「……八神龍也……」

何時の間にかワタシの部屋の椅子に腰掛け。微笑んでいる八神龍也の姿があった……

「眠ると言うのならまた出直すが？」

「いや、構わん……色々と考えたい事も合ったしな」

布団から身を起こす少年に

「すまないね……少年」

「……何だその呼び名は？」

不機嫌そうな少年に私は

「名前知らないしな。少年としか言いようが無いだろう？」

「……そうだな。ユウリだ。ユウリ・クロガネだ」

「よろしく。ユウリ」

「ああ。よろしく」

ユウリの身体を見て。気付いた……

(やはり魔力の残滓がある……何者かが治癒を施したと言うことか)

僅かに残る魔力の残滓……かなり強力な治癒魔法だったからか。

まだ身体から魔力が抜けきってないのだろう

「なにか？」

「いや。なんでもない……所で……ユウリはファントムタスクでは無かったのかね？」

そう尋ねるとユウリは肩を竦め

「協力者だったただけだ、色々と考えて抜ける事にしたんだよ。死に掛けたがな？」

「ふっふふ。だろうな？　だが男の決断と言うのは何時だって命懸けだろ？」

「違うない」

くつくと笑ったユウリは懐から

「タスクのスコールと言う女から預かった。お前なら暗号が解けるらしいが？」

差し出されたUSBメモリを見ながら

「暗号の解読には挑戦しなかったのか？」

「やってみたんだが。意味が判らなかった……剣十字に白と黒の羽根が重なってる絵が表示されるだけだな」

その言葉に私は

「なるほど……私が解けると言うのはそういうことか……」

1人納得していると。ユウリが

「どういう事だ？」

「剣十字はベルカの証。そして私は古のベルカの王族の血統だ……そ

の暗号は私の事を示していると思う」

私がそう言っているとユウリは肩を竦め

「判らん筈だ……」

と苦笑しているユウリに

「このメモリは預かる。私のPCで確認させてもらう」

「ああ……そうしてくれ、まだワタシはここから出ることは出来ない
しな」

黒いメモリをコートに仕舞ってから

「これからどうするんだ？」

「さあな……暫く考えさせてもらうさ。のんびりと休養しながらな」

くつくと笑うユウリの頭を手をおき。身体に残っている魔力を吸
収する

「むっ？ 何をした？」

「何気にするな。簡単な治癒だ……楽になったろ？」

手を閉じたり開いたりしてるユウリに

「じゃあな。今度はこんな暗い所じゃなくて。陽の下で会おう」

私はユウリの返事を聞く前に転移で自室にと戻り

「さて……このメモリに一体何が？」

ノートPCにメモリをセットして中を読み込む

「さてと……考えられるのは……」

思いついたキーワード……夜天の守護者と入力すると

「当たり前……さて何が……」

メモリの中のデータに目を通し……目を見開いた……そのメモリ
の中に記されていた。ネクロの計画は信じられないものだった……

「なるほど……どうやら時間はさほど残されていないようだな」

ノートPCの画面に映し出されていたのは、ジオガデイスの居城で
あり、聖王のゆりかごのより攻撃特化の改造を施された。空中魔城。パ
ンデモニウムの同型機の姿だった……

第53話に続く

第53話

どうも混沌の魔法使いです。今回は前回の後書き通り楯無さんとユウリさんの話と束さんサイドの話にするつもりです。

それでは今回もどうか宜しくお願いします

第53話

放課後に私はフレイア達のログハウスの地下に来ていた

「どう。気分は？」

「……まあ。悪くはないな」

ベッドに腰掛けているユウリは退屈そうに大きく伸びをしているのを見て

「暇なの？」

「暇じゃないように見えるか？」

ジト目で尋ねてくるユウリを良く見る。ベッドに腰掛け明らかに暇そうな表情をしている

「見えないわね……」

「ならそれが答えだな」

ふんと鼻を鳴らすユウリにツバキさんに言われた事を尋ねて見る

「更識家か天乃宮家の支援を受けるの？」

「そう尋ねるとユウリは

「今の所はそのどちらの支援を受ける気は無い。ワタシの道はワタシが決める」

「しっかりとした口調のユウリに

「じゃあ前に話した。私の依頼を受けるって話は？」

「……保留中だ」

少し考えた素振りを見せてから返事を返すユウリに

「ふーん。じゃあ今度依頼してもいい？」

「……考えておこう」

返事はいまいにはされたが。断れたわけじゃないか

「じゃあ。また来るわ」

「……」

返事を返してくれないユウリを見ながら部屋を出て鍵を掛けなおすと

「……また明日」

「……え……」

扉越しにまた明日と声を掛けて来たユウリに一瞬呆けたが

「ええ。また明日」

2度目の返事は無かったが。それで充分だった……私は少しだけ早足で寮に戻っていった……

窓の外を歩くお嬢様を見ながら

「随分とお嬢様はあのユウリとか言う奴にお熱みたいだな」

毎日毎日。地下のユウリに会いに来ているお嬢様の背中を見ながらそう呟くと

「まあ。話を聞けば無理ないとは思うけど……」

「信用は出来ない」

フレイアもアイアスも複雑そうな顔をしている。それを見ながらあたしは

「でもまあ。ツバキさんも知ってるし、あたし達がどうこう言う問題じゃないだろ？」

昨晚ツバキさんが来て。更識家か天乃宮家が責任を持つと決定をした、ならばその下のあたし達がどうこう言う問題じゃない

「だから両家の指示を黙って待つと言うのか？ シェルニカ？」

「おう。あたしは待つぞ？ それは両家に仕える人間ってもんだろ？」

上の命令には従う、その指示は疑わない。そういうもんさ」

長い事戦場を渡り歩き傭兵家業をしていた。あたしにはそれについて迷う理由は無い

「そもそもだな？ シェルニカ・オウレンって名前をくれた更識家と、普通の人間らしい事を教えてくれた天乃宮家の為に命を使うと決めた。あたしにやユウリがどうだのこうだのなんて関係ねえよ」

元は名前の無い孤児だったあたしに名をくれて。殺しや破壊工作以外の事を教えてくれた天乃宮家には感謝してもしきれない

「大体な。言いたい事があるなら顔を見て言うの良いだろ？ あたしは両家の決定には逆らわない、ユウリがあたし達と同じ様に更識家や天乃宮家の人間になるって言うなら受け入れる。敵になるって言うなら戦う。それだけさ」

良い意味で悪い意味でもあたしは生粋の傭兵だ。元からある程度護衛任務等をしていて、フレイアやアイアスとは違う

「ボクは……シエルニカみたいに割り切れない」
「私もだ」

そう言うフレイアとアイアスにあたしは

「ならいざと言うときは……お前らが裁けば良い。何時もと同じだろ？ フレイアなら剣士らしく斬れば良い。アイアスなら狙い撃てば良い。あーだこーだ考えるのは止めようや」

考えすぎてしまうフレイアとアイアスと、戦場の中で裏切りや策謀の中で生きていた。あたしとフレイアとアイアスがチームを組んでいるのは、きつとこう言うのが理由だと思っている

「ふっ。あいかわらず変な所でドライだなお前は」

「ドライと言うよりかは単純なだけさ。どーせあたしは考えるのは苦手だからな。直感で動いてるだけだよ」

「突撃馬鹿」

「うっせ」

くつくと笑いながら。ソファアから立ち上がり

「夕飯なんにする？」

エプロンを着けながら尋ねると

「和食だ」

「マーボー」

そう即答する2人の声にあたしは

「和食だな。OK」

良い魚の開きがあるし、昨日から漬けていた漬物も良い具合だ。後は味噌汁と簡単な煮物を用意すれば良いか……

「ボクのマーボーは？」

「黙ってる。味覚音痴」

「酷い」

よよよと嘆くアイアスを無視して夕食の準備を始めた

「マーボー!? 作ってくれたの!?!」

「食いたいんなら作ってやるさ。だけど……そんなには辛くしてないからな」

どうせマーボーを食うって言うのと判っていたから、ちゃんと豆腐を買い足していた。

「じゃあ食おうぜ」

「ああ」

「いっただきまーす♪」

細かい事は考えない。物事は大きな流れで出来ていると考えれば良い……だから難しい事は考えないでなる様になると思うほうが楽だ。

それにあたしにはユウリが出す答えはある程度判っている。やつとあたしの経歴は似てる、だからこそ判る信じれる者にしか従わない人種だ

(だからあいつが従うのは両家じゃないだろうな)

きつとユウリは更識家にも天乃宮家にも従う事は無いだろう……そんな確信にも似た思いがあたしの胸の中にあつた

人里離れた山の中にある。篠ノ之東研究室では

「ねーアズマちゃん。調子どーお?」

部屋に入るなりそう尋ねてくる束に

「大分楽だ。痛みももう無いしな」

八神龍也にへし折られた肋骨の痛みはもう無い。束が施してくれた治療のおかげで予定より早く完治した

「しっかし酷いよねー？ 女の子にこんな怪我をさせるなんてさ？
何が神の王だよ。神だつて言うなら怪我をさせないで無力化くらい
出来なかつたのかよ」

不機嫌そうな束の声を聞きながら。私はへし折られた肋骨を撫で
ながら

(いや。やつはきつとその気なら無力化出来たに違いない)

圧倒的までの戦力差を感じた。数で勝っているネクロ達が警戒す
る理由を言葉どおりこの身で味わつたから判る……八神龍也が私に
怪我をさせたのは、警告の意味もあつたのだろう

(次敵として立ち塞がれば次は無いだろうな)

あの男はきつと2度も敵にかける慈悲は持ち合わせていないだろ
う……

「んくどつたの？ アズマちゃん？ 何か考え事かにや〜」

私の顔を覗き込んでくる束に

「ブラッドバニーの事を考えていた」

「あ、あくアズマちゃんのIS？ んく流石の束さんでもDレベルの
ダメージは簡単には直せないかなー？」

まああれだけの攻撃を受けたのだから当然か……

「どれくらいで直る？」

「んくクロエちゃんとアズマちゃんが手伝ってくれたら……2・3日
かな？」

にここにこ笑う束に頷き

「判つたすぐにISハンガーに行くから。修理を始めててくれないか
？」

「おっけ〜じゃあ待つてるよーん！」

嬉しそうに笑って走って行く束を見ながら。自分用のPCを起動
し

(準備が必要だ……いざと言うときに束が逃げる事が出来るだけの時
間を稼げるだけの準備が)

今回の事で判つた。今のままのISでは八神龍也にもネクロにも
勝てない……もしネクロが束を切り捨てた時の為の備えは必要だ

(廃棄するつもりだったが……使えそうだな)

ラファールの最強パッケージ。クアッドフアランクス、重力制御と射撃の反動制御で動けない欠点を持つ欠陥品のパッケージだが。

(この火力は役に立つし。改造すれば移動できない欠点は充分克服できる)

私になら出来ると言う確信がある。だが今やるべき事は

「ブラッドバニーの修復だな」

ただのパッケージではなくオートクチュールにする必要がある。

その為にはブラッドバニーの修復が最優先だ

(私は束の為の道を作る……この道が間違いだとしても。私はその道を貫くぞ……八神龍也)

束は賢い。時が来ればきっと変われる、だから今は時間が必要だ……そしてその為の時間を作るのが私の生きる意味なのだから……

その日私は久しぶりに更識家に来ていた

「椿様。榎奈様が奥でお待ちです」

「ありがとうございます」

そう返事を返し。榎奈の待つ部屋に向かう

「ひさしぶりね。椿」

「やっほ。元気そうね」

更識榎奈。先代の更識家の妻で当然簪ちゃんと榎無の母親で、私の幼馴染だ。

(すっかり相変わらず榎無に良く似てるわよね)

いつも思うが、榎無と榎奈は良く似ている。親子だからと言えばそれまでだが、本当に良く似ている

「で？ 今日は何のよう？」

「んーちよつと所かかなり込み入った話になるから。人払いして欲しいんだけど？」

この話は聞かれるわけには行かないので榎奈に人払いを頼むが

「もうしてあるわよ。私と椿の話となると、他の人間に聞かせられる話じゃないからね」

そう笑う櫛奈に私は

「それなら安心。あのね、前に話したでしょ？ エリスちゃんのこと」

エリスちゃんが楯無にスカウトされた時にエリスちゃんの生い立ちと過去は櫛奈に話してある。だから私がそう言うのと

「前に言ってたユウリとセリナって子の話？ 大分探してるけどまだ見つかってないわよ？」

「それがね。今IS学園にユウリがいるの、今の所はフレリア達に監視して貰ってるけどね」

「監視？ なんでよ。折角見つかったエリスちゃんの姉なんでしょ？

そんな犯罪者にするような……」それがユウリは黒武士として活動していたのよ」……そうなると思情は変わるわね」

黒武士。少しでも裏世界に関わる人間ならこの名前を知らない者はいない。漆黒のISを身に纏い違法研究所の襲撃や、報酬しだいで要人の暗殺を引き受けるヒットマン……それがユウリの裏世界での通り名だ

「でもまあ良かったじゃない。エリスちゃんが覚えていないとは言え姉妹の再会……」ユウリは違法の研究の後遺症で人造の男性操縦者になってるのよ」

姉妹の再会と言い掛けた櫛奈の言葉を遮って言う

「人造の男性操縦者か……にわかには信じがたいけど……嘘じゃないのよね？」

「こんな嘘は言わないわよ。これ一応検査データと写真ね」

学園から持ってきていたデータを渡す。櫛奈はそれにすぐ目を通しながら

「来たのは更識の支援が目的？」

「そ、更識家と天乃宮家の両家が後ろにいれば、おいそれと手は出せないでしょ？」

更識家の家は優秀なSPや暗部部隊の派遣元として、天乃宮家は優秀なIS研究者と指導者としてそれぞれ有名だ。どの国も少なから

ず更識家と天乃宮家は関係している、下手に両家が保護してる人間にちよつかいをかければどんな手痛いしつぺ貸しがあるかなんて言うまでもない

「……まあ。判らないでもないわ……でもね「楯無は大分ユウリを気に掛けてると言うか。惚れてるみたいなのよ」……刀奈はユウリが元女って知ってるの?」

「知らないわよ? 100%男って思ってるわね」

大体今のユウリを見て元女と思う者は存在しないだろう。少々小柄ながら鍛え上げられた肉体と鋭い視線はどこからどう見ても男の物だ

「まあぱつと見は間違いなく男よね」

写真を見ながら暫く唸っていた櫛奈だったが……

「まあ刀奈が気に掛けてるって言うなら考えなくもないわよ? けどさ……黒武士と刀奈の接点が見えないんだけど?」

自分の娘とユウリの関係性が見えないと言う。櫛奈に

「前に何度か街とかでばったり出くわしてるみたいよ? 黒い悪魔に襲われた時も助けられたらしくて」

楯無から聞いた何時・そして何回あったのか? という話をする
櫛奈は

「……娘と親って似るのね。私もあの人と会ったのは戦場だったわね」

今でこそ、華道や琴の先生として活動している櫛奈だが……昔は私と同じ様に違法研究所を破壊して回ったりしていた、だから櫛奈の馴れ始めも戦場だったそうだ

「でもね。楯無って絶対自分の気持ちに気付いてないわ」

「え? どういうこと?」

不思議そうな顔をする櫛奈に私は

「いやね。何かほっておけないとは感じてるみたいんだけど。何でほっておけないと思うのか? とかが全然判ってないみたいなのよ」

間違はなくあれは自分の気持ちを理解していないと断定出来る
と言うと

「我が娘ながら……呆れ果てて何も言えないわね」

ふうつと深い溜息を吐く櫛奈は添付していた写真を見ながら

「ちよつと背丈は低いけど……身体つきは良いわね。生粋の剣士って感じね」

写真から自分の娘が目をつけた相手の分析を始める櫛奈

「まあ黒武士って通り名が付く位の戦闘力は持つてるし、筋肉の付き方も剣を振る上では理想的な感じよね」

剣の使い手ならではの観点だ。私は写真を見ている櫛奈に

「それで櫛奈にはお願いがあるのよ」

「何を？　この子を支援する話とは別件？」

そうそうと頷きながら私は

「ちよつとねー楯無の危機感を煽って欲しいかなって」

「どういうこと？」

首を傾げる櫛奈に私は

「楯無って絶対切っ掛け無いと自分が恋してるって気付かないと思うのよ。だからもしユウリがIS学園を去るって言ったら、更識家か天乃宮家のどちらかで保護するって言ってくれば良いわ」

「ああ。想い人が居なくなると知れば多少は心境が変わると」

「そう言うこと。もし楯無が気付かなくても暫くしたら。IS学園に戻せば良いしね。じゃあそういう流れで宜しく」

もう話すことは話したしそろそろIS学園に戻って研究を進めたいし。そろそろ帰るとしよう

「ん。了解、じゃあ今日の夜にも連絡してみるわ。それと今度は仕事の話じゃなくてゆつくり出来る時にね」

そう笑う櫛奈と別れ。私はIS学園にと戻っていった……

その日の夜

「え、えーと……今なんて言ったのお母さん？」

珍しくお母さんから連絡があり。少しだけ嬉々とした気持ちで携

帯を取ったのだが……お母さんの言った言葉が理解できず尋ね返すと

「だから今IS学園で保護されてる。ユウリ・クロガネがもしIS学園を去るって言うなら。更識家か天乃宮家で保護するって話」

「なんでお母さんがユウリを知ってるの?」

なんで本家に居るお母さんがユウリを知っているのかが気になり尋ねると

「更識家はIS学園の経営にもかかわってるの忘れた? 一応そういう報告は回って来てるのよ?」

そ、そうだったんだ……多分ツバキさんとかフレイア経由でお母さんに伝わったのか……

「という訳だから。刀奈がユウリにIS学園に居てほしいと思うのなら。自分で残るように説得するなり話し合うなり好きにきなさい。一週間後には迎えに行くからね。じゃあお休み」

「ちよっ!? お母さん!? 切れちゃった……」

言うだけ言って通話を切る。しかもその後は着信拒否……相変わらずの一方通行具合に腹が立つが……

「えーと……え? 説得しないとユウリ本家に行っちゃうって事?」

折角会えたのに本家に行かれたら今度は何時会えるかわからなくなってしまう

「説得って言っても……何すれば良いのよ」

そもそもユウリがIS学園に残る事を承諾してくれるかどうかも怪しいし。私の話を聞いてくれるかどうかも怪しい……暫く頭を抱え思い出したのは

「依頼! そう依頼だわ!」

ユウリは私の依頼なら優先的に聞いてくれると言っていた。ならそれで何か頼んでIS学園に留まってもらえば良い

「うんうん。それで行きましょう」

良い考えが浮かんだ浮かんだと笑っていて気付いた

(あれ? なんで私。ユウリがIS学園から居なくなるって聞いてあんなに焦ったの?)

ふとそれが気にはなつたが……

「なんでだろう？」

すこし思い返してみるが判らない。暫くベッドの上で考えて見たが……

「まいつか。寝よ」

とりあえず今日は寝て、明日の朝か放課後にも話しに行けばいいか
と思い、私はベッドに潜り込んだ……だがここで考える事を放棄した
事で楯無はとんでもない自爆をすることになるのだが、それはまた別
の話である

第54話に続く

第54話

第54話

夢を見る……

この夢を見るときは毎回同じシーンを繰り返して見る。まるで映画か何か様に

崩れ果てた廃墟の中で対峙する男女の姿。赤黒いI Sに似た甲冑を纏う女性の目は爛々と紅く輝き、鬼のような表所をしながら低い唸り声を上げている。それと対峙する男はそんな女性の姿を悲しそうに見つめながら、無言で剣を構える

(雪片に似てる……)

どこか雪片に似た西洋剣と漆黒の甲冑を纏う男の顔は見えないが、何か覚悟を決めた表情をしていた

■■■■ツ!!!!

獣に似た咆哮と同時に女性が宙を舞う。それを追う様に空を駆ける男。閃光が何度も何度も空を奔る。聞こえてくるのはぶつかり合う金属音と風が裂ける音

高速で何回も何回も打ち合い数えるのも馬鹿らしくなるほど打ち合ったあと

■■■■■■■■■■……す……ま……ない

男の剣が女性の胸を刺し貫く。心臓を貫かれてであろう女性はとても優しい笑みしながら男に寄りかかり、黒い粒子となって消えた

……

あ……うおあああああッ!!!!!!

男の手が震えその手から剣が零れ落ちる
ちくしようっ! ちくしようっ!!! これしか! これしかなかつたのかよッ!!!!!!

何度も何度も拳を地面に打ちつけ。涙を流しながら吼える

皆! 皆死んじまった!!! 皆だ!! どうして俺だけが生きてるんだよ!! 誰か教えてくれよ!!!!!!

心が軋む。深い嘆きと絶望の声だけが世界に満ちる。その内世界に雨が降る……男は雨に打たれながらゆつくりと立ち上がる

てめえらのせいだ……全部何もかも!!!

水溜りの中からネクロ達が姿を見せる。男はネクロ達を憎悪を込めた目で睨みながら

許せねえ……てめえらだけは！ てめえらだけは許せねええええ

!!!!

無限に湧いて出るネクロを引き裂き・両断し・踏み潰し闘う男の姿は正しく鬼神。憎悪と殺意だけに突き動かされた人の形をした修羅

は……ははっ……てめえで最後だ!!!!

腕を失い……足を失い……目を潰され、それでも戦いを止めなかった男は最後のネクロを両断し

終わった……全部終わった……俺も今逝くよ……皆

自身の体から流れ出た血の中に倒れこむ男に冷たい雨が降り注ぐ

(いやだ……もう起きたい。こんなの見たくないツ!!!)

幾ら願ってもこの夢は終わらない、朝までの時間延々とこの夢を見続ける……のだが

「貴様にわかるか？ 何もかも失った絶望と狂気が？」

「?!?!」

世界が消え漆黒の世界に変わったと思うと、目の前に先ほどの男がいて俺に手を伸ばしてくる。闇の中にいるから顔は判らないが信じられないほどの殺気が叩きつけられる

「今のお前では何も護れない。全てを失うだけだ……だから」

闇の中から男が一步前に足を踏み出す。やっと見えた男の顔を見て俺は

「お、俺!?!」

多少年上だが見間違えようもない。男の顔は俺だった、憎悪と殺意に歪んだ顔をしているが間違いなく俺の……織斑一夏の顔だった

「そうだ。俺はお前だ……だから寄越せ。貴様の身体を寄越せ……俺が今度こそ護る。何を犠牲にしても。悪魔と呼ばれても……俺が護りたい全てを護る為に！ 貴様の身体を寄越せええええ!!!」

「がつ!? うぐつ!?!」

一瞬で間合いを詰められ右手で首を絞められ宙に吊り上げられる
「死ねよ……お前じゃ何も護れねえんだ。だから俺に身体を超越せよ」

何もかも歪んで狂った俺が俺の顔を見て笑う。首を締め上げられながら

(おれ……死ぬのか……?)

死を覚悟した瞬間白銀の閃光が走る

「ちっ……お前か。何故俺に逆らう! 雪華ツ!!!」

忌々しそうに呟く俺の前に立ち塞がったのは、何時か見た黒いゴスロリの少女

「もう貴方に従う義理はない。今の私のマスターはこの世界の貴方。憎悪と殺意に溺れたお前じゃない」

「はっ! それでどうするってんだ!! たかがデバイスが俺を止めるってか!?!」

黒い甲冑を作り出す俺を見据えた雪華と呼ばれた少女は俺の手を掴んで

「ごめんなさい。油断してました、まさか夢の中で干渉してくるなんて思ってたかったです」

申し訳無さそうに言う雪華は凜とした表情で俺を睨み

「この人は連れて帰ります。この人に必要なのは狂気じゃない……優しさだから」

「優しさ!?! それで何が護れるって言うんだよ!! ええ! 雪華!!!
そんなもんじゃ何も救えない! 何も護れない! お前も見て来ただろうが!」

「それでも狂気も絶望も必要ない。必要なのは……揺るがぬ想い。絶望に負けたお前にはこの人は渡さないッ!!!」

白銀の閃光が世界を覆い隠す、闇が無くなっていく中、黒い甲冑を纏った俺は

「ちっ……まだ早かったか……だが忘れるなあ! 俺は何時だってめえを殺す機会を伺ってるってなあ!?!」

狂ったように笑いながら消えていく俺を見ていると

……か！ い……か！！ ちよつ……一夏！

脳裏に直接響く誰かの声がする。それと同時に俺の意識はこの世界から消えた

「ちよつと!?! 一夏! 一夏大丈夫!?!」

目を覚ました俺が見たのは必死な表情で俺を揺さぶる

「り、鈴?」

今まで見たことないくらい不安そうな顔をした鈴の顔だった

「い、一夏? はー良かった。さつき起こしに来ただけけど何か呻き声が聞こえたから、扉蹴り破って入ってきたら……物凄く魘されて汗とか酷かったから、びっくりしたじゃない」

とびら? あ。あれか? 俺の視界の隅にあるのは真つ二つに蹴り割られた扉の残骸。普段なら怒る所だが

「サンキュー鈴。助かった」

もうどんな夢を見ていたかと言うのは覚えてないが、鈴に助けられたと言うのが判り礼を言う

「大丈夫? 酷い顔してるわよ?」

心配そうな鈴の声を聞きながらもう1度横になり

「すまん、鈴。千冬姉に伝えてくれ……今日は授業を休むって」
とても動けそうにない。なぜだか判らないが動きたくない

「熱でもあるの?」

「わからん……でも駄目だ。今日は動けそうにない。頼むよ鈴、千冬姉に伝えてくれ」

「うん……判った。ちよつと待つてね」

そう言う鈴は俺のクローゼットから慣れた手付きでスペアの扉を取り出し

「とりあえず扉は直しとくから」

「……ああ。頼む」

どうして扉があるのか? とか色々聞きたいことはあったが、今は眠りたい……俺はゆっくりと目を閉じてもう1度眠りに落ちた……

何時ものようにログハウスの天井を見上げていると

「ユウリ入るわよ」

「ずかずかと部屋に入ってきた楯無に

「普通は許可を聞くだろ?」

「ジト目で言う」と楯無は

「そんなのはどうでも良いのよ」

「良くないだろ、普通」

「なんだ? 妙に焦ってる気がするが……ワタシの事で何か問題で

も起きたのか? と考えていると

「契約よ。私に身を預けて(更識家とI S学園で雇う)」

「お前に身を預ける? (楯無本人に付き従え?)」

「行き成りだな? 何かあったのか? と疑問には思ったが

「ただでは契約できないな……」

「そう簡単には契約できない。仮にもワタシは暗殺者として活動し

ていた、自分の身が護れるだけのバックが無いと契約なんて出来ない

「……条件は?」

「そうだな……ワタシを納得させるだけの力を見せろ。スコールはワ

タシを倒して自身の力を証明してくれたぞ」

「楯無がワタシを倒せるとは思えないので、納得させてみるとワタシ

がそう言う」と楯無は

「判ったわ。何時勝負するの?」

「少しは悩むと思ったが……即決か、まあ良い……話が早いのは楽で

良い

「4日後だ、ワタシのI Sの調整をしなければならぬし、多少は身体

を動かしたい。それくらいは良いだろう?」

「I Sの整備はこの地下のラボを使うと良いわ。アイアスカシエル

ニカの監視下なら許可を出すわ」

「上層部と相談も無しで決めるか、よっぽどなにか焦る理由でもある

のだろうか

「では今日からISの調整をさせて欲しい」

「……良いわ。アイアスとフレイアには話を通しておくわ」

「良いだろう。ではお前の力を見極めさせてもらう。ワタシが負ければお前に身を預ければ良いのだな（楯無に付き従えば良いのだな）」

契約内容の確認をする為にもう1度尋ねると

「ええ。私に貴方の身を預けてもらうわ（IS学園と更識家に従ってもらう）」

やはりここでも互いの認識の違いはあったが、身を預けると言う事で話が決まった

「判った。では4日まで互いに接触はなしだ、良いな？」

「じゃあ。4日後にアイアス達が訓練に使うアリーナで試合でいいわね？」

「場所はどこでも構わん、では4日後だな。ではラボへ案内してくれ」
時間が無い。アマノミカゲのダメージレベルは多少は回復したとは言え。詳しく調べないと不安な所が多い……ワタシは楯無に案内され、ログハウス地下のISラボに向かった……

「……これは思ったよりも酷いな」

楯無と分かれたあとですぐにISハンガーにアマノミカゲをセツトしたのだが、詳しく調べた所でワタシは顔を歪めた

「右脚部装甲と胸部装甲はフレームからぐしゃぐしゃ。あとの装甲も中破か……」

2キロの高性能爆薬を胸部フレームで爆発させて、この程度の損傷と言えば大分ましだが……

「どうしたものか……」

ラボに保管されたISパーツを確認する……装甲はワタシの特製だが。フレームは打鉄の物が流用できる筈だ

「……型番が古いな。無理もないか……」

今の量産型のISはラファールが大半を占めている。打鉄はどちらかと言うと旧式だ、保管されていたのはアマノミカゲに使用していた。フレームの型番から2つは古い

「アマノミカゲに出力に耐えられるか？　だがラファールではな」

ラファールは射撃型。近接異常特化のアマノミカゲの出力には耐えられないだろう

「致し方ない。打鉄のフレームを強化しよう」

マドカのラファールを改造した時と同じく、フレームをベースにIS装甲を溶接し強度と耐久度を増させる、一時しのぎだが戦闘には耐え切れるだろう

「あとは破損した装甲を交換するか」

右脚部と胸部はフレームからだから、本当に一時しのぎだが、その他の装甲とフレームが無事なら戦えない訳ではない……最低限ブースターと両腕が生きてさえいれば戦える

「……問題は楯無のISか」

遠距離にも近距離にも対応する。ミステリアス・レイデイのナノマシン攻撃だ、それに対応策は残念ながら無い……だがその程度でどうこうなるほど甘い世界を生きてきた訳じゃない……出来る限りの調整をし、後は長い間生死をかけた戦いをしてきた自身の感を信じるだけだ

「さてと……少しは身体を動かしておくか」

暫く寝たきりだったから身体を動かしておきたい。アマノミカゲをオートリカバリモードにしてワタシはラボを出ると

「何だ？」

緋色の髪をした目付きの鋭い女がワタシを監視していたので

「少し身体を動かしたい。外に出るぞ」

「……判った。だが私の監視がつくぞ」

強い口調の女にワタシは返事をせず外に向かって歩き出した……

↳4日後↳

私とユウリはフレイア達が訓練に使う、IS学園の近くに隠された地下アリーナにいた

(相変わらず凄い気配ね)

触れば切れる。そんな抜き身の刀のような気配を撒き散らすユウリは、軽い素振りで腰に装着された右の鞘から日本刀型のブレードを抜き放ち構える

(近接能力は前に経験済み。間合いの取り合いね)

あの狭い研究所で対峙した時は私の武器の殆どが使用できない無かったとは言え、それでも実力は私以上と見て間違いない。

(ナノマシンとラスティーネイルを使って、中距離を保ち続けないと) どう戦うかを考えているとフレイアから

『それでは試合を始めてください』

合図が入ると同時にラスティーネイルをコールしユウリ目掛けて伸ばすが

「甘い……」

鈍い金属音を立てて弾かれる。ラスティーネイルを身体全体を使った円運動を利用し、遠心力をつけた一撃を放つ

「蛇腹剣なんて子供騙しが通用するか!」

関節部が切り裂かれ、ラスティーネイルの切っ先が宙を舞うのを見て

(やっぱり駄目ね!?)

負傷していたユウリの動きを確かめるための攻撃だったが、あの動きを見る限り、怪我の影響など微塵も無いだろう

「今度はこちらから行くぞ」

独特な形状をしたブースターを全開にして突っ込んでくる。ユウリ目掛け蒼流旋を構えるが

(なにあの機動!?)

蒼流旋の4門のガトリング砲の照準を合わせようとするが、独特な形状をした背部ブースターの根本が自在に動き。鋭角や弧を描いた旋回等を繰り返して照準が合わせられない

「射撃武器の相手は馴れている」

「つく!?!」

対射撃制動。しかもかなり熟練された動き。ウエイトのあるガトリングでは狙いを絞りきれない、射撃を諦め蒼流旋による突きを放つ

が

「ふっ！」

腰部に収納されていた小太刀サイズのブレードで受け流し、回転により威力を高めた上段からの一撃が肩の装甲に食い込む。距離を取ろうと後退の瞬時加速をするが

「甘い！」

「くっ!？」

全く同じタイミングで瞬時加速に入り。間合いが引き離せない、このままでは

(クリアパッションも使いにくい!?)

この距離でクリアパッションを使えば、自身をも巻き込みかねない……

(それが判った上での近距離戦！ 下がれば……流れを失う！)

日本刀型のブレードではなく、小太刀サイズの刀を両手に構えているユウリを見据え。私は後ろでは無く前に踏み出した……実力が拮抗してる相手を前に流れを失えば勝機を失う。ここは多少の不利は覚悟して前に出る!!

(ちい!?! 前に出てきたか!)

フルフェイスで顔は隠しているが、正直ワタシは焦っていた。4日で何とかアmanoミカゲは何とか戦闘が出来るレベルには修復したが、単一技能は使えず。右脚部のブースターは殆ど死んでおり。背中の夜天輪廻と姿勢制御のブースターをフルに使い間合いを詰めてはいたが……脚部の片方が死んでるだけで、夜天輪廻に掛かる負担は大きくなる

(……放熱中。機動力は半減か)

機動力が半減しただけで楯無の手のランスに内蔵された、4門のガトリングを回避するのは難しくなる。だから間合いを詰めて距離を取らせるつもりが、予想に反して前に出てきた。流れを失わない為の英断なのは間違いないが

(距離を取られたほうが楽だったんだがな)

アミノミカゲのセンサーは空中に漂うナノマシンを敏感に察知するように設定している。距離を取ってのナノマシンによる起爆攻撃を回避しての童子切安綱による。抜刀術「禍ツ月」で極めるつもりだったのだが……

(まあ良い！ 前に出てくるならワタシの独壇場だ！)

アミノミカゲの武装は全て近距離の兵装で固めてある。インフライトでは負けは無い、腰部後ろに帯刀されていた2本の小太刀型ブレード「長曾禰虎徹」を抜き放ち

薙ぎ、袈裟、逆袈裟と回転と円運動を行かした連撃を放つのだが

……

「くっ!? このっ!!」

ランスの持ち手を自在に持ち替え、ワタシの攻撃を防ぎいなす楯無に

(中々やってくれる！)

機動力は本来の物ではないとは言え。アミノミカゲの機動に完璧についてくる楯無に若干焦りが出てくる

(持久戦は不味い！)

夜天輪廻と言う高性能のブースターがあるとは言え、脚部のブースターが死んでいる以上。負担は全部夜天輪廻に掛かる長くは持たない

(勝機を逃したら駄目だ！)

間合いを詰め続ける。さっきまでと違い、距離を1度離されたら今度詰めた時に夜天輪廻はオーバーヒートする。今のワタシには間合いを詰め続けるしか勝機は無い

何度も何度もランスと長曾禰虎徹がぶつかり火花を散らす。1合・2合と打ち合い続ける、徐々に長曾禰虎徹の方が深く楯無の間合いに食い込んでいく

(……だっ!?)

一瞬身体が揺らいだ楯無の首元を狙い長曾禰虎徹を振るつたが。楯無はその攻撃をかわし、一気に2連続の瞬時加速で間合いを取る

(しまっ……)

ワタシらしからぬミス、あの間に誘い込まれた。その事に気付いた時にはもう遅い、アマノミカゲのセンサーが周囲にナノマシンが集まってきた事を知らされると同時に

楯無が指を鳴らし、ワタシの周囲のナノマシンが一斉に起爆した
……

(取っ……てはないわね)

フレリアの勝利者コールが無い。まだユウリのISのSEはゼロになってないと警戒していると、爆発の中から高速で何か飛び出してくる、センサーの反応からISではなく、もっと小さい何かとまで認識した所で

「あぐっ!？」

胸部の装甲に突き立ったの何かに息が詰まる。

(こ……これは……)

大型の日本刀型のブレードが突き立っていた

「おおおっ!!!」

左腰部に帯刀された、日本刀の柄に手を添えて突っ込んでくるユウリの姿が見える

(あちゃーミスったな)

ユウリが手にしているブレードはSEがへれば減るほど威力を増す刀……このタイミングでは避けれない。だが諦めたくは無くて蒼流旋を構えなおした所で、ユウリが私の前に来て抜刀をしようとした所で、フェルフェイスに隠れているであろうユウリの目と私の目が合った気がした

「!？」

ユウリの動きが一瞬止まる……その事を確認した私の手は自然と動き。ユウリのISの胸部に蒼流旋を突き立て、ガトリングの引き金を引いた

「ぐうっ!!?!」

零距离でのガトリングの掃射をくらったユウリはその勢いに押されて後退していく……その間にアクアパッションを発動させようとなノマシンを集中させようとした瞬間

「がっ!? しまつ……」

「え、ええ!?! どうして!?!」

ユウリのISの胸部装甲と右脚部が爆発し、ユウリの身体が落下する。慌てて瞬時加速に入り落ちていくユウリの手を掴み、アリーナの床に着地すると

「ちつ……ワタシの負けか」

ISを解除しそう眩くユウリは私を見て

「お前の力見せてもらった……契約成立だ。ワタシはお前に付き従う」

ん? 私に……? あれ?

「何を不思議そうにしている。身を預けろといったのはお前だろう」

「いやいや、ちよつと、ちよつと待って。私はIS学園と更識家にとって意味で」

何か致命的に認識の違いがある事に気付き慌ててそう言うが、ユウリは

「ワタシはIS学園にも更識家にも関わるのは御免だ」

……え? もうこれ駄目っぽい? 今更IS学園とか更識家とか

に従うの件は絶対に聞いてくれない

「まあ詳しくはおいおいな……」

そう言っ歩いて行くユウリに

「ま、まつ……行っちゃった……」

呼び止めようとしたがユウリはもう行ってしまった……

「ユウリが……私専属? ええ? 嘘……」

私とユウリに致命的なまでに認識の違いがあったのを初めて今知った……

「えーと……ま、まあ。ツバキさんが何か考えてくれるでしょ」

うん、きつと何とかしてくれると思ひ。とりあえずIS学園にと戻ったのだが……その夜ツバキさんが私の部屋に来て

「あ、更識家と連名でユウリ・クロガネを3人目の男性操縦者として発表するって決めたから……後ユウリと話し合ったけど、ユウリは貴方付けじゃないと指示聞かないって言ってるから、全部任せるわね。あとユウリは夏休み明けに貴女のクラスに転入させるから……どうするかはちゃんと2人で考えてね」

言うだけ言って出て行ってしまったツバキさんをみながら

「え？ 私にどうしろって言うの……？」

ユウリをIS学園に留めるだけのつもりが、私の知らない所で話が色々決まっている事に驚き

「……寝ましょう。今日はもう駄目、考える事が多すぎる」

私は考える事を放棄し、眠る事にしたのだが、明日今日以上に驚かされる事になる事を今の私は知らなかった……

第55話に続く

第55話

第55話

楯無との戦闘を終えて通路を歩いていると、突然拍手の音がし驚きながら振り返るとそこには

「ご苦労様。中々苦戦したようだな」

手を叩いていたのは、ワタシの知る姿の八神龍也とは違う。成人の姿をした八神龍也が通路の壁に背中を預け拍手していた

「……見ていたのか」

気配もまるで感じなかったことに内心驚きながら尋ねると。龍也は

「ああ。IS学園から離れた所にお前と楯無の気配を感じてね。もしかするとと思つて見に来たのだよ」

くつくと笑う龍也に

「どうやってここに来た？ 何重にも電子ロックがあつた筈だが？」

ワタシが来た時は楯無が10個にも及ぶ電子ロックを外した上で、ここまで来たのに何故ここにいるのかが判らず尋ねると

「電子ロック？ は、この世界の電子ロックなど、魔導師にとつては子供の遊びだよ」

「この上なく明確な回答どうもありがとう」

ワタシの常識で量るなど遠まわしに言われた事に気付き。皮肉を込めて言うと

「理解が早くて助かるよ。さて見ていて思ったのだが……楯無に誰を重ねてみたのかね？」

全てを見通していると言いたげな蒼い瞳から目を逸らしながら

「……話す必要が？」

「ふむ。無いな……すまん、今のは忘れてくれて構わない。だが……1つだけ言わせて貰おう」

追求されると思つていた分。肩透かしをされた気分になりながら、龍也の言葉に耳を傾ける

「死者は死者だ、ネクロは死者を利用する。失った者の面影を見るなどとは言わんが……割り切れ。ならば貴様も死者になるぞ」

「どういう事だ……貴様は何を知っている?」

その言葉に何か引掛かる物を感じそう尋ねると

「私が言っているのは可能性の話だ。話半分で聞いておけ、奴らにとって死者ほど扱い易い手駒は無い。世界の死者の半分はやつらの手駒とおけておけ……」

そう言うのとワタシに背を向けて歩き出した。八神龍也の背に向けて

「何故ワタシにそんな事を言う?」

そう尋ねると龍也は後ろを向いたまま

「さあな?……何の意図も無いさ……ただの気まぐれさ。ではな……今度はIS学園で会おう」

そう言うのと龍也は蒼い光を纏い姿を消した……残った光の残滓を見ながら

「食えん男だ……」

ワタシはそう呟き。通路の外で待っていたシエルニカと合流しIS学園にと戻った……

自室で休んでいるとツバキが部屋に入ってきた

「はい。元気?」

「何のようだ」

ジト目でツバキを見ると、ツバキは

「さて……楯無との契約で、更識家かIS学園に従って……その気は無さそうね?」

「ああ。ワタシが従うとすれば……更識楯無本人だけだ」

大きな組織というのは信用出来ない。だからそう言うのと

「別に構わないわ。貴方がIS学園にいてくれるというだけで充分。それと悪いけど明日IS学園に来て貰うわ。転入手続きの為にね……もうじき夏休みだからね……体験入学と言う形で一学期の最後に少しだけ2年生のクラス……楯無と同じクラスに転入して貰うわ」

笑いながら言うツバキに

「好きにすれば良い。後はまあ……楯無とでも考える」

「そう、じゃあ楯無しの方にも話を通しておくわね。じゃあ……近いうちに3人目のIS操縦者として発表するから。ちよつと周りは騒がしくなるけど我慢してね」

「ああ、もうどうでも良い……そういう政治的なやり取りには関わりたいくない。後は任せる」

しつしと手を振りワタシは布団に潜り込み、眠りに落ちた

ユウリが眠りに落ちた頃。龍也はIS学園に戻らず、IS学園の近くの海辺に訪れていた……

「やれやれ。どうしてこうも問題ごとが重なるかね？」

臨海学校でのネクロ襲撃の際、ペガサスに止めを刺そうとした時に現れた。人型のネクロの事を思い出す

「あの時はエリスに似ていると思ったが……」

攻撃されたときはエリスに似ていると思った、だがあの時は気配だけに集中していたせいでそう感じただけで、今思い返すと気配こそエリスやユウリに似ていると感じたが……その顔付きや雰囲気は

「楯無に良く似ていた……な」

髪の色、瞳の色、体型どれを取っても楯無に酷似していた。そしてさっきの楯無とユウリの戦いを見ていて思ったが

「ユウリは自分に近い誰かを亡くしているな」

あの悲しみに満ちた目は間違いない、ユウリは誰かを亡くしている。そしてユウリ達に似た気配を持ち、楯無と瓜二つの容姿を持つネクロ……

「常套手段とは言え……出来る事ならば、あの2人に会うまでに仕留めておきたいものだ」

ユウリとエリスに会わせるのは明らかに不味いだろう。それにネクロに利用されているだろう束。ネクロと協力関係にあるファントムタスク。そしてネクロたちがこの世界に持ち込んだ、パンデモニウムの同型機が存在と……考える事は山ほどある

「やれやれ……」

コートポケットから煙草を取り出し火を点ける。なのは達やアギト達と居る時は気を使つて吸わない様になっているが、1人の時くらいは良いだろう。まあ吸うと言つても

本当に偶にだけなのだが……

「ふーッ……ん？」

煙を吐き出した所で気付いた。この海岸に残る魔力の残滓に

「ここでユウリが流れ着いたのか？」

その魔力の残滓を辿り夜の砂浜を進んだ……そしてそこで私は

「こ、この羽は……」

もう消えかけているが魔力で実体化した漆黒の翼。そして周囲に残る、ネクロと魔導師の魔力……

「……ここに居たのか？ リーエ……」

半ネクロの少女、リーエ。この世界に来る前に時空の狭間に吸い込まれ消えた彼女の事を思い出しながら、煙草を左手に持ち、地面に落ちていた羽根を右手で拾うと

「……あ」

その翼はさらさらと砂の様に崩れ去った……随分前にこの場に落ちたのだろう。掌に残った黒い粒を握りしめ

「お前は今どこに居るんだ？」

どこに居るかも判らない。私や六課の皆も探しているが見つかることの出来ないリーエがここに居た。だが私はそれに気付けなかった……

「……ッ!？」

その羽根の粒子を握り締めリーエの事を考えていると、煙草の熱右手の指を焦がす、煙草を砂浜に落とし、苛立ち紛れにそれを思いつきり踏みつけ

「……行くか」

ここでリーエの羽根を見つけたのはきつと、リーエがまだ生きていると言うことなのだろう。生きているのならまだ機会はある……私はそう考えその場に背を向け、またポケットから煙草を取り出し、火を点けながらその場を後にした……

翌朝。自分のクラスに向かう途中ですれ違った、生徒を見て私は絶句した……

「よう。楯無」

IS 学園の制服をノースリーブに改造し、長い銀髪を首元で結んだ。紅い目の男子がそこにいた。というかぶっちゃつけユウリだった

「何してるの!?!」

「転入手続きを終えて暇なのでうろろろしていた」

暇なのでどう言うことよ!?!　と言うか

「他に生徒には会わなかったの!?!」

「ああ。今のところはあつてないな」

一安心だわ。誰かに会ってられたらそこからフォローできる術を私は知らない

「丁度良かった。ワタシの設定なんだがな、許婚で良いだろう?」

許婚?　は?　一瞬混乱してしまったが……次の瞬間

「いやいや?!?!　待って!　待って!　そ、そそそ!!　そういうのもうちよつと時間が経つてからの物でしょ!?!　婚約者とかは!?!」

慌てて手を振りながら言うユウリは溜め息を吐きながら

「設定だ。設定……どうせ暫く。ワタシはお前と一緒に行動するんだから、一緒にいても問題の無い設定が必要だろう?」

あ……ああ。そうか……うん。そうよね……はービックリした

「そう言うのは大事よね。うん、婚約者「スクープ!」

シャッター音に振り返ると、髪を翻し走り去る女性との背中。あの声は間違いなく

「薫子ちゃんよね?」

新聞部でしかもこういうことが大好きな、薫子ちゃんの事だからきつと、生徒会長に婚約者あり!?　見たいな感じで学園新聞に載るだらう

「薫子とは?」

「新聞部の生徒。写真を撮られたから、今朝の学園新聞に載るわね」
「そうか……」

2人で暫く黙り込み

「不味くないか? (ない?)」

色々と不味いと思ひ。慌てて2人で薫子ちゃんの後を追ったが
……

「号外! 号外!! 更識会長に婚約者が居たわよ!!」

「しまった!? 手遅れか!」

学園新聞を片手に抱え。号外と叫びながら新聞を配っていた……

「どうする?」

「どうするって……どうすれば良いのか判らないわよ」

2人で頭を抱えているとツバキさんが来て。

「婚約者ってこれどうするのよ?」

その手には先ほど配られていた学園新聞が握られていた

「どうしようもないな。もうそれで通す」

窓の外では既に大半の生徒が学園新聞を手をしている。もうここ
からの訂正は出来ないだろう

「え、でも私どうすれば?」

私がそう呟くとユウリとツバキさんは私の肩に手をおいて、声を揃
えて

「頑張れ」

そう言っ歩いて行ってしまった。1人残された私は

「どうすれば……えっ!」

ドドドツ!!

と激しい足音が聞こえ、驚きながら振り返ると

「会長!! 婚約者ってどういうことですかー!」

「ちよっ!?! 来ないでー!」

私が一番混乱しているのに説明が出来るわけが無い。私は即座に
生徒会室に向かって逃げ出した……

せめてもの救いはユウリが入学してくるまでまだ時間があると言
うことだけだった

教室で授業の準備をしていると。簪が学園新聞を手に話しかけてくる

「エリス。エリス、お姉ちゃんに婚約者だって」

「ゴシップでしょう?」

「でも写真もあるよ?」

簪が差し出した学園新聞の見出しの写真を見て

(!? く、黒武士!?)

そこに居たのは間違いなく、ファントムタスクの黒武士……いや、私と同じ人を基にしたクローンの姿だった

(なんで!? どうして!?)

訳が判らず混乱しながらも。簪に差し出された学園新聞に目を通すが、黒武士についての詳しい記事は無い。どういふことか判らず混乱している

「エリスちゃん、ちょっと来て」

お母さんと呼ばれ、簪に学園新聞を手渡し

「すいません。簪、呼ばれているので」

慌てて立ち上がりお母さんの元に向かい

「あの記事はどういうこと?」

「詳しくはここじゃ話せないわ。着いてきて」

そういうお母さんの後を着いて、学園地下のISのラボに向かうと、そこでは黒武士がISを調整していた。私に気付いた黒武士は

「……また、会ったな。エリス・V・アマノミヤ」

「……そうですね。黒武士」

声の感じと体付きこそ違えど、それ以外は殆ど私と同じ黒武士を前にすると鏡の前に立っているような気がするが、確かに目の前に黒武士は存在している

「貴方は……私と同じなのですか?」

「まあな……男と女での違いこそあれ。基は同じ筈だ……」

椅子に腰掛けたまま返事を返す黒武士に

「黒武士。貴方はタスク側の人間なのでは?」

「……ユウリだ。ユウリ・クロガネ、それがワタシの名だ」

「それは失礼しました。ユウリ……では改めて聞きます。貴方はタスクだったのでは？」

もう1度尋ねるとユウリは

「抜けた……元々は拾われただけだ。進む道を見つけた以上付き合う道理はない、まあネクロと戦って死に掛けたがな」

くつくと笑うユウリの顔はやはり私と瓜二つで何か落ち着かない。

「エリスちゃん。そんなに警戒しないで……ユウリはもうタスクとは何の関係もないから。ねっ？」

言い聞かせるように言ってくるお母さんに頷くとユウリは

「まあそういう訳だ……お前達と敵対する気は無い。仲間と認めろとまでは言わない、後はお前が判断すればいい。ワタシを信じるか、信じないかはお前の自由だ」

真っ直ぐな目で私を見てくるユウリから目を逸らし

「……同じなら判りますよね？ 私達って何のために生きているんでしょうか？」

クローンであり純粋な人間で無いユウリなら、私と同じ事を考えた筈だと思い尋ねると

「答えを見つけるため……ではないか？ 自分が自分であると認められるだけの答えを探して生きている。少なくとも……ワタシはそう
だ」

「そうですか……ありがとうございます。では……私はこれで」

私と似た返事を聞き頭を下げて、私は地下の研究室を後にした……何の因果か、同じ人間を元にする同士が同じ場所に居るのも何かの運命だろう。ならばそれに従って見るのも悪くは無いだろう……

「くつくと……まさかこうなるとは……」

配られた学園新聞にはユウリと楯無の姿があり、婚約者! の見出しが大きく掲げられている。確かに下手に紹介するよりかは早いだろうが

(変な意味で有名になりそうだな。ユウリ)

完璧な生徒会長の婚約者としての肩書きが着いて回る事になるが、まあ大丈夫だろう。そんな事を気にするようなタイプではないだろうから

そんな事を考えながら新聞を読んでいると

「つ……疲れた」

机に突っ伏すシエンの姿が視界に入る、読んでいた学園新聞を机の上において

「大丈夫か？」

「……そうやって声を掛けてくれるのは龍也君だけだよ」

机に突っ伏したままそう返事を返すシエンの前の席に座り

「鈴か？ それともシャルロット？」

シエンの疲労具合から、この2人が何かをやったと思い尋ねると

「鈴……」夏君の鳩尾を強打して連れ去ろうとしているのを止めるのに大変だったよ」

「朝から、ご苦労様……これ良かったら」

コートからビスケットとクッキーを取り出し机の上におく

「うう……龍也君の優しさが心に染みるよ」

クッキーとビスケットを机の中に仕舞うシエンだったが……はつとした顔になり

「はやてさん達は？」

「ん？ 朝から喧嘩してトリプルノックダウン」

デバイスまでは持ち出さなかったが、その気になれば金属も打ち抜く剛拳で互いに互いの顎を打ち抜いた為。本気で目を回している

「……そっちもそっちで大変なんだね」

「何時もの事だ。大変とは思わんよ」

六課ではもつと酷いしな、それと比べれば全然だ

「ぎゃーッ!! 来るなー!!」

「逃げるな! 一夏ッ!!」

廊下から聞こえてくる一夏の悲鳴と鈴の怒声を聞きながら、私とシエンは

「少しは静かに出来る人間はI S学園にいないのかね？」

「……希望薄かな？ ほらあれ見てよ」

シエンの指差すほうを見ると、黒い笑みを浮かべてシャルロットが廊下に飛び出していった

「確率変動で魔王ファイバー？」

「……変な感じだけど。まさしくそうだね」

2人で溜め息を吐きながら言うのと廊下から

「ギャーツ!! シャルも来たー!?!」

一夏のもう嫌だと言う悲鳴を聞いていると、はやて達がふらふらと教室に入ってきて。その後すぐチャイムがなり山田先生が教室に入ってくる

「一夏君とシャルロットさんは遅刻ですね。じゃあ、1時間目を始めます」

魔王は無視。というスタンスは既にI S学園で確立されていた。そして教科書を開いた所で

「千冬姉も来たアアアアア!? 誰か! 誰か助けてくださいッ!!!!」

今日も一夏の悲鳴がI S学園に木霊していた……

!!!!!!

I S学園の地下の会議室

「これがワタシが要求する物だ」

ユウリが差し出してきた書類を見る、ちゃんとした書面になっているので結構長い。その内特にユウリが重要としている部分を要約すると

基本は更識楯無の指示にしか従わない ※有事の際のみ織斑千冬・ツバキ・V・アマノミヤの指示に従う

I S学園の地下ハンガーと学園が有するI Sのパーツの使用許可を出す事 その対価として報酬を出すのなら教員用・訓練用のI Sの整備も行う

まあこの2つは判らなくも無い、1度I Sの整備の技術を見せても

らったが、何も教えなくてもどこかの国の専属整備士に慣れるだけの腕は持っている。それに何度もユウリが言っているが大きい組織は信用出来ない、更識家とかに従うのごめんだと言っていたので。楯無にしか従わないと言うのも納得の条件だ

「この条件を呑めば力を貸してくれるという事で良いのですか？ ユウリ・クロガネ君？」

轡木さんがそう尋ねるとユウリは

「力を貸すと言うのは正しくないな。ワタシは更識楯無に従い、そのついでにIS学園に残ると言っているんだ。まあこの条件を呑んでくれるなら、対価次第では他の以来を受けなくも無いがな」

あくまで強気の姿勢を崩さないユウリ。だがその強気も判らなくは無い、フアントムタスクそしてネクロの情報を持つユウリはなんとしてもIS学園に置いて置きたい人材だ。だからこそ轡木さんと私が話を聞いているんだ、そして生粋の傭兵とも言えるユウリは交渉には馴れている。下手に条件を出すのは不味い

「良いでしょう。この条件で契約しましょう。ユウリ・クロガネ君」
「賢明な判断だ。では近いうちにワタシがタスクから持ち出した情報を提示しよう」

私達が今最も欲しいのはネクロの情報。そして次に戦力となる人間だ。その2つを同時に得れるのならば、多少不利な契約でも結ぶべきだろう

「しかし1つだけ気掛かりな事があるんですよ」

「なにがだ？」

轡木さんは少しだけ考えた素振りを見せてから

「私は椿君から君達がどう言う存在か聞いています。無論君が椿君を恨んでいるのも判ります、できればそういうのは……」言われなくてもだ、言わせてもらうがな。ワタシは別にツバキを恨んでいるわけではない。それはお前の要らぬ心配だ」

轡木さんは驚いた表情を一瞬見せたが、すぐにそうですかと笑い

「では本日を持って、ユウリ君はIS学園の生徒です。それでは宜しくお願いしますね」

そう笑う轡木さんに返事を返さず出て行くユウリを見ながら

「中々気難しい子のようですね」

「まあ、今までが今までですから」

フロントムタスクの黒武士。裏世界でその名を知らない人間は居ない、それは轡木さんも同じ事だ

「過去の事は良いです。今は備えが必要な時期ですから、彼については近い内に正式に発表する事になります。更識家か天乃宮家の連名となりますが、櫛奈君の許可は下りていますか？」

「それは問題ないです。発表の準備もこちらでしておきます」

「そうですね、では任せます」

そう笑う轡木さんに頭を下げて私は地下の会議室を後にした

「さて、これから忙しくなりそうですね」

一学期が終るまであと5日、急いで発表の準備を整える。次に体験入学の準備とやる事は沢山あるが、まあ大丈夫だろう。今から準備を始めれば2日もあれば終る

私はそんな事を考えながら、研究室に戻った……

第56話に続く

第56話

第56話

「なんだか最近ついてないなあ」

私は廊下を歩きながらため息をついた。

ここIS学園に来てからの私はどうにもついていない気がする。

具体的に言えば、親友が病んでたり男友達に太らされたりエトセトラ。

とにかく、私は思った。たまには休みが欲しいと……ゆつくりと穏やかな気持ちで一日を過ごしたいと思った、だが……

「とは言っても、鈴が不安だし……」

勿論、鈴のことを応援していかないわけじゃない。むしろ、親友として鈴のことを心から応援したい気持ちでいっぱいだ。親友としては、だが……

「だけどなー行動が不安すぎるんだよね。鈴は……」

客観的に見ると、鈴……だけじゃなくて他の面々もやたらと危うい。しかも、龍也君の妹さん……はやてが来てからそれが加速した気がしてならないのだ。

「うーん……どうしよう」

ただでさえ病んでいた鈴が、ここに来て病状を悪化させている。一夏君が好きなのはわかるが、そのうち魔王に恐れをなして、IS学園からひっそりと一夏君がいなくなっているのでは、と心配になる。

自重……はまあ、無理だろうしね。魔王と化した者が人の都合を考えるわけ無いし……

誰か手伝ってくれる人はいないだろうか。

「龍也君だったら、頼めば手伝ってくれそうだけど……」

以前から世話になりっぱなしだし、こんな時まで頼るのは申し訳ない……だけど、他に頼めそうな人もいないのだ。

クリスマスあたりは大丈夫かもしれないけど……魔王相手となるとそう簡単にはうんとは言ってくれないだろう。一応は頼んでおこうかなとは思うけど……

「……つてわけなんだけど。あ、クリスにも頼んであるんだけどね」
結局、龍也君に頼ることにした……何時も周りにいるはやて達がない間に昼休みに龍也君に声をかけ、考えたこととかを説明する。
私とて人間であるので、ストレスというか負担ばかりかかって発散できないままでは死にかねない。

一夏君も悪乗りして私をいじめることがあるのだからなおさらだ、
とまあそんな感じなのだが、と龍也君に話すと

「なるほどな……はやてには私から言っておくが、流石に私が彼女達
全員を止めるのは無理だと思うが？」

「だから、目をつけててくれるだけでいいの！　またお礼はするから、
お願い！」

龍也君の存在自体が強大な抑止力となる。あんまり度が過ぎると
幾らなんでも龍也君も止めに入ると皆知ってるからだ

「わかったわかった、とりあえず頭を上げてくれ」

こんなところ見られたらあらぬ噂が立つと龍也君に言われ、土下座
の体勢から頭を上げる。とりあえずスカートの中身が見えないよう
に立ち上がると、改めて龍也君にお礼を言った。

「ホントにありがと！　土曜日は遊びに行ってくるから、その間見張
りをお願いね」

そうやって頼んだとき、ふと背後から禍々しい視線を感じる。
「……」

恐る恐る振り向くと、はやてが私のことを睨みつつ何やら言ってい
た、耳を澄ますと

「殺す……潰す……切り刻む……」

怨嗟の声100%。お化け屋敷なんて非にならない恐怖だ。えっ
？……もしかして、私も標的にされた？　1番凶悪な魔王に？

「あ、えと、じゃあ私はこれで！」

龍也君にお礼を言っただけでその場を逃げ去る。

なんか怖かった……このままこの場にいたら誤解から殺されかね
ないと思った

「何の話をしてたんや？」

シエンと兄ちゃんの姿が見えなかつたので気配を探って探し当てると、兄ちゃんとシエンが話をしていたので、警戒の意味を込めて殺気を飛ばしていたら。シエンは慌てて逃げ去つたのを見ながら尋ねると

「なんでも鈴とかシャルロットの面倒を見るのを疲れたから、今度の土日にくっきり休みたいから、魔王化を警戒して欲しいと頼まれてたんだ」

ふーんと返事を返しながら

(惚れたとかじゃないか？ まあ要警戒やけどな)

兄ちゃんの魔性にも似た魅力のスキルは警戒しておかないとあちこちでフラグを立てるので警戒はしておかないと不味い

「まあ判らないでも無いからな。そろそろ教室に戻ろうか」

「うん」

兄ちゃんに返事を返して後ろを歩きながら、要注意の人間リストにシエンの名前を書き足しておいた……

そして土曜日。

龍也君に依頼したのが水曜日だったので、木、金と二日間私は鈴を制御していたわけだ。相変わらずの魔王さ具合だった

例を挙げれば

一夏と呼んで腹部に強打を打ち込み気絶させようとする

一夏君がセシリアやラウラと話しているとISを部分展開して殴ろうとする

どこかから持ち出した手錠を大量に制服のスカートに仕込んでいた(これは流石に危険なので取り上げた)

監禁願望と殺傷願望が日に日に増大してる気がする……

私は一夏君と同じクラスなのでよく一夏君絡みのイベントが起きるのをよく目にするのだが、その度に鈴が来て病むので、止める方としては一苦勞である。

ついでに言えば、一夏君がそれを労ってくれるかといえはそうでもなかったり……もう慣れたけど。あと案外龍也君がご苦労様とか言ってクツキーとかをくれるのは嬉しいが、体重と魔王の視線×6にさらされるのでトントンと言う感じだ。

常識人は辛いなあ、というのがこのクラスで過ごしていて感じる気持ちの全てである……魔王のクラスメイトに担任教諭の行動に驚かされるのも大分慣れてきた。正直慣れたくは無いことだけどね……

「それはそうとして、久しぶりに羽を伸ばせそうだし……買い物するぞー!!」

もつとも、私はそこまで物を買う人間じゃないんだけど。とりあえず、臨海学校の時に水着を買った駅前的大型デパートに向かう。

あのデパートは色んなものが売っているのですごく便利……日用品もあるし、趣味も充足できるし、満足できる場所だなあ、と思っていたその時。

「あら、シエンさんじゃありませんか。奇遇ですわね」

聞き覚えのある声に振り向くと、そこにはセシリアが立っていた。思わず固まってしまいが、セシリアに不審な目をされたのでできるだけ自然に振舞った。

今日のはのんびり過ごせると思ってただけだなあ……

「奇遇だね、セシリアさん。どうしたの?」

「お気に入りの食器が壊れてしまいました。せつかくなので、いいお皿があるか品定めをしようかと」

「そうなんだ。今日は一人?」

聞いてから、私は思った。聞かなければよかったのに、なんで自分から関わりに行ったんだろうと……セシリアさんは

「いえ、一夏さんとその他諸々も一緒に来ていますわ」

「だよね……はあ」

やはり、私は苦労する星の下に生まれたのかもしれない。

「とりあえず、私は買い物してくるよ」

「ええ。では、また学校で会いましょう」

「うう……あんまり服にはこだわらないんだけど、珍しく買っちゃったよ……」

結構な時間が経ってしまい、今は夕方になっている。私は両手に複数の袋を持って駅前を歩いていた。

袋に入っているのは、お小遣いで買った服とかお菓子とか。度々ダイエツトをしなければならぬのでお菓子は不安だけど、まあ大丈夫だと信じたい。

「龍也君の訓練を受ければすぐに落ちるしね」

足腰立たなくなるまで投げられ、いなされ。徒手での戦い方をきっちり叩き込まれるあのハードトレーニングはすぐに体重が落ちるので、ダイエツトと訓練の一挙両得だ

「それにしたって買すぎたかなあ……袋が重い」

少し買すぎたなと後悔しながら歩いていると

「ん、シエンじゃないか。お前もここに来てたのか」

「あ、龍也君……」

駅に今日何度目かの、知り合いの声を聞いて後ろを向く。

立っていたのは龍也君だった……夏場だと言うのに黒の長袖・長ズボンに長い黒のロングコート。暑い筈なのに相変わらずその額には汗は無い。どういう身体の作りをしているんだろうか？

そんな龍也君の周りには珍しく誰もいない。必ずと言ってはやてかなのはが傍にいるのにこれは非常に珍しいと思う

「そんなたくさん荷物を持って大丈夫か？」

「大丈夫大丈夫……IS学園も遠くないし、なんとかなるよ」

そうは言うが正直重いし疲れてきた……龍也君はそれに気付いたのか

「……少し息が荒いが」

多分それは今日一日で精神的に疲れたからだと思う。休みに来たのに何回か目撃したのは腕を捻り上げられ絶叫する一夏君や、容赦の無いリバーブローで悶絶する一夏君と

ISS学園と大差ない光景だった……

まさか、ここに来てまでいつものメンバーに会うとは思わなかったし……そういえば、常識人枠とは会ってないかも……

そんな事を考えていると龍也君が、私が持っていた袋を取り上げた。

「私が持とう。疲れているんだろう？　なんでかは知らないが」

「ああ、うん……ありがと」

結局、また龍也君に頼ってしまった……よく考えたら、水曜日に頼んだ内容はしつかり果たしてくれたんだろうか。

「龍也君、今日は鈴大丈夫だった？」

「ん？　ああ、いつもどおりだったぞ？」

「そっか……いつもどおりって、結構危ない気もするけど」

鈴のいつもと言うと骨を折りかねない強打と関節を粉碎しようとする強烈なサブミッション。下手をすれば傷害で起訴されかねないと思う

「まあ、一夏も慣れてきているだろうし逃げ切るさ」

「慣れるのもどうかと思うけどね」

そんなことを話しながら、私は龍也君と2人きりで帰りながら、ふと気になった事を尋ねてみる

「はやてさんとかはどうしたの？」

魔王筆頭のあの3人の事を尋ねると龍也君は

「なんか鈴とかシャルロットと秘密の買い物とか言ってたが？」

「それ凄く怖いね」

魔王同士の秘密の買い物なんて恐ろしい事この上ないと思う。そんな事を考えていると

「そういえばシエン」

「ん？」

「お前の私服姿はあまり見たことがなかったんだが、普通に可愛いじゃないか」

「……え!?　いや、いきなり何言ってるの龍也君!？」

私は服にはこだわらない……というかおしやれには興味がないの

で、あまり種類を持っていない。動きやすさ重視の服装ということ
で、肌色のジーンズに白いTシャツ、ちよつとは可愛くしてもいいか
と黄色のパーカーを着ているしバッグなんて持っていないので財布は
ポケットに入れてるし、靴に至ってはスニーカーだ。

そんな服装なのに、いきなり龍也君から褒められたので思わず顔が
熱くなってしまふ。夕日がなかったら真つ赤な顔が見られちゃうん
だろうな、と思うくらいに熱かった。

「いや、見たままの感想を言ったただけだが……大丈夫か、シエン。顔が
赤いぞ」

「ゆ、夕日のせいだから」

この人は本当に何を考えているだろうか？ どうしてこうもフラ
グを立てようとするのだろうか？

「そうか……体調が悪いなら無理はするなよ」

うん、と頷いた瞬間、足元に何かが刺さった。

「？」

見てみると、何故かナイフが私の足元に突き刺さっていた。こ、こ
のナイフって……確かはやての

「全く。はやてめ」

「へ？」

私の顔目掛け走った4つの閃光を認識したところで顔を上げると
龍也君の左手には4本のナイフが握られていた

「え？ えええ？ 私今死に掛けてた？」

あれ明らかに顔を狙ってたよね？ 私が動揺していると龍也君が

「すまん、私の妹が迷惑をかけた、後で言っただけさせておくから」

ナイフを回収している龍也君にふと気になった事を尋ねてみる

「……ちなみに、どこから投げたの？」

近くに姿はなかったから何処かから投げてきたのか気になり尋ね
ると

「少ししか見えなかったが、多分数軒先の家の屋根だろう」

「遠くない!？」

非常識すぎることに驚いたし、それ以上に私の命が現在進行形で

危なかったという事実には驚いた。

なんでこう、せつかくの休みなのについてないのか……思わず、ため息をついてしまう。

「はあ……」

「？」

そして、その原因の一角を担うクラスメイトは、私のため息の理由がわからずに首をかしげるのだった。

「で、鈴はどうだった？」

「また一夏に逃げられたわ……次はどんな手を使うべきか」

「正直、一夏君には優しくした方が好いてもらえる……って、もう遅いよね」

夜、私は鈴と話をした。鈴は今日も一夏君に詰め寄っていたらしい。他のアプローチの方法は思いつかないのだろうか？

それを聞いたあたりで鈴が私に逆に質問してきた。

「で、シエンはどうなの？」

「どうって、何が？」

「シエンって龍也が好きなんじゃないの？」

「なんで!？」

「今日もいい雰囲気だったじゃない」

今日も？ と一瞬首をかしげて、直ぐに思い当たる。

「……もしかして、私たちが帰るの見てたとか？」

「一夏を追ってたらたまたまね。まあ、一夏は別の道だったみたいだけど」

「そっか……んー……龍也君はかっこいいと思うけど、恋愛的な意味で好きではないかなあ」

「えー、なにそれつまんない」

「いやいや、人の恋をネタにしないでよ」

相変わらず人の不幸を蜜にしそうな性格だなあと思う。鈴は根が優しい性格であると知っているので、嫌いにはならないけれども。

「ってというか、私のことより鈴のことでしょう？ 応援してるんだから、頑張ってよ」

「そりゃあ頑張るわよ。セシリアとかシャルロットとかに負けてられるもんですか」

「そうそうその意気！」

「……そういえば、結局休めてないじゃん」

夜、お風呂に入ったあとと休憩している時にふと思った。寝る直前にそんなことを思ってしまった、ガクツと来てしまう。

本来の目的が果たせずがっかりきたけど、もう終わってしまったものは仕方ない。

「髪を切りに行こうと思ってたんだけどなー。まあ、息抜きできただけでいいにしよう……」

帰りに髪を切るつもりがリアルな生死の境を前に完全に忘れていた。明日も出かけると言う選択肢はあるが明日は日曜日だし、ゆっくりと寮で身体を休めたい……それに日曜日だから鈴はまた一夏君に物理的なアプローチを仕掛けるに決まっているから。きっと休めるはず。

そう前向きに捉えて、私は眠りにつくのだった。

だが明日は明日でそれなりの災難が待っていたりする……

第57話に続く

第57話

第57話

消灯時間の少し前、扉が叩かれる

「誰だろう?」

一番近くのフェイトが立ち上がり、扉を開けると

「良かった。起きてた」

扉から顔を出したのは鈴だった、それを見たはやては

「ん? 私に用か?」

「今日はちよつと違うのよ。龍也に用があつてね」

私? ベッドから身体を起こしながら

「どうした?」

「ん、いやさ……そのシエンの事でね、頼みがあつてさ」

あははと軽く笑いながら言う鈴の話を聞き

「自覚してるなら、少しは自重すればどうだ?」

主にシエンの心労の原因になっているのは鈴の筈。少しばかり自

重すればどうだ? と言うと鈴は

「それはいや。どう? 頼める?」

予想とおりの即答。そして話を別の方向に持っていく鈴に内心呆れながらも

「別に構わない、それくらいの頼みなら聞くさ」

別に難しい頼みではないし、それくらいの頼みならお安い御用だと

言うと、鈴は指を鳴らして

「やりッ♪ やっぱ龍也に頼んで正解だわ。じゃあよろしく!」

言うだけ言つて部屋を出て行く鈴を見ていると

「鈴つてやつぱり友達を大事にしてるよね」

「うんうん。そういう所は良いよね」

少々正格に難こそあるが、基本的には善人だ。だからこそ鈴の頼みを受けることにした……

「さてと……寝る前に少し考えておくか」

コートから手帳を取り出し幾つか印をつけてから、私は眠りに落ちた……

「んあー眠い」

目覚ましの音で目を覚まし身体を起こした所で気付いた

「あれ？ 鈴が居ない」

隣のベッドで眠っている筈の鈴の姿がない。一瞬どこへ思ったが

「まああれかな、一夏君に奇襲かな？」

鈴の姿がない。一夏君に何らかの災難と言うのはもうお決まりのパターン過ぎて、動揺はしないが

(休みなのに可哀相だな)

月々日曜日の間、絶対に一夏君がゆっくり休める日はない。暫くすれば寮内に一夏君の悲鳴が……

「ギャアアアアア……」

「朝から一体何があったんだろうね」

徐々に小さくなっていく悲鳴を聞きながら。私はベッドから降り身嗜みを整え、食堂に向かった。なおこの悲鳴は1日1回必ず響き渡る。最初こそ皆ビククリしていたが

今は驚く人間は居ない。人間の適応力の高さが以下に凄いかがる。そんな事を考えながら日替わり朝食セットを手にし、空いてる席に腰掛けて気付いた

(あれ？ 何時もの面子が居ない?)

いつも大騒ぎをしている面子が居ない事に疑問を感じながら朝食を食べ始めた。

シエンが朝食を食べ始めた頃、鈴は……

「う、うがあああああッ?!?!」

奇声を発していた……それを見ていた龍也は

「落ち着け」

「うぐぐ……ぐうううツ?!?」

まあまあと龍也に言われたあたしは、手の中の無残の物を見ながら「こんな餃子作るの難しいの?」

無残な姿と仕上がった餃子だった物を見ながら言うと

「お前が不器用なだけだ」

龍也はどんだん慣れた手際で餃子の皮を作っている。あたしはまた餃子の種の入っているボールを見つめ

「見本希望します」

「やれやれまたか?」

龍也が呆れたようにまたゆっくり餃子を作ってくれるのを見る。

中国人でもここまで上手いのは居ないだろうと言うレベルだ

「と言うわけだ。判ったか?」

「なんとか……」

力を入れすぎないことと種を入れすぎないこと、そして丁寧に作る事を心がけゆつくりと餃子を作っていると

「お前酢豚作り上手なのにそれ以外は駄目なのか?」

一夏が酢豚を好きなのでひたすらに練習した。それ以外で出来る物といえば……

「……あとチャーハンと手打ちラーメンなら」

「なんでそうも両極端なんだ?」

呆れる龍也はやれやれと肩を竦める。今言った料理も一夏が好きなので覚えたのであり、それ以外はまるで駄目だ、なにかこう……やる気が出ない

「自分で作ると言ったんだらう? まあ頑張れ」

昨日の夜。龍也に頼んだのは料理を教えて欲しいだった。その理由は

「シエンが好きな料理を作ると言っているのに、まだ一品も完成して無いぞ?」

「……うん」

何時も迷惑掛けてるし、昨日も元気なかったし。好きな者でも食べ

たら元気になるだろうと思いはしたが、食堂で食べてもらっては意味は無いと思ひ。龍也に頼んだのだが……得意料理以外のスキルは極端に低いあたしは最初の餃子の時点で躓いていた

「リラックスして肩の力を抜け」

「……あんた今度は何を作ってるのよ？」

さっきまで餃子の皮を量産していた龍也はまた小麦粉を練っている。それを見ながら尋ねると

「北京ダックもどきを作ろうと思つて」

「あなたの料理のレパートリー多すぎじゃない？」

その気になれば店の1つや2つ持てるんじゃないだろうか？ 思はずそう思つてしまう、だつて餃子の皮を作る前に、杏仁豆腐やプリンを作つて冷蔵庫に入れていた。

あの手際は明らかに料理人の物だと思ふ

「まあ。そんなのはどうでも良いだろう？」

その通りか。今は早く料理を仕上げる事が第一。あたしは考えをきつちり切り替え餃子作りに集中し始めた……

どうしてこんな事になつたんだろう？ 私は首に巻かれたタオル

と身体を覆うシートを見下ろしながら

「あのさ。本当に大丈夫？」

「何心配する事は無い」

首だけで後ろを見る、龍也君が腕まくりしその手にはハサミとクシが握られている。

(どうしてあんな事いっちゃったかな?)

私はどうしてこんな事になつたのかを思い出していた。

時間は少し遡る

昼食の後寮のロビーで髪をいじりながら

「あー大分伸びてきたなあ」

あんまり髪が長いのは好きじゃないし、それに染めている髪もだんだん元の色に戻っている。そろそろ髪を切つて染めなおしたいなど

思っているよ

「なんだ。髪を切りたいのか？」

寮に戻ってきた龍也君が私の呟きを聞いたのか、そう尋ねてくる
「うん、夏前に髪を切りたいとは思っているよ」

本当は昨日の内に切るつもりだったんだけど、鈴達の大騒ぎに気を
取られてそれ所ではなかったと思いつながら言うと

「そっか、じゃあ切つてやろう」

「はい？」

あまりに簡潔な龍也君の言葉に思わず、自分の耳を疑ってしまい尋
ね返すと龍也君は

「髪を切つてやろう。何心配するな、何年もはやてとかの髪を切つて
いるのは私だ」

それは知らなかった。どこか良い美容室で切つていると思つてい
た、だけど

「い、良いよ。龍也くんが悪いし」

「構わんさ。髪を切るくらい別に大した手間じゃない」

そして気が付けば私はブルーシートの上に置かれた椅子の上に座
らされ、髪を切る体勢になっていた

自分でも訳が判らないが気が付いたらこの体勢になっていたのだ。

「長さはどうする？」

もうここまで来たら覚悟を決めるしかない。私は

「肩の高さくらいで揃えて欲しいかな？」

あんまり長いのも嫌いだが短いのも嫌だ。肩の高さくらいが好き
なのでそう言うと

「了解」

それからそつと髪にクシとはさみが入り。髪を切る音が聞こえて
くる

(だ、大丈夫かな？ ばつさりいきましたとかないよね!?)

と切り始め不安に思っていたのだが、少し時間が経てば

(本当に慣れてるんだ)

丁寧に髪を切る龍也君の手並みは不安に思うことが無いほど、熟練

したハサミ捌きだった。その事に安心しながら

(芸達者なのは知ってたけどここまでとは思わなかったなあ)

色々と出来る龍也君だけどまさか髪を切る事まで出来るとは予想外だったと思っていると、ふと気付いた

(無茶苦茶見られてる!?)

切っているのが寮のロビーだけに目に付くのは判るが……それを差し置いても

「……………」

四方から感じる羨ましいと言う視線が私に突き刺さっている。それに異常なまでの居心地の悪さを感じるのだが、龍也君は全く気にした素振りを見せず髪を切っている

(ああ。早く切り終らないかな)

目は口ほどにものを言うとは言うが、それをまさか実感する事になるとは思っても見なかった……

「はい。終り」

「あ、うん。ありがとう」

向けられた鏡を見る。綺麗に整えられていて満足な仕上がりのだが、さつきまで凝視されていたのを考えるとなんか複雑な気分だった。鏡を見ながら唸っていると龍也君の所に女子が殺到し髪を切ってくれと頼んでいる。龍也君は少し考えた素振りを見せたが

「ま、いっか」

その頼みを聞き、そのままなし崩し的に並んでいる女子の髪を切り始めていた。大物と言うべきか天然と言うべきか悩みながら

(部屋でシャワーで髪を洗い流して髪を染めよう)

私はそんな事を考えながら、自室に方にと足を向けたのだが

「ん? ヒッ!？」

強烈な殺気を感じ振り返る。その瞬間振り返るんじゃないかと後悔した

「……………」

目が単色、闇その物を纏っているかのようなはやてさん達が居て。私は

(このまま歩いてたら殺される!?)

100%まじりつけのない生命の危機を感じ、私は全力で自室に向かって走り出した……

シエンが生命の危機を感じ寮の廊下を走っている頃。IS学園地下の秘密ハンガーでは

「また面白い物を作っているな」

「でしょ? これどう思う?」

地下に呼び出したユウリにそう尋ねると、ユウリは

「汎用型と特化型の2種類か……見たところ機動力と火力の両立をメインにしたオートクチュールか?」

「見ただけで判るの?」

ユウリの言葉に内心驚きながら尋ねる。今は1度武装を外してブースターと装甲のチェックをしていたから、外見から判るとは思えないのだが

「タスクが強奪してきたオートクチュールのパッケージの調整とかもしてたしな、こう言うのには詳しい」

そう呟くユウリ。どうも世間的には発表されてないが、タスクは色々と活動しているらしい

「それだけじゃなくてISの整備もでしょ?」

自分のISだけではなく、教員用の打鉄やラファールの調整も頼めばやってくれる(金がそれなりに必要だが)その腕は本職のIS整備士と言っても良いレベルだ

「必要だから覚えたに過ぎない。それでこれカラーを見る限り特化型はエリスの物か?」

「そうそう、前に見たんだけど。ネクロつて有機・無機に関係なく寄生するからね。前のネクロの細胞に寄生されたパーツ回収したデータから、分析して色々試したら

寄生されないとまでは行かないけど……ある程度は防御できると思うのよね」

パーツ自体に2種類の加工を施し寄生し難いように仕上げられた筈なのだが、実際にネクロと対峙した事が無いのであくまで可能性の段階だが

「……まだ足りないだろうが、少しはネクロの寄生を防ぐ事は出来るだろうな。もし完全に防げるようにしたいのなら……」

「龍也君の力を借りる必要があると?」

「ああ、あの男が力を貸してくれるのなら、完全にネクロの寄生を防ぐのも不可能ではないだろうが……」

ユウリの言いたい事は判る、私は椅子に深く腰掛け

「そう簡単に力を貸してくれる人間じゃないと?」

「まあ。そんな所だろうな、所で頼んでいたものは?」

そう尋ねてくるユウリの言葉に頷き、ユウリが主に使っているハンガーの近くに積んであるコンテナを指差して

「届いてるわよ。打鉄の最新型のフレームとパーツ一式、それとラファール用の新型ブースターも」

壊れたアマノミカゲの修理に必要なと言われたパーツは全部揃えた。無論

「感謝する、ではタスクが所有している八神龍也の情報を教えよう」

等価交換だ。入手困難な龍也君の裏の情報と比べればISのフレームとパーツなど安い物だ

「八神龍也の実年齢は24歳。8歳前後から魔法使いとして活動していたそうだ。そこから作り出された我流の剣術と体術と16年に渡る戦闘経験が八神龍也の最大の武器とも言える」

16年か……あの深い戦術眼と体術も納得と言えだけの年数だろう。それをしっかり記録しながら

「それで魔法だっけ? どうゆうの使うの?」

「ネクロから提示されたのは、広域殲滅と防御・回復系。それと武器の具現化くらいだな。とは言えどんな物かは判らん」

結局の所タスクもそこまで情報は与えられて無いと……まあ納得といえれば納得だが出来ればもう少し情報が欲しかった

「他には?」

「ない」

「……そっか。ありがとう」

ちよつと期待はずれな気もするが、まあ情報は情報だと割り切ろうと思っっていると

「ああ、そうだ。1度だけ八神龍也の魔法を記録したデータがあつたな。ノイズがひどいが見るか?」

その言葉に即答する。待機状態のアマノミカゲにケーブルを繋いだユウリがPCを操作すると。ノイズ交じりの映像が映し出された

『ザ……ザザザ……投影……』

森の中で対峙しているネクロに向かって駆け出しながら、何ごとか呟くとその手から光が放出され始める

『写……無……なる湖光……ア……ン……ト』

装飾が施された剣が現れた所で画像の再生が止まった

「何も無い所から剣か……アなんとかって言ってたけど、まさかアロンドイトとか言わないわよね?」

アーサー王伝説で有名なランスロット卿の所有した剣の名前を言う

「案外違うとも言えない気がするがな」

うん。私もそんな気がしなくも無い。大体自分の常識がどこまで通用するかわからない、あり得るかもと思っていたほうが良いだろう「ではワタシはアマノミカゲの修理を始める。隣のハンガーを借りる」

そう言って私の居るブロックを後にする、ユウリの背中を見ながら「さーて、パツケージの調整を再開しましょうか」

まだ色々調整する所はある、今は出来る事をしよう。私はそう思っ

て調整を再開した

ボタン!! と勢いよく開かれた扉に驚き振り返ると

「ぜはーぜはー」

肩で大きく息をするシエンが居て、あたしは

「どうしたのよ。そんなに慌てて？」

「ま……魔王の……目が怖かった」

この上なく判り易い説明に頷いているとシエンは息を整えてから、自分のクローゼットから着替えを取り出し

「ちよつと……シャワー浴びてくるね」

「はいはい。行ってらっしゃい」

シエンの背中を見送った所で、備え付けの冷蔵庫に入れておいた料理を取り出し、エプロンを身に着け

「よし、いっちょようやりますか！」

シエンは、荒れてた頃からあたしを気に掛けて居てくれた大事な友人だ。たまには感謝の気持ちをちゃんと伝えるべきだ、あたしはフライパンに油を引いて準備した料理の調理を始めた……

「あーすつきり」

髪を洗い流し、髪を染め直したので少々長くなったが、まあ良いだろう髪を拭いながら部屋に向かうと

「良い匂い。なに、鈴何か作ったの？」

「うん。何時も迷惑掛けてるしね、たまにはシエンの好きな物でも作ろうかなって思ってたさ」

机の上には焼き餃子にシウマイ。それに北京ダックぽいものと色々並べられていた

「え？ こんなにバリエーションあったっけ？」

「龍也に教わったのよ。まあ口に合うかは判んないけど食べてみてよ」

ちよつとぶつきらぼうな感じの口調の鈴に

(あ。照れてる)

こういう時どうすれば良いのか判らないから、口調がぶつきらぼうな感じになってしまうのはずっと同じだ

「ありがと、じゃ。頂きます」

手を合わせてから箸を手にし1番最初に手に止まった餃子を食べ

てみる

「美味しい♪」

羽根つき餃子でパリツとしていて美味しい。鈴も私が食べたのを確認してから餃子を口にして

「美味しい。龍也のレシピは間違いないわね」

鈴の言葉を聞きながら、色々と用意してくれた料理を食べながら

(まあ色々と気を使ってくれたって事だよ)

元気が無いと思ったから色々と考えてくれたのだろう、色々と迷惑を掛けられたり振り回されたりするが、それでもずっと一緒に居るのは不器用ながらも優しい鈴と一緒に居るのが楽しいからだ。

(ま、たまにはこういうのも良いかな?)

そう思いながら私は鈴の用意してくれた、食事を終えパジャマに着替え眠りに落ちた

翌日の昼休憩

「たたた、助けてえええええ!!」

「待ちなさい! 一夏ーッ!!!」

相変わらずと言うか何時も通りのやり取りが聞こえてくる事に笑みを零しながら

「仕方ない、鈴のフォローに行こうかな」

まだまだ鈴の一途過ぎる想いが適う事は無さそうだと、と苦笑しながら

「やれやれ鈴は一直線すぎるんだよ」

そろそろ止めに行こう、じゃないと鈴に対する一夏君の評価更に悪くなりそうだしねと思いつつ、廊下に出た……

第58話に続く

第58話

第58話

気が付いたら俺は食堂の椅子に縛り付けられていた。何を言っているのかまるで判らないと思うが、事実だ。しかもしっかりと制服姿、自分で着替えた覚えは無いのだが……いや、よそうこの事は深く考えていい問題じゃない。犬に噛まれたとでも思っただけで忘れろべきだ、主に俺の精神衛生上のために

「……」

メンチを切りあっている鈴とシャルの姿。俺が何があつたのかを真剣に考えていると

「む？ 起きたか一夏」

「ああ、起きたぞ箒。ところで何故俺は椅子に縛られているんだ？」

朝食のトレーを持って来ていた箒にそう尋ねると、箒の代わりにセシリアが

「鈴さんが一夏さんを肩に担いで来たのですか？」

「ああ、なるほど。また扉が破壊されたんだな」

3重の鍵に加えて、鉄板で強化したんだが、魔王の前ではまるで効果が無かつたようだ

「まあほら。そう気を落すな、一夏」

「ああ、ありがとラウラ、所でこの鎖壊せないか？」

「すまないが無理だ」

ラウラでも破壊できないか。となるとはやてさん印の捕獲アイテムなんだろうな、となるとこれを外せるのは鈴かシャルだけか……脱出方法はないと悟り俺は遠い目で天井を見つめる事しか出来なかった。俺から気まずそうに目を逸らしながら朝食を食べる箒達を見ていると

「一夏！」

「は、はいー」

鈴とシャルに同時に名前を呼ばれ、思わず背筋を伸ばしながら返事

をすると

「どっちを食べる!？」

差し出されたのは明らかに手作りだと思われる朝食が2つ……俺はそれを見て

「両方は?」「駄目」……そっか」

両方とも察が少ないので両方とも大丈夫だと思いつながら言うと、即答で駄目と言われてしまった。どっちかを選ぶとなると

(鈴のはオーソドックスな中華粥。シヤルは鰯の開きと味噌汁)

どっちも美味そうなのだが、何か混ざられてそうな気がする……(どーするかなー)

俺が遠い目でどうするか考えていると、食堂に点けられているTVから

『本日未明。更識家・天乃宮家の両家から3人目の男性IS操縦者が発見されたと発表されました』

ぎゃーぎゃーと騒いでいる鈴とシヤルに

「ちよつと静かにしてくれ! ニュースが聞こえない!」

俺がそう怒鳴ると2人もTVを見て

「え? 3人目の男性操縦者?」

「この人って前の学園新聞の見出しの人だよね?」

魔王化モードを解除して俺と同じ様にニュースを見る鈴達を横目に見ながら、アナウンサーの言葉に集中する

『年齢は17歳。国籍は日本、IS整備士と活動している際にISの起動に成功し。更識家・天乃宮家の両家に保護された「ユウリ・クロガネ」は近日中にIS学園に転入となるそうです。なお両家から専用機も与えられるとの事です』

「元IS整備士か……どこぞで会ってるかもしれないな」

「そうですわね。専用機持ちなら整備士に会う事も多いですしね」

うんうんと頷きあうラウラとセシリアを見ると、モニターに写真が映し出された。長い銀髪を首元で束ね、ルビーのような真紅な瞳をした鋭い目付きの男子だった

「……………うん? エリスに似てないか?」

箸が首を傾げながら呟く。確かにクロガネさんはエリスさんにどこと無く似てる気もする

「他人の空似だろう？ エリスに兄がいる等聞いたこともないしな」
ラウラがそういうのを聞いていると、千冬姉が食堂に入ってきて

「いつまで食べている！ 食事は素早く済ませろ！」

ぱんぱんと手を叩きながらそう怒鳴る、ふと時計を見るともうすぐ予鈴がなる時間だ

「やば!? 頼むから鎖……あ、あれ？」

目の前に突き出されたスプーンと箸。

「はい！ 口開ける！」

「じ、自分でもがっ!？」

無理やり突っ込まれる御粥と鰯の開き

(ま、不味い!?)

中華粥と魚の開きは悪夢なまでに合っていない。本来なら美味しい筈のそれは不味いといしか言いようの無い味になっていた……

「合同発表には出なくて良かったの？」

アマノミカゲの制御プログラムの調整をしているのをずっと見ていた、楯無が不意にそう尋ねてくる

「人前に出るのはあまり好きじゃない」

振り返らずに返事を返しながらプログラムを見る。右足のブースターと背部ブースターのプログラムの再構築が必要だな……新型のパーツが多く手に入ったから個々のプログラムも組み直した方が良いな。私の作業をじつと見ている楯無に

「お前は良いのか？ そろそろ授業だろう？」

そう尋ねると楯無は腕時計を見て、慌てて地下の研究室を出て行った。そんなに慌てるならこんな地下まで来なければ良いのにと思いながら、深く溜め息を吐き1度作業を中断し、修理中のアマノミカゲを見る。胸部装甲と左腕右足が完全に破壊されている。ブースターだつて1から作り直しになる、パーツもフレームもあるが……問題は

時間だ

(今日の発表で確実にタスクもネクロもワタシの生存に気付いた。そうなければ近い内に襲撃が来るの間違いはない)

そして襲撃してくる可能性が高いのはマドカの可能性が高い。マドカ1人だけならいざ知らず、ネクロも何体か手駒を出してくる。今IS学園でネクロと戦えるのは

(ツバキと千冬……あとは楯無位か)

他の代表候補や教諭では役に立たない所か、ネクロに寄生されISごと奪われるのは目に見えている

(修理だけではなく、使える人間の確保が重要だな)

とりあえず今出来るのはアミノミカゲの修理に集中する事だ。完全に破損しているパーツだけでも修理しないと不味い。考え事に耽っている

「ユウリ。何してるの?」

「何とは何だ?」

研究室に来たツバキが信じられない物を見るような目で尋ねてくる。その意味が判らず尋ね返すと

「今日から体験入学してもらうんだけど? 言わなかったっけ?」

「聞いてない」

即答し作業に戻る。今日からと言われてもまだ何の準備もしていない、それに夏休みまであと1日ある。明日でも良いだろう……そんな事を考えているとツバキは携帯の画面を見て

「……あ、送信してなかった」

「馬鹿か貴様は?」

あははと乾いた笑い声を上げるツバキに

「明日なら出る。今日は作業に集中させてくれ」

「まあ、連絡して無かった私が悪いんだし、仕方ないか……じゃあ、明日はちゃんと出席してね?」

「判った、判った」

そう返事を返すとツバキは自分の研究フロアに向かって行った。ワタシはゆっくりと歩いて行くツバキの後ろ背を見ながら、アミノミ

カゲの修理を再開した

『国籍は日本、IS整備士と活動している際にISの起動に成功し。更識家・天乃宮家の両家に保護された「ユウリ・クロガネ」は近日中にIS学園に転入となるそうです。なお両家から……』

見ていたTVの電源を切り目を閉じる

(上手く合流できたみたいね)

ユウリが自爆し死んだと思っていたが、私が思うよりも悪運が強かったようだ。

(これであるUSBメモリは八神龍也の手に渡った。後は……彼が主導になってネクロに備えてくれれば)

八神龍也にパンデモニウムの情報を渡すのが目的だった。その目的が達成出来た以上、後の心残りは1つ

(マドカをどうやってIS学園に送るかね)

マドカはまだ何とかなる……問題は山ほどあるが、何とか彼女も向こう側に送りたい。最近ますますそう思うようになってきた

「スコール。やっぱり……実働部隊の過半数の連絡がつかない」

バサリと投げ渡された書類に目を通す、消息不明の部隊はどれも最後の任務で、ネクロと共同任務となっている。

「そう……予想通りと言えば予想通りだけど、実際に聞くと大分堪えるわね」

最近連絡のつかない実働部隊が多い。10の部隊の内7つの隊と連絡がつかない。残るのは本部直属の隊だけだ……本部では連絡のつかない隊は極秘任務だと言っているが

実際がどうなのか考えるまでも無いだろう。渡された書類を見ながら、

「ありがとう、オータム。下がって良いわ」

「ああ、一応こっちでも近くの部隊の隠れ場所を見に行ってみる」

「お願いするわ、近くだと……データ奪取を主にした部隊が居たわよね?」

倉持技研や日本のIS研究所にハッキングを仕掛ける。ハッカーの部隊が居た筈、その隊とも既に連絡がつかなくなって1週間。そのリーダーは私と同じく昔からタスクに所属していた人間。今のタスクのおかしさに気付いていて本隊のハッキングを引き受けてくれた、もしかすると何らかの情報を手にしたから処分されたと考えると辻褄が合う。

「ラクシユミに気をつけて」

前に私と対談に応じたネクロ。さまざまな姿を持ち戦闘能力を持たない代わりに、凄まじいまでの情報収集能力を持ったネクロに気をつけると言うと

「ああ、じゃあな」

オータムは領き部屋を出て行った。破壊工作に長けたオータムはそれと同じくらい隠密行動にも優れている。もし処罰されたと言え、集めた情報を無にするような馬鹿ではない。どこかに集めた情報を隠している筈、その回収をしたい。今のタスクが何を考えているか私達は知らなければならぬ

(裏の情報の中にある、第一世代のIS操縦者の失踪事件。そして第1回のモンドグロツソの際に使用されたISデータの損失)

何か私達では想像も付かないレベルで物事が動いているに違いない。私は読んでいた書類をシュレッダーに掛ける為に立ち上がった所で

「スコール。話がある」

「マドカ? 何かしら?」

書類を机の中にしまい。尋ね返すとマドカは決意の色を映した瞳で

「ユウリの始末を任せて欲しい」

強い口調のマドカの言葉に少し考える……ユウリはマドカのISの整備を全てしていた。気難しいマドカが唯一気を許したとも言える、ユウリが裏切ったのが許せないのだろう

「ISはどうするのかしら?」

ゼファイルスは今ネクロの元にあり、使用出来ない筈。だからISを

どうする？ と尋ねるとマドカは待機状態の I S を私の前に置く
「……このアスモデウスを使う。あいつが組み上げた I S でユウリを
討つ」

アスモデウス。最初期型のラファールをユウリが改造した I S。
そしてマドカがゼフィルスを手にする前に使用していた I S……

「良いわ。任せる……だけど、すぐには駄目よ」

「何故だ」

鋭い眼光のマドカに私は

「ユウリが居るのは I S 学園。 I S 学園に八神龍也が居る以上、タスク
だけで動くわけには行かない。判るでしょう？」

「……判った。では機会を待つ」

「ええ、そうして頂戴」

納得と言う感じで頷き、部屋を後にするマドカを見ながら。私は内
心笑っていた

(流れが来たわね)

こちらからユウリの始末を言い出せば、ネクロ側も幾つか手駒を出
してくれるだろう。それに紛れればマドカをタスクから I S 学園に
送る事が出来る、これはハッキリ言って

好都合……だが

(ネクロとの共同作戦。しかも本人には I S 学園に行く気が無い)

条件的にはかなり不利だ。ユウリは積極的にタスクを出ると言っ
ていた、だからこそあのユウリの脱走は成功したような物だ。

(……となると私が取れる手段は1つ)

八神龍也に託した U S B メモリ。それがマドカをタスク。いえ
……ネクロ側から切り離す事の出来る唯一の鍵となる。そしてその
1回だけが唯一のチャンス、それを逃せば

次は無いのだから……

翌朝

教室で授業の準備をしていると、ガラリと教室の扉が開き

「……」

不機嫌そうな顔でユウリが入って来ると同時に私でも耳を塞ぐよ
うな、歓声が響き渡る

「うそ!? 会長の婚約者超格好良い♪」

「いいなー、私も恋人欲しいな〜♪」

きやいきやいと騒ぐクラスメイトを掻き分け、私の隣のイスに腰掛
けたユウリは机に突っ伏した。その顔は疲労困憊その物で私でも話
しかけるのは不味いなって思うくらい不機嫌そうな顔をしていた

(休憩時間にも話せば良いか)

どうせ今日で夏休みで、半日で授業も終るし……と楽観的に思っ
ていたのだが

休憩時間になると、クラスメイトだけではなく。他のクラスの生徒
も来てユウリを囲んであーだこーだと質問を繰り返している

(あつ。凄いイライラしてる)

ポーカーフェイスだから判り難いが、凄まじくイライラしているの
が判る。それに目で

(助ける)

と訴えている。私は注目されるのは嫌だったが

「ユウリ。ちよつと話が」

「あ、ああ」

助かったと言う感じのユウリと共に教室を出ると、教室から

「あー私達が囲うから会長が怒っちゃった」

「会長も嫉妬するんだね。以外♪」

きやいきやいと楽しげな声に私は

「なんか……ごめんね?」

「いい……ワタシも女子の事を甘く見すぎていた」

2人では深い溜め息を吐きながら

「あと2時間だから頑張つて、怒鳴つたりしないよね?」

「……善処する」

そう言うユウリだったが、結局3時間目の休憩で

「やかましいぞ! 貴様らツ!!」

我慢の限界が来たのか、凄まじい大声でそう叫んだ……

その一喝が聞いたのか、女子達はびっくりと肩を竦め各々の椅子に戻って行った

(限界だった?)

(ああ)

私がそう尋ねるとユウリは机に突っ伏したまま。そう返事を返した……私でもうるさいと思ったのだから、ユウリが叫ぶのは無理も無いと思った……

女子があれだけ群れるとうるさい物だとは思っても見なかった。半日だけとは言え体験入学は酷くワタシの精神を削った

(明日から夏休みで本当によかった)

暫く女子に会わないように地下の研究室に籠ろう。それが良い、どうせアマノミカゲも修理しないとならないしな。ワタシは鞆を手に地下の研究室に直行しようとする

「なんだ？」

「どこに行くのよ？」

ワタシの手を掴んだ楯無に小声で

(アマノミカゲの修理に行く)

(ご飯は?)

(カロリーメイトで良い)

どうせ一回研究室に籠るとカロリーメイト漬けになるしなと思いつながら言うと

「えー折角だから、食堂で食べましょうよ」

「騒がしいから嫌だ」

もうあの黄色い歓声は嫌だ。鬱陶しい事この上ないと思いつながら言うと

「だいじょーぶ♪ だいじょーぶ♪ 私が居るし。そんなに騒がしくはならないと思うよ」

「……本当だろうか？」

ジト目で尋ねると楯無はにこりと微笑み

「本当よ」

ならば信じてみるか、カロリーメイトで良いとは言え、やはりちゃんとした食事の方が良いしなと思ひ。2人で食堂に行ったのだが

「きたー♪」

「やっぱり2人で来たわね、ちゃんと取材しないと」

何十にも女子が待ち構えていた、ワタシは隣の楯無を睨んで

「おい」

「あははは……これは予想外」

しまったと笑う楯無。引き返そうにも囲まれてるから退路が無い……どうした物かと考えていると

「お？ ユウリ、楯無。こっち来いよー」

その呼び声で女子達の波の一箇所が崩れる。その声の主は

「よっ♪」

人の良い笑みを浮かべた、ワタシと同年代の姿をした龍也だった。普段は何を考えている？ と疑う所だが今のワタシにはその呼び声はありがたく、楯無の手を掴んで龍也の元に向かった。

「随分と疲れたみたいだな？」

「……うるさい」

くつくと笑う龍也を睨みながら言うと、楯無が驚いた顔で

「え、えーと。知り合い？」

きよろきよろと不思議そうな顔をしている。その顔で気付いた、楯無は龍也の事を何一つ聞いていないと。どう説明するものかと一瞬考えた瞬間

「ああ、今日廊下でバツタリ会ってね。そこで数少ない男子生徒同士だ、暫く話していたのだよ」

何一つ動揺する事無く嘘を言い切る龍也にあわせて

「教室に行く前にバツタリ出くわしたんだ」

話を合わせておいた方が良い、下手に勘ぐられるのは面白くないしな。

「ふーん？ そうなんだ」

ワタシの話を信じたのかどうか判らないが、頷く楯無と龍也と共に

昼食を終えた所で

「楯無。少しばかりユウリと話をしたいのだが良いかね？」

「ここにこと笑う龍也。この話と言うのは恐らくワタシが手渡したUSBメモリの話だろう。」

「うーん。まあ良いわよ？ でも後で私の部屋に案内してね？」

「ああ。ちゃんと案内するよ」

そう笑う龍也に連れられ、食堂を後にした

「大分参っているようだな？」

「林の周りに結界を張りユウリに尋ねると

「まあ……な」

「疲れたように言うユウリにご苦労様と声を掛けてから、受け取ったUSBメモリを見せて

「このメモリの情報はとてもありがたかった」

「中に何が保存されていたんだ？」

「首を傾げながら尋ねてくるユウリに

「中に保存されていたのは。最悪の戦略兵器の同型機の改修計画書だった」

「少々大げさかもしれないが、この世界の科学力では太刀打ち出来る兵器ではないよな、かつてクラナガンを半壊にまで追い込んだパンデモニウムの猛威を思い出しながら言う」と

「最悪の戦略兵器だと？」

「案の定ユウリが食いついてきた。この世界では唯一ネクロに関する情報を知ってるだけあるか……」

「ああ、もし完全な形で稼動すれば半日も関わらず日本なら、更地になるだろうな」

「パンデモニウムの魔力砲と誘導型のビットが完全な形で再生されたらなら。この世界の科学力では対抗出来る訳がない」

「何を他人事の様子に！」「話は最後まで聞け。この世界では動力や修理に使う材料が無い、どう足掻こうが完全な形で再生は不可能だ」

魔力を伝達する金属に、誘導型のビットの修理に必要なデバイスも無い、どう足掻こうが完全な修理は不可能だ。ジオガデイスが使用した時も魔力砲の修理しか出来なかったのだ、科学力が数段劣るこの世界での修理は不可能だ

「そ、そうなのか……では改修案とは？」

「すまないが、そこまでの情報は無い。判っているのは攻撃系の武装の大半を諦め、防御能力に特化させる改修をする事だけだ」

攻撃的な性格のはずのネクロが防御的な改修。なにか裏があると見て間違いないだろう

「他に情報は？」

「何百重にもプロテクトが合ってるね。流石にそう簡単に解除できない」

それに専門のPCもないし、この世界のPCでの完全な解析は難しい

「流石のお前でも難しいと言うわけか？」

弱点見たりと言う顔のユウリに

「うむ。古代ベルカ語ばかりだね、専門家でも難しいのだよ」

ネクロが書く書物の大半は古代ベルカ語だ。現代ベルカ語とは文法が違いすぎて理解できない

「まあその内には解読できるさ。さてと本題なのだがね、どうも近い内にネクロの襲撃があるかもしれないと言う事なのだよ」

パンデモニウムより深刻なのはそっちだ。

「IS学園の関係者には？」

「まだ話は通していない。夏休み中に機会を見て話すつもりだ」

なにせその襲撃の件を分析出来たのは昨日だ。話余裕など無かつたしな

「何故ワタシに最初に教えた？」

「事情を知ってる人間のほうが話しやすいだろう？ 一々説明する手間も無くて楽だからな」

そう笑いながらユウリの隣を通り過ぎながら

「では、その時までと同じ学園の生徒として頼むよ。ほれこい、楯無の

部屋に案内してやるから」

「釈然としない表情をしながらも着いて来るユウリは、ふと思い出したように」

「お前のISを分析させろ。同じ生徒なんだから構わないだろう？」

「……なるほど、すっかりしてる」

私のISを解析すれば色々判ると踏んでいるのだろう。まあ別に良いか

「良いぞ。私がISの調整をしてる時に幾らでも解析させてやる」

そう簡単にデバイスの情報が解析出来る訳無いしな。この後はこれといった話をするわけでも無く、互いに無言で寮にと戻って行った……

第59話に続く

第59話

第59話

夏休みのある日。ISの学生寮の一室で

「エリス。これどうしよう?」

急にいけなくなったとかいう理由で譲り受けた、ウォーターワールドのチケットをエリスに見せながら尋ねる

「誰か誘ってあげれば良いんじゃないですか?」

ベッドに寝そべりながら、興味がなさそうに言うエリスに

「じゃあ、エリス一緒にいきましょうよ」

「それは嫌です」

即答で嫌だと言うエリス。エリスは人が大勢居るところが余り好きではない、断られるとは思っていたが。それではせつかくのペアチケットが余りにもつたいない

「じゃあ、誰を誘えば良いの?」

私が誘って着いて来てくれそうなのは、本音かお姉ちゃん位だけど……私がそんな事を考えているとエリスは

「龍也君でも誘ったらどうですか?」

何かの本を見ながらそういうエリス。確かに龍也君を誘うのも良いかも知れないが

「来てくれるかな?」

私が誘って来てくれるかと言う不安がある。長い付き合いのエリスは私の不安を感じ取ったのか、若干の呆れ顔で

「誘わないであーだこーだ考えるのは良くないと思いますよ」

考えすぎると言うエリスに

「……判った。聞くだけ聞いてみる」

とりあえず聞くだけ聞いてみようと思い、チケットをポケットにし
まいながら

「どこに居ると思う?」

「整備室じゃないですかね? さっきジュースを買いに行った時に歩

いていくのを見ましたよ」

そっか、じゃあまだ居るかもしれない。私はそう思って自室を後にした

「うん？ ああ、なるほど……ここはこうなっているのか」

ぶつぶつと整備室に響く声は龍也君の物じゃない。ここには居ないのかな？

「ああ、ここの回路とそっちの回路と連携してるんだ」

龍也君の声も聞こえてくる。誰か一緒かもしれないけど行ってみよう。私はポケットの中のチケットを触りながら整備室に足を踏み入れた

「ん？ 楯無妹か」

龍也君と一緒に居たのは先日の学園新聞でお姉ちゃんの婚約者と紹介されていた、3人目の男性IS操縦者のユウリ・クロガネさんだった。つなぎを着て龍也君の白銀のIS「インフィニティア」にコードを何本も繋ぎ。メンテナンスをしていたようだ

「簪だ」

「ワタシは知らん。で？ この動力の回路はどういう仕組みだ？」

「それは機体の翼と連動している、良く見るエネルギーバイパスが繋がってるだろう？」

「ん？ ああ、これか？ 随分と細い回路だが見落としていたな」

私でも理解できない、ISの整備の話をしている龍也君に

「あ、あの龍也君。ちよつと良い？」

「ん？ 私か？ 判った、ちよつと席を外すぞユウリ」

「判った、1度調べたデータを纏めるから問題ない」

ユウリさんに声を掛けてから私の近くに来た龍也君に

「あ、あのね？ これ」

ポケットからウォーターワールドのチケットを手渡す

「ん？ これは？」

差し出されたチケットを不思議そうに見る龍也君に

「えっと、近くに出来たウォーターワールドのチケット。明日まで一緒にいってくれる人も居ないし……良かったら一緒にどうかな？」

はやてさんとかも居るし多分駄目だよなと思いつながら、尋ねると龍也君は

「良いぞ、別に」

「え？ い、良いの!？」

まさかOKが貰えると思わず思わず大声で尋ねると龍也君は

「うん。別に構わんよ？ で日にちは当然明日だよな。時間はどうする?。」

「えーと10時にウォーターワールドの門の所で」

「判った、じゃあ明日」

私は龍也君に見せていたチケットをポケットに戻して、私は整備室を後にし自室に戻った

「どうでした?。」

「OKだった」

了承を貰えた事を言うのとエリスはにこりと微笑んで

「良かったですね。簪」

「う、うん!。」

とりあえず水着とか用意しないと、私はクローゼットにしまっていた水着を探し始めたのだが。後ろで私を見ていたエリスは

「水着だけで良いんですか？ 私服は?。」

「……エリスう」

「はいはい、色々と考えてあげますよ」

仕方ないなあと笑うエリスにありがとうと言って私は明日に向けて準備を始めた

エリスと簪が奮闘してる頃。整備室の龍也とユウリはと言うと

「この材質は、普通のISと違うな?。2重いや3重には加工してるな?。」

ほう。なかなか鋭い……従来のISの材料にデバイスを混ぜ、さらに魔力加工を施している。もちろん見かけは普通のISと同じ感じにしてあるからぱつと見て判る物じゃないはずなんだが、それだけユウリが優秀ということか……

「正解正解、で？ 加工方法は判ったかな？」

この加工方法はジェイルが独自に開発したもの、私やはやてといった高位魔導師の魔力に耐えられるように独自の技術で開発された。新型のデバイス装甲だ。そう簡単に判る物ではないと思いつながら尋ねると

「……いずれ説明してやる」

判らないという事が苛立つのか、若干眉をしかめながらそう返事を返すユウリを見て

「はっはは、そう簡単に出来るかなー」

半デバイスのインフィニティアの解析に奮闘しているユウリを見ながら、私は笑った……気難しい奴かと思っていたが案外面白い奴だ

（おかしいわね？）

昨日一夏の部屋に遊びに行き、友達から買い取ったウオーターワールドのチケットを見せ。一緒に行く約束をしたのにまだ一夏が来ない、その事に

（まさか忘れてる？ もしかして嫌われてる？）

今までの自分の行動を考えると嫌われている可能性も捨てきれず、不安に思っていると

「ん？」

「あら？」

ウオーターワールドの前で偶然セシリアを見つけ、互いにはちくりと瞬きをした後

「こんにちわ。鈴さん」

「う、うん。セシリア、こんにちわ」

なんでここに居るんだろうと思いつながらも返事を返す。

（どうしてここに居るんだろう？）

どうしてここにセシリアが居るのか気になった物の

（まあもう少しすれば来るでしょ）

楽観的にそう考えあたしは一夏が来るのを待った

〜20分後〜

(だあー！ 遅い！ 何やってるのよ！ あいつはあ!!!)

怒りに身を任せ地団駄を踏んでいると携帯が鳴る。イライラしながら携帯を取り出す、表示は一夏

「もしもし!? あんた何してるのよ！ 今どこ!? シャルロットかブラコンに捕まった!?!」

遅れた可能性として最も有り得る事を考えながら尋ねると

「捕まった……うん、そうとも言えるかもな」

「今行く、シャルロットかブラコンに殺してやるって伝えて」

人のデートを邪魔するような奴は殺してやる、あたしにはその権利がある。

「あーいやな? 千冬姉が伝え忘れてたらしいんだけどな? なんか

倉持技研の研究者が来て白式のデータを取りたいって言っててだな」

「それで何?」

「まじですまん。今日はいけそうにない」

「なあ!?!」

脳裏に高笑いしてるブラコンの姿が思い浮かぶ、恐らくこういった事態を想定して業と伝えなかったとしか思えない

「でな? 昨日のうちにお前に伝えておこうと思っただけだ。お前寝てるし、シエンさんも出てこないしさ?」

……少々張り切ってしまったって勝負下着を見てる時にかかわれて、反射的に意識を刈り取ってしまった。

昨日の内に聞いていたのなら!! ブラコンとやりあうことになろうが、なんとしても一夏を、なんなら誘拐しても良いから連れて来たいというのに

「というわけでだ」

「うん」

「セシリアにチケット買ったから。一緒に遊ぶと良い」

その言葉を一瞬理解できなかった。え? あたしがセシリアとデートすんの?」

「ふふふふ、ふざけんあッ!!!」

怒りに身を任せそう叫ぶと一夏は

「すまん！ マジですまん!!! 今度絶対埋め合わせするから!!!」

夏！ 何を喋っている！ 早く書類に目を通せ！」

一夏を怒鳴るブラコン女の声がする。一夏に変われと言おうとしたが

「すぐ行かないといけなくなった。悪いんだけど文句は後で聞く！
じゃあ」

言うだけ言って電話が切られる、ツー、ツーと言う音を聞いていると徐々に怒りがこみ上げてくる

「く、く、くっ……」

携帯を握り締める。手の中でメキメキと携帯が軋んでいるが、そんなのはどうでも良い

「あの、鈴さん？ どう」

あたしの様子が気になったのかそう尋ねてくるセシリアの声を聞いた瞬間。あたしの中で何かが切れた

「ふざけんあッ!!!」

手に持っていた携帯を地面に叩きつけ、おもいつきり踏み砕く

「はーはー」

怒りのあまり目の前が真っ赤になる、大きく肩で息を整えながら与えられた情報を整理していると

「ど、どうなさったんですか!? 何ごとですか!?!」

慌てて尋ねてくるセシリアにあたしは

「嵌められた。良い、一夏はブラコンに捕まった」

結論から言っただけでブラコンが何らかの方法で、あたしと一夏が出かける情報を得て。業と用事を用意したとしか思えない

「はい?」

意味が判らず首を傾げるセシリアに自分の分のチケットを見せながら

「この！ チケットは！ あたしが一夏と行くために準備したの！
それを知ってブラコンが邪魔しやがった!! 死ね！ あのブラコン

女アアアア!!!」

感情任せにそう叫ぶ、周囲の人間が何ごとかとあたしを見るが

「何見てんのよ! 殺すわよ!!」

憎悪100%および殺気100%で叫ぶと

「はひっ!!!」

返事をして逃げていく周囲の人間を睨んでいると

「り、鈴さん」

「あ? なによ?」

あたしの本気の殺気に怯えながらもセシリアは

「と、とりあえず中で何か飲みましょう。ねっ? 奢りますから」

「……そうね。とりあえず何か飲むわ」

踏み碎いた携帯の残骸を拾う。あつメモリは無事だ。無意識でもメモリは踏んじやいけない物とは判つてたようだ、あたしはセシリアにおちついてと言われながらウォーターワールドのゲートを潜った

「一夏、早く準備をしろ」

「判ってるって、えーと書類ってこれで全部?」

目の前で書類と奮闘している一夏がそう尋ねてくる。夏休み中必ずあの化け猫が何かを仕掛けてくると踏んでいた為、業と一夏に渡しでなかったISの書類。内容は謎の形態変化をした白式と現在の白式・白雪の解析についての書類だ

「ああ、それで最後だ。急げ倉持技研の開発チームが来るぞ」

と言うか、私が指定した時間に来るように言い聞かせてある。こういう時ブリュンヒルデの名は非常に役に立つ

「判ってる! えーとこれでよし! 千冬姉確認頼める? 着替えてくるから」

「ああ。とつとと着替えて来い」

一夏は化け猫と出掛ける予定だったのか私服姿だ、このまま倉持技研の面子と顔を合わせる訳にも行かないので、着替えに行くという一夏の後ろ背を見ながら

(ふふん、そう簡単に一夏を連れ出せると思うなよ。馬鹿どもめ)

私の目が黒い内は一夏とのデートなど誰が認めるものか

(さてと話し合いが終わったら、食事にも行くか)

私はそんな事を考えながらゲートの前まで来ている、開発チームの出迎えに向かった……もちろん余計な事は言うなと言う口止めをする為にだ……

「つまり、このチケットは鈴さんが用意して、一夏さんを誘ったと。そして織斑先生がそれを知って業と用事を伝えた訳ですね」

「先生なんてつけなくても良いのよ、ブラコン女もしくは変態で良いわ」

鈴さんは常に織斑先生と喧嘩してる。呼び方も大体ブラコン女であることが多い

「まあ落ち着いてください、ね？」

「うっさい、黙れ。死ね、ドリルロール」

むぐっ……落ち着くんです。落ち着くんです、私。鈴さんがイライラしてる時に口調が荒くなるのは判ってた事なんですから

「とりあえず。帰るわ」

「泳がないんですか？」

帰ると言う鈴さんにそう尋ねると鈴さんは

「気分じゃない、」

取り付く島もない鈴さん、でも私も今抱えている思いは鈴さんと何も変わらない。折角デートだと思っていたのにそんな事で楽しみを奪われて、納得できるか？と言われて納得できる訳がない

(まあ今日の事で何か後で埋め合わせをしてもらえば良いですね)

取り合えずこのままここに残っていても何の益もない。IS学園に戻ろうと思いついた瞬間

『では！ 本日のメインイベント！ 水上ペアタッグ障害物レースは午後1時から開始致します！ 参加希望の方は12時までフロントへとお届けください』

見世物になる気はないですし、早く帰りましょう。荷物に手を伸ばした所で

『優勝賞品はなんと沖縄5泊6日の旅をペアでご招待!』

優勝賞品を聞いた瞬間。私は同じく帰ろうとしていた鈴さんの方を見ました。すると同じ様に鈴さんを私を見ていて

「セシリアー!」

「鈴さん!」

「目指せ優勝!!」

私と鈴さんがガシつと手を組んだ瞬間。別のフロアでは水着に着替えなくても遊べる、アトラクションを回っていた龍也と簪もその放送を聞いていた

「あ、のね? お父様とお母様の結婚記念日が近くてね? このレースの景品をプレゼントしたい」

「判った。じゃあ参加しよう」

ウォーターワールドに遊びに来ていた。簪と龍也も参加すべくフロントに向かって歩き出していた……

「さあ! 第1回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レースを開催します!」

司会の人元気が良くジャンプするのを見ながら隣の龍也君を見る。水上レースなのに龍也君は

「なんだ?」

「ううん、何でもない」

黒のズボンにシャツにジャケット。そして何時ものロングコートのまま。着替えなくて良いの? と聞いたら

『濡れないから大丈夫』

と断言されてしまったが、大丈夫なんだろうか?

「さあなんと参加者の1組はカップルでの参加です。皆さん拍手!」

え? 私。周囲の視線が集中する、何となく気恥ずかしくなり隠れようとする

「失礼」

「え? あ、はい。なんですか?」

「簪が気を悪くする、発言を撤回して欲しい」

龍也君が淡々と言うと司会の人がいまませんと私に謝ってくれる
中

「なあ!? 龍也! それに簪!? あんたら何してるのよ!」

一番奥だから気付かなかったけど、鈴さんとセシリアさんの姿がある

「うむ、簪の両親の結婚記念日が近いらしくてな。賞品をプレゼント
したいらしいのだよ」

「ふーん。で、なんであんな私服なのよ? 濡れるわよ?」

「問題ない」

全くマイペースそのものの龍也君を見ると、司会の人
の説明が始まる

「では再度ルールの説明です! この50×50メートルの巨大プー
ル! その中央の島へと渡り、フラッグをとったペアが優勝です」

司会の人
のルール説明を聞きながらコースを見る

(近道とかは出来ないようになってるし。結構色々と考えられてる
みたいだね)

確かに普通の一般人にはクリアは難しいだろう。そう普通の一般
人ならば。運動が苦手とは言え私もちゃんとした代表候補生だ、普通
の女性に負けるほど運動音痴ではないのだが

(鈴さんが要注意かな?)

切れると獣同然の運動能力を發揮する鈴さんだけは警戒しないと

「さあ! いよいよレースの開始です! 位置についてよーい!」

ぱあんと乾いた競技用のピストル音が聞こえたと思った瞬間

「ふえ?」

私の身体は宙に浮いていた。ふと足元を見ると龍也君の足が私の
足を払っている

「行くぞ」

「え、ええ!」

床に叩きつけられる前に龍也君の両腕が私を抱き上げると同時に
走り出す

(お、お姫様抱っ!?)

抱き上げられている事に驚いている中

「よっ」

「えええ!」

両脇から出された足払いを軽い跳躍で回避しスピードを落さず走り始める

「くっ!? やっぱやりやがったわね! チート!!」

「なんで人一人抱えてそのスピードで走れるんですか!」

妨害ペアに苦戦している鈴さんとセシリアさんの声に

「さあね!」

ロープで繋がれた島に飛び乗り、1つ飛ばしで飛んで行く

「こ、これは凄い!? パートナーを抱えたまま飛んで行きます。えーと高校生らしいですが、なんとと言う運動神経なのでしょう!」

龍也君の動きに興奮したのか司会の人が叫ぶ中、ちらりと後ろを見ると

「セシリアアツ!! いけえツ!!」

「えええ!」

鈴さんがセシリアさんの足を掴んでこっちにほり投げってくる

「嘘オ!? 龍也君! 後ろからセシリアさんが飛んできてる!!」

「ん?」 「こうなったらやけですわ!!」 「ぐおっ!」

投げられて飛んで来ていたセシリアさんが空中で姿勢を立て直し、龍也君の背中に蹴りを叩き込んだ。突然の背後からの強襲に龍也君が姿勢を崩す

「わわ!」

龍也君が態勢を崩した事で腕に抱かれていた私が投げ出される

「よし! 今のうち!」

「無茶しますわね! 全く!!」

今の内といって龍也君を追い抜いて行こうとした鈴さんとセシリアさんだったが、私は私で問題があった

(お、落ちる!?)

このままでは水に落ちてしまつてスタート位置に戻されてしまう、

なんとかコースに着地しないと！ そう思い足を伸ばそうとした時
「心配ない」

手を付いてそれを軸に半回転して腕の力だけで飛び上がった龍也君は私を片手で拾い上げて、2人の追走を始める、だけどかなり距離が離されてしまった

「だ、大丈夫!？」

「問題ない」

結構凄い勢いで蹴られてたと思うけど？ 大丈夫なのかな？ 私
がそんな事を考えていると、セシリアさんが

「ぶべっ!？」

鈴さんに顔を踏まれて、乙女らしからぬ奇声を発し。鈴さんは身軽さを生かしてフラッグを取り、セシリアさんは対峙していた身体の大
きい女性2人と一緒にプールの中に落ちて行った

(あ、と、取れなかった)

優勝賞品が取れなかったことに落胆していると

ドッパーンツ!!!

天井に届くような水の柱が立ち、そこからISを展開したセシリア
さんが姿を見せた

「よ、よくも！ 乙女の顔を踏んでくれましたね!! 鈴さんツ!!!」

「はっ！ やろうつての？ 甲龍!!!」

それと戦う為にISを展開する鈴さん

(ど、どうしよう!？ 学園の外でISを展開したら駄目なのにな!?)

私のISはロッカーだし、どうしようと思っていると

「な、な、なあ!？ 2人はまさかIS学園の生徒なのでしょうか!？ こ
こで2機のISを見れるとは思いません……ってあぶない!!」

2人のISの武装の流れ弾に当たりかけた司会の人がかつちに逃
げてくる。それを見た龍也君は

「好都合だ」

あんまり見たことのない悪い笑みを浮かべ、そう呟く

「え?」

龍也君の言葉の意味が判らず首を傾げる。2人が暴れてるのが好

都合？ どういうこと？

「あの2人、止めたら私達にも賞品下さい」

「え？」

「ですから、あの馬鹿2人を止めるので。賞品を下さい」

につこりと笑いながら言う龍也君に司会の人

「あげる！ 止めてくれたらあげる!!!」

慌てて叫ぶ司会の人に頷き龍也君はスーっと大きく息を吸い込んだ

(あつ、耳塞がないと)

前に見たことのある仕草だったでの慌てて耳を塞ぐ。前にはやてさん達が喧嘩してる時にそれを止める為の

「いい加減にしろ!!! 馬鹿どもがッ!!!」

プールに響き渡る怒声。耳を塞いでいたけど近距離だから耳がキーンとしてる、司会の人に至っては

「あ、ああ？」

前後不左右になりふらふらしてる。龍也君は待機状態のISを取り出すとすぐにISを展開して宙に舞い上がった。それと同時に観客席からは

「お、おい!? 男がISを使ってるぞ!?」

「あ、あの顔、あの髪！ 2人目の男性操縦者の子だ!?」

「ほ、本当だ!? 何でこんな所に!」

観客席がざわめく中。最初にISを持ち出した鈴さんとセシリアさんは

「あ、あははは……」

怯え100%の顔をしてる。龍也君がどんな顔をしてるのか私の位置からじゃ見えないけど、あの顔を見れば怒っているのが判る

「少し……頭を冷やして来い！ たわけっ!!!」

ゴン×2

強烈な打撃音と共に鈴さんとセシリアさんが水柱をあげてプールに沈んだ

「はい、完了です。じゃあ簪に賞品を渡してあげてください」

「え、あ、はい」

突然の事が理解出来ないで居る、司会の人にそう言うと龍也君は私を見て

「なんか騒がしくなりそうだから、先に帰る」

「あ、う、うん。じゃあ学園の寮で」

まだ周囲の人間が硬直してるから良いけど、再起動されると言うさ
いと言うのは判る、だからまた後でと言って龍也君はそのままISを
展開したまま、外に通じる大窓から出て行った……

夕方

「何か楽しそうですね。龍也君とのデートは上手く行ったんですか？」

イルカのぬいぐるみを抱えている簪にそう言うと、簪は

「で、デートじゃないよ!」

一緒に出かけたのだからデートで通じると思うのだが、本人がデートじゃないと言っているので深く突っ込まない事にしよう

「色々と回って楽しかった。でも最後に鈴さんとセシリアさんが」

「あの2人がどうしました?」

「ISを展開しちゃって」

「なるほど龍也君に怒られたんですね」

疲労困憊と言う感じで帰ってきた鈴とセシリアは今、生徒指導室に連れて行かれた。多分そこでもまた怒られているのだろうと思っ
ていると

「その手の包みは?」

「これね。沖繩5泊6日の旅のチケット。お父様とお母様に贈るの
♪」

そう笑う簪に

「それは良いですね。きっと喜びますよ」

「うん♪」

機嫌よく笑う簪を見て

(今日は楽しかったのですね。良かったです)

友人が楽しそうにしているのは嬉しいんですけど

(何か釈然としない物が……)

友人としては喜ぶべき事なのに、何故か釈然としないもやもやを感じながら、私は布団に潜り込み目を閉じた……

エリスがベッドに潜り込んだ頃、鈴とセシリアはと言うと、生徒指導室で千冬によってたつぷり怒られた挙句。千冬の監視下で反省文を書かされていた

「民間施設でISの展開？ お前は馬鹿なのか？」

くつくつと笑いながら言う、化け猫が

「あんたが！ 一夏を搔つ攫うからいけないのよ!!」

「何を言っているんだ？ 弟は姉の物だ、それを奪おうとしているのは貴様だろうか？」

私がそう言うのと化け猫はゆらりと立ち上がりながら

「やっぱあんたは邪魔。あたしが一夏を物にするために消えてもらうわ」

ISは展開しなかったが、どこかから取り出したナイフを2本構える化け猫に

「上等だ。お前は目障りだったんだ。風・鈴音」

手持ちの武器は無いので拳を構える

「あ、あの織斑先生も鈴さんも落ち着いて……」

オルコットが止めに入るよりも早く。私と化け猫は

「死ね！ ブラコン！」

「それはこっちの台詞だ、化け猫!!」

「え、まって!? 私を巻き込まないでええええ!!」

オルコットを巻き込んだでの死合を始めた。

なおこの死合は騒ぎを聞いて、駆け込んできたツバキさんのSTO Pが入るまで続

き、私と化け猫はツバキさんに頭を木刀で強打され、ダブルKOと

なつた……

ちなみにオルコットは私と化け猫の最初の一撃がクリティカルH
ITし、この日目を覚ます事は無かった……

第60話に続く

第60話

第60話

「生きてるか？ 弥生」

食堂の机に突っ伏している弥生にそう声をかけると

「逝ける、逝ける」

どこか遠い世界を見ているような虚ろな視線でそう返事を返す弥生

「字が違う気がしますわ」

セシリアの言葉に思わず頷く。さっきまで龍也主導の自主錬に参加していたのだが結果は

「……死ぬ」

「ラウラ。目が死んでる」

「どうやったらあの化け物に一矢報いることが出来るのかな？」

「だよね。どうやったら8方向からの同時攻撃を避けられるんだろう？」

いつもの如くボコボコに叩きのめされた。特に何度も立ち上がり攻撃しようとしていた弥生のダメージが深刻だ

「はぁー取りあえずさあ。お茶でも飲もうよ……」

疲れたように言うシャルロットに頷き

「弥生。何がほしい？」

「……メロンソーダ」

動く気力のない弥生のリクエストを聞いてから、私は食堂のドリンクサーバーに向かった

「でさー正直聞くけど。一夏ってどこがいいの？」

ようやく復活した弥生がメロンソーダを飲みながら尋ねてくる

「はいっ？」

「だからさー箒も、セシリアとかもなんで一夏が良いのかなーってさ？ 気になるじゃない」

女子が集まれば恋話と決まっているしとか言い始める弥生に

「そういうお前は？」

「あたし？ あたしは断然年上、包容力がある人がいいかな。それで強ければなおよし」

即答する弥生。私を感じているような恥じらいはないようだ、だがこのままでは私にも回ってくるかと判断し立ち上がろうとすると、鈴が「逃亡は認めない。座れ」

「どこから取り出した、そのナイフ」

突きつけられたナイフに溜息を吐きながら、椅子に座りなおし強制的に恋話談話に参加させられることになった

セシリアの場合

「とうわけでもまずはセシリア。あんたから見て一夏の良い所は」

「拒否権は？」

「ない」

魔王の笑みで言う鈴さんに溜息を吐きながら

「目ですかね？」

「目？ あんた馬鹿？」

「失礼ですわね。あの強い意志の光を持つ目は好感が持てますわ」

初めての模擬戦の時のことを思い出しながら言うと

「さてこれについて賛同できるのは……ラウラだけ？」

手を上げたのはラウラさんで、ラウラさんは

「戦闘時に限りだが、目標を決めた一夏の目は力強いと思う」

「あーなんか判る。前だけ見てるあの感じの目は凄く良い。写真も撮ったし」

「待ちなさい。いつ写真を撮ったのシャルロット？」

「ラファールをちよつとね？」

なんか違法行為をしているような気がします……

「チェンジ」

「いや」

「2」

「OK。交換」

鈴さんとシャルロットさんが何かの写真を交換してるのが見えま
すけど……突っ込まない方がいいですね。主に私の身の安全の為に
「じゃあ、次は箒さんですわね」

箒の場合

「じゃあ、次は箒さんですわね」

あつさりと自分の番が回ってきた。私は思わず眉をしかめてから
「幼馴染だし、気がついたらつてやつだな」

「あ、それあたし判る。なんか一緒に遊んでたら自然つてやつよね」
うんうんと鈴と頷き会っている

「なんか別にありそうですね。例えば……いじめとか？」

「うっ?!?!」

クリスの指摘に鈴と一緒に呻くと

「よくあるパターンだね」

「一夏の正義感ならありえるありえる」

微笑ましい物を見るような目で私と鈴を見る視線に耐え切れず

「じゃあ、次！ シャルロット!!」

このままだとさらに自爆しかねないのでシャルロットに回した
……そして回すんじゃないかと後悔した

傍観者簪さんの場合

「僕が一夏が好きなの理由か……簡単だよ」

シャルロットさんがくすくす笑い始める。それに伴い空気がどん
よりと重くなる

(私この空気苦手)

龍也君に訓練をつけて貰い、その後箒さん達と食堂に来たのが全て
の間違いだったのかもしれない

「一夏はねえ、僕に幸せになる権利があるって言うってくれたんだあ

……だから僕は一夏が好き。そして一夏が欲しい、何をしてもね。うふふふ」

くすくすと怖い笑みで笑い続けるシャルロットさんの顔が物凄く怖い。居心地が悪く隣のエリスに

(エリス、凄く怖い)

(私もですよ。この空気は心臓に悪い上に恐ろしいです)

出来ることならこの場から逃げ出したいが、今ここで動くのは何か不味い気がするので動くわけには行かない。じつと椅子に座りシャルロットさんの話を聞くしかない

「だからねえ……一夏が欲しいんだよ？ 判るかな？ かな？」

くすくすと笑いながら、シャルロットさんは怖い笑みを浮かべたまま鈴さんを見て

「鈴は判るんじゃないかなあ？ 僕の言うことが」

そう尋ねられた鈴さんは

「判るわ。何をしても欲しいと思うのはあたしも同じ」

賛同してから鈴さんは

「自分の居場所だと、ここに居ても良いんだと思ってしまったらその居場所は絶対に欲しくなるものよね？」

「そう！ そうなんだよ……非合法なことをしても良い、この手を血に染めても良い。一夏が手に入るのなら……なんでもする」

空気が重くなる、殺す事も視野に入れて考えているシャルロットさんと鈴さんに背筋が凍る。

「まあ、僕の考えはここままで……鈴は何かある？」

そう尋ねられた鈴は肩を竦めて

「箒もセシリアもシャルロットもあたしの言いたかった事は言っちゃったし、何も言えないから……何か他の話わつと」

うーんと頭を抱えた鈴さんは手をポンツと叩いて

「じゃああたし達から見た、龍也の話でもしましょう。好みとかどうとかじゃなくて、純粹に龍也をどう思うか？ って話をしよう」

何か想像もしない方向に話が進んでいる気がする。かと言って席を立つ訳にも行かず、私は突然始まった龍也君の話を聞き始めた……

ヴィクトリアの場合

「龍也をどう思うか？ 結構難しい話だと思うが？」

私がそう言うのとセシリア達も

「確かに龍也さんほど何を考えているか判らない方はいませんよね？」

「色々と凄いつて言うのは判るがな」

ラウラが賛同してくれる。私からしても龍也は凄と思う、剣の扱いも槍の扱いも同年代とは思えないし、ISを使わせても難しいビットと本体の同時行動を難なくこなす。どこの国でも代表として迎え入れたい人材だろう

「あたしは結構凄いやつだと思ってるかな。あれだけ何にも出来ず負けたのは初めてだ」

弥生の言い分は判る。体術のレベルが高いからギリシャの代表候補にスカウトされたのに……そういう面では私以上にシヨックだろう……

「あー私も判る。私は弥生と違って自己流だけど龍也君の格闘のスキルの高さは判るよ」

うんうんと頷きあう、弥生とシエンを見ながら私は「だが、それ以上にあの剣の技能は素晴らしいとしか言いようがない」

片手剣、両手剣、細身剣、どの扱いを見ても素晴らしいとしか言いようがない。尊敬できるだけの剣の技を龍也は持っている

「西洋剣だけではなく、日本刀の扱いも素晴らしいぞ。一度だけ見せて貰ったが、あの居合い切り素晴らしかったと思う」

「あ、それは判ります、私も見ました。一息で2連続抜刀なんて初めて見ましたよ」

剣の話に乗ってきた。そう言えばエリスの機体は完全近接特化だったな

「ああ、本当に凄と思う。ビットを一息で3機両断されたのは初めてだ」

龍也の近接。特に剣の技は何をしても覚えたいものだ……うんうんと頷きあう筈とエリスを見ながら私はそんな事を考えていた

シエンの場合

なんかあつちはあつちでなんか話が固まってる？ 武装が剣で固められている面々は龍也君の剣の技について真剣に話し合っている

「私達って何の話をすればいいのかな？」

「まああいつらと同じ話題なら、徒手空拳か？」

弥生さんの言う事は判る。あの格闘の技をISで使えたのなら……格段に戦闘力が上がるというのは判る

「シエンっていま何分立ってれたっけ？」

「私？ 私は良いとこ1分30分くらいかな？」

私がそう言うのとラウラは

「私は2分だな、掴まれなければの話だな」

「掴まったら逃れる術が無いしなく投げられても受身が取れば何とかなるかもしれないけどな」

そう笑う弥生にラウラが

「三半規管を揺さぶられてどうやって受身を取れというんだ？」

「だから取れたらって言ってんだよ」

龍也君の投げ技は多種多様でしかも、投げ方が独特なので投げられた瞬間。一瞬何が何だが判らなくなる、そのせいで緑に受身すら取れない……かなり独特な投げ方だ

「まあそれもあるが……何においても一番厄介なのは」

ラウラがクリスから貰ったであろう、画像を私達に見せながら「この滑るような移動方法だ」

一歩で7歩以上進む、あの移動方法。あれを攻略しない事には勝機は無いだろう

「む？ シエン、弥生ここを見てみる」

ラウラが再生していた画像を停止して、ある一箇所を指差す

「あれ？ なんかおかしくない？」

「ああ、何がとは判らないけど……なんかおかしい」
「どこが？」と言われると難しいが何かがおかしい。もしかしてこの違和感がああ龍也君の歩法の正体なのかもしれない
何度もその所を繰り返し再生して。その違和感を解明することに挑戦した……

「何をしてる。龍也」

瀕死の織斑一夏を肩に担いで歩いている龍也に偶然会い、思わずそう尋ねると

「うむ。浸透勁で打ち抜いたら気絶した。引きずっていたんだが周りの視線が痛いから担いでいる」

この男はずれているのだろうか？ ネクロが危険だの何だの言っていたが正直よく判らない。ワタシから見ると天然という印象しか抱けない。

「う……うお？」

肩の上で織斑一夏が呻きながら意識を取り戻す
「お、起きたか」

龍也が下ろしながらそう尋ねると織斑一夏は
「生きてる！ 俺生きてる!!」

なんか生きてる事に歓喜していた。その光景を見たワタシは
(こいつどんな訓練をこいつらにさせてるんだ?)

基本的にIS学園の地下で整備をしているワタシはその訓練光景を一度見て見たほうが良いと思った

「あーえーと、ユウリ・クロガネさん？ でしたっけ？」

ワタシを見てそう尋ねてくる織斑一夏。年上だと知っているから敬語と言うのは判るが

「ユウリで構わん。ワタシも一夏と呼ぶ」

「あ、ああ。よろしくユウリ」

にかつと笑う一夏、別に馴れ合う気はないが……別に疎遠になる必

要も無い。ある程度の交友は必要だろう

「一夏と夕食に行くのだが、一緒にどうだ」

龍也がその声を掛けて来るが、ワタシは手を振って

「まだやる事があるんでな。悪いが断らせて貰う」

ワタシはそう返事を返し……龍也と一夏に背を向けて歩き出した

……

「なあ龍也。あれどうなってるんだ？」

「さあ？」

龍也と食堂に行くとき、箒達が頭を抱えている。俺が気絶している間にいったい何が？ 気になりはするが、聞かない方が良い様な気がする。俺がそんな事を考えていると

「兄ちゃん♪」

龍也の背中に飛び乗るはやてさんと目が合う

「おー一夏かあ。今日も絞られた見たいやな？」

にやにやと笑うはやてさんを見て

「なのはさんとフェイトさんは？」

何時もいる2人の姿が無くてそう尋ねるとはやてさんは

「んーISSの整備で忙しくてなー。部屋で食べるって言うてるわ」

そうなのか、やっぱり専用機持だからそういうのもやる方が良いのかな？ 俺はそんな事を考えながら龍也とはやてさんと一緒に、呻いている箒達の方に向かい

「何やってるんだ？」

「!? 一夏？ もう訓練は終わったのか？」

俺に気づいてそう尋ねてくる箒に

「もうって、もう6時だぞ？ 2時間もずっと何を考えてたんだ？」

ふーんと返事を返しながら、椅子に座りそのままいつもの様に箒達と一緒に談話をしながら、食事してから自室に戻った

「まだまだ全然だよなあ」

今日も龍也に訓練をして貰ったが、やはりと言うか何時も通りと言うか……龍也に一撃すら入れることが出来ずISでも組み手でも負けた。

「あー同年代の筈なんだけどなー」

がりがりと頭を搔きながらベッドから立ち上がる。別に自分が強いだなんて思っていないがここまで負け続けると、さすがに自信を失ってくる

「とりあえず今日はもう寝よう」

簡単な話だ、龍也の方が俺よりもっと頑張ってきた。だから力の差が明確に出てる、積んできた修練の差とでも言えるだろう

(とりあえず、走る距離を増やして、筋トレももうちよつと頑張ろう) もっと強くなりたい……誰かを守れるように、悔しいが今の俺ではきつと何も守れない。だからもっと強くなりたい、そんな事を考えながら歯を磨きタオルで口を拭い、ふと顔を上げて

「ッ?!?!」

声にならない悲鳴を上げて思わずその場に尻餅をついた。鏡に映っていたのは前に夢に見た、憎悪と殺意に支配された俺の顔だった……

「え、あ? う、嘘だろ?」

訳が判らない恐怖を感じながら顔を触るが、何時も通りのはずだ……あんな顔をしてるはずが無い。ゆっくりと身体を起こし鏡を見る、そこには何時も通りの自分の顔があった……

「当たり前だよな……」

鏡を見たら違う自分がいるなんてあり得ない。きつと疲れていたんだろう

「今日は結構頑張ったし、疲れてたんだな、きつと」

自分に言い聞かせるようにそう呟いて、ベッドに潜り込んだ……

一夏がベッドに潜り込み目を閉じた頃、洗面所の鏡には先ほどと同じく一夏の顔が映っていた。そこにもう一夏がないというのに

……ベッドで眠る一夏を見た偶像の一夏の顔は歪み、憎悪と殺意に満ちた狂人とも言える笑みを浮かべながら

『そうだ……もつとだ、もつと力を望め。かつての俺のように』

何の光も宿していないその双眸で眠る一夏を見つめながら呟く偶像は

『そうすれば、俺は表に出れる』

偶像には力が無かった。いや……力はあった、ただ一夏には雪の少女の加護があり、そして白が彼の心を守っていた。ゆえに狂気に落ちた偶像はまだ一夏の心に触れることが出来なかった……

偶像が一夏に触れるには

もつと一夏が絶望しなければならなかった

もつと一夏が己の無力さを知らなければならなかった

そしてもつと力を渴望しなければならなかった

そうかつての己のように……

『くっくっくっ……』

偶像は歪んだ笑みを浮かべ溶けるように鏡の中にと姿を消した

……

第61話に続く

第61話

第61話

キュイーンツ!!! バチバチツ!!!

マシンアームが忙しく動いて、新造の装甲とブースターが徐々に組み上げられていくのを見ながら、今のアマノミカゲの状態を確認する

(なんとか、フレームの強化は上手く行ったか)

打鉄のフレームを改造して何とか、アマノミカゲの加速力を生かせるだけの耐久力を与える事が出来たが、完成には程遠い。

(装甲もまだ……なんとか戦闘に使えるだけのその場のぎか)

新型装甲とフレーム、ブースターが完成するまでのその場のぎとして、粒子分解していた旧型装甲を組み付けはしたが……

(これでネクロと戦えるとは思えんな)

ネルヴィオによって破壊されたパーツのデータがごっそり抜け落ちていた。攻撃と同時にISにハッキングされた……今のアマノミカゲは互換性の無いパーツを無理に装備している状態だ

(やはりエラーか)

手元の画面には胸部と脚部のパーツが適合していないとエラーが表示されている。今まで何回も交換してきたパーツと互換性が無い

その事に納得いかないものを感じながらも

(文句を言っても仕方ないか)

パーツの新造をする羽目になったが、あの絶望的な状況で生き残れたと言うことを考えると仕方ない。必要経費として考えよう

(とりあえずはエラー表示では困るし、プログラムを組みなおすか)

ワタシはそんな事を考えながら制御プログラムの組み直しを始めた……

「簪ちゃん、その膝の上のぬいぐるみは何?」

「……買って貰った(ぽッ)」

簪ちゃんとお茶をしようと思つて簪ちゃんの部屋に行く。簪ちゃんは大きなイルカのぬいぐるみを大事そうに抱えていた……頬を赤らめながら言う簪ちゃんの姿に

(龍也君かな?)

前に遊びに行くとか行つてたし、その時の物かなと思ひながら。

(なんか複雑)

今までロボットとかにしか興味の無かつた簪ちゃんが、女の子らしい物を持つているのは嬉しいが……姉としては何か複雑だつた……まあ私がどうこう言う問題じゃないか……買つてきたクリーム餡蜜やシュークリームを食べながらのんびりと話をしていると

「そう言えばお姉ちゃん」

「何?」

あら? この龍也君から分けてもらった茶葉美味しいわね。どこで売つてるのかしら? 紅茶を飲みながら尋ねると

「ユウリさんつてお姉ちゃんの婚約者なんだよね?」

「ばふう!」

「き、汚いですよ! 楯無!」

簪ちゃんのいきなりの言葉に思わず、紅茶を噴出す。いろんな人に聞かれたがまさか実の妹に言われるのがこんなに動揺するとは思つても見なかつた

「なんでそんなに動揺してるの?」

きよとんと首を傾げる簪ちゃん、しかしここで婚約者じゃないとは言えないので

「そ、そうなるかな?」

口をハンカチで拭いながら頷くと、簪ちゃんは

「デートとかしたの?」

ドゴンッ!

思わず机に思いっきり頭を叩きつける

「危ない」

「お、お姉ちゃんどうしたの!?!」

浮かび上がったカップを上手くキャッチするエリスちゃんと、私に驚いている簪ちゃんに

「ちよつと驚いただけ」

アニメとかにしか興味の無かった、簪ちゃんからまさかこんな事を聞かれるとは思っても見なかった……

「まあ……色々と忙しくて遊びにとかは行っていないかな？」

頬を掻きながら言う簪ちゃんとエリスちゃんは

「じゃあこれあげる」

「ええ、どうぞ」

にこりと笑いながら差し出された物を見る

『デートMAP 最新版 夏号』

「ごふうー」

予想外にもほどがあるアイテムを前に再び紅茶を噴出した……知らなかった、簪ちゃんとエリスちゃんがこんなにも女子的感性を持っているなんて……

私は軽いショックを覚えながら渡された雑誌を手にも自室にと戻った。

「なんかフラフラしてたね？」

「ええ。そうですね」

カップとかを片付けながらエリスが簪に

「素晴らしい口撃だったと思いますよ？」

いつもからかわれているエリスがそう笑いながら、簪に言う

「？」

訳が判らない言う表情で首を傾げる簪を見たエリスは

（素だったんですか。末恐ろしい姉妹ですね）

長い付き合いのはずの友人がド天然である事を始めた知った、エリスだった……

いつものようにアマノミカゲの調整の合間に教員用のISの調整をしていると

「……おはよう」

「なんだ？ いつものハイテンションはどこに行っちゃった？」

明らかに寝不足な様子の楯無にそう尋ねると

「これー！」

バツと差し出されたのは

『デートMAP 最新版 夏号』

「なんだこれは？」

突然こんなものを差し出して何をしろというんだ？ ワタシが首を傾げていると

「出掛けましょう、乗ってる所に」

「……急にどうした？」

訳が判らない展開に首を傾げるユウリ。彼は知らなかったが、昨晚楯無は母親に色々とからかわれた。例えば

まだデートもしてないの？

いつになったらユウリ君を連れてきてくれるのかな？

簪ちゃんはデートしてるのに……

しかも結婚祝いの5泊6日の旅行券までくれたのよ？

簪ちゃんが気に入っている、八神龍也君にいたってはお菓子まで送ってくれてね？

楯無は母に精神的に来る小言を永遠と言われ、ついには

「私だってデートくらい出来るもん！」

「じゃあ、明日デートして写真を送ってね？ 楽しみに待ってるから」

見事に嵌められたのだった……流石は楯無の母、自分の娘の焚き付け方を熟知していた……

「ずっとこんな所にいるのはどうかと思うわ。だから出掛けましょう」

「面倒だ」

まだやらなければならぬことがあるのでそう言う。ちょうど教員用のISのスクランが終わったらしく、楯無から背を向けてスクラン結果を見ていると

「そう……それじゃあ仕方ないわね」

妙に殺気立った声がし振り返ったワタシが見たのは、振り下ろされるISのパーツだった

「は？……がつ!？」

呆気に取られた瞬間、ワタシは冷たい金属の衝撃に意識を弾き飛ばされた

「……やっちゃった」

目を回しているユウリを見下ろしながら、手の中のISのパーツを手放す

「殺人現場?！」

「!？」

呆れたと言う感じの声に振り返るとツバキさんが頭を抑えていた

「あ、あのですね!?! これは」

「櫛奈に聞いたわよ、からかいすぎたから暴走してるかもって。案の定暴走したみたいね」

溜息を吐くツバキさんに

「どうしましょう?！」

そう尋ねるとツバキさんはにこりと笑い

「今のうちに連れて行きなさい。起きてたら絶対抵抗するから」

予想外だったが、それはいいアイデアだと思い、私は気絶しているユウリを連れてIS学園を後にした

「……怒ってる?！」

「怒ってないように見えるか?！」

カフェテリアで事情を説明してから、ユウリにそう尋ねると。思いつきり睨まれたこれ絶対怒ってる

「はあ……まあ良い。行くぞ」

「え?！」

帰ると言い出すと思っていたのに……

「良いの?！」

「ここまで来ておいて、何もせずに帰るのはおかしいだろ? それに

偶には気分転換も必要だ」

私を見ずに言うユウリに頷き、2人で街中を歩き始めた

「ユウリってゲームセンターとか行った事ある？」

「無い、そして興味も無い」

となるとゲームセンターは無しか……んーじゃあ

「ユウリって何が好き？」

「……特に無い」

どうしましょう？ 私かユウリの好きな所に行こうと思ってたんだけど

「じゃあ……」そう言えば、ノートPCが欲しいとか言ってたか？」……え？ うん」

私が頷くとユウリはそうかと頷き

「じゃあパーツを買いに行くか？」

パーツ？ 何をする気なんだろう？ 私が首を傾げていると

「買うくらいならワタシが作ってやる」

PCを作ると言う発想は無かった……

「じゃあ、お願いしても良い？」

「構わん」

言葉短く言うユウリに頷き、私達はPCのパーツを扱っている店に向かった

ノートPC用のパーツを色々買い込み、IS学園に送ってもらおう手続きを取ってから店を出ると

「……どれくらいで出来るの？」

「1週間見ていて貰えれば出来る」

ISと比べればノートPCなど楽な物だしな

「で？ この後どうする？」

「特に無いわ」

「無計画だな」

考えるより行動、こんなのが頭首で大丈夫か？

「今失礼なこと考えたでしょ？」

「さあな……」

さてどうするかと考えるが特に何も無い

「帰るか？」

「それはいや」

確かに遊びに来て1時間で帰るのはおかしいか……少し考えてから

「ではゲームセンターとやらに行つて見るか？」

「そうね、何事も経験つて言うしね」

今までやった事も無いことをやるのもいい経験だろう、ワタシはそんなことを考えながら楯無とゲームセンターに向かった……

　　その日の夜

「どうだった？」

「特に何も無い」

研究室に戻るなりそう尋ねてくるツバキにそう返事を返す、ゲームセンターに行つて見たものの大して面白いものは無く。

記念と言うことでプリクラとやらを撮った程度だ

「ふーん、やっぱ互いにストイック系同士だと駄目なのね」

「何が言いたい？」

「べつにー」

　　にやにやと笑うツバキに

「まあ良い。それでパッケージの方は？」

「まだ……手伝ってくれる？」

「判った、データを回せ」

とりあえずはこういったことも手伝うと言う契約だしな……ワタシは回された新型パッケージの調整を始めたのだが……

(なぜこうも落ち着かん)

街中で見た日の光の中の楯無の姿とあいつの姿がダブリ、どうしても落ち着かない。

(楯無はあいつじゃないんだ……セリナは死んだんだ)

セリナと楯無を重ねて見てしまった自分に言いようのない腹立ちを感じて、作業がどうしても進まなかった……

「首尾はどうだ？」

ベエルゼ様の言葉に私は

「上手くいっているという段階ですね」

パンデモニウムの同型機「ヨツンヘイム」の改修は6割方形になってきている

「強襲用をよくここまで組み替えたな。ベリト」

「お褒めに預かり光栄でございます」

「お前とベルフェゴールが居てくれて良かった」

私もベルフェゴールも元々はベエルゼ様に仕えた者。あの方が居るのならばそこにはせ参じるのが配下としての勤めだ

「それでISとやらの分析は？」

「はい、今現在は、シルバリオ・ゴスペル。そしてサイレントゼフィルスの2機を解析しております、近い内に私達の技術で再現が可能かと」

「そうか……では解析と改修の方は全て任せるぞ、私にはやらねばならんことがあるからな」

その言葉に私は思わず

「何か計画を立てているのですか？」

「気になるか？」

「失礼いたしました。今の言葉忘れてください」

配下が王に質問するなど許されることではない。気を損ねる前に謝らなければ

「ふっふっ……気にせんさ。まあ待っている。いずれ教える」

背を向けて去っていくベエルゼ様を見ていると

「ヒャーハハハッ!!! 馬鹿が」

「耳障りな笑い声をやめろ。ベルフェ」

くつくつと笑うベルフェの甲冑は真紅に染まっている

「ずいぶんとお楽しみだったようだな?」

「くつくつ……俺はてめえと違って殺戮本能を押さえるなんて真似はしねえ!! 殺したいときに殺し・戦いてえときに戦う!」

ネクロの中でとりわけ殺戮本能が高いベルフェらしいと笑いながら

「まあ良い。ずいぶんと魔力が満ちてきてるな? LV4に戻るのも近いな?」

「ヒャーハハツ!!! おうよ! やつと俺様の本来の姿に戻れるぜえ」

愉しそうに笑うベルフェに書類を投げつける

「んあ? 何だあこりやあ?」

「処罰リストだ、近い内に処理してくれ」

私達を嗅ぎ回っている不快なネズミのリストを拾い上げたベルフェは

「そいつは良い!!」

殺しと聞けばすぐに飛んでいくベルフェの背中を見ながら

「全くあいつは……」

長いことパートナーとして活動していたから、ベルフェの性格は理解しているつもりだったが……あそこまで単純だったか?

と苦笑しながらヨツンヘイムの改修作業を再開した……

「ん?」

闇の徒が徐々にその力を高めている頃。龍也の元に一通のメールが届いていた

「なるほど……中々頭の切れるやつだ」

手元にあるUSBメモリを中継に使用するという。アイデアに正直驚かされながら届いたメールを確認する

「……どうもきな臭くなってきたか」

私では入手できない情報が送られてきた、内容の大半は「モンドグロツソ使用のISデータの消失」「各世代のISデータにコピーの形跡」「連絡がつかない過去の代表達のリスト」そしてこれらの情報と引き換えに顔合わせをしたいと持ちかけてきた

「……こっちの都合はお構いなしか」

『明日の20時、街外れのバーで待っています。 神王陛下』

丁寧に地図まで添付されていた、メールを見てそう呟きながら、このメールの送り主のことを考える

「神王の名を知るということはネクロ関係者……いや離脱者か」

ネクロの行いに疑問を感じ離れた人間……どこの組織のものかはわからないが。その勇氣には正直感心する

ネクロの監視を掻い潜りこれだけの情報を集めた……ネクロの力を知る私からすれば信じられないとしか言いようが無い

「ならば乗ってやろうじゃないか」

送り主は命を懸けた、ならばそれに答えてやる義務がある……私はそんな事を考えながら送られてきたデータに目を通し始めた……

第62話に続く

第62話

第62話

その日私は頭を抱えていた。その理由は至ってシンプルで「なあ？ 何時までそうしてるつもりだ？」

珍しく3人固まり、私が使う仕切り板を使って隠れているはやて達に声を掛ける。すると仕切り板からスケッチブックが顔を出し

『どうして遊んでくれないんや』

『私たちだけ仕事って不公平』

『龍也はロリコンなの？』

最後のフェイトのスケッチブックは直ぐに引っ込み、そして仕切り板の中から

「ドあほッ!!」

はやての怒声とごっんという鈍い音がした後、再びスケッチブックが差し出され

『少しは構ってください』

そのスケッチブックを見て、酷い頭痛を覚えながら

「子供か!？」

余りに発想が幼稚すぎる。こんなのはリンとかがやることだろうと思いつながら言う

『『子供です!!!』』

もう何もいえない。変な所で子供っぽいはやて達に頭痛を感じながらも

(仕事をやらせてたのも事実出しなあ)

私はユウリから預かったUSBメモリの解析をジェルと交代でやり。はやて達は全国のIS研究施設や裏情報の収集を3人でやっていた。確かに負担は3人の方が遥かに上だ。ストライキを起こしたくなるのも無理は無い

(結局のところ私のせいなんだよな)

ハーティーンにも言われたが、やはり私は人の上に立つような人間

ではないと改めて実感する。

「じゃあ、遊びに行くか?」

仕切り板の中ではやて達が驚いている気配がする、それにガタガタと仕切り板が揺れている音もする

「本当?」

ひよこつと顔を出したはやてに頷きながら

「ああ、私は嘘はつかん。遊びに行きたいというのなら連れてってやる」

女尊男卑の世界だからはやて達を3人連れて歩くのは目立ってしまいかもしれんが……

(どうせ私の場合嫌でも目立つしな)

黒コート、銀髪、サングラス、どれをとっても目立つ。まあ別に着替える気もないし、はやて達が出てくるのを待つかと思ひ。ドアノブに手を伸ばすと

「兄ちゃん。まさかそのまま出掛ける気か!」

真つ先に仕切り板から出てきたはやてが驚いた様子で尋ねてくるので

「おかしいか?」

そう返事を返すとはやてだけではなく、なのはとフェイトも声をそろえ

「「おかしい」」

「むう……そんなにおかしいか?」

ミッドチルダでは黒ばつかだったので、普通の服のセンスと云うのがわからない。と言うか私の場合服など着れば良い程度の認識なので、おしゃれとかはまるで興味が無い。なのでおかしいと言われても何がおかしいのか判らない

「じゃあ私達を選ぶから着替えてなあ?」

「あんまり変なのは嫌だぞ」

私がそう言うとはやて達はごそごそと私のクローゼットをいじり始めた。服なんて着ればいいのに、どうしてそこまで拘るか私には理解できなかった……そして5分後私はなのは達が選んだ服にと着

替えた

「落ち着かない」

白のズボンにグレーのシャツに黒のジャケットにと着替えると、髪は首元で結ばれた。服など着れば良いという認識の私にはこれがどうなのか？　と言うのは全く判らなかつた。溜息を吐きながらコートに手を伸ばすと

「「没……へぶっ!」」

「大丈夫か？」

私のコートが重いのを知っていたはやて達は3人で持ったが、重さに耐え切れず床に膝を着いた。

「ほら、渡せ」

危ないからと良いながらコートに手を伸ばすが

「着ちやうから駄目や」

「そもそも夏場にコートはおかしいです」

「ジャケット着てるしコートは要らないよ」

3人がかりでコートを没収されてしまった。更にバインドを3重でかけられ着るのは不可能そうだ

「はいはい、判った諦めるよ。じゃあ外のゲートで待ってる」

「「はい」」

楽しそうに返事を返すはやて達と別れ、ISのゲートに向かうと

「む？　龍也か？」

「おはよう、ラウラ。お前も出掛けるのか？」

ゲートの近くではIS学園の制服姿のラウラが居た。ここに居ると言う事は出掛けるのだろうか

「1人で出掛けるのか？　クリスとかシャルロットは？」

大体どちらかと行動を共にしている事が多いので、そう尋ねるとラウラは

「クリスは好きな神話の本を探しにいくとかで、朝早くから居ない。シャルロットは一夏を探すと行っていたが、まだ来ないという事はまだ見つけられてないんだろうな。で？　龍也は？」

「うむ。はやて達が外に連れて行けとうるさいから出掛ける事にした

んだ」

そう言うとラウラは私の服装を見て

「黒いコートを着てないから違和感がある」

「私も感じてるよ。服など着れば良いと言うのに、おしやれをしろとうるさいんだ」

はあっと溜息を吐きながら言うとラウラはうんうんと頷きながら「判るぞ。その気持ち、シャルロットもクリスマスもおしやれをしろとうるさいんだ。服なんて着ればいいのにな」

「ああ、全くだ」

ふうとお互いに溜息を吐く。どうやらラウラも苦勞している様だ、しばらく2人で並んで待っている

「ラウラー！ ごめんねー!!」

シャルロットが謝りながら駆け寄ってくる。ラウラの前で立ち止まったシャルロットは

「いやーどこにも一夏がいなくてね。鈴を問い詰めたんだけど知らないって逆切れされてさ」

あはははと笑うシャルだが、その笑みはどことなく黒い。ラウラの隣に立つ私を見て

「あれ？ 龍也がラウ……いや、無いね。はやてと出掛けるの？」

「ああ、遊びに連れて行けとうるさいのですね」

肩を竦めながら言うとシャルロットは私の前に指を突きつけて

「あのね。女の子はちゃんと構ってあげないと駄目なんだよ？ 判る？」

若干怒っているようなシャルロットに

「ああ、それは何回も言われてるから判ってるよ」

それなら良いけど、と言うと黒い笑みで笑いながらぼそりと「あのブラコン。いつか殺す」と呟いた。どうやら一夏を独占してるのは織斑先生のようなだ。

「まあ今は良いや。じゃ、行こうラウラ」

「う、うむー」

シャルロットが浮かべていた黒い笑みがぱつと消え。いつもの愛

想の良い笑みを浮かべているが、どこか恐怖を感じるのかラウラの顔は若干引き攣っていた。シャルロットに半場引きずられるように歩いて行くラウラを無言で見送っていると

「お？ 兄ちゃんどうしたんや？ そんな神妙な顔して？」

私服に着替えて寮から出てきたはやて達にそう尋ねられ、私は「別になんでもない」

どうせ私達も街に出るんだし、どこかでラウラ達にも会うだろう。私はそんな事を考えはやて達と近くのバス停に向かって歩き出した

私はシャルロットと私の服を買いにきたのだが

（く、空気が重い……）

さつきは別に良いやと言っていたが、やはり不機嫌なようできつきから、普通の笑みと黒い笑みが交互に顔を出している。その笑みのせいで夏場だと言うのに、若干の寒気を感じていた

「じゃ、まずはここね」

シャルロットが立ち止まる、どうやら目的地に着いたようだ。顔を上げ店名を読む

「サード・サーフィス？ 変わった名前だな？」

私がそう呟くとシャルロットは手の中の雑誌を見ながら

「結構、人気のある店見たいだよ？ ほら女の子がいっぱいいるでしょ？」

そういわれ店内を覗き込むと確かに女子高生……ん？

「シャルロット。あれはヴィクトリアではないか？」

「あ、本当だ」

珍しく髪を結んだヴィクトリアが難しい顔で店内を歩いていた。きつと私の様に服を界に来たのだろうと思

「ヴィクトリア」

「!? ラウラ、それにシャルロット」

声を掛けられ驚いた様子で振り返った、ヴィクトリアに片手を上げて挨拶する。何はともあれ、私一人ではシャルロットは御せない、迷

惑だとは思いますがヴィクトリアにも道ず……こほん。一緒に買い物しよう

「何をしているんだ……いやここに居るといふ事は買い物か？」

「うん。ラウラの服を選びに来たんだよ。そう言うヴィクトリアも？」

人の良い笑みで尋ねられたヴィクトリアは

「ま。まあそんな所だな。私もあんまり私服は持ってないしな、そろそろ買い足しておこうと思ってな」

へーと良いながらシャルロットはにこりと微笑みながら、ヴィクトリアの手の中の服を見て

「それはヴィクトリアにはあんまり似合っていないね。良かったらヴィクトリアの服も見てあげようか？」

「いや、私は自分で」

ヴィクトリアが断ろうとすると、シャルロットはその言葉を遮り

「選んであげようか？」

「……いいいやな？ 私は自分で「選んであげようか？」……お願いします」

何を言っても無駄だと判断したヴィクトリア。その判断は正しい、私も同じようにうんと言うまでエンドレスでそう言われたしな

「じゃあ、行こうか？」

ヴィクトリアがうんと言った事に気を良くした、シャルロットが私とヴィクトリアの前に立ち歩き出す。私とヴィクトリアはシャルロットの後ろで

(何かすまないな。ヴィクトリア)

(いや、良い。捕まった時点で駄目だったのだろう)

はあと2人で溜息を吐いているとシャルロットが

「おーい、ラウラ。良いの見つけたからおいでよ」

店員と話しながら、私とヴィクトリアを呼び寄せるシャルロットに近寄ると

「ラウラはこっちの黒のワンピース、ヴィクトリアは白のミニスカートとかどう？」

にこにこ服を差し出してくるシャルロット。私は服のことなんて判らないのでとりあえず受け取るが、ヴィクトリアは

「な、何だこの長けの短いスカートは!? 私はこの嫌だぞ!」

確かにシャルロットの差し出したスカートは、長身のヴィクトリアが穿くには少々短いと私でも思ったが

「何も言わないで穿こうね? ヴィクトリア」

「だから、断ると「いいから黙って着ようね? ヴィクトリア」ツ……はい」

ヴィクトリアの抵抗もむなしく、ヴィクトリアはシャルロットに差し出された服を掴んで試着室にと入って行った……

結局のところ、私もヴィクトリアもシャルロットに捕まった以上。シャルロットの気が済むまで着せ替え人形になるのは自明の理だ。溜息を吐きながら2人で試着室に向かうと

「はあ……」

試着室の前で深く溜息を吐く銀髪の……と言うか龍也が居た。

「何をしている?」

「ん? なんだ、ラウラとヴィクトリアか。見て判らないかね?」

龍也は肩をすくめやれやれと言いたげな態度で、にやりと笑いながら

「晒し者になっているのだよ」

もう疲れたという態度の龍也の手には大量の紙袋。もしかしくても

「荷物持ちか?」

「まあそんな所だよ。3人分なので少々疲れたよ」

ふうつと溜息を吐く龍也には店内の女性の視線が集中している。龍也は長身だし目立つ髪色なので目立つなと言うのは難しいだろう

「龍也ーこれどうかな?」

試着室からフェイトが姿を見せる。黒の肩だしのワンピースを着こんで微笑みながら龍也に問いかける、龍也は

「髪の色とあっているんじゃないか?」

「うーん♪ じゃあこれ買っちゃおうかなー♪」

くるりと回転するフェイトはすぐ嬉しそうだ。それと同じタイミングでなのはやても姿を見せ

「これどうかなー兄ちゃん」

「これどうですか？ 龍也さん」

2人にそう尋ねられた龍也は溜息を吐きながら

「もう褒める言葉が思いつかん。自分達が気に入ったのなら買うと良い」

龍也はそう言うのとズボンのポケットから財布を取り出し、はやてに投げ渡しながら

「本当に悪いがもう褒め言葉など何一つ思いつかん。それにこれ以上はここにも居にくい、店の外で待つ」

そう言うのと龍也は大量の紙袋を抱えて店外へと歩き出した、私は龍也と入れ違いになりながらフェイトの隣の試着室にと入った……

なおその後も私とヴィクトリアはシャルロットの着せ替え人形状態で色々と服を着替える羽目となったのは言うまでもない……

あれは？ 私は思わず柱の影に身体を隠して少し離れたところにいる少年を見つめた。いつもの黒コートがないから印象が違うが、間違いなく龍也だ。如何してこんなところにと思っているかと

「何してるんだ、クリス」
「!？」

いつの間にか背後を取られていて驚きながら、とつさに抜き手を放つが

「やめろ」

パシンッと軽く弾かれてしまう。その事で我に返り

「ごめんなさい」

「いや、驚かしたのはごつちだ。悪かった」

と愛想よく笑う龍也の回りには色々な見せの買い物袋の数々が

「振り回されてたの？」

魔王とあだ名されている3人の事を頭に浮かべながら尋ねると、龍也は正解と言って笑った

「で？　そう言うクリスは面白い物かね？　ふむ。神話系かね？」

分厚い背表紙を見てそう尋ねてくる龍也。人のいい笑みを浮かべているがその洞察力と観察力は凄まじい、だがそれ以上に

「おかしいとは思わないのですか？」

「何が？」

わけが判らないという表情の龍也に

「こういう本は今の時代にはおかしなものじゃないですか？」

今のご時勢に神話や伝承と言うジャンルは余り見向きもされないジャンルだ。そんな本を好む私は、ドイツでは少し浮いていた。だが龍也は

「この世には眼には見えないものが多数ある。科学で判らない事もあ
る、世界にはまだ理解できない神秘が多数あると私は思うよ・だから
私もそう言う本は好きだな」

からからと笑う龍也だったが、途中でふむと頷き

「良かったら今度私の部屋に来るといい、色々な神話の本があるから
貸してやろう」

何も無いように言うが、同世代の男の子の部屋に良くというのは
色々と問題があるのではと一瞬思ったが

(そういうのは絶対じゃないか)

龍也の回りにいる魔王に龍也自身の鈍感具合を考えれば。そう
言った事にはならないはずと思い

「今度時間があつたら借りに行く事にする」

私がそう言うのと龍也はそうしてくれると助かる、せつかくの本だ見
ないのはもつたいたいと笑いながら

「では、はやて達がそろそろ店から出てくる頃だから戻る。いい本が
見つかるの良いな」

そう笑って歩いていく龍也を見ながら。行きつけの本屋のほうに
歩き出しながら

(本当に不思議な人だね)

同年代のはずなのに、不思議なほど大人びていてどこか遠くを見て
いてそれで居て……

(とても寂しそうな人……)

何がそんなに寂しいのか？ 何がそんなに哀しいのか？ 私にはわからない。そもそもこれは私の勘違いかもしれないし、誰にも言う気はない……でも何時か判る時が来るのならば

(相談くらいには乗ってあげようかな……色々とお世話になつてるしね)

私はそんな事を考えながら龍也から離れていった……

だがのちに私は知る事になる、私が感じていた龍也の悲しみも慟哭も、その理由も……だけど今の私はその事を知る事はなく、予感として感じていた……

「つ、疲れた……」

はやて達に振り回されるのはネクロと戦う以上に疲れた、途中でハンバーガーを食べて。今度は小物を買うのにつき合わされ、流石の私も荷物を持ちきれない段階になったとき。はやてが漸く休んで良いと言うので、近くの喫茶店「アットクルーズ」の席に腰掛けメニューを見ながら呟く

「あははは。ごめんな？」

「ちよつと振り回しすぎちゃった？」

苦笑しながらそう言ってくるはやてとなのはに

「構わん、久しぶりだから疲れただけだ。特に問題ない」

六課ではもつと酷いしな、それと比べれば何の問題も無い。例を挙げればチンク達とか(最低でも4人、最高で12人)うふふとか笑いながら私のあとをずっと尾行しているセツテとティアナと比べれば。今日はかなり楽と言うものだ、そんな話をしながら目ミューを決めて「すいませーん。注文良いですかー」

そう声を掛けてるとメイド服姿の店員が近づいてきた。あの店員どこかで見たことあるような気がするなあと考えていると

「えーと(注)文は……はっ!？」

私にそう尋ねてきたのは、髪にかわいらしいリボンと白いメイド服姿のヴィクトリアだった。私達の顔を見て見られてしまったと言う顔をしている

「何があったんや？ その服装はどう見てもヴィクトリアの趣味ちゃうよな？」

はやてにそう問いかけられたヴィクトリアは

「じゃ、シャルロットが人助けと言って、私とラウラにメイド服を着させて1日店員をさせると言い出したんだ」

「ドンマイ、ヴィクトリア。今度お菓子おごつてあげるよ」

フェイトがそう声を掛けてしていると、私達の隣の執事が通り過ぎる。その人物は

「何で僕だけメイド服じゃないの？ 不公平だよ」

ぶつぶつと呟いているシャルロットだった。顔が天使モードなのでその呟きがより一層際立っている

「あいつも苦労してるんだな」

「ああ、シャルロットは顔付きの問題らしいな」

はあつと溜息を吐くヴィクトリアに

「とりあえずダージリンストレートを4つと特製パフェを3つ、それと頑張れ」

「励ましてくれてありがとう、じゃあな」

重い足取りで歩いていくヴィクトリアを見ながらなのはが

「大変だね、ヴィクトリアさんも」

「だね、シャルロットはやっぱりはやて系の魔王だよ」

「うん、私もそう思うよ」

3人でうんうんと頷いている中、はやては

「あふ……なんか眠いなあ」

我関せず欠伸をしていた、やはりはやては良いも悪いもマイペースだなと思っていると

「全員動くなあ!!!」

ドアを蹴り破って5人組の男が怒号を上げる、5人が5人銃器で武装し、顔には覆面。背中のバッグからは何枚かの紙幣が飛び出してい

る、どこからどうみても強盗だ

「なあはやて、私が呪われてるのか、それともお前達が呪われてるのかどっちだと思う?」

「半々やと思う」

私達で出掛けるの必ず問題が起きるので、思わずそう尋ねるとはやては半々だと答えた。私も多分そうだと思う

(とりあえず制圧する方向で、荷物は転移させるぞ)

今日買いに買った荷物は転移魔法で寮にと送り。机の下に潜り込み状況を窺っていると

(む? 龍也達もか?)

同じように机の下に屈み込んでいるヴィクトリアとシャルロットと顔を見合わせる。ここには代表候補生が3人に、魔導師が4人と明らかに強盗5人など分けなく対処できるだけの人員が揃っている

(所でラウラは?)

一緒にいると思っていたのにラウラの姿が無く、そう尋ねていると(私も探しているんだが見つからない)

(ラウラは軍人だし、多分どこかで行動に……あ、居た)

シャルロットの視線の先には、腕組したラウラの姿が……

((もう作戦も何も無いね))

相手の武装や錬度等を窺いたかったが、そんな事してる暇はなさそうだ。私達が溜息を吐いている間もラウラは犯人グループと会話をしていた

「水だ」

「いや、あのメニューは?」

「黙れ、飲め。飲めるものならばな!」

その手に持っていたトレイをひっくり返し、氷水が宙を舞う。ラウラはそれを指で弾いた、氷の指弾だ。中々芸達者なやつだ

「ツぶざげやがって! このガ……」黙れ。耳障りだ「はっ? ぐえっ!」

ラウラに意識を向けた犯人の懐に飛び込み、そのまま膝蹴りからの裏拳で意識を刈り取る

「あ、兄貴!? こ、こいつら!」

「うろたえるな! ガキの2人くらい直ぐに」

私とラウラの強襲に動揺する、強盗団。やはり錬度は低いようだな、それに

「1人じゃないんだよねえ? 残念ながら」

「全くだ!!」

シャルロットとヴィクトリアが動揺する、犯人の後ろに回りこみ、それぞれ踵落としと首筋への手刀を叩き込む

「な、なあ!? てめえら何者「ほい、なのはちゃん。パス」ごふう!」
はやての鳩尾への肘鉄からの回し蹴りで吹っ飛ばされたリーダー格。その先にはなのはがいて

「別にいらぬよ、こんなの」

「げはあッ!!!」

3連抜き手からの空気投げで大柄なリーダーは宙を舞った。その余りの光景に残りの2人の目が点になった瞬間

「どつこいしよ!」

ガツンツ!!!

フェイトの振り下ろした椅子の直撃で1人が沈み

「僕さーすごく不機嫌なんだ。だから死んでよ」

絶対零度の笑みを浮かべたシャルロットの強烈なハイキックで最後の1人も床に沈んだ

「制圧完了。で、どうするよ?」

気絶してる強盗団を見下ろしながら尋ねる。このまま残るとマスコミや警察の事情聴取がうるさくなると思いながら言う

「ん? 僕は逃げるよ」

「その素早さ、素直に感心するよ。シャルロット」

既に荷物を纏めているシャルロットを見てそう呟いた瞬間

「捕まってムシヨ暮らしになるくらいなら、全部吹き飛ばしてやらあ!!!」

リーダーが立ち上がり着ていたベストを広げる。そこにはプラスチック爆弾の腹巻が巻かれていた、その量はざっと見積もっても40

平方メートルは吹き飛ばせそうだ。ふう……やれやれ。私は内心溜息を吐きながら隣を見る

(ヴィクトリアか……まあ別に何のことか判らんだろう)

これがはやてとかならなんの気遣いもいらんが、贅沢は言ってもらん

「投影開始」

小声でそう呟き指の間に柄だけの剣をそれぞれ4本ずつ投影する
「ふつとべ」「遅いんだよ、たわけ」

両手を同時に振るい指の間に挟んでいた柄を投擲する。これは別の世界で代行者と呼ばれる存在が扱う投擲用の剣。「黒剣」

魔力を練りこむ事で刀身を作り出すこの剣は、私の手から離れた瞬間刃を構築し、爆弾の起爆装置と爆薬の信管。そして導線だけを切り裂き。犯人を店内の壁に縫い付けた

「さて……爆弾を爆発させるだけの覚悟があつたんだ。腕の1つや2つ切り落としてやろうか？」

犯人の頭を掠めて壁に突き刺さっていた黒剣を握り、脅しのつもりで左腕の付け根に切っ先を突き当てながら訪ねると

「ひ、ひい!? す、すみ! すみません! も、もうしません! だから許してください!」

涙目でそう叫ぶリーダーに

「駄目だね。とりあえず1回死ね」

首めがけて黒剣を振るう

「「龍也!」」

驚きに目を見開き私の名を叫ぶヴィクトリア達に手ぶらの両手を見せながら

「ただの脅しだ、これくらいの方が丁度良い」

私の足元で泡を吹き気絶してるリーダーを見ながら言うと、ラウラが

「龍也とはやては似てるのだな?」

「兄妹だ、似ていて当然だろ?」

くつくつくと笑いながらヴィクトリア達に

「そろそろ警察が出てくるぞ？ 私達は先に撤退する、お前達も急げよ」

注文した品も届いてないし、今なら店を出て行っても問題ないしな。私達はそう言うのと呆然としているヴィクトリア達の横を走りぬけ、そのままアットクルーズを後にした……

「なんか騒動があったけど楽しかったなあ」

部屋に転移で送っておいた荷物を開けながら、そう言うのと

「だねーやっぱ気分転換も大事だよ」

「そうそう、それに龍也と出掛けれたって言うのもプラスだよねえ」

にこにここと笑いながら私と同じように荷物を開けているのはちゃんとフェイトちゃんを見ていると

「おろ？ 兄ちゃんどっかでかけるんか？」

また出掛ける準備をしている兄ちゃんにそう尋ねると

「ああ、ネクロの情報を教えてくれた人物に会いに行つて来るよ」

「女の人か？」

私がそう尋ねると兄ちゃんは肩を竦めながら

「さあ？ どっちだろうね？ メールだけではなんとも言えんさ。まあそう言うわけだ、荷物を片付け終わったら先に寝ていてくれて構わない」

兄ちゃんはそう言うのと部屋を出て行った。その後ろ背を見ながら

「女の気がするで」

私の感が告げている。兄ちゃんを呼び出したのは女だと

「あとをつけた方がいいのかな？」

「それならスピードがある私の方がいいよね？ 外も夜だし」

あとをつけるかどうかの話し合いをしていると、兄ちゃんが部屋に戻って来て

「言っておくが、後をつけるなんて真似はするなよ？ まとまって行動するとネクロに見つかりやすいからな」

兄ちゃんはそう言うのと今度こそ部屋を後にした。残った私達は

「むー大人しくしてるしかないか」

「だね、服の整理でもしようよ」

とりあえず兄ちゃんに言われた通りに留守番するしかない、諦め。私達は買ってきた服の整理をはじめた……

龍也がIS学園を後にした頃。都内某所のマンションでは

「スコール、これが失踪した第8部隊が残してくれた、ネクロに関するデータだ」

オータムが差し出したロムを受け取る。これで八神龍也と交渉するだけのカードは揃った

「しかし、八神龍也という男が私達の要求を受け入れてくれるとは思えんぞ?」

「その可能性は十分理解してるわ、オータム。それでも交渉に行くだけの価値があるの」

交渉と言うのは形だけ、様は私達が八神龍也にとって有益だと認めさせ。身の保証を求め、言うならば命乞いだ。

「ネクロは断罪者と言っていた。私達はファントムタスクとして、悪と呼ばれるだけの事をして来たよな。助けてくれと言っても見捨てられるんじゃないのか?」

そこは確かに不安材料ではある。だけど私とオータムはもう覚悟を決めているからいいが、せめてマドカだけは生き残って欲しい。その為には八神龍也の助力が必要だ

「それは判らないわ、でも何とか話を纏めてみせる。だから心配しないで待ってて」

交渉は慣れている。それに八神龍也に渡すデータも良い物が揃っている、手札は少ないがどれも有効な札のはずだ

「気をつけて」

「ありがとう。オータム」

玄関まで見送りに来てくれたオータムにそう返事を返し、私は携帯でタクシーを呼び街外れのバーに向かった。その途中窓の外を見な

がら

(カードは揃ってる、後は私次第……ね)

気持ちで負けていたら交渉なんて出来はしない。虚勢だったとしても強気でいること、それが交渉を纏める上でのコツだ

街外れのバーまでは15分。その15分の間に私は考えられるだけの全てのパターンを頭の中に浮かべ、どうやって交渉を纏めるかを必死で考えていた

第63話に続く

第63話

第63話

指定された店は、ぱつと見飲食店には見えないつくりをしていた。知る人ぞ知る名店と言うやつか、それともやばい話をしていてもばれないというのを考えたのかは判らないが、中々にいい選択かもしれない。そんな事を考えながら店内に入ると、客は1人しかいなかった、ふわりとした金髪に洒落た紅いドレスに宝石の付いたペンダントを身に着けた。どこか怪しげな雰囲気を放つ女性だった

「お待ちしてりましたわ。神王陛下様」

にこりと笑いながらそう言う女性に思わず眉を顰める。神王の名は継いだが、実際私はそこまで偉くないし。神の名を名乗ることもおこがましい若輩者だ。その名は正直言つて好きではない

「その名は余り好きじゃない」

「それは失礼しました。では八神龍也さんと呼びすれば？」

慇懃とも取れる態度を取る女性の前に座りながら

「まずは自分が名乗るのが礼儀ではないのかね？」

「それは失礼いたしました。スコール。スコール・ミューゼルです。八神さん「龍也で構わん。私もスコールと呼ぶ。それと敬語は止める。私はそんなに偉い人間じゃない」

そう言うスコールは驚いた表情をする

「なんだ？ なぜそんなに不思議そうな顔をする」

そう尋ねるとスコールは失礼しましたと言つてから

「ネクロから話を聞く限りは、貴方は冷酷な審判者だと聞いていたの
で」

「意外だったとしても言うのか？ 私は自分で言うのもなんだが。甘い人間だと思うぞ」

そんな事を言いながら、壁際に控えていたウェイターに赤ワインと軽くつまみを注文する。余り酒は呑まないが偶にはいいだろう

指を鳴らす、キンと言う乾いた音が響き。私達の周りに空気が変化

する

「何をしたのかしら？」

「認識妨害をな。聞かれたら不味い話だ、犠牲者は増やしたくないのでね」

ネクロの話を少しでも聞けば狙われる可能性がある、ならばその前に手を打つのが妥当だろう

「意外と優しいのね？」

「意外とは何だ、意外とはそんなに悪人に見えるかね？」

いいえと笑うスコール。表面上は互いに笑い合っているが、その本質は私もスコールも少しでも自分が有利な立場に立とうと考えている。交渉の場合相手に弱みを握られるとそこから崩れる。あくまでも対等の立場を貫かなければならない

「お待たせしました。ご注文の赤ワインとチーズの盛り合わせです」

おかれたボトルをあけて自分の分とスコールの分に注ぎ。軽く打ち合わせる、さて向こうがどんなカードを切ってくるか楽しみだ

威圧感がとんでもないわね。私は八神龍也に注がれた赤ワインを少しだけ口に含みながらそんな事を考えていた。こうして向き合っているだけでもとんでもないプレッシャーを感じる。ネクロが最強だ何だのいう理由がわかった気がする。そして今黙り込んでいるのは、私がどんなカードを切るのか待っているからだろう。

「これを見てもらえるかしら？」

最初に切ることにしたカードは各世代のISのコピーが取られているという事。私はよく判らないがネクロと戦ってきているという。八神龍也には十分な効果を持つだけの札になるはず、コピーしたものを渡すと

「ふむ……確かに有力な情報だな。なぜネクロがISをコピーしているのかが大体見当が付く、良い情報だ感謝しよう」

見ただけで何をしようとしているのかわかる？ やはりそれは長年戦って来たからこそ判る。物なのかもしれない

「そして次にこれ、私はなんだか判らないけど、貴方には判るんじゃない

いかしら?」

それはオータムが持つてきてくれた映像ファイルだった、ノイズは酷いが確かに何者かの姿と第8部隊の戦闘データだ

「隊長!・もうこれ以上抑えきれません!」

「そう……ありがとう」

もうこれでしか聞けない。名も知らぬ友人の声と第8部隊の隊員が死んでいく声が私の胸を締め付ける。私は確かに彼女の友人だった。出来る事なら救いたかった、でも救えなかったという後悔が胸の中に押し寄せる

ザンツ!!

鋭い斬撃音と同時に何者かの姿が映りこんだ瞬間

「!? 馬鹿な……どういうことだ」

「人目で気付くなんてさすがね、私は何十回と見返してやっと気付いたわ。この襲撃者が何者なのかをね?」

逆光だし、映像は不鮮明だ。それにノイズのせいでよく見えない。それだけの悪条件の中でもしつかりと襲撃者のシルエツトを写していた。襲撃者は女だった、しかもISを展開している。これは5回目の再生で気付いた。最初はネクロがISをまねているのだと思っていたが実際は違っていた

「この肩のライン。それに全体的なシルエツト……色こそ違えど、このISは」

「暮桜……織斑千冬のISだな?」

そう呟く八神龍也に頷く。最初は信じられなかったが間違いない、この襲撃者のISは暮桜だ

「ネクロは私達を斬るのかしら?」

「……チャキ」

友人の呟きに返事を返さず襲撃者は刀を構える。それは淡い光を放っていた、間違いなくワンオフアビリティの零落白夜だ

「それとも殺してネクロにするって所かしらね? 第2・3部隊と同じく」

その問いかけに襲撃者は答えない、友人は肩を竦めながら

「残念だけどき。私は化け物になるのもごめんだし、今のフロントムタスクにも忠誠なんて誓えない、タスクのあの人の理想のない組織になんて興味ないの」

そう笑いながら机の中に埋め込まれた。ガラスのケースに護られた何かのボタンを見せ付けるように笑い

「死にたくないのなら逃げれば？ 偽り「死ねッ!!!」遅いわよ」

がシャンッ!!! 拳を振り下ろすと同時に画面が切り替わる。このロムは爆破された第8部隊のアジトの地下室から発見された。

最後まで映像を記録し、私の手の中に渡るように計算されていた仕掛けだった。画面が暗転すると上の階が揺れ映像は途絶えた

「これがネクロがISのデータを奪った理由だと思うのだけど、どうかしら？」

私がそう尋ねると八神龍也は難しい顔をしながら、ぶつぶつと何かを呟いている。少しだけ聞こえてきた単語は

(平行世界？ それに別の存在？ ほんとに魔法って何でもありね)

私達では図り知ることの出来ない世界を見ている八神龍也は、自分の中で考えが纏まったのか。話を変えてきた

「しかし、これだけの物入手しようとしたらネクロに狙われるだろう？ 良く手に来たな？」

「友人が命と引き換えに残してくれたものよ、何が何でも手にして見せるわ」

オータムはLV1の監視を潜り抜け何とか、このロムを回収してくれた。第8部隊は何時どここの組織に見つかってもおかしくないように、無数の隠し通路をアジトに用意していた、だから逃げれたと言えるだろう

「そうか……」

私の話を聞いた。八神龍也は机に置かれていた空のガラスを私の隣に置き、ワインを注ぎ

「魂の救済があらんことを……」

名も知らぬ私の友人のために祈ってくれた。なんだかんだ言っただけは凄く良い人なのかもしれない。私も十字を切ってワインを煽る。

素面では話せないが、酔いすぎても困る。気分を変えるための一杯だ
「それでこれだけの情報を私に渡したんだ、お前は何を望む？」

穏やかとも取れる光を宿した、蒼銀の瞳が私を見つめる。下手な遠まわしはいらないと告げているような目に見て、私は決めた。単刀直入に言おうと。この男は優しい、その優しさに付け込むよう出来が退けるが。生き残るためにはその優しさを利用しなければならぬ。
私は八神龍也の顔を見て

「助けて欲しい仲間がいるんです。その子を助けてください。私とパートナーは悪と呼ばれることもしました、殺人もしました……でも私は、私達はあの子に死んで欲しくない」

深く頭を下げて頼む、いや懇願する……悪と呼ばれるだけはした、殺人も犯した。だがそれはかつてのタスクの理念に従ったの事だ。世界にとつての悪となり警戒させること、ネクロによつて処罰された前のリーダーは高貴な理想を持っていた。人間にとつての悪を行い、世界にとつて正義をなす。この世界に純粹な正義などない、この世は限りなくグレーだ。だから私は言える、私は悪と呼ばれるだけの行為はした、だが間違つてはいなかった。だから自分の行いに悔いはない、いつか裁かれるとしても甘んじてその罪を受けよう。だけどマドカは違うまだ引き返せるところにいる。本人は嫌がるかもしれない、でも私は彼女には日の下を歩いて欲しいと思う。ユウリと同じように

「……自分達の死は受け入れた、だがそのマドカという少女を助けて欲しいと言うのか？」

八神龍也の小さな呟きに私は

「ええ……私ともう一人、オータムは既に覚悟を決めているわ。けどあの子は違う、ネクロに影響を受けているだけ。だからまだ助かる、だからお願いマドカを助けてあげて」

こんな都合の良い話があるわけがない。散々悪と呼ばれるだけの事をしていまさら助ける？ そんな話を聞く馬鹿はいないだろう

「自身の罪を認め、そしてその上でお前の仲間を助けると？ そんな都合のいい話があると思うか？」

そう問いかけてくる、八神龍也の顔を見ずに頭を下げたまま

「私は自分の信じた道に迷いはないわ。世界にとって必要な悪を成すと言う信念に迷いはない、だけどあの子は違う。利用されているだけ、だからあの子だけは光の元に戻るべきなの」

繰り返すマドカを助けて欲しいと頼み込むと

「……その願い、確かに聞き届けた。判った必ずマドカという少女は助けよう」

少し黙り込んでからそう言う八神龍也の顔を思わず見る。先ほどと同じような笑みを浮かべたまま

「だがしかして、お前達も失うには惜しい人材だと思うよ。悪であると認め罪を受け入れる覚悟、賞賛に値する。だから誇れ、自身が悪であることにそして迷うな、お前の信じた願いは正しい」

否定するわけでもなく、受け入れるわけでもなく。八神龍也は認め、私達のあり方を……

「そのマドカと言うのはどんな少女だ？ 顔が判らなければ救いようがない」

そう言われてもマドカの写真なんてない、だけど

「ユウリが知っているわ。詳しくはユウリに聞いて」

タスクの離反者にして現在IS学園にいるユウリの名を上げると

「判った。ではな……また会おう」

八神龍也はそう言う、机の上に数枚の紙幣を置いて立ち上がり。私の横を通り抜けながら

「誇り高き悪の華。そのあり方夢忘れん事だ……」

私の肩を叩いて去っていくその背中に

「貴方は正義の味方なのに悪を認めるの？」

どうしても気になってしまった事を尋ねると八神龍也は

「ふん。私は正義など名乗った事はないよ。私は護る者だ、正義の味方は全てを救うだろう、だが守護者は護れる者しか救わない。ならばそれは正義と呼べるかね？」

それは独善的とも言えるあり方。正義とは程遠いあり方だろう、言うならば私達に近いあり方とも言える

「だが、それでも全てを救おうと思う、全てを救いたいと願う。そんな矛盾した願いを持つ者がいる、そんな壊れた人間が悪だなんだと言う事ができるか？ 答えは否。だからこそ私はお前達のあり方を是と認めるさ」

そう笑うと八神龍也は今度こそ背を向けて歩き去っていった……

私はIS学園に戻ると、すぐに地下の研究所に向かった。もちろん幻術は掛けないで本来の姿のまままで、地下にはツバキとユウリに加えて千冬の姿もあった、呼び出す手間が省けたので丁度いいと思いなから。教員用のIS、特に千冬用の打鉄の調整をしてる3人に

「少しいいかね？」

近くの椅子に座ってからそう声を掛けると、驚いた表情をして3人が振り返り。私を見て目を見開いている

「なんだ。そのまるで化け物を見たような目は。失礼とは思わないかね？」

鼻を鳴らしながら言うツバキが

「あ、あ。そうだったわね、君はそっちの姿が本当の姿なのよね？」

1番先に我に帰ったツバキがそう尋ねてくる

「そう言うことだな、さて。忙しいところ申し訳ないが少しばかり私のお話を聞いてくれるかね」

私がそう言うユウリが眉を顰めながら

「ネクロ関係か？」

「ま、そんな所だな。聞きたくないのなら聞かなくてもいいが、そのせいで何かあったと言われても責任は取れんぞ」

私がそう言うツバキは「とんでもない」と言いながら携帯端末を私の前において。自身の手には手帳を手にして

「そんなわけないわ、それに話す気になってくれたって事よね？ 早速だけ魔法について「それはまだだ。今はネクロだけだ」

研究者肌だけに未知には興味があるということか、まあそれ自体は悪い事ではないが。今はそんな話をしに来たのではないのでそう言

うと明らかに気落ちした素振りを見せてから。

「それで話って何かしら？」

粘っても話をしてくれないと思ったのか、話を切り替えるツバキに「ネクロが近いうちに仕掛けてくるかも知れん、IS学園の防衛を固める事を進める」

私がそう言うのと3人とも一瞬何を言われているのか判らないという表情をしてから

「どういうことだ!!! 説明しろ!!!」

机を叩きながら怒鳴る千冬に私は肩を竦めながら

「私を知るわけないだろう？ そんなのはネクロに聞け」

あいつらが何を考えているかなんて私を知るわけもない。ネクロの行動指針はその世界にいる上位ネクロが決める、その固体によって考え方が違うので私が判るわけがない

「まさかお前がいるのが襲ってくる原因ではないだろうか？」

疑わしいという視線を向けてくる千冬。まあそう思うのは無理もないか

「私が居ようが居なからうが関係ないな。このデータからして判る」

スクールから貰い受けたデータとなのは達が集めたデータを纏めた。書類を机の上におくと

「これは？」

書類を見ながらこの書類が何か尋ねてくる。千冬に

「行方不明のIS操縦者のリストに各国のIS研究所に残されたハッキングの形跡を纏めたものだ。案外顔見知りがあるかも知れんぞ？」

私がそう言うのと千冬とツバキは慌ててリストを覗き込む。しばらくしてから

「とりあえず私の知り合いは大丈夫みたい」

「私もですね」

ほっとした表情をするツバキと千冬とは対照的にユウリはさめた態度で

「ネクロの目的は何だ。なぜ操縦者とISのデータを盗んだ？」

納得できないという表情のユウリ。確かにネクロを知るユウリに

は理解できないだろう。態々ISなんか使わなくてもネクロは強いから。だからこそ気になるのだろう

「考えられるのは操縦者のネクロ化……臨海学校のとときのシルバリオゴスペルと同じような状況になると思ってくれればいい」

臨海学校での異形と化したシルバリオ・ゴスペルを思い出したのか顔を引き攣らせる。ツバキと千冬に

「一応対処法は教えておこう。ネクロは個体差はあるが基本的には無限再生能力を持っている。映像で見ただろ？」

ゴスペルが2回3回と回復していたはずだというと、思い出したように頷く千冬とツバキ。やはり実物を見てるだけあって理解が早くて助かる

「だがそれはコアがあつてこそそのものだ」

血の様に赤い球体のコアの映像を見せると、千冬がそのコアを指差しながら

「これが心臓というわけか？」

「そうなる。このコアには魔力が溜め込まれていて、ダメージを受けると自動的にその魔力を開放する。それによってネクロは不死とも言える回復能力を持つ。だがコアを砕かれれば消滅するしかない、対峙したのならコアを狙え」

私がそう言うのとツバキは手を上げてからコアの映像を指差して

「このコアって言うのはどこにあるの？ やっぱり心臓の位置なのかしら？」

「特定は出来ていない。コアの場所は固体によって異なるのでここだ。という場所はないが修復が早い箇所に近い傾向がある」

コアから近ければ近いほど回復が早い、牽制のダメージでどこにコアがあるかの大まかな予想をつける。これは新規の管理局全員が全員やらされる訓練だ。高位の魔導師は身体ごと消滅させるが、普通の魔導師にはできない。だからコアの場所を予測できるようにするのが基礎の訓練に組み込まれている

「ISで何とかなるものなのか？」

「下級なら何とかなるかもしれないが、上位となると今のISでは太刀

打ち出来んな……まあその場合は逃げる。それと襲撃されるのは誰か判らんからな。これを持っておけ」

小さな楕円形の機会をコートから三つ取り出し投げ渡す

「これは？ 見たことない金属だけど？」

触りながら尋ねてくるツバキに

「合流用のセンサーだ。私が親機を持っているから……いや、説明するより見たほうが早いかな」

親機に魔力を通すと、ユウリ達の持つ子機の中心が光り、その光の中に矢印のようなものが浮かび上がる

「す、凄い!! これって何？」

「ネクロは何時どこに現れるかわからん、1人で戦うのは無謀と言える。その時に近くの仲間に自分の場所を知らせるものだ」

念話という手もあるが、それだとネクロに感づかれる。だから魔力を殆ど使わない物としてジェイルが製作した物だ。六課メンバーは殆ど使う事はないが、一応持っている

「私も一応警戒はするが、誰が狙われるか判らん。連絡をしたら早く合流してくれ、私の予想だが……狙われるのは一夏達の代表候補生の可能性が高い」

まだ未熟で世界の闇も知らない子供。ネクロにとっては格好の獲物といえる、私は椅子から立ち上がると幻術を発動させて16歳前後の姿に化ける。もう今はこれ以上話す事はないしな

「では邪魔したな」

ネクロの事も私の事もまだそこまで詳しく話すつもりはない。これ以上ここに居て話したくない事を繰り返して聞かれるのもうっとうしいので、難しい顔をしているツバキ達に背を向けて研究室を後にした……研究室を出て寮に向かいながらふと夜空を見上げる

「もう少しで満月か……何かありそうな気がするな」

月と言うのは様々な魔性に関わる。満月でネクロが活性化するなんて聞いた事はないが、可能性がないというわけではない。

学生生活で緩んだ気を引き締めたほうが良いなと思いつつ、ゆつくりと寮に向かって歩いて行つた……

「ハーデス。気分はどうだ」

「悪くない。しかしこの魔力の薄さは俺には馴染まん」

ぶつぶつと文句を言うハーデスに

「仕方あるまい、そう言う世界もあるということだ」

ネクロにとって魔力とは生きるために必要なものだ、上位LVになれば魔力は必ずしも必要と言うわけではないが、それでも魔力が多いほうが調子がいい。

「ベエルゼ。1つ聞きたい」

「何をだ？ ヨツンヘイムのことか？」

本来は殲滅用の兵器である、パンデモニウムを防衛用に改造した事についてかと尋ねると

「違う、俺が聞きたいのは。なぜ死に掛けているネクロを6体も回収した？ そいつらを回復させるのに使う魔力がもつたいたいとは思わないのか？」

なるほど、そつちの事か。確かに私は消滅しかけていたネクロを数体回収し、魔力を与えて回復させている。確かに理解できない行動かもしれない

「ふふふ、あのネクロには利用価値がある。お前には理解出来ないだろうがな」

殲滅特化のハーデスには私が何を考えているのか判らないのだろう。だがちゃんと意図があつての再生だ

「まあそうだな。それよりもベエルゼ、俺を戦わせろ。何時までもここにいるのは気が滅入る」

「あと少し辛抱しろ。近いうちに仕掛ける、それまでは魔力を蓄えていろ」

詰まらなそうに鼻を鳴らすハーデスから背を向けて、王座に戻る。
(抑えておくのも限界か)

ハーデスにしろ、アヌビスにしろ、ベルフェにしろ。その本質は殺戮者だ。私やベリトのように策略を好むネクロではない

そろそろ暴れさせないと不味い。ゆつくりとヨツンヘイムの通路

を歩きながら窓を見上げる

「もうじき満月か……そろそろ仕掛けるべきだな」

満月と言うのはネクロロにとっては都合のいい条件を示している。空气中の魔素の濃度があがり行動しやすくなる

(誰を出すか考えておくべきだな)

守護者を完全に倒すつもりはない、あくまで様子見が目的だ。そのついでで代表候補生というのを2人ほど捕まえればいい

「私を知る貴様と今の貴様……どれほどの差があるのか見極めさせてもらおうぞ」

亡者達の足音はもうすぐ近くまで迫り始めていた……

第64話に続き

第64話

第64話

ドイツ組みと格闘少女

とんとん

ラウラとシャルロットの部屋の扉を叩くと

「ちよつと待っててくれ……クリスマス」

扉から顔を出したラウラは黒猫パジャマを着ていた。前までは普通のパジャマだったと思うけど。多分シャルロットに買ってもらったんだと思う。しばらく待つと何時も通りの顔つきのラウラが髪をまとめながら出てくる

「いつもすまん」

「気にしないでいいよ。行こう」

「うむ」

頷くラウラと一緒に寮の外に出る。私達はドイツの軍属だ、IS学園を卒業すれば直ぐに隊に戻らなければならない。そのときに身体が鈍って話にならない。だから私とラウラ、それにエリスは毎朝一緒にIS学園の周り走り込みすることになっているのだ。

集合場所に行くところではエリスが既にアップを始めていた。私とラウラに気付いたエリスは

「また遅れましたね? 今日5分です」

若干怒っているようなエリスに謝りながら、アップを始める

「それで今日はどうしたんですか? ラウラ」

「……一夏分が足りないとか言って文句を言い続けるシャルロットを宥めていた」

「ご愁傷様」

シャルロットの暴走は何時も酷い、ラウラが寝不足になるのも判ると思いなながら

「今日はちよつと違うコースで回ろうか?」

「どうするんです?」

普段は校舎周りだが、今日は林周りのコースにしようと提案した。

平坦な道ではなく木が邪魔をするので丁度いいと思うというと

「そうだな。偶には違うコースにしよう」

ラウラも同意してくれたので違うコースに向けて私たちは走り出した

〜10分後〜

大分IS学園の外れに来たところで見覚えのある人影を見つけた。薄い青色の髪的女生徒。弥生だ何かをじっと見ている弥生にゆっくり近づいたところで

「シッ!」

鋭い気合の込められた声がする。誰か居るのかもしれないと思いき声でエリスが

(弥生何してるんです?)

(うおっ!? あ、なんだよエリス達か)

ほっとしたような表情の弥生に

(何を見てるのです?)

そう尋ねると弥生はシーと言いながら私達にも見えやすいように身体をずらした。そこには龍也が居た、だがそれはいつもと違い。鋭い光をその目に宿し、2振り的大小の木剣を振るっていた。誰かとの戦いのイメージトレーニングなのか、絶え間なく足場を変え、持ち手を変え鋭く踏み込みながら木剣を振るっていたが。突然木剣を地面に突き立て

「盗み見は好かん。出て来い」

その言葉にびくりと肩を竦めながら、龍也の所に向かうと

「何をしてるんだ? お前らは? 盗み見して面白いものでもなからうに」

呆れながら言う龍也に弥生が

「しかし随分とすごい動きをしてたな? 誰かと試合をイメージしていたのか?」

そう尋ねると龍也は木剣を拾い上げながら

「まあそんな所だよ。純粋な剣術じゃ、絶対に勝てないからな。どう

すればいいのか考えてるのだよ」

龍也を持つてしてそこまで言わせる相手に若干興味感じた、1年の中で最強といえる龍也が勝てない。一体それはどんな相手なのだろうか？

「見てるのはいいが静かにしてろよ。集中が途切れるからな」

そう言ってから再び木剣を振るい始める。しかし今度はさっきまでと違い

「シッ！ ふっ!!!」

一瞬木剣を離しての拳打や蹴りを織り交ぜている。だがそれでも何分かすると木剣を手放し

「あー全然駄目だ。押し切られた」

頭をガリガリと掻き始めた龍也に弥生が

「その相手って言うのはどんな奴なんだ？」

そう尋ねられた龍也は肩を竦めながら話ほどの相手じゃない、それに説明するのも難しいといっって今度は黒塗りの和弓を取り出した

「龍也？ 何をするんだ？」

「何って引くんだよ 感が狂うからな」

そう言っって弓を構える龍也の視線の先には何も無い。的もないのに何を打つというのだろうか？ そう思っってみていると

「シッ！」

矢を引いて放つ、それは空を裂きながら飛んで行き。

スターンツ!!!

快音を響かせた。私達には見えてないが的があるのかもしれない。そんな事を考えている間に2回3回と弓を引き始める

そのたび快音を響かせる弓矢。5回ほど引いたところで龍也は弓を片付け

「こんな物だな。さてと戻るか」

くるりと背を向けて去っていく龍也を見ながら、私は

「矢ってどこに当たってると思う？」

「気になりますね？」

「確かに」

あれだけ無造作に引いていたんだ、きつと的の端とかにあたって
るだけに違いないと思いい見に行く」と

「嘘……」

真ん中の赤い丸に突き立った矢に矢が刺さっていた、1本や2本
じゃない全本だ。

「龍也って何でもこなしすぎだろ？」

「ああ、あいつはISが使えなくても何でもしそうだな」

私達は改めて八神龍也の化け物具合を知るのであった……

イギリス組みの不運

「くっ！ このっ！」

グロリアスヴィクトリーを両手で持ち。龍也にと切りかかるが

「脇が甘い。ISだからって足運びも気をつけろ」

カキンと乾いた音を立てて弾かれる。かれこれ5分このやり取り
が続いている

(間合いが読めん!?)

射撃武器も拳のバンカーもなし、龍也が使っているのは日本刀型ブ
レード「獅子王刀」一振りなのに届かない

(こうなったら)

背後に滞空してるグロリアスヴィクトリーを見つめ。背後から龍
也の背中目掛けて飛ばすが

「そう言うのはそんなに見ては駄目だな。奇襲性が劣る」

「なにっ!!」

私のほうを見たまま背後から飛んできたグロリアスヴィクトリー
を掴んだ龍也は

「まだまだ甘いな」

「くっ!!」

獅子王刀とグロリアスヴィクトリーの一撃で私のSEは0になり、
ゆっくりと地面に倒れこんだ

「なぜ届かないんだ!? 何か秘密でもあるのか？」

倒れこみながら尋ねると龍也は頬を搔きながら

「いいにくいんだが？ お前ビット動かすとき見すぎだ、それで大体判るぞ？ それに剣の軌道も単調だから読みやすいし」

「……きついこと言うな」

自分でも判っていたが、顔を見られて言われると正直きつい。身体を起こしながら言う龍也は

「武器の特性を理解してないから単調になるんだよ。西洋剣と言ってもお前のブレードは、レイピアやショートブレードに近い。バスターソードのような使い方は駄目だ。まずは武器の特性の理解だな、セシリアーお前も来い」

向こうでなのはに射撃武器の講習を受けていたセシリアが絶望だという顔で歩いてくる、その後ろではシャルロットが手を合わせていた。ご愁傷様とでも言いたいのかもしれない

「セシリアのインターセプターは防御向きだ。持ち手にナックルガードがある、これは受け流すのに適している。しかしヴィクトリアのグロリアスヴィクトリーは攻撃向きだ。だが使い方がなっていない、流すや斬りの基本を覚えるべきだな、力任せでは駄目だぞ」

そういつて武器の解説を始める。龍也の話をしつかりと聞く、同年代のはずなのだが。恐ろしいほど冷静で強い龍也の意見は不思議と聞ける

「まずはだがね？ 射撃も使える近接も使える。これは戦闘においての引き出しが多いということに直結する、だが使いこなせなければ意味がない。射撃だけでも近接だけでも駄目という事だ」

「ではどうしろと仰られるのですか？」

セシリアにそう尋ねられた龍也は肩を竦めながら

「等に一夏。それにエリスにラウラ。切磋琢磨する友人がいるだろ？ 私もいるしなのはもフェイトもそれに危険だがはやても居る。模擬戦に戦い方の話、いくらでも勉強できるだろ？」

そう笑う龍也。確かに正論だな……と私が思っていると、龍也は悪戯めいた笑みを浮かべ

「特にセシリア？ お前は一夏に色々教えてもらえば良い。それは面

「白そうではないかね？」

「?!? それもそうですわね!! 早速そうしましょう!!」

「全は急げと走っていくセシリアを見送りながら私は

「焚きつけてどうする？」

「はて? 何のことかな？」

「白々しいと思ったがセシリアが自分の意思で行ったのだから、私は何も言う事はないだろう」

「ではヴィクトリアはどうする? 箒達と訓練するか? それとも私とするか? 好きなほうを選べ」

「そう笑う龍也に私は即座に

「続きだ。ISでなくてもかまわん。剣の扱い方とやらを教えてください」

「私がそう言うのと龍也はふむと頷いてから

「では互いに着替えてから、寮の裏の集会所で剣術稽古をしよう。先に行って待っている」

「そういつて出て行く龍也とは逆のピットに向かい。シャワーで汗を流してから着替えて指定された場所に走った

「その日の夜」

「うーむ。興味深いものだな」

「龍也が教えてくれたのは基本的な切り下ろし薙ぎ払いと言った。剣術の基礎だったが、基礎は基礎ではそれは普通のものど違っていた」
「持ち手をこころも変える剣術と言うのは聞いたことがないな」

「業とゆるく握り、振ると同時に遠心力でリーチを伸ばす、即座に持ち替え攻撃を流す。少しずつ間合いを変えていくことで相手の間合いを乱し、自分のペースに持ち込んでいく。さらにはISの特性を生かし投擲するという手段もあると教えてくれた」

「(武器は投げるべきものではないと思うが……いやだからこそか)」

「私は奇策と言うのが苦手だ、だから真つ向勝負に持ち込む事が多い。だからそこを突かれて負ける、ならばと教えて貰った奇襲だ。IS用のブレードビット「グロリアスヴィクトリー」は投げたりして距離が離れてもある程度誘導が効く、つまり罠のように使ったり、相手

の動きを束縛するのにも使えるのだ。だがそれは今まで私が思いもよらなかった戦法だ

(本当にあの男は面白い)

何を考えているのか、どこを見ているのか？ それがまるで判らない。だがそれでも悪い奴ではないと思う、ただ私達が龍也を理解できないのは、龍也と同じ場所に立っていないからだ。龍也は私達よりも遙か高みにいて、私達では想像も出来ない景色を見ている。だから私達は龍也に勝てないのだろう……

(勝つとまでは言わないが、せめて一矢くらいは報いたいものだ)

負けっぱなしは性に合わない。だが直ぐに勝てないのも判っている。だからせめて一矢報いたい、そこから目標は上げて行けばいいのだから。私はそんなことを考えながら布団に包まり、眠りに落ちた……

安定の苦労人とヤンデレ魔王様

本国に提出するレポートを職員室に預け、寮に戻っているとき鈴が「だからさー。少しは格闘技覚えたら？」

呆れたように言う鈴に私はうーんと唸りながら

「でもさ。なんからしくないんだよね？ 私には」

そう言う鈴は私にデコピンしながら

「馬鹿なの？ 爆真甲を行かす方向性で考えなさいよ？」

私のISの武装の爆真甲は両腕に装備する大型の手甲とも言える。防御にも使えエネルギーを溜めれば一撃必殺の打撃技として使える。私のもっぱら防具として使用しているのだが、鈴は

「それだけでかい手甲なら殴ってもダメージが行くんだからさ。体術と組み合わせるべきだった」

「だからさー私にはそう言うのむかないんだよ！」

鈴は私に格闘技を覚えれば良いと勧めてくれている。爆真甲を防具としてではなく武器として使うべきだと。だけど私は考えながら戦うなんて器用な真似は得意ではない。考えるのではなく感じる、野

生とも言える戦い方が私の武器だからだ

「だから！ 宝の持ち腐れは止めた方が良くってあたしは言ってるのよ！ 代表になりたいんでしょ？ 引き出しは増やしておきなさいよー！」

「だから無理だつてば！ 「何を騒いでいるのかね？」 ツ!!!」

第3者の声に思わず辺りを見るが、姿がない。あの声は龍也君だと思うけど……どこに？ 私と鈴が辺りを見回していると

「ここだ。(ぺらり寮の壁紙がはがれ龍也君登場)」

「忍者!? 忍者なの!?!」

「あんた……何してるのよ?」

軽い頭痛を覚えながら尋ねると龍也君は壁紙を畳んでコートにしまいながら

「ふむ。何時も通りはやてから逃げているのだよ？ なんかストレスが溜まつてるのか、手錠を見て笑つててな？ 恐怖を覚えたので逃げているのだよ」

からからと笑っているが、それは笑い事ではないと思う

「それで何を揉めていたのかね？」

何事もなかったように尋ねてくる龍也君に突っ込みを入れたい気持ちを感じながらも、鈴と一緒に事情を説明すると龍也君は

「ふむ、鈴無理を言うのはよくないな。シエンに格闘技はむかないぞ?」

そう笑う龍也君に鈴がへっ? って言う顔をしながら

「なんでよ? 何時も戦い方は多いほうが良いって言うじゃない? なんでよ?」

理解できないという顔の鈴、かと言う私も理解できてない。龍也君の言葉を待っていると龍也君は

「シエンに格闘技を覚えさせてみる。それに集中しすぎて動きがばれればねになるぞ?」

それは余りにきつい言葉でした。鈴はそっかと言って納得してくれてるけど、私は何か納得できないものがあつたのだが、龍也君は「大体シエンは今のままで十分だろ? 動物的とも言える感があるん

だし、余計な事を教えるよりも必要なのは心構えくらいじゃないか？」

そう笑った龍也君は鈴と私を交互に指差して

「感情的に見えてそのくせ、クレバーな鈴は色々と覚えておいたほうがいいだろう。しかし冷静に見えて感情的なシエンには自分の感を信じる戦い方があつていると思うよ」

そう笑う龍也君。その言葉に私は少し驚いた、龍也君は私と鈴の事を良く知っていたんだと

「と言うわけだよ。自分にあつた戦いかたや戦術を覚えた方が良いに決まっているからな。無理に覚えることはないと思うよ。じゃあな、このままだとはやて達に捕まるんでね！」

そう言う長い銀髪と黒コートを翻し走っていく龍也君を見ながら

「龍也君って意外と人を見てるんだね」

「そうね。あんた男見る目あるわ。ちゃんと理解してくれてるじゃないかい」

「そうだ……って違うからね!? 私はそう言う感情は持つてないからね!」

「え? 百合? あたしはノーマルだからね!」

ズザザと身を引く鈴、言う事欠いてそれか、それなら

「誰が百合だーツ!!!」 「シエンが怒ったー!!!」 待てこら! 化け猫娘ーツ!!!」

怖いーと叫んで逃げていく鈴を追いかけて私は走り出した。無論鈴が本気で言つてないのは判るがそれでも納得できないものと言うものはある。私は笑いながら鈴を追いかけているながら

(こんな楽しい毎日がずっと続けばいいのにな)

IS 学園で過ごす日々は楽しい。騒がしくてもそれ以上に暖かい毎日だ。中国ではこんな気持ちになった事はない、だからこそこの毎日が尊いものに思えて。私は思わずそんな事を思った、けどこの願いは叶う事はなく、私達は今まで思ったことのない非日常にと巻き込まれていくこととなる……

エクストラ 暗部3人娘

「最近やたらツバキ殿が防衛を固めると仰られるな」

IS学園の周囲にセツトするセンサーの確認をしながら言うフレ
イアに

「……確かにそうだね。ボクも気になってる」

先日からツバキさんに備えるように言われているのだが、急すぎて
よく理解できない

「なにか情報を掴んだのだろうか？」

「……かもね」

フレイアとそんな話をしながら、センサーの設定をしていると

「ただいまー、付けて来たぞ」

そう笑いながら入ってきたシエルニカの手を見てボクは

「……頭を使う仕事をしてるボク達にお土産？」

そう尋ねるとシエルニカは頬を掻きながら

「龍也が持つて行けつてくれたんだよ」

置かれた袋の中からは袋に包まれたクッキーやプリンが顔を覗か
していた。それを見ながらボクは

「……もしかしてシエルニカが気に入られてるだけだったりして？」

「はあ!? アイアスお前なにに言ってるんだ!？」

明らかに動揺するシエルニカにフレイアが

「年下趣味は褒められたものではないぞ?」

「お前も何言ってるやがる!?! フレイア!?!」

顔を真っ赤にするシエルニカ、ここはやはり傭兵だとしても女子
だ、こういう話題は面白い、特にそれで相手が狼狽してるのならなお
の事。面白いものを見つけたと言わんばかりにボクとフレイアは
シエルニカをからかって遊んでいた

例えば

ショタ趣味は引くとか

年下に手を出すなよ? とか

でもボク達は知らなかった。八神龍也が本当は僕達よりも年上だと……そしてそれを知った後1騒動あるのだが、それはまたの機会に語るとしよう

第65話に続く

第65話

第65話

夏休みの訓練のない日。自室で本を読みながらふと呟く

「今日は満月か……」

警戒していた満月の日だ、月は様々な魔性に濃い影響を与える。ネクロがどうかはわからないが警戒していてそんはない筈だ

(私の嫌な予感はあるからな)

大体何か起こると見て間違いない。外れて欲しいと願うがここ8年ほど私の嫌な予感は何一つ外れた事がない。もう一種の未来予知だと思う

(一夏達もIS学園に居てくれると良いんだが)

それならば護りやすいと思っていると、部屋の扉が数回ノックされてから開き

「龍也！ IS学園の近くで祭りがあるんだが一緒に行かないか？」

その言葉に私は酷い頭痛を覚えながら、心の中でこう思った

(居るかどうかも判らん神とやら。お前はよほど私が嫌いなんだな)

居るとしたら神とやらは私が嫌いに違いない。もし居ないのなら私の運は相当悪いに違いない

「なんだ龍也。そのいもしない存在に恨みをもっていますって言う顔は？」

「気にするな一夏。折角の誘いは嬉しいが今回は見送らせてもらおうよ、ツバキさんに呼ばれているのでね」

丁度良い言い訳にツバキさんの名前を出すと一夏は、そうかと頷いてから

「そっか、じゃあ仕方ないな。んじゃ、俺達だけで行って来る」

「ちなみに誰が来るんだ？」

これが箒達くらいまでならと思いつながら尋ねると一夏は指折りしながら

「えーと箒達にシエンさんに弥生さんにクリスさんに簪さんにエリス

さん。それとヴィクトリアさん」

代表候補生オールメンバー。くそっ！ 高校生って言うのはこんなに遊び好きなのか!? そう思うと舌打ちが出た。

戦い続けの私では理解できない世界だった。これが普通と言うことか

「んじやな。龍也」

私の苦勞を知らずか、のほほんと笑って出て行く一夏の背中を見ながら

(如何してこうなるかね?)

祭りといえ夜、祭りの最中に襲ってくることも考えられ、帰り道に襲ってくることも考えられる。ネクロからすれば一夏達は取るに足らない存在だ。ネクロ化して手駒が増えただけではなく、ISも手に入る。一石二鳥だ

(なのは達を一夏達の警護に回すか)

祭り会場か、IS学園の近くでかはわからないが。仕掛けてくるのは間違いない、私は呼んでいた本を閉じ

(どう出てくるかだな)

今の所判っているネクロはアヌビス・ヴォドオン・ペガサスの3体と、ユウリからの情報で死霊使いと殺人凶のネクロの2体

死霊使いは恐らくネクロマンシーに適性のあるネクロ。ネクロが人を殺しネクロ化するのではなく、呪術で死体や魂をネクロ化する方法だ。こちらの方が失敗がなく安定しているが、使えるネクロはそうはいない。軽く見積もってAA+からSSまでのクラスと見ていいだろう。

そして殺人凶と聞いて、思い浮かぶネクロが1体居た。まだ私が六課に戻る前に良く戦った、最もネクロらしいネクロ。「ベルフェゴール」だ。そしてそのベルフェゴールが居るといふ事はこの世界に居るネクロは

「LV4 ベエルゼ。そしてベルフェゴール、ベリトか……」

この3体のネクロは、ベエルゼをリーダーとし、ベリトが参謀。ベルフェゴールが切り込み隊長として活躍していたネクロだ。

パンデモニウムが出たときには居なかつたが、どうやら生き残っていたようだ

「どうやら今日は休んでいるところの話ではないか……」

そう呟き私は空を見上げた、雲一つ無い快晴だが。それが何かの予兆のように私には思えた

ヨツンヘイムに帰還指示が出て戻ると

「おや？ ペガサスではないですか、どうも」

壁に背中を預けているペガサスを見つけ、帽子を脱ぎながら挨拶を
すると

「ふん」

不機嫌そうに鼻を鳴らし私から目を逸らすペガサスを見ながら

(まだ彼には神の徒としての自覚が足りませんね)

1度死に。こうして蘇った私達は神に選ばれたというのに、なぜその事が理解できないでしょうか。

「良く戻った。ヴォドオン、ペガサス」

ホールの奥から赤黒い甲冑と青いマントを身に着けたネクロが現れる。私は慌ててその場に膝を着きながら

「ただいま戻りました。ベエルゼ様」

「相変わらずだな。ヴォドオン、さて態々呼び戻したのは他でもない。代表候補生に仕掛けて、守護者を引っ張り出してもらいたい、指揮はお前に任せる。必要なネクロが居るのなら言うが良い。用意する」

その言葉を聞きながらベエルゼ様に

「ペガサスは？」

「お前と一緒に出撃して貰うが、ペガサスは単独行動だ。指揮に従うようなタイプではないからな」

「良く判っているじゃないか。では俺はもう行く、ここは好かん」

そう言って出て行くペガサスを睨んでいると、ベエルゼ様が

「そう睨むな、あれはあれで使い道がある。それよりもさっきの話はどうだ？」

「勿論引き受けさせていただきます」

頭を下げながら言うのとベエルゼ様は任せたといいながら、私に作戦を説明し始めた。それを聞きながら私は

(やはりこの方は優秀だ)

二重三重の策を持つて守護者を引きずり出し、仲間と引き離す。いくら守護者とは言え足手まといを10人近く抱えてまともな戦闘が出来ないわけが無い。守護者の弱点を良く知っているベエルゼ様らしい戦法だ

「そして今回はLV1〜3に加えて、こいつらの実戦テストを頼む」

指が鳴らされ現れたのはどんよりとした目をした。3人の女の姿、だが放つ気配は人間ではなくネクロの物だ。恐らく人ベースのネクロだ。だがその割には感情が無い様だが……

「お前の疑問は最もだ。あれはネクロコアをベースにしたISの適合者だ、人格等は消してある。駒として使え」

「なるほど、ではお預かり「いや、構わん。初期型だ、破棄しても構わん。もつと強力なネクロも準備が出来ているからな」

その言葉に頷きながら立ち上がり

「それでは月が昇り次第。仕掛けさせていただきます、吉報をお待ちください」

私はそう言つてベエルゼ様に預けられた3人を連れてホールを出るとペガサスで腕組して立っ

「月が昇る頃に合流する。それまでは俺に構わないで貰おうか」

そういつて歩き去ろうとするペガサスに

「待ちなさい、話を……もう行つてしまいましたか」

ペガサスは私の言葉を聞かずに行つてしまった。相変わらず協調性の無いネクロだ。とは言え能力は高いので文句は言えない、ネクロは応じて個人主義が多い。団体行動に適したネクロなんてそうは居ないのだから

(さてと使えそう。LV3を見繕いに行きますか)

LV1と2は雑兵同然。守護者を引きずり出すにはLV3が必要だ。しかもただのLV3ではなく能力が高いほうが良い、私は判断し

ヨツンヘイムの奥へと足を進めた

「いや、楽しかったなー」

夏祭りを終えIS学園に向かいながらそう呟くと

「そうですね、日本のお祭りは楽しいものですわ」

「ああ、私も初めて来たが、また来たいと思うぞ」

「……今度は部隊の皆も呼びたいね」

とセシリア達も満足してくれたようだし……

「あの賑やかな感じはいい物だ」

「確かにね。祭りがあれだけ賑やかなのは日本くらいよね」

鈴や箒達も楽しんでくれた様で良かったと思いつつ、IS学園の敷地に入り、寮に向かっていく途中で

「!? 一夏! 飛べ!!」

「え! うわっ!」

ラウラの怒声に驚き飛び上がると同時に漆黒の刃が地面に突き刺さる。

「なっ!? なんだよ!? これは!!」

「叫んでいる暇があったらISを展開しなさい! 一夏! 敵よ!!!」

鈴達は既にISを展開している、それを見て慌てて白式を展開すると、周囲の闇が不気味にうごめき

「キキ!! ミツケターア! ミツケター!!!」

「ケタケター!! ダイヒョウウミツケター!!!」

「人間コロス! カクゴしろ!!」

闇が形を作りそこからどんどん異形達が姿を見せる。それは臨海学校のときに出てきた異形だった

「くそっ! 何でこんな所に!」

IS学園の敷地だぞ?! 如何してこんなに化け物が居るんだよ! 思わずそう叫ぶと

「一夏! 伏せなさい!!」

鈴の怒声に頭を伏せると同時に見えない衝撃がネックを弾き飛ば

す。

「一夏！ こつちだ！ センターとボックスに分かれる！ セシリア、クリス、簪は後衛。私とヴィクトリア、一夏と箒そして弥生はセンター！ 鈴とシャルロット、それにシエンとエリスは後衛の防御をしながら援護！」

ラウラはドイツでは部隊を預かるだけあつて的確な指示を飛ばす。それに従い陣形を整列する

「突出するな！ 教員が来るまで耐えるんだ！」

ラウラが指示を出しながら近づいてきた黒い影のような異形をワイヤーブレードで突き刺す、それに

「いっけえ!!」

シャルのアサルトライフルの弾が殺到し吹っ飛ばす。

「一夏！ 前に出すぎるな。銀の福音の二の舞になるぞ！」

「判ってる!!」

組み付こうとしてくる異形を雪片で弾き飛ばしながら辺りを見回す

(鎧型が6体。影見たいのが14体。少し厳しいか?)

ISが12機。過剰戦力とも思えるが、何をされるか判らない以上これくらいで丁度いいのかもしれない

(早く来てくれよ。千冬姉)

IS学園の近くで襲われたのがせめてもの救いだ、直ぐに救援が来てくれる筈だ。俺がそう思って近寄ってくる異形に向けて荷電粒子砲を放った……

何この感じ？ 私は突然感じた悪寒に思わず立ち止まった。簪

ちゃんがもうじきIS学園に着くと言ってから15分経った、余りに遅いので何かあったのではと探しに来た私がある一箇所立ち止まった

「変な感じがする」

思わず手を伸ばすと。手が吸い込まれるように消えていく、慌てて

引き抜きながら

「な、なにこれ!？」

こんなのありえない。連絡しないと思ったのだが次の瞬間、そんな考えは消し飛んだ

(もしかしたら簪ちゃんが!?)

そう思った私はその空間の中に飛び込んだ。すると

キンツ!!! キンツ!!!

ダダダッ!!!

激しい金属音と銃撃の音がする。やはり私の考えは合っていた、私はミステリアス・レイディを展開し、その音のほうへと向かった
(な、なにこれ!?)

そこでは一夏君たちと黒い化け物が戦っていた。

「くっ!? 弾切れだ!」

「こつちもエネルギーが!」

シャルロットちゃんが銃を投げ捨てる。良く見ると一夏君たちの

ISはボロボロだ

「シネーッ!!!」

簪ちゃんに飛び掛ろうとする異形を見た私は、瞬時加速で回りこみ異形に回し蹴りを放ちながら

「これどういうこと?! 説明出来る人いる!？」

そう叫びながらラストイーネイルをコールし異形に叩きつける

「お姉ちゃん!」

「楯無、良い所に来てくれました!」

簪ちゃんは被弾していないが、エリスちゃんのISはボロボロだ。

「会長! 教員達は来てくれるんですか!？」

ヴィクトリアちゃんの問いかけに私は

「来ないわ! そもそもIS学園に戦闘中の連絡は通ってない! こ
こなんか訳判らないけど! 変な空間に閉じ込められてるみたい!!」
そう叫びながらアクアクリスタルを動かして、特に被弾が酷い弥生
ちゃんとエリスちゃんを覆い隠しながら

「戦って逃げるしかないわ! 陣形組みなおして! 私が前に入るか

らエネルギーが残ってる子は私とセンター！ 弾とエネルギーが残ってるなら援護して！ 残りは被弾してるこの援護！」

直接指示を出し、戦況を見極める

(何とか行けるわね！)

敵は残り鎧を纏っているのが3体と影見たいのが5体。これなら何とかなる！ 私はそう判断して

「残りの弾薬全部使って！ 倒して逃げるわよ!!」

そう指示を出しながら、ガトリングの引き金を引いた。負傷してる子も居る、早く片付けないと……

キンツ……

乾いた音を立てて最後の葉莖が落ちる。それと同時にへたり込み「はーはーなんとか助かったみたいね？」

こつちのISのエネルギーとSEは全部使い切ったが、何とか助かったと呟き。皆を見ると

「た、助かりました。会長」

「ほ、本当ですわ。何でこんなところに化け物が」

息も絶え絶えと言う感じのヴィクトリアちゃんとセシリアちゃんに

「ぜーぜー。な、なんだよ、こいつら」

「ま、全くです。もう2度と会うことは無いって思ってたんですけどね」

荒い呼吸を整えている弥生ちゃんとエリスちゃんを見て

(休ませないと駄目みたいね。とりあえず)

「ここを出しましょう。追っ手が「ふむ。逃げられては困りますね」

!?! ここに居ないはずの第3者の声に驚き振り返ると

「う、嘘……」

思わず私はそう呟いた。そこには

「ふむ。絶望したという表情をしているようだな」

刺々しい鎧を身に纏った獣のような異形と

「がっははは!!! そりゃそうだ！ 人間は貧弱だからな!!!」

龍のような頭部をした巨大な龍人が私達を見下ろし笑い始める

「下品な。もつとスマートに喋れないのですか？ 全く」

甲冑を纏った異形がやれやれと肩を竦めながら

「さて人間。良く抗ったと褒めましょう。しかしてそれもここまで、死んで頂きましようか」

穏やかな口調だがその殺気は本物だ。だが今の私達では何も出来ない

(くっ!? 判断をミスった)

自身のミスを悔いているとき唐突に声が響き渡る

「殺すか……ふっ。なんとも三流くさい台詞だな」

その声の方向を見るとそこには何時も通りの余裕の笑みを浮かべた、龍也君がいた

「龍也君!? そんな事言っていないで逃げなさい!!」

私がそう叫ぶが、龍也君は笑ったままゆっくりと私達の横を通りながら、コートの中から何かを取り出し

「やれやれ、よりによって一夏達を狙って。空間干渉までして襲うとはな……まさかそこまでするとは思わなかったよ」

溜息を吐きながら龍也君は慣れた手つきで何かを銜えると

シユボつとライターの音がする。そして白い煙が上がる……まさかタバコ!? 龍也君みたいな優等生がタバコを吸うという行動を見て。驚きはしたがそのせいで逆に冷静になり始める自分がいる。なぜここに居るのか? 如何してこんなに冷静なのか? と言う疑問が次々沸いて来る

「ふーやれやれ偶には吸わんとやってられんよ。苛立つ事が多すぎだな」

くっくと笑いながら紫煙を吐き出した龍也君を見た異形が

「こいつ狂いやがったぜ? 俺達を見て「狂う? 失礼だな。たかだかLV3如きが言ってくれる」

LV3? 龍也君は何を言っているの? それに龍也君はどうしてあんなに落ち着いていられるの?

「貴様!? 何者だ!?!」

「さあ? 自分で考えてみたらどうだね!!」

タバコを銜えたまま地面に突き立っていた。グロリアスヴィクトリーを掴み上げ走り出す

(そんなあれって1本で20キロくらいあるのに、それを片手で!?)
その事に驚いていると龍也君はそのまま1番近くの騎士の異形に切りかかった

「ぐっ!? 重い!? なんだ貴様は!?!」

「なんだと聞かれて答える馬鹿がいるかね?」

いつもと同じ余裕綽々と言う感じで切り結ぶ龍也君は

「そこにいろ、下手に動くなよ!?!」

そう叫ぶと力強く踏み込み異形を真一文字に引き裂き。そのまま地面を蹴り上げて落ちていたアサルトライフルを掴み上げ。片手でライフルの引き金を引きながら。間合いを取り居合いの構えを取る

と
「シッ!!」

鋭い気合の声と同時にグロリアスヴィクトリーを振りぬく

「つぎやああアアアア!?!」

悲鳴を上げて獣人が両断され消滅させられる。それを見た私達は

「え。如何してこんなにあっさりと倒せるの!?!」

「信じられない……」

目の前の光景が信じられず目を見開いていると、一際巨大な異形が「貴様が何者かは知らんが! 天下無双の我が力を受けろオ!」

その巨大な拳を龍也君目掛けて振り下ろす

「龍也君!!」

簪ちゃんとエリスちゃんが悲鳴にも似た声でそう叫ぶ、龍也君の身長ほどの大きさの拳だ。あんなの食らえばひとたまりも無い

バシッ!!!

「う、うそでしょ……」

「あ、ありえねえ……」

思わずそんな言葉が出てしまう。龍也君は片手でそれを受け止め

「これで天下無双とは恐れ入る。私の仲間にはお前の倍は力が強い奴が居るぞ……」

「な、なにイ!?」「遅い!」ぐはっ!」

龍也君の鋭い前蹴りで異形の腹を蹴り上げ。そのままグロリアスヴィクトリーを構えて突き立てる

「貴様のコアはここだな、このまま抉り出させてもらう」

「ぐっ!? ぐあああ!?! 貴様!?! はっ!?! お前! お前はアアアア!?!」「気付くのが遅い、たわけ」ぐおおおおお!?!」

赤黒い球体が異形の胸から抉り出される、龍也君はそれを無造作に踏み砕き

「残るは貴様だけだな。ネクロ」

「ひっ!?! お前、お前はアアア!?! なぜ!?! なぜ貴様がここに居る!! 守護者ア!!!」

龍也君を見て恐怖の色を顔に浮かべたネクロがそう叫ぶ。守護者? 龍也君が? 訳が判らず首をかしげていると

「う。ううう……頭が痛い」

クリスちゃんの苦しそうな声に振り返ると、クリスちゃんが膝を着いて頭を抱えている、いやクリスちゃんだけではない

「うっうう……お姉ちゃん、頭痛い……」

「ぐうっ……私もです」

「ぐあ。痛い、痛い。頭が頭が割れる!!」

簪ちやんとエリスちゃん、そして一夏君が頭を抱えて唸っている。

「くそっ! 聞いてない! 聞いてない!! ここに守護者が入るなんて聞いてないぞおお!?!」

黒い光の翼を羽ばたかせ逃げだす異形を冷たい視線で見つめた龍也君は、握っていたグロリアスヴィクトリーを投げ捨てると

「投影重層」

ぼそりとそう呟くと龍也君の手から黄金の光があふれ出した。その光が収まるとその手には

「写・無駄無しの弓（フェイルノート）・写・赤原猟犬（フルンデイング）!」

突然現れた弓と剣に驚いていると、龍也君は弓に剣を番える。だがそれはおかしい弓に番えるのは矢だ、剣ではない筈だ

「我が骨子はねじれ狂う！」

剣が光を放ち弓矢へと変化する。龍也君はそれを弓に番え力強く得弦を引きながら

「赤原《せきげん》を行け、赤原猟犬《フルンディング》ツ!!!」

ゴウツ!!!

とんでもない轟音を立てて矢が放たれる、それは空気を引き裂きながら逃げた異形へと追いつがりが。背後から異形を刺し貫く

「壊れた幻想《ブロークンファンタズム》ツ!!!」

パチン

指を鳴らすと剣が爆発し異形を消し飛ばす。それは見たこともない非常識な現象だ

「た、龍也君。君は一体？」

思わずそう尋ねると龍也君はその眩きに答えず。弓を振るう

キン!!

乾いた音を立てて近くの木に突き刺さるナイフ。それは私を狙ったものだった

「出て来い」

「ふっ、バレているか」

少し離れたところから赤紫色の髪の毛の男が姿を見せる。だがその目は縦に割れていて人間とは思えない

「答えてやりたいが、少し待ってろ。あとで説明してやる」

龍也君はそう言うと言を投げ捨て男のほうに駆け出した……

「投影開始！」

走りながら武器を作り出す、作り上げるのは2本1対の中華剣

「写・干将・莫耶ツ!!」

一夏達が見ているとかは関係ない、どうせばれるんだし。全力でいく!

「ふっ。二刀流か、ならば俺も！」

ペガサスも2振りの西洋剣を作り出しながら、間合いを詰めてく

る。

「はっ!!」

「甘いな!」

キンッ!! キンッ!!!

鋭い金属音が繰り返し響き渡る。同じ二刀流が何もかも違う、私は防御の剣だが、ペガサスの剣は攻めのそして

(やはり御神流か!?)

足運びや剣の振り方が御神流に酷似しているからまさかとは思っていたが。こうして剣を合わせて確信した、ペガサスの剣は御神流だと……そしてこの時点で判った

(平行世界のなのは関係者か!?)

となると時間稼ぎが難しい。ユウリ達の持つ合流用のデバイスに魔力を通したが、まるで来る気配が無い。その事に舌打ちする

(このままで碌に戦えん!)

一夏達を護る人間が必要だ。上位レベルのネクロと戦っていれば、一夏達までは気が回らない

(早くしろ、たわけどもが!)

徐々に怒りを感じてくる、IS学園にネクロの気配を感じ直ぐにセンサーを発動させ。この場に来たのにまだ千冬達は来ない、遅いにもほどがある。そしてこの苛立ちが良くなかった。闇の中に紛れるネクロの気配を見落とした

「キキーツ!!!」

「きやあつ!!!」

ネクロの声と簪とエリスの悲鳴に振り返ると、簪とエリスの影から飛び出したLV1が2人を掴んで、私達の方に飛んでくる

「簪ちゃん! エリスちゃん!!」

楯無の悲鳴に思わず立ち止まった瞬間

「ふっ!!!」

「ぐうっ!?!」

ペガサスの回し蹴りが放たれる。干将・莫耶で咄嗟に受け止めるが、威力を殺しきれず一夏達の所まで蹴り飛ばされた。何とか体勢を

立て直し着地すると

「動かないで貰いましょうか！ 守護者!!」

黒いカソックを身に纏ったネクロ。ヴォドオンが簪とエリスを拘束しながら、私にそう告げた

「動かないで貰いましょうか！ 守護者!!」

海で俺を撃墜した男がが、簪さんとエリスさんの動きを抑えながらそう叫ぶ。

（さつきから守護者。守護者って何のことだ？ 龍也の事なのか？）

そんな事を考えている中、黒いカソックの男は

「ではまずはお久しぶりですね。守護者」

「ふん。私は貴様になど会いたく無かったよ。狂信者」

知り合いなのか？ 龍也が忌々しいという口調でそう言うと

「ふっふふ。相変わらずとだけ言っておきましょう。さて……私の要求は1つです、守護者。この2人を解放して欲しければ……貴方の持つ至高の魔道書「天雷の書」を捨てて頂きましょうか？ 安いものではないですか？ 人2人の命と魔道書、考えるまでも無い話でしょう？」

魔道書？ 一体何の話をしているんだ？ 俺にはまるで理解でき

ない。龍也達の話が……その事に混乱している

（一夏君。エネルギーはどれくらい残ってる？）

楯無さんが小声で尋ねてくる。俺は白式のステータスを確認して

（瞬時加速2回分です）

ギリギリだが何とか2回分の瞬時加速のエネルギーがあるという

（私とヴィクトリア、それにクリスが煙幕弾を放つ。その隙に頼む）

ラウラが小声でそう話しかけながら油断無く、カソックの男の様子を窺っている。だが

（あいつはどうすれば良い。あいつの剣は速いぞ）

海でも対峙した二刀流剣士を見ながらそう呟く。あいつの剣は速い上に防御をすり抜ける、仮にカソックの男から簪さんとエリス産を

助け出せたとしても、あいつに斬られる。直感でそう感じそう言うところ（未展開のグロリアスヴィクトリーがある、それを射出する）

（それに合わせて私のミサイルビットを使います）

ミサイルの爆炎で目くらましをして、その一瞬で助ける。博打と言ってもいいだろう

（私が簪ちゃんを助けるから、一夏君はエリスちゃんを）

（はい）

俺達が救出について打ち合わせをしていると

「では守護者。お答えを」

龍也に向けてカソツクの男がそう尋ねる。ここで嘘でも良いから渡すと言ってくれば助ける……

「断る」

「「「えっ!?!」」」

龍也はハッキリと断ると告げ。コートに手を入れながら

「貴様らが約束を護るとは思えない。どうせネクロ化させられるか、殺されるかして終わりだ。ならば……」

ガチャン!!!

「私が殺す」

黒光りする拳銃を簪さんとエリスさんに向けて、龍也はハッキリと告げた。その事が一瞬理解できず呆然とする

「ほう? この2人を見捨てる? 罪悪感は無いのですか?」

嘲るように言うカソツクの男の言葉に龍也は

「無いな、私は私の正義を貫くだけだ。救えるなら救う、救えないのなら切り捨てる。2人と11人。考えるまでも無い、私は私の正義の為に2人を切り捨てる」

チキリ

檄鉄が起こされる。龍也がゆっくりと照準を合わせるが、どこか遠くに見える

「ま、待て! 龍也! お前何をしているのか判っているのか!!!」

ラウラが一番先に我に帰りそう叫ぶと龍也は

「判っているさ。救えない2を切り捨て8を救う。それが私の正義

だ。迷いも揺らぎも無い……目を閉じておけ。そっちの方が恐怖が少ないぞ」

龍也のその言葉に気付いてしまった。本気だと、本気で簪さんとエリスさんを撃つ気だと

「龍也君！ 冗談きついよ……？」

「そうだ。拳銃をおろせ、他の方法があるはずだ」

「仲間を見捨てるのは間違いだ。早く銃をおろせ!!」

シエンさん達がそう言うが龍也は1度も振り返ることなく

「他に方法は無い。殺してやるのが私の情けだ、化け物にはなりたくないだろう？ 誰だってそうだ。だから私はずっと殺してきた。殺して、殺して。気が遠くなるほど人を殺して、そしてその倍の人間を救った。今回は偶々簪とエリスだっただけ、切り捨てるのが知人の顔だった。ただそれだけだ」

どこまでも淡々と告げる龍也。一体何を言っているのか理解できない。龍也がずっと人を殺してきた？ あの優しい龍也が？ そんなの嘘だ……だが龍也は一切の動揺を見せず、2人に照準を合わせた「やめて……やめてよ！ 私の妹よ!! やめて！ お願いだからやめて!!!」

楯無さんがそう叫ぶが、龍也は片手で十字を切りながら

「迷いし魂に救済があらん事を。そして魂が天の国に召される事を願う」

「止めろおおおおッ!!!」

俺達の叫びが響く中、龍也は引き金を引いた……

ターンッ!! ターンッ!!!

銃声が響き、放たれた銃弾がまっすぐに進み。簪さんとエリスさんの胸を打ち抜き、2人がゆっくりと倒れるのを見た箒達の

「きゃああああアッ!!!」

悲鳴が森の中を木霊していた……

第66話に続く

第66話

第66話

「きゃあああああッ!!!」

箒達の悲鳴が響く中でも龍也の声は意外なほど、はっきりと俺の耳に届いた。

「哀れな魂に永久の救済を……」

救済？ 哀れ？ 自分で殺しておいて何を言ってるんだ。

「龍也ア!!!お前何やってるんだ!!!」

地面に倒れる簪さんとエリスさんを見て、俺の中で何かが切れた。龍也に詰め寄り襟をつかんで近くの木に龍也を叩き付ける。

「何とは何だ？」

理解出来ないと言う感じの龍也に俺は一気に頭に血が上り。

「何で殺した!!助けれたかもしれないだろ!!!なんで、なんで殺したんだ!!!」

目の前で人が死んだ。しかもそれを行ったのが龍也だった、優しいと思っていた。どんな時も俺達を助けてくれると思っていた。そんな龍也が人を撃った。しかも同級生を……怒りとか訳のわからない感情が俺の中を駆け巡る。

「それが私の正義だからだ、救えぬ者を救おうとする暇があるなら、確実に救える者だけを救う。それが私の正義だ」

その言葉に俺が拳を握り締めた振りかぶった瞬間。俺の視界は反転し地面に叩きつけられていた。

「世界の仕組みも何も知らぬ、ただの子供に殴られる云われは無い」

「あぐがあ!!」

冷酷なまでの響きを持って俺を見下ろしそう言う龍也。俺は受身も取れず地面に叩きつけられたことで全身に痛みが走り、息も出来ないで居た。

「正義!?人を殺して、仲間を見捨てて何が正義だ!!お前の行った事はただの悪だ!」

声も無く涙を流している箒達の中で真っ先に正常な思考を取り戻したラウラが、憎悪を込めた目で龍也を見てそう叫ぶ。箒達も批難の視線を向けている。だが龍也は涼しい顔をしたまま

「正義さ、溢れ出た涙が流れた血よりも少ないのなら、それを正義と呼ぶ。何を正義と呼ぶ？」

理解できない、俺には龍也が何を言っているのか判らない。それが正しいと信じきっている龍也の顔が酷く歪んで見える

同じ人間のはずなのに全く別の生き物のように思えてくる。

「くっ……このっ!!」

目に涙をためた楯無さんが龍也に駆け寄り右手を振りかぶる。

「言ったはずだ、殴られる云われは無いと」

その平手を受け止めた龍也に楯無さんが龍也に詰め寄りながら。

「どうして!どうして私の妹とエリスちゃんを殺したのよ!!!他にもっと他の選択肢があったんじゃないの!!皆を救える!そんな道があったんじゃないの!!!」

楯無さんの涙ながらの言葉を聞いた龍也は楯無さんを突き飛ばし。

どこまでも冷酷な能面のような表情をしながら俺達を見据えながら口を開いた……

「10を救うことなんか出来ないんだよ!判るか!必ず犠牲になる者がいる、その1を切り捨て9を救う!それを正義と呼ぶぞなんと言う!甘いんだよ!お前達は!救えぬものを救おうとして救えるはずの者を救えなくなるのなら、私は速やかに救えない者を切り捨てる!そして9を救う!」

その言葉には途方も無い激情と絶望が込められていた。俺はそれを聞きながら

(これがヴオドオンの作戦か)

八神龍也なら救えないと知れば見捨てる、そして孤立させることが目的だと言っていた。だからこの絶好の襲撃の機会にヴオドオンは、攻撃するのではなく八神龍也への不信感をあおることを選んだ

「はっははは!!流石だな!!私は知っているぞ!お前は正義のためだと

1つの街を完全に破壊した！たった数人の人間を救うために、1000人を殺した殺人者だ！そんな者が正義を名乗るとか、何と滑稽だろうな！」

さらに挑発を重ね八神龍也を孤立させようとする、自分の思い通りに進んでいると思っているヴオドオンは気付いていないが

(なぜ、あそこまで涼しい顔ができる?)

小僧達の憎悪と殺意の視線を受けながらも涼しい顔をして、何かを待っているかのように思える。

「ふん、判っているさ。私は人殺しさ、正義だ、何だといって救えない者をずっと切り捨ててきた、今回はそれがたまたま知り合いだっただけさ……救えないなら切り捨てる、何故なら知り合いと仲間は違うからな」

そして八神龍也は更に小僧達の怒りを集めるような口調で言葉を つむぐ

(なんだ。何を考えている?)

この奇妙な不信感。俺の剣士としての感が何かを告げているが、その何かがわからない。それに仮に何を考えているか判ったとしても

(俺が対処する必要は無いか)

ベエルゼに指揮権を与えられているのは、ヴオドオンだ。それには俺の目的がある、ここでヴオドオンの策略が成功しようが失敗しようがどうでも良い。極論を言えばヴオドオンがやられたとしても俺には何の関係もない。

「貴方は……あの子達は貴方に憧れていたのに！」

小娘が八神龍也に近寄りそう叫ぶ、八神龍也はやはりその目に何も映さないまま

「ふん、良いことを教えてやろう……憧れとは、理解から最も程遠い感情だ。救えぬ1を捨てて9を救う、ああ、そうさ……それが私の正義さ。間違っているといえるかね？」

ここでふと疑問が形になっていく。与えられた情報と今の八神龍也の違い……それが恐ろしいスピードで形を作っていく

(なぜここまで喋る?)

八神龍也は寡黙な男のはずだ、ではなぜ敢えて挑発するような言葉を続ける？

なぜ俺とヴオドオンを無視している？

そう、それはまるで何かを待っているかのように思える、だが夜天や雷光を待っている訳ではない筈だ

(あつちにはネルヴィオが回っている、それは八神龍也も気付いているはず、では何を待っている?)

魔力同士のぶつかり合いはここに居ても伝わって来ている、それに八神龍也が気づかないわけが無い

「確かに、そうかもしれない。……でも、そんなこと受け入れられるわけじゃないじゃない！9を救うために1を捨てる？ええ正しいわよ！正しくて正しくてどこまでも正しいわ！でもね、それは見捨てるたつた1を救えないって言っているような物よ！はつきり言ってあげるわ。あなたはただ……あきらめただけの弱虫よ！」

小娘が目には涙をためてそう叫ぶ。八神龍也はにやりと笑いながら肩を竦め

「ああ、そうとも言えるな。だがね？捨てた代わりにお前達は今こうして生きている。あの2人の犠牲の元に今お前達は生きている。私はお前達を救ったんだ、感謝こそして罵倒するのは間違いいではないかね？」

おかしい、八神龍也はこんな人間ではない筈だ。何だ奴は何を考えている。

「くっ……私は貴方を許さない。絶対に！いつまでも貴方を恨む！」
「恨む？くくく……何と見当違いな事を、私にはお前にも一夏達にも恨まれる謂れはないさ」

この時八神龍也の顔付きが一瞬だけ変わったのを俺は見逃さなかった。

「私の妹を殺しておいてええ!!」

自身の首にと伸ばされた手を弾きながら八神龍也は

「このまま話していても時間の無駄だ。根本的な事でお前達は勘違いしているのだからな」

「勘違い!? 簪ちゃんとかエリスちゃんを殺しておいて、何を言うのよ!!」
「そう。そこがすべての間違いだ……私の正義は確かに救えぬ1を捨てて9を救うことだ。ここに間違いはない」

「なんだ? 奴は何を言っている? 八神龍也は余裕の笑みを浮かべながら」

「だけどな……簪もエリスも切り捨てる1なんかじゃないんだよ」

地面に転がる小娘を見て笑う、その笑みは全て自分の計算通りに話が進んだという事を示しているように見え

「はっ? 貴方を?」

「ま、まさか!」

困惑する小娘と八神龍也が何を言っているのか理解したヴオドオン。俺は即座に片手にクラスソラスを構えた

「くつくつく……だからこういふことさ!! 簪! エリス! いまだ!!」

倒れていた2人が一瞬でISを展開し、俺とヴオドオンに刃を向ける

「ちいッ!!」

突き出された薙刀を上にと弾いたが、代わりに叩き込まれた荷電粒子砲に吹っ飛ばされる。

「ぐうっ!!」

ヴオドオンは下から切り上げられ、右腕に深い傷を負った。そして八神龍也の後ろにと離脱していく2人を見て

(嵌められたって事か)

さつきまでのやり取りも全て八神龍也の計算の上。俺はこの時初めて八神龍也の巧みな話術と卓越した演技によって欺かれていたことを知った。やはりこの男は

(全てを救う一手を講じていただけか!)

自身を悪としあえて挑発と罵倒をその身に受けながらも、俺達の間あの2人を無事に助ける一手を打っていただけだったのだ……

「ぐっ！　なんで簪ちゃんとエリスちゃんが倒れてるの」

ツバキが唇を噛み締めるのを見ながら

(なにか裏があるな)

ワタシ達は龍也達がいるところから少し離れたところで様子を窺っていた。無論ワタシもツバキも反対したが

【ネクロが八神を狙ってきた可能性がある。少し観察すべきだ】

最初から龍也を疑っている千冬がそういつて動かないので、ワタシ達も待機することになったのだ。だがワタシ達が見ている前で簪とエリスは龍也の撃った銃弾に倒れた

「やっぱり裏切ったのか!」

千冬がやはり私の考え通りだと言いたげな表情をするのを見ながらワタシは

(一体何を考えている?)

龍也が何を考えているか判らず。しかしかといって詰め寄ることも出来ず。待機していてふと気付いた

(?　エリスの手元の草が千切れている?)

無理やり引きちぎったように見える草が数本視界の隅に映る。何かおかしいと思ひ観察していて気付いた

「千冬、ツバキ。龍也が2人を殺したと判断するのは早いぞ」

倒れている簪とエリスを指差して

「胸が動いてる。まだ生きてる……いやむしろ最初から死んでなどいないということではないのか?」

魔法とやらで死んでいるように見せているだけと言う可能性があるというところ

「そっか……その可能性があるわね」

まだ龍也が2人を殺したと判断するのは早い……それにワタシとしてもネクロを倒す切り札にしてワタシ達全員が生き残る為のカードを手放すという事はしたくない

(裏切ってくれるなよ。八神龍也……)

少ない時間だが共にいた。ワタシは八神龍也は信用に値する人間だと思っている。だからこそワタシは龍也を信じて今はまだ動かな

い。きつと何とかしてくれると思って……龍也の後ろ背を見つめた

少し時間は遡る。

私とエリスが化け物に捕まって、龍也君が私達に銃を向けたとき。怖くて怖くて仕方なかった、でも

(心配ない。お前達に弾は当たらない)

脳裏に突然龍也君の声が響いた、ISのプライベートチャンネルではなく。アニメとか漫画で見るとようなテレパシーって奴に近いような気がした。隣のエリスも驚いたような顔をして龍也君を見ている

(もう一度言う心配するな。一芝居打っただけだ、合図したらISを展開して離脱しろ。良いな)

少しだけ頷くと龍也君は冷酷とも言える光をその目に宿して

「無いな、私は私の正義を貫くだけだ。救えるなら救う、救えないのなら切り捨てる。2人と11人。考えるまでも無い、私は私の正義の為に2人を切り捨てる」

チキリ

檄鉄が起こされる。龍也君がゆっくりと照準を合わせる。紛れもない死の気配を感じ身が竦むでも、それでも龍也君の言葉を信じたい怖いのを我慢して龍也君を見る

「ま、待て！龍也！お前何をしているのか判っているのか!!!」

ラウラさんが龍也君にそう声を掛けるのが聞こえる。だがそれよりも私には

(最後に1つだけ言う、巻き込んですまない。そして私を信じろ、必ず無事にお前達を取り戻す)

「判っているさ。救えない2を切り捨て8を救う。それが私の正義だ。迷いも揺らぎも無い……目を閉じておけ。そっちの方が恐怖が少ないぞ」

(痛みは少ないはずだが、多少の衝撃は行く。目を閉じて歯を食いしばっておけ)

龍也君から語られる言葉と違う言葉が脳裏に響く。これが何か気になるが、今はそんなことを考えている場合ではない。言われたとお

り目を閉じて歯を食いしばる

「迷いし魂に救済があらん事を。そして魂が天の国に召される事を願う」

十字を切りながら放たれた2発の銃弾は私とエリスの胸に当たった。その衝撃で化け物が手を離し、地面にと転がるが

(い、痛くない……)

紛れも無く銃弾は私とエリスの胸を捉えた、だが衝撃は無く、痛みもまるでない

(い、一体何が起きてるの?)

自分に何が起きているのかわからず混乱するが、龍也君に言われたとおり合図があるまで死んだ振りをする。その間に龍也君は一夏君やお姉ちゃん達に罵倒され、殺意と憎悪を込められた目で見られている。それに耐え切れず動こうとすると

(まだまだ！まだ動くな、簪、エリス)

脳裏に響く声に制止される、少しだけ薄目を開けて隣を見ると、エリスも動こうとしていたのか少しだけ手元の草が千切れていた

(だよね……エリスも動きたいよね)

私とエリスは生きている、だがそれはお姉ちゃん達は知らない。私達を殺したと思っっているお姉ちゃん達に罵倒されている龍也君は「ふん、良いことを教えてやろう……憧れとは、理解から最も程遠い感情だ。救えぬ1を捨てて9を救う、ああ、そうさ……それが私の正義さ。間違っているといえるかね？」

敢えてお姉ちゃん達を挑発するような言葉を続ける、それに化け物たちは喜び、お姉ちゃん達は怒りを深めていく。それを見て私は(注意を自分にひきつけてるの……あんなことを言っただけ……)

私達から自分にと注意を引き付けて、私とエリスが離脱できるチャンスを待っている。もしそのチャンスがあるとすれば、それは一瞬にも満たない刹那の時しかない。それを作り出すために敢えて憎まれ役になって居るのだと判る、そしてその時が来た。龍也君がお姉ちゃんの手を振り払いながら

「だけどな……簪もエリスも切り捨てる1なんかじゃないんだよ」

さつきまでの冷酷な笑みではなく。いつもと同じの余裕と優しさをにじませる笑みでそう告げる

「はっ？貴方何を？」

「ま、まさか!？」

何がなんだか判らないという表情をしている、お姉ちゃんとカソツクの異形を見ながら龍也君は

「くつくつく……だからこういうことさ!!簪！エリス！いまだ!!」

その言葉を聞くと同時に残りのエネルギー全部を使って、式式を起動させ、赤紫の髪をした男に切りかかる

「ちい!!」

舌打ちしながら私の攻撃を弾いた男の腹めがけ最後の荷電粒子砲を叩き込み、その反動で龍也君達の方に向かう。エリスは

「はっ!!」

「ぐうう!？」

神速の抜刀術でカソツクの男の腕を切りつけ、私と同じ様に離脱してくる

「か、簪ちゃん!？え、え？ど、どういうこと!？」

「え、エリス!？撃たれたのではないのか!？」

お姉ちゃんとラウラさんが私とエリスに近寄って来てそう尋ねてくる。箒さん達も

「撃たれた後がない!？」

「それに血痕も……え？え。ど、どういうこと!？」

私達が混乱している中、龍也君はにやりと笑いながら私とエリスに「良い子だ。ちゃんとされたとお里、お守りを持っていたな？」

そう言われてはっとなって手首のブレスレットを見る、鮮やかな寶石の色は失われている。もしかしてこれが？ 私とエリスを護ってくれていた？ お守りとは聞いていただけで、こんなの見たことも聞いたこともない

「貴様あ!？騙したな」

カソツクの男がそう怒鳴ると龍也君は髪をかきあげながら、涼しい顔をして

「くく、簡単な話さ。何も判ってない子供を利用すれば簡単に騙せる、ああ、楯無の激昂は実によかった……そのおかげで時間が稼げた」

龍也君がそう言うのと木々の間から

「エリスちゃん！皆大丈夫!？」

「大丈夫か！一夏」

「すまない、来るのが遅れた」

木々の間から織斑先生とツバキさん、そしてユウリさんが姿を見せる。それを見た龍也君は手首につけていた、ブレスレットを外しながら織斑先生達に

「ふん。この状況で遠くで観察とは恐れ入る。よほど私が信用できなかったのか？」

龍也君の攻めるような視線に織斑先生が目をそらす。代わりにツバキさんが

「その事は謝るわ。ごめんなさい」

「ふん。まあ良いどちらにせよこれで子守は終わりだ。あとはお前達で守れ」

そう言いながら私達の前から離れながら、1人で赤紫の髪とカソツクの男の元へと歩きながら

「これでやつと戦える……私本来の姿でな」

私達から離れていくその背中に私は思わず夢で何度も見る紅い荒野に佇む騎士の姿を見たような気がした……

(どうなってるんだ!?)

死んだと思っていた簪さんもエリスさんも生きていて、何がなんだか判らない、ごちゃごちゃと思考が乱れ何も考えられずにいる中

「これでやつと戦える……私本来の姿でな」

俺達の前からゆつくりと歩きさつて行く、だが龍也はISを展開させず、生身のままだ

「龍也?お前何を?」

龍也の言ってる言葉が判らず、思わず俺は龍也に近寄ろうとしたが(うつ……な、なんだ!?)

身体が動かない、まるでその場に縫い付けられたように、それに龍也の身体から湯気のように立ち込める何かがある。俺の足を止める。何かなんだか判らないが俺達と龍也では立ち位置が違うとでも言うのだろうか。俺は、いや俺達はその場から動けず、龍也の後姿を見ることしか出来なかった……

「1つ……私は私を友と信じてくれた者の信頼を裏切った」

ゆっくりと歩みだしながら龍也がそう呟く、それと同時に龍也が纏う空気が変質し始める。

「2つ……一瞬剣としての決意を鈍らせた」

空気が歪んで見えるほどの闘気に息が詰まる。俺達が知る龍也とはまるで違う、一言で言うのなら歴戦の戦士だけが纏うことの許される、必殺の気迫

「あ、あれは本当に龍也か？」

「空気が重いですわ」

箒とセシリアが耐え切れなくなって片膝をつく。俺だって足が震えて立っているのがやつとだ。空気が軋みそこだけ時が止まってるかの印象を受ける

「3つ……そのせいで一夏達を死なせかけた……私は自分の罪を数えたぞ。ペガサス、ヴオドオン……」

龍也がゆっくりと左手をペガサスとヴオドオンに向けると

ゴウツ!!!

凄まじい音を立てて龍也の背中から炎が噴出したかと思うと、それは穏やかな音を立てて炎の翼にと変化する

「な、何が起こってるのよ」

「あ……す、すげえ」

「う、ううううう。頭が痛い」

呆然とする者。その幻想的な光景に目を奪われる者。異常な雰囲気、気にもまれ両膝をつく者

俺は声を発することも出来ず、目の前の光景に目を奪われた。炎の翼はゆっくりと龍也の姿を覆い隠した。そして次の瞬間夜が一瞬昼間になったかのような光が辺りを照らす。その余りのまぶしさに一

瞬目を閉じ、再び開いたとき俺は目を見開きながら

「うっ……あ……う、嘘だろ?」

俺は思わずそう呟いた。目の前の光景が信じられなかったから……だがそれは紛れもない現実で……

「黄金の……騎士」

全身を覆う黄金の甲冑に身を包んだ龍也の後姿が見える。気のせいか身長も少し伸びているような気がする……そしてそのうち龍也の美しい銀髪が燃えるような緋色へとその色を変えていく……その姿は間違いなく臨海学校のと きに見た黄金の騎士の姿で間違いなかった

「さあ……お前達の罪を……数えろ!!」

どこまでも力強さに満ちた声で2体のネクロを指差して龍也はそう叫んだ

「はっ……いまさら数え切れるか!!!」

ペガサスは走りながら甲冑を展開し龍也に突っ込む。ヴオドオンは

「神の徒たる私に罪などありません!」

『プロヴィデンス』

USBメモリのようなものを腰のベルトにセットし走り出す、その姿はあの時海で見た異形の姿へと瞬く間に変わっていく。ペガサスとヴオドオンが同時に攻撃を繰り出した瞬間

「ぐうツ!!」

「くっ?」

黄金の閃光が空を走り2人を弾き飛ばす、いつの間にか龍也の手には美しい装飾が施された黄金の剣が握られていた。

それは豪華な装飾に美しい蒼の装飾が施されたその剣は武器には見えず、まるで王様や騎士だけが持つ杖のように思えた

(なんだよ……あれ)

考えるまでも無く、あれはISの武器ではない。美しさと獰猛なまでの存在感を併せ持つ、あれが人間が作り出したものとは思えない。

龍也はその剣を軽く振るい正眼に構えながら

「たった2体のLV4で私を止めれる等と思わないことだ」

威厳と力強さを兼ねた龍也のその言葉を合図に、俺達の常識では凶ることの出来ない戦いが幕を開けたのだった……

そしてこの戦いを切欠に、俺達の日常は終わりを迎え。

この瞬間まで想像もしなかった、非日常にと足を踏み入れることになる事を今の俺は知らなかった……

第67話に続く

第67話

第67話

龍也がペガサスとヴオドオンと戦い始めた頃。IS学園の上空で待機していたはやて達の前に

「やっほ。またあったね♪」

闇を引きつれた女性が姿を見せる。それを見た私は

「ネルヴィオ……」

前のネクロの襲撃のときに現れた人型ネクロで、ヴィヴィオに瓜二つなネクロ。ナツクルガードに脚甲を身につけた闘士タイプだ

「名前を覚えててくれて嬉しいよ……まあ嘘だけどね。お前なんか私の名前は呼んで欲しくない。私の名前を呼んで良いのはお父様だけ」

うふふふと笑ったネルヴィオは私達を睨み

「貴方達の存在はお父様の価値を損ねる。だから死んでよっ!!」

ノーリアクションでの砲撃が同時に4発放たれる。それをとっさに回避しながら

「なんや、かなりキテるな」

「そうだね。はやてといっ」だまつとれ「あいたっ!? デバイスで頭殴るのなし!!!」

フェイトちゃんが講義するが今のはフェイトちゃんが100%悪いのでフォローしない

「ふふふ……顔を踏み碎いて。ボロボロにして殺してやる!!!」

100%殺意しか写していない目で私達を見据えるネルヴィオが踏み出そうとしたき

「オチツイテ。ネル?」

「セリナ……ふふ。ありがとう」

闇から現れたホワイトカラーのISを身にまとったネクロがネルヴィオを宥める。その顔は

(楯無に似てる……)

蒼銀色のセミロングで真紅の瞳。髪の色は違うが、楯無にそっくり

だった。違うのはその瞳。生気のないどんよりと濁り切った紅目。それが死者を思わせる

「おちツイテ。ひとりずつカクジツニ、ソノタメニネクロもつれてきてる」

心配しているような声色だがその声に感情は無く機械的とも言える冷たさを伴っていた

「うんうんだね、ありがと、セリナ！ナイスフォローだよ！」

ネルヴィオがセリナにありがとと言って抱きつきながら、私達を見て

「ふふ……ついつい頭に血が上るのが私の悪い癖」

ふふふと笑ってネルヴィオはネクロを呼び出し

「駒は全部使わないとね!!!」

「ソウ！そのトオリダヨ？ハヤクつぶして、ネルのパパをむかえにいこう」

もうあの2人にとって私達を倒して龍也さんを迎えに行くのは決定事項のようだ。

「フェイトちゃんはトップ。私はフォローに回る。なのはちゃんは遠距離攻撃な」

指示を出すはやてちゃんに頷き。私達は陣形を組んだ。どうやらそう簡単に倒せる相手ではなさそうだ……

黄金の騎士が……いや龍也がゆっくりと剣を構えながら

「来いど3流格の違いつて物を教えてやる」

「安い挑発と言いたい所だが……乗ってやる。八神龍也」

ペガサスが2刀を構え好戦的な笑みを浮かべると、全身に鎧を纏った異形「ヴオドオン」が

「待ちなさい。指揮権は私にあるはずですよ！」

「はっ！そんなもの知ったことか！ 大体お前は八神龍也をこの場に誘い出すまでの協力だと言ってあったはずだ！」

地面を蹴りISの瞬時加速並みのスピードで龍也に迫るペガサス。龍也もそれと同等かそれ以上のスピードでペガサスに肉薄する

ガキンツ!! キンツ!! キンツ!!

鋭い金属音が響くと同時に黄金の閃光と漆黒の閃光が何度も何度も闇夜を照らす。

「良いでしょう!あなたが死んでも私は知りませんからね!」

ヴオドオンが龍也とペガサスの戦いに割り込む。龍也の背後に回りこみ

「はっ!」

ペガサスの攻撃を避け体勢を崩している龍也の頭目掛けて繰り出される拳。しかしそれは空を切り

「甘いな。私が何年一人で戦ってきたと思っている?」

「がっ!」

素早く身を屈めた龍也がヴオドオンの腕を掴んで背負い投げをする。宙を待ったヴオドオンに龍也の拳が叩き込まれ、更に回し蹴りが頭部を捉える。サッカーボールのように地面を弾んで木に叩きつけられるヴオドオンに目もくれず。前を向いたままペガサスの2刀を一息で弾き返す

「やってくれる。最強と呼ばれるだけはあるな」

「ふん。そんなのは勝手に呼ばれているだけだ。最強だの何だのそんなものは只の言葉遊びに過ぎん!!」

黄金の閃光が空を抉りカマイタチを起こす。こんな現象は漫画やアニメでしか見る事の出来ない、目の前で起きているのに何処か遠くの現象のように思えた。龍也の一振りごとに地面が抉れ、木々が宙を舞う……そんなありえない現象を起こしているのはISでも化け物でもなく人だ。

(龍也……お前は一体何者なんだ?)

友人だと思っていた。ずっと頼れる仲間だと思っていた……だが龍也は俺が目標としていた黄金の騎士で、俺や箒達が見ていた物と全く異なる世界を見ていたと言うことを俺は初めて知った……

これが魔法使いの実力か……

ワタシは楯無達を護りながら龍也の戦いを分析していた

「凍てつけ氷の足枷！」

ダンッ!!!

打ち付けた拳を中心に氷柱が走る。それと同時にワタシ達の場所までひんやりと冷気が漂ってくるのを感じた

「はっ……こんな子供騙しが！」

だがそれは振るわれた剣と蹴りで完全に砕け散る、だが龍也にはそれさえも計算の上だったのか。剣を背中に回し左手をネクロのほうにむけ

「撃つは雷！響くは轟雷！サンダーフォール!!」

ズダーンッ!!!

「ぐああああッ!!!」

天空から降り注いだ雷が氷に乱反射しネクロを焼き尽くす

(とんでもないな。自然現象まで操るのか)

氷・雷。どれも自然の力だ。どれだけ科学が発達しようが人間では到達できない境地

「なめるなあ!!」

気合一閃で雷を弾き飛ばし。帯電しながらも龍也に突っ込んでいくネクロ。確か……こいつはペガサスの筈だ。IS学園の所持しているネクロのデータに名前があった。臨海学校のとくに強襲してきたネクロだ。ペガサスは下からの2連続の鋭い切り上げを放つ

「ちいっ!?!」

キンッ!!!

弾かれた剣が宙を舞いこつちに落ちてくる。それは運悪く楯無のほうに飛んできています。普段の楯無なら手を貸さずとも避けられただろうが、魔法と言う超常現象を前に我を忘れているのか反応が鈍い

「楯無！」

「えっ?きやあっ!?!」

その手を掴んで強引に引き寄せると同時に楯無の手前に龍也が持っていた剣が突き刺さる

ドスツ!!!

それは鋭い音を立てて刀身の7割を地面の中に沈めた。ただ落ちてきただけなのになんていう切れ味だ……

「はっー!」

無手の龍也にヴオドオンとか言うネクロが迫る。さつきまでは剣で間合いを取っていたが、今は無手完全に懐に飛び込まれた龍也を見て、とっさに目の前の剣を掴み引き抜こうとするが

(な、何だこれは!?)

渾身の力で引つ張っているのにびくともしない。龍也は軽々とこれを片手で振るっていたというのに

「ユウリ!?何を遊んで……え!?何これ!?!」

ツバキも剣の柄を掴んで引き抜こうとするが案の定。ピクリとも動かないワタシとツバキの行動を見ていないのに龍也は

「無理だ、お前たちにはそれを抜けん。それに……「はっ!!」私は素手でも十分強い!」

ズダンツ!!!

鋭い踏み込みの音が響いた次の瞬間……

「羅刹……剛手甲!!!」

残像が見えるほどの高速の2連続の裏拳が放たれる、それはまるで爆弾が爆発したような轟音を立ててヴオドオンを吹っ飛ばす

「ふー……「残心してる場合か!」 違うだろうな!」

ISを展開していても見えるかどうかの神速の斬撃が龍也に迫る

パシツ!

パシツ!!!

腕の軌道を見極め。的確にいなし直撃だけは回避している龍也だが、浅く頬や腕を切られ鮮血が闇夜に赤い筋を作り出す

「「っ!」」

血の蒸しかえるような臭いに顔を顰める織斑と箒だが、殆どは龍也の戦いから目を逸らさず、その目に涙を浮かべ、自身の足元に飛んできた血に嫌悪感を見せても。龍也の戦いをじっと見つめていた、何を

思って戦いを見ているのかは判らない。超常を操り自在に氷や炎を扱う龍也を恐れているのかもしれないし、それとも龍也がヒーローにも見えているのかもしれない……

(ユウリは知ってたの？ 龍也君の事を?)

ひそひそと尋ねてくる楯無に、他の人間には聞こえないように気を付け

(知っていた。タスクからも要注意人物として名前が挙がっていた。不可思議な能力を持つとな)

まさか魔法使いと聞いていたとは言えないし、ネクロが警戒していたとも言えずに若干の嘘を交えながら話していると

「いつまでも無手で防げると思うなよ!!」

「がつぐうっ!!」

ペガサスの膝蹴りが腹にめり込み、龍也の身体がくの字に折れた所に強烈な横薙ぎが龍也の顔を捉え。今までの非ではない鮮血が闇夜に飛び散る。龍也がとっさに右手で顔を隠すと同時に

「吹っ飛べ!!」

鋭い風切音を伴った鋭い回し蹴りが龍也の胸を捉え、龍也は凄まじい勢いでワタシ達の方に向かって吹っ飛んできた。その顔は鮮血に染まり緑にもものなど見えていないように見えた。流石のこれにはラウラ達でさえ息を呑んだが、そんな中龍也に近寄った人物がいた……恐怖に顔を歪めながらもその手にハンカチを持って近づいたのは簪だった……

「だ、大丈夫?」

目から血を流している龍也君にハンカチを差し出そうとすると

「いや。構わん……気にするな」

それを手で制して立ち上がった龍也君はやはり目が見えてないのかふらつと一瞬身体が傾いた。慌てて手を伸ばそうとすると

「止めておけ。汚れるぞ」

その手を振りほどくように立ち上がった龍也君は顔に手を当てて

何事か呟いた。すると蒼い光が龍也君の顔を包み直ぐに消える

「ふう……これで大丈夫だ」

血まみれの龍也君の顔は一瞬で元に戻り、閉ざされていた眼も両目とも開かれていた

「え？なにが？」

訳が判らずそうつぶやくと龍也君は前を向いたまま。

「下がっている。それと眼を閉じておけ、ここから先は子供が見るものじゃない。一夏達もだ、これから目を閉じて耳を塞げここからはお前達が踏み込むべき領域じゃない。全てを忘れろ、そして見るな。1度でも見れば何度でもこの悪夢はお前達を襲う」

龍也君の纏う空気が1段下がったような気がする。全身に寒気が走り手が震える。そんな私をツバキさんが抱き寄せながら

「何が起きるって言うの？」

「あいつらの本性が出てくるのさ。闇よりもなお深い闇がね」

龍也君がそう告げると同時に私とエリスを捕まえた異形が

「良い感をしていますね。そう遊びはここまで守護者。貴方が1人の内に仕留めさせて貰いますよ」

その異形の後ろから3人の女性が姿を見せる。それを見たセシリアさんが

「!? ファアラさん!?!」

「馬鹿な。長期療養中ではないのか!?!」

このとき私は知らなかったが、ファアラと言うのはセシリアさんとヴィクトリアさんの先輩に当たり。サイレント・ゼフィルスの専属縦者だったが、病気で長期療養中だと本国から言われていたらしい「長期療養? くくっはははは!! そんなわけが無いでしょう? サイレント・ゼフィルスを奪取した時にちゃんと殺して連れて帰っていますよ」

殺した? でも目の前にいるのに? 私達が混乱していると3人の女性は何も写していない目で私達を見据え

「ギシヤアアアアアッ!!!」

人間の物とは思えない咆哮をあげる。それと同時に身体が裂けそ

これから金属の光沢を持つ物が次々飛び出して……

「うっ……」

血が撒き散らされ濃厚な血の臭いが辺りに満ち吐き気を感じて口に手を当てると

「四神結界！」

私達を囲うように4つの剣が地面に突き立てられ。お姉ちゃんの前に突き刺さった剣を中心にして蒼い障壁を発生させる

「多少はましになるだろう。ほんの気休め程度だがな……」

龍也君がそう呟くとほぼ同時に女性の姿はISとさつきまでいた化け物が混ざったような異形へと姿を変えていた。顔や体型に元の名残は何一つなく本当に化け物に見えた

「ふふ。さあショータイムの始まりです。行きなさい!!」

「「「シャアアアアッ!!」」」

咆哮と共に龍也君に襲い掛かる異形となった女性達。龍也君も駆け出しながら

「投影開始 《トレースオン》 ……写・干将・莫耶ッ!!」

2振りの中華剣を両手に構え、1番最初に突っ込んできた。打鉄に似た装甲をしている異形を横薙ぎに引き裂いた瞬間

「痛い！痛い！イタイイタイ!!!」

苦痛に咽び泣く女性の声が響く。振り切ろうとした中華剣を止めた龍也君の腕をラファールに似た装甲の異形が手にしたライフルで打ち抜く

「ちっ！投影開始 《トレースオン》 ……写・干将・莫耶ッ!!」

再び何かを呟くと弾け飛んだ中華剣が再度龍也君の手の中に現れ、ブルーティアーズに似た異形と切り結ぶ

「ああああーッ!!!痛い！イタイイタイ!!!私の腕!?私の足!? 私の顔!? 全部全部痛いよおおおおッ!!!」

その間も絶え間なく女性の悲鳴が私達の耳に届く。その叫びを聞きたく無くて耳を塞ぐがその悲鳴は耳を塞いでも私の耳に届く

「ぐっ！やってくれるな。ヴォドオンッ!!!」

龍也君が間合いを取ってそう怒鳴るとヴォドオンははて？ と身

振りをしながら

「失敗作を使えるようにしていただけですよ。痛みと怨嗟の声は貴方の心を縛り動きを鈍らせる。役に立たぬ者の利用価値などその程度でしよう？ほら。そんな事を話している場合は無いでしょう？」

龍也君目掛けペガサスと言う人間にしか見えないネクロが龍也君に近づくと

「余所見をしている暇など与えん！」

「くっ!!？」

キンー！ キン!!

鋭い金属音が何度も何度も響き渡る。しかし龍也君は明らかに集中を乱していた

「はっ!!！」

下からの切り上げで再び龍也君の手から中華剣が弾かれ宙を舞う

「うあああああ!!?痛い！痛いよお!!!殺して！壊して!!もう人を殺すのも！何かを壊すのもイヤアアアアア!!！」

「イタイイタイイタイツ!!!頭も心もイタイよおおおおツ!!！」

「殺して！早く殺して!!壊して貴方はセイギなんダろお!!?私達を壊して、ハヤク殺してくれええええ!!！」

赤い瞳から黒い涙を流しながら殺してくれ、壊してくれと懇願する異形。その余りに痛々しい悲鳴に耳を閉じて目を閉じてもあの嘆きと絶望は私達の心を抉る

「うっうう………」

「酷い………」

あちこちから泣声が聞こえてくる。当然だ……私だって涙しているんだ。こんな光景を見て泣かないわけがない

「私はお前達を哀れむ!!せめてその魂だけは私が救済する!!！」

凜と響き渡る龍也君の声。殺して来たと言っていた……それはもしかするとあの人達のような人達の事を言っているのかもしれない

「人としての尊厳を持って逝くが良い。黄泉路への案内人私が仕る！

投影開始《トレースオン》ツ!!! 写・無毀なる湖光《アロンドイト》ツ!!!」

アロンダイトの名に驚き少しだけ目を開き龍也君の手元を見る。そこには湖面のような刀身をした美しい剣が握られていた。

アロンダイト……アーサー王伝説で出てくる裏切りの騎士が所有した聖剣。龍也君の手にあるその剣はまるで伝説から抜け出てきたような美しさと神々しさを兼ね備えていて。武器のようには見えなかった……

「ああアアアッ!!!」

咆哮をあげて襲ってくる異形を一振りで両断する。すると美しいまでの蒼い炎がその遺骸を包む

「私が殺す。私が生かす。私が傷つけ私が癒す。我が手を逃れうる者は1人もいない。我が目の届かぬ者は1人もいない……」

謳うように紡がれていく言葉……

「打ち砕かれよ。敗れた者、老いた者を私が招く。私に委ね、私に学び、私に従え。休息を。唄を忘れず、祈りを忘れず、私を忘れず、私は軽く、あらゆる重みを忘れさせる」

舞うように剣を構え振るう。それは吸い寄せられるように異形を両断し瞬く間に炎に呑み込む

「装うなかれ。許しには報復を、信頼には裏切りを、希望には絶望を、光あるものには闇を、生あるものには暗い死を……休息は私の手に。貴方の罪に油を注ぎ印を記そう。永遠の命は、死の中でこそ与えられる。……許しはここに。受肉した私が誓う……この魂に憐れみを《キリエ・エレイソン》」

ザンツ!!!

驚くほど静かな呟きだが。それは全て私達の耳にと届いた……最後の異形が両断され炎に吞まれる。その蒼い炎の中で異形の顔がぼろぼろと崩れそこから穏やかな笑みを浮かべた女性の顔が出てきて

ありがとう……殺してくれて……

耳ではない。心に響く声なき声が私達には聞こえた……

龍也君はその蒼い炎に一瞬だけ視線を向けると前だけを見て走り出した

「人をなんだと思っている!!!」

「人など神に選ばれなくては何の意味もない存在！ただ私達の餌となれば良い！」

「人の心を踏みにじる外道共がツ!!貴様らの存在がどれだけ世界に絶望を与えた、どれだけの人々から笑顔を奪った!!!」

炎のような怒りそれを全身に纏いアロンダイトを振るい続ける龍也君

「はっ！偽善者が何を言う！正義だ何だといって人を危める者が何を持って我らを否定する！お前とて私達と何も変わりはない!!」

「判っている！判っているさ!!!私は何よりも悪を重ねてきた！決して許される者ではない！だが！だからこそ私は!!」

金属と金属がぶつかり合う激しい金属音の中でも龍也君の言葉は私達に届いていた

「全ての救済を願う!!もう誰も涙を流すことの無い時が来ることを願う！その為になれば私は！例えこの世の全てを悪を担う事になったとしても構わない!!!それが全てを救う方法だというのなら!!私はその悪をこの身に背負うだけだ!!!」

「ぬっ！」

その強烈な一撃はヴォドオンの体勢を崩す。そして剣を持ち直し両断せんと振りかぶった瞬間

「ひゃーはははははっ!!!くたばりやがれ!!夜天の守護者ツ!!!」

突如現れた悪魔のような異形の一撃が龍也君の胸に叩き込まれる

「がっ!!ぐうう……ベルフェゴール!!!」

「ひゃーはははは!!覚えててくれて嬉しいぜえ!!その礼だ！首を撥ねて殺してやるよ!!!」

また新しい敵が出てきた……これで3対1になってしまった。私は思わず

「ツバキさんと織斑先生のISは!？」

そう尋ねるが2人は気まずそうに顔を逸らした。ISが通用しないってことは判っている。それでも龍也君を1人で戦わせるのが酷く心を傷つける。思わず目を閉じた瞬間ふいに耳に小さな呟きが届いた

「……鶴翼、欠落ヲ不ラズ《しんぎ　むけつにしてばんじやく》」

それはとても小さな眩きだった。眩いているのは龍也君だ

「ふっ！3対1が卑怯だなんて言うなよ!!」

振るわれる2刀、それをアロソナイトで防ぐのは無理だと判断したのか龍也君は再び中華剣を両手に持ち。その嵐のような攻撃を防ぎ続ける

「心技、泰山ニ至リ《ちからやまをぬき》」

「心技、黄河ヲ渡ル《つるぎみずをわかつ》」

キンツ!!!　キンツ!!!

鋭い音を立てて龍也君の手から中華剣が何度も弾きとび。その度に新しい中華剣が龍也君の手の中に現れる

「ふっ！死んで煉獄の炎に焼かれるが良い！」

「悪いな。まだ私は死ねないのだよ!!!」

3体の連続攻撃を防ぐのは至難の業なのか。徐々に龍也君が押され始める。だがそんな中でも龍也君の詠唱は続く

「唯名、別天ニ納メ《せいめいりきゆうにとどき》」

「両雄、共ニ命ヲ別ツ《われらともにてんをいだかず》」

ヒュン！　ヒュン！　ヒュンツ!!!

鋭い風切音があちこちから響く。龍也君は一気に私達の前まで跳んで

「鶴翼14連！交わせるものなら交わしてみろ!!」

あちこちから飛んでいった筈の中華剣が弧を描いて異形へと殺到していく。そしてその包囲網が完成したと同時に

「壊れた幻想《ブロークンファンタズム》ツ!!」

14の中華剣が全て爆発し辺りを炎の海に包み込んだ……

壊れた幻想《ブロークンファンタズム》で発生した爆炎を見ながら（ベルフェゴールまで……この調子で増えられると流石に不味い）

LV4の1体や2体ならどうという事はない。しかしこの調子で

増えられると流石に不味い……

(致し方ない……)

後ろの一夏達を見て

「良いか！絶対に動くなよ！弾き出されたくなくなったらな！」

「何を言ってるの？もう倒したんじや!？」

「あの程度で死ぬほどLV4は甘くない！ただの時間稼ぎだ！良いな！絶対に動くなよ！」

そう何度も念を押してから拳を握り締めながら

「身体は剣で出来ている……」

脳裏に思い浮かべるは最強の盾……

「熾天覆う七つの円環《ロー・アイアス》ツ!!!」

真名を叫ぶと同時に発生した7つの盾の1枚に黒い砲撃がぶつか
る。ギリギリだったみたいだ……

だが熾天覆う七つの円環《ロー・アイアス》は簡単に貫かれる護り
ではない。十分な時間稼ぎになるが

(またはやて達に怒られるな)

1人で使うなど何度も釘を刺された。だが今はそんな事を気にし
ている時間はない……

さあ始めよう……私の戦いを……

「In itself, a life does not hav
e itself in a sake. (己が命が己が為にあ
らず)」

そう。私の命は私のものではない

「The body does not have itself
to people. (己が体は人にあらず)」

私の身体は人ではない……

「My body is a sword of protecti
on. (我が身は守護の剣なり)」

この身体は己の大切な者を護る為の剣だ

「However the time may pass (どれほ
ど時が流れても)」

どれだけ月日がたとうとあの日の誓いに揺るぎは無い

「何をグダグダとくつちやべってるんだ!？」

「考えるまでも無いでしょう。あの盾を全て碎けば事足ります。行きなさい！」

ヴオドオンが呼び出したネクロ達とヴオドオンとベルフェゴールの攻撃が何度叩き付けられても碎けはしない。あれは私自身だそう簡単に碎けるものではない

「However it may throw language
(どれほど言葉を投げかけられても)

言葉だけでかわれはしない

「There is no change in my way of life.
(我が生き方に変わりはない)

私が胸に刻んだ誓いを護る為だけに私は生きている

「The world at which those that themselves merely loved laugh
(ただ己が愛した者全てが笑う世界を……)

ただ私が欲しいのは、私の愛した者達が笑っている世界

「The world in which things are not where who sheds tears
(誰も涙を流す事ない世界を……)

私が願うのは、もう誰も涙を流す事のない世界

「Self is fought in order to make it.
(それを作る為に我は戦う)

ただそれだけを夢見て。私は剣を手にする。決して届かぬ理想と知ってもなお追い続ける

「なんだ？何を言ってるんだ。シャル判るか？」

「え、えーと早いし聞こえにくいけど……何とか」

一夏達が詠唱の意味を理解しようとしているのが聞こえるが。そんなのは理解しないほうが良い

「What 1000 battlefield
(幾千の戦場)
全ての戦場を見てきた……」

「The what 10,000 world (幾万の世界)」

星の数ほど世界を渡ってきた……

「It is that the time with fortunate everyone to wish visits self by gazing at the all (その全てを見据え我は願う、誰もが幸せな時代が訪れる事を……)」

その全ての世界、全ての人が嘆くことも無く、涙することも無く笑っている世界が時代が訪れる事を願う

「that time —— all feeling —— it laughs at hidden self (その時まで感情全て隠し我は笑う)」

その為ならば無理にだって笑おう。私が泣けば皆が不安がる。それに私に嘆き涙を流す資格などない

「Because the way of life is just my only one obtained answer (その生き方こそが我が得た唯一つの答えなのだから)」

全てを偽り。己ではない者のために生きる……それだけが私という存在なのだから……

「The grave marker of the sword of 1000 (千の剣の墓標) ツ!!!」

「な。なんだよ……これ」

俺は思わずそう呟いた。俺達は森の中に居たはずなのに……今は紅い荒野の廃墟が立ち並ぶ場所に居た。その荒野には無数の剣や斧や槍。考えうる限りの全ての武器が墓標のように突き立っていた……

「うっ。ううう……頭が痛い」

クリスさんの呟きとほぼ同時に俺にも頭が割れるような激痛が走る

「がっ!? ぐうううッ……」

頭を抱えその激痛の余り倒れかけると

「大丈夫か？一夏」

千冬姉がその腕で倒れ掛けた俺を支えてくれるが。千冬姉もその顔色が若干悪い、多分この場所の影響だ

「こ。これって……」

「どうして……これが」

簪さんとエリスさんは何か知っているようで信じられないという感じで呟いている。

「世界を転移した？いや違う……」

「なんだこれは?! 貴様何をした!!」

ネクロ達も訳が判らないのかそう叫ぶ。この現象がなんなのか理解しているのは龍也だけだろう。龍也は俺とネクロ達の間鑄びた剣の前に佇んでいた

「固有結界……己が心を世界に移す禁忌の魔法。つまりここが私の心の中だ!! 私はあるの詠唱の通り決して届かぬ理想を追い続ける者」

固有結界? 心の中? この廃墟が……何一つ生きる者の居ない世界が龍也の心の中だった?

「う。嘘だよね……こ、こんなのが龍也君の世界だなんて嘘だよね?」

「そ、そうじゃないの? ハツタリとか?」

シエンと鈴の信じられないという声は何処か遠くに聞こえる。俺にはなぜか判ってしまった、この世界が嘘偽りの無い八神龍也という男の心象風景なのだ……

「何もない世界……生きるものは無い。この世界が私の心だというのならば……これほど相応しいものは無い。己の命は自分でない誰かの為に……」

龍也はそう呟きながらゆつくりと歩き出す。行く道を塞いでいた剣達は独りでに動き龍也の道を作る。それは臣下が己が王を迎え入れるような厳かさに似た雰囲気をしていた

「こんな墓が並ぶ世界が龍也の心だというのか?」

「なんて寂しい世界なんですか。余りに辛い場所です」

余りに辛い、心が怯え震える……本能的な畏怖……俺達は知らぬ間

に近寄り互いに互いの身体を暖めていた。そうしないと自分を見失いそうな気がして……

「壊れた人間にこれ以上相応しいものは無い……私もまた生きていると同時に死んでいるのだから」

その眩きと同時に、無数に立ち並ぶ剣が震え音を立てる。それが何十、何百、何千、何万と幾つも幾つも重なって、一つの音となる。それは泣き声の様に聞こえた。龍也は無造作に2本の剣を地面から抜き放ちながら

「壊れた男が辿り着いた唯一つの答え。砕けるものなら砕いてみるが良い」

巖かに……そしてどこまでも空っぽの声で龍也はそう告げたのだった……

第68話に続く

第68話

第68話

男の話をしよう

男には何もなかった

名も。感情も。夢も。希望も何もなかった

男が持っていたのは

絶望と嘆きだけ。どこまでも空っぽな男は出会いを繰り返し

その中身を満たしていった……

しかしてそれが幸福なのだろうか？

空っぽな男に幸福は理解できない

なぜなら男は空っぽなのだから

誰も知ることのなかった

暗き時代が幕を開ける

キンツ!!キンツ!!

「邪魔だ！失せろ!!」

両手に西洋剣を構え四方八方から迫るネクロを全て両断し進んでいく龍也君を見て

(なんて強さ……)

私は思いあがっていた訳ではない。だが最悪IS学園の教師全員とフレリア達が居れば龍也君を制圧できると考えていた。その為に戦闘終了後、もし龍也君が怪しい素振りを見せたら捕獲できるように近くにフレリア達を待機させていたが

(勝てるわけがない……)

例え第3世代が1小隊分あったとしても勝てない。それ所か一矢報いることが出来るかどうかでさえ怪しい

「燃え盛る炎の大剣《レーヴァティン》ツ!!!」

天を燃やし尽くすかのような炎の刃を持つ剣を一閃することにネ

クロが炎に吞まれ消滅していく。

(強すぎる……あれが魔法使いの全力だというの)

次元が違う……強さとして全く異なる存在だ

「消えうせろ!!」

【プロヴィデンス マキシマムドライブ】

漆黒の球体が龍也君ではなく私達の方に向けられた瞬間

「私の後ろにはただの1つの攻撃など通さん!!!」

瞬間移動としか思えない。かなり離れていたのに龍也君は一瞬で

私たちの前に移動し

「全ての呪いを弾く盾《フォースシールド》ッ!!!」

美しく輝く緑色の盾がその球体を弾き飛ばす。その反動でか砂煙

が上がった瞬間

「ひやはははははッ!!!」

ドシュッ!!!

肉を裂くおぞましい音が響く思わず目を背け掛けるが前を見ると

「ひやははは!!死んだかあ!!」

全身に目玉のあるネクロが手に持っていた鎌の切っ先が丁度背中

から心臓の辺りを通って龍也君を貫いていた……

「ッ?!?!」

エリスちゃんたちが息を呑むのが判る。今彼は私達を護ろうとし

たそして心臓を貫かれた……もう生きているわけが

「死ぬ?私か?何を言っているベルフェゴール?」

「ひやはっ!!」

鎌の切っ先を握り潰しながら龍也君が身体を前に動かし無理やり

鎌を引き抜き。ネクロの頭を掴んで走り出す、その先には廃墟に突き

刺さり切っ先を向けている無数の剣群がある。龍也君はネクロを掴

んだまま壁に体当たりした再び肉を裂く嫌な音が響く

「げがっ?!?てめえ……なんで傷がねえ!?!」

その言葉に良く注意して見ると龍也君の身体には一切の傷がない。

さっきの鎌の傷もだ

「なぜ?簡単な話だ。私の命は私の物で私の物でない。この世界はそ

の象徴……この結界がある限り。私が負う筈の傷は全て一時的に無効化される。この世界がある限り私は心臓を抉り出されようが、頭を砕かれようが死にはしない。判るか？お前たちの不死性と言う有利さはこの世界では何の意味もない!!」

その腕を剣に刺し貫かれながらネクロを殴り飛ばす。案の定傷が一瞬出来るが直ぐに消え去る

「守護者だなんだと言われておきながら。その本質は剣鬼か」

「はっ！私は何度も死んださ。いまさら死に対する恐怖などない！私が恐れるのは！誰も護れない事だけだ！」

剣を2本抜き放ちネクロにと突進していく。ネクロもその手に2本の剣を持ち何度も何度も打ち合う。受けきれなかった一閃が龍也君を引き裂くがやはり傷は直ぐに消える。一種異常とも言える光景に言葉もなくただ呆然と見ていると気付いた

(あ、あれ？簪ちゃんだけじゃない一夏君とかの傷もない?)

ネクロとの戦いで一夏君達が負っていた傷も跡形もなく消えていた。

(中の人間の傷を全て無効化する？それがこの世界の能力?)

私は自分の中でそう仮説を立てたが、それは違っていた……龍也君を意味する「守護者」そしてさっきの

【負う傷の全てを一時的に無効化する】

一時的にとという言葉が意味する本当の意味。それを私が知るのはいずれが終わったときだった……そして全てを知った私は理解した。

八神龍也という存在はどこまでも真っ直ぐでどこまでも歪んだ人間なのだ……

「シャル……龍也がなんて言ってたか判るか？出来たら日本語で判る範囲で良い。俺に教えてくれ」

龍也が剣を振るい次々とネクロを切り裂いていくのを見ながらそう尋ねると、シャルではなくヴィクトリアが謳うように

「己が命が己が為にあらず、己が体は人にあらず。我が身は守護の剣

なり。私が聞き取れたのは最初だけだ。他に聞き取れたものは？」

ヴィクトリアさんの問い掛けにユウリが

「どれほど時が流れても。どれほど言葉を投げかけられても。我が生き方に変わりはない。かなり早口の上に発音がかなり聞き取りにくかった」

ほんの一瞬で聞き取るのは難しい。英語に長けた者で無ければ聞き取れるものではないだろう

「ただ己が愛した者全てが笑う世界を……誰も涙を流す事ない世界を……それを作る為に我は戦う。ですわ。なんとも哀しい言葉ですわね……完全な自己否定ですわ」

完全な自己否定。龍也は自分で自分を認めれないのか？命も自分ものではない、身体も人ではない。じゃあ龍也は何のために生きているんだ？人としての全てを捨てて何をしたいんだ……

「幾千の戦場。幾万の世界。その全てを見据え我は願う、誰もが幸せな時代が訪れる事を……」

ぼそりと呟いたエリスさんの言葉に続くように簪さんが目に涙を溜めながら

「その時まで感情全て隠し我は笑う。その生き方こそが我が得た唯一つの答えなのだから……千の剣の……墓標」

固有結界。心を移す魔法……そしてそれを発動させるための言葉……その言葉にどれだけの葛藤が、どれだけの嘆きが込められていたのか俺は勿論。誰もわからない、否判る訳がない

(お前は何者なんだよ……)

優しく相談に乗ってくれた龍也。その強さを持って俺達に身の護り方や適切な戦術を教えてくれた。優しく面倒見の良い龍也と

簪さんとエリスさんを撃って冷酷な笑みを浮かべた龍也。能面のような表情をしてネクロと戦っている龍也。恐ろしいほど冷酷で残酷な龍也

(どっちがお前なんだよ……龍也)

長い事友人だと思っていたし、これからもずっとそうだと思っていた。だけどそんな当たり前の日常は終わってしまった……

(俺には駄目だ……お前がわからねえ……わからねえよ……龍也)

龍也の1を切り捨てて9を救うという正義も……

龍也が黄金の騎士だったってことも……

龍也がどんな光景を見てきたのか、何を考えているのか。

何もかもが俺には判らなかつた……

俺には龍也の背中しか見えない。龍也がどんな顔をして戦っているかも、その目に何を写しているのかも何も見えはしない。

俺は墓場のような世界を見ながら。龍也が何を考えているのか、何を見てきたのか。ただそれだけを考えていた……

なんて哀しい場所なんだろうか……血の様に赤い大地。墓標のように立ち並ぶ無数の剣。そして崩れ果てた廃墟の街並み。どれを見ても龍也の心の中とは信じがたい

(一体どれだけの涙を流してきたのだろう……)

この世界には嘆きと悲しみしかない。そして墓標のように並ぶ剣や斧……それが龍也の悲しみの証だというのは考えるまでもなく判ることだ……

「うう。……苦しい……凄く空気が重い」

「ちよっ!? シエン大丈夫!? うっ!? やば……なにこれ……あたしも頭痛い」

シエンが膝をついて頭を抱える。それに鈴が駆け寄って触れると同じように頭を抱えて蹲る

「うっ!? なんだこれは!? 何かが見える!?」

「ユウリ!? だい……うっ!? なにこれ私にも見える!? 泣いてる子供? なに!? なんなの!?」

ユウリが鈴に続いて蹲り。ユウリの肩に手を置いた会長も蹲り何か呟く。何が起こっているかわからず混乱している中。箒やセシリア。織斑先生達も頭痛を訴え蹲っていく。化け物達の怒号の中でも皆のうめき声が聞こえる。

「うっ!? 私もか……」

ラウラが倒れ。それに続くかのように私の頭にも激しい頭痛が走り脳裏に何かが浮かび始めた……

《おとーさんー！おかーさん！！》

舌足らずの子供の声と暗い海に沈んでいく男女の姿と何かの光に包まれ宙を浮かんでいく子供の姿。黒い髪に首からは龍を模したペンダントを下げていた

(龍也？でも髪の色が違う……)

一瞬龍也の記憶かと思ったが違う。龍也の髪は銀で子供の髪は黒。それに雰囲気や目つきもまるで違うではこの子供は？私がそんな事を考えているうちにまた場面が変わる

《また別の孤児院に回ってもらうから。じゃあね》

《……》

面倒くさそうに言う女性に何の反応も示さない子供。その目は光が一切なく生きているのか人形なのか、思わずそんな事を考えてしまうほど。感情と言ったものを感じさせなかった……その少年を見ているとその女性と入れ替わりで

《君が■龍也君かい？》

《……誰？》

《僕は君のお父さんの弟なんだ。やっと見つけたよ……ごめんね。こんなに遅くなって》

《なんで泣いてる？》

感情がない。それが私が見た過去の龍也の印象だった。何も無い空虚な存在、それが子供のときの龍也だった

《行こう。君は■龍也ではなく。八神龍也になるんだ……そして私の息子に成るんだ》

《行きましよう？龍也君》

子供の時の龍也は不思議な顔をして何度も伸ばされた手を見つめ。そしてその手を掴んだ。そしてまた場面が変わる

《なあなあ兄ちゃん。兄ちゃん》

《なに？はやてちゃん？》

《ぶー私と兄ちゃんは兄妹やからちゃんはおかしい！！》

まだ小さいはやてが龍也にじゃれ付いている。それに対して龍也の顔は若干固いように見える。まだ幼いはやてと小学校低学年に見える龍也では考えることも違うのだろう

《でもあれやろ？今日。お父さんとお母さんが帰ってきたら、兄ちゃんもお父さん言うんやろ？》

《うん。1年経ったし……今なら言えると思うんだ》

固い笑顔で言う龍也。そしてそれと同時に電話が鳴る

《おばさんかもね。出てくるね》

《はいなー》

ニコニコと笑うはやてに見送られ電話に出た龍也は

《え？し。死んだ？交通……事故？》

龍也の手から電話が滑り落ち。また場面が変わる……

《お父さん……お母さん》

墓標の前で泣くはやてを見て拳を握り締める龍也。

【僕のせいだ……僕が居たから叔母さんと叔父さんは】

あの日は龍也が八神家に引き取られて丁度1年だった日。自分がいなければ2人が死ぬこともなく、はやてが両親を失う事もなかった。どこまでも暗い考えが龍也を満たしていく、それと同時に私の周りに数本の剣が姿を現し墓標の様に突き刺さる。その数は4本……死んだ龍也の両親とはやての両親の数と同じだった。龍也は泣いているはやてを抱きしめて

《大丈夫。大丈夫だ……はやてお前は……私が護るから》

その目には危ういとも取れる輝きが灯っていた。そしてまた場面が変わる

《ぐっ!?なんだこれは!》

街中を走る龍也。少し成長していて小学校高学年くらいに見える。何か判らない黒い影が龍也を追い回している。まだ幼さが残る物のその雰囲気や態度は今の龍也と殆ど同じのように見える

《がっ!?ぐうう!!》

化け物の牙が龍也を捉えその身体を高く持ち上げる。

《がっ!?ぐうう!!》

その牙は身体を貫通しているのか龍也の口から大量の血液が吐き出される。それと同時にそこかしこから息を呑む声が聞こえる。どうやら私だけではなくラウラや簪もこの光景を見ているようだ

《まだ……まだ……ぐっぶ……私は、私は……し。死ねない……》

震える手で化け物を殴る。まだ死ねない……それはきつと幼いはやてを1人にしたくないから

《まだ……死んで……堪るかアアアアア!!!》

咆哮めいた声と共に龍也が首から提げていたペンダントが輝き。それが化け物を弾き飛ばすと同時に甲冑が龍也の身体を覆い隠す

《なんだこれは? いや……どうでも良いか》

龍也は剣を抜き放ちそれを片手で構え

《私の道を妨げるものは相手がなんであろうが! 叩き潰すだけだ!!!》

剣を手に駆け出していく龍也を見て私は

(あれが龍也とは思いにくい)

感情の起伏は殆どない。どこまでも空っぽな表情をしている龍也と今の龍也は余りに違いすぎる。ではこれから今の龍也に近づいていくのか? 私がそんな事を考えているとまた場面が変わり始めた

《ふふふ。死になさい闇の書の主》

《あ、ああ……》

車椅子の上のはやてに迫る黒いローブの女が手刀を突き出す。はやての手には紅いドレスや緑のドレスが握られていた。女は手をゆっくりと引きそれをはやて目掛けて突き出した

《止めろおおおおッ!!!》

その直後空の方から龍也の怒号が響き渡り。蒼い閃光が走る……そして

ドシユツ!!!

《ぐっ……がぼっ》

《あ、あああッ!! 兄ちゃん! 兄ちゃんツ!!!》

女の手は龍也の胸を貫いていた。それはどう見ても即死の傷……食道や肺を完全に貫いていた。龍也は糸が切れた人形のようにはやてのほうに倒れた。それは奇しくも私の居る方向と同じで何の光も

宿していない目が私を写し思わず身を抱いた。人の死ほど暗いものはない……それが例え遠い昔の出来事であっても変わりはない
【し、死んで堪るか……私は死ねない。死ぬわけには行かない!】

脳裏に龍也の声が響く。まだ死ねないと繰り返し眩くその声は段々その響きを強くしていた

【まだ私は役目を果たしていない。まだ何も終わっていない!まだ死ぬわけには行かない!!!】

その声は怨念に似た暗い響きがあり。思わず自分の身を抱く

《い、イヤアアアアアアアアアアッ!!!》

はやての絶叫と共に暗い闇が吹き出し龍也とはやてを飲み込んでいく。そしてまた場面が変わった

《なぜ夢に溺れない?夢の中には何の苦しみも悲しみもないのに?》

銀髪に紅目の女性が訳が判らないと言う感じで問いかける。すると蒼い光が走りそこから学生服の龍也が姿を見せ

《夢を見ているのにまた夢を見るわけがないだろう?》

《何を言っているのですか?兄君は?》

《私は今まで2度死んだ。そして今3度目の死を迎えようとしている、いくらなんでも心臓を貫かれて生きていられる人間は居ないだろう?》

《だからこそ夢の中の死を私は与えようと思いましたが。あそこは全てが満たされている幸福な場所のはず。嘆きも涙もない場所だったはず、なんで目覚めようとするのですか》

《言ったはずだ夢を見ているのに夢を見るわけがなからう?今私は絶対に醒めたくないと思っている夢を見ている。亡くしてしまった筈の家族がまた増えた。はやて、ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラ……私は十分に幸せだった。そして思う、あの場所は死者がいるべき場所ではない。私はあの時死んだ、故にもう良い……この胸には抱え切れないほどの思い出をもう貰った……だから私は何の悔いも無く死ぬ。最後まではやて達を護ってな》

学生服は甲冑に変わる、だがその甲冑はひび割れ、自身の血で真紅に染まっている

《私はもう死んだ人間だ。この身に恐怖はない、私はただはやてを護るといっだけの存在だ。そんなものは人間とは呼べないただの人形さ。人形は踊るだけだ哀れで滑稽な踊りをな》

くつくくと笑いながら龍也は剣を振る。自身が居る場所を切り裂きそこから飛び出して行つた

そしてまた場所が変わつた……だがそれと同時に身体を締め付けるような痛みが私を襲つた

雪の振る何処かの世界で

《調子に乗るな!!この死に損ないが!!》

《ぐあっ!!》

黒い騎士と龍也が戦っている。だが龍也の左腕は無く大量の血液が流れているのが判る。いやそれだけじゃない右目も刃で裂かれたのか固く閉じられ血を流していた

まだ幼いなのはと見覚えのない紅いドレスの少女がそう叫ぶ中龍也は右手で剣を構え抵抗の意思を示している

《まだ立つか、それほどこいつ等を守りたいと言うのか……いいだろう。こいつ等を見逃してやろうか?》

《なに?》

黒い騎士は剣を龍也に向けながら

《だからこいつ達を見逃しやろうかと言っているんだ。俺の目的は貴様を殺すだけだからな》

《私を殺せばお前は此処から消えるのか?》

《ああ。そのとおりだ。如何する?お前が決める3人とも死にたいならそのまま立つてろ。2人を見逃して欲しいなら其処に座れ》

龍也は剣を捨てその場に座り込んだ。

《いい覚悟だ。仲間を救うためその命を差し出すか。いいだろう2人の事は見逃してやろう》

黒い騎士はそう言うのと剣を腰の鞘に収め浮かび上がると、左手に魔力を収束し始めた

《兄貴。なにやってるんだよ、早く逃げろよ!!》

《龍也さん、逃げてお願い!!》

なのは達の悲壮な叫びが響く中。それとは別の声が私の脳裏に響く

【これで良い。2人を救えるのなら私の命など……】

囁くような呟きだった。だが妙に私の耳に残った……

《消えろ!!カオスブレイカー!!!》

騎士から放たれた黒い光が龍也を飲み込む寸前。龍也は泣きそうな顔でなのは達を見て

《なのは。ヴィータ、はやてにすまなかった……》

龍也は最後まで言うことなく黒い光に飲まれて消えた……

《……》

今度は私達が知らぬ間に別の場所に居た。街を見下ろすことの出来る崖の上に佇む龍也。長い黒髪とコートを纏うその姿はまだ幼さを残す物の今の龍也と殆ど変わらないように思えた

《行くぞ。これ以上やつらの思い通りにはさせん》

《はい。全ては王の御心のままに》

龍也の隣に現れた女性はそのまま溶ける様に消え龍也の身体の中に消えていく。すると龍也の瞳が蒼銀に染まり髪は美しい銀髪になる。その姿は完全に今の龍也と同じだ。龍也は崖の上から飛び降りながら両手に剣を作り出し

《貴様らアア!!!》

ネクロはその町の住人を殺し回っていた。鬼の形相でそう叫んだ龍也はネクロの中に突っ込んでいった

《う。ううう……》

瓦礫の中で何かを抱きかかえ蹲る龍也。その腕の中には虚空を見つめている少女の亡骸があった

《王よ。貴方は正義をなした、1000人のうち100人救えなかったが残りの900は救えた。嘆く必要は》

《100救えなかった!私は全てを救うことを願って力を手にしたのにまた救えなかった!また護れなかった!》

亡骸を抱え泣き叫ぶ龍也の顔をはじめて良く見た。その顔は余りに幼くまだ13〜16の間くらいだった

(私達よりも年下の時になって酷い経験を)

死を見る。それは兵士としては基礎的な部分だ。兵士ならば死に直面することもあるだろう。だけどこの龍也はまだ子供だ、精神が耐えられるとは思えない。そしてまた場面が変わる

《もう大丈夫だ。おいで》

《……ほんと?》

《本当だとも》

瓦礫の中で泣いている子供に手を伸ばす龍也。そして子供が泣きながら龍也に手を伸ばした瞬間

ドスツ!!!

《え?あ?》

《!!》

どこから飛来した剣が子供の心臓を貫く。龍也の伸ばした手はその子供が吐き出した血で真紅に染まる

《う……うそつき……だいじょ……って……のに》

子供は龍也に素晴らしいながら地面に倒れ絶命した

《あ、アアあつ!!あああああああーツ!!!》

龍也は泣き叫びながら振り返るそこには、4つの鞆を背負ったネクロがにやにやと笑っていた。

《良い顔ですね。絶望と慟哭。それに染まる人間の顔と言うのは何時もても良いものです》

《ヘルズウ!!!》

龍也が飛び出そうとした瞬間。宙に剣が現れ切っ先を下に向ける

《判りますか?この切っ先が何を狙っているか?》

その切っ先の下を見ると瓦礫の下に隠れている街の人々の姿が龍也の顔が青ざめた瞬間

《そう、その顔が見たいのですよ。守護者、貴方に何人護れますかな》
《や、やめろおおおおおッ!!!》

龍也の叫びを嘲笑うかのように剣は雨のように降り注ぎ辺りから

《ぎゃああああ!!》

《いたい!?痛いよおお!!!》

《いやだ!?死にたく……あ》

剣に刺し貫かれ絶命していく住人の悲鳴が木霊する

《あ、あ……う、おあああああああッ!!!》

龍也の悲鳴が私の心を抉る。余りに深い絶望と嘆きその悲鳴を聞いているだけで心が軋んでいくような気がする

《あははは!!一人も救えなかったようですね!そう貴方に私達を止めることなどで気はしない。全てを捨ててもね》

《ヘルズうろうう!!!》

涙を流しながらネクロに向かっていった龍也だが

《そんな攻撃にあたってあげれるほど暇ではないのでね。眠っていない小さい守護者》

ネクロの蹴りが龍也の胸を捕らえひっくり返ると同時に

ザン!!

《あ。ぐあああああ!!!》

空から剣が降り注ぎ龍也を昆虫標本のように地面に縫い付ける

《ふふふ、ではまたいずれお会いしましょう?壊れた正義の味方さん?》

痛みと絶望にすすり泣く龍也を見下ろしそのネクロは消えて行った、残されたのは墓のように地面に突き立つ剣と全身から血を流す

龍也の痛々しい姿だけだった

雨の降る中龍也は手足を引きずるように廃墟を歩いていた。その目は必死そのもので何かを探して……いや何かなんかではない。龍也は生存者を探しているのだ

ガラリ

瓦礫の崩れる音に龍也が振り返る。そして振り返ると同時に涙を流した。瓦礫を蹴ったのは生存者ではなく

《キキ》

《アアアアアッ!?!》

ネクロになり始めていた街の人間だった。黒い細胞に浸食されている街の住人は涙を流しながら手を伸ばす

《殺せエ!?殺してくれえ!!化け物になんか……キガあ!?!》

《痛いイタイイタイ!!!やだやだアア!!!化け物なんかになりたくないイイイツ!!!》

ネクロになりたくない泣き叫ぶ街の住人を見る龍也。龍也は涙を流しながら

《う、うおおああああアッ!!!》

獣のような咆哮を上げて剣を構えネクロになりかけている街の住人に向かっていった

《がふっ……ありがとう……》

知らぬ間に場面が変わり龍也が涙を流しながら小さな身体に剣を付きたている場面が変わる。その子供は龍也が救えなかった子供だ《化け物になるより……死ねたほうが良いよね?ありがとうお兄ちゃん》

化け物になる前に死ねたと言って感謝の言葉を口にする子供

【言うな!礼など……言わないでくれ!】

血が出るほど歯を食いしばり涙を流す龍也の前でネクロになりかけていた子供がゆつくりと崩れ落ちる。龍也が剣を握り締めたまま空を仰ぐ、龍也の顔から零れ落ちた涙が血で染まった大地に落ちる

《王よ、嘆くことはない。貴方は正義をなした》

龍也の隣に現れた女性がそういつて涙を拭おうとするが

《違う!こんな!こんな物は!私の望んだ正義じゃない!!人を殺して何が正義だ!!!》

《違います。あの者達はネクロにとりかけていた。その前に殺してもらえてあの者達は嬉しかったはずだ》

《ふざけるなあ!違う!こんな!こんな物が正義であるものか!!!》

血でぬれた隻腕で顔を押しさえ雨に打たれながら絶望の声を上げる

《私は……全てを救いたかった。手の届く全てを護りたかった……なのに私のしたことは何だ!?ただ全てを無に返しただけだ!こんな物が正義であるわけがない!!!そうだろう!?》

《違います、貴方は正義をなした》

《ふざけるな……ふざけるなあッ!!!馬鹿野郎ッ!!!》

【違う!違う!!違う違う!!!こんな!こんな事をするために!!!私は力を

手にしたんじゃない!!!」

余りに重い絶望と慟哭が私を押し潰しに来る。心が軋み独りでに涙が溢れ出す

(こゝ、こんなの耐えられない!)」

絶望・嘆きそれが心だけではなく身体でさえ押し潰さんとしてくる。だがそれだけでは終わらない景色は次々と変わっていく。それと同時に剣も増え続ける

《また!まただ!また私は何も護れなかった!!!》

《……うつつわあああああアツ!!!》

場所、時間が変わっても龍也の嘆きは絶望は消えない。誰よりも尊い願いを抱き続けていた龍也は殺し続けることに耐えられなかった

《殺してやる!殺してやる!ヘルズウウウツ!!!》

嘆きは狂気となり龍也を満ちす。その瞳は憎悪と絶望だけを写し他の何も写してはいなかった、ネクロは速やかに殺し救えぬ者は見捨て。ネクロになりかけているものを殺してももう龍也は涙を流さなかつた。いや違う。流す涙も枯れ果てていた……能面のような表情で進み続ける。届かないと判っている理想を追い続けその身体を傷つけ、心を磨耗させて……きつと龍也の進む先には何も無い。あるのは破滅だけ、そこに救済などない……

《龍也。君は変わったね》

《そうか?》

《ああ。変わったとも、良く笑うようになったよ》

《そうか。では笑うのはもうやめよう》

《なぜそうなるね?》

臨海学校でいたジェルとかいう博士と龍也が並んで月を見上げている。この龍也は能面のような表情ではなくぎこちないながら笑みを浮かべることが出来ていた

《許されないからだ》

《何にだい?》

《全てにだ》

《そりやまたなんで?》

龍也は自嘲の笑みを浮かべながら左腕を天に掲げる。それは機械の骨格が見える義手だった

《俺は数え切れないほど罪を犯した。もう決して許される事ではないだろう。咎人が笑うなど許される者ではない》

《そうかい。じゃあ私も同罪かな?》

《なぜだ?》

《ネクロに娘を人質に取られ奴らの悪事に手を貸した。ならば私も同罪だろう?》

《違う。お前は救われるべき人間だ》

《じゃあ龍也もだろ?》

《……駄目だ。俺は殺し続けてきた、この身は血とネクロの血で汚れきっている。もう光の元に戻る資格などない》

違う。そんなことはない。龍也は誰よりも尊い理想を抱いた、確かに悪と呼ばれるだけのこともしただろう。だけどそれ以上に人を救ってきたはずだ。そんな龍也が許されないわけがない

《……もう行く。ネクロがまた動き始める》

《また人知れず君の家族を救うのかい?合いたいと探し続ける家族から逃げてなんになる?》

龍也はふっと笑いながら月を握り締めるかのような動きをしながら

《煉獄の炎に焼かれてもなお決して届かぬ光を見る事は許されよう。しかし咎人に許される物などない、この身は命尽きるまで罪を償うことしか出来んのさ、ではな》

そこから飛び降り炎の翼で飛び去る龍也を見ながらジェイルは

《龍也……君は誰よりも救われるべき人間だ。どうしてそれが判らない?》

どこまでも心を閉ざした龍也を見てジェイルは涙を流していた

どこまでも尊い理想を抱き

誰よりも優しく

誰よりも人を護ってきた

その変わりに得たのがこの剣の世界……

そんなのはおかしい。おかしいに決まっている

誰よりも優しく、誰よりも涙を拭きたいと願ってきた

そんな龍也がこんな世界に閉じこもるなんておかしいに決まっている

「はっ！やっつけてくれるな!!!」

「お褒めに預かり光栄だ!!」

気が付いたら私たちは元の場所に戻ってきていた。全員が全員涙を流し龍也の背中を見つめていた

「こんなの……悲しすぎるよ……龍也くんは何も悪い事なんかしてない！ただ救いたいわって願っただけなのになんて！なんでこんなのが……こんな……こんな場所が……ぐすつ。龍也君の心の中なの……」
剣の丘を見て涙を流し崩れ落ちるシエン。簪やエリスなどは顔を抑えて押し殺した泣き声を上げている。あまりに感受性が強すぎてしまったのだろう。だがそれは私にも言えた事で

「龍也……お前は誰よりも救われるべきはずの人間だ……」

誰よりも龍也は聖人だった。自身のみを捨ててまで、心を捨ててまで、全てを護り救ってきたのになぜその末路がこんな世界なんだ……

「是、射殺す百頭《ナインライブズツ!!!》」

龍也の背丈を上回る巨大な斧剣を片手で構え。裂帛の気合と共に振るわれる。九つの斬撃がネックを切り裂き消滅させる。剣の丘に立つ龍也は前を向いたまま

「身体は剣で出来ている。私にそれ以外の価値はない。全てを救いたいと願ひ、全てを失ってきた。こんな男にまともな未来も最後も必要ない」

剣を2本新たに抜き放ちネック達を獣を思わせる目で睨みながら

「私に未来は必要ない。未来はもつと相応しい者達の為にある。壊れた男にはそんな物を担う資格はない。私は未来を築くための道となる。そしてその役目を終えれば……もう私は世界に必要ななくなる。私が眠る場所は穏やかで会ってはならない咎人が眠るは地獄が相応

しいだろうよッ!!!」

「はっ！ならば俺が貴様を地獄に送ってやる!!」

「何時までも未練他らしく現世に残らずとつと死になさい」

ペガサスとヴオドオンが同時に地面を蹴り龍也に迫る。超高速の挟み撃ちだったが

「ごめんこうむる。まだ私にはやるべきことがあるのでねッ!!!」

それを見ることもなく弾き返し剣を捨てて別の剣を手にし

「私は剣として生きてきた。剣は泣かない、剣に名は必要ない、剣に未来は必要ない。剣はただ目の前の敵を屠るだけだ!!!」

たった1人戦い続けた。夢も願いも捨てて心も名も捨てた。剣としての人生を歩み。絶望と嘆きだけを繰り返して続けた

それが八神龍也という男の余りに哀しい人生だった。

あの優しさは悲しみを知るからこそもの

どこまでも優しい壊れた男に救済などありはしない。それこそが八神龍也に架せられた罪なのだから……

第69話に続く

第69話

第69話

ネルヴィオを名乗るネクロとISを展開しているネクロと戦っているとき

(！兄ちゃんの魔力が途絶えた!?)

兄ちゃんの魔力の反応が消えた。いやそれだけじゃない、箒とかの気配も全部だ

(兄ちゃんがおるから全滅っていうのは考えられん)

つまり兄ちゃんは今

(固有結界を使ってるんか!?)

あの固有結界は駄目だ。1人で使ってはいけないと何度もお願いしたのにだが逆に言えば

(使わないと行かん状態ってことか!?)

それが判った以上私はこんなところで持久戦に付き合い理由はない

「フェイトちゃん！なのはちゃん！2トップ！私のフォローに回れ！」

バックアップから前に出ると

「バックアップのお前が出てきてどうするの?」

一切装飾のない剣を肩に担いで笑うネルヴィオに

「あんたは勘違いしとるわ。私はどの距離も得意分野や……だけど指揮官が前には出れんやろ?でも……兄ちゃんが危ないのならソナン言うとれんのか。とつとと墜ちてもらおうで!!!」

リミッターを解除し騎士甲冑を変化させる

「フォールダウンモード起動。地獄に叩き落したる!!!」

「はっ！やってみなよ!!」

ネルヴィオの剣と私のゼロアームズがぶつかり合う。即座にバツクし

「シャープネスクレイモア!!」

腕を振ると同時に4つの魔力刃が弧を描いてネルヴィオに殺到する

「やるう！でも私には効かないよ!!」

魔力を開放するだけでその魔力刃を弾き飛ばすネルヴィオに

「ドアホッ!!そんだけで終わるかあ!!!」

即座にバインドを発動させてネルヴィオを引つ張りよせ

「ぶつとべっ!!」

ゼロ距離からの炎を纏った砲撃で吹っ飛ばす。吹っ飛んでいくネルヴィオを見て

「ネル!?「よそ見しとる場合か!カラミティサンダーツ!!」

高密度の電撃弾を放ち追撃に出ようとしますが脳裏に映像が浮かび上がる。突撃しかけて軌道を強引に修正して上に逃れる

ゴウツ!!!

私がいいたところを薙ぎ払う特大の砲撃。そのまま突進してたら直撃で貰ってたな。

「殺す!ネルの邪魔をするのは全部殺す!!!」

殺気と魔力で空間を歪めているネルヴィオを見据え

「なのはちゃんとかフェイトちゃんはネクロとIS展開に回って。私はあいつを叩き潰す」

なにかわからんけど。あいつ嫌いや……私はそう言うのとネルヴィオの方に向かって行った。早く片付けて合流しんと固有結界のデメリットが出てくる前に!私の頭の中はそれで一杯だった。兄ちゃんの固有結界とか言う「千の剣の墓標」は1対多に特化した能力だ。だけれどその分デメリットも桁違いに激しい。下手をすれば命に関わるほどの……

(こんなところで時間をかけるわけにはいかへん!速攻で片付ける!)

私達はツバキ殿が持っているカメラから送られてくる映像が信じ

られなかった

「なあ？フレイア。あたしは夢を見てんのか？」

目をこすりながら尋ねてくるシエルニカに

「残念ながら現実だ。認めろ」

「だよな？さつき頬つねったけど超いてえ」

無限の剣だらけの荒野。そこを縦横無尽に駆け回る八神龍也の姿。それは私たちにとってはある意味見慣れたとも言える姿。敵を倒すことだけに意識を向けた闘争本能の塊とも言える姿

「あれが八神龍也。はつきり言っつて桁が違うな」

私は暗部として活動してきたし戦場にも出たことがある。だが正直言っつて桁が違う、例えばISが1部隊あったとしても勝機はないだろう

「あ？アイアス？どうした？」

シエルニカの声ではつとなりアイアスを見ると呆然とした顔でモニターを凝視していた。簪お嬢様とエリス様が撃たれた時はこれでもかつて怒り狂っていたが。今は心ここにあらずという感じでモニターを見ていた

「ボクは判る。八神龍也の理想は正しいってでも間違っているって」

ぼそりと呟くアイアス。八神龍也の話は私達も聞いていた。兵士や傭兵だった私には良く判る、内心の葛藤や絶望が……その絶望に押しつぶされそうになりながらも前に進んでいる。

「先入観を捨てるべきだったと思う。彼はきつと誰よりも悲しんで涙して、傷ついてそれでも前に進んできた。自分の理想を追いかけてきた。理解できるよ……ボクは」

その呟きにシエルニカは頭をガリガリとかきながら

「まあ。あたしも判らんでもない。龍也はどっちかと言うとあたし達側の人間だからな」

自分の命を捨てて理想を追う。命を捨てて主に仕える。方向性は違うがあり方は良く似ていると思う。シエルニカとフレイアの話は聞きながらモニターに視線を戻して

(ん？気のせいかな？額から血が流れているような？)

さつきから傷を負っても直ぐに塞がっていた。だから多分見間違
いだろうと思ひ、ふと腕時計を見た……今あの固有結界とやらで戦い
始めてから丁度20分経ったところだった

(ちっ！数が多すぎる！)

倒しても倒してもきりが無い。それに

「どうした！息切れか！」

「誰がッ!!」

ペガサスが思った以上に厄介だ。御神流は何度も手合わせしてい
るし対応も知っているつもりだったが

(かなりの腕だな)

士郎さんや恭也よりも遥かに錬度が高い。一対一ならまだしもこ
の乱戦では余りに不利だ。

「ひゃーはははっ!!貫った!!」

「ちいっ!!」

舌打ちしながら地面に刺さっている剣を蹴り上げ。ペガサスの攻
撃を回避しながらその剣の柄を掴み半回転しながらの一撃で鎌を弾
き。そのまま間合いを取ろうとするが

「させませんよ!!」

ヴオドオンの手の中の銃とダガーが一体化した奇妙な武器から放
たれる魔力弾で殆ど間合いを取れず。またペガサスに間合いを詰め
られる。高速移動……いや神速だ。両手の光の剣は腰元にある……
私は即座に両手に名もない西洋剣を握り踏み込みながら

(いけるか!?)

ペガサスと全く同じ構えで力強く踏み込み。互いの間合いに入る
と同時に

「螺旋ッ!!!」

互いに裂帛の気合を込めた螺旋を放つ

1合目 互いに互いの横薙ぎが弾かれる

2合目 1合目と同じく。いや若干私のほうが早く弾かれる

3合目 完全に押し込まれるが辛うじて直撃を回避

(やはり付け焼刃では駄目か!?)

私は御神流の剣士ではない。はやてを護るために剣術の基礎は士郎さんに教わった、しかし私には才がなかった。御神流の技はどれも私には取得することは出来なかった。基礎は覚えているし、何度も見ているので真似事は出来る。だが御神流の剣士と打ち合えるほどの錬度はない。体勢を崩したところに袈裟からの一撃が放たれる。

「ぐうっ!？」

固有結界内では騎士甲冑の展開が出来ない。直撃を喰らいながらも後ろに飛び着地しようとした瞬間

「キキツ!!」

影から飛び出してきたLV1が2体。私の足を掴んでくる

「ちいっ!!」

舌打ちしながら魔力を開放しネクロを弾き飛ばす。拘束は数秒も持たなかったが

「LV1も役に立つものだな!!」

ペガサスが再度間合いを詰めるには十分すぎる時間だった。廃墟の壁に突き立っている。折れる事無い不滅の聖剣《デュランダル》を抜き放ち突っ込んできたペガサスの突撃を受け止める

「ふっ!そんな剣で俺の剣を止めれると思っているのか?」

ペガサスの剣は小回りの効く二刀。それに対して私の剣は幅広の西洋剣。何時までもペガサスの攻撃を防ぐのは不可能だ、だが防ぐのが目的でこれを抜いたんじゃない

「ああ、元より防ぐつもりなんかないからな」

「!?ちっ!」

私が何を言おうとしているのか理解したペガサスが間合いを離そうとするが

「遅い!壊れた幻想《ブロークンファンタズム》!!」

デュランダルを爆破し互いに大きく弾き飛ばされる。私の目的は間合いを取る事、千の剣の墓標内では私のダメージは全て先送りになる。本来ならやろうとも思わないが今回はこれで良い

(結構数が多いな)

ベルフェゴールは自身を媒介に転移ゲートを作り出せるネクロだ。奴の作り出したゲートからほとんどLV1・2が姿を見せている

あの調子で召喚され続けるといつかはリミットが来てしまう。ならば！地面に突き立つ武器の中でも取り分け印象の強い赤い槍を抜き放つ。その槍の名は刺し穿つ死棘の槍《ゲイボルグ》。因果逆転の魔槍。ケルトの英雄クーフリーンが所持した最強クラスの槍それを片手で抜き放ち魔力を通す。手の中でゲイボルグが震えるのを感じながら

「突き穿つ……死翔の槍《ゲイボルグ》ッ!!!」

一気に跳躍しゲイボルグの真名を解放しながら地面目掛けて全力で投げつける。それと同時にゲイボルグは無数の棘に分裂し現れ始めてたLV1・2に加え大半のネクロ達を貫きながら一直線にベルフェゴールに向かっていく

「ぐがあ!?てめえ……よくも!!!」

胸に突き立ったゲイボルグの棘に注意が割かれたベルフェゴールめがけ

「いっけえッ!!!」

地面に突き立っていた黄色の魔槍。必滅の黄薔薇《ゲイ・ボウ》を投げつける。魔力で強化しているので投擲自体が既に一撃必殺の域までになっているが、そこはLV4身体をねじり直撃を回避する。だがゲイ・ボウはベルフェゴールの転移のゲートとなる中心の目を打ち抜いた。追撃にと名もない名槍を2本投擲しベルフェゴールに命中すると同時に爆破する

「ぎがっ!」

奇声を発して吹っ飛んでいくベルフェゴールを見て

(これでしばらくは大丈夫なはずだ)

ゲイ・ボウは修復不可の傷を与える。無論私は本来の担い手ではないのでそこまで効力は高くないが。これでしばらくは、そう戦闘が終わるまではゲートは開けないはず。ペガサスもほぼゼロ距離のデユランダルの爆発でダメージが大きいのか動きが鈍い。私はそれを確

認すると同時にヴオドオン目掛けて駆け出した

すごい……私はそれしか考えられなかった。アニメや小説の中でしか見たことのない現象が次々と目の前で繰り広げられる

光の刃を放つ剣に天を裂くような炎の剣。そして宙で分裂し降り注ぐ紅い槍……

どれもISや科学で解明できるものではない。さっきの龍也君の記憶の衝撃も強かった。誰よりも尊い願いを抱いて、届かない理想と現実に涙してきた。どこまでも優しい人だから見捨ててしまった自分が許せなくて、ずっと闇を彷徨っていた……私はとても悲しくなった。だけど……そうは思わない人も居たのが余計に哀しかった

「……」

明らかに恐怖の色を目に映している一夏君達から視線を外し前を見る。力強く地面を蹴りながらヴオドオンと名乗ったネクロに突っ込んでいく

「はっ！一人で勝てると思っっているのですか！」

「ふん。たかがLV4で私を止めれると思うな！」

互いに剣とダガーを振るう。ただの打ち合いなのに轟音が何度も何度も響き渡る

「シッ!!!」

龍也君が剣を手放し一瞬構えを取ったと思った瞬間

「打ち砕くッ！」

手が分裂したように見えるほどの高速ラッシュがヴオドオンを捉え打ち上げる

「ごがっ!!!」

「せえいっ!!!」

アッパーがヴオドオンのボディを打ち抜くと同時に蒼く輝く龍が飛び出し、ヴオドオンを飲み込み。地面にヴオドオンを叩きつける。その勢いが余りに強かったのかヴオドオンの身体が地面に跳ねて高く打ち上げられたところで

「羅刹断撃拳ッ!!」

蒼い光を纏った龍也君の強烈な飛び蹴りが叩き込まれ廃墟のビルに背中から突っ込むヴォドオン

(決まった……?)

あれだけの攻撃を連続で受けたんだ。もう決まっているんじゃない？私がそんな事を考えていると。ヴォドオンの突っ込んだビルから

光弾が放たれシエンさんに向かう

「!?」

シエンさんは自分が狙われると思っ居なかつたのか硬直する。ツバキさんがとつさに動こうとするが

「死ぬつもりか？余計な手間を取らせるな」

「え？あ……ごめんなさい」

龍也君が回りこんで光弾を切り払い。ツバキさんにそう言いながら

「ちっ。浅かったか？手ごたえはあったんだが……」

放たれる光弾を弾きながら。私を見て

「簪、もつと下がれ射程に入ってるぞ。出来るだけ打ち落とすが自分でも身を護ることを考えろ」

「え？あ……うん」

言われたとおりに数歩下がると龍也君が前を向いたまま

「投影開始」

さつきから何度も言ってる呪文のような言葉を呟くと。空中に4つの巨大な岩で出来た斧剣が現れ地響きを立てて私たちの前に落ちる

「危ないと思ったら隠れる。そう簡単にこれは碎けん」

そう言うと同時に駆け出す龍也君を見ていると。箒さんと織斑先生が

「本当か？疑わしいが？」

「だな。何もかも隠している奴のいうことなど……」

完全に疑ってかかっている。さつきの龍也君の記憶を見て、そしてその上で護られているのに何故信じる事が出来ないのか

「……」

口にはしないが疑っているのが見え見えの一夏君に

「龍也さんがいなければ私達はこんな恐ろしい目に合わなかったのでは？」

龍也君のせいでこうなった良い始めるセシリアさん。全てが龍也君のせいだと全員が思い始めるのも時間の問題と言うとき

「はっ！無能もここまで来ると笑えるな。あいつが護ってくれなければワタシたちはとづくに死んでいるという事すら理解できんのか。おい簪。エリス、楯無隠れるぞ。あいつらは死にたいらしい。あいつらと違ってな」

ユウリさんの見たところでは

「ふむ。岩？いや鉄か？なんにしろ頑丈そうだな」

「……結構良い感じかも」

「皆隠れないの？」

「とつととこつちに来なさいよ。一夏」

ヴィクトリアさん達は既に斧剣の後ろに隠れ、武器同士の間隙から龍也君の戦いを観察していた。

(疑ってる人だけじゃなかった)

私と同じように龍也君を信じようとしている人がいる。それが凄く嬉しかった

「お姉ちゃん。肩貸すよ」

「ええ。楯無。私と簪の肩にてを置いてください」

「う、うん」

お姉ちゃんに手を貸して私とエリスも一番近くの斧剣の後ろに隠れ。龍也君の戦いに視線を戻した

「あれだけ叩き込んでも駄目か。随分と固いな」

龍也君が剣を構えながらそう呟くと

「当然です。神の徒たる私に攻撃が通るとお思いですか？」

あの余裕と言う態度。何か判らないが何かあるのかもしれない。私がそんな事を考えていると

「そうか。では確かめてみるか」

「はっ?なに……ぐうっ!?これは!」

ヴオドオンの身体を背後から剣が突き刺し。そのまま龍也君のほうに押し寄せて来る、龍也君は無造作に剣を突き出し

「壊れた幻想《ブロークンファンタズム》」

ゼロ距離で全ての剣を爆発させた。龍也君もヴオドオンも弾き飛ばされる

「ぐっ!?ぐうう!?正気ですか!」

ヴオドオンは刺し貫かれた腹を押さえながらそう叫ぶと

「正気も正気だよ。お前と私どっちが先に根を上げるかの根競べと行こうじゃないか!」

龍也君はやはり無傷で、再び剣を構え駆け出すとヴオドオンは後退し間合いを取ろうとするが

「ぐがあっ!」

「今度は4本。貴様に耐えられるか?壊れた幻想《ブロークンファンタズム》」

廃墟が一斉に震えるほどの大爆発がしたと思った瞬間

「ぐっがあっ!!」

私が隠れている斧剣に高速でぶつかる音と苦悶の音が響く。ゆっくりと落ちて行く背中には言うまでもなく龍也君の背中だ

「ぐっ……死ぬ気ですか!?守護者!」

「はっ。言っただろ?この世界では私は死ねないんだよ!!死ぬのは貴様だけだ!!」

再度突進する龍也君目掛けヴオドオンが銃を構えトリガーを引く。そこから放たれたのは前に一夏君を瀕死に追い込んだ黒い光だった。だが龍也君はそれを回避する素振りも見せず変わりに紅い槍を抜き放ち、それを自身の身体の前に突き出し黒い光に突っ込んだ。いや黒い光は紅い槍に触れると同時に消えて行った。私は知る由もなかったが龍也君が手にした槍は「破魔の紅薔薇《ゲイジャルグ》」と言う魔槍で魔力に対して強い抵抗力を持つ槍らしい

「なにっ!?なぜ腐敗の教義が!?」敵に教える馬鹿はない。失せろ!!」

紅い槍でヴオドオンの心臓の辺りをえぐりそのまま投げ飛ばす。

いくら化け物とは言え作りは人間と同じはず心臓を抉られてはもう死んだはずだ。だが龍也君は念には念を入れてか地面に突き立った槍を構え大きく振りかぶった瞬間

「!?」

「ほう。良い感をしているな!」

そのまま後ろ目掛けて槍を振るった。槍の穂先と切りあっているのは光り輝く2刀、さつき剣の爆発に巻き込まれたペガサスが戦線に復帰し龍也君に襲い掛かったのだ

「だが槍で俺の剣を止めれるか!」

「止めて見せよう。ついでに貴様の首も貰ってやろう」

「はっ!やれるものならやってみろ!!!」

龍也君とペガサスが間合いを取る。ペガサスは右手の剣を逆手に構え体制を低くし。龍也君は両手で槍を持ち穂先を下に向け……うん?

(今血が見えたような?)

一瞬龍也君の額から血が流れているように見えたが。目をこすると血は出てなかった。私はこの時は見間違いだったのかと思っただが、後に知る事になる。あの傷の位置はお姉ちゃんの傷の位置と同じであり。タオルで止血されていたはずの傷が消えている事に。そしてこの固有結界の本当の力を知ったとき、私は人生が変わる決断をすることになるのだが今の私はそれを知らなかった

「シッ!!」

「なめるな!!」

龍也とペガサスが各々の得物で何度も何度も打ち合う光景を見てワタシは

(少しは勝機はあると思っていたが。思い上がりだったか)

コアトレースを使えば勝てると思っていたが、コアトレースを使ったところでおそらくは相打ちが限度だろう。しかもワタシの特攻が決まればと条件はかなり悪い

「貴様は剣士だと聞いていたがな！」

真紅の槍と光の2刀が何度も何度も互いを弾く中。ペガサスがそう叫ぶ

「剣を使うのが多いというだけだッ!!!」

廃墟の壁を蹴り加速しながら突き出された槍をペガサスが回避する。その腕には飛刀が握られていて即座に投擲されるが

「甘いー！」

即座に持ち手を変え半回転させ飛刀を全て弾くとそのまま前に跳ぶ様に移動し一気に間合いを詰める

(?持ち手が短い?)

龍也は極端に槍を短く持つていることに気付いた。槍は間合いを離して戦う為の武器だ持ち手を短くしては意味がないのでは？

「シッ!!!」

強烈な気迫と共に放たれた一撃は一息で8連続で放たれた。ワタシの目には槍の切っ先が分裂したかのように見えた

「そんな子供騙しが！」

だがペガサスにはその全てが見えているのか的確に迎撃していくが

「子供騙しだと思おうか！」

「ちっ?!」

打ち合いの途中で持ち手を長くし。半回転からの薙ぎを放つ急なリズムを変えられたのにペガサスはそれに対応し身体を捻りながら回避しそのままバックステップで間合いを離そうとするが

「させると思おうか！」

「思わんな!!」

龍也の追走からは逃れられないと判断したのかペガサスが足を止めて2刀を構える。そこから始まったのはISを展開していても見えない超高速戦闘だった。剣と槍の打ち合いが閃光にしか見えずつかり合う音が響くたびに、廃墟が崩れ地面が抉れる

「はっ!!!」

「なめるな!!!」

だが武器だけの戦いではなく互いに互いの隙を窺い、蹴りや正拳を繰り返して出している。はつきり言っていてワタシでも半分ほどしか何が起きていたのか見えはしない。それほどまでの高速戦闘だった。当然ながら一夏達は見えるわけもない……金属同士の高速度衝突音の中ペガサスが

「何故貴様は何も掴まない？」

「何のことだ」

互いに互いの命を奪おうとしているのに話を始める。龍也とペガサス、その間もかすればそれだけで絶命しかねない一撃が放たれあっている

「地位。名誉。金……そして女。貴様は全てを手に来るだけの地位と名誉を既に手に出来ると言うのに。何故何も掴まない？」

「はっ。そんな下らん事を聞かれるとは思わなかった!!」

いつの間にか槍から剣に持ち替えていた龍也の高速の上下の切りおろしを弾くペガサス。龍也は間合いを詰めながら

「価値がないのさ。私の存在理由は家族を仲間を護る事だけだ。地位？名誉？金？はっ！くだらん！私にとってそんな物は何の価値もないものだ!!」

龍也がそう叫びながらペガサスの胸に蹴りを叩き込み弾き飛ばしながら

「いまさら血に濡れたこの腕で何を掴める！何を抱きしめる事ができる！何も救えず護ることも出来なかった私が何故いまさら幸せになどなれる！ただの1人……」

龍也が一瞬顔を歪めた。後悔と悲しみに満たされた顔のまま

「愛していると言ってくれた女すらこの手で殺した私に幸せなど不要なものだ!!!」

「ぐがあっ!!!」

振りかぶった龍也の拳がペガサスの顔面を捉え殴り飛ばす。だがそれ以上に龍也の言葉はワタシ達に衝撃を与えた

《愛していると言ってくれた女を殺した。いや違う。きつとネクロによってネクロ化する前に龍也が殺したのだろう。だがそれゆえ

に龍也の心に深い傷を残したのだろう。箒や一夏達が龍也を睨む。真意を知るのではなくただ自分たちが理解できない力を振るう龍也を恐れ睨んでいるのだ。ワタシからすれば愚かとしか言いようのない行為だ。龍也は吹っ飛んだペガサスを睨み一瞬で間合いを詰め剣を振るおうとした瞬間

「!?……ちいつ!!」

龍也の動きが一瞬鈍る。その間にペガサスは間合いを離すが龍也はその場から動く気配がない

(なんだ? どうした?)

傷を無効化する世界で戦っているのだから、ダメージと言うのはない筈だが……龍也は数回首を振るとまた剣を両手に構えペガサスに向かつて突進していく。だが明らかにその動きは鈍くなっている

「どうした? 疲れたか?」

「さあなっ!!」

(やはり鈍い……どうしたんだ)

やはりさつきと比べると明らかに動きが鈍くなっている。だが見た感じダメージはないはず? では龍也に何が起こっているというんだ? わけがわからず混乱している

「うっぐう!!」

さつき龍也の記憶を見たときと同じ頭痛がワタシを襲う。いやワタシだけではない楯無もエリス達も同様だ。そしてワタシ達はまた龍也の記憶を、そして龍也を最も理解し共にいた女性の存在を

《なあ……そんな顔してて疲れないか?》

隻腕だった時の龍也が頬をかきながら尋ねると

《問題ありません……お気になさらず》

美しい銀髪に蒼い目の女性。表情と言うものは何も浮かべておらず人形のような印象を受ける

《気にするなど言われてもな。そんな能面見たいな顔をしてたら嫌でも気になるぞ?》

《気にしないで下さい。私は統制人格……貴方の手となり足となる者。それ以外に私に価値は無いのです》

龍也はゆつくりと立ち上がり女性の頭に拳を振り下ろす。当然力なんて何も入ってなかったのかぼこんと言う乾いた音が響いただけだった

《良いか？今までの王がどうだったか知らないが、私がお前の主になつた以上そんな事は認めない。普通に笑って過ごせ、それに何時までも統制人格と名乗っているのがいけないんだ。待ってろ今名前を考える》

龍也の隣の腰掛け。じーと見ている女性。大人のはずなのに何処か子供っぽい印象を受ける

《そうだ。空の上から見守る者、天界の青き風。セレスというのはどうだ？》

《空の上から見守る者。天界の青き風……セレス。ありがとうございます……その名……大切にします》

胸の上で手を組んで嬉しそうに笑う女性。いやセレス。彼女が微笑むと世界が変わっていく……

《うう……ああああ……》

廃墟の中で全身から血を流し涙を流す龍也に

《王よ。行きましよう……》

《ぐうう……また私は何も護れなかった……何も救えなかった》

血が出るほど拳を握り締めて嘆く龍也を優しく抱きしめ

《行きましよう。死ななければ次があります》

龍也はセレスに抱きかかえるように消えて行った。それからもセレスは何度も何度も龍也を支えた。護れなかったと涙する龍也の涙を拭い。死に瀕した龍也を救った。だがそれが何年も続くうちに龍也は変わり始めていた。セレスが人らしくなっていくのに対して龍也は人形のようになっていた。それでもなおセレスは龍也を支え続けた……そして場面が変わった瞬間ワタシは思わず息を呑んだ

(これは……流石のワタシでもきつい)

裏世界を知るワタシでも目の前の光景はきつかった。ポロポロの動力室の様な場所の壁に背中を預ける龍也。だが左腕は肩から切り落とされとどめなく血が流れ続けている。いやそれだけじゃない、両

足に1本ずつ、右肩に2本、そして腹に4本。巨大な槍が突き刺さっていた。もう絶命するのも時間の問題だと言うのは直ぐ判った

《セレス。お前は脱出しろ……そしてはやと契約しろ。もう私に付き合わなくていい……今までありがとう、さあ行くんだ》

何の光も映してない空虚な目でセレスではなく別の方向を見つめながら言う龍也。視力を失っていると一目で判る

《お断りします、天空の青き風は何時如何なる時も貴方と共に・・》

セレスはそう言うと言うと龍也の隣に座り腕を掴む。龍也は驚いた表情を見せてから

《馬鹿だな……お前は……でもありがとう。1人は嫌だから……嬉しいよ。寂しいのは……嫌だからなあ……もうあんな寂しい思いをしたくないからな……》

龍也はそう笑うと身体から全ての力が抜けたように目を閉じた……セレスはその目に涙を浮かべながら事切れた龍也を抱きしめ

《貴方を独りだけで逝かせはしません。私も……貴方と共に……》
そして龍也とセレスは炎に吞まれ消えて行った……

《オリジンの融合騎には1つだけ特殊な力があります。それは己の命と魔力をマスターに渡すこと》

唐突に場所が変わった。龍也の前に佇むセレスは優しく微笑みながら龍也の頬に触れて

《そんな顔をなさらないください。私が望んだ事です》
にっこりと微笑むセレスは私から離れながら

《私は王に出会えて良かった。磨耗した私にとって貴方と過ごした時間が何よりも素晴らしく大切な時間でした、だから私は貴方の為に命を捨てる事が出来た。貴方に生きていて欲しかったから、貴方に笑っていて欲しかったから》

長い時の中でセレスは龍也を愛し始めていたのかもしれない。だから龍也のために命を捨てる事が出来た……

《私は幸せでした。貴方の傍に居れて、もう充分です……私は幸せに生きる事が出来ました。思い残す事はありません》

消えて行くセレスに龍也が慌てて手を伸ばそうとするが、セレスは

手でそれを制し

《王よ。我が愛しい人よ……貴方が掴む腕は私の腕ではありません。貴方が掴むべき腕は他にあります。だから生きてください……貴方には幸せに生きる権利がある。生きて生きて……そして再びこうして話すことが出来る時には……また色んな話を聞かせてください》

セレスは最後にそう微笑み。消えて行った……

「はっ!？」

気がついたらワタシはまた紅い大地に立っていた。2回目の記憶の度は短いものだったがそれでも深くワタシの胸に残った……

誰よりも龍也を理解し愛した女「セレス」その愛は自身の命を引き換えにしたとしても龍也を生かしたいと願った何よりも尊い愛の形だった。龍也はその愛に報いることが出来なかった事を悔いているのだ、だから殺したといった。だけど真実は全く異なっていた……ワタシは龍也の背中を見て

(なんて哀しい道を選んだんだ。お前は……)

きつともつと優しく暖かい道もあつただろう。だが龍也が選んだのは茨の道……

誰からも理解されない。孤独な正義……それが八神龍也が選んだ道だったのだとワタシは悟つたのだ……

第70話に続く

第70話

第70話

キンツ!!キンツ!!!

固有結界の中を響き渡る甲高い金属音。ペガサス、ヴオドオン、ベルフェゴールの3体を相手に戦うのならば生半可な剣では役に立たない。

「はっ!!!」

「シャアツ!!!」

上段から振り下ろされたペガサスの2刀と横薙ぎのベルフェゴールの鎌に引き裂かれながら後ろに飛んで

「壊れた幻想《ブロークンファンタズム》ツ!!!」

ベルフェゴール達の中心にある剣を爆破しその爆風についで一気に間合いを離す。着地し直ぐに走り出そうとして

ガクンツ

(くっ!?!リバウンドか!?)

展開し始めてもう30分が経とうとしている。全身が悲鳴をあげ視界が徐々に狭まっている。

(ちいっ!こんなところで終われるか!!)

リミットがくれば私は十中八九意識を失う。そうなれば一夏達はベルフェゴール達から身を護る術はない。ISなんてLV4にしてみればただのおもちやだ。絶対防御など何の役にも立ちほしくない。震える足を殴りつけ活を入れてから、廃墟を駆け世界の中心に突き立つ黄金の剣「約束されし勝利の剣《エクスカリバー》」を目指して走る(時間がない。これで極めなければ)

真名開放に使う魔力と残りの自身の魔力を計算すればギリギリで一発放てる。後は

(上手く誘導するだけだ!)

3体をエクスカリバーの射軸におさめる。その方法は1つだけだ、

地面に並び立つ剣を見据えその内の1本を切り上げる

キンツ!!!

「加法……一本・二本・三本・四本・五本・六本・七本・八本・九・十・十一・十二本」

高速回転しながら弾かれた剣は別の剣を弾き、それがまた別の剣を弾く。それが何度も繰り返され倍々に増えていく

「乗法。48本」

更に回転する剣を叩き回転させる宙を舞う剣同士が更にぶつかりあいその数を倍以上に増やす。だがこれで終わりではない

「乱立。192本」

一息で2本更に剣を弾く、それは高速回転しながら周りの剣を巻き込みあいその数を倍以上に跳ね上げる。

「ひゃっは!?!何だこれは!?!」

「視界全てが剣だと!?!」

動揺し硬直しているヴオドオン。ベルフェゴールと違い

「なっ!?!散れ!ベルフェゴール!ヴオドオン!!」

私が何をしようとしているのか理解したペガサスがそう叫ぶがもう遅い。最後に弾いた剣が目の前に来たところで

「封殺「剣の牢獄」ツ!!!」

その一本の剣を全力で打ち出す。それは全ての剣を巻き込み一直線にペガサス達に向かっていく。

「くっ!?!退路を断られた!?!」

打ち出した剣達は互いに互いを弾き合い、完全なる包囲網とする。人間相手には使う気はないがネック相手なら何の問題も無い

(壊れた幻想では駄目だ。火力が足りない)

あの3体を同時に仕留めるにはEXオーバーの魔力が必要になる。192本全て同時に爆破したところでSS+、普通の相手ならこれで十分だが。最高位のLV4を同時に屠るにはこれしかない。足場をしっかりとつくり両手で約束されし勝利の剣《エクスカリバー》の柄を握り締め魔力を通してながら振りかぶる
(ぐっううう……相変わらずの大食いが)

約束されし勝利の剣《エクスカリバー》はとんでもなく燃費が悪い。魔力を無尽蔵に吸い上げていくのではと使う度に思う

しかも固有結界を展開時間ギリギリまで展開した上の真名開放。はつきり言つて自殺行為でしかない。最悪の場合の治癒の魔力まで使おうとしているのだから自分でも呆れてしまうが

(ここであいつらを仕留めておかないと後が不味い)

指揮官クラスが3体も揃つて出てきた。こんな好機を逃すわけにはいかない

「約束されし《エクス……》」

約束されし勝利の剣《エクスカリバー》の刀身に光が集まり巨大な刀身を作り上げる

「……勝利の剣《カリバー》ッ!!!」

全ての魔力をつぎ込んで放たれた史上最強の聖剣の刃がベルフェゴール達に迫る。極まったと放った瞬間確信した、だが……それは間違いだつた。固有結界内に突然2つの膨大な魔力反応が現れると同時に

「ぬうんっ!!!」

「はあああッ!!!」

エクスカリバーを押し返そうとする2つの闇の刃。暫く拮抗しあつていたが

「ぐうっ……」

もうエクスカリバーを維持するだけの魔力がなくなり。勝利を約束されたはずの聖剣は私の手の中でその輝きを失つた……

「ふっふふふ、久しいな。八神龍也。私を覚えているか？」

私の前に立ち塞がったのは見覚えのあるLV4ネクロだつた。赤黒い甲冑と青いマントを持ち、大型の西洋剣と盾で武装したLV4ネクロ。私自身も何度も対峙した

「ああ。良く覚えているよ……冥皇ベエルゼ」

LV4の中でも取り分け強力なネクロ。最終決戦の時には姿を見せなかつたので死んだと思つていたがまさかこんな魔素の薄い世界で生きているとは思つても見なかつた

「礼に従い。俺も名乗ろう。覇皇ハーデス」

そしてベエルゼの隣で腕を組むLV4ネクロ。漆黒の甲冑に自分の周りに滞空している棺のような形状の楯とその両腰の鞘に装備された西洋剣が見える。最悪のタイミングでの増援だった……

龍也が剣を支えにして漸く立っているとと言う状態で更に増援が現れた。しかもベエルゼ

(スコールから何度も聞いていたが、こいつも化け物だな)

タスクの協力者としてIS奪取や操縦者の拉致をやっていたネクロ達のリーダー。しかも総大将が前に出てきた。これはワタシでも予想外だった……

(逃げるのは無理か……いざとなればワタシも闘うしかないな)

ネクロ相手に普通のISでどこまで戦えるかは判らない。だが戦うしかないのなら命を賭ける覚悟がある。1人戦う覚悟をしている中ベエルゼは剣を収め

「相変わらずの戦技。じつに見事……私の知る貴様より遥かに腕を上げていた。素直に賞賛に値する」

「ふん……貴様なんぞに褒められても嬉しくもなんともないね」

よろよろと剣を構えなおす龍也にベエルゼは手を向けて

「止せ。剣を降ろせ……今の貴様とは戦う気はない。ただ宣戦布告に来ただけだ」

「おいおい!?ベエルゼ様よ!ここで仕留めておけば後々「黙れ。ベルフェゴール。私はペガサス達を回収して戻れと言ったはずだ。命令違反の上に私に意見する気か?」ひやはっ!?も、申し訳ありません」

膝を付き謝るベルフェゴール。あれだけの強さを持つネクロがぶるぶると怯え顔色を窺っているというのが信じられなかった。ベエルゼが強いのは知っていた。だがここまでとか

「惜しむらくは足手纏いどもが居た事だな。お前1人ならばこの世界を展開した時点でペガサス達を殺せた者を」

くつくくつと笑うベエルゼに龍也は

「ふん。今でも私は戦える」

剣を構える龍也にベエルゼはワタシ達を指差し

「哀れだな。何も理解しようとしないうる愚か者共がそれほどいては貴様も碌に戦えぬのは道理。しかも貴様を全ての悪と決め付け憎悪する。人間とは愚かだな。なあ八神龍也？貴様がどれほど傷を背負い戦ってくれたのでさえ理解しない。人間とは度し難い存在だよ」

喉を鳴らし笑うベエルゼに千冬が

「何の話をしている。龍也がいたから貴様らが来た。龍也がいなければ「戯けが。八神龍也がいるからこそ我らは進軍しなかつただけだ。こんな砂にも劣る城砦など半日もかからず廃墟だ。それすら判らぬか、世界最強が聞いて呆れるわ!!!」

ベエルゼの一喝がワタシ達に叩きつけられる。ベエルゼは肩を竦め

「こんな虫にも劣る屑どもを護り傷ついた貴様を私は憐れむよ。だってそうだろう？自分たちの傷が全て癒えて……いや違うか。八神龍也がその痛みを全て引き受けていることさえ理解できぬのだからな!!!」

ベエルゼの一喝がワタシ達の耳を打つ。ワタシ達の傷を龍也が背負う？どういうことだ……私達が困惑しているとベエルゼは剣を構えたままぴくりとも動かない龍也を見ながら饒舌に

「知らぬのか、ならば教えてやろう。どうせもう八神龍也に動く気力など残されていないのだからな。変わりに教えてやる。この世界は全ての傷を一時的に無効化する。だが展開終了後にその傷は全て同時に八神龍也の身体に戻る。常人なら発狂死するほどの痛みが既に八神達也を襲っている「黙れ……そんなことはどうだって良い」だがこの世界に足を踏み入れたものの傷も全て背負ってる。貴様らの傷はないことに気づいておらぬか？」

そう言われて慌てて楯無を見ると、楯無は頭に巻いていたタオルを外し

「き、傷が無い!?頭も腕も全部!?!」

楯無だけではない全員が怪我を負っていた箇所を確かめ驚く中ベ
エルゼは踵を返し

「このような些事で死んでくれるなよ。貴様を倒すのは私だ。行くぞ」

龍也を一瞥したベエルゼは無造作に腕を振るうと空間をこじ開け「戻るぞ。ここで八神龍也が死ぬと言うのならそれもまた運命だ」

そう言って自身がこじ開けた空間の中に消えていくベエルゼ。それに続いて消えてくヴオドオン、ベルフエゴールだったが

「……」

「どうした。ペガサス戻るぞ」

ペガサスだけではハーデスと名乗ったネクロを睨みつけて居たが。領き同じように消えていった……残されたのは剣を構えて沈黙している龍也とベエルゼの言葉を聞いて硬直してるワタシ達だけ……もしあいつ言ったことが本当なら……ワタシがそう思い足を一步踏み出した瞬間。紅い大地は音を立てて崩れ落ち

「ごはっ」

龍也は大量の血液を吐き出すと同時に糸が切れた操り人形のように地面に崩れ落ちた。そしてそれと同時に鼻を突く血の臭い

「ツバキ！楯無！」

「判ってるわ！」

「恩人だからね！死なせないわよ！」

慌てて龍也に駆け寄り倒れた龍也の身体を起こして

「!?!」

ワタシもツバキも楯無も絶句した。全身どこを見ても傷傷傷……無事なところなど何一つ無い……それ所かどの傷も楯無や一夏達が負った傷と同じ場所に、同じ深さで存在し。それが龍也の古傷を開き余計に出血を激しくさせていた。その余りの光景に箒達が目を見開き呆然としている中。楯無が気道を確保しようと口元に手を持っていったとき

「!?!ツバキ！息をしていない!!!」

ワタシも龍也の口元に手をかざす。龍也の呼吸は完全に停止し心

音も止まりかけていた

「気付け行くわよ！ユウリ、楯無！身体押さえて！千冬手伝いなさい！」

ツバキがそう怒鳴るが千冬は

「魔法使いなんだろう？その程度自力で……」「いいかげんにしなさい！！自分達の命の恩人を見殺しにする気！貴方達も呆然としてないで手伝いなさい！！」

ツバキの一喝が響いても動きもしない一夏達に本気で怒りを覚えた。なぜ自分たちを救ってくれた人間を助けようとしなさい、これではベエルゼの言った通りではないか……だが動くものも居た

「ツバキさん、どうすれば良いですか!？」

「彼は死なせてはいけない、お義母さんどうすれば良いの!？」

「簪ちゃん……エリスちゃん……2人で身体を支えて。良いしつかりよ?。」

「恩を仇で返すのは性じゃねえ。手伝うぜ」

ツバキが指示を出す中シエンやヴィクトリアも龍也の身体を押さえに来る。龍也の本来の姿はワタシ達が見ていた姿より一回り大きい。ワタシ・楯無・ヴィクトリア・シエン・クリス・簪・エリス・弥生で支えて漸く身体を固定できた。血で服や手が汚れるがそんな事を考えている場合ではない

「せーのっ!!!」

龍也の後ろに回ったツバキが背中に足を当てて肩を掴み。思いつきり後ろに引っ張る

ゴキヤンツ!!!

生々しいまでの骨のなる音が響くと同時に龍也が目を見開き

「うっごほーげほっがほっげおっ!!!」

龍也が咳き込む度にどす黒い血が吐き出されワタシ達の服を汚す。その血の色を見て

(この色は不味い!?)

黒い血液を吐き出すということは内臓がいくつかやられているのは間違いない

「このままじゃ不味い！早く治療室に連れて行かないと手遅れになる！！」

出血が激しすぎる。このままでは出血死をするのは時間の問題だ。

「ツバキ殿！緊急医療キットです！」

暗部の3人がそれぞれ緊急用の医療キットを持って走ってくる。だがあんなその場しのぎの機械では……丁度その時月光が龍也を照らす……それと同時に闇の中に蒼い光が走る

(な。なんだ!?何が起きている!?)

突然の不可解な現象にワタシが驚いている中光は徐々に形を成していく……

《王を救いたい。力を貸して欲しい》

月光の光を浴びてワタシ達の前に姿を現したのは

「せ、セレス？」

龍也の記憶で見た死んだ筈の女性の姿だった……

「ん？あ、なんだー終わりかあ」

突然ネルヴィオが立ち止まりそう呟く。空中だから立ち止まるという表現はおかしいが止まっている。ネルヴィオはBJを解除し小さな女の子を抱きかかえる

(やっぱリユニゾンデバイス！)

ネルヴィオの気配だけではなく別の気配も感じていたのでもしかしたらと思っていたがやはり私の予想は当たっていた

「早く行きなよ。千の剣のリバウンドでお父様が死んじゃうでしょ」

「何を考えとる？」

ネクロが態々私達を見逃す理由がわからない。警戒しながら尋ねると

「あのねー。ネルはネルの目的で動いてるの！ベエルゼとかどうでもいいーし。ネルはお父様が欲しいだけだから死なれたら困るの。判る？」

だから早く行ってよと不機嫌そうに言ったネルヴィオは

「いこ。セリナ、今日は帰ろ」

「うん。ワカッタヨ。ネル」

ネルヴィオ達はそう言うのと本当に轉移し私達の前から姿を消した。ネクロが1枚岩の組織ではないとは言えこれには驚いた。だが呆然としている暇は無い。即座に兄ちゃんの魔力をサーチするが

(反応が弱すぎる！)

反応が弱すぎて感知できない。まだあたりに残っているネクロの魔力のせいだ

「私が行こうか!? スピードは私が1番あるよ!」

「がむしゃらに探しても埒が明かんわ!」

固有結界の時間制限を越えた。リバウンドで死に掛けているのは間違いない。だから探知できるように最低限の魔力は残す約束だったが、そんな余裕が無かったのだろう。完全に魔力の反応が無い。気ばかりが焦る中唐突に凄まじい魔力反応がした

「こ、この魔力は……」

「そんな……どうして」

その魔力の波長を忘れるわけが無い、一緒にいた時間は短かったが忘れるわけが無い。風のように吹き渡る魔力……

「セレス……さん」

セレスさんの魔力が教えてくれている、兄ちゃんの居場所を……私達は即座に目配せしてその魔力反応の元へと向かった

血の海に沈む龍也君の前に浮かび上がったセレスさんは私とエリスを見つめて

《貴女達の力を貸して欲しい。貴女達ならば王を救える》

私達が龍也君を救える? という意味かわからず困惑していると、セレスさんは

《いまはやて様達がこっちに来ている。だが間に合うかどうかはギリギリだ。だが貴女達は魔道師としての素養がある。貴女達が力を貸

してくれれば王を救える。だけど……無理強いはしない。貴女達が王を救えば貴女達は逃れることの出来ない戦いに身を投じることになる》

戦い……ネクロとの戦いのこと？私が困惑している中箒さんが「止めておけ！箒！エリス！はやて達が来れば八神は助かるんだ。お前達が八神を救う義理はない筈だ！」「黙れ！私は龍也君に救われた。ずっと、ずっとだ！さっきも何も言わないで私達を助けてくれた！どうしてそんな事がいえる!!!」

エリスの一喝に箒がびくりと身を竦める。いやそれだけじゃない……ツバキさんやユウリさんにも睨まれ完全に黙ってしまった

「失礼しました。それでセレスさん？私はどうすれば龍也君を救えるのですか？」

《貴女1人では足りない。その貴女の力も必要》

私を見てそう言うセレスさん。お姉ちゃんや箒さん達の視線を感じながら。隣のお姉ちゃんを見ると

「止めないわよ。箒ちゃんが決めなさい」

お姉ちゃんに背中を押され1歩前に踏み出しながら

「私も協力します。だから教えてください、龍也君を助ける方法を」

私がそう言うときセレスさんは

《感謝します。手を貸してください》

ゆっくりと伸ばされた手を握る。半透明なのにしっかりと感触が会った

《私が詠唱を教えます。それについて詠唱をしてください》

その言葉に頷くとセレスさんは詠うように言葉を紡ぎ始めた

創造の理念を鑑定し、

「創造の理念を鑑定し」

基本となる骨子を想定し、

「基本となる骨子を想定し」

構成された材質を複製し、

「構成された物質を複製し」

ここまで詠唱したところで凄まじい虚脱感に襲われた。足が震え

て立つてられない。私もエリスも膝を着くがそれでもセレスさんの手は離さない

制作に及ぶ技術を模倣し、

「せ、製作に及ぶ……技術を模倣し……」

成長に至る経験に共感し、

「成長に至……る。経験を共感し……」

蓄積された年月を再現し、

もう口を開くのもしんどいし目の前がかすむでもセレスさんの言葉を聞き違えることなく詠唱を続ける

「蓄……積……された……年月を再現し……」

あらゆる工程を凌駕し尽くし——

「あらゆる……工程を凌駕し……尽くし」

ここに、幻想を結び剣と成す——！

「ここに幻想を結び剣と成す！」

《全工程終了。投影終了「全て遠き理想郷《アヴァロン》

私とエリスの手の中に光り輝く鞘が現れる。それは日本人の私には何の鞘か判らなかつたがヴィクトリアさんが

「アヴァロン!?アーサー王の神話の伝説の鞘……所有者に不老不死を与えるといわれるあの鞘か!」

驚き目を見開いているヴィクトリアさんをみながら私達の手の中に現れた鞘を龍也君の身体の上に乗せると

「うっ……うっ」

柔らかい黄金の光が龍也君を包み込む。すると見る見るうちに傷は言え血の気の失せた顔にゆつくりとだが生気が戻ってくる

「う……せ、セレス?」

《はい。私です》

龍也君はうっすらと透けて見えるセレスさんを見つめて

「迎えに来たのか……?」

《いえ。違います……私は貴方を救いに来ただけです》

「そ、そうか……まだ裁きは訪れないか……」

龍也君はそう呟くと再び意識を失った

《これで大丈夫です。あとははやて様たちが何とかしてくれるでしょう》

そう笑ったセレスさんだが織斑先生達を見て

《私は貴女達を許さない。自分の都合しか考えない屑が何を持って王を否定する！お前達のような存在を護って王が傷つく理由など無い！そんなにも王が信じれぬというのなら何故王の後ろに隠れた！前に出て死ねばよかつただろう!!!》

燃えるような怒りを帯びた視線でそう叫んだセレスさんから目を逸らす織斑先生達から興味を失ったのか、何処か遠くを見つめて

《来た……あとははやて様達が何とかしてくれるはずだ》

そう呟くと龍也君を抱きしめゆっくりとその姿を粒子にして消えて行つた……死してなお龍也君と共にあり続けるセレスさんの深い愛を見た……

「兄ちゃん!!」

「龍也ー!」

「龍也さん!!」

空から黒い甲冑や白い法衣の様な物を纏つたはやてさん達が降りてくる。龍也君が魔法使いなら当然といえば当然だろう。慌てて龍也君に寄り添つたはやてさんは何事か呟くと蒼い光が龍也君を包み込んだ

「うっ……はやて?」

「あ、ああ……良かった」

心底安堵したという表情ではやてさんは龍也君を抱きしめた。龍也君ははやてさんを抱き返しながら背中を撫でて、はやてさんに肩を貸して貰いながら立ち上がった龍也君は

「全てを説明するときが来たようだな。ツバキ・V・アマノミヤ」

その顔は見たこともない険しい顔をしていて、思わず背筋が伸びた……龍也君はそんな私とエリスを見てくすりと笑うと

「ありがとう。助かったよ」

にこりと微笑みかけられ私とエリスはいうまでも無くトマトのように真っ赤になる。あうあうと理解不能な言葉を呟くことになった

……あの笑みは駄目。綺麗過ぎると私は思った

第71話に続く

第71話

第71話

血塗れの簪やエリスを見ながら私は悪いことをしたなど思いながら

「すまない。助かった、死に掛けるのは慣れていないが」「慣れる物じゃない!!!」「耳元で怒鳴るな頭に響く」

いかにアヴァロンといえど結界の外に加え。ランクとしては私が作るものと比べるまでも無く粗悪な仕上がりがりだった。

失った血液と受けたダメージは半分ほど回復したが、それでも本調子には程遠い

「大丈夫なの?」

「なにがだ?」

楯無にそう尋ね返すと楯無は自身の頭と腕を触りながら

「ほら……その腕とか? 肋骨とか? 頭とか?」

自分の怪我が私に写ったとベエルゼに聞かされた。楯無が申し訳なさそうな顔をして尋ねてくる

「問題ない。傷は完治した。あとはまあ血液とかだが休めばどうともなる」

セレスとの融合のおかげで回復力は高いしなと思っていると一夏が少し距離を取りながら

「なあ? お前達は一体なんなんだ?」

恐怖を目に写しながら尋ねてくる。まあ当然といえば当然か、慣れるからなんとも思わんがな

「ふむ。説明しても良いが……ここでは駄目だな。私の別荘に来てもらおうか」

私がそう言うのと一夏は首を振りながら後ずさり

「いや。俺は行かない……お前はずっと俺達を騙していたんだろう!? 何もかも知ってたのに!! 俺はそんな奴の言うことは信じられない! だから俺達は帰る!!! 簪さん達もだ! 着いて行かないで戻るべきだ!!」

その言葉に明らかにはやて達が不機嫌な顔をする。まあ騙していたって言えば騙していたが別にそんな意図はなかったんだがな。あと

「……………イラッ」

民間人にデバイスを向けようとしてているはやて達。これでも我慢しているほうだが、もしこれ以上何か言おうものなら非殺傷の魔法の嵐が発生するのは言うまでも無いだろう

「そ、そうですね。私も戻ります。少々気分が優れないので」

「……………僕は一夏が帰るって言うなら帰る」

一夏の帰るといふ言葉に続くかのように帰ると言い始めるセシリア達。残っているのは私を助けてくれたメンバーと暗部の3人とそして鈴とラウラだけだ。鈴とラウラは

「あたしは知るべきことは知りたいの。教えて貰うわよ。何者なのかとかあのネクロがなんなのかとかね?」

「私も同意権だ。もしつぎがあつたらと考えるのなら聞いておくべきだ」

クレバーな2人らしいとも思いながら私は肩を竦めて

「うむ。別に構わんよ?寮でネクロ化したいのならかまわん。好きにしたまえ身体が内側から裂かれる痛みにもがき苦しみ死にたいのなら好きにすれば良い」

その言葉に立ち止まる一夏達を無視してはやてに目配せすると

「ではツバキさん達はこっちへ。兄ちゃんの別荘で解呪と風呂を用意するんで血を洗い流してください」

ゲートを作りさつきと楯無たちを押し込んでいく。千冬が

「どういうことだ?」

「簡単な話だ、ネクロ化は空気感染もする。これだけ大量のネクロを倒したんだこころ辺一体はネクロの毒素で汚染された。

抵抗力を持たない人間なら半日もすればネクロ化する。痛みを伴ってな?まあ帰ると言うなら止めはしない。勝手に死ぬ」

「ちよつと待った!龍也く……………君はおかしいわね、さんでOK?」どうぞ」治してあげないの?」

ネクロ化の言葉を聞いて明らかに怯えの色を見せる一夏達に

「帰ると言うことは私が信じれないということだ。無償で2回は助けたさ、だが聖人君子じゃあない。態々去って行く者を救う気はない面倒だしな」

そう言いながらゲートに近づき。指を1本だけ立てて

「私の堪忍袋も3回までだ。10秒以内に決断しろ。来るか！来ないのか！死にたいのなら悩んでいろ!!!」

私の怒声に慌てて近寄ってくる一夏達を見ながら

「二度はない。大人の言う事は黙って聞いておけ」

黙って頷く一夏達を見ながらツバキさんに

「ゲートの先はまぶしいので気をつけて」

「まぶしい？まあ良いわ。魔法とやらあとでじっくり聞かせてもらうから」

「構いませんよ。受けた恩は返すのが流儀ですから」

そんな話をしながらゲートを潜る。一夏達はおどおどとついてくる。するとゲートの先からうわつとかきやあつと言う声が聞こえてくる

「罨とかじゃないわよね？」

「ふーあの先は昼間なんですよ？それにですね。態々罨なんか仕掛けなくても無力化するなら」

パチン

指を鳴らすと空中に剣が3本現れる。投影待機にしていた剣群だ

「これで全部事足りる」

「……それは失礼。魔法使いって言うのは随分とすごいよね？」

「ご想像にお任せしましょう。まあその前に血を流してください。私の別荘でね」

ゲートを潜り抜けるとその先は昼の世界。全員が目を閉じるなか私はゆっくりと別荘にと歩き出した

これが別荘？龍也が別荘と言ったのはかなり大きなログハウス。

近くには巨大な湖が広がっているのが見える

「龍也様。お怪我は大丈夫ですか？」

雪の花が散ったと思つた瞬間緑色の髪をした女性が龍也の前に片膝立ちで立っていた

「問題ない。それよりもはやて達が連れて行つた彼女達は？」

「は、いま入浴をしていただいています。だいぶ血液を浴びていたよ
うなので。服のほうはこちらのほうで処分いたしました」

「そうか。ありがとう。それとあいつらも案内してやってくれ。汗が
酷いだろうからな」

その言葉に片膝立ちの女性は眉を顰めながら俺達を見ながら

「龍也様を疑い迫害したものをですか？」

「そうだ。嫌か？」

迫害つて俺達が何したつて言うんだよ。龍也が何もかも言わない
のが悪いんだろう？俺がそんな事を考えていると

「落ち着け。シャルナ。子供の戯言だ」

「……度し難いです。龍也様に疑惑を向けるなど極刑に値する」

その目は黒く濁っているかのように見えた。俺や千冬姉を見据え
シャルナと呼ばれた女性は龍也に一通り宥められてから立ち上がり

「先に用意するものを要しておきます。龍也様の手当ての用意も必要
ですし、ではまた後で」

とんつと跳躍すると女性は雪をまとつて姿を消した

「え？なにあれ？ええ？どういうことよ？」

鈴が驚きながら尋ねると龍也は

「後で説明してやるよ。あとで気が向いたらなだけだな」

「あら？じゃあ私が聞いたら？」

ツバキ先生がそう尋ねると龍也は

「恩人ですからね。1つだけなら無条件で答えますよ？それでさつき
のを答えましょうか？」

「いや。良いわ。後で聞かせてもらおうから」

ツバキ先生とそんな話をしながら歩いていく。俺達は着いて行か
ないわけにはいかず龍也の後を追って歩き出した

「取りあえず汗を流して来い。話はそれからだ。シャルナ。クレア悪いが手当てを頼む」

龍也はそう言うときつきに緑の髪的女性と小柄な金髪の少女を連れてログハウスの奥に向かって行った。取りあえず俺達は従うしかなかったのだから、言われたとおりシャワーで汗を流してから渡された着替えに着替えてリビングに戻った

「おや。意外と早かったな？それともなにかね？私が何か罫を仕掛けているとでも思ったかな？」

くつくと笑う龍也は既にもう絶好調と言う感じでいつもと同じ余裕の色を見せている。その隣でははやてさん達の姿があるが、龍也同様20代前半と言った感じになっている

「あ、あの着替え、ありがとう……」

簪さんや楯無さんも血塗れの私服ではなく別の服を着ている。俺と同じように龍也から貰ったらしい。まああれだけ血塗れになっていたらもうきること難しいだろうと思いつつ椅子に座る

「ああ。気にするな。私が預かった子供の面倒を見るときに使う服だ。気に入ったら持って行け」

そう笑う龍也は俺達を見ながら

「では始めるか……投影開始」

パチンと指が鳴らされた瞬間。俺達1人1人を囲うように3本の剣が現れる。楯無さんが不安げな表情をして

「これでぐさりとかは無いわよね？」

「ないに決まってるだろ？お前私をなんだと思っている？すこしばりつとするが我慢しろ」

パンツ!!!

龍也が勢い良く手を打ち鳴らすと一瞬だけ電撃が走ったような気がして思わずウツと呻く。千冬姉はユウリも同じくだ

「これで終わりだ。ネクロ化の心配はない」

龍也がそう言うとき剣は溶けるように消えていく。それを見ていたユウリが

「何をしたんだ？」

「なにお前達の体内に私の魔力を通したんだ。私の魔力は少々特異でね。破邪属性だからネクロには猛毒なのだよ」

破邪？魔力を通した？そんな事を言われても何のことか全く判らない。

「終わりだ。で？何から話せば良いのかね？」

いつもと同じ笑みを浮かべる龍也に筈が

「さて。この程度なら向こうで済んだのではないか？」

確かに剣を作つて魔力を通す？だけなら向こうで済んだのではないか？と俺達が思っているとはやてさん達か

「あーそりや無理やな。ここは兄ちゃんが作った魔力石があつちこち埋め込まれとる。だから出来るんよ」

「そーそ、本当ならむちやくちや面倒な魔方陣に術式を用意しないと駄目なんだから」

なのはさんとはやてさんの言ってることは半分も判らないが、なにか複雑な現象が起きているというのはわかった

「じゃあ龍也君。君は何者なのかしら？はやてさんとかもね？」

ツバキ先生の質問に龍也は頷きはしたが指を立てて

「質問には答えよう。ただし私の話を聞いた後にな。少々腹に据えかねえていることがあるのでな……言わなくても判るだろう？」

龍也の鋭い眼光が千冬姉を見据えている。千冬姉は何時も通りのポーカーフェイスのまま

「なんのことか……」ネクロが八神を狙ってきた可能性がある。少し観察すべきだ。だったかな？」

ビクンつと千冬姉が肩を竦める中龍也は、上機嫌とも取れる表情でたんたんと言葉を紡ぎだす

「ああ。お前の判断は実に正しい、だけど……それ以上に愚かだ。疑いが前に出すぎている。戦士としては優秀だろうが、指揮官としては下の下だ。指揮を出すのなら敵であれなんであれ利用する方向で考えるべきだろうよ」

龍也はからからとそう笑うがその後ろではなのはさん達が凄い顔で千冬姉を睨んでいる。だが俺としては何も話してなかった龍也達

の方が悪いと思う

「と言うわけだ、ではまずは何から話そうか？」

紅茶のカップを手にとって笑う龍也にツバキ先生が

「龍也さん君達は何？そして何かの組織に所属しているのかしら？その動き統制されているように見えるのだけど？」

俺には判らないが、どうも龍也達の行動は統制されているらしい。

龍也はにこりと笑いながら

「私達はそれぞれ魔導師だ。お前達ふうによればと魔法使いと言う奴だ」

魔法使い……本来なら何を馬鹿なところだがさっきの光景を見ると信じるしかない

「そして私達は時空管理局機動六課に所属する魔導師だ。はやてはこの総轄隊長。なのはとフェイトもそれぞれ部隊のリーダーだ」

時空管理局？機動六課？どういう組織なんだ？管理とついているだけあって監視とかしてる組織なのか？俺が首をかしげていると弥生さんが龍也に

「その管理局って言うのはどうでもいーや。けど龍也？お前は？普通の隊員ってことはないよな？」

どうでも良いことは無いとおもうんだが……弥生さんの問い掛けに龍也ではなくはやてさんが答えた

「大将や。本来なら後ろで指揮だすのが仕事なのに……いっつも先陣切って突っ込んでいくやで？正気とはおもえんやろ？」

ふうと溜息を吐くはやてさんに龍也は紅茶のカップを机の上におきながら

「それが一番早い、指揮は前線で取るに限る」

「だからって！何時も勝手に！飛び出していかないの!!!」

なのはさんが耳元で怒鳴る。どうやら何時も先陣切って飛び出していくらしい。龍也はなれた様子で耳を塞いでガン無視だ

「組織で行動しているというのは判ったわ。じゃあ、あのネクロって言うのは？なんなの？」

ネクロ。俺も気になっていたあれが何なのか？龍也は頷いてから

「詳しく説明するのは難しいので大雑把にだが説明する。魔法とかについてはまた今度だ。疲れているだろうからな、今話しても半分も理解できそうだしな」

そう前置きしてから龍也はネクロについての説明を始めた

「ネクロについてだが、ネクロは基本LV1〜4の区分に分けられる。まれに「デクス」タイプと言う亜種も存在しているが大体は1〜4の区分で分かれていると思うてくれれば良い」

俺達の前にディスプレイは浮かび上がり。そこに映像が映し出される

さつき俺達が戦った黒い亡霊と騎士の姿をした化け物の映像だ。それを見てセシリアや箒が少し身を引く、多分さつきの殺してくれと嘆いていた人たちの事を思い出したのだろう

「まずはネクロと言う生き物に付いてだが、ネクロは死んだ魔道師の魂や。遺体を変化させ誕生する悪性の魔道生物だ。生者を襲い生命力やリンカーコアを奪い自らの糧にする。さつき見ただろ？ネクロになった操縦者を」

さつきの忘れようと思っても忘れようが無い。苦痛の声を上げてネクロになって行った操縦者を

「あ、あれは人間なの？」

簪さんの問い掛けに龍也は目を伏せて

「ああ、そうだネクロマンシーで強制的に蘇生され、本人の意思を剥奪され破壊の限りを尽くす悲しき亡者達。倒す事が彼らの救済に成る。完全にネクロ化するともう元には戻れないからな」

倒すことが救済……だとしても何か釈然としないものが胸に残る……他に何か方法があるのではと考えてしまう

「他に何か無いのかと考えているな？一夏」

「う、まあ考えるだろ普通？」

あのネクロ達は助けてくれと言っていた。殺す以外の方法があるんじゃないかと思っっているという

「ない事も無いが完全にネクロ化されてはだめだ。変化の途中なら10%の確立で解呪出来る」

100%? たったそれだけなのか? 魔法使いなんだからぱつぱと出来るんじゃないのか?

「あのね? 一夏。魔法だって万能じゃないんだよ? 出来ないことの方が多いんだ、それでも私も龍也もはやても皆出来る範囲を超えて手の届くものを全部護ろうとしているの判る?」

諭すような口調のフェイトさんに頷く。そりやあまあそうだよな。万能なわけないんだよな……

「それはまた随分と酷いわね……如何してネクロはそんな事をするの?」

ツバキ先生が顔を歪めながら尋ねる。さっきのネクロの行動を思い出したのか顔を青褪めさせるセシリアの背中を撫でていると龍也が

「やつらは破壊と殺戮を好む。すべてを壊し殺すこと。それがやつらの存在理由だ。私も10年近く戦っているが一向に数が減らない。むしろ増えていると言って良いだろう。それに見たんじゃないのか? 千の剣の中で私の過去を?」

千の剣。あの廃墟の世界の名前……墓のように立ち並ぶ武具の数々は見ているだけで心が冷え、恐怖を感じる……固有結界は心を写す禁呪だと言っていた。そして龍也の過去も見た……嘆きと絶望だけの記憶。見ているだけ痛ましく心が痛んだ。でもそれ以上に恐ろしいと俺は思ってしまった……

「ええ。見たわ……申し訳ないけどね」

さっきの固有結界と言う奴の中で見た龍也の過去を思い出しているとツバキ先生がそう告げる

「別に気にする事は無い。何も無いからっぽな人形の半生だ。くだらん喜劇だったろ「兄ちゃん!!」「龍也さん!!」「龍也!!」事実だから変えようが無い」

龍也の自嘲気味な呟きを聞くのがいやなのかそう怒鳴るはやてさん達が怒鳴るが龍也は全く意に介した素振りを見せずネクロの説明を続ける。はやてさん達は酷く悲しそうな顔をして龍也の後ろの席に座りなおしている

「ネクロの特性としては極めて高い再生能力と一定量魔力や生命力を吸収するとその姿を変えることにある。LV1は一律黒い亡霊型、LV2はボロボロの甲冑姿と決まっている。このLVなら自我も薄いし知能も対して高くないそれに特殊な事をしてこないなので比較的に楽に戦える。ただし、影に潜ることができるので、注意するところはその一点のみだな」

龍也の言葉をメモしているツバキ先生。俺達もしっかりとその話を聞く。正直龍也が何を考えているかなんて判らないし、正直怖い気もする。だが話を聞かないわけには行かないと思ったのだ。ラウラやシエンさんは

「手帳持ってた良かったよ」

「本当だな」

懐から出したメモ帳に龍也に言われたネクロの特徴をメモしている。代表候補となるとやはりこういう事態を想定しているのだろうか？

「ではLV3とLV4は？」

ツバキ先生がそう尋ねるとモニターの画像が切り替わり。スライドショーのように画像を送っていく

「LV3とLV4は上位ランクに位置するネクロだ、一概にどういう姿をしているとは言えんのだが……獣や龍と言った異形型か獣人と言った姿を持つのがLV3だ。このLVになるとなんらかの特殊能力を身に付けている可能性が高く。知性と自我も兼ね備えるのでかなり厄介だ」

様々な姿をしたネクロの姿が浮かび上がる。獣人や龍人。それに狼のような物に機械の姿をしたもの。本当に種類が豊富だった。俺は思わず

「本当に姿が全然違うんだな。個体ごとに姿が違いすぎるがそれには何か理由が？」

余りに個体差が激しすぎる。どうして同じ種族のはずなのにこうも姿が違うんだろうか？

「一言で言う素体になった人間の性格性に影響している。元の人間

が凶悪犯罪者や異常者だとそういつた面が強調されて獣や龍と言った異形型になり易い。逆に元が優れた武人や魔道師の場合、獣人や人型に近い姿になる」

その説明を聞いたユウリはツバキ先生と同じようにメモ取りながら

「本能がその姿を形作ると考えれば良いのか？殺人者とかは獣や悪魔に、普通の人間はとかは人型にと言うことか？」

ユウリの質問に龍也は良い質問だと良いながら

「とは言え幾つか例外もある。金属にネクロの細胞を植え付けネクロ化させる方法や。生きている人間にネクロの細胞を植え付けてネクロ化させる方法もある。そして最後にLV4だが、こいつらは正真正銘の化け物だ。姿は人に近いか人からかけ離れた者かの二択で、その戦闘力は個体事に差はあるがLV3の2倍から6倍だと思えば良い。もちろん既存のISでは何もできずにつぶされるのが落ちだなそれで何か質問は？」

そう言い終わった所で質問は無いかと尋ねてくる龍也に楯無さんが

「ネクロは弱点とかないのかしら？再生能力もちなら弱点とかないと流石にきついんだけど？」

「良いところに気がついたな。ネクロにはコアと言う赤黒い結晶体がある。人間で言うとその心が心臓になるのだが、それを碎かれると体組織を維持できなくなり消失する」

心臓が結晶体なのか……それでもやっぱり生き物だから心臓みたいな弱点があるんだな……

「ほかに？」「えーと。良いですか？」

次に龍也に声を掛けたのは簪さんだった。おずおずと手を上げてから簪さんは龍也の目を見て

「こんな事を聞くのは悪いと思うんですけど……龍也……さんは……どれだけ悲しい思いをしてきたんですか？」

私は龍也さんの過去を見た。絶望と嘆きに満ちた記憶を……心が痛くて痛くてそして悲しかった……だからそう尋ねると

「ずっとだよ……ずっとそうさ……後悔と失うことしかなくなった半生だったよ」

くつくくと喉を鳴らす龍也さんはとても悲しそうでそして儂げに見えた。その自嘲とも言える笑みに誰も物が言えない中

「色々と聞かせてもらいたい。龍也……良いか？」

ユウリさんや他の面々も龍也さんを見て声を掛けようとする中。弥生さんがユウリさんの言葉を遮って

「龍也さん。何歳ですか!？」

敬語でそう尋ねられた龍也さんはぶつと吹き出して

「あつははは!歳か?24だよ?お前達から見るとおじさんかな?」

と楽しそうに笑う龍也さん。でもおじさん所か若くて格好良いお兄さんって言う感じだ……

「あ、いやそんあ……おじさん所か格好良いです」

弥生さんがおどおどとしている。だが私も同じだ。年上かつその涼しげな表情はどーしても視線を奪われる。

「兄ちゃん。笑うの禁止。落とすから」

「何を?」

「知らないで良いです」

「??」

不思議そうに首を傾げる龍也さん。妙に子供っぽい仕草だ。本当なら大人で可愛いなんて言えない仕草なのだが、本当に可愛く見えるから不思議だ

「龍也さん。あの……アロンナイトとかエクスカリバーとか言ってみただけど……本物じゃないですよね?」

エリスがおどおどしながら尋ねると龍也さんは平然とした表情で

「真正銘本物だよ?宝具と言ってな、神話とかに伝わる通りの性能を持っていないよ?」

……嘘……本物なの?……私達が絶句しているとエリスとツバキさん、そしてユウリさんが

「実に興味深い。今度じっくりと見たいのだが良いか？」

「私もね。アロンダイトの本物とかどんなのか見てみたいわ」

「他にもあるんですか？その伝説の剣とか？」

色々と龍也さんに聞きたい事が出てきた私達だったが……

「話は終わりのようだな。ならば私は帰る」

織斑先生の言葉を皮切りに一夏君や箒さん達も立ち上がりログハウスを出て行くこうとする。はやてさんが

「帰ると言うのならどうぞ。別に兄ちゃんが信じれんと言うのならご勝手に」

冷たさを伴う声で告げるはやてさんに一夏君が攻めるような口調で

「龍也達はずっと何もかも知ってたのに教えてくれなかったんだろ？もっと早く教えてくれてたら！俺達だって心構えが出来て……」

「じゃあ逆に聞こうか？ネクロと言う化け物がいる。狙われているから気をつけろと言って信じれたか？」……うっ。それは」

口ごもる一夏君に龍也さんはくくつと喉を鳴らしながら

「お前の言う事は都合の良い解釈に過ぎない。人は目で見なければ信じれない。そうだろ？」

そうだ仮に今日の朝ネクロと言う化け物が来るから寮で大人しくしているといわれて大人しくしていたらどうか？多分だが何を言っているんだらうと思って無視して出かけただらう。実際に目で見るまで、襲われるまで信じろというのは難しい話だった

「ぐっ。そうだとしても！俺は龍也をもう無条件で信じれない！！それにあの固有結界とかの奴を見たさ！！あれだけ人だったのを殺してき た龍也を……俺は正直言っ て怖い……」

一夏君や箒さんの目には恐れの色が浮かんでいる。たしかにさっきの圧倒的な力を見ていて怖かったでも、それでも龍也さんは私達を護ろうとしてくれていた。怖がるのは論外だと思っ……

「だけど龍也達に助けられたのも本当だ……だけど頭の中がぐちゃぐちゃで何を言えば良いか判らない。……すまないが……少し時間が欲しい……気持ちを整理する時間を」

一夏君はそう言うのと織斑先生の後をついてログハウスを出て行った

「……ごめん。シエン。あたしもう少し聞いて色々知っておきたかったけど、一夏が心配だから着いて行くわ。後で教えて」

「OK。判ったよ鈴。ちゃんと聞いておくから行ってきてよ」

龍也さんのことを知りたいとは思っている様子の鈴さんだが一夏君が気になると行って出て行く鈴さん。でも出るときに

「あー龍也良い忘れてたわ。助けてくれてありがとう。それと過去を見ちゃってごめんなさい」

そう笑って鈴さんは出て行った。鈴さんは普段の行動こそアレだがちゃんとしているところはちゃんとしている。続々と席を立つ人がいる中弥生さんが

「んで？お前も行っちゃうのか？箒？」

「……ああ。少し考えたい……私は一夏のように龍也が裏切っていたとかは思わん。だが……良く判らない何かを感じる。気持ちを整理させて欲しい」

龍也さんたちに深く頭を下げてから箒さんもログハウスを出て行った。

「ほらっしやんとする！」

「うう……気持ち悪いんです……」

「ごめん。僕も話し聞きたいけど、セシリアが駄目っぽいから連れて帰るよ。ヴィクトリア後よろしくね」

「ああ。任せておけ」

知り合いがネクロ化してしまったということと完全に心が折れてしまっているセシリアさんを引きずるようにしてログハウスを出て行く。シャルロットさん

「私は残る。知るべきことは知っておきたい」

「私も同じ」

ラウラさんとクリスさんは残ると言った。やはりここは軍人と言うところだろうか？これで残っているはユウリさん、お姉ちゃん、ツバキさん、エリス、弥生さん、ラウラさん、クリスさん、シエンさん

とフレイアさん達だったが

「フレイアたちにはちよつとお願いがあるの。龍也さんが破壊した、ISとネクロの半々の奴のパーツをいくつか回収しておい……そう言えばあれって触つても大丈夫？接触感染とかない？」

思い出したように龍也さんに尋ねるツバキさん。龍也さんは

「完全に浄化しているので大丈夫だ。もし心配なら」

ひよいつと龍也さんがフレイア達に何かを投げ渡す

「これは？」

「まあ簡単に言うると小型の結界発生装置だよ。その中に入れてれば問題ない」

やはりずつと戦ってきているだけあつてちゃんとそう言うのもあるんだ……フレイアさん達はそれを持ってログハウスを出て行った……

「龍也さん……あのセレスさんが言ってたけど……簪ちゃんとエリスちゃんが逃れられない戦いに巻き込まれるってどういうこと？」

私も気になつていた尋ねようと思つていたことをお姉ちゃんが尋ねてくれた。龍也さんは少し思案顔になつてから

「セレスの補助があつたとは言え普通の人間は投影なんて使えない。つまり簪とエリスは……魔導師としての適正があるということだ」

私とエリスが？魔法使いとしての素質がある？私とエリスが驚いていると

「なぜこの2人だけなんだ？」

ラウラさんの質問になのはさんが昔を思い出すような顔をしながら

「んー私とかはやてちゃんも基は魔法の無い世界で暮らしてたんだけど。偶にだけ魔法がない世界でも魔法に適正のある人がいるときがあるんだ。多分簪とエリスはそう言うタイプだともう」

……良くわかんないけど突然変異みたいな感じなのかな？でもなのはさんの話を聞く限り龍也さんとかも同じみたい。何か以外だった

「魔法って練習すれば私とかでも使える？簪ちゃんが使えるなら私

だつて……「いやそれは無理だ。魔法を使うにはリンカーコアと言う器官が必要になる。恐らく楯無お前には魔法は使えない」

「そ、そうなんだ……なんか残念」

「なんだ？魔法少女とかやりたかったのか？楯無」

「ちがうわよ!?からかわないでユウリ!!」

お姉ちゃんがぼかぼかとおウリさんを叩いているが、ユウリさんはそれを座ったままいなしている。婚約者って聞いたけど仲良しみたいで良いなあと思った。あ、そういえば昔お姉ちゃん魔法使いの杖を「簪ちゃん。それ喋ったら流石の私も本気で怒るわよ」

「……うん」

笑顔なのに目が笑っていないおねえちゃんに恐怖しながら紅茶を飲んでいると龍也さんがツバキさんに

「これから先ネクロの進撃があるということを考えるとI Sの強化は必要不可欠だ。私はやても手伝う。だからI Sの改装を始めよう」
「それは助かるわ。今日見たけどネクロって言うのは本当に危険な存在みたいだから。私からも頼もうと思つてたのよ。ありがとう龍也さん」

I Sの改装……確かにそれは必要なのかもしれない。今のままのI Sではネクロには勝てないと思うから

「それにヴィクトリアにシエン。そして弥生。お前達に提案があるのだが」

龍也さんは私達を見て笑いながら

「恐らくまたお前達はまたネクロに狙われる、しかし私達とて狙われている身だ」

それは当然だ。向こうからすれば自分たちを知る龍也さん達は真つ先に対処したい敵に違いないのだから

「だから対処法としてだが……これから対ネクロの訓練をしてみる気はないか?」

「……それはワタシや楯無もか?」

「そうだ。今回は引いてくれたが。次は無い……とはいえこれ以上魔導師の援軍は呼べない。となればこの世界で戦える人間を育てるべ

きだろうか？それでどうする？」

その問い掛けに私達は迷うことなく頷くことにした

そして私達は今まで知らなかった非日常にと足を踏み入れるの
だった

第71話に続く

第72話

第72話

一通り質問を聞き終えたら時刻は日付を跨ごうとしていた。私は時計を見ながら

「質問はまた明日聞こう。簪たちも疲れているだろうからな」

いくらセレスのサポートがあつたとは言え投影。しかもEXランクの武具を投影した2人の疲労は相当なものだろう。椅子に腰掛けたまま少し舟をこぎ始めているのを見ながら言う

「それもそうね。また何時でも話を聞かせてもらえるのかしら？」

「その必要があればいつでも話をしますよ。これからは備えなければならぬですから」

ハーデスとベルゼが同時に転移してきた。それはいつでも主力級がIS学園に転移してこれるということだ、そうなる前に備えておかなければならない

「そういつてもらえると助かるわ。さてとヴィクトリアちゃんとうちちゃん。それにクリスちゃんは元気そうね。弥生ちゃんとかを運ぶのを手伝ってもらえるかしら？」

ツバキさんは指示を素早く出して、自身はエリスを抱えてログハウスを出て行くこうとして

「龍也さん……なんか変ね。やっぱり君ってつけるわ」

「別に好きに呼んでくれれば良いですよ」

「ありがと龍也君。会って間もないし、こんな事言える立場じゃないけど……自分をいつか許してあげてね？それと千冬のこととは変

わりに私が謝るわ。ごめんなさい……それじゃあね」

ツバキさんを先頭にして出て行く弥生達。全員の気配がなくなつたところで

「くっ……ぐうっ」

身体から力が抜けフローリングに倒れかける。シャルナとアイギナが動き出そうとするよりも早く

「兄ちゃん!!」

はやてが真つ先にそれに気付き私を支えてくれる

「大丈夫? やっぱり無理やったんやないの?」

「むり……でもやるべきだった」

あの場合弱った姿を見せれば強く出ることとは出来なかった。だからこそ我慢してでもちちゃんと交渉のテーブルに着くべきだった。何とか身体を起こそうとするが駄目だ身体に力が入らない

「フェイトちゃん。なのはちゃんそっち3人で支えれば何とかソファアまで運べる」

「すまん……」

「ええよって言いたいけど……もう1人で固有結界使わんといて……そのうち本当に死んでまうから」

表情こそ平然としているがはやて達の声は震えている……

「約束は出来ないが善処する」

好機の一瞬は無為な一生に勝る。あの時はリバウンドを恐れず「約束された勝利の剣」を使うのが最善だった。計算外だったのはベエルゼとハーデスの強襲だが……

(あいつらも無傷ではない筈だ)

約束された勝利の剣は千の剣の中でしか真名開放が出来ないほどの威力を秘めた。史上最強の聖剣だ……例えばLV4であったとしても防ぎきれるものではない。恐らく魔力の殆どを消費したはずだ、だからこそ撤退した

「ふーはやて。お前たちはIS学園に戻れ。シャルナは3人に着いて行け……IS学園を覆っている結界の強度を上げておいてくれ。これを使ってな」

破邪属性の焰「蒼炎」を固形化させたものを4つ投げ渡し

「使い方は……判るな? ……少し休む。後は頼む」

これ以上は意識を保っていられない……私はソファアに深く背中を預けコートを布団代わりにして眠りに落ちた……

「はあ……急に寝てまうから焦ったで」

眠りに落ちた龍也に近寄りながらそう呟くはやてに

「傷は治してあります。あとは魔力が回復すれば意識を取り戻されるでしょう。それにしても腹正しいのはあのIS学園の連中ですがね」

不機嫌そうに言うシャルナにフェイトが

「私もそう思うけど……龍也が何もするなって言っただしね」

なのは達が千冬達を攻めなかつたのは龍也の静止があつたからだ。それが無ければ何一つ情報など与えなかつただろう

「ま、話すのも良いけど。今は龍也さんに言われたとおり結界の強化をしよう?」

なのはの言葉に頷きはやて達はログハウスを出てIS学園を覆っている結界の強化を始めた。

そんなはやて達を監視する者が居た。木の枝に逆さにぶら下がっていた何者かは

「なるほど。結界強化ですか。これは報告しておかなければなりませんね」

木の枝から足を離し地面に溶ける様に消えていったのだ……

翌朝。いつもの朝の訓練の時間にアリーナに行く。既に回復したのか腕を組んで待っている龍也さんの姿があつた。しかしその姿は昨日のものと違い。見慣れたとも言える高校生くらいの姿だった

「ふむ。やはり一夏達は来ないか。まあ当然といえば当然か」

「一応あたしは声を掛けたぞ?」

「私もな、だがセシリアは暫く考えたいそうだ」

アップをしていた弥生さんとヴェイクトリアさんがそう言う。ここに居るのは昨日龍也さんを助けた面子しか居ない

「まあ構わん。悩むだけ悩め……答えは2つだけだ。そのどちらを選ぶかはあいつら次第だ」

そう笑う龍也さんに私は思わず

「答えってなんですか?」

「知りたいか? 簪?」

その言葉に目に思わず身が竦む。全てを見通しているかのような蒼銀の瞳は心の中まで覗かれている様な気がする。だけどそれに臆することなく見つめ返すと

「くくくつ。お前にしてもエリスにしても芯が強い。弥生とヴィクトリアは直ぐにダウンしたのにな」

楽しそうに笑う龍也さん。どういふことか判らず首を傾げているとエリスが

「暗示だそうです。目を逸らしたくなるとか後ずさるとかの、これに對抗できるのは意志の強さが重要だそうです。弥生はしゃがみ。ヴィクトリアは後ろに下がろうとして転び、クリスは気絶しました」
「言うなあ!!!」

ヴィクトリアさん達が怒鳴る中龍也さんはくすりと笑い

「それで良いんだよ。本当はな？徐々に抵抗できるようになるのが普通だ。簪とエリスが耐えたのは一重に魔力のおかげに他ならない」
魔力……：そういうえば龍也さんが言ってた私とエリスには魔法の適正があると。どんな魔法が使えるのか気になるが今は

「答えてなんなんですか？」

「ん？ああ、簡単だ。目を閉じ耳を塞ぎ何も見ず何も聞かない事。そしてもう一つは恐ろしくても前に進むかどうかだ。簡単だろ？」

くつくくつと笑う龍也さんはコートの中から何かを取り出し、私とエリスに手渡してくる。それは無色透明な水晶が中心に埋まったアクセサリーだった

「龍也君。これなーに？」

「うわっ!?!」

私とエリスの間から顔を出して笑うお姉ちゃんに驚く。お姉ちゃんにはこつと笑いながら

「で？これなんなの？」

「魔力適正と変換素質の有無を調べる測定器だ。とは言え簡易だから詳しいところは判らんがな」

そう笑う龍也さんは自身もそれを取りだし握りしめたすると

バチバチバチッ!!!

とんでもない音を立てて蒼い炎が吹き上がり。測定器は粉々に砕け散った

「え？壊れて良いの？」

お姉ちゃんが砕けた測定器を見ながら尋ねると龍也さんは懐かしい物を思い出すような顔をして

「構わん。私の魔力など測定できん。ははは。昔私の魔力を測定しようとして基地中の測定器が全部爆発炎上したこともあるんだぞ？」

ははと笑った龍也さんは天井を見上げて

「確か全部で1千万くらいだったかな？買いなおすのに自腹できつたが」

単位がとんでもない。1千万を自腹って……もしかして龍也さんって凄いいお金持ち？

「い、1千万!?龍也はお前は凄いい金持ちなのか？」

ヴィクトリアさんがそう尋ねると龍也さんは

「んー私とはやての給料合わせると軽く億は越える」

「二……魔法使いって凄いい」

「ははは。でも大半はあれだネクロのせいで親や家族を失った者達の為に使っている。あとはあれだな、養護院とか孤児院の建設に使ってるよ」

そう笑う龍也さんは私とエリスに

「まあ私の事はどうだって良いだろう?どこにでもいる普通の魔法使いだ」

どこにでもと普通に激しく突っ込みを入れたかったがそれを何とかこらえアクセサリーを握り締めると

バチバチ!!!

「で、電気!?!」

「っ、冷たい!?!」

エリスの手からは電気が走り。私の手の上には氷の結晶が現れていた

「うお!?すげえ……ちゃんと触れる」

弥生さんが私の手の上の氷を触り驚いた表情をする、多分私も同じ

ような顔をしていると思う

「魔法とはこうも不可思議な現象を可能とするのか？」

「わお！凄いわね簪ちゃん♪」

偉い偉いと私の頭を撫でるお姉ちゃんを見てみると龍也さんが

「変換素質か。これはまた随分とレアだな」

変換素質？なんだろうそれは？機能の説明にはなかったと思うけど

「変換素質とはなんですか？」

「説明は難しいのだが、普通は魔力を変換して炎とか稲妻にしてるんだ。変換素質はその変換の過程を飛ばして炎や氷を発生させれる技能のことだ。結構珍しい」

「ふーん龍也君はできるの？」

「ん？腕を切り落とされて目をつぶされた後に出来るようになったぞ？」

さらりととんでもない事を言う龍也さん。そしてその言葉に昨日の固有結界でのリアルな映像を思い出し

「…………吐きそう」

「気にするな。私は大体に死に掛ける、もう何年もそうだ」

「胸を張っていうことじゃないわ」

私たちでは突込みが出来ないのでお姉ちゃんがしてくれた。だが龍也さんは笑うだけできにした素振りを見せない

「なに笑ってるんや？」

「たいしたことじゃない。じゃあ簪とエリスははやてに魔法の事を聞くと良い。私は楯無達に」

龍也さんはお姉ちゃん達を見てにっこりと笑い

「1度地獄を見てもらおうと思うから」

地獄？地獄って何？私が困惑しているとはやてさんが「ほな行こか？まずは魔法についての理論を説明するわ」

ぐいぐいっと背中を押されアリーナの片隅ではやてさんの説明を聞いていると

「いいやあああああッ！！！！」

とんでもない絶叫が響き渡りそっちのほうを見ると

「飛んでる……」

クリスさんが空高く待っていた、くるくると回転しながら絶叫しつつも、スカートはがっちり両手で押さえていた

「違います簪。あれは投げられているのです」

「あーあれや兄ちゃんの訓練の1番最初。恐怖になれるや……ただの体術で真上に放り投げられるのって超こわいんやで？」

「おちー落ちるううううッ!!!」

弥生さんが絶叫しながら宙を舞っているのを見ています

「あつちはあつち、こつちはこつち。早く魔法の理論覚えてな？」

はいつと手渡された百科辞典並みの本を見て

「これ全部覚えるんですか？」

下手をするとISのマニユアルより分厚い、しかも字も細かい。これを覚えるのは至難の業だと思いつながら尋ねると

「んー全部とは言わんけど基礎のところは見えてな？判らんところは私とかなのはちゃんに聞けば良いから、んじやまずは5ページの自分の属性を知るところから始めよか？」

はやてさんの言葉に頷き言われたページを開く。最初は管理局とは？とか機動六課とは？とか書かれていたけど直ぐに魔法に関するページになった。かなり小さい文字に四苦八苦しながら読み進め。簡単に要約すると

1 魔導師には様々なタイプが存在し。砲撃等の大火力を得意とするタイプや中間距離での打ち合い。もしくは戦闘タイプではなく補助や回復に長けたタイプが存在する

2 長い時間修練を積み重ねたタイプの魔法も覚えれるが最初は自身のタイプにあった魔法を重点的に学ぶと良い

「はやてはどのタイプなんですか？」

「私？広域殲滅をベースにしたオールラウンダーや。まあ私の事はどうでも良いで。まずは自分のタイプの事を考えよう？」

はやてさんの言葉に頷き。また魔法についての基礎知識の勉強を始めるのだった。私は何度も渡された本を見返しながら

(一夏君たちはどうするのか？)

このまま目を閉じ見ない振りをするのか？それとも前に進もうとするのか。どちらを決断するのだろうか？私はそれがどうしても気になるのだった……

俺は寝不足の目を擦りながらあても無く歩いていた。昨晚の龍也の話とネクロの事を考えるとどうしても眠れず、かといって起きているのは辛いほど身体が弱っていた。なのに目を閉じると千の剣の丘とそこで戦っていた龍也と、血を吐き倒れた姿を何度も思い出し眠れなかった。

(どうすっかなー)

それよりも俺の心を蝕んでいたのは昨日の俺自身だ。龍也は俺達を助けてくれたのに罵倒してしまった。謝りたいと思う気持ちと、もつと他の方法があったんじゃないかと言いたい気持ち。相反する2つの感情が俺の中にあり余計に俺の頭を悩ませた
(どうやって声を掛ければ良いかわかんねえよ)

話しかけたらなんて言ってしまうのか判らない。謝ろうという気持ちに反してまた罵倒してしまうかもしれない……とにかく
(気持ちの整理がつくまでは龍也に話しかけるのはやめよう)

俺はそんな事を考えながら、恐らく自分と同じ状況になっているであろう「セシリア」「箒」「シャル」と話をしようと思い。1番近いシャルの部屋へと足を向けたのだった

「いらっしやい。一夏」

「おう。悪いなシャル」

差し出された紅茶のカップを見ながらシャルの真向かいに座る

「僕のところに来たのは昨日の事で？」

魔王モードの視線ではなく何時も通りの優しい眼差しのシャルに
頷くと

「んー僕も、もやもや感はあるよ？ラウラはラウラで軍人だから切り替え速かったけど、僕は正直良く判らないよ」

「良く判らないって？」

「龍也かな？あそこまで誰かのために行動できるのに、なんで自分をあそこまで許せないのか？それが判らないよ」

龍也は聖人と言えるだけの人格者に思えるよ。紅茶を飲みながら言うシャルは

「龍也は多分いろんな物を背負いすぎてるんだよ。救えなかった者、見捨てた者があまりに多すぎたんだ。後悔だらけの人生って言うってでしょ？」

龍也の記憶を見た何度も泣いて絶望して、それでも歯を食いしばって前を見てきた。龍也の護るは俺とはまるで違う、護ってきた重み。失った哀しみ、その全てを背負ってきた。だからこそ龍也の護るは言葉の重みが違った

「謝りたいけど、何か別の事を言ってしまえば怖いんでしょ？今は時間を置いて気持ちを整理すると良いよ」

そう笑うシャル。確かにその通りだ……今は気持ちを整理すべきなんだ……

「だよな……悪い。時間取らせた」

「別に良いよ。僕自身も……色々と考えてるしね」

くすりと笑うシャルに頷き席を立ち礼を言ってから部屋を後にし、今度はセシリアの部屋に向かうと

「あら……一夏さん」

「大丈夫か？」

明らかに消耗した様子のセシリアにそう尋ねると。セシリアはにこりと笑い

「問題ありませんわ。どうぞ」

部屋に招き入れられセシリアの部屋のイスに腰掛けると

「一夏さんも随分と悩んでいるようですね？」

その言葉になんと答えようと悩んでいるとセシリアは

「私はヴィクトリアさんに怒られましたわ」

力なく笑うセシリアは頬を抑えながら笑う。その右頬は少し紅くなっている

「もしかして?」「ええ。思いつきり頬を張られましたわ」「どうしてまた?」

「ふふふ。命の恩人に対する罵倒と恐怖。貴族として認められるものではないと怒鳴られ。ビンタされました……しかしヴィクトリアさんの言うことは正しいです」

静かに語るセシリアに俺は

「ああ。それは俺も判ってる。龍也は命を懸けて俺達を助けてくれたのは俺も判る」

「ええ。無償で何の見返りもなくです……私達は恐れるのではなく感謝すべきだった……」

ですがと呟いたセシリアは自身の身体を抱くように

「私が恐れたのは龍也さんではありません。私が恐れたのはネクロです……」

セシリアは昨日のネクロの事を思い出したのか青い顔をして

「ネクロは人の魂や遺体から作られると龍也さんは言っていました。と言うことは私もあなる可能性があるということ……そう思うと私は恐ろしい」

そうだ。俺もそう聞くと恐ろしくて身体が震える……ネクロは元は人間だった……もし俺達が死ねばネクロにされるかもしれない。それはありえる話だ……セシリアは

「耳を塞いで目を閉じて全てが終わるまで隠れていたと思います……だけどヴィクトリアさんは言いました「仮にも貴族だということ誇りにしているのなら立ち向かえと、私は貴族でもなんでもないが……立ち止まることはしない」と……ですが私には何をどうすれば良いのか判らない……頭の中がぐちゃぐちゃなんです……」

セシリアの今の状況は俺と同じだ。何をどうすれば良いか判らず混乱している……だが誰に相談してもきつと何も変わらない自分で何かを見つけないければ何も変わらない

「少し話をして気が楽になりましたわ。一夏さんどうもありがとうご

ございました」

「いや。俺もだ、話が出来てよかった。じゃあなセシリア。少し休んだほうが良い」

「そうですね……それではまた」

寝室に戻って行くセシリアを見ながら。俺も外に出て窓の外を見ると

「箒か？」

まるで迷いを断ち切るように竹刀を振るっている箒の姿が見える。シヤルは時間を待つといった。セシリアは怖いと言った。では箒は何を考えているのか？俺はそれが知りたくなり箒のほうへと歩き出した

「むっ。一夏か……」

竹刀を置いて近くの木陰で休んでいる箒に

「よう。ほい」

買って来ておいたスポーツドリンクを手渡しながら箒の隣に腰掛ける

「何をしてたんだ？」

「考えていた。私がどうするべきなのかを……」

箒はタオルで汗を拭いながら俺を見て

「千冬さんの言うことも判る。龍也が居たからネクロがきた、確かにその可能性も考えられる。だが逆に私はこう思う。龍也と言う武力があるから私達は護られていたと」

「それは……」「一夏。迷いを持つのは悪くないと父は言っていた。だが私は迷うのは好きじゃない、決めた道がないと……私は前に進めない。だからどうするか考えながら半日竹刀をずっと振っていた」

そこで箒を見て気付いた。きている胴着は相当汗を吸っているのがわかるし疲労の色が顔に浮かんでいる

「なんでそこまで……」

どうしてそこまでしたのかと尋ねると箒は

「迷いを断ち切り答えを見つけたためだ。逃げてても時間を置いても何も変わらない。こんなことを言うのは何だが、昨晚は全部千冬さんが

悪かったと思う」

その言葉にかつと頭に血が上るがそれを押さえて箒に尋ねる

「まず私は何も知らない。だからまずツバキ先生に聞いた。昨日の龍也の言葉があつていたのか？千冬さんは龍也を疑つて観察することを選んだのか？結果は龍也の言うとおりだった。千冬さんは簪とエリスが人質にとられる前には近くに来ていたそうだ」

ツバキ先生が嘘をいう必要はない。だからきつと箒の言つてることとは真実なのだろう

「その後はここですつと竹刀を振つていた。私は馬鹿だからこうして考えることしか出来なかつた。だけど判つた……立ち向かうべきだと。弥生やヴェクトリアは既に立ち向かうための準備をしている、なら……私は立ち止まっている場合ではないと思う」

箒はそう言うのと立ち上がりとして少しよろめき倒れかけた、俺が身体を支えようとすると

「良い……大丈夫だ。昨日は殆ど寝てないから疲れが出ただけ……汗を流したら寝る」

ふらふらと竹刀を抱え歩いていく箒は最後に俺を見て

「迷いとどう付き合うか。それが剣士として重要だと……師範は……父は言つていた」

箒はその言い残し寮にと歩いていった。俺は一人で空を見上げながら

(箒は立ち向かうことを選んだ……皆出した答えは違う)

シャルは気持ちの整理をつけるといった

セシリアは怖いとどうすればいいのか何もかも判らず怖いと言つた

箒は恐怖はあるが立ち向かうと言つた

皆それぞれに答えを出している。鈴はシエンさんと一緒にアリーナの見学に行くとメールをくれた、ラウラは普段通り訓練に参加しネクロの事を聞くとメールをくれた。

(俺はどうしたいんだ？俺はどうすればいいんだ？)

シャルの言うこともセシリアの言うことも箒の言うことも判る、で

も俺は何をすればいいのかわからないまままだ、そんな事を考えているうちに俺の意識は闇に沈んでいった

《よお。また会ったな》

脳裏に響く何かの声。これは、俺はこの声を知っている

《くつくくつそう怖がることはないだろう？同じオレだろ？》

膝を抱えくつくくつくと笑うオレ。俺は思わず数歩後ずさる

「お前は……お前は！お前はなんなんだよ!!!どうして俺と同じ顔をしてる!?!どうしてそんな顔をしてるんだ!」

思い出した最近寝ると1週間に1度はこの男が現れる。だけどその手足は鎖でつながれ声を掛けてくるだけだ。そして男の周りには光り輝く壁があり。そこから男は出て来れないようなのだ

《前に教えてやったら？オレはお前だ。そしてお前はオレだ。判るか？》

愉しそうに笑う俺は立ち上がり光る壁に拳をたたきつけ

《ネクロを見たんだろ？怖かったんだろ？力が無い。力が無いから奪われるのが怖かったんだろ？》

そうだ俺は怖かった。今のこの場所が奪われることが

《力が欲しいなら与えてやるぜ？オレはお前だ。オレの力はお前のもでもある。オレの力を使えばネクロなんて楽に倒せるぜ？》

力……そう力があれば。俺は思わず一歩足を前に踏み出したが

《駄目》

「君たちは……」

そうまたこの子達だ。俺がオレの言葉を聞いて動いてしまった時に毎回現れて俺を止めてくれる。白と黒のゴスロリドレスの少女たちは真剣な顔をして俺を自分達の方に引っ張りながら

《戻って。ここは駄目》

《闇に飲まれたら戻れなくなる》

《はっは!!!また来いよ！俺っ!!!何時でもオレは待ってるぜ？てめえが力を望むのよおっ!!!》

その2人の心配そうな声と狂ったように笑うオレの声を聞きながら俺の意識はゆつくりと浮上していった

「織斑君？織斑君？大丈夫？」

「あ……えーと……誰でしたっけ？」

俺を揺さぶり起こしてくれた女性にそう尋ねると

「忘れたの？教員予備の黒城よ」

あ……ああ。そうだ、黒城先生だ。俺は身体を起こし

「すいません、起こしていただいて」

「いいわよ。大分魘されてたみたいだからね」

そう笑った黒城先生は寮を指差して

「そろそろ夕食の時間よ？早く行きなさい」

「え？あ……はい！ありがとうございます」

俺はそう返事を返し寮のほうへと足を向けたのだが

「あれ？俺……なんでここに？」

誰かと話していたような気もするが……何も思い出せない暫く考え込んでいると

「まあいつか。飯を食いに行こう」

俺はそう呟き寮の方へと歩き出したのだった……そのあと時間が経った後も結局俺は夢の内容も、俺を起こしてくれた先生のことを思い出すことはなく

(どうすればいいんだろうなあ)

自分がどうすればいいのか？それだけを考えていた……いつの間にか眠りに落ちるまで俺はずっと答えの出ない自問自答を繰り返していた

第73話に続く

第73話

第73話

ウサギの思惑。義娘の想い

【おお凄いい！これが魔法つてやつ!】

【ネルちゃーん。ガンバレー】

【なにこの剣の墓場見たいの？守護者とか言っておきながら狂人じゃん♪】

【おおッ!?血を吐いて倒れた？これは死ぬかなあ?】

けらけらと聞こえてくる束様の声を聞きたくないと思い。離れたところにあるアズマの部屋に向かいながら

(束様は変わられてしまった)

昔。そう私を義娘にするといってドイツから連れ出してくれた時はまだ人を思いやる心を持っていた。それはきつとアズマのおかげ。でも数年前から接触し始めた「ネクロ」そして「ネルヴィオ」達のせいで段々言動がおかしくなってきたと私は感じていた

「あら？こんにちは、クロエ」

「……どうも」

緑色の法衣を纏った女性。いやネクロのラクシユミから顔を逸らしながら挨拶すると

「そんなに嫌わなくてもいいのに♪ところで私のISのトライアウトは済んだのかしら」

ラクシユミはネクロしての戦闘力はなく、束様に依頼して自分用のISを作らせた。しかも2機の試作品を要求し、気に入ったほうを自分で用に調整するようにと我がままざんまいだが、束様は快く了承し2機のISを作成した

「ネクロディア・ゼフィルス。ネクロディア・ゴスペルは完成した。今は試運転中。もう少して貴方専用のISができる」

尋ねられたらこう答えるようにと言われていたのでそう言う

「そう。それは楽しみだわ。それじゃあね、クロエちゃん」

にここにこと笑うラクシユミに返事を返さず、そのままアズマのラボに向かう

「ん？クロエかどうした？」

「アズマこそ何をしているの？」

アズマ・ワンレイイサ。束様と瓜二つの容姿をし、頭の作りも殆ど同じ。束様との関係は絶対に聞いてはいけないタブーになっているので気になっても聞きはしない。アズマのラボの椅子に座りながら「何を作っているのですか？」

アズマのラボに設置されたパッケージはクアッドファンクスに似ている様な気がしたが。どうも印象が違うのでそう尋ねると

「強襲用のパッケージだ。いずれ必要になる」

かなり大型のパッケージにいくつも追加武装をつけた。機動要塞とも見える、だがそれでいてある程度の機動力もある用に見える

しかしそれはどうみても過剰戦力と思えるほどの武装を積んでいて思わず私は

「それを使うのは人間にですか？それともネクロ？」

私がそう尋ねるとアズマは私の頭を軽く撫でながら

「心配する必要はない。そうお前は何も心配しなくていい、束はいま少し環境が悪いだけだ、きつとネクロから離れば元に戻る。だから心配することはない、私が全部上手くやるから」

私に言っているはずなのにそのことばはどこか遠くに向けられているような気がした。アズマが何処か遠くに行ってしまうような気がして思わず手を伸ばしかけたところで

「くーちゃん♪アズマちゃん♪なんかさーラクシユミがお昼を奢ってくれるっっているから行こうよ！なんと三星レストラン、たまには外食もいいよね？ん。んんん？アズマちゃん、そのパッケージ何？」

アズマの前のパッケージを見て不思議そうな顔をする束様にアズマは

「お前の敵を倒すためのものだ」

「そーなんだ♪ありがとアズマちゃん♪」

嬉しそうな束様とその背中を軽く撫でているアズマ。私はアズマ

の言葉を考えていた

【お前の敵】

アズマが思う。束様の敵って誰なんだろう？魔法使い達？それともIS学園？はたまた亡国企業？

(ネクロはないですよね？)

アズマの言う敵がなんなのか今の私には判らなかつた、そしてアズマの敵がわかつたとき、それはもう全てが取り返しのつかなくなつたときだつた……それは今から遠くない未来に起きる、その時私は初めてアズマの真意を知ることになる……

闇の陣営

この世界での基地であるヨツンヘイムに戻つたところで

「ぬつぐうう。流石に無理があつたか」

「……奴の魔力は俺達には毒だからな」

ハーデスと揃つて膝を付く。何とか奴の攻撃を凌ぐ事が出来たが、正直言つて余力はない……

(夜天達がいなかつたのはついていたな)

もしあの場に夜天達がいたら私達はやられていただろう

「全く初めて見たが守護者はあんなに化け物だとは聞いてないぞ」

「私の知る守護者よりも一回りも二回りも強かつた。情報収集が甘かつたということだな」

魔力を溜め込んでおいたISコアを王座の後ろから取り出しハーデスに投げ渡す

「またこれか、俺はリンカーコアの方が良い」

「無理を言うな。この世界に魔導師の適正のある人間など殆どいないのだからな」

私達が見つけた3人のリンカーコア保持者は既に拘束して、精神を壊し魔力を出す機械として使っているが。それでもなお魔力は足り

ない

「空間転移で纏めて連れてこればいいものを」

平行世界の移動が出来る事を知っているのでそう言ってくるハーデスに

「そんなことをすれば膨大な魔力反応でこの場所が見つかる。そんな危険を冒すことは出来ない」

守護者達突出戦力をこの場に呼び寄せるとしてもそれはもっと先のことだ。今はデクスもこの世界で作ったISと人間の融合態のデイスやガルム達の数も足りない

「それでどうするつもりなんだ？俺達の魔力が回復するまでの攻撃は？」

「それについてはベルフェゴールとヴオドオンに任せる。あの2人なら何も言わずに素体を集めてくるからな」

今回ベルフェゴールは命令違反をしたが。それは別に良い、ベルフェゴールは闘争本能に特化したネクロだから当然だ

「それにもうじきあいつらも動けるようになる。後は徐々に戦力を集めていけば良い」

私がそう言うのとハーデスは思い出したように

「あんな1度死んだネクロを再生するくらいなら。それなら普通のネクロの方がよほど役に立つ」

「そう言うな。あいつらは普通のネクロとは違う。人間のときの感情とネクロ化による破壊衝動が交わり全く異質なネクロになっているからな」

ヨツンヘイムを手にした世界で見つけた死に掛けの6体のネクロ。それは珍しい人型のネクロでしかも感情も強く出ていた。無論狂気と言う感情だけだが、それを寄り代に死ぬかける身体を無理に維持していた。その執念は役に立つと思いい回収しネクロコアと魔力を与えて再生治療を始めた。それがもう直ぐ終わるのだ

「まあお前がここでの指揮官だ。好きにするがいいさ」

「どこへ行く？」

甲冑の上から魔力によるカムフラージュをして歩き出そうとする

ハーデスにそう尋ねると

「人狩りだ。魂でも喰って体力を回復させる。安心しろお前の分も狩って来る」

言うが早く転移で姿を消すハーデス。結局のところ暴れたりないだけだろうと思いい王座に背中を預けると

「ベエルゼ様。お加減はどうですか？」

「ベリトか。しばらくは行動できそうもないが問題ない、それでなんのようだ？」

「量産先行型ネクロディアを人間にいくらかお渡ししたいのですがいいでしょうか？」

ネクロディア。ベリトが製作しているネクロコアをベースにしたISもどきだ

「ほう。もう使わせることが出来るのか？」

「はい。その為にテストして、捕獲していた亡国企業とやらの人間を使いたいのですがよろしいでしょうか？」

「好きにしろ、どうせ殺すか魂食いにしか使わん。死のうが鹵獲されようが何の痛手もない」

この世界の情勢も判ったし、大体のISの情報もわかった。もう捕まえておいたあの人間も必要ないと思いつながら言う

「それではそのように話を進めます。スコールは利用しても構いませんか？」

スコールか。私が始めてこの世界に来たときに接触した人間だったな。

「構わん。好きにしろ、使い潰しても良い。作戦の立案は全て任せろ、ネクロも使いたいのがいるのなら使え」

判りましたといって頷き出て行くベリトを見ながら。守護者の事を考える、人格者であり最も強い魔導師。それが奴の表側の評価だ。だが私は知っているそんなのは奴の偽りの姿だ、奴の本心は血に飢えた悪鬼だ

(私が戦いたいのは守護者としての貴様ではない)

脳裏に浮かぶは私たちと同じくネクロの力を使い竜人となった八

神龍也の姿。そして私はその姿を恐れた絶対に勝てないと思い身を引いた。だからLV4まで生き残ることが出来たが、そのせいで私のプライドはずたずたになった。その失ったプライドを取り戻すためには

(あの姿の貴様を倒す以外のほかの方法はない)

態々この世界に留まっっているのはそのためだ。ネクロとしてはこんな世界はさつさと去りたいだが、騎士として武人として与えられた屈辱を晴らすまでこの世界を去るつもりはない。私は目を閉じ王座の背もたれに背中を預けゆつくりと眠りに落ちるのだった

亡国企業の最後の好機

ネクロのIS学園襲撃は失敗に終わったらしい。その事に安堵しながら

(何時マドカをIS学園に送ろうかしら)

このままマドカをここにおいておくのは危険だ。その前に八神龍也に預けたい、何とか都合の良い任務はないかと考え込んでいると

「スコール、貴女に頼みたいことがあるのだけど？」

闇から聞こえてきた声に驚きながら振り返り

「ラクシユミ……驚かされるのはやめてくれないかしら？」

ネクロは転移と言う瞬間移動のようなことを得意にしている。突然現れ話しかけられると流石に驚く

「それはごめんなさい」

全く悪びれた様子のないラクシユミ。また何か厄介ごとだろうか？と思っていると

「近い内に2体のデイスと6体のネクロを預けるわ。その後誰でもいいから貴女達から1人人間をつけて、IS学園に仕掛けてもらうわ」

「昨日返り討ちにあったと聞いてるけど。そんなに直ぐ仕掛けるの

？」

ネルヴィオが朝ふらりと来て襲撃失敗とか言って笑っていたのを思い出しながら言うと

「直ぐ仕掛けるから良いのよ。まあただの捨て駒だから、気にしないでいいわ。ただ攻撃を仕掛けてくれればいいのよ」

本当にネクロって言うのは人間を捨て駒程度にしか考えてない見たいね。その事に若干の苛立ちを覚えながらも頷くと

「そう言ってくれると思ったわ。それじゃあね？スコール」

微笑みながら消えていくラクシユミを見ながら私は

(これが最後のチャンスかもしれない)

ネクロの主力は消耗している。このチャンスが唯一マドカを無事にIS学園に送る機会だ。無論戦いになる事は避けられないが

(ユウリと八神龍也には話を通して、きつと上手くいく)

「マドカ？ちよつと来てくれるかしら？」

部屋の奥にそう声を掛けると面倒くさそうな顔をしてマドカが顔を見せる

「なんのようだ？またISの強奪か？」

「違うわ。ネクロと共同でIS学園に襲撃してもらいたいの」

私がそう言うとマドカの瞳に怪しい輝きが宿る。憎悪や敬愛が入り混じった危う色だ

「襲撃……ユウリと一夏は殺してもいいのか？」

マドカは織斑一夏を殺すという目的で亡国企業に來た。そして裏切ったユウリを許さないといっていた、大分時間が経ったがその感情は何も変わってないようだ。それともネクロのせいで変わらなかったのかもしれない

「そこらへんは貴女に任せるわ。好きにして」

多分無理だろうけどねと思いつつ言うとマドカはにやあと歪んだ笑みを浮かべて

「は、ははーたまにはネクロも良い仕事を持ってくるものだな！」

上機嫌に笑うマドカは私から背を向けて

「襲撃の日時が決まったら教えろ。それまではISの調整をする」

今マドカのISがアスモデウスだ。ゼファイルスはネクロが回収してしまったから別の機体を使用している。性能自体は第3世代に該当するが中身は第2世代、しかも専属メカニツクのユウリがいなくなったから細かい調整が必要になってしまったのだ。これで出撃の日程が決まるまでマドカは部屋から出てこないだろうと思っ

と
「スコール。マドカがえらい笑っていたが出撃なのか？」

ネクロと亡国企業が集めていた情報を整理していたオータムがリビングに入ってきたながら尋ねてくる

「そうよ。ネクロからの指示でね」

私の言葉にオータムは返事を返さず、代わりに部屋の隅に設置されたワインセラーからワインを取り出し、私の真向かいに座りながら「これで少しは肩の荷が下りるか？」

マドカのこと私が私とオータムの悩みだった。だからこそ八神龍也に取引を持ちかけた。そして八神龍也はそれを引き受けてくれた

そのチャンスが来たのだ。だけどこれは分の悪い賭けとしか言いようがない

「それは判らないわ。これからだもの。所で頼んでいたのは？」

マドカが大人しく戦うことを諦めてくれるかどうかとも判らないし、もしかするとネクロに回収されてしまうかもしれない。マドカがどうなるかはユウリと八神龍也にかかっている、後はどうなるかなんて私にだってわからない

「仕込み済みだ。あとは神のみぞ知るだな」

そう笑ってワインのコルクをあけて自分の分と私の分を注ぎ

「これからが正念場だ。気を緩めずにいこうぜ、スコール」

「ええ。その通りねオータム」

グラスをぶつけると澄んだ音が響き渡る、それを聞きながら私はこれからの自分たちの行動を考えていた

(どうせネクロは私達を殺すわ。ならその前に八神龍也と合流する)

出来るだけネクロの陣営の情報を集めてからこのマンションを廃棄してIS学園に向かう。距離はそんなにないが、私達が裏切ったと

知れば全力で妨害に来るだろう。もしそうなれば

「どちらか片方だけでも八神龍也と合流する。それでいいわね？」

「ああ、私としてはお前に辿り着いて欲しいけどな」

出来るなら2人一緒が良い。だけど早々上手くいくとは思えない、ネクロは凶悪でそれでいて賢い、もしかすると私たちの行動は筒抜けなのかもしれない。それでも行動を起こさずにはいられない

「あら。空ね、今度は私がつぐわ」

空のグラスにワインをつぎなおし。そのグラスを掲げるとオータムも同じようにグラスを掲げ

「私達が願った未来が訪れることを願って!!」

2人だけの部屋にグラスを打ち合わせた澄んだ響きが響き渡る。人に対して必要な悪を成し、世界に対しての正義を成す。それが亡国企業の理想。もう2人だけになってしまったが、それでもその理想は夢は私たちの中にある

（ただ利用されるだけで終わらない。必ず一泡吹かせてやるわ。ネクロ）

私は心の中で決意を新たにした、恐らくオータムも同じ。ここからは私達は反逆への策を練る例え逃れられない、死が待っているとしても人としての尊厳、そして誇りは捨てない。最後まで抗い続ける……それが私とオータム。もうたった2人だけになってしまった亡国企業としての誇り。

この想いだけは絶対に失うわけにはいかないのだから……

第74話に続く

第74話

第74話

ネクロ襲撃から2日後、休日と言うことで私とはやて達はIS学園の地下の研究室に来ていた

「ほー、中々良い設備が揃ってるなあ?」

「でもさ、空中投影のディスプレイとか少くない?」

「以外と科学力が低いのかな?」

好き勝手あちこちを見て、自分用のディスプレイをセットしているはやて達を横目に楯無が

「ねえ?魔法使いつてこういうのも出来るの?」

ISとかの組み上げマニュアルに目を通して作業を始めようとしているはやて達。ここでは普通の学生と言うことで色々と弄りたいのを我慢していたのか、実に生き生きした表情で改造を始めようとしている

「ああ、デバイスとかも自分で整備するし、壊れたりしたら応急処置くらいは出来んと殺されるからな、ネクロに」

ネクロとの戦いの中でデバイスが壊れてみる。殺してくださいって言ってる様な物だと言うと

「デバイスって何?私聞いてないけど?」

「あ、そうでしたね。言っただけですよね。デバイスは魔法を使うための道具ですよ、ツバキさん達風に言うるとISみたいな感じですね。リンカーコアさえあれば男女とわず使えます」

私がツバキさんにそんな話をしているとユウリが不思議そうな顔をして

「なぜ、ツバキに敬語を使う?」

「敬意を払うべき相手にはそれなりの対応をする。それが大人と言うものだよ」

私がそう笑うとユウリと楯無はどうしたものかと困った様子で苦笑している

「若いんだから笑って誤魔化すくらいやってみたらどうかね？」

「龍也君。君も十分若いわよ？」

ツバキさんの言葉に私は苦笑しながら

「まあ20代前半なので若いで通るでしょうね。それよりもISの改修を始めましょうかね？」

そういつて振り返るとはやて達が

「スペアのデバイスコア突っ込むか？」

「それよりあれだよ。装甲を軽くしようよ」

「速さが足りないって言いたいのか？」

「そうそう、速さは重要だよ」

デバイスパーツと教員用のISをかってに組み合わせ魔改造しようとしていた……

「待てこら！勝手に何する気だ！止めろ！特にはやて!!!」

はやてを放置しておくとしてISがどうなるか判らない。慌てて止める

「えー改造してもいいやん」

「駄目だ。ISの改修は対ネクロだけだ」

はやて達が本気で改造したISだったらもしかすると、第4世代とかをすっ飛ばして、第6世代とかになりかねん。そして誰も使いこなせないようなピーキーなし上がりになる未来しか見えない。

「改修案はそっちが出してくるって聞いてたけど、こういう改修をするつもりなの？」

「そうそう、私もそれは気になってるのよね。魔法使いの改修案とかきつと私達の思いつくのは全然違うと想うのよね」

興味津々と言う表情の楯無とツバキさんを見ると、はやてが

「ISの各部装甲に簡易の魔力コーティングをしてみると良いかもな。ネクロの魔力の波長と逆の波長のパターンでコーティングすれば弾けるやろうし」

ISと魔力の適合性とかも調べないと駄目やしーとか言いながら空中投影のキーボードを叩くはやてに

「はやてさんはそう言うのが得意なの？」

「私はデバイスの中身をいじるのは得意やから。多分ISも弄れると思うで？なのはちやんとかはまあ前線によく出るから、応急処置とか武装の改修とか得意やし、ネクロに組み付かれても即感染しない程度には改修できるで？」

からからと笑いながら楯無に手を向けて

「はい、ISだして。改修するで」

「大丈夫？へんなパーツとか？」つけて欲しいならつけるけど？武器のほうが良い？」とりあえず改修だけで」

楯無のISミステリアスレイディの改修を始めるはやて達を見ながら私は

「さてでは対ネクロの武装の……ん？どうしたね？なぜそんなに不思議そうな顔をしている？」

ツバキとユウリが信じられないものを見るような顔をして私を見ているのでそう尋ねると

「あーそのね？私達……千冬とかがずいぶんなことを言ったじゃない。それなのになんで私達を助けてくれるの？」

千冬とかか……まあ確かに結構な暴言だったなと思いつながら

「人の上に立つものは私怨を持ち込んでほならぬ。それとこれとは話は別だ、それに千冬のことでも判らんでもないしな」

ツバキ達の見ていた自立式のパッケージの情報を見ながら言う。ほう？中々良い感じだな、デバイスコアを流用すれば直ぐにでも動かすことが出来そうだなと思っていると

「千冬がわかる？どういうことだ？龍也」

「ふむ。簡単な話だよ、千冬も私と良く似た壊れた人間だ。だから判る、今は世界最強と言う地位と教師と言う役職があり。必要とされている。だがそこに私が来て見ろ、自分の居場所がなくなると怖くなる。故に私に対するあたりが強いのだ」

多分一夏に対する過剰ともいえる姉弟のスキンシップも似たような物だろう。千冬にとって自分が帰れる場所は、そして本当の自分が出せる場所は一夏の傍だけ、だから一夏に執着してらんだらうよと続けて言う

「龍也君って人間の観察得意？」

「いろいろと訳ありの子を預かることも多いんでね。プロファイリングは基礎ですよ」

人造魔導師に俗に言う巫人と言われるワーウルフの子供とかも預かる事もある。そういつた子らの行動から何を考えているのか？何を欲しているのかを理解しなければ彼らは自分の殻に閉じこもりきりになる。それは良くない、子供はおおらかに笑って育つべきだ

「龍也君って結構大人なのね。」ただ年寄り臭いだけです。それよりもこのバックパックの仕上げと、対ネクロの武器の試作品を作りましょう」

上位ネクロの襲撃はないとしても下位ネクロの攻撃はあるかもしれない。そのための備えは必要だ

「それで何を作るんだ？」

「ブレードが良いと思う、ネクロは魔力障壁を発生させているから射撃兵器は弾頭にしろ銃身にしろ相当な強化が必要だ。その分近接武器なら改修も楽しからな。そっちがいいだろう」

打鉄やラファールの換装用のブレードを見てどういう風に改造しようかと思っていると

「お前の造りだす剣をISに装備させるのは無理なのか？」

尋ねられると思っていたことだった。確かにISに私の投影した武器を装備させればそれだけで戦力になる……が

「無理だな。私の作り出す剣は高密度の魔力体で形成されている……と言っても判らんか。投影開始」

2振りの日本刀を作り出し机の上におきながら

「ツバキさんも、ユウリも好きなほうを持ってくれ。大丈夫、呪われた武器ではない、至極普通の名刀だ」

ツバキさんが先に刀を抜き。刀身を見つめて

「凄いやつね……この手に吸い付くような一体感。相当な代物ね」

冷静に分析するツバキさんに対してユウリは

「確かにいい刀だ。それで何故ISと平行使用できないんだ？」

「ISを展開してみれば判る。説明するよりよっぽど早い」

ユウリは自身のISS「アマノミカゲ」をツバキさんは教員用の打鉄を展開しようとしたが

「あ。あれ？ISSが展開しない？」

ISSはうんともすんともいわない。混乱してるツバキさんに

「ISSと魔力の相性はお世辞にもいいとは言えない。特に高密度の結晶体である投影品とは良くないと言うことだよ」

ツバキさんとユウリの手の中の投影した刀を破棄しながら言うと

「いい刀だった。銘が気になるところだな」

刀剣収集とその手入れが趣味と言っていたユウリは名残惜しそうな顔をして言うので

「そんなに気に入ったか？天下5剣の1つ「童子切安綱」は？」

「ど、童子切安綱!?そんな名剣まで複製できるのか!？」

「私のはなんだったの？」「そっちは丙子椒林剣。宝具としてのランクは低い。それなりには名剣だ」それなりってレベルじゃないわよ!？」

そうか？エクスカリバーとかと比べると見劣りするし。取り回しもしにくいからあんまりいい武器って言う印象がないんだよな

「武器の参考資料としていくらでも剣は作るから。とりあえず、ユウリ・楯無の武器の作成を始めるとしよう」

学生としてはなく裏社会も知る楯無。そして元は裏世界の住人であるユウリから武装の改修を始めるのが一番だろう

「では作業を始めようか。武器の作成にISSの改修。それに自律式バックパックの作成……やることは山ほどあるからな」

早速作業に取り掛かりながら私は一夏や千冬の事を考えていた目を背けるのか、それとも抗う事を選ぶか……それは誰でもない一夏達が決めることだ。せいぜい悩んで自身の答えくらいは出して欲しいものだ……

ISS学園の理事長室の本当の主「轡木十蔵」は難しい顔をしながら

書類を見つめていた。八神龍也から提出されたネクロに対する情報が纏められたレポートを見ながら彼らのことを考えていた

(只者ではないと思っていました、異界の魔法使いとは予想もしませんでしたよ)

最初は何を馬鹿なと思いましたが、ツバキの話と見せてもらった投影と言う魔法を前に私は自分でも驚くくらい、魔法使いと言う存在を容認していた。そして彼はネクロは必ずまたここを狙うと断言し、備えるべきだと。そしてその為の道具は用意するからそちらからIS学園の教員を納得させて欲しいと言って来た

(これは中々難しい問題です)

IS学園の教師は私が運営を行っていることを知っている。むしろこの教員は私が総べてスカウトしたのだから知らないほうがおかしい。つまりこの教師は私の話を聞いてはくれる、しかし

「魔法使いとネクロと言う化け物が来るかもしれないので備えてください。……養護院の入居を勧められそうな気がしますね」

いくらなんでも魔法と言って。はいそうですかとは納得がいくものではないですからね。どうやって説明するのかと言うことも問題ですがそれ以上に

「千冬君が心ここにあらずという状況も不味いですね」

数日前から千冬君の様子がおかしいというのは聞いていた。どうも魔法使いとネクロの戦いを見て何かあったというのはツバキには聞きました。しかし明らかに八神龍也を避ける素振りとは何回も溜息を吐くその様子を見る限り相当悩んでいるのは明白だ、かと言って千冬君は人に何かを相談するようなタイプではない。自分で解決するのを待つしかない……それに今の私には千冬君に構っている時間もない

「どうしたものでしょうね……」

ネクロを見たという織斑一夏君達に、龍也君達のこれからの処遇、それに各国の反応……考えることが多すぎる。だけどこんなことで泣き言を言って入られない。ツバキの報告ではネクロの襲撃の際に巻き込まれた代表候補の一部はネクロと戦うためにISの改修と特

殊訓練を始めているとか……ネクロと戦えば死ぬ可能性だってある、それを聞いてもなお戦うという決断をしたのだ。なら私は

「私の出来る戦いをするまでです」

戦いにおいて重要なのは前衛で戦うことの出来る人間だけではない、むしろ裏方の方が重要だといえる。

「あとは千冬君が早く現場に復帰してくれるといいんですけどね」

ふらふらと覇気のない表情でIS学園の裏の山に向かって歩いている千冬君を見ながらそう呟き。椅子に腰掛けもう1度龍也君から預かったネクロの資料について目を通し始めたのだった

私はどうすればいいのだろうか……それがここ数日私の心を埋め尽くすものだった

授業の合間。休み時間といった自由な時間を使い私は自分の考えを纏めようとしていた。

（あの時は八神を責めるようなことを言ったが、あっちが正しかったのは考えるまでもないことだ）

確かに強大な力は時に争いを呼ぶし、いらぬ疑いを招く……いや、そんなのは建前だ……私が恐れたのは

（自分の居場所がなくなる事を恐れた）

あの時少しでも八神の落ち度を見つけられれば。そこから自分が有利に話を進めることが出来ると判断した、だが結果は

（八神が正しかった。それどころか）

疑っていた私さえも護ってくれた……そんな真似私には出来ない。私だったらあんなことを言われてまで護ろうとなんて思わない。

同じ歳なのに人としても戦闘者としても……そして導く者としても私は八神に劣っているということを自覚してしまった。それは今まで私を感じたことのない敗北感だった。そしてそれと同時に自分が八神よりも劣っていると認識してしまった、自分がどうすればいいのか？何をすれば良いのか？何もかもが判らない。私はごろりと寝

転がりながら

「私は何をすればいいんだ？」

何をすればいい？何を言えればいい？何を考えればいい？ずっと考えていても頭の中がぐちゃぐちゃで考えが纏まらない……雲ひとつない青空に手を伸ばしながら

「私は何がしたかったんだろうな」

あの時八神を疑って……

あの時八神を責めて……

私は何がしたかったんだ？いやそれよりも何故私は剣を手にし、I Sを手にした？何のために？

私は何か成し遂げたい願いがあって剣を手にしたはずだ……

私は叶えたい願いがあってI Sを手にしたはずだ……

なのに今は何をしたかったか？何を成し遂げたかったのか？

何1つ思い出せない……

「何処かで私は道を間違えてしまったのだろうか……」

スーツの胸ポケットから1枚の写真を取り出しそれを眺める。写真の上半分は破いてしまったが両親の姿があり、私とその両隣に一夏と一夏より少し年下の少女の姿が写った写真。写真の裏には「家族」と書いた私の文字が書かれている。一夏にも話していない家族の事、私は妹を護れなかった。その後悔は今もずっと私の胸の中に残り続けている

「私には何が出来るんだろうか？」

何をしたいのか？

何が出来るのか？

何がしたかったのか？

それをずっと考えているのに何も判らない。自分はこんなにも弱かったのかと思いつつながら深く溜息を吐く。どうすればいいかなんて判っている。私はどこまでも青い空を見て

「1度手合わせを頼んでみるか……受けてもらえるか判らんがな」

私は剣士だ。迷ったとき答えは戦いの中で見つけることしか出来はしない。それ以外の方法なんて私は知らない

何時だった答えは戦いの中に、そして師との戦いの中で見つけてきた。今回もそれ以外の方法はないだろう……戦いの中で答えを見つめる……私はそう決めてゆつくりとIS学園に足を向けた

迷い受け入れ嘆きながらも自身のあり方を来て進んできた八神と迷いを受け入れることが出来ず、見たくない現実から目を逸らしてきた私

きつと今回で悩むのは最後になる。どんな形であれ私はずっと目を逸らしてきた現実を向き合うことになる。

そんな確信めいた予感を感じながら私はゆつくりとIS学園の地下を目指して歩いていったのだった……

第75話に続く

第75話

第75話

IS学園の近くに隠されたアリーナの観客席で私は思わずこう呟いた

「魔導師って魔法を使わなくても強いのか？」

「強いに決まってるやろ？特に兄ちゃんは素手でもネクロ倒せるんやで？」

「というか龍也ってダイヤモンド握り潰せたよね？」

「うん。確かそうだよ。よくはやてちゃんが作る金属の監禁部屋破壊して逃げてるし」

魔法使いってなんだろう？杖で空を飛んだり、炎を出すとかを想像してただけでもしかすると魔法の後ろに（物理）がつくのかもかもしれない

「お前ら少しは状況を理解したらどうだ？」

呆れたように言うユウリ。その視線の先では

「世界最強。くだらん戯言に踊らされ自己を高めることを忘れたお前の剣など私には届かんよ」

「くっ！」

織斑先生と龍也さんが打ち合っている……いや完全に織斑先生が遊ばれている

「ほれ、これで7度目。私とその気なら貴様は当に死んでいるな？世界最強」

龍也さんの横薙ぎの一太刀が織斑先生の木刀を弾きそのまま喉元に向けられる

「黙れエッ！」

「届かん。理想も信念も無き刃が私を捉える事などない」

織斑先生の上段からの一撃を片手で弾き、そのままのど元に剣を突き立てる

「8回目。何度死ねば気が済むのかね？」

挑発を繰り返す龍也さんの顔には余裕の色が見えるし汗1つ無い。それに対している織斑先生は

「はーッ……はーッ」

肩で息をし木刀を杖代わりにして漸く断っているという感じだ。IS学園のアリーナで無くて良かったと本当に思う、こんなのはIS学園の生徒にも一夏君達にも見せられたものじゃない（如何してこんな事になってしまったのでしょうか？）

きっかけは3時間前だったと思う……

IS学園の地下のラボでISの改修と武器の考案を纏めているときに織斑先生が突然やってきた。ここ数日碌にこのラボに来てなかったからどうしたんだろうと思っていると

「八神龍也頼みがある」

「ふむ？何かな？ここから出て行けというのは聞けんぞ？」

「一手手合わせを願いたい。頼めないだろうか？」

その言葉に私の隣で作業していたはやてさんとフエイトさんが

「死んだな。精神的にも肉体的にも」

「だね。ま、私達の知ったことじゃないけどさ」

黒い笑みで呟く2人。まさか龍也さんがそんなことするわけないと思っただが

「構わんよ？骨の5〜6本は覚悟してもらうがな」

えっ？一瞬龍也さんの言葉が理解出来ず目が点になる私。いや私だけじゃないユウリも同じようになってる

「私とて善人じゃない。お前のいらぬ不信感のせいで、私は護るべき者に芝居とは言え銃を向ける羽目になった。少々腹に据えかねてるのだよ」

龍也さんの目が鋭い眼光を放つ。代表として、そして現更識の党首として色々な修羅場を見てきた私でも思わず背筋が凍りつくような鋭い視線だった。

「それで構わない。IS学園のアリーナでやるわけにも行かないので、近くに隠しアリーナがある。そこで待っている」

そういつて出て行った織斑先生を見ているとなのはさんが

「龍也つてさあ、ああいう人が1番嫌いなんだよね」

「そうそう。教師だからとか言つて、直ぐに手を上げる人間は教師の資格なしつて言うてたしなあ」

「まあどうなろうと私達の責任じゃないし。龍也なら腕の1本や2本くつつけるし、心配ないでしょ」

心配しかないですけど!?!腕の1本や2本くつつくつてそんな簡単に言う事じゃないわよ!?!

「んじゃちよつと千冬を地獄に叩き落してくる」

「廃人にしたらあかんで? 兄ちゃんの暗示きついから」

「善処しよう」

「善処しようじゃないわよーツ!!!」

駄目だ。この人たちを放置してはいけない。私は謎の使命感に突き動かされユウリを連れて(1人では怖かったため、こんなときに限つてツバキさんがいなかったから)隠しアリーナに付いて来たのだ。ちなみに運転は龍也さんだった

「自分が最強だというくだらぬ自負。全くもつて理解に苦しむ……宣言しよう。お前の攻撃はただの一撃も私には当たらないと」

向かい合う龍也さんと織斑先生の得物は木刀だ。本気でやれば骨の1つは2つは確かに折れるだろうが、生死に関わる事態にはならないと思う。龍也さんの挑発に遠目から見ても明らかに不機嫌になった織斑先生が、先手必勝と力強く踏み込み一瞬で間合いを詰め木刀を振るうが

「どこを狙つたのかね?」

「!?!」

織斑先生がぱつと飛びのく。私でも目の前で見れば反射的に間合いを離すだろう。何をされたのか判らず頭の中がぐちゃぐちゃになつているから

「魔法でも使つたのか?」

「馬鹿かね? 子供相手にそんなものを使う分けなからう? ただの体術だよ、ただのね。どれ今度は私が」

龍也さんが木刀を突き出すと同時に

「がはっ!？」

蹴り飛ばされたサッカーボールのように織斑先生の体が吹っ飛ぶ。龍也さんの位置は最初のまま

「え? ええ!? なに今の!？」

何が起こったのかさっぱりわからない。どうして織斑先生が吹っ飛んだのかが判らない

「突きだ。凄まじい踏み込みで間合いを詰めて……その勢いそのまま突きをして元の位置に戻っただけだ」

「見えたの?」

「辛うじて……」

ユウリは酷く神妙な顔をしてアリーナの下を見つめている。一時も瞬きなど出来ないと言った真剣な表情で

「織斑千冬は勝てない。格が違いすぎる」

再び響くガツンっという鈍い音に私もそう思ったのだった……だけれどはやてさん達は

「ん? ふーん……なるほどね」

「まあ龍也だからね。仕方ないよ」

「龍也さん人にあんまりお節介するなよって言うておいてこれだもんなあ」

ぶつぶつと何かを呟いていたのだが、私は目の前の戦いに集中していてその呟きが耳に入る事はなかった……

ガンツ!!ガンツ!!

木刀が何度もぶつかり合う鈍い音が何度もアリーナの中に響き渡る。魔法もISも無し純粋な体術勝負だが、私は重りのコートも脱がず、木刀も右手一本で持ち千冬の猛攻を防ぎ続けていた

(軽いな、この剣は)

剣士の剣としては余りに軽すぎる。それは張りぼての栄光。作られた勝利のせいなのか、それともただ千冬が弱いだけなのか……そんなことを考えながら振り下ろされた木刀を弾き、そのまま左手で千冬

の襟をつかんで投げ飛ばす

「うわっ!? くっ……このおっ!!!」

投げられて体勢を崩したものの片手について上手くりカバリーして突っ込んできた千冬にあわせて木刀を振り下ろす

「うぐうっ!?」

突っ込んで来た勢いが全部自身の肩に跳ね返ってきて顔を歪める千冬だが

(目は死んでいない、むしろ強くなっているか)

ヒンドウー教では虎は傷ついてからが本物と言う言葉があるが。どうも千冬も似たようなものか……とは言え負けるほどの脅威は感じない

(さてとそろそろ。お遊びは終わりだな)

軽く指を鳴らして結界を発動させる。ここからの話はユウリや楯無に聞かせるわけには行かないからな

「さてと……行くかッ!」

木刀を逆手で構え一気に間合いを詰め切り上げる

「ぐっ!」

ガツーンツと鈍い音が響く中即座に持ち手を治し

「ふんっ!!!」

「がっ!!!」

肩に木刀を押し当てそのまま力で千冬を地面に叩きつける

「まだ「嫌もう終わっているな」

立ち上がろうとした千冬に蹴りを叩き込みそのまま吹っ飛ばす。アリーナの床で2回ほど跳ねて木刀にもたれ掛かるようにして、意地でも倒れないと言うのを言葉ではなく視線で告げる千冬
(そう千冬は身体の痛みでは倒れないだろう)

千冬と私は良く似ているだから身体の痛みなら幾らでも耐える。だから私がへし折るのは千冬の心だ、で無ければ千冬は何時までも道を踏み外したままなのだから……

私は今まで調べた白騎士事件の事。モンドグロツソの事を思い出しながらゆつくりと千冬に声を掛けた……

木刀を握り締めながら自身の体のダメージを確認する。あちこち激痛が走っているものの身体はまだ動く。

(いや手加減されているのか)

最初の突きの早さには全く対応できなかった。あのスピードで攻撃してくれば何もさせずに私を打ち倒す事も出来るのに、八神はそれをしない

(何か考えがあるのか……)

師と戦っているかのようにまったく先が読めない。ノーモーションの突っ込みに受け止めた手が痺れるほどの強烈な一撃。私はそのどれにも対応できていない

「お前は今まで何をして来た？全てが自分の力とでも思っていたのか？」

「なんのことだ？」

突然そう話しかけてきた八神は私の問いに答えず

「モンドグロツソ。その出場者にはある条件が本国から出されていたら、それは織斑千冬に敗れる事。もし勝つ様ならば束はその国に対するハッキング攻撃をすると開催2日前に全世界の首相に脅しをかけていた」

「な、なに？」

「篠ノ之束にとってお前は特別な人間だった。自身はISを開発した天才として名声を得た。しかしお前は表には立てぬ活躍しかしていない。故に考える、自身にとって特別な人間を全世界に知らしめる方法。ISの最強の操縦者としての名声。モンドグロツソの存在はただお前の存在を世界に知らしめるだけの舞台装置だったということだ」

そんな馬鹿など言いたいのが束ならと判ってしまう自分がいる。学生時代を考えてもあいつは学校のPCを操作して私と同じクラスになるようにしていたからだ

「そして次にお前は束の傍にいてISの試作機の開発を手伝ってい

た。その地点で他の参加者とは認識も何もかも違っていた。故にお前は常に有利だった」

「だが私はモンドグロツソでは「苦戦した？演出だ。あの束と言う女は実に利己的で賢い人間だ。ISの強制介入により行動の制限。それでもなお勝てるというのならその人間は素晴らしい」うっぐ……」

自分が築き上げてきたものが崩れていくそんな感覚が私を襲う。それと同時に見ている楯無とユウリの事を考えてしまい、思わずこちらに視線を向けると

「心配ない、向こうには何も聞こえていないし別の物が見えている。私と打ち合うお前とかな」

「……魔法とやらか？」

私の問い掛けに八神は答えず言葉を続ける。態々聞くまでもない事だったか

「そして白騎士事件。世間一般では死傷者ゼロだが実際は違う。負傷者480名、死者138名。お前はこの事実を知っていたか？」

「!?そ、そんなはずは?!」

束は言っていたただの1人の死者もいなかったと……負傷者もないと。それにその事件の後のニュースにもそんな情報は無かった

「隠蔽工作。束はISの技術を死傷者の出た国に与える事でその情報を隠蔽させた。各国にとつて死傷者が出たのは痛いがそれ以上にISの情報は魅力だったと言うことだ」

嫌だ、これ以上聞きたくない。そう願うのに私の腕は動いてはくれない。今まで目を閉じていた、耳を塞いでいた、そして逃げていた現実が全て私に突きつけられる

「しかし残された遺族は堪ったものじゃない。何人が路頭に迷った？何人が裏世界に手を伸ばした？お前はそれを知っているか？そしてお前は自分の罪を数えたことがあるか？」

手の中から木刀が零れ落ちる。今まで信じていた者、見たくなかった現実を全て突きつけられてしまった。全てを見通しているかのような龍也の蒼銀の目が私を射抜く……

「お前は自身を強いと思っていた。ああ、確かにそうだ束の介入が

あつたとは言え。勝ち残れたのはお前の実力であつたのは認めよう。しかしお前は道を踏み間違えようとしている」

気がつけば八神は私の前に立っていた。逃げよう、離れようと思うが足は動いてはくれない

「お前のあり方は私に良く似ている。だがそれゆえに私は認めることが出来ない、お前は私の様にはなつてはいけない。ネクロに襲われたとき、私を警戒して当然だ。護りたい家族がいるのならその反応は極めて正しい」

八神は諭すように坦々と告げる。私も同じ反応していただろうからなと苦笑しながら

「だが今のままでは駄目だ、お前はきつと私と同じになる。狂い闇の道を彷徨う事になるだろう、そうなれば戻る事は出来はしない。だから……一度全てをリセットしろ。そうすればきつと判る。お前の進む道が……さあお前の罪を数えろ……」

八神の手が私の目を覆う、それと同時に強烈な睡魔が私を襲う。立っていられず倒れかける私を八神は受け止めて

「おやすみ織斑千冬。次ぎ目覚めたとききつとお前は答えを手にしているだろう」

どこまでも落ちていくようなそんな感覚と共に私の意識は闇にと沈んでいった……

崩れ落ちる千冬の身体を支えながら指を鳴らして幻術を解除する。見ていたユウリと楯無には千冬がカウンターを喰らって崩れ落ちたように見えているだろう

「織斑先生！」

「問題ない。手加減してある」

観客席から叫ぶ楯無にそう返事を返す。それに与えたダメージの大半も既に治療済みだ。私は子供や女を痛めつけるような趣味は無いからな

「楯無。今そつちに行く」

千冬をどうやって運ぶか考え、とりあえず背負う事にしそのまま観客席のほうに向かって歩き出した

「あんまり怪我が無いですね」

「魔法である程度は治してある。後は本人しだいだ」

深い眠りの中で自分自身を見つめなおすのが終われば、直ぐにでも目覚めるが。それがいつかはわからない

「やりすぎ……ではないな。手加減していたんだろう?」

「それなりには本気だったよ。手を抜いて戦える相手ではないからね」

千冬の太刀は確かに最強と言うのに相応しいだけのものではあったが、それを振るうだけの心が無かった。敵は倒し屠るだけの邪の剣。それでは駄目だ、ネクロの闇に吞まれてしまう。だからこそ千冬の提案を受けたのだから。一通り手当てを終えたところで

「ではIS学園に戻るか。何時までもIS学園を空けているのは不味いからな。楯無とユウリなら運べるだろ?じゃあ任せるぞ」

来た道を引き返し車の方に向かっていているとはやてが後についてきて

「千冬はほっておけへんかった?」

「ふっ、お前にはお見通しか」

「当然♪兄ちゃんの考えてることは判るで」

にこにここと笑うはやてを見て、後ろからなのはとフェイトが来ていないのを確認してから。隣のはやてを抱きしめる

「兄ちゃん?」

突然の事に驚いた顔をするはやてに

「千冬は私だ。私が歩きえた可能性を持っていた」

千冬のようにはやてだけのことを想い。それ以外を二の次にし見たくない現実から目を逸らし逃げていた可能性が私にはあった。

私は弱いから……そんな未来を私に想像させるまでに私と千冬は良く似ていたのだ……

「ん。大丈夫……兄ちゃんはきつと大丈夫」

「そうだろうか……」

何時も私は弱気になる。いつか狂ってしまうんじゃないかと、取り返しのつかないことをしてしまふんじゃないかと……はやては私の頬に触れて

「大丈夫。兄ちゃんはそんなことには絶対にならん。私がいる、ヴィータがいる、シグナムがいる。そして皆がいる……絶対に大丈夫」

ゆつくりと私の頬を撫でるはやての小さい身体を抱きしめながら「……そうだな。つまらないことで不安に思ってしまったな。すまない」

はやてが皆がいるから私はきつと私のままでいられる。そしてその為に戦う事ができる。狂わずに前を見て……抱きしめていたはやてから離れるとはやては私の手を握り

「行くこう！兄ちゃん」

いつかのように私の手を握ってくれるはやての小さな手を感じながら。私は歩き出した……

まだ今は……この暖かい場所に居たっていいだろう。いつか全てが終わるその時まで……

はやてに手を引かれ歩いていく龍也を見つめる4つの視線

「いいの？フェイトちゃん。邪魔しなくて」

「しないよ。偶に龍也だって弱気になるよ」

魔王の直感でユウリと楯無において様子を見に来たのはとフェイトは通路に背中を預けて

「やっぱり。龍也さんが弱気になるのははやてちゃんの前だけか」

悔しいと想う反面。それが当然だと想う自分達の複雑な心境に眉を顰めたが、それは兄と妹の関係だから。そしてもっとも近い傍にいる家族だからと言う理由で納得し、龍也とはやて達のほうとは逆。アリーナに戻り千冬を運ぶのを手伝いに行ったのだった……

龍也達が隠しアリーナからIS学園に戻っている頃。一夏はIS

学園の近くの海岸を歩いていた

あの一件から、俺は龍也と距離を置くようになった。箒やセシリアと違い。俺は何をすればいいのか？何が出来るのか？が判らず。かといって龍也と話をする事を考えると、感情的になり顔を合わせれば何を言うか自分でも判らないからこうして距離を取るしか出来ない。あの時撃たれた簪さんとエリスさんが未だに龍也と一緒にいるのか？俺には判らない。それに龍也の事もネクロのことも何も判らない……

「つともうこんな時間か」

あても無く歩いていたせいで気がつかなかったが。太陽は傾き辺りを緋色に染め上げている。その事で門限が近い事には気付いたが

俺は学園に戻ろうと思わなかった。千冬姉の説教が待ってるだろうし、もしかすると魔王モードになった千冬姉に襲われるかもしれないけど、それでもまだ戻りたくなかった……そんなことを考えながら海岸沿いに歩いていたその時に俺は思わぬ人物と出会うことになる
「悩んでいる、いや違うな。迷っているな織斑一夏」

「!?」

背後から聞こえた声それはあの時いた奴、臨海学校で初めて戦ったあいつ。ペガサスと言うネクロの声に違いなかった。思わず身構えると

「身構えるな。別にとつて喰うわけじゃない」

「どうだか……お前だってネクロってやつなんだろ」

ネクロは人間の魂を糧にすると行ってた。だからただ会話師に来たと言うわけではない筈だ。

「……守護者がどう説明したか知らんがまああつてるだろうな」

白式をいつでも展開できるようにしながら俺は少しづつ後退する。戦うのは無理だ逃げるしか出来ない、だがどうやって逃げると必死に考えているとペガサスは腕を組みながら俺に問いかけてきた

「守護者があの時言った言葉は正しいぞ」

その言葉に思わず目が点になる。あの言葉……それはあの固有結界と言う奴の中での言葉であり、簪さんとエリスさんが撃たれたとき

の事だと理解すると俺は

「なっ！犠牲を出すことが正しいわけないだろ！」

「全てを護るなどという奴は驕ってるだけだ。人が護れるのはその腕の届く範囲でしかない」

怒鳴る俺に対してペガサスは冷静に言葉を返してくる。段々腹が立ってきた、龍也の言う事も判るけどそれが正しいなんて俺には思えないからだ

「だったら俺は……」そして織斑一夏、お前は誰かを守れるほど強くない」

俺が口を開いた瞬間。俺の視界からペガサスが消えて首に手刀が添えられていた

「っ!？」

ネクロの力を考えれば、このまま俺の首を切り飛ばすことだって出来る。なのにペガサスは

「自身を守れない者が誰かを守る？笑わせるなよ」

淡々と言葉を紡ぎながらゆっくりと手刀がおろされるが、俺は動けなかった……死にかけて怖かったというのもあるが、理解してしまっただのだ、ペガサスの言う通りだと……そして龍也の言うことは正しいと……それでも俺は

「……めない」

「んっ?」

「それでも俺は！認めるわけにはいかないんだ！」

そうだ。龍也の言う通りだったとしても、ペガサスの言う事が正しかったとしても俺は俺だ！俺でしかないんだ！この気持ちを偽る事なんて出来はしない

「……やはりこの世界での英雄はお前なんだな」

俺の叫びを聞いたペガサスが呟いたみたいだが風で聞こえない。ペガサスは俺を見ながら

「……俺の剣術をお前に教えてやる」

「な!？」

その発言の意味が理解出来ず俺が困惑しているとペガサスは

「俺の目的はあるネクロを消滅させること……そのためにお前と守護者、両方を利用させてもらう。それに守護者の訓練をつけられるのも今は嫌なのだろう?」

ネクロがネクロを狙う……? 龍也から聞いた話とは少し違うみたいだけど……

「どう言う事だよ……」

俺の心境を全て見透かしているかの様な口調のペガサスに若干の警戒をしながら、言葉の意味を尋ねるとペガサスは

「なに、お前は”本来この時間は守護者と鍛錬をしている”ハズだからな。ここにいると言う事はあの一件からだと推測できる」

……ん? 今凄く重要なことを言わなかったか? 少し考えてこれほとんどでもない事だと気付き

「なんで知ってるんだよ!?!」

それはIS学園にいなければ知る由もない話だ。なんでペガサスが知っているそのことに動揺しながら訪ねると

「くくつ……まあ知りたかったらそつちにいる黒武士とやらに聞くといいさ。そつちにいる更識という奴かツバキとやらに聞け」

黒武士? 誰のことだ? 龍也ではないよな? そう言うのを背に向けて歩き去ろうとするペガサスの背中に……一瞬だけどその背中にあの時の龍也の姿が被った

「もし俺の剣術を教わりたくないなら、明日の早朝にここまで来るといい。もし守護者に気づかれたのなら俺が交渉したいと言っていたと伝えてここにつれてくればいい。騙し討ちはしない」

「……信用できるかよ」

人の姿をしてもその中身はあの化け物と同じだ。龍也が信用するわけが無いと言うと

「するさ。守護者に■■■の剣士の誇りにかけて、と俺が言ったといえはな……」

一瞬だけ振り返ってそう次げた。ペガサスはそのまま今度こそ立ち去っていった……一人残された俺は
「つたく俺にどうしろって言うんだよ」

そして俺はこの答えをどうするか悩むことになるのだった……

第76話に続く

第76話

第76話

隠しアリーナの中を自在に飛び回る2機のIS。両方とも黒をメインカラーにしたISだが、普通のISと違う点があった。それは背中に装備したバックパックだ。本体全体を覆うように装着している。そのおかげで加速力や機体制御が格段に上昇していた。だがバックパックの形状は2人とも異なっていた。片方は多目的翼と一体化するように装着されたバックパックで、機体のサイズが1回り巨大化していた

もう片方は全体的なシルエットは普通のISとほとんど同じだが、背中のランドセル型のブースターに増設された可変ブースターとシールドが特徴的な姿をしていた。その2機の機動データを取っていた私は

「お疲れ様。エリスちゃんもアイアスちゃんもシャワーを浴びてからこっちに来て」

「はい。後でデータを見せてくださいね」

「……少し疲れました」

そう返事を返してピットゲートに誘導に従い戻ってくる2人を見ながら

(一週間でこれとは驚きね)

私が開発していた試作型のバックパックを改修した。龍也君達の科学力には正直驚かされる、武装はまだ搭載してないが。それでもあの機動力は十分な武器になる

(それに私の考えていた自立支援型のバックパックも開発する方法があるらしいし)

デバイスコアを使えば可能と言っていた。龍也君いわくデバイスコアとISコアは良く似ているので流用出来るって言ってたっけ……

(人工知能の搭載はこれで可能になった。あとはこの試作型のバック

バックをベースに完成させればいい)

アイアスちゃんが使ってたのは汎用バックパックの基礎型タイプ。これを元にフレリアとシエルニカ用の各能力特化型を作る大事なベース型。一応量産する事が前提なのでつくりがある程度簡略されている。

エリスちゃんのは元よりエリスちゃんのために作っていた。高機動型のワンオフのバックパックだ。量産が前提の機体と、ワンオフではやはり速度には差が出ているのは仕方ないが、どちらも仮定数値よりも遥かに良い数値が出ている

(あとは武装ね。とりあえずヤタガラスの弱点を補う方向で考えましょう)

バックパックの調整は一時中断し。背もたれに背中を預け大きく背を伸ばす

(ユウリと楯無に聞いたけど、千冬と龍也君が戦って千冬はボコボコでしかも……意識不明だしね)

外見には何の傷も無いのにも関わらず千冬は目を覚まさない。一夏君に教えるとまた龍也君に突っかかりそうなのでIS学園の用事で出張していると説明してある。

(しかし、私がないときに千冬が龍也君に勝負を挑むとは思ってなかったのよね)

はーっと溜息を吐く。龍也君いわく千冬は治療中との事だけど、一週間も目を覚まさないと言石に心配だ。そんなことを考えながら椅子から立ち上がり

「ユウリの様子でも見に行くのでしょうか」

アリーナ内部の第二ラボに移動する。ここは私のいるフロアと違って完成したISの調整用のブロックだ。ここでISの改修を急ピッチで進めている

「ユウリ。調子はどう?」

アマノミカゲとミステリアス・レイデイの前で作業しているユウリにそう尋ねると

「……思うようには進んでないが。出力は5%上昇している。それに

ネクロの寄生を防ぐコーティングも終わった。次は前よりも楽に戦えるだろうな」

アイアスちゃん達とユウリと楯無のISから優先してコーティングと改修を進めている。戦力になるものから準備するのは当然のことだろう。ユウリの手際の良い整備を見ながら

「前に龍也君となにか話をしてたけど何の話をしてたの？」

前に2人だけでなにか話をしているのを見たのだが、ユウリが妙に慌てていたのが気になりそう尋ねると

「……聞かないほうが良いお前の立場的にな。ただ龍也は更に味方を増やそうとしている……としか言いようが無い」

その言い方に私はピンツと来た。多分龍也君が迎え入れようとしているのは亡国企業の間人だと、しかし今は手段を選んでいる状況ではないので何もいわない

「とりあえず今はワタシ達が出来る事をすればいい。そう代表候補は龍也に任せればいい」

「……多分地獄を見てると思うけどね」

1度龍也君の訓練を見たけどあれはやばい。私は知らずの内に出た冷や汗を拭いながら

「じゃあお互いに作業を頑張りましょう」

そう声を掛けてユウリの隣に椅子に座り。ミスティアス・レイディの改修を始めたのだった

一夏はと言うと一週間前からずっと早朝のペガサスによる剣術指南を受けていた……いや指南と聞けば聞こえは良いが、その内容は殆ど実戦と同じで一夏は何度も死を感じながらもその訓練を受けていた

「遅いな。死にたいのか」

「ごがあっ!?!」

ペガサスの膝蹴りを腹に喰らいそのまま吹き飛ばされる。そのま

ま数メートル地面を転がり、仰向けになっっている

「貴様何を腑抜けている？今日の貴様は何時も以上に酷いぞ」

もう見慣れた縦に割れた瞳孔が俺を見据える。最初こそ信用できないという思いがあり、フェイトさんに尋ねてみたことがあった

「ネクロは完全に我を忘れていたりするのか？心とかはないのか？」とそれに対してフェイトさんは

「うーん。完全にそうとは言えないよ？ネクロだって自意識が強いネクロはいるよ？稀にだけ破壊衝動とかを完全に押さえ込んで民間人を護ったネクロがいた例もあるよ」

と言うことはペガサスはそういった珍しいタイプのネクロということなのだろう……

「おい、聞いているのか」

「ぬおおおっ!!!何すんだよ!!今思いつきり直撃コースだったぞ!!」

投げられたクナイを横に飛びながら回避すると。俺の視界を覆う黒い影とつさに剣を木刀を構えるとガツンという手応えを感じる。

そしてそのまま体重を前にかけてペガサスを押し返そうとする

「戯けが」

「うおっ!!!」

足払いを掛けられ、体勢を崩されたところで、襟を掴まれそのまま投げ飛ばされるが。途中で地面に手をつけて態勢を立て直し。ペガサスを見据える事のできる位置に着地すると

「腑抜けていると思いきや、その集中力。飛んだ変わり者だな、お前は」

やれやれと言う感じで肩を竦めたペガサスはその手にしていた剣を消し去り。俺から背を向けて

「今日はここまでだ。今度はもう少しましな動きをするんだな」

闇の中に消えていくペガサス。朝なのに闇と言うのはおかしいがそれでも闇は闇だ……俺は持っていた木刀を手放し。そのまま寝転がり空を見上げる。一週間と言う時間、そして敵であるペガサスとの稽古……それは俺に色々考える機会を与えてくれた

「あー結局俺が子供だったって事なんだよな。結局」

簪さんやエリスさんが龍也と一緒にいれるのは、龍也のやったことが正しいと判っていたからで

鈴やラウラがああ後も龍也の訓練に参加していたのは、ネクロになつてしまった人たちをもう増やさないためにだ……

「俺って全然駄目だよなー」

自分で呆れるくらい。駄目だったと判る……簡単な話、俺は何も判ってなかったただけだったわけだ……

何もかも救うなんてことは出来はしない。

でも見捨てることなんて出来はしないから龍也は頑張ってきたのだ。努力して戦つて傷ついて全てを護ろうとした来たのだ

それでもなお救えなかった者があつた……

護れなかつた物があつた……

その事を嘆いて、悲しんで……それでも前に進んできたんだ……

それは尊敬するべき背中だったんだ。俺も護る人間になりたいとずっと願っていたのだから

「自分の言葉が以下に軽かつたか思い知らされるよな……」

俺の守るはただ理想を語っていただけだった。現実も護る事の難しさも知らず、ただ守る守ると喚びただけ。初日のペガサスの打ち合いで徹底的に叩きのめされ、いかに自分が弱かつたのかと云うのを思い知らされた。なんせただの1回の攻撃も出来ぬまま叩きのめされたのだから。以下に自分の守るが軽い言葉だったのか痛いほど思い知らされた。そして龍也の偉大さを改めて理解した、そして出来る事ならまた以前のような関係に戻れたらと思うのだが

「とは言え。いまさらどうすれば……」

龍也に何と云つて謝ればいいのか？謝ったところで許してもらえないのか？と云う不安が頭をよぎり、行動に出れない

「俺ってこんなに弱虫だったのかな？」

……かー！

「どうしよっかな。なのはさんとかに仲介を……いや駄目だ。絶対殺される」

あの暗い目で睨まれたらと思うと怖くてそんなこと頼めない

……ちかーッ！……無視……ころ……わよ!!!

「でも何時までもこうして考えていても仕方ないよな」

IS学園にいる以上。いつかは龍也と話をつけなくてはいけない。殴られたとしてもはやてさん達にフルボッコにされても、立ち向かわなければならぬ。そうと決まればと気合を入れて立ち上がろうとした瞬間

「あたしを無視すんじゃないわよ！馬鹿一夏ーッ!!!」げぶうっ!!!

強烈なドロップキックを背中に叩き込まれ砂浜に顔面からダイブする。

「いつまでもうだうだうだ!!!鬱陶しいのよ!!とっと龍也に謝りなさい！」

この声は鈴だな。いつまでも俺がうだうだしてるのに我慢できなくなつて強襲しにきたか

「ほら！立っ！へたれ一夏!!!」

「ぐおっ!？」

魔王モードか!?!片手で俺を持ち上げやがったぞ鈴の奴！そしてそのまま砂浜に下ろされ

「いつまでもぐだぐだしてる一夏は見てるの嫌なのよ。だからさっさと謝って、はやてに処刑されなさい」

なぜ早く処刑されなければならないのだろうか？だけど自分がした事を考えれば、龍也大好きなはやてさん達が怒るのは無理もないだろう、はーつと深く溜息を吐いてから頬を叩いて気合を入れて立ち上がる

「だな、鈴の言うとおりだよ。サンキュー！決心ついた！」

とりあえず謝る。その後の三途の川メドレーは俺の罪として受け入れよう。本当にやばかったら多分龍也が止めてくれると信じて、だけどやっぱり少し怖いので鈴を見て

「鈴。一緒に来てくれるか？怖いから」

「しようがないわね。ほら、一緒に謝ってあげるから早く行くわよ」

身長差がかなりある鈴に手を引かれながらIS学園に戻りながら俺は

(どうか殺されませんように)

そう祈りながらIS学園に戻ったのだが、俺に待っていたのは

「STOP! STOPだ! はやて! なのは! フェイト! ステイ! ステイ!!!」

「■■■■ツ!!!!」

「ぎゃー!!! 理性がログアウトしてるうううう!!!」

謝ることすらできず。理性がログアウトしたはやてさん達にフルボッコにされ意識を弾き飛ばされるのだった。なお回復させられる。三途の川に叩き込まれるが6回繰り返され。本当に死を覚悟したのだった。なお顔の形が変わるまで殴られ緑に話せない状態になった物の身振り手振りを交えて謝ると龍也は

「大して気にしていいいさ。その代わりそうだな。箒とか簪とかから遅れたぶん。6倍位濃い訓練をしようか?」

……俺は本気で死を覚悟したのだった。ちなみに6倍濃い訓練とは瀕死になると魔法で強制回復また訓練の無限ループだったりする……

薄暗い部屋の中でも輝きを失わない黒と金の装甲を持つIS「アスモデウス」を見ながら

「もうじきお前の出番だ。私を裏切ったユウリと織斑一夏を殺すために力を貸してくれ」

アスモデウスは私が始めて奪ってきたISである、ラファールを改造した機体で長年私の手足として働いてくれた。サイレント・ゼフィルスを手に入れてからは使ってなかったが、ユウリを倒すには、そして織斑一夏を殺すのにこれ以上相応しい機体はない

「その仮面も良く似合っているな」

展開すると私の顔の上半分を隠すようになってる。バイザーにするのも考えたが、バイザーはとも好きではないので仮面にすることにした。ユウリのスペアの仮面を改造したもので一応眼の所に視

覚矯正等の強化パーツを装着してある

「これで準備は整ったな」

バスのロットは空いているが、アスモデウスは特殊なISだ。ユウリ以外のメカニックでは武装の追加は出来ない。だから使えるのはガンブレードと背中の実弾ビットが2機……あとは試作型ビームライフルが2丁。武装の面は心もとないが

「武器で全てが決まるわけではないからな」

武器は確かに戦局を操作するだけの物だが、使いこなせなければ、そして有効的に使えなくては意味は無い。その分アスモデウスは武装は少ないがジェネレーターにブースターその全てが高性能だ。これを効率よく使えば第3世代にだって負けはしない

「随分と気合が入っているのね」

「スコールか。まあな、最近妙に気分がいいんだ」

何もかもがクリアに感じるのに、胸の奥にたまった黒い泥は自己主張を強め。狂おしいまでの憎悪と殺意が私を満たしている

それがとても心地よい。闇と同化するような、いや闇が私自身になるようなそんな感覚がとても安堵できるのだ

「……そう。それは貴女にとっていい物？」

「……うん？ん？……」

スコールの問い掛けを聞いた瞬間。これではいけないという声を聞いた気がしたが、それもまた消える。私はスコールを見て

「ああ、良い物だ。わずらわしいものを考えなくて済む」

ただユウリを壊したい……

ただ織斑一夏を殺したい……

ただ姉さんを自分のものになりたい……

それだけしか考えられない。いやそれ以外を考えたくない……

「まあいいわ。ネクロから指示があつたから伝えるわ。明日仕掛けるそうよ、ネクロが作ったIS二機と共同戦線……いえ違うわね。一緒に出撃するだけ。あとは各々好きにすればいいわとのことよ」

言うだけ言って出て行くスコールを見ずにアスモデウスの最終調整を進める。この時もしスコールがいたら作業を中断させていただ

ろう……マドカの背後には何体ものネクロがいて、その手に、その足に、その身体に、絡みつくようにしてマドカの身体の中に消えて行っていたのだから……

夢を見る……

もう何年も見ることもなかった夢

父がいて……

母がいて……

一夏がいて……

マドカがいた……

もうずっと前に失ってしまった。私が幸福だったときの居場所……

(なぜ忘れてしまったのだろうか?)

この光景だけは絶対に忘れるものかと胸に決めていたはずだったのに、なぜ忘れていたのだろうか?

千冬。一夏とマドカを頼む、私達が行けば少しは時間が稼げるだろう

お願いね。千冬、一夏とマドカをお願い

どこか判らない場所で私に一夏とマドカを託して走っていく父と母の背中。私はマドカと一夏を抱きしめて必死に逆方向に走った……

(これは何時の事だった?この手に確かに一夏とマドカが……いや。待てマドカ?……マドカは誰だ?)

一瞬思考が停止するが直ぐに思い出す。織斑マドカ私の妹で一夏の1つ年下の妹だったはずだ。

(何故私はこんなにも物事を忘れている?マドカも一夏も大切な家族だったはずなのに?)

何故だ?

何故今まで昔の事を思い返せなかった?

何故今までマドカのことを忘れていた?

第77話

第77話

IS学園とその周囲にセットしたサーチャーの監視結果を見ていて

「こことここ。それにここ。IS学園の内部にネクロの反応がある」

サーチャーの記録にはここ数日にかけて、IS学園内部にネクロの反応があったことを示すノイズが記録されていたが……

「んーでも私達が気付かないってことは無いよね？」

「そうやよなー。私達に兄ちゃん。4重の探査を通り抜けるネクロなんて居るわけないとおもうんやけど」

確かに私もそう思うトツプクラスの魔導師の結界を通り抜けることが出来るネクロなんて居るわけ無いと思うのは普通だが……なのはだけは

「特異型ですね？」

「その可能性が高い。ネクロの中でも極めて異質で強力な存在である。特異型では無いかと私は考えている」

特異型ネクロ。先日襲撃してきた「ヴォドウン」を筆頭に特殊能力を持つネクロがいる。それが特異型だ

「うーん。しかし特異型なら魔力反応で直ぐ見つけれられるんじゃない？」

「いや。恐らく今回の特異型は今までのネクロは違うはずだ。この世界に適応した特異型ネクロが生まれていてもおかしくない」

特異型は普通の常識では考えられない能力を持つていることが多い。今までは戦闘特化で高魔力を持つネクロが居たが

「そういうことか……魔力が極端に少ない、もしくは魔力を完全に隠蔽できるネクロがIS学園に侵入している可能性がある……ってこと？」

フェイトが私の言いたいことに気づいたのかそう尋ねてくる。私は頷きながら

「そう言うことだ。そして反応が最近は多く出ている。なにか仕掛けてくるような気がする……今から判れて少しIS学園の中を調べたい。何か仕掛けられていたら困るしな」

ベエルゼは撤退したが下位ネクロはまだ力を残している。仕掛けてきてもおかしくない状態だ、それにファントムタスクの事も気になる。

魔力反応があつたのは全部で5箇所。「学園の東側の森」「正門」「学園内のラボ」「アリーナ」「IS学園の近くの浜辺」

とりあえず学園の近くの浜辺は後回しにし、学園内のネクロの反応があつた場所から調べる事しそれぞれ分かれて調査を始めた。私はアリーナへと足を向けたのだった……

今までの観測データからネクロの襲撃の可能性があると考え、龍也達が調べに出たのだが……それはほんの少しだけ遅かった

「待ってたわよ。ファントムタスクさん？」

「ラクシユミ……？」

IS学園のセキュリティの前でマドカに話しかける。IS学園の教師としても身分を示すバッジを身につけた女は

「そうよお？といっても私は端末だけだね」

くすくすと笑う女教師の目が反転しネクロと同じ輝きを宿す

「まあお前がどうでもいい。私は私のやりたいようにやる」

「どうぞ？手駒は2つ貸すから好きにやってくれて構わないわ」

マドカはラクシユミを一瞥し、アリーナのほうへ歩き出した。カムフラージュの為のIS学園の制服を身にまとっている。偽造IDも所持しているのですんなりとIS学園の中へと入っていった

「んふふふ……あの子は死んでもいいネクロになるわねえ……」

くすくすと楽しそうに笑うはラクシユミは鼻歌を歌いながらIS学園の中へと戻って行ったのだった……

その頃アリーナでは一夏と楯無が訓練を終えて話をしていた。一

夏は訓練のサボりを取り返すために、楯無は改修を終えたミステリアス・レイディの調整のために来ていて。ユウリは管制室でデータ取りをしていた。そして2人はどうせならと言うことで軽く模擬戦をしていたのだ

「ありがとうございます」

互いにそう一礼してから地面に座り込む一夏君。私は第1次改修を終えたミステリアスレイディを見て

(今までよりも反応が良くなってる。それにレスポンスも良い)

私の思ったとおりに動く。それにパワーも良い……はやてさん達の改修は思った以上に効果が出ていた。まだアクアクリスタルは調整中で水を操る事は難しいけど、白兵戦なら十分すぎるほどの性能を發揮してくれている。私がそんなことを考えていると一夏君が

「あの楯無さん。一個聞きたいことがあるんですけど」

「なーに？お姉さんのスリーサイズ？」

茶化すつもりで行ったのに一夏君は私の発言を無視して

「黒武士……って知ってますか？」

なんで黒武士の事を……内心動揺しながら

「急にどうしたの？それに誰にそんな話を聞いたの？」

そう尋ね返すと一夏君は言いにくそうに

「俺……今ネクロのペガサスって居ましたよね？あいつに良く会ってるんです」

「え？」

予想を越える言葉に私が驚いていると一夏は

「なんかあいつには倒したいネクロがいるとかで俺達と龍也を利用するって言ってたんです。龍也に会うことがばれたら取引を

したいと言ってくれて言われています」

「龍也さんには話したの？」

「いやまだです。なんて話せば良いか判らなくて」

確かにそうだろうネクロと話しているなんて、なんと言えば良いのか判らないのは当然だろう

「それで。ペガサスは知ってたんです、俺達の訓練のスケジュールを、

どうしてそれを知ってるって怒鳴ったら。黒武士に聞け、そうすれば判るって……」

ユウリが知っている……もしかするとネクロ関係かファントムタスクの構成員の事？ワタシがそんな事を考えていると、音を立ててアリーナの扉が開きそこから黒と金で彩られたISが姿を見せる。その操縦者は顔半分が隠れる仮面を身につけていて……その仮面には見覚えがあった……

(黒武士の仮面!?)

それは見間違えるわけが無い。ユウリと初めてあった時にユウリが見につけていた仮面だった。多少改造されているが見間違えるわけが無いのだから。そしてそれに気付いたのはユウリの方が早く襲撃者に気付き

『一夏！楯無！逃げろッ!!』

その怒声と共にアリーナの非常警報を鳴らす。それと同時に襲撃者のISの背中から何かが分裂し向かってくる

(遠隔操作兵器ね！)

一夏君もISを展開して身構えている。2人で同時にそのビット射線軸から離れた瞬間

「ぎっシャアアアアッ!!!」

「ウオオオオオオッ!!!」

「?!?!」

獣のような雄たけびを上げて上空から更に二機のISが降下してくる

(サイレント・ゼフィルス!?それにシルバリオ・ゴスペル!?)

そのISのシルエットは強奪されたサイレント・ゼフィルス。そして臨海学校で暴走した福音と瓜二つのシルエットをしていたが。操縦者は既にISと一体化し獣のような荒い呼吸をしながらその腕を伸ばしてくる

「くっ。このおっ!!」

一夏君が両手の白羅からエネルギークローを出現させ応戦しようとするが

「ギアアアアッ!!!」

ゴスペルの姿をしたネクロが咆哮を上げてその爪を弾き。変わりに右拳を押し当てるすると

「うあああああああッ!!!」
バリバリッ!!!
!!!

とんでもない!放電と一夏君の悲鳴が重なる。それは操縦者とI Sの両方にダメージを与えると言われ装備することが禁止された装備。スタン・ナツクルだ。しかも電圧をかなり高めているのか白式・白雪がショートしているのが見える

「一夏君!」

ガンランスでゴスペルを弾き飛ばし、今のうちに間合いを離そうとすると

「させると思っているのか?」

「し、しまっ!?!」

足をつかまれ一夏君と一緒に地面に向かって投げつけられる。それと同時に

「合わせろ」

「ギシャアアア!!」

襲撃者は両手に持ったガンブレードの銃口を、ゼフィルスをモチーフにしたネクロは翼を分離させ4つレールガンとビームの刃を発生させ打ち出してくる

(避けれ……)

「やれやれ。嫌な予感が当たったな!」

「楯無!」

ユウリと龍也さんが割り込んでその攻撃を防ぐ……そしてユウリは襲撃者をみて

「マドカか……何をしに来た」

「知れたこと……お前と織斑一夏を殺しに来た!!!」

そう叫ぶと襲撃者はユウリに向かって突っ込んでいき、龍也さんはI Sを展開して

「気を緩めるなよ。増援だ」

龍也さんの視線の先には黒い闇があり、そこから這い出るように無数のネクロが姿を見せ始めていた……

アリーナのほうから聞こえる非常警報。何かあったのではと思い簪と一緒にアリーナに向かってしていると

「STOPッ！エリスと簪は寮に戻りなさい！」

「なのはさん……」

私と簪の前でそう言うなのはさんは

「2人は魔導師の適正がある。ネクロにとっては何をしても捕獲したいターゲット。だから隠れて……危ないッ！」

ISではなく、杖の様な物……確かデバイスのレイジングハートを構え虚空目掛けて振るうと

「あはははーばれちゃったー！」

そこから姿を見せたのはスーツ姿の女性。確か……

「なんで■■■■先生が……」

「どう……して」

確かあの人は整備課の担任教諭で……あれ？違ったっけ？

「考えないで。強烈な暗示を使ってる、心を壊されるよ。教えたでしよ？プロテクション……それで自分達を護って」

言われたとおり簡易型のデバイスとして持っていないさいと言われていたお守りを握り締める。私は黄色の、簪は青いバリアみたいのに覆い隠される。

「ふーん。随分と上達が早いのね計算外だわ」

そう笑う先生の目は白と黒が反転し、両手に闇その物なわけと思わせる黒い爪を発生させてそれをなのはさんに向けている

「一応聞いておこうか……LV4。お前の目的は何？」

「さあ？答えると思ってるー」

ヒュンッ!!

鋭く腕を振るうとそこから三日月形の刃が飛び出し私と簪に向

かってくる

「子供のプロテクションなんて簡単に……」

ガキンツ!!!

耳を塞ぎたくなるような金属音と共に爪が砕け散る。なのはさんはその隙に杖を槍のように構えて

「馬鹿だね。私達が用意したデバイスだよ？魔力の増幅機能くらいつけてるよ！」

一瞬で間合いを詰め踏み込みのスピードを乗せた強烈な突きを繰り出した

「そうねえ。読み違えたわ！」

槍のようにレイジングハートを構え突っ込んでいくなのはさん。本来のスタイルは魔法による弾幕戦らしいが、ここはIS学園の通路。幾ら結界とかで護つても限界がある、それを理解したうえで近接戦闘。状況判断能力そして自分の得意な戦い方を封じられても十分に戦うことの出来る戦闘経験。

(これが別の世界の人の戦い方……)

魔法と言うものを教わり、ISとの両立を始めたばかりの私では到底出来ないだろう……自分の戦い方、戦闘知識、状況把握。その全てが高い次元で両立されているからこそ出来る戦いかただ。爪と槍のぶつかり合いで起きる火花を見ながら手の中で輝くペンダントとヤタガラスの待機形態である。メタルブラックのブローチを思わず見つめて

(私もあんな戦いが出来るようになるのかな)

魔導師として魔法が使えると聞いた時は嬉しかった。だけどそれだけでは駄目なんだ……私と簪は目の前で繰り広げられる魔法使いと異形の戦いを食い入るように見つめたのだった……

だがこの戦いは同時に別の場所でも起きていた……

「なんや？お前？随分と妙な気配をしてるな？」

「うふふふ……さすが夜天の女神とだけ言っておきましようか？」

「その余裕なんか腹立つなあ？まあええわ、シエン。クリス下手に動

いたらあかんで？ 私は広域殲滅やで巻き込んでまう」

「設備とかは大丈夫なの？」

「知らん、そんなのは私の管轄外や」

「いいの!? 破壊して!」

「命を大事に、物は壊しても直せば良い、私は知らんけどな!!」

そう言うのが速く魔力弾をばら撒き始めるはやて。当然辺りの施設や地面に次々にクレーターが発生していく。クリスとシエンの悲痛な悲鳴はガン無視。ブラツデイダガーを連射し、魔力刃を飛ばしまくるはやて。ネクロは観察するような眼差しでその攻撃を回避することに徹していた……

「侵入されているなんて思っても無かったよ!!」

「つつとと！ かなり離れていると思っただけなんですけどね」

「甘いよ。ネクロの気配を感じて普通に移動してくると思う？」

フェイトの手に風が集まり渦を巻く

「なるほど、風による加速……聞いていたのより遥かに早いようですね？」

「速いだけじゃないけどね!」

腕を振るい、風の刃と雷の刃を同時に飛ばしながらバルデツシュを構えて

「ヴィクトリア、弥生！ 下がってて、そのISじゃ組み付かれたら感染する!」

そう叫びながらネクロをヴィクトリアと弥生から引き離すために攻撃を仕掛ける

「速いわねえ……避けるのが手一杯」

はやてやなのはと戦っているネクロと同じように、フェイトの動きを観察しながら回避に徹するネクロ。全く同じタイミングで、全く同じ顔をした3体のネクロと3人の魔導師が戦闘を開始したのだった……

アリーナで警報が鳴り始めたころ……学生寮の寮長室では

「あ……うあ？……ここは……」

若干の頭痛を感じながら目を覚ます。そして暫く呆然としていたが徐々に思考がハッキリしてくる。八神の問い掛けにずっと忘れていた大切な者のことを……

「何か身が軽いな……気のせいかな」

どれくらい寝ていたか判らないがとてもすがすがしい気分だ。しかし龍也に言われたとおり自分の罪と言うのも自覚した……今まで自分はなんと幼稚な事をしてきたのか？今からでも償えるのか？と考えることは色々ある……と再び思考の海に浸ろうとしていると気付いた

「警報？！またネクロなのか!？」

ちいつ寝すぎて感覚が鈍っている！舌打ちしながら身体を起こすがやはり身体の重みを感じて思うように動けない

「ん？なんだこれは」

とりあえず髪を整えて着替えればいいと思いい机の上を見ると。見覚えのない怪しげな栄養ドリンクの瓶と見たことない金属のボックスが置かれていた

「八神か？」

金属のボックスに触れるとそこからホログラムのようなものが浮かび上がり

『あーこれを見ているということは目を覚ました頃だと思う。まずはまあ好き勝手言つて悪かった、それに殴りすぎて悪い』

頬を掻きながら苦笑をする八神に思わず噴出しかける。思ったよりナイーブな奴なのかもしれない

『横に置いてあるのは魔導師が良く使う栄養剤だ。味はまあ……そこそこだ。たぶんしんどいので飲むといい。それとボックスの中に適当に武器を入れておいたので打鉄にでも搭載するといい。あの模擬戦で互いに帳消しだ、力を貸してくれることを願う』

「私の方が悪いと思うんだがな……」

とりあえず今のネクロの襲撃を乗り切ったら謝ろう。それがいい
と思いなから栄養剤の蓋を開けて一気に煽る

「むぐう……これは……酷いな」

漢方を纏めて4種類くらい飲んだような苦味とえぐみが舌を襲う
が、さつきまで感じていた頭の痛みと身体のだるさは消えた。私は机
の上におかれていた金属のボックスをスーツのポケットに突っ込み
そのままアリーナのほうへと走りだした

自分がやるべきことは判っている……

自分が犯した罪も知った……

償う方法なんて無いのかもしれない……

ならばその罪は背負っていこう、何時までも……

そして……私が剣をとった理由は今も昔も変わらない……

「大切な家族を護るためだけにある」

あの時私はマドカから手を離してしまった……

一夏を護りきる事ができず、一夏は頭をぶつけて父と母そしてマド

カのことを忘れた……

今度は絶対に護りきると思い、剣を手にした……

そしてISを手にした。護るための力として……

だが結局私のしたことはなんだったのか？

世界最強なんて言われて、初心を忘れてしまった……

何のために力を得たのかさえ忘れて……だが私は自身のあり方を

漸く思い出せた……

たった数年でその想いを忘れてしまった……それほどまでに忙し
く振り返ることなど出来ない毎日だったが

もう忘れることは無いだろう……あの時の剣を取ったときの想い
を……

第78話に続く

第78話

第78話

ちっ！何だこの反応速度は!?改修したアマノミカゲの反応速度を完全に上回っているアスモデウスに

「どうした！私についてこれないのか！」

ガンブレードで射撃と斬撃を交互に繰り返す。超高速のヒット&アウェイを繰り返すマドカの動きに対応できない。おかしい、アマノミカゲもミステリアス・レイディもモーターから全部組みなおし、外見はそのままで中身は前と比べられないほど上昇しているはずなのにどうしてマドカに、アスモデウスに追いつけない？

「ユウリ！楯無！間合いを離せ！」

龍也は闇から這い出てくるネクロを両断し。空中から襲ってくる福音とゼフィルスに酷似したISの一撃を裁きながら。ワタシと楯無のほうに指を向けて鳴らす。すると

「え？身体光ってる？」

身体だけじゃない、ISもうっすらを蒼い光を帯びている

「ギツシャアアアアアッ！」

「邪魔だッ!!」

魔法ではなくISの両腰のレールガンで飛び掛ってきた福音を吹っ飛ばした龍也は、一夏に向かっても同じように指をならしながら「簡易の強化だ！反応とかが上がってるからいつもと同じ動きをするなよ！」

そう言うが早く次々にネクロが現れている場所に瞬時加速で向かっていく龍也。魔法を使えば早い、ここはIS学園のアリーナでしかも監視カメラがある。無論ネクロのことをIS学園が発表するとは思えないが、それでも何処から情報は流れる。自分のことを出来るなら最後まで隠しておきたい龍也は敢えて魔法を使っていないのだ。ワタシは両手に握った長曾禰虎徹の刀身を見つめマドカのそしてスコールの事を考える

(もうタスクの人員のほとんどがネクロ化しているのだろうか)

あの2機のISの動きのクセに見覚えがあった。タスクの中でも武闘派でスコールの同志だった部隊のリーダーと副リーダーのISを動かすときの癖に似ている。この感じだともうタスクに残っている人間はスコールとオータムだけなのでは?と思うってしまう、だがそれ以上にマドカがここに来た。それは

(スコールの意地か……)

ワタシをネクロから遠ざけるために色々と策を講じてくれた。そして今ここにマドカがいるそれはもしかするともう自分が反逆者であるということがばれて。処罰される前にとマドカをIS学園で回収させるつもりだったからではないのか?反応速度が上昇したアマノミカゲの機動力を生かしながらプライベートチャンネルで

(あのIS操縦者を確保する)

(それはいいけど……あの顔何処かで見たことある気がするんだけど?)

ガンランスの掃射でマドカの射撃を相殺している楯無。流石の洞察力だなと感心しながら

(あの操縦者の名は「織斑マドカ」事故で千冬と一夏を引き離されファントムタスクに拾われた。あの2人の妹だ)

ワタシの言葉に一瞬驚いた表情をした楯無だったが

(OK。判った……機動系を潰して回収で行きましょうか)

口で言うのは簡単だがアスモデウスの機動力はかなり高い。そして向こうは殺す気で来ている、そんな相手の無力化なんてそう簡単に行くわけが無いが……やらないわけにはいかない

(バックアップは私がやるわ)

(ああ。頼む)

そして1度は敵同士だった。楯無が私の背中を護ってくれている……今なら何でも出来る。そんな気がする……ワタシはそんなことを考えながらバレルロールを繰り返し間合いを幻惑させているマドカの方に向かって行った……

(ちっ！数が多いい！)

内心舌打ちしながら。右腕のニーベルングアイゼンをビットを持つ I S 型ネクロの腹部にたたきつけトリガーを引く

炸薬の炸裂音と悲鳴を上げて吹っ飛んでいくネクロを見ながら

(どういことだ！なぜゲートが開いている)

ネクロは転移能力を持つものもいる。だが今ここに現れているのは L V 1・2 だけだ。下位レベルは転移なんて高等な能力は持っていない。I S 一体型は火力と機動力こそ高いが、良いトコ L V 3。しかも理性が無く本能で闘っているところを見ると転移能力を持っているとは思えない。となると考えられるのはゲートの作成しかないが近くのゲートの気配は無い

(それに I S 学園内に3体のネクロ反応……!?どうなっているんだ)

あれだけ張った結界を潜り抜け。なおかつゲート作成……並みのネクロではないが、何故と言う疑惑がどうしても残る

「シャアアアアッ!!」

「シッ!!」

両腕の帯電した拳で殴りかかってくる福音に酷似したネクロの攻撃をいなすと同時に背中中のビットを射出し。一夏とユウリに攻撃を仕掛けようとしていた L V 1、2 に射撃を放ちながら間合いを取る。魔法を使えば一瞬とまではいわないが速攻で片付けれるだが……

(妙な胸騒ぎがする)

I S 学園内のネクロはなのは達が戦っているから心配ない。なのに妙な胸騒ぎがどうしても消えない……底なしの闇が迫ってくるそんな嫌な気配がずっと私達に纏わりついて……

(どこで見ている!?気配はまるでしない)

獅子王刀でスタンナックルを持つネクロの左腕を切り飛ばし。そのまま浄焔で焼き尽くし再生をさせないようにする

「ちっ!? やっかいな!」

追撃に踏み出そうとした瞬間上空からビームブレードビットと

レールガンが放たれ、それを回避しているうちに福音は無数に沸いて出ているネクロを噛み砕き捕食し斬り飛ばされた左腕を再生する

(生前コンビだったか。良い連携だ)

本能で知っている戦い方だ……きつと生前はコンビかチームで行動していたのだろう……それはきつと自分達の信じる物の為に鍛え上げられた物であることは容易に想像できる。だがそれもネクロとなれば破壊と殺戮のためにだけに使われる

「時間はかけない。そして苦しみも与えない。眠れ……」

魔力を開放しインフィニティアの能力を1部開放する。背中 of 翼型のビットを覆うように魔力の光が宿る。それと同時に右目が真紅に染まる

「その魂に永久の救済があらんことを」

獅子王刀を構え向かってきた福音を胴から両断し、そのまま獅子王刀を上空目掛け投げつける

「ギアアッ!？」

高速回転しながら跳んできた獅子王刀に対応できず両断され落下していくティアーズタイプのネクロを見ながら

(この勝負長引かせる訳にはいかない)

どこから感じる殺意と憎悪に満ちた視線と絡みつくような闇の気配。両断した四肢を互いに交換して再生していくネクロを見ながら

私達を監視している何者かの気配を探し始めた……正直話目の前のネクロより、どこから見ているネクロの方が危険度が高い。そんな確信が私にはあった……

「はあッ!!」

両手の雪羅から作り出したビームクローでネクロを引き裂き、あるいは薙ぎ払う

(絶え間なく足場と間合いを変えて。常に周りを警戒)

ペガサスが教えてくれた足の間合いに変化。ISなら飛行できる

けど今の俺では空を飛べば感覚が狂う。だからPICを解除してアリーナの床に立ちネクロと戦っていた

「キイツ!!」

「余所見をするな戯け」

「あ。ああ。すまん……龍也」

俺の影から飛び出してきたネクロを龍也が刀で両断し。俺の背後に回りネクロを更に両断する

「随分見ない間に変わった足捌きを覚えてきたな？」

うつバレてる……俺が言葉に詰まっていると龍也は

「好きにすれば良い。ネクロ＝悪と言う図式が当てはまらない奴もいる……だが1人では何も出来ない。だから」

龍也が俺の肩を掴んで自信のほうに引き寄せながら前に出てネクロを両断する

「人を頼れ。時に伸ばされた手を弾け、自分で決めた道を最後まで貫く意地を持って。良いな」

諭すようにいった一夏は俺から離れながら、アリーナの出入口を見て

「人は1人では強くなれない。だから仲間がいるんだよ」

「一夏ーッ!!!」

「なんでお前はそう1人で突っ込む!!」

「やれやれ警報を聞いて走ってきて正解だったな」

言うが早く飛んでくる異形の青竜刀や紅いレーザーにレールカノンの爆風。いうまでも無く鈴・箒・ラウラだ。セシリアとシャルの姿は無いが。それでもネクロと戦っている俺を助けにきてくれた

「ふふ。人を集めるのは一種の才能だ。さてでは……講義の時間だ。一夏」

龍也は両手に獅子王刀を握り締め。俺に背を向けて

「剣を取る理由。覚悟それを知れ。今のお前ではいずれ死ぬ、何のために剣を取る？何のために闘う？それを理解しろ。そして決めろ、人知の及ばぬ敵から逃げるのか？それとも立ち向かうのか？自分で考えて自分で決めろ」

遠ざかっていく龍也と俺に近寄ってくる箒達……俺はどうしたいのか？そんなのは決まっている。

「じゃあっ!!!」

全力で自分の頬を張る。かなり痛いし思ったよりスナップが効いてて頭に響いたが考えは決まった

「い、一夏!?!どうした!?!気でも触れたか!?!」

驚いているラウラの後ろで箒と鈴はやれやれっていう感じで肩を竦めて

「気持ちには固まったの？へたれ一夏」

「考えは纏まったか？」

そう尋ねてくる箒と鈴に頷いていると

「ほう。それは良い、お前の出した答えとやら私にも聞かせてもらおうか？」

「せ、千冬姉!?!」

出張中のはずの千冬姉が教師用の打鉄を展開して俺の後ろにいた。

「ほれ、どうした?!! 試してみろ?!!」

楽しそうに笑う千冬姉に俺は

「俺はやっぱり護るために剣を振りたい。俺馬鹿で龍也から逃げた……怖かったから。だけど今なら判る。護るって事は壊すことだ、全部を護る事なんて1人じゃできない。だからこんなバカで臆病な俺だけ……力を貸して欲しい」

そうだ。俺ひとりでは何も出来はしない、だから皆の力を借りると言う

「お前が迷惑だといっても力の1つや2つ何時でも貸す」

「まあそうよねえ?!! 力は貸すけどお返しよろしく♪」

「ふふ、悪くない。私もそう思っているからな」

箒達が笑ってくれる中千冬姉は満足げに頷き。俺の頭を撫でて

「一夏。これが終わったら大事な話がある。私達の家族の事だな」

「え?!!……あ、うん。判った」

タブーだった家族の話。それはもしかすると千冬姉が俺の答えを認めてくれたってことなのかもしれない。俺はそんなことを考えな

がら雪片式型を構えたのだった……

ユウリと更識の当主は私を鹵獲しようとしているようだが。鹵獲されるつもりなんて無い。ユウリを叩きのめし、織斑一夏を殺すという目的を達するまでは何をしてでも行動を止めるつもりは無い。そんな中一夏の周りに姉さんとたくさんの人の姿が見える

(私が1人なのになぜお前ばかりが……)

協力し互いに互いの刺客をカバーしネクロを倒していく一夏。そして姉さんもそこにいる、私がないのに姉さんも一夏も笑っている、同じ歳で双子だったはず。それなのに私は闇に、一夏だけが光の中にどうして。何故？

(それはあの男がいるからだ)

(壊せ、全部殺せ)

(そして姉を手に入れろ)

(殺して、壊して、傷つけろ)

ああ……そうだ、私は全部を壊せばそれで良い。それ以上は何もいらぬ。頭に響く黒い声に頷き、どす黒い感情が私を満たしていく。もうどうでも良い闇に全てをゆだねよう……

「おおあああああッ!!!」

全身に紫電が走ったような高揚感を感じた瞬間。自然に口から雄たけびがこぼれ出た。それと同時に私は瞬時加速でユウリと更識を突破して一夏の方に向かって降下しそのままの勢いでガンブレードを振り下ろし銀髪の女のISの背部装甲を力づくで切り落としそのまま一夏の胴体にガンブレードを押し付けトリガーを引く。装填しておいた散弾銃がほぼゼロ距離で炸裂し、ISごと操縦者を傷つける。ゼロ距離からの射撃に面白いように吹っ飛ぶ一夏と蹲る銀髪の女。追撃にと2人にさらに散弾銃を放つ、少し進んで炸裂したその弾は2人をさらに吹き飛ばし完全に沈黙させる

「貴様！」

「邪魔だあー!」

手を伸ばしてくる紅いISの腕の装甲を斬り付け強引に方向性を変えて。操縦者の額に頭突きを叩き込む

「うあっ!?!」

「消えろ目障りだ!」

ガンビットを2人に押し付け、ガンブレードの炸裂弾を撃ち込みビットの残りの弾薬とエネルギーを爆発させ2人を同時に吹っ飛ばす

「このおっ」

「遅い!」

振り下ろされた異形の青竜刀をサイドステップで交わし。そのまま脚部装甲で加速した蹴りを叩き込む

「ぐうっ!あがっ!?!」「ははっ!死ねえ!!!」

頭を掴んでそのままアリーナの床に叩き付けボールのようにはじけ飛んだ女目掛けて蹴りを叩き込みボールのように蹴り飛ばす

(頭の中がすつきりしてる。今までこんな気分になったことはなかった)

何もかもどうでも良い。

姉さんに迎え入れて欲しいとか

一夏にまた妹として受け入れて欲しいとか

IS学園に来るまでは色々と迷っていた気持ちが無くなって変わりに今まで抑えてきた、憎悪や殺意が私を満たしていく……

「ははは……はははっ!!ハハハハハッ!!!」

笑いがどんどん溢れ出てくる……もう何もかもどうでも良い……

姉さんも……

一夏も……

私も……

どうなろうがどうでも良い……

マドカのこの変調はネクロが関係していた。殺したい、殺したくない、会いたい、会いたくない……

何十にも屈折した家族への歪んだ愛情。歪な精神を作り上げたマ

ド力はネクロの素体としてこれ以上なく優秀な素材だった

だからネクロはISに若干のネクロの魔力を混ぜ。アスモデウスの能力を底上げした、今のアスモデウスは、いやマド力は半分ネクロにと変わりかけていた。その事に気付いた龍也やユウリ、楯無が一夏達の方に向かおうとするが

「「「シャアアアアッ!!!」」」

「くそっ!まだ来るのか!」

「本当化け物って厄介だわ!」

「ぼやいてる暇があったら打ち落とせ!」

何対ものネクロが邪魔をしように進めない。そして辺りには龍也達が倒したネクロの瘴気が満ちていた。これなら後数分もたらず完全にネクロ化してもおかしくない、これがネクロの計画だったのだが。1つ誤算があった……

それは一夏の存在だった……

海でのヴォドオンの腐敗教義から逃れるために龍也が与えたデバイス

そしてネクロの度重なる襲撃……

そして強さを渴望する心……

傷ついた仲間……

その全ての要因がネクロの計画を狂わせる方向で進んでいた。そしてそのほんの僅かな度重なった偶然はとある必然となりつつあった

もつと力が欲しい……

襲撃者のISの銃弾が腹を貫通し鈍い痛みが走り気絶しようにも出来なかった俺はそれだけを考えていた。

もう動くことも出来ない身体が憎く思えた。箒と鈴。ラウラはネクロの危険性を知つてもなお俺を助けにきてくれたのに、俺は何も出来なかった。ただこうして自身の無力さに絶望するだけ

「くっ……マドカ……もう止めろ！」

篠ノ之やボーデヴィツヒが動かなくなったと同時に私に襲い掛かってきたマドカの攻撃は鋭く、そして重かった。緑に防御も出来ずロボロになった打鉄を見ながら私の前に立つマドカにそう叫ぶと

「ねえさん？ネエサン？姉さん？あれっ？姉さんって？誰？私は何？私は誰？あははははははッ！！判らない！ワカラナイ！わからない！！！」

仮面から覗くマドカの瞳には何の光もない。その瞳の色はネクロに似ているときえ私は思った。そしてそれと同時に思う何もかも手遅れ手になってしまったのかと、もう私と一夏とマドカが一緒にいる事はできないのか？そんなことを考えていると

「じゃあまずは一夏から！」

瞬時加速で倒れている一夏の上に移動し両手のガンブレードを振り下ろそうとするマドカ。そうはさせないと瞬時加速で回り込もうとした瞬間

ドシュツ！！

肉を裂く鈍い音がアリーナに響き渡る。それは一夏の両腕からだった。突然跳ね起きた一夏が振り下ろされたガンブレードを両手で握り締めていたのだった。

「一夏？なにやって……」……千冬か、懐かしい」……一夏？」

私を見た一夏の眩きはとても低く眩きだったまるで成人しているようなそんな声の質だった

「お前何者だ？一夏じゃない？」

マドカの声がネクロのようにダブリ何十にも聞こえる中、一夏の身体を覆っていた白式が漆黒に染まり、背中のスラスタが翼のように変化していく

「名前？くっくくくっはははははッ！！名前なんかねえよッ！！！」

ドゴンツ！！

とんでもない轟音を立てて吹き飛んでいくマドカ、一夏はそれを見ながら右手で自身の顔を押しさえ

「はっはははっ!!!は……」

狂ったように笑う一夏の顔半分を覆うように白い仮面が現れその顔を覆い隠し

「死にたくなければ、俺の前から消えうせろおお!!!」

アリーナに響き渡るような獰猛な叫びを上げて吹き飛んで行ったマドカの方に飛んで行った

(一体何が……)

一夏の目は底なしの闇そのものだった。大事な弟に一体何が起きたのかわからず、私は打鉄を展開したままその場にとへたり込んだのだった……

龍也が感じていた何者化の気配。それはアリーナの時間軸と空間軸をずらしたところに隠れ。状況を観察していて、もう観察は十分澄んだと撤退しようとしたところで、アリーナで暴れまわる一夏を見た漆黒の瞳はまるで恋人を見るかのようにとろけた色を浮かべ

「居た！気配はずっと感じていたんだ……私のイチカ……あの時の傷が教えてくれていた。お前の存在を」

肩にてを当てて狂氣的な笑みを浮かべ楽しそうに笑いながら

「予定変更だ……お前との逢瀬待ちわびたぞ……何年も何年もなああ!!!」

もう抑えきれない。何年もこの身に閉じ込めていた殺意と狂った愛はもうあのイチカを見た時点で抑えきれなくなった

まだ顔を出すなど言われていたがそんなのはどうでも良い。この世界がどうなろうと、ネクロの計画がどうなろうと知ったことじゃない……

「さあ始めようじゃないか？死愛を……ははッ！ははははっ!!!」

誰もいない場所で狂ったように笑うネクロ。いや見る者が見れば気付いただろう……髪型や憎悪や愛情の入り混じった感情のせいかな顔付きは変わっていたが……その顔は間違いなく織斑千冬と同じ顔だった……

第79話に続く

第79話

第79話

フラッシュムーブで一気に間合いを詰めながら、両手を握り締める。しっかりと感じる手ごたえに思わず笑みが浮かぶ。今までは何の感覚も無かった。だが今は違う。オレという存在を確かに認識できる。視界の隅に写っていた白いISがオレ自身を示す黒にと変わり。両手に現れた大振りなブレードを構える。しつくりと馴染む……片方はオレの剣ではないが、もう片方はオレが何年も振るった銃剣馴染まないわけがない

(今度こそ……オレは……)

視界の隅に写る箒や鈴。それに千冬姉を見る……オレが失ったはずの存在がここにいる。俺では絶対に護れない存在がいる

(今度こそオレは全てを守る!)

もうあんな出来事は2度と起こさせない。思考がクリアになっていく……しかしそれと同時に狂おしいまでの憎悪と殺意も確かにオレの中にある

(IS……だったか。あれを操縦しているのはマドカだな……ネクロの気配が少しする)

さつきは仮面のせいで誰か判らなかつたが、少し気持ちが悪く落ち着いたから判る。あれはマドカだならば、殺さず戦闘不能に追い込む

(それと……魔導師が1人。2人……4人か)

オレよりもはるかに高い魔力量が4つ。恐らくネクロを追いかけたきた魔導師だろうが……別にどうでも良い。オレは協力する気な人かないそれよりも早くマドカを戦闘不能にする。それだけを考え間合いを詰めようとさらにフラッシュムーブを使い間合いを詰める

「誰?ダレだれだれだだ!?ダレだ!?お前は!!」

不味いな。ネクロ化の兆候が見て取れる……それを見た瞬間。オレの中でかつての忌まわしい記憶がフラッシュバックする。護りたかつたはずの存在に手をかけた忌まわしき記憶

「あ。うおおおおあああああッ!!!!」

それを認識した瞬間。助けるとかどうかとかの考えは全て吹き飛び。オレはただ1つの思考に支配された

「ネクロを殺せ」

オレはもうそれだけしか考えることが出来なかった……

突然咆哮をあげた一夏君の白式・白雪がその叫びに呼応するかのよ
うに漆黒に染まり。信じられないスピードで動き出すのを見て

「ユウリ。貴方何かした!」

「馬鹿なことを言うな。あんなのが出来ると思えるか?」

形状変化にISカラーの変更。そして異常なほどのスピードUP
……ありえないけど……

「サードシフト?」

ありえないが3回目の形態変化なのではと言う考えが浮かんだ瞬
間

「おおおおッ!!!!」

両腕を突き出し咆哮をあげるとISの装甲が展開しそこから砲門
が姿を見せる

(あれなんかやばく……つてえ!?うそおっ!?)

装甲が展開したことで現れた砲門にエネルギーが集まっていくの
が見える

「ちっ!ユウリ!楯無!箒とラウラを連れてこっちに来い!ISじゃ
防げない!それは魔力弾だ!!」

自身も鈴ちゃんを牽引しながら叫ぶ龍也さん。魔力弾ってどうい
うことなのか訳が判らないけど、無差別攻撃に巻き込まれる前に

「ユウリ。ラウラちゃんよろしく!私は箒ちゃんを連れて行くわ」
「了解した」

距離的には同じくらいだけどユウリが箒ちゃんを牽引するのは正
直見たくないのでそう言う。ユウリが怪訝そうな顔をするかなって
思ったんだけど

「行くぞ。ラウラ」

「すまん……P I Cが不調なんだ」

全然気にした素振りを見せず牽引するユウリ。私だけがなんか深く考えただけ？若干複雑な感情を抱きながら箒ちゃんのI Sをつかんで引つ張っていると

「なんか……その」

「良い。言わないで」

「はい……」

箒ちゃんが何を言おうとしているのか判るのでそれを手で制し。

龍也さんの後ろに回ると同時に

「消えうせろおおおッ!!!」

咆哮と共にビームの嵐が無差別に放たれる。

「グギイイイツ!!!」

「ギシャアアアアッ!!!」

その大半はネクロに向かって放たれていたが数があまりに多い、龍也さんはその全てを見据え

「写・熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）ッ!!!」

前も見ただけの光り輝く花卉のような盾。あの時は7枚出していたけど今回は3枚だけだ

「大丈夫なのか!?!」

「心配ない。アイアスは投擲武器には無敵だ。それにあの程度の魔力弾。なのは達と比べればただの子供だましだ」

その言葉に嘘偽りは無い様で雨のように降り注いでくる弾雨は盾に弾かれ消えていく。全ての弾雨が消えると同時に花卉の盾は空中に溶ける様に消えていく。あれだけの強度と面積があったのに一瞬で消えるその盾を見て、本当に魔法と言うのはすごいと感心してしまう

「龍也。一夏はどうしたんだ？まさか……」

不安の色を顔に浮かべ、言葉に詰まりながら龍也さんに声を掛けるラウラちゃんに龍也さんは

「違う。ネクロ化ではない。何が原因でああなっているかは判らんが

な」

黒い白式で襲撃者を滅多打ちにしているのを呆然と見ていた織斑先生が

「ツ！八神！早く一夏を止めてくれ！あのISの操縦者は「知ってる。織斑マドカだろ？お前たちの妹の」

その言葉にはつとまった織斑先生に箒ちゃんが詰め寄りながら「い、妹!?そんな話聞いてない!~!~!~!どういことなのですか!?!」

幼馴染であるはずの自分が知らない一夏の訓の家族の事で動じているようで、織斑先生が説明しようとする前に

「幼馴染に深刻な家族の話をするわけ無いでしょ、落ち着きなよ。箒」
鈴ちゃんが以上に冷めた表情でそう告げる。激昂型に見えるが鈴ちゃんはその実冷静で戦局を見ている感がある、こんなくだららない

とことで時間を潰すのは得策ではないと判断したようだ

「あとで説明してくれればいいわ。それよりもISが暴走してるみたいだし、早く止めないと一夏が妹を殺しちゃうわよ。ラウラAICで止めれる?」

私やユウリ、そして龍也さんを無視して話を進めていく鈴ちゃん。もしかすると本当に鈴ちゃんは指揮官とまでは言わないけどFAに向いているのかもしれない

「そうだな。ISならAICで……「ユウリ手伝え!」「言われなくても!」

マドカという少女から奪い取ったガンブレードをこちらに向け乱射してくる

「もう!なんでなのよ!」

思わずそんなことを叫びながらガンランスで放たれた銃弾を迎撃する。

ガガガキンツ!!!!

火花を散らし明後日の方向に飛び去っていく銃弾をみて龍也さんが

「なんにせよ。ネクロも私達も敵と認識しているようだし、とりあえず……鎮圧(死刑)する」

あれ？おかしいな鎮圧の裏に別の言葉が聞こえた気がする。それに難か達也さんの顔が黒い気がする

「あ。あの？龍也さん？一夏をどうするの？」

冷や汗を流しながら鈴ちゃんが尋ねると龍也さんは

「とりあえず叩きのめす。それにあのままほっておくと不味い」

龍也さんはそう言うのと鋭い眼光で一夏君を見つめながら

「とりあえず管制室に行け。巻き込まない自信が無い。どうも……手加減とかを考える相手じゃないようだ」

龍也さんの視線の先では多角連続瞬時加速を使い、完璧ともいえるヒット&アウェイを繰り返している一夏君の姿があった……

(あんなのモンドグロツソでも見ないわよ)

瞬時加速中に方向転換は操縦者に莫大な負担をかける。だから出来るわけがないのに……

「八神。一夏とマドカを頼めるか？」

「任せておけ。それと大分頭が柔らかくなったな？過去への旅はいかがだったかね？」

「大事なものを思い出せたただけ言っておこう」

そう笑う織斑先生の表情は柔らかく一瞬別人かと思うほどだった

「話は終わりだ。こっちにも銃弾やビームが飛んでき始めている。早く管制室へ行くぞ」

ユウリがアリーナの出口を見ながら言う。さっきまでのネクロとの戦いとさっきの弾幕の雨。それにマドカとか言う少女の猛攻撃で私達のISのSEはかなりやばいところまで削られている。ここから始まるであろう魔導師の戦いを考えれば安全なところに非難するのが正しい選択だ

「た、龍也さん！一夏は一夏はどうなるんですか!？」

不安そうな箒ちゃんの頭を軽く撫でた龍也さんにはつと笑い「心配するな。あの馬鹿は少しだけ自分を見失ってるだけだ。心配しなくていい、直ぐにいつもの一夏に戻してやるよ」

見ていて安心できる笑みを浮かべた龍也さんはこっちに飛んできた銃弾と魔力弾を弾き飛ばしながら

「だから大船に乗ったつもりで待っている。あの馬鹿を叩き伏せて、妹やらもちゃんと連れて帰る」

そう言うのと龍也さんは全身に蒼い光りを纏って宙へと舞い上がった……

「行くぞ。このままここには八神の邪魔になる」

ISを解除して通路を走っていく織斑先生の後について私達も管制室のほうへと走り出した

一体何が起きているんだ？私の右目は一夏を覆うもう1つの魂とでも言うのかその存在を確かに確認していた

「零落絶衝ッ!!!」

両手のブレードから飛び出した黒い三日月状の零落白夜を見て

(間違いない魔力……どうなっているんだ)

一夏に魔導師適性は無かった。それは間違いないはずなのに何故？

「うおおあああああッ!!!」

「ちっ！完全に暴走しているか！」

エリスの暴走のときとは違う。あれは内部からの暴走だ、ISが原因ではないというのは判るが、何が原因なのかが判らない

「これは少しばかり不味いな」

魔力と零落白夜の特徴を併せ持ったこの飛ぶ一撃。これが不味い……プロテクションも引き裂いてくるので思うように前に進めない。

「おうあああああッ!!!」

「ぐっがあああ?」

全身の装甲から魔力弾を放ちながらマドカの頭を掴んでアリーナの壁に叩き付け。そのまま引きずるように加速していく

「ぐうっ！あぐ……あああああッ!!!」

ネクロ化仕掛けていることもあり。僅かながら回復しながら一夏に手を伸ばそうとしているマドカだがそうはさせないと。さらにスピードを上げようとしている一夏を見て

「ちい！考えている時間はないか！」

アリーナには認識阻害の結果を張っている。もうISで戦うとか言っている場合ではない、擬似ISを解除し即座に騎士甲冑を展開と同時に投影を行い

「行けッ!!!」

両手に黒鍵を投影しそのまま一夏に投げつける。投擲した10本のうち6本は迎撃されたが

「がつぐうつ!? 貴様も敵かああ!!!」

両肩に突き刺さった黒鍵に注意を引かれさつきまで執拗に攻撃を繰り返していたマドカを無視して突っ込んでくる一夏を見て

(これは瞬時加速じゃない。これはフラッシュムーブだ)

近くで見ると良く判る。ISの装甲のブースターも使われ、瞬時加速のように見えるが……あれは間違いない。フラッシュムーブだ、だけどあれだけモーションが見えているのなら心配ない。

(魔力ダメージでノックアウトする)

魔力を使っている以上魔力ダメージを与えれば気絶する。そう判断し黒鍵を投擲し

「火葬聖典ッ!!」

青い魔力の炎を刀身に発生させる。これなら魔力に大ダメージを与えられる、追撃に魔力刃を放つ準備をしていると

(なにっ!?)

一夏の身体が魔力の粒子となり消えたと思った瞬間。背後に気配を振り返ると

「よおっ。何者かは知らないが……目障りだ！消えろッ！零落絶衝ッ!!!」

振り切ると同時に飛び出した黒い刃を見て直感で理解する。

(あれは防ごうと思ったら駄目だ。近くで見ると良く判る)

刀身から飛び出した刃は螺旋回転する魔力と零落白夜で構築されている。防ごうとすれば螺旋回転している魔力に引き裂かれ、そして絶対防御を強制的に発動させる零落白夜でSEを削り取られる。しかも連射が可能とくれば

「舐めないで貰おうかッ!!」

単一技能の複製で手にした木花咲耶を発動させ同じように参式斬艦刀を振るい魔力刃を飛ばす

「やはり貴様も魔導師か!」

そう言うと同時にまたさつきと同じように気配が消える。完全な気配の遮断と……いやそれだけじゃないな……

(撒き散らした魔力の粒子で自身の気配を完全に隠蔽。そしてフラッシュムーブノ連続使用で多角機動)

一撃離脱に特化した戦闘スタイル。だがそれでも動きを見る以上(戦闘スタイルは私と同じと見ていいだろう)

高速で移動しながら私の隙を窺っている感じがする。とはいえ魔力の気配も気配も何一つ感じないので視線としか感じれないが

私の様子を窺っているのは判る。しかしこのまま見ているだけと言うわけにも行かない。ここは業と隙を出して……

「投影開始」

当たらないと判っているが両手に再び黒鍵を投影し真上に放り投げる。それと同時に私の背後に魔力が集まり一夏の気配が現れる

「貰った!」

鋭い突きを紙一重で交わし、伸ばされた剣の柄を掴み

「少々甘いんじゃないかね?」

上空に放り投げた黒鍵が回転しながら降下して来る。落ちてくる場所は一夏の両肩と太ももだ。魔力でコーティングしてあるからSは楽に貫ける。手足にダメージは行くがそこは我慢してもらおうと思つた瞬間

「甘いのは貴様だ」

「なんだと!」

黒鍵が刺さろうとした瞬間。一夏の手足が粒子となり消える……ここで私は1つのミスをした、一夏の移動を高速移動だと思つたことが全ての間違いだった

(くっ!計算が間違っていたか!?)

一夏は高速移動していたのではない。自身を魔力の粒子とし移動

していたのだ、それは間違いなく

(レアスキルか!?)

しかもかなり高位レベルのレアスキルに違いない。一瞬呆けたが拳を握り締め再度放たれた突きを裏拳で弾き、総べるように間合いに滑り込み

「羅刹剛手甲!!!」

インパクトの瞬間に魔力を開放し威力を爆発的に跳ね上げる。得意な連続攻撃を繰り返すが

「オレに攻撃は当たらない」

「くっ、馬鹿なっ!」

私の裏拳が当たった場所のみ粒子化し攻撃を回避し、その場で半回転し勢いをつけた踵落としを叩き込んでくる一夏。とつさにガードしたが地面に向かって蹴り飛ばされる、頭から落下する前に反転し着地し即座にバックステップする

「ちっ!交わしたか!」

砲撃がアリーナの床に炸裂する。なのは達と比べると威力は低いがそれでもネクロ相手と考えると十分すぎる威力だ

(身体を魔力の粒子と変えて攻撃回避……これは少しばかり骨が折れるな)

追撃に放たれた無数の黒い刃を回避しながら両手を握り締め、再び一夏の方へと向かって行った

黒と金の閃光がアリーナの中の縦横無尽に走り続ける。時折八神と一夏の姿が見えるが直ぐに消える。

(一夏。お前は どうして しまったんだ?)

あの剣筋も足裁きも一夏のものなのに、仮面に隠された目からは狂気の色しか映ってない。どうして一夏があんなことになってしまったのか、それがどうしても判らない

(私は一夏のことを知っているつもりだったのに、何も判らない)

今まで自分がいかに家族を理解しているつもりだったのかを思い

知らされるような気がして胸が痛む

「状況はどんな感じや!？」

私が自分の行いを後悔しているとはやてが両肩にルウとファウス
トを担いで管制室に駆け込んできた。まさかあっちもネクロの攻撃
が……

「り、鈴……私は止めた。止めたんだよ……でもはやてさんが……は
やてさんが……」

「ちよ!?! シェン!?! どうしたの大丈夫!?!」

「ラウラ……私は無力だったんだ。暴君を止める事ができなかった」
「クリース!?! どうした!?! 一体何があった!?!」

放心状態のシェンとクリスに駆け寄る凰とボーデヴィツヒに2人
はそう言う私を見て

「ははやてさんが。IS学園のサブアリーナとその周囲を完全に更地
にしました」

「てへっ♪ちよっ♪と張り切りすぎてもうた♪」

……はっ? 更地って……何をしたんだ

「ちよい張り切りすぎて重力魔法でぺっちゃんこにしてまった♪」

「可愛く言えば許されると思うなアアアアアッ!!!」

魔法使いとかどうとかを忘れて本気ではやてのほっぺたを掴み
引っ張る

「いひゃい! ひゅみません! ぎゃいじょうぶ! ひゃいじょうぶにやん
ですううう!」

涙目のはやての頬から手を離していると

「こっちのネクロは大丈夫!?!」

「急いできたよ」

さっきのはやて達同様肩に放心状態の更識とアマノミヤ、そしてス
ミスと薄野を抱えた高町とハラオウンが管制室に飛び込んでくる

「お前らは何をやってくれたんだ!!」

魔法使いが何をやったのか? そして放心状態の更識達を見て思わ
ず切れた私は、今まで最高と思える速度で出席簿を振り下ろした。そ
のあと正座させ説明を聞くと

「結界とやらで大丈夫なんだな？」

「はい。だから核兵器は駄目ですけど……魔法攻撃くらいなら結界内で処理できるので大丈夫です」

正座している高町の説明に「安心していると

「避けるというのなら避けられない様にしてやろう」

八神のドスの利いたとも言える声に振り返ると凰とボーデヴィツヒが呆然としながら

「あれ。やばくない？……アリーナ消し飛ぶんじゃ？」

「うむ……私もそう思う」

「……龍也は怒らせてはいけないな。絶対に」

冷や汗を流しているボーデヴィツヒを横にどけてアリーナの中を見る

「遠き地にて闇に沈め！ディアボリック・エミッションツ!!!」

黒い球体が雨霰のように降り注ぎアリーナを容赦なく穴だらけにしていく。しかも当たったところはひしやげて消滅している

「あちゃー重力魔法や……超本気やね。あれ……」

「龍也さんのあれって街の1つくらい簡単に消滅させるんだよね……大丈夫かな、結界」

炸裂していく魔法を見て、はやて達があちゃーって感じで眩くなかアリーナでは

「くっ!?化け物が!」

光が集まり一夏が姿を見せた瞬間。八神がにやりと笑ったのが遠く離れたここでも見えた

「聞き分けの無い子供は……1度叩き伏せるに限る!!!」

突き出した両手から散弾銃のような蒼い光りが一夏に殺到する
「舐めるなあッ!!!」

両手のブレードから黒い斬撃を飛ばして迎撃していく一夏だが
「はああああッ!!!」

蒼い光としか見えないスピードで突っ込んだ八神が両手を組み合わせて一夏の頭に振り下ろす

「あぐっ!?!」

アリーナの床に向かって叩き付けられた一夏のほうに回りこみ

「でやああああッ!!!」

「ぐほっ!!!」

落ちて来た一夏の腹にアツパーを叩き込み再び上空に殴り飛ばす。それを見た楯無とユウリがぼそりと

「あれ殺す気じゃない?いま普通に装甲をぶち砕いてたけど」

どうやら私の見間違いではなかったようだ。龍也の拳が命中した瞬間白式の装甲がひしゃげて砕け散ったのは間違いないようだ

「……大丈夫だと思うぞ。龍也は死者蘇生できるらしいからな」

「それ殺すってことじゃないの!?!」

なんかかなり聞き捨てならない情報をユウリがつぶやいた気がするが。今はもうフルボッコの上にフルボッコされている一夏の方が心配だ

「物事はスマートにな」

そう呟くと一瞬で一夏に追いつき握り締めた拳に蒼い魔力を纏わせ

「白虎咬ッ!!!」

両腕での連続正拳突き。双撞掌底で白式の装甲を容赦なく陥没させていく

「あぐうーこの馬鹿力がッ!!!」

黒い刃を纏わせた一撃で反撃に出る一夏だが、その動きは先ほどと比べると数段鈍い。八神はそれを軽々回避し、その勢いを利用した、まるで前回りのように回転しながら踵落としをがら空きの一夏の腹に叩き込む

「がはっ!!!」

白式の全身に輝の入った一夏が降下するのを見て思わず息を呑む。ボーデヴィッツヒ達に居たつては小さく悲鳴を上げている

「くっ!このままやられて堪るか!」

咄嗟に身体を反転させ再び粒子に変えようとする一夏に

「この切っ先から逃げれると思うな!舞朱雀ッ!!!」

八神の身体がぶれたと思った瞬間。八神が7人に分身し上下左右

から肘から現れた刃で一夏を追いかける

「ぐっ！何故オレの邪魔をする!!!オレは！オレはああ!？」

上下左右から切り裂かれ姿を見せた一夏は顔を覆っている仮面は半分が砕け、白式も僅かな装甲を残しているだけだった

「貴様の目的など知らん。だが……塵は塵に灰は灰に変えるが定め。そして亡者は地の底へと還れッ!!」

両肘から放電を繰り返す蒼い刃を作り出した八神はアリーナの床に着地すると力強く地面を蹴り。一夏のほうに向かつていく

「はやて……大丈夫なの？あれで一夏は死んだりしない？」

不安そうな風の頭を撫でながらはやてが

「大丈夫や。どうも今の一夏には変な魔力が纏わりついとる、それを剥ぎ取るには1度完全に気絶させなあかん。中途半端に気絶させて。あの一夏になってまったら嫌やろ？」

こくんと頷く風の頭を再度撫でながら真剣な顔をしているはやてに

「変な魔力とは？」

クリスのその問い掛けにはやては首を傾げながら。推測やけどと前置きしてから

「うーん、ここからやとよう判らんけど……怨念とか憎悪とか……そんな感じの魔力の塊やな。なんでそんなのが一夏に取り憑いてるか判らんけど……そのままにしておくのは余りに危険や」

「ネクロ化しやすい状態になる可能性が高いもんね」

専門家らしい話を始めるのはとはやて。一夏のネクロ化なんて冗談じゃない。ここは専門家に任せて私達は一夏が元に戻ることを祈るしかなかった

「コード麒麟ッ！この一撃で冥府にもどれッ!!!」

光り輝く蒼い刃が一夏に振り下ろされる。それは一夏と白式を覆っていた黒い障壁を切り裂き白式の装甲を真一文字に引き裂いた

「あがつぐううう……」

黒い装甲が徐々に白い装甲に色を変えていき、仮面が輝が入っていく

「これでトドメだッ!!」

その場で半回転し八神が横薙ぎを放とうとした瞬間
「ッ!!」

紅い輝きを放つ刀が投げ入れられ八神が気絶した一夏を掴んで後ろに跳ぶと同時に、空間が割けそこからローブを身に纏った何者かが姿を見せた。その新たな襲撃者の手の中に戻った剣を見て思わず私は

「馬鹿な……雪片だと……」

色こそ違えどそれは雪片そのものだった。そしてローブから出ているISの装甲も暮桜と全く同じ形状をしていた……

「ちっ。仕留め損ねたか」

舌打ちする声は女の声だった。左手で掴み寄せた一夏を見て舌打ちする

(しくじった)

一夏を覆っていた黒い魔力は完全に消し去ることが出来ず。また一夏の中に戻ってしまった。あの一打が打ち込めていれば……

「まあ良い。今はまだ動くなど念を押されている。奪える物なら奪う予定だったが。致し方ない」

くっくっくと笑う声。そしてさっきの暮桜……それにこの口調「貴様。亡国企業を潰したネクロだな」

スコールに見せられた画像のネクロだ。出来る事なら千冬や箒の居ないうちに倒しておきたかったが……私の予想通りならこのネクロは間違いなく……

「ほう……良く知っているな。八神龍也、ラクシユミやヴオドオンに聞いたとおりにかなりの情報網を持っているようだな」

楽しそうに笑うネクロはローブの中から手を一夏の方へ差し伸べて

「ふふふふーあははっ!!その一夏は私の良く知る一夏のような……いずれ貰い受ける。一夏は私だけのものだ」

狂ったように笑い出すネクロ……その笑いが段々大きくなり被っていたフードが外れる。そこには私の予想通りの顔があった

「やはり……平行世界の……」

「ふふん、その通りとだけ言っておこうか」

短く切り揃えられた黒髪と鷹のような目付き。そして瞳孔が縦に割れ白目と黒目が反転したオリムラチフユの姿だった

「別に戦っていないんだ。顔くらい見られても何の問題も無いから……」

くつくと笑ったオリムラチフユは気絶している一夏をもう1度見て、狂気と愛情の入り混じった光りをその目に宿し

「ふふふ……いずれまた会おう」

空間を引き裂きその中に飛び込み消えていく。追いかける……考えるまでも無く愚策だな……消耗した状態で敵の本陣で単独で乗り込む。どう考えても死に行く様な物だ……そんなことを考えているうちに開かれていた空間が閉じる

「はー……また問題ごとが増えたか」

管制室から感じるあわただしい気配。恐らく自分を見た千冬が動揺しているところか……説明しないと不味いな。そんなことを考えながらアリーナの片隅で気絶しているマドカを方に行き。近くに一夏を寝かせる

(2人とも相当やられてるな)

マドカはISに寄生していたネクロの魔力とそしてさっきの一夏の黒い零落白夜によって酷い魔力ダメージの後が全身に見て取れる

一夏はあの謎の魔力そして乱用していた。身体を粒子に変えるレアスキルのせいであちこちの腱が傷ついているのが判る。2人の周囲に剣を突き立て、浄焰を固形化しその剣の柄の上に乗せて体内に残っているネクロの魔力を完全に浄化する

「これで取りあえずは良いか」

マドカと一夏を肩に担ぎ、管制室に戻りながら。どうやって説明するかを考えるのだった……

第80話に続く

第80話

第80話

管制室に戻ると案の定。千冬がはやてに詰め寄り

「はやて！あれは……あのネクロは何だ!?何故私と同じ顔をしていた!?」

「ちよつ。まちい！落ち着きいッ!!」

詰め寄られて慌てているはやて。それに管制室に批難していた箒達の顔色も良くないか……

「落ち着け。千冬」

「八神！さっきのは……」落ち着けと言っている。それよりも今のお前には何よりも優先すべきことがあるんじゃないのか?」

気絶している一夏とマドカを管制室の椅子に座らせると、千冬ははつとした表情になり

「2人は……?」

「問題ない。ダメージのほうは全て回復させた。浄化のほうも完了済みだ、目覚めるまでネクロの話は無しだ。良いな」

千冬は一夏とマドカを心配そうに見ている。2人が目覚めるまでは恐らく気になってはいても尋ねてはこないだろう

「しかし、龍也は私達には説明してもらおう」「二度は言わない、良いな」……判った」

もう何がなんだか判らないという表情の箒に強い口調で言って管制室のPCの前に座り

「ユウリ。少し手伝ってくれ……もしかすると最悪の展開になっている可能性がある」

あのタイミングで出てきたネクロの千冬。そして明らかに足止め目的だと思われる3体のネクロの反応……そしてスコールからの情報で貰った情報戦に特化したネクロ……全てが悪い方向に動いているような気がする

「判った。何を調べれば良い?」

ISを解除しPCの前に座って尋ねてくるユウリ。気絶している一夏とマド力を見て困惑してる鈴達を見て一瞬考えるが時間が無い
「全ISの改修案の図面と強化用独立稼働のパッケージの設計図だ」
箒達が襲われることを考えて対ネクロ用に改修する予定だった。その図面とそのIS専用の強化パッケージの設計図。狙うとしたらそこらへんのはずだ

「え？強化独立稼働のパッケージ？……あたし達よの？」

「そうだ、最悪の可能性を想定して設計しておいたものだ。いずれは組み上げて装着させる予定だったが……」

話しかけてくる鈴に返事を返しながら、なのは達に

「千冬を手伝って一夏とマド力を休めれる場所に連れて行ってやってくれ、楯無とはやてはこつちの手伝い。弥生達は部屋で休むといい。あとでまたネクロの事ではなしをするからな。それまでは休んでおけ。今回も長い話になるぞ、それと楯無たちはEの77番からDの128番までの確認を頼む」

全員分のISのデータは奪われないにしろ。なんらかしらの目的があつたと見て間違いない、とにかく片っ端から確認しない事には何も始まらない

「ほら。龍也さんの邪魔になるから行くよ」

「そういうこと、こういう時のメカニックとかは気難しいから行くよ」
色々聞きたいことがあるって表情をしている箒達にそう声を掛けて出て行くなのは達を見ながら。データを全て確認する……

～1時間後～

「どうだった？私の方は特に調べられた形跡が無いが」

私が見たのは簪やエリス用のパッケージだったが、一度は開かれたようだがなにも触られてないようだ。他のはどうだったと尋ねると
「改造案とパッケージの方は手付かずだったが……こつちはブルー・ティアーズと甲龍の情報だけコピーされていた形跡がある」

「私のほうはパッケージデータの武装の1部とラファール・リバイブの情報」

「私の方はレーゲンと紅椿のデータがごっそり持っていかれてるで兄

ちゃん」

改修案とパッケージには殆ど触った形跡が無く。鈴達だけのISの情報だけが持ち去られた……考えれる事態は1つだけ

(予想とは違っていたが、最悪の展開だな)

チフユが纏っていた暮桜の事を考えると考えられるのは1つだけだ。ユウリも私と同じ事を考えたのか思案顔をしている

「もしかして……」龍也さん！早く寮に来て！マドカが暴れてるのー！
駆け込んできたなのは言葉に楯無が言いかけた言葉は掻き消された……だけどこの場にいた全員には最悪とも言える予想が頭の中に浮かんでいた。それは千冬同様ネクロ化した箒達がネクロ達の陣営に居るかもしれないという可能性だった……

時間は少し遡る

「う……あ？……は……」

ゆつくりと身体を起こすと同時に

「一夏ーッ！心配したんだからね！」

「ぐぶうっ!!」

鈴の声を確認したと同時に腹部走る激痛。どうも頭から突っ込まれたらしい

「り、鈴？……あいだだだッ!!なんだこれ!?全身が痛い!!!」

「鈴!?何をしてるんだ!?!」

俺の悲鳴に気付いた箒がカーテンの間から顔を出す。心配して近くに居てくれたのかもしれない

「違うー!あたしはなにもしてない!」

何もしてないって事は無いだろ?って心の中で突っ込む。口にして言いたいのが痛みのせいで声が出ない。この騒ぎに気付いたのかカーテンが開かれる。カーテンと言うことは保健室だろうか?そんなことを考えていると

「はい。これ身体の上に乗せて」

ぽいっと投げ渡された蒼く輝く水晶。投げ渡してくれたのはここ

数日顔を見合わせてなかったのはさんだ

「まあ色々言いたいし。骨の1本2本はへし折って……イヤむしろ踏み碎いてやりたいと思っっているけど」

やばい。目がマジだ……改めて魔王の恐怖を感じていると

「まあここは本気ビンタ一発で許すって言うのが私達の出した結論だから元気になったら……覚悟しておいてね?」

「……はい」

全身に走る激痛を感じながら頷く。なのはさんは

「それ暫く持つてれば傷の回復が始まるから、ほら鈴、箒行くよ」

猫のように2人の襟首を掴んで歩いていくなのはさんを見ながら言われたとおり蒼い水晶を握り締めしていると

(あーなんか暖かい)

身体の芯から温まるというのか、何と言うのか判らないがとても暖かい……しかしそれより気になるのは

(記憶が無いってことなんだよな……)

覚えているのはアリーナで襲撃者の駆るISで俺も箒も戦闘不能寸前に追い込まれたところまで……

(龍也に助けてもらったのか? いや……それにしては)

箒と鈴の顔に微妙な怯えの色があったのが気になる……

「ん?」

そんなことを考えていると水晶は音を立てて俺の手の中で砕け散る

「おお!? えええ!? 大丈夫なのかこれ!」

思わず狼狽して身体を起こすとさつきまで身体に走っていた痛みが無い。普通に手も肩も動く、砕けてしまった水晶を手にもベッドから出てカーテンを開ける

(保健室じゃない。ここは誰かの部屋?)

どうも移動式のカーテンで俺が寝ていたベッドだけを覆っていたようだ、その隣には同じようにカーテンで覆われたベッドが見える。俺の他にも誰か倒れたんだろうかと思っっていると

「一夏起きたか。ここに来い」

千冬姉の呼ぶ声がしてその部屋の扉を開ける。俺達の寮の部屋より一回り大きい間取り……どうもここは千冬姉の部屋だったようだ

「一夏。起きたか？気分はどうだ？」

「大丈夫だよ。千冬姉……それとなのはさん」

なのはさんのほうを向いた瞬間。全力で振りかぶっているのはさんと目が合う

「はっ？、いつでええええええッ!!!」

バチーンッ!!!

全力フルスイングのビンタ。元気になったら覚悟しろって言うだけどいきなりですか?!そして右手で頬を抑え顔を上げると

(次弾装填済みですか)

フルスイングに加え軽くジャンプして勢いを倍以上に増加させているフェイトさんと目があつた瞬間

バチーンッ!!!

「いつでええええええッ!!!」

無事だつた左頬に全力フルスイングのビンタが叩き込まれ。しかもジャンプしていた分威力が増していて、俺は千冬姉の部屋のソファーに顔面から突つ込む羽目になったのだつた……

「ほれ。一夏氷嚢だ」

「ありがと。千冬姉」

千冬姉に手渡された氷嚢で頬を押さえながらソファーに座る

(シャルとセシリアは居ないか……)

やっぱりと思う自分が居る。ネクロが怖いといって隠れることを選んだセシリアと自分が何をしたいか考えるといつていたシャル。

まだ答えを出すには早いということだろう

「まずなんだが一夏。私と一夏の下には一人妹が居る。お前とは双子になる」

……はい？ちよつとまってください。千冬姉、それは結構重大な話なのではないですか？

「そしてあのISの操縦者がお前の妹のマドカだ」

「ちよつ?!ええええええッ?!俺思いつきり殺されかけたんだけど!」

いきなりすぎる。妹が居るってことだけでも驚きなのに、ついさつき俺を殺そうとしていたあのISの操縦者が妹とかって

「つていうか!? 落ち着きすぎだろ!?」

普通に紅茶を飲んでいる筈達にそう言うのと

「いや。私はさつき聞いたし」

「うん。あたしも」

「なんで弟の俺より先に聞いてるの!? おかしくない!?」

俺のキャラじゃないのに突っ込みを繰り返していることに驚きながらそう叫ぶ

「仕方ないだろう。お前が全然起きないんだ……それに色々と話さないといけないこともあったしな。一夏、お前はアリーナで何をしたか覚えているか?」

その言い方だと俺が何かしたみたい……ここで気づいた。簪さんやエリスさん達が俺から若干距離を取っていることに

「千冬姉。俺は何かしたのか?」

「その様子だと覚えてないようだな」

ふーと溜息を吐いた千冬姉は机の上のディスプレイを電源を入れた。そこに映し出されたのは

「俺!?!」

黒い白式を身に纏い。悪魔のような印象を受ける装甲をした俺がマドカの駆るISを殴り蹴り雪片で徹底的に打ちのめしていく

途中で龍也が乱入して俺を気絶させてくれたようだが。そうでなければ俺は人を殺めていたかもしれない状況だった、こんなのを見れば簪さん達が俺から距離を取るのには判る……

「なのはさん……俺は知らないうちにネクロ化したのか?」

考えられるのはそれしかない。俺がそう尋ねるとなのはさんは首を振り

「ううん。ネクロ化じゃないよ、良く判らないけど魔力に操られていたって感じかな?」

操られていた……俺には1つ心当たりがあった

(あのオレだ……)

牢獄に閉じ込められたもう1人の俺。狂気をその身に宿したオレだ……だがそれだけで終わりではなかった

「千冬姉!？」

「そのようだ……高町が言うには平行世界の私らしいな」

ペガサスのように瞳孔が縦に割れた千冬姉が高笑いしながら消えていくところで画像は途絶えていた

「ネクロの常套手段だよ。動揺させれば隙が出来るからね……とは言え。こういうケースはかなり稀だけどね」

言葉の無い俺たちにそう告げるのはさん。とは言えこの画像はかなり衝撃的だった……。もしかすると平行世界の自分と戦うことになるかもしれない……。それはそう簡単に受け入れることが出来ない問題だ。そんなことを考え全員が沈黙していると

「ふうふうふうっ!!!」

猫のような唸り声が聞こえたと思った瞬間。寝室のほうから少女が飛び出してきて俺と千冬姉に向けてナイフを振るってくる。その顔つきは俺には似てないが、千冬姉にそっくりだった

「うおっ!？」

「マドカ!止めろッ!」

千冬姉がそう叫ぶとマドカは肩で息をしながら

「うるさいうるさいうるさい!!!私には姉さんも一夏も嫌いだッ!!!死ねッ!!!私の前から消えろッ!!!」

涙をその目に浮かべてナイフを振るってくるマドカ。激昂しているせいか攻撃は単調で避けられない事はないが。この狭い部屋と言う条件と涙を浮かべているマドカを見るとどうしても動きが鈍る

「どうして!私だけ1人にした!!!姉さん!一夏!私が今までどんな気持ちで生きてきたか判るか!!!」

箒やなのはさん達は一切見ず俺と千冬姉に憎悪の視線を向けてくるマドカ

「私はあの時1人で川に落ちた!だけど姉さんが助けしてくれるって思ってたのに……姉さんは私を捨てたんだろう!？」

川に落ちた!?!じゃあ俺がマドカのことを覚えてないのはその時の

せいなのか!?

「違うんだマドカ。あの時私も一夏も川に落ちて「うるさいうるさいうるさいッ!!!」姉さんの話なんか信じられるか!!!私はずっと1人だった!ずっと寂しかった!!!」

半狂乱でナイフを振るうマドカ。何とかそれをいなしてる千冬姉と俺だが、家具のせいで思うように動けない

「楯無。エリス!危ないから部屋から出ろ!巻き込まれるぞ!」

慌てて部屋を出て行く簪さんとエリスさん。箒と鈴、それにラウラは何かマドカを取り抑えようとしているが、あそこまでナイフを振るわれていると近づくことすら難しい。ISがないのが救いだが、あの両手のサバイバルナイフは不味い……どうやって取り抑えるかを考えていると

「やれやれ……いきなりコレか?愁嘆場かね?」

「ぐっ放せッ!!!」

「放せといって放す馬鹿が居ると思うかね?」

龍也がマドカの両手を掴んで吊り上げている。マドカはじたばた暴れているが龍也はびくともしない所か笑いながら

「うん。昔保護したワーウルフの子供を思い出すな。いや、ハルピュイアの子供だったかな?最初は全然懐いてくれなくて大変だったなあ……」

龍也がとんでもない事を言った気がするがとりあえずスルーする。俺はその場にへたり込みながら

「は……助かった」

起きてすぐ向けられたまじりつけなしの殺気と刃物は怖すぎる

……

私がマドカの両手を掴んで吊り上げていると千冬が

「マドカ話を聞いてくれないか?」

「放せ放せ放せッ!!!ふーっ!ふーっ!!!」

千冬の話の話を聞く素振りすら見せない、どうもネクロによって憎悪と

かが強化されてるようだな……

「そのままやと話し合える状況や無いな」

「そうだな……ふむ」

このまま捕まえて置いてもいいが、放した瞬間一夏達に襲いかけられても、目的達成で自殺されても困る

「千冬。少々手荒な手段になるが、大人しくさせる方法があるがどうだろうか?」

「何する気だ?」

「その視線。流石に傷つくよ……なにただ少しはやてと2人きりにさせて話をさせるだけだ。はやてはこういう子供を大人しくさせるのが得意なんだ」

何回もやっているから実績はあるんだぞ?と言いながら言うて付いて来ていたユウリが

「このままでは罫が明かない。頼んでみたらどうだ」

「お前も!私を裏切った!殺してやる!殺してやるぞユウリツ!!!」

ああ。ワーウルフの子供のほうに似ているな、この感じ……

「そうだな……少し落ち着かせるだけでいいからな?」

「OK。お任せ!はーい「ふーっ!!!」良いこやから落ちつかか?」「はぐっ!?!」

はやてがにつこりと笑ったまま地獄突きを放ちマド力を昏倒させる

「ちよっ!?!俺の妹なんだけど!?!」

一夏が慌てた様子でそう叫ぶ。当然ながら鈴は面白くないって顔をしているがスルー

「心配ないって♪10分くらいで終わるでまっててくれる?」

気絶したマド力を連れて部屋の奥に向かっていくはやてを見送り

「お茶でも淹れようか……お茶請けはケーキでいいかな?」

コートからティーポットとケーキを取り出していると楯無が

「そのコートも魔法?」

「ああ。4次元コートと言ってな。ネクロを追って無人世界に行くことが多からジェイルが作ってくれたんだよ」

そんな話をしながらポットに茶葉を入れてお湯を注ぎ、人数分カップを用意してソファアに座る

「あー龍也が来てくれて助かったわ」

「本当だな。あのままだったらどうなっていたか……」

「やれやれと言う感じの箒と鈴。ラウラは私の手元のケーキを見て

「私はガトーショコラが良い」

「はいはい。ガトーショコラな」

皿にケーキを載せて全員分配っているとユウリが

「性格強制と言っていたが……大丈夫なのか？」

性格矯正って単語だけを聞けば不安になるのは当然か……私は肩を竦めながら

「大丈夫だよ。何の心配もない」

「龍也が言うなら大丈夫そうだな」

紅茶を全員のカップに入れながら

「はやてに任せれば。95%で性格強制完了だ」

今までの傾向を思う出しながら言う。はやてに任せておけば人間嫌いの亜人の子供も、人造魔導師の子供も問題なく大人しくて良い子になっている

「へーどうなるんだ？」

興味深そうに尋ねてくる一夏の前にケーキを紅茶を置きながら

「95%でヤンデレになる。残り5%は普通になる。心配することは少ない」

良い子ではやてに良く似た性格になっている。子供特有の独占欲の現われだと思う

「心配するところしかないんですけど!」

大声で叫ぶ一夏たちを見ながら紅茶のカップを手に

「問題ない。殺ンデレから病ンデレになるだけ安心だろう?」

「どこが!」

「無駄だよ。龍也はもう魔王が近くに居る生活に馴れちゃってるから」

「だよねー龍也さんもう魔王も個性として受け入れちゃってるもん

ね」

「十人十色っていうだろ？気にするものじゃないさ」

「二気にしろッ!!!」

声を揃えて叫ぶ一夏達を見ているとはやてとマドカが消えて行つた部屋の扉が開き

「一夏一夏♪姉さん姉さん♪」

一夏と千冬の間座り両腕を幸せそうに抱え込むマドカを見て

「ほっ……ヤンデレになってみたいだな」

一夏がそう言つて胸をなでおろす。どうも成功してただのシスコンとブラコンになったようだ。偶にはちゃんと成功……

「箒紅茶……何故私が居るのに他の女を見る。許さないぞ」……魔王になつてる!?!しかもどこから出したそのナイフ!?!」

素早くナイフを取り出し一夏の喉元に突き立てるマドカ。うん……やっぱり魔王で病んでるようだ

「成功成功♪兄ちゃん私にもケーキ頂戴♪」

「普通に膝の上に座るな。隣に座れ」

普通に私の膝の上に座つたはやてにそう言うとはやてはにへらと笑い

「やーだ♪頑張つたんやから少しはわがまま聞いて?」

にこつと笑うはやてにはいはいと返事を返しはやての好きなケーキの準備をしていると

「一夏♪ずーと会いたいと思つていた。姉さんも……こうしてあえて嬉しい」

ついさつきまでの暴れ具合からは想像できない懐きっぷりだ。多分さつきまでの暴れ具合は愛情が深いせいで憎悪に変わってしまったのだろう

「んー♪一夏も姉さんも好き♪大好き♪」

さつきまで殺す殺す騒いでいたのが嘘の様だ。さつきまでの狂氣的な光は消え穏やかな感じがして、歳相応の女の子って感じだ……だけど一夏にとつては突然再会した妹であり、認識が無い……ストレトすぎる感情表現に赤面していると

「……潰すわ」

えらくドスの聞いた声で立ち上がった鈴が両手にISを部分展開する。なんか予想通り過ぎる反応でどうすれば良いのか判らないな
「ぎゃー!?鈴!?リーン!?駄目だから! ISで強打は駄目だから!!」

一夏が慌ててそう叫ぶ。マドかはそのやり取りを気にした素振りを見せず。ぎゅーっとコアラのようにしがみついたままだ

「うっさい! あんたも妹に鼻の下伸ばしてるんじゃないわよ! 変態!!」

「誤解だろ!? 俺何もしてない!!!」「一夏♪」とりあえず離れるマドカーツ!!!」

「一夏は私が嫌いなのか?」

「いや嫌いじゃないぞ!? やつと会えた妹なら嫌いになるわけが無い! 嬉しい♪」「一夏ーッ!!!」

一夏の背中にぴとってくつつくマドカ。それを見た鈴が更にヒートアップする。箒とラウラも面白くなさそうな顔をしているが、やつと会えた家族と言うことで我慢しているようだ。はやてがどういう方向性で話し合ったのかは不明だが……

「千冬姉! マドカ! マドカを何とかしてくれ!」

自分では駄目だと判断した一夏が千冬に助けてくれと言うが。千冬は紅茶のカップを片手に、空いた手にケーキを持って避難していた。素晴らしいまでの対応と言わざるを得ない

「久しぶりに会った兄に甘えたんだろう。そのままおんぶしていてやれ」

「さすが姉さん。判っています」

ぎゅーっと幸せそうな顔をしているマドカ。うん……あれはスケールダウンしたはやてそのものだな

「兄ちゃん♪」

「離れる! この猫かぶり!」

「ああ、殺してやるか!!!」

なのはとフェイトが私からははやてを引き離そうと奮闘しているのか。一夏はと言うと

「一夏は私と姉さんを見ていれば良い。判る?」

「オーケー。マドカ話し合おう。まずは俺の頸動脈にナイフの刃を当てるのを止めてくれ」

「一夏動くな。私が引き離そう」

「夫を救うのは妻の役目だからな」

「死ぬ。眼帯、似非侍」

空気が凍りついたと思った瞬間。箒とラウラが無言で拳を握り締め戦闘態勢に入る。それを見て楯無とユウリがこっちに批難してきて

「これ酷くなってないか?」

「殺す気がなくなった分良いだろう?それに妹ってああいうものじゃないのか?」

「絶対違う」

楯無とユウリの突込みを聞きながら自分の妹を思い出すが、皆あんな感じだったと思うんだが……

「まあ良いんじゃないか?とここでお茶のおかわりは?」

一夏がマドカと箒達の争いに巻き込まれ悲鳴を上げているのは無視して私はそう尋ねるのだった

織斑先生の部屋から自室に戻りベットに横になる

「一夏君大丈夫かしらね」

最終的には箒ちゃん達もISを部分展開して一夏君に殴りかかっていた。マドカちゃんが護ってたみたいだけど……どうなったんだろう?途中で巻き込まれるのがいやで逃げてきたからどうなったか判らない

「話は明日になっちゃったしねえ」

マドカちゃんのことを考慮した龍也さんがネクロについての話は明日にするって言ってさっさと部屋に戻ってしまったので聞きたいことも聞けずしまい……まあ明日になれば判るから良いんだけど

「それにしても簪ちゃんは良いなあ」

思わずそんなことを呟く。魔法使い……なんてときめく言葉だろう……子供のときは魔法使いになりたいなんて思った事もあったから羨ましいと思う反面。魔法が使えるってことはネックに狙われると言うことと同義だ。羨ましいなんていってはいけないと思うが思わずそう呟く

「私も魔法が使えたらなく♪」

街の出かけたときに思わず買ってしまった杖を振るった瞬間

「楯無話が……」

「あつ」

ユウリと目が合う。ユウリは私の手の中の杖を見て

「すまない。誰にも言うつもりは無い。続けてくれ」

そう言つて足早に出て行くユウリ。再起動した私は両手で顔を抑えて

「みやあああああッ?!?!」

自分でも理解できない奇声を発して、杖を慌てて片付けユウリの後を追いかけたのだ……

追いつき説得するまで必死で説得が終わった後、どうしてそこまで慌てていたのかを必死に考えるのだった

生徒会長様が自分の気持ちに気付くまであと少しかかりそうです

第81話に続く

第81話

第81話

俺と千冬姉にはマドカと言う妹が居ると言うのを知ったのは昨日でしかも殺されかけるといふ斬新過ぎる再会をした後。はやてさんにいろいろとされ

「一夏♪」

立派なはやてさんと同じブラコンになっていた。俺はマドカと手を繋ぎ（手を繋がないとすぐ不機嫌になるから）食堂に向かっていったのだが……今IS学園は夏休み中で生徒が少ないのだが。全員が居ないわけではない

「織斑君の背中に女子が」

「なんとなく織斑先生に似てない？」

「もしかして妹とか!？」

その結論に至った女子達はあつという間に消えていった。近い内に妹の情報がIS学園に行き渡るだろう

「一夏。朝食はまだなのか？」

「あ。ああ……今食堂に案内する」

嬉しそうに笑うマドカの手を引きながら俺は食堂に向かって歩き出した

（きつと鈴とかも居るんだろうなあ）

マドカが挑発して鈴が魔王化して乱戦開始。それを考えると胃が痛くなった。見た目は可愛いのにどうして大人しくしてくれないのだろうか？

「大丈夫。チビと似非侍と眼帯は私が潰す」

うん。その発言とかでもう胃が痛いよマドカ。もう少し柔らかい性格だと俺も安心なんだけどな……

見た目は小さい千冬姉で、目付きは千冬姉以上に鋭い。しかも好戦的と来た

（大丈夫かなあ？いや大丈夫だろう朝から喧嘩になるわけがないさ）

自分に言い聞かせるように食堂に向かいそこで俺が見たのは
宙を舞う茶碗に

閃光のように走るサバイバルナイフの軌道

そして机を叩ききった日本刀の一撃

飛び交う飛刀

(どこの戦場ですか?)

そう思わざるを得ない状況。しかも発端はマドカと鈴の衝突、そこから箒とラウラが参入しとんでもない事態になってしまった

俺は俺目掛けて飛んできた味噌汁のお碗2つを見つめて

(俺のせいか。俺のせいなんだろうなあ)

そんなことを考えながら頭から熱々の味噌汁(白味噌と豆腐の味噌汁)をかぶり

「あつちいいいいいっ!!!しかもいてえ!」

どうも鈴の投げた飛刀の柄が額に命中したらしく、痛いのと熱いのを感じながらゆっくりと椅子から落ちながら

拝啓。居るかも知らない神様へ、俺はあんたにひとつだけ言いたい。あんた俺のこと嫌いだろ……俺はそんなことを考えながら意識を失ったのだった……

一夏が食堂で気絶している頃。龍也と千冬、そしてツバキは学園長室で

「IS教員の中にネクロが紛れている」

龍也君がそう切り出してきた。私は驚きながら

「それはありえませんか。この学園の教員は私が直接選んだのですよ?」

元軍属や国家専属のIS整備士を選んでいる。そこにネクロが割り込むのは不可能だというと

「昨日の戦闘データです。IS学園通路で、なのはさん。フェイトさん。はやてさんが交戦したネクロです」

ツバキから差し出されたUSBメモリをPCに指し画像を確認し

て

「そんな馬鹿な。何故彼女たちが」

私が直接会って面接した3人の教師がネクロになり3人と交戦していた。信じられない光景に驚いていると龍也君が

「十蔵さん。あの3人の名前と国籍がわかりますか？」

「何を馬鹿な……ん？」

名前が出てこない。どこで面接した、何に特化しているかを聞いた、教師としての理想を聞いたはずなのに名前が如何しても思い出せない

「暗示を掛けられていたんですよ。記憶の刷り込みです、そして名前はその場その場ででっち上げ、暗示を掛けなおす。そうすれば自分の正体は知られない」

信じられない。いやネクロと言う超常の相手に私の常識が通用するわけがなかったのか

「それとIS学園のPCデータを調べました。複数のデータがコピーされた形跡があり、SSSランクの機密事項のデータもロスとしていきます」

千冬君の報告に顔を歪める。SSSランクは引退したIS操縦者や預けられている第三世代のISの回収や修理用のデータ。一級品の機密データぞろいだ

「そこで八神と話し合ったのですが。ネクロを罫にかけ一掃しそれと同時に教員にネクロのことを教えるアイデアがあります」

「いつの間に和解したのですか？」

確か龍也君と千冬君。いや千冬君が一方的に龍也君を嫌っていたはずだと思いながら尋ねると

「大事な事を思い出させてくれたので」

つき物が落ちたような顔で笑う千冬君に一安心していると龍也君が

「それに伴い。いずれ私からネクロについて話す機会を与えていただけるとありがたいのです。実物を見せれば信じるでしょうからね」

そう笑う龍也君。私ではどうやって話すか？と言うことで頭を抱

えていた私には嬉しい提案だ。

「専門家にそう言ってもらえると助かります。よろしくお願いしますね。それで話は終わりですか？」

ネクロのことなら千冬君は必要なかったはずだがと思いつながら尋ねると

「はい。私からお願ひがあります。長い事別れていた妹がつい先日の襲撃者でした。ネクロによって洗脳されてようなのですが、八

神達がそれを解除してくれました。妹の在籍許可をお願いしたいのです」

真剣な顔で言う千冬君。情としては妹さんの在籍を認めたいが

「襲撃者というとの悪魔のようなISですね。完全にネクロの洗脳は解けたと言えますか？凶暴性はないのですか？」

私の問い掛けに龍也君が

「問題ありません。こっちには精神操作系に長けたはやてが居ますからね。洗脳のほうは問題なく解除されています。凶暴性のほうは……千冬に似たようなものになっておりますが基本的には大丈夫です」

千冬君と同じと言うことは一夏君を病的に愛していると

「ふむ。それくらいならば良いでしょう。許可します」

一夏君にとつては自分の妹になるのですから千冬君と妹さんの2人の面倒を責任を持ってもらおうとしましょう

「ではその手筈を進めておきますね。十蔵さん、じゃあ龍也君。ここからはネクロを誘き寄せる策を聞かせてもらいましょか？」

「ええ。任せてください。そう言うのは得意なんですよ」

若干の黒い笑みを見て少し不安に思ったが、餅は餅屋と言うしここは龍也君に任せようと思ひ。龍也君のアイデアに耳を傾けるのだった

「いつまでそうしているつもりだ。セシリア」

私の部屋の前でその声を掛けて来るヴィクトリアさんに返事を返さずぼんやりと窓の外を見つめる。ネクロに対する恐怖心は多少薄れたが今度は自分が死ぬかもしれないと思うと恐ろしくなった。誰だって死ぬのは怖い

(如何して箒さん達は戦うという道を選ぶことが出来たのですか?)

死ぬのは怖くないのだろうか? 私は恐ろしい、実際に死ぬかもしれないという状況になって……

優しかった先輩がネクロになっていてのを見て

(もう本国に帰ろうかしら)

代表候補と言う地位を捨てて本国で暮らす。それも1つの道ではなからうかと考えていると

「ええい、いつまで鬱陶しいぞ!!」

バーンつと勢い良く扉が開き驚きながら振り返ると

「ヴィ、ヴィクトリアさん!?なんでISを部分展開してるんですか!」

腕装甲だけを展開して扉を殴り開けたらしいヴィクトリアさんにそう尋ねると

「いつまでもぐだぐだして。鬱陶しいわ!いつもの自信満々のお前はどこに行った!!」

一喝と相応しい怒号が部屋に響く。つかつかと私に近づいてきて

「何だその覇気のない顔は!それでも私と代表の地位を争ってきた人間か」

だいひょう……そう確かに私は国家代表になりたかった。だけど

……今は

「セシリア。箒もラウラも目的を決めて進んでいる。お前はいつまでも閉じ籠っている?何もしなくて良いのか?後悔しないのか?」

後悔?何を後悔……そう言われて思い出すのはヴィクトリアさんと何度も何度も模擬戦をして、同じティアーズモデルの適正者として課せられた訓練の事だ

「ISはおもちゃじゃない。それは私達は嫌と言うほど理解していたはずだ。戦争になれば駆りだされるとき説明を受けたはずだ」

そうだ。初めてティアーズを手にしたとき本国のIS設計者と訓

練を見ていてくれた指導官にそう言われた。力持つ意味を知りその責務を果たせと

「でも……私は怖いんです。死にたくない……ネクロになりたくない。私はもう戦えない」

ネクロ。あの存在を知ってから夜も眠れないし死とは何かと考えてしまう。自慢だった髪は少し艶を失っているし目の下の隈も濃いパチンツ!!!

「泣き言はいい加減にしろ。セシリア」

頬を張られた事に気付くまで数秒掛かったが一気に頭に血が上り

「何をするんですか！真剣に悩んで「悩む？お前は逃げているだけだ」ヴィクトリアさんの凜とした声がやけに耳に残った

「龍也の訓練に出た後みんな話している。ネクロは怖いって、死ぬかもしれないって。だけど自分達を狙って来るんだ抗う力は必要だ」

淡々と語るヴィクトリアさんは私の目を見て

「セシリア。逃げるな。誰だって怖い。それでもなお前に進もうとしている。いつまでも立ち止まるな、そんなことをしている間に皆は先に行ってしまうぞ。勿論私もだ」

おいていかれる私が？1人でいつまでもここにいて？

嫌だ……

死ぬのは怖い、だけどそれ以上にここIS学園で出来た友達を失うのはもっと怖い。1人はいやだ

「それに一夏には生き別れの妹がいたらしくてな。いまIS学園に居るがべつたりだ。織斑先生といい勝負だなあれは、箒もラウラも鈴も邪魔されて面白くなさそうな顔をしていたな」

一夏さんの妹？……何故だろうはやてさんの顔を思い出すのですが……

「いつまでもこうしてるうちに代表候補から外され。想っていた相手も手が届かなくなる。それで良いのならここにいれば良い。ずっとな？だがお前はそんなにも弱い奴だったか？」

「ふふふ……ずるいですね。そんなに焚きつけてどうするおつもりなのですか？」

私の負けず嫌いな性格を知っていてここまで言われて黙っていられるわけが無い

「別に？ただお前がどうしようがお前の自由だ。セシリア、ただ何もせず諦めるのはお前らしくないと思うぞ」

そういい残して出て行くヴィクトリアさんの背中を暫く見つめていたが、気付いたときには立ち上がり鏡の前に居た

「酷い顔ですわね。まずはシャワーと香水。それとメイクで隈は誤魔化すとしますか」

何もせずに負ける

何もせずに諦める？

そんなのは私ではない。いつまでも自室と自分の殻に閉じこもっていて随分と体が重く感じるがこの程度なら直ぐに治せる

「あそこまで言われて黙って引き下がる？隠れ続ける？ありえませんか！」

今まで沈んでいた気分がなんだったのかと思う位気分が高揚している

「なぜなら私はイギリス代表候補。セシリア・オルコットなのですから！」

このまま引いてはオルコット家の名に傷をつける。確かにネクロは怖い、だけど皆それは同じだ。なら私だって抗って見せる

皆にできるのなら私に出来ないわけは無いのだから

「セシリアも元気になったみたいだね」

いつもより少しだけ濃いメイクをして掛けて行くセシリアの背中を見てそう呟く。実を言うと僕は五分前に答えを出して龍也に話に言っていた。僕は龍也の言う事は正しいと思った、だけど僕と龍也の最大の違いは

(僕は自分の護りたい者だけ守れば良い、そう一夏だけを……)

僕は一夏が大事だ。そして何より愛している、だから彼を護るだけの力があれば良いと思っっている。と龍也に言うのと龍也は笑いに笑

いながら

「信念があればそれは正しいとも言える、シャルロットのあり方は歪んでいるがそれ以上に正しい」

褒められているのか窘められているのか良く判らないがとりあえず褒め言葉として受け取っておくことにした。ちゃんと話もしたのに何故僕がまだ自室に閉じこもっているのかと言うと

「まだまだなんだよねえ」

前のネクロとの戦いを見て思った。僕は器用貧乏でこれと言うのはラピッドスイッチくらい、こんな状態では一夏を護る事なんて出来はしない。そうなのはさんに相談したらこれをくれた。小星型12面体の奇妙な形をしたボックスだ

(シャルロットは器用貧乏じゃなくて自分の力の使い方を理解してないだけだよ。広い視野で周りを見れることを覚えてみたらどうかかな?)

魔法使いの基礎能力の高速マルチタスクの練習に使えるそうで、1つの面を押すと発行し、12個の面の別の2箇所が光り、そこを押すと3箇所が光る。それをどんどん押し全部を点滅させられるらしいのだが、星の形をしていてしかも面が細かく分かれている

押し間違えるとぶるぶると震えて失敗と言うことを教えてくれる

「これ本当にクリアできるのかな?」

複数の面を同時に把握し光っている部分だけを押し。これは同時に複数の面を把握しないと出来ない

「これをクリアできたらマルチタスクを覚えれるって言うのも納得かな?」

正確にはこれをクリアするのがマルチタスクを覚える第一歩のこと。

「早くクリアしないと」

僕のISは世代的には第2世代。幾ら改造しても第3世代とは能力的には劣る。ならば操縦者の錬度を上げるしかない

「そう僕が一夏の力になるしかこれしかないんだから」

一夏のためにもっともっと力をつける。だから僕が一夏に会いに

行くのはちやんとこれをクリアできるようになってから。一夏の妹がいると言う話は聞いた確かに気になるけど、今は少しでも早く完全なマルチタスクを覚える

「直ぐにまた会いに行くからね一夏♪」

姉妹でブラコンなんて流石は姉妹と言う感じだが、法律上あの2人の思いが叶う事はない、だから焦ってことを動かす必要は無い

「勝つのは僕だよ。ブラコンども」

そう呟きながら多面体を触ったのだが自分でも驚きのスピードで面を光らせることが出来た。やっぱり思いの力が一番強いんだなあと再認識しもう1度多面体の面を全て光らせる事に挑戦するのだった

はやてとの話し合いは私にとって大変有意義だった。私は一夏と姉さんを憎む事で生きてきたがそれは本当は強すぎる愛情の裏返しなのだ。私はそこまで思いつめるほど一夏を姉さんを愛しているんだと諭すように教えてくれたはやて。最初は何だこいつは思ったがはやてはすごくいい奴だった

「はやて。一夏ともっと仲良くなるにはどうしたら良い?」

「そりゃ勿論妹って言う立場をフルに使って甘えまくれば良いやろ?」

IS学園のカフェテラスで私はコーヒー。はやては紅茶を片手にそんな話をしていた

「甘える……具体的にはどうすれば良い。私と一夏の出会いは最悪すぎた。それを挽回する手が知りたい」

ネクロのせいとは言え姉さんと一夏を殺したいと思っていた自分が恥ずかしい。血を分けた兄妹を手に掛けようなんて正気の沙汰ではないのだから

「うん。確かに出会いは最悪やったけどそれは幾らでも挽回できるで? 私の妹も最初兄ちゃんを攻撃しようとしてたからな。でも今は大

丈夫や。兄ちゃんにべつたりの可愛げMAXの妹になってるから」

そう言う話を聞けると心強い。挽回できるかもしれないと前向きに考えることが出来るからだ

「それはどうすれば良い？」

まずは最初の悪印象を取り消すことが大事だ。一夏に嫌われては元も子もない

「まずはあんまり喧嘩しんこと。喧嘩するなら一夏のいないところでやな。喧嘩は見てるほうが嫌がるから」

購買に買った手帳にメモをしていく。残念な事に手持ちのものは何一つないのでIS学園の制服と安くて少しサイズの合わない下着で我慢しているが近い内に買いなおしたいと思いつながらシャープンを走らせる

「次に邪魔者を近づけさせないことを考える。1人だと難しいから千冬と2人で一夏を覆ってまえば良い。無論箒とかが邪魔してくると思うけど。マドカが攻撃に出なければ良い」

ふむふむ喧嘩をしないことで一夏の好感度を下げないと、それは大事な事だな。書いた後に赤い丸をつけて大事な事と言うマークをつける

「それとなくぴたーってくっついたりして全身で好きって言うのを表現したらいいんよ。抱きつくとかは効果的やね」

だ、抱きつくか……一瞬自分の胸を見る。鈴以上であるのは間違いないが大きいというわけではない、はやてと同じようにバランスの良いといやつっぽい

「胸とかは気にしないで自分が好きって言う気持ちを伝えるんよ。抱きついたり、甘えてみたりしてな？お兄ちゃんって言うのは妹に甘えて貰えると嬉しいもんやで」

「甘えるというのは具体的にどうすれば良いんだ？」

甘えたことがないから判らないというとはやてはにっこりと笑い「抱きついてみたり。背中に寄り添ってみたりすれば自然と体が動くって。妹はおにいちゃんに甘えたいものなんやで？難しく考えないで感じたままに行動すれば良いんよ」

感じたままに一夏への感情表現をする。それはそれでなんとなく気恥ずかしいような気もするがそれも良いのかもしれないとおもっている

「私のとっておきの甘え方を教えてあげるわ」

につこりと笑い私に耳打ちしてくるはやて。その話を聞きたびに耳が赤くなり顔が火照ってくる。

「そんなことをしても大丈夫なのか？」

「だいじょーぶ♪だいじょーぶ♪私も良くやるし心配ないで」

はやてがそう言うのなら多分大丈夫なだろう。そして挑戦するだけの価値がる作戦だった、今朝の食事の誘い方もはやてが教えてくれた。(部屋の前でぽっーんとたっついて一緒にご飯を食べたいと上目目線) 一夏の反応が凄く良かった、多分今回も大丈夫なはず

「というわけや。頑張つてなマドカ」

そう笑って私の肩を叩くはやて。初めて出来た同姓の友人は私にいろんなことを教えてくれるとても素晴らしい人だった

「さてでは必要なものを買うに行くか」

はやてが教えてくれた作戦を実行するには如何しても必要なものが2つある。私はそれを買うために再度購買に向かって歩き出したのだった

その頃シエン達はアリーナの仲の休憩所で

「これで生徒同士の模擬戦で私は7連勝だね」

手帳に記されている模擬戦の記録を見ながら言うと弥生さんは

「あたしは9連勝だな。いい調子過ぎて怖いな」

スポーツドリンクを飲みながら弥生さんと話しているとノートPCを叩いていたクリスさんが

「それは当然の結果。これを見て」

そこに映し出されていたのは2本のグラフそれを見ながら

「これなに？」

上と下でかなり数値が違うみたいだけど何のグラフだろうと思

ながら尋ねると

「入学当時と今の戦闘能力の簡易測定結果。龍也の訓練を受けてから爆発的に数値が伸びてる」

クリスさんの言葉を聞いて驚きながら自分の数値を見てみるが「これを見ても上がっているって言われてもなんかしっくり来ないな」

「うん。私もそう思う」

棒グラフだから良く判らないというところクリスさんはそれならと言ってキーボードを操作して別のグラフを呼び出す。そこにはこのスキルの比較が書かれており。

「本当だ。近接とか凄く上がってるみたい」

「あたしもだな」

近接や空間把握の数値が倍くらいになっているのがわかる。へーって感心しながら見ていると一個だけ下がっている数値があり「あのさ。私なんか技能の数値だけ下がってるだけ」

近接戦闘とかのスキルは上がっているけど操作の技術が下がってるというところクリスさんは

「だってシエンはつつこんで叩き伏せるだけ。むしろ防御とか気にしてないから」

そう言われるとよければようになったからそんなに防御を気にしてなかったような気がする。弥生さんは防御とかのスキルが上がってるのに

「まあそう気にするなよシエン。攻撃力で突破って言うのもいいと思うぞ?」

攻撃は最大の防御って言うしなって言いながら私の肩を叩く弥生さん。だけど皆数値が上がってるのに私だけ能力が下がっているというのはどうにも納得できず

(今度の訓練ではもっと防御とかのやり方を聞いてみよう)

そう決意をあたらしし防御とかを教わろうと心に決めたのだがいざ訓練を始めると攻撃ばかりに意識が向いてしまいどんどん防御のスキルが下がっていくのだが。気がついたときには既に遅く私はI

Sの防御力を生かした一撃必殺のスタイルが完全に癖になってしま
うのだった……

第82話に続く

第82話

第82話

その日は早朝から緊急職員会議と言うことで全ての教師がIS学園地下のミーティングルームに集められていた。この部屋は有事の際指揮を取る部屋として設計されている部屋だ

(とは言えここに来たのは初めてですけどね)

使うことは無いだろうと思われていたミーティングルームの椅子に腰掛ける。既に先輩とツバキさん。それに十蔵さんの姿もある

一体何の会議なんだろう？私はそんなことを考えながら全員が揃うのを待った

「朝早くから申し訳ありませんね皆さん。大至急対策を考えないといけないことがあります、詳しくは今配った資料を見てください」

十蔵さんから配られた分厚い書類には「特A級極秘事項」と書かれていた。一体何が書かれているのだろうかと思っページを捲り

(これは!?)

各国の行方不明者として噂されている人達のリスト。破壊された亡国企業の基地の詳細な位置データ。どうしてこんなのが詳しくまとめられているのかと驚いたが。それよりも私が驚かされたのは

(黒い……悪魔)

都市伝説になっっている黒い悪魔の存在について詳しくまとめられたページだ。しかも交戦者の名前のところには一夏君達の名前が書かれており、つい先日にもIS学園内に侵入されたとかかれていた。しかも写真も添付されていた

「学園長。これは何かの冗談ですか？」

エドワースの言葉に先輩が真剣な表情で

「冗談ではない。黒い悪魔が存在かっこたる証拠も手に入れた、だからここに呼び出して話をしてる」

証拠？それは一体……私達が首を傾げる中。突然と言って良い夕イミングで

「投影開始……やらせん!!!」

突然響いた声に驚くまもなく10本の剣が私の目の前を通り一番奥に腰掛けていた整備課の教師2人の全身に突き刺さった

「「きゃあああッ!!!」」

突然の事に思わず悲鳴を上げてしまう。そんな中先輩が振り返りそう叫ぶ。先輩の振り返った先には

(や、八神君!?)

今まで見たことのないような険しい顔の八神君がいて、だけど気のせいかいつもより少し背が高いし顔つきも違うように見える

「決まったか!？」

「まだまだ!この程度で済むほどやつらは甘くない!投影開始ッ!」

八神君の手から蒼い光りがあふれ出しそこから剣が現れる

「部分展開じゃない!?どういうこと!？」

見ていた教師の一人が叫ぶ中剣を全身に刺したまま2人の教師が立ち上がる。その目は白目と黒目が反転して異様な形相をしていた

「罨に嵌められたってこと……だけどデータは」

「残念だがダメーデータだ!掛かってくれてありがとう。礼だ、早々に消えろ!」

ザンツ!!!

鋭い風切り音と共にその教師の首が飛んだと思った瞬間。その身体は粒子となり消え去った。もう目の前で起きている事が何一つ判らず混乱している私の視線と八神君の視線が一瞬だけあったと思っ
た瞬間

「頭を下げろ!山田摩耶ッ!」

「え、あ、はいっ!!!」

その怒声に思わず頭を下げた瞬間。私の背後に八神君が持っている剣が突き刺さりそこから

「ギギヤアアアアアア」

「ええええ!？」

不気味な咆哮に振り返ると黒い悪魔が剣で両断され悶えながら消え去る瞬間だった

「素手で勝てると思ってるのかしら？ 八神龍也!!!」

身体に突き刺さっていた剣を抜こうとする女に八神君が

「たわけが。失せろ、壊れた幻想（ブロークンファンタズム）」

指を鳴らすと突き刺さっていた剣が一斉に爆発し跡形もなくその女は消え去ったのだった

「今のが黒い悪魔だ。正しくはネクロと言うのだったな？」

「その通り。黒い悪魔なんて長い名前よりわかりやすいだろ？」

くつくと笑い何事もなかったかのように椅子に腰掛ける八神君。やはりいつもと顔つきが違うと思う

「今見ていただいたのが黒い悪魔。ううん、ネクロよ。これでさっきの書類にも信憑性が出てきたでしょ？」

ツバキさんの言葉に私達は頷く事しかできなかった。書かれていた特長と完全に一致していたからだ

再生能力と桁並外れた生命力を持つ

人間に擬態するものも居る

影から飛び出してくる

これは全てさつき目の当たりにした。信じるしかない……だけど

「八神君。君は一体？」

私がそう尋ねると八神君は楽しそうに笑いながら右手を上に向けて

「改めまして自己紹介を、私の名前は八神龍也。そして」

パチンと鳴らされた指先に炎・風・氷・電気が現われ

「君達で言う魔法使いだよ」

その四つが空中で弾け花火のような音を立てる中。

「嘘オオオオツ!!!」

信じられない現実、だけど信じるしかない現実に思わずそう叫ぶ事しか出来なかったのだった……

「落ち着いたかね？」

「は、はい。なんとか」

それから数分後。私達は何とか普段の冷静さを取り戻し、気になったことを尋ねてみた

「八神君ってもしかして私より年上ですか？」

冷静になってみると判る。今の八神君は明らかに成人した男性と
言う感じの雰囲気をしている。だからそう尋ねると

「今年で25になるが、それがなにか？」

大人っぽいと思っていました。が本当に大人だったんですね。

「八神君が魔法使いと言う事ははやてさん達も？」

「うん。魔法使いだな。正確には魔導師って言うんだけどな」

そんな些細な事はどうでも良いのですが、と言うかももう情報を受け
入れることしか出来ないくらい混乱してるんですね

「これで一通り自己紹介は済みましたね。ではこれからのIS学園全
体の方針を決めて行きます。何か意見のある人は遠慮せずに行つて
くださいね」

十蔵さんがそうは言ってくれるが私達は目の前で進む突然の出来
事の数々に思考停止してしまい。もうはい。とか判りましたとかの
相槌を打つことしかできなかったのだった

チユン。チユン……

窓の外から聞こえてくる雀の鳴き声。もう朝かもう少し寝ようと
思い寝返りをうとうとして

ガチャ

(金属音?)

なぜか右手首に感じる違和感そして俺の隣に誰か居る気配。そー
と目を開けると

「むにー」

「?!?!?!」

思わず声にならない悲鳴が出るほど驚いた。なぜかマドカがピン
クのパジャマにナイトキャップ。更にぬいぐるみを抱えて、自分の左
手と俺の右手を手錠で繋いで寝ていた

(どういう事態だこれは!?)

いまだかつて無い事態に俺は完全に混乱していた。起きてた時に千冬姉がいたことは何回もあつた、だけど手錠までなんて今までの経験ではありえなかつた

「ふや……ああ。おはよう。一夏」

「ああ、おはよう……じゃなくて！これどういうことだ!!」

手錠のせいで身体を起こすことしか出来ない中そう尋ねるとマドカは

「はやてがこうすると良いと教えてくれた」

何やつてるんですか!?!はやてさん。貴方は俺の妹をブラコン・ヤンデレにただけでは飽き足らず。自分の同類まで進化させるつもりなんですか!?!とりあえず手錠を外してもらわないと

「一夏。起きているか」

はい。死んだー、俺死んだー。なんでこんな絶妙なタイミングで来るかな?しかも

「一夏さん。おはようございます。色々考えて漸く考えが纏まりましたの」

セシリアか?そうか漸く出てきてくれたんだな。良かった良かった。タイミングが良ければなお良かったよ

「失せる似非侍。ドリルロール」

マドカの凜とした声が響く。千冬姉と同じでマドカの声は良く通る。それは廊下に居る筈とセシリアにしっかりと届いたようで、ヤバイと思った瞬間。俺の部屋の扉は吹き飛んだ

「一夏ーッ!!!」

「一夏さん!!」

どこから沸いて出た鈴!?!しかも部分展開じゃなくて完全展開してるし!即座に窓からの逃亡を考え

(駄目だあ!?!マドカが居る)

交戦する気満々のマドカだったがぼんつと手を叩き

「鍵をどこにおいたか忘れてしまった」

「このドジっ子がああ!!!」

マドカを小脇に抱えて窓から逃亡。マドカが小柄でよかつたと思

う反面。思うようにスピードが出ない

後ろから追ってくる幼馴染2人と空を舞うビット。朝から生死の境を覗き込んだ俺だった

「ユウリ。修理を頼む」

ユウリが楯無さんの席に向かう途中で呼び止めて待機状態である十字架を渡す。ユウリははあつと溜息を吐き

「……判った。ついでに改修もしておく」

「頼むぞ」

ユウリとそんな話をしているマドカ。マドカとユウリの関係も気になるどころだが、それよりも今現在も俺とマドカの腕は未だに繋がれたままだ。鍵をどこにおいたか忘れたらしい

「一夏。ほら食え」

話は終わったという感じで俺のほうを向く、その顔は無表情なのだが何処か嬉しそうと言う奇奇怪怪なものだった

「それより鍵は？」

「判らん」

真顔だ。嘘はついてないようだが……このままでは着替えは愚かトイレにも行けん。だからマドカはパジャマにナイトキャップそしてぬいぐるみを抱えたままだ。それなのにこの表情、千冬姉並みのポーカーフエイスだ

「私が切り落とすか？鎖を」

「引きちぎるほうが早いと思うわ」

俺とマドカが手錠でつながれていることに気付き僅かに冷静さを取り戻した。箒と鈴、俺が寝ている間にもぐりこまれたのだから判ってくれたようだ、だが向けられる日本刀とISの腕部パーツを見ると恐怖しか感じない

「んお？おはよーさん。マドカ」

「おはよう。はやて」

はやてさんにそう笑顔で挨拶するマドカ。どうもマドカははやてさんが気に入っているらしい

「はやてのくれた手錠はとても頑丈で素晴らしい」

「はやてさんのなのか!?!」

龍也を抑えるための手錠。ISで怖せるかどうかもあやしいぞ

「そうやで? 兄ちゃん捕獲用や。魔法でも中々壊せん業物や」

なんてこった!?! 最悪すぎる。と言うかそんなものを一般人に渡さないで欲しい

「はやてちゃん。そう言うのを渡すのは良くないと思うよ」

「私は貰ったよ?」

「フェイトちゃん。何してるの!?!」

「つい出来心で」

なのはさんとフェイトさんの話に軽い頭痛を覚えながら。マドカの隣の席に座ったはやてさんに鈴が

「なんでマドカを助けるの!?! あたしを手伝ってくれてたじゃない!?!」

「悪いなあ鈴。鈴も好きやけどマドカは私に似てるからどうしてもなあ」

出来ればこれ以上マドカに入れ知恵して欲しくないところだ。そんなことを考えながらフォークで鯖のみをほぐし口にほりこんだ。

味は抜群なのだが出来るなら普通に食べたかったと思いつつながらふと気になったことをはやてさんに尋ねてみた

「龍也は?」

「んー下で先生達にネクロの脅威とか説明してる」

IS学園全体でネクロに備えさせるつもりなのか、俺はフォークを置いて味噌汁をおわんを掴んで中身を飲みながら

(何時龍也に言おうかな)

ペガサスの事を話したいし、俺の身体に起きている事も聞きたい。あの暴走状態のこともずっと頭に引つかかっているし、俺はそんなことを考えながら食事を再開しようとして

「一夏、あーん」

「そうそう。上目目線で見るのがポイントや」

「お願いだからマドカをこれ以上焼き付けないで!」

マドカにどんどん知識を入れ込んでいるはやてさんに俺は思わずそう叫んだ。箸とかの目が殺意を持っていて見られているだけでも

超怖かった。これからこんな毎日を過ごすのだと思うと少し憂鬱な気分になったのだった

閉じていた目を開く、さつきまでリンクしていた分身体からの情報が完全に途絶えた

「見破られましたか？」

ペリトの言葉に頷きながら立ち上がる。私はネクロとしての戦闘能力は低い、だけど私は分身体を無数に作り出し、分身が見た情報を全て見ることが出来る。諜報戦や情報戦に特化したネクロだ、だから戦闘能力が高いネクロとコンビを組む事が多い

「仕方ありませんね。ファントムタスクが出たときに同時に情報収集をするつもりで動かしたのは不味かったですね」

代表候補の捕獲を狙って動かしたがまさか夜天やエースオブエースがついているとは誤算だった。だからばれるのは時間の問題だったはずだ

「でも、情報は取れたんでしょ？ラクシユミ」

よつと言いながら私の前に着地したのはスーツに身を包んだ、狐の耳と9本の尻尾を持つネクロイナリだ。いつ戻ってきたのだろうか？

「イナリ。何時戻ったのですか？」

「ついさつき。色々調べて来れたわよ。はい、ラクシユミ」

差し出されたUSBメモリを受け取る。イナリは尻尾と耳を隠せる。私と同じように人間社会に潜り込んで情報収集をしていた。私との最大の違いはイナリは単独でも戦えるだけの戦闘力を持っている点だろう

「それでファントムタスクの残存兵にネクロディアシリーズを渡してくれましたか？」

「あーそれは大丈夫、これで活躍できるって喜んでたわ。馬鹿よねえ？人間はあれは人間を部品にして動くのに♪」

くすくすと笑うイナリ。束から貰ったISのデータを元に私達が

作った擬似IS、モデルはゼフィルス・そしてゴスペルのデータを元に作り出した機体。最初は普通に使えるが精神状態やダメージで機体に仕込んだネクロの細胞が活性化し操縦者を取り込みネクロ化するようになってる

「でさー思うんだけど。もうフロントムタスクいらなくない？特にスコール達。邪魔だし私達の事探ってるみたいだし、もう殺しても良くない？ネクロ化させてさ駒にしたほうが良いと思うのよね」

「確かにそうですね。そろそろ切り捨てますか。あの2人は」

前の襲撃のときに明らかかな違和感を感じた。あの2人が私たちに反逆する気なのはわかってた。でもこの世界の情勢を理解するまで殺すわけには行かないので生かしておいたが、もういらんか

「いらんって言えばさー、あの兎も要らなくない？もうあいつから手に入る情報もないし」

束もそろそろいらんかというイナリにベリトはふむと顎の下に手を置いて

「考えておきましょう。どうせならネクロ化してネルヴィオに渡せば良いですからね。もしかするとまだ利用価値があるかもしれないし」

束はまだ利用価値があるかもしれないので保留。じゃあスコールを殺す人員は

「私出るよー。最近暴れてないし、人間殺してないし、久しぶりにさ人間の骨とか踏み砕きたいし？魂食いもしたいかな〜って」

「そう言うことならイナリが出れば良いでしょう。それに貴方は交渉役でしたからね、向こうも多少は気を許しているだろうですしね」

イナリとベリトの話を聞きながら私は

「ネクロディアも出すといい。データ取りをしたいから一緒に連れてっててもらえたらうれしい」

「オツケー♪早く出撃許可でないかなあ？」

「早く暴れたいのは判りますが、まずはベエルゼ様に報告に行きますよ。ではラクシユミ、調整の続きをよろしく願います」

ベリトの言葉に頷き。手に入れたISのデータを見ながらお目当

ての情報を探す

「見つけた」

そこに記録されているのはIS学園の代表候補生のISのデータが5機分。しかも必要なデータが全部集まっている

「早く仕上げよう」

今まで集めたデータをモチーフに作った「R・暮桜」やその他のISの調整を再開しながら。彼女達が戦場に立ったときの事を考える。驚きと恐怖に満ちた表情を見せてくれるであろう、IS学園の人間の姿を想像するだけで笑みがこぼれた

「私が殺せない分。いーぱい人間を殺してね♪」

ネクロでありながら戦闘能力を持たないネクロ。それが私、だけど戦いは力だけで決まるものじゃあない。私のように皆のサポートをする存在が必要になる。私はそんなことを考えながら奪い取ったISのデータと私達の知識を応用した擬似ISの作成を再開したのだった

「あーあ、あいつらは趣味悪いねえ？セリナ」

ヨツンヘイムの私の部屋でそう言うとセリナは私を見て

「ネル。ワタシもでたい。ユウリほしい」

「ん？んーそれは良いけど、私は一緒に出れないよ？」

私は前回の襲撃時にはやて達を妨害するのをやめたとかでヴオドオンとベルフェゴール難癖をつけられて。出歩くのを禁じられている

「だいじょうぶ。ユウリコロシテつれてカエツテクル。ソノトキハ」

「OK、OKわかってるよセリナ。ユウリをネクロ化してずーと一緒にいるんだよね？」

私がそう言うとセリナは嬉しそうに笑いながら何度も頷く

「良いよ。セリナ、私がベエルゼに話を通しておくよ。単独出撃の許可を取るから心配しないで」

ベエルゼはネクロマンシーを使えない。今いる面子の中でネクロ

マンシーを使えるのは私だけ、だから私の言うことはベエルゼは聞いてくれる

「うん、ウンよろしくねネル！」

嬉しそうに笑うセリナの頭を撫でながら

(私も早くお父さんに会いたい)

私のお父さん。ずっと探していてやっと会えた。愛してる、心から貴方を

(愛してるからこそ貴方を殺す。その後はずっと私の傍にいてね)

あの子じゃない。貴方の娘はこの私、私が貴方の娘になれなかったのはタイミングが悪かっただけ。こうしてもう1度回ってきたチャンスを見逃すほど私は馬鹿じゃない。私はいつかお父さんが私だけを見てくれるその時を考え笑いながらベエルゼに連絡を取ったのだ

……

第83話に続く

第83話

第83話

騒がしい食事を終えた後。龍也が前回の俺の暴走のことについて話があると言うのでアリーナのブリーフィングルームに呼び出された。簪さん達は魔法の講習。弥生さん達は夏休みの課題。食べて直ぐ訓練はきついだろうという心遣いだった。簪達は気になることもあるといつて俺についてきた。ちなみにマド力は千冬姉に連れられて転入手続きをしている。本当なら千冬姉も交えてネクロの話をする予定だったのだが。まずはマド力のことを第一に考えるところだった。なおマド力は最後まで手錠を外す事には抵抗していた。そんな1悶着あったもののブリーフィングルームに来た俺はそこで龍也に信じられないことを告げられた。その言葉はあまりに衝撃的だった

「二夏。このままお前がISを……白式を使うのは止めたほうがいい。戻って来れなくなる」

その言葉の意味が判らず呆然としてしていると簪が

「戻って来れなくなるというのは？」

「前の暴走状態のときのままになる。闘争本能だけ……言い方は悪いが今の状況でISを使えばネクロ化に近い状況になる。それが私の出した結論だ」

どうしてそんなことになったのか判らず呆然としてしまう。やっと俺の進むべき道が判ったとたんこれなのか!?

「どうしても俺が白式を使ったらだめなのか!？」

「……どうしてもと言うことではない。だが条件がある、かなり厳しい条件がな」

真剣な顔をしてる龍也。だが条件付でも使えるのならと思

「その条件は？」

「可能性の話だが、暴走を抑えるために魔力コントロールを覚えろ」

魔力コントロール？俺と一緒に話を聞いていた簪や鈴が呆けた顔

をする中龍也は

「暴走のせいかはわからんが、僅かに。そう本当に僅かに、出力は簪やエリスの4分の1以下ほどだが一夏にも魔力があることが判った」

傷心なのにそこまで言うかと一瞬肩を落とすなか、ラウラが

「一夏が魔力コントロールを覚えればあのときのような姿にはならん
いと?。」

「判らん。可能性の問題だ、魔力を使うことであの状態になりやすくなるかも知れんし、抑えられる様になるかもしれない」

そう言う龍也にシャルが少しだけ怒った表情で

「それは流石にいい加減じゃないのかな? 前例がない「前例はある。半ネクロの少女は自分の意思でネクロの力を押さえ込み、人として暮らしていた。名はリーエ。私が預かって育てていた子供だ」

龍也がコートから1枚の写真を取り出して机の上におく。そこには10歳前後と思われる少女と龍也の姿が写されていた。鮮やかなまでの紅い髪と蒼い瞳。だがその左目はペガサスのように縦に割れていた。龍也の隣でコートの裾を掴みながらも前を向いてカメラを見つめていた

「ずいぶんと可愛らしい子ね」

「良く懐かれているようですね」

写真でもわかる。このリーエと言う少女がとても龍也に懐いていると。龍也は写真をコートにしまいながら

「こんな子供でもネクロの力を抑えて生活していた。リーエより年上なのに不安だというのか? お前は」

「出来るに決まってだろ!」では早速始めようか、お前は簪とエリスより魔法力が弱すぎる。まずは」

淡々とし説明を始める龍也を見て俺は

(あれ? 俺地雷踏み抜いた?)

判っていたはずなのに、俺は龍也の常套手段である挑発にまんまと乗ってしまったわけで……

「馬鹿だな。一夏、骨は拾ってやるぞ」

「大変だと思うけど頑張りなさい。帰りにジュースを買っておいてあ

げるわ」

「一夏さん。頑張ってくださいね、一夏さんがどんな魔法を使えるようになるのか楽しみにしていますわ」

「頑張ってるね一夏。僕も僕で頑張るよ。マルチタスクの練習を」

口々にそう言って去っていく箒達。残ったのはラウラだけだった。ラウラは興味心で瞳を輝かせて俺の隣に座り

「魔法の訓練と言うのをじかで見てみたい」

キラキラと瞳を輝かせるラウラと一緒に俺は魔法の講習を受け始めた。

く3時間後く

「しつかりしろ。一夏」

「らうらア。頭痛い」

「情けない奴だ」

龍也による魔法講習は頭の中に強制的に魔法の知識を叩き込むというもので頭を鷲づかみにされ、そこから無理やり情報を流し込まれるというとんでもない荒業だった

「龍也。皆こういう風にやるのか?」

俺を支えているラウラがそう尋ねると龍也はにっこりと笑い

「前回のささやかなお返しだ。何も知らなかった子供には相応しいだろう?」

……うん。2度と軽はずみな言動はしないようにしよう。龍也は怒らせたらいけない人間だ。俺の心の中の怒らせてはいけない人間ランキングに龍也の名前が深く刻まれたのだった。ラウラもそう思ったのか小声で

（一夏。今回は自業自得と諦める。代わりに後で私がカフェラテとケーキを奢ってやろう）

ラウラのその優しい言葉が俺の心に染み渡ったのだが、カフェラテで

「一夏から離れる。眼帯女」

「その言葉宣戦布告と受け取る」

互いにナイフを構えるマドカとラウラを止めるのに疲れ果て。心

も身体もボロボロになったのだった

ボロボロの一夏を見ている一団の姿があった。手にしていたカ
フェオレを置いて

「一夏君って妹いたんだね」

シエンがそう言う。私はカップに砂糖を入れながら
「そのようだな。まあ性格が凄いがな」

鈴と箒を相手にしても普通に戦闘できるその能力。そして今の目
の前で繰り広げられているナイフでの近接戦闘を見る限り。世界最
強の姉にしてこの妹ありと思えるだけの能力だ

「しかし性格まで似ていると流石に驚きますね

「……うん。ちよつと怖いかな？」

エリスと簪が午前中の魔法の訓練の後の楽しみにしているケーキ
を食べながらそう呟く。姉妹だから容姿が似るのは判るのだがブラ
コン・ヤンデレまでにな

くていいのに、それがあの戦いを見ている私達の考えだった

「それにしても最近色々あるな」

はあつと溜息を吐く弥生。その一言には色々な思いが込められて
いる、私たちもそう思っているのだから間違いない

「短い間に色々あったので余計にそう思うんだと思う」

たかだか数週間の間に魔法・ネクロ・魔導師、さまざまなことがあっ
た。

「事実は小説より奇なり。とは言うが流石に驚かされる」

とはいえそれにもう適応してしまつた私たちもどうかと思うがな
と苦笑しながら言う。皆も同じように苦笑していた。さてとと紅茶
のカップを机の上におき

「さてとそろそろ時間だな」

はやて達に言われていた訓練時間が近づいてきているのでそう言
うと

「相変わらず時間が正確だね。ヴィクトリア」

呆れたようにいうシエン。私はシエン達を見ながら持論である

「当然だ。時間に遅れるというのは非礼になる。そう言うのはしつかりしておくべきだ」

はやてやなのは、フェイトによる対ネクロ用の戦闘訓練。別になのは達はそんなことをしなくてもいいのに私達が襲われたときの事を考えて訓練をつけてくれると言っている。それに遅れるのは人としてどうかと思う。それに未知の戦闘技能と言うのを学べる機会なんて普通はあるものじゃない。その貴重な機会を失うわけには行かないと思いなから言うよ

「確かにそうだね。じゃあそろそろ行こうかな」

自分達が飲んでいたカフェオレとかを片付けながら立ち上がる。シエン達を見ながら私は少し早めにアリーナに向けて歩き出した。はやて達の訓練はとても為になるし適確だ。少しでも多く訓練や戦闘技術について聞きたいからだ。今日はどんな話を聞けるのだろうか？私はそんなことを考えながらアリーナへと歩き出したのだった

都内某所

そろそろ潮時かしらね。得れる限りの情報は手にした、ネクロ達もそろそろ私とオータムの考えていることに気づいたことだろう

「スコール。アラクネとゴルドンドーンのエネルギーの補充は終わった。火器も搭載できる分だけ詰んだ」

オータムの報告を聞きながらデータを吸い出した後。使っていたPCのデータを完全に消去してから、銃弾を撃ち込み完全に破壊する「ありがとう。オータム、これ持っておいて」

私とオータムがそれぞれ同じ内容を保存したUSBメモリを持って逃亡する。仮に補足されたとしても、どちらかが戦えば時間が稼げる。そうすればどちらかは逃げ切れるという算段だが。上手く行くかどうかは怪しいところだ

「スコール。上手く行くと思うか？」

不安そうなオータム。そういえばずっとオータムは私についてきてくれた。こういう時楽観的なことを言うよと余計に不安に思うよ、

だから私は

「間違いなく。どちらかは死ぬわ」

ユウリの残したISコーティングの技術のおかげで接触するだけで感染と言うことはない。だけど武器までは手が回らなかった。ブレード2本にAMFの加工を施すのがやっとで、後の武器は普通の銃器だけだ。正直普通の銃器でネクロと戦うのは難しい。だかた搭載できるだけの武器を搭載した。使い捨てが出来るように

「だけどここの近くにはネクロと戦っていた八神龍也達が居る。上手く時間を稼げれば逃げ切れる可能性もあるわ」

私とオータムが2人揃って生き残るにはネクロに追い詰められる前に救援が来てくれることが絶対条件になっている。

「やっぱり私が出て囿に」

「駄目よオータム。どっちが助かってても文句なしって約束したでしょ？」

オータムの言葉を遮ってそう言う。マドカがIS学園に回収された頃からネクロは私達の前に現れなくなった。もう切られたと考えるていいだろう

「へえ？良い勘してるのね！褒めてあげようかしら！」

「!!」

突然聞こえた女の声にISを展開して飛びのく。私の身体を覆うは尻尾を持つ黄金のIS「ゴールデン・ドーン」オータムは8本の足を持つ蜘蛛のようなIS「アラクネ」だが私とオータムのISは通常の物ではなかった。僅かでも生存率を上げるため、ゴールデン・ドーンもアラクネも装甲の1部をオミットしてその代わりにブースターや装甲に装備するリアクティブアーマーを搭載した

「お久しぶりね。イナリ」

「ええ。でもまあもう会うことは無いだろうケドねツ!!」

スーツが一瞬で消え。黒を基調にした着物と9つの尻尾が現れる。それを見たオータムが

「それがお前の本当に姿って事か」

「そうよ？人間の振りは疲れたわあ」

くすくす笑うイナリの背後で尻尾が動いているのが見える。イナリは尻尾の毛を1つ抜いてそれを剣に変えながら

「裏切り者は処分よね？心配しなくても良いわ。殺した後はネクロにしておけるから」

そう笑うイナリを見ながら私は

「ごめんよ。私とオータムはネクロになんかならないわよ！」

そう叫んでフロアリングの中に仕込んでおいた爆弾を起爆させ、その爆風を利用して私とオータムはマンションからぬけだした

「けほっ！ごほっ！あーもう！どうして人間はこういうことするかなあ！服が汚れちゃったじゃない！！」

腕を振る炎と煙を振り払ったイナリは服こそ汚れていたがまったくの無傷。それ所か自分の服を汚されたことに怒り

「あーもういい！ネクロ化なんてしてやらない！殺してやる！」

そう叫ぶとスコール達が抜け出した窓から飛び出し2人の後を追いかけて始めた

「人がいない……結界って言うやつか!？」

「そう見たいねえ」

爆弾の起爆は私のゴールデン・ドーンのプロミネンススコートの熱線バリアで防いだが、その分エネルギーを浪費してしまった。だがあの爆発なら誰か気づくと思っていたが、イナリは既に結界でここら辺を封鎖していたようだ

「どうする!?気づいて「ううん。気付いて貰えるわ」

オータムに言い聞かせるように呟く。結界と言うのは魔力で構成されているらしい。そんな物を街中で使えばここに居ると言っているような物だと言うと

「助かる可能性が上がるって事か！」

「そうだけど。まずは……応戦しないとね」

「見たい……だな」

私とスコールの視線の先では無数の黒い影のようなネクロと

「敗走者が！目障りだ消えろ！」

狼のような顔をしたブレストプレートを身に纏ったネクロが両手

に三日月状の剣「シヤムシール」を構えて私とオータムを見据える。更にそれだけではなく

「随分となめた真似をしてくれるわね？いいわ。希望通りネクロにはしてやらない。その代わり惨たらしい殺し方をしてあげるわー」

和服に煤をつけたイナリが私達の背後を取る。完全に退路を立たれてしまった……思わず私は

「これは少し不味いかもね」

LV1・2くらいだったらなんとかなると踏んでいた。だが実際はLV3と4が出てきた。つまりそれだけ私とオータムがネクロの核心に迫る情報を手にしているということの証明だ。なんとしてもこの場を切り抜けて八神龍也にこのUSBメモリを届けないと

「オータム。行くわよ」

「ああ」

負けはしない。生きるという執念がある、そこはネクロには無い感情だろう。私はそんなことを考えながらAMFのブレードを構えたのだった

一夏への訓練と言うなのささやか仕返しを終えて、ISの改修作業に戻っていると

「！」

広域サーチをかけていたサーチャーがネクロの気配を感じ取った。しかもその場所は街の中心。と言うことはスコール達か！情報をさぐるといっていたが、恐らく反逆しているということがバレたのだろう

「兄ちゃん。どうする？」

「言われるまでも無い」

見捨てると言う選択肢は無い。助けられるのなら助ける、そして今ならまだ間に合う

「出る。スコールは失うに惜しい人材だ」

戦闘もできて諜報戦も出来る。そして覚悟がある、自身の正義を貫

くために悪を為しても良いという覚悟が

「私1人で出る。IS学園の防衛を頼む……だが臨機応変に対応してくれればいい。いつもと同じようにな」

前みたいにIS学園の内部に直接ネクロが転移してくるという可能性がある以上。単独出撃しかない。だがはやて達はルーキーではない、自分で戦局を判断できるだけの経験をつんでいる。だから臨機応変に対応しろと指示を出してベヒーモスで街に出ようとしていると

「龍也！」

「龍也さん！」

楯無とユウリに呼び止められる。だがここで止まれば二人は自分たちも連れて行けと思うベヒーモスを発進させると、2人は自身の目の前を通るベヒーモスに飛び乗るといふ暴挙に出てきた

ドンツ!!

「ぬう!?お前らは馬鹿か!!!」

一瞬クラッシュしかけたのを立て直しそう怒鳴る。楯無はサイドカーに、ユウリはタンDEMシートの上で

「落ちる!落ちるうううう!」

「馬鹿かお前は!!!」

サイドカーに飛び乗り失敗している、楯無の襟首を掴んで引き上げる

「し、死ぬかと思った」

ぜーぜーと方で息をしている楯無を見てベヒーモスのエンジンを緩めようとすると

「そんなことをしている間にスクール達は死ぬ。心配するな、ワタシと楯無のISの回収は完了している」

準備完了と言うことか、はあつと溜息を吐き

「もう良い好きにしろ、物好きどもが」

改修が終わったとしても試験飛行もしていない。そんな状態で戦闘に出るなんて無謀としか言いようが無い。だがユウリにとってスクールは自分をタスクから抜け出す手助けをしてくれた恩人だ。そ

んな人物の危機を見過ごせないと言うのは判る。だが

「お前は何でついて来るんだ？」

「んーノリ？」

「サイドカーを切り離すか」

「冗談！冗談ですから!!!」

慌てて叫ぶ楯無を見て冗談は無しだぞと視線で告げると

「ユウリだけ行かせるのも不安だったし、それに私のISなら水のヴェールで負傷者を包み込んで護れるでしょ？だから来たの」

真剣な顔で言う楯無。確かにその通りだが……はあ

「振り落とされるなよ。一気に結界の中に突入するからな」

もう何を言っても駄目だと判った。楯無もユウリも裏の社会を知る人間だ。覚悟は済んでいるだろう、仮に済んでいなかったとしてもここに乗った以上

「冥界への直行便だ。後悔するなよ!!!」

ベヒーモスのエンジンをふかし一気にトップスピードまで加速する。

「やっぱりか！」

街の一角に結界に張られている。魔力障壁をベヒーモスの前に展開しその加速を生かして突入し無理やり結界を破壊する

「「キギヤアアアアッ!!!」」

結界の中で待ち伏せしていたISとネクロの融合態が襲い掛かってくる

「ワタシと楯無がいく！お前はスコール達を頼む」

言うが早くISを展開して空に舞い上がるユウリと楯無はそのまま前も現れたシルバリオ・ゴスペルに酷似したISとの戦闘を開始した。

「無理はするなよー」

そう声を掛けて私はそのままネクロの中に突っ込んでいった。今回は殲滅ではない、救出戦だ。短期決戦そして早期離脱その2つを目的とする電撃戦。時間はかけられない。私は魔力障壁を展開したままネクロを弾き飛ばしながら街の中心に向かって走り出した

「くうっ……化け物どもが」

オータムがそう舌打ちしコールしていたアサルトマシンガンを投げ捨てる。その銃身は断ち切られている。アヌビスのシラムシールで両断されたのだ

「オータムー」

ゴールデン・ドーンに内蔵していた火器をオータムに投げ渡し、そのまま反転し

「行きなさいー」

両手をイナリとアヌビスにむけ。火の粉を集め、それを凝縮した火球「ソリッドフレア」を放つが

「甘いな」

「炎よっー」

アヌビスはその手にしていたシラムシールでソリッドフレアを両断し

イナリは札を投げつけ、それが発火しソリッドフレアを相殺する

（くっ不味い）

ゴールデン・ドーンは第三世代型。そしてその特殊能力のソリッドフレアもプロミネンスコートも多大にエネルギーを消費する。さつきからソリッドフレアを連発で放っている。もうエネルギー切れが近い

（オータムに離脱してもらいましょう。私は……もう本当は死人だから）

10年前私は1度死んで身体の中に機械を埋め込むことで延命していた。変な話だが生身の部分も残っているアンドロイドと言う奴が1番近い表現だと思う。だけどオータムは違う、だからこそオータムだけは逃がしたいと思った。そう考えオータムのほうに視線を向けた瞬間気づいた。その影から這い出すように姿を見せたネクロの姿に

「オータムー」

「えっ!？」

咄嗟にオータムを突き飛ばすが。代わりにネクロの一撃を喰らい弾き飛ばされ

「ふふん。良いざまよね!!」

「くっ!!」

弾き飛ばされた私目掛けてイナリがその手にした剣を振るってくる。咄嗟に身体をねじって直撃を回避したが

「あぐうっ!？」

「スコール!!」

完全に回避することが出来ず右腕が切り飛ばされる。だがそれでも良かったと思う。右腕は金属の腕のほうだ、痛みはあるがパニックになる程度ではない。そのうちに離脱を

「ばーか！私達の敵には戦闘機人って言うのが居るのよ！あんたが半分機って言うのはお見通しなのよ!!」

イナリが投げはなった札が蛇になりゴールデン・ドーンの脚部装甲にまきつき。装甲ごと私の足をへし折る

「うっぐうう」

両足同時に折られた。片方だけなら機械だから平気だったのに……それに今の攻撃でISのエネルギーも底がついた。立ち上がる事が出来ず地面に倒れこんでいると

「ふふふ。これでおしまい」

笑いながらイナリが近づいてきてその手の刀を振りかぶるのが見える。エネルギーも残ってない。足は動かない

(ここまでかしらね)

でもただでは死なない。自爆してオータムの逃げる隙を作るために自爆しようとした瞬間

ブウウウウン!!

突然響いたバイクのエクゾースト音。そして次の瞬間

「諦めるには早いんじゃないか？スコール・ミューゼル!」

「なあー！守護……ぐううっ!!」

勢い良く前輪を跳ね上げイナリを弾き飛ばし、着地と同時にバイク

を反転させて私達とイナリ・アヌビスの間に割り込む

「遅かったかね？」

「ぎりぎりセーフ。ありがとう」

右腕と両足はお釈迦になったけど、命があるだけ御の字だろう、八神龍也はバイクから降りて

「オータムだったか、こっちにこい！」

「え。ああ！判った！」

瞬時加速で私の前に来たオータムに

「お前が乗って離脱しろ。ベヒーモスはサポートしろ」

『YESマイマスター』

バイクが返事を返したことに驚くが、魔法の世界の技術なんだろう理解し、八神龍也……龍也で良いか。龍也に抱きかかえられるようにサイドカーに乗せられる。オータムはISを解除してバイクに乗り込み心配そうに見ている

「問題ない、行け。LV3と4なら十分相手に出来る。だからここは私に任せろ」

黄金の甲冑を展開しイナリとアヌビスを対峙する龍也を残して。オータムは街の外へ向かってバイクを走らせたのだった。高速で走るバイクのサイドカーの中で

(なんとか……なつたみたいね)

精神的疲労と肉体的疲労で私はサイドカーの中で目を閉じて、眠りに落ちたのだった

街の中心から聞こえてくる稲妻の轟音。恐らく龍也が戦闘を始めたのだろう

「向こうは始めたみたいね」

楯無が指を鳴らすたびにシルバリオ・ゴスペルに似たシルエットのネクロの翼が爆発する。そして機動力が落ちたそのネクロを

「はあっ!!」

AMFの加工を施した長曾禰虎徹での確に無効化していく。そんな中プライベートトチャンネルで

(エネルギーはどれくらい残っている?)

楯無のIS「ミステリアス・レイディ」は改修によってナノマシンの出力が上がリ「クリア・パッション」の連射性が上昇したが、その分エネルギー消費が激しくなっている。今までと同じ感じで使うと直ぐにガス欠になる。それが心配で尋ねると

(残り半分と少して所かしらね。まとめて倒せるようになったのは良いけど消費が激しいわね)

対ネクロ用と言うことで改造したがまだ改善点はあるようだな、そんなことを考えているとハイパーセンサーに反応がある。そっちの方向を見ると

「くっ。このじゃじゃ馬が！もつとスピードを落とせねえのか！」

『NO。これ以上スピードを落とすと魔力障壁と突進による攻撃でネクロを蹴散らすことが出来ません。今しばらく我慢を』

「くそつたれ！ISを部分展開してもいてえぞ！どんなスピードだ!!!」

オータムがサイドカーにスコールを乗せて激走していた。さつきワタシ達がここに来たときより数段はよい、運転しているオータムはかなりしんどいだろう。だが

「目的は達成しているな離脱するぞ！」

「OK。ユウリ」

スコールとオータムは回収した。あとはワタシ達だ、龍也が破壊した結界のほころびに向かおうとした瞬間

「オチテ。アクセルクローク」

背筋が凍るような殺気と機械的な声。それと同時に放たれる3つの光の矢

「任せて！」

楯無がそれを水でそれを受け止め勢いを殺す。スピードが低下した矢をそれぞれ打ち落とすと同時に上空からピュアホワイトのISを身にまとった女が現れる

「私……!?!」

いつかは現れると思っていた。ワタシ達の前に

「ユウリ……ムカエにきたよ」

「セリナアアアア!!!」

ワタシが護れなかった。救いたかったその相手が目の前に現われた……ネクロとして倒すべき敵として。それを認識した瞬間ワタシは瞬時加速でセリナへと斬りかかって行った

「ユウリ!?!撤退……ああ!もう良い!私も手伝うわよ!」

そう叫んでついて来る楯無の声さえ届かない。ワタシの胸を支配していたのはセリナを救うために殺す。ただそれだけだった……

第84話に続く

第84話

第84話

ユウリと対峙しているネクロを見て驚いた

(私に良く似てる)

それもただ似ているなんて言うレベルではない。瞳孔が縦に割れてなければ完全に私と同じだ。それにISもミステリアス・レイディに良く似ている。背中に翼がある点とアクアクリスタルの代わりにビットが搭載されている点を除けば殆ど瓜二つだ

「あはーあはははははははははは!!!」

「くうっ!!!」

狂ったように笑っている点だろうか。なんとかユウリの援護をと思うのだが

「はじめてー!」

「くっ! やっかいな武器をいくつ積んでるのよ!」

私とユウリの間を2基ずつ飛び交っているビットから拡散する光弾が私とユウリをたくみに引き離す

(くっ! 狂ってるように見えるだけってことね!)

さつきから支離滅裂な上に笑っているだけだが、その攻撃の精度は恐ろしいほど高い、それに

「くっ! この程度で!!!」

「あはっ♪ユウリはやくシンでー!」

ユウリもあのネクロも面識があるようで、どこか蚊帳の外と言う感じがする。それでも私がやらなければならぬことは判っている

(今のユウリは危険だわ)

普段の冷静さがどこにもない、今はまだ直撃は回避しているが……そのうち直撃を貰うだろう。なんとかユウリの支援に入らないとそのうちユウリが撃墜される。それが容易に想像できるほど、今のユウリは冷静さを欠いている

(あーもう! 色々と考えたいことがあるのに!)

私と顔が瓜二つのネクロ。そしてユウリとあのネクロの関係性……そしてユウリが何故私に従うと言ってくれたのか？それはもしかするとあのネクロのなった少女の面影を私に見たから？

(だけどそんなことは関係ない！)

私はユウリを助けたいと思っている。ユウリが私を通じてあの少女を見ていたとかは関係ない、私がユウリを助けて、ユウリと一緒に居る。それだけでいい。まあ後で事情はちゃんと説明してもらおうつもりだけどね♪

「邪魔ー！」

私の前をゆらゆらと飛んでいるビットにはやてさんに新しく搭載してもらった短剣を投げつける。刀身にうつすらとアクアクリスタルから発生している水でコーティングされた短剣がビットに命中すると

パキンツ!!!

乾いた音を立ててビットは氷の棺の中に閉じ込められ落下していった。その威力を見て思わず冷や汗を流す

(これ本当に使って平気なの!?)

完全に凍結したってことはかなりの低温よね!? 一体どんな改造をしたの!? その恐ろしい威力を秘めた短剣に未恐ろしいものを感じながらも

「これで行けるー！」

ユウリと私を分断しているビットはこれで動かなくなった。今のうちに間合いを詰めてユウリと合流する、早くユウリをフォローしないと不味い。どんどん気持ちだけが焦ってくる、そんな気持ちになるほど今のユウリは危うく感じた

(お願いだから早く合流してきてよ！龍也さん)

今のユウリには多分私の言葉は届かない、今のユウリを止めれるとしたら龍也さんかツバキさんしか居ない。いま私に出来るのはユウリが撃墜されないようにアクアクリスタルであるネクロの攻撃を防ぐ事だけだった……

(ちっ不味いな)

ユウリと楯無がとつくに離脱しているものと思っていたがまだ残っている。しかもネクロと交戦している

(早く合流してやりたいが)

「炎よ！雷よ！我が敵を穿て！」

イナリと名乗ったネクロが連続で放つ札術とアヌビスのコンビネーションが思ったよりも硬い

「おおおっ!!!」

「烈火刃!!!」

突っ込んでくるアヌビス目掛け炎のクナイを投げつけ。イナリの札術はプロテクションで防ぐ

「ふーん。2対1だから楽勝だと思ったけど結構厄介なのね守護者って?」

「当たり前だ。ただ1人で10年以上我らと戦い続けた相手だ、そうそう討ち取れるような首ではない」

アヌビスとイナリが余裕と言う感じで会話しているのを見て確信した。あの2人の目的は私を倒すことではない。第一ネクロだって念話を使える。態々口にしたということは私を焦らせるためか挑発だ

(互いに倒したくもあるが逃げたくもある。嫌な状況だ)

戦闘能力は私の方が上だが、どちらもそう簡単に倒せるネクロではない。どちらかに集中してしまえば片方の対処が遅れる。いくら私が1対多に長けていたとしてもこの状況は不味い

(動くに動けん)

下手に動けばこの拮抗状態を崩すことになる。そうなれば何かのきっかけで総崩れになりかねない……私はイナリとアヌビスを見据えて、この拮抗状態からの突破口を探し出す事にした。倒せないと判っているのなら何かのきっかけを待ってその機に一気に離脱するしかない。だがユウリと楯無のほうにもネクロが居る、悠長に考えている時間はないだろう……その僅かな一瞬を作り出す方法はある。

だがそれには多少時間が掛かる……どうもこの世界のネクロは連携を重視しているようで本当に厄介だなと思いつながら

(私がそつちに合流するまで何とか持ち堪えてくれよ。ユウリ、楯無)

2人の戦闘センスを信じるしかない。幸いにも2人で居てくれるのが不幸中の幸いだ、2人なら互いに互いの死角を補うことが出来るからだ。私はアヌビスとイナリの間を伺いなら術式構築を始めたのだった……

いつかは対峙すると思っていた。だが冷静で居られるとワタシは思っていた、だが実際こうしてセリナと対峙するといろいろな事を思い出してしまった。研究所で互いに互いを励ましあったことや、交わした約束の数々。そういったことを思い出すたびに心が軋むのを感じた。戦いで冷静さを欠いたら待っているのは死だと判っていたはずなのに

「う、おおおおおッ!!!」

ワタシの目はセリナだけしか写していなかった。ワタシが護れなかった存在がこうして目の前に敵として現れた、後悔は激情となりワタシの心を埋め尽くした

「いこう?ユウリわたしとイツシヨにネクロのところへ♪」

けたけたと笑いながら、高速で後ろに移動しながら手にした和弓から次々と光弾を打ち出してくるセリナ。その射撃は驚くほど正確でそして凄まじい速度で連射されてくる

「それがどうした!!!」

回避なんて考える状況ではない、ワタシは腰部右に搭載された雷切を抜き放たれる弾幕を切り払おうとするが

(ぐっ!!?これは)

1発・2発と弾いただけで改修し強度が上昇したはずの雷切に目に見える亀裂が走る。それだけ高密度の攻撃と言うことか!だがそれが判ったとしてもワタシに立ち止まるという選択肢はない。輝の

入った雷切を振るい光弾を弾いていると

「ふふっ。やっとなたしのまあい」

楽しそうに笑うセリナの声が聞こえたと思った瞬間

(な。なんだあれは!?)

セリナの構えていた和弓に黒い不死鳥を模した矢が番えられていた

「これでまたいっしょだね?オチテ、ユウリ」

歪んだ笑みを浮かべたセリナの手から黒い不死鳥が放たれた。それは信じられないスピードでワタシ目掛けて突進してくる。普段ならば多少ダメージを受ければ、童子切丸安綱の威力が増すと考え受け止めようと判断するが

(これは駄目だ!?)

かすただけでも絶対防御が発動する。それほどの密度を持った攻撃だと判る。だが今から回避するには距離がた然なすぎた

(よ。避けられない!?)

セリナを追って加速していたのが仇になった。前に進んでいるワタシと向かってくる攻撃のスピードは殆ど同じこのタイミングでは避けれない

「ユウリッ!

横手から感じた驚き顔を上げるとワタシがいた場所には楯無が居て、そして次の瞬間

ドンッ!!!

まるでトラック同士の交通事故のような音を立てて楯無が吹っ飛び。ビルを貫いてコンクリートの地面に叩きつけられた

「え?」

思わずそんな呆けた声が出るくらいワタシは混乱していた。楯無に庇われた、あの致死性の攻撃から……コンクリートにたたきつけられた楯無は完全に気絶しISも解除されていた。ワタシが思わず楯無を見つめっていると

「……クスクス……」

さつきまでの大声ではなく静かにだがその笑いの中に秘めた狂気

は先ほどまでの非でない。背筋が凍るような笑い声に振り返ると

「あなたがユウリを……しばっているのね」

憎悪を宿した暗い瞳で楯無を見つめたセリナは和弓を天に向けて構え

「きえて、ユウリはわたさない！スターダストツ!!!」

上空に放たれた光弾は突然弾けセリナを中心に弾幕の雨となった。周囲のビルを破壊しながら降り注ぐその雨を見た瞬間

「おおおおッ!!!」

ワタシは瞬時加速に入っていた。降り注ぐ光弾を追い抜き気絶している楯無の前に回りこみ

「単一能力。核同調（コアトレース）……起動（ドライブ）ツ!!!」

単一技能のコアトレースを発動し迫り来る光弾に対峙していた。コアトレースはISと自身を完全に同調させる単一技能。簡単に言うのならISサイズの人間になる技能だ。ラグが無くなり普通のISとは比べられないほどのスピードと精密さを得るが、その代償は大きい。もしこの状態で絶対防御が発動しようものならばそれだけでショック死しかねないほどのデメリットがある。それを知ってなおワタシは楯無を守るためにコアトレースを使った。躊躇いも死への恐怖もなくだ

（こんなにもワタシの中で楯無の存在は大きくなっていったのか？）

思わずそんなことを考えてしまった。それでも身体は動き迫り来る光弾を長曾禰虎徹で打ち落とし始めた。刀身に輝が入り、方の装甲が弾け飛び、そこだけががれた様な痛みが走るがそれでもなお長曾禰虎徹を振るい続ける。

「はっ……はっ……はっ……」

まるで何時間もそうしていたような気がしたが、実際は数十秒にも満たない攻防だった。それでもワタシの身体はボロボロで長曾禰虎徹の刀身は中ほどから折れて存在してなかった。それに両腕の装甲は殆ど使い物にならない状況で腕が軋んでいるのが判る。それでも倒れずにセリナを睨んでいると、セリナは急に頭を抱えて

「くらいんですこわいんですしにたくないですまだなにもわたしはつ

たえてないあなたになにもかえしてないどこにいるんですかはなさ
ないでいなくならないでたすけてくださいゆうりゆうりゆうりゆう
りゆうりゆうりゆうりゆうりゆうりゆうりゆうりゆうりゆうりゆう
りゆうりゆうりゆうり」

突然壊れたように繰り返し呟くセリナ。その姿にワタシは龍也に
聞いた話を思い出していった

（拒絶反応か!?）

ネクロの細胞と人間の体は全く異なるつくりをしている。稀にネ
クロ化しても拒絶反応が起こり自我が希薄になるネクロがいると龍
也は言っていた。今ならセリナをしとめることが出来る……

（ワタシがやるんだ、私がセリナを……）

指を動かすのも辛い状況でも自分がやらなければ成らないことは
判っている。痛みのせいなのか、それともセリナを殺すことへの恐怖
なのか、震える手で童子切安綱を抜こうとした瞬間

「離脱するぞーユウリ！」

ボードのようなものに乗った龍也が上空から降下して来る。その
後ろからは無数のネクロが追ってきている

「た、龍也!? まであのネクロ「後にしろ! LV4が出てきた!」

龍也の一喝にワタシは黙り込むしかなかった。それだけの気迫が
込められた言葉だった。龍也は楯無を脇に抱えて

「乗れ! このまま離脱する」

サーフボードのような形状をしているが銃機やブレードの姿が見
える。これも魔法使いの武器なのかもしれない、そんなことを考えな
がらボードに乗る。上空ではセリナが頭を抱えて苦しんでいるセリ
ナを回収するネクロの姿があった

「何か因縁があるのは判る。だが今は我慢しろ、今回はスコールと
オータムの回収が目的だ。それが済んだ以上これ以上この場に残る
理由はない」

言い聞かせるように言う龍也。確かにその通りだ、目的は達してい
るしアマノミカゲは中破し楯無は気絶している。この場は離脱する
のが正しい選択だ

「次がある。死ななければな。時に敗走しても良い、次勝てばいいのだからな」

その言葉には妙な重みがあった。だからかワタシは

「経験談か？」

「その通りだよ？血反吐を吐き泥を啜ろうが……生き残れば勝ちなんだよ。次があるからな!!!」

ボードを急に反転させネクロの攻撃を回避する。スカイサーフインなんていうレベルではない、形容しがたい感覚がワタシを襲う。急旋回のGとかが半端じゃない

「こ、これでどうやって逃げるんだ!？」

ネクロの数はどんどん増えているし、ボードに3人乗っているからかスピードはそんなに出ていない。到底振り切れると思わずそう尋ねると

「飛べ」

「は?」

余りに簡潔な言葉に思わず尋ね返すと龍也は実にイイエガオで

「飛ぶぞ、結界の外に飛んだら自爆させる」

龍也がボードの真ん中を踏むと明らかに爆弾を思われるものが現れる。なんて者で迎えに来てるんだこいつは!?一瞬年上とか自分より強いとか、セリナのことできえ消し飛ぶインパクトがあった

「よし。飛ぶぞ!!!」

「ちよつと待てエエエエエ!!!」

龍也はそう叫ぶとワタシを米でも担ぐかのように担ぎ上げボードのうえから飛び降りた。下手な高層ビルよりも高い位置から……思わずそう絶叫してしまった私は悪くない。悪いのは

「アイキャンフライィィ!!!」

むちやくちや楽しそうにしているこいつの頭の中だ。そしてこんなの下で働いているであろう名も知らない魔法使いに同情するのだった……

「どうなったんだ？」

龍也から無理やり乗せられた大型バイクの上で息も絶え絶えと言う感じで呟くオータム。だがそれも無理はないスピードメーターは楽に200は出ていた。乗ってる人間の負担は考えるまでも無いだろう。左腕だけでなんとか身体を起こして上を見ると

「アイ！キャン！フライイツ！！」

「馬鹿かアアアアアア！！」

龍也の楽しそうな声とユウリの絶叫が聞こえたと思った瞬間

ズンツ！！！！

とんでもない音を立てて私とオータムの前に龍也が着地した。肩にユウリを担ぎ、脇に楯無を抱えてだ

「ずいぶんと衝撃的な再会ね」

考えられる中で最も凄い再会方法だろう。ユウリは珍しく目を回している。それは当然とも言えるだろう

「よう、無事に逃げ切れたみたいだな。良かった良かった」

そう笑った龍也は目を回しているユウリと楯無を地面に横にし

「よし、そろそろだな」

龍也がそういった瞬間まるで地震のような衝撃が辺りを襲った

「な。何をしたの？」

「ん？ネクロをおびき寄せて魔力爆弾で一掃した。多分上位レベルは撤退しただろうが、下級は全滅しただろうな」

爆弾……街中でなんてものを。あ、でも結界の中だからいいのかな？そんなことを考えていると

「八神龍也。これから私とスコールはどうなる？」

バイクから降りて若干の緊張の色を見せながらそう尋ねるオータムに龍也はにっこりと笑い

「客人として扱わせてもらう。なーに、IS学園でも私と敵対すると言おう選択肢はとらないだろうからな」

そう笑いながらユウリと楯無の治療をしている龍也は

「心配しなくてもいい。この世界での戸籍が無理なら私の世界で暮らしてもらおうことになるが、そこで戸籍も仕事も用意しよう。私は貴女

達を歓迎する」

随分と景気のいいことを言ってくるのねと思っていると

「今は少し休むといい、詳しくはIS学園で話をする。出来たらネクロの近況のこともそこで聞かせてくれ」

「それがお前が私とスコールを保護する条件って事か？」

「そう受け取ってもらっても構わない。受け取り方は人それぞれだからな」

笑っているだろうという気配を感じながらオータムに

「いいじゃない、戸籍と仕事まで用意してくれるなら悪くないわ。彼にしたがってみましょう」

「スコールがそう言うなら私に文句はないさ。それに死ぬかもしれない状況で拾った命だ。恩は返さないとな」

オータムは口は悪いが義理堅い、きつとこういうと思っていた。私は治療を終えたであろう龍也は

「よし。ではIS学園に帰るか。そこでスコールの治療の事を考える」

私の治療？そう聞いて私は嘲笑の笑みを浮かべて

「無理よ。この手術はネクロがやって「心配ない。私の仲間にもお前と同じ存在が居る、しっかりと治療できる。また歩けるし走れるようになるはずだ」

修理ではなく治療。半分機械である私にはその些細な言葉が嬉しかった。タスクでは治療ではなく修理と言われていたから……半分機械だからと差別されていたから

「と言うわけだよ。治療が終わってからこれからどうするか考えてもらえると嬉しい。決断するのは貴女達だからな」

そう笑う龍也はさつき同じようにユウリと楯無を担いで私とオータムの前に立ち

「転移する、下手に動くなよ」

こうして私とオータムは今までと全く異なる道を歩むことになる。そしてその先に待つものが何なのか？それは何もかも判らないが。きつとこれから私とオータムの進む道は明るい。そんな予感がして

いた……

丁度その頃ミッドチルダでは

「うーむむむ。中々興味深いよね龍也の考えることは」

デバイス開発局局长であり、詠って踊れて戦える科学者を自称する「ジェイル・スカリエツィ」は龍也から送られて来たISを対ネクロ用に改造する図面。しかも重要なところは

『考えてくれ』

と書かれてあった。ISとデバイスは似て非なる物、それをネクロ用に改造するのは並大抵の頭脳では不可能だ。ISでネクロにダメージを与えるのは難しい。それをやるにはISコアの出力UPに装甲の改修やることが山ほどある

「そこを私に考えろと？龍也も無理難題を言ってくる」

そうは言いつつ私は笑っていた。それだけ難易度の高い事を私にやら出来るといふ確信があつて言っているのだ、ならばそれに報いるのが友人としての勤めだろう

「さーて！じゃあIS学園に見せ付けてやろうか！天才の頭脳と言うものをね！」

あんな自画自賛をする天才ではなく本物の周りから正当な評価を受けた天才の力を見せてやる。幸いにも改修予定のISの元のデータは全部送られて来た。それを元に改造案を纏めるなど容易い事だ
「だが元が来なくちやなあ」

改造元がなければ改造は出来ないし、実際に見てみないと改造なんて出来はしないし、装備の相性とかも考えないといけない。

「1度こっちに戻ってきてくれるといいんだけどなあ。出来たら代表候補って言う子達もいっしょに」

その子達と話をしてどんな装備がいいのかとか聞きたいしな。自分の好みじゃない武器を搭載されても嫌だろうし

「ほんと、1度帰ってきてくれないかな。龍也」

地下の研究所からのモニターに写っている訓練所では

「うがああああ!!あにきーッ!!」

「ヴィータさんが発作を起こした!? 止めないと六課が大破するううう!!!」

「もう! どうして2日1回は暴走するかな!!!」

「話してる暇があったらアイゼンを取り上げろ! 六課が本当に壊れるぞ!!」

龍也に会えないことで凶暴性が増しているヴィータ君が暴れはじめそれを鎮圧しようとしているシグナム君たちを見て

「本当1階帰ってきてくれないかなあ。龍也」

そのうち六課が完全に崩壊してしまうその前に帰ってきてくれないかなあと僕は思ったのだった……

第85話に続く

第85話

第85話

おかしい、スコールとオータムをつれてIS学園に戻った私は妙な違和感を感じていた。いやそれは戦闘中にも感じていた……

(はやて達はどうした?)

おかしい……ここまで来てはやて達が来ないというのは明らかにおかしい。最悪の予想が頭をよぎったと同時に

「龍也君!?!戻ったの!?!」

「ツバキさん。なにか……いや、聞くまでも無いですね。楯無とユウリ、それにスコールとオータムをよろしくお願いします」

私を待っていたであろう。ツバキさんにそう声を掛けてアリーナに走る。アリーナのほうから結界の感じがする……そこではやて達が戦っているのは明白だ

(余力が無い……いや違うか)

私が来ても念話が無いという事は、念話に意識を向けている余裕がないと言うこと

(やはり同時攻撃だったか)

私の性格はネクロ達の方が良く把握しているといえる。救える可能性があるのなら救いに行くのと判っているのだ。だからこそアヌビスとイナリは私の足止めをしてきた。そう考えるとこつちが本命と考えるのが普通だろう、しかしはやて達が念話を出来ないほど余裕が無いというのが気になる。

(こういう時の予感はず絶対当たるからいやだな)

こういう時の嫌な予感が外れた験しがない、だからこそ今回も当たるだろう。

「まったく！神様と言うのはよほど私が嫌いなんだろうな!!!」

毎回毎回いつもこうだ。きつと神様と言うのが存在するのなら私の事がさぞ嫌いなのだろうと叫び私はアリーナのほうへ走っていった。

やっかいなやつらやな！私は心の中でそう舌打ちした、兄ちゃんが
出撃してから15分、仮にネクロが来てもIS学園に被害が出ないよ
うにとアリーナで待機していた。仮にネクロが襲って来るとしたら
一夏や箒達を狙うと考えてだ。そしてその予想は当たった

「ふーん。みーつけた♪」

「鬱陶しいですね。死ねばいいのにべール」

「ああ。そつちが死ぬヴィステイラー！うざいし、目障りだし！なん
であたしが集団行動しないといけないわけ!？」

「……やかましい。少し黙ってる」

「……皆そう思ってる」

「早々にターゲットを殺して帰る。ついでにつれて帰れるなら連れて
帰ればいいだろう。貴様たちを殺してな」

アリーナに直接転移してきた5体のネクロは、目深に被ったフード
で顔は見れないが人型であることは判った

(LV4ネクロだね)

(そうやろな。完全な人型やし)

人型になるのはLV4か人間ベースのネクロだけ、だが人間ベース
のネクロの割には、人間の気配がない……となると完全なLV4と言
うことだろう。しかし私達を見ずに互いに口論しているLV4。ネ
クロにも自我はあるが、相当これは酷いのではないだろうか？だがあ
の感じでは連携をとるといふ事はなさそうだ。

「はやてさん。私達はどうすれば」

そう尋ねてくるセシリアに、私は笑いかけながら

「心配あらへんよ。LV4ネクロは強いけど3人居ればいろいろ出来
るからな」

回復・フォローとチーム編成して動ける。それに3人いれば一夏達
を護りながら時間を稼ぐことも出来る。だけど

「念の為にISだけ展開しておいて、ネクロの攻撃だから直ぐ絶対防
御が発動すると思うけど……無いよりはましだから」

なのはちやんの言葉に頷きISを展開する一夏たち。今回こうして一箇所を集めたのはネクロの目的を探るためでもあったし、一箇所に集まってもらえば護りやすいという理由でもある。その証拠に
(簪たちは見ても居らん)

ローブ越しに鋭い眼光を向けているのは、箒・鈴・セシリア・シャルロット・ラウラの5人だけ、簪やエリス、弥生には目もくれていない。となると兄ちゃんの推測は当たってるのかも知れんな

「フェイトちゃん、なのはちゃん来るで、周囲警戒して囲まれんように注意や！」

5人同時に動き始めるネクロ。だがその軌道はバラバラで連携とかを考えている動きではない。だが

(動きが読めん!?)

互いに互いを邪魔して連携などとうとしていない、だがそのせいで攻撃が不規則になって防ぎにくい。防戦する場合で1番厄介な相手だ

(これはあかん!?護りきれんかも知れん)

そう判断したのはなのはちやんとフェイトちゃんも同じだったように

「各自で自分のみを護ることを考えて！」

「背中合わせで集まって互いに互いの死角を補って防御!間違っても攻撃しようなんて思わないで！」

そう判断して、それぞれ散会しようとするなのはちやんとフェイトちゃんだったが

「え!?足が動かない!？」

「くっ!?!こっちは腕!？」

なのはちやんとフェイトちゃんが驚いたように叫ぶ、そんな2人に手を向けているネクロのローブの下を見て私は驚いた

(IS、しかもレーゲンやと!?)

カラーリングは違うが、形状は紛れも無くラウラのISのレーゲンだった。この位置からではラウラ達が見えないのが、僅かながらの救いだっただ。

「甘いんじゃないの！魔導師さん！」

そう叫んだネクロは、鋭い踏み込みでなのはちゃんの懐に飛び込んで

「ほっー」

「ごっふっ!?ちゅ、中国「そーだよ！とりあえず1人死んだあ!!!」

なのはちゃんを攻撃したネクロは、危ういほど感情の起伏が激しく。鋭い肘うちを叩き込まれ硬直しているなのはちゃんの頭を掴んで地面に叩きつけた

「なのは!?」「よそ見してる暇があるのか?」「くっ!?」

フェイトちゃんに切りかかったネクロは、両手にブレードを作り出して嵐のような連激を叩き込んでいる。腕の拘束は解除されたようだが、その剣筋は鋭い。そして私は

「ふーん。私には2人掛かりなん?」

私の前には2人のネクロが居た。その後ろのネクロは戦闘に参加する気が無いかぼんやりとしているように見える

「ええ。夜天の女神は強敵と聞いてますからね」

「……不本意だが共闘するのが正しい選択だろう」

そういったネクロが腕を突き出すと同時に横に飛ぶ。近くで見て判った

(A I Cの魔力板か!?)

一瞬だが見えた、魔力で出来た糸の存在を……あれでなのはちゃんとフェイトちゃんの動きを制限したのだろう。それに

「おいきなさいな」

ローブの中から飛び出してきたレーザーを身体をねじって回避する。威力・スピードは桁違いだが間違いない

(ブルーティアーズのレーザーや)

なのはちゃんと対峙しているネクロは中国拳法と見えない打撃。

フェイトちゃんと対峙しているのは高速機動に長けた2刀流の剣士

そして私と戦っているのは相手を拘束する能力と高速のレーザーを武器にしているネクロ

(あかんな。兄ちゃんの予想通り過ぎるやろ)

あのローブの下は恐らく……出来る事なら箒達が出会う前に片付けたかったが駄目だ。思っていたよりも強い、連携をする気が無いのに互いに互いの妨害が連携になっている。セオリーの無い攻撃。こういうのが1番厄介や……

(お願いやからはよ帰ってきて！兄ちゃん)

これは不味い。ただのネクロならまだいい、だが今回は話が違う。箒達が居る上に向こうの方が数が多い、念話で助けを求める間もなく私は2体のネクロの攻撃を弾く事に意識を集中させたのだった

はやてさん達と戦っているネクロを見てると何かを感じる。自分がしなくてはいけないことがあるような、こんな所で見ていいものなのかと言う感覚がしてどんどん気持ち焦ってくる。俺にしかできないことがあるようなそんな気がする。だがそれと同時に耳元から声がある。『オレを出せ』『オレを戦わせろ』
(ぐっ、こ、この声は……)

激しい頭痛がする。この声はあのときのオレだ、全てを壊そうとしたオレの声だ。思わず頭を抱えて蹲ると

「い、一夏!? あ……あんだどうしたのよ!?!」

鈴の声が遠くに聞こえる。駄目だ意識を保て……またあんな状態になるわけには行かない。必死で歯を食いしばり意識を保とうと努力する

「一夏!? え、なんで!?! 白式の装甲が黒く……」

シャルの声に驚き、腕の装甲を見ると闇が光りを浸食するかのよう
に黒がじわじわと白式を浸食していた

「一夏! 我を保て! 飲まれるな!」

箒が怒鳴っているのだろうが声が遠い。それに眠くて眠くて仕方ない。このまま目を閉じてしまいたい

「一夏さん! すいません!」

セシリアがそう言った気がした、次の瞬間左頬を力強く張られて意

識が一気に覚醒する

「いつてえええ」

「すいません……」夏……さん?」

セシリアの疑問系の声に驚いていると

「うつまたなの」

「離れていたほうがいいかもしれませんね」

簪さんや弥生さんが俺から少し距離を取るのが見える。それになんか顔の右半分が妙に重い……まさかと思いい顔に触れると固い何かの感触

「鈴……俺の右の顔半分はどうなってる」

鏡が無いので尋ねる事しか出来ない。絶句しているセシリアではなく鈴に尋ねると、鈴は酷く悩んだ素振りを見せたが俺に答えた

「仮面が出来てるわ。前の暴走のときと同じね、それに白式の右半分も黒くなっている」

その言葉に恐る恐る右腕を上げると確かに白式は黒く染まり始めていた。それを認識すると同時に

「がっ!!?ぐうう!!うあああああッ!!」

「!!?!」

箒達の声にならない悲鳴を聴いたと思った瞬間。バキバキ!!と音を立てて仮面が構築されていく。それに伴いどんどん俺を呼ぶ声が強くなる

(ま。不味い)

もう駄目だ。これ以上オレを抑えられない、俺が必死に頭を振って自我を保とうとしているときつきまで黙り込んでいたネックロが俺を見つめて

「見つけたアアアア!!」

そう叫ぶとはやてさん達の間を抜けて俺に抜き手を突き出してくる。

「悪いがそうそう自分らの思い通りいくと思わないことだ」

「うあっ!」

黒い旋風が駆け抜けたと思った瞬間俺に近づいていたネックロは明

後日の方向に投げ飛ばされ

「お前もお前だ一夏。己をしつかり持て」

龍也がそう言うのと頭を叩かれる。すると耳鳴りのように聞こえていたオレの声は消え。仮面も砕け散った

「ぎ、サンキュー龍也」

「礼はまだ早い。多分また出てくるだろうからな」

エッ？龍也の言葉に首をかしげていると、はやてさん達と戦っていたネクロはいつの間にか戦闘態勢を解除して俺達を見下ろしていた

「あーあ、時間かけすぎちゃった。守護者が来たらそうそうに仕事を終えて離脱だっけ？」

「そうですね。遊んでいたわけではありませんが。相手が悪かったですね」

「……仕事を済ませて離脱。不満はあるが仕方あるまい」

何か口々に話し合ってると思つた瞬間5体のネクロの姿が掻き消え

「「「きやああつ!!」」」

箒達の悲鳴に振り返ると装甲が陥没し、完全に崩壊したISに埋まれるように倒れこんでいる箒達の姿がそしてネクロ達はもといいた場所に戻っていた。一体何が怒つたのか判らない

「ちっ。早すぎたか2打ちがやつとだったか」

龍也の呟きが聞こえたと思つた瞬間。5体の内2体のネクロのローブが引き裂かれる

「ちっ。邪魔されたか。貴様さえいなければ心臓を抉り出せたものを」

「血見たかったのに良くも邪魔してくれたわね!?あ。あーでもいつかそっちの方が楽しいから」

片方のネクロは悔しそうに。そしてもう片方のネクロは狂ったように笑いながらローブに手をかけて

「どうせなら身体だけじゃなくて……心も壊したほうが楽しいよね!!」

そう叫んだネクロは纏っていたローブを脱ぎ払った……そこにい

たのは

「う、嘘だろ？」

「そんなまさか……」

「どうして……」

皆が口々に信じられないという言葉の口にする。目の前で見ているのに如何しても信じられない。

「う、嘘……よ。あたしが……なんで……」

鈴は信じられないと大きく目を見開きその場にへたり込んだ。ネクロはそんな鈴を見てケタケタ笑いながら

「はい。こんにちわ、別の世界のあたし。あたしの名前はベール。LV4ベール……あんたを素体に作られたネクロよ。凰・鈴音」

黒い甲龍を身に纏った邪悪で、でも純粋な子供のような笑みを浮かべた。成人した鈴と言う印象を受けるネクロが俺達を見下ろしていたのだった

やはりか。私にとって最悪の予想が当たってしまった。茫然自失という感じで上空を見つめている箒達の前でネクロ達は次々ローブを脱ぎ捨てて

「ヴィステイラーですわ。以後お見知りおきを。殺すまでの僅かな時間ですけどね」

「ラーベル・レーゲンだ」

「……ルーシエ。皆死ねばいいのに」

「桜鬼。名乗る意味はないがな、どうせ貴様らは全員死ぬ。私達が存在し続けるために」

名乗った全員がセシリア・ラウラ・シャルロット・箒の面影を持ったネクロだった。すこし成長していて成人しているという風貌だったが、箒達だと確信できるほどに顔立ちが似ていた

「まあ？そういうわけ。いずれちゃんと言殺しに来るからさあ？今度はもう少しは強くなつてなさいよ。今のままだと殺してもつまらないしいい？」

けらけらと笑うベールは一夏を指差して

「あたしの目的はあんただけよ、イチカ。そこにいるあたしも、こいつらも全部殺してあたしはあんたを迎えに行く。だからそれまで死んだら駄目だからね」

ベールがそう告げた瞬間、無言で何処かを見つめていたルーシエが動き出し

「死ねベール!」

「ぐぶっ」

後ろから魔力刃で貫かれたベールは、その口から血を吐き出したまま

「あんたが死ねルーシエ!!」

お返しと言いたげに、強烈なフックでルーシエの顔を打ち抜いた。ポキン!と骨が折れた音がしたが……ルーシエは平気そうな顔をして

「イチカイイチカイチカ。僕のイチカはどこ?あれじゃない、もっと憎んで、僕を痛めつけて、僕も君を傷つけるから」

空ろな目でぶつぶつ呟き始めた。鈴とシャルロットはなんとも言えない表情で互いを見つめていたが次の瞬間、2人同時に気絶した。自分と同じ顔をしたネクロが友人を攻撃した。その事に耐え切れなくなつて気絶したのだろう

「まあいい。ISのかけらは貰った。これで完全な複製が出来る」

桜鬼の手には紅椿の装甲が。同じようにルーシエ達もそれぞれのISのパーツを持っていた

「逃がすと思ってるのか?」

4人の最高位の魔導師がいる、幾らLV4が5体いたところで逃げれるわけが無い

「逃げれるさ。私達ならな」

桜鬼はそう言うと、黒いオーラに包まれ。ヴィステイラとレーゲンを連れて闇に溶けるように消えた

(馬鹿な!?!結界を通り抜けただ?!?)

4重の結界を何の苦も無く潜り抜けた。桜鬼の気配があつという

間に遠ざかっていく

「よー空間圧縮開始。いっけエ!!」

ベールのその叫びと同時に、空間そのものを破壊し兼ねない勢いで衝撃砲が放たれ。結界を力づくで破壊した。とんでもない戦法だ

「まあ？ぎつとこんなもんよ？じゃくねく」

「……かえる」

ベールとルーシエは、風穴を開けられた結界から外に飛び出し転移で姿を消した

(やられた。こんな能力持ちとは思ってなかった)

LV4の能力とIS能力の平行使用による能力の強化。一筋縄でいかないわけだ

「はー追い払えただけで、よしとするしかないか」

死傷者がいない。それだけでよしとすべきだが、この襲撃は正直言くと負けだったな。私達の

「」「……」「」

ネクロ達は自分達の目的のISのかけらを手に入れノーダメージで離脱。それに対してこっちはと言うと、完全に茫然自失のまま座り込んでいる箒達に動揺の色を隠せない簪達。ほんの数分の邂逅だったがそれで十分なほど箒達の心を傷つけていた

(はやての精神操作で忘れさせるか?)

10代にはきつい出来事だったはずだ。1回記憶を操作するというのも考えたが

(いや、やめておこう)

10代と言うのならスバル達も同じだからそこまでする必要は無いだろう。むしろネクロの戦法をマジかで見ても、自分たちが戦おうとしている存在を言うのを実感してくれたと考えれば。少々高い授業料と思えば御の字だ

(それにどうせ越えねばならぬ壁だ。自分達で決断させたほうが良い)

ネクロ達が襲ってくる以上また対峙する機会は何度もあるはずだ。そして怪我を負わずネクロのことを見れた、ならばその記憶を忘れさ

せるのは良くないだろう。今回の事で箒も簪達もネクロと戦うということはこういうことだと理解できたはずだから。放心状態の一夏達を見ていると千冬たちがアリーナに入ってくるのが見える。私はその場に座りこみこれからのことに頭を悩ませるのだった……

第86話に続く

第86話

第86話

一通り休憩してから学園地下のブリーフィングルームに呼んだのだが……

(落ち込んでる……いや、ネクロの脅威を再認識したというところか)
自分と同じ顔をしたネクロを見た箒達の落ち込み具合は凄まじい、自分もあぁなってしまうのでは？と言う恐怖を感じているのが目に見えてわかる。それに箒達も、そんな箒達を見て何を言えればいいのか判らないという表情をしているが、いずれは立ち向かわなければならぬ問題だ。自分たちで答えを出して貰うことにしよう、ネクロと戦うのかどうなのかと言うことを

「落ち込んでいるところ申し訳ないが話をさせてもらうぞ、今回の襲撃で現れたお前達のネクロは厳密に言えばお前達ではない、そこを覚えておけ」

えっと言う顔をして顔を上げる箒達に私は

「あのネクロ達は魔力を持っていた。この世界でネクロ化したものは内蔵できる魔力が極端に少なくなる」

モニターに今まで交戦したこの世界のネクロの分析データを写す。簡易分析だがミッドチルダに出たネクロと比べるとこの世界のネクロは魔力量が少ないことが判る

「じゃああの私達のネクロは？」

「考えれるのは別の世界。俗に言うパラレルワールドのしかもISではなく、魔導師としての適性を持っていたお前達がネクロ化したものだ」

そう言うのと箒達は少しだけ安心した顔にはなったが、まだ不安そうにしていた。別の世界とは言え自分自身のネクロを見て気分がいい筈がないのだからな

「それは判った。ネクロが別の世界の私達を連れてきたのは「簡単だ。精神的動揺の為だ」

やっぱりかと呟く千冬。割り切れるところは割り切る。今までと違い柔軟な考えが出来るようになっていいる、これなら協力者として申し分ない

「簡易分析やけど戦闘能力はかなりの上位なのは間違いないで。私たち3人がかりで撃破出来へんかったのやからな」

はやてが素晴らしいながら紙を配る。簡易の箒達のネクロの戦闘能力の分析結果だ。箒達は少しだけ目を通して複雑そうな顔をしている。早々割り切れる問題ではないからそれはそれでいいだろう

「それで一夏はまた暴走しかけたと？」

「ああ。変な声が出て気がついたらああなっていた」

魔力コントロールは身につけたばかりだからまだ抑制できる段階ではないか、これはこれからということだな

「龍也さんもしかすると私とかエリスのネクロも居るの？」

不安そうな簪に私は正直に判らないと告げた

「今回奪われたデータは箒達のISのデータだけだ。今の段階ではなんともいえない私では」

そう言うってからブリーフィングルームの入り口に目を向けて

「ネクロの陣営のことを知る人間に話を聞こう。元亡国企業のスコール・ミューゼルとオータムにな」

車椅子の上に乗ったスコールとオータムが入室してくる、ここからが本題の議題だな。私はそんなことを考えながら難しい顔をしているユウリと楯無を見るのだった

どういう怪我をしてるんだ!?俺は龍也に呼ばれて入ってきた金髪の女性を見てそう感じた。右腕は肘から下が完全に切り落とされ包帯を巻かれている。両足は明後日の方向に曲がり痛々しいことこの上ない。だがそれよりも気になったのだ

「亡国企業ってなんだ？」

名前を聞く限り何かの組織名だと思うのだが……そんなことを考えながらそう尋ねるとマドカとユウリが

「亡国企業は第二次世界大戦中に結成された組織だ。簡単に言えばテロリスト集団だ」

「現在はISの強奪を主に活動している」

淡々と語る二人に皆の視線が集まる仲ユウリは肩を竦めて

「ワタシとマドカも元は亡国企業に属していた。まあ死に掛けているところを拾われて働かされていたというところだな」

「私も似たようなものだ。一夏」

まさか身近な所に居ると思っておらず、俺が困惑しているとスコールさんが

「でもそれは表向きの理由。結成直後の目的は「世界に対して必要な悪を行い正義をなす」という思想に従って集まった集団よ」

世界に対して必要な悪を行い正義をなす? どういうことだ?

「例えばだが。私がアメリカから強奪したISは操縦者を殺す武器が搭載されていたし、マドカがイギリスから強奪したISのビットには感電しさせるスタンガンが搭載されていた。そういう違法なISを奪うことを目的にしていた」

車椅子を押している女性がそう言う、違法ISの強奪だがそれも悪なのでは

「必要悪って言う言葉があるのよ。ボーヤ」

そう笑うスコールさんは悲しそうな顔をして

「でもそれも7年前まで、ネクロ……ベエルゼが来てからタスクの思想は完全になくなり、そして先日タスクもネクロによつて消滅したわ、いつかは裁かれると思っていたけどまさかこんな事になるなんて思ってたなかったけどね」

肩を竦めるスコールさんに龍也が

「それと千冬。ツバキ言っておくがスコールとオータムは私の客人として扱う。この世界では裁かせない、彼女達の力は必要になるはずだからな」

「なあ!? 犯罪者だぞ!? 龍也」

「それがどうした? 有益な人材だ、この状況で手段を選んでいられると思っっているのか?」

ん？つという龍也の言葉に千冬姉が黙り込むなかセシリアが

「犯罪者であれ有益なら利用すると？」

「言い方が悪いな。セシリア、ギブアンドテイクだ。スコールとオータムはネクロの情報を命懸けで何度も私に教えてくれた。その結果がベエルゼの奇襲を防げたりと結果となつて出ている。言うなれば命の恩人だ、それでもなお犯罪者と追及するのかね？」

うつと言葉に詰まるセシリア。ラウラ達も同様だ。スコールさんのおかげで助かったのにその恩人を犯罪者と言つて追及できるわけがない

「この世に完全な正義などないのだよ。判つたかね？」

穏やかな口調だが、説明しがたい威圧感を持っている龍也に俺達は領くしか出来なかつた。それにユウリにしてもマドカにしてももう仲間だ。今更過去の経歴なんてどうでもいいだろう

「それでスコールさん。貴女の知っているネクロの情報つてなにかしら？」

ツバキ先生の問い掛けにスコールさんは

「今ネクロは自分達の技術で量産した、ISシリーズをタスクの構成員に渡して片っ端からネクロ化して戦力を増強させようとしてるわ。あと数日で500人に近いタスクの戦闘員がネクロ化して「その心配はない、スコール。ちゃんと手は打つてある」

自信満々という顔で笑う龍也になのはさん達がまさかと言う顔になる

「龍也もしかして街で交戦したネクロに爆弾を」

「おう、ついでに箒とかのネクロにもつけておいたぞ。高性能の魔力爆弾をな？あたりの魔力を吸い込んで魔力を消し飛ばす爆弾だ。暫くLV3、4は動けないほどに消耗するだろうな」

爆弾……いやまあ足止め目的ならいいのだろう

「そろそろ爆発した事だと思ふんだ」

……とりあえず俺は何も言わないでおこう、藪を突いてなんとやらだ。ネクロの進行が抑えられるのならそれでいいだろう。方法とかはどうでも良いのだろう

「ネクロの進行を暫く遅らせることが出来るのか？」

疲れた様子のヴィクトリアさんの問い掛けに龍也ではなくフェイトさんが

「うん、少なくとも1週間は大丈夫だよ。あたりの魔力を消し飛ばしているから……自己回復が間に合わないはずだ。暫くは動きたくても動けないはず」

専門家が言うのならそうなんだろうな。直ぐに動いてくると思っていたから……はーつと溜息を吐き肩の力を抜く少し気持ちに余裕が出来た。それは俺だけじゃなくて箒達も同じように深く溜息を吐いている。安心すると眠くなってきてしまい思わず欠伸をしてしまおうと龍也や千冬姉それにマドカまでに呆れたような目で見られて

「いや、そのちよつと気が緩んで」

「気が張っていたからな。無理もない話すことは終わったし、部屋に戻って休むといい」

そう言う龍也は俺や箒達に向かってキャンデイのようなものを投げてきた。それを受け取りながら

「これはなに？龍也さん」

エリスさんの問い掛けに龍也はからからと笑いながら

「まあ睡眠薬とまでは言わないがリラックスできるように薬草をブレンドした飴だ。ルーキーがネクロとの戦闘をしたあと配るようになっている。気分が落ち着いて良く寝れるようになるぞ」

まああんまり多用すると中毒になるからそんなには渡せないがな。と苦笑する龍也に

「サンキュー。寝る前に舐めさせてもらう」

気が抜けたからか眠くて眠くて仕方ない。それは箒や簪さん達も同じようだしきりに欠伸をしながら俺達は地下ブリーフィングルームを後にしたのだった

「お疲れ様。はやて」

「オーライ。問題なしやで」

一夏達が出て行ってからはやてにそう声を掛ける。一夏達が欠伸をし始めたのはやての催眠魔法のせいだ。ここから先の話は一夏達がいとも話が進まなくなるそう判断したのだ

「魔法ってやつか？相変わらず不可思議なことをするな」

苦笑いを浮かべているユウリに

「便利だからな。それに精神感应系は素質が重要だから、使い手が少ないんだよ」

精神感应系を仕えるのは感受性が優れているとか観察眼に長けているとか素質が影響している。とりわけはやての精神感应は強力で違和感すら与えない、こういう時に重宝するんだよと言いながら残った面子。ユウリ、楯無、千冬、ツバキ、スコール、オータムに

「さてここからは大人の話し合いだ、まずはISの審議会だが、完全に無視する。スコール・オータムと言う人物は存在しない、判ったな？」

どこの世界も上の人間は馬鹿だ。そしてIS審議会の人間はそれに輪をかけて馬鹿だ。自分達の保身の事しか考えてない人間にどうこう言われるのは面白くないし、鬱陶しいから教える必要は無い

「じゃあどうするつもりだ？ISコアの反応があるんだ、IS審議会がいろいろと声をかけてくる筈だが？」

千冬の言葉に私とはやてはくつくくと笑いながら

「転移で襲撃。頭の中をなあ？」

「少し弄ればOK。ユウリとかマドカもそれで解決予定や。今日の夜辺り奇襲してくるわ」

面倒ごととは早めに解決。そして色々頭の中を弄って善人にすればいい。それで行動しやすくなるはずだ、千冬とツバキは絶句しているが、それで解決するならと頷く。なおこの話し合いのあと深夜龍也とはやてはIS審議会のメンバーを襲撃し、精神操作をしていたりする……

「今回の襲撃で判ったが、桜鬼たちの目的は自分達の素体の抹殺。その理由は判っている」

あの行動パターン。言動から推測したが、多分当たっているはずだと確信しながら言うと、ツバキが不思議そうな顔をして

「理由？ネクロだからじゃないの？」

ネクロは殺しと破壊を好む。それは事実だがもう1つの要素がある

「それもあるが、桜鬼達は心が砕けている。その砕けた心を生めるために箒達の魂を喰らうことを考えているのだろう」

異常なまでの精神状態に加え、一夏には過剰に反応した。それは砕けた心であったとしてもかつて自分が愛した者の面影を持つ一夏のこととは忘れることが出来なかつたせいだろう

「かなりの問題が出来てしまったな」

今の説明で理解したのだ。桜鬼達が箒達を狙って行動することをそれを見越しての魔力爆弾だったのだ

「それでどうするつもりなの？何か考えているんでしょう？」

そう尋ねてくるスコールに私は頷きながら

「戦うという意思を固めてもらう。逃げていようが隠れていようが奴らは箒達を狙う。今回は良かったがまたベエルゼやヴオドオンが出てきたら守っている余裕はない」

実際の所あの5体のネクロはかなり強い、守りながら戦う余裕なんてないのが現状だ

「でも箒とかはかなり傷心してるわよ？どうするつもり？」

「1度ミッドチルダ。私達の世界に連れて行く。ISの全改修に加えスコールの治療にはミッドチルダに行く必要がある」

「でも其の間……だから魔力爆弾とやらを使ったのね？」

ツバキの言葉に頷きながら少し訂正する

「魔力爆弾と言うのは正しくないんだ。魔力を吸収して炸裂させる、それと同時に私の魔力を散布してネクロを麻痺させる。一種のスタングレネードのような者なんだ」

ジェイル印の危うい爆弾。ネクロにとっては私の魔力は猛毒。それを利用した一種のスタングレネードなんだと言うと補足で

「前に使ったときは下位ネクロを一掃して、上位レベルも身体が動かなくなる程度の効力があつたんだ、だけどあたりの魔力を全部使っちゃうから攻めることも出来ない。時間稼ぎとか撤退支援とかにし

か使えないんだよね」

なのは追加の説明を聞いていたオータムが

「で、それで1週間は時間が稼げると、其の間にあのガキどもに覚悟を決めさせてI Sを改修するつてのが計画なんだな？」

「それしかないと言わざるを得ないな。私達を狙ってくれるのならいいが、一夏や箒を狙うのなら自分達が力をつけるしかない」

1週間猶予はそれだけ、それだけの時間で覚悟を決めさせるのは難しい。だが方法がないわけではない

「それについては私に任せて欲しい。多少荒療治になるかも知れんがそれしか方法がないからな。それに伴ってだ。夏休み中とは言え1週間の外泊だ。なんとか学園を納得させれるだけの言い訳を考えて欲しい」

I Sの研修とか何でもいい。1週間外に出かけるだけの許可が必要なのだというと

「それは私が考えるから心配ないわ。それで何時出発するの？」

「出来るだけ早いほうがいい。出来るなら明日の昼前には出発したい」

1週間と言うのは目安だ。もしかするとそれより早くなるのかもしれないからな。大まかなこれからの行動が決まった所で

「では今日はこれで解散にしよう。明日またどこからミッドチルダに飛ぶのかとかを説明する。スクールとオータムは空き部屋で過ごしてもらえるか？食事は運ぶから」

「十分よ。それじゃあその空き部屋というのに案内してもらおうかしら？あ、そんな怖い目で見なくてもいいわよ？私は別に龍也を貴女達から取る気はないから」

からから笑うスクールを見ている中。楯無とユウリが揃って出て行くのを見て

(ユウリも楯無も気持ちの整理が必要だろうしな)

今回のミッドチルダ行きはきつと気持ちを整理させるのに役立つ。同じ所においても気が滅入るだけだからな。私はそんなことを考えながらはやて達と一緒にスクールとオータムの部屋へと案内するため

に地下ブリーフィングルームを後にした

無言で歩いているユウリの背中を見ながら右手を動かす。ユウリを庇って右腕は骨折したはずだけど龍也さんが治してくれたから動く。若干の軋みは感じるが平気だ。そんなことを考えながら歩いているとユウリの背中にぶつかってしまう

「もう！急に立ち止まってどうしたの？」

突然止まったユウリにそう尋ねるとユウリは前を向いたまま

「何故何も尋ねない？」

「尋ねるって？ああ、セリナとか言うネクロのこと？」

目の前に現れただけでユウリを激昂させ冷静さを奪い。私と酷似したネクロの女の事を思い出しながら

「逆に聞くけど聞いたなら答えてくれる？」

「……それは」

言いにくそうに口を開くユウリに私はでしよつと言ってから

「無理には聞かない。龍也さんを見てて思ったんだけど、何かを背負っている人って……中々自分の弱みを見せないのよね」

はやてさんとかフェイトさんとも話をしたけど、何かを背負っている男と言うのは中々弱みを見せてくれない、焦らないの？と思わず尋ねるとはやてさんは笑いながら

『ええことおしえたるわ。良い女の条件は男のやりたいことを邪魔せんで黙って見送ることが出来る。待つことが出来る女の事を言うんや。そして帰ってきたとき、弱みを見せたい時黙って受け入れることが出来る女がええ女なんよ』

からから笑いながら言うはやてさんの笑顔は妙な説得力があり、そうなんだと思ってしまった。だから私は待とうと思う

「ユウリが気持ちの整理がついて、私に弱い所を見せてくれるのを待とうって思うのよ」

「なんだ。それは随分と悪趣味だな」

苦笑したと思ったユウリは私の予想に反して上機嫌に笑いながら「いつかワタシの気持ちの整理がいたら教える。ワタシやセリナ、そしてエリス。ワタシ達3人のことも全部何もかも教える。だからそれまで待っていてくれ」

今まで自分のことを話そうとしなかったユウリのその言葉に私は「いいわ。待っててあげる。だからその時が来たらちゃんと教えてねユウリ」

笑いながらそう言うとユウリはああ、と頷いてそのまま歩き出す。私はその背中を見ながらつかず離れずの距離を保ってゆつくりと歩きながら

(私って多分ユウリのが好きなのよね)

今まで曖昧だったけど今日のネクロのことで判った。きっと私はユウリが好きなんだろう、更識の党首として厳しい世界で生きてきた私が見つけたのはやはりお母さんと同じく、自分と同じ道を歩いてくれる人だった。

(待ってるから、その時はきっと私も自分の気持ちをちゃんと伝えられると思うよ。ユウリ)

きつとユウリが話してくれる気になったとき。それは私が自分の想いをユウリに伝える日になる。私はそんなことを考えながら無言でユウリの後について歩いた。特に話すこともないし、目を合わせることもない。だけどその沈黙は何か心地よくて、私は上機嫌にユウリの後について自分の部屋までのんびりと歩くのだった

そして翌朝。千冬含め全員の携帯に1通のメールが届いた

『本日10時。寮裏の空き地に集合されたし、魔法世界へご招待しよう。各自荷物とISを持ってくること』

それは魔法世界への招待状にしては短く簡潔な言葉だったが、その短い言葉のせいでああ、本当なんだなと全員が感想を抱くのだった。そして一夏達IS学園の生徒は魔法使いの世界へと足を踏み入れることになるのだった

「あつ。転移する所間違えた」

「……い、いやあああああ!!!」

……正しくは宙へと放り出されるのだった。そしてその惨劇を起
こした本人は

「デバイス鞆の中だったな。はっはっは!!! うっかりしてたあああああ
!!!」

ドツプラー効果を残し、真つ逆さまに落下しながら超楽しそうに笑
うことになるのだが、この時一夏達は当然ながらそんなことになる
は露とも知らず、未知なる世界へをこの目で見ることが出来るとい
うことに落ち込んできた気持ちも忘れうきうきと準備を進めていた
りする

強制フリーフォールまであと1時間15分……

第87話に続く

第87話

第87話

こんにちわ。織斑一夏です、魔法使いにネクロと言った超常現象を目の当たりにし、普通に生きていたら絶対に足を踏み入れることのない非日常に足を踏み入れてしまったIS学園の1年です。死に掛けたり、ISが暴走したり、妹がいたことを最近になってしつて並大抵の事では驚かないようにはなってきたと思うんですが、今回ばかりはそんなことを言っている場合ではありません。思わず敬語になってしまふほど動揺しています

なぜかって?そんなのは簡単です

「うおおおおおッ!!死ぬ!死ぬううううッ!!」

「はっははははは!転移する所間違えた!!」

高度3000メートルからの強制フリーフォール中だからです。箒とかもきやあああああつと可愛らしい悲鳴を上げている。はやてさん達は慣れた様子で

「兄ちゃんに転移させたのは失敗やったな」

「だね。龍也たまにうっかりするもんね」

「まあ海の上とかじゃないからまだまし?」

慣れた様子でそんな会話をしていた……俺は如何してこんなことになってしまったのかを高速で落下しながら、必死で思い返していた……そうあれは1時間前だ……

「ん?メールが来てる」

携帯にきていた龍也からのメールを見て驚いた内容は

『本日10時。寮裏の空き地に集合されたし、魔法世界へご招待しよう。各自荷物とISを持ってくること』

「魔法世界!?すげえどんな所なんだ?」

ずっと気になっていた龍也達が暮らしているという世界。未知な

る物に興味がわくのは仕方ない事だが、魔法使いの住んでいるところなんて普通に暮らしていたら見れる物ではない。10時まであと1時間、急いで準備をしたほうが良さそうだ

「招待してくれるって言うなら準備したほうがいいよな」

旅行鞆をクロゼットから引つ張り出して着替えとかを詰めていると

コンコン

「一夏少し良いか?」

少し開いた扉から顔を出したのはマドカだった。その手には真新しい旅行鞆があつた

「どうしたんだ?」

そう尋ねるとマドカは鞆を俺の前において頬をかきながら

「旅行には何を持っていけばいい?着替えは用意したがそれ以外はまるで判らない」

「あーなるほど。じゃあ一緒に準備するか?」

ぱあつと笑つて、俺の隣にちよこんと座るマドカを見ながら俺は(こういう経験つて殆どないんだよな。なんか嬉しいのかな?)

千冬姉と旅行することなんて殆どなかった。こうして準備するのにも久しぶりだ、そして妹と一緒に旅行の準備をする。なんか嬉しいなと考えながら俺は旅行の準備を進めた

「歯磨きセットとタオルは居るからな」

「ナイトキャップは?」

「欲しいならもって行けばいいと思うぞ?」

「じゃ、もって行く」

ナイトキャップをこそごと鞆に詰め込んでいるマドカを見ながら、俺は魔法世界つてどんな所なんだろと想像していた。やっぱり皆空飛んだりするのかな?

強制フリーフォールまであと25分……

「お?俺とマドカが一番最後なのか?」

龍也に指定された場所に行くところには既に箒とが待っていて各々が

「鈴。魔法使いの住んでるところってどんなところなのかな？」

「やつぱあれ？塔とか？」

「どんななんだろうね？魔法使いの住んでるところって」

「魔法使いかあ……気難しいのかな？エリス」

「どうでしょう？龍也さんとかはかなりフレンドリーですけどね」

きやいきやいと色々と龍也達の住んでいる世界についての話をしていた。前の自分達のネクロを見て少し落ち込んでいたようだったから、多分気分転換できるように龍也が考えてくれたんだなっと考えていると

「一夏。お前は魔法使いの世界ってどんな者だと思う？」

「ん。んー？そうだな……空飛んでるとかじゃないかな？」

龍也とかの魔法を見るとそんな気がするということ

「だが一夏。この魔法使いの本を見るとウキ島とか書いてあるぞ？」

真剣そのものの表情でラウラがそう言う。その手にしているのは、良くある魔法使いについての小説でどうもラウラはそう言うのを想像しているようだ

「私はドラゴンが見たいですね」

「……クリスさん。ドラゴンは危険なんじゃ？」

ファンタジーの王道。ドラゴン……見てみたい気もするが確かに凶暴そうだ。でも見てみたいと思うのも確かだ

「ドラゴン……大きいのだろうか？やはり」

「どうかしら？そもそもドラゴンって直ぐ見れるの？なんか危ないとかで隔離されてそうだけどね」

ユウリと楯無さんもそんな話をしている。魔法使い、小説やアニメ、ゲームで良く見るテーマだ。実際の魔法使いがどんな生活をしているのか？興味は尽きない

「待たせたようだな。すまない」

龍也たちがゆっくりと歩いて来る。千冬姉とツバキさんの姿もある。勿論荷物らしい鞆も持っているのだが

(千冬姉何を持ってきたんだ？)

片手鞆だけしか持ってない千冬姉。一体何を持ってきたのだろう

か?と考えていると

「ではミッドチルダに行く前に幾つか注意事項を言っておく」

龍也が俺達を見てそう言ってから説明を始めた

「まず立ち入り禁止区には向かわないこと、ネクロが出る危険性があるからな」

向こうでもネクロは出てくるのか。イヤむしろ魔法の世界だから出現率が高いのかもしれない

「あと当然ながら向こうとこっちは価値観は全然違う。こっちと同じで女尊男卑のつもりで居ると痛い眼を見るので気をつけること」

喧嘩っ早い奴も居るからな。戦闘凶が……とか龍也がぶつぶつ言っていた。戦闘凶って大丈夫なのか?

「あと泊まる所はまだ決めてへんから、多分兄ちゃんの屋敷か六課の空き部屋になると思うからそこそこよろしく」

屋敷?龍也って屋敷を持っているのか?新たに与えられた情報を整理していると

「まあ後はおいおい説明していくから。じゃあ行くか」

龍也がぼいっと何かを投げると黒いひずみになる。それはネクロが消える空間に似ていた

「これは?なんなんだ龍也?」

強制不利フォールまであと4秒

「転移ゲートとでも言うものだ。潜ればミッドチルダに着く」

「凄いなだね。魔導師って私とエリスも出来るようになる?」

「ん〜練習すれば出来ると思うよ。結構簡単だし」

強制フリーフォールまであと2秒

へー便利だなっと思いつながら龍也達と一緒にひずみの中に足を踏み入れ。真っ先に飛び込んできたのは雲ひとつない青い空だった。そして感じる浮遊感

「あつ。転移する所間違えた」

龍也がさらりと言う。恐る恐る下を見ると地面がない……それ所か、かなりの高い所に俺達は浮いていた

「「い、いやああああ!!」」

それを認識した瞬間俺達は自然落下を始めたのだった

強制フリーフォールスタート……

「ふっはははは!!イヤツツホオオオオオオウ!!!」

「何でそんなに楽しそうなんだアアアアア!!!」

超楽しそうに笑っている龍也。だがその落下スピードは俺たちより速い。頭を下にしているせいだろうか?と言うかこのままだと不味い。地面に叩きつけられてザクロだ

「!そうですわ!IS!ISを展開し……集中できませんわああ!!!」

セシリアがISを展開すればいいと気づくが、強制フリーフォール中で集中できないらしく絶叫している

「ほっ!セーフ」

「まったくだな」

楯無さんとユウリはあっさりとISを展開して、宙で姿勢を正してラウラや箒に手を貸し。ISを展開しやすいようにサポートしている。ツバキさんは

「ありがとう。エリスちゃん。簪ちゃん」

簪さんとエリスさんに両脇から抱えられてゆっくりと降下している。これでは千冬姉とマドカ……あっ!

(はっ!スコールさん達は!?)

ネクロの攻撃で右腕と両足を失ったスコールさんは、車椅子だったはずと思えば上を見ると

「大丈夫か?スコール」

「ありがと、オータム。流星にちよつと焦ったわ」

8本の足を持つISをオータムさんが展開していて、生身の2本の腕とISの4本の腕でスコールさんを支えてた。それを見て一安心しているユウリの櫓が飛ぶ

「今のうちにISを展開して姿勢を正せ。ダメージレベルはDだがPICは問題なく使用出来るはずだ。はやて達はもう騎士甲冑だったか?それを展開しているぞ?」

ユウリの視線の先では、なのはさん達が騎士甲冑だったかBJだったか忘れたが、それを展開して宙に浮いている。箒たちのISは前回

のネクロの攻撃で大破しているが、PICくらいは使えるのか、ゆつたりとだが降下している。それを見て俺も白式を展開しようとするが

(全然集中できねえ！)

弥生さんやシエンさんがどんどんISを展開していく中。俺だけが降下している。このままだと不味いと焦れば焦るほど、展開が出来なくなつて来ていた

「一夏。早くISを展開してくれないと私も姉さんも不味いんだが？」

「ああ。私はISを持ってないし、まどかは修理中だからな」

スカートを両手で押さえ。鞆を小脇に抱えている千冬姉とマドカを見る。だが表情はいつも同じなので焦っているように見えないのが凄い、鉄のポーカーフェイスなのかか思わず考えてしまうほど俺はうろたえていた

「判ってるから、プレッシャーをかけないでくれ！」

そう叫んでから目を閉じて、意識を集中させることで漸く白式が展開した。ほっと一安心し千冬姉とマドカを抱えた所で

「あ、デバイスとIS鞆の中だ。うっかりしてたなあああああ!!!」

「兄ちゃん!?!」

「龍也さーん!?!」

「龍也ーツ!!!」

はやてさん達の悲鳴と箒達の絶叫。そして龍也のドツプラー効果を残した絶叫が辺りに響いたのだった……

しまったなあ……うっかり鞆にISとデバイスを入れたままだ。

真つ逆さまに降下しながらどうした者かと考える

「うーん。どうするかな？」

そんなことを考えていると視線を感じてそっちに視線を向けると

「よお。ウエンディ久しぶりだな」

ボード型のデバイスの上にはしゃがみこんで、こつちをみているウエ

ンデイと視線が合った

「うん……久しぶりっすね。龍也兄」

降下している私とそんな私に合わせているウエンデイ。とてもシユールな光景だ

「何時帰ってきたんすつか？」

「ついさっきだな。間違えて上空に転移してしまったんだ」

「うっかり？」

「うっかりだ」

シーンと嫌な沈黙が辺りに満ちる。それよりなんでここに居るんだらうということが気になり

「何してるんだ？こんな高さで？」

「デイエチ姉に射撃してもらって回避の練習っす。と言うかこんな状況で良くそんなこと聞けるっすね？」

呆れたと笑うウエンデイは、立ち上がりながら手を私に伸ばして

「ほい。乗るっすよ」

「すまん」

バニンシングバードの上に乗った所で、下から魔力弾が放たれる「つととー！」

急旋回を切ってその攻撃を回避するウエンデイ。それを見て

「ふむ、良いことを思いついた。操縦を代わってくれ」

「ほえ？別に良いっすよ？」

立ち位置を交代して後ろのウエンデイに

「しっかり捕まってる。バニンシングバードの使い方を見せてやる」

「りょーかいっす♪」

えへへっと笑ってウエンデイが私にしがみついたのを確認してから

「行くぞ!!!」

バニンシングバードの機首を上に向けると同時に急加速をして、下からある程度で放たれる正確な射撃を回避しながら雲の間を突き抜けて、一夏達が居るところまで昇っていった

落ちて行ってしまった龍也の後を追って降下していると

「ん？下から急接近してくる反応あり……龍也か。良かった」

ハイパーセンサーに反応があり、多分龍也だろうと思っていると雲の間を突き抜けてサーフボードの様な物が飛び出してくる。

「あー、ウエンデイがおったんか……まあGJやな」

「たまには役に立つね。あの子も」

「なのはもはやてもウエンデイに当たりきつくくない？」

フェイトさん達がそんな話をしていると、雲の間から光り輝く光弾が何個も何個も飛び出してボードを追いかけていく

「ギースタートだ!!」

龍也がそう言うのとボードが正面を向く、良く見ると龍也の後ろにしがみついている紅い髪の少女の姿に気づく

(知り合いだよな？多分)

そんなことを考えているうちに龍也の操るボードが動き始めた

「よっー」

時間差で襲ってくる魔力弾と言う奴を反転や降下を織り交ぜて、鮮やかな軌道を描きつつ舞うように魔力弾を回避していく

「す……なになあれ」

「波乗りしてるみたいだな」

シエンさんや弥生さんの驚愕の声が聞こえる。サーフィンをしているかのような仕草で、どんどん増える魔力弾を回避していく、それを射撃している人も感じ取ったのかどんどん射撃の勢いが増していくが

「ふふん。その程度じゃ私は捉えれんぞ、デイエチ」

龍也が自信満々に笑うと、龍也は姿勢を変えて前傾姿勢になる。その姿はサーファーの姿にそっくりだ

「射撃なら交わすのなんてわけないんだよ」

右へ左への連続のクイックターン。上から見ると良く判るがジグザグ移動を繰り返し射撃を巧みに回避している。しかもスピードも調整して射手を幻惑するような動作も組み込まれている。

「ん？つぎはそう来たか。ならこうだ！」

時間差の7連射が雲を突き破って迫ってくる。それを見た龍也は嬉しそうに笑い。まずは最初の弾丸をボードを前に進めて回避、時間差で迫ってきた2発目・3発目をバク宙のような動きで回避。4発目・5発目はボードを大きく横に切り半回転して回避し、最後の2発は

「こういうことも出来るんだよ、私はな」

ボードの機首を上げて上に逃れ、ある程度加速がついたところで「同じスピードなら通り抜けれない道理は無い」

6発目と7発目の微妙な隙間にボードをねじ込み、鋭く回転しながら7発の魔力弾を全て回避した。それを見ていた箒達が

「凄いな。龍也はあんなことまで出来たのか」

「芸達者ですわね。本当に」

ISを展開して余裕が出来たのか箒やセシリアがそんな話をしてる。美しい蒼い光りが帯のようにボードの通った道に残り確かに美しい。しかもそれを

「上下左右か。ならこうだ!」

「うっひゃあああ!」

右宙返りや高速ターンで包囲してきた魔力弾を鮮やかに回避して俺達の方に近寄ってくる

「やー何とかなる者だな。意外と」

からから笑う龍也の後ろで赤い髪の女の子は「め。めえ回るすうっ……」と呻いていた。あれだけ旋回や空中回転を繰り返されたら気持ち悪くもなるというものだろう

「兄ちゃん。うっかりもたいがいにししいよっ!」

起こった感じではやてさんが言うのと龍也は右手で頭をかきながら「すまんすまん。ちよつと気が緩んでみたいだ」

そのちよつとで俺達は死ぬかもしれない状況だったのだが、こうして無事だったし、龍也も悪いなど謝ってくれたのであえて口にはしなかった。

「そろそろ地面に着く。着地の準備をしておけよ」

そう言うのと龍也は少し距離を取ってから機首を上に向けて

「ぎーてラストトリックだ。ちゃんと覚えろよ！ウエンデイ」

「は。はいっす」

へろへろだけど大丈夫なのか？あの子？そんな感想を抱いているうちに龍也が一気に加速していく。その龍也を追う様に無数の魔力弾が殺到していくが

「すごい、微妙な緩急を使って全部回避してる」

「勉強になるな。空中戦のお手本のような動きだ」

急加速と減速を組み合わせた、その機動は確かに空中戦のお手本のような動きだ。しかもクイックターンを織り交ぜることで魔力弾同士をぶつけて防御もしている。その機動は十分に戦闘技能として流用できると思っっているうちに地面に着きISを解除するとそこには

「なんだお前達は？」

「知らない人」

目付きの鋭い青い髪の女性とその隣にキャノン砲を抱えた茶髪の女性がいた、さっきから攻撃していたのはこの人たちなのか？

思わず身構えると

「よーとー！久しぶりやなー！」

「はやて？と言う事はこいつらはあれか？お前たちが行っていた世界の人間か？」

「そうそう。ちよつと色々あつてなあ連れて来たんよ」

にこにここと笑うはやてさん。どうやら知り合いのようだ、ほつと溜息を吐いていると

「よつとー！こんなもんだな」

龍也が最後に着地し乗っていたボードを跳ね上げて立たせる。ウエンデイと呼ばれていた少女はすこしぐったりしていたが問題なさそうだ

「なんだ、急に動きが変わったと思ったらやつぱりお前か八神。訓練の邪魔をされては困るぞ」

「すまんな。デバイスを鞆に入れててな。真つ逆さまに落ちてしまったのだよ」

笑いながら言うなよ、と言いながらとーれと呼ばれた女性が深く溜

息を吐きながら

「まあいいがな。では私達は訓練の続きがあるから行くぞ。また後でな」

2人の少女を連れて歩き去っていった。どうも知り合いみたいだけどころか関係なんだろうか？

「龍也。今の3人は？」

「ジェイルを覚えてるか。あいつの娘だよ、それで私の部隊の構成員。あれでも一芸特化でな。トーレは高速機動、ウエンデイは応用力、デイエチは超精密射撃。私の部隊はどちらかと言うとそう言うエキスパートの集まりなんだよ」

若そうに見えたけど、龍也が言うんだからきつと俺たちなんかよりも強いんだろなあと思った。龍也は俺達を見てにこりと笑いながら

「多少のトラブルはあったが、ようこそ私達の世界へ」

多少のトラブルで片付けて良いレベルの事態だったのかは不明だが、魔法世界に来る事ができたようだ。さつきまでの異様な緊張感が溶けて深く溜息を吐いているとエリスさんが

「龍也さん。ここは見た所の森の中なのですが……ここは一体どこなんですか？」

辺りには見たことのない動植物の数々、それに地面の感触も少し違うような気がする。龍也はふむつと頷き顎の下に手を置いて

「あ、不味いな……ベルカの訓練地区だな」

辺りを見てそうつぶやく。ベルカの訓練地区？地名が判らないからなんとも言えないんだが、龍也を含めはやてさん達も嫌そうな顔をしているのが判る。なんとなく不安に思っている

「だね……ここに居ると不味いね。主に龍也が」

えっ!?ここにいたら不味いの!?嫌そうな顔をしている龍也を見て不安になっていると、ザザザッ!!と木々を掻き分ける音がしたと思つた瞬間何人もの屈強そうな男の人たちが来てぎよつとしてしまった。全員が全員屈強そうな男性で……あつ少し女の人も混ざってるけどそれでもこれだけ屈強そうな連中に囲まれると恐怖を感じる。なお

千冬姉とマドカは平気そうな顔をして

「なあはやて、こいつらはなんだ？」

「敵か？敵なら戦うが」

敵Ⅱ戦うの凶式で物を考えているから怖い。魔法使い相手でもまったくの自然体、俺の姉と妹は豪胆すぎると思う。そんな2人にはやてさんは

「敵ならいいんやけど、ちやうんよなあ……」

龍也に負けないくらい嫌そうな顔をしたはやてさんが溜息を吐くのと殆ど同じタイミングで俺達を囲んでいた人たちが

「「神王陛下様！」」

そう叫んだと思うと同時にざっと一斉に片膝立ちになる。えっえっ？神王陛下下って何!?俺たちが混乱しているとはあつと深く溜息を吐いた龍也はやれやれと頭を振りながら片膝立ちの集団を見て

「どうもこのままと言うわけには行きそうに無いな。来いって言うんだろ？聖王教会に」

「はい！少しだけでもよろしいので顔を出して頂きたい」

龍也は心底嫌そうな顔をしていた。聖王教会って言うだけあつて宗教的な場所なのか？と俺が思っている中。龍也ははやてさん達に「すまんがカリムとかシャツハは止めてくれよ」

「了解」

話についていけない中。先頭の屈強な男性が俺達を見て

「神王陛下様のお客人だ！荷物を運べ！」

「了解！」

一斉に敬礼して俺達の荷物を抱えて走っていつてしまおう。だから神王陛下下ってなんだよ!?箒とかも突然のことに呆然としていた

「あの……龍也君？神王陛下下ってなに？」

ツバキさんの問い掛けに龍也ではなく俺達を見ていた男性が

「神王陛下とはベルカの土地を修めたもつとも偉大で優秀な王のこと！そして八神龍也大將様はその実子！世が世ならば王としてこの世界を治めるかたでございます！」

……え？龍也……王様なの？俺達の視線が集中する中龍也はふ

かーく溜息を吐き

「だからここは嫌いなんだ」

本当に嫌そうな顔をしてそう呟いた。そして俺達は騎士の皆様（後に聞いたがこの土地に居る魔法使いは騎士と称されるらしい）に半分連行されるような形で聖王教会と言う教会へと連れて行かれるのだった。その途中龍也は心底申し訳なさそうな顔をしてすまんと謝ってきたのだった……

第88話に続く

第88話

第88話

龍也さん達の後ろを歩いて森の中を歩くこと5分。私達の前に荘厳と言う表現が相応しい石造りの教会が姿を見せた

「これが聖王教会？」

「そうや、聖王教会。ベルカの土地の最重要施設や。んで聖王の家系を神聖視している場所や」

聖王の家系……凄いな前だけど……ちらりと龍也さんを見ると龍也さんは頭をかきながら

「私は滅んだ聖王の家系の最後の直系だ」

最後の直系……でも滅んだ家系なんだよね？どういうことだろう？と私達が首を傾げていると龍也さんが

「私の生まれはこの時代より数千年以上前だ。ネクロが1番最初に現われ世界を滅ぼそうとした時代、その時代のネクロを倒した王「神王」の息子だ。だから本当はお前たちよりはるか年上だ」

とんでもない話になってきた……龍也君は本当は過去の人間なの？魔法ってそんなことまで出来るの？

「今の時代の魔法使いだと無理だよ。時間跳躍は神王の家系だけの稀少技能。今使えるのは龍也くらいだよ」

時の巻き戻し……長いこと人間が夢見た理想。魔法も大概だけどこれは極め付けだ。そのとんでもない事実私達が驚いていると

「限定的だ。それに使う気もない。対して気にするまでも無い」

何か不機嫌そうだ。何が原因なんだろう、私がそんなことを考えていると龍也君が不機嫌な理由は直ぐに判った

「神王陛下万歳ッ！」

ザッ！と一齐に万歳三唱が始まる。龍也さんの顔が死んでる、今まで見たことの無い顔だ

（これはあれかな？エリス。心底鬱陶しいって思ってるってことなのかな？）

(それっぽいわね。もう鬱陶しいって態度が顔に全部出てる)

ひそひそ話をするなか龍也さんはよしつと頷いてから

「顔を出したから帰るぞ」

くるりと背を向けて歩き去ろうとする龍也さん。本当にここが嫌いなんだと判る

「ちよつと待ってください。神王陛下!」

シスター服の私たちと同年代そうな少女が笑顔で龍也さんに言う
と

「うざい。かえる。車よこせ」

簡潔すぎる!?!しかも最後の車よこせって何!? I S 学園とここだと全然態度が違いすぎる

「お願いしますよお! たまには顔を出してってください! 司祭様がうるさいんですよおお」

「纏わり着くなりムヤ! 私はここは嫌いなんだよ!!」

「お願いしますううう!!」

龍也さんの腰にしがみついて滝のような涙を流す少女。これだけ見ると酷い図式だ

(あーリムヤかあ……兄ちゃんリムヤに甘いからなあ)

(えっ? そうなの?)

(うん。元は孤児で龍也さんとここにいてき。私はシスターになりたいですって言ってここに来た子なんだ)

「お願いしますうおとうさーん!」

「ああ! もう判った! 判ったから泣くな!!!」

あ、龍也さんが折れた。と言うかお父さんって……

(お父さんか……龍也が引き取った孤児だからか?)

(そうや。中にはお兄ちゃん呼んでる子も居るで? 兄ちゃんあんまりそう言うの気にしないから)

(気にするべき所だと思っただけど!?)

普通は気にするところだと私も思う。龍也さんは、はあつと深い溜息を吐いてから

「悪いが街の案内は少し待ってくれ。カリムのところに顔を出すか

ら。それまでなのはとかに聖王教会の中を案内してもらおうといい結構な名所だぞ」

そういつてリムヤさんに先導され教会の中に入っていく龍也さんとはやてさん。残った私たちは

「どうぞこちらへ、観光コースはこちらです」

先頭にいた女の人に案内され、龍也さん達とは違う出入口から教会の中に足を踏み入れたのだった

聖王教会の中の装飾は外の見た目と同じでかなり洗練され美しい物だった

「はあ……これはまた見事だな」

思わずそんなことを呟いてしまった。私は無宗教だが、この建物の素晴らしさは判る

「確かに綺麗ね。こんな場所ならオクトさんも連れてきたかったなあ」

私の隣でツバキさんがそう呟く。観光名所と龍也が言っていたがその言葉に偽りは無かったようだ

「なのはさん。写真とか大丈夫？ 記念に1枚撮りたいんだけど？」

「うーん、壁とかの方を向けてたら大丈夫かな？ 展示品とかの写真は駄目だよ？」

嵐が高町にそう尋ねているのが見える。一夏やマドカも

「はーあんまり俺はこういうの興味ないけど凄いな」

「ステンドグラスだな。綺麗だな」

巨大なステンドグラスを見上げてそう呟いている。美術鑑賞などやったことの無い私でさえ、ここにあるものが一品と言うのがわかる

「素晴らしい絵画ですね。ヴィクトリアさん」

「ああ、確かに素晴らしい絵だ」

「普通に美術館に飾ってあってもおかしくないね、この絵なら」

イギリス組みのオルコット・スミス・デユノアは飾られている絵を見てそんな感想を呟いていた

「……これがこの世界の刀剣か。何と言うか機械的だな」

「だな。なんだろう？このスリット見たいのは？」

「それはねカートリッジシステムだよ。カートリッジってなんて言えばいいのかな？サブタンクかな？それを装填して一時的に魔力を底上げして攻撃力とか防御力とか、デバイスの特殊機構を発動させるのに使うんだよ」

フエイトの説明を聞いたユウリが

「その機構はISに流用できるのか？」

「う？うーんどうだろう？私はエンジニアじゃないし。後で行く六課で聞いてみたらどうかな？専門家も居るしそっちで聞いたほうが良いと思うよ」

「そうか。ネクロと戦って判ったが、今のままのISでは駄目だと実感した、もう少し能力の底上げをしたかったんだがな」

龍也がスコールたちを連れてきてから何かユウリの表情が硬い。そこで戦ったネクロが関係しているのだろうか？

「お姉ちゃん。ユウリさんなにか悩んでるみたいだけどいいの？」

「いいのよ。待ってみるのも大事なのよ、心配しても悩んでも結局話してくれるのを待つしかないからね」

「あら？楯無は良い女の条件でも知ってるのかしら？」

「ええ、待てることですよ？」

「正解。良い女の条件は待てることよ。女尊男卑とか関係なくね、男っていつつも何にも言わないで、進んで行っちゃうからそれを時邪魔しない待てる女が良い女なのよ」

「スコールの持論だな。まあそれに関しては私も賛成だけだな」

なんかユウリ達を見て良い女談義をしている。なんでこんな所であんな話をしてるんだ？

「はい。シエンはもうちよい詰めて。クリスとラウラも。はいチーズ」

美術鑑賞興味なし組みが記念撮影している。それを見て私は鞆からカメラを取り出して一緒に回っていたツバキさんに

「私達の写真を撮ってもらいたいんですがいいですか？」

「一夏君とマドカちゃんど？」

「はい、やっと揃ったんですからね写真を撮っておきたいと思っただんです」

写真は大事な物だ。例え自分の傍に今その人物がいなくても、ここに居たんだと思いい出せるからだ

「判ったわ。撮ってあげる」

「ありがとうございます」

一夏とマドカに写真を撮るぞと声を掛けると一夏は判ったとすぐ頷いたが、マドカは不思議そう顔をしているので

「家族の写真を撮ろう。もう1度マドカ・一夏。私が揃った記念に」

「！判った♪」

私の右隣に一夏、左隣にマドカ。1度失ってしまった大事な者をもう1度手にすることが出来た。もう2度と忘れることは無いだろう（今度こそ私が守りきってみせる。家族を）

2度と失わないと決意を新たにした。この写真はもう何年も増えることの無かった家族の写真のアルバムの1番最初のページに張られることになるのだった

「待たせて悪かったな」

一通り教会の中を見終わった所で龍也とはやてが来る。龍也は少しばかり疲れた様子だった

「疲れた顔をしてるわね？どうしたの？」

ツバキさんの問い掛けに龍也はやれやれと肩を竦めて

「管理局を辞めて、聖王協会の所属になれとうるさかったんだよ。私は管理局をやめる気などないからな。何を言われてもNOとしか言いようが無い」

ふうつと溜息を吐きながら行った龍也は出口のほうを指差して

「車を出してくれるそうだ。それで管理局まで行って滞在許可を出してもらいに行くぞ」

滞在許可。ビザと同じような者か、それが必要だというのなら逆らうことに何の意味もない。わかったと頷き外に出るとワゴンタイプの車が3台用意されていた。手際がいいな

「それぞれはやて、なのは、フェイトが運転する。荷物はもう載せてあるから好きな車に乗ってくれ」

そう言っつて別の所に歩いていこうとする龍也に一夏が

「お前は どうするんだ？」

「バイクで先に行つてる。事情を説明しておかないと、いきなり滞在許可をくれと言っつてもらえる物ではないからな」

そう言っつて龍也は私達の前から歩き去り、暫くするとバイクのエクゾースト音が遠ざかっていくのが聞こえた

「んじや。車に乗つてな？今から行けば昼食ごろには手続き終わると思っつで」

はやてのその言葉に頷き私達は車に乗り込むと車はゆっくりと走り出し、私達は魔導師が暮らす街へと走り出したのだった

「なんか想像と違っつな」

なのはさんの運転するワゴンの窓から見える街並みは俺が想像していた物と大分違っつていた。何と言っつか物凄く文明が発達した都市っつていっつ感じだ。ラウラやクリスさんもなんか違っつと眩いっつている。なのはさんの運転する車には俺・マドカ・千冬姉・ラウラ・クリスさん・シエンさん。はやてさんの車はスコールさん・オータムさん・ユウリ・楯無さん・セシリア・ヴィクトリアさん。フェイトさんの車は鈴・箒・シャル・簪さん・エリスさん・弥生さん・ツバキさんとなっつている。

「想像してたのっつて塔とか浮島とか？」

運転しながら尋ねてくるなのはさんにラウラが

「魔法使いの小説にはそんな事が書いてあっつた」

「あはは！うん。確かにそう言っつ魔法使いが居る世界もあるよっつ。」

世界によっつて違っつ、うーん文化の違っつとかなのか？俺がそんなことを考えているとマドカが俺の服の袖を引いて

「一夏。あれを見ろ。龍也の写真集発売と書いてあるぞ」

「はっつはは何を馬鹿……マジかよ。すげえ行列」

マドカのジョークだと思いきや笑いながら窓の外を見ると、龍也の顔がプリントされポスターと昇りが多数配置され。販売するであろう本屋の前には長蛇の列。しかも女性ばかり……店員らしい人が整理券を配っているのが見える

「なのは、龍也は人気者なのか?」

もしかして物凄い有名人なのかと思いつきながら尋ねると、なのはは笑いながら

「人気者って言うよりカリスマかな?結構龍也さんは街の人を助けるし、復興資金をポケットマネーから出したりしているからね。知らない人は居ないんじゃないかな?」

人気者じゃないか……うーんなんて表現すればいいのか判らないけど有名人ってことでいいのかな?それとも英雄とでも言うのだろうか?

「なのはは買わないの?」

クリスさんの問い掛けは少しおかしいと思った、こうして買う人は多分龍也を滅多に見れない人のはず、一緒に働いている……

「うん?買ってるよ?定期購読にしているから家に届くから態々ならなくてもいいんだよ」

……俺がおかしいのだろうか?なのはさん達が何を考えているのか一瞬本当に判らなくなった。

「顔を見て話すのもいいんだけど、昼寝してる所とかは滅多に見れないからね。写真も欲しいんだよ。だってほら龍也さんの写真ってブロマイドで4枚500円くらいで販売されてるんだけどさ!」

販売されてるの!?!と言うかブロマイド!?!それでいいのか魔法使い!?!昼寝してる男の写真を見て何が面白いんだろう?魔法使いってもって神秘的だと思ってたんだけど、予想以上に俗物的だった事に驚愕し……物凄く並んでいる女性の数に呆れる俺を乗せて車は本局と呼ばれる場所に到着したのだった。車から降りてきた箒達も

「魔法使いってもっとこう神秘的だと思ってた!」

どうやら俺と同じ感想を抱いていたようだった

「じゃあないやん?魔導師も人間なんやし見たいものは見たいし、欲

「しい物は欲しいんやで？」

「妙に説得力があった。それはきつと我が道に行く性格のはやてさんだからこそその説得力だと思った。多分千冬姉とかマドカが行っても同じような説得力があると思う」

「ま、とりあえず滞在許可証を書きに行こうよ。龍也が準備してくれてるはずだからさ」

「フェイトさんがそう言っただけで早く早くと言っただけで歩き出す。その背中を追って本局と言う建物に入る」

（うわ。すげえ）

「IS学園の設備よりも1ランク。いや3ランクは上だろう。あちこちに展開された空中ディスプレイに丸いなかの装置。その上に乗った人の姿が消える。魔法使いのエレベーターのような物だろう。未知なる文明の科学力の高さに驚いていると」

「こつちやで、兄ちゃんのエレベーターは……はよ来い」

「おいでおいでと手招きするはやてさんに頷き。丸い装置ではなくエレベーターに乗る。そのなかで」

「龍也君のエレベーターって？」

「そのまんま。兄ちゃんも管理局大將やからね。エレベーターはあつて当然やで？まあ六課に帰れば私達もエレベーターあるけどな」

「たびたび出てくる六課と言うのはなんなんだろう？話を聞く限り龍也はやてさん達が所属している部隊のようだけど、そんなことを考えているうちにエレベーターは止まり。その階の奥のエレベーターに入ると」

「来たか。書類の準備は出来てる、紙に名前とか書いてこつちに渡してくれ。こつちで処理するからな」

「もうどこの豪邸だと思ふような部屋の机に龍也が腰掛けながらその声を掛けてくる。後ろを見ると別荘であつたシャルナさんが控えていて。一瞬物凄く覚めた目で見られて肝が冷えたが、直ぐに視線がそれたのでほっとした」

「それを書いたら昼食にしよう。私が良く外食で使う店があるんだ、そこの予約をしてある」

手際がいいなあ。俺達全員分の書類の準備をして。その上で昼食の予約？

「龍也君？予約ってレストランとか？」

「いえ？普通の店ですよ。普通のね？」

なんか不安だ。魔導師の金銭感覚がどんなものかは判らないが何か不安になる

「まあ気にしないで書いて持ってきてくれればいい、それで滞在許可証が発行できるからな。判らないところは聞いてくれればいいから」

繰り返し言われとりあえず先にと机の上におかれていた書類を見た。名前と生年月日それと所持デバイスの能力？

「龍也さん、ここに書いてある所持デバイスの能力って？」

「ISのことを書いてくれればいい。名前と武装だけでOKだ。一応規則だからな、所持品として処理したほうが楽だぞ？あとで質量兵器だとか何とか言われると面倒だからな」

重火器は駄目なのか？それに質量兵器って？俺たちが首を傾げているとなのはさんが

「説明してもいいけど多分良く判らないと思うから気にしないほうがいいよ？ただ質量。銃とかの所持が禁止されてるって思ってくれればいいから」

うーん色々制度があるんだな。魔導師っていうのも……俺はそんなことを考えながら名前・生年月日・血液型の順番に書いていってふと気づく

（あれ？武装って言ったよな？俺とかは簡単だけどエリスさんとかは？）

武装がブレードとエネルギークロウの俺はちやっちやっ書いて終わりだったけど

「えーとレインオブサタデイにガラム」

「あー武器の名前が漢字しかも枠が小さい」

武装を沢山搭載しているシャルロットや、武装の名前が漢字のシェンさんや鈴が書くのに奮闘している。それに能力の説明も必要なのだ

「AICの理論の説明をこの行で書くのは、少し厳しい物があるな」
「本当だねラウラ。まさかこんな事を書くことになるなんて思ってたよ」

特殊な武器を搭載しているラウラやクリスさん。それに楯無さんも書くのに苦戦している。それを見て俺は

(武器が少なくて良かった)

思わずそんな事を思ってしまった。とりあえず埋めるべき欄を埋めている、あーこれか武装の能力を書くのってえーと零落白夜はバリヤー貫通。こんなもんでいいのか？

「龍也これで頼む」

「私もかけたわよ。利き腕が左でよかったわ」

「こういうのを書くのはなれてるから楽ね」

千冬姉とスコールさんそしてツバキさんが書類を書き終えて、龍也から金属のカードのような物を貰ってる。多分あれが滞在許可証って奴なんだろうなと思いつながら。俺も自分の書類を書き進める事に意識を集中させるのだった

全員分の書類を受け取り、かわりに滞在許可証を受け取っていたのだが

「説明を書くのが大変だったわ」

「……僕はどうしてラファールにあんなに武装を搭載してしまったんだらうね？」

能力の説明が難しい楯無と武装の数が多いシャルロットが酷く疲れた様子で私の前に書類を置いた。仕方ないこととは言え可愛そうだと思ってしまった、書類を机の中にしまい。代わりに滞在許可証を渡して

「これで全員分行ったな？じゃあさっそく昼食に出かけよう」

昼食を終えてから私の家に案内して部屋割りをすればいいだろうと思ひ。後ろで控えていたシャルナに

(空き部屋の掃除とかを頼む。あと食材の買い足しを頼めるか?)

小声でそう尋ねるとシャルナはお任せくださいと頷き執務室を出て行った。シャルナに任せておけば大丈夫だろう。私はそんなことを考えながら本局を後にして、はやての車の助手席に乗り予約していた店に向かった

「ここだ、ここ」

クラナガンの中心にある店の前で言うと、隣に来ていた千冬が

「かなり高級そうな店だが？」

「大丈夫だ、私が奢るからな」

クラナガンや周囲の管理世界でも腕のいいコックが多数集まって経営しているこの店は。まあ確かに高級店といってもいい店だ。だからこそこの店に案内すると決めていた。普段は昇進や活躍した時にスバルとかを連れてくる程度だ

「まあ気にするな、それに腹もすいてるだろう？」

時刻は昼の1時半。食事の時間としては少し遅い、そんなことを話しているのなら早く食事にしようと思いを掛け店に入ると

「お待ちしておりました。八神龍也様。いつものお部屋を準備しております。こちらへ」

ギヤルソンに先導され店の奥へ奥へと進む。進むたびになんか一夏達が身体を小さくしてる。始めて連れてきたときのスバルとかに似ているなど思いながら通路を歩いていると

「どうぞ。お入りください」

ギヤルソンが扉を開ける。そこはシャンデリヤや紅い絨毯が引かれた。まあ簡単に言うとVIPルームと言う奴だ。なかには既に4人ほどのギヤルソンが待機しており

「どうぞおかけください」

椅子を引いて座りやすいようにしてから声を掛けてくる。私はまあある程度なれているので普通に腰掛けたが

「あくこういうのは中々慣れんなあ」

「本当だよね」

はやてやなのははなれないなあと話しながら座り、一夏達はガッチガッチと言う様子で椅子に腰掛けた。唯一普通だったのはセシリア

と楯無くらいだった。名家の生まれだからこういう機会もあったの
だろう

「食前酒は白と赤とございますが？」

「今日のお勧めは？」

「牛のフィレスステーキです」

牛肉なら赤ワインだな。それと

「肉が苦手な者は？」

おずおずと手を上げる簪とシエン。あとツバキさんは魚の方が好
みねと言う、スコールもお昼からは肉はちよつと言うので

「ではあの4人には魚のメニューを、それと白ワインを頼む。見れば
判ると思うが未成年だ。白葡萄酒のジュースにしてくれ」

畏まりましたと頭を下げ、出て行くギャルソンを見ながらガチガ
チの一夏達に

「もう少しリラックスしたらどうだ？」

「むむ、むむむ無理！こんな店来たこと無い！」

声を揃えて言う一夏達。こうなれば料理が来るのを待つしかなさ
そうだな

「お待たせいたしました。八神様」

「ん。ありがとう」

私の前からワインを置いていくギャルソン、一夏達はボトルに入っ
た葡萄ジュースを注いでいる

「今しばらくお待ちを、オードブルを今仕上げていますので」

深く頭を下げて出て行くギャルソンを見送りワイングラスを手に
「そんなに緊張することもないだろう。食事だからな？力を抜いて普
通に食べればいいさ」

テーブルマナーが判らないと騒いで居る一夏達にそう声を掛けて
からワインを煽った。

「あら？美味しいジュースね。酸味と甘みが丁度いいわ」

「この白ワインもいけるわね。良い店を知っているのね」

「む。確かに良いワインだ、これは料理が期待できるな」

緊張している一夏達とは対照的にリラックスした様子でワインを

煽っている千冬たちを見ながら、私はもつと別の店にしたほうがよ
かっただろうか？と考えながら空いたグラスにワインを注ぎなおし
たのだった

第89話に続く

第89話

第89話

あたしちやんと昼食食べたよな？でもなんでだろう？食べたって言う気がしない、あたしだけじゃなくて箸とかも同じような顔をしている

(なんか食べたって言う気がしないよな筈)

(ああ、空気に吞まれたといえれば良いのか判らんが、何を食べたかって思い出せない)

コース料理だったようで色々ギャルソン？に説明されたが何を言われたかなんて殆ど判らず、机の上に並べられたナイフとフォークにも困惑した。普通に食事をしていたのは教師勢と龍也さん達を除けば

「あら。美味しいですわね」

「本当ね。腕の良いシェフがいるのね」

「……美味しい」

セシリアと楯無先輩とユウリは普通に食事を進めていた。これが育ちの差とでも言うのだろうか、そんなことを考えながら食べた食事はうろ覚えで味もどんな者だったか覚えてない。

「？不味かったか？」

反応がないあたし達に龍也さんがそう尋ねてくる。味は良かった、それは間違いない……だが高級店って言う感じの雰囲気吞まれて味わったという感じがしないんだよな。あたしがそんなことを考えていると鈴が

「いや。美味しかったんだけど……もっと普通の良かったなくなて」

そう確かに美味かった。けどこういう店は一介の高校生が来る様な店ではない、もっと普通の店が良かった。多分あたしだけじゃなくて大半がそう思っているはずだ

「ふむ……そうか。では夕食はもっと普通にしよう。そういえばスバ

ルとかも同じことを言ってたなあ」

2回目!?学習しようぜ……とあたしが考えているとはやてさんが「でもあれやん。毎回じゃない?就任したばっかのルーキーとかも連れてきたら同じ反応してるやん」

「そう言われればそうだな。忘れてたな」

あたしは名前も知らないルーキーとやらに心底同情した。有名人の上司にこんな店に連れてこられて食事。普通なら動揺して味なんて殆ど判らないだろうなあ……

「じゃあとりあえず荷物を置きにいくか。ISの改修とかの話は明日にして今日は休めばいいだろう。それにこんな後でネクロの話とかも聞きたくないだろ?」

こんな後どころか覚悟が出来るまでそんな話は聞きたくないと思いなから頷くと龍也は結構、それで言いと笑いながら会計を済ませるから先に行けというので店の外に出ようとしている時に聞こえてきた12万と言う食事代にあたしは思わず隣の筈に

(あたし達って何を食ったんだ?)

食事で12万。そんな経験は今まで1回もない。一体どんな高級食材を食べてしまったのかが気になりそう尋ねると

(判らない……私はそう言うのに詳しくないんだ)

自分達が何を食べたのかを考えながら駐車場のワゴンに乗り込んだのだった……なお弥生達が食べたのはA5ランクの和牛であったり、大間のマグロだったりする。この店はミッドチルダに少ししかない地球食専門店だったりするのだった……

ワゴンカーが止まったのはどこの豪邸だよと言いたくなるような屋敷の前だった。セシリアや楯無さんが自分の家より大きいと驚いているのが見える。庭もあるプールもある、完全無欠な豪邸だ。俺たちが唾然としている中ツバキさんが

「龍也君の家なの?これ」

「ええ。格安で譲ってもらったんですよ。家族が多いので」

そう笑う龍也が門を開けて屋敷の中に入っていく。これはついていく流れなのでワゴンから自分の荷物を取りだして、俺達もその後をついていった

(すげえなこれ)

噴水にプール。綺麗に刈り込まれた植木などどれを見ても豪邸と
言う感じだ。いや、目の前の建物を見ればわかるんだけど如何しても
そんな風に思ってしまう

「ただい……」「わーい！おかえりなさい」「ごぶうっ！」

扉を開けた龍也の身体が宙に舞った。え。ええ!? どういうこと!?
驚きながら玄関を見るとそこには

「リインのせいだな。1番勢いよく突進した」

「酷いです！リインのせいじゃないですよ」

「リヒトの突進が1番だよ！へも!」

「何で突進するんですかアホの子」

「パパー！パパー大丈夫!」

「はふう……知らない人が……一杯」

銀髪・紅髪・目を髪で隠してる・金髪・オッドアイ・フードと色々な容姿をした10歳前後の女の子が一杯居た。フードつきの女の子だけ俺たちを見て目を回していた。対人恐怖症のけでもあるのだろうか？

「えーとはやてさん？あの子達は？」

シャルの問い掛けにはやてさんはにっこりと笑いながら

「ん？家族やよ？」

なんて簡潔な言葉だろう。家族それで済ませてしまえるだけの信頼とでも言うのだろうか？それがその一言でわかった。千冬姉が俺とマドカを家族と言うのと同じだ。不思議な説得力があった

「あー突撃警戒してなかったなあ」

どっこいしょと立ち上がる龍也は、首を鳴らしながら手を振りちびっ子達に笑顔を向けながら

「ただいま」

龍也がそう声を掛けるとちびっ子達は、ぱあっと華の咲くような笑みで笑いながら

「「おかえりー♪」」

両手をぶんぶんと振るちびっ子達は、ロリコンではない俺でも可愛いと思ってしまうほど愛らしさに満ちていた

「可愛いわねえ。それに皆良い子そう」

「良い子そうじゃなくて良い子ですよ、ではどうぞ私の家へ」

俺たちを先導して歩く龍也が家にはいると、ちびっ子達は龍也のコートにしがみつき器用に昇っていき、にぱーと笑っている。龍也ははいはいと言いながら頭を撫でたり抱っこしたりしている。何と云うか

（（お父さん？））

なんか堂の入ったお父さんと言うのを思わずにはいられなかった。はやてさん達は判るわかると頷きながら

「兄ちゃんってなんかお父さんって言う感じがするんや」

「子供だと余計にそう思うんだよね。良く懐くし」

「お父さん属性でお兄さん属性なんだよね。多分」

どんな属性なんだ!?お兄さんでお父さん属性ってどういう属性だ!?俺が心の中でそう突っ込んでいると龍也は抱っこしていた金髪の子に何かを言っていて、その子は判りましたといいながら頷き、ぴよんと龍也の腕の中から飛び降りる。同じように背中にしが

みついていたことかも地面に着地する。それを見ていたセシリアや鈴はなんかほっこりした顔をしていた、愛らしい仕草で母性本能とかがくすぐられたのかもしれない。そんなことを考えていると

「こんにちわー。リンなのです」

「アギトだぞ」

「ターゲスアンブルッフ・リヒトだよ。リヒトでいーよ。おにーさん、おねーさん」

「ユナです。こんにちわ」

「ヴィヴィオーー!」

なんか凄いな個性的な面々過ぎる。喋り方も髪の色も雰囲気もだ

……あ、あれ？気絶していたフードのこは気がついたらいなくなつた。どこへ行ったんだろう？

「お部屋に案内するのです！」

「お手伝いだな」

「ひっひーリヒトもお手伝いできるもんねー！」

どうも龍也が言っていたのは俺たちをそれぞれの部屋に案内してくれと言う話だったらしい。子供のときからお手伝いをさせる、それはいいことだと思う。俺はどうやらマドカと千冬姉と同じ部屋のようで……あれ？詰んでる？千冬姉とマドカと同じ部屋って俺肉食獣がいる部屋で寝ていると同意義

「ふんっ！」

「!!!」

千冬姉とマドカに同時に踵で爪先を踏み抜かれる。ぐう……余計なことを考えた罰か……そんな俺達を案内してくれている女の子。確かにリヒトちゃんは

「面白いねーおねーさん達」

俺が踵で爪先を踏み抜かれるのを面白いというリヒトちゃんを見て。思わず俺は

(この子ってはやてさんとかに似ているのか?)

この子もどうやら魔王属性のようだ。見掛けが可愛いからって騙されると痛い目を見る。この短い時間で俺はそれを確信していたのだった、なおリヒトちゃんはマドカに

「ペットがいるんだよ。かくれんぼをしてどこに言ったか判らないけど、後で出てくると思うんだ」

「ペット？可愛いのか？」

「可愛いよーそれに頭もいいよ」

魔法使いのペットって何なんだろう。でもこれだけ小さい子が多いから普通に子犬とかかな？俺はそんなことを考えながら踏み砕かれた右足を引きずりながら、リヒトちゃんの後について歩き出したのだった

私とエリスとお姉ちゃんはアギトちゃんに案内されて2階を歩いていた。10歳くらいに見えるけど凄くしつかりしている

「この部屋は空き部屋でな、夜勤を終わった六課の職員が泊まりに来るんだ。だから勝手に入ったら怒られるからな」

この部屋は誰の部屋だから駄目とかを教えてくれていた。ここに来るまでに通ったのははやてさんの部屋とシグナムと言う人の部屋だった。シグナムって誰だろうと思ったけど、多分一緒に暮らしてゐることは家族の人なんだろうと思った

「アギトちゃんは姉妹ってどんな感じの子なの？」

お姉ちゃんの問い掛けにアギトちゃんは

「んーリインっていたろ？あれが自称1番お姉さん。でも1番甘えん坊で我がままで泣き虫。リヒトは基本的に言う事を聞かない自由人で、ユナは本とぬいぐるみが大好きで毒を吐く、アザレアはアリウムと二重人格で、アザレアは泣き虫で人が怖い、アリウムはわが道を行く性格。ヴィヴィオは兄大好きだな」

1人1人かなり性格が違うようだけど……それでも姉妹としてやっていけるのは、やっぱり龍也さんがいるからかな？

「んで荷物置いたらリビングな？階段下りてすぐの大きい扉の部屋に行ってくればいいから。兄がそこで話があるんだって」

「今度は案内してくれないのですか？」

案内がなくて寂しいということではないが、アギトちゃんから私達の知らない龍也さんの事を聞きたいと思っっているエリスがそう尋ねるとアギトちゃんは

「連絡が来るまで暇だからかくれんぼしてたんだけど、ドラキチ……あーペットな？見つからないから探しに行かないといけないからごめん」

どうもアギトちゃんも私達を案内したいようだけど、ペットが心配だからごめんなと言ってくる

「いいわよ。ペットって言っても家族なんですよ？心配しちゃうわよ

ね？」

お姉ちゃんの言葉にアギトちゃんはうんって頷きながら

「どつか危ない所に行つてたら大変だから、見つけてやらないと」

ぐつと握りこぶしを作るアギトちゃんの小さい背中を見ながら、隣のエリスとお姉ちゃんとISのプライベートチャンネルで

(ドラキちつて凄い名前だよね)

(そうですね。一体なんなんでしょう?)

(ドラゴンとか?)

お姉ちゃんの言葉に思わず噴出す。幾らなんでもドラゴンのドラキちなんか容易なネーミング過ぎる。きつと何かの生き物にそう名づけたんだと思う

「はい。ここな? 部屋は結構広いから3人でも余裕だと思うからじゃーなー」

そう言うドラキちと言うペットを探しに行ったのか、廊下を元気良く駆けて行くアギトちゃんの小さい背中を見送り、私達は案内された部屋に入った

「広いわねー。ベッドは2段ベッドが2つ? それに机とかTVもおいてあるわね」

外から見てもかなりの大きさだったけどやっぱり家の中も凄かった。私達の部屋は2段ベッドが2つにテレビとソファも完備と見た目と同じくらい部屋の中の装飾も豪華だった

「これなら一週間所か1カ月でも全然平気ね♪」

荷物を2段ベッドの上に置きながら笑うお姉ちゃん。確かにこの部屋なら1カ月居たって平気かもしれない、それに魔法使いの世界なんて普通に生きていたら絶対に見れない、観光とかもしたいかもしれない

「まあそれよりもリビングに行きましようか? 龍也さんが待っているそうですしね」

待たせるのも悪いから荷物を机の上において私達はアギトちゃんに案内してもらった道を引き返し、1階のリビングに向かったのだ

「あ、簪それにエリス。どうだった部屋は？」

途中で鈴さん達にあつて、1階のリビングに向かいながら私達の部屋のことを話すとへーって頷きながら

「あたし達の部屋も似たような物ね、こんな部屋をホテルで借りようとしたら幾らするのかしらね？」

「ざつと見積もっても5桁はするんじゃない？一晩」

だよねーと部屋のことを話しながらリビングに向かう。そこはシックと言うのかお洒落だけど嫌味じゃない。そんな色合いの家具で固められた部屋だった

「待ってたよ、まあ好きなどころに腰掛けるといい」

リビングの長机の所で待っていた龍也さんに頷き、来た順から椅子に座っていくのだが

「これもまた見事だね。相当高いんじゃない？」

「ですわね。イギリスでもここまで見事な椅子は見たことがありませんわ」

椅子を見ているシャルロットさんとセシリアさんがそう言う。私は普通に腰掛けたけど確かにいい椅子であることは間違いない

「そんなの気にしなくていいから、早く座るといい本題の話がいつまで経っても出来ないからな」

龍也さんがそういった瞬間。リビングに置かれてた壺が突然ゴトんと音を立ててひっくり返った

「え!?!ドツキリ!?!龍也何かした?」

「いや、何もしてない筈だが……何かいるのか?」

椅子に腰掛けていた龍也さんが立ちあがり壺に近づきながら「アギトとかが何かを入れてたか?」

小さいアギトちゃんとかの悪戯かと呟きながら壺に近づくと「クギユークギュー」

くぐもった何かの鳴声が聞こえてくる……その鳴き声を聞いた龍也さんは壺の中を見て

「詰まったのか?」

そう声を掛けると壺の中の鳴声が大きくなる。どうやら中に何か

がいるのは确实のようだ

「ギュー！キュキューっ!!!」

助けれくれと言っているかののように鳴声が大きくなる。その鳴声を聞いていたマドカさんが一夏君に

（何の鳴声だ？）

（聞いた事がない鳴声だから判らん）

一夏君の言う通りに聞き覚えのない鳴声になんの鳴声だろうと考えていると、龍也さんがぶんぶん壺を降り始める。何回目かですぽんとコルクが抜けるような音がして壺の中から灰色の何かが飛び出てきた。それは私達の座っている机を飛び越えて出入り口に近くに落ちると、ころころと数回回転してから止まった

「え？なんだこれ？」

弥生さんの言葉はきつと全員が思ったことだろう。灰色で少し大きめな犬と同じくらいの物体は、ゆっくりと丸まっていた状態から元に戻り

「キュー♪」

尻尾をピーンと伸ばしフリフリ降り始めた。短い手足に丸っこい身体。頭の横から生える2本の角と赤い瞳……なんだろうこの生き物凄く可愛いけど犬とか猫の私の知ってる生き物じゃない

「龍也君？それなに？」

ツバキさんが引き攣った顔で尋ねると龍也さんはニコニコ笑いながら

「ペットのアースドラゴンの幼生のドラキチです」

アースドラゴン……ドラゴン？ファンタジーの王道がこれ？

「キュっ？」

ピコピコ揺れる尻尾と愛嬌を振りまくその仕草。何か想像と違うけど

「「可愛い♪」」

こんな可愛い生き物見たことがない。子犬と比べても一回りも二回りも可愛い、頭を撫でようか考えていると

ピーッ!!!

指笛の音が響く。それを聞いたドラキちは開いていた窓を見つめて

「きゅーっ!!」

タタタタツッ!ピョーン!

小さい生き物とは思えない脚力で、開いていた窓を飛び越えて庭へと駆け出していった

「あ……行っちゃった」

頭を撫でようとしていたクリスさんがしよぼーんとしている。勿論私もだ、頭とか撫でてみたかったのに……

「アザレアが呼んでたからな。仕方ない、また明日にでもするといい。毎朝散歩してるから一緒に散歩とかしてもいいぞ」

毎朝ドラゴンの散歩。何かシユールな光景だけどいいかもしれない。ドラキちは凄く可愛かったから写真を撮っておきたいと思う

「それでだ。ドラキちの件はおいといて本題の話をしたからそろそろ座ってくれないか？」

龍也さんに言われて気づく、私とクリスさんそれにエリスにお姉ちゃん、更にはヴィクトリアさんや鈴さんもドラキちが出て行った窓を名残惜しそうに見つめていた。そしてそんな私達を見てほほえましいと言う顔をしているユウリさんや織斑先生の視線に、私達は赤面しながら椅子に座りなおしたのだった……なおヴィクトリアさんだけは、両手で顔を覆って酷く恥ずかしそうにしていたのだった

ドラキちを見て目を輝かせていた簪達。やっぱり女の子だから可愛い生き物が好きだったんだろうなあと思いつつながら、机の上のカップに紅茶を注ぎ

「ではまずだが、今回ここに一夏達を招待したのは勿論理由がある。1つはISの改修、2つ目は独立稼働のパッケージの作成、そして3つ目は同年代でネクロと戦っている人間と引き合わせるためだ」

えって言う顔をする一夏達とは対照的になるほどと言う顔をしたツバキさんと千冬は

「それはあれか？ネクロと戦うためにか？」

「そうなるな。出来る事ならば護衛程度に留めて置きたかったが、そうも言ってもらえん。ネクロの目的が鈴や箒にある以上自分で自分の身を守るだけの力を身につけてもらわなければならない。だが」

ここで一度言葉を切り一夏達を見る。一夏は自身の暴走を、箒達は自分と同じ顔をしているネクロとの戦いを恐れ、箒達もまたネクロに対する恐怖を改めて認識し顔が引き攣っている

「今の状況で訓練とかをしても意味がない。だから一夏達には六課の訓練や本局の訓練生と会ってみて話をしてみて欲しい。それで大分考えが変わるかもしれない、無論結論を急ぐことはない。どうだ？」

私の言葉にうーんと言う顔をしている一夏達。一週間と言う時間は短くはないが長くもない、本当は2週間くらい時間が取ればいいが、そこまで悠長にネクロが待つてくれるとは思えないからだ

「私はいいい考えだと思うけど。戦闘経験者の同年代って言うの良い話相手になってくれると思うわよ？」

スコールが車椅子の上でそう言う。年長者らしく私の考えていることを理解してくれてありがたい

「同年代の子ってどんな子がいるの？」

楯無の問い掛けに私はスバルやティアナ、それにセツテたちの事を思い出しながら

「普通だよ。普通の女の子だよ。守りたい者や願いがあつてネクロと戦うことを選んだね」

私がそう言うトラウラはふむつと頷きながら。私の両隣を見る普段にいる筈のなのはやはやてがないことを確認してから

「なのはやフェイトがないのもそのためか？」

「そうだよ。今ちよつと話に行つてゐるんだ、気難しいわけではないがいきなり来て話をしましょうと言っても、話しにくいだろうからな」

とは言え六課のメンバーはかなりおらかなから、その所の心配はないけどなと心の中で付け加える

「だから明日は六課。ネクロと戦っている最前線部隊であり、私達が所属しているそこに一緒に来てもらう。お昼から観光がしたいとい

うのなら案内する。難しく考えないで経験者と話す位に考えていてくれれば良い、ISの回収は少しずつ進めていく予定だ」

本人が戦う気がないのに改修しても意味がない。その気になれば半日で改修できるが、焦る事もないだろう。考える素振りを見せている一夏達に

「そう深く考えなくていいと言っただろう？今日はのんびりと過ごすといい、風呂は1階と2階にあるが、1階は女性専用だから一夏とユウリは入らないように。じゃあ部屋で荷物を出すといい。夕食は7時だからそれまで好きに散歩でもしているといい」

そう言うで一夏達は考え事をしながら部屋を出て行き。残ったのはスコール・オータム・千冬・ツバキさんだった

「酷いと思いますかね？」

他に方法があれば別の手をとりたい、だが方法がない以上多少の行き過ぎも必要だ。だから批判するかと尋ねるとオータムが

「私はそうは思わないけどな。自分で考えさせる、命令するでもなくこうしろと誘導するわけでもない。自分で決めさせる、それ自体が優しいと思うぜ」

「確かにね。自分で決めさせる。逃げるにしろ立ち向かうにしろ。自分の決断ならそれを尊重したいってことでしょ？」

判っていますという表情をするツバキさんとオータム。それに対して千冬とスコールは

「ネクロと戦わせる。その道しかないのだろうか？」

「戦ってボロボロになった私だからこそ言えるけど、子供たちに戦わせるのはどうかと思うわよ？」

確かにそうだが、こればかりは仕方ない事だ。私やはやてを狙っているのなら一夏達を戦わせる必要はないが

「箒達のネクロは自分達を狙っている。抗うことが出来なければ殺される……あれだけの数、そして特殊能力。幾ら私達とは言え楽に戦えるネクロじゃないんだ」

空間を歪めて移動。それに攻撃や結界を通り抜ける稀有な能力、攻め込まれやすく守りにくい。それが箒達のネクロだ

「別の方法も考えてはあるが、それでも駄目だ。向こうは数が多い頭数を増やすので手一杯だ」

あのネクロとISのハイブリッドの事を考えると、戦える人間は少しでも増やしたい。だが正直な話、IS学園の教師は戦力として数えるのは難しい

「こっちの魔法使いを連れて行くのは？」

「それは駄目だ。下手に戦力を連れて行くところちの防衛が手薄になる」

どちらかと言うとネクロはこっちの方が出現率が高い。それを知っててなお、なのはやフェイトと言った隊長クラスを連れて行っている以上、これ以上戦力を減らすことも出来ないのが現状だ

「となると……やっぱり一夏達が強くなるしかないのか」

私だって色々考えたがそれしか方法がないのが現状だ

「とは言え無理には言わない、その決断をするのは一夏達だからな。私はその決断を尊重するだけだ」

この1週間で一夏達がどういう結論を出すのか？それは私が口に出すことじゃない、全ては一夏達が決めることだ

「まあ小難しい話はこのままで、夕食のときにワインを出しますが。摘みは何にしますか？」

久しぶりに帰ってきたミッドチルダだ、少し位息抜きをしてもいいだろうと思ひ。千冬達にそう尋ねるのだった

すげえ……俺は目の前の光景を見て思わずそう呟いた。巨大な施設で隊舎と言う感じの建物が何棟も見える。これが機動六課

ネクロと戦う最前線の場所なのか

「ようこそ機動六課へ、ここが私達の職場になる」

これだけの敷地を見るとかなりの人数がここで働いているんだろうなと思う。それには出入り口には警備員もいて

「八神陸上1佐、高町3佐、フェイト執務官お疲れ様です！後ろの方達

は？」

「別の世界でネクロに狙われてる人や、ちよーとここで鍛えておくつもりなんよ。ちゃんと滞在許可証と手続きは取ってるから証明書の発行を頼むわ」

なんか難しい話をしているのを聞きながら、昨晚の事を思いだす。好きにしている良いと言うので歩いていけるとドラゴンに追いかければ、へんな発明品のロボを見つけたり。まあIS学園では体験できないような貴重な体験が出来た。中々に面白かったと思う。そして昨晚の夕食はオムライスだった、どうやらアギトちゃん達のリクエストだったようだ、最初はオムライス？と思ったが喰って見るとむちゃくちゃ美味かった。デミグラスソースも絶品だったし、朝は簡単なハムトーストとサラダにスープ、運動するかもしれないから軽くしてくれたらしい。

「前線部隊はなのはとフェイトが隊長をしている「スターズ」と「ライトニング」分隊で4人ずつの構成になっている。部隊舎はあそこな。それであの奥のが「ロングアーチ」情報索敵を主にしている部隊ではやてが指揮官をしている」

敷地を歩きながら説明してくれる龍也。なのはさん達は21歳らしいけど部隊を持つている所を考えるとやはりエリートなのだろう

「ふーっ！寄るな！」

「良いじゃん！たまには場所変わってよ！」

「はやて不公平だよ」

なんか子供みたいな喧嘩をしているけど、それとこれは違うんだよな多分。そんなことを考えていると楯無さんが

「前に言ってた龍也さんの部隊は？」

確かアサルト。強襲部隊って意味だよな？だけど隊舎がないことが気になったのかそう尋ねている。龍也は

「私の部隊は有事の際のみ召集が掛かる。普段はライトニングやスターズ、それにロングアーチで行動している」

兼任ってことか。でもそれが出来るだけの能力があるというのは凄いと思う。そんなことを考えながら一番大きな隊舎に入った瞬間

「兄貴ーッ！会いたかったー!!!」

「龍也様ーッ！LOVEーッ!!!」

「兄さまー!」

「龍也さんお久しぶりです!」

「うおおあああああッ!!!」

龍也が一瞬で女性の波に飲み込まれて消えた。もみくちやにされている……思わず隣のはやてさんを見ると物凄く怖い笑みで笑っていると思っただ瞬間

「たわけ！兄ちゃんから離れろッ!!!」

一喝、その一喝で龍也を飲み込んでいた女性は一気に離れた。龍也はぜーぜーと荒い呼吸で

「し、死ぬかと思っただぞ。スバルとかセツテとか筋力全開過ぎる。それに魔力を併用されたら大の男でも組み伏せるのか、魔法って凄いな

……怒られた女性を見て

(これはまた綺麗ところばかり集まってるな)

オレンジの髪に青い瞳。すらりとした手足の長い美女でモデルのように見える

ピンク色の髪の女性はとても綺麗なのだが、光りのない目が死ぬほど怖い

茶色い髪をした女性は男のように見えるけどスカートをはいている所を見ると女性なのだろう

一番最後の人は1度在ったことが会った鈴や弥生さんが首を傾げながら

「スバル？なんか成長してない?」

そう龍也の義手が壊れたときにチンクさんと一緒に来ていたスバルだった。あの時は10〜14くらいだと思っただが、今は18歳前後と言う感じだ。スバルさんは俺達を見てくすりと笑いながら

「いや、あの時は辻褄あわせて幻術かけてたからね?私は本当は18だよ」

スバルさんはそう笑うとなのはさん達に敬礼して

「それではスバル・ナカジマ一等陸士これより早朝訓練に行くの失礼します！」

そう言うのと逃げろーっ!と叫んで男の子のような少女を脇に抱えてあつという間に見えなくなった。魔王に襲われる前に逃走、賢い選択なのかもしれない。そんなスバルさん達を見ながらオレンジ色の髪をした女性が

「んじや。私も訓練見に行くかな。じゃーなー兄貴。後で時間があつたら訓練見に来てくれよな〜」

「龍也様が見に来てくれるのならば、私はオレンジ頭を血祭りに上げて差し上げましょう。見ものですよ」

……なんかあれな人がいる。俺達の視線が龍也に集中する、龍也は溜息を吐きなんて説明しようか考えている様子だ。そんな龍也にツバキさんが

「なんかこの人って凄いわね?」

かなり気を使っている言葉だと判る、一目見ただけだが判るあれはなのはさんたちの同類だと……それに女性ばかりなのが気になつている筈達が

(随分と女性が多いが龍也の趣味なのだろうか?)

(モテるからハーレムでも作ろうとしていいるのかな?)

(え!?!そんな事無いと思うよ!?!)

その余りに酷い評価を付けられた龍也は溜息を再度吐きながら

「ここは元はロストロギアと言うのに対応できるように作られた部隊で、はやてがリーダーだった。だからはやての知り合いで固められるから女性が多いんだよ、私は結成されてから少ししてから合流したんだ。だから人選は全部はやてが決めたんだ」

だから別に女性ばかり集めているわけじゃないぞ?と龍也が言う。そう言うことか確かに女性が指揮官ならセクハラとかないしそれに安心して女性が多くなるのも当然だなと思つていいると龍也が

「私はこれからスコールの怪我の治療をしてもらう手筈を取る。一緒に来るならISを預けておけば修理してくれるがどうする?」

スコールさんは手術の準備が出来るまで龍也の家でいるらしい。

アギトちゃん達が怖がるといけないからと言って部屋で休んでいたい、ちなみに千冬姉は二日酔いとまでは言わないが、ワインが聞いて起きれなかったのもそのままにしてある。起こすのも可愛そうだと思っただし、下手に起こすと捕食されそうな気がしたからだ。それにISの修理か

(白式はダメージレベルCだけど1回修理してもらった方がいいかな)

箒とかはダメージレベルがDなので迷わず修理を依頼していた、俺も1度見てもらおうと思

「ついていって修理してもらおう」

「それならついて来い。こっちだ」

そう言っ歩いていく龍也の後ろをついて歩く、途中ですれ違う制服姿の人達にじろじろ見られたがここでは龍也もなのはさんたちも有名人だから仕方ないと判っていたのだが、どうにも肩身が狭かった。そんなことを考えているうちに研究室に着いたのか龍也が建物の中に入っていく。

「やーや。ようこそようこそ、私のラボへ久しぶりだねー元気にしてたかい？」

海であったジェイル・スカリエツティさんに出迎えられる。スカリエツティさんは

「色々と話をしたんだけどね、時間がないからISの修理をして欲しいなら机の上においておいてくれるかい？悪いね」

カタカタとキーボードを叩くスカリエツティさんは確かに忙しそうだ。邪魔をしたら悪いと思いい待機状態のISを机の上におき研究室を出る。そこで箒が

「魔法使いの訓練とやらがあるのだろうか？見に行っても構わないかな？」

さつきスバルが言っていた訓練、魔法使いの訓練がどんな物か気になっっていた俺や弥生さんも

「時間があつたらでいいから俺も見てみたいな」

「あたしもだ。どんな訓練をしているのか見てみたい」

言葉にはしてないが簪さんやヴィクトリアさんも興味津々と言う顔をしている。龍也は

「構わないぞ。見てみるといい、それもきつといい勉強になると思うぞ」

龍也の言葉に続いてなのはさんやフエイトさんも

「今日は確か近接訓練の日だったよね？」

「そうそう。シグナムとかが教官をしているはずだよ」

魔法使いにも近接訓練があるのか、どんな訓練をしているのだろうか？話を聞きたびに興味が出てくる

「それじゃあ訓練が終わる前に行くか。演習場はこっちだ」

そう言っつて演習場に案内してくれる龍也の背中を見ながら、俺達は見たことがない魔法使いの訓練がどんな物なのか想像を膨らませるのだった……

第90話に続く

第90話

第90話

演習場と言うところに案内され見学しているのだが、ただただ圧倒されていた

「すげ……」

「これが魔法使いの戦い」

「とても同年代とは思えないな」

弥生さんや簪さん、そして箒の驚きの声が聞こえる。この声がなければ俺ももう少し動揺していたかもしれない

「どうした！それで終わりか！」

ピンク色の髪をした女性が、甲冑のような物を着て炎を巻き上げる機械的な剣を構えている。その人と対峙しているのは

「やっぱりシグナム隊長相手に私じゃインファイトは分が悪いわね。スバル交代！バックアップに入るわ」

「OK！ティア！あとは私に任せて！」

片方はさつきもあつたスバルさんだ。胸周りと肩に装甲の様な物を身につけて、両手にはガントレットのような籠手を嵌め。足元にはローラーブレードの様な脚甲を装備していた。そしてその隣のオレンジ色の髪のツインテールの女性はスバルさんとは対照的に黒っぽいインナーの様な物の上に白いコートを羽織っていて、その手には二丁の拳銃な様なものを装備しているだけで、スバルさんと比べると随分と軽装に見えた

「スバルは陸戦だから防御力と火力重視。ティアナは元陸戦の空戦魔導師、若いけど指揮官タイプだね。オールレンジ対応んだけど支援タイプだからね。スピード・機動力重視だから軽装なんだよ」

なのはさんがそう解説してくれる。龍也とはやてさんは少し席を外すと言って、演習場の前で別れた。しかし一口にこうしてみてもと魔導師といってもスタイルで装備が変わるのか、龍也は蒼や金色の甲冑。なのはさんは白を基調にした服と杖。フェイトさんは黒い服

の上に白のマント。はやてさんは甲冑と服の組み合わせ。変な話だがISみたいにもう少し共通点とかあると思っていた

「ではあそこで2人と戦っているのは？2人と装備が違うようだが？」

ユウリの視線の先にはポニーテールの女性の姿、確かにスバルさんとあの人の装備は全然違う物に見える気がする。ユウリの問い掛けになのはさんが

「シグナムはベルカ式の魔導師でカートリッジ。魔力を増幅させる装備をデバイスに装備してて、それで武器の形状を変化させたり。身体能力を強化して戦う生粋のインファイターだよ、ほらああいう風に使うんだよ」

まあスバルとティアナもベルカ式なんだけど近代ベルカ式だから少し違うんだよ。と付け加えるのはさん、同じ魔法でも近代とか色々種類があるんだなあと思っっていると

「レーヴァティーン！カートリッジロード！」

ガシャコンと音を立てて排出されるカートリッジ。それと同時にシグナムと言う女性が持っている剣に炎が奔る

「紫電一閃ッ！」

「一撃必倒！デイバイン……バスターツ!!!」

炎を伴った一閃とスバルさんの拳から打ち出された光線がぶつかり演習場を大きく揺らした。そして

「うわあ!？」

スバルさんが押し負け吹っ飛ばされる地面に2回3回と跳ねて演習場の陰に消える

「スバル!？」「チェックメイトだ。ティアナ」……うつ参りました」

そしてティアナさんの喉元に剣を突きつけるシグナムさん。どうやらあれで決着のようだ。

「魔導師の訓練って言うのはこんなに実戦形式なの？これじゃあ訓練で怪我をするんじゃないの？」

鈴の問い掛けは俺も思った。あの攻撃は明らかに怪我をしてもおかしくないほどの勢いだった、訓練で怪我をしたら本末転倒なのでは

と尋ねるとフエイトさんが

「魔法には非殺傷設定って言うのがあって魔力ダメージを与えるモードがあるの。それは少しくらいは打撲や打ち身はするけどそれくらいだから大丈夫なんだよ」

そうなのか……だからあんなに思いっきり攻撃が出来ているのか。でもそれはいい物だとおもう手加減した攻撃で訓練しても身につかないからだ

「ところであそこで戦っているシグナムと言うのは、やはり隊長格なのか？動きや攻撃の早さが全然違ったのだから？」

「それは私も気になってた。どうなんですか？」

軍人であるラウラとクリスさんらしい視点で見えていると思った。

その言葉になのはさんは笑いながら

「八神シグナム1等空尉。ライトニングの副隊長だよ」

八神？と言うことは龍也の妹……じーと演習場のシグナムさんを見る。日本人とは思えないんだけど……龍也は髪と目の色こそ違いますが日本人って言う感じなんだけど……

「あははは、別に血が繋がっている訳やないんよ。ちよっと複雑な事情があるんや。まあそんなに気にしないでいいよ」

演習場の前で別れたはやてさんが入ってきてそう笑う。しかし隣に龍也の姿がない、それに気付いたなのはさんが

「あれ？はやてちゃん？龍也さんは？」

はやてさんは俺達が見ている演習場のほうを指差して

「あっち。訓練に参加するんやて、なんか鈍ってる感じがするらしいで」

演習場の方から龍也が姿を見せる。それを見たシグナムさんが近づいていく

「兄上どうなされたのですか？」

シグナムさんが敬語で龍也に話しかける、龍也はにっこりと笑いなから

「私も訓練に参加しようとおもってね。構わないか？シグナム」

その問い掛けを聞いたシグナムさんははいつと頷きながら龍也か

ら離れて

「まずは私からお願いしても？」

好戦的とも取れる笑みを浮かべるシグナムさんに龍也は頷き、いつもの黄金色の甲冑ではなく黒の軽鎧に紅いコートを身にまとってだらりと両手を下げる。いつもと全然違う姿に困惑しながら見ていると

「訓練の時龍也は相手に応じた戦い方をするんだ。シグナムとかスバルの近接の魔導師相手は徒手空拳と剣術をメインにした戦い方。ティアナとかなのは時は銃とかを使った射撃とかね？同じ戦い方なら見ているだけでも参考になるでしょう？」

剣術は見ることも大事だ。確かにそう言う稽古も効果的だろう、しかも相手が強いのならなおの事だ、そんなことを考えていると

なのはさん達が椅子に腰掛けて

「一夏達も座ってみたらどうや？兄ちゃんの訓練は長いからなあ。立ってみるのは大変やで？」

「多分久しぶりだからデイドとかノーヴェも訓練に出てくるだろうね」

龍也の訓練は参加者が多いのか……でも確かに龍也の訓練は厳しいけど色々教えてくれる。しかもそれが1対1で教えてくれるのならそれは参加したいとおもうのが当然だろう。演習場には少しずつだけ人が増えて来ている

「そう言うことなら座ってみるか」

今までは立って見ていたけど、なのはさんたちが言うのなら座って見た方が良さのだろう。俺達は演習場の見学席に備え付けられた椅子に腰を下ろして、龍也とシグナムさんの訓練を見学する事にしたのだった

キンキンッ!!!

何度も何度も繰り返される金属音の応酬。しかしそれでいて無骨

ではなく一種の舞のような美しさを持っている。それを見た私は思わず、自分の剣術とあの2人の剣術とを比べてしまっていた。そしてわかる自分の剣術がいかに稚拙だったのかと

(素晴らしい……魔導師やそうじゃないなんて関係ない。これは修練の成果だ)

毎日毎日訓練を積み重ね作り上げられた剣術。ネクロと戦っているときはネクロの方に意識が向いてしまっていて、判らなかつたがこうしてみると良く判る。龍也さんの剣の素晴らしさが……同じ二刀流でも完成度がまるで違う

「くっ……やはりそう簡単には届きませんか！」

「まだまだ。そう簡単には一本はやれんなあ」

シグナムさんの強烈な一撃を2振りの中華刀で鮮やかに受け流し、さばく手数は決して少なくはない。だけどそれを涼しい顔をしてさばいている。同じ事をしろと言われても決して私には出来ない……いや出来るわけがない、戦いの中でも決して熱くならず冷静でいることが出来なければあんな神がかり的な防御は出来るわけがない

「凄いとしか言いようがないな。ワタシでもあそこまでは出来ないぞ」

「ユウリでもそう思う？ 私も……経験と修練の差が凄く出てるわね」

武を修めている者ならば判る。龍也さんとシグナムさんの技能の高さが……シグナムさんの剣は西洋剣に似ている、それはつまり自重を持って相手の武器を叩き折る剣だ。それに対して龍也さんの剣は中華刀。つまり少し間違えれば一瞬で砕き折られるそんな得物で、どうしてあそこまで鮮やかに攻撃を受け流せるのだろうか

「凄いわね。あたしは剣術なんて判らないけど、あの動きの凄さは判るわよ」

「素晴らしいとしか言いようがない。あれは剣術を収める者が到達できる2つの高みだ」

2つの高み。私のような子供が言うのもおこがましいが、龍也さんは才能がない。それを訓練と実戦で補い莫大な戦闘経験で才能のなさを補っている。それに対してシグナムさんは溢れんばかりの才能

を持つている。それを更に訓練と稽古で磨き上げた剣。本来なら龍也さんが押されるはずなのに

「行くぞ！」

「はいっ！」

徐々に龍也さんの攻撃のテンポが上がっていく。剣術に二刀流というのは手数が多くなると思われがちだが、考えてみて欲しい。刀と言うのは重量がある。それを片手で支えて振るうことがいかに大変かと言うことを知らない物が言える事だ。二刀で戦うには筋力や鋭い腰のキレ、そして鋭い空間把握が揃ってようやく二刀流で戦うことが出来る。そして龍也さんの剣術は完成しきっていた

(私にも到達できるのだろうか？この高みに)

二刀流の剣術を修める者として、また剣士として私はいつかその高みに辿り着きたいと願うのだった……

随分と真剣な顔をしてみるなあ。演習場を見ている一夏達を見て私はそう思った。世界は違えど同年代と言うのは良い刺激になる。だからこそ兄ちゃんが訓練に出てきたのだ

「どうした？届いてないぞー！」

「まだまだあ!!!」

バシツ！バシツ!!!

スバルと兄ちゃんの模擬戦を見ている弥生やシエンが信じられないようなものを見ているような顔をしている。それはルーキーが見学に来て初めて六課の訓練を見たときの顔に良く似ていた
(心が折れないといいんやけどね)

この訓練を見てルーキーの2割は自信を無くす。だけど同年代が出来るならと奮起する者もいる、一夏達はどっちだろうと思ってみていると

「クリス。画像の記録は出来ているのか？」

「うん。少し動きが早くて録画しにくいけど……大丈夫」

ノートPCで兄ちゃんとスバルの動きを録画していたり

「スバルって18歳って言ってたよな？」

「うん。私たちと3歳しか違わないんだよね」

「ならあたし達も頑張れば何とかなるんじゃないのか？ネクロは怖いけどよ……逃げてても仕方ない。そう思わないか？」

「思う……俺もそう思う」

なんか逆にやる気を出している一夏達を見て要らぬ心配だったかと思っていると楯無が

「はやてさん達は訓練しないんですか？」

それは質問と言うより私達の力を見てみたいとその目が語っていた。私は肩を竦めて

「せえへんよ。今日は部下組みの訓練の日。隊長陣が出るわけにはいかへんやろ？」

訓練が始まると熱が入ってしまう。そうなるとその日のスバル達の訓練はお流れになる。となれば無理には訓練には参加できない

「私達の訓練は明後日だからね、明後日を待ってよ。楯無」

なのはちゃんの言葉に楯無はそうですかと呟いてから

「私はネクロと戦うってもう決めてますから。早めの改修よろしくお願いします」

そう言ってユウリの隣に腰掛け演習場を写しているモニターに視線を戻す。そのモニターにはデイドと兄ちゃんの模擬戦の様子が写されていた。興味深そうにモニターを見ている楯無。私は最近良くみる楯無の目の事を思い出していた。ただ力を望んでいるのではない、あの目は何か目的があつて力が欲しいといっている目だ。その目は私やなのはちゃんが良くする目の色に良く似ていた

(ユウリのためにか……)

楯無が力を求める理由はユウリの為だろう。スコールさんを助ける時にユウリと楯無の方に現れたネクロ……セリナと名乗る楯無と瓜二つのネクロ。ユウリはセリナを知っていて、セリナは楯無に似ている。自分がそのセリナと言うネクロの素体になった女生徒重ねて見られている事を知つてもなおユウリと一緒にいる。楯無はまだ幼いが覚悟がある、いや肝が据わっているとも言える。情けないのはユ

ウリの方や

(ここまで想ってくれてるんやで？何時までも考えてないで何か言つてやりいよ)

ユウリが何を抱えているかなんて知らない。楯無はユウリが自分が抱えている何かを言うのを待つと決めた、その強さを私は買った

(スカリエツティさん。聞こえる？)

念話で声を掛けると直ぐに

(んーなんだい？はやて君。今スコールさんに会う手足を作っているところなだけど？)

スコールさんは私たちで言うところと戦闘機人に近い。だからスカリエツティさんだけが治療できるのだ

(それ終わったらで良いで。ミステリアス・レイデイの改修を優先してくれん？)

(構わないよ？一夏君達のISの改修は後回しで良いって言われてたからね。ミステリアス・レイデイの改修を優先するよ)

そう返事を返すスカリエツティさんにありがとうと返事を返している

「はやてちゃん。訓練終わりみたいだよ？」

「ん？もうそんなに時間たった？」

時計を見ると1時間と少し、普段より少し短いけど兄ちゃんの目的だとスバルとかと一夏達の話させるのが目的らしいしこんなもんやろ……

「んじゃ食堂でも行こうか？ジュースとかお菓子とかあるから、そこでスバル達を待って話をするといいよ」

フェイトちゃんがそう笑ってこっちだよって言って一夏達を先導して歩き出す。ツバキさんは1番最後尾にいて私の前に来て

「ありがとう。良いカンフル剤になった見たいね」

すれ違った一夏達の顔はやる気とかに満ちていた。同年代を見て自分もやれば出来ると思っっている表情だった

「だけどそれじゃあまだ駄目です。言わなくても判つてますよね？」

「ええ。判つてるわ、ネクロへの恐怖はまだ残ってるみたいだしね」

確かに一夏達はやる気を出した。だがそれとネクロへの恐怖心は別物だ。ここから先はスバル達次第だ

「今日見せてもらった戦鬪データの解析をしたいんだけど。何処かないかしら？」

「あ、それでしたら。私もスバル達の動きを分析するんで一緒にどうぞ。なのはちゃんスバル達に上手く言っておいてな？」

了解と返事を返すのはちゃんと別れ、私はツバキさんと一緒にロングアーチの執務室に向かったのだった

フェイトさんは用事があるからと言って食堂の前で別れた。俺達はフェイトさんに案内された食堂で飲み物やお菓子を買って箒達と話をしていると

「やはり勝てませんでしたね。残念です」

「えーデイドは結構良い線行ったんじゃない？私は全然だけどさ」

「まあどちらにせよ。今の私達じゃ1対1じゃ勝率は0%。チームを組んで0.5%前後って所ね」

首からタオルを提げたスバルさんと、何かの機械を操作しているオレンジ色の髪をした……ティアさん。それとその隣にいる腰元まで伸びた茶髪と穏やかな笑みを浮かべた人が食堂に入ってくる。俺達が見ているのに気づいたスバルさんが

「やっほー」

軽く手を振ってそのまま2人を連れて、俺達が座っている場所に来て鈴達に手を振りながら

「鈴と弥生。それにシエン久しぶりだねー」

前に自己紹介を済ませているスバルさんはそう笑って椅子に座る。

「一通り話は聞いているわ。ティアナ・ランスター。ティアナで良いわよ」

「デイド。デイド・スカリエツティです。よろしくお願いします」

「……セツテ」

ティアナさんとデイドさんは笑っていたが、デイドさんの隣の

セツテさんはぼそつとそう言っただけで興味が無さそうな顔をして椅子に座る。自己紹介された以上俺たちも自己紹介をしないわけにはいかず

「織斑一夏です。こっちは妹のマドカ」

俺の自己紹介に続いて箒達も自己紹介をしていく。そんな俺達を見ていたティアナさんは

「ん。よろしく」

そう言うのと機械の操作に視線を戻してしまった。なんか気難しい人なのかも知れない

「スバルってほんとは年上だったんだ」

「うん。ほらあの時は龍也さんも歳を誤魔化してたからね。辻褄合わせで歳を誤魔化してたんだ……ねえ。ティア、ちよつと無愛想すぎない？」

ティアナさんは視線だけをスバルさんに向けて

「あんたの訓練報告書の間違いをピックアップしてるの、それとも自分でやるの？」

「……お願いします」

じろりと睨まれたスバルさんは身体を小さくしている、その様子がおかしかったのか箒やヴィクトリアさんが噴出す

「もう笑うことないんじゃない？ 私は実戦タイプだから「破壊した街の施設とかの始末書は書いたの」うぐっ!?!ティアの意地悪」

もう駄目だ。俺も笑ってしまった……その笑いのせいか今まで感じていた緊張感とかはなくなつたのか弥生さんが

「スバルさん。凄かったな……こうなんか光ってる奴」

「あー極光？ あれは龍也さんに教えて貰ったんだよ。私は射撃とかで駄目だから」

「ディードさんは随分と変わった剣を使うんだな？」

「ベルゼルガーですか？ あれは龍也兄様に頂いた大事な物ですので使いこなせる様に毎日毎日訓練したんですよ」

「……マドカ」

「セツテ」

「うふふふふ」

なんかマドカとセツテさんが共鳴している。と言うかマドカがふふふふつなんて笑う所は始めてみたと思う。互いに互いの気になる話をした。ISとデバイスのことや、凄い戦いだっさと模擬戦を見た感想。お茶とお菓子を食べながら話していると、さつきまで難しい顔をしていたティアナさんも

「はい。間違えてる所ピックアップしたから。後で直しておきなさいよ」

「あ、ありがとー！やっぱり持つべき者は相棒だよね♪」

嬉しそうに笑うスバルさんともうつと溜息を吐くティアナさん。それはさつき演習場で見た真剣な顔で龍也と戦っていた人と同じには見えなかった

「監禁？ならば手錠を上げましょう」

「いいのか？ありがとう」

なんかマドカとセツテさんが凄く怖い会話をしてるけど聞かなかったことにしよう。手錠でマドカが何をするつもりなのか？考えるだけでも恐ろしい。それにセツテさんが

「拘束すればこっちの物です。悪戯しほうだいです」

「悪戯し放題……（ポツ）」

……今日は少し警戒して寝ておこう。ISの部分展開とかしてフィールドを発生させて置いたほうがいいのかもしれない。あ、IS修理中だから無理だ……その事に絶望していると

「ISね。龍也さんには聞いてたけどデバイスによく似てるのね」

「そうなのですか？」

「うん。私は専門じゃないけどね、そのくらいは判るわよ」

「……デバイスは買うんですか？」

「フリーの人は自分で作るわね。私達のは支給品のワンオフのデバイスよ」

「パーツとかは売ってるのですか？もしそうなら見てみたいんですが」

ティアナさんやセシリアがそんな話をしている。簪さんとエリス

さんはデバイスに相当興味があるのか、ティアナさんにそう尋ねていた。どうやらスバルさんとティアナさんのやり取りで肩の力が抜けたようだ

「ディード。今度時間があればいいのだが私と組み手をしてもらえないだろうか？」

「構いませんけど……どうしてですか？」

「私は二刀流の剣術を修めているのだが、このままで良いのかとか考えてしまつてな。良かったら同じ二刀流使いと勝負をしてみれば何か閃くのではと思つたのだ」

「そう言うことでしたら構いませんよ。今日は17時頃からもう1度訓練がありますのでどうぞその時に手合わせしましょう」

わいわいと明るい話が続く。だけど俺達はずっと聞かなければならない事がある、ネクロの事とかだ……だけど誰もそれを口にしない。嫌したくないのだ、まだこの世界に来て2日目だ。昨日の龍也の話では1週間は大丈夫なのだからそう焦ることはない筈だ

「おーい、スバルーティアナー！龍也が皆で遊びに行つて良いつて半日休暇を出してくれたぞー！しかも小遣いもくれた！皆で遊びに行こーぜ！」

ノーヴェさんが食堂の入り口の所で来い来いつて手を振っている。

「それとー！一夏だったかー！お前達も来いよークラナガンを案内してやるぜ」

おお。それは面白そうだ、俺は隣の箒達を見て

「折角誘つてくれてるんだ。行こうぜ」

魔法使いの世界の街。どんな所なのか見てみたかった、しかも同年代なら俺達が見ても楽しい所を考えてくれそうだ

「良いですね。行って見たいです」

「私も見たい」

キラキラとした目で行きたいという簪さんとエリスさん。それに箒やシエンさんも

「少ししか見れなかったからな。1度見てみたいと思つていた」
「観光名所とかはあるの？スバル？」

楽しそうに話しかけてくるシェンさんにスバル達は

「あるよ♪それに美味しいスイーツの店とかも一杯」

「良い機会だから案内してあげるわ。それと簪さんとエリスさんはデバイスに興味があるみたいだから、デバイスのパーツを売っている店も見せてあげるわ」

嬉しそうに笑う簪さんとエリスさん。自分達でISの整備ができるからデバイスも興味があるのだろう。かという俺もデバイスのパーツと言うものに若干の興味があるんだけどな

「ユウリ。楽しみね！見てみたいって言ってたわよね？」

「……あ、ああそうだな。確かに見てみたいと思っていた」

「じゃあ行きましょう♪」

ユウリが楯無さんに手を引かれて食堂の入り口で手を振っているノーヴェさんの所に行く、俺達もその後をついて食堂を出て行ったのだった。見たことのない魔法使いの暮らす世界に対する好奇心と興味心で高まる胸の音を感じていたのだった。この時だけはネクロに對する恐怖も不安も何も感じなかった。感じていたのは自分の知らない世界を見てみたいという気持ちだけだった……

一夏達がクラナガンの街に繰り出した頃。ジェイルのラボでは「うーんとまあこんな物かな」と

最後のデータの入力を終えてググーツと背伸びをする。今までしていたのはスコール・ミューゼルさんの身体データを元にネクロに壊されてしまった。両足と右腕の治療の為のデータ入力をしていただけだ

「まさかあの世界にも戦闘機人を作れるだけの科学技術があったとは驚きだ」

スコールさんのスキャンデータを見て驚いた。それはスバル君やウーノ達と同じく、機械の骨格と人造筋肉で構成された戦闘機人だった。とは言え

(かなり旧式だったな。しかも私の設計した物じゃない)

ネクロに脅され考えてしまった戦闘機人。今はもうその図面は何一つ残っていない、もし残っているとすれば私の頭の中だけだ

(それに身体のうちこちはボロボロ。手術で神経を繋いだ跡があちこちにある)

考えられるのは昔何かの事故で身体の大半を失い。それを補う形で戦闘機人に近い存在になったと言うことだろう。データの入力は済んだから今から製作を始めれば明日の昼ごろには完成する

(手術の感が鈍ってないといいんだがな)

もうやらないと決めていた戦闘機人の手術。だけどそれをするこゝとで誰かを救うことが出来るのならもう1度やるまいと決めいた手術をすることも受け入れよう。ブランクはある、だからそれだけが不安だが。私にならきつと出来る

「ふーこれもまた何かの運命なのだろうな」

ネクロによって自分の愛する娘達が戦闘機人になってしまった。私はその事を死ぬほど後悔した、だがその事で今スコールさんを救うことが出来る。罪深いはずの私が人を救える立場になれるというのなら……

「いつかはこの罪深いこの身を許せる日が来るのかもしれないな」

私は誰もいないラボの中でそう呟き。はやて君達から預かったI Sの修理を始めたのだった……

第9 1話に続く

第91話

第91話

ノーヴェさんやスバルさんにクラナガンの街を案内してもらった。俺達の知る街と良く似ている、魔法使いの世界とは言えそんなに差異は無いんだなあと感じていたのだが

「隣の地区からは閉鎖区域だから引き返すわよ」

そう言つて背を向けるティアナさん、普通の街並みに見えるけど閉鎖区域つてどういうことだろうか？

「む？壁？透明な壁があるぞ？」

「本当だな。もたれかけることができな」

マドカとラウラが閉鎖区域の方に手を伸ばして、それぞれの右手と左手を起点にして立っている。まるでパントマイムのようにだと思つているとセツテさんが

「そこから先はネクロが進行の拠点にしていた移動要塞「パンデモニウム」の残骸が落ちている地区でネクロの魔力に汚染されているんです、当然ネクロの出現率も高く、大変危険ですので龍也様が結界で周囲を封鎖しているのです」

そうなのか、かなりの範囲が封鎖されているのかもしれないと思いつながら辺りを見る。普通の町並みの中にある封鎖区域。それだけ

ネクロの攻撃が激しいってことなのかもしれない。セツテさんの説明を聞いていると1つ引かかったことがあった。それを訪ねようとすると箒が俺よりも早く封鎖区域のほうを見て

「封鎖区域があるのなら、そこまで警戒する必要は無いんじゃないのか？」

箒の質問は正しいと思う。地区を封鎖しているのだからネクロが現れないんじゃない？と思うのは当然の事だ。それなのにこの周囲にはカーキ色の制服を着た管理局つて所の人たちの姿が見える。箒の質問にノーヴェさんが

「いや、ミッドチルダ全体は魔力に満ちてるからな、空間転移の能力を

持つネクロや下位ネクロはその魔力に惹かれてやってくる。封鎖区域とは関係ない所に出てくることもあるんだよ」

「そうなのか。でもそれを言われるとIS学園の敷地の中に直接跳んで来たこともあったなと思出し納得しているとスバルさんが

「あと勝手に入ろうとすると捕まって、牢屋に入れられるから。罰金は安く見ても50万からだから入らないでね?」

「いや。俺死にたくないからそんなところ頼まれても入らない。それだけ危ないってことかと納得していると

「デバイスのパーツの店は?」

「エリスさんがそう尋ねる。ISの整備が好きな簪さんも興味津々と言う顔をしている

「ああ。見たいって行ってたね。近くだから案内するよ」

「そう言っつてスバルさんは歩き出そうとして、立ち止まり振り返つてティアナさんを見て

「隊員証持ってる?」

「……忘れたの?」

「……うん」

「いやーな沈黙が満ちる中ノーヴェエさんがはあつと深い溜息を吐いて

「あたしは持ってきてるぞ?ティアナは?」

「私も持ってる。半日休憩だからってちゃんと身につけてなさいスバル」

「ティアナさんとノーヴェエさんに怒られてしよぼーんとしているスバル。なんか年上なのに可愛いと思え

「ふんっ!」

「ぐぶう!」

「シャルと鈴の両サイドからの裏拳を両頬に叩き込まれ、一瞬視界が狭くなった気がした、足元がふらついている俺を鈴が掴み

「あたし達はあるまりそう言うの興味ないから、別の所を見てみたんだけどいいかな?」

「デバイスに興味があると言っていたのは、クリスさんと簪さんそれ

にエリスさんとユウリだ、確かに少数だった

「それなら近くにカフェがあるからそこに案内してやるよ。オーブンカフェで良い所なんだ、あたしもあんまりそう言うの興味ないからさ、そこで待つてようぜ」

助かった助かったと言いたげなノーヴェさんに続こうとするスバルさんはティアナさんに肩をつかまれ

「荷物もち」

「……はい」

多分スバルさんも、そう言うのに興味が無いんだろうなあと思っているセツテさんが別方向に歩き出す

「どこに行くんだセツテ？」

「……予約していた龍也様の写真集をとりに行くのです。それではまた」

そういったセツテさんは振り返ることも無く歩きさって行った。それを見ていたヴィクトリアさんが

「セツテは龍也さんのことを様付けしているが、どういう理由なんだ？」

ノーヴェさんはセツテさんの姉だから知っている筈と思ひ尋ねたのだろう。ノーヴェエは頭を掻きながら

「セツテは龍也至上主義。龍也の事が何よりも優先する、セツテの部屋なんか壁全部龍也の写真で埋め尽くされてるし、等身大の人形とかもあるんだぞ」

……それは相当やバイレベルまで行ってしまっているのでは？と全員が思ったが誰も口に出さなかった。鈴とかシャルはそうか……とかなかなか悟りを開いた顔をしているし、この世界は下手をすると鈴とかにかなりの悪影響を与えるのでは？と思わずにはいられなかった……

「まあ。そう言うわけだからセツテはほつておいて良いぞ。邪魔すると襲ってくるからな、それよりカフェに行こうぜ」

そう言つて歩き出すノーヴェさんと

「末妹ですし、お兄さんに憧れがあったんだと私達は判断しています

から。龍也兄様は尊敬できる人ですし……無理も無いと思うんです」
につこりと笑いこちらですと言って歩き出す、ディードさんの背中
を見て俺達は馴れ馴れして恐ろしいなあと思うのだった……多分六課の
人は魔王に慣れきってしまっているんだろなあと思うのだった
……その後俺達は観光名所を見て回り、龍也の家へと帰ったのだった
……ちびっ子が元気でトランプしよーよーとか言って鈴とかシェン
さんにじやれ付いているのを見ながら、部屋に戻りベッドに寝転がっ
て夕食の時間まで少しだけ眠ることにしたのだった。実を言うと最
近夜祿に眠ることが出来ず寝不足気味だったからだ、少し街を歩いて
疲れたのか俺は夢を見るようなこともなく眠りに落ちたのだった
……

なおティアナに簪さんとエリスさんは

「これがデバイスのパーツ」

「結構高いんですね」

パーツと値段を見てそんな話をしている簪とエリスにティアナは
「まあここのは六課とかの前線部隊のパーツを専門で取り扱ってるか
らちよつと割高よね。まあ性能はいいからそれでも買うんだけどね、
おじさん、頼んでおいた狙撃用のパーツとハンドガンのカートリッジ
は？」

「はい。ちゃんと仕入れてあるよ、いつも買ってきてくれるかちよつと割
引しておくね」

店員から渡されたパーツを受け取っているティアナ

「このカートリッジギミックと言うのはこれか……」

「見て判るの？ユウリ」

「判らん、どうやって搭載するんだ？」

カートリッジシステムを見ているユウリと楯無

「一回フレームをばらしてロード機構とマガジンを搭載するの、同じ
外見でも中の性能は違うからね、その人の魔力ランクに応じて買うん
だよ」

スバルはカートリッジを買い足したいけど、隊員証を忘れたしなあ

と呟いている

「はい。スバル荷物を持って」

「はい。かなり多いね今日は？」

「まあね。あとこれよろしく」

簡易デバイス製作キットをスバルに手渡す。それは囑託の魔導師が使うデバイスを作れる物だった

「どうするの？これ？今更必要ないでしょ？」

スバルの問い掛けにティアナは私のじゃないわよと返事を返して

「簪とエリスはメカニック志望なんでしょ？私がメンテナンスする時に教えてあげるから組んでみなさいよ」

「え？私とかでも作れるの？」

「作れるわよ。私とスバルも最初は自作のデバイス使ってたしね。ユウリは？買うならもう一つ買うけど？」

「まだ良い、考えたいことがある。デバイスを作っている余裕は無い」

ユウリはそう呟くと店を出て行ってしまった。楯無はそんなユウリの背中を見つめて

「ごめん。ユウリが心配だから行くわ。後でね！」

簪とエリスにそう声を掛けて出て行ってしまった。残されたスバル達は

「何か訳ありそうだね。まあ私が言う問題じゃないか……それじゃあカフェに行こうか」

会計を済ませ一夏達が待っているカフェにと向かったのだった
……

龍也に連れて来られて来た研究室では

「やあ。ミス・ミューゼル、ようこそ私のラボへ」

白衣を着た紫色の髪の男性に迎えられる。龍也の話によると彼が私の手足を治してくれる科学者のジェイル・スカリエッティと言うここでは高名な科学者らしい

「大丈夫なのか？かなりハイなやつそうだぞ？」

「大丈夫だ。頭は少々おかしいが腕は確かだ」

「待つてくれないか龍也。頭がおかしいというのは出来たら否定して欲しいのだが？」

「なんか不安になるんだけど……本当に大丈夫なのかしら」

「心配しなくていいよ。ミス・ミューゼル、私なら君に再び走ることが出来る足と大事な物を掴める手を与えられる。信用してくれたまえ」
金色の瞳が私を見る。その目は真っ直ぐで信じてくれと伝えてきているような気がした

「判ったわ……よろしくお願いするわ。ドクター」

「ああ。任せてくれたまえ、さてと龍也とミス・オータムは外へ行つてくれるかい？この手術はとても難しい私一人にしてくれ」

スカリエッティがそう告げると龍也は私を見て

「不安に思うことは無い、ふざけているかのような口調だがこいつは良い科学者であり医者だ、私の義手もこいつの作品だ、心配する必要は何ひとつ無いぞ」

そう笑つて出て行く龍也。だがオータムは不安そうに私とスカリエッティを交互に見ている。会ったばかりだから不安なのだろう

「心配ないよ。ミス・オータム、失敗はありえない。半日ほど掛かるから外で待つているといい」

優しい口調で言われたオータムは少し考える素振りを見せてから頷き

「スコールをよろしく頼む」

「任せておきたまえ」

スカリエッティにその声をかけてオータムは部屋を出て行った。
残ったのは私とスカリエッティだけだ

「ではまずは腕の適合性を試すよ。色々と用意してみた。1番感じの良いのを言ってくれ」

スカリエッティの後ろのハンガーには右腕がたくさん掛けられていた。多分これが切り落とされた右腕の代わりになるのだろう。私の右腕の接合部にあるコネクターにワイヤーをつないで

「良いよ。動かしてみてくれ」

「どうすればいいのかしら？」

タスクではこういう感じではなかったので感じが判らないと言うと

「拳を握り閉める、開くで良いよ。感覚は繋いであるから思うだけで動くはずだよ」

言われたとおり拳を閉じて開くイメージを試してみる。離れた所にある右腕がゆっくり動く

「固い気がするわ」

酷い筋肉痛の時に手を動かしているような気分だという

「じゃあ次だね。これはどうだい？」

今度は軽いので軽いという。どうも見た目は同じだけど少しずつ違うらしい、そんな中5本目の腕で

「あ、これが丁度いいわ……自分の腕みたいにしっくり来る」

前の右腕よりも感じが良い。それに実に滑らかに動くという

「ん。これだね。肘と手首のモーターを強くして人工筋肉を少し多めに使っているのが良かったのかな？それじゃあ右腕は決まりと」

「今度は足なのかしら？」

私がそう尋ねるとスカリエッティはいいやと言って

「足のほうは人工筋肉から骨格。手術で今の機械の骨格を取り出して嵌めなおす。だからここからは手術になる」

そう言って私に失礼と声をかけてからオペ台に優しく乗せてくれる。仰向けでスカリエッティを見て

「リハビリとかは必要なのかしら？」

不安を口にするのは嫌だったのであえて軽い口調で尋ねると

「不要だよ。身体に馴染むまでの2〜3時間ベッドの上でいてくれれば歩けるようにはなる。走れるようになるのは少しだけ時間が掛かるかもね」

そう言って手術の時の麻酔の用意をするスカリエッティに

「どうして貴方はそんなに滑らかに手術の準備が出来るの？」

この手術の準備は明らかに手馴れた感じだと思ひ尋ねるとスカリエッティは

「この手術は戦闘機人の手術だ。ネクロに脅され私が作ってしまった、だから私は誰よりもこの手術に詳しいのさ」

明るい性格だと思っていたけど彼も内に闇を抱えてたのね。もしかすると私とオータムのように龍也に仲間にされたのかもしれない
「心配しなくても良いよ。直ぐに終わるからね。それじゃあお休み」

麻酔を掛けられて私の意識は闇の中にと沈んで行ったのだった

……

「う、うん？」

目を覚ますとそこは研究室ではなく白を基調にした医療室のような部屋だった

「や。目が覚めたかい？ミス・ミューゼル」

ぼんやりとした頭を振って身体を起こそうとしたが

「動けない？」

体がピクリとも動かない。動くのは視線と口だけだった困惑している私にスカリエツティが

「うん。まだ動けないよ、ついでだから右腕と両足だけじゃなくて背中とかの金属の骨格も交換しておいたよ。今まで傷みとかあったんじゃない？」

その言葉に頷く。金属の骨格は取替えが利く分便利だったが拒絶反応とかで薬が手放せなかったのだ

「その薬ももう必要ないから、人造骨格と筋肉に変えてるから薬は必要なし、まあ今日1日は大人しくしてもらおうけど……多分明日からは普通に歩けると思うよ」

それは予想以上に良い変化だ。今まで苦しんでいた拒絶反応がなくなるだけでもありがたい

「ありがとう。ミスタ・スカリエツティ」

「どう致しまして。それじゃあもう少し休んでいると良いよ、多分眠いだろうしね」

そう笑って出て行くスカリエツティの背中を見てみるとまた強烈な眠気が襲ってきた。ここはもう少し眠ったほうが良さそうだ、私は睡魔に身を任せて眠りに落ちたのだった……

ワタシはどうすればいいのだろうか……

龍也に許可を取って1人でクラナガンの街を歩きながらワタシは考え事をしていた。前にセリナが現れた時、もし楯無がいなければワタシは死んでいただろう。それを自分の身を呈して助けてくれた楯無、そしてその楯無を莫大なデメリットがある核同調（コアトレース）を使ったワタシ……

（ワタシは……どうして楯無を助けたんだ……助けられたから？）

助けられたから助けた、それは当然の事だ。だがそれだけか？もやもやとした感じが何時までも胸に残る。首から下げたロケットペンダントを開く。そこにはまだ人間だった頃のセリナの写真が収められている。研究所で唯一残っていたセリナの写真だ……ロケットを閉じる。よく考えるとIS学園にいる間に何度このロケットを開いただろう？タスクでは毎日見ていたのに

（ワタシは楯無に惹かれているのか？こんな身体で？）

ワタシはあの外道共の実験で男になってしまったが、本当は女なのに？何時限界が来て死ぬかもしれないの？

「馬鹿らしい……そんなことは許されることでは「何が馬鹿らしいの？」」

突然聞こえた声に驚きばつと後ずさるとそこには

「なによりそんなに逃げなくてもいいじゃないユウリ」

センスを片手にくすくす笑っている楯無がいた。今1番会いたくない時に来たなと思っていると

「それで？何が馬鹿らしいの？」

首を傾げながら尋ねてくる楯無に

「言う必要は無い」

つつばねる用に言うとう楯無はくすりと笑みを深めて

「そ、それならユウリが言うのを待ってるわ」

にここにこと笑う楯無はそうだと言って

「はやてさんとかが観光にいいところを教えてくださいましたから一緒に行き

ましようよ」

「嫌だ。付き合う道理は無い」

考え事をしたくて1人になったのに楯無と一緒にでは意味が無いと思いつながら言うと、楯無は顔に浮かべていた笑みを消して

「それで自分だけで全てを解決できると思いつて進むの？」

その目は真剣そのもので言葉に詰まる。そんなワタシを見ながら楯無は

「あのセリナって言うネクロに会ってからユウリはずっとおかしいよ。昔の知り合いかもしれない、もしかすると私にセリナって言う人を重ねて見てしまつて辛いのもかもしれない。だからつて1人になるのはおかしいと思うよユウリ」

確かにワタシは楯無にセリナを重ねて見てしまつているのかもしれない、何かもセリナと楯無は良く似ているからだ

「私はユウリが話したくなるのを待つよ、だけどユウリがまた1人になるのはほつておけない。だから私はユウリを1人にはさせない」

強い意志を宿した目で私を見る楯無。だがワタシが抱えている問題を話して良い物かと思う、話してしまつて楽になる所か自分の首を絞めてしまうかもしれない可能性があるからだ

「何かを悩んでいてもいいよ。ユウリはユウリでしょ？何も不安がることも怖がることは無いと思うよ？さてと！それよりも行こう！良い所があるつて教えてくれたんだよ」

そう言つてワタシの手を取つて歩き出す楯無。こういうところはセリナには無かつた所だ、それにさつきまで楯無と一緒に居たく無いと思つていた。それなのにながれた手から感じる体温のせいかとても安心する。ワタシは1人ではないんだと思える

「楯無どこへ行くんだ？」

どこに行くかも知れずについていくのも可笑しな話なのでそう尋ねると楯無は

「凄く良い所よ。龍也さんやはやてさんが良く行く場所なんですつて」

そんな所に行つていいのか？龍也やはやてが良く行くという事は

2人がなにか思い入れがある場所なのでは?と思っていると

「そこからの景色が凄く良いんですって。そこに行ったらきつとユウリの悩みも解決するんじゃないかしら?」

強引ではあるがワタシのことを心配しての行動だったのか……ワタシの手を引く楯無の背中を見つめながら

(覚悟を決めたほうがいいのかも知れんな)

楯無だっけきつと不安に思っている。セリナを見て恐怖しただろうし、ワタシが如何して自分の傍にいてくれるのかと考えただろう

……それでもなおワタシの手を掴んでくれた楯無。何時までも逃げていても仕方が無いのかもしれない……それが恐怖や不安を乗り越えてワタシの手を掴んでくれた楯無に対してワタシが出来るただ1つのことなのだから……

ISの改修と修理がまだ終わってないからと言って、身体を動かさないといざと言うとき身体が動かないので、演習場で組み稽古をしているのだが

「遅いぞ一夏」

マドカの冷静な一言が聞こえたと思った瞬間。天と地が逆転し俺は背中を強か地面に打ちつけていた

「あいたた……何をしたんだ?」

マドカにそう尋ねるとマドカは手を振りながら

「円運動だ。合気の種類だな、これなら身長も体重も何もかも関係ない」

ふふんと笑うマドカ。その笑い方は千冬姉にそっくりだった、俺は腰をさすりながら立ち上がる。徒手空拳の組み手も駄目、木刀を使った軽い打ち合いも駄目。今日は散々だと思っいや……別の理由からか

(俺は戦うのが怖いのか?)

2回の暴走また何時暴走するかもしれないという不安が会って集中しきれないのか?

「一夏。今日は少し動きが悪いがどうかしたか？」

弥生さんとの組み手を終えたラウラがそう尋ねてくるとそれが切っ掛けになったのか鈴や箒も訓練を1回止めて

「確かに今日の一夏は随分と動きが悪いな、どうかしたのか？」

「調子が悪いならクリスとかと動きの分析をしてたらどう？」

俺を心配してそう言うってくる箒と鈴。だが調子は悪くないのだ、だが身体が動かない

(俺はどうしてしまったんだ)

箒や皆とネクロと戦うと決めたはずなのに、俺の身体は俺の決意を嘲笑うかのように動いてくれない。その事がもどかしくて苛立ちを感じつつ、箒や皆を心配させるわけにも行かず

「少し考え事をしてただけだ。次からは大丈夫だ」

パンッと手を叩いて気合を入れるような素振りをする。今はISを使っていないんだ暴走する筈が無いんだ、何を恐れる必要がある？そう考えて深く深呼吸をしよう1度マドカとの組み手をやろうとしていると、ふと気付く

(あれ誰だ?)

逆立った金髪に、黒いライダースーツの青年が俺を見ていた。その眼光は異様なまでに鋭く、思わず背筋が伸びた。ここにいるということとは六課の人間だと思っただが、どうも雰囲気が違うなあと思っっている

「皆ちよつと来い」

演習場に来た龍也が俺達のほうを見て手招きする。何の用だろうと思いつながら近づくと

「今から私は今度ここに配属される隊員の訓練を見に行くのだが、一緒に来るか？」

ちよつとそごまでつて言う感じで言う龍也。ここに配属される隊員の訓練の見学？そう言うのつて俺達が行ってもいいのだろうか？

「え？そう言うのつてあたし達が行っても良いの？」

思ったことをすぐ口にする鈴がそう尋ねるとヴィクトリアさんも

「向こうは事情を知らないのだろうか？私達が行ってたら気分を害する

のではないのか？」

雑誌やTVで見たが機動六課はエリート部隊で若い隊員の憧れの部隊だそうだ、そんな部隊への配属が決まるかもしれない訓練の見学に何も知らない俺達が行くのはお門違いではないだろうか？

「いや、お前達が着いて来る事に意味はある」

龍也は有無を言わさない強い口調でそう言い切った。その余りに強い口調に萎縮する面々がいる中、シエンさんが

「龍也さん、私達が行くことに意味があるってどういうことですか？」

魔法を知らない俺達が行く事に意味があるなんて到底思えない、龍也は俺達を見ながら

「今から行く部隊は追跡班の訓練生がいる部隊だ。大体が15〜17歳が多い、それに実戦経験をしているティアナやスバルは先に行つて自分達の体験談を話す準備をしている」

ここで言葉を切った龍也は少しだけしゃがみこみ。俺達を見て

「不安があつて訓練で身体を動かして不安を紛らわそうとしてるのは判る、だが今必要なのは別にあると思う。同年代と話してみても、訓練を見てみて。自分達が不安に思っていることを訪ねてみると良い、何時までもそれを抱え込んでいては悪循環にしかたない。寝れてないだろうか？」

龍也の言葉で俺や箒達の背筋が伸びる……そう俺達はここ最近緑に眠れていない、俺は眠るとまたあのオレに会うかもしれないという恐怖から。箒や鈴達はあの時見た自分のネクロの存在がきっかりで眠れていないのだ

「そんな状態で訓練をしても意味が無い。だからどうだろうか？気分転換、そしてお前達が抱えている問題を解決するために一緒に来ないか？」

冷静に説明してくれる龍也。俺達は少し考えてから行くことと返事を返したのだった……そして龍也に連れられていった部隊で俺達は知る事になる。戦うと言う事と立ち向かうと決めた人達の話聞いて、そしてその話が俺達の人生の転機になるということを知り、俺達は知らないのだ……

車に向かう途中で俺は気になっていたことを龍也に尋ねてみる事にした

「さっき逆立った金髪の人が俺達を見てたんだけど」

俺がそう尋ねると龍也はああと頷き

「ルシルファー・S・ハーティーン。剣の腕はピカイチで面倒見も良い、少々口が悪いから、勘違いするかも知れんがいい奴だよ。

多分お前達の動きを見て何か言おうとしてたんじゃないかな？」

そうなんだ。じゃあ怖がることはなかったのかと安心していると龍也は

「まあその内に紹介する。あいつは言う事を聞かないのでな、いつかとは言えんがな」

そう苦笑して歩く龍也の運転する車に乗り。俺達を乗せた車は新人がいるという部隊の方へと走り出したのだった……

くおまけく

シエンの日記

龍也さんの豪邸の中で私は

「迷った……」

自分の部屋が判らなくなりうろろうしている

「どうしたんですか？」

「あーリインちゃん？」

私を見上げながら尋ねてくるリインちゃん。迷子になったと言いにくくなんと答えた者かと考えていると

「暇なら遊んでください」

キラキラとした目で尋ねてくるリインちゃん。その手にはグローブとボールが見える。キャッチボールでもしてたのかなと思いがら

「良いよ。遊ぼうか？」

「わーいーじゃあこっちですー！」

嬉しそうに笑って歩き出すリインちゃんの後をついていくと、ホー

ルに出て玄関の前に出た。小さくても暮らしてるから覚えてるんだなあと思いつながら一緒に庭に出ると

「キュー♪」

「待て待てー!!」

「回り込むよー!!!」

庭を走り回るドラキチとそれを追いかけているアギトちゃん達の姿が見える。私とリインちゃんが行くと

「……………こ、こんにちわ」

「こんにちわ」

フードを被っている少女に頭を下げ返す、リインちゃんに差し出されたグローブを受けとり

「おー?リインも遊んでくれるのかー!」

「人が増えると楽しいよねー」

「そうですね、よろしくお願いしますね」

「キュー!!!」

ちびっ子軍団とドラゴンが楽しそうに笑う。私はグローブをバシバシと叩きながら

「よーしー!こーい!!」

「えーい!!!」

山なりで投げられたボールを受け止めながら

(なんかこういうのいいなあ)

IS学園ではなかった心休まる時間。こういうのは凄くいいなあ、私はそんな事を考えながらボールをアギトちゃんへと投げ返したのだった……途中で鈴も出てきて

「面白そうじゃない、あたしも遊んであげようか?」

「わーい!嬉しいです!じゃあこれをどうぞ!!」

リインちゃんからグローブを受け取り私の隣に立つ鈴に

「行くぞー!」

綺麗なフォームから投げられたボールは真っ直ぐ鈴の胸元に来る

「上手いじゃない。ほら行くわよー」

リインちゃんに山なりにボールを投げると

「キューー！」

ドラキチがそれに割り込んでボールを口でくわえる。

「おおー！」

私と鈴は思わずその曲芸のような動きに拍手をしてしまった。それから私と鈴はアギトちゃん達が満足するまでキャッチボールや追いかけてっこをして遊んであげたのだった……

第92話に続く

第92話

第92話

龍也さんの運転する車はどんどん郊外に向かっっていく。かなりの人数が乗れる超大型の車だった、なんでも新入隊員を迎えに行くときの車らしい。多分これで龍也さんが迎えに来た新入隊員と言う人は相当驚いたんだろうなあと思いつつ窓の外を見てみると。車はどどん山の中に入っていく街外れってネクロとかが多くて危ないんじゃない……

「龍也どこまで行くんだ？」

山の中と言うことで不安に思ったのか一夏君がそう尋ねると

「んー？訓練所。街中じゃあんまり意味のない部隊だからな」

街中じゃあんまり意味のない部隊？？という事？私が首を傾げていると龍也さんは前を向いたまま

「そう不思議そうな顔をしなくても良いだろう？簪」

前を向いているのに突然名指しされ驚いているとラウラさんが

「魔法か？」

「馬鹿を言え馬鹿を。この程度で魔法を使うか、ただ気配とかそういうので判るんだよ」

それは魔法よりも凄いのでは……これが経験を積んだ魔法使いと云うものなのだろうか？

「それで私達が見学する部隊と言うのはどんな部隊なんだ？こんな山奥にある部隊とはなんだ？」

ラウラさんの問い掛けに龍也さんは笑いながら

「特殊部隊だな。追走班だ、チェイサーと呼称されている」

追走？ネクロを追いかける班って事？私が首を傾げていると龍也さんが

「まあ口で言うよりも見たほうが早い。もう着くぞ」

そう言われて窓の外を見て私は驚いた。窓の外に広がっていたのは

「街がまた……それに遺跡とかまで……」

箒さんがそう呟く、窓の外の広がっていたのは今私達が来た街並みと遺跡が入り混じったような不思議な場所だった

「龍也さん。ここは一体何をする場所でチエイサーとは何の部隊なのですか？」

「チエイサーは特殊部隊でな。街中や山中に現れたネクロの追走を主な任務にした部隊で最近発足したばかりの部隊だ。お前達と同年代が多い、まあ聞くよりも見てみる。そして話をしてみる、いろいろな理由をもつてネクロと戦うことを選んだ者達の声をな」

そう笑う龍也さんだが私はとても笑えるような状況ではなかった。一夏君達にしてもそうだ、ネクロの脅威を知って戦うのが怖いと私は思ってしまった。だがここには私と同年代でしかもネクロと戦うと決めた人達がいる……その人達と話すことで何か変わるかもしれない、何かを決断できるかもしれない……多分これは私だけじゃなく一夏君達も同じはず……ここでの話し合いはきつと有意義な者になる……私はそんな事を考えながら近づいてくる施設の入り口を見つめるのだった。

施設に向かう車中で憂い顔をしている者がいた。一夏だ、暴走するかもしれないということへの恐怖心のせいで、思わず胸を押さえた一夏は

(俺は……ここで何か変えることが出来るのか?)

自分で自分じゃなくなるような言いようの無い不安。また暴走するんじゃないかと言う恐怖……不安と恐怖をその目に宿した一夏。そんな一夏を不安そうに見つめる者がいた、鈴と箒だ。幼馴染の2人は気づいていた、最近一夏が無理をして笑っていることに……

だが自分たちでは何も出来ないというもどかしさ……箒と鈴は窓から見える施設を見つめながら、ここで一夏が何か答えを得れる事を願っていたのだった……

あたしは訓練着に着替えながら大きく溜息を吐いた。あたしの名

前はアイビス・ダグラス3等陸士。新規発足された部隊「チエイサーズ」に所属している。訓練着に着替え終えロッカーに張つてある紙を見る、そこには

『○月某日 八神大将 訓練視察。機動六課への配属の可能性あり。各員気を引き締めること』

教官から配られた紙を見てあたしはもう1度溜息を吐いた

(八神大将の視察かあ……緊張するよなあ……)

管理局で最強と言われ、そしてパンデモニウム事変を終結させた。最強の魔導師。それが八神大将だ……そんな雲の上の人が訓練の視察に来るもしかするとエリート部隊の機動六課への配属が決まるかもしれない。これで緊張するなと言うほうがおかしい

「ううーでも頑張るしかないかあ」

あたしが選ばれるとは思ってないが、もしかするとと言う可能性もある。やる前から諦めるのはあたしらしくない。両手を打ち合わせ気合を入れていると

「ふん。お前なんかに参加しても無意味だといってやったのに参加する気か？アイビス」

青い髪を翻しながらあたしにそう言う吊り目の同期。スレイ・プレステイだ。座学・実技共にNO.1で同期の中で機動六課への入隊が確実だと噂されている

「あたしだってちゃんと試験に合格してるんだ。嫌味を言うのはやめてよね」

「ふん。ギリギリの落ちこぼれが参加するだけ無意味だ。恥をかく前に辞退すればいい物をお前なんかは八神大将の目に止まる訳が無い、機動六課に配属になるのは私だ」

そう言つてロッカーを出て行くスレイ。入隊当時からずっとこんな感じだ、あたしは何もしてないのにどうしてこうも目の敵にするかなあ。知らないうちになにかしてしまったかなと思うが心当たりは当然無い

「あーもうーどうしてああ嫌味っぽいかな!!!」

この部隊に所属してからずっとああいう風に嫌味を言ってくるス

レイに苛立ちを覚えた物のいつものことと割り切り

「今日は駄目。張り合おうとしないで自分のベストを尽くそう」

今日のコースは遺跡コースだ、最高難易度のこのコースであたし達の技量を見てもらう。他の事を考えられるほどのコースは甘くない。もう一度手を打ち鳴らして愛用のフィンガーグローブを嵌めて

「しゃっ！行くぞー！」

自分のベストを尽くす、それだけを考えてあたしはロッカールームを後にしたのだった

「では本日の訓練は実戦形式で山岳コースでレース形式だ。アイビス・スレイ・クロウ・シャリーは前に出る」

教官の言葉に頷き前が出る。山岳コースしかも実戦とレース形式かあ……これはかなり難しいよなあ……山岳コースはまず道が無い、自身の感と操縦のテクニクが試される。けどまあ量産型のトライチェイサーなら……

「なお今回は正式採用のトライチェイサーを使ってもらう。出力等は量産型とは比べ物にならない、各次運転には最大限の注意を払うこと。今より5分後反応弾を挙げる、それがスタートの合図だ。各員所定のスタート位置に散会し配置されているトライチェイサーの元で待て。なお今回は八神大將が視察に来ているが、緊張せずいつも通りの力を発揮してくれることを願う。では散会！」

その合図で渡されていた地図を見ながらスタート地点に向かう

(えーとB—3……ん？B—3って……)

嫌な予感を感じつつB—3地区に向かって絶句した

「崖の上だー!？」

崖の上のギリギリのコース。難易度最大のエリアだ……なんであしたがこんな難関コースを

「皆は楽そうだなあ……」

高いスタート地点だから見える。スレイは森林エリア、木々が生い茂っていて走りにくいエリアだ。クロウは直線エリアだけど途中で瓦礫があり真っ直ぐは進めないコース、確か途中でこっちの方に近づいてくるコースのはず。シャリーは湖畔エリア、ぬかるみとかでス

リップしやすいエリアだ。

「これは気合を入れていかないかね」

崖の上のコースは少しでもミスれば転落する危険性がある。しかもマシンは正式採用のトライチエイサー、いつもの量産機のつもりでは痛い目を見る。大きく深呼吸してからトライチエイサーに跨る。量産機の黒いボディと違って白銀のカラーリングが眩しい、エンジンを噴かせながらスタートの合図を待つ。この狭いコースでエンジンを噴かす、クラッシュするかもしれないからここは低速でスタートするのが普通だが

(もしネクロを追い掛けたらそんな事をやっている時間はない)

実践形式つまりネクロを追いかけていくというのが前提なんだ。なら最初から全開だ、エンジンを噴かし続けていると反応弾が上がる。それと同時にブレーキを離し

「いっけえ!!!」

しつかり握り締めているのに暴れだすハンドルととんでもない加速力。吹っ飛んでいく景色の中あたしの集中力は今まで最高にまで研ぎ澄まされていたのだった

「あははは！随分と思い切りの良いルーキーがいるな」

楽しそうに笑う八神対象の隣で正直少し焦っていた。アイビスがまさかあんな行動に出るとは思ってたからだ、確かに思い切りは良いが。まさかあんな山岳コースでいきなりエンジン全開にするなんて思っても無かった

「ところで八神大将」

「なんだ？えーと……カイ？」

首を傾げる八神対象に敬礼しながら。

「カイ・キタムラです。新規ルーキーの教導官担当です」

ちなみに私の方が1回り所か2回り位年上なのだが、ここは上官なので敬語で通そうと思いつながら

「後ろの方達は一体？」

管理局の人間ではない、それ所か魔導師でもない。全くの一般人を何故連れてきたのかと思いつながら尋ねる。その子供達は窓を興味深そうに見つめレース状況を見ている

「今いる世界でネクロに狙われている民間人だ。戦うか逃げるか選べるために連れてきた。アイビスを筆頭に同年代が多いからな」

魔法を使えない民間人がネクロに狙われるのは相当な理由があるはずだ。狙われる以上自分の身を護るだけの力を持つか、逃げるしかない。

「戦うといたら？」

「鍛える。死なないように生き残れるようにな、逃げると言うのなら逃げられるように手伝う。本人達の意思が重要だ」

やはり八神大将は若いが大將の地位になっているだけはある。周りを見る目がある

「しかしスレイ・プレスティか。随分と安定して走りをしているな」

森林コースを遅すぎず早すぎずのペースで走り続けている。このペースならあと数分で湖畔コースのシャリーと合流し戦闘になるだろう

「良い感じだな。だが私はアイビスの方が面白いと思うな。カイ」

「アイビス・ダグラス3等陸尉ですか？「敬語じゃなくて良い。落ちて着かない」……こほん、では失礼して。アイビスのどこが面白いと思う？」

そう尋ね返すと八神大将はにこやかに笑いながら

「思い切りの良さと判断能力は買いだ。ああいう人材が欲しいね」

落ちこぼれと言われていたアイビスが高評価だ。アイビスは決して落ちこぼれではない、判断や運転技術はずば抜けているが考え方が違うのだ。訓練で評価を得たいんじゃない、常に実戦を想定しているだからこうして差が出る

『な、なんでこのコースで追い上げて』

『スリップストリームだよ。後続がいるのに加速してくれてありがとね！』

クロウの加速で生まれた気流に乗り一気に追い抜いていく。アイビスの最も秀でている点それは空気の流れや魔力の流れを読むのに長けている。そしてそこにアイビス特有の動物的感が合わさると

『貰ったーッ!!!』

『うわあ!?!』

一瞬ハンドルに搭載された魔力刃を抜き放ちクロウの前輪を破壊する。オートブレーキで停車するクロウのトライチェイサーの横をエンジン全開で駆け抜けていく。山岳コースを物ともしない動物的なステアリング

(やはりアイビスとスレイの一騎打ちになったか)

座学・実技NO. 1のスレイがアイビスに辛く当たるのは自分を脅かすと知っているからだ。スレイは誰よりもアイビスの才能を理解している。だからこそ発破をかけていたのだ

(さあ行け! アイビス、スレイ! ここまでの訓練の成果を俺と八神大将に見せてくれ)

そしてシルバーとレッドの2台のトライチェイサーが最後のコース。遺跡をそのまま使用しているエリアに同時に飛び込んできたのだった……

やはり来たか……私は崖の上のコースを全開で走っているアイビスを見てそう思った。アイビスならきつと追いついてくると思った。だが

(崖の上のコースとは運がないな、アイビス)

崖の上のコースと森林のコース。崖の上のコースはゴールが近くにしる道が細くなつていく何時までのあのスピードでは走れない。合流地点でアクセルを全開にしたところでもう私には追いつけない。そう思っていたら

「いっけええええッ!!!!!!」

「なにいつ!?!」

崖の上から私のいるコース目掛けて跳んできた。私の後方に着地

する。クラツシユの音がしないから恐らくサスペンションを上手く使い態勢を立て直したのだろう。すぐにエンジンを噴かせ追いかけてくる音がする

(とんでもない無茶をするな！)

私も加速しながら崖の上を見る。高さは約10Mと言った所だ、幾ら正式採用機とは言えよくもまああんな無茶を

「あぶな……し、死ぬかと思った」

風に乗って聞こえてきたアイビスの眩きに。馬鹿かとい瞬思ったが

(いや、ネクロを追いかけていると言うことを想定すれば今の行動は正しい)

私たちはネクロの追跡を主にした部隊として活動するんだ。そうなれば自身の身の安全は二の次、ネクロを追いかけることを考えなければならぬのだから。躊躇いもなくジャンプが出来たアイビスに感心する反面追いつかれて堪るかと言う気持ちがかみ上げてくる。

(どうせ勝つならアイビスを倒してゴールする！)

ハンドルを切り強引に反転させ、トライチェイサーのフロントカウルに内蔵された射撃口から魔力弾を放つ

「うわつとと！攻撃はするくない!？」

それを減速と加速を組み合わせて回避するアイビスに

「実戦形式と言っただろう！悔しかったら追いついて見せろ！」

カートリッジを使い爆発加速でアイビスを引き離しに掛かる。風を引き裂いて発生した乱気流に少しハンドルを取られかけるが、それを体重を掛けることで制御し更に加速する。これで私の方が早い……ここまで考えた所で自分の失策に気付いた。後ろを見ると

「へっへースレイ忘れた？あたしは空気の流れを見るのは得意なんだよ！」

私が加速したことで発生したスリップストリームを利用して追いついてくるアイビス。いやそれ所かエンジンを噴かせて私を抜き去るタイミングを計っている

(くっ！引き離せない)

距離があつたからカートリッジを使ったのにその距離を物ともせず私の後ろに入ってきた。その判断の早さに驚く反面私は笑つていた。アイビスの勝負強さにだが何時までも加速状態ではいられない。この先は直角カーブだこのままのスピードだとクラッシュする。そう判断して失速した瞬間

「貰い!!」

アイビスが一気に加速して私を追い抜いていく。

「馬鹿か!?その先は直角カーブだぞ!?そのスピードで曲がれると思つているのか!?!」

思わずそう叫ぶあのスピードなら間違いなく曲がることなんて不可能だ。クラッシュするに決まつている、だがアイビスは更に加速してコーナーに向かつていく、クラッシュすると思つた瞬間

「行ける!」

前輪を跳ね上げてウイリーに入ったアイビスは強引に車体を曲げて直角カーブを減速なしで曲がりきつた

(信じられない。少し間違えれば大クラッシュだぞ)

加速による異常トルクで前輪を跳ね上げる。そうすれば曲がりきれぬが下手をすればクラッシュして終わりだ。私にはそんな思い切りの良い事は出来ない。だが負けるわけには行かない

「なら私はこうだ!!!」

アイビスと同じように加速し曲がるのではなく、跳ぶこのスピードなら崖を跳び越せる、風を引き裂く音が心地良い。一気にスピードを乗せて崖の端に向かう

「行けッ!!!」

加速がついたまま崖を飛び越える。追い風が私の背中を押してギリギリだと思つたが余裕で飛び越えることが出来た。着地もサスペンションを有効に使つて楽に着地できた、あとはアイビスを追いかけるだけだ。

「やっぱ追いついてきたね!やっぱりスレイはそうじゃないと!」

「その余裕が命取りになるぞ!アイビス!」

更にエンジンを噴かす残りは500Mの直進。ここが最後の勝負

になる、狭い通路を2人で並んで走る、少しずつだが私がアイビスを追い抜き始める

(やはり山岳コースで燃料を使い切ったな)

アイビスの事だから最初から最後まで全開だったのだろう。ガス欠で減速し始めるアイビスのマシンを追い抜いた時

「最後の大勝負！スレイ全力勝負だ！」

突然そう叫んだアイビスが追い上げてくる。どうやらわざと減速して最後の勝負に出てきたようだが

「私に追いつけると思っているのか！」

「追いつくよ！挑戦者の方があたらしいからね！」

抜きつ抜かれるの接戦をしているとアイビスが急に減速して左右に機体を振り始める

(何をやる気だ?)

そんな事をすれば機体が空気抵抗で更に減速するのは目に見えているのに、何をやる気かと思ってみていると

「マニユーバAX。いっけーッ!!!」

右にハンドルを切ったと思った瞬間急加速で私を追いかけてくる。マニユーバAX。減速と加速を組み合わせ更にカートリッジを使い限界加速で相手を追い抜く特殊マニユーバだがこの狭いコースで出来るわけが

「行けるー！」

急ハンドルで私の後ろを取ったアイビスは即座に反転し、私と壁の間をすり抜ける様に追い抜いていった

(なにを……した)

一瞬何をされたか判らなかった。だがアイビスは私を追い抜いてどんどん加速していく。追いつこうとするがもう追いつけないと悟ってしまった。残り200M弱、追いつくには余りに距離が足らなかった……私が諦めると同時にアイビスがゴールテープを切ったのだった……

「最後の最後で何をした？」

同期に囲まれ話をしているアイビスにそう尋ねるとアイビスは

うーんと唸りながら

「マニニューバAX?」

「違う、あれは全くの別物だ」

減速をせずに加速加速で一瞬の間を見抜く追い抜いていった。私では出来ないアイビスならではの走りだ

「えーそんなの言われても判らないよ。あたしはただ追いつきたい、追い抜きたいって思っただけで」

それだけしか考えてなかったのか……八神大将にアピールしようとかを考えず私の背中だけを見ていたということか

「今回は負けたが次ぎは勝つ」

「いやいや。勝つとかまけるじゃないと思うんだけど」

手を振り苦笑しているアイビスを見ていると

「ご苦労様。訓練見せてもらったよ」

ばふうっ何人かが噴出す音が聞こえた。長い銀髪と黒いコート八神大将だ。慌てて敬礼しようとする

「ああ、そのままが良い。アイビス・ダグラス、スレイ・プレステイ。明日より機動六課への出向を命じる。遅れずに機動六課に来ること」

は? 私とアイビスが機動六課に出向……

「復唱は?」

呆然としている私とアイビスにそう告げる八神大将に慌てて敬礼し

「スレイ・プレステイ3等陸佐了解いたしました!」

「あ、アイビス・ダグラス3等陸佐了解いたしました!」

うむつと頷いた八神大将はさっそくだがと言って

「最初の任務だ。今六課にはネクロに狙われている別世界の民間人を保護している。その民間人を会話してきて欲しい」

「会話……ですか?」そうだ。会話だ、ネクロと戦う意味やそう言うことを話してくれば良い。歳も近いから話しやすいと思う、

スバルとティアナも待っているから4人でよろしく頼むよ」

そう笑って出て行く八神大将の背中を見ながら私は隣で呆けいて

いるアイビスの脇に肘打ちを叩き込み

「何をしているアイビス、早く着替えて移動するぞ！」

「……うっ了解……」

脇を抑えて呻くアイビスを無視して私は慌てて着替え始めた。ルーキーの出世頭の2人を待たせてはいけない、私はそれだけを考え替え終え。スバルさん達が待つブリーフィングルームへと駆け足で向かったのだった……

ブリーフィングルームと言う所に案内された俺達はスバルさん達を待っていた。見学を終えた俺達に龍也が

『スバルやティアナを呼んである。それにアイビスとスレイも来るはずだ、同年代と腹を割って話をしてみる。そして決めろ自分達が何をしたいのかをな』

話し合う。それで俺達の悩みが解決するのだろうか？ 箒や簪さん達も神妙な顔をしている。そんな事を考えているとガチャリと音を立てて部屋の扉が開く。スバルさん達かと思いきや

「ふう……待たせてない。一安心だな」

見学の時にいた青い髪の鋭い目付きの女性が来て椅子に腰掛ける。確かスレイさんそれから少しして

「スレイ歩くの早い〜結構疲れてるんだけど私」

アイビスさんがふーと溜息を吐きながら椅子に座る。何か話しかけないと思うのだが何を聞けば良いかわからず困惑している

「お待たせ！少し遅れちゃったね！」

「スバルが寄り道するからよ」

スバルさんとティアナさんが入ってくる。知り合いと言うことで少しだけ安心した

「スレイ・プレステイさんとアイビス・ダグラスさんね？ティアナ・ランスターよ。よろしくね、こっちはスバル」

「スバル・ナカジマだよ。よろしくね」

アイビスさんとスレイさんに自己紹介したスバルさん達は俺達を

見て

「今龍也さん達が出向いている世界でネクロに狙われている人達よ。

一夏から自己紹介してくれる?」

ティアナさんに促され俺から自己紹介をしていく

「織斑一夏です、こっちは妹のマドカ」

「マドカだ。よろしく頼む」

「篠ノ之箒だ。箒で構わない」

「凰鈴音。鈴って呼んでくれればいいわ」

「セシリア・オルコットですわ」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「シャルロット・デュノアだよ」

「更識……簪です。よろしくお願いします」

「ヴィクトリア・スミスだ」

「薄野弥生。弥生でいーぜ」

「クリス・ファウスト。あとあのバイクの性能を教えてくださいませんか?」

「呂 神麗（ルウ・シエンリー）。シエンって呼んでくれると嬉しいかな?」

「エリス・V・アマノミヤです。エリスでいいですよ」

口々に自己紹介するのだがアイビスさんは首をかしげて

「駄目だ。あたし1回じゃ覚えられない。人数が多すぎる」

一気に言われて1回で覚えるのは相当難しいだろう。人数も多いし目を白黒させているアイビスさんにスレイさんが

「失礼だぞアイビス。自己紹介してもらったんだちゃんと覚えろ」

とそんなやり取りをしているスレイさんとアイビスさんを見てみると、簪さんが手を挙げて

「1つどうしても聞きたいんです。ネクロと戦うのは怖くないんですか?」

普段あんまり自分の意見を出さない簪さんが1番最初に口を開いたということに驚きながら返事を待つと、ティアナさんが

「怖いわ。怖いに決まっているでしょう?ネクロと戦う、何時自分が

ネクロになるかもしれない。仲間だった人と戦うかもしれない。それは何よりも怖いわ」

淡々とした口調で言うティアナさん、ずっと戦ってきているティアナさんでもそう思うのか……

「じゃあなんで戦えるんですか？」

「後悔したくないからかな……手を伸ばせば届いたかもしれない。そんな後悔をするなら行動して後悔したほうが良いと思わない？ 簪」

スバルさんが即答する。後悔したくない……それはきつと俺でもそう思うだろう、手を伸ばせば届くのなら傷ついたってこの手を伸ばしたいと思う

「あたしはあれですね。もう泣いてる人は見たくないですよ。あたしの住んでいた街はネクロの攻撃で崩壊。生き残りはあたし含めて30人弱。八神大将達が頑張ってくれたけど進行が早過ぎた……防衛線も緑に張れず攻撃を受けてしまったの」

アイビスさんが首から提げたペンダントを握り締めながら言う。もしかするとあのペンダントは家族の形見なのかもしれない

「あたしはその時家にいなかったから無事だったけど、家族や友達は何死んじやった……そんな中で泣いてる子供とかを見てもう涙は見たくないなあって思ったからあたしは管理局に入隊した。出来ることなんて少ないと思うけど少しでも誰かの涙を拭えるなら……あたしはそうしたい」

16歳なのに俺なんかより数段考え方がしっかりしている。俺達は戦うのが怖いで逃げたいと思っていたのに

「私はそういう経験は無い。だが私はずっと一つの信念を持って生きてきた」

スレイさんの眼光が俺達を射抜く信じられない威圧感を感じているとスレイさんは笑いながら

「悔いの無い選択をすることだ。こうして管理局に入ったのも、力を求めたのも。全部その為だ、悔いを残すような真似はしたくない。私は常に自分で選び自分の意思で道を決め進んできた。運命なんか関係ない、私は私の意志で今ここにいる」

静かな呟きだったのにそれは妙に大きく聞こえた。俺達と同じ歳でもまったく異なる人生を歩んできた。その経験差があるから言える言葉かもしれない

「ティアナは？」

鈴がそう尋ねる。ティアナさんは少し考える素振りを見せてから「追いつきたい人がいるからね。私はずっとその背中を追いかけてきた、私に贈ってくれた言葉を大事に大事に抱えて。そして今もまだその背中を追い掛けている。何時か追いつける……そう信じて」

誰の背中とは言わなかったけどここまで聞けば判る。龍也以外にありえないと……

「ネクロに襲われるかもしれないと思うと怖いし、俺は暴走するかもしれない。俺はそれが恐ろしい」

ぼそりと言ってしまった俺の言葉にスバルさんがからからと笑いながら

「そんなの言えば私も怖いし、多分ノーヴェとかも怖いんじゃない？」
軽い口調のスバルさんにティアナさんが真剣な顔をして

「言うの？」

「言うよ。別に私気にしてないし、どうせバレるんだしね？それにほら私は龍也さんに認めてもらったからさ。ほかの人間に何を言われようと何にも気にならないよ」

そう笑ったスバルさんは俺達を見据えて

「戦闘機人。身体の中に機械を埋め込まれた人なざる人……私やノーヴェは戦闘機人なんだよ。特にノーヴェたちはネクロによつて戦闘機人にされた。一夏が暴走するかもしれないって言うのなら私やノーヴェの方がその可能性高くない？」

軽い口調で言われて一瞬理解できなかった。身体の中に機械？

……スバルさんが？

「う、嘘じゃないんだよね？」

「うん。嘘じゃないよ？こういうことも出来るかな」

トンつとスバルさんが机を叩くとそこだけが丸い穴を開けた。綺麗な円だ

「何をしたんだ？」

俺達が目を丸くしている中スバルさんはジュースの蓋を開けて

「原子配列？えーと駄目だ。詳しくは忘れたけどそれを崩して切断する？駄目だ思い出せない」

「自分の身体でしようが。いい加減覚えなさい」

「いや、どうでも良いし。極光使ったほうが強いし」

そんな話をしているスバルさんとティアナさんに驚く、こういう話
はもつと神妙な物になるのではないのだろうか？

「だからさ？不安に思うのも怖いって思うのも判るけどさ、逃げてても仕方ないんだよ結局。立ち向かうのか？受け入れるのか？それとも逃げるのか？それは一夏達の感じ方だし誰も否定もしない。逃げたいのなら逃げれば良い、立ち向かいたいのなら立ち向かえば良い。大事なのは自分が何をしたいかだと思おうよ？」

そう笑うスバルさん。自分が何をしたいと願うのか？それが一番大事と笑うスバルさん。ラウラが真剣な顔をして

「自分の身体が嫌いじゃないのか？」

ラウラはドイツの人造人間とも言える。その事で随分悩んだと俺に打ち明けてくれた。だから自分と同じスバルさんにどうしてもそう尋ねたかったようだ

「全然？いや最初は色々悩んだよ？でもさ、私は私って言ってくれた人がいたし。受け入れてくれる仲間も出来た。それにこの力で皆を助けることが出来る良い事だらけじゃない？だから私は悔いの無い選択をして後悔の無い人生を生きる！それだけだよ」

その言葉は不思議と心に響いた。誰も口を開かない、いや開けないのだ。同年代でも余りに考え方が違う。自分達が以下に甘えていたのかと言うことを思い知らされた気分だ

「ん？話が終わったようだな。良いタイミングだったかな？」

龍也が部屋に入ってきてそう笑って

「さてとそろそろ帰ろうか？話も終わったようだしな。スバル達はどうする？車に乗ってくか？」

「いえ、バイクで来てるので心配しないでください。ほら行くわよス

バル」

「りよーかい♪じゃあね一夏。また後で話しでもする？それとアイビス、スレイ明日六課で待つてるから」

そう言っ出て行く2人を見送り。俺達は龍也の運転する車で龍也の家へと戻った。車中は無言で誰も口を開かない、だけど自分達が何をしたいのか、どうしたいのか？それを考えているのは誰もが判っていた。龍也に与えられた部屋で天井を見つめ手を伸ばして虚空を掴む

(俺がやりたいのは……俺がしたいのは)

そんなのは決まっている。後悔も悔いも残したくない、俺は全力で生きたと思えるような人生を歩みたい。それがきつと答えなんだ……

一夏達が各々考えている頃。楯無とユウリは街外れの小高い丘の上にいた。クラナガンの外れの小高い丘の上、街を見下ろすことが出来る場所だ。ユウリと楯無は当然知るわけもないが、セレスの墓がある場所だ。とは言えここから更に上らないといけないので気付かないだろう……

「綺麗な所ねえ」

私は思わずそう呟いた。大きな木の周りには色とりどりの花が咲き乱れとても美しいと思えた。うつすらと見える星空もまた美しい(龍也さんとはやてさんが良く来る理由が判るかも知れないわね)

なぜかは判らないけれどこの場所はとても心が安らぐ。木に背中を預けて目を閉じればすぐに眠りに落ちてしまえるのでは？と思うほどのこちら辺の空気は落ち着いていて心を休ませてくれた

「良い場所だな」

ユウリがそう呟いて私の隣に腰掛け空を見上げて

「頃合かも知れんな……」

「え？」

ユウリの呟きの意味が判らず顔を見るとユウリは真剣な顔をして「ワタシが何を抱えているか。聞いてくれるか？」

「……教えてくれるの？」

「ああ、そろそろ話したいと思っていた。ワタシとセリナ。そしてエリス……ワタシ達の関係をな……」

そしてユウリは語り始めた。ユウリ・セリナ・エリスを繋ぐ過去を……それは私が想像していた物よりも遥かに重く暗い話だった……

第93話に続く

第93話

第93話

楯無に連れてこられた丘の上はなぜか判らないが心が休まった。巨大な大木に背中を預けながら

「楯無も気付いていただろう？ワタシがエリスを見ていることに」

「ええ、気づいてたわ」

楯無はふざけているように見えて、その実周りを良く見ている。ワタシがエリスを見ていることにも気付いているだろうと思いつ尋ねると即答で気付いていたと告げる。ワタシは朱色になり始めている空を見ながら

「人造操縦者作成計画。優秀なISの操縦者の遺伝子を元に肉体改造やナノマシンで無理にIS適性を上げる実験をしていた研究所があった。そこではドイツの第1世代型ISの操縦者の遺伝子からより強い、IS操縦者を作ろうとしていた」

ワタシがそう言うのと楯無がワタシが何を言おうとしているのか気付き

「ご、ごめん……やっぱり「気にしなくて良い。いずれ話さなければと思っていたんだ」

やはり楯無は優しい。ワタシが何を言おうとしているのかを理解して止めに入ったが、ワタシは今を逃せばきつともう話そうとは思えなくなる。そんな気がして言葉を続けた

「ワタシ・エリスは同じ遺伝子を基盤に作られた、双子のクローンベイビーだった。だからワタシとエリスが似ているのは当然なんだ、双子だからな」

予想にもしてなかった事実で絶句する楯無。だがここから更に言いくい話をワタシはしなければならぬ、何時までも楯無の優しさに甘えていたくないからだ

「セリナはワタシやエリスと同じ遺伝子をベースにされたが特別な調整を施されて生まれた。ワタシやエリスのように身体能力ではなく

空間把握等を強化されて生まれた、だからワタシとエリスの妹になる」

セリナが楯無に似ているのはもしかするとこの調整のせいなのかも知れない。どういう因果かは判らないが楯無とセリナは鏡写しのように良く似ている。

「そっか、だからセリナはユウリを探していたのね？」

「あの暗い研究所では自分たち以外の全ては敵だった。クローンだから替えが利くと言って毎日毎日実験をされ、心も身体も傷ついていた。そんな中でワタシ達は兄妹として励ましあって生きていた」

今でも傷がうずく時がある。ファントムタスクに入って数年後。力をつけたワタシは復讐しあいつらを皆殺しにした。だが心に残った傷は今でもワタシを開放してはくれない

「だがそんなのはあのとときの地獄と比べればどうと言うことはなかった……研究者達は自分たちの限界に気付き始めていた。クローンは言え同じ身体能力や反射神経を得れるという事ではない。それ所か能力的には元の人間と同じか少し上と言うところがげんかいた」

クローンとは言え別の人間だ。同じ能力を得れるわけがないのだから……だが研究者達はそれを認めなかった。自分達は神だと言う驕りを持ち更に研究を進めた。口を両手で押さえてワタシを見ている楯無、この事を話すのは正直怖いと思っていた。最初は鬱陶しいと思っていた、だが何時からか楯無と居る時間は何よりも癒される時間になっていったからだ。この話をして楯無がワタシから離れてしまうかもしれないと思いつつもワタシは自分の秘密を口にした

「研究者達はある結論に達した。女の身体では限界がある、そしてナノマシンと同じ遺伝子基盤を持つ男のクローンのデータを組み合わせ、性別反転の実験を行った……何十人も実験の反動で死んだ、だがワタシはそれに耐えた。ワタシは変性実験の唯一の成功体なんだ……」

変性実験……それって性別を変える実験って事よね。と言うことはユウリは元は女と言うことになる。だけどこうして見るユウリはしなやかだけど屈強な身体つきでどこからどう見ても男にしか見えない

「本当なの？」

冗談とは思えなかったが尋ねずには居られずそう尋ねた。ユウリは

「こんな事は嘘では言わん。実験の跡もこうして残っている」

ユウリが服の裾を掴んで捲る。そこにあつたのは傷そして火傷の跡。考えられる全ての傷がそこあつた、思わず絶句しているとユウリは淡々とした口調で

「女性のしなやかさに男性の力強さを持つ事になったワタシはあの外道より酷い実験をされる嵌めになった。試験段階のナノマシンの注入や耐久力実験。そのせいかワタシの体は傷だらけだ。切り裂かれ、ナノマシンを入れられ、無理なGを掛けられ、毎日毎日死に掛けた。だが変性実験……この実験のおかげでエリスがワタシと同じ実験の披見体になる事はなかった。それだけがワタシにとって唯一の救いだった。クローンであれエリスはワタシにとって大切な妹だったからな」

とても優しい口調で言うユウリ。だが私にはどうしても腑に落ちない点があつた

「でもどうしてエリスちゃんはユウリのことを覚えてないの？」

私がそう尋ねるとユウリは恐らくと前置きしてから

「エリスだけはツバキとオクトが研究所に奇襲を仕掛けたときに救助された。その時の衝撃で記憶を失ったんだろうな」

だからエリスちゃんはツバキさん達に引き取られて養女になつているのかと納得した。だがユウリ達はツバキさん達に救助されなかつたということになる。だからフロントムタスクに救助されたと言うことになる

「あの時ワタシとセリナは実験の為に、地下の研究室に連れて行かれていた。エリスはIS適性のテストの為に研究所の上層部にいた、ツ

バキとオクトは電撃戦。爆弾を使って研究所を破壊しその混乱に乗じてワタシ達を助けるということを選択しようだが、それは失敗だった。爆弾のせいでワタシとセリナの居た研究室は崩壊し瓦礫で完全に埋もれた」

昔を思い出しているのか、遠くを見ているユウリはいつも首から下げているペンダントを握り締めながら

「ワタシはその時試験用のISを展開していた。無論普通のISより低出力でないよりまし程度の防御力しかなかったが、そのおかげでワタシは命を繋ぐことが出来た。だがセリナはその時に死んだ……ワタシはセリナを救えなかったことに後悔し絶望した。その時にスコールに連れられワタシはその研究所を後にしたんだ」

つまり。ユウリとエリスちゃんが救助された時に死んだセリナは、ネクロによって回収されてネクロ化されたってことなのね。ユウリはペンダントを開き

「だからワタシは初めてお前に会った時。倒さずに見逃し、ネクロに襲われていた時に助けた。それはワタシ自身の贖罪の為だったのかもしれないな。幻滅しただろう？ワタシはお前をずっと騙していた……それだけじゃない、お前にセリナを通して見ていた。自分で自分が嫌になる」

深く溜息吐き、空を見上げるユウリは酷く焦燥しているように見えた。多分ずっと私をだましている事に罪悪感を感じていたのだろう「どうして私に教えてくれたのユウリ？」

ずっと黙っていく事もできた筈だ。それに自分が実験で性別が反転してしまったことだっただけで黙っている事も出来た筈だ。それなのにユウリは私に全てを話してくれた、その理由がどうしても気になりそう尋ねるとユウリは

「ワタシはお前と居る時間が楽しかった。フロントムタスクの時はずっとこのペンダントを見て過ごすかISの整備だけをして過ごしていた。けどお前に会ってからワタシはこのペンダントを見ている時間が減った……それはきつと楯無。お前に会ったことで前を向こうと思えるようになったからかも知れない。だからワタシは楯無、

お前にだけは本当のことを伝えたかった」

私だから教えたかった。その言葉が何よりも嬉しかった……だから私も

「じゃあ、私も私の秘密を教えてあげる」

私はユウリが元は女だったとか関係ないと思う。ユウリがユウリだから一緒に居たいと思うのだ、多分出会ったときにユウリが女であつてもそれは変わらない。そんな妙な確信が私にはあつた

「私の本当の名前は刀奈。更識刀奈……更識家当主としてじゃない、私自身の名前よ」

更識家の当主としての名前じゃない。私自身の名前を告げるとユウリは少し驚いた顔をしてから

「良いのか？ワタシに本当の名前を教えても？ワタシはずつとお前を騙して「騙してなんかないわ。ユウリはちゃんと私に全部教えてくれたわ」

きつとユウリにとっては話したくない事だっただろう。それなのに私に全てを教えてくれた……だからユウリは私を騙してなんかいない。私の言葉を聞いて驚いているユウリの手を掴んで抱き寄せる
「ありがとう。ユウリ私に全部教えてくれて」

遠くで見るとあんなに大きく見えたのにこうして見ると小さく見える。ユウリは抵抗するでもなく振り払うでもなく

「ワタシを受け入れてくれるのか？造られた人間のワタシを？」

震える声で尋ねてくるユウリの身体を更に抱き締めて

「クローンだろうが元が女とかは関係ないわ、ユウリはユウリで良いじゃない」

今までずつと一人で頑張ってきたんだ。重い荷物を背負ってここまで来たんだ……だから

「もうユウリは一人じゃないわ。私があなただを支えるから」

これからは私がユウリを支える。やはりあの時間夜に消えていくユウリに手を伸ばしたのは間違いなんかじゃなかった

「ありがとう……」

小さいな声でそう呟くユウリの頭を撫でながら、私は空を見上げ

た。いつの間にか夕日は沈み、三日月が昇り始めていた。私はなぜかそれがユウリの心のように思えた。私に何が出来るかなんか判らない、だけどその欠けている部分を埋めてあげたい。私はそう思ったのだった

うん……ここは……うつすらと目を開くと知らない天井が見えた
「スコール起きたのか。気分はどうだ？」

私のベッドの横で本を読んでいたオータムがそう尋ねてくる。ぼーっとしていた頭がハッキリして気づいたが、私の額には濡れたタオルが乗せられていた。どうも看病してくれていたようだ

「気分はいいわね。今までにないくらい」

前まで感じていた身体の痛みやダルさはまるでない。それに前まで聞こえていた身体の中の機械音も聞こえなくなり、また生身に戻ったような気がしていた

「それは良かったな」

嬉しそうに笑うオータム。彼女は一番私の傍に居てくれた。だから私の悩みを理解してくれているからだ……身体を起こしながらオータムに気になっていたことを尋ねた。

「私は、どれくらい眠っていたの？」

「丸一日と、半分くらいだ」

結構眠ってたのね。道理で疲労が完全に取れているわけだ、ネクロと戦うと決めてから。連日連夜徹夜で、情報収集をしていた。龍也に保護された後も、結構気が張っていて眠れなかった。一日寝て気分もすっきりしている

「おや？起きたのかい」

にこにここと笑いながらスカリエッツァが入ってくる。私は姿勢を正して

「どうもありがとうございます。これで私もネクロと戦えます」

敬語で言っているとスカリエッツァさんはにこにここと笑いながら

「敬語じゃなくていいよ。私は医者として出来る事をしただけだから

ね」

そう笑うスカリエツティは、失礼するよと声を掛けてから、オータムの隣に腰掛けて

「ネクロと戦う。君達はネクロの脅威を知ってなおそう言うのかい？」

再確認と言う感じで尋ねてくる。スカリエツティ、もしかするとネクロと最前線で戦っている。彼らの怒りを買ってしまったかもしれないと少し不安になった。ISでネクロと戦う。それは自殺行為としか思えない、だけど

「私は戦います。それが私の……ファントムタスクの構成員だった。私の義務です」

ネクロにこの世界の情勢を教えたのは、ファントムタスクだ。そして今ネクロの戦力になっているのは、ネクロ化したファントムタスクの構成員だ。ならば私達がやらなければならない事だ。オータムも「私達がやらないといけないんだ。IS学園のガキ共や龍也達だけに任せておけない、いや大人として子供だけを戦わせることなんて出来ないんだよ」

オータムは口は悪いから誤解されがちだが、子供好きで面倒見が良い。実際ユウリやマドカを世話していたのもオータムだ。私とオータムの言葉を聞いたスカリエツティは

「OK判ったよ。ミス・ミューゼル、ミス・オータム。私が責任を持って、君達のISをネクロと戦えるように改修する。龍也に話を通して訓練にも出れるようにしておくよ」

「ありがとう。何から何まで」

龍也にもスカリエツティにも何からないうまで世話になりっぱっなしだ。だからそう言うスカリエツティは

「気にしないでくれたまえ。それではね、私は帰るよ」

「結局何しに来たんだ？何か用があったんじゃないのか？」

そう尋ねられたスカリエツティはにっこりと笑いながら「戦うのかどうなのかを聞きに来たんだよ」

もう用はないという感じで出て行くスカリエツティの背中を見な

がら

「ふう……なんか疲れたわね」

「私もだ」

ただ話をしただけなのに妙に疲れた。やはりスカリエツテイも魔法使いだから、私達ではそのプレッシャーに耐えれなかったのかもしいれない。私はもう1度ベッドに横になりながら

「もう少し寝るわ。なんか急に疲れてしまったから」

精神的疲労による睡魔なのか、術後の疲労なのかは判らないがとにかく眠いのでそう言うと

「判った。私も少し休む事にする、じゃあなオータム」

睡魔に耐えながらオータムを見送り。私はもう1度深い眠りに落ちていった……どうやらまだ私の身体は休息を欲していたのか、驚く早く私の意識は闇の中に沈んで行ったのだった……

一夏達がチェイサーズの訓練見学を終え。ユウリと楯無が話を終えた日の次の日の朝。一夏は誰よりも早く起きだし、自分の出した答えを龍也に伝えるためにリビングに向かった

「よく眠れたかね？」

リビングで紅茶を飲みながら。いつもと同じ余裕の笑みを浮かべる龍也。だが纏う空気は重く一夏に押し掛かっていた。それは言うならば歴戦の戦士だけが纏う事が出来る、必殺の気迫と言えた。リビングには龍也と千冬・ツバキの姿があった、だが2人はいつも同じように笑っている龍也と違い、千冬とツバキは

「……」

無言で一夏達を見つめる千冬とツバキ。その目は鋭く一夏を見据えていた。今までの一夏ならその気迫に飲まれて喋ることは愚か近づくことさえ出来なかっただろう。だが一夏はそのプレッシャーを跳ね除け、震える足で龍也のほうに近づき

「龍也。俺は決めたんだ」

「何をかな？」

判っているのにあえて尋ねている。だが自分の思いは口にしなければ伝わらない

「俺は何も知らなかった。いや何も理解しようとしてなかった」

「ふむ。それはある意味正しい選択だ。知りたくないものを知りたくないと思うのは正しい選択の一つだ」

「だがそれじゃあ、駄目なんだ。逃げていても、離れていても立ち向かわないといけないことはあると思うんだ」

胸に手を当てる一夏。その目はいつもの不安や恐怖の色ではなく。立ち向かうと決めた強い決意の色が浮かんでいた

「俺は戦いたい、みんなを護るために。いや今の俺に護るなんて事は言えないって判ってる。俺は弱い臆病だからだ。だけどそれでも俺は皆を仲間を護るために強くなりたいんだ」

「一夏。それは茨の道になる。私も龍也に念を押された、戦うという事は死ぬかもしれないという事だと……それでもお前は戦うことを選ぶのか？」

千冬の静かな問い掛けに頷いた一夏は龍也を見る。龍也は何も言わず立ち上がり……一夏の腹に拳を叩き込んだ

「ごぼおっ!!」

拳打の威力が1番死ぬという距離に関わらず、一夏の身体は数メートルは吹っ飛んだ。だが一夏は空中で体勢を整え着地し、倒れず龍也を見ていた。両腕で腹を押さえて痛みにも耐えながらも、その目はなお不屈を訴えていた

「良い目だ。覚悟を決めたな？ならば良いだろう。今までのような、甘い訓練ではない。戦って生き残る術を教えてやる。泣こうが喚こうが止めはしない。引き返すなら今のうちだぞ？」

「逃げねえ！俺はもう逃げない！進むって決めたんだ！」

龍也のプレッシャーを跳ね除ける様に叫ぶ一夏に龍也は笑いながら

「ならば教えてやろう。ネクロに勝つための戦い方をな」

各々が答えを出し進むことを選んだ。その先に待つのは自身の死かも知れない、しかしそれを受け入れて進むことを選んだ。もう迷う

ことはないだろう。自分達が進むべき道は心に刻まれていたのだから……

くおまけく

俺とマドカ達は龍也とルシルファアの訓練を見ていたのだが

「ひっ！」

箒とか鈴が顔を引き攣らせている。だが俺の顔も引き攣っているのが判る

「おおおおおッ!!!」

ドゴッ!

メシヤアツ!

互いの拳が顔面に命中しはじけ飛ぶ。今まで聞いたことも無い生々しい音に思わず目を瞑る

「いい加減にギブアップしたらどうだ?ん?」

額の血を拭いながら言う龍也。剣での斬り合いから、素手へとシフトし互いに全力で殴り合っている

「はっ…この程度で諦めるか」

この程度?見たところ腕が折れてるし、右目も見えてないようだが……どう見てもこの程度と言うダメージではないように思える

「なのは?あの2人はなぜ殺し合いをしているんだ?」

そしてマドカ。少しでいいから動じてくれ。相変わらずの無表情の妹にそれを望む俺がおかしいのだろうか?いいや、おかしくない筈だ

「いや、ルシルファアが戦闘狂なだけ、向こうが襲ってくるから龍也さんも応戦してるだけだよ」

戦闘狂……ゲームとか漫画では良く見かけるけど結構やばいんだな

「止めなくていいの?」

簪さんが微妙に目を背けながら言うと、ボキンッ!と骨の折れる音がした。どうやら龍也がルシルファアの腕をへし折ったらしい

「まだまだあ!!」

無事な左手で剣を拾い、口に唾えるルシルファー。その目の輝きは
どンドン強くなり微塵も諦めてないのがよく判る

「あー不味いね。あのままだと本当にどっちか死ぬよ」

フェイトさんがそう言う、何が起こっているんだと思いつつながら演習
場を見て

「あの2人は何をしているんだ!？」

剣にオーラを纏わせた龍也とルシルファーがジリジリと足場を変
えながら攻撃するタイミングを計っていた。本気で死ぬぞ?!誰か止
め……

「えっ?」

演習場に入ってきた茶髪の女性が大きく振りかぶり辞書を投げつ
ける。それは信じられないスピードで空中を進み

「ごはあ!?!角が!角が!!」

今まさに走り出そうとしていたルシルファーの後頭部を穿つ辞書。
その威力は凄まじかったらしく、ルシルファーは頭を抱えて蹲ってい
る

「ハーティーン!また八神大将に迷惑かけて!何してるの!!」

女性はそう怒鳴りながら辞書を拾い上げ、両手で辞書を振りかぶり
女性はその角でルシルファーを滅多打ちにしている。ルシルファー
は

「すまん!いやちよつと熱が入ってだな!」

「それで八神大将に怪我させてどうするのツ!!」

「がはあ!」

振りかぶった辞書の角で頭を強打されたルシルファーは、そのまま
糸の切れた人形のように崩れ落ちた

「すいません。すいません。ハーティーンが迷惑かけて」

ペコペコと何度も何度も頭を下げる女性。龍也はその場に座り込
みながら

「いや。構わない。私も必死だったから」

自身の傷の手当をしている龍也とそんな龍也に何回も何回も頭を

下げている女性を見ながら

「あれ誰ですか？」

見たこと無い人だけど誰だろうと思いつながら、なのはさんにたずねると

「ルシルファアの奥さん」

結婚してたのか!?俺や箒達はさっきまでの惨劇より、その事に驚いた。強気で我が道を行く性格そうだったけど……案外恐妻家なんだなあ……俺はシャマル先生達に治療を受けている龍也を見てぼんやりとそんな事を考えていたのだった

なお後日

奥さん（ラグナさんと言うらしい）物凄く怒っている様子のラグナさんに必死で謝っているルシルファアの姿を見かけて思わず俺は（俺もああなるのか？）

まだ考えたことは無いが、俺もいつかは結婚する。その時もしかするとルシルファアと同じ感じになるのでは？と少しだけ恐怖するのだった……

第94話に続く

第94話

第94話

魔法世界「ミッドチルダ」に滞在すること3日目。最初は龍也の家を自由に出歩くのはどうだろうかと思った物の割と歓迎されているらしく（龍也が固有結界を使った時に助けようとした。私やラウラ、それに簪とエリスと言った面子は、シャルナ達に自然と受け入れられている。ただ一夏達は少しあたりがきつかったが、今は普通に会話をするようになっていて）龍也の書齋にある本を見て言いと許可を貰っているので、書齋に向かって歩いてみると

スタスタ……

トチトチ……

（?・今奇妙な足音が……気のせいか）

そんな事を考えながら、歩き出すが……

スタスタ……

トチトチ……

確実に何か着いてきてる。一体何がと思い振り返ると

「キュー？」

（ど、ドラゴン！）

初日以降出会うことになかったドラゴンがそこにいた。ファンタジーの代名詞「ドラゴン」もつといかつくて怖いのを想像していたが「キュー?・キューウ?」

今日の前にいるドラゴンはぶにぶにとしていて実に柔らかさそうだ。確か名前はドラキチだったはずだ

（今なら頭を撫でれるかもしれない）

しゃがみ込んで頭を撫でてみる。灰色の身体はむにむにとしていて実に柔らかい

「キュー」

目を細めているドラキチ。何かドラゴンと言うよりかは少し大き

めの犬と言う感じだ、暫くドラキちの頭を撫でてしていると

「あれ？クリスなにしているの？」

のほほんとしたシエンの声に驚き振り返ると

「おはよなのです！」

「クリスも散歩するか」

ぶんぶんと元気よく手を振るアギト達とシエンが居た。どういふことだろうと思ってみていると

「いや、なんか懐かれてさ……散歩に良く誘われるんだよね」

多分それはシエンの頭の中がアギト達に近いからだと思う。だがそれを口にせず立ち上がりながら

「私もいいのか？」

「良いですよ〜一緒に行きましょう」

ボールを抱えて笑うリイン。一緒に歩いていて気付いた。若干隠れるように歩いている鮮やかな金髪に

(ヴィクトリア。お前何してるんだ?)

後ろのほうで隠れるように歩いているヴィクトリアを見つけて、そう尋ねるが無言で歩いていて、返事を返してこない。それを見たシエンが

(恥ずかしいんだって)

なるほど堅物のイメージのある自分が、こうして小動物と戯れている所が見られるのが恥ずかしいのか。まあ判らないでもないのので会えて口にせずに庭に出る

「ドラキち！GOーッ!!」

「キューッ!!!」

リインが投げたボールを空中でキャッチするドラキち。見た目よりもすばしっこいようだ、私は庭を駆け回るドラキちとアギト達を見て穏やかな気持ちになったのは言うまでもない。なお私もボールを投げたのだがドラキちは見事にキャッチしてくれたのが少し嬉しかった

「キューキュー」

ドラキちがボールをくわえて歩いてきてヴィクトリアの下にボー

ルを落とす。投げて投げてつと尻尾をピコピコ振るドラキチ、アギト達もキラキラとした目で見ている。ヴィクトリアが投げるかどうかで葛藤しているのがわかる、暫く悩んだようだったがヴィクトリアはボールを拾い

「よし、取って来い」

「キューツ！」

ぽーんと山なりに投げられたボールをドラキチはジャンプして身体を捻りながらキャッチした

「おおー」

その曲芸じみた動きに私とシエンは思わず拍手してしまったのだった。その後は散歩やキャッチボールなどをしてアギト達と遊ぶのだった。

ジリリリリッ!!!

「ん、うーんよく寝たあー」

大きく背伸びをしながらベッドから抜け出して、軽くストレッチをする。簪ちゃんとしなげとエリスちゃんの姿は無い多分、早起きしてドラキチの散歩に付き添っているのだろう。そんな事を考えながら着替えて部屋を出る

(しかし昨日は少し怒られちゃったなあ)

ユウリと話していて気がつけば完全に日が落ちてしまっていた。どうしたものかと思ひ龍也さんに連絡して迎えに来てもらったのだが、夜はネクロが活性化するらしく2度とこんな事をしないようにと釘を刺されてしまった。ユウリにいたっては問答無用の拳骨、ユウリが涙目で蹲るといふレアな光景を見ることが出来たが、悪いことをしてしまった。後で謝らないと思っっていると

「おはよう」

廊下のところでユウリにばったり会う。ユウリはいつも通りと言う感じで声を掛けてくるが

「……ええ。おはよう、ユウリ」

昨日の今日でどう反応すれば良いか判らず、少しもってしまいました。そんな私を見たユウリは苦笑して

「普通にしている。女子と言うのはそう言うのを敏感に感じ取るだろう」

何かあったと思われるような素振りをするなど言ってくれている様だ。それにしなくてもここは、女性の割合が多いし、昨日龍也さんに2人して怒られてる所も目撃されている。余計な詮索を受けるような素振りは見せるなど言うことだろう

「じゃあ自然な感じで行きましょうか」

「そう言うことだ」

2人で並んでリビングに向かいながら私は、昨日どうしても聞けなかったことを尋ねる事にした

「エリスちゃんには言わないの?」

昨日の話で判ったが、ユウリはエリスのお兄さんになるはずだ。だから教えるべきなのではと思ひ尋ねると

「必要ない。エリスには同じ遺伝子のクローンと教えてある。態々そこまで教える必要はない」

有無を言わせない強い口調で言い切るユウリ。ユウリは前を見たまま

「エリスはせっつかくあの研究所のことを忘れているんだ。余計なことを言っと思って思ひ出させたくない」

それに男だか女だかわからんやつが兄妹だって名乗り出るのもおかしいだろう?と苦笑するユウリ

「おにおねえちゃん?」

「訳の判らん事を抜かすな。それにもうワタシは男で身体の作りが固まっちゃまっている。もう今更元に戻る事はないだろうよ」

じゃあお兄ちゃんだよと名乗り出れば良いのと思うのだが、ユウリが兄として名乗り出ないのはある意味はじめなのだ判断して何も言わない。セリナとエリスを守ることの出来なかった自分への戒めなのだろう

「じゃあさ、ユウリ今日出かける？」

気分転換を兼ねて出かけないかと言うとユウリは駄目だなと言う

「えーいいじゃない。折角の魔法使いの世界よ？観光しましよよ」

これを逃せば次は無いだろうと思いつつユウリは真剣な顔をして

「この世界にいる内にデバイスの作りを理解したい。ネクロに対抗できるだけの術を早く身につけたい」

そう言われると強く出ることが出来ない。ユウリは元々はメカニックだ、異世界の技術を身につけられる機会を逃したくないのだろう「しかたないわね。じゃあ私は簪ちゃんとかと観光でもしましょうかね」

「悪いな、今度埋め合わせをする」

その言葉に内心驚く、今まではそんなことは言ってくれなかったからだ。昨日の話は色々と有意義だったのかもしれない、ユウリが知らずに作っていた壁が少し低くなったような気がする。それが嬉しくて思わず微笑んでしまう

「何故笑う？」

「気にしないで良いのよ♪待たせるのも悪いから行きましよう」

シャルナさんや龍也さんが朝食の準備をしてくれているはずだ、待たせるのも悪いので早く行こうと言いつつユウリの手を握る。

私がユウリの事を気に掛けていたのはもしかすると

(一目惚れだったのかもしれないわね♪)

簪ちゃん達からは相当遅れてしまったけど、私も好きな人が判ったみたい♪

その日の楯無はやけに上機嫌で一緒にクラナガンを回っていた、簪とエリスはユウリと何かあったのかな？と思いはしたが、尋ねる事はなかったのだった……

龍也の家でお世話になった3日目。強制参加の訓練の後はクラナガンを観光するか、龍也の家に戻るか、六課で話を聞くかと色々選ぶことが出来る。一夏は今日は龍也と話があるとかで行ってしまった。1人で観光するのも寂しいので六課でヴィータと話をすることにした。ヴィータははやての妹だけあって、私の考え方に理解を示してくれた。それからは結構話をしている

「よーマドカー…こっち来いよ」

食堂に入るとヴィータが私を見つけて手を振ってくる。私も手を振り返しその席に座ると

「よう。マドカ、普通の世界はどうだ？」

「オータム…：朝から酒か？」

最近見なかったオータムがチーズを着にワインを煽っていた。オータムとスコールは、ネクロから私とユウリを逃がすために色々と考えてくれていたと姉さんから聞かされていた、しかしなんと話をすればいいか判らず。なし崩しにそのままになっていた…：急にあつて例も言えずいきなりの皮肉

(常識がないというのはこういう時に困るな)

もつとこうフレンドリーに出来ない物かと考えていると

「マドカらしくていいじゃねえか。それとこれは葡萄ジュースだ。流石に朝から酒はのまねえよ」

くつくつと笑うオータム。その仕草はいつも通りで肩の力が抜けた気がした

「そうそう。そう肩に力を入れてなくていいぜ？自然だな」

「悪いな。マドカ、私は止めたほうが良いって言ったんだけど…：オータムが聞かなくてな」

どうもオータムが私をここに呼んだらしい。どういう目的でと思っている

「スコールの治療が完了した。今はまだ面会謝絶だがもう少ししたら普通に出歩けるようになるそうだ」

「そうか。それは良かった…：」

ネクロの影響で攻撃的になっていた私も色々時にかけてくれた。

そして自分が死ぬかもしれないというリスクを負ってまで、私をIS学園への襲撃のメンバーに連れてくれた。そのおかげで私はこうして姉さんと一夏と一緒に居る事ができる……ちゃんとお礼を

「考えすぎる性格のおまえに言っておくけど、スコールは礼なんていらないとさ」

「な!?!だが私は……」スコールはお前とユウリに日の当たる所を歩いて欲しかったんだとさ、タスクみたいな闇の世界じゃなくて」

私の言葉を遮って言うオータムはブロックチーズを一口で食べ、葡萄ジュースを一気飲み干して立ち上がりながら

「借りがあるって思うのならよ。精一杯幸せに生きてる所を見せてやれよ、スコールはそれが見たいんだとさ。ヴィータ、ジュースご馳走さん。今度はワインを頼むぜ」

言うだけ言って手を振って出て行くオータム。追いかけて声を掛けようとしたが

「止めとけて。オータムもスコールも礼が欲しいんじゃないよ」

ヴィータが私の手首を掴んで座れと言う。手首を掴まれているため強引に振りほどくことも出来ず、その場に座ると

「良いか?大人って言うのは子供が笑っているのを見るのが好きなんだよ。あのオータムもスコールも多分同じだと思うんだがな」

そう笑いながらコップに葡萄ジュースを注いで手渡してくるヴィータは

「だからさ、そう難しく考えないでよ。笑ってろよ」

からからと笑うヴィータ。何を言われているのか良く理解できない、これが一夏や姉さんだったら理解できたかもしれない。けど私には理解できない

「判らないか、私も最初はそうだった。幸せとか好きとかそう言うのも全然判らなかつた。そう言うのは時間が経たないと判らないんだよ。だから今はたっぷり悩め、そのうち判るさ」

じゃあ私は部下の訓練があるからと言って去っていくヴィータ。ヴィータもオータムも好きな事を好きなだけ言って去っていった、そう言うのはずるいと思う

(私は何も判らないのに……)

私を知っているのは物を壊すことだけ、そんな私に自分で考えろなんて出来るわけが無い。ヴィータがくれたジュースを見てみると

「マドカ。何してるんだ？」

「一夏……？」

龍也との話を終えたのか一夏が私の前に座る。一夏は自分で持ってきたジュースを飲みながら

「なんか悩み事か？」

「そんなところだ」

とは言えその内容は話す気はない。一夏や姉さんには聞かれたくない、自分が自分でいいのか？何をすれば良いか判らないなんて言いたくない。そんな事を考えながらジュースを飲む。互いに何の話もしないまま時間が過ぎる……何か話をしたほうが良いと思い。口を開こうとした瞬間一夏の携帯がなる。ちよつと待つてくれと言つてから携帯を確認した一夏は私を見て

「千冬姉が龍也に車を借りてドライブに行くつて言ってるんだよ。マドカも行こうぜ」

一夏がそう笑つて手を伸ばしてくる。私が1度一夏を殺そうとした、それなのにこんなにも優しい顔をして手を伸ばしてくれる。

(今はまだこのままで……)

一夏や姉さんが私の進む道を示してくれる。自分が本当に何をしたいのか？それが判るまでで良いから、こうさせて……私は一夏の手を両手で掴んで、一夏の後ろをついて歩き出した……

キーボードを叩く音だけが研究室に響き渡る。龍也君達が提供してくれたラボも資材もIS学園と比べると段違いに性能が良い

「これでよし」と

白式達を全てハンガーに掛けて修復作業をしていたが、これで一通りは終わった。後はISの自己修復が終わるまでの半日待てば使えるようになる。

「おや？終わりましたか？ツバキさん」

「ええ。この施設のおかげです」

スカリエッツィさんの研究室の1つらしいが、それを態々IS用に改修してくれたらしい。そのおかげでスムーズに修理が完了した

「そうか、それは良かったね。それじゃあそろそろ次の段階に入ろうか」

「改修ですね」

その通りと笑うスカリエッツィさん。前のネクロの攻撃で理解したが、今のままの白式やブルー・ティアーズでは勝てない。操縦の難易度が上がるが、各部アクチュエーターやサーボモーター。それに搭載しているジェネレーターの出力量上が必要不可欠だ

「二応一通りパーツは揃えてきた。少しずつ改修を始めよう。時間がないからね、急いで仕上げていこう」

その言葉に頷き改修が簡単な、第3世代……ブルーティアーズや甲龍の改修から始める。白式はデバイスと融合しているらしく私では改修できないし、打鉄・式式やヤタガラスは改修に時間が掛かる。まずは出来る所からだ。互いに作業を始めるとそこは科学者同士、時間も忘れて作業に没頭し始める。私とスカリエッツィさんは休憩も食事もせずに改修を進めたのだった

〜8時間後〜

気がついたら夕方の7時。そろそろ作業を切り上げましょうと声を掛け。データの保存をしていると

「ツバキさんが考案したパッケージシステム。あれは物になりそうですよ、AIは私が作った、擬似ISコアを流用すれば可能です」

スカリエッツィさんがそう声を掛けてくる。科学者同士と言うことで意見を聞きたくて見せたのが良かったようだ

「本当ですか？助かります」

ISの防御力・機動力・火力の確保。そしてネクロからの感染防止……そして戦闘支援をするAI。これがあればISだってネクロと戦える。だけどAIとネクロの感染防止がネックだった、その最大の問題が解決する。これで少しはエリスちゃん達の戦いが楽になるは

ずだ

「だけどまずはISの改修からだね、じゃないとテストが出来ない。それに作成時間も考えると……ここに居る間じゃ、仕上げれないね」出来る事なら、この世界にいるうちに仕上げたかったが……急いで作って不具合が出ては意味が無い。ゆっくりと作成していったほうが良いだろう

「それは仕方ありませんね。パッケージを元に改造した者ですから」元々の使用方法と違うのだ。改修に時間が掛かるのは当然だ。それにISの互換性や相性の問題もある。外側は出来ても中の調整が相当時間が掛かるはずだ……

「だからISの武器の改造・そして本体の改修。これをメインにしていこうと思う、明日からは私の部下も手伝いに来るからかなりのペースで作業を進めれる。だから私とツバキさんはバックパックの作成に取り掛かりましょう」

時間がないのなら役割分担をして作業を進める。それは当然の事だ、今まで私とスカリエツティさんだけだったのは、デバイス開発局の人間がISを理解してなかったから。だがそれが済んだのなら効率よく作業を進めることが出来る

（しかし2日でISの仕組みを理解するなんて……魔導師は凄いのね）

「まあ暫くは改修したISに適應できるように身体能力の強化とがあるからね。地獄の訓練に参加してもらおう事になるかな」

にこにここと笑いながら言うスカリエツティさん。私はその笑顔を見てエリスちゃん達に心の中でごめんねと呟いたのだった……

そして翌朝からはバックパックとISの回収を同時進行でやっていたのだが、資材と図面をとりに行く途中で訓練をしている一夏君達を見た。そこで見たのは宙を舞う（物理）涙目の一夏君達の姿……

（強く生きて）

私は心の中でそう呟くことしかできないのだった……目を伏せて私は訓練が終わった頃にアイスとかを差し入れしてあげようと考えながら、その場を後にしたのだった

くおまけく

私の研究所にも聞こえてくる一夏君達の悲鳴に

(ああ、あれか)

龍也は体術の達人でもある。素手で人を真上に放り投げる事なんて実に容易くやってのける。ネクロに対する恐怖とは違うが、恐怖を克服する訓練で龍也が良くやっているのだ。懐かしいなあと思いつながらISの改修をしていると

「凄い光景を見たわ」

「あははは。まあ始めてみると驚くのは当然ですな」

「疲れている様子のツバキさんにそう笑いながら言う」と

「結構やってるの？あれ」

「ええ、新隊員とかはよく」

管理局では宙を舞う新入隊員としてある意味有名な光景だということ

「魔法使いの世界ってどうなってるの？もつと神秘的なものじゃないの？」

「期待すると裏切られますよ。人間なんだからそんなに変わりませんって」

あつはははと笑いながら言うツバキさんはあつと溜息を吐き

「まあいいけどね、資材って新しいの来た？」

「来ましたよ。好きなのをどうぞ」

ISの改修用の資材はさつき運ばれてきたので好きに使ってくださいと声を掛け、別の作業をしていると

「何してるの？」

私の手元を見てそう尋ねてくるツバキさんに私は「ちよつとゲームを作ってるんですよ。こういうの」

モニターにゲームの画面を移すとツバキさんは

「龍也君？何のゲームを作ってるのよ？」

呆れたという感じのツバキさんに私は

「これです。「夜天の守護者と恋しよう」龍也を落とす恋愛シミュレーションです」

「本当に何してるのよ……」

言葉も無いという感じのツバキさんに私は

「なのは君やはやて君。それに私の娘も龍也を落とそうと努力してますが中々上手く行かない。ならば別のアプローチを試すべきでしょう？はやて君達には頑張って貰いたい物ですよ。あの頑固で自分の意志を曲げない龍也を変えられるのはきつと彼女達だけですから」

私では龍也を救うことは出来ない。どこまでも自分を追い詰めてしまう龍也を救えるのはきつと、心から龍也を愛する彼女達以外にありえない

「上手く行くといいわね」

「ええ。龍也にもいつか心から休める日が来れば、きつと変わると思えますよ」

いつか、龍也も自身の罪を許せる日が来る。そして幸せになっても良いとおもえる日が来るはずなのだから……

第95話に続く

第95話

第95話

六課の訓練施設での訓練はIS学園のアリーナよりも、実践的な訓練が出来る。実体を持ったホログラムのおかげで市街戦や山中、海上と色々な状況を想定して訓練が出来るようになっていく。その理由を考えると

(ネクロの奇襲の事を考えているのか)

ネクロがいかにも神出鬼没なのかをよく理解しているからこそその多彩な戦闘エリアの設定なのだろう

「箒。今回の戦闘データの統計が取れたけど見る？」

「クリス。いつもすまない、見せてくれ」

ここでの訓練は必ずだが、スバルやティアナ。そして龍也の妹だというヴィータ・シグナムと言う面子とのマンツーマンの訓練が決まりになっている。私の場合は剣を使うということとシグナムさんやデイド。稀にアイギナさんやセツテと組み稽古をするのだが

(全然当たらない。流石に自信を無くすな)

剣道の大会で優勝し、剣術にも自信があつたのだが……私の自身の源を全てへし折られた。私のは実戦には適していない、それがシグナム達の評価だった……それからは篠ノ之流に頼り切るのでなく、自身で考え新たな剣術をと考え実践の中で進化させることを考えたのだが

(そう簡単に行く物ではないな)

元々何代も何代も修練と研磨を積み重ねて完成した。篠ノ之流それをいきなり別物に変える事を1日やそこらで出来るわけが無い、訓練を繰り返し。新しい物を見つけるしかないのだ

「今回だけ大分良かった様だ。攻め込める範囲が広がっている」

分析に特化しているクリスの言葉を聞きながら私は

「その代わり防御力が下がっているのだろうか？」

「それは仕方ない。攻撃と防御の両立は難しいから」

篠ノ之流は元々防御と反撃の剣。それを攻撃に変える、口で言うのは簡単だが早々上手くは行かない。もともと身体に馴染んでいる動きがあるからだ

「そうきに病む事は無い。中々良い感じだったぞ、荒いがな」

シグナムさんがそう笑いながら私の肩を叩いてくれる。最近こんな風に褒められたことがなくて、少しだけ頬が緩むのを感じながら「ありがとうございます」

手合わせしてくれていたシグナムさんにお礼を言う。私とは違う剣術で良い勉強になった。木刀同士で木刀を叩き切られるという衝撃的な光景をもあつたが、間違いなく良い訓練だったと言える

「少ない時間でネクロと戦えるようにするには少々きつい訓練をしているが、身体は大丈夫か？」

「あ、はい。大丈夫です、最初は筋肉痛が酷かったですけどね」

身体を動かす。回復魔法で治すの繰り返しにより少ない時間で筋肉をつける、自分では実感はないが段々打ち合える時間が増えてきているので効果はあるのかもしれない

「焦るなど言うのは難しいかも知れんが、段階を踏んでいけ。そのうち兄上がネクロに慣れる訓練をしてくれるはずだ」

「ネクロに慣れる訓練ですか？どんな？」

ネクロへの恐怖心を克服しないことには戦うことは出来ない。だがネクロは本能的な恐怖を与えてくる、それを克服するにはどんな訓練があるのだろうか？

「それは私が言う事ではないな。まあ一夏の訓練が終わるのを待っている。言っておくがただ待つんじゃないぞ？」

「はい。判っています」

剣道とは見ると言う意味もある。見て学ぶ、それも大事な事なのだ。シグナムさんは判っているなら良いといつてヴィクトリアとの模擬戦を始める。それをクリスの隣で見ることにする

(しかしクリスは凄いな)

ラウラと同じく軍属と言うことで私達とは違っていると判っているつもりだったが

カタカタツ!!!!

キーボードを信じられないスピードで入力し、今模擬戦をしている「ヴィクトリア」「弥生」「シャルロット&セシリア」「一夏」の行動を全て記録すると同時に模擬戦を終えた順にデータを纏めている。クリスの正確な分析のおかげで改善点が判り次の訓練で改善できる。技量が上がっているというのならそれはクリスのおかげだろう……そんな事を考えながら模擬戦を見学する。ヴィクトリアはシグナムさんと同じく西洋剣を使うので技や返しを覚えて目に見えて防御力が上がっている

「足運びが遅いッ!!!」

「っ！まだまだ!!!」

シグナムさんの攻撃を受けてよろめくが直ぐに体勢を立て直すヴィクトリア。これはやはり日本刀と西洋剣の違いか、日本刀はデリケートなので刀身で防ぐという発想が私にはない。だがヴィクトリアは元々西洋剣の扱いに慣れている、刀身で攻撃を止めることができる。これは私にはない発想だ

「ほら！行くよッ!!!」

「じゃあーこいッ!」

弥生はヘッドギアと防具をつけて徹底的に白兵戦の技能を叩き込まれている。スバルかノーヴェエが相手なのだが、スバルは拳打。ノーヴェエは蹴り技のエキスパート。殴られて蹴られて技を覚えている。痛みを伴うからそれが嫌だから技量が上昇する。荒療治だが一番確実な方法だ

「くっ！連射速度が速すぎますわ」

「喋ってる暇があったら動いて!」

セシリアとシャルロットはスファイアと言う魔法から放たれる魔力弾の回避。射撃タイプは状況把握が大事と言うことで全方位射撃を回避するという訓練なのだが、ぱっと見拷問にしか見えない。しかしそれを言えば

「歯あ食いしばれッ!!!」

「いんちゆうー!」

龍也さんと訓練をしている一夏だ。しかも訓練を見ているのは龍也さんだけではない。一夏がダウンする度に交代で訓練を受け持っているのは、逆立った金髪の青年「ルシルファー」さんだ
「脇が甘い、それと防具に頼るな！よけることを覚えろ！」

連続で振り下ろされる木刀を受ける訓練。これは攻撃に対する反応を上げる為だと言っていたが、正直よけることは殆ど出来ておらず、防具に当たり続けている

「は、はいつ!!!」

「よーし。いい気迫だ」

ルシルファーさんにも稽古をつけられている。龍也さんと比べると言うまでもなく、怖い。しかしその言動の割には面倒見が良く、私にも剣を教えてくれてる。龍也さんが言っていた勘違いされやすいというのも判らなくはない。だけど前の龍也さんとの組み手を見て（内容は殺し合いに近かった）少しだけ苦手意識を抱いてしまったが、話してみると案外気さくでいい人だった

「はっ！はっ！」

息切れしながらも必死に抵抗する一夏。ヘッドギアと防具こそ身につけているが、それを考えてもボロボロだ。だがそれも無理はない（ランニング10キロ、腕立て・腹筋200回。それから剣道・徒手空拳の組み手に木刀による稽古……どう考えてもオーバーワークだな）魔法で回復させているとは言え流石に疲労の色が濃い。それでもなお一夏は立ち上がり

「おおお!!!」「ガードはどうした!!!」げぶうつ!!!」

突進してきたのをカウンターで蹴り上げられ、宙を舞った瞬間頭をつかまれ地面に叩きつけられる

「!」

見ているだけでも痛い。私と同じように見学している鈴とマドカも顔を背けている。訓練と言うのは判っているが、それでも正視しているのは正直きつい。だがラウラだけは

「一夏。何をしている……龍也の話をちゃんと聞いていないのか？」

苛々としているのか貧乏ゆすりをしている、龍也の訓練は説明を聞

いて入れればクリアできる物だ。だが今の一夏はそこまで頭が回らないのだろう。疲労のせいだ

「もういい、今日は終わりだ。次の訓練に入る、集まれ」

一夏を叩き伏せ回復させて座らせて私達を呼ぶ

「全員座れ。今日の訓練はこれで終わりだからな」

そう言われて首を傾げながら座る。座ってやる訓練。瞑想とかか？

「まず。最初に言っておく、この訓練は精神的に来る覚悟しておくように「龍也さん」なんだシエン？」

精神的に来ると聞いてシエンが拳手して尋ねる

「精神的ってどのレベルで？」

「100%気絶するレベルだ。まあ聞くよりみるだ、どうせ直ぐには起きれないだろうしな」

そう笑って龍也が私達の前に移動して。右手で顔を覆った瞬間、あたりの気温が下がったような気がした

(な、なんだこれは!?)

鳥肌が立つ。わけの判らない恐怖が襲ってくる。皆も同じように青い顔をしている、簪やエリスは既に冷や汗が額ににじんでいるのが見える

「ディランズ……ディアボロ・ダス・エクストレーム・トラウリヒ・ドラツヘツ（世界の中心で泣き続ける大悪魔龍）!!」

まるで爆発したような音が響き、思わず目を閉じる。そして目を開いた瞬間

(うあ……)

全身があわ立つ、逃げたいと言う考えしか頭に浮かばない。私達の目の前にいた龍也の姿は全く別物になっていた。黒い甲冑に蝙蝠の翼……そして顔の右上を隠すような仮面……その姿はまるでネクロの様だった……そこまで認識した所で私の意識は途絶えてしまったのだ……

ゾクツ!?

空調完備が出来ている研究室にいるのに突然背筋が冷えた。スコールさんとオータムさんも同じようで不思議そうな顔をしている。平気な顔をしているのはスカリエツティさんだけだ

「今変な感じがしなかったか?」

平気そうな顔をしていているスカリエツティさんにオータムさんが尋ねると

「龍也がディランズを使ったんだと思うよ。一夏君達にネクロに慣れさせる為にね」

話をしながら作業をしている。今改修しているのはゴールデン・ドーンとアラクネだ。元々戦闘になれているスコールさんとオータムさんのISから改修したほうが早いと言う結論になり、こうして作業をしているのだが

「ディランズって?」

聞き覚えの無い単語があり、尋ねるとスカリエツティさんは

「んー?ネクロ化だよ。ネクロ化。龍也はネクロ化できるんだ」

龍也君がネクロ化出来る!?!そんな話は聞いていない。それ以前にネクロ化して大丈夫なの!?

「短時間なら制御できるよ。昔の魔導師は使えたみたいだよ。今は使える人間なんて殆どいないけどね。あ、ミス……言いくいからオータム君でいいか。ガトリングを魔力弾かレーザーどっちに換えて欲しい?」

「いや。そんなことよりネクロ化して大丈夫なのか?暴走とかは?」

「だいじょーぶ。だいじょーぶ、問題ないよ。ネクロに慣れるにはネクロを見る。これしかないよ」

そう笑って作業を進めるスカリエツティさん。荒療治だが、確かにそれが確実なのかもしれない

「スコールさんは何か武器のリクエストは?」

とりあえず作業を再開しよう。ゴールデン・ドーンは第3世代で改修しやすい、それにゴールデン・ドーンは殆ど武装を搭載してないの
でネクロと戦うのなら武器は必須だ

「そうね。腕部内臓のブレードとか欲しいわね。あと脚部にも」

「白兵戦が得意なの？」

武装を見る限り、ゴールデン・ドーンは炎扱う能力と尻尾による攻撃のミドルレンジ対応のISに見える。それなの格闘戦の武器を搭載してくれと言うことは、白兵戦が得意なのかと思ひ尋ねると

「ええ、得意よ。蹴り技とかね」

もしかして奪ってきたISと相性が良くなかったんじゃないかと思つた。でもタスクの理念を聞いた限りだと危険なISだから強奪してきたのだから、相性は二の次なのかもしれない

「上をレーザーで下を魔力弾にしよう。んでブレードを2本」

「さて。私のアラクネを魔改造する気満々じゃねえか」

「ええ？そんなことないよ、バズーカを肩にくつつけて、腰にレールガンをつけるんだよ」

「魔改造じゃねえか!?原形とどめてねえぞ!」

私もあれくらい改造すればいいのかな。ちらりとスコールさんを見ると

「普通でお願いするわ。あんまり個性が強いと使いこなせるようになるまで時間が掛かるから、腕部と脚部のブレード。それと手持ちの火器と剣が欲しいわね」

スコールの要望を聞きながら図面を起こす。いろいろ試しに設計したものがあつたら直ぐに作成できると思ひながら剣と言う事で使いやすそうな物を1つ見せる

「こういうのはどう？」

龍也君が投影してくれた武器をイメージして作った剣を見せると

「うーん。ちよつと違うかな？ゴールデン・ドーンは遠距離武器を複数内蔵してるから、間合いを詰められても戦えるようにナックルガード付きの剣が欲しいのよ」

なるほど、牽制と自分のみを護るための武器ね。となると切れ味より防御力で考えたほうがいいかしら？

「さらにこのバックパックで腕が2倍に！」

「なんとじゃねえ！そんなもんどうやって動かせつて言うんだ!」

「んー気合?」

「てめえふざけてんのかああ!」

あつちは大変そうだなあ……私とスコールさんはそう眩き。真面目にゴールデンドーンの改修と武装について考え始めたのだった

オータム。機動六課に不在していたツツコミのポジションを獲得することになるのだが……後に

「給料も住める事も文句はないけど、なんでツツコミが私一人なんだよ!?!」

龍也ガ身元引受人でクラナガンの地に暮らすことになった、オータムは酒を飲む度にそう叫ぶようになったそうです……

「はっ!?!」

「よう。起きたか、一夏が3番目と結構早かったな」

そう笑う龍也、俺はゆっくりと身体を起こし頭を振る。

(駄目だ。さっきの龍也の姿が頭に張り付いている)

黒い龍神とも悪魔とも言える龍也の姿。その強烈なインパクトに意識を失ったのだ、周りを見ると箒やセシリアも倒れている。どうやら倒れたのは俺だけではないようだ。

「一夏早かったな」

「予想外ですね」

おきていたのはラウラとクリスさん。平然としているように見えるが足がガクガクと揺れているのが見える、かという俺も足が震えている。それほどまでの恐怖だったのかと思いつながら龍也に近づき

「さっきのは?」

「ネクロ化だ。禁呪「ディランス」一時的にネクロ化する魔法だ」

ネクロ化ってそんな事をして大丈夫なのか?

「大丈夫じゃない。長時間のネクロ化はそのままネクロになる危険性もある。それにネクロ化により凶暴性も増すしな、守護者しか使えん

技だが、ネクロに慣れるのはこれが一番早い」

腕組しながら説明してくれるルシルファア。しかしその説明を聞いて俺が思ったのは

(なんでそんなにリスクのある物を……)

幾らなんでもリスクが高すぎる。俺がそんな事を考えているとラウラが

「私達がネクロに早く慣れる用にだそうだ。あの状態の龍也はLV4に匹敵するらしくてな。強い者に慣れれば下位は平気になるそうだ」それは確かに理屈は通ってるけど、そのためにそんなリスクを犯す事は

「ネクロと戦わせると言うのも考えたが、こっちの方がいいだろうと思っただけ。実戦で死なれたり、精神疾患を負われても困る。現にそう言う事例は多いからな」

そうやって立ち上がった龍也は

「飲み物と食べる物を用意してくる。ケーキとか、甘い物を食べれば少しは落ち着くだろうからな。箒とかが起きても部屋に帰らない様に言ってくれ」

その言葉に頷き俺は大きく溜息を吐いた。思いだすだけで手足が震える、それほどまでにインパクトがあった

(ネクロと戦えるようになるまでまだまだ時間が掛かりそうだな)

気絶していたら意味が無いだろう……俺はそう苦笑しながらストレッチを始めた。身体が萎縮していてガチガチだほぐしておこう……ストレッチをしているとゆっくりとだが、箒やマドかも目を覚まし始める。俺はその度に事情を説明し龍也が戻ってくるのを待つのがあった……

その頃元の世界の束の隠れラボでは

「これでいいか……」

長い事時間が掛かってしまったが、なんとかクアッドファンクスを改造し移動できるようにし、火力も上昇させることが出来た

「アームドベースとの連動も出来ているな」

クアッドの火力を更に上昇させるために搭載した「アームドベース」これはハードポイントを増大させ搭載できる武装を増やす機構だ
「分離式にしたのは成功だったか」

こうしてハンガーに掛けているのを見るとフルスキンに見えるが、
装甲の大半は分離式になっている。デッドウェイトになった武装を
装甲ごとパージして機動力を確保する。しかも装甲は炸薬を仕込んで
リアクティブアーマーにしてある、防御力も心配ない

「アズマちゃん。完成おめでとー♪」

「束……」

後ろから抱きついてきた束は私の作り上げたパッケージを見て

「これでアズマちゃんの敵は倒せるの？」

邪気の無い顔で尋ねてくる束に

「ああ、これで私の敵を倒せるよ」

「そっか。前に負けた八神龍也は強いもんね。これくらいじゃ足りないよ、ネルちゃんに頼もうか？」

束は何も判ってない。私の敵は八神龍也じゃない……

「ネルヴィオから……最近連絡はあるのか？」

「んー謹慎中なんだって、ネクロにもそう言うのがあるんだね。束さんは驚きだよ」

私はそうは思わない。もう束はネクロにとって利用価値がなくなった。そう考えるのが妥当なのではないだろうか？確かに束は天才だ。だが感情が幼すぎる、自分のことを過剰評価している。だからネクロに切り捨てられるなんて考えてないだろう

(今まで毎日連絡が会ったのに、今はそれが無い。それはもう必要ないかと判断されたからではないのか?)

ネクロディアの設計図を取りに来たイナリが2週間前に来た、それ以来ネクロからの接触は無い。切り捨てられたと考えるべきだろう
「じゃあネルちゃんに連絡してくれるね」

ニコニコと笑って私の研究所を出て行く束の背中を見ながら

「クロエ。判っただろう？」

「はい……」

クロエは最後まで束が自分で気付いてくれる事を願っていた。だけれど束はきつと永遠に気付かない。自分が一番だと思っている以上「これを」

USBメモリをクロエに手に握らせる。これを束が見てくれればきつと元の優しい束に戻るだろう。ネクロに出会う前の、私とクロエを助け出してくれた頃の束に

「……アズマはどうなるんですか？こんなISを用意して」

「賢いお前なら判っているんだろう？」

ネクロの考え方を考えれば、束を切り捨てるとしたら自分達から手を下すことは無い。人間を使う、そして人間に絶望した束をネクロ化する、そう考えていると考えると間違いない。私はしゃがみ込んでクロエを抱き締めて

「私はなんとしてもクロエと束をここから逃がす。後は任せるぞ、クロエ」

「……はい……」

目に涙を溜めてもクロエは泣きはしない。私はクロエの頭を撫でて

「あと少し時間があると思う。それまでは束の傍にいてやってくれ」

頷いて出て行くクロエ、私はゆつくりと立ち上がり。ハンガーに掛かっているブラッドバニーの装甲を撫でる

「きつと次にお前に乗るときが私達の最後だ。それまでよろしく頼む」

私の敵は束を悲しませる者達だ。だが私にネクロと戦うだけの力はない、だから自分の出来る最善を尽くす。束とクロエをここから逃がす、それだけが私の出来ることだ。そしてその為命を使う、この戦いが終わればきつと私の命は尽きているだろう……

（だがそれでいい。どうせ死ぬはずだった私がここまでこれた、十分だ）

私はそう笑いながらブラッドバニーの装甲により掛かり目を閉じた。あと何回こうして眠ることが出来、目覚めることが出来るだろう

？出来ることならばこの小さな平穩が長く続きますように……私は
そう祈りながら眠りに落ちたのだった……

くおまけく

「最近どうだ？夢を見るか？」

コーヒーを片手にそう尋ねてくる龍也。これは多分アレだろう。
俺が最近見ると相談していた檻の夢のことだと判断した。

「いいや。最近見て……にがあ」

「砂糖とミルクを入れろ」

にやりと笑う龍也に頷きながらコーヒーに砂糖とミルクを加える。
スプーンを入れて混ぜながら

(不思議とも見ないんだよなあ)

IS学園では毎日のように見ていた。檻の中で笑うオレの夢。何
度も何度も俺に手を伸ばしてくる悪夢だ

「ふむ……多少なりとも魔力取得の効果がでてきたということか」

「やつぱりそうか？」

龍也に教わり徐々に使えるようになってきた魔力。そのおかげか
もしれない

「それもあると思うが、気持ちの問題だな。余裕が少しながら出てき
たと言う事だろう、だがあまり慢心するな。闇は直ぐに顔を出し、お
前を飲み込もうとしてくるぞ？」

脅してではない。これは本当のことだ。力を望んだとき、誰かを憎ん
だとき。心が軋むような感じがして視界が歪むことがある。龍也い
わくそれは暴走の予兆とのことらしいが

「何でそんなに詳しく……」「一度テイランスでな？完全にネクロ化し
かけたことがあるんだよ。経験者は語るだ」

それと同じくらい俺の暴走も危険つてことか……龍也も一歩間違
えればネクロ化するという状況になったつてことか……

「ちなみに対処法は？」

「平常心を保つことだ。良いな？」

即答されたが。それは何よりも難しいことだなと苦笑しながらも

頷き

「判った」

砂糖とミルクの入ったコーヒーを啜り。俺はもう1度眉と顔を顰めて

「にげえ……」

「お子様が」

からかうように笑う龍也の視線から逃れるように、部屋の隅を見つめ。もう1度砂糖を加えてからコーヒーを啜るのだった……

第96話に続く

第96話

第96話

ISの改修が終わったからと聞いて、試運転の為に演習場に来た。楯無さんとユウリは自分で改修をしているらしく、テストを繰り返している。別の演習場にいるそう。スカリエッティさんからISを受け取りたいと思うのだが

「てめえ！私のISを変な改造をするなってあれほど言っただろうがあー！」

オータムさんがISを展開して、スカリエッティさんの首を絞めていた。その身体を覆っているのはフルスキンに見える。重装甲だった

「はははははは!!」

首を絞められガクンガクン揺らされているのに、凄く楽しそうに笑っている

「笑ってんじゃあねえ！なんだこれ!? 適当に武器積んだだけだろう!?!」

「あつはははははは！最高にハイってやつだよ!!」

「死んでしまえ!!!」

アラクネと言うISを纏っているオータムさんが、搭載している火器をスカリエッティさんに乱射している。スカリエッティさんは笑いながら走りそれを回避している

(なあ？ラウラ。アラクネってあんな重装備のISなのか?)

(いや。違う、8本の足があるのが特徴のISだが……あんなISではない)

俺が見ているISは腰元にレールガン。背部にキャノン砲。両腕はバズーカ。背中の8本の足からはビームやレーザーが絶え間なく放たれている。

(白式もあんな風になっているのか?)

マッドな科学者と聞いていたがこれは酷い……オータムさんが怒

るのも当然に思える、だがそれ以上に

「凄いね。むちやくちや動きが機敏だね」

「本当だな。科学者とは思えないな」

すると攻撃を回避している。スカリエツティさん本当に科学者なのかと思う

「あつははは！冗談はここまで！ぽちつとな」

白衣から何かを取り出したスカリエツティさんがボタンを押すとバキン！

甲高い金属音が響き、アラクネの装甲がパージされる。そこから姿を見せたのは

「お……これは」

重装甲に見えていた装甲はそのほとんどがパージされ、すらりとした装甲が姿を見せる

「わあ……綺麗なIS」

「本当ですね。素晴らしいメカニックだったのですね」

簪さんとエリスさんがそう呟く。ISのことには詳しくない俺でも思った。スラリとしたフォルムに腰周りの装甲はレールガンと一体化し、両腕は銃口が見えるアサルトライフルでも内蔵しているのかもしれない。8本の足は4本になり、ビームとレーザーの発射工が見えている

「アラクネの機動力の低さをカバーするように。軽量化を前提にしつつ、ミドルレンジ特化型に改造してみた。どうかな？」

「良い……ありがとう。と言うかさっきのは？」

さっきの重装甲のISはなんなんだと尋ねるオータムさんにスカリエツティさんは笑いながら

「強行様の強襲パッケージさ！防御力と火力の両立を前提にしたんだよ。しかも中にインストール済みだから好きなタイミングで着脱できる。エネルギーの消耗が激しいからそこだけ気をつけてくれよ」

その説明を聞いて試運転を始めるオータムさん。色々と試しているのが良く判る

「や！待ってたよ。一夏君達。君達のISの改修も済んでいるから展

開してみてくれるかな?」

差し出された待機状態のISを受け取る。待機状態は目に見えた変化は無い

「展開して動いて見てくれるかい?」

空中に投影したデイスプレイを見ながら言うスカリエツティさんに頷き。ISを展開する

(あんまり変わってないか……)

俺と等のIS。白式と紅椿は目に見えた変化は見えない……と言
うか

「少し変わっていますわね?」

「うん。僕のもだね」

「と言うかアラクネと比べると殆ど変わってないな」

そう俺達のISはほとんど外見の変化はなかった。強いて言えばブースターが増設されていたり、装甲が少し増えている程度だ。俺達がスカリエツティさんを見ると

「うん。君達のISは外見的な改造はほとんどしていない」

「これでネクロと戦えるのか?」

弥生さんがISの拳を見せながら言うと、スカリエツティさんは涼しい顔をして

「あのねえ? 私は……これでも……結構強いんだよ!!」

弥生さんのIS。デッドクリムゾンの腕を掴み、よいしょと呟いた瞬間

「うわあ!? う、嘘だろ!」

ISを展開していたのに弥生さんは地面に叩きつけられていた。な、何が起こったんだ!?

「力は力。より強い力に制される、だがこうして柔らかい力でも制される。力は驕りと慢心を呼ぶ、故に余り目に見えて改修はしていない」

白衣の襟を直しながらスカリエツティさんは俺達を見て

「それと改修しない理由はもう一つ。ツバキさんと調べた結果なんだがね? 君達のISの多くはセカンドシフトが近いと言うことで、本格

的な改修はしてないんだよ」

セカンドシフト……俺の白式みたいにか。鈴とかのISはどうなるんだろうな？そんな事を考えながら軽く白式を動かそうとした瞬間

「へっ?」

「あぶない!」

信じられない加速で動き出し、俺は間抜けな顔をしたままシャルと正面からぶつかった

「大丈夫?」

受け止めてくれたのは嬉しいんだけどなシャル。両手を広げて抱き締める形で受け止めるのは正直どうなんだと思う。俺の顔はシャルの顔の近く、形のいいシャルの胸が目の前にあって心臓が高鳴るのを感じた。だがそれとは別に

ゴゴゴゴゴゴゴ

空気が軋んでいる音が聞こえる。そして視界の隅では弥生さんやヴィクトリアさん達がISを解除して、逃げているのが見える

(もつと慎重に動くべきだった)

外見的变化はなかったが、内面は相当改造されていたのだ。機動力や反射速度、その全てが俺の予想を裏切っていた。あれだけISを魔改造していたんだ、外見の変化がないからって安心するのは早すぎたんだと思う

「あっははははは!最高!全て私の計算通り!さあ!修羅場を楽しみたまえ!一夏君!あーははははっ!!!」

高笑いをして去っていくスカリエッティさん。外道過ぎる!?!人を完全に遊び道具にしているぞ!?!

「一夏……速く離れなさい。へし折るわよ」

離れたいんです。でもシャルの腕の力が凄まじくて逃げられな
いんです

「チャキ……」

無言で空裂を構えないでください。出力がどれくらい上がってるかは判りませんが死ぬますから

「新型ライフルですか。試しうちには丁度いいかもしれないですね」
ガチャリとマガジンに弾が装填される音が聞こえる。駄目！それ駄目なやつだから!?あのマッドが作った武器なんですよね!?普通に死ねるから

「姉さん。一夏とシャルが抱き合っている。直ぐ来てくれる?ありがとう」

マドカ!?千冬姉は呼んじゃだめ!殺される!俺殺される!

生きるためにシャルを振りほどこうとするが。シャルの腕はびくともしない、ISを展開しているとはいえこの筋力はおかしいだろう!?

「シャルロツト。私も欲しい」

ラウラ!?俺は物じゃないです!そんな事を言うのなら助けてください!

「ふふふふ……一夏は僕のだからあげないよ」

俺には見えないが勝ち誇った顔をしているであろう。シャルの眩きで箒達が一斉に襲いかかってきた、逃げることも前を向くこともできず。唯一見れるのが、揺れるシャルの胸だけと言う天国のような地獄の中。俺の耳に聞こえてくる銃撃音にガチャリと重い音を立てて回転するシリンダーの音。もう棺桶に片足を突っ込んでいるような状態の俺は

(だ、誰か助けて……)

たまに顔に当たるシャルの胸とか、叩きつけられるような箒達の殺気に気絶することも出来ず。俺は心の中で助けを求めたのだった

……
なお助けなど現れる筈もなく、俺はフルボッコの上から更にフルボッコにされ医療室へと担ぎ込まれたのだった

一夏君を見捨てて逃げてきたけど……大丈夫かなあ?心配になり振り返ると直ぐに

ギャアアアアアアアアツ……

段々声に力がなくなっていく悲鳴が聞こえてくる。私達は顔を見合わせてから

「『南無』」

両手を合わせてそう呟いた。戻っても見るのはスプラッタな光景だ、戻るのは得策とは思えない

「で？どうする？今日は別の演習場は使えないって言ってたよな？」

弥生さんが手帳を見ながら言う。そういえば今朝龍也さんに今日は使える少ないって言われていたっけ

「せめて座れる所があれば分析できる」

試運転が出来ないのならデータだけでもと言い始めるクリスさん。確かに改修されたISのデータは確認したいけど、六課の人も仕事をしているし我が俣はいえない。通路でうろうろしていると

「何してるの？」

その静かな声に振り返るとそこには、男にも見える少女。確かオットーさんが私達を見ていた

「えーと。演習場で『グアアアアアアアア!!』……説明しなくても判る？」

シエンさんが説明しようとしたら、一夏君の悲鳴が聞こえてきた。これ以上ない説明だろうオットーさんは

「それならアサルトに来るといいよ。人もいないから」

そう言っ歩いていくオットーさん。付いて来いってことだよねと思えばエリスを見ると

「来て良いと言ってくれてるんです。付いて行きましょう」

オットーさんの小さい背中を追いかけていくと、直ぐにアサルトの部屋に着いた

「あー眠「起きろ戯け」あいだー！」

机で眠っているウエンディさんの頭を叩く、チンクさんと目が合う「どうした？八神ならいないぞ？本局に行っているからな」

「その演習場で喧嘩が起きてて、行く場所が無いので」

クリスさんの言葉にチンクさんはそうかと小さく呟き。

「空いてる机も椅子もある。飲み物も好きに飲めば良い」

そう言つて自分の机の上に書類に視線を向けるチンクさん。言われた通り適当な椅子に腰掛ける

「さてと、ISの分析を始めよう」

クリスさんは改修されたISの分析作業を始めて、弥生さんとシエンさんは

「んーんー？理解できるか？」

「ギリ」

スバルさんから貰つた。龍也さんの手書きの格闘指南書と睨めっこしていた、私も見たがあれは凶解はあるが難しい物だった

「簪。私達はこれを見ましようか」

「う、うんそうだね」

エリスが机の上に置いたのは私達用の、魔法に対する教本。訓練では少しずつ使える様になっているがまだまだだと思つたので、時間を見てはこうして勉強している。とは言え中々思うように言つてはならないけどね。ヴィクトリアさんは

「コーヒーを淹れるが欲しい人は？」

自分にも他人にも厳しい人だけど面倒見は良いので、コーヒーの欲しい人は？と尋ねてくれる。私は手を上げて

「砂糖一つでお願いしてもいいですか？」

「判つた。少し待て」

ヴィクトリアさんが机の上に置いてくれたコーヒーを飲みながら、教本を捲っていると

「チンク姉ー、龍也兄ーは？」

「本局だ。今日は何か知らんがパーティーにでないといけないらしくてな。いやいや出かけていった」

龍也さんが嫌がることつて聖王教会以外にあるんだ……どうもIS学園でのイメージが強いのでそう言う龍也さんをイメージできない

「そうつすかー、ん。終わりつす。確認よろしくお願いします」

「ん。間違えてたらやり直しだぞ。確認が終わるまで簪とかでも話を

しているといい」

ういつすと返事を返して私達が座っている所に来た。ウエンデイさんに

「なあ？龍也って意外と子供っぽいのか？」

さっきの会話で気になっていたのか弥生さんがそう尋ねる。ウエンデイさんは

「そうっすよ？龍也兄は基本的に女・子供に甘いつす。んで義理堅いつす。嫌なことでも貸しがある人の言う事は大概聞いてくれるっすよ？歌って踊るとか」

え？そうなの？そんな龍也さんは全然想像できないんだけど……私達が首を傾げているとウエンデイさんは机の中をござござそといじり

「ほいつす。龍也兄が歌ってるCDとPVっす」

じゃんと差し出されたのはサインつきのCD。しかも手書きではなくプリントの所を見る限り、製品として成り立っているらしい「見れるのか？」

ISの解析作業をやめたクリスさんがそう尋ねる。その目は興味津々と言う顔をしている、かという私もどんな内容なのか凄く気になる

「じゃあ見るっすか？」

「見るー！」

興味の方が勝り、教法を閉じながら言うとうエンデイさんは。そのCDをプレイヤーにセットしてくれた。

「はー歌も上手いんだね」

「楽器の演奏とかもじょうずっすよ？バイオリンとかピアノとか、龍也兄は基本的に何でもできるっすよ？」

そうなんだーと頷き、私達は昼食だぞ？とチンクさんに声を掛けられるまでそのDVDに夢中になっていたのだった……

オットーさんもいつの間にかちよこんと座り。モニターをととても楽しそうに見つめているのだった

(う、生きてる?!俺生きてる!?)

シャルに抱き抱えられている所を箒やセシリアに攻撃され。更にAICで拘束され、マドカと千冬姉の剛拳と剛脚でボロ雑巾のように宙を舞った瞬間。俺は死んだと思ったのだがこうして生きている事に感謝したのだが

(身体が動かない!?)

普段ならシャル先生や龍也が治療してくれるのだが、今は包帯を身につけている。これはとても珍しい事だ

(超いてえ……)

指を動かす事ですら痛い。どうしてこんなに痛いのかと疑問に思っている

「しゃーねーだろ?私はある回復は得意じゃないんだよ。兄貴がシャルがいればいいんだけど、2人ともいないしな」

不機嫌そうな声が聞こえてくる。この声は……

「ヴい、ヴィータさん?」

「おう」

首が動かせないので口調で確認するしかないのだが、この口調はヴィータさんに間違いなかった

「まああれだ。あれ、あんまり魔王刺激すると死ぬぞ。セツテとかが入れ知恵してるからな」

知ってます。手錠とか薬を見て笑っているシャルとかマドカを良く見ますから

「それと、ダークマターが来るから。頑張って生きろよ」

ダークマター!?頑張って生きろ!?!?どういうことなんですか!?!?そう尋ねたかったのに口を開くのも苦しくて、部屋を出て行くヴィータさんを黙って見送るしかなかった。俺は痛む全身に顔を歪めながら。ダークマターについて考え

(はっ!?!ま、まさか……)

考えれるのはあれしかない。いや、だがそんなわけ無い。もう2度と料理はしないって約束して

「一夏。御粥を作ったぞ」

「私と姉さんの自信作だ」

NOーツ!!!

俺は思わぬ心の中でそう叫んだ。俺が料理を出来るのは千冬姉が致命的なまでに料理が下手だからだ、なんと三途の川送りになったか思い出すのも恐ろしい。いやだがマドカは

「姉さんに教わったから完璧だ!」

駄目だ!その人にだけは料理を教わったら駄目なんだ!米を漂白剤で洗うような人なんだぞ?!頑張つて千冬姉のほうを見て

(俺は死ぬのか!?)

土鍋を持っているのはまだ良い。御粥といっていたから、しかし何で

(完全防衛体制なんだ!?)

エプロンではなく千冬姉とマドカが装備しているのは、溶接に使うマスクに鉄製の手袋。どう考えても料理をしていたとは思えない姿だ。そして土鍋は

(なんだあれは!?!あれは食べれる者なのか!?)

黒い。しかもボコボコ言ってる。食べたら臓器が溶けるんじゃないか!?

「大丈夫だ。箸達も食べて美味しいと言っていた。その後倒れて動かなくなつたがな」

犠牲者多数!?!姿の見えない箸とかも気になっていたけど、まさか俺より先に冥界送りになつていゝとは思わなかつた。すまん俺も直ぐ逝くから……

「はい。あーん」

「まずは一夏の口の包帯を解いたほうがいいのでは?」
「それもそうだな」

千冬姉とマドカのそんな会話を聞きながら、俺は自分でも驚くような穏やかな気持ちで口元に運ばれた御粥を口にした

甘い・辛い・すっぱい・しょっぱい・痛い

それだけが俺が認識できた全てで、次々と口に運ばれる劇物。そし

て

「うむ。1度こういうのをやって見たいと思っていた」

「そうなんですか？」

「逆はあったんだ。昔な」

「良いですね。私もやってほしいです」

「風邪を引けばいいんじゃないのか？全部終わってからな」

そんな穏やかな会話と反して俺は1口ごとに体の感覚がなくなり。土鍋が空になる頃には

「三途の川か。初めて見たな」

美しい川の前にいたのだった……しかも箒とかもいた。いつもの刺々しい雰囲気はなく、穏やか顔で話し合っている箒達に安堵し、俺は花畑の中に倒れこんだのだった……

なおこの30分後。シャマル先生の帰還により俺達は無事に現世に帰還することが出来たのだった

「し。死ぬかと思った」

「と言うか半分ほど死んでいたな」

「もう2度と織斑先生の料理は食べませんわ」

「……リアルな死の体験だったね」

「一夏。千冬さんの料理のスキルは変わってないんだな」

そして俺達は今後何があっても千冬姉をキッチンに立たせないことを誓ったのだった……

なお千冬姉とマドカは

「うーむ。やはり久しぶりだから上手いかなかったな」

「大丈夫ですよ。次は上手く行くとおもいます」

「面白い料理法ですよね。私もお手伝いしますね」

必殺料理人シャマルを加えて、また新しい即死系料理の開発をしていたりする

くおまけく

「あのさ？この部屋って何の部屋なの？」

龍也さんの家の中で唯一裏返されたネームプレートがある部屋がある。それが何なのかずっと気になっていた。クレアさんにそう尋ねる。近くにいた一夏君達も会話を止めて、クレアさんの返事を待っている。

「あの部屋はリーエと言う少女の部屋です」

「リーエ……それって龍也が言ってた」

私の記憶が確かならば、その少女の名前は半ネクロ。ネクロであり、人間でもあると言う少女の名前だ

「はい。彼女は半年ほど前、魔力の暴走でこの世界から弾き出されてしまったのです。龍也様達も探しておられますが、一行に見つかる気配がありません」

あれだけの人数の魔法使いがいても見つけることが出来ない。それだけ世界の数が多いいと言うことなのだろうか

「部屋は掃除に常に綺麗になっています。しかしあの部屋に入ることは許されません。それをすれば龍也様のお怒りを買うことになる。良いですね？絶対にあけてはいけませんし、聞いてもいけません。龍也様はリーエの事を心配し今も探しているのですから」

そう念を押して部屋を出て行くクレアさん。残された私達は

「聞いたら不味いことだったみたいね」

「そうみたい……だね」

「全くだ。まあ直接聞けと言いたい所だがね？」

突然聞こえてきた龍也さんの声に振り返ると、そこには

「なにか？」

紅茶のカップを手に、膝の上にドラキチを寝かせてその頭を撫でている龍也さんの姿があった。ず、ずつといたんだ……その事に若干驚きながら

「「ご、ごめんなさい!!!」」

とりあえず謝らなければと判断し、一夏君達と一緒に謝ると龍也さんは

「謝ることもなकारうに、好奇心は悪いとは言わない」

こういう対応をされると本当に大人なんだなと実感する。龍也さ

んは紅茶を飲みながら

「家族だから探し続ける、それだけだ。いつかは道は重なるだろうよ。ただリーエは泣き虫だからそれだけが心配だ」

悲哀と何処か哀愁を漂わせるその横顔に私達は何も言うことが出来ず。無言でとても居心地の悪い空気の中。それぞれ手にしている飲み物を機会のように飲むことしか出来なかったのだった……なおこの時の話を後日ユウリにすると

「馬鹿じゃないのか？」

そーですよ。どうせ私は馬鹿ですよ……傷心の梳きに言われたのでその一言を中々忘れることが出来ないのだった……

第97話に続く

第97話

第97話

千冬姉のおかゆで臨死体験した俺達は、アサルトに逃げていた簪さん達を回収し龍也の家に戻った。なお戻るまで色々あった

「裏切り者！シエーン！待ちなさいよ」

「ちよっ！それ逆恨み！私関係ないよ！」

鈴がシエンさんに飛び掛り、髪をむしやくしゃにし

「ヴィクトリアさん。これは織斑先生の作った御粥の残りなんです。食べませんか？」

「それはどう考えても劇物だ!?!」

千冬姉の作ったおかゆを手にmヴィクトリアさんを追いかけるセシリア

「クリス。教官の料理は最強だった。一口で三途の川に逝けたぞ」

「戻って来れて良かった」

生還できたことを喜んでいるラウラとその肩を叩くクリスさん。

まあ色々あったが、なんとか龍也の家に帰って来る事ができた。途中で三途の川送りにならなかつた面々にアイスを奢って貰った。同じストロベリーやバナナでも、味が大分違って面白かつた

「しかし織斑先生が料理がへたくそなんて以外ね」

「完璧な人間などいないということだろう」

途中で合流した楯無さんとユウリが笑いながら言うが、あれは笑いながら言える様な代物ではない

「料理は面白い。またやりたいと思う」

マドカが料理に目覚めたのはいいことだな、今度はちゃんとした料理を教えようと思ひ。玄関に向かっていると

「ドラキチー！GOーッ！」

「キューッ！」

もうこの家に来てから毎日見ると言っても過言ではない。庭を駆け回るドラゴンと幼女の囃。なんかこう……見ていると癒される光

景なんだよな。小動物が持つ不思議パワーなのかもしれない、そんなくだらない事を考えながら家の中に入ろうとすると

「シェーン・ヴィクター・クリース！簪ー！エリース！あそーぼー!!!」

家に入ろうとした俺達を見つけた、ちびっ子ーズがシェンさん達を呼ぶ。どうもかなり懐かれている様だ、呼ばれた面子は少し考えてから。ちよつと遊んであげてくるねと言って、ちびっ子ーズとドラキチの方に向かって行った。ボールやfrisbeeで遊んでいるドラキチとちびっ子達を見ながら俺達は家の中に入ってしまったのだった

「ふーん。それは災難やったなあ」

風呂の後の夕食で今日あったことを愚痴で言っていると、それを聞いたはやてさんがそう笑いながらワインを飲んでいた。

「いや、本当に死ぬかと思ったんだよ。はやて」

「あつはは！家にもそう言うのは居るでなあ？しゃあないって」

楽しそうに笑うはやてさん。だけどここにはいつもいるはずの龍也の姿が無い、それが気になった俺は

「龍也は？」

俺の問い掛けに答えてくれたのは、ヴィヴィオだった。龍也が引き取って育てている子供とは聞いていた。天真爛漫と言う感じのヴィヴィオは夕食のオムライスを幸せそうに頬張りながら

「ん〜？パーパはお仕事。TVに出るんだって！」

TV？あ、龍也は有名人だから出てもおかしくはないのか？俺がそんな事を考えているとははやてさんが

「そろそろ時間やけど。見たい？」

俺達ではなくチビツ子にそう声を掛ける、ちびっ子達はスプーンを振りながら

「「みるー！」」

にぱーと笑いながら言った。やっぱり龍也が好きなんだろうなあと思ひながら、オムライスを頬張ろうとすると

「あーん」

無表情なのに期待しているという顔で俺を見るマドカ。本当に器用なやつだと思う、だが

(また三途の川送りなのか)

視線が物理的な威力を持つていれば、俺は蜂の巣になっている。だがこれだけ期待の色を目にしているマドカを蔑ろにすることもできず、俺はマドカの口にオムライスを運ぶのだった。物凄く幸せそうに租借しているマドカと、背筋が冷える眼光。全く相反する圧力に怯えていると

「パパだー」

「お兄様です」

ほのぼのとしらヴィヴィオとリインの声に振り返ると、TVに龍也が映っていたのだが……

(す、すげえ……)

白のスーツに赤と金のマントを肩から下げた龍也の姿は、王様としか言いようの無い威圧感……そして同性であれ見惚れるような美しさがあがり、俺は思わず手にしていたスプーンを落とすのだった……

カチャーンつという音がする。一夏君がスプーンを落とした音だ、私はTVに映っている龍也さんの姿に完全に目を奪われた

(はわ……綺麗)

格好良いとも思うんだけど、それ以上に綺麗だと思った……思わず絶句してしまった。だけどそれは私だけではなく

「…………ポ」

エリスやヴィクトリアさん達が頬を赤らめている。だけど私の顔も熱いのが判る、映像越しでこれなら近くで見ている人達はもつと赤面しているだろう。

『八神龍也大将。今回はどうもありがとうございます』

『招待ありがとう。今回は楽しませてもらおうとするよ』

そう笑って歩き出す龍也さん。龍也さんが歩く度に人が道を開けていく……

(モーゼの海割り?)

人がさつと道を開けていく。もしかするとあの場にいる人達は完全に龍也さんの雰囲気呑まれているのかもしれない。

「はいはい！見惚れてないでご飯たべい」

はやてさんが手を叩きながら言う。どうも龍也さんの姿に完全に目を奪われて、食事が止まっていたようだ。食事を再開しているとマドカさんが不思議そうに首をかしげて

「龍也は黒い服ばかりに着ていたが、何で白い服を着ているのだ？」

それは確かに気になっていた。いつも龍也さんは黒い服を着ている、だからいつもと印象が違うのも目を奪われた理由だと思う

「んー？そりやあれや。黒は負のイメージがどうしてもするからなあ。だから白い服とマントなんよ」

そう笑うはやてさん。確かに黒よりも白の方が明るいイメージがある、そう思っただけで納得していると

「こほん、それだけではありません。はやて様」

壁際に控えていたアイギナさんが失礼しますと声を掛けてから

「白と金と赤。あれは王の父君。初代神王の衣装なのです、マントは意匠や染め抜きまで完璧に再現しております」

「ほーそうやったんか？」

「はい。私とクレアで作成しました。あのマントはそれ自体に魔力が込められており、防具としても優秀なのです」

そうなんだ、だから王様って感じがするんだ……と納得しながらオムライスを頬張っていると

「お兄様はかっこいいです♪」

「パパはかっこいい」

「……に、兄さんは凄くかっこいいです」

きやつきやつと楽しそうに言う、リインちゃん達。龍也さんに相当懐いているのだと改めて思う……そんな事を考えながらTVをちらりと見ると

(楽しくなさそうだな……)

話し掛けてくる人達に相槌を打っているのが見えるが、どうも楽しくなさそうだ。あの姿は更識家のパーティーの時に良く見る、お姉ちゃんの姿に似ていると思った。私もよくお姉ちゃんと一緒に参加していたから判るのだが、龍也さんは退屈していると思った。

龍也さんの地位と役職を考えればこういうパーティーに呼ばれるのも納得なんだけど、お姉ちゃんが行きたくないなあといっていたのをどうしても思い出してしまったのだった。

「お姉ちゃんもやっぱりああいうパーティーは嫌いななの？」

部屋に帰って寝る準備をしながら尋ねると、お姉ちゃんはブラシを机の上において

「あんまり楽しい物じゃないわね。見え透いたおべっかとか聞いているのってあんまり好きじゃないのよね」

「それは当然だと思いますね。私も同じ立場なら嫌だと思えます」

エリスが頷きながら言うと、お姉ちゃんはでもと言ってから

「人の上に立つ人は自分が嫌な事でもしないといけない時があるのよ」

偉い人って言う程良い物じゃないのかも知れない。私とエリスも人事ではなく、もし代表になればそういう機会も増えるだろうと思っていると

「まあ今すぐにつてわけじゃないから、それに明日も龍也さんの訓練があるんでしょう？早く寝ておいたほうがいいわよ？私もISの調整があるし」

そう言つて布団にもぐりこむお姉ちゃん。それを見たエリスがぼそりと

「逃げましたね」

「逃げた？」

エリスの言葉の意味が判らず尋ね返すとエリスは、ええと言つてから

「最近ユウリと仲がいいみたいなので。その事を聞こうと思ったのに残念です」

「……あんまりお姉ちゃんを苛めないでね」

お姉ちゃんは意外と脆い所があるのでそう声を掛けてから、自分の布団に潜り込んだのだった……

「ふああ……よく寝たあ」

ぐぐーつと背伸びをしながら長い通路を歩く。最初はこんな慣れないと思っただけ、意外と適応力は高かったようでもう普通に馴染んでいた。それは私の適応力だけじゃなくて

(リインちゃんとかのおかげかな?)

遊んで、遊んでとじゃれ付いてくる。リインちゃんとかに案内されて家の中を歩いている内に慣れたのかもしれない。そんな事を考えながら

(鈴は相変わらず夜更かしだね)

私が寝た時はまだ鈴は部屋にいなかった。多分だけど一夏君とかと話をしていたんだろうなあと思いつながら歩いていると

「ん?おはよう。シエン、早いな」

同じように背伸びをしながら歩いていた龍也さんにはぶったり会った。ここに来てから滅多に会うと言うことは無かったので、不意打ちも良い所だ

(背高いんだね)

IS学園にいたときは幻術で歳を調整していたと聞いていた。こうして本来の歳の龍也さんを見ると随分と背が高い。完全に見上げる形になってしまふなあと思いつながら

「昨日の服はもう着ないんですか?」

冗談のつもりでそう尋ねると龍也さんは難しい顔をしてから

「あれは特別な時しか着ないんだよ。式典とかな、日常的に着るものじゃない」

アイギナさんが言うには、確かあの服は王様としての服。確かに普通に着る物じゃないね、と納得した所で気づく

「龍也さんコートは?」

何かいつもと違うと思つたら、IS学園でもここでも着ていた黒いコートを着てないのだ。それが気になり尋ねると龍也さんは

「明日は隊長陣の訓練の日だからな。それに向けて身体を慣らすためにな、あれは重さが300キロあるから。脱いだときの軽くなる感じに慣れておかないと後が大変なんだ。向こうは偶に殺す気であるか

らな、ご褒美が欲しくて」

……あははと笑っているが、笑って流せる単語は無かったと思う。300キロのコート・殺す気・ご褒美。どれも突っ込み所しかないような気がする。しかし私が一番気になっていたのは

(ご褒美ってなに?)

あの魔王なはやてさん達へのご褒美? 私が首を傾げていると龍也さんは笑いながら

「なにただの休日の独占権だよ。買い物とかに付き合うという約束なんだよ。ちなみに私はまだ不敗だ」

それはあれじゃないだろうか? 絶対に手に入れることのできない物を餌に、やる気を出させているような物ではないのだろうか? ずるいと思う反面。自分のみを護るためと考えれば妥当な手段なのかもしれない

「そう言うわけだ。それと今日の訓練は無しだからな」

「訓練無いんですか?」

今までずっと訓練があつたのに何でだろうと思ひながら尋ねると、龍也さんは頭を掻きながら

「ジェイルがな、ヴィータ達をからかって演習場が大破したんだ」

……大破? あの演習場が? 私が絶句していると龍也さんはからから笑いながら

「よくあるんだよ。ほら、皆強いから」

強いで済ませて良い問題じゃないと思ひはしたが、あえて口にはしなかつた。郷に入つては郷に従えと言うしね

「と言うわけだ。今日は観光に連れて行ってやろう。10時にリビングに集合な?」

「いきなり言う事じゃないと思います」

いきなりの観光・しかも時間まで指定。そう言うのはもつと早く行って欲しい

「今シエンに言った。じゃ、後は任せた。箒とかに声を掛けておいてくれ」

言うだけ言ってさつて行く龍也さん。途中で「キュー♪」「お兄様で

すー♪」と聞こえてくる楽しそうな声を聞きながら腕時計を見る

【6時30分】

時間的な余裕はある。だけど朝食。身支度と考えると結構ギリギリだ。それに朝弱い面子も多い

「とりあえず。楯無先輩と箒さんを起こしに行かないとー」

キリツとしていて頼れる2人を起こすことを最優先に考えよう、私はそう判断して2人の部屋へと走ったのだった

シエンが必死に起こして回っている頃。龍也とちびっ子達は

「おにーさまー行きますよー」

「良いぞー」

「えーい」

「ん。上手になったなー」

庭でキャッチボールをして遊んでいたりする。なおちびっ子の投げるボールはその性格を現しているのか、かなり独特だった

リイン 超山なり、1回跳ねて龍也の所に届く

アギト かなり早い、胸元にストレート返球

ユナ 半分も届かず落ちる。

アザレア 以外や以外ストレート返球 稀に明後日の方向に消える

リヒト 変化球 フォークしたり、カーブする

そしてヴィヴィオはと言うと

「てえーい」

真っ直ぐ投げているのに、なぜか頭の後ろからと言う器用すぎる投球をしていた。そして最後のドラキちは

「キューー」

ボールを加えて真上に投げ、半回転して尻尾で打ち出すという器用な事をしていたりする。なおドラキちはこの尻尾にミットを嵌めてキャッチャーを出来たりする。器用なドラゴンである……

シエンが必死で鈴を起こしているのは対照的に、庭ではとてもものんびりとした光景が広がっていたのだった……

シエンさんに観光に行くらしいから起きてと叩き起こされ、朝食を食べた後で出掛ける準備をするために部屋に戻っていると

「観光に連れてつてくれるなら昨日の内に声を……ふああああ」

鈴が欠伸をしながら言う。昨日は俺や鈴それに箒達は臨死体験のせいで、調べることの出来なかったISのスペックの分析で夜遅くまで起きていたので皆欠伸をしている

「だらしない」

マドカだけはいつもの無表情。千冬姉とこんな所まで似ているとは正直驚きだ

「観光かあ。どんな所があるのかしらね？」

「さあな。しかし態々龍也が案内してくれるんだ。見る価値があるのか、それとも遊べる所なのか？そのどちらかだろうな」

並んで歩きながらそんな話をしている。ユウリと楯無さん。最近すこしギクシヤクしているかな？と思っていたのに、今は凄く仲が良さそうだ、俺達が知らない所で何かあったのかな？と思いつつ、少し羨ましいと思つた。彼女が欲しいというわけじゃないが、それでも仲良さげな2人の姿を見ていると羨ましいと思つてしまう。なんせ普段は

（殴られ、切りかかられ、射撃の的にされ……常に死に掛けてるもんなあ）

俺は龍也みたいにやんちゃだから仕方ない。と言う態度で受け入れることが出来ない、贅沢は言わないが、もう少し優しくしてもらいたいと思つても罰は当たらないだろう。

「二夏。観光だって♪楽しみだね」

そう笑つてシャルが俺の腕を抱え込む。腕に当たる柔らかい感触に思わず赤面する。だが直ぐに背筋に強烈な寒気を感じる

「ゴキッ！メキ！ボキボキッ!!」

鈴とマドカが手の骨を鳴らして俺を睨んでいる。だがこれは男としては当然といえる反応なんだ、俺は龍也みたいに抱き疲れても平然

としていられるような精神力は無いんだ。そこは理解してくれないだろうか

「ギロツ！」

鈴とマドカのように手を出してくる気配は無いが、殺気を込めた目で俺を睨んでくる。箒とラウラ……2人とも刀剣の扱いに長けているので少しでも気を損ねるとマジで殺される。冷や汗を流しながらふと思う

(セシリアが何もしてこない?)

普段なら鈴か箒達の法に入っているのに、どうしたんだと思っっていると

「実に楽しみですわね！一夏さん」

(そうきたかあ!?)

シャルに対抗したのか左腕を抱き抱えるセシリア。そしてその行動で

「一夏あ!!!」

噴火寸前だった箒達が一気に噴火した。そして水平に廊下を吹っ飛びながら

(もう少しだけで良いんです。俺に平穏をください)

観光する前に既にボロボロになった俺は、薄れ行く意識の中でそう思ったのだった……

第98話に続く

第98話

第98話

龍也に観光に連れて行ってやると言われて、車に乗って街に来たのだが……

「そう緊張するな！アイビス！」

「は、はいいい……」

途中で隊舎に行くはずだったアイビスさんだったが、龍也に丁度いいとか言われて。猫のように襟を捕まえられて強制連行。憐れである、更に街に到着すると同時に逃げようとしたから、襟を再度掴まれ捕獲、何と言うか不憫である

「何故連れて来たんだ？龍也」

千冬姉にそう尋ねられた龍也はうんと頷いてから

「いや、スバルとかもいないし、はやてとかも仕事だし。街の情勢を知るなら若者、そして丁度良い所に来たアイビス。それが理由だ」

私じゃなくても良かったんですか!?アイビスさんがそう叫ぶ、俺達はそんなアイビスさんを見て

(何時まであのままなんだろう?)

龍也に襟をつかまれたまま。猫のように連行されているアイビスさんはむちやくちや目立っている。人数も多いし、何より龍也が目立つから視線が集中している。何と言うか憐れと言いたくなるような顔をしている

「八神大将。そろそろ離して貰えませんか？」

「ん？ああそうだな。すまない、じゃあアイビス。案内してくれ」

平然と言ってアイビスさんを降ろす龍也は任せたと笑っている。多分六課の人もこんな感じで振り回されているんだろうなあと思っ

た。
「じゃあえーと案内しますね。若い人が多いならそうですね……買い物とかどうですかね？近くに色々店がある所があるので、そこに行きましようか？」

アイビスさんが手帳を見ながら言う、それを覗き込んだシエンさんが

「お菓子の店ばかりスクラップしてない？」

「う。別にそれはいいじゃない！この店美味しいんだから、それで八神大将。そこに行くのはどうでしょうか？聖王教会は見たなら、観光名所は夕方の方が綺麗だと思うんですが」

アイビスさんにそう尋ねられた龍也は首を傾げて

「そんな所あったけ？」

え？思わず目を丸くする。龍也はこの街で暮らしているはずなのに？と思わず龍也の顔を見る、だが何も言えないでいるとツバキさんが

「知らないの？住んでいるのに？」

「いや、私は殆どネクロとの戦いで殆どいないから……新しい店とかは知らないんです。アイビスその店は最近出来た店か？」

逆に尋ねられたアイビスさんはいつと頷いて、半年前に開店しましたと言うと

「じゃあ丁度IS学園にいたころだな。知るわけないのは当然だな」

あつはは！と笑う龍也。なんかこうして見ると本当に人の良いお兄さんって感じだよな〜と思っている

「まあとりあえず行きましよう。こつちです」

アイビスさんに先導され俺達は街を歩き出したのだが

(凄い目立っている)

龍也が先頭を歩いているから物凄く目立っている。通り過ぎる人が1回立ち止まり2度見している。これを見た俺達はひそひそと

(やっぱり龍也は有名人なんだな)

(私は雑誌で見たが、どの雑誌も特集記事を組んでいたぞ)

(あたしはTVで見たけど、特集TVが多かったわね)

短くこの世界の生活でも判るほどに龍也は有名人だった。俺達つてもしかしてかなり凄い人に訓練をつけられているのかもしれないと思いつつ龍也とアイビスさんの後を追って歩き出したのだ

アイビスさんに案内されて来た店は凄いいお店だった。複合ショッピングセンターと言う奴なのだが、私達がいる所とは規模が違っていた。

(凄いわね、これは)

日本とは敷地が違うからといえば説明がつくのだが、それにしたつた外の見え目と中の大きさが完全に違う

「龍也さん。これも魔法なんですか？」

簪ちゃんがそう尋ねると龍也さんはそうだと頷いてから

「空間魔法の応用だな。複数の魔法を発動させて、それを更に複数の制御魔法で空間を圧縮している」

魔法ってそんな事も出来るのね、私はただただ感心することしか出来なかった。色々と神秘的なことを見てきたつもりだが、これはかなりの極めつけね

「さてと行くとすれば服売り場とかどうですか？」

アイビスさんが私達を見て言う。この世界の服……確かに少し興味があるかもしれない。スバルさんとかの私服を見ると、お洒落でそして珍しいデザインの服には正直興味があった。それは勿論私だけではなく箒ちゃん達も同じだったようで、目が輝いている

「行きたいようだな。見に行くか」

龍也さんの言葉に頷き、レイリースコーナーに向かう。そしてそこで私達は思わず

「「わあ……」」

思わず歓声の声を上げてしまった。民族衣装のような物や綺麗な染め抜きの服……私達の世界では見た事のない服がこれでもかと陳列されていた

「素晴らしいですわね。これは……」

「本当だな。美しいドレスだ」

手にとって身体に当てているセシリアちゃんやヴィクトリアちゃん。姿見も完備されていて鏡で見ることも出来る、サービスが行き届いているわね

「一夏。姉さん、私は服はどういうのが良いか判らない。見てくれな
いか?」

「ん? ああ、そうだな。見てやろうマドカ。一夏も見てやれ」

「俺? 俺もそう言うのは良く判らないぞ?」

そんな話をしながらマドカちゃん服を選びに行く、織斑先生と一
夏君

(皆興味津々って言う感じね)

皆それぞれに興味のある服を見ている。私も見に行こうかなと
思つて服を見ていると

「これはどうだ。楯無」

「え?」

ユウリに差し出された白いワンピースを見て、思わずユウリを見る
と

「何だその顔は? ワタシに選ばれるのは不服か?」

ちよつとだけ不機嫌そうな様子で尋ねてくるユウリ。まさかユウ
リがこんな事をしてくれるとは思つてなかつたから驚いただけと返
事を返し、

「着てみようかしら?」

「いいんじゃないのか? 見た目だけでも清楚にしてみてもどうだ?」

見た目だけでもって酷い!? 乙女の純真をなんだと思つているんだ
と思つているんだと文句を言いたくもなつたが

「ふふん、その発言後悔しない事ね!」

それでも私は更識家の娘として一通りのことは全部出来る。勿論
もつとお嬢様風に喋ることも振舞うことも出来る、普段やらないのは
疲れるからだ。私はユウリに差し出されたワンピースを手に試着室
にへと向かつたのだつた……試着してお嬢様風に振舞つたら

「すまない。ワタシが悪かつた……」

ユウリは直ぐに折れていつも通りに頼むといったのだつた……

中国コンビ 魅了される

「鈴何を見てるの?」

じーつとショーケースを見つめている鈴にそう尋ねると

「指輪」

ぼそつと呟く鈴。鈴が指輪？珍しい、アクセサリーの類はあんまり好きじゃないのにおもいながら、後ろからショーケースを覗き込んで（ふーんって指輪!?!）

服売り場の筈なのにさも当然のように並んでいる。高価そうな指輪に驚いた。しかし……確かに

「綺麗だね」

「うん」

金のリングに青紫の宝石や透き通るような蒼の宝石が埋め込まれていて、とても美しい。それなのに値段は2000円弱と安い

「人工の宝石なのかな？」

「そうじゃないの？」

鈴とそんな話をしていると店員さんが声を掛けてきた

「その指輪は八神大将が考案した、簡易プロテクションを発生させる特殊デバイスです。こちらは突然のネクロの強襲に備えて買われていかれる女性が多い当店お勧めの品です。リンカーコアのない方も使用できるのでお勧めですよ」

これもデバイスって奴なんだ……じゃあ

「このブレスレットとかペンダントもですか？」

同じように並んでいるブレスレットとペンダントを見ながら尋ねると

「その通りです、ブレスレットタイプとペンダントタイプは男性が良く買われていかれます。この真ん中の魔力石は時間とともに魔力を回復させるので何回でも使えるので便利ですよ」

商品を紹介してくれる店員さんにありがとうございますと言ってから

「鈴。買う？」

プロテクションは確か防御魔法。ネクロに襲われる可能性を考えると買って置いた方がいい気がする。私は買うつもりだけどと尋ねると

「あたしも買うわ。それと箒達にも声を掛けておきましょうか」

ネクロに狙われるのは箒さん達も同じはずだ。むしろ私より箒さん達の方が危険かもしれない。私はそんな事を考えながらブレスレットを一つとって

「最後に一つだけ、2000円とかで本当に安全なんですか？」

そう尋ねると店員さんはくすりと笑い。

「はい、この指輪やブレスレットを正規価格で買おうとすると1万はしますが、八神大将のご好意とスカリエッティ博士の研究の成果で量産体制が取れたため、半額以下でご提供させていただいております」
やっぱり龍也さんとスカリエッティさんは凄いなあと感じつつ、私は自分で選んだブレスレットを購入したのだった。なおこのブレスを見た龍也さんとスカリエッティさんは、どうせならといって同じ色の魔力石。しかも更に強力なものに交換してくれたのだった

ドイツコンビ+α×2

「クリス、こういうのはどうだ？」

「判らない」

「ラウラ、これは？」

「判らない」

私と弥生は溜息を吐きながら、また服を選び始めた。ラウラとクリスに服を選んで欲しいと言われて引き受けたが

(これは予想以上に難敵だ)

ドイツ軍人として軍で育った2人の女子的感性はかなり低かった。何を見ても判らないの一点張り、どんな服がいいかと尋ねても良く判らないか、実用的なのが良い。としか言わない

(あーヴィクトリア。安受け合いしちまったなあ)

弥生の言葉に頷く。近くに居たからと言うことでクリスとラウラに声を掛けられ、いっしょにと誘われたので良いといったのが間違っていたのかもしれない。

(セシリア達は自分のを選んでいるか)

セシリアとシャルロットは自分の服やアクセサリーを選んで

のが見える。私と弥生は自分の服を買うつもりはなく、別の世界の服と言うのを見てみようと思っただから別に良いのだが

(どうせ選ぶなら喜んで欲しいのだが)

ちらりとラウラとクリスを見てみる。ラウラはいつもの無表情、クリスは携帯タブレットで何かを調べる、いや分析している。私も服装には疎いが、ラウラとクリスほどではない

(うーむ。どんなものがいんだ?)

そう尋ねた所で判らないと返事を返すに決まっている。ではどうするかと考えた私は、店内の鏡を利用してラウラ達を観察することに。無意識に見ている服に興味があると思っただからだとしてその作戦は成功した。ラウラもクリスも何回か見ている服が合った

(弥生あれだ)

(ん?あれか……)

ラウラはやはりボーイッシュな服装がいいのか上下セットに帽子を着ているマネキンを何回も見ていた。ボーイッシュと言っても可愛らしいタイプの服だ。ラウラみたいな小柄なタイプには良く似合うはずだ

クリスは白系統が好きなのかワンピースやブラウスを良く見ていた。あとは私と弥生の服を見るセンスが試されるわけだ。私はそんな事を考えながら、クリスの服を再び選び始めたのだった

「ふむ。マドカはこれが似合うな、あとこれとこれとこれ」

次々にマドカに服を手渡していく千冬姉。ぱつと見ているだけなのにサイズは全てマドカにぴったりなのが驚きだ

「これを全部試着するのか?姉さん」

俺が持っている服を見て尋ねてくるマドカ。俺はハンガーに掛かった服をこれでもかと持っており、ハンガーの首が指に食い込んでいる正直痛くなってきた

「試着?必要ないな、私の目利きを舐めるな。一夏の服だって全部私

が選んでいる」

そう、そうなのだ。学生時代から俺は自分の服を言うのを選んだ事が無い。下着は自分で買っているが、Tシャツやジーンズは全て千冬姉の見立てだ。これは千冬姉の悪い癖とも言えるのだが

(自分の選んだ服を俺にさせて写真撮るのが好きなんだよな)

千冬姉は写真撮るのが好きだ。特に家族と撮る写真が、だからその写真を撮る時は一切の妥協をしない、服を見るセンスは確かに一流だから文句を言えない。しかも成長しているのにサイズは全てぴったりと言うのも正直驚きだ

「あとはうん。これだな」

「まだ買うのか!？」

「当たり前だ。マドカには私服がない。夏場・冬服・秋物全部買うぞ」
そんなにもてません。お姉様……千冬姉は自分の弟の筋力とかを過信していないだろうか?今でもかなりギリギリなのに……

「とりあえず会計して荷物を預かってもらおう。そしてまだ買うぞ」
勘弁してくれと思つたが、ふと思ひ出す。最後に千冬姉と買い物に来たときは2時間以上買い物に付き合わされた。無論俺の服を選んでいるだけでだ……

(龍也の予定とか大丈夫なのか?)

案内してくれる場所は夕方が良いとは言っていたが、食事とかもあるし折角の観光だから見ておきたい場所もある。とりあえず俺に出来るのは千冬姉が早めにマドカの服を選ぶのを止めてくれるのを祈ることだけだった

〜1時間後〜

「千冬。妹さんの服を選ぶのが楽しいのは判るけど、それくらいにしたら?」

「うむ。箒やラウラ達も待っているぞ?向かいのカフェでな」

俺とマドカを救ってくれたのは龍也とツバキさんだった。若干呆れたという顔をしているのはご愛嬌だろう。2人にそう言われた千冬姉は

「あ、ああ……すまない。多少夢中になっていたようだ。マドカの服

の選ぶ続きはIS学園に帰ってからにしよう」

まだ買うのか？と言う顔をしている龍也とツバキさん、だが正直この程度ではまだ甘い。千冬姉は自分の事には無頓着だが、俺にはかなり甘い面がある。そしてそれは妹のマドカに対しても同じことだ、買い物するときは万単位で買い物をし、更に筆筒まで買うときもある。それで考えれば今回はまだ甘いと言わざるを得ない

「とりあえず会計だ、行くぞ一夏」

「うーい」

ふんつと気合を入れて服を抱えなおし、俺は千冬姉の後ろをついてレジへと向かったのだった。

財布を取り出して会計をしている千冬を見ていた龍也とツバキは

「軽く万は越えてますよね？」

「10万言ってるかもね」

買い込んだ量に店員も驚いている、しかも現金で買うと言っているから更に驚きと言う感じだ。しれっと会計をしている千冬を見て龍也とツバキはふうつと溜息を吐いて

「ツバキさん、あの荷物を積み込むのを手伝うので箒達の食事代はこれで」

「私も持ってきてるから大丈夫よ？」

「アイビスは有名な大食漢なんですよ、普通の人の2倍は食べますから」

「……そうね。じゃあ貰っていくわ」

ツバキは信じられないという顔をしてカフェに向かい、龍也は会計を済ませた千冬達の所に向かい。買い込んだ服を車のほうへと運ぶのだった……

「さてと……思ったより時間を食ってしまったな」

荷物がよそうより多いといった龍也は仕方ない最終手段と云ってから、魔法で服を直接千冬姉とマドカの部屋に跳ばした。魔法を街中で使うのは駄目なんだがなと苦笑する龍也に、魔力反応と言うことで注意に来た管理局の人は龍也を見て回れ右で去って行った。さすがに自分のところのお偉いさんに注意する勇氣はなかったのだろう

「それで満足したかね? アイビス」

「は、はひーご馳走になりました!」

箒達の話によると自分達の3倍はケーキを食べていたらしいアイビスさんが上ずった声で返事を返す。その様子に龍也は上機嫌に笑いながら

「食事もまた訓練と言う言葉がある。生きるということは食べることももある、健康でいいことだと思うよ」

女性が食べる量を褒められても嬉しくないと思うんだけどなあと思いながら

「龍也どこに行くんだ?」

「ん? 適当」

案内じゃないのか!? 適当ってどういうことだ!? 俺達が混乱していると龍也は冗談冗談と笑いながら

「海が近くにある。泳げるような場所じゃないんだが、近くにレストランとかもあるし、テニスコートとかもある場所がある。そこに行くと思うのだがどうだ?」

運転しながら尋ねてくる龍也にセシリアが

「観光名所と言うのは?」

「あそこは夕方の方が良い。空が近くてな、星が良く見えるんだ」

星が見えるなら夕方の方がいいんだろうなと納得する。龍也はまあ昼間は昼間で綺麗なんだけどなと笑いながら、ゆっくりと海のほうへとハンドルを切ったのだった……

夕方までテニスやバスケットボールで遊んだ後(千冬はスポーツの万能だったようで、代表候補である簪ちゃん達をらくらく抜いてダンクシュートを決めていた)ユウリや楯無は見ているだけだったけど楽しそうだった

「さて、じゃあそろそろ行くか。決着付けろよー」

龍也君がそう声を掛ける。バスケットコートでは

「抜かせてもらう」

「そう簡単には」

マドカと箒が1対1で勝負していた。さてどっちが決まるかな？
と思ってみていると

「はっ！」

「くっ！きせん！」

クイツクターンで飛び上がったマドカのシュートを箒がジャンプして弾いた。身長差が勝負を決めてしまったようだ

「決着は付いたか。早く戻って来い。この時間は道が込むんだ」

龍也君の言葉に慌てて戻ってくる一夏君達を乗せて、車は街外れのほうに向かつて走り出した

「龍也さん。この方向って」

「楯無とユウリはもう行ってたな。そう私が良く行く場所だ。少しだけ山を登るが……いいところだぞ」

どうも楯無とユウリは行く場所を知っているみたいね。私は

「どんな所なの？」

「小高い丘で街の明かりと星空が凄く綺麗な所でした」

へーそれは楽しみね。私はそんなことを考えながら、窓の外を見つめたのだった

「確かにここは連れて来たい場所よね」

龍也君に先導され上ってきた丘から見ると、街と空は確かに綺麗で見の価値があると思った

「確かに綺麗だな。日本じゃ見れないかも」

「そうだな。これは確かに素晴らしい」

ここまで上ってくるのは少し疲れたけど、十分に価値のある物を見たと思つて夜空を見ていると

「まだ。終わりじゃない、こっちだ」

そう言つて龍也君が崖の方に歩いていく

「そっちはがけ……ええ!?!」

龍也君の姿が溶けるように消えた。どういうこと!?!と思つてみると龍也君が顔を出し

「この先は関係者しか知らない。こっちへ」

関係者しか知らない場所?……そんなところに私達を案内する目的はなんだろう?と思ひ首を傾げているとアイビスさんが

「守護者の墓標……そっか。ここだったんだ」

守護者の墓標? 1人だけ知っているという感じのアイビスさんにエリスちゃんが

「守護者の墓標? 守護者と言うのは龍也さんの渾名なのでは?」

そう尋ねられたアイビスさんはそうといって頷いてから

「パンデモニウムが落下した際に、八神大将は1年の間行方不明になってるんです。MIA扱いで墓標が建てられたんです、それは関係者しか知らない場所なんです」

そう言つて歩き出す、アイビスさんの後を追つて崖の方に足を伸ばすと

「あつ地面がある」

見ているのは空なのに、ちゃんと地面がある。これも魔法の力なのねと思ひながら完全に崖の方に身を乗り出すと、そこにはちゃんと丘が続いていた……その先には丘を登つていく龍也君の背中が見える。その背中を追つて丘を登つていく

「ここは……」

上りきつた丘の上は全く別物の世界だった。足元は街の光があり、顔を上げれば星に手が届きそうとさえ思える。そして丘の上にある墓標の前にしやがみ込んだ龍也君は

「ここは私の墓でもあり、セレスの墓でもあり、そしてネクロとの戦いで死んだ者達の墓でもある」

龍也君は淡々と語りながら。コートから取り出した酒瓶を傾けて墓にかけている

「ネクロと戦うということは死を覚悟するということだ。今この場でもう1度問おう……お前達はネクロと戦うのか」

観光なんてとんでもない、これは最後の確認のためだったのね。日常を思う存分楽しませてから、それでもなお非日常に足を踏み入れるのか?と問いかける。それはずるいとも言えるが、確実な手だった。

これで揺らぐのならネクロとは戦わないほうが良い。一夏君達は少し考える素振りを見せてから

「俺はもう決めてる。ネクロと戦う、逃げないってな。それに今日1日普通の事をしてて思ったんだ。この日常を護りたいなあって……だから俺は戦う。もう逃げない」

一夏君が一步前に踏み出して言う。そして箒達も同意権だと言う感じで頷いている、龍也君はそうかと言って

「なら良い。私はお前たちが死なないようにするだけだ。選んだ道に後悔するなよ」

そう言つて夜空を見上げながら、お前達も見ておけ。これだけの星は滅多に見れないぞと言つた。私は空を見て

(確かにこの空は見えないわね)

星しか見えないその夜空は私の記憶にしつかりと残つたのだった……多分。一夏君達も同じなんだろうなあと思いつつながら暫くの間夜空を見続けるのだった

「やっぱ拒否反応が出たかあ……」

私はポッドニ入つて眠っているセリナを見てそう呟いた。やはり死体のネクロ化は不安定なのかもしれない、とは言えセリナは私に良く似ているので見捨てることも出来ない。出来るだけ拒絶反応を出ないように調整してあげたほうがいいのかもしれない

「ネル……ネル」

「ん？モモメノどうかした？」

私の服の裾を引っ張るモモメノの視線に合わせる為にしゃがむとモモメノは私の耳元で

「いる……LV5」

その言葉を聞いて、モモメノを抱き抱えて立ち上がると

「ビーモー」

ぼさぼさ頭の着崩したタキシード姿の浮浪者が私を見ていた。当

然ヨツン Heim の中なので人間がいるわけが無い

「何してるのよ。ランドグリーズ、気持ち悪いわよ」

「あつははは。情報収集はこっちの方が楽なんですよ？魔力反応が消えますからね」

くつくつくと笑いながら。ぴんとしたタキシードにスカーフ姿になるランドグリーズは着込んでいたマントを椅子にかけ

「いい加減にうんつと言ってくれませんかね？」

「帰れ。勝手に椅子に座るな」

「こいつは何時もこれだ、鬱陶しいことこの上ない。ランドグリーズは

「盟主に使えるのがそんなに嫌ですか？」

「嫌よ。私は私の意思で動くの、誰かに仕えるなんてうんざりよ」

「より強力なネクロになれるとしても？」

「しつこいわよ。帰りなさい、ベエルゼを呼ぶわよ」

ベエルゼを呼んだ所で戦力にはならないが、援軍をとかを言われるのは面倒なはずだと思ひ言うと

「ふー判りました。今回は帰ります、寄っただけですからね」

寄っただけ？珍しい。いつも来るときは私が折れるまで説得しに来る。だから盟主のいる所から直接来るのにと思っていると

「リーエを追いかけていた者で」

しれつと言うランドグリーズだったが、私は一瞬頭に血が上りモメノを抱えているのを忘れ、力を入れてしまった

「ネル……痛い」

ぺちぺちと私の腕を叩くモメノにゴメンと言ひながら

「それを言いに来たの？最低ね」

「別に他意はありません。少々手こずる相手を仲間にしたみたいですのでね。一応教えておこうかと」

ランドグリーズが手こずる？そんな相手がいるのか？と思つていと

「聖魔王が仲間になったようです」

「！あいつ生きてたの？」

「ええ。生きていたようです。残念ですけどね。あれもLV5の器として優秀だったんですけどね。さてとでは失礼を、ベエルゼと遊んでいるのも良いですが、早々に切り上げてくださいね」

マントを羽織り溶けるように消えていくランドグリーズを見ながら。モメモノを降ろして

「お菓子でも食べてなさい。私は考えることがあるから」
「うん」

ぬいぐるみを抱えて部屋を出て行くモメモノを見送り。私はイスに腰掛け

「リーエ。お前はお父様に会わせない」

リーエ。お前は私が潰す、お父様のいる世界に行く前に叩き潰してやる……お父様の娘は私だけ、お前もあの子も消えれば良い

「もうそろそろ私もこの世界から手を引くときみたいね」

お父様がいるからこの世界にいるが、もうそれも良いだろう。私も本格的に自分の目的のために動こう……誰よりも何よりも優先するのはお父様だけ、だから私からお父様を奪おうとする存在は許さない……何をしても、どんな手を使っても

「殺してやる……」

私はそう呟き。セリナの眠る部屋を後にしたのだった……

第99話に続く

第99話

第99話

日課になっっている訓練を終えて龍也さんの家に帰る。すると庭を見て驚いた……なんと庭には

「キュー」

「クー」

ドラキちと白い身体のドラゴンが戯れていた。なぜ？ドラゴンは一匹だったんじゃないかと私が首を傾げていると

「こんにちわ」

「え？うん。こんにちわ」

民族衣装のようなものを着込んだ。ピンク色の髪をした少女に声を掛けられる、少女はニコニコと笑いながら

「シエンさんですよね？お父さんに聞いてます」

にぱっと笑う少女はぺこりと頭を下げながら

「キャロ・ル・ルシエです。それとおいで」

キャロちゃんの呼びかけで白いドラゴンは空を飛びあがる。その姿はワイバーンと言う感じがした、そのドラゴンはキャロちゃんの足元に着地し

「フリードです。私のパートナーです」

「クーー！」

ぴこぴこと翼を振るフリード。ドラゴンは本当に愛嬌があるようだ。私がそんな事を考えていると、ラインちゃん達が家からボールを持ってきて

「あそぼー！」

ぽーんと投げられたボールは私の隣のクリスさんに、クリスさんは良いよーと返事を返してボールを投げ返す。今度は私に投げられ、それを受け取り

「いっくよー」

「はーい」

両手を上げて嬉しそうに手を振る。アギトちゃん達へとボールを投げ返したのだった……暫く遊んだ後疲れたからと言って家の中に入り、庭を見ながらジュースを飲みながら。なんの気なしに

「最近こうして遊んであげているのが日課になってるよね」

龍也さんは訓練を終えて家に帰るなら、アギトちゃん達と遊んでやってくれと言っていた。最初は暇だしと思って遊んであげていたのだが、いつの間にか日課になってるねと呟くと

「だな。可愛いから良いのだが元氣すぎて困るな」

途中で帰ってきてあそぼーと言われて。断れずに遊んであげていたヴィクトリアさんも同意してくれる。するとクリスマスさんが

「これも龍也の訓練。シエンとヴィクトリアは理解してなかったの？」

へっ？私とヴィクトリアさんが振り返ると、クリスマスサンは涼しい顔をしたまま

「日常と非日常。ネクロと戦うと考えれば私達が足を踏み入れるのは非日常。だけど非日常に慣れてしまうと、日常の中にある物が見えなくなる」

クリスマスさんの視線の先ではドラキちとボールを追いかけている。アギトちゃん達の姿がある、楽しそうな笑い声と笑顔が溢れている

「日常の大切さを知る。それは護りたいという意味に繋がる。ドイツではそう習った」

そう言っ部屋へ歩いていってしまうクリスマスさん。またISの分析でもするのだろう、私は窓の外で楽しそうに遊んでいるアギトちゃん達を見て

（日常の大切さか……うん。それは判るかな）

ネクロと戦うことはなのはさん達でも怖いと言っていた。それでも戦うのはこういう光景を護りたいからなんだなと思う、そして私もそうおもう。結構時間が掛かったけど見つけることが出来たみたい……ああいう、どこにもある光景を護りたいって私は思うなあ……

シエンがそんな事を考えている隣でヴィクトリアは

（お父様……）

ホームシック&父に会いたい。それだけを考えていたりする、そしてヴィクトリアはIS学園に変えた後1度帰国すると事になるのだった……

この日。私とオータムは龍也に呼ばれて書類を書いていた、結構書くところが多いのだが、それも当然。中途採用しかも専属でのスカウトとして、訓練を飛ばして六課に就職するための書類だからだ

「住む所と仕事を用意してくれるって言うのは、嘘じゃなかったのね」
「私は嘘は言わんよ」

からからと笑う龍也。差し出された紙は雇用契約書なのだが、これがかかなりの破格だ。要約すると

住む所として提供されるのは、街の一等地の高級マンション
魔法の適性がないが、PC系の操作に長けているので情報を集める部隊のロングアーチへ所属。オータムはアサルトで制圧等の任務についてもらう

交代制で夜勤もありだが、福利厚生も充実している。そして給料は「年間1100万ってマジで?」

オータムが目丸くしながらそう言う。私は1800万、はつきり言おう。予想の4倍以上の給料だ

「危険手当とかもあるからそれくらいだぞ? ヴァイスとか危険手当とかで1000万行ってるし」

龍也がそんな事をいいながら窓の外を見ると
「ぎゃああああ……」

誰かが悲鳴と共に空を舞っていた、思わず隣のオータムと絶句している

「あれがヴァイスだ。八つ当たりされたんだな」

八つ当たり!? それだけなの!? いろいろと話を聞いていたが、まさかここまでとは思ってなかった。どの道元の世界に帰ったところで、タスクに追われ、ネクロに狙われ続ける毎日だ。だからここで暮らした

ほうがいいのだが

(スコール。あたし達は大丈夫なのか?)

(だ、大丈夫だと思うわ)

どうも不安が消えない。大丈夫なのだろうか、最後のサインの段階で止まっていると

「大丈夫だ。あれはスキンシップのような者だからな」

笑いながら言う龍也。あれでスキンシップ……生死の境を彷徨う事になるだろう。正直サインはしたくないというのが本音だが、どの道私とオータムには選ぶ道はこれしかない。私とオータムは覚悟を決めてサインをし龍也に手渡した

「ん、確かにじゃあまずはこちら」

机の上に置かれた鞆。置いたときに大きな音はしなかったけど……中身はなんだろう?」

「当面の暮らしに必要な物はそれで集めてくれ、車が必要なら言えば貸すから」

あ、お金? 給料の前借ってことね、鞆を受け取る。かなりの重量に少し驚きながら

「ありがとう。気前がいいのね」

「明後日には帰るから、それまでだな」

そう言われて気付く。一週間って言うのは本当にあつという間だった。だけどこの一週間はとても有意義な物だったと思う

「ネクロに勝てるかしら?」

部屋を出る間際にそう尋ねると龍也はにやりと笑い

「勝つき。絶対にな」

揺らぐ事の無い自信。これがもしかすると龍也の強さの秘密のかもね、私はそんな事を考えながら、龍也の執務室を後にしたのだった……

なお渡された鞆の中身は現金で500万入っており、魔導師の金銭感覚はおかしいと思ったのだった……

「えーと、これはここですか？」

前にティアナさん達に買ってもらった、デバイスキットを組み上げるのはISよりも難しかった。デバイスコアというパーツの調整に。基盤のハンダ付け……言い出せばきりがなくらい難しい作業が多かったが

「そうそう。そこでボルトを締めて溶接して」

自分の作業をしつつ、私とエリスの面倒を見てくれているティアナさんのおかげで、半日で何とか完成間近までこぎつける事ができた
「ありがとうございます、もう少しで完成ですね。ティアナのおかげです」

エリスが最後のボルトを締めて、道具を片付けてながら言う
「簪もエリスも基礎が出来てたからね。私の教えることなんて殆どなかったわよ」

謙遜してそう言うが、基盤の組み上げやプログラミングを覚えてくれた。ティアナさんがいなければとてもじゃないが、ここまで組み上げる事はできなかっただろう

「これはナイフなんですか？」

組み上げてきて、形が見えてきたのでそう尋ねると

「そうよ。護身用のナイフ形デバイスよ。魔力量で刃を調節できるから、ナイフじゃなくて剣みたいに使うことも出来るわね。簪とエリスは変換素質があるからそう言う攻撃も出来るわよ」

そうなんだ。完成したら搭載してみよう。効果は薄いかもしれないけど無いよりはましなはずだから

「大丈夫よ、それだってある程度はネックと戦えるんだから心配ないわ。それよりISだっけ？そっちの慣らしもしておいたほうがいいわよ」

ティアナさんの言う通りだ。改修したヤタガラスも式式も出力が凄く高い、慣れておかないと

「続きは夜にしましょう。ここまで来たら完成は近いから心配ないわ」

そう笑うティアナさんに言われて、工作室を後にする

「行こうか？今なら訓練やっつてると思うよ」

今の時間なら間違いない訓練をしているはず。だから行こうと言うと

「ですね。もうじきI S学園に帰るんです。思いつきり訓練できるうちにおきましょう」

一週間は長いようで短い、もう明後日には帰らないといけない。そう思うと寂しいと思うけど

(この経験はとっても良かった)

違う世界があつて、違う文化がある。この経験は誰にも言えないけどとっても貴重な経験だ。だから

(ネクロとの戦いが終わったらまた来たい。またこの人と話したい)

だけどその為には戦って勝つことを覚えないといけない。だから今は今時分の出来ることを全力でする、私とエリスは少し駆け足で訓練場へと向かったのだつた……

訓練の後でシャワーを浴びて着替えにロッカーにいる時

「はぁ疲れましたわ」

深く溜息を吐くセシリア。日課になっている訓練だが、I S学園の物とは比べるまでもなくハードだ。だがその分色々と学べる事が多いので決して苦しいだけではない

「皆同じなんだから泣き言言わないの。それにセシリアの訓練が厳しいのは、ヴィクトリアさんの武器を自分ののに搭載して欲しいって言ったからでしょ？」

そう。セシリアは本来ヴィクトリアのI Sに搭載されるはずの、実態とレーザーブレードを兼ね備えたブレード「アロンダイト」を搭載して欲しいと言い出したのだ。ネクロ相手では火力が足りないことを危惧していたセシリアが珍しく我がままを言ったのだ。ヴィクトリアは快くそれを譲ったのだが、セシリアには使いこなすだけの技能がなかった。それで剣の扱いに長けているシグナムにマンツーマン

で訓練をつけてもらっているのだ
「うっ、はい……自業自得ですね」

なおシグナムの訓練は厳しいが、そのおかげでセシリアの剣術の能力は桁違いに上昇している。そしてクリス達の訓練は昼まで終わりだが、私達の訓練は自由参加だが、昼と夜もある。自分で望んで訓練に参加したが体力の消耗は激しい

「しかしそのおかげで大分馴れたじゃないか。改修されたISにも」
「確かに。前まではまるで暴れ馬のようだった」

外見は同じでも何もかも違っていた。今までと同じように動かせば加速がつきすぎて、壁にぶつかったり。銃の反動を間違え背中から壁に追突したり……例を挙げればきりが無いほどだ。だけど朝・昼・晩の訓練で漸くなれてきた

「模擬戦とかもできるかもしれないね」

髪を拭き終えたシャルロットがそう言う。確かになのは達に訓練をつけてもらうのも良いが模擬戦も良い……とここまで考えた所で
我に帰り

「駄目だ。それは禁止されてる」

あつと言う筈と鈴。明日あたり模擬戦をしようと話していたからだ

「出力向上と武器の強化に伴い。監視下もしくは、なのは達以外との模擬戦は禁止されている」

治せるが怪我をする可能性が高いのでやめておけ。と言う事を龍也に言われているのだ

「そっかーそうだったわね。じゃああたしは明日はノーヴェに相手してもらおうかしら」

「では私は、デイドだな」

殆ど同じ歳なのに勝てない。なので明日こそはと息巻いている2人にシャルロットが

「でもさ。明後日の夜には帰るんだよね？僕は折角だから皆で観光にもう1度行きたいね」

確かに……折角だから皆で遊びたいなあと話をしていると

「心配ない。兄様はちゃんと用意している」

「わ!?」

突然聞こえた声に驚きながら振り返るとオットーが髪を拭きながら。

「明後日バーベキューをしてくれるって、それにお土産とかを買いに連れてってくれるって。だから心配しなくていいよ」

そう呟いて出て行くオットー。独特な雰囲気を持っているのは知っていたが、さすがに驚いた。完全に気配を消していたからだ、だけどこの言葉で心配事はなくなったわけで

「では私はやはり、セツテだな。1度だけで良い勝っておきたい」

「僕はそうだねーチンクさんかなあ。あの人凄く応用力が高いから」

そしてそれぞれにそんなはなしをしながら食堂に向かった。腹も空いているし、何より疲れた。食べて取りあえず寝よう……

なお夜に大量に食べると太るが、龍也達の訓練は半端じゃなく厳しいので、体重はむしろ減り良い感じになっている。鈴にいたっては胸のサイズが増えたと言って喜んでいたので……

「はぁー疲れた」

朝からぶつ通しの訓練で正直へとへとだ。だけど

(強くなってるって実感できてる)

剣筋を見ることが出来なかった。ルシルファアの剣筋も当たっているのは変わらないが、直撃は避けられているし、良い感じだ。思わず握り拳を作っていると、突然膝の上に座ってくるマドカ

「一夏。髪といて」

首からタオルを提げて、ピンク色のパジャマを着ているマドカは後ろ手に櫛を渡してくる

「はいはい。動くなよ」

平常心を心がけながらそう言う。膝に当たる柔らかい感触とか、シャンプーの匂いは無視しろと自分に言い聞かせる。妹を意識するなんて変態もいい所だ。俺はノーマルなんだと言い聞かせながら、動

くなよと言うとマドカは

「うん」

はやてさんの入れ知恵なのか、こうして最近は良くマドカは俺に甘えてくる。表情も少しずつだけど顔に出るようになってきてるし……良い傾向だと思う。それに素直になってきているので正直可愛い妹と思えるようになってきた。

「ん。終わり」

肩幅なので整えやすいと龍也に言われて教わったが、これで良いだろうかと思いつながら言うと

「駄目だ、まだ毛先がぼさぼさ」

ん？んーそうなのか。じゃあ毛先を気をつけて梳こう。髪はデリケートらしいのでゆつくと梳いていると

「くすぐつたい」

「え？えーと駄目なのか？」

ここで怒るとマドカがまた鉄面皮になるのでは？と思いつつ言うとおりにしたほうが良いと思いつねると

「いや。その感じで良い、だがもう少し強めが良いな」

入浴を終えたらしく、部屋に戻ってきた千冬姉は首からタオルを提げたまま。俺の隣に座り

「マドカの後は私だな」

「なんで!？」

「姉さんを仲間はずれにするのか」

違う、仲間はずれとかそういう問題じゃない。弟が姉の髪を梳くことがおかしいんだ、声を高らかにそう言いたかったが。ぐつとこらえて

(いや、ここは俺が大人になろう。千冬姉も髪を梳けば納得してくれる。ただの姉弟のスキンシップだ、問題ない)

「判った。マドカの後な」

とりあえず言う事を聞いておけば開放されるだろう。そんな事を考えながらマドカの髪を梳いた後に千冬姉の髪を梳いたのだった

……

く20分後く

(どうしてこうなった!?)

左隣マドカ。右隣千冬姉。なおマドカは手錠で俺の手首と自分の手首を繋いでいる。少し、ほんの少し選択肢を間違えたらこれだ

「川の字で寝る。一夏が真ん中だ」

その言葉に即座に逃げ出そうとしたが、ボデイブローを喰らい悶絶。その間にマドカは布団をセット済み。抜群すぎるコンビネーションに思わず涙が出た、そしてそのまま逃げることも出来ず布団に寝転がされ今に至る。どうしたものかと考えていると

(んーん?)

不思議と逃げたいと思わない、それ所か安心する。これが家族のあり方なのかもしれない、いやブラコンとかは駄目だと思うけど。それでもやっぱり家族なんだなあと思う

(偶にはこういうのもいいかもな……おやすみ。千冬姉、マドカ)

俺はゆっくりと目を閉じて眠りに落ちた。寝るには少し早い時間だったけど、この安心感が余りに心地よくて、俺は深い眠りへと落ちたのだった。この日は不思議と悪夢を見ることはなかった、暴走してから見るオレの夢。牢獄の中から俺に手を伸ばしてくる俺の夢。それを見ることもなく、俺はとても穏やかな気持ちで眠ることが出来たのだった

なお翌朝。マドカと千冬姉に両サイドから抱き締められ、胸の感触と女性とは思えない膂力で締め上げられ、三途の川に叩き込まれると思いのしたのだが……なんかこれでも良いやと思えたのは何だろう……?

ちなみに俺は起こしにきた、箒と鈴によって救助されたのだが、手首と肩を脱臼しており。シャマル先生の元へと運ばれたのだった……

おまけ

その頃IS学園では

「あ、かんちゃんからメールが来てる♪」

旅行に一緒に行けなかった本音が嬉しそうに笑いながら、ベッドに寝転がり携帯を見る

「たつやんの別荘なんだ〜大きい所だねえ〜それにこのワンちゃん可愛い♪」

かんちゃんの隣で嬉しそうに尻尾を振る灰色の子犬と大きな青い犬の写真に頬を緩める。だけど

「この犬なんだろう？雑種？」

見たことのない犬種に首を傾げる。ずんぐりした体格に短い手足と尻尾。見たことのない犬種だ。もう片方は体が大きくて野性味に満ちてるし……と首を傾げる本音は

「帰ってきてから聞こう〜元気そうで安心安心♪」

幼馴染である簪だけ誘われたので断念したが、そこはやはり幼馴染と一緒に出かけたかったに違いない。だけど満面の笑みに安心した本音は携帯に

『楽しそうで良かったね〜帰ってきたら思いで話をしてね？ P S その犬なーに？』

とメールを打ち返信したのだった。なおこの犬は言うまでも無く

「キュー？」

「ちよつと大人しくしててね？」

「キュウキュウ♪」

簪達がクラナガンに居る間に懐かれたドラキチであり、いくらなんでもドラゴンの写真は駄目だろうと言うことで幻術で誤魔化した物だったりする。そしてこの写真は

「おすわり。できるっ？」

「キュー？」

「やっぱ無理ですか？」

「んーお手くらいなら、教えられるかもしれない」

なお簪は結構犬好きで、犬に世話としつけは得意だった。それを生かしドラキチに芸を仕込もうとしていたのだが

「キュー？」

おなかを向けてころころと転がっているドラキチを見て

「少し難しいかもしれない」

どらごんに犬の芸を仕込むのは難しいと冷や汗を流している時の写真だったりするのだった。

なお簪の努力の成果でドラキチはなんとかお手とお座りを覚えるのだった……

第100話に続く

第100話

第100話

長いようで短かったクラナガンでの暮らしも今日で最後か……今まで世話になった部屋を掃除しながらそんな事を考える。

(色々あったなあ……とても一週間とは思えないな)

千冬姉とマドカでは部屋を掃除する所か、より汚くするので一人で掃除している。はたきで埃を払いながら窓の外を見ると、庭でドラキちとかと遊んでいる千冬姉とマドカの姿が見えるのだが……

「いっくよー!」

「よーし!来い」

てーいと言う掛け声から放たれた剛速球を受け止めている千冬姉。そして

「おお、凄いなドラキちは」

「キューッ!」

マドカを背中に乗せて走り回るドラキち。なんとというかすごい光景だ。特に千冬姉の変化が凄い、弟の俺でも笑っている顔なんて数えるほどしか見たことがないのに、この家では良く笑っている。凄まじきかな口りっ子パワー。鉄面皮の千冬姉を笑うように変えてくれたリヒトちゃんトリインちゃんにはなんと礼を言えば良いのか判らないほど感謝している。そんな事を考えながら部屋を掃除しているとここ一週間の事ばかりを思い出す

龍也に木刀でぼこぼこに殴られて

ルシルファーに素手で気絶するまで殴られて

龍也とルシルファーにフルボッコにされて

(あれ?俺苛められてる!?俺苛められてるのか!?)

訓練の事を思い出すとどうしても叩きのめされたことしか思い出せない。あのイイエガオで拳と木刀を振るう龍也とルシルファーの姿が脳裏に焼きついている。これは間違いないトラウマだ、もっと楽しい事を思い出せ!色々あっただろう!?俺!はたきを机の上に置

いて考え込む

はやてさんと話しこむ度に笑い方が近づいていくマドカ
ひそひそと俺を見ながら話をする鈴とセツテさん

明らかにやばそうな色をした薬物っぽい者を手にして笑っている
シャル

訓練中のトラブルで箒の上に落ちて、偶然にも胸を掴んでしまい。
マドカ・ラウラ・シャル・鈴によつて三途の川送りにされた

朝起きたら両手が手錠でベッドに繋がれていた

「いやいや。まだ何かあるはず！まだにかあるはずだ！」

必死に楽しい思い出を思い出そうとする。そして脳裏に浮かぶの
は

猫の着ぐるみを着せられたドラキちに突撃され吹っ飛ばされ

龍也の家のプールで泳いでいたら、ドラキちに後ろから押し掛から
れ沈んだ事

廊下を歩いていたら、そりを引いてきたドラキちに突撃され吹っ飛
ばされた事

「なんでこんな事しか思い出せない!？」

どうしてこんなことしか思い出せない!？その事に絶望した、どうや
ら楽しい思い出よりも、生死の境を彷徨ったことの方が多すぎて思い
出せなくなっているようだ

「なにやっつてるのよ？一夏」

思わず蹲り頭を抱えていると鈴の声がして振り返ると

「お前こそどうしたんだ？それに皆も」

鈴だけではなくシャルや箒も私服姿で俺を見ている。どうした？
と尋ねるとシャルが

「龍也が最後までいい好きに遊んでくるといいってね。この街のレ
ジャー スポットとかお土産を売っている良い店とかを教えてくれた
んだよ」

最終日は龍也がまた案内してくれると言っていたが、俺達自身で考
えて移動してみろって言う事なのか？それよりもそんな話をしてく
れていたことすら忘れていて

「すまん、直ぐ着替える」

出かける準備を何もしていない、早く着替えるから待っててくれと声を掛けて鈴達を閉め出す。はやてさんの影響か何か悪い方向に進化しているので覗かれる様な気がしてならない。手早く着替えて部屋の外に出ると

「何してる？・鈴」

「ま、待ってただけー」

案の定鈴が1人だけそこにいた。1番悪影響を受けているのは間違いない。鈴だなど確認しながら、俺は外で待っている筈達と合流するために歩き出したのだった。

「遅いぞー夏」

どうも庭で遊んでた千冬姉は龍也に頼まれて先導役だったようだ。どうも俺だけが完全に忘れていたようだ

「ごめん。ちよつと忘れてた」

素直に謝ると千冬姉は仕方ないと呟いてから
「では行くぞ。夜まで好きにしていって良いそうだからな」

地図を持って歩き出す千冬姉の後について俺達は龍也の家を後にしたのだった

龍也に渡された地図とお勧めスポットと書かれたメモを見ながら
「近くに小物やと本屋とかがあるそうだな。どうする？」

クラナガンはかなり入り組んでいるそうで、ウィンドウショッピングで迷子になる可能性があると言っている。だから近くの店を教え
てて行くか？と尋ねると

「んー本屋は別に俺は良いかな。筈とかは？」

着いて来ているのは一夏といつもの面子だ。簪や楯無は龍也の家と六課で考えたいことがあると言って残っているし、シエンやヴィクトリアはドラキちとリン達と遊んでいるのでここにはいない

「私も余りこの世界のほんに興味はないな」

「僕もだよ。この世界のほんはあんまりね」

そう苦笑するデユノアと篠ノ之。その意見には私も賛成だ、この世界の本を見たが大概がこの世界でしか通用しない料理の本だったり、この世界の歴史書が大半だった。ファツション雑誌とかもこの世界の物で私達の世界で考えるところとおかしい物ばかりだ。一応は聞いてみたが予想とおりの反応だった

「ではどんな場所に行きたい？」

そう尋ねると一夏達はうーんと唸る。こうして観光でうろうろ歩いているが折角観光に来ているのだから色々見てみたいと思うのは当然だろう

「シヨップングモールとかはないのか？姉さん？」

マドカの問い掛けに地図とメモを見て場所を確認する。近くもなすが遠くも無いそんな場所に一軒ある、勿論龍也に案内された場所とは違う店だ

「ではそこに行くか？昼食もそこで済ませて土産や服を見る、これどうだ？」

異議なしと言う感じで頷く一夏達を先導して、近くのバス停に向かい。私達はシヨップングモールへと向かったのだった

(かなり広いな)

最初に龍也に案内されたシヨップングモールと同じく魔法を使っているのか外見より遥かに広い。つくづく魔法世界と言うのは規格外だなと改めて実感していると一夏が

「ここなら迷子にならないし、いざとなれば携帯で連絡を取れるし皆好きな店に行くのはどうだろう？」

む？だがそれだと一夏の監視が出来ない。だが何時までもこうして私が連れて歩いていたら観光の意味がないと判断し

「いいだろう。では昼前に1階のカフェに集合だ」

集合場所を決めて一夏達と判れた。篠ノ之とかが一夏といっしょに回ると喧嘩すると思っていたのが、予想に反してバラバラで行動する篠ノ之達。どうもあいつらもあいつらで見たいものがあったのだろう。私はそんな事を考えながらうろうろとシヨップングモールを歩き出したのだった……

今頃千冬達は観光かしら？そんな事を考えながら使っていたラボの機材を片付けていると

「良かったんですか？観光に行かなくて」

龍也君がラボに入ってきてそう尋ねてくる。私は1度片付けの手を止めて

「まあね。それに一週間ここにいたし、結構感慨深いのよ」

未知の科学に私の世界よりも数段進んだ文明。正直言って興味は尽きないそれに

「龍也君のおかげで面白い武器も作れたしね。大満足よ」

龍也君が投影で見せてくれた色々な伝説上の武器。それを見てエリスちゃんやユウリといっしょに作るのは結構楽しかった

「アロンダイトですね。セシリアが搭載したいというのは予想外でしたけどね」

「それは私も同じよ」

アロンダイト。レーザーと実態の二種を持つブレード。破壊力もありリーチもある、ヴィクトリアのISに搭載する予定だったんだけど、ヴィクトリアが辞退したし、セシリアが是非と言うのでブルーティアーズに搭載した。正直あんまり相性が良くないと思うんだけどねと思いつながら椅子に腰掛けるとCDを渡される

「これは？」

「ISの改修の方法、それと独立式パッケージの凶面の簡略化の方法ですよ。これで量産できますよ」

量産。何故そんな物を渡すの？私が首を傾げていると龍也君は

「一夏や箒のISの外見は変わってないですが、中身は既に第4世代と言えるほどに強化されています」

私やスカリエッティさん。そして龍也君にはやてさんのおかげで最新式のISだと言えるだろう

「1週間でここまで変わっていいは委員会や国もうるさいでしょう、だからこれをもって帰って発表してください。最新式のISの改修

方法としてね」

そう笑う龍也君。私は手の中のCDを見ながら

「私の名前を売り。更に一夏君達への要らぬ疑いを向けさせないために？」

「その通り。話が早くて助かりますね」

今IS委員会はネクロの事。そして亡国企業の事で疑心暗鬼状態になっている。龍也君とはやてさんが少し精神操作をしてくれたそうだけど、そこまでは変わらないと言っていたから急に強くなればいけない疑いが掛かるだろう

「よく考えてるのね？」

「それなりには、お願いできますか？」

これは私に矢面に立って欲しいというお願いだ。一夏君達を護るために……私は少し考えてから

「OKよ。任せて」

私は日本政府にもドイツ政府にも顔が広い。この改修案と独立式のパッケージを発表し、テストベットとしてセシリア達のISを回収したと言えば名目は立つし、彼女達の安全も確保できる。あとついでに私の名前が売れる、まあ元々フリーのIS技術者でそこそこの名前が通ってるんだけどね

「とりあえず試作型のパッケージは完成したし、これも一緒に発表するわ」

ヤタガラス専用パッケージと、フレイア達の試作型もできた。これをとりあえず発表しよう

「AIは搭載出来てないのにいいんですか？」

最終的にはAIを搭載して、独立稼動により操縦者をサポートする事を目標にしているが、今はそこまで完成してはいない。だけど

「試作つて言えばいいのよ。最終的にAIを搭載するで押し通すわ」
それにAIを搭載する鈴達のパッケージもここで開発してくれてるしね。心配は無いわよと言うと

「まあ私達も戻るのでフォローはしますけどね」

「また学生するの？」

私がそう尋ねると龍也君ははいえと言って真剣な顔をして

「夏休み中に蹴りをつけます。学校が始まればより危険が増す。短期決戦を仕掛けます」

短期決戦って……どこに隠れているかも判らないネクロをどうやって見つけ出すつもりなの？

「探す方法はいくらでもありますよ。ネクロは既に束から必要な情報は手に入れました、何時までも自分の存在を知る人間を生かしておくと思いますか？」

その言葉に直ぐには返答は出来なかった。そんな簡単なことを尋ねてくるとは思えない、少し考えて自分の中で情報を纏めて

「人間だから駄目ってこと？」

私がそう呟くと龍也君は正解と手を叩き

「ネクロは束を切り捨てる。だけど自分の手は汚さない、奴らは一言言うだけで1部の馬鹿が動く。束の居場所を言うだけでね」

篠ノ之束は全世界から追われている。それは自分達の陣営に引き込みたかったり、薬漬けにして自分達の言う事だけを聞く人形にするためにね、人間に襲われ、束は殺意を抱く。その殺意はネクロにとつては好都合な物。ネクロの目的は……篠ノ之束のネクロ化だ」

篠ノ之束のネクロ化。もしそうなたら最悪だ。あの頭脳が人間を殺すためだけに使われると考えると、勝つのはますます難しくなる「防ぐ方法は？」

「考えてありますよ。軍隊でも動けば直ぐに動けます、だから私は行動待ちですよ。ネクロの行動が判らないなら、人間の動きで考えればいい」

「けっこう悪いこと考えるのね？」

「当然。正しいだけじゃ……ネクロには勝てないですよ」

そう笑ってラボを出て行く龍也君の背中を見ながら私は

「若いのに色々と背負ってて大変ね」

千冬と同じ歳なのに……そう思うと少しだけ不憫に思えた、だけどこれで少し判った。スカリエツティさんが彼を手伝うのは、きつとその重荷を少しでも軽くしてあげようと考えているからだろう

(良い友達を持っているのね)

私は心の中でそう呟き、使っていたラボの掃除を再開したのだった
……

ショッピングモールで買い物を終えて、夕食の時間に帰って来いと
言われたので龍也の家に帰ると

「おう、おかえり。楽しかったか？」

にこにここと笑う龍也。その後ろでは5つのバーベキューセットが
並んでいる

「え、えーと？」

信じられない手際で肉を引つ繰り返し、お皿に盛り付けている龍也
を見て、若干の思考停止に陥っていると

「ん？バーベキューをするって言ってなかったか？」

いや聞いてたけど、こんな光景で出迎えられると正直驚く。箒達も
同じ様子だ

「あーむ♪」

「むふー♪」

そしてちびっ子軍団はバーベキューを食べて幸せそうに笑ってい
る。その光景を見ていると腹が鳴った、俺だけじゃなくて箒達の方か
らも聞こえた。思わず振り返ると箒とシャルが俯いていた、色々と買
い物をして街を歩いて空腹だったようだ

「何してる？早く手を洗って来たらどうだ？美味しいぞ？」

「そーだよー！鈴も早くおいだよ。海老とかの殻も向いてあるから食
べやすいよ」

既にバーベキューを食べているシエンさんとヴィクトリアさんを
見た鈴が

「もうー何で先に食べてるのよー！ほら早く手を洗いに行つてあたし達
も食べるわよー！」

そう言つて家の中に走っていく鈴の背中を見て俺達は苦笑しながら

ら、家の中に入り手を洗って再び庭へと出たのだった
「おお、うまつー！」

外で焼いているからか、それともこの雰囲気のおかげか余計に美味く
思える。いや実際肉は高級な肉だし十分美味しいのだが、更に美味しく感
じる。龍也は器用に5つのバーベキューセットに木炭を足して。肉
と野菜を焼いて次々とちびっ子に配りつつ、自分も食べているこうい
うのに慣れているんだろうな

「美味しいわね。こういうのも悪くないわね！」

「キャンプとは違うが、確かにいいな」

楽しそうにバーベキューセットから肉と魚をとって食べている箒
達に

「おかわりー♪」

「もつとー！もつと♪」

空皿を抱えてお代わりお代わりとはしゃいでいるちびっ子たちを
見ていると凄く安心する。これが平和って言うやつなのかもしれない
い

「これが龍也が最後に見せたかった物かもしれないな」

いつの間にか俺の隣にいた千冬姉は楽しそうにはしゃいでいるち
びっ子たちを見て

「平和と日常。それは戦って護れる物だ。その大切さを教えてくれよ
うとしているのかもな」

そう笑う千冬姉。確かにそうかもしれない、ネクロと戦う理由とし
てそれは十分すぎるほどになるだろう

「にいちゃん。お酒飲んで良い？」

「飲みすぎるなよ。お前もなのはもフェイトもな。ん、ほれ簪魚焼き
あがったぞ」

「あ、ありがとうございますー！」

全員の話聞きながらてきぱきと作業している龍也を見ながら、俺
は

(俺も今度こそ……誰かを護れるようになりたい)

ISが暴走してマド力を殺しかけた。そして何時またオレに身体

を奪われるか判らない。それでも俺は誰かを護れる人間になりたい……そんな事を考えていると千冬姉に頭を撫でられ

「その気持ちがあれば大丈夫だ。その気持ちを忘れるなよ」

「判ってる。ありがとう千冬姉」

俺はもう忘れない。何のために剣を取るのか、そして何をなすのか……この光景をしつかりと瞼に焼付けた。俺が護りたいと願う者を忘れないために……

「あ、そうだ千冬姉。これ」

振り返り忘れるところだったと思いながら小さな包みを千冬姉に手渡す

「これは？」

不思議そうな顔をして尋ねてくる千冬姉に俺は笑いながら、首から提げているペンダントを見せて

「俺とマドカと千冬姉でおそろいのペンダント！大切にしてくれよな！」

折角だからとマドカといっしょに選んで買った。少し割高だったけど、俺とマドカで半分ずつ出せば買えた。正直こんな事は初めてだったので、とてもじゃないけど千冬姉の顔を見ることは出来ず

「俺も食うぞ。入れてくれ」

「ったく遅いのよ。馬鹿。ほらこつちきなさい。今焼いてるところだから」

トングで網の上に肉を乗せながら、自分の隣を叩く鈴。それに気付いたら裏が

「待て鈴。こつちのは既に焼けている、だからこつちに来い」

ちよつとした口論になる。鈴とラウラの間に座る

「喧嘩しないで仲良く食おうぜ。折角なんだからよ」

俺はそう声を掛けながらラウラの前の網の上から鶏肉を取り頬張ったのだった……暫くここで話したり食べたりしたら立ち上がり

「セシリアとなりいいか？」

「い、一夏さん!?!どうぞ！どうぞ座ってくださいな！」

むつとする箸やシャル、それにマドカに一瞬肝を冷やしたが、ち

びつ子も居るし、火も近くにあるので誰も攻撃してこない

「ちやんと食べてるか？」

「ええ。私は少しずつ頂いております」

またセシリアと話をしているしよに物を食べた後に立ち上がり、次は誰の隣に座ろうかなと考えながら俺は皿を片手に歩き出した。

折角だから全員と話として食べよう。これも良い思い出になると思ったのだった……

1人残された千冬は渡されたペンダントを見て

「悪くない……」

お揃いのペンダントを身につけ、そう笑っていたのだった……

そして次の日の朝。俺達はクラナガンを後にした。長いようで短かった1週間。だけどこの1週間でかぞえきれないほどの大切なことを知ることが出来たと俺は思うのだった……

おまけ

「お嬢様からメールが来ていますね」

龍也君が実家に帰るそうで、一夏君達と観光に行っているお嬢様からのメールに笑みを零す。あんまり自分の近況のことを話してくれないお嬢様の性格を考えるととても珍しい事だと思いつながらメールを開く

「あらあら……」

メールに添付されていた写真を見て、思わず苦笑してしまう。そこにはピースサインのお嬢様の隣で不機嫌そうに顔を歪めているユウリの姿が写されていた。メールの内容を見ると

「いい夜景ですね。どこでしょうか？」

下には光る街並みと空には満天の星。多分誰かにとって貰ったんでしょうけど、この場所はどこでしょうか？そもそも

「龍也君の実家ってどこなんでしょうね？」

代表候補生の面々にツバキさんに織斑先生。とかなりの人数のはず……それだけの人数を招待できる……

「龍也君はもしかすると良い所の人なのかも知れないですね」

思い出して思うのだが、龍也君は歳の割りに落ち着いているし、社交性もある。そして何よりも広い観点で周りを見れる人間だ。帝王学でも学んでいるのだろうか？と思うほどに龍也君の考え方は大人びていた

「……戻ってきたら聞いてみますかね」

虚は夢にも思うまい。年下だと思っっている筈の龍也が実は自分よりも年上で、何千人と言う人間の上に立つ人間と言うことを

「えーとじゃあ。お嬢様にはこれで良いですね」

『ユウリさんと仲良くしてください。喧嘩などをなさらないように』

ユウリさんもお嬢様と同じく裏の社会を知る人間であり、人付き合いが苦手な部類の人間だ、それに対してお嬢様は多少強引にでも人の心の中に踏み込んでいく性格だ。しかしユウリさんはそう言うのは多分嫌うので気をつけるようにとメールを打ち

「さてと、そろそろ寝ましようか」

まだ夏休みは残っているが、時間にルーズになつては駄目だ。長期休みであったとしても規則正しい生活を送らなければ。私はそう考え布団に潜り込み目を閉じたのだった……

「あー虚ちゃん。ナイスアドバイス」

年上の幼馴染からのアドバイスを見た楯無は、軽く冷や汗を流して自分の行動を考える。ユウリの話聞いてから調子に乗っていたかもしれない

「うん。もうちよつと接し方を考えてみよう」

初恋だからどう行動すればいいのか判らない、乙女な楯無さんは、日記を見返し、そしてはやて達に相談に乗って貰うために自室を後にしたのだった……

第101話

第101話

闇よりも深いヨツンヘイムの中に響き渡る。闇その物の粘りつくようなこの雰囲気とは全く似合わない、ヒステリックな女の怒声

「もう最悪ーなんでこの時に動けないのよー！」

ヨツンヘイムの中に響く怒声イナリだ。龍也の仕掛けていた魔力爆弾で全身が麻痺して動きたくとも動けない状況に、苛々だけが募りこうして怒鳴り散らしている。壁に背中を預けて目を閉じていた狼の頭部を持つネクロ。アヌビスはうつすらと目を開き

「やかましい。そうやって動いている暇があれば、少しでも魔力を蓄えろ」

守護者の魔力が散布されたことで思うように魔力を集めることが出来ず、身体が麻痺しているのだから。少しでも魔力を蓄えて動けるようになるべきだろうと思いつながら言うといナリは

「うっさいーアヌビス！ってあああ……気持ち悪い」

八つ当たりするかのように我に怒鳴りかかってきて、へたり込むイナリ。全然学習しない奴だ。守護者の魔力が散布されてから2日。毎日毎日同じことを言っただけ飽きないのか？と呆れていると

「イナリ。アヌビスの言うとおりですよ、今は身体を休めなさい」

マントを翻しながら部屋に入ってきたベリト様の言葉にイナリは「ベリト様……ううーだけどあの兎を早く殺してネクロにしたほうが良いじゃないですか」

我らよりも魔力量の多いベリト様はぎこちないながらも動くことが出来ていた。こうして騒いでいるイナリを鎮めに来てくれたようだ

「それは私も理解しています。守護者達が居ないうちに準備を整えたんですからね、

守護者の魔力反応がこの世界から消えた。動くなら今のうちだが、この身体では思うようには動けない。ISなど万全の状態なら取る

に足りんが今の状況では負けはしないが勝ちも出来ない。まずは魔力の回復が最優先だ

「ラクシユミは精神リンクで世界に散らしていた、分身体で動いていきますし、ヴオドオンが適当に人間を捕まえてきてくれます。少しずつ魔力を回復させるのです、良いですね」

ベリト様にそう言われたイナリはしぶしぶと言う感じで頷き。目を閉じた、魔力の収束に集中するためだろう

「所でペガサスの奴はどうしたのですか？」

守護者の魔力がヨツンヘイムに散布された時に、ヴオドオン・ペガサス。そしてハーデス様はいなかった。ハーデス様は好き勝手に人間を殺してベエルゼ様の魔力を回復させるために魂狩りをしているのだろう。ヴオドオンはベリト様の命令で我達に与える魂を狩りに行っている。あいつは人間と同じ姿をしているから魂狩りがしやすいからだ。だがそれを言えばペガサスも同じはずなのに、ここ数日姿を見てない。それが気になり尋ねると

「私も見てないので何とも言えないですね。ペガサスは魂狩りには余り積極的ではないのでそうきにすることも無いでしょう。ベルフェが動けるようになれば早く回復できるようになります、それまでは大人しくしててください」

そう言っ出て行くベリト様の背中を見ながら我はは

(なぜ何も言わない)

上位ネクロである。ベリト様からすれば命令を聞かず動き回るペガサスの存在は面白くないはず、なのに何故ペガサスを自由にさせているのか？

(何か理由があるのか?)

ベリト様達がペガサスを自由にさせているのは何か理由があるのか？その理由を考えようとしたが

(ぬっ……限界か)

意識が途絶え掛ける。自身の身体を維持するだけの魔力がなく、睡魔が襲ってくる。人間の眠りと違ってネクロの眠りは長い。魔力がある程度回復するまでは目覚めることはない。我は泥のように深い

眠りへと落ちていったのだった……

ペガサスの事を気に掛けていましたか……アヌビスと話をした後。
ヨツンヘイムの動力室に向かいながら

(中々頭が切れる)

イナリは外見上は大人の女性と言う感じだが、その実痲癩を起こしやすく子供っぽい性格をしている。アヌビスは生粋の戦闘者のネクロだ。ペガサスを自由にさせている私達に疑問を感じたのだろう

(とは言え御せないのが現実ですからね)

ペガサスは何処かの世界で拾ったネクロだった。人間からネクロに変化した極めて珍しい固体、指示も聞かず戦闘力も高い。だけど完全に心まではネクロになっていない。つまりいつ牙を剥くか判らない存在に必要な以上の情報を渡したくないのだ

「あの子達もまた眠りにつきましましたか」

自分達のオリジナルからISのパーツを奪ってきた。桜鬼達はまた眠りに落ちていて、外見こそ違おうがその本質は同じ人間。1つの世界に同じ人間は存在できない、桜鬼達は異物として認識され必要以上に魔力を消耗してしまったのだ。目覚めるのは恐らく1週間前後掛かるはずだ。そんな事を考えながら動力室に向かっていると背後から声を掛けられる

「私にはまだ動くなど言うのか？ベリト」

通路に背中を預けるネクロ。肩幅の黒髪に鋭い光をその目に宿したネクロ。この世界の織斑千冬がネクロ化した存在で

「ウイントヒルデ。ええ、申し訳ないですね。もう少し待っていてくれませんか？」

私がそう言うとうイントヒルデは面白くなさそうに眉を顰めて

「私は少しでも早く、一夏を手にするだけの力が必要なんだ」

狂気に満ちた目で私を見るウイントヒルデ。とは言えその一夏が居ないのだから出撃しても意味が無いのに、その苛々を晴らすために人間を殺したいと考えているのは判る。だが

(今ここで下手に暴れられると足が付く)

恐らく守護者はミッドチルダに居てもこちらの情報を集めているだろう。大規模殺戮とかをあれば私達が動いたと気付く。攻め込まれるわけには行かないこの状況で後始末を考えることの出来ない。ウイントヒルデを出すわけには行かない、ヴオドオンもハーデス様もそこところは理解していて、世界の紛争地に紛れ込み魂狩りをしている

「仕方ありませんね。ついて来てください」

「?まあいいだろう」

不機嫌そうな顔をしてついてくるウイントヒルデをヨツンハイムの動力室のラボに案内する

「これは……」

目の前にあるハンガーに下がったISを見てにやりと獰猛な笑みを浮かべる

「気に入ってくれましたか? 貴女のISの改修体「サラウンド・ノワール」です」

R・暮桜と守護者の所から奪い去った、ISの改修データを元にネクロコア・デクスコアの2つを搭載して、出力を倍以上に強化した事で従来の装甲よりも重厚な物を搭載し。武装もデバイスの情報を流用し強力な物になっている

「どうかしら? これで改修は6割。完成したら守護者相手でも互角に戦えるし、何より簡単に一夏を捕まえることが出来るわよ」

私がそう言うとうイントヒルデはふんつと鼻を鳴らして、私を睨んで

「狸め。私以外の機体も改修しているくせに」

「それは仕方がないわ。向こうも改修してるもの」

守護者達がクラナガンに帰ったのは恐らく改修の為。となればこつちも改修しなくては勝ち目はない。無論機体の性能だけで勝負が決まるわけじゃないけど、準備できるものは準備して置いた方が良いからだ

「だけど貴女のはあの子達の前よりも強力よ。元が違うからね」

外見をコピーしただけの桜鬼達と、最初から改修を前提に作っていたサラウンド・ノワールでは比べるまでもなく。サラウンド・ノワールの方が上だと言うと

「まあ良い。これが完成する頃には一夏達も戻るだろう。それまでは大人しくしていてやろう」

そう言っつてラボを出て行く、ウイントヒルデを見ながら私は（さてとこっちも作業を始めましょう）

まだ身体の動きは鈍いが動けないわけではない。少しでもヨツンヘイムの改修を進め、更に6機のISを改造する。やる事は山積みだ（この程度で私の動きを止めれると思わないことですよ。守護者）

確かに普通のネクロではこの状態では動くことも辛いだろう。だがあいにく私は普通のネクロではない、私は魔力操作に特化したネクロだ。身体の中に魔力を通して魔力で身体を動かす事が出来る。

（貴方の思い通りには行きません）

全てはベエルゼ様のために……私はこんな所で立ち止まって入れないのだから……

「ベエルゼ。気分はどうだ」

王座に腰掛けて魔力の回復に集中しているとハーデスに声を掛けられ、閉じていた目を開きながら

「大丈夫だ、問題ない」

私がそう言うとハーデスは不思議そうな顔をして

「これだけ守護者の魔力に満ちているのか？」

出撃していた面子が戻ってくると同時に起爆した魔力爆弾。そのせいでヨツンヘイムには今守護者の魔力が満ちている

「ああ、それもまたいい刺激だ。あの時敗れた私の未熟さを思いだせる」

私は1度LV3のときに守護者と対峙した。荒んでいて私達を倒す事だけを考えていた時の守護者だ。LV3、6体とLV1・2が15体の中くらいの部隊だった。あの時私は楽に守護者を倒せると

思っていた、だが結果は惨敗。デイランスによりネクロ化した守護者にほぼ全員が殺された。私は命からがら逃げることに成功した

(あの時ほど私の能力に感謝したことはない)

空間に関する能力を持つ私は、自身のみをなんとか違う空間に逃げることに成功し守護者からの攻撃から身を護ることができ。こうしてLV4にまで進化する事が出来た。だが

(あの時の敗北の屈辱。未だに忘れることなどできん！)

ただの人間と侮り、片目と腕を切り落とされ……無様に逃げ出したあの屈辱

(守護者を倒すことでしか晴らせん！)

俺が甲冑の下で歯を食いしばっていることに気付いているハーデスは

「そうか。なら俺は少しでもお前の魔力が回復するように人間の魂を狩って来よう」

「すまない。頼むぞ……友よ」

私が歩き去っていくその背中に声を掛けると、ハーデスは腕を上げて返事を返す

(ハーデス。お前とも長い付き合いだな)

共にバラガルとの配下として出会い。共にLV4へと進化し、そして私はバラガルトに能力を疎まれ……お前はその能力の強大さゆえに恐れられ封印された。こうしてまた会えそして同じ目的を持ち進んでいける

(今度は負けない。私が勝つ！)

戦う決意を新たにし目を閉じようとした所で

「やほ？ベエルゼ。呼ばれたから来たよ。何のよう？」

ネルヴィオが王座の間に入ってくる。私は閉じかけた目を開き

「単刀直入に聞かせて欲しい」

ネルヴィオは一応私の配下として人間をネクロと変化させたり、出撃してくれていた。我を通すが有益な部下としていてくれた……だが

「お前は私よりも遥かに高い地位に居るのではないのか？」

私の問い掛けにネルヴィオはにこにここと笑ったまま

「何の事かな？判らないけど」

笑ったままのネルヴィオに私は

「誤魔化さなくていい。LV5から手を引けと言われていたのだろう？」

この言葉にネルヴィオは少しだけ顔色を変えて

「いつから知ってた？」

「ふつやはりか」

「鎌をかけたの？中々切れるね」

くつくつくと苦笑するネルヴィオ。前々からそんな気がしていた、私もベリトもベルフェも気にした素振りを見せず、自由気ままに振舞うその姿に

「私の尋ねたいことは1つだけだ。LV5はここに来るのか？」

LV4よりも上の階級。私達とは比べようがないほどの力を持っているのがLV5だ。LV5が動けば、私達の意味など関係なくLV5に従わざるを得ない。だからそれを尋ねるとネルヴィオは

「来ないよ、正直この世界なんてどうでも良いって思ってるよ。だから私にも手を引けって言ってるんだよ」

そうか……やはりか……なんとなくそんな気がしていた。守護者と戦っているのに何の音沙汰もない。その事が気になっていたが、今のネルヴィオの言葉で解決した

「朗報だ。感謝する、私は私の目的の為に戦える」

突然来て言うことを聞けと言われてもはいそうですか、で収まる訳がない。LV5からの口出しがないと判れば好きに戦える。これ以上朗報はない

「ふーん？私には理解できないよ。まっ、ここに居る間は力を貸してあげるよ。ベエルゼ」

ネルヴィオは興味がなさそうに王座の間から出て行く、私はその背中を見ながら目を閉じ眠りへと落ちていったのだった……少しでも早く戦えるだけの魔力と体力を蓄えるために……

気付かれちゃったか……私は自分の部屋に帰りながらそんな事を考えていた。ベエルゼのハツタリに乗ってしまったのは私だけど、まさか私の言動でその後ろに気付くなんて思ってもなかった。流石はLV4と言った所だろう

(そろそろ引こうかなあ……でもセリナがなあ……)

私だけならもう撤退しても良いと思う。だけど友達のセリナがユウリが欲しいと言っている。出来るならユウリをネクロにしたら、この世界を去りたいと思うし。前にランドグリーズに聞いたことも気になる

(聖魔王……あいつがリーエの仲間に加わると厄介なんだよね)

ほとんど仲間と力を身につけて世界を流離っているリーエ。今までは取るに足らないと思いい見逃して来ていたが、そろそろ鬱陶しくなってきた……お父様の周りに居る邪魔者を殺すか、リーエ達を殺すか？頭の中でシミュレートしてみる

(どうするかな。クラナガンに行こうかな)

癪だけどランドグリーズに言えば、LV4も手駒に出来る。それなら十分クラナガンに仕掛けるだけの戦力を得ることが出来るが……(うーんそれもめんどくさいよね)

今居る世界は私が本来居る時間から考えれば、過去になる。過去で行動を起こすのもめんどくさい、リーエを追いかけるのはアークがやっているし……私が態々動くまでもない

(お父様が居るから来たけど思うように行かないなあ)

通路を歩きながらこれから如何するかを考えながら自分の部屋に戻ると

「おかえり。ネル」

ぬいぐるみを抱えて歩いてくるモモメノを抱き抱えて、頭を撫でながら

「セリナは？」

一緒にいたはずのセリナの姿が見えずそう尋ねると、モモメノはポッドのある部屋を指差して

「寝てるよ？・疲れてるみたい」

セリナは前の出撃でユウリにあつて少し不安定になつている上に、お父様の魔力がヨツンヘイムに散布されたことで更に不安定になつてしまったので眠っている。モモメノはユニゾンデバイスだから影響は無いし、私は丁度その時にヨツンヘイムを離れていたから影響がない。

(まあ居たとしても大した影響はないんだけどね)

私にはお父様の魔力は毒所か薬だ。魔力が逆に回復する、ベルフエとベリトがうるさいから大人しくしているけど本当ならベエルゼの言うとおり、あの2人なんて敵じゃないけど……今はこうして大人しくしているほうが都合がいい。私にもお父様の魔力は有毒なんだと思わせたほうが色々動きやすいからだ

「お菓子でも食べようか？」

とりあえず、今は大人しくしていようと決めて。モモメノにそう尋ねると

「うん♪食べる」

にぱつと笑うモモメノをイスの上に座らせて、私はお菓子とお茶の準備をするのだった……

(ああ。早くお父様に会いたい)

自分でこうしてお茶を淹れるのも、お菓子を作るのもいいけど……やはりお父様のお菓子とお茶が欲しい。その為には

(早く邪魔者を全部殺さないとね……)

私はお父様を縛る者を許さない。だから全部壊してやる……そうすればお父様は私のところに来てくれる。そしたらずっと一緒に入れる

(ああ、その時が楽しみだなあ……)

早く言葉をかわしたい……触れ合いたい……私はずっとそれだけを考えて生きてきた……この気持ちだけが私が私だと言える証明だ
(まずははやてあいつから壊してやる)

はやての存在がもつともお父様の存在を損ねている。何をしてもあいつから壊す……きつとそうすれば心が晴れやかになるんだろう

なあ……私はボロボロになったはやての姿を想像して笑みを零しながら、お茶の準備を終えて

「はい。出来たよモメモノ」

「うんーありがとう」

私は束の間の平和な時間を楽しむことにしたのだ……動くのはお父様が帰ってきた後からで十分なのだから……それにこの世界にいるベエルゼとかが死のうが何の痛手もないみたいだしね。私はそんな事を考えながら、モメモノの前にホットケーキを置くのだった

第102話に続く

第102話

第102話

どこか判らない紛争地ではヴオドオンによる蹂躪が連日連夜行われていた

「さあ！その命を我らの神にささげなさい！」

『プロヴィデンス』

全身を甲冑が包み込んでいく。私の能力のせいで生身で戦えないのは不便だが、致し方ない

「ば、化け物だ！ニゲロ!!!」

戦い合っていた人間達が武器を投げ捨て逃げていく。私はそれを見ながら

「背を向けて逃げる。実に愚か」

腰にマウントしていたルシファーを抜き逃げていく人間に照準を合わせる

「神の祝福が訪れる事を」

そして2発銃弾を放った。その2発は一撃で人間を死に至らしめ骨も残さず消滅させた

(神に選ばれませんでしたか)

あの2人は残念ながらネクロになる事は出来なかった。つまり神に選ばれなかったということ、折角同胞を増やそうと思ったのに残念です。私はゆっくりと消えていく人間の骸に手を伸ばし魂を掴み取る

「神の捧げ物程度にはなっってくれるでしょうね」

魔力回復のためにベエルゼ様やベルフェ様に捧げる供物としては使えるだろう。私はそれを魔力で閉じ込め

「さて、私の前からは逃げれませんよ。神の僕の私からわね」

結界を張っているので人間達は逃げる事が出来ず、半狂乱になっている。私はその憐れさを感じさせる姿を見てくすりと笑いながら

「貴方達に神の祝福を」

50人近くいるが、ネクロに慣れるのは一体何人だろうか？私はそんな事を考えながら震える手で銃を拾い上げる人間達を見て、もう一度小さく笑い人間達へと向かって行った

「結局0人ですか。全く魂が弱いとは思いませんか？」

大体人間を殺しつつ、わざと1人残した人間にそう尋ねる

「ひ、ひいいいい!？」

腰を抜かしているのかみつともなく逃げる人間の足を踏み。逃げられないようにしながら

「人が話をしているのに逃げるのはどうかと思いますよ」

プロヴィデンスのメモリを腰から抜き。逃げようとしていた男と視線を合わせる。恐怖の余り言葉を発することも出来ないようだ、私は苦笑しながらカソツクを捲り上げる

「見てくださいよ。この肌をこの身体もそろそろ限界なんですよ」

前に取り替えてから2週間。すでに腐敗は限界まで進み骨が見ている。青い顔をしている男に

「そろそろ次の身体が欲しいんですよ。判りますか？」

私がそう言うと言は自分は自分が起きるのか理解して逃げ出そうとするが、私が足を押さえているので逃げることは出来ない

「痛みは一瞬ですよ。ええ、直ぐに終わりますとも」

逃げようとしている男の頬を軽く撫で、今まで使っていた身体から抜け出す

「はーああああ。この姿は余り好きませんねえ」

男が持っていたナイフに私の姿が写り、苦笑する。黒い骸骨の上半身に腐ったローブ姿。私は数世紀前に神の徒となる事が出来、不死に近い能力を得たが、この身体はあんまり好かない。この異形の姿は恐らく、私の信心が足りなかったせいなのだろうと思いつつながら

「よるな！来るな！化け物おお!!」

振り回されるナイフがローブに当たると金属が腐り落ちる。余りに強力な腐食能力、これが私の力

「化け物でなく、神の僕ですよ。さあ貴方の体を私へ」

逃げようとしている男を掴み上げ、その身体に骨を付きたて、男の身体を取り込むのだった……

「今回の身体はあんまり良くないですね」

カソツクを着込みながらぼやく。今回の身体は私にあんまり適応せずに少しぎこちない、あまりネクロに適した人間がないので妥協としてあの男にしたがあまりよくないですね

(早く身体を取り替えないと動きにくいですね)

適合率が余りに低い。あの男のネクロへの適性値が低かったせいだろう。私はカソツクの中から

「次の戦場はあそこが良いですね」

中東の宗教戦争の紛争地。そこならばもう少しましな魂があるだろう。

「1度魂をベリト様に届けてから行きますか」

私はそう呟き。ヨツンヘイムへと転移しベリト様に集めた魂を渡す

「今回は大分集まったようですね」

「お褒めに預かり光栄です」

ベリト様の前で片膝を付き頭を深く下げる。ベリト様はベエルゼ様の側近。私のようなネクロとは立ち位置が違うのだから

「この魂は全てベルフェに渡します。貴方の活躍は私からベエルゼ様に伝えておきます。ではまた魂集めを頼めますか?」

「勿論でございます。今度はもっと多くの魂を集めてまいります」

私はベリト様の前でもう1度頭を下げ、ヨツンヘイムを後にし中東に向かったのだった……

身体に力が入らない者の何とか動けるようになってきたのでヨツンヘイムの奥のベリトのラボに向かっていると

「ベール」

「ん?なに?モモメノ」

あたしの足元に居たモモメノにそう尋ねると、モモメノは

「一夏、いない。出撃駄目」

駄目って言われなくても判っている。それに今のあたしでは出撃する気力も無い、桜鬼とか動く気がないようで身体を休めている、じっとしていると気が滅入るので少し気分転換に散歩しているだけだ

「言われなくても判ってるわよ。ありがと、モモメノ」

「それなら良い」

ぬいぐるみを抱き抱えたまま歩いていくモモメノの背中を見つめる

(なんか変な感じよね)

ネクロなのに人間としての意識もある。前のイチカと戦った世界ではただイチカを殺したい、それだけしか考えれなかったのに今は別のことを考えることが出来る。いいことなのか、悪い事なのか良く判らないが

(一夏。この世界にいないのは残念ね)

イチカと一夏は違う。イチカはあたし達を殺したイチカ、絶望と狂気に飲まれて変わり果ててしまったイチカ。そっちが良いと言うのも居る。けどあたしは一夏が欲しい。その為なら桜鬼やヴィステイラー達を全員殺して、一夏の心を砕いてどこか別の世界であたしと一夏だけの世界で一生を暮らす。一夏が死ねばネクロにする、そうすれば永遠に一緒にいることが出来る

(それが元々報酬なんだし、文句を言われる筋合いは無いはずよね)

ベエルゼは協力するなら望みを叶えると言った。あたし達全員が一夏を超越せと言った、ベエルゼはならば一夏というのは自分達で手に入れる。そうすれば私が望みを叶えると言った、だからこうして協力しているのだ

(とは言え暇よね)

戦いに出ても一夏がいなければ戦いに行く意味はない、ヨツンハイムにいては気が滅入るだけでしょうかなと思っ歩いてると

「ベール暇なの？」

聞こえてきた声に振り返る。モモメノがいたんだからネルヴィオ

も居て当然よね、モメモノを抱っこしているネルヴィオに

「まあね。暇じゃないのがおかしいじゃない？こんな所」

何も無い闇だけの城。こんな所に普通の感性の人間がいたら気が狂うところだ。とはいってもあたしもネクロだからあんまりおかしいとは思わないんだけどね

「あつははは！最高、ベール最高！そうそう気が狂いそうになるよね
こんな所」

楽しそうに笑うネルヴィオ。その笑みは子供じみた邪悪さに満ちていて

「もう狂ってるんじゃないの？あんた？」

思わず思ったことを言うのとネルヴィオは更に楽しそうに笑いながら

「ぷーっ!!!あつはははっ!!!もう最高！あつたりまえじゃん！ネクロが狂ってないわけではないでしょう！」

あつははははと心底楽しそうに笑うネルヴィオ。何が壺なのか判らないわね、こいつ……外見はあたしと同じ人間そのものだが、その能力はあたしよりも高い。だけどそんなことで屈したくないので睨みながら言う

「ベール。私はこれから街に行くの、一緒に来ない？」

「はあ？」

驚きの余りへんな声が出てしまう。ネルヴィオは前回の出撃で命令拒否をして出歩くのを禁止されていたんじゃないのか？

「そんなのいつまでも続かないよ。モメモノもお菓子食べたいらしいし、ちゃんとベエルゼに許可を取ったよ。で如何する？一緒に来る？」

そう尋ねてくるネルヴィオにあたしは少し考えてから

「行くわ。暇だしね」

「OK♪幻術をかけてあげるから目は気にしなくていいよ。じゃあ行こうか？」

そう笑って歩き出すネルヴィオと共にあたしは街へと出かけていった

「で？なんであたしだったのよ。桜鬼とかも起きてたでしょ？」

カフェでコーヒーを飲みながら尋ねる、あの時ヴィステイラーも桜鬼もおきていたのに何であたしだけを誘ったの？と尋ねると

「似てるから。自分の好きな人と永遠に続く時間と世界を望むベールは私に良く似てるから誘ったの」

似てる？考え方が？ネルヴィオはふふふと笑いながら

「そうだよ？私はお父様と永遠に続く日々が欲しい。だからベエルゼに協力してる、それだけだよ」

「モモは？」

「勿論モモメノも一緒だよ」

モモメノの頭を優しく撫でているネルヴィオ。お父様ねえ……それって守護者の事よね

「出来るの？守護者相手に？」

どう考えても守護者相手にそんなことできるわけが無いと思うんだけど

「やるの。絶対に、私にはそれだけの力がある」

強い意志をその目に宿すネルヴィオ。なんか本当にやりそうだから怖いよね

「頑張つて。あたしは応援するわよ」

同じ考え方をするもの同士応援するのは当然だからねと言うとネルヴィオは嬉しそうに笑い

「ありがと♪じゃあ今度私がとっておきのプレゼントをするよ」

にこにここと笑うネルヴィオにあたしは

「とっておきって何よ？」

あたしがそう尋ねるとネルヴィオはふふふと笑って

「ひ・み・つ♪楽しみにしてよ」

それから何回か尋ねてみたがネルヴィオは答えることはなく、あたしはネルヴィオに1日街中を引っ張り回されるのだった……

ネルヴィオとベールが街を回っている頃。ヨツンハイムの一室で

は

「ああ？ベリトか？なんだ俺に何か用か？」

守護者に受けた傷が原因で弱っていたのに、更に守護者の魔力を散布され動くことも出来ず。休んでいる所にベリトが姿を見せる

「これを受け取ってください」

差し出されたのはISコアに人間の魂を封じ込めた擬似リンカーコア

「んだあ？俺が喰らっても良いのか？ベエルゼ様とハーデス様のじゃねえのか？」

これはベエルゼ様とハーデス様の為の物。それを俺が喰らっても良いのか？と尋ねるとベリトは

「構いません。早く傷を癒し、早くもとのレベル4に戻ってください。そうすれば早く魂狩りが出来ますから」

「ひやははは！それが目的かあ？」

くつくつくと笑いながら擬似リンカーコアに手を伸ばす。守護者は俺をベルフェゴールと読んだが、俺はあの時はまだ不完全だった。ISコアとパーツを取り込み擬似的にLV4になっていただけだ。その証拠に今の俺はLV3の姿へと退化している

「ありがたく頂くぜえ！直ぐに魂狩りをしてきてやるよ!!」

擬似リンカーコアにかぶりつき中に閉じ込められていた人間の魂を一気に喰らう

「くつくつく……ひゃーははははははっ!!!戻ってきた！戻ってきたぜええ!!俺の力が!!!」

失っていた狼を模した肩周りの甲冑と山羊の角が再生し、2枚だった翼も4枚になる。そして最後の両腕に赤い爪を装備した手甲が装備される。

「くつくくつ……ベルフェゴール様の復活だアアア!!!」

4枚の翼を広げ、叫ぶ。失っていた力を漸く取り戻した！こんなハイな気分になる事はない

「嬉しいのは判りますが、うるさいです。静かにしてください」

ベリトの言葉に悪いなど返事を返し翼を閉じ、そのまま歩き出す

「どこら辺が良い？魂狩りは？」

「ヴオドオンが中東の宗教戦争の参加しています。そこらへんがいいでしょうね」

ヴオドオンか、あいつの能力は面白いからなあ。一方的な殺戮。これほど楽しい者はない、俺はくつくつくと笑いながら愛用の鎌を作り出し左手に構え

「ベエルゼ様に伝えてくれ！俺が直ぐに傷を治して差し上げますってなあ!!!」

俺はそう叫び空間を引きさき戦場へと転移したのだった……

「ひゃーはははははははは!!!最高だ！殺してやるぜ人間共おおおとおッ!!!」

蘇った力を確かめるように俺は鎌を振るい、爪を振るい、魔力で人間を焼き払いながら、気が済むまで殺しを楽しむのだった……

どこか判らない山の中に佇む青年。彼を照らすのは血のように赤い満月だ。赤紫色の髪をした青年、いやネクロのペガサスは突然胸を押さえてしゃがみ込んだ

「がっ、ぐうううう……時間が、時間がない……」

日に日に強くなるネクロの破壊と殺戮衝動。それを何とか押さえ込んできたが、そろそろ限界だ

「よりに余ってクラナガンに行くとはな、守護者のやつめ」

ISの改修の為にクラナガンに行った守護者達の魔力反応は今の世界には無い、ベエルゼ達は守護者の魔力のせいで動けない。俺は自由に動けるので指示を出せれる前に姿を隠したが、ネクロの本能を押さえるのもそろそろ限界になってきた

「まだだー」

クラウソラスを作り出し、腕に突き立てる。強烈な痛みのおかげでなんとか意識がハッキリしてくる。俺はゆっくりと近くの大木に背中を預け

「はあー……はあー……」

大きく何度も深呼吸を繰り返し、呼吸を整える。痛みは既に傷が回復していることで引いているが

(不味いな、間隔が段々短くなってきた)

発作の感覚が短くなってきている。それは俺が完全にネクロ化する日に近いことを示していた、俺が完全にネクロ化するまでもうそんなに時間がないだろう。それにあの月も不味い、出来るだけ月の光を浴びないように気をつけ木々の陰に移動し、大きく息を吐く

「急がなければ……」

俺が俺である内に……あいつを倒す。それだけを心に決めて何年も何年も世界を渡り、あいつの姿を探し続けた。そして漸く見つけた、この世界で

「まだだ。まだ俺はこんな所で終われない」

ネクロでありながらまだ人間としての意識を辛うじて残している俺はベエルゼ達からは厄介者だ。だから俺には何の指示も出ていない……だがこれは好都合だ。僅かに残っている意識を繋ぎとめる事に集中できる

(早く戻って来い。守護者、そして織斑一夏)

出来るなら俺一人で仇を取りたい。だがあいつは強い。俺ひとりでは到底勝つことなどで気はしない、だからこうして従順な振りをしてきた、だがそれも終わりだ。守護者が戻れば俺はあいつと戦うことが出来る

「覇皇ハーデス。貴様だけは俺のこの手で……」

俺の世界を滅ぼし、全てを破壊したハーデス。あの時の貴様は半ば暴走状態だったから俺のことなど覚えていないだろう、だが俺は忘れない。貴様の策略のせいで互いに殺しあった仲間達の姿を！そして死んでいった者達の事を！

「どうして忘れることが出来るというんだ……」

あの場所は間違いなく俺の居場所だった。それがたった数日で全てが無になった、俺は死んでしまった仲間達を全て埋葬し、復讐を誓った、だが生身では到底勝てない相手だった。だから俺はあえてネクロを受け入れネクロとなった。そして意思でネクロの破壊衝動を

押さえ込み、この力を手にした

「絶対に貴様だけは俺のこの手で……」

クラウドソラスを杖代わりにし立ち上がり身体を引きずるようにして、俺はその場を後にした

(月が見えないところへ行かなければ……)

満月と言うのは古来から魔の者の力を増大させると言われて来た。それはネクロも例外ではない、普段なら押さえ込むことの出来るネクロの意思が俺を乗っ取ろうとしてくるのを感じる。このまま月の光を浴びていては確実に正気を失う。そうなつては敵討ちところではない、俺は足を引きずりながら森の奥へ向かい。大木の下に据わり目を閉じた。ここなら周囲の木々が月の光を隠してくれる

(あとは朝を待つだけだな)

さつきまで暴れていたネクロの魔力も静まっている。これならば今日一晩は問題ない筈だ、俺は眠るわけでないが目を閉じ少しでも身体を休めることを考え、休息をとるのだった……

ペガサスが眠れぬ夜を過ごしている頃。IS学園の近くの浜辺に龍也達が転移して来ていた。そしてこの世界でのネクロとの戦いは激しさを増していく事になる。その切っ掛けはネクロや龍也の行動ではなく別の人物が切っ掛けに激しさを増していく事になるのだ……

第103話に続く

第103話

第103話

クラナガンでの長いようで短い1週間を過ごした俺はいつもの海岸に来て素振りを始めていた

(戦う覚悟か)

クラナガンで色々なことを知った。そして戦う為の術も教えてもらった。だけど実戦でどうなるかは判らない、熟練の魔導師でさえ常に死の危険性がある。それがネクロとの戦いだ

(千冬姉や龍也達との模擬線の中で色々と考えないとな)

暫くは実戦形式の訓練をメインにする。素早い状況判断や思考の高速化。それが必要と言うのが、龍也と千冬姉の共通の認識だ。そしてもう1つ慣れないといけないのが

(絶対防御の出力低下か……)

わざと絶対防御の出力を落とし、身体にダメージが来るようになる。傷は魔法で治せるから問題が……今までの事を考えると最初は怪我だらけになるんだろうなと小さく呟く。ISを展開していてもネクロと戦えば死ぬかもしれない。これはオータムさんやスコールさんに何回も言われた。2人はISでネクロと戦い死に掛けたのだから、ISの絶対防御など何の意味も無いと言うことを身をもって体験したから何回も言ってくれたのだろう。確かに俺も

(いざとなればって思うもんな)

絶対防御ならと言う考えがある。その考えを捨てなければネクロと戦うことなんて出来ないだろう。心構え・戦う術・覚悟。まだまだネクロと戦うには俺は未熟なんだろうな……そんな事を考えながら木刀を振るう

「ふー、次の訓練があるって言ってたよな」

もつと実践的な訓練があると言っていた、それが何なのか？不安に思う反面、若干楽しみでもあった。強くなる喜びとでも言うのだろうか？最近はずっと強くなっている自分が嬉しい、しかし慢心してはいけない、下手に自分強くなったなあなどと考えていけば、訓練が更

に酷いことになるからだ。

(どんな訓練……いや、きつと必要なことなんだよな)

ネクロと戦う上で必要な事。覚悟だけではない戦う術を覚えなければいけないのだから。まだまだこれからだ

「今日はいなかったか……」

この海岸で俺はペガサスに剣術を教わっていた。とは言え俺はあいつの剣を何一つ理解できなかった。箒と同じ2刀流だが全く異なる剣術

(確かこうだったかな?)

木刀を2本構え、見様見真似で構えを取って見るが、全然違う。やっぱりなれた形で勝負するのがいいんだろうなと思っっていると

「たわけ、俺の構えはそんなものじゃない」

突然聞こえてきたペガサスの声に驚きながら振り返るとそこには、疲弊した様子のペガサスが木に背中を預けていた

「ど、どうかしたのか!？」

ネクロには自己再生能力があると龍也に何回も言われた。それなのに今のペガサスは疲弊しきっている。何かあったのかと思ひ、俺がそう尋ねるとペガサスはふんつと鼻を鳴らして

「俺の事などどうでも良い。俺の事を守護者に話したのか?」

確認といたげに尋ねてくるペガサスに

「一応昨日話しておいたけど……」

昨晚IS学園に戻ってきた時に部屋に戻る前に龍也を呼び止めて話をしたことを言うと

「それなら良い。行くぞ」

「ど。どこへだ!？」

ペガサスはゆっくりと振り返り俺を見据えて

「俺には時間がない、そろそろ貴様と守護者の力を借りてあいつを倒す」

それ以降ペガサスが口を開くことはなく、俺はペガサスの隣を歩きながらIS学園へと戻ったのだ……

私は昨日の夜一夏に聞いた事について千冬とツバキ。それにはやてを交えて話し合っていた

(御神流の剣士の誇りにかけてか……)

ペガサスは私と交渉をしたいと言っていたと一夏は教えてくれた。やはりペガサスはネクロの中でも人間としての意識が強いと言うのは判っていたが、まさか交渉をしてくれと言ってくるとは思わなかった。しかも御神流の名を出されては話を聞かないわけには行かない。やはりペガサスは平行世界のなのは関係者だったのかもしれない。「龍也はどう思っているんだ？」

千冬の問い掛けに私は少し考えてから

「信用できると思う。ペガサスは人間としての意識が強い、十分に信用できると思う。とは言え会って話をしてみないと判らないがな」

どこまで信用できるかは実際話をしてみないと判らない。しかし今まで2回対峙しているがそのどちらも私や一夏を殺す機会があったのにそれをしなかった。その点も考えると1度話をしたほうがいいだろう

「ネクロにもそう言うのがいるの？」

「ネクロにだって人格はある。大体はネクロ化した時にネクロの考えに支配されるが、稀に人間としての意識が残る場合もある」

とは言え時間と共にその意識は薄れていくけどなど付け加える。ネクロと人間の魂だと、言うまでもなくネクロの魂の方が強い徐々に浸食され我を失い完全にネクロになる。固体差があり一概には言えない事だがな

「しかしネクロが兄ちゃんに協力を求めるとはな。何が目的なんやろか？」

それが少しだけ気になっただけはいる、ネクロが私の力を借りたいという理由が判らないと

「少し考えたほうがいいじゃないか？」

「しかし有益な情報を得れるなら話を聞いたほうがいい」

虎穴に入らずんば虎子を得ず。多少のリスクは覚悟してでも話を

する必要がある。そんな事を考えていると

ウーッ！ウーッ！！

結界にネクロが進入時に反応するブザーが大きな音を立てる。近くにネクロが来ているようだ

「はやてモニターに」

「了解や」

直ぐに会議室にモニターに画像が映し出される。そしてその画像を見て「どうやら向こうから来てくれたようだな」

モニターには一夏と並んで歩いているペガサスの姿がある。一夏の話では私に来るように言っていたのだが、そんな事を言っている余裕がなくなったのかもしれない。私が座っていた椅子から立ち上がる

「どこ行くの？龍也君」

「向こうから来てくれたんですよ、出迎えるのが道理でしょう？」

私はそう笑いIS学園の入場ゲートのほうに向かった。丁度そこに一夏とペガサスが来ていて、一夏は私を見て困ったようにしている。一夏には悪いが無視し、ペガサスのほうに近づき

「ようこそ、歓迎するよ」

「ふん、どの口がそれを言う？俺には判っているぞ」

ペガサスは虚空を見つめている。そこは私が投影した剣があり、ペガサスが不審な動きをすれば攻撃できる位置に配置している

「ふふふ、当然だろう？話は聞くが信用するとは言っていない」

「狸め」

「褒め言葉として受け取っておこうか？」

くつくつくと互いに笑い合う、一夏は状況についていけず目を白黒させている

「まあついて来い。ゆつくりと話を聞かせてもらおう」

「それはお前の態度次第だ。八神龍也」

互いにある程度は相手の事を理解しているが、必要以上に信頼しない。どこまで行こうが、人間とネクロ。分かり合えはしない……そう
(半ネクロとは違う)

半ネクロは人間の面も残っている。純粋なネクロはどうあがいてもネクロの本能には勝てないのだから

「俺はどうすればいい？戻ったほうがいいのか？」

一夏が私とペガサスを見てそう尋ねてくる。私は少し考え

「ペガサスはどうする？」

「小僧と貴様に用がある。その小僧も一緒だ」

一夏は自分も!?!と驚いているが、連れてきたのは一夏だ、そこは責任を取ってもらおう

「判った。では一夏も連れて行こう」

いやいやと言う感じで頷き着いて来る一夏を連れて、ペガサスを監視しながら地下のブリーフィングルームへと向かったのだ……

ベエルゼに出した提案が通ったのでイナリに説明しに向かっていると

「あー漸く回復したわねえ!!」

イナリが部屋の肩を回しながら言う。確かにイナリは完全に回復しているようだ。魔力も回復しているようだし、気力も充実しているようだ

「じゃあさっそく、束を殺しに行こうかしらねえ」

にやりと邪悪な笑みを浮かべるイナリ。このまま行かせてもいいが、跡でベリトに文句を言われるのも癪なので

「ちよい待ち。それは駄目だから」

部屋に入りながら駄目だというと。イナリは出鼻を挫かれたことで不機嫌そうにしている

「あんたに言われる筋合いはないわよ。ネルヴィオ」

私を睨んで言うイナリ。あーもう、こいつは本当に鬱陶しい……本当なら消し飛ばすことも出来るんだけど、一応私はベエルゼに付き従っていると言うことになってるので下手に動けない

「指示に逆らうなら良いわよ？処罰されるだけだから」

私がそう言うといナリは立ち止まり、不機嫌そうに足踏みしながら

「指示って何？私に関係あること？」

一応話は聞くといい態度のイナリに私はにやりと笑いながら

「束を今すぐ殺すのは無し。それがベエルゼ様の決定」

ベエルゼに様付けするなんて本当はいやだけど、ここは仕方ない。ちゃんと配下の振りをしよう

「あんだベエルゼ様に何か言った？」

私は何も言っていない。これを考えたのはベリトなんだけどね、ベエルゼは私からの提案とベリトからの進言で決めたのだ。私は内心苦笑しながら

「ベリト様の指示だよ。束は人間としては使える、だからネクロ化させるけどあそこまで自意識の強い人間だと失敗しかねない」

ネクロ化が死体や死にかけの人間がいいのはそこだ、意識が希薄になりネクロの思考に染まりやすくなるからだ。だけどあそこまで自意識が強い束はネクロ化させても言う事を聞くとは思えない。下手をすると半ネクロにもなりかねない

「じゃあどうするって言うのよ？」

「簡単だよ。束はこの世界では人間に狙われている」

上質なネクロの条件は色々ある。例えば憎悪とか殺意。こういうのはネクロにとっては最高の糧になる。だけどそれとは別に良い素材がある

「憎悪。あの束って言うのは極めて自己的で自分の事しか考えてない……あえて私達が手を下さず……人間にやらせる。そう言うことね？」

ネクロの考えていることなんて大体似たり寄ったりだ、最後まで説明しなくても理解してくれる。こういうところは本当に便利だよね
「その通り。でも人間だと束を殺さない可能性もあるからすこーし、弄るけどね」

束を見つけたと知ればどの国も動く。そして乗り込んで捕まえようとする人間達を見つけて精神操作をする。それがベリトの考えたプランだ。わざと痛めつけさせ殺さず生かさずで心を折り、人間に殺意を向けさせる。そうすればネクロ化した時もその憎悪と殺意は残る

「判ったわよ、そう言う手筈なら私は動かないから」

つまらなそうに鼻を鳴らして歩き出すイナリ。途中で耳と尻尾を消してスーツ姿に着替えて転移する。恐らく人間達に束の情報を流すためにだろう

(私の本命は束じゃないしね)

束は面白いけど私の好みじゃない、どちらかと言うと死の運命を知りつつ足掻いてるアズマの方がよほど好みだ

(アズマをネクロ化したら面白いだろうなあ……)

届かない、叶わないと知りつつ光に手を伸ばすアズマは実にこっけいで愚かしい。だがそれゆえに

「面白い」

人間もネクロも不完全だ。だけどその不完全差が玩具として面白い。最高の喜劇だ、自分は良かれと思って行動しているがそれが返って最悪のほうに進んでいるのだから

(足掻け、そして絶望しろ。アズマ)

その時がお前が最も輝くときだ。そして私の人形に相応しくなるときだ……私はくつくつと喉の奥で笑いながら、人間達が束に攻撃を仕掛けるのを待つのだ……

私は束に与えられた自分の部屋を整理しながら考え事をしていた(昨晚またIS学園に魔力の反応が戻ってきた。と言うことは八神龍也達が戻ってきたのだろう)

ここ数日IS学園に仕込んでいたカメラには織斑千冬達の姿はなく、束が落ち込んでいた。恐らくだが、八神龍也達の技術力でISを改修する為にこの世界を去ったのだろう

(しかし何かしていつてくれたようだな)

何をしたかは判らないが、活発に動いていたネクロの動きが弱まっていた。自分達が世界を去る前に何かしたのだろう……だけどそのおかげで色々と準備が出来た

(小型は出来なかったが魔力弾を打つ機構も何とか間に合った)

ネルヴィオは業と不完全な物を渡して、私と東の科学力を試していた。

私はその中の一つ。デバイスの修理をしていたが、ギリギリで間に合った

「とは言えどこまで使えるかだな」

ISの武器として考えればかなり強力だが。ネクロに通用するかどうかは判らない。それにネクロが直接仕掛けてくるとは思えない、やはりこのラボの1部も改造しておくべきか？対ネクロ・対人間。その両方で考えておかないといけないだろう

「やつほー♪アズマチャーン！」

「ぬお!?なにをする束！」

いきなり後ろから抱きついてきた束を振りほどく。束はイエーイとピースしながら

「昨日ちーちゃん達がIS学園に帰ってきたんだよ。いやー束さんは寂しかったよ」

よよよつと崩れ落ちる振りをする束を無視していると

「無視しないでよ！話聞いてよ」

「ええい！纏わり付くな！話は聞いてやるからスカートから手を離せ！」

私のスカートを両手でぐいぐい引つ張る束を引つpegし、イスの上に座らせる

「なんでちーちゃんは八神龍也の話聞く気になったんだろうねえ？」

紅茶を飲みながら尋ねてくる束。そんな事を尋ねられても私に判るわけがない、私は織斑千冬ではないから、だけど大体の予想は付く「ネクロに襲われてなにか考えが変わったのではないか？」

「えーだけどネルちゃんはちーちゃん達を襲わないって言ってたよ？」

何故そこまでネクロの事を信用できるのか理解できない。口約束ならなんとも言えるし、向こうはこっちの約束など護る必要もないのだから

「それはネルヴィオだけの話だったのではないのか？」

どうせ約束したと言ってもネルヴィオだけだろうと思いい言うど束はてをぼんつとたたき

「あーそっか。それなら判るかも、ネルちゃん言つてたもんね。ネクロも一枚岩じゃないって」

うんうんと頷いている束。ネクロの話聞いていたのなら気付いてもおかしくないのだろうが

(また隈が酷くなっているな)

ネクロと合つてから束はおかしくなっていた。自分は気付いてないが、私とクロエは気付いていた。束の異変に……

「束。また徹夜していたな？少しは休んだらどうだ？」

「ん、んーそういえば、4日くらい寝てないかも？」

「早く寝ろ。そしたら考えも纏まるだろう？」

私がそう言うど束はうーんと考える素振りを見せるが

「ううん。寝ない、さっきね面白い者を考えたんだ！アズマちゃんの造

つてたあれを見て閃いたんだよ」

あれ？ブラッドバニーの強化パツクの事か？

「そうだよ、あれでね。箒ちゃんの紅椿を更にパワーアップさせれるんだよ！」

えへへと笑つてじゃあ早速作つてくるから！と言つて部屋を出て行く束。私はその背中を見て

(まだ大丈夫か……だがいつまで大丈夫なのだろうか)

私の見解だが、ネクロは少しずつ束に干渉してきている、最近の言動の変化そして時折見せる束とは思えない邪悪な笑み。少しずつ、少しずつだが……束はネクロ化しているのではないか？と言う不安が頭を過ぎる

「いや。まだ大丈夫だ、まだ間に合うはずだ」

とは言え私に出来ることは余りに少ない……もし束を救える存在がいるというのなら

「それは八神龍也以外にありえない」

この世界では束そして織斑千冬はお互いを越えるのはお互いだけだった。だからこそ自分の我を通して来れた。さつきは束には言わなかったが、千冬が変わったのは恐らく八神龍也に徹底的に論破されたのだろう、自分の考えを徹底的に否定されたのか、それとも叩きのめされたのか？そこは私には判らないが恐らくそうだろう。だが束と織斑千冬は違う

「束が素直に話を聞くわけがない」

ネクロの影響もあり、束が素直に八神龍也の話を聞く可能性は限りなく0に近い。しかし八神龍也には束を救ってもらわないと困る。もし私の考えている通りなら

「私の命はそう長くない」

元々私は長く生きれる体ではない、そして最悪の事態になったとき。その時が私の命の終わるときだと理解している

(ネクロには何一つ思い通りにはさせない)

束はネクロにはさせないし、私もネクロになる気はない。

(一泡吹かせてやる)

どうせ長くは生きる事のできない身体だ。自分の命に未練はない……ここで出来るだけ派手に暴れば八神龍也が気付いてくれる可能性がある

(しかしそう簡単に上手く行くかどうか……)

ネクロも八神龍也の危険性を知っている、そう簡単に知らせることが出来るかどうか……私の願いと思いは全てクロエに託した。あと不安に思うことは1つだけ

(束とクロエをここから逃がせるかどうかだ)

襲ってくるネクロと人間はどうとでもなる、そのための準備はしてある……問題は二人を逃がす手段だ。ネクロも人間も束を利用しようとする。逃がすほうが圧倒的に難題だ……

(ネクロは恐らく結界を使う。となれば通信は駄目だ)

どうした物かと考えていると私の目に止まる物体があった。それは試作段階のデバイスコア。真似をして作ってみたが想定していた出力に届かず、僅かながらのエネルギーをISに供給できるサブタン

ク程度の効果しかないものだが、その使い方を限定すれば相当なエネルギーを捻出できる。そうネクロの結界を破壊する程度の力はではずだ

「これしかないか」

小型化できず車のエンジンと同程度の大きさになってしまっている。これでは使えないと思った物の今こうしてやっと利用価値が出てきた

「こうなると大きくてよかったと思ってしまうな」

ISコアと同じ大きさでなければ使えない、失敗かと廃棄しようとしていたが、まさかこんな所で利用価値が出てくるとは思わなかった。私はそう苦笑しながら、そのデバイスコアのエネルギーバイパスを一極化し方向性を固定するようにプログラムを組みなおし

「出力を更上げるために少し手を加えておくか」

今のままだと十分な出力を得れない可能性がある、それだと本末転倒だ。廃棄する予定だったISのパーツと組み合わせ、即席の爆弾を作り上げる

「これならば八神龍也も気付くだろう」

この爆弾の目的は1つだけ、八神龍也にこの場所を知らせる事。束は抵抗するだろうが、あの男なら束の抵抗も苦とせず無力化させることが出来るだろう……私は深く溜息を吐きイスの背もたれに背中を預け

「最近感じるこの嫌の感じ段々近づいているな」

ゆつくりと、だが確実に自分たちに迫っている殺意。これから逃げることは出来ないだろう。私は目を閉じて少しだけ眠りに落ちることにした。せめて夢の中では私が望む幸福があることを願って……

だがアズマの願いは叶うことはなく、終わりの時はもう直ぐ近くまで迫っていたのだった……

第104話に続く

第104話

第104話

IS学園の地下ブリーフィングルームを使う時。それは有事の際だけだが

(こんな事態は想定していないわよ)

私は心の中でそう呟いた。ブリーフィングルームは異様な空気に満ち殺伐としていた。はやてさんと龍也君、千冬と私と一夏君。そしてスコールさんだ

「なんだ？俺になにか言いたい事があるのか？」

射抜くような視線。ペガサスだ、刺す様な殺気を纏いながら椅子に腰掛けている。私と千冬は平気だけど一夏君の顔が青い。殺気に当てられているのだろう

「殺気を抑えてもらえないかね？子供には刺激が強い」

「ならお前も攻撃の態勢をやめたらどうだ？」

ペガサスの言葉に驚いて龍也君を見る。だけど龍也君は妙な素振りを見せてない……どういうことだろうか？

「それで？お前の出す情報はなんだ？」

龍也君の言葉にペガサスはふんつと鼻を鳴らしてから

「ネクロが用意している物と今後の動きの情報を出す。代わりに貴様とそこの小僧の力を貸せ」

あくまで高圧的な態度を崩さない。それは自分の有利さを理解しているからこそその態度だ

「私は判るが、一夏まで？なのはとフェイトで足りるのではないのか？」

「まずはお前が力を貸すのかどうかだ」

「ふむ……ではネクロの情報を先にだ」

「俺も妥協は出来ん。先にお前が了承してからだ」

互いに完全な平行線だ。とは言え私とかが口を挟むと話がこじれるかもしれない……ここは龍也君とペガサスの話し合いを待つしか

ない。互いに睨み合っている、龍也君とペガサスを見ていると

「OK……力を貸そう」

折れたのは龍也君だった。向こうが折れないということを理解したのだろう、あのペガサスと言うのは自分の立場を知りその上でこの場に来た。折れる訳がないと判断したのだろう。はやてさんも仕方ないという表情で頷き

「それであんたの知ってる情報は？」

「ヨツンヘイムは改良こそ進んでいるが、想定していた戦略兵器としての価値はない。あくまで防衛装置としての役割に落ち着いた」

淡々と語るペガサス。その話をメモしながら龍也君は

「ネクロの科学力でも不可能だったわけか？」

「部品が無い。修理が限界だったわけだ」

嘲笑うように言うペガサス。私と千冬そして一夏君は完全な蚊帳の外になっているが、仕方がない。私達が知らない話だから無理に割って入ることも出来ず、話が終わるのを待つしかなかった

「それでもこの世界の人間の兵器では破壊は出来ないだろうがな」

破壊できない防衛兵器。どこかの国が暴走して核ミサイルとかを持ち出さないと良いんだけど

「次にだが。量産型ネクロディア・ゼファイルスとゴスペル。デイス・デイスガルム。それと……平行世界の織斑千冬達のネクロ態、ペリト・ベルフェゴール・イナリ・アヌビス・ラクシユミ・ハーデス・ベルゼバナ」

なんか敵のほうの数が圧倒的に多いんだけど……ってそれよりもペガサスがネクロのことを知っているならこれだけは聞いておかないと

「平行世界の千冬とかの情報は？」

ネクロも脅威だが。前にアリーナに現れた千冬達のネクロも脅威だ、出来ることなら情報を知りたいと思ひ尋ねると

「無い。あいつらは精神が極めて不安定だ。常に調整中で滅多に合うことは無い」

精神が不安定……そう言えば前にアリーナに出てきた時も酷かつ

たわね。あれがデフォルトってことか……判ったのが精神状態だけだが。それでももしかすると付け入る隙になるかもしれない。しつかりとメモをしておくことにする

「それとネクロの動きだが。近いうちにベルフェゴールとイナリが動く、目的までは知らんがこれは確実な話だ」

「イナリと言うのはあれか？狐耳の」

前にスコールさん達を襲っていたネクロの事だと思い。スコールさん達に尋ねる千冬。スコールさんはええと頷きながら

「ええ。イナリは人間に擬態出来るから、各国に積極的に関わっているみたいよ」

人間に擬態できるネクロか。そう言えば前にIS学園に進入してきたネクロもいたわね……本当にネクロって言うのは能力のバリエーションが多いわね

「ペガサス。1つ聞くけど、前にIS学園に侵入して来たネクロがおった。あれはなんて言うんや？」

「ラクシュミだ。この世界で生まれたネクロらしくてな、魔力は持たないが特殊な能力を持っている。自身をオリジナルとして自分自身をコピーできる。あいつは端末と言っていたがな、それから情報を集めて整理している完全な情報戦特化のネクロだ」

世界に適応したネクロってやつね。龍也君達が気付かないわけだ

「スコールは知っていたのか？」

「いいえ、そう言うネクロがいるとは聞いていたけど、まさかそんな能力とは思って無かったわ」

ネクロといえば攻撃特化。まさかそんな進化をしているとは私も思わないわね、プロでも知らないパターンか……考えるだけで怖いわね

「一応聞いておきたいが良いか」

今まで黙り込んでいた千冬がペガサスにそう声を掛ける。ペガサスは一瞬だけ千冬を見てからつまらなそうに視線を逸らし

「何が聞きたい」

「平行世界の私とやらの強さは？」

平行世界とは言え同じ自分。その力が気になるのは無理もない、ペガサスは少しだけ考える素振りを見せてから

「向こうの方が上だな。基礎は同じでも人間と魔導師。そしてネクロ化……腕力や耐久力は考えるまでもなくあちらが上だ。それにネクロ化の影響で攻撃的になっている。自分と同じだと高をくくつていと死ぬぞ」

その言葉は脅しでもなんでもないだろう。ネクロの力を考えればいくら警戒しても足りないくらいだ

「判った。肝に銘じておこう」

また考え事を再開する千冬。いかに戦うかと言うことを考えているのだと思う。あのネクロは一夏君を狙っていたから警戒するのは当然だろう

「さてではペガサス。今度はお前の要求を聞こう。お前は何故私と一夏を指定する？ネクロ相手ならなのはやフェイトの方が戦力になるとおもうのだが？」

ネクロなのに態々IS学園に来て、龍也君と交渉をしたいというペガサス。その理由が判らず、そして更に一夏君を指定してきたことを疑問に思いながら私はペガサスの言葉に耳を傾けたのだった……

龍也とペガサス達の交渉の場に同席するように言われていた俺は場違い感を感じていた。千冬姉やスコールさんは判るが、何故俺を指定したのが判らないのだ

「俺の目的は1つだけだ。覇皇ハーデスを殺すこと。俺はそれだけの為にネクロになった」

「……復讐か」

龍也の呟きにペガサスはそうだと頷いた。復讐の為にネクロ化？ どういうことだ？

「意思がネクロの因子を上回ったって事か、随分と無茶をするなあ？」

龍也とはやてさん達は理解しているようだが、俺達には何の事なのかさっぱり判らない。俺達が首を傾げていると龍也が

「ペガサスは生身の時にあえてネクロの細胞を受け入れ、人間からネクロになったのだろう。通常は直ぐに意識もネクロ化するのだが、ペガサスは意思でそれをねじ込んで自分の意識を保っているんだ。違うか？」

「ああ。かれこれ1000年近く、ネクロの因子と戦っている。最近では発作の間隔が短い、俺には時間がないんだ」

発作の意味が判らないが、恐らく完全にネクロ化するまでもう時間が無いと言う事なのだろう。だからこうして龍也の所に来た

「でもそれなら確実性を取ってなのはさんとかフェイトさんに協力して貰えば」

「それが出来れば苦労はしない。ハーデスは魔力吸収・反射の能力を持つ。倒すには物理。しかも近接攻撃しか手が無い」

吸収・反射。ネクロって言うのは本当にどれだけ能力を持っているんだ。ペガサスの言葉に龍也は考える素振りを見せる、その能力のこゝと俺の能力を考えているのだろうか

「なるほど、大体判った。だがそれで何故一夏を指定する。まだ一夏はLV4と戦えない」

「ハーデスは強力なバリアを展開できる。それを破ろうとすれば体力も魔力も消耗してしまう。ならばバリアー貫通能力を持つやつに最初からやらせれば早い」

バリアー無効って零落白夜のことか？だけどそれはISに対してだけだから意味が無いはずなんだが

「ISとデバイスは違うんでしょ？一夏君の零落白夜は効果があるの？」

「それだ。突破出来るという確信が無いのなら、そんな無茶な賭けに一夏を出すのは賛同できない」

千冬姉とツバキさんが反対意見を出す。俺も出来ることなら辞退したい所だ

「出来る。今の一夏のISはデバイスと融合している、少し調整すれば魔力障壁を突破することも出来る」

だが龍也が出来ると断言した。となれば後は俺次第と言う事にな

る……正直怖い……

「なるほどね。それなら一夏君が戦う価値は十分にあるわね。それにどうせネクロに襲われるのだから強い相手と戦っておく意味はあるわ」

「そやね。千冬のネクロも箒達のネクロも一夏を狙つとる……一夏。ここで覚悟をきめい」

覚悟……本当にネクロと戦うという覚悟を決める。膝の上の手が震える……これは武者震いなんかじゃない、これは恐怖でだ……z

「織斑一夏。護ると言う事は戦うことだ、逃げるのなら逃げろ。だがそうすればお前は2度と剣は取れない」

ペガサスの視線が俺を射抜く。その目は真剣そのものだった。俺は震える手を見つめて自分の意志でどうしたいのか？それを考えた（護ると言う事は戦うこと……それはずっと見てきた）

千冬姉や龍也の記憶。そしてクラナガンで出会った隊員の人達……その人達も言っていた、怖いけど護る為に失わない為に戦うと……じゃあ俺は今ここで逃げていいのか？

（逃げたら俺はずっと逃げ続けるじゃ……）

逃げてどうなるんだ？俺はネクロと戦うと決めて覚悟を決めたんじゃないのか？じゃあ何で俺の手は震えてるんだ？

「一夏。決めるのはお前だ、お前はどうしたい？」

千冬姉が俺の肩にてを置いてそう尋ねてくる。その手は俺がこうありたいと思つた手だ……俺は……俺は！

「戦う！俺はもう逃げない!!」

震えている手を机に叩きつけ強引に震えを止めて、龍也とペガサスを見て叫ぶ

「だ、そうだ。これで取引成立だな」

「ああ。とは言えハーデスは滅多に出てくるネクロじゃない、だが必ず仕掛けてくる、その時に俺はまたここに来る。じゃあな」

言うだけ言ってペガサスは闇に溶けるように姿を消した。俺は背もたれに深く背中を預けて溜息を吐いていると

「言い切ったな。まあそれくらい思い切りが無いとあかんで」

「だな。言い切った以上はやり遂げろよ」

龍也とはやてさんがそう声を掛けて部屋を出て行く、多分ペガサスからもらった情報を整理するんだろう

「一夏。よく言った。頑張れよ」

「白式はばつちり調整するからね」

「時間がどれくらいあるか判らないけど、私とオータムも貴方に戦い方を教えるから。頑張りなさい」

次々に声を掛けて部屋を出て行く。俺は深く溜息を吐きながら

「怖いとか言ってる場合じゃない」

クラナガンでは暴走はなかった。それに最近は夢も見ない、それでもいつ暴走するかもしれないという恐怖はずっと俺の中にあった。だけどペガサスはいつ完全にネクロ化するか判らない中それでも自分の目的のために戦っていた

「俺だって逃げてばかりはいられない」

俺は誰かを護れる人間にずつとなりたかった。俺はもう逃げないと決めた、そして戦うと覚悟を決めた

「もう逃げたくねえんだ」

ネクロからも、ISの暴走からも逃げない。俺は立ち向かう……俺は気合を入れるために自分の頬を叩く、ちよつと力を入れすぎて痛い
が……これくらいで丁度良い

「しゃっ！行くか!!!」

話が終わったのならこれからは訓練だ。フェイトさんの訓練に参加している箒達と合流しようと思ひ、俺は地下のブリーフィングルームを後にしたのだった

何処か判らない紛争地に佇む一体の異形。漆黒の甲冑にその周囲を浮遊する棺のような形をした楯。その足元には無残に切り裂かれた戦車とそして人間だった肉片だけが落ちていた

「脆い。余りに脆い」

上半身と下半身がバラバラになっている肉片を踏み砕き、更なる獲

騒乱を起こした。人間同士の殺し合いの中で人間を喰らい、リンカーコアを取り込み体力と魔力を回復させた

(だがあの世界の魔導師は良かった、意識があればよかったのだが)

ただ殺すことしか考えられない状態で出会ってしまった不幸。俺の意識があれば闘いを楽しむことが出来たのに……

(あの手ごたえはまだ残っている)

腕を切り飛ばされ、楯も全て砕かれ、モロスは中ほどから砕け散った。ボロボロで限界状況の中この手で殺した女の魔導師。俺たちの中では有名な相手らしいが俺はその相手が誰かは知らなかった。封印されていた時間が長かったからだ……

(いつまでもこんなことはしてられん)

盟友であるベエルゼの回復のために魂狩りをしてきたが、これだけ人間の魂を狩れば十分だ。ベルフェゴールも相当な量の魂を刈り取っている。俺がいつまでも魂狩りをする必要はない筈だ

「ベエルゼに話をして見るか」

いつまでもこんな事をしていても意味が無い。守護者もこちらの動きに注目して行動を再開しようとしている。待つだけではなく、こちらから動かなければ俺はこの場をベルフェゴールに任せ、ヨツンヘイムへと帰還したのだった

魔力の消耗のせいで陥っていた眠りから目覚め、ベリトからの報告を聞いた私は王座に背中を預け

「そうか。守護者が戻ったか」

この世界から去っていた守護者が戻ってきた。それは恐らく私達に対する対策が練れたと考えるべきだろう

「ハーデスは？」

「魂狩りにでておられますが、そろそろ我慢の限界かと」

「今まで良くやってくれたと言うべきだ」

私の回復の為の魂をこれでもかと集めてくれた。ハーデスは闘い

を好むネクロだからここまで良く我慢してくれた

「戻り次第王座に来るように伝えてくれ」

「畏まりました。それでは失礼いたします」

ペリトが頭を下げて部屋を出て行く、寝むり起きての繰り返しだったが今は気分が驚くほど高揚している。漸く回復がすんだと見て間違いないだろう

（しかし守護者が戻ったか、1度仕掛けるべきか）

ヨツンヘイムの改修はほぼ完了しているが、向こうの戦力の変化が気になる……

（1度威力偵察を出すか）

ハーデスを出すにしても1度向こうの戦力を確認しておかなければハーデスを消耗させることになる。ハーデスはその能力上短期決戦には強いが長期戦には弱い。情報収集は必要だ

（ベルフェとイナリ。それとベール達の中から1人出すか）

1度戦力を確認しておいたほうがいい。そして確実に撤退させるための策も必要になるだろう

（同時攻撃を仕掛けるか）

丁度手駒として使えるデイスとデイスガルの数は揃っている。1度戦闘データを取った所だ……この機会に出してみるか……

「そろそろ動くとしても、もう少し情報が欲しいからな」

守護者達の能力は判っている。私が知りたいのはそれ以外の戦力のことだ、守護者の世界にもネクロは出現している。必然的に戦力は分断される。だから単独でも戦力になる夜天達がこの世界に居る、だがそれ以外の戦力はどうか？護りながら戦うのは難しい、特にこの世界の人間は弱いから単純に数があるだけでは何の意味もない、だが守護者の下でクラナガンで訓練を受けたと考えると話は別だ。リスクは極力下げる、守護者相手では一瞬の油断が敗因になりかねないからだ

（ここはあえて慎重に行く。お前がどう出るか楽しみにしているぞ、八神龍也）

今はまだ仕掛けるべきときではない。慎重に慎重を重ねてもまだ足りない。守護者との戦いはそう言うものだ、それにこれ以上高レベルのネクロが増えないことを考えると更に慎重になる必要がある。そして相手の出方を見るには

(同時に3箇所だな)

複数の場所に同時にネクロを出現させる。ラクシユミがゲートを刻んでくれているので近くに出現させることが出来る筈だ。

「今一度お前の力を見せてもらおうぞ。八神龍也」

1週間と言う時間は短くもあり長くもある。その時間である学園の人間がどれほど変わったのか？それを知る必要がある、私は配下のネクロとその編成に頭の中に思い描き、仕掛ける時間を場所を念入りにシユミレートするのだった……

第105話に続く

第105話

第105話

アリーナで白式・白雪を展開し、戦闘ではなく機動の訓練をしていたのだが

(出力が高すぎる。反応が間に合わない)

白式を強引に反転させると同時に脚部と背部のブースターで方向転換しアリーナの壁を回避する

「ふー危ねえ」

今はISの絶対防御の出力が落ちている。この状態でアリーナの壁にぶつかれば大怪我は必須だ、ギリギリのタイミングで回避できたことに安堵し汗を拭っていると

「まだまだだな。いつまで白式と同じ感覚で動かしているんだ?」

俺と同じように改造されているのに、既にレーゲンを完全に使いこなしている。ラウラにきつい言葉を言われ苦笑しながら

「ラウラ。中々思い通りにはいかないんだよな」

「お前は急に専用機を持たされたからな、慣れるまで時間が掛かるのは仕方ない。だが学習しろ」

厳しいラウラの言葉。だがその通りなので苦笑するしかない、改修されたISに慣れてないのは俺と等だけ。セシリア達は元々代表候補生として色々なISを使っている。その分俺達より経験があり、機体の癖を掴むのが早いのだろう

「もうラウラ。もっと優しく言ってあげないと」

「そうですねラウラさん。一夏さんと等さんはISに慣れてないので、余り厳しい言いかたは良くないですわ」

シャルとセシリアがそう言ってくれるが

「いや、良いんだ。厳しいくらいが丁度良いんだ」

甘くされると気が緩む、厳しい指導の方が丁度良いと言うと

「よく言った一夏。ならば回避訓練を始めよう。ラウラ手伝ってく

れ」

「マドカ。なるほど良い考えだ」

え？ラウラとマドカ？両手に銃を持って何をする気なんだ

「撃つから避ける」

「いやいや！2人とかは無理だつて！」

「やれば出来る。やって見せろ一夏」

イヤイヤ無理無理!!俺がラウラとマドカと説得しようとしていると、アリーナに警報が響く。それは龍也達が設置したネクロの襲撃を知らせる警報だ。その警報に身構えていると

「集合！」

千冬姉の集合の言葉。俺達は上空から降下し千冬姉の前に並ぶ

「来たな。今の警報で判っていると思うがネクロが来ている、龍也が言うには下位ネクロネクロがメインとのことだ。1度実戦経験の為にチーム編成をして各個ネクロ撃破へ向かえ」

実戦!?!?ついにか……来るべきときが来たと思う反面。若干の恐怖を感じる

「大丈夫なんですか？私達だけで」

シエンさんが不安そうに尋ねる。いやシエンさんだけではなく箒やヴィクトリアさんも不安そうにしている

「龍也達が控えていて危険と判断したら救援に向かう。勿論私もだ、1度実戦経験をつんでおけ」

これは何を言っても駄目だ。既に決定している事だ、なら俺達も覚悟を決めなければならぬ

「教官。編成はどうなるのですか？それと展開位置の場所は？」

ラウラは既に思考を切り替えたのか鋭い光をその目に宿し、千冬姉にそう尋ねる。簪さんや弥生さんも若干の怯えの色を見せる物の覚悟を決めた顔をしている

(俺もそんなことを言ってられないな)

出来るはず、いや出来るに決まっている！まずは気持ちで負けないことだ。俺はそんな事を考えながら千冬姉のチーム編成に耳を傾けたのだった

「龍也さん。いきなりスパルタなんじゃ？」

地下のブリーフィングルームで尋ねてくる楯無に

「スパルタも何も無い、実戦経験をつめる機会があるんだ。それを無駄にすることは出来ない。万が一にならないように慎重に編成を決めた。後は一夏たち次第だ」

IS学園周囲3箇所に見れたネクロの反応。殆どが下位ネクロ。それも1〜2レベルだ。実戦経験をつむには丁度良い。

「だがもし上位レベルが来たら？」

「そうなれば直ぐに私達が出る。無論お前達もな」

既にネクロと交戦している楯無とユウリは待機。はやて・なのは・フェイトは一夏達が戦うエリアの近くで待機している、いざとなれば援護にはいる手筈になっている

「龍也君が動かないのは何か理由があるのかしら？」

ツバキさんの問い掛けに私はモニターを見ながら

「護る戦い。壊す戦い。簡単なのはどちらでしょう？」

「……壊す戦いよね？好きなタイミングで仕掛けれるんだから」

「そう。それもありませんが、それでは50点です。護る戦いは相手より強くなければならず、そして相手の戦いに応じて戦い方を変えなければならぬ。私がここにいて向こうは波状作戦を取つてくることは容易に判るでしょう？」

本陣を私1人にするための波状作戦。しかし私の目的は一夏達に戦闘経験をさせること。だからあえて動かない

「大丈夫かしら？」

不安そうにしている楯無。確かに実戦経験をさせるのは不安だがいつまでもそんな事は言つてられない

「信じて待つてみる事も大事だよ」

「う……そうね」

楯無は納得していないようだが表面上は頷いた。私はモニターを見ながら

(1週間とは言え私が本気で指導したんだ。少しは結果を見せてくれ

よ)

私は心の中でそう呟き。周囲の結界の密度を上昇させこれ以上敵が増えないようにしてから、モニターに意識を集中させるのだった。そしてモニターに姿を見せたのは一夏・ヴィクトリア・鈴・マドカの4人組だった

(オーソドックな陣形で来たか。これを考えたのはマドカだな)

一夏とヴィクトリアをセンター・鈴とマドカがバックス。典型的なフォーメーションだが。こういう状況ではこれがいい、いい判断だ。地面から這い出るように姿を見せるネクロ達を見ながら瞳に闘志を映す一夏、気持ちでは負けてないか。あとはどうなるかだな

交戦を始めた一夏達を見て私はどうなるかを考え始めたのだった

一夏とヴィクトリアをセンターに起き、オールラウンダーの私と鈴はその後ろで状況を見ていた。一夏とヴィクトリアが前衛なのは単純に防御力と攻撃力から判断した。私と鈴のISは全レンジに対応できる分若干防御が薄い。相手の数が判らない以上後衛がいい

「おらあ!!」

「むんー!」

一夏とヴィクトリアはそれぞれ手にした、雪片式型とグロリアスヴィクトリーでネクロLV1と対峙している

「キキッ!!!」

「はっ!!!」

一夏の脇を抜いて私と鈴に近づこうとしたネクロを両断し、雪片を両手持ちに持ち替えLV2の斧を受け止める

「一夏少し首を傾けろ!」

即座にビームライフルを抜き放しネクロの肩を穿つ

「もらいー!」

体勢を崩したネクロ目掛け鈴が衝撃砲を撃ちその身体を弾き飛ばす

「いけっ!」

そしてヴィクトリアが拳を突き出すとビットになっっているグロリアスヴィクトリーがLV2の胴体を打ち抜き消滅させる

(AMFは問題なく稼動しているか)

ネクロの障壁を打ち抜く加工をされていると聞いていたがここまでは正直驚く

「中々行けるな!」

「馬鹿!調子に乗ってるんじゃないの!もっと周りに意識を向けなさい!」

鈴の怒声が響く。まだたかがLV1を3体。LV2を1体倒しただけ、敵の数はまだ多い。慢心が出来る状態ではない

「悪い!切り替える!」

両手にエネルギークローを作り出しネクロと応戦している一夏を見ながら、周囲を見る

(数は約20。そのうち11がLV1。残りは全てLV2か)

LV1を前衛において、LV2は何かを観察しているような素振りを見せている

(マドカ。あの後ろのあたし達をずっと見てるわね?)

プライベートチャンネルで尋ねてくる鈴に頷く。やはり鈴もそう感じたか

(クラナガンに行っていたことをネクロも知っているのか?)

となると今回の襲撃は威力偵察の可能性がある。私はスカリエツティに搭載してもらった新型のライフルと格納し、AMF弾を搭載した通常のライフルに持ち替えながら

(今回のネクロの攻撃は偵察目的のはずだ、新搭載された武器の使用は控える!)

私の言葉に頷きヴィクトリアと鈴も同じく新搭載の武器を格納し今までの武器に持ち替える。一夏だけはそれが無いのでそのままだが、一夏は白兵戦向けだ。出力向上とかだけだから問題ない。それよりだ

(何処かにもう1人居るはずだ)

どこにいます?今の戦闘で確信した。LV2までならコンビネー

シオンを取れば勝てる、しかしそれにしては

「ニンゲンその程度か？そのテイドで我にカテルと思っっているのか？」

「ヨワイ！弱いぞニンゲン！もっとキサマラノ力を見せてみる！」

何故挑発する？私達の力の方が自分達を上回っているのが判らないのか？

「くっ！舐められて」「一夏！安い挑発に乗ってるんじゃないわよ！陣形維持！」

前に出ようとした一夏を鈴が窘める。一夏は直情型だからこうして窘める存在が必要だ、一夏のことを鈴に任せ私はアスモデウスの索敵を最大に設定し索敵を始めた。もし私の考えてることが当たっているのなら

(この場以後1人ネクロが居る)

隠れてこのネクロ達に指示を出しているネクロがいる筈だ。恐らくLV3程度だと思いがこうして隠れられていると嫌な物だ

(どこだ？どこで見ている？)

一夏達のバックアップしながら私は隠れている。もう1人のネクロの存在を探し始めるのだった。

マドカを見つめる視線。縦に割れた瞳孔に危うい光を宿したそのネクロは

「ふーん。中々感が良いのがあるじゃない」

木の枝の上に寝転び、ふあつと大きく欠伸をしながら

「まだあたしが出る幕じゃなさそうだし、少し寝るか」

そう言つてそのネクロは目を閉じて本当に寝始めてしまった。風に揺れる髪がゆらりと揺れるのだった

「我が乞うは、蒼風の盾。月光の騎士に、暁の光を」

簪さんが歌うように詠唱をすると私とエリスさんのISを淡い水色の光が包み込む

「防御魔法。少しはマシになるとおもう」

ぼそぼそと言う簪。私は爆真甲を打ち鳴らし

「マシところか凄くいいよ!!」

爆真甲で飛び掛ってきたネクロを纏めて弾き飛ばす。これすごい、防御魔法って言ってたけど攻撃力も上がっている

「ふー……行けッ!!」

今までのヤタガラスとは少し形状の違うISを展開しているエリスさん。ヘッドギアが完全にヘルメットになり、右目をゴーグルで隠している。そしてランドセルブースターに増設する形でウイングとシールドが装着されている

(あれが新型のパッケージ……)

私達のISにも装着予定のバックパック。今までのパッケージと違い着脱自由でISの動きを損ねないように再設計されているが、出力や機動力はパッケージ以上に上昇している。エリスさんが鋭い掛け声と同時に、鞘に収めている日本刀型のブレードをエリスさんが抜刀すると、三日月状の光の刃が放たれネクロを両断するが

「う……」

一瞬よろめくエリスさん。まだ魔法の扱いに慣れてないのに使ったから反動が来たのかもしれない。それかバックパックのせいで思うように動けないのかもしれない。私がフォローに入ろうとするとそれよりも早く

「エリス。後退下がってッ!」

シャルロットさんがその隙に飛び掛ってきたネクロの銃弾を叩き込み弾き飛ばす。銃身や弾丸は前と同じだが弾頭に特殊加工を施しているからネクロにもダメージを与えられる。私はそれを見て

(私もなんか飛び道具欲しかったなあ)

そう思うものの元々私は近接タイプ。射撃の細かい計算とかは無理かと苦笑し

「チャクラムシュートッ!!」

爆真甲からワイヤーで繋がれたチャクラムが射出されネクロに迫る。これで牽制本命は爆真甲の一撃!耐性を低くし突撃の準備をしていると

「コンナ物があ!?!」

「へっ!?!」

チャクラムを受け止めようとしたネクロの肩がチャクラムの刃で切り裂かれる。私は即座にチャクラムを回収し

「シャルロットさん! トドメよろしく!」

「OKッ!!」

2発の銃声が響き、片腕を失ったネクロの胴を穿ち弾き飛ばす。そのネクロは2・3度跳ねて動かなくなった。これも新開発のAMF弾って奴の効果だろう

「シエンさん。考え事はそこまでにしてください」

エリスさんが左腕を振るい光刃を飛ばす。新搭載の投擲兵器。私のチャクラムと違い完全なエネルギーなのでスピードが速く、牽制に適している。それで私に近づこうとしてきたネクロを後退させる。私はその後退したネクロのほうに踏み込みながら

「ごめん。やっぱり凄いつて思ってたさ!」

拳を握り締め飛び掛ってきたネクロにアッパーを叩き込み殴り飛ばす

「それはもうミタ」

「えっ!?!」

空中で態勢を立て直したネクロは着地と同時に光弾を打ち出してきた

「危ない!」

簪さんが放った光弾がそれを相殺する。さっきまではあれで倒せたのに何で!?! 若干混乱しバックステップで距離を取る

(どういうことだと思っ? シャルロットさん)

後ろで情報整理に集中していたシャルロットさんにそう尋ねると、シャルロットさんは多分と前置きしてから

(ネクロは自己進化するって言ってたよね? 何回も見て耐性を得たってことじゃ?)

自己進化ってここまで早いのか!?! 予想より数段はやい

「フォーメーション変更! 私とシエンさんがセンター! 簪とシャル

ロットさんは後衛で射撃用意！」

エリスさんがそう指示を出して前に出てくる。簪さんはシャルロットさんと並んで目を閉じて

「穿て、電乱を纏いて我が敵を……」

詠唱魔法。色々覚えたって聞いたけど後ろで詠唱をしてるのを聞くこと

「護らないとって思うよね!!」

「ぬう！カタイナ」

爆真甲を合わせて盾にしネクロの一撃を弾き飛ばす。耐久力を挙げてあると聞いていたけどネクロの一撃をはじけるレベルになっているなんて驚きだ

「ハッ！」

「ギガア!?!」

体勢を崩したネクロを両断するエリスさんを見て

「私盾じゃないよ?」

「仕方ないでしょう? 私は高機動タイプなので防御力は薄いんですから、頑張ってください」

こんな状況でも冷静なエリスさんに凄いなあと感心しながら

「OK！私に任せて」

チャクラムを収納し、武装を待機状態に戻し両腕の爆真甲を構え、その隙間からネクロの動きを観察しながら。簪さんとシャルロットさんを護る事を第一に考えゆつくりとネクロの動きと自分達の動きの両方を頭に入れる

(自分でも驚いてるくらい冷静になっている)

クラナガンで何度も教わった。特に昔の私と似てるからとよく訓練を見てくれたスバルさんのおかげだ。周りを見るのではなく、上から見ているように考え、仲間のことを考える。そうすればおのずと周りが見えてくる。最初は何のことか判らなかつたけど……こうしてみるとどういう意味なのか良く判る

「エリスさん！飛んで！斜め後ろから来るよ！」

「ッ！はっ！」

空中で立て直したエリスさんが奇襲を仕掛けてきたネクロを両断する。前しか見てないのに周りが見えるような気がする

(行ける！私は前に行ける！)

今までの私とは違う、全く異なる戦い方が思いつく。私は今ここでこうして実践の中で自分が強くなっているのだと実感するのだった。

「ふーん。中々やるじゃない小娘の癖にさ」

ネクロと戦っているエリス達を見てにやりと笑うネクロ。それは敵を見つけたという笑みではなく

「ふふふ。久しぶりに魔力を食べれそう♪」

簪とエリスを餌を見るような目つきで見つめ、ふふふと楽しそうに笑うのだった……

(攻撃が効かなくなっている!?!?どうということだ!)

今まで有効だった攻撃が効かなくなってきた！?どうということだ!?!空裂のエネルギー刃がネクロの装甲の前に弾かれ、届かない

「箒さん!下がって!」

「何かおかしい。1度様子見をしたほうがいい!」

セシリアとクリスの言葉に頷き1度距離を取る。弥生も同じように下がってきている

「どうということだ。さっきまで効いてた攻撃が効かなくなってるぞ」

「判らない。それは私が聞きたい」

弥生も不思議そうに何度も首を傾げる。どうということなのか全く判らない

「クリス。分析を頼む、私が前に入る」

中距離サポートをしていたラウラが前に出てくると同時にワイヤーを飛ばしネクロを縛り付ける

(ラウラの攻撃は通った?何故だ)

雨月の攻撃は命中の前に無効化され、弥生の打撃とエネルギー波は効かないのになぜだ

「次はこれだ!」

今度は射撃からワイヤーと繋ぐ。今度は射撃は通ったが、ワイヤーは弾かれた

「1つの攻撃に対応して無効にする！同じ攻撃を続けるな！」

クリスの言葉に頷き、雨月から空裂と続けて攻撃する

「グギッ!？」

射撃で体がういたネクロを空裂の斬撃が両断する。直ぐに態勢を立て直し距離を取る

「おらああ!!」

弥生がアツパーでネクロを打ち上げ、エネルギー波を纏った拳がネクロを打ち砕く

「効いてますわね、それなら私とクリスさんで支援します。箒さん、弥生さん、ラウラさん！トドメをよろしくお願いします」

セシリアとクリスがそれぞれスナイパーライフルと小型のビームライフルを構える。

(ここは連射よりも一撃の破壊力に集中させる)

雨月を鞘に収め、空裂を両手で握り一撃の威力を高める事に集中する

「んじゃあたしはこれだ」

PICを解除し地面に降り立ち、拳を構えファイティングポーズを取る。弥生は格闘戦に特化しているのでPICで浮遊しているより、地面に立っているほうが良いのだろう

「さて、掛かって来い。貴様には負けんぞ」

ラウラは両手にビームブレードを発生させ、ワイヤークロアの展開準備をしている。セシリアとクリスの攻撃でネクロの耐性を無効にし一撃で決める

(長期戦になるとどんどん耐性が増える可能性がある。一撃必殺のつもりで攻撃してくれ)

プライベートチャンネルで指示を出してくるクリスに頷きながら、空裂を構え

(やりやすいものだな。1人ではないという事は)

自分1人でやるのではなく、助けてくれる仲間が居る。これほど頼

もしい事は無いだろう

「シアアアアッ!!」

爪を振りかざし突進してきたネクロの一撃をしたから切り払い

「甘いぞッ!!!」

唐竹切りで両断する。若干鈍い手ごたえだったが強引に両断する

「お。やるな箒! あたしも負けてられないな」

「ニンゲンが何をイウ?」

「はっ! 人間を舐めんなよ!!!」

まるで交通事故のような轟音を響かせネクロと殴り合っている。いや正しくはネクロの攻撃をいなし自分の攻撃を叩き込んでいるが。ネクロが消滅する気配は無い

(LV3と言う奴か?)

冷静に周囲を見ると影のようなネクロにボロボロの甲冑を纏ったネクロ。そしてその後ろに2体。そして弥生と対峙しているネクロの計3体雰囲気の違いネクロがいる

(もしかするとあの2体はLV3かもしれない。エネルギー配分に気をつける。サブタンクを搭載してきたとは言え無理は禁物だ)

ラウラの警戒の言葉に頷く。実戦の中でエネルギー切れをするわけにはいかない。今回は背部に一時的にエネルギーを回復させるサブタンクを1人1個搭載している。全開するわけではないが、エネルギー切れの可能性はかなり低くなる

(冷静だ。平常心を保て)

クラナガンで何度も何度もシグナムさんに言われた。カツカするのは良い、だが心は熱く頭は冷ややかに、冷静さを失えば死ぬぞと何度も何度も言われた。それから座禅等の精神修行の時間を多くした。今までの私ならネクロの攻撃が通用するという事で調子に乗っていたかもしれないと苦笑しながら空裂を構える。ふーっと息を吐きネクロを見据え

(一夏達は……いやきつと大丈夫だな)

龍也さん達にもクラナガンで出会った人達にも言われた

(仲間を信じろ。良い言葉だ)

私達が戦えているんだ、一夏達だって大丈夫に決まっている。

「キキーツ!!」

「はっ!!」

影から飛び出してきたネクロの一撃を受け流し、空裂で両断する。

「グガア!?この俺が……」

「人間を舐めるからだよ。バカヤロー」

弥生の一撃がネクロの胸を貫き消滅させる。ラウラも同じように

「チエックメイトだ」

ワイヤーブレードでネクロを絡めとり、自身の方に引き寄せネクロの胸をブレードで刺し貫き消滅させる。それを見て私は皆も訓練の成果が出ている。一夏達だって大丈夫な筈だ……だから今私が出れることは目の前の敵に集中する事だ。影から這い出てくるネクロと後方で動く気配の無いネクロ。その両者を睨みながらも1度深く深呼吸をしたのだった

「ふむ。悪くない、たかが人間と思っていたが戦うだけの価値はありそうだ」

闇に紛れ箒達を観察しているネクロはくつくつくと楽しそうに笑い出す

「魔導師相手ではないから乗り気ではなかったが、中々楽しめそうだし動く事のできなかつたフラストレーションを晴らすために戦いに出たのに人間相手と言うことで、苛立ちを募らせていたネクロだったが、こうして戦っているところを見て気が変わったらしく、腰の鞘からシャムシールを抜き放ち

「そろそろ仕掛けてやるか」

にやりと笑いその場から飛び立ち、箒達の方へと向かったのだった

……

「中々やるなあ」

「そうだね。短い期間でよく成長しているよ」

「だね。だけどまだ甘いかな?」

兄ちゃんの指示でいつ上位レベルが出てきてもいいように、一夏達
が戦っているエリアの近くで待機しながら、サーチャーで一夏達の戦
いを見ているのだが予想よりも数段動きが良い。一週間の実践的な
訓練の成果だけではなく自分達の心構えも変わったからの動きの良
さだろう。連携を考え突出しない、集団戦闘の定説を護った戦い方を
している

(チーム編成が良かったんかな?)

指示を出せるマドカ。状況把握に長けたエリスとシャルロット。
そして分析能力に長けたクリスと軍人のラウラ。それぞれをバラバ
ラに配置し動きを見ているのだが、予想よりも良い連携が取れている
「だけどそろそろ動き出そうじゃない?」

「まあね。今回は向こうも偵察に来ているし、一夏達の今の実力も見
れたしもう良いかな」

そろそろ乱入してもいい頃合かもしれない。しかし向こうが動い
てこないのなら私達が先に動くわけには行かない

(兄ちゃんの予想なら上位レベルが1体紛れてる筈やけど、問題は誰
が来るかだ)

ヴオドオンやハーデスだと一夏だけでは不味い。しかし威力偵察
にそんな高レベルのネクロが来るだろうか?

(こういう手を打たれるのが1番面倒やなあ)

普通に攻め込まれるほうがよっぽど楽だ。しかしそれにしても
「態々一夏達の偵察のために出てくるとは思わなかったね」

フェイトちゃんが驚きと言う感じで呟く。確かにネクロが態々そ
んなめんどくさい事をしてきたのは珍しいと思う

「それだけ慎重なんやろうな、ベエルゼは」

兄ちゃんからの話で聞いていたが、この世界にいるLV4ネクロは
ベエルゼと言い。自身の戦闘力も高いがそれ以上に戦略に長けたネ
クロらしい。

「それを考えても珍しいよ。慎重すぎる」

「まあな。それは私も気になってるけどネクロの考えていることを
一々全部理解できんやろ?」

そう言う手を打つネクロもいるって言う解釈でいい。深く考える必要は無い

「来たな。やっぱり三箇所同時やね」

一夏達のいる所に突然現れる3つの魔力反応。予想とおりの展開だ

「魔力からするとLV3と4の中間くらいだね」

今の一夏達では苦戦するレベルだろう。私達は打ち合わせ通りに散会し一夏達の所に向かったのだが

(この魔力。箒達のネクロか?)

1体だけいる異質な魔力反応。この感じは箒達のネクロに良く似ている

(誰や? 誰のネクロや?)

私の進む先。鈴と一夏達がいるエリアに現れた異質な魔力反応。それに嫌な予感を感じつつ、私は一夏達達の居る方向へと向かったのだった。しかし私はそこで予想だにしない光景を見ることになるのだった……

第106話に続く

第106話

第106話

ネクロとの実戦は初めてだったが……驚くほど冷静なくらい周りが見えている。ゆっくりとまでは言わないが、無数のネクロの動きの1部がしっかりと見えている

(なんだ案外行けるじゃないッ！)

ネクロの目から放たれた魔力弾を回避し、素早く距離を取り

「お返しよッ!!」

両肩の衝撃砲を放ちネクロを吹き飛ばす。だがその反動で2Mほど後退してしまう

(ちっ連射が売りだったのに、いやあたしの訓練不足か……)

強化された甲龍の衝撃砲の威力は凄まじい物があるが、その分反動も増した。正直な話今のあたしでは連射は無理だろう

「はっ!!」

「いっけえ!!」

ヴィクトリアのグローリアス・ヴィクトリーの横薙ぎの一撃と一夏の白式の雪羅のビームクローがネクロを引き裂き、消滅させる

「ふーこれで終わりかしら?」

構えを解きながら呟くと、後ろのほうで警戒していたマドカから

「馬鹿！なにをしている！この状況で警戒を解くな！」

マドカの鋭い怒声に驚き、構えを取り直すと同時に背筋が凍るような殺気を感じた

「へー中々頭が切れるのがいるじゃない?ねえ?」

この声は!?咄嗟に飛びのくと同時に地面にクレーターが出来る。何かの飛び道具の攻撃だと判る

「あそこだ！一夏！ヴィクトリア！下がれ！」

「ああ！判ってる！」

「ちっ。よりによってこいつか」

一夏とヴィクトリアがあたしのほうに来る。あたしは震える手を

見て

(情けないわね。あたしツ!!!)

力強く拳を握り締め自らの足を叩き、気合を入れる。マドカが指差した方向を見た、そこには

「はい、あたし?このあたし、ボールが殺しに来てやったんだから感謝しなさいよ?」

木の枝の上に座り、足を揺らしながらあたし見ているネクロの姿があった。山吹色のISを展開したそのネクロ……いや……

「平行世界のあたし……」

ボールと名乗ったそのネクロは楽しそうに笑いながら、拳を打ち鳴らし

「そうよ♪同じあたしだから……思いつきり惨たらしく殺してあげる!!!」

楽しそうにそう笑い、両手をあたしに向けて突っ込んでくるネクロ。咄嗟の事に反応できずにいると

「させねえ!」

一夏が割り込んでその突撃を止めてくれるが、そのままガリガリと地面を削りながら押し込まれてしまう。とんでもない力だ

「あーそつちの一夏か。別にあたしはどつちでも良いけど……さきにあんたを殺して連れて帰るのも良いわね!!!」

急に狂ったように笑うその声に、逆にあたしは冷静になった。ここであたしが引けば一夏が殺されると思うと恐ろしいまでに頭が冷えた。震えていた手足の震えも収まった

(マドカ、ヴィクトリアは支援!あたしが一夏のフォローに入る!)

2人の返事を聞かず、雪片式型で応戦している一夏の脇に並び

「へー向かってくるんだ?あたしより弱いのに?」

馬鹿にするように笑うボール。同じ顔だけど、あれはあたしじゃない!怖いとなんて思わないし!逃げない!!!

「舐めんな!化け物になった奴に負けないわよ!!一夏!いくわよ!」

「お、おうっ!!」

あたしは隣の一夏にそう叫びボールに向かって、双天牙月を振り下

ろしたのだった……

ネクロの動きが鈍くなってきた。エリスとシエンさんのおかげかな？そんな事を考えながらも、しっかりと教わったマルチタスクを続け魔法の発動の準備をしていると、静電気に似た刺激が首筋を走る

「シャルロットさん！」

「えっ!？」

呆然としているシャルロットさんの手を引いて、その場を離れると。巨大な火柱と雷の玉がその場を焼く

(あ、危なかった)

あのままだったら、ISごと焼き尽くされて死んでいた……

「へー良い感してるじゃない？小娘」

闇が人の形になる。和服に似た衣装に身を包み、金色の尻尾と耳を持つ女のネクロだった

「私はイナリ。いやさーこの世界つてさ。魔力少なくて調子でないのよねえ」

お札を胸の間から取り出して、くすくす笑っているイナリ。

(な……名にこのネクロ……なにかおかしい)

化け物だからまともとはいえないのは当然だが、それでもなおおかしいと思える

「いけっー」

先手必勝と言わんばかりにシャルロットさんの手の中のショットガンが火を噴くが

「そんなの効く訳無いじゃない。バーカッ！」

お札を地面に叩きつけると地面が盛り上がり銃弾を弾く、しかもそれだけではなく岩の柱が地面を走りシャルロットさんに迫る

「嘘ッ!?「このおっ!!」」

予想外の攻撃に驚き反応が遅れたシャルロットさん。だけどシエンさんが横から岩の柱を殴り破壊する

「じゃあ次はこれ！雷よ走れ！」

イナリが無数の札を放り投げると黒い稲妻となり、私達に迫る。それを見た瞬間私はシェンさん達の前に出る

「簪！」

「判ってる！」

エリスの言葉を聞く前に前に出て詠唱待機にしていたプロテクションを発動させる。龍也さんいわく緊急程度の効果しかないらしいが体勢を整える時間稼ぎくらいにはなるはずだ

(え？なにこれ)

プロテクションに当たった瞬間弾け飛ぶ稲妻。衝撃もダメージも何一つ無い

「はッ!!」

稲妻と私のプロテクションの合間をすり抜けてエリスがイナリに切りかかるが……

「おっと危ない危ない」

お札が剣になり、エリスの一撃を弾く。イナリはその反動を利用して後退しお札を両手に構えて

「今ので大体判ったわ。その金髪は攻撃と防御特化。そのポニーテールは攻撃と機動力。後ろの金髪は射撃支援。その眼鏡は支援タイプの魔導師ね」

！全員のタイプを一瞬で見破った!?!もしかして今の攻撃は偵察の為に……

「そうと判れば後はねじ伏せるだけ。眼鏡と金髪はまあ……手足をもぎ取ってヨツンヘイムに連れて帰ろうかしら? 私達には魔力が必要だし？」

にやりと笑うイナリは私とエリスを見つめている。その目は肉食獣と言って良いほどにキラキラとした輝きに満ちていて、思わず後ずさりそうになるが

(簪！私が直ぐ行くから少しだけこらえて!!)

脳裏に響くフェイトさんの声。どうやら今こっちに向かってきてくれているようだ。私は恐怖で思考が止まりそうになるのを必死に我慢して

「シエンさん、エリスは前衛！私とシャルロットさんが支援する！
フェイトさんが来るまでこらえるよ！」

今は戦うのではなく、生き残り時間を稼ぐことだけを考えるんだ……私は頭の中を切り替え、防戦のシユミレートと魔法の詠唱。そして全員が生き残るための作戦を考えるのだった……

激しい剣激の音が何度も何度も響き渡る。

「ふっはははッ！どうした！どうした！どうした！！防戦一方か小娘えッ！！！」

高笑いしながら連続で振るわれるシャムシール。空裂と雨月を振るい続ける

（早過ぎるー！それになんて重い攻撃だ！）

アヌビスと名乗ったネクロはセシリアもラウラもクリスも無視して、私だけを狙って攻撃して来ている。

「くそが！！！」

「はっ！ぬるいぞ！！！」

弥生もネクロに殴りかかるがその攻撃を素手で受け止め、お返しだと言わんばかりに繰り出された拳が弥生を殴り飛ばす

「うわっ！」

「弥生！」

殴り飛ばされてきた弥生を受け止める。死線の紅（スカーレット・オーガ）の装甲は陥没し、カラーリングも剥がれて来ている

（くそつたれ、なんて馬鹿力だ）

（それは同意する。勝つ目が何も見えないな）

アヌビスはセシリア達を完全に無視している。それに対してセシリア達は何もしてない訳ではないのだが

「隙ありますわ！」

「思い通りにはさせん！！！」

アヌビス目掛けセシリアとクリスの射撃を放つが

「無駄だ。我に射撃は届かない！そこで大人しくしている！雑魚共

がッ!!!

完全に死角から放たれたのにアヌビスは見もしないで打ち落とす。これはさつきからも何回も繰り返されている

「くっ！やはり届きませんわ」

「これがあいつの能力か！厄介な能力だな……」

推測は確信へと変わった。アヌビスは直接攻撃に特化しており、そして射撃を完全に無効化する能力……

（戦えるのは私と弥生。それにラウラだが……）

ラウラの武装は完全に相手の懐に入らなければ使えない。間合いが広いシャムシール相手では戦えない。そして弥生のISは完全に近接特化で、SEがそのまま攻撃力になる能力だが、これだけダメージを受けていると攻撃力は低下している

（戦えるのは私だけか）

赤椿の能力で辛うじてSEが残っているが、それもいつまでも続かない。

「ふふふ。どうした？さつきまでの勢いはどうしたんだ？」

シャムシールを肩に担ぎ笑うアヌビス。その態度には余裕が見えている。

（いや、事実余裕があるのか）

自分に負けは無いと判っているのだ。だからこそこの余裕……くやしいと思えるほど余裕が無い。

（圧倒的な戦力差。これがレベル3の上位レベル）

私達が倒していたLV3とは比べようが無いほどに力強さに満ちている……それに対して私達のISは半壊している。今のこの状況では何をしても勝てる見込みが無い

「箒！弥生下がって!!!ディバイン……バスターツ!!!」

「こ、この攻撃は!?ぬぐあつ……」

なのはの声に驚き下がると同時に桜色の光がアヌビスを弾き飛ばす

「間に合ってよかった。ここからは私が」

「なのは……助かった」

完全にジリ貧だった。なのはが来てくれたことに安堵していると

「なのは！あのネクロに射撃は」

ラウラが射撃は効かないと警告しようとした時。砂煙の中から

「くっ……エース・オブ・エースッ!!」

シヤムシールの片方が砕け、片膝を付いているアヌビスが姿を見せる

(どういうことだ、何故攻撃が……)

ラウラ達の射撃は無効化されたのに何故なのはの攻撃は通ったのか？それが判らず首を傾げていると

(もしかするとアヌビスはこの世界のネクロなのかもしれない)

龍也さんの言葉によるとネクロはその世界に適応した進化をすらし、もしかするとアヌビスの射撃無効化能力は実弾。しかも私達の世界の武器。ISの兵器にだけ対応する物なのではないのか？

「ふっふっふ……」

突然笑い出したアヌビスは私達を見て、シヤムシールを鞘に収めながら

「我が目的はこれで達成した。IS学園の人間の戦力分析……末恐ろしい成長スピードだ。貴様等の警戒は必要なようだ……これからは貴様らも標的にさせてもらうぞ。シノノノ・ホウキ。ススキノ・ヤヨイ」

笑いながらアヌビスの背後に黒い影のようなネクロが現れる。あれはLV1ネクロか……？

「逃がすと思っているの？」

なのはがデバイス。レイジングハートを向けるとアヌビスは

「ふっはははは!!逃げさせてもらうまでよ！覚えておけ！シノノノ・ホウキ！貴様の姉。シノノノ・タバネは既に我らにとって何の価値も無い！そのうちあの女は死ぬぞ」

姉さんが……死ぬ？突然の宣告に思考が停止する。殺されるのか？ネクロに……

「愚かしい人間を利用するまでよ！ふっははは!!さらばだ！」

アヌビスの後ろのネクロがアヌビスを飲み込む。なのはが咄嗟に

魔力弾を放つが

「待て……くっ。逃げられた」

命中したはずなのにアヌビスの姿はない。どうやら完全に逃げられたようだ。くやしいのか、何なのか良く判らない気持ちを感じる。手の中の空裂と雨月の柄ががしやりと音を立てる。力を抜こうと思ふのにそれが出来ずにいると

「最後の最後でしくじるなんて……はあ……取り合えずご苦労様。よく頑張ったね」

なのはさんにそう言われて、やっと手の中から力が抜けた、いや手だけじゃなくて全身の力が抜け思わずその場に座り込む。私だけではなくセシリア達も同じようだ

「っ、疲れましたわ……」

「ああ……疲れた。一挙動一挙動に死ぬかも知れない恐怖。さすがに私も堪えた

「聞くだけじゃなくて、こうして目の前にして判った。ネクロの脅威を……」

「あーまだまだだなあ……」

口々に疲れたと呟きISを解除する弥生達を見ながら私は
(姉さん……今どこにいるんだ)

携帯には連絡が付かない、ネクロに切り捨てられた事を命の危機が迫っていることを伝えなければならぬのに……それが出来ない。私は今どこにいるかも判らない姉さんの無事を心から祈るのだった

私は目の前で繰り広げられている高速戦闘に完全に圧倒されていた。援護とか手伝わないとすら思えない凄まじい戦闘に動くことが出来なかった

「雷光の戦乙女……まいったわねえ！」

「そうは思ってるようには見えないけどね!!」

黒い死神のような姿から、空色のボディアーマーに赤いマントを羽織っているその姿は騎士の様に見えた

「全く……私みたいなLV3を相手に本気なんて大人気ないんじゃない!」

お札が宙にばら撒かれ、それぞれが炎・水・氷・稲妻の形を取り、私達に迫るが

「悪いね。子供しか狙わない相手に手加減する気なんて無いんだよ!」

赤いマントが振るわれると、突然私達の前に風が発生し、それが逆巻き向かってきた炎を掻き消す

「風と雷は私の味方。いつでも力を貸してくれるんだよ!ハーケンセイバーツ!!」

紫電を纏った飛ぶ刃がイナリの手に使っていた剣を中ほどから切り裂く

「すごい……なにあれ……エリスさんは出来るの?」

シエンにそう尋ねられた私は首を振りながら

「出来ません。あそこまでの高密度なのは私にはまだ」

魔力刃自体を飛ばすことが出来るが、あそこまでの威力は無い。精々牽制が手一杯だ

「ふーん。流石に分が悪いわね……ベリト様に頼まれてきたけど最悪」

あーやだやだと呟いたイナリは手にしていたお札を全て和服の中に戻す。フェイトさんはその様子に訝しげに見つめ、油断無く左手のブレスレットから、発生している黄色の刃を向けながら

「何を企んでいるの」

「べつにー?仕事を済ませて、ついでのそのポニーテールと眼鏡を連れて帰ろうかなー?位に思ってただけだし?」

その喋り方にさつきまでの刺々しい感じが無い。本気でこれ以上戦う気はなさそうだ

(なんとかなったみたいで良かったね。簪・エリス)

(う、うん……そうだね)

プライベートチャンネルで無事に戦いが済んでよかったと話している声を聞きながら。私も構えを解いた瞬間

「だからさー。任された仕事だけして帰るわ」

「! 皆離れて!」

フェイトさんの怒声が聞こえたと同時に

「え? うわああああ!」

「! きやああああッ!!!」

シエンさんと簪の悲鳴が聞こえる。それに続いて

「くっ! これは!」

シャルロットさんの悲鳴が聞こえた瞬間。地面から黒い手が現れヤタガラスの装甲を掴む

「これは! ぐっうううう!!!」

凄まじい放電音がする。ISのアラート音が繰り返し響く、絶対防御越しでも身体が痺れる。そして

(うっお義母さんが作ってくれたバックパックが!?)

その電圧に耐えられなかったのか、バックパックから火花が散り爆発する

「くっ……そこっ!!!」

フェイトさんが腕を振るうと雷の槍が地面に突き立つ。それと同時に電撃は止まったが、

「ラファールが……」

「私の神武も駄目だ……」

「そんなあ……」

私含め全員のISが壊れてしまった。過剰な電圧に耐え切れず、制御PCの基盤が焼きついてしまったようだ。けどそれでも最後まで私達を護る為に絶対防御を続けてくれた。それが無ければ私達も黒こげになっていただろう……しかしその僅かな時間にイナリは姿を消し

「あっははは!!! この勝負は私の勝ちよ!」

高らかに勝利宣言の声だけがその場に残っていた。私は完全に壊れ機能を失っているバックパックとヤタガラスを見つめ、その場にしゃがみ込んだまま動けないのだった……

強い……なんて強さなんだ……俺はひび割れた白式の装甲と、刃こぼれしている雪片を見てベールの余りの強さに驚愕していた

「ほらほらー少しは反撃してみなさいよ!!」

甲龍と同じく搭載されている衝撃砲。だが威力が桁違いに高いそれを乱射するベール。俺達はバラバラに分断され、追い掛け回されていた

「くっ！くう!？」

「がっ!?くそっ!!化け物が!」

マドカとヴィクトリアさんが衝撃砲で弾き飛ばされる。マドカの悪態にベールは一瞬きよとんをした顔になったが

「そうよー化け物で悪い!!!」

狂ったように笑いながら鈴の使う双天牙月より一回り大きいそれを振り回しながら、マドカとヴィクトリアさんに追撃しようとするが「俺を忘れてもらったら困るんだよ!!」

「あんたの相手はあたし達って言ったでしょ!!!」

雪羅から放ったエネルギーと衝撃砲が背後からベールを打ち抜くが……

「あー忘れてたわ。だって弱すぎるしねえ?」

完全に無傷でにやにや笑うベール。そしてベールが纏う甲龍。いや「落凰」には傷1つ無い

（くそつたれ!なんて防御力だよ!）

心の中でそう叫ぶ。魔力をなんとか使えるようになった俺にはぼんやりとだが見えていた

（魔力にネクロの力、それにISか……ちよつとした要塞だぞ。これは……）

黄色に似た魔力の光に重なるように黒いネクロの魔力。そして最後に半透明なISの絶対防御の光。外見こそISに似ているが、その本質は城と言っても良い防御力を持った別物だ

「化け物になってまで生きてどうするのよ!」

「はっ！なーにも知らないあたしに言われたくないわね!あたしがどんな世界で生きてたかも知らないくせに!」

「知りたくなんかないわよ！化け物!!!」

（一夏。零落白夜の準備は？）

ベールと口論しながら双天牙月を必死で振るい応戦している鈴が
プライベートチャンネルで尋ねてくる。普通に攻撃しても効かない、
零落白夜を使うしかないのだ

（大丈夫だ、直ぐに発動できるようにしてある）

今まで1回も使わず機会を窺っていた。奇襲でしか効かないだろ
うし、仮に絶対防御を貫通したとしても3重の障壁を切り裂ける可能
性は殆ど無い。だが少しは時間を稼げる筈だ

（少しずつだけど近づいてきてる。あと少しだ）

今こっちに高速で向かってきているはやてさんの魔力を感じる。
だが近くにネクロの気配もあり、中々進めて無い様だが確実に近づい
てきている。はやてさんが来るまで時間を稼げればいいのだ

（だったら早くして！もうそんなに持たない！）

鈴の悲鳴にも似た声が聞こえ零落白夜を使おうとした瞬間。ベ
ルは鈴の双天牙月を片手で受け止めて

「あーイナリもアヌビスも撤退したのね」

静かな呟きだが、その言葉に込められた威圧感に気圧されて思わず
零落白夜を発動することを忘れてしまう。そして次の瞬間

「遊びは終わり……死になさいッ!!!」

双天牙月を握り潰すと同時に重々しい音を立てて落風の両腕から
鎖が放たれ、ヴィクトリアさんとマドカを締め上げる

「あつがああ!!!」

「ぐうう!? ISのぼうぎよ……ぐあああッ!!!」

凄まじい音を立てて放たれる電撃と鎖の締め付けにマドカとヴィ
クトリアさんの苦悶の音が響く、咄嗟に動こうとしたが

「う、動けない!?なんで!?!」

まるで全身が鎖に締め付けられたように動かない。その事に驚き
叫ぶと

「バインド……一夏は後で連れて帰る。だから大人しくしてなさい
……んで……お前もだ!!!」

「えっ！うああああ!!」

「あっはははははは!!」

鈴の頭を掴んで力づくで地面に叩きつけ、頭を踏みつけ笑うベール「全部殺す……殺して、殺して、殺しつくす……ヴィステイラーもルーシエも皆殺す。あたしに必要なのは一夏だけだから」

落凰の纏う光が強くなると同時に鎖に締め上げられていた。マドカとヴィクトリアさんが吐血し悲鳴を上げる

「あがああーうあああ!!」

「がはっ！うぐうう……」

「足をどけ……」「うるさい。ゴミが」きゃあああッ……」

強烈な電撃でISが黒い煙を出している。もう何分も持たない、それに鈴は頭を踏みつけられるだけではなく、魔力で圧迫されているのかISの装甲が見る見る間にくぼんでいく。あのままでは圧死する……それが判っているのに身体が動かない

(力が足りない……俺は……俺には力が足りない)

バインドで縛り上げられ、苦しんでいる鈴達を助けることも出来ない。その事に激しい怒りを感じ……そして己を呪った

爪が掌の皮膚を突き破り、血があふれ出す。激しい怒りと自分への絶望。そして力を渴望した時……

(オレの出番だなッ!!)

(そうだ。お前の力を寄越せ)

(てめえが消えても力が欲しいのか?)

(欲しい。護る力が……欲しいッ!!)

俺はオレのささやきに耳を傾けた。そして次の瞬間には俺の意識は闇へと沈んでいた……

「う、ウオオオオオオオオッ!!!!!!」

獣じみた咆哮が一夏の口から放たれる。それはまるで衝撃波のようにベールを弾き飛ばし、拘束されていたマドカ達をそして踏みつけられていた鈴をベールから開放した。だが鈴達の表情に安堵の色はなかった

「暴……走」

美しい白い装甲は闇のような黒に染まり、その姿を鋭利な甲冑へ作り変えていく、背中には赤黒い魔力で出来た4枚の翼が発生する

「ベールッ!!!」

黒い仮面から覗くその目は赤く、殺意と憎悪に満ちている。そして鈴やマドカの姿をその目に映していなかった。憎悪と殺意に満ちた声でベールの名を叫ぶ

「あ……あは♪イチカーッ!!!」

それに対するベールも先ほどまでいたぶっていた。鈴やマドカに何の反応も見せず一夏を見つめ

「殺すー殺してやるぞ!!!ベール!!再びオレが貴様を殺す!!!」

2振りの剣を構えるとその刀身が開き、黒い零落白夜の光が刀身を覆う

「あはーやってみなさいよ！出来るわよねーッ!!!あんたは前にあたし達を全員殺したんだから！なんでこの世界の一夏の中にいるかは知らないけど……今度はあたしが殺してあげるわよーイチカッ!!!」

ベールとイチカにはそれぞれ互いの姿しか見えていなかった。そして2人は同時に瞬時加速に入り、互いを殺すことしか考えていない。狂刃を振り下ろしたのだった……

第107話に続く

第107話

第107話

サーチャーで箒達の戦いを見ていた。若干危なっかしい所はあつた物の初戦と考えればかなり良いだろう

(まだ荒いが、やはり1人1人の伸び代がかなり大きいな)

ISは残念ながら大破されてしまったが、クラナガンで完全にデータ取りをしてあるので普通に修理するよりも短い時間で修理できるだろう。とは言え

(向こうの迷惑通りになってしまったのは癪だがな)

どうも向こうの目的は箒達の戦力分析だったのだろう。深追いせずに撤退した所を見て間違いない……箒達と簪達を見ていたサーチャーの電源を切り。一夏達の方のサーチャーを見ようとした瞬間
ウーツ!!ウーツ!!!

突然異常な警報鳴り響く。これは……!?!

「直ぐに出る!楯無とユウリは簪達の回収に向かえ!千冬は教師に連絡して医療班を用意しておけ!」

楯無とユウリに指示を出して地下を出る為に通路を走り出す。

「ちよつ、ちよつと!急にどうしたの!?!」

「説明してもらわないと困るのだが?」

走って追いかけてきたユウリと楯無。私は振り返らずに全力で走りながら

「あいつらだ!平行世界の箒達のネクロ!その1体がでてきた!」

「なああ!?!」

いきなり出てくると思ってた無かった最上位の敵に絶句する。楯無とユウリに

「判ったら早く回収に向かえ!なのはとフェイトが一緒のはずだが、同時に仕掛けられたら不味い!」

もし更に箒達のネクロが出てきたとしたら、簪達を護りながらでは

なのは達は戦えない。となればここからは離脱戦になる

「判った！私は簪ちゃんのように回る！」

「ならワタシは箒達だ」

即座に頷き地下から出ると同時にI-Sを展開して飛び去る。ユウリと楯無の背中を見ながら、私も騎士甲冑を展開し一夏達の方に向かったのだった……

「な、なによ……これ」

あたしは目の前で起きる光景を見てそう呟くことしか出来なかった

「うおおおッ!!!」

悪魔を思わせる4枚の黒い翼を持つ黒い白式。そして全身から赤黒い光を放っている一夏の姿は現れては消えるを繰り返し、死角からの奇襲を繰り返しているのだが

「あははは！見えてるわよ！」

業と自分の身体を傷つけ一夏を捕まえようとするベール。

「ちいっ！」

一夏が舌打ちしその姿が粒子と消える。そしてズザザッと滑る音がして振り返ると

「なんだ？」

いつの間にかあたし達の後ろにいた一夏の目があたし達を射抜く。その目はとても冷たくて身体が震えた

「お前は本当に一夏なのか？」

「くだらん。オレはオリムライチカに他ならない。それよりも邪魔だ、巻き込まれなくなかったらとつと逃げろ」

「あはっ♪他人を心配してる余裕なんてあげない！あんたはあたしだけを見なさいよッ!!」

ガシャガシャッ!!!

ベールの落風の肩の砲門が全て開く。その中に見えるのはあたしの甲龍と同じく衝撃砲のコアだが

(なんて……数なのよ!?)

1つの砲門の4つ。ただの衝撃砲でも脅威なのにそれが16門……回避はどう考えても出来ない

「あはっ♪皆死んでしまえッ!!!」

赤黒い光がコアに集まりとんでもない轟音と共に放たれた。それは真っ直ぐにあたし達に迫る

「ふん。子供騙しだなッ!!!ベールッ!!!」

一夏があたし達の前に割り込み雪片を構える。すると黒い零落白夜の輝きが刀身を包み込む

「零落絶衝ッ!!!」

三日月状の刃が雪片の刀身から放たれ、ベールが放った衝撃砲を掻き消す。そしてそれと同時に

「うがあッ!!!」

「おおああああッ!!!」

一夏がベールの頭を掴み地面に叩きつけていた

(な、何が起きたのよ!?)

今何がおきたのか判らない。黒い飛ぶ斬撃と赤黒い衝撃砲がぶつかったと思った瞬間。既にベールは地面に叩きつけられていた

「今何が起きたか判ったか?」

ヴィクトリアがそう尋ねてくる。あたしは勿論マドカも首を振った

「見えなかった……何が起きたのか理解できない……」

マドカが信じられないと言う顔で呟く。それはあたしも同じ気持ちだ

「このおっ!!」

「おっと……」

ベールが地面に衝撃砲を撃ち込み、自分と一夏を同時に弾き飛ばす。一夏は空中で態勢を立て直し着地する。

「大丈夫か!?怪我は無いか!」

はやてがあたし達の後ろに着地して駆け寄って来て一夏を見て

「あれは誰や?一夏やないな!?!」

はやての声にマドカが振り返る

「何を馬鹿な事を……」「馬鹿なことや無い！あれは一夏の魔力の感じやない！それに気配も違う！あれは一夏じゃない！」

はやては慌てた様子でそう叫ぶ。魔力と気配で違う……ハヤテが断言した以上。あれは一夏じゃないっていうの？どういうことか理解出来ないでいると

「殺す…殺してやる!!!あんたはあたしの物なんだからあッ!!!」

両腕のボルテックチェーンで一夏を捕らえようとするボールだが
ゆらり……

一夏の姿がぶれたと思った瞬間。放たれた鎖が一夏の身体を貫くが、肝心の一夏の姿は陽炎のように消えうせる。まただ！またこれ……

「あっちゃー！」

「そこねっ!？」

はやてとボールが同時に空を見上げると、2人の視線の先に一夏が現れ再び飛ぶ零落白夜の飛ぶ刃を見てマドカが

「何故アレほどまでに零落白夜が連打出来る？もうSEが尽きていてもおかしくないのに……」

信じられないという感じで呟く。普段の一夏を見ていたら判るが、あれほど零落白夜を使っていたらとつくにSEを使いきっていてもおかしくないのに……

「あれは零落白夜だけじゃない！あれは魔力も使っているんや！それよりも！逃げるで！」

はやてがあたしとヴィクトリアとマドカを掴んで一気に後退する。それと同時に黒い刃があたし達がいた所にも炸裂している

「なんで!?!私達まで!？」

「周りなんか見えてへん！巻き込まれるで！」

珍しく慌てた声をしているはやては直ぐに手にしていた。デバイスを地面に付きたて障壁を作り出し

「不味いことになってるな、完全に暴走してる。私じゃ止められへん……」

はやての苦しそうな声にあたしはこの時点で漸く理解した……今もつとも最悪の状況になっているというのを……一夏とベールの戦いは激しさを増し、互いに攻撃で抉れて行く地面とあたし達の方に飛んでくる一夏とベールの攻撃……どんどん自分の知る一夏を変わっていく一夏にあたしは思わず

(一夏がいなくなっちゃう……)

もう一夏が自分の手の届かない所についてしまうのではないかと
思い身体が震えてしまうのだった……

(ちっ、なんだこの身体は鈍らにも程がある)

ベールが放つ衝撃砲を回避しながら、体の状態を確認する

手足の痺れはまだないが、握力がなくなってきた。今はまだ魔力でフォローできているが……

(長期戦は不利か!?)

何者かは知らないが、魔導師。それもかなりの高レベルが来たから鈴達は大丈夫だ。問題はオレ自身か

「いっけえ!!!」

重々しい音を立てて迫ってくるボルテックチェーンを回避する。今までは光彩陸離で回避していたが、握力の減退で気付いた。これはオレの身体じゃない、普段通りの戦いをしていたら直ぐに息切れする。迫ってきたボルテックチェーンを雪片と雪華で切り払い、間合いを放す

「逃がすかあッ!!!」

「ちっ！やっかいな真似を！」

切り落とされたボルテックチェーンを魔力で繋ぎ、腕を振るいその軌道を変えてくる。だがこれは元の世界でもベールが得意としていた戦術だ。動じる事無く対応できたが

「取ったあッ!!!」

「舐めるな!!!」

一瞬で間合いを詰めてきて、魔力陣を展開した双天牙月振り下ろし

てくる。魔力刃でリーチが増している。咄嗟に身体をのけぞらせて回避したが、肩の甲冑を切り飛ばされる

(早い。今のタイミングでも駄目なのか!?)

今の攻撃はオレの世界では回避できた攻撃だが、今は避けることが出来なかった……それは間違いなく

(オレの世界よりも強くなっている……)

反応速度も魔力量も間違いなく増している……

(何があった？オレとは違う時間を過ごしていたのか?)

オレの記憶は桜鬼と相打ちになり雨の中。自分の血と雨が流れていくのを見ながら、自分の身体が動かなくなるのを感じた……そして気がつけば、俺はこの世界の一夏の中にいた。そして隙を見てこの世界の一夏に接触し、何とか身体の主導権を奪おうと夢を利用した。そしてこの世界の一夏の心が揺らいだ隙にこうして出てきた。こうして表に出てくることができたが、ここまで激しい戦闘は初めてだった。そして気付いた

(この身体はオレの体とは違う。反応も筋力も何もかも!)

平行世界とは言え自分の身体だ。拒否反応は当然無いが、錬度が違う。

(くそ。攻め切れん……)

苛立ちが焦りを呼ぶ。そしてそれは

「貰いッ!!」

かつてのオレならやるはずも無いミスを誘発する

「しまっ!? うぐおっ!」

一瞬の隙を突かれボールの放った。不可視の弾丸がオレを穿つ

……

(ちいっ！オレは何をしている！)

当たり所が悪かったのか、視界が揺れる。脳震盪だ……揺れる視界と震える足……思うように動けないで居ると

「あは♪やーと大人しくなった♪」

にやにやと笑うベールはその手にしていた。双天牙月を振りかぶり投げつけてくる

(今のままでは回避できん！ちいつ！)

使いたくは無いが仕方ない。光彩陸離を使い、身体を粒子化しその攻撃を回避する。

(ぐっ！流石に連続で使いすぎたか……)

以前のオレならなんとでもなった。しかしこの身体は駄目だ……筋力も魔力も何もかもオレよりも劣っている……脚の筋肉が断裂していくのを感じる。ボールから離れた所に着地しようとして

ズルツ！

(しまっ!?)

足の筋肉が断裂していたので着地しきれず、身体のバランスが崩れて倒れかけるのを何とかこらえるが

「やっぱり限界が来たわね！ヴィステイラーや桜鬼がいなくて良かったわ！ここであんたを連れて帰る!!」

両腕から放たれたボルテックチェーンを姿勢を崩したままで切り払う

(ちっ！なんとか身体の動きはトレース出来ているから良いもの……このままでは不味い……)

反応速度がオレのままだから何とかこうして打ち合えているが、徐々に差し込まれてきている

「あはははははは!!めんどくさいと思ってたけど、出て来た良かったわ！これであんたは私のものよね！イチカーツ!!!」

バトンのように双天牙月を振り回し、前進し続けるボール。光彩陸離が使えない以上。こうして弾くことしかできない……

「あは！隙あり！」

「ぐうっ!？」

下からの遠心力をつけた斬り払いがオレの手から雪華を弾き飛ばす。咄嗟に両手持ちに持ち替え双天牙月を鏢迫り合いに入る

「ふふふふ……やーと顔を見合わせる事が出来たわねー？大好き、愛してる。ずーと、ずーと愛してた。だからあたしのもものになりなさいよ。」

ふふふふと笑いながら、その目に怪しい光を宿し、あえて左手を伸

ばし、まるで宝物に触るかのようにゆっくりと手を伸ばしてくるベール。こうして敢えてオレの注意を惹いて来るベール……

「お前の考えは判ってる！」

即座に後ろにフラッシュムーブを使い。この世界の鈴達の前に行くと同時に、浮遊してたアンロックユニットが開く。そこから更に赤黒いコアが姿を見せる。

「舐めるな！」

オレではなく、この世界の鈴達を狙った衝撃砲の攻撃を掻き消す。オレに敢えて手を伸ばすことで注意を引くことで自分に注意を引こうとしていたのだ。両手で雪片を握りなおし、ベールを睨むと

(?どうした?)

ベールは先ほどまでの挙動は収まり、不気味な程に沈黙を保っている。その様子を不審に思い警戒している

「なんでなんでなんでなんでなんで……なんで!あたしじゃなくてツ!!この世界のあたしを見るのよツ!!」

急に顔を上げたベールがそう怒鳴る。その顔は狂気に染まり、美しいとも言えるその顔つきは禍々しいとも言える顔へと変わっていた「あたしあたしあたし!ああ。うあああああッ!!消えろ消えろ消えろ消えろおおおおおおッ!!」

両肩とアンロックユニットを合わせた。計6門の衝撃砲を用いて乱射してくる。それはオレの防御をすり抜け、魔導師が発生させているプロテクションに当たり続ける

「ぐうっ!?どんどん威力が増してる!」

結界を張っているであろう魔導師の苦悶の声が聞こえる。流石にあれだけの乱射を耐えるのはきつくなってきたのだらう……

「あの世界では!あたしはあんたを愛してた!皆死んだ!箒も死んだ!千冬も死んだ!だけどあたしは嬉しかった!それであんたがあたしを見てくれるって!!!あいつらの変わりでも良いって思った!だけど!!!」

半狂乱と言うしかない。泣いている様な笑っているような複雑な

表情をして衝撃砲を乱射し、ボルテックチェーンを伸ばし続けるベール。その攻撃はオレもこの世界の鈴達もおかまいなしに攻撃をし続ける

「でもあんたはあたしを見てくれなかった！ネクロになった箒を殺す！千冬を殺す！それだけ！それしか言わなかった!!!あたしも誰も見なかった！あたしは死人にも劣る！あんたの目にはあたしの姿は入らなかった!!なのに！この世界のあたしを見る？ふざけんなあ!!!あたしはなんだ！ふざけるな！ふふふFUFU……ふざけるなあああ!!!」

狂ったように笑いながらオレとこの世界の鈴達を攻撃する。その間もオレの世界の話を叫ぶ続ける。ベールの言葉にこの世界の鈴達の顔が徐々に引き攣っていく。知らない世界の話。そしてこの世界の自分の友達が死んだと聞かされて平常心でいられるとは思えない「箒の次はセシリアが死んだ！その次は簪！皆！皆死んでいった!!!それでネクロになっていった!!!残ってる人間で助け合って生きてた……いつかは！いつかは……あんたが諦めて、あたしを見てくれるって思ってた……だけど……あたしも死んだ……あんたを庇って死んだ……その時だけ……あんたがあたしを見たのはその時だけ……あーだから判った。あんたをあたしの物にするには……あんたを殺すしかないってさッ!!!」

「うがああ!」
突然フラッシュムーブで間合いを詰めてきたベールに首を絞められる

(なんだ……なんだ……この力はあ……)

ネクロとは言えこの力は異常としか言えない。だがその目もそうだ……今までの狂気とは違い、不安定に揺れるその瞳に一瞬だけ抵抗しようと思えなくなってしまう……

「愛してた。好きだった。傍に居たかった……それだけでよかったのに……好きなのに、愛してたのに……」

オレの首をへし折らんと込められていた力は徐々に抜けて、ただ首に手が掛けられているだけになっていた。だが今ならチャンスだ

……今ならベールを仕留める事が

(う、動かん!?ぐああ!?!痛い!頭が割れるう!)

強烈な頭痛がオレを襲う。それに加えて腕が動かない……そして腕が痺れ、オレの手から雪片が零れ落ちる。そしてオレの意識が徐々に遠のいていく

「まだだ!まだだ……でて来るなアアア」

オレはまだここで引つ込むわけには行かない。ベールだけは……こいつらだけはオレが……オレが殺す……それがオレが出来る……ただ1つの……お前達の愛に報いる方法だと……言うのに……

イチカが抵抗する素振りを見せていたが、徐々にその抵抗は弱くなる

(おかしい?なんで?)

イチカの抵抗が弱くなった事で頭が冷えた……

「う……あ……」

黒いISの色が徐々に白に戻っていく、それに伴い憎悪だけの色に染まっていた瞳の色が変わり始める……あたしはそれに笑みを深め首にかけていた右手を離す。すると

「がおーげほっ!げほっ!!!」

激しく咳き込む一夏。一夏が纏っている黒い白式は元の白式の姿に戻っている。それを見て確信した……もうこれはイチカじゃない、あたしの世界のイチカじゃない。だけどそれでいい……この一夏なら楽に連れて帰ることが出来る……

(これであたしの目的は達成した。ネクロもどうでもよくなる)

ベエルゼやハーデスに付き従って来たのはこの時の為……そしてここで一夏を手にするれば、ヴィステイラーや桜鬼とイヤイヤ手を組む必要もない。少し精神操作をすれば2人でずっと過ごせる。あたしが欲しいと思っていた未来が手に入る!蹲る一夏に手を伸ばす

「あ?なに考えてんの?死にたいの?」

手を伸ばした瞬間。身体が揺れるそれは

「一夏には手を出させないわよ!」

この世界のあたしが両肩の衝撃砲を発射体制であたしを睨んでいた。今の衝撃は衝撃砲の直撃を喰らったからか……

「刃以もて 血に染めよ 穿て ブラッディダガーツ!!」

「一夏を連れて行かせるわけにはいかない。お前のような狂った女には特にな」

「そう言うわけだ!」

小ぶりなダガーと鉛玉。それと空を浮遊する剣があたしに殺到する

「はっ!こんな効かないわよ!」

鉛玉と剣は常に発生させている。プロテクションに弾き、ダガーはチエーンで弾く……

「さてと……んじゃあ。一夏は連れて「行けると思っっているのか?」

この声は!?一夏に伸ばしていた右腕が切り飛ばされる

「お前!あたしの腕を!!」

切り飛ばされた右腕を左手で掴み一気に後退する。あたしと一夏の間を割り込んでできていたのは八神龍也。左手に剣を構え、右手で一夏を抱えている

(ちっ!時間を掛けすぎたか……)

八神龍也が来たら撤退するようにくどいほど言われていた。切り落とされた右腕を切断面に当てて繋ぐ。ネクロの回復力を持つてすればこれだけで切り落とされた腕は繋がる

「あーあ。時間を掛けすぎちゃった……一夏が手に入ると思ったのに」

ISを解除して髪をかき上げながら笑う。もうあたしに戦う気は無い。撤退しないとベリトがうるさいだろうしね……引き攣った顔であたしを見ているこの世界のあたしは

「あんたはどんな世界で……」

「はあ?あたしの世界?ネクロにぶっ壊されて、みーんな殺されて?イチカが最後の生き残りになって滅んだ世界よ」

それがあたしの世界。最後の生き残りも死んだ。完全に滅んだ世

界……それがあたしの世界だ

「あーもう良いや。棚ぼたなんて上手くいくわけないしね？」

そうそう上手く行くわけが無いか……

「くすくす。あんたもあたしと同じになる。判るもの？同属だしねえ？あつははは♪鈴もマドカも狂ってしまえ！狂って狂って踊り狂え！お前達にも待っているのはあたしと同じ末路だ！あつはははははっ!!!」

啞然とした表情であたしを見ている。この世界のあたしとマドカを睨みながらあたしはこの場から転移した。ここまで喋っていたのは八神龍也も八神はやても攻撃してこないと判っているから。向こうはあたしの情報が欲しい上に、気絶している一夏にあたしが衝撃砲を乱射したのが功を奏し、この世界のあたしのISとやらは既に消えろぼろ。さっきの衝撃砲と射撃の威力が低かったのは既に消える寸前だったからだ

「じゃーねー♪今度はちゃんと一夏は貰って変えるからねー♪」

あたしは鈴達に手を振りその場を後にしたのだった……

兄ちゃんが来てくれたおかげで何とかこの場を切り抜けることが出来たけど……

(かなり不味いことになったなあ……)

ベール達の世界の情勢とその世界での一夏の関係。それを聞いてしまった鈴とマドカのダメージは深刻だ。肉体のダメージよりこういう精神的なダメージは不味い

「かなりキテるな？何があつた？」

一夏を米俵の様に抱え込んでいる兄ちゃんにそう尋ねられる。私は頬をかきながら

「んー後で説明するわ。とりあえず……気絶させへん？」

明らかに落ち込んでいる様子の鈴達。しかもISが大破しているので、地面に女の子座りで呆然としている。唯一平気そうなのはヴィクトリアだが、そのヴィクトリアも座り込んだまま。何かを考えているように見える

「うん。そうするか……」

兄ちゃんが手を打ち鳴らすと鈴とマドカそしてヴィクトリアが糸の切れた人形のように地面に倒れこむ……

「で？何があったんだ？」

再度そう兄ちゃんに尋ねられた私は途中からだけど前置きしてから

「一夏の中に居る奴の正体と平行世界の箒達のネクロの生まれた秘密。そして……その世界がどんな末路を歩んだのかって事やね」

私がそう言うのと兄ちゃんの顔も深刻そうな顔をする。

「うあ？」

兄ちゃんが脇に抱えていた一夏が首を振りながら目を覚ます。それを見た兄ちゃんは

「寝てろッ！」

「はぐっ!？」

首筋に手刀を叩き込まれ再度昏倒する一夏を肩に担ぎなおした兄ちゃんは

「今回は引き分けて所かな？」

「ギリギリだけどな……」

一夏達のネクロに対する初戦闘と考えれば、中々良い感じだったかもしれない。だがISが中破・大破にこそ追い込まれてしまっているが、負傷者は少なく魔法で治せるレベルだから問題ないが

「精神的なものがどうなるかやね。これは兄ちゃんの出番やね？名力ウンセラ」

私がからかうように笑うと兄ちゃんはあつと溜息を吐き

「ああ。任せておけ……まずは一夏達をIS学園に連れて帰ろう。箒達はもう戻っているだろうしな？」

私は兄ちゃん言葉に頷き。気絶している鈴とマドカ。そしてヴィクトリアを見て

「兄ちゃん？まだ担げる？」

「問題ない。誰を担げば良い？」

そう尋ねてくる兄ちゃんに気絶している3人を見る。暫く考えて

から

「鈴を頼んでも良い？」

ヴィクトリア。そこそこ胸が大きい。マドカは均整の取れた感じだ。そして鈴はぺちゃんこだ。つまり鈴が1番相応しいと思った

「判った。鈴だな？」

一夏と同じように米俵のように鈴を担ぐ兄ちゃん・担ぎ方としては最悪だけど、それが兄ちゃんらしいと思った。私は魔法でマドカとヴィクトリアを浮き上がらせISS学園へと戻ったのだった

第108話に続く

第108話

第108話

IS学園の地下のIS整備室のハンガーは全て埋まっていた。ネクロとの戦いで一夏君の白式以外は中破と大破。操縦者であるエリスちゃん達は龍也君に治療され既に自室に戻っている。私はハンガーに掛かっているISを見て

「結構やられたわね？」

「ネクロと戦ってこの程度なら御の字だ。クラナガンでデータ取りをしてある、直ぐにとは言わないが前よりも早く修理が出来るだろう」

龍也君は大破しているISを見ながらそう呟く、ISはコアとパーツの適合に時間が掛かる。パーツだけあっても直ぐに修理して使えるわけではない。細かい再調整を含めても1週間は使えない筈だ
……

(でも短い訓練であそこまでネクロと戦えるようになるなんて……
やっぱり龍也君の訓練が良かったのかしら?)

「とは言え予想外の事がありすぎたがな……」

若干疲れた様子の龍也君は溜息を吐く。それを見ていた千冬が

「自分のネクロに遭遇した鈴か……」

はやてさんから聞いた戦闘報告と、ISに記録された戦闘記録を見ると。半狂乱に陥ったベールの叫びは生々しいまでの負の感情に満ちていた。多感の時期にあればかなり答えただろう、かという私も相当ショックは受けたけどね

「ヴィクトリアはそこまでショックは受けてないが、マドカと鈴のダメージは深刻だ。一夏は精神的ダメージよりも肉体的ダメージ

が大きい。何回も使っていた身体の粒子化……身体の筋組織の損傷が酷い」

カルテのような物を見ている龍也君。その顔はとても険しい……
それだけ深刻な状況になっているということだろう……

「まあ良い。鈴のカウンセリングは私がする。千冬はマドカを見て

やってくれ。一夏は……起きるまでほっておいて構わない。起きてから治療を始める」

言うだけ言っただけ出て行く龍也君。それだけ余裕が無いってことなのかもしれない。

「ではツバキさん。私はマドカの様子を見に行くので、後はよろしくお願いします」

頭を下げて出て行く千冬を見送り。私は全てのISのスキャンデータをみる

(んー外見のダメージは深刻だけど、中身はそんなに壊れてないわね) 外装こそ大破しているが、中身の損傷は軽微……クラナガンでの改修が良かったのか？それとも向こうも本気ではなかったのか？色々考える事は出来る。しかしどれだけ考えてもそれは机上の空論になる。そこまで深く考えることは無いだろう。それよりも今大事なものは……

「短期間でどこまで治せるかよね？」

装甲のみの大破・中破だから前よりは短時間で修復が出来るが、壊れている数が多い。自分だけで治せるだろうか？

「ツバキ殿。お手伝いに参りました」

「こういう時に声をかけて貰わないと」

フレイアとアイアスがそう声をかけてくれる。それに

「あんまり手伝いが出来るか判らないけど、私も手伝うよ」

「少しは手伝えると思うから、よろしく」

なのはさんとフェイトさんも治下のハンガーに来てそう笑ってくれる。5人でやれば修理も早く済むかもしれない

「そう。とても助かるわ。それじゃ早速始めましょうか！損傷が軽微なブルーティアーズから始めるわよ！」

ぱんぱんと手を叩き。クラナガンでスカリエツティさんと一緒に作って置いたスペアパーツを見ながら。もつとも損傷が軽微で、武装の損傷が少ないブルーティアーズから修理に取り掛かったのだ……

「う……うん」

ゆっくりと目を開き、頭を数回振る。暫くボーっとしていたが直ぐに思考が切り替わる

(ボールはあたしで、あたしはボールで……あたしもああなるの?)

違うと思っていた。あたしとボールが違うと断言できた。だけど心のどこかで納得してしまった

(あたしもなるかもしれないって思っちゃった)

同じあたしだから判る。あたしも同じ状況になったと考えれば

(あたしも同じ選択をする)

思わず両手で顔を覆う。もしも、もしも箒達がネクロに殺されてしまったと考えると……

(箒達の変わりでも良いとおもう、それで一夏があたしを見てくれるなら……それでも良いって思う!)

脳裏にボールの声が蘇る。『あっははははは♪鈴もマドカも狂ってしまえ!狂って狂って踊り狂え!お前達にも待っているのはあたしと同じ末路だ!あっはははははっ!!』

狂え狂えと囁くボールの声が耳から離れない。あたしは……あたしはなんなのよ!どうしろって言うのよ……頭の中がごちゃごちゃしていて思考がまとまらない

「起きたか?気分は……悪そうだな?」

「た、龍也……何しにきたのよ」

なんかばつが悪くなり攻めるような口調で言うと龍也はニコニコと笑いながら、あたしのベッドサイドの椅子に座り込み

「ふむ。それだけ強気なら平気とは……言えんな?とりあえずこれでも飲むか?」

差し出されたのは甘い香りをしているカップ。それを受け取りはした物の飲む気がしない……ベッドサイドの机の上に置く

「飲む気分ではないか……話でもするか?」

にこにこ笑い。あたしのベッドサイドの椅子に座ってこっちを見ている龍也

「したくない……と言うか、女の子の部屋にずかずかと入ってこないでくれる?」

今は誰とも話したくない。龍也の蒼銀の瞳から逃れるために顔を逸らし、体育座りをして顔を隠す

「しかしだな?今のお前には話が必要だと思ったのだよ。不安なのだろう?」

その言葉にビクンと肩を竦めてしまう。龍也はその様子を見て苦笑しながら

「お前は態度に出るな。まあそれくらいの歳なら当然か、だがな?自分で抱えて解決できるのか?それは余計に自分を苦しめるのではないか?」

自分で考え込んで解決できるとは思ってない。だけど何を話せば良いのか判らない、龍也の心配そうな声にあたしは拒絶と言う子供のような態度でしか返事を出来なかった

「ふー多感な時期だしな。迷うか、なら言わせて貰うがね?お前の考えは正しい」

「あたしが何を考えてるかなんて「誰かの変わりでも良い。それで一夏が見てくれるなら」か?ん?」

あたしが考えていることを言い当てられ肩を竦めると龍也は

「やっぱりか」

なるほどと言う感じの龍也。その態度で判った……今のはブラフだったと……

「さいてーね」

ジト目で龍也を見ながら言う龍也はにこにここと笑いながら

「よく言われるから気にしない。だが、今のお前はほっておけないのね?あのタイミングで何故ボールがあんなことを言ったか判るか?」

話を変えにきていると判っているけど、それでも良いかと思ひ

「嫌がらせじゃないの?」

気がついたらあたしは龍也の顔を見ていた。龍也は顎の下に手を置いて

「違うな。あいつらが自分達のオリジナルを狙うのは理由がある……聞きたいかね？」

紅茶を飲みながら尋ねてくる龍也。理由？オリジナルってあたし達のことよね？それも何か意味があるの？頭の中がこんがらがって来た

「教えてよ」

「じゃあまずココアを飲め。話はそこからだ」

にこつと笑う龍也に嵌められたという気がしなくもない。なんでか判らないけど完全に龍也のペースになっている……だけど自分であうだうだ考えているよりも何倍も良いと思いつつ。差し出されたココアを啜る

「甘……ッ」

普段飲まない物なので余計に甘く思える。顔を顰めると龍也は

「業とそうしてある。少しだが落ち着くだろう？」

そう言われると少しだけ気分が楽になった気がする。ココアをちびちびと飲みながら

「それでベールがあたしを狙う理由って何よ？」

龍也が態々そう言うってことはちゃんと理由があるはずだと思いつつ。そう尋ねると龍也は

「お前もベールも同じ存在だ。変な話だが、同一の存在は同じ場所には長時間存在できない。平行世界の理論なのだが、もっと詳しく説明しようか？」

ん？と尋ねてくる龍也。平行世界の理論と言われても今のあたしの頭には全然入ってこないだろう。と言うかそれ以前に

「そんな話をして楽しい？嫌味っぽく聞こえるんだけど？」

あたしが睨みながら言うのと龍也はそれで良いと笑って、手を叩く「なによそれ？」

その行動の意味が判らず、龍也にそう尋ねると

「それくらい強気の方が鈴らしい」

「性格悪くない？」「自覚してると言っただろう？」

どうも今のやり取りも龍也に誘導されていた様で面白くない。だ

けどこの感じの方があたしらしいと思える

「それで話を戻すが、この世界ではお前達の方が正しい存在として認識されている。ボール達は異物になる。世界はどう動くとおもうね？」

龍也にそう尋ねられ、少し考えてから

「赤血球とか白血球みたいに排除に掛かる？」

「正解だ、頭の回転が速くて助かる」

ナデナデと頭を撫でられる。あたしは龍也の顔を見て

「あたしのこと子供って思ってるでしょ？」

「違うのか？」

違うとはいえないけど、なんか癪……もしこれが龍也の世界の子供なら相当喜んだんだろうなあと思いつつ。龍也から与えられた情報を整理する

「つまり……自分が存在するためにあたし達を狙うって事？」

あたしがそう言うのと龍也は驚いた表情をして

「正解だ。頭が切れて本当に助かるね。説明が早く済む、しかし一つ付け加えるなら殺して、お前達を取り込むことが目的だ。あくまでボール達はこの世界では異物だ。鈴達を取り込み情報を書き換えるのが目的だ」

書き換えるとか言われても訳判らないけど、とりあえずボール達の目的は判った。

「これで説明は終わり。後はこれが終われば帰る」

何をするつもり？と見ていると急に龍也に抱きしめられる。突然の事に驚いて

「ちよっ!?何するの放し……泣け。涙をこらえるな……うっ」

龍也にそう言われると急に視界が歪むのを感じた。だけど泣くわけには……

「泣いておけ、溜め込むな」

もう一度泣けと言われ本格的に視界が歪む。それによく考えると顔を隠されているので誰にも見られないと判るともう駄目だった……

「うう……うああああッ……」

ボロボロと涙が零れる。それでも大声で泣く物かと声を押し殺してあたしは涙を流し続けるのだった……龍也は何も言わずとあたしの背中を撫でていた。それは全然違うが、お父さんに昔やつてもらったことを思い出してしまったのだった……

「姉さん」

「ん。何も言わんで良い」

「うん……」

マドカは千冬の背中に顔を埋めてぶるぶると震えていた。それは鈴と同じかそれ以上の恐怖を感じている証拠でもあった。ネクロとの初戦闘は鈴とマドカの心に深く傷を残しているのだった……

守護者達との戦いを終えて戻ってきた。イナリ・アヌビス・ベールの報告を聞き、前までの戦闘記録と比較し

(恐ろしいまでの成長速度と言えるが、所詮は人間か)

魔導師と比べれば畏れるまでも無いと言えるが、問題はその成長の幅。前のデータよりも数段以上に戦闘能力が増している

(ISを破壊できたのが大きいな)

ISは修理に時間が掛かる。その間は戦闘には使えない……報告で戦闘に使えるのは織斑一夏の白式だけ、それ以外はともではないは戦闘に使える段階ではない。今出れば間違いなく守護者達と戦えるIS学園の人間。確か「更識楯無」「ユウリ」だけだ

(仕掛けるのは今か)

向こうの戦力が落ちている。仕掛けるのは今が最も適作だと思えるが……

(ベール達の世界のオリムライチカが存在が不確定要素か)

話に聞いていただけだが、かなり稀少なレアスキルを所持しており。その戦闘力は極めて高いらしいが……それがどれほどの者なのか？それが重要だ。しかしこの好機を失うのは余りに惜しい

「ハーデス」

私がそう呟くと空間が裂けそこからハーデスが姿を見せる。姿を

見るだけで判る、今のハーデスは間違いなくベストの状態であると
「なんだ？」

業とらしく尋ねてくるハーデス。ずっとここで見ていたのだから
私は何を言いたいかなんて判っているのにと思いつながら

「守護者達に仕掛けるか？」

「漸くか？俺が出てても良いのだな？」

ハーデスから感じる魔力が一段と強くなる。いや、それだけではな
く闘志も増している……この上なくハーデスの気力は充実している

「ああ。好きにしろ……出来るならベール達のネクロの素体を捕らえ
て来い」

今のベール達には活動限界がある。それは異なる世界の存在だ、性
格や考え方はネクロよりになっているとは言え。この世界には自分
達と同一の存在がいる。自ずと活動限界は限られている……それで
も普通に戦うだけと考えれば十分だが、戦力として考えるのなら時間
制限は無いほうが決まっている

「判った覚えておこう。気が向けば捕らえてこよう」

気が向けばって事は恐らく捕まえてこないだろうなと思ひ苦笑す
る。今のこいつの目的は守護者と戦うことだけ、それ以外を考えると
もりはなさそうだ

「直ぐに出るのか？」

ハーデスがどう行動するなんかなんて判っている。だが一応そう
尋ねると

「いや。感情に身を任せ行動するのは愚かな事だ。俺はそんな愚かな
ことはしない……万全な状態に戻るまでは仕掛けない」

ハーデスは戦いを好むが、その実恐ろしいまでの冷静で用心深い面
もある。相手が格下ならばここまで用心はしないだろうが、相手が守
護者と判っているのだから、感情で行動するような愚かな真似はしな
い。現れたときと同じように空間を引き裂き闇の中に消えていく
ハーデスの姿を見送りながら

「ベリト。人間の洗脳はどうなっている？」

篠ノ之束をネクロ化するのにはネクロに殺されるのでは駄目だ。

元々人間嫌いなものだからそれを利用しない手は無い、人間によって殺させることで人間を憎ませより上位にしたほうが利用価値がある

「4割がた完了しております」

「そうか。それではまだ少し不安だな」

守護者達も束の存在を探している。それに私達を疑っているアズマの事もある。こちらもまだか……

「しかし今のままでも十分に「責めているのではない、気にすることは無い作業に戻ってくれ」

ベリトは納得して無いという表情ではあったが、王座を後にした。私は再び1人になった王座のまで闇を見つめたまま

「さてこれからどうするか……だな」

策は何重にも用意してある。そして向こうの戦力は激減している、そろそろ大きく一手を打つ番だ……だが打つ順番を間違えては意味が無い。だが今ならばどの策であれ成功率はとても高い、今考えるべきなのは、いかに大きな打撃を与えるかただ。そしてやはり1番攻めるべきなのは

「守護者だな」

守護者を負傷させることが出来れば、大きく戦況は動く……私はその為の策を考えるために、今動けるネクロ。そして敵の数。その全てを考慮し、最善の一手を打つための作戦を考え始めるのだ……

地下のブリーフィングルームを覗き込む

「……………」

そこにはいつもの明るい箒ちゃん達の姿は無い。初めてのネクロとの実戦。そしてISの破損……落ち込むところは山ほどあるだろうが、1番大きいのは

(ムードメイカーでもある鈴ちゃんのせいね)

もつとも精神的なダメージを受けて、今龍也さんのカウンセリングを受けている鈴ちゃん。彼女は言いも悪いもムードメイカーで場の雰囲気盛り上げるのに長けている。そんな彼女が落ち込みそして更に一夏君は意識不明の重態。戦闘としては勝ったと言えるが、気持

ち的には負けていると言えるだろう。普段なら何とかしてあげたいと思うんだけど

(なんて言えば良いのか判らないわね……)

どうすればいいのか判らず、その場に佇んでいると肩を叩かれる。誰だろうと思いい振り返ると

「ユウリ……何か様？」

「少し散歩に行くぞ。このままでは気が滅入るだけだ」

私の返事を聞かずに歩き出すユウリ。暫くブリーフィングルームとユウリの背中を見ていたが、私はユウリについて散歩をすることにしたのだった

「しかしあれだな……ネクロはかなり強いな」

暫く歩き、開けた場所に出たところでユウリが地面に座り込みそう言う。私もその隣に座って

「そうね。私は楽勝とまでは言わないけど、良い線行くと思ってただけどね」

ネクロと交戦した経験があるからと出撃すると言われていたが、あそこまで落ち込んでいるのを見ると自分達も出撃していればと思わず思ってしまう

「だがアレでよかったのかもしれないぞ？」

空を見上げながら言うユウリ。その言葉の意味が判らずユウリの顔を見ると

「戦いとはああいうものだ、死ぬかもしれないという恐怖が付き纏う。それを乗り越えることが出来ないのならここで再起不能になるのも仕方ないことだ」

「それはまあ……そうだけどね」

私は正直言っただけで、ネクロと戦うというのは止めたいと思っている。これはある意味荒療治だが、自分達が今踏み込もうとしている世界を知る良い勉強になったとも思えるはずだ。そしてこの経験で戦いを止めるというのならそれもそれで仕方ない

「龍也が言っていたんだがな、大人になるといっことは諦めと背負いたくない荷物を背負うことなんだとき」

「それはまた随分と説得力があるわね？」

龍也さんのことはクラナガンで色々調べた。明らかに過度すぎる期待を背負い、そして結果を常に出してきた。そして今は最強と謳われたが、その実彼の心はボロボロだろう。救えなかった者、切り捨ててしまった命……そういったものがこれでもかと龍也さんを苦しめているのだと私は思った。そんな龍也さんの言葉だからこそ、妙に納得してしまった……

「ワタシは戦うだろう。過去を断ち切るために……」

何処か遠くを見つめる表情をするユウリ。彼が今何を考えているか……それが判ってしまうのもまた辛い

(セリナのことね)

自分が護れなかった。そしてネクロになっちゃってしまった兄妹……もしも、もしもだが。龍也さんがセリナを倒してしまえばユウリは2度と自分を許せなくなるだろう。私からすればユウリも龍也さんも良く似ている

(自分が抱えていることとか、背負わなくて良い荷物を背負っている所とか……それに自分を追い込む所も全部そっくり)

はやてさんも言っていた、ユウリは龍也さんに良く似ていると……だからこそ思う。はやてさんが龍也さんをほっておけないのは、どこまで墮ちて行ってしまうから……だから私もユウリはほっておけない。ユウリの手に自分の手を重ねる

「どうかしたか？」

「別に？」

おかしなやつだと首を傾げるユウリ。過去を断ち切る……それでユウリが命を落としては意味が無い。私に出来ることなんてたかが知れている。だけど私に出来る事は全部する、ユウリが戻ってこれるように祈ろう

(貴方の手は絶対に放さない……)

貴方が例え自分が許すことが出来ないとしても、貴方が自分が犯した罪から目を逸らすことができないとしても、私は貴方の手だけは放しはしない。何があったとしても……

俺は気がついたら白い天井を見ていた。ここ最近何回も見ていた
医務室の天上だ

「あいたたた……いてえ!？」

身体を起こそうとしたら全身に激痛が走る。その痛みに顔を歪め
ていると

「よう。起きたか? 戯け者ツ!!」

「あいだあああ!？」

ぐっつんと拳骨を叩き込まれ、その激痛と全身の痛みにのた打ち
回っていると、

「私は言ったよな? 力だけを望むなって?」

あ、これ龍也だ。凄く低い声に背筋が凍ったような気がした。クラ
ナガンで何回も言われたのに俺はまた

「まあ取り合えずだ。傷は治してやる」

龍也がそう言うと言った蒼い光が俺を包み込み全身の痛みは治まった。
だが頭の痛みはそのままだった

「サンキュ……よし。では歯を食いしばれ」いやいや!?!ちよつと待っ
てくれて!?!」

拳を握り締め俺の顔を狙っている龍也に慌ててSTOPを掛ける
が、龍也は無言で拳を振りかぶる。これは何を言っても駄目だと判断
し、観念して歯を食いしばる。それと同時に龍也の鉄拳が再び頭を捕
らえる

「いてえええええ!?!」

さつきとは比べられない激痛に思わず絶叫する。すると

「大丈夫!?!一夏!?!」

シャツとカーテンが開き鈴が顔を見せる。如何してここに? それ
に目が赤いけど何かあったのか? と頭の中が疑問符で一杯になるが、
それ以上に頭が痛くて何も言えずベッドに蹲っていると

「まあこれで良いだろう。後は知らん」

「殴るだけ殴って戻るって酷いわよ!?!」

「これくらい単純なほうが良いんだよ。下手に説教するよりも良く効

く」

そう笑って部屋を出て行く龍也。俺そこまで物分りが悪いわけじゃないから口で言ってもらえば判る……

「大丈夫？一夏」

心配そうに俺に氷の入った袋を差し出して来る鈴。

「ああ。ありが……」

その氷の入った袋を受け取ろうとして鈴の顔を見て……俺は何故か涙が溢れて、鈴の手を握り締めてしまう

「ど、どうかしたの？」

級に俺が泣き出したことに驚いている鈴に俺は涙を拭いながら

「いや、なんか判らねえ……けど嬉しいような、悲しいような……訳わからねえ」

自分でも理解できない感情を感じながら鈴の手を話す。鈴は不思議そうな顔をして

「何か飲み物でも買ってきてあげるわ。まってなさい」

そう言って部屋を出て行く鈴。俺は咄嗟に伸ばしかけていた手を見て……

(なんだろう……この変な感じは)

疲れているのだろうか？それに俺は何をしたのか？それが何もかも判らない……俺はベッドにもう1度寝転がり目を閉じた。何がなんだか判らない。とりあえず思い出せるだけ全部思い出そう……

(また暴走したんだよな?)

オレがまた前に出てきて、そして白式が黒く染まったのは覚えている。だけどその後が何も思い出せない……

(俺はどうなってしまった?)

自分でも理解できない感情。それに自分が自分じゃなくなっていくかのような……そんな言いようの無い不安が俺を押し潰そうとしてくる……俺は自分が消えてしまうのではないか？俺はその恐怖から逃れるかのように俺は布団に潜り込んだのだった。

第109話に続く

第109話

第109話

ネクロとの戦いを終えて戻ってきた箒達はそれぞれが別々の理由で落ち込んでいた。

あるものは改修されたISを破壊されてしまったことに

あるものは鈴が精神的に弱ってしまった事に

あるものは一夏が再び暴走してしまった事に

全員が落ち込みいつもの雰囲気と違い。まるで葬式のような雰囲気の中

「ネクロは何がしたいんだろうな」

私がそう呟くとセシリアやラウラの視線が集まる。私はその視線に少しだけ圧された物の自分の考えを言うのだった

「龍也さんやはやてさん達に仕掛ける事無く、まるで私達を調べるかのように行動して……ISを少しだけ破壊した。その目的はなんだろうか？」

あの時なのはさんが来たとは言え私達を倒す隙は十分にあった。それなのに撤退した。その目的がどうしても気になるというところ

「……確かにそれは私も気になっていた。ネクロの目的は他にあるんじゃないかって」

疲れている様子ながらノートPCを操作しているクリスはキーボードを鮮やかに叩きながら

「今回の攻撃は威力偵察。それと強化されているであろうISの情報を得るため。と考えるの妥当」

「どういふこと？」

「弥生。少しは自分で考えろといい、この世界に龍也がいなかったのはネクロも周知の事実。じゃあどこにいたと考える？」

クリスの問い掛けに答えたのはセシリアだった。セシリアも思案顔で何かを考えている様子だったから、誰も声を掛ける事がなかったのだ

「龍也さんの世界ですか？」

それしか考える事が出来ない、ネクロもこちらを警戒しているのだから動向を考えるのは当然のことだ

「そう考えるだろう。そして向こうはこう考える「この世界の人間がどれくらい強くなったのか？」そして威力偵察として高レベルのLV3が訪れたと考えるのが普通だろう」

つまり今回の襲撃は威力偵察だったと……ラウラはその言葉を聞いて立ち上がり部屋を出て行こうとする

「どこに行くの？」

「ISの武器の再搭載を考える。あのまま負けっぱなしと言うのは気に食わない。それにネクロどもに教えてやるんだ、人間の力を舐めるなってな」

にやりと笑い出ていくラウラ。ラウラらしいといえる強気の態度に笑う気分ではないのに思わず笑ってしまう

「確かにここでそうしても仕方ないね。僕ちよつと調理室を借りてくるよ」

シャルロットもラウラに続いて出て行き、それを見ていたセシリアは

「ヴィクトリアさんが心配なので失礼します」

同室のヴィクトリアの容態が心配だからと出て行くセシリア。シエンは既にこの部屋を後にして鈴のために御粥を作りに行っている

「じゃあ、私はツバキさんの手伝いでもしてくる。少しでも早くISが復旧するように」

「私も手伝いましょう。簪……装甲の修理ならお手伝いできるでしょうから」

と次々に部屋を出て行く、弥生にいたっては

「ちよつと龍也に頼んで訓練つけてもらってくる。私は何にも出来なかったしな」

アヌビスに私と同様でターゲットにされた弥生は、気合を入れた顔で出て行った弥生らしいが今の私はそんな気分じゃなかった

「如何してそんなに悩んでいる？」

クリスの問い掛けに私は少し悩んでから

「アヌビスが消える前にな私にこういったんだ「シノノノ・タバネは既に我らにとつて何の価値も無い！そのうちあの女は死ぬぞ」とな」

クリスは眉を擡めてキーボードを叩く手を止めて

「協力関係にあつたということか？」

若干批難の色を目に浮かべるクリスに私は首を振りながら

「判らないんだ、姉さんが何をしたいのか？私はどうすればいいの
かって」

姉さんが死ぬのは嫌だが、ネクロと協力していた可能性があると考え
えると自分がどうすればいいのか判らないと言うとクリスは

「あつて自分がどう動くのか？それでいいだろう？殴るなら殴る、受
け入れるなら受け入れればいい」

殴るってなんでだ？と思ひながらドヤ顔をしているクリスに

「なんだその理屈は」

「龍也がよくやる方法らしい、説得の1つだと言っていた」

それは説得と呼んでいいものなのか少し悩んだが、昔私や姉さんが
悪戯をしたときは父に殴られた。それでこれは悪いことなんだつて
自覚したなと思ひ出し

「そうだな。姉さんを見つけてから考える」

「それがいいとおもう。頑張れ」

クリスの言葉を聞きながら部屋を出て形態を取り出し姉さんに電
話したが、やはり繋がらない

（今どこにいるんだ。姉さん……）

今どこにいるかもしれない姉に危険が迫っているのにそれを伝え
る事もできない。今私に出来るのは

（どうか無事で……）

余り姉さんの事は好きじゃなかった。だけど……死んで欲しくな
い。私は窓の外から見える星を見てそう祈るのだった……

俺はこの世界の戦場を渡り歩きながら人間の魂を集めていた。今

度はベエルゼに与えるのではなく自分で使うためにだ

(まだ足りない。もつとだ)

俺の能力をフルに使うにはリンカーコアが大量に必要なになる、だがこの世界にリンカーコアを持つ人間は少数しか存在しない。人間の魂で代用できない事も無いが

(純度が余りに低い……殆ど役に立たんな)

ネクロに適した魂ならば糧にもなろうが、この男尊女卑と言う世界の中ではあまりに役に立たない魂が多すぎる。質より量とも言えるがそれで俺の糧になるだけの魂を集めようと思えばどれほど時間が掛かるか……剣を1度鞘に収めたため息をはく

(人造リンカーコアは駄目だったからな)

ペリトが作り上げた人造リンカーコアは俺には適応しなかった仮に取り込んだとしても、意味がない。直ぐにその効力を失うからだ……再び別の戦場に赴こうとしたとき

「帽子しらねえ？ハーデス」

突然聞こえてきた声に振り返るとそこには、くたびれた黒いタキシードに何の手入れもされてない黒髪を持つ男が立っていた

(いつ現れた?)

戦場に似合わないタキシード姿に加え、きよろきよろと辺りを見ているその素振り……とても戦場にいる人間には思えない

「帽子を探しているだけだよ？見てねえか？ハーデス」

繰り返し俺の名を呼ぶ男に

「貴様何故俺の名前を知っている!？」

にここにこと笑いながら再び俺の名を呼ぶ男にそう怒鳴ると

「ふーどうでもいいだろ？帽子見てねえ？ダチに貰ったもんで無いで困るんだよ」

俺を無視して辺りを見ている男。その姿はどこから見ても人間にしか見えないのに

(何だこの威圧感は!?)

無防備な姿をしているのに今手を出せば自分が殺される光景しか想像できない。俺が人間を恐れるなんてありえない、鞘に収めたモロ

スを抜こうとして

「ああ、あつたあつた」

落ちていたシルクハットを拾って埃を払っている男に

「中々の魔力の持ち主のようだな。その命俺に「貴方が俺を殺す？ははははッ！やれるもんならやってみな？」

「その言葉後悔するぞ！」

ふふふと笑う男に接近し剣を振るう、男は回避する素振りを見せないこれは取った！

「おいおい……どこを狙ってるんだか？」

「!?」

当たったはずなのに当たってない………どういふことか理解できないでいると

「ふふふ？理解できねえか？なら教えてやるよ！お前と俺では天と地ほどの差があるんだよ！」

男の拳が俺を穿ち殴り飛ばす。俺は空中で態勢を立て直し………着地する

「何者だ。お前は何故ネクロの魔力を使える！」

おかしい、人の気配しか感じないが、ネクロの魔力だった。こいつがなにもか判らずそう怒鳴ると

「俺が何者かなんてどうでも良いだろう？ハーデス。俺はお前に贈り物を持って来たんだよ！受け取りな」

投げられたカードを指で挟むとそのカードが輝き中から固形化したリンカーコアが大量に零れ落ちる

「これは何故!?」

リンカーコアは人間から取り出された風化し消え去る。それなのに完全に固定化されているリンカーコアに驚きながら尋ねると

「だから俺が何なのかと、何故持ってこれたなんてどうでも良いだろう？贈り物だからよ！お前の力を見せてくれよ、期待してるぜ？ハーデス」

男はそう言うと言の中に溶けるようにその姿を消した。それは下位ネクロネクロの得意とする影を使った移動方法だった。

「なぜその能力を……」

上位ネクロに進化するほどにその能力は弱くなる。それは他の力が強くなるからだ、完全に人間になる事が出来るネクロがそんなの能力を残しているとは思えない……だが

「ありがたく貰っておく」

足元に落ちている固定化しているリンカーコアを拾い上げ取り込む。

「戻ってきたぞ……これが俺の力だ！」

増して行く力に笑みを零しながら俺はこの戦場を後にした。予定よりも早く守護者達に仕掛けることが出来そうだ……

「くつくつく、精々頑張れよ？ハーデス」

消えていくハーデスを見つめて笑う男の後ろに

「趣味悪いわね？ランドグリーズ」

ネルヴィオが現われそう声を掛ける。

「おっ？ネルヴィオ、如何してここに？どうだ？一緒に食事でも」黙りなさい、ランドグリーズ」

手を振りあげられた男は痛い痛いと言っていたが芝居は止めろと言われて

「あははは失礼。ネルヴィオ」

男の姿は一瞬に黒いタキシードと紅いマントそしてスカーフ姿になった。あの男はランドグリーズだったのだ

「で？なんでハーデスにリンカーコアを与えたの？私が折角固定化したのに」

「ふふふ。特異型ネクロはLV5になる可能性があります、その力量を見ておくのは無意味ではないでしょう？なんせ、天の属性のネクロはまだいませんからね」

知られてはいないがネクロには「冥」「裂」「地」「天」と4つの属性に分かれている。『冥』は特別な能力を持つ者とそうでない者に判れ、ランドグリーズは前者であるが、その能力を使った事は無い。そうやすやすと使う事ができる能力ではないからだ。『裂』は遠距離攻撃には適さないが、引き裂くや切り裂くという攻撃に高い適性持ち、魔力

による飛ぶ斬撃などが使える、近く中距離に特化したネクロだ。そして『地』は強固な身体と他のネクロを上回る再生能力。そしてあらゆる距離に対応できる反面、スピードに劣るものが多い。つまりネクロとは自分が属する属性と素体の魂によってその姿を変える。一様にこの属性はこれだ！と言うわけではないのだが、基本的に自分の属性に合うように進化していく。その中でも天の属性は極めて稀少であり、特異型が進化したときに稀に変化する属性であり。他のネクロとは比べられない能力を持つのだ

「貴女は冥の属性を得れるのですよ？ 盟主に声を掛けるので1度お会いしませんか？」

「お断り！ 私には私の目的があるの！ 盟主には関わるのはお断り！」

ネルヴィオがそう怒鳴って姿を消す、残ったランドグリーズは

「まあその内で良いですよ。ネルヴィオ……あなたはいずれこちらに来るのですから……」

ランドグリーズはそう笑いながら姿を消したのだった……消える前の笑みは全て自分の計算通りだと言いたげな物だったのだ……

「ぐ、ぐあああああ!!」

森林の中に響き渡る苦悶の声。ペガサスだ……長い事自分のネクロの因士を力づくで封じ込めれていたのだが、あまりに長い時間生きていたペガサスのからだには限界が来ていたのだ

「まだだ！ まだ出てくるなあ!!」

消えかける意識とは違い徐々にその力を増してくるネクロの力にそう絶叫する。言う事を聞かない腕が黒一色に染まりその姿を作り変えようとする

「俺は俺だ！ 心まではネクロには渡さん!!」

クラウソラスを手の甲に突き立てる。肘の上まで伸びてきていたネクロの細胞は肌の中に消えていく

「はあッ！ はあッ!!……じ、時間がなくなってきた」

木に背中を預け荒い呼吸を整えるべく大きく深呼吸を繰り返す

……

「本当に不味くなってきたな」

満月の時だけがネクロの力が異常活性化していたのだが、ここ数日は昼だろうが、夜だろうが関係無しに俺の意識を奪い去ろうと姿を見せる……

「まだ俺はこんな所で倒れる事なんて出来ないッ!!」

歯を食いしばり足を殴りつけ立ち上がる。俺には判っていた、もう数日の内に俺は意識を失い、完全なネクロに化すと……

「よく持ったという事か」

人間であるときにあえてネクロの因士を受け入れたのは俺だけではなかった。だがそいつらは徐々に人間の意識を失いネクロと変化していった……

(半分以上意地だな)

そいつらは2日から一週間でネクロ化していった。それに対して100年以上ネクロ化するのを耐えているのは以下に俺は異質なんだろうか？ 仇を取るそれだけを考え俺はここまで生きながらえ、そしてネクロ化を意思で押さえ込んできた。だが

「ここ数日の異常なネクロの力の増大か」

ベエルゼの体力は完全に回復し、そしてハーデスは人間狩りを繰り返しその魔力を倍以上に回復させていた。

「共鳴現象か……」

ネクロはより強いネクロの力に共鳴し進化する。そしてそれに伴い力を増させる、俺のネクロの因士とどのネクロの力が共鳴しているのかは判らないが、日に日に力を増していくネクロの因士を抑えるのもそろそろ限界だ

「完全にネクロ化するまでまだ時間はあるはずだ」

もうあの小僧が力をつけるまで待つなんて言っている余裕はない、だがハーデスはその姿を隠して行動しているし、そして……

(1人で戦うには強すぎる)

ハーデスは溜め込んでいるリンカーコアによってその力を増大させる。俺1人で戦うのは余りに危険だ、それに共鳴しているネクロが

ハーデスだとしたら俺は意識を完全に失う、守護者と小僧の協力は必要不可欠だが……ハーデスがいつ仕掛けるか判らない……近いうちとは言っていたが……いつかなんて俺には判らない

(I S学園の近くで待機するしかないか)

いつ仕掛けるか判らないのならば、その場所で待つのが1番早い……俺は震える足に自ら活を入れて立ち上がり

「行くか……」

まだ自分の意志がしつかりしているうちにI S学園の近くへ行こう。あの周囲は守護者の魔力に満ちている、守護者の魔力はネクロにとっては猛毒だ。だが今の俺には必要な物だ……受け入れる事のできない、魔力による痛みは俺の意識を繋ぎ止める役目をしてくれるだろう……途絶えかける意識を必死で繋ぎ止め足を引きずりながら歩く

「ツ……」

歩く途中で偶然俺の姿を写す湖面を見て俺はそう苦笑した。湖面に映る姿は俺ではなく、灰色の甲冑と4枚の翼を持つ異形の姿が映っていた。一瞬目を擦りもう1度湖面を覗きこむ。そこに映っていたのは俺の顔だった。

「幻覚か……それだけ弱っているという事か……」

精神的にも肉体的にも弱っていると言うことか……だが俺はそんな事には屈指はしない……俺はまだ死ぬわけには行かない

(あいつらの仇を取るまでは……)

俺の世界を滅ぼしたハーデスを倒し、皆の仇を取るまでは死ぬわけには行かない……その為にこうして人の身体を捨て、ネクロになった……まだこんな所で立ち止まるわけには行かない。いずれ着くところか地獄だとわかっていたとしても

「立ち止まるわけには行かないのだから!」

俺を突き動かすのは復讐心だけだ。こんな人間が行く所なんて地獄と決まっている……だが全ての業を背負ってでもなお進むと決めたのだから……

(地獄に落ちたとでもなお……為すべき事があるのだから……)

ぼんやりとする意識の中でもこの思いだけはどうしても揺らぐ事はない……この想いがある限り、俺は俺としての意識を保つ事ができるのだから……

第110話へ続く

第110話

第110話

寝ているはずなのに妙に意識がすっかりしている……それは言うならば映画を見ている様な感覚と言えるだろう。だがその内容は映画とはいえないような凄惨な者だった……

『ああ。うああああッ……』

廃墟の中で蹲り泣き続ける青年。白い鎧……だがそれはISではないと判る

(デバイスなのか?)

龍也達が使うデバイスと言う物と同じ物だと判る。しかし……

(あれは血なのか……)

本来美しいはずの白の甲冑は赤黒く染まっている。それは返り血だと判るのに、その近くには誰も居ない……いや

(ネクロなのか……)

黒い粒子が湯気のように天に向かって伸びている……ネクロが消えているのだと思いつき

(うつ!?ラウラ……!?)

今まさに消滅しようとしているのは成人しているがラウラだとわかるネクロだった。虚空を写している目と目が合った瞬間。景色がぶれ今度は

『さよなら……ですわね……』

『ああ……そう……だな』

青いデバイスを身に纏っている、先ほどのラウラと同じく成人していると思われるセシリアの胸に突き刺さっている剣……それを基点に消滅していくセシリアは

『ああ……死にたくないですわね……もつと……』

セシリアの最後の言葉は紡がれる事無く粒子として消えた。そして剣を落とした青年は

『ああ……セシリア!!すまない……ッ!すま……ない!!!』

激しい嗚咽と共に景色がまた変わる。そして俺は理解した、これはオレの記憶なのだ

(その通りだ、織斑一夏。最後まで見るが良い、オレの記憶をな)

脳裏に響いたオレの言葉。そしてそれから俺は流れ続ける記憶を見ることしか出来なかった。目を閉じても、耳を塞いでも景色も映像も俺の脳裏に浮かび上がっては消えていく

(う、ううううッ!!)

余りに深い絶望と悲しみの記憶に押しつぶされそうになる。しかも俺と同じ顔をしているオレが、俺が良く知る人間を涙ながら殺していくのだ、ネクロになっているとは言え知人が死んでいくのを見て、俺は平気で居られるような人間じゃない。そして最後は

『ぐふっ……』

『ははは……これでお前は私の……物だ』

箒いや、最後までネクロとしての意識を持つ桜鬼とオレは相打ちになり、俺が見ている景色は途絶えた

「お前の記憶を俺に見せてどうするつもり何だ……」

精神的に痛めつけられ、夢の中にも関わらず蹲っている俺にオレは『別にどうもする気はない。だが今のままではお前の進む末路もオレと同じだという事を言いたいだけだ』

にやりと笑いながら言うオレに思わず俺は立ち上がり

「そんなことをはありえないだろ！」

この世界には龍也達が居る、オレが歩んだ記録を歩むわけがないのだ

『ただ1人の英雄では何もかも救う事など出来はしない、現実是非情なんだ』

龍也の記憶でも見た。龍也が全てを救おうと尽力し、そして救えなかったものに涙する記憶を……

『心当たりがあるようだな。それが『それ以上余計な事をしないでください』』

俺の言葉を遮り姿を見せたのは白の少女と黒の少女。2人は俺の手を引いてオレの前から引き離す

『ちつ、まだオレの邪魔をするか……まあ良い。俺はまたオレを必要とするさ、力がなくては何も救えないからな!!』

重々しい音を立てて、無数の鎖が周囲から放たれオレの姿を覆い隠していく……徐々に鎖の中に消えていくオレだが、その鎖を引きちぎり、俺へとその手を伸ばしながら

『いつかお前の身体はオレがもらう。全てを救う為になッ!!』

ついに鎖に捕まり、その姿を飲まれながらも、どこまでも深い絶望と狂気をその目に宿し俺を見つめ続ける……俺はその目に本能的な恐怖を覚え

「う、うわあああああッ!!!」

悲鳴を上げながら飛び起きた。嫌なくらい心臓が脈打っているし、額からは大粒の汗が零れ落ちる

「一夏!どうした大丈夫か!」

俺の悲鳴を聞いた千冬姉が医務室に飛び込んでくる。俺は両手で顔を覆い

「酷い夢を見たんだ……大丈夫。大丈夫だから……」

千冬姉に言うのではなく自分に言い聞かせるように繰り返すと言うと

「馬鹿。どこが大丈夫だ、酷い顔をしているぞ」

千冬姉は平気そうな顔をして俺の手を取り、自分の方を向けさせて「泣け。情けない事に私に出来るのはこれくらいだが……泣きたい時は泣けばいい」

ぎゅつと俺を抱き締めながらいう千冬姉。その暖かさに昔の事を思い出した、両親が居ない事や千冬姉と俺のこと……考えても答えの出ないことと判っているのに、考えてしまい。泣いていた……その時も千冬姉は俺の傍にいてくれた

「ああ……うあああああッ……俺……俺はどうすればいいのか判らない……俺は……俺はあ……」

俺はどうすればいいのか?それが判らない、ベールとの邂逅、オレの存在。そして俺は護りたい者を守るのかどうなのか?そんな言いようの無い不安が俺を押し潰そうとしてくる。

「泣け……泣くだけ泣いてそれで眠れ一夏」

優しく俺の背中を撫でながら言う千冬姉の言葉。俺はその言葉の通り、泣いて泣いて泣き疲れるまで泣いて、千冬姉に抱きついたまま眠りに落ちるのだった……

泣き疲れて眠ってしまった一夏をベッドに横にして、カーテンでベッドの周りを覆ってから振り返ると

「随分と弱っているな、一夏は」

さも当然と言う感じで腰掛け、紅茶を手に行っている龍也が居た。いかがかね?と言いなながらカップを向けてくる龍也に

「見ていたのか?」

「さて?何のことかな?」

相変わらず食えない奴だ、何を考えているのか全然判らない。同じ歳でもこうも違うものなのかと苦笑しながら、龍也の前に座る

「ミルクティー?珍しいな」

龍也が進めてくるのは大体がストレートティーだ。それなのに今日はミルクティーだったので珍しいなと尋ねると

「そう言う気分の時もある。それだけの話だ」

そうかと返事を返し、自分の分のミルクティーを口に行っていると龍也が

「一夏は今重要な分岐点に立っているな」

その言葉を聞いて私はカップを机の上に置き

「どういう意味だ?」

何か私に隠しているのでは?と想い睨みながら尋ねるが……

「深い意味はないさ。このまま闘いから遠ざかるのも、それとも立ち向かうのも一夏次第。そう言う意味での分岐点と言っただよ」

その言葉の裏に何かあるとは思うのだが、残念な事に私では柔和な笑みの裏の龍也の真意を読む事ができない。これがもしはやてとかなら判るんだろうなと思いなながら

「逃げると思ったら如何するんだ?」

「別にどうもしない。一夏が出した結論がそれならそれで良いだろう

？あくまで私はネクロに殺されないように鍛えはしたさ、だが気持ちで負けてしまったのなら……」

そこで言葉を切った龍也は私の目を見返してくる。その目はまるで吸い込まれるかのような、そんな不思議な目をしていると同時に、全てを見透かすような不思議な色をしていた

「一夏はそこまでの人間だったと言うわけだ。だから私がやることなど何もないよ」

笑うでもなく、怒るでもなく、ただ淡々と告げる龍也はカップを手に

「自分で片付けておけよ？じゃあな」

「さて……またか」

呼び止める隙も無く部屋を出て行ってしまった龍也。私は背もたれに背中を預けながら

(龍也は何を考えていた?)

あの目には絶対何か他の意味が合ったはずだ。龍也の真意は何だ？何かあるはずなんだ……

(一体何を私に……そして一夏に言おうとしていた?)

考えても考えても答えは出ない。変な話だが、私と龍也では見ている場所が違う。考えた所で龍也が何を見ているのか？それは理解できない……龍也と私では見ている光景が余りに違いすぎるからだ

「はあ……まずい」

ミルクティーは不味くないのに、思わず私はそう呟いてしまったのだ……これから先ネクロの襲撃があつたとして私に戦う力はない。暮桜は凍結状態だし、量産型のISでどうにかできる相手ではないだろう。思わず溜息を吐いていると

「千冬。出かけるわよ」

「何処へですか？私は一夏が心配なのですが」

いきなり医務室に来て出かけるというツバキさんにそう尋ねる。ツバキさんは地下のラボでISの修理をしているはずで、今出かける余裕なんてない筈なのに

「たまにはお酒でも飲もうって話になってね。気分転換にいいわよ

？」

スコールも姿を見せてそう言う。これはあれだ、もう私は断る事ができないようだと言いつつ苦笑しながら振り返り

「気配も無く後ろに回りこむのは止めてくれないか？」

「んー覚えとくわあ♪」

拳を振りかぶっているはやてはにこにここと笑っているまま……こういう所は怖いなど思いながら立ち上がり

「偶には付き合いますよ」

それに気分も落ち込んでいるし、アルコールを飲むのも悪くないと思いつつ私は、はやて達に連れられるように医務室を後にしたのだった

走り去る車を見ながら私は熱い紅茶を口に含み。医務室で眠っている一夏の事を考えていた

(一夏の気配が変わり始めていたな……)

一夏の気配にまるで水の中に墨汁を落としたように、黒い濁りが混じり始めていた。暴走している……いや、別の世界の一夏の力が徐々に強まってきているのかもしれない

(魔力で押さえ込むのも限界か……)

私が身につけているブレスレットの魔力石に亀裂が走っている。これは白式に融合しているデバイスとリンクさせ、そのデバイスを媒介に一夏に私の魔力を流していたのだが、それも限界が近いようだ(切っ掛けはやはりベール達か)

鈴やヴィクトリアから聞いた話だと、ベールと別の世界の一夏は同じ生まれで魔導師だったらしい。そしてネクロとなったベールたちを倒したのも一夏だったと……こうなると最悪のケースも想定しないといけないだろう

(自分が殺したはずのベール達を再び殺すことだけを考えている復讐鬼……いや、壊れた心の持ち主か)

その一夏が表に出ているときに鈴達を庇っている。護る為に壊す、

壊されないうちに殺す。私もかつてそう考えていた次期があった……私は飲み終えたカップをそのまま魔力で消滅させ

「最悪のケースを想定しなければならぬな」

1つの体に2つの魂は存在できない、どちらかが消滅しなければ対消滅する。向こうはなんとしても身体の主導権を取ろうとするだろう、それに対して一夏は精神力も何もかも劣っている。それで考えれば消えるのはこの世界の一夏のほうだろう……

(心で負けるなよ、一夏)

魂同士の戦いで必要なのは力でも魔力でもない、折れない心だ。それさえ判っていれば後はどうとでもなる。今も医務室で眠り続けている一夏が再び剣を取れるかどうかは判らない。逃げるも戦うも一夏次第、私が口を挟む問題じゃない。その結果この世界の一夏が消えたとしてもそれは運命としか言いようがない。が

「殴られるかもしれない」

千冬とかにな。もしそうなるのならば甘んじて受けるがな。この世界の一夏とあの世界の一夏は違う、千冬達が大切に思っている一夏ではないのだから

(だから、負けるなよ。一夏)

私にも誰にも今のお前に力を貸すことは出来ない、全てはお前次第なんだからな。私は心の中でそう呟きその場を後にした……ペガサスの事や束の事も。考える事は山ほどあるだから一夏一人に気を向ける余裕はない、この世界でのネクロとの戦いはもう直ぐ傍にまで近づいてきているだろうから……

何重にもオレを縛り上げている鎖。ぱっと見抜け出る事は出来無そうだが

「ふん！」

軽く力を入れるだけで鎖は風化し消えていく。オレは自由になった拳を握り締め周囲を確認する、白一色だったここは徐々にグレーに染まり、そして黒へと近づいてきている。つまりオレの世界になりつ

つあるのだ。だから一時はオレを封じ込める事ができたが、それまでだったと言うことだ

「後はこの世界の俺を消す事だけだな」

雪華ともう1人が俺を押しさえ込もうとしている。今はまだあの2人の方が力が強いが、そのうちオレの力が上回る。そうなればもう1度この世界の俺をここに引きずり込むだけで全てが終わる

「今度こそオレは全てを護る。全てを破壊したとしても」

あの世界でオレはリン達を救えなかった。だからあいつらはネク口になってしまった、だからあいつらを倒すのは同じ世界で暮らし、共に笑い合ったオレがやらねばならない事だ。そしてこの世界の俺では鈴達を守ることなど出来はしない、あいつには覚悟がない。剣を取る理由も判っていないだろう、そして護ると言う事がいかに難しい事なのかも……

「ならば絶望も悲しみも知らぬうちに殺してやるのが情けと言うものだ」

オレの手の中に現れた剣を振るうたびにこの世界の色は徐々に灰色になっていく、この世界が全て黒く染まったとき。その時こそが

「オレが完全に身体を手にする時だ」

徐々に鋭さを増していく風切り音を聞きながらオレはそう呟いたのだった……オレはもう何も失いたくない、だからこうして魂だけになってもなお生き永らえて来た。もうオレは魂だけの偶像ではないのだから……

「その身体は貰うぞ。織斑一夏」

オレの呟きは灰色の空へ吸い込まれ消えていくのだった……

第111話に続く

第111話

第111話

IS学園に帰ってきてから初めてのネクロとの戦闘。あれから2日経ったのだが、あれから一夏の様子が何処かおかしい、がむしやりに素振りをしていたり、オーバーワークとしか思えないトレーニングをしていた。それはまるで迷いを断ち切ろうとして足掻いているように見えた、私や鈴が相談に乗ると言っても

『悪い。暫くは1人にしてくれ』

と言って私の話も鈴の話も、そして千冬さんやマドカの話さえ聞く気配がない。

「一夏はどうしちゃったんだろうね」

「判らない。鈴は何かしららないのか？」

あの時一緒にいたヴィクトリアやマドカ。そして鈴にも話を聞いた。

「何回も聞かないですよ。あたしのネクロが出てきて、一夏が暴走した。それで一夏が暴走しているときとあたし達のネクロは知り合い、これしか分からないわよ」

不機嫌そうに言う鈴。何回も同じ話をさせられれば不機嫌になるのは当然だが、今の私達には何回も聞いた話でさえも聞き返し、僅かながらでも情報を得るしかないのだ

「……そもそもなのですが、ISの暴走。それは本当なのですか？鈴さんの話を聞く限り。別の存在が憑依しているという可能性のほう高いのでは？」

セシリアの言葉に何を馬鹿な。と言う物はいない、魔法にネクロと言う超常を知った以上その可能性は私達だつて考えた……だけど

その確信がない。知ってそうなのはさんやはやてさんにも聞いて見たが

「専門じゃないって言ってたよね？そう言うのは」

魔導師であっても得意な者とそうじゃない物があると言っていた。

なのはさん達は攻撃にこそ特化しているが、そういう存在については詳しくない。消去法で導き出されるのは

「龍也しかいない」

私と同じ結論に至ったラウラがそう呟く。私達だけで集まってもこれ以上の進展はない、龍也に話を聞くのが1番早いが……問題は別にある

「あの八神龍也がそう簡単に答えてくれると思うのか？肉親である姉さんと私が聞いても答えてくれないの？」

マドカの言葉にうつと呻く。事実千冬さんとマドカが聞いているらしいが返事は

「私が何でもかんでも知っていると思うなよ？で終わりだぞ？あの態度は絶対何かを知っているに違いないのに」

「力づくじゃ絶対無理だし」

「自白剤とかも駄目だろうな。確実に気付かれる」

何とかして龍也に話を聞きだす方法を考えているラウラ達を横目に立ち上がる

「箒？何か良いアイデアでも浮かんだの？」

シャルロットの言葉に首を振り。私は

「直接直談判する。何を言われても引き下がらないでな」

あーだこーだと変化球で攻めるよりも、直球で聞いたほうが早いという

「それは無理と言う事は私と姉さんで分かっているだろう？」

「時間の無駄になるかもしれないわよ？」

マドカとセシリアの言うこともわかる。だけど

「こうして話している間も一夏は悩んで自分を痛め続けている。私は……そんな一夏をほっておけない」

限りなく可能性が0だとしても、行動せずにはいられない。私は少しでも一夏の力になりたいのだからと言って私は龍也がいるであろう、地下のI Sの整備室へと足を向けたのだった。残されたセシリア達は

「直ぐに帰ってくることにしなすわね」

「私も何度聞いたことか」

諦めムードのセシリアとマドカだったが、鈴は違っていた

「はは……あーむかつく。全部箒の言ってる事が正しいわ」

ギラリとした強い意志の光を瞳に宿した鈴はぱつと飛び起き

「何時間でも粘ってやろうじゃない。あたしも行くわよ」

即行動と言う感じで走って箒の後を追いかけていく鈴。そしてそれによくようにシャルロットが出て行く、そして最終的には全員が地下のISの整備室へと走り出すのだった……

その頃地下の整備室ではと言うと

「龍也さんは何かを知ってるんじゃないの？」

「何か？ふむ……色々を知っているがね？何の事を聞かれているのかわからないな？何の話だ？」

楯無の言葉にそう尋ね返すとむーっと唸り始める楯無。その隣に居るユウリは

「意地が悪いな、何を聞かれているのか知っているだろうに？」

責める様な視線のユウリに私は本当に判らないと呟きながら、肩を竦め

「さて、どうかな？私はただ特殊な力があるだけの人間に過ぎないよ。語る事が出来るのは知っているだけの言葉。知らないものは知らない」

紅茶を啜りながらメンテナンス中のISの状態を調べる。この世界で行動するために作った擬似ISはすでにその役目を終えているので、解体しても良いか。騎士甲冑を使ったほうが早いしな。あとはクラナガンで複製したISのパーツをこっちに転送するかと考えていると

「一夏君の暴走の理由を教えて！知る権利があるはずよ！」

机をバンつと叩き怒鳴る楯無に私は眉を顰め

「淑女としての嗜みが足りんな。感情に身を任せるのは愚の骨頂だぞ」

「そう言う話をしてるんじゃないの！一夏君の最近の状態を知ってるでしょ！あのままじゃ倒れるわよ！」

睡眠時間は平均1時間弱。朝早くから夜の遅くまでの訓練。確かにいつかは倒れるだろうな

「知っているよ。今の一夏の状態は、だがそれは私の関与する問題ではないし、誰であつても今の一夏の状態は理解できないだろうよ」

遠まわしに話すだけ無駄だと言うと、更に怒った表情をする楯無。年下の怒気くらいはなんともないがね

「理解できない?」夏自身の問題と言う事か? ISの暴走は?」

ISを徹底的に分析しその原因がISではない事を突き止めたユウリの言葉に私は

「当たらずとも遠からずといった所だよ」

さてと、はやて達がISのスパアパーツを取って戻ってくるまで後2時間ほどか。1度IS学園の周囲の結界でも強化するかな

「そうやってはぐらかして楽しい?」

「楽しいと思えるか?」

逆に尋ね返されると楯無は黙り込み、机の上のクッキーに手を伸ばす。若くても裏を知る人間らしい対応だ

「話す気はあるのかしら?」

「話すのは私ではない、一夏だ。故に私に詰め寄っても時間の無駄だ」今の自分の状態を1番理解しているのは一夏自身以外ありえない。

そして

「仮に自分の状態を他人から聞かされて1番ショックなのは誰だ? 知っているだろうから私に聞く、その発想から間違いなのだよ」

整備室をこっそりと覗いている者達の視線を感じながら、カップを机の上に置き

「本当に助けたいとおもうのなら行動すべきだ。私は常にそうしてきた、拒絶されようが攻撃されようがね」

その言葉の後。複数の走る足音が聞こえてくる、それを聞いていた楯無が

「回りくどい事好きなのね? 箒ちゃん達が聞いてたの知ってたんだよ?」

そう言われれば知っていたと言わざるを得ないな。と苦笑しながら

ら

「時と場合による。この場合は誰が一夏の心に入り込めるか？それが重要なのだよ。その面では楯無はとても優秀だ、私の思い描いていた通りに動いてくれた。ご褒美にケーキをやろう」

机の上にショートケーキを置くと楯無は難しい顔をしながら

「まんまと利用されたわけ？」

「そうなるな。この男の言動は人を動かすように出来ている、もっとも性質の悪い人間だ」

私をまるで人を操って楽しんでいると言いたげなユウリに

「酷い言われようだ。すべてが丸く収まるように考えているだけだよ」

「性格が悪い」

ユウリと楯無に揃って言われ私は肩を竦めながらすまんと呟くのがだった……私って自覚ないが性格悪いのか？今まで言われた事の無い言葉に真剣に悩むのだった……

IS学園の外れでぼんやりと空を見上げてみると、自然と睡魔が襲ってくる。それも当然か、ここ最近碌に寝てないのだから……一瞬目を閉じかけて。慌てて開く、眠ればオレが来る。俺と変われとその手を伸ばしてくる。

「もう少し素振りするか」

ここ2日で軽く1000回は振っているだろう。それでも俺の手は綺麗なまままだ、迷いが合ったとしてもクラナガンで教わった剣の振りは何一つ変わっていないのかと苦笑しながら、振りかぶり素振りを繰り返す。自分がどうなってしまうのか？と言う不安がどうしても消えない、分かるのだ。俺の中でオレの存在が大きくなってるのを油断すれば、俺が吞まれて消えてしまうような嫌な予感がどうしても消えない。恐怖を振り払うように素振りを繰り返していると、誰かが走ってくる気配がして振り返ると

「見つけたわよ！馬鹿一夏ーッ!!!」

見えたのはスニーカーの底と風に揺れるツインテールだった、避け

ようとか思う間もなく

「げふうっ!!」

飛び蹴りが腹に命中しごろごろと転がる。鈴は俺の前に着地し

「おうこらへタレ。悩みがあるなら聞いてやるわよ、だから逃げんな」
うわお……まじギレしてる。口調が違うことが俺の危機感を煽る。
だけどこればかりは鈴や箒に相談できないようじゃない、なんとかして巻こうと思いいちち上がって見ると

(うげえ!? 鈴だけじゃない!?)

遠くのほうから走ってきているセシリアや箒の姿が見える。いかん、1人ならまだしもあの人数から逃げるのは厳しい、俺はマジギレしている鈴が伸ばしてきた拳を回避し、そのまま脱兎のように逃げ出したのだった

「待ってって言うてるでしょ! 止まれ! 馬鹿一夏ツ!!」

「その前にお前が止まれ! その手にしてるクナイは何だ!」

「痺れ葉だから大丈夫よ! 止まれ! 止まらないと投げるわよ!!!」

止まらないと投げるといつているが既に投擲されているクナイを飛びのいて回避すると

「オーライ」

「角度よし、捕獲ネットの射出シークエンスに入る」

(シャルううう!?)

ISを展開し捕獲体制のシャルと捕獲ネットを打ち出そうとしているラウラ。俺は放たれたネットに木刀を搦め態勢を立て直しそのまま走り出した。静かに考え事をしたいと思っていたのにどうしてこんなことに!?

「3秒だけ猶予をやる、止まれ一夏。スタンショットを私が撃つ前に」

「お前らが止まれ! 一夏止まるな! 撃たれるぞ!!!」

「一夏さーん! 逃げて! 逃げてください!!」

箒とセシリアの逃げろという言葉に、僅かながらだが安堵し俺は全力で走り出したのだった

「ちくしょう! こうなるって判ってたぜ! こんちくしょう!!!」

ISを持ち出していたシャルとラウラに続き、鈴とマド力までIS

を持ち出した。俺が捕獲されるのは時間の問題だったのだ。完全に包囲され絶叫していると

「うん。漸く一夏らしくなったわね」

「うんそうだね」

はっ？俺らしくってどういうことだ？俺が首を傾げているとI Sを解除した鈴がずかずかと歩いてきて

「ふんー！」

振りかぶってビンタを叩き込んできた。更に

「じゃあこれは僕の分ってことで」

「ふぐおう!？」

鋭い踏み込みからの肘うちに身体がくの字に折れると

「こういう時は思い切りが大事だと聞いた」

マドカが回し蹴りで俺の頭を打ちぬき

「すまんな」

ラウラが謝りながら俺の頭に肘を叩き込んだ。見事なまでの連携攻撃を前に俺が倒れこんでいると

「一夏。こんな事になってしまったことは謝る。だがお前が悪いんだぞ？私達が心配しているのに何もかも自分で背負い込んで……自分を追い詰めるような修練をしてなんになる？」

「そうですねよ。一夏さん、自分ひとりで悩みを抱え込まないでください」

箒とセシリアの言葉に俺はぼつと飛び起き鈴達を見ると、箒やセシリアのように優しい眼差しをしていた。さっきの攻撃は俺の馬鹿さ加減に対する仕置きと言う事だったのかと肩を落としながら

「あー俺って凄い馬鹿なのか？」

「『馬鹿だ』」

声を揃えて言われて少しへこんだが、俺自身も馬鹿だと思うから仕方ない。俺は痛む身体を我慢して姿勢を正して

「悪い。今俺が悩んでいる事を聞いてくれるか？」

もちろんと頷く箒達。俺はまたなんて馬鹿な事をしたんだろうなと小さく呟いた。俺の為にここまでして相談に乗ってくれようとし

ている箒達から逃げて何をしていたんだと思いながら、俺はぽつぽつと喋り始めたのだった……

全てを話し終えた一夏は箒達の見ている前で糸の切れた人形のように倒れこみ、寝息を立て始めた。最初は驚いた箒達だったが仕方ないと言いたげに苦笑し、寝ている一夏の周りに座り込み

「暴走じゃなくて違う世界の自分が一夏の中に居るかあ……なんともとんでもない話になったわね」

一夏の話の内容は、自分の中に違う世界の自分。ボール達と同じ世界の自分がいて、それが自分の身体を乗っ取ろうとしているの事だった。その話を聞いた箒達は驚きはしたが一夏を励ました。大丈夫だとそんな事にはならないと、仮にそうなりかけたとしても

「叩いてでも元にもどすだっけ？」

「む……悪いか？ 私にはそれ以外の方法が思いつかなかったんだ」

シャルロットの言葉にバツが悪そうな顔をする箒にううんと言いながらシャルロットは

「僕もそれで良いとおもうよ。まあなんにせよ、一夏が起きるまでは傍にいてあげようか？」

子供のように安心しきった顔をしている一夏。1人ではないという事に安心しきっているのだろう

「そうだな。しかし何をして時間を潰す？」

座りながら尋ねるラウラにマドカがごそごそとスカートのポケットから

「トランプでもしよう。賭けで」

「賭け？ 何を賭けるんですの？」

セシリアの言葉にマドカはにやりと笑いながら

「私は一夏の寝起きの写真を賭けの対象として出そう。姉さんや私しか見ることの出来ない、貴重な写真だ」

「そんな物持つてるのは」「乗ったあ！」「持つてるのか!？」

箒の言葉を遮り、鈴とシャルロットが叫ぶ。驚いている箒・セシリア・ラウラにマドカは

「他の物でもいいぞ?」

「ぐっ、いいだろう! やってやろうじゃないか! なら私は小学校の時の一夏の写真を出す!」

「持つてるんじゃないですか!?!」

「今は持つてないが、察にはある。それだけだ」

「寝ている一夏はまさか自分の写真を賭けの対象に箒達がトランプをしているとは夢にも思わず熟睡していたのだった……」

箒達がトランプに盛り上がっていることIS学園では

「よく来たと言っておこうか?」

「お前の力を借りるときが来た」

「疲弊しきっているペガサスがIS学園に訪れているのだった……」

「随分と弱っているようだが、どうかしたのか?」

龍也の問い掛けにペガサスは鼻を鳴らして

「白々しいぞ、八神龍也。判っているのだろうか?」

その問い掛けに龍也は頷き、ペガサスを見据えて

「時間がないんだな?」

「ああ。俺が俺でいることの出来る時間もあと僅か、ハーデスが動き出そうとしている今がチャンスなんだ」

人間ベースのネクロ。それは人間としての意識を保つ事が出来ると言う稀有な存在だが、それには時間制限がある。ペガサスはその時間を完全にオーバーし、ネクロになろうとしている身体を無理やり押さえ込んでいた。しかしそれも限界が近づいてきていたのだ

「少しでも人間としての意識を保てるようにしてやる。ついてこい」
「ああ」

足を引きずるように龍也の後をついて行くペガサス。そして龍也とペガサスの姿は突如として消え、変わりに蒼い魔力の残滓だけが2人の歩いてきた通路に残るのだった……

第112話に続く

第112話

第112話

地下の整備室に来たワタシは思わず顔を引き攣らせた、なぜならそこには本来居るはずのない存在が居たからだ

「なんだ小僧」

不機嫌そうな顔をしているペガサスが腕組してどつかと椅子に座っていた。同じく整備室には普段いないフレイヤとシエルニカの姿がある。念の為の護衛と言うところだろう

「そうきにする事はないさ。外見が化け物って訳じゃないし、見た目は人間だから。見た目はな」

恐らくペガサスをこの場に招いた龍也が笑いながら言う、だがペガサスは不機嫌そうに

「2回言うな、腹が立つ」

刺すような殺気を叩きつけるが龍也は涼しい顔をしている。こちらへんはあれだな、確実に経験の差つと言うところか

「で？なんでいるの？」

ペガサスを見ながら尋ねるツバキに龍也は

「本格的なネクロの攻撃が近いと警告に来てくれたのさ。そして……「おい」ふむ。失礼少々口が滑った」

龍也の言葉を遮るペガサスはますます不機嫌そうな顔になる。龍也は平気そうに笑っているが、ワタシ達には少々きつすぎる殺気だ「でも本当にネクロが協力してくれるなんてね？あ、砂糖入れる？」

「そのまま構わん。コーヒーにしてくれ」

平然とコーヒーを要求するペガサス。それを見ているしかないワタシ達は小声で

（座ってるだけなのになんていう威圧感なの？）

ペガサスは座っているだけなのにこの空間を全て掌握しているような威圧感を持っている。これが最上位レベルのネクロの力とでも言うのだろうか？

(私達がいっても無駄と思うな)

(ISを展開しても勝てねえよ。だけどここにいるしかない)

小声で聞こえてくるシエルニカ達の声。だがその判断は間違いではない、シエルニカ達は傭兵上がりと言える。最も重要なのは生き残る事であり、クライアアントの指示を守ることだ。例え力が足りないと判っているとは言え離れる事はできないのだろう

「それで?ここのせめて来るネクロはどんなネクロなんだ?」

「お前に話しても無駄だと思うがな、織斑千冬」

ふふんと笑うペガサスに千冬が顔を歪めるが

「安い挑発に乗るな、それとお前もだ」

龍也がペガサスと千冬の間を取り持つ。どちらも互いを信用する気はないという態度が見え見えだ

(私部屋に帰りたい)

(ワタシもだ)

いつものようにISの整備に来たのだが、明らかに今日はタイムミングが悪かったと言わざるを得ない。出来るなら引き換えして訓練でもしていた方が良くと言うものだ。しかし1度この部屋に入った以上外に出るわけにもいかず、この居心地の悪い場所に居続けるしかない

「攻めて来るのは「覇皇ハーデス」。万全ではないはずだったんだが……ここ数日の奴は今まで以上に最高の状態になっている」

「万全ではないはずだった?どういうことだ?」

その言い回しに引つかかる物を感じてそう尋ねるとペガサスは

「やつはリンカーコア。魔導師が魔法を使う器官だが、説明は聞いているか?」

龍也から何回も聞いているので間違いない。魔法を使うのに必要な器官で、若い魔導師は再生する事もある、摘出される事で死に至る事はないらしいが、それでも身体に深刻なダメージを受けるらしい。そして

「ネクロにとっては毒だと聞いている」

ネクロにとっては魔力は必要な物だが、リンカーコアを直接取り込

むことは自身の消滅に繋がり危険だと

「ああ、その認識で合っているが、極稀にリンカーコアを取り込めるネクロが存在する。特異態だ」

特異態？聞いた事が無いと視線で龍也に言うと、龍也は肩を竦め

「希少種だからな。滅多に存在しないネクロだ」

「ヴオドオンもそれに含まれるかな」

あの腐敗を使いこなすネクロか、確かにあいつも他のネクロとは違う能力を持っていたというのは見て理解している

「ハーデスはリンカーコアを体内に蓄積する事で自身の能力を上げる。この世界にリンカーコアは存在しない自身の能力を上げる事は出来ない筈だった……だが奴は何処かでリンカーコアを入手し体内に大量に蓄積している。今の奴の力がどんな物なのかは知らないが、相当強力になっているのは判る」

リンカーコアを力に変える……普通のネクロの常識に当て嵌まらないネクロか……そんなネクロが如何してIS学園に来るんだ？

「あいつは戦闘者としての意思が強いネクロだ。そしてこの世界の存在はあまりに脆弱、ここまで言えば判るだろう？」

「私が目的か……まあ色々と策を講じてくるネクロよりかはやりやすいがな」

「IS学園が更地になつては困るんだが？」

千冬の言葉に龍也とペガサスはやれやれという感じで肩を竦め

「向こうが私を狙っているのなら移動してやれば良い。迎え撃つほうが楽だからな、とは言え一夏が不安要素か」

「ここ数日の一夏の様子を考えるのなら、戦闘に出すのは控えたい所だ

「あの小僧がどうかしたのか？」

「精神的に不安定でな。出来る事ならば私とお前だけで戦えればいいんだが」

「無理だ。あいつの障壁はこの世界の技術と魔法のハイブリッド。両方同時に対応しなければならぬ」

「しかしだな……」それにハーデスは一夏を狙っている。1度死んだ

ネクロが蘇った原因とも言えるしな」

その言葉に千冬の眉が動く、龍也も信じられないという顔をしている。

「えーと良い？」

「なんだ小娘」

ペガサスに見つめられた楯無は少し肩を竦めてから

「その言い方だと一回鈴ちゃん達のネクロは死んでいるように」

「死んでいるんだ。俺も見たから間違いない、あのネクロ達は1度死に、消滅している。それなのにコアを自ら復元し肉体の再生を始めていた。丁度その時に回収され、この世界に運び込まれたんだ。確か運び込まれたときは殆ど肉片だったはずだ……」

とんでもない話になってきたな、普通のネクロはそこまで消滅すれば再生できないはずなのではないのか……しかし肉片からあそこまで回復するとは、ネクロとは本当にとんでもないな

「執念かはたまた愛憎か……どっちにしろ厄介な存在である事は間違いないな」

「俺には関係のない話だな。まあこれで俺の話は終わりだ、警戒しておけ」

ペガサスはそう言うのと立ち上がり、闇の中に溶けるように消えていった

「ネクロは皆あんな能力があるのか？」

「基本的にネクロは影に関する能力を持つ。まあ上位レベルは失う事が多いがな」

龍也の説明を聞きながらツバキがコーヒーを啜りながら

「より強い能力を得ることが出来るから？」

「そうだ。影を移動する能力は大体はLV3の地点で失う事が多いがな」

ネクロの進化能力と言うのは本当に常識に当て嵌まらないようだな……

「まあなんにせよ攻撃してくるのが判れば対策はいくらでも取り様がある。ISの修理は間に合うのか？」

龍也の問い掛けにワタシとツバキは

「不可能だ。戦闘可能になるレベルには程遠い。動かす事なら大丈夫だがな」

「ええ。しかも動いたとしても戦闘には耐えれない」

龍也はうーむと唸りながらIS学園の周辺の地図を見て

「やはりなのは・フェイト・はやてが主力になるか、シエルニ力達のISの改造は出来ているのか？」

「改修は出来てるが……ネクロとの戦闘には不安があるぞ」

フレイアがそう言うと言龍也は

「戦わせる事が目的ではないのでな。それでいい、千冬・ツバキ……ハーデスの攻撃に対してだがあえて防衛網を薄くして、本陣に切り込ませるのが目的だ」

龍也の作戦を聞いたワタシと楯無は

「やっぱり性格悪い」

「ああ。性悪だな」

ワタシと楯無はやはり龍也の性格が悪いのを実感し、そう呟いたのだが

「戦術としては優秀よ。本陣に招きよせるための作戦としてはな」

「ああ、間違いないな……優秀な軍師だよ。お前はな……」

性格が悪いのはではなく、軍師として戦略家として非常に優秀と言うことなのか……ワタシと楯無はまだ若いということかと苦笑するのだった……

IS学園の上空に佇む女性「ネルヴィオ」だ。彼女はIS学園の敷地から遠ざかっていくペガサスの気配を感じ取り

「ふーん。やっぱり裏切ったかあ……まあ私には関係ないけどね」

形場はベエルゼの配下をしているけど、私は正直のこの世界の戦いなんてどうでも良いし……空中の上に寝転がりIS学園を見下ろす

「あーあ、お父様はこんなに近くににいるのになあ」

手を伸ばせば、愛に行こうと思えば会いに行ける距離にいるのにな

あ……

(今は会いに行けないしなあ……)

あの煩わしい女達が居ないから会いに行こうと思えば行ける、けどI・S学園にはネクロ達の監視がある……それにお父様も今会いにこられても困るだろうし……

「ネルは良い子だからお父様に迷惑をかけたくないしね」

お父様が何よりも大事で、その為に私は動いている。それはこの世界でも代わりはない……

「ネル？どうするのー？」

「モメモノ……モメモノはどうしたい？」

同じようにふわふわと浮いているモメモノを抱っこしながら尋ねる。モメモノは首を傾げて

「んーわかんない……モモ。お父様に会ったことないしね……」

「あーそっかーそうだよねー。ごめんね」

モメモノは私がネクロとして活動して……んー何年だっけ？忘れた。まあいいや、最初から私と一緒にじゃなかったから知っているわけがないのだ

「お父様はねー、とっても優しく暖かいんだよ？モメモノと私の居場所なんだよ？」

「居場所？お家？」

「そう家、私とモメモノが帰るのはお父様の所なんだよ。その為にはまだやらないといけない事が沢山あるけどね」

まずはお父様に会うことが大事だし、あの女たちを潰さないといけない、それに何よりも

(この時間から移動しないと駄目なんだよね)

私はこの時間軸よりも先の存在だ。だから私を見た物は名前・能力と言った事は話すことが出来る、だけど詳しい容姿は話すことが出来ない、簡単に言うると時間の修正力と言う奴だ。だから今のお父様は「ネクロマンシー」を扱う事のできる女性型のネクロが居る

と言う認識しかないわけだ

(そろそろ帰ろうかなあ……)

ベエルゼも回復してるし、ハーデスも動くようになった。徐々に戦力は充実しているし、態々私がネクロマンシーを使わなくてももうネクロは増え始めているのだから。だけどこの時間軸は外れるとランドグリーズがうるさい

「ネル? どうした?」

「んーなんでもないよ、難しい話だからね」

モメメノは外見の通り子供だ、難しい話をしてても理解できないだろう

「帰ろうか?」「いやいや、お待ちください」帰れストーカー」

虚空に突然現れたランドグリーズにそう言うと、ランドグリーズは肩を竦め

「手厳しい」

そうは言うが笑っているので特に何も感じてはいないだろう。そもそもそんな事で傷つくのならネクロなんて出来ない

「んで?今日は何しに来たわけ?ハーデスにリンカーコアを渡して帰ったんじゃないの?」

私がそう尋ねるとランドグリーズは眉を顰め

「少々不味い事になってきてましてね。本来の時間軸でね」

「……興味ない。お父様に関係ないならね」

そう言つて帰ろうとするとランドグリーズはそうですか?と呟いてから転移しようとしたが

「盟主が守護者を消しました」

「……どういう事だ!!」

振り返りそう怒鳴るが既にランドグリーズの姿はない。くそっ!あの狸め!!!

「守護者?お父さん?」

「……1度帰るよ。モメメノ……盟主の所にね」

情報を整理しないと不味い。特に盟主の動きは私は何一つ知らないのだから

「おいで。モメメノ」

「うん」

「ユニゾンイン」

モメモノとユニゾンし甲冑を展開すると同時に、腰の剣を抜き放つ、いや正しくは鞘に収まったままなので剣を抜き放つとは言えないか……

「開け」

魔力を纏わせ振るうとゲートが作り出される、だがそれは普通のゲートではなくもつと豪華な物だった。金の装飾が施された正真正銘のゲート

「行くよ。モメモノ。怖かったら意識を閉じてて」

『うん……』

モメモノの小さな呟きを聞いてから私はゲートの中に足を踏み入れた、ここから先は通常のネクロは存在も出来ない世界。盟主の許可を得てなおかつ、通常のLV4の倍以上の魔力を持つ者しか進むことの出来ない世界。

(また強くなってるわね)

盟主の魔力がここまで流れてきている。その力は既にお父様と同じかそれ以上だ、内心舌打ちする

(前にあったときはもつと魔力も少なかったのに……)

いつの間にもここまで力をつけたのか？そしてこれだけの魔力ならお父様を倒しても不思議はない……とにかく一刻でも早く情報を得なければ……私はそれだけを考えゲートの奥へと進んで行ったのだった……

訓練の後皆で昼食を食べていると龍也が来て俺にそう告げる

「戦う事になるかもしれない？一夏が!?今の一夏の状態を知ってて言ってるんですか!」

「こういうのはなんです、些か無謀では?」

「僕もそう言うのは止めたほうがいいと思う」

箒が龍也にそう怒鳴り、セシリアとシャルは柔らかい口調だが駄目だという。周りの反応を見る限りだと結界でも張ってあるのか無反

応だ。こういう時魔法は便利だとおもう

「判っている。だが……越えねばならぬ壁もある。まあ無理強いはない、決めるのは一夏だが……」

ここで龍也は言葉を切つてにやりとまるで悪戯坊主のような笑みを浮かべ

「心配だから止めているようじゃあ、いい女とは程遠いな」

「どういう意味ですの!?!」

セシリアがそう尋ねると龍也はやれやれという感じで肩を竦めて

「鈴かラウラにでも聞いて見ろ。あとマドカにもな」

そう笑つて歩き去つていく龍也。首を傾げている箒達を見ながら鈴に

「いい女の条件ってなんなんだ?」

「はあ? 何言ってるのよ? 一夏」

何馬鹿言ってるの? と言う顔をしながら鈴は自分が注文したデザートザートの杏仁豆腐を頬張りながら

「男の決めた道を邪魔しないのがいい女よ。どうせあたし達が言つたつて聞きやしないんだから、好きにすれば? その代わりついてけどね!」

「うむ。クラナガンで龍也や、その周囲の人間を見ていて思ったが、龍也の周囲の人間はきつと心配こそすれど止めはしないだろう。止める事は龍也を信じないことに繋がるからな」

「と言うわけだ。一夏、自分で決めろ。私達は止めない」

ばんつと背中を叩くマドカ。俺はマドカとかの話聞いて、皆随分とたくましくなったなあと思いつつ、言っている事は正しいと思う。俺が何をしたいのか? それはいつだって決まっている

「俺はやるぞ。戦う」

箒とかが俺を見るがそれで揺らぐような気持ちではない、確かに暴走は怖いし、ネクロも怖い。だけど

「いつまでも逃げていても意味ないしな! やるだけやってみるぜ!!」

注文していたカツ丼を慌てて食べ終え、そのまま立ち上がり

「龍也に話を聞いてくる! じゃな!!」

俺はそのまま食器を返却し龍也を探して走り出したのだった。残された箒達は

「なんか負けた気がする」

「私もですわ」

「僕も……」

深く溜息を吐いていたが、鈴達は平然とした顔で自分の注文した料理を食べ終え

「さーてあたしも龍也を探しますか、話を聞かないと何をすればいいのか判らないしね」

「その通りだな。ISやデバイスがなくても戦える術はあるかもしれないしな」

「整備室だな。行こう」

さっさと食器を片付けて食堂を後にしていた。それを見ていた箒はぼそりと

「これがいい女とそうじゃない女の差なのか……」

と呟き、更に深い溜息を吐くのがあった……同年代でも考え方の違いが徐々に出てきているのだった。この次期は少しのきっかけで大きく変わる。それが特に大きい鈴達だった……

そして一夏達が動き出した頃。ハーデスもまた動き出していた「……行くか」

魔力・気力共に過去最大といえるほどに充実している。全身が叫んでいる、戦わせろと俺に相応しい敵を待っていたのだ

「ハーデス」

「ベエルゼか。どうした？珍しいな」

普段で歩く事のないベエルゼが俺の前に現れた。なにか予定の変更でもあったのか？と思っていると

「ペガサスが守護者側に着いた」

「ほう……それはまた朗報だ」

あのペガサスと言うネクロが俺を敵対視しているのは知っていた。

だがベエルゼは仲間同士の争いを嫌う、だからあえて無視していたが、敵に回るといふのなら好都合だ。

「念のためにデクスを連れて行け。守護者が何の手も打たないとは思えない」

守護者の策はどれもこれも少数で多数に勝つ作戦だ。確かに警戒しておいたほうがいいだろう

「判った。デクスを数体連れて行く。ではな……」

「武運を祈るハーデス」

ベエルゼの言葉に俺は少し考え、悪いがと前置きしてから

「俺は……戻らんかもしれんぞ?」

俺は途中で逃げるような真似はしない。戦うと決めたのなら戦場で死ぬ……無様な真似はしない。守護者相手ならば俺が戻る確立は良くて20%と言うところだ、だが俺には俺の誇りがある。だからこそ無謀だと言われようが他の高レベルのネクロを連れて行かないのだ

「知っている。だから見送りに来たんだ。お前の性格は知っているつもりだからな」

「そうか。戻れたらお前の指揮に従う事も考えよう」

俺はそう言い残しヨツンヘイムを後にした。IS学園とやらに向かうに連れて血が滾るのを感じる

(守護者・ペガサス!俺を満足させろ)

こんな生ぬるい世界と言うのは癩だが、最高の敵がいる。そう考えるだけで魔力が滾り、否が応でも手に力が入る。俺は自分でも判る獰猛な笑みを浮かべ、一直線にIS学園へと向かったのだ……

第113話に続く

第113話

第113話

雲が月を覆い隠す中。俺は数対のネクロを連れてIS学園に向かっていた。無論連れているのは少数だが、直接転移でIS学園の近くに戦線を展開できる準備も出来ている

(守護者の気配はない。どこに居る)

向こうが俺の気配を感じ取るように向こうも俺の気配を感じ取っているはず、それなのに向こうの気配がしない

(何か考えているのか?)

守護者が単独の時は、今のように集団戦術ではなく、ゲリラ戦術。しかも少数で多数を討ち取る戦術を得意にしていた。今回もそうであるのでは?と言う考えが頭を過ぎる中

「おーと、ここから先は通さへんで?」

「ここで止まってもらうよ。ハーデス」

夜天と雷光が姿を見せる、だがその魔力を感じ取る事はできなかった

(何かの策か?それとも結界か?)

突然現れた2人に一瞬混乱しかけるが、直ぐに気を取り直し

「いけっ!」

「キツシャアアア!!」

咆哮を上げながら飛び掛っていくデクスに2人を任せて、更に奥へと進むと今度は、ISとか言うガラクタを身に纏った人間が姿を見せる

「邪魔だツ!!」

全身から魔力と殺気を飛ばすと顔を青くして引き下がる人間を無視して、周囲にネクロを散会させる。これで戦力は更に分散するはずだ。更に奥に進むと

「ふっ、やってくれるな」

そこには甲冑を展開した守護者とペガサス。そして人間の小僧

……確か「織斑一夏」が待ち構えていた。俺はここに誘導されていたわけか……ヒュプノス・モロスを抜き放ち

「3人如きで俺を止めれると思ってるのか？」

「止めるのではない、殺すんだ。そこを間違えるな。ハーデス!!!」

凄まじいまでの殺気と魔力、そして清涼な闘気を放つペガサス。俺は知らないが、もしかするとあいつの生前と何か関係があったのかもしれんな、だが

(期待はずれが1人居るが仕方ない)

織斑一夏とか言う小僧は顔を青くしている。正直って邪魔物だが、別に構わない。ペガサスと守護者と闘えるのなら、他の存在などどうでも良い。今は俺が戦うに相応しい猛者が2人もいる、その2人だけで充分だ

「行くぞ！存分に死合を楽しもうではないか！」

俺はそう叫び守護者とペガサスへと駆け出したのだった

「シャアアアア!!」

「キキ!!!」

影から次々出てくるネクロを見ながら私は隣のユウリに

「作戦通りらしいけど、これってさ？結構ピンチじゃない？」

「今更気付いたのか？」

呆れたように言うユウリ。周囲にはネクロ・ネクロ・ネクロの数々。

どう考えても2人で処理できる数じゃない。

(予定通り引き付けながら下がるぞ)

プライベートチャンネルのユウリの言葉に頷き。ネクロ達を適度に攻撃しながら、下がっていく。ネクロは当然ながら追いかけてきて、私とユウリがある程度下がった所でステルスモードを解除したオータムさんとアラクネ改が姿を見せ

「邪魔だ！オラオラオラ!!!」

オータムさんのガトリングが火を噴き続ける。あれって最初魔改造とか言って気に入らなかったはずなのに、いつの間にかトリガー

ハッピーになっているような気がする

「制圧戦にはいいのよ。後最初の弾幕は重要だわ」

スコールさんが展開しているのも当然改造が完了している、ゴールデンドーンだ。ブレードとすらスターの増量で機動力を強化しているらしい

「森吹き飛んでますけど」

アラクネに搭載された重火器が火を噴き続け、IS学園の周囲の森の1部が完全に消滅している事を指摘すると

「必要経費よ」

「いや、違うだろ?」

ユウリの突込みが炸裂する。ネクロは私達に近づく事ができず、弾幕にやられて消滅していつている。

「AMFフィールド弾って凄い威力ね」

クラナガンで搭載された新型の弾丸。ネクロの障壁を突破する特殊弾らしいのだが、とんでもない破壊力だ。その分反動も凄まじいが……

「ちっ！弾切れだ！スコール！作戦変更だ！」

早!?おかしいわよね!?AMF弾は1000発搭載してあったはずなのに!?

「打つのが楽しくてな。使いすぎた」

トリガーハッピー!!!大丈夫なの……強化パーツをオミットして通常形態に移行しているアラクネを見ながら

「とりあえず、ここからが本番だ。油断するなよ」

影からどんどん這い出てくるネクロを見ながら言うユウリ、ネクロとの戦闘に慣れる為とは言えこれは相当きつい

(100人抜き所か200人抜きよね)

どんどん這い出てくるネクロを見て溜息を吐く。影のようなネクロがメインだが、その数は明らかにこちらの数十倍だ

「実戦は100の訓練に勝る。気を入れなさいよ」

スコールさんがレイピアを構えながら言う。確かにその通りだ、これはこれからの戦いの予行練習だと思えばいいんだ。私はそう判断

し蒼流旋を構えながら、それでも言わずにはいられないことを口にした

「あの鬼を今度なんとしてもとっちめる!!」

いきなりこんな実践訓練にほりこんでくれた龍也さんに必ず報復してくれると叫び。ガトリングのトリガーを引くのだった……

目の前で見えている光景を見ると、なのはさんとツバキ先生。そして千冬さんが

「はいはい、目をそらさない。ちゃんと見てね」

「そうよ。乱戦のこれ以上にならない実戦よ、ちゃんと見ておきなさい」

「後でレポートを提出してもらおう。しっかりと学んでおけ」

私達はなのはさんの張った障壁の後ろに隠れながら、ネクロと戦っている楯無さん達を見ていた

「見ることも稽古。ちゃんと見るんだよ」

優しい口調のなのはさんは、ここならネクロに見つからないからと笑う。少しだけ身を乗り出して戦いを見る

「ユウリ！フオローよろしく!」

「撃ち過ぎだ。馬鹿者」

「スコール。装填の間頼むぜ」

「ええ。任せておいて」

AMF弾。ネクロの障壁を貫通する特殊弾を搭載している。ミステリアス・レイディとアラクネが下がり、入れ替わりでユウリとスコールさんが前に出て

「このAMF加工と言うのは便利だな」

「そうね。ネクロにもダメージって言うのがいいわ」

そんな会話をしながら襲ってくるネクロをいなし、切り裂く。そして

「装填完了!下がって!」

「行くぜえ!!!」

弾丸を装填しなおしたミステリアス・レイディとアラクネの弾雨が

ネクロを貰っていく。それは完全に互いに互いをフォローしており。完璧な乱戦でのフォーメーションになっていた。それを観察していたマドカが

「質問は聞いてくれるのか？」

「いいよ。これも勉強だからね」

「何故切り込んで攻撃しない？あのAMF加工の剣ならばダメージを与えるのではないか？」

それは私も思っていた。私達のISにはまだ搭載されていないが、その内搭載予定の武器だ。それを持っているのに何故自分から攻撃しないのか？と言う問い掛けに

「過信は厳禁だからね。生き残り戦いをするための戦術。深追いはしないで安定して攻撃できる射撃武器を使う。これは常識だよ」

そう言われると確かにとおもいますが、攻める時に攻めるべきなのではないだろうか？

「ネクロは神出鬼没。今優性でもどうなるか判らない。慎重に戦うのがセオリーだよ」

むう……何回も言われたがやはり私はまだ猪突猛進の気が抜けないのかもしれない。集団戦術とその有効性は何度も教わったはずなのに

「だけどその心意気は買うけどね。慎重すぎて動けなくなるよりは、思い切って行動。それも大事なんだよ、まあそれが出来るならついでに指揮とかも覚えると良いよ。前線に出れる指揮官は優秀だよ？」

なのはさんにそういわれるがそう言うのは私の性格では出来ないだろうな。力を過信しがちな私には到底向いていない

「ラウラはあれと同じ事が出来る？」

「……難しい所だ。戦いながら周囲を見ることは今の私では出来ない。そう言うのが出来るのはヴィクトリアやエリスではないか？」

「私もそう言うのは苦手だぞ？」

「謙遜しなくてもいいのよ？ヴィクトリアちゃんは見ることをたけてるわ。充分指揮官としての器は持つてるわよ」

ツバキさんにそう言われて照れているヴィクトリアを見ながら、1番前で戦いを見ている鈴に近づくと

「集団戦って言うのは簡単だけど。こうして見ると難しいわね」

「だな。だが覚える必要のあることだと私は思う」

今こうして近くで戦闘を見るのが出来る。父にも言われていた見て学ぶ事も大事だと、ならば今私が出来るのは

(しっかりと見て学び。あの動きを覚える事だ)

「箒は随分と集中してるね、いいことだよ」

真剣に戦いを見ている箒を見ながら言うのは

「篠ノ之は剣士としてのレベルは充分だ。だが視野が狭い。こうして戦闘を見ることも良い経験になるとおもう」

「それは千冬にも言えるけどね?」

「耳が痛いです」

顔を顰める千冬を見てなのはくすりと笑い

「学ぶ事。省みる事ができれば引き返せるよ。今からでも充分にね」

真剣にネクロとの戦いを見ている箒達。実戦の後に、実戦を見せることで自分たちの戦いのどこが駄目だったのか?そこを理解させる。これは龍也がクラナガンでも行っている訓練方法の1つであり。そもそもつとも効率的であり、ネクロと闘う事を決めさせる一種の授業なのだ。ここで諦める者とかも出てくるのだが

「皆良い目をしてるから大丈夫だよ」

なのははそう断言した。箒達の目に怯えや恐怖の色は浮かんでいない、それでもなおその色に負けない。決意の色が浮かんでいた、こういう人物は強いとなのはは知っていた。だからそう断言できたのだった

「むんっ!!!」

「ちっ! 固い」

ハーデスの一撃を弾き、その勢いを利用して間合いを放す。近くに居るペガサスに

(本気で固いな。有効打を与えない)

(あの障壁は相乗効果で強化されている。そう簡単には突破できない)

話は聞いていたが、ここまでとは予想外だ。あの障壁を突破するには「約束されし勝利の剣」もしくは発動に時間の掛かる詠唱魔法でなければ突破できないだろう

「くそっ！俺の零落白夜で」

痺れを切らして零落白夜を発動させようとした一夏。だがそれは

「馬鹿か！貴様は！大人しくしている！」

ペガサスの一喝で止められる。私でもペガサスでもあの障壁は突破できず、私とペガサスがそれぞれの魔力で障壁を中和し。そこに零落白夜を叩き込む。それは今取れる最善の策だ。ここで一夏に暴走されては意味はない

「何を話しているかは知らんが、行くぞ!!」

背後に浮かんでいる楯から魔力を放出して突っ込んでくるハーデス

「ちいっ!!」

両手で剣を持ちその一撃を受け止めるが……

「この馬鹿力が!!」

その勢いに押されて地面に足がめり込む。信じられない破壊力だ、膂力に加えて魔力のブースト。正面から衝突すればこっちが弾き飛ばされる。かといって魔法で攻撃すれば吸収される。

(とんでもなくやっかないネクロだな)

加速力・防御力・攻撃力。どれをとっても今まで戦ったネクロの中でも最強に数える事ができる。ペガサスが1人で戦えないといったのも納得だ。私がハーデスと鏝迫り合いをしていると

「取った!!」

ペガサスが間合いを詰めて横薙ぎの一撃を叩き込もうとする。その動きは何回も見た「御神流」の徹の技だが

「余り舐めないでもらおうか!!」

ハーデスの背後の楯が動き魔力を放つ、それによってペガサスが弾

き飛ばされる

(本当に固い。さすがは特異型という所か)

滅多に存在しないLV4の特異型。その力はある程度理解していたつもりだが、事実固すぎる。突破口が見出せない

(聖王の魔力しかないか)

普通の魔力では駄目だと判断し、聖王の魔力に切り替える。虹色の魔力を全身にまとうと

「それを出すのを待っていたッ!!!ウオオオオオッ!!!」

ハーデスの背後の楯が開き、そこから漆黒の魔力が溢れだす

「ちっ！離れろ！」

ペガサスの言葉を聞く前に距離を取り、後方で待機していた一夏のほうに跳ぶ。その間にハーデスは楯から溢れ出した漆黒の魔力に包み込まれる

「あいつは何をしている」

この現象はネクロの進化前の現象に似ているが、既にLV4のハーデスが更に進化できるとは思えない。なにか別の奥の手を隠しているのか?と思いペガサスに尋ねるが

「知らん！俺が戦ったときハーデスにあんな能力はなかった！」

と言うことは隠していたのか、最近目覚めたのか。両方の可能性がある

「ここからが本番だ！行くぞ」

鋭利な甲冑に8枚に増えた楯。そして両手の剣は更に一回り大きくなる、最悪な方の予想が的中した事に眉を顰める

(LV4が更に進化したと!?!)

魔力量も上がっているから間違いない、ハーデスはLV4から更に進化したのだ。ネクロは進化する生命体だが、まさかLV4を超える存在が居るとは思わなかった。

「これは覚悟を決めねばならないな」

ペガサスがそう呟くと甲冑がパージされ、背中に漆黒の翼が現れる
「そのようだな」

こっちは聖王の魔力発動中が最強状態なのでこれ以上うえはネク

口化しかない。だがハーデスと共鳴すると確実に我を失うので、このまま戦うしかない

「仕切りなおしだ。行くぞ!!」

8枚の楯から魔力を放出して信じられない速度で突撃してくるハーデスの一撃に対抗するために、全開の魔力を伴った魔力刃を繰り出した

「はっ!!!」

ハーデスも負けじと繰り出した十字の魔力刃と私の魔力刃がぶつかり爆発を起こす。その爆発が合図となり、私達とハーデスの戦いの第二幕が幕を開けたのだった

第114話に続く

第114話

第114話

目の前の光景を見ておれはただただ圧倒されるだけだった。虹色と漆黒の閃光が走り、それを追うかのように紅黒い閃光が宙を走る

(早過ぎる……ISじゃあ追いつけない)

強化されたこの白式・白雪でも到底追いつけない。それほどのまでの高速戦闘。下手をすれば一撃喰らうだけでISが機能停止するかもしれない……

「どうした！防戦一方だぞ！守護者！ペガサス!!!」

地面を削りながら姿を現すハーデス。現れた時よりも一回り身体が大きく、全体的に鋭利になった甲冑を身に纏っている。ペガサスの話では複合結界と言う厄介な防御能力を持っているらしく、俺の零落白夜と龍也そしてペガサスの魔力をぶつける必要があるらしいが……

(そんな隙はないじゃないか……)

その背中を覆っている8枚の楯に加え、それ1本がまるで丸太のような大きさの西洋剣が2本。俺に入り込める隙はない……だけど

(俺は逃げないって決めたんだ)

もう逃げたくはない、1度決めた事を揺らがせたくない。俺は皆を護れる様になりたいんだ。そのために龍也に頼んできつい訓練をした。今だってそうだ、ハーデスの動きが見えないのは俺が恐れているからだ

(集中しろ。確かに速い、速いけど見ないわけじゃない筈だ！)

自分に言い聞かせるようにそう呟き、大きく深呼吸をする……そして湖を思い浮かべる。揺らぐ事のない湖面を思い浮かべるんだ……恐怖も何も感じるな……一種に思い込みだが、龍也に何回も言われた気持ちで負けるなど、揺らぐ事のない自分をイメージしろと……何回も深呼吸を繰り返し、閉じていた目を開く。さつきまで閃光にしか見えなかった龍也達の動きが見えてくる

「いくぜツ！」

雪片を腰打め構えタイミングを計る。ペガサスと龍也の邪魔をしないタイミングで……大きく深呼吸をする

(出来る。俺になら出来る筈だ)

大事なのは出来て当然だと思うこと……

「はは！貫った「それはこっちの台詞だ!!」

ハーデスが姿を現したタイミングで瞬時加速に入り、背後に回りこむ。俺の姿を見た龍也とペガサスは

「合わせろ！」

「言われなくとも！」

同時に魔力刃を放つ、俺もそれに合わせて零落白夜を発動させハーデスの背中に切りかかる

「グハ！小僧!!」

俺に手を伸ばしてくるハーデス。その突きに合わせてしやがみ込み、俺の頭上を素通りすると同時に横に飛んで

「もう！発喰らつとけ!!」

胴を蹴りつけ間合いを離しながら雪片で一閃する。それは残念ながら浅く傷をつけただけだが、龍也達と合流するだけの隙を得る事ができた

「良くやった。いい判断だったぞ」

「気付かなければただのマヌケだがな」

どうやら龍也達は俺が動くのを待っていたようだ、そう言う計画なら最初から言ってくればいいものを

「気を緩めるなよ。本番はこれからだぞ」

龍也の言葉に頷きハーデスのほうを見ると斬られた傷を見てにやりと笑いながら

「礼を言うぞ小僧。これでやつと対等な戦いが出来るという物だ」

俺に礼!!? どういうことか判らずに混乱しているとハーデスは

「あの複合結界は俺が進化した時に強制的に発動した物でな。俺自身でも解除できなかつた……戦いを楽しみたいと言うのにあの結果は邪魔としか言いようがなかつたんだ」

にやりと笑い嬉しそうに剣を構えたハーデスは俺達を睨み

「俺の武器はいつだってこれだけだ。行くぞ！」

ハーデスがそう叫ぶと背中の楯から赤黒い光が放たれ、信じられないスピードで突っ込んでくる。瞬時加速に似ているが、それよりも遙かに速い

「うお？」

ブースターで横に避け剣を構えなおすがハーデスの姿は見えず、代わりに上空から鋭い金属音が聞こえてくる。咄嗟に顔を上げると打ち合いをしている龍也とハーデスの姿が見える

「小僧。下手に動くな巻き込まれるぞ」

ペガサスの言葉に踏みとどまる。剣士同士の戦いに割ってはいると痛い目にあうと言うのはクラナガンで学んだ。ここは動かないのが得策なのだろう

「集中を緩めるな。くるぞ！」

「オオオオッ!!!」

直角に曲がって突っ込んできたハーデスの一撃を雪片で受け止めるが

(重い!?なんて馬鹿力だ!?)

僅かながらの魔力サポートをしているのにそれでも受け止めるのだけで手一杯だ

「下がるな!前に出ろ！」

俺と同じように攻撃を受け止めているペガサスの声を聞いて、下がらかけた足を強引に前に出す。下がればそこから押し込まれるからだ

「おおおお!!」

とんでもなく重いハーデスの剣を気合をこめた一振りで弾き返すと

「いいぞ小僧!もっと俺を楽しませろ!!!」

嬉しそうに剣を振るってくるハーデスは俺とペガサスを同時に相手にしてもなお余裕を見せていた。それほどまでに力の差があるということか。龍也は龍也で

「やれやれ鬱陶しい事だ!!」

近くの影から無尽蔵に湧き出してくるネクロの相手をしていた。援護は期待できないだろう……だけど

(俺は負けられない)

俺はもう逃げたくない。今度こそ自分で決めた事を最後まで貫く！雪片を握りなおした瞬間

ドクン！

(なんだ？身体が熱い)

身体が熱い。いや何か判らないが気力が満ちて来る。これなら行ける!!俺は上段から振り下ろされた剣を回避しそのまますれ違いざまに横薙ぎを放った。信じられないくらいに身体が軽い……これなら互角とまでは言わないが、足手纏いにはならないはずだ。俺はもう1度雪片を握りなおしハーデスを睨みつけるのだった……

この小僧。恐ろしい成長速度だ、実践の中で成長しているのか？俺は目の前の小僧を見て少しながら恐怖を感じた

「ぬんっ!!」

リンカーコアの魔力を使いブースとしたことで強化されたヒュプノスを振り下ろす

「おおおっ!!!」

剣の腹でそれを受け止める、いや受け流しながら間合いを詰めてくる。今までとは比べられない動きだ

(面白い！)

既に完成しきっている守護者やペガサスとは違う。未知数の相手と言うのも悪くはない

「シッ!!!」

急加速で切り込んできたペガサスの剣を受け止めると同時に小僧が下がり守護者の元に行く

(なるほど……守護者らしい戦い方だ)

守護者は小僧の体力と気力を回復させている。その間はペガサスが俺を引き止めておくと……

「邪魔をしないのか？」

ペガサスが俺と剣を交えながらそう尋ねてくる。互いに二刀流剣士、こうして喋っている間も互いの隙を窺い、眼前の敵を屠ろうと何度も何度も剣が交差する

「詰まらんことを言うな、俺は戦いを楽しみに来たんだ。それが長引くのならそれを邪魔する理由はない」

「そうか。ならば……存分に楽しみ死ぬ!!」

ペガサスがするりと俺の間合いに入り込み。その距離は既にゼロ距離といえる

(嫌な予感がする!)

俺の長年の戦いの経験が告げているこの距離についてはならないと、咄嗟に後ろに飛びのくが

「貴様だけはここですとめる! 御神流奥義之式・虎乱ツ!!」

ほぼゼロ距離から放たれた無数の剣戟が俺を同時に襲う。それはまるで暴れ狂う獣その物の荒々しく、そして絶大な殺意を持つ一撃

だがこの技は見たことがあった。

「そうか! 貴様はあるの世界に生き残りか! ペガサス・ダウンフィールド! いいや! テンマ・カミナギツ!!」

その縦横無尽に迫る斬激を弾き、いなし、楯で受け止める。俺が目覚めて不安定な時に滅ぼした世界で対峙した剣士の技だ。容姿が変わっていて気づかなかったが間違いない

「そうだ! 貴様によって殺された仲間達の仇……今ここで取らせて貰う!!」

その目に憎悪と殺意の色を宿すペガサス……それを見て俺は思わず笑みがこぼれた

「いいだろう! 来い!!! あのとときの俺は不完全だったが、今の俺は違うぞ!!!」

あの時はただ魂を喰らい、世界を滅ぼすことしか考える事が出来なかった。だが俺の魂はこいつとの戦いを楽しんでいたのを覚えている

「関係ない! 貴様だけはここで! 今この場所で滅ぼしてくれ!!!」

力強く地面を蹴るペガサスの姿が消える。あの世界でも見た超高速移動だ。

(ふふふ。これは守護者達を見ている場合ではないな)

ペガサスの動きに集中してなければ何が起こっているのか判らぬうちに切り伏せられる。俺は守護者達から意識を外しペガサスの気配だけに集中するのだった

その頃当然龍也達は知るよしもないがこの近くに来ている少女の姿があつた、ツインテールの小柄な少女。鈴だ

「一夏……」

自身の第六感とでも言うのだろうか？とんでもない嫌な予感を感じた鈴は、なのは達に嘘を付きこの場に来ていた、ISもない。魔力もないそんな鈴ができることなど何一つない、いや出来る事は一つだけあつた。鈴は両手を組み合わせ一夏の無事を祈り始めた

何か嫌な予感を感じそのまま居る事など鈴には出来ないのだった……

龍也に体力と魔力を回復させて貰つてる中間こえてきたペガサスの叫びに

「もしかして龍也がペガサスに協力しているのは」

「お前の予想通りだと言っておこう、よし終わりだ」

龍也の言うとおり体力と魔力は回復してきている。ペガサスがネクロを裏切つた理由は

(自分の仲間の仇を取るために)

ペガサスがネクロになつたものその為と言うことなのか……

「一夏気を緩めるな、直ぐに飛び出すぞ」

「でも押して……」

俺の見た感じではペガサスがハーデスを押している感じに見えるのだが……

「ペガサスはその意思で完全なネクロ化を抑えていたが、既にもう限

界に近い。こうして打ち合っているはその進行は爆発的に加速する。ペガサスが完全にネクロ化したら死ぬぞ、私もお前も」

冷や汗が流れた龍也でも死ぬって……龍也は最強と呼ばれる魔法使いなのにか？と思っていると龍也が説明してくれた

「単純に相性の問題だ。ぐーとチョコキのようにな、私とペガサスは相性がとことん悪いんだ。それよりも行くぞ！」

龍也の姿が消えたと思ったのと同時にペガサスが俺のとなりに現れる

「ぜえ……はあ……はあ……くそが」

悪態をつくペガサスを見るからに消耗している。それはもしかするとネクロ化が進んでいるのかもしれない

「俺の事を気にしている暇があれば行け！戯け！1人で相手をするのはしんどい相手だぞ」

ペガサスの睨みにびくんと背筋を伸ばす。その余りに鋭い眼光に身体が震えてしまったが

「判ってる！」

俺はペガサスにそう返事を返し、瞬時加速でハーデスと龍也の間合いに飛び込んだ

「来たか！小僧！お前の力を見せてみる!!」

楯から魔力波を放ってきたハーデスの一撃を加速しながらしやがむ事で回避し、起き上がる勢いを使って下からの切り上げを放つ

「ほう！良い反応だ!!」

「烈火刃!!」

俺に意識を向けたハーデスの隙に龍也が燃えるクナイを放つと同時に巨大な西洋剣を構え上段から振り下ろす

「ちいっ！」

ハーデスは舌打ちしながら楯でクナイを弾き。龍也の一撃を剣を十字にして受け止める

「はっ!!」

がら空きの胴に雪片を叩き込む。どちらかしか防げないように龍也は誘導しているのだ、こう言う所は経験の違いだなと思っていると

「馬鹿野郎！止まるな!!!」

龍也の怒声が聞こえた瞬間横に突き飛ばされる。思わず尻餅をついた俺の耳に聞こえてきたのは

「ごぼお!」

くぐもった悲鳴と鋭い風切音、そして振り切られたハーデスの拳……そして蹴られたボールのように宙を舞う小柄な影

「り、鈴り!」

ごろごろと地面を転がっていたのは鈴だった。龍也達を知るよしもないが、鈴は第六感とも呼ばれる鋭い勘で一夏達のほうに来ていたのだ。そして一夏の危機に思わず飛び出してしまったのだ

「おい！おい！鈴！おい!!」

倒れている鈴に近寄り声を掛けるが反応がない、それに顔には血の気がない

「一夏動かすな！死ぬぞ!」

龍也が駆け寄ってくるのが見える。死ぬ……鈴が？俺のせい？護りたかったのに?……頭の中が真っ白になった瞬間

【はあ！オレの出番だな!!!】

「う、うおあああああアツ!!!」

白式が一瞬に黒に染まっていくのが見える。それに顔に仮面が現れるのを感じながら俺の意識は闇へと沈んだのだ……

「あの馬鹿者が……」

俺は思わず舌打ちしてしまった。戦場で足を止めるそれは自殺行為としかいえない行為だ。

「は、はははははは!!!いいぞ！絶望が深い、より高いシンクロをしている!!!」

黒く染まった甲冑を着込み高笑いしている小僧。良く見るとどす黒い魔力がその全身を覆っている。その雰囲気はネクロに近いものがある

(余計な手間を掛けさせやがって)

あのままでは駄目だ。暴走状態の攻撃がハーデスに通用するとは思えない、それにあのままでは駄目なんだ。今の小僧には剣を取る覚悟もその意味も何一つ理解していない

「貴様はどういう鍛え方をしていたんだ！」

活性化するネクロの因子を必死に押さえ込みながらそう怒鳴ると

「私に何でもかんでも文句を言わないで貰おう、できること出来ない事があるんだ」

守護者はそう言いながら血の気のない少女の治療を施しながら

「使え。ネクロの因子を押さえ込む術式が刻んである」

投げ渡されたブレスレットを身につけると確かに少しだけ楽になった。だがブレスレットは小刻みに振動し、長く持たないだろう……

（それだけ俺の限界が近いということか）

「あの馬鹿を叩きのめして正気に戻してくれ。私も治療が終われば合流する」

「厄介ごとばかりを俺に押し付けるのか？」

「因子を抑えてやってるのに私の魔力を使ってるんだぞ？私が正面斬って戦えないのだからお前が何とかしろ」

その言葉に舌打ちする。俺の中のネクロの因子はかなり活性化している。それを押さえるために守護者は魔力を使い続けている。普段先陣を切る守護者が後方支援に回っているのは俺のせいだと言える

「ちっ！判った。任せておけ」

それにあの小僧は俺が見つけた逸材でもある。ここで暴走、いや浸食されて自我を失わせるのは余りに惜しい。クラウソラスを構えなおし、俺は小僧とハーデスに向かって駆け出した。恐らく互いに互いを敵と認める乱戦になる、だがそういう戦場こそ

（俺の独壇場だ）

自分よりも多い敵と戦うのはなれている。それに向こうの動き方もある程度理解しているし、それにここは御神流の剣士が最も力を発揮できるとも言える森の中。全ては俺にとって有利に動いているが、

問題は1つ

(終わるまで持つかどうかだな)

守護者から渡されたブレスレットとペンダント。それを触媒にネクロの因子を押さえているが、今もぎしぎしと悲鳴を上げている。これがいつまで持つか判らない。もしかすると最後まで持たないかもしれないが

(この時だけを考えて生きてきた！こんな所で立ち止まれるか！)

この時の為だけにネクロとなり、裏切り者の汚名を背負ってまで生きてきた。ネクロの因子の活性化？完全なネクロ化？そのリスクを背負ってもなお敵討ちのために生きていた。ならばその程度で立ち止まれるわけがないのだから……例えネクロと化してもなおハーデスだけはこの俺が倒すと決めたのだから、この身体がネクロと化したとしてもこの魂だけは渡しはしない!!!

第115話に続く

第115話

第115話

地面に横たわる鈴を見て小さく舌打ちする。私が念の為に渡しておいたプロテクションを発生させるブレスレットと鈴が自前で買ったであろう指輪。二重のプロテクションを簡単に打ち抜いている。

(……骨は肋骨の5番と3番。右腕と左足骨折……強い衝撃による脳震盪……それと軽度のネクロの因士の感染……この程度なら御の字か)

ハーデスの一撃はどう考えても生身の人間ならそれで即死しかねないほどに強力な一撃だった。二重のプロテクションで一命を取り留めている。ネクロの因士に感染しているが、この程度ならば治療できる……そ魔力で直接酸素を与え窒息しないようにしてから

(なのは！フェイト！これ以上こつちに箒達が来ないように監視しろ！鈴がこつちに来て重傷だ。今から治療に入る、念話には対応できない！)

なのは達に念話でそう怒鳴り、鈴の治療を始めるのだが

(ちっ、いつもより回復のスピードが遅い)

ペガサスのネクロの因子を抑えるのに魔力を回している分。魔法の効力が薄い……暫くは治療を続けないと駄目そうだ。だが戦況は

ハーデス・ペガサスそして暴走している一夏。とてもじゃないが、良い状況とはいえない……

(泣き言は言ってられん。まずは肋骨からだ)

今このタイミングで鈴の意識が戻ると危ない。鈴が目を覚ます前に肋骨の治療だけは終わらせる！上手く魔力を集中できない中。鈴の治療を始めるのだった……確実に助ける事はできるが、これは少しばかり骨が折れる

(何とかしのいでくれよ)

ネクロ化しかけているペガサスにハーデスと暴走している一夏の相手は厳しいと判っている。だから少しでも早くペガサスに合流で

きるように、治療に専念するのだった……

(ちい……暴走なんて生易しい者じゃないぞ)

俺はハーデスに加えて暴走している小僧の2人を相手にしなければならぬのだが、ハーデスよりも暴走している小僧が厄介だった
「オオオオオツ!!!」

見境なく飛ばされる黒い魔力刃。牽制目的なんかではない、それどころちを仕留めると言いたげに殺意に満ちた攻撃だ

「くっ！いい加減に目を覚ませ!!」

俺とハーデスの両方に殺到する魔力刃を何とか弾きながら叫ぶが
「ハハー！オレはお前など知らん、俺は知ってるかもしれない!!」

両手のブレードで切りかかってくる小僧。その一撃は重くそして
鋭い

(徐々に鋭くなってきている)

打ち合うたびにその勢いは鋭さを増し、そして破壊力は増している。既に弾くのが手一杯と言うレベルだ。いや殺すで掛ければまだやりようはあるのだが……

(殺すわけにも行かん。ここは)

小僧を殺すわけにはいかんし、当然自分が死ぬのは駄目だ。背後から切りかかってくるハーデスの気配を感じながら、神速に入る。自分以外がスローに動く中大きく飛びのく、次の瞬間には

「はー！貴様が相手か!」

「どうでも良い！目障りだ!」

小僧とハーデスが切りあっている間に間合いを放し、手の中のクラウソラスを見て舌打ちする

(刀身の輝が回復していない)

これも俺の魔力がベースになっているから、恐らく回復にまわせるだけの魔力が俺に残っていないのだろう。それに身体の疲労感も段々強くなってきている

(ネクロの因子を抑えるのも限界か)

ネクロ化は抑えられているが、そのせいで弱体化しては意味が

ない。だがこのブレスレットを取れば一気にネクロの因子は活性化するだろう。

(俺の自我がどこまで持つかだ……今はだめだ)

守護者が戦えない以上、俺まで暴走するわけには行かない。呼吸を整えると同時に小僧とハーデスのほうに切りかかる

「乱戦に持ち込めばと思っっているのか？」

「さあ……な！」

ハーデスの上段からの一撃をクラウドソラスの柄で受け止め、そのまま回転しながら一閃し

「シッ!!」

「ちっー!」

即座に下から切り上げ小僧の剣を上に向けて弾く。それと同時に拳を繰り出す

「ぐう!？」

「俺は気が長い性質じゃないんでな」

いつまでもこんな硬直状態でいては何も変わらない。俺はクラウドソラスを構えなおし

「腕の一本は覚悟してもらおうぞ」

無傷で無力化しようなんて甘い考えは捨てた。俺の一撃なら切断面は乱れることもないだろう、切り落とした後で守護者になおさせれば良い。俺はそう判断したのだ

「出来るのか?今の貴様に」

俺の今の状態を知っているのかそう尋ねてくる小僧に

「なに心配する事はない、今の俺は完全ではないが、それ以上に充実している!」「はあ!!」

ハーデスの横薙ぎを飛び上がり回避し、その刀身の上に着地し回し蹴りを叩き込むと同時に小僧目掛け

「手加減する気は失せた」

正確に言えば、自分を護る気がなくなっただがなんと内心苦笑しながら、身体に染み込んでいる技の構えに入る

「な……ぐはあ!？」

血を吐き出し吹き飛ぶ小僧。あいつの目には閃光が走ったようにしか見えないだろうな……御神流奥義之参・射抜。御神流奥義の中で最も速く、リーチが長い突き技。見てから回避することなどできようもない、最速の技だ

「貴様にはこれをくれてやる!!」

俺の一撃を受け止めたハーデスの剣目掛けもう1度剣を振り下ろす

「ぐう!? き、貴様何を」

身体に走った衝撃に顔を歪めるハーデス。一瞬だけよろめいたその隙にクラウソラスを柄に収め

「答える義理はない!」

クラウソラスを柄に収めたまま走り出し、加速の乗った四連抜刀を繰り出す

「くっ? 俺の楯が」

背後に滞空していた楯を2つと胴体に深い切り傷を受けて後退するハーデス。普段なら追撃に走り出したいところだが

(ぐう……不味い)

ネクロの因子が活性化するのを感じてその場に立ち竦む。御神流奥義之六・薙旋そして御神流奥義之肆・雷徹。2つの奥義に加え身体強化を同時に掛けた事で体内の魔力量が変わり、ネクロの因子の活性化が再び始まったのだ

(歯を食いしばれ! まだ終われないのだろう!)

歯が碎けるばかりに食いしばり意識を保つ。視界に移る俺の右腕に徐々に黒い魔力が集まっていくのが見える。それは物質化を始めていて

(ちいーいつまで持つか……)

ネクロの魔力の物質化が始まればネクロ化は爆発的に加速する。守護者の魔力で抑えているとはいえ限界が来ているのは一目瞭然だ。だがもう立ち止まれない、ここまで来たら進み続けるしかないのだから……音を立てて碎けるブレスレットを横目に俺は再びハーデスと小僧に向かって走り出したのだ……

俺は何をしているんだろうか……今自分が何をしているのか？どこに居るのかも判らない闇の中に俺はいた

(酷く眠い)

判っているのはそれだけだった。光りも何も無い闇の中、目を瞑ればどこまでも落ちていくかのような、そんな感じがある。普段なら恐れる闇も何も感じることはなく、何故かとても穏やかな気分になっていた

(眠ろう……)

そうすれば何も考えなくて済む。後悔する事も、悲しむこともない……そう考え、開きかけた瞼をまた閉じようとしているとどこから声が聞こえてくる。小さな声だが、それは妙にしつかりと聞こえた

『それでいいのか？』

「ああ、これでいいんだ」

自然と零れる言葉。何も考えないほうが楽だ、痛みも絶望もないのだから

『逃げるのか？現実から』

その言葉にぼんやりとしていた思考が再びまとまり始める。俺が何をしたかったのかはまだ思い出せないが、何か焦るようなそんな感じがする

『俺は逃げた。逃げて逃げて逃げて……狂った。それで良かった、もう俺が護りたかった者は何もいなかったから』

後悔するかのような、しかしそれでいて懺悔するかのような声が聞こえてくる。その声が聞こえるたびに意識がはつきりとしてくる

俺は……こんな所に来るために強くなったのか……違う

このまま眠るのか……駄目だ。俺はもう逃げないと決めたんだ

頭の中がグルグルと回転している。そしてそれを見て笑う誰かの気配。だけど闇の中に居るから誰か判らない

『1度逃げたら逃げ続けなさいといけない。そしてその末路をお前は知っているはずだ』

そう言われて脳裏に浮かぶのは檻の中にいたもう一人の俺の存在。そこまで思い出した所で

「俺は!?!」

如何して俺はここにいるんだ!?!俺はペガサスと龍也と一緒にハーデスと戦っていたんじゃないのか!?!色々な事を急に思い出し、軽く頭痛を感じながらも身体を起こすと同時に周囲の闇は溶ける様に消えていく

『目覚めたな?あのままでは完全に取り込まれていたぞ?オレにな』

そう笑う誰かの姿。今ならばつきり判る、その姿はクラナガンで見た龍也達と同じ制服を着込んだ俺の姿だった

「俺?!」

だけど夢の中で見る俺とは印象がまるで違う。いつもの狂っているような素振りはなくとても穏やかな雰囲気をしている

『良い反応だ。そう俺はお前だ。ただし魔導士として活動していた俺だな』

じゃああの檻の中の俺はなんなんだ!?!頭の中が混乱してきた。あのオレも魔導師なんだよな?じゃあ目の前の俺はなんなんだ

『深く考えなくて良い。俺とオレは同じ存在だが、あいつはオレが狂ったときに生まれたオレだ、まあ簡単に言うると二重人格のようなものだが、あいつは力が強くなりすぎた。異なる世界の自分に干渉できるほどに』

白式が暴走しているのももしかしてそのせいなのでは……:ただそれ以上に俺の精神力が低いせいなのか?

『いいか。俺がお前を助けれるのはこの一回だけだ、お前がオレを何とかしないとイケない』

「ちよつと待ってくれ!ど、どういうことだ!?!」

俺の理解できない段階で話が進んでいるのを感じて俺にそう言うが

『悪いが時間がない。今は何とか俺の力で身体の主導権をお前に返すが、その後は俺でもどうにもならない。奴がこの世界に帰ってくると俺は取り込まれるからな』

「い、いや！だから待て！何の話なんだ!？」

『言っているだろう？時間がないと、今この瞬間がチャンスなんだ！いいか！次は負けるなよ!!』

俺に突き飛ばされると強烈な浮遊感を感じる。俺はそのまま遠ざかっていく俺の姿を見ることが出来なかった

「いい加減にしゃがれ！このガキが!!!」

「ぐはあ!？」

目覚めた俺に待っていたのはペガサスの鉄拳でした。折角目覚めた意識がまた吹き飛びかねない威力だったのは言うまでもないだろう

『間が悪かったな。すまん』

一夏の中ではなく、白式に取り込まれているデバイスの中で呟く平
行世界の一夏の元に

『貴様！何故オレの邪魔をする!』

『さあな、オレとお前は考え方が違うんだよ。この世界の一夏の邪魔はさせない。俺が相手になってやる』

白と黒の閃光がぶつかり合い、均衡を繰り返していたが何回目かの衝突で僅かに白の光が黒を飲み込んだのだった……

「そつちも戻ったようだな。しかもより強くなった」

あの黒いISが再び白に戻り、その姿を変えていく、背中に砲台を装備した大型のISに変化している。そして感じる闘士が前よりも強くなっている事に笑みを零す。取るに足らないと思っていた相手が俺を脅かすものとなる……この瞬間こそが俺の楽しみの一つになっている

「いてえ……だが気付けにはなった」

「お前のせいで、いらん魔力を使った」

ペガサスから感じるネクロの気配は強くなってきている。もうじき完全にネクロ化するだろう

(守護者はまだか)

守護者はまだ小娘の治療に集中している。まだこつちに回ってく

る事はないだろう。俺の目的としては守護者と戦うことの目標だったのだが、仕方ない

「良い感じに身体が温まってきた」

全身に力と魔力が行き渡っていくのを感じる。俺は闘いの中でしか生きれないネクロだ、そんな俺にとってこの世界はぬるま湯同然のくだらない世界だ。だからこそ俺はさび付いていた……

「この痛みが俺が俺であると認識できる」

ネクロは姿によって固有さがある。その中には自分が存在しているのに、存在していると言いうことを実感できないネクロもいる。俺はそのタイプのネクロだった。だから戦いの中で感じる痛みと高揚感。それだけが俺が俺であると実感できる全てだった

「戦闘凶が」

「なんとも言え、俺は戦いが好きだ、その何が悪い」

元来ネクロは闘争本能の塊だ。ベエルゼやヴオドオンそしてベリトのようなネクロの方が稀少なのだ。

「人間とてそうだ。闘争の中で進化してきた。違うか？」

戦争で優れた兵器が生まれた。そして人間もその中で進化してきた。人間の歴史もまた闘争の歴史なのだ

「違う！お前達と俺たちを一緒にするな！」

小僧がそう怒鳴る。俺はにやりと笑いながら

「違うというのなら自分で示してみるのが良い、俺達との違いをな!!!」

魔力が更に増量し俺の甲冑を作り変えていく、俺は闘争の中で己の姿を変える。この第3形態が俺の本当の姿と言える

(とは言え寿命を縮めるがな)

この姿は俺の魔力を無尽蔵に吸い上げる。故に俺にはリンカーコアを貯める能力があったのだと思う。魔力で作られた蝙蝠の翼を見つめながら

「この姿になった以上一瞬たりとも気を抜くな。でなければ……直ぐに死ぬぞ!!」

俺の身体から放出された魔力が刃になりペガサスと小僧に迫る。命中するというタイミングで

「わるいが、ここからは私も混ざらせてもらおうか」

剣を手にその魔力刃を弾く守護者を見つめながら両手のモロス・ヒュプロスに魔力をこめながら

「歓迎しよう。俺はお前とも戦いたかった！」

魔力は減っているがそれに反するかのように闘志は上昇している。身体が中から壊れていくのを理解しながらも、俺は笑みを零さずに入られなかった。これこそが闘いだ、そして生きていると実感できる瞬間なのだから……

凄まじい威圧感を放つハーデス。汗が浮き出て手が震える。ペガサスは苦しそうに顔を歪めている。良く見ると身体に黒い魔力が集まっているのが見える

(余計な詮索はするな。目の前に集中しろ)

龍也の言葉に小さく頷き、目の前に浮かぶ白式の状態を見る

(エネルギーは全開だけど、良く考えないと駄目だな)

海るときは一瞬で片付いたが、今回はどうなるのはわからない。零落白夜の発動は控えよう、雪片を構えながらハーデスの様子を窺う。ただ浮かんでいるだけだが、その威圧感はとんでもない。思わず後ずさりをしそうになる

「フツッ！」

「流石と言う反射神経だな」

気がついた時には龍也とハーデスが打ち合っていた。全然見えなかった上にISのハイパーセンサーも作動しなかった

(これがネクロの本気なのか)

正直今の俺では足手纏いと思うがここまで来た以上。引くわけには行かない、それに気持ちはハーデスを恐れているが、不思議なことに身体は平然としていた。つまり後は俺の気持ち次第と言う事だ。俺は何度も深呼吸を繰り返す

(龍也が逃げろと言わない以上。俺にも出来ることがあるはずだ)

もし危険ならば龍也が逃げろと言う筈だからだ、俺はまだこのス

ピードになれてないから駄目だが、慣れてくれれば見れるはずだ

ゆつくりと深呼吸を繰り返し、意識を集中していると脳裏に声が響く

『少しの間なら力を貸せる、行くぞ。この世界の俺』

それは俺を呼び覚ましてくれた俺の声だ。全身を覆う魔力の光、それと同時に龍也達の動きが見えてくる

『慢心するな。集中しろ』

脳裏に響く俺の声に頷き、俺は雪片を右手に持ち。左腰から雪華を抜き放ちペガサスと龍也の放った魔力刃を避けるように飛び出してきたハーデスと切り結んだ

「ほう。良い反応だ！」

「くっ！このお！」

連続で繰り返される剣を必死で弾く。何とか見えるから弾くことは出来る。だが自分から攻め込むことは出来ない

「はああああっ!!」

俺が押されかけているとペガサスが鋭い気合と共にハーデスに近づき、何かの技を放つ。その間に龍也が俺の前に来て

「使え。こっちの方が役にたつ」

渡された装飾の美しい西洋剣を両手で構える。すると魔力が刀身を覆う、これならハーデスにもダメージを与えられるかもしれない

(自分から攻め込もうなんて思うなよ。身を護る事だけを考えろ)

龍也の警告の声に頷き高速で動き回るペガサスとハーデスの姿を見る。さつきまでは良く見えなかったが、今はしっかりと見えていく。この魔力で身体強化されているからかもしれないが、これはとてもありがたい。正眼で構えた剣を見つめていると自分の精神が研ぎ澄まされていくのを感じる。だが慢心はしない

(ふー……落ち着け)

俺は自分に言い聞かせるように小さくそう呟き、龍也とペガサス。そしてハーデスの一挙手一投足を見逃さず、いつでも飛び出せるように身構えていたのだった……

第116話に続く

第116話

第116話

下級ネクロの波状攻撃が徐々に収まって来ている。そろそろ向こうも戦力が切れてきたかと思っていると空間が裂け、そこから見たことのないネクロが姿を見せた瞬間

「うっ!？」

余りに強力な魔力の波動を受けて、隣のフェイトちゃんと一緒に片膝を付く。なのはちゃん達のほうも顔を歪めているのが判るし……

「か、身体が動かない……」

「な。なによこれ……」

「銃も動かないぜ」

ユウリ達も何かに縛り付けられたかのように動く気配が無い……ただの1体のネクロの威圧感でここまでなるなんて事はありえない。もしそれが出来ると言うのならそれは相当高位なネクロになる

(あかん。殺される)

身体が動かない状況でこれだけの魔力を持つネクロと対峙する。それはそのまま死を意味することに他ならない、何とか攻撃を考えると

「ああ、そう身構えないで。今は戦う気はありませんよ。今はね？」

魔力で全身を覆い隠してして姿を認識できない。声の感じは人間と同じに聞こえる

(高レベルの人型ネクロか!?)

異形型のネクロは声帯が違うのでここまで人間に近い声を出す事は出来ない。だから目の前にいるのが人型ネクロだと判断する。姿が見えない、動く事が出来ないの二重苦だが……この状態でも出来る事と考える。フェイトちゃんも同様で微弱の魔力を発して姿形の予測をしている

「ああ。無駄な事はおやめなさい。魔力の無駄遣いですよ?今の私は影、影を認識など出来ないのですから」

くくくつと忍び笑いをするネクロの声を聞いていると意識がぼーつとしてくる

「それでは失礼を、この戦いを見逃すわけには行かないのでね。あとこれはお礼ですよ、この周囲にいたネクロは下げてくださいので」

そう笑ってそのネクロの気配は消えた。いや最初から空間を引き裂いて現れたネクロなんかいなかったのだ

「戦況終了。近くで保護されている鈴を回収してI S学園に戻るで」

兄ちゃん達の援護をするにも1度千冬達をI S学園に連れて行かなければならない

「了解。魔力もユウリ達のS Eも限界だしね」

私達の魔力も大分使いすぎている。戦えないレベルではないが、護りながら戦うというのは難しいレベルだ。状況と疲弊状態を考えるところは1度I S学園に戻り念の為に備えたほうがいいだろう。私はそう判断し、S Eを使い切り待機状態になっているI Sを見てへたり込んでいるユウリ達を連れてI S学園へと転移し、フェイトちゃんには兄ちゃんの結果で保護されている鈴を迎えに行つたのだ……

「ふむふむ。中々上手くいきましたね」

木の枝に腰掛けるタキシード姿のネクロ。ランドグリーズだ、別の時間軸での事を考え最盛期のある人間の観察に来ていたのだ。

「さてと行くとしますか」

こうして去っていくこの世界の人間と夜天達を嘲笑っているのもそれはそれで面白いが、本来の目的は別に在る。遊んでいる時間が無い事を思い出したランドグリーズはネクロの脚力を持って枝を蹴り、高速で森の奥へと突き進んで行つたのだ……

あの小僧何があった？ 対峙している一夏とか言う小僧の動きは1合打ち合うたびに爆発的に洗礼されて行っている

(魔力量も増えている、本当に何があった)

戦いの中で考え事をする。それはある意味隙を作ることには他ならない、しかも強敵が2人もいるのに歯牙にもかけないはずの人間に意

識を向けるなど愚の骨頂。だがそれでもなお俺は一夏という小僧を観察していた

「シッ!!」

「むん!!」

死角から飛び出してきたペガサスの突きを拳で弾き、フラッシュムーブで俺の間合いに入り込んできていた守護者を見て

「はああ!!」

手にしていたモロスとヒュプロスを鞘に収め。徒手空拳で応戦する

(ここまで中に入り込まれると剣は邪魔になる)

剣と言うのは近接から中間距離で最大の効力を発揮するが、ここまですら懐にもぐりこまれると邪魔にしかない

「むん!」

「シッ!!」

俺と守護者の魔力を込めた拳が交差する。互いの魔力が摩擦し放電現象を起こす、視界の隅で突っ込んでこようとするペガサスを見て「無粋な真似をするなッ!!」

魔力を固めて飛ばす。それだけの攻撃、いや攻撃と呼ぶには余りに稚拙すぎる攻撃だ。だが今の俺の魔力を持って放てばそれは必殺の一撃となりえる

「ぐあ?」

ペガサスが咄嗟に作り出した巨大な西洋剣を盾にして直撃を伏せぐが、その威力で西洋剣は真っ二つに折れ使い物にならなくなっただろう

「これだから武人タイプは嫌いなんだ」

守護者がそう呟きながら俺の甲冑に手を置く。その瞬間強烈な寒気を感じて後ずさろうとするが

「遅いッ!!」

守護者の魔力が籠った拳が守護者の手に叩きつけられた瞬間

「ガはあ!」

とんでもない衝撃が俺の中を走った。俺は甲冑を着ていたのに何

故ただの打撃でここまでのダメージを

「日本には鎧を着ている人間の心臓を止めるって武術があるんだよ。覚えておけ！」

とんつとボックスステップをする守護者。だがそれは余りに遠い距離だ

「合わせろ！」

「言われるまでもない！」

ペガサスと守護者、それに一夏が並んで同時に剣を振るう

「蒼龍月花ツ!!!」

「はッ!!」

「零落白衝ッ!!」

三日月状の魔力刃が3つ同時に俺に迫ってくる。回避は出来ない、ならば

「ちいっ!!」

舌打ちをしながら両手をクロスしてそのダメージに備えた瞬間。強烈な爆発が俺を飲み込んだのだった……

(ふむ。まだ人工リンカーコアではこの程度ですか)

その爆発の衝撃で周囲の事が理解できないでいた俺の脳裏に染しげなそんな声が響いたと思った瞬間。俺の身体はダメージではない熱に焼かれたのだった……

「■■■■ーッ!!!」

俺の喉からは凄まじい獣の咆哮が響き渡ったのだった……

「■■■■ーッ!!!」

獣のような咆哮が聞こえたと思った瞬間。漆黒の閃光が何重何百と放たれる

「ちっ！良いか何も考えるな！」

頭の中に俺の声が聞こえたと思った瞬間。俺の手足が粒子と化していく

「なあ?」

突然の現象に驚き思わず上ずった悲鳴が出てしまう。だがそれと

違い頭の中の声は

「うろたえるな！大丈夫だ！」

その声は妙に力があつて言われた通り、出来るだけ無心を心がけた瞬間に俺の視界も粒子と化したのだった……

ズザアアツ!!!

「は、はあ！はあ!?!なんだ何が起きたんだ!?!」

気がついたら俺はかなりはなれた所で片膝を付いていた。一体何が起きたのか理解できないでいると

「ちつ、最悪な展開になったぞ」

プロテクションを張って今の攻撃を耐えていた龍也の大きな舌打ちがここまで聞こえていた

「ウ、ウオオオオオオオツ!!!」

ペガサスの獣のような咆哮に身が竦む。そして思わず振り返るとそこには

「ウオオオオオオオ!!!」

鎧が生き物の用に変化し、背中に漆黒の翼が現れ爛々と輝く紅い瞳をしたペガサスがいた

「何が起こって「共鳴現象だ。ハーデスの力が上がりすぎて引きずられる形でネクロ化が進んでいる！もう私の力でも抑え切れん！」

ハーデスはハーデスで既に人型としての姿は無く。おぞましいとしか言いようの無い漆黒のオーラに身を包んでいた

「グルルルウーウがアアアアアツ!!!」

4つ這いになり龍を思わせる姿へとその姿を作り変えている。進化したのか!?!だけどネクロはLV4までなんじゃ!?!

「暴走だ。コアが魔力に耐え切れなくなつて対応できる姿に変化したんだ」

「そんな事があるのか!?!」

予想だにしない事に俺が驚いているとハーデスの瞳が俺を見る。その威圧感にまけて目をそらすと

「馬鹿が！目をそらすな！」

龍也の怒声が聞こえたと思った瞬間空気が爆発したような音が響

き、ハーデスの牙が俺を噛み砕こうと迫ってくる

「これが最後だからな！」

俺の声が聞こえた瞬間。俺の身体は再び粒子化しその突撃を回避する。離れた所に着地すると同時に

「もうこれ以上。俺はサポートできない……死ぬなよ」

ノイズ交じりの声が聞こえ、それは徐々に聞こえなくなり。俺の気配は完全に消えた

「二夏。そのレアスキルはそれ以上使うな。自我の境界が無くなって戻って来れなくなるぞ」

使いたくてももう使えないが、何より危なそうな事を言われたのでもう使わないでおこうと心の中で呟く

「グルルルルッ!!!」

甲冑はその形状を変え装甲となり、人が他の面影は無く最初からドラゴンの姿をしていたのではないか?と思うほどにハーデスの姿は変貌していた

「目を逸らすな、今のあいつは外見通り獣だ。目を逸らしたら喰らいついてくるぞ」

野生動物と対峙したときと同じだと言うが、あれそんな生易しい者じゃないだろう。それに

「ペガサスは」

「判らん。完全にネクロ化するか、意思で捻じ伏せるか……いやどっちにしろ。もうペガサスは倒すしか道が無いだろうな」

倒す。協力してくれていたのに?俺が少しだけ嫌悪感を見せると龍也は

「元よりそう言う約束だ。いざと言うときは頼むってな、これを違える事はできない」

約束って言ったってそう簡単に割り切れないぞ。ISのハイパーセンサーを利用して蹲っているペガサスを観察する。頭を抱えて動く気配が無い、だけどハーデスと一緒に敵に回られたら勝機は無いという事は俺でも判る

「!飛べ!」

龍也の言葉に咄嗟に足のブースターで飛び上がると、俺と龍也の居た所を薙ぎ払う漆黒の刃が見えた

「剣は魔力刃に転化されたか。まずいな」

龍也が観察しながら呟く、今のはハーデスの6枚の翼のうち2枚の攻撃だったが、あと4枚は刃が増えるを見て間違いないだろう。それに……

「あの肩のは間違いなくあれだよな」

ハーデスの背中に展開されていた盾に違いがない、魔獣となった事で知性は失ったが、戦闘力は上がっているようだ

「グルル」

唸りながら俺と龍也を睨んでいるハーデス。さつきまではまだ知性的だったが、今日の前にいるのはその外見の通り獣そのもので（どう戦えば良いんだ?!）

人間の形をしていればある程度動きの予測は出来る、だが今のこの状態のハーデスとどう戦えばいいのか判らない

「獣との戦いは目を逸らさない事。それと攻撃に対して警戒しておけ、どこから仕掛けてくるか判らんぞ」

ハーデスに視線を向けるとその翼で空中に駆け上って着て来た。つまりここからは空中戦になると思った瞬間

「逃がすと思ってるのかああああ!!」

凄まじい怒声と共にハーデスの胴体に魔力の糸が何重にも絡みつき

「うおおおおッ!!!」

「ギャアアアア!!!」

まるで爆弾が爆発したような轟音と共にハーデスの巨体が地面に叩きつけられる。当然俺も龍也も何もしていない

「見事だ、そこまでネクロ化してもなお自我を保つか」

ペガサスの半身は既に完全にネクロと化していた。獣のそれを思わせる異形の手と真紅の瞳。それでもなおペガサスは自我を失ってはいなかった

「守護者！小僧！俺の邪魔をするな！俺が俺が!!!こいつを倒す!!!」

ペガサスの怒声に身が竦む。それだけの闘志と迫力に満ちていた。ただど一人でなんてと思っていると、龍也は剣を粒子に返し腕を組んで

「判った。私はもう手を出さない」

「龍也!?!」

龍也の真意が判らず龍也の顔を見るが、龍也を見ても何を考えているのかは判らない

「一夏。戦いの中には決して手を出してはいけない物がある。それがこれだ、黙って見守っている。どう転んでも結末は同じだ」

「結末が同じってどういうことだ?」

嫌な予感を感じながら尋ねると龍也は深刻そうな顔をして

「ハーデスを倒せばペガサスは完全にネクロ化する。それを倒すのが私とお前だ。覚悟を決めておくんだな」

龍也の言葉が理解できなかつた。だけどネクロと化せば倒すしかない事は判っている……

(俺は……ペガサスに攻撃できるのか?)

乱暴で口は悪いが人情味を持っていた。それに俺に戦い方を教えてくれた、そんな存在に俺は剣を向けることが出来るのか?俺は思わず手にしていた剣を鞘に収め龍也に渡し、ペガサスとハーデスの戦いに目を向けたのだった。

(もしこれが別れになるのなら、その一挙動その全てを覚えてやる)

ペガサスいわく。俺の剣術はペガサスの剣術に近いらしい、ならその全てを覚えてやる。俺は心の中でそう決心し、ペガサスの背中を見つめるのだった……

力はこれ以上に無いほどに満ちているが、その代償として鑢で手足を削り落とされているかのような激痛が全身に走る

(この程度で!!)

あいつらは仲間同士で殺し合いをさせられた……

笑い合った思い出の場所を自分たちで壊した……

「おおおッ!!!」

ハーデスの胴体に巻きつけた糸を掴んで引つ張り寄せ、その顔面に拳を叩きつける。骨が砕ける音と即座に再生されネクロとなりつつ身体を見つめながら

「まだだ!!!」

この程度!この程度で俺は怯んだりはない!!!

何度も何度も糸を引つ張り自分のほうに引き寄せ拳を叩きつける。当然ハーデスもただでやられる気はないのか

「シャアアアア!!!」

魔力刃と障壁で俺を攻撃してくるが、知性も何も無い本能だけの攻撃などよける事は容易い

「くたばれえええッ!!!」

魔力を収束して拳をハーデスの腹に突き立てる

「ギシャアアアッ?!?!?」

聞くに堪えない絶叫を上げて弾き飛んでいくハーデス。奴の胴体に巻きつけていた糸は今の一撃で切れたが問題ない

(これで少しは気が晴れた)

直ぐに倒すのでは俺の気が晴れない。だからこそクラウドソラスを使わず素手で攻撃を仕掛けたが、今ので充分だ

「殺してやる!ハーデス!!!」

地面を蹴ると同時に神速に入る、それと同時に景色が歪み爆発的な加速の中に突入する

「シャアアア!」

普通のネクロや魔導師では対応できないが、このレベルのネクロになると普通にこの加速時間の中に入り込んでくる

「シャアアアッ!!!」

6枚の翼のうち3枚の翼から魔力刃を作り出し、更に両爪からの魔力刃を作り出し9本の魔力刃が前後左右から迫ってくる

「舐めるな!」

クラウドソラスの刀身を自ら砕き、魔力で刀身を作り出しハーデスの魔力刃と切り結ぶ

1合2合3合と例え守護者でも認識できない世界で何度も何度も打ち合う

(遅い、いや俺が早いのか)

完全なネクロ化が進み、それにより神速に使う魔力が上昇し加速領域が増したのだ。それが判れば遊んでいる時間はない、速攻で片付ける

「おおお!!」

神速の中で更に神速に入る。神速重ね、生身の人間ではこれを使う事は捨て身になるが、今の俺ならば問題ない。そしてこの神速重ねに入った事で

「グオ!?グガアアアア!」

ハーデスが認知出来ない高速の世界の中でハーデスを引き裂き、その牙と爪を打ち砕く。こいつの知性があるうがなからうが関係ない。俺の敵であるという事実だけあればいい

「これでトドメだッ!!!」

ボロボロのハーデスの胸に蹴りを叩き込み宙に跳ね上げる。視界に見えるのは既にその牙と爪を失い瀕死のハーデス

「シッ!!!」

もつとも俺が信用する奥義。そしてもつとも考え深い技……御神流奥義之六・螺旋。完全にネクロ化したことで強化された魔力刃と魔力で作り上げた鞘を使い。超神速の高速連撃がハーデスの身体に叩き込まれる

(この際で進化させたか)

既に人のみを失い、化け物と化した今。俺は本来4連撃の螺旋を更に進化させ8連撃を一息で放つ事ができた

(ふっ……なんとも皮肉な話だな)

もはや俺は死ぬだけを待つ運命。そんな俺が螺旋を進化させる事ができたとはなと苦笑していると俺の両手にコアを砕く鈍い感触が残る。それと同時に

「グツギヤアアアアア!?!」

暴走し獣と化しているハーデスの断末魔を聞いたと同時に、俺の中

で何か満足してしまった。俺はハーデスを倒す事だけを考えてネクロ化を防いでいた。だがその目的を達した今、俺は自分の意志でネクロ化を抑える事が出来なくなっていた。爆発的にネクロの因子が活性化していくのを感じる、この身体を奪い取ろうとするネクロの意思に

(貴様らにこの身体は渡さんぞ!)

既に死んだこの身体だが、それでもなお剣士としての誇りがある。利用されるつもりなどない

「小僧！来い！俺と勝負をしろツ!!」

最後に剣士としての誇りを貫く道を選んだのだった……

やはり私ではなく一夏を選んだか……自分の見出した才能。自信の最期を看取るのがその才能が良いというのは判らなくも無い

「龍也。俺はどうすれば良いんだ」

困惑している一夏の背中を叩き、その肩に手を置いて

「望みを叶えてやれ」

「だけどそれってペガサスを殺すってことじゃないのか!？」

確かにそうなるだろうな。だがネクロにとっては殺しは救済だ。それにもう死んでいると自覚しているのだから。悪夢を終わらせてもらうという意味もあるだろう。一夏にとっては辛い事かもしれないが、ペガサスがそれを望んでいるのなら、それを叶えてやるしかないだろう

「うぬぼれるなよ、小僧。貴様なんか俺をどうこうできると思うのか?こい、最後の戦いだ」

もう喋るのも辛かろうに、この強い精神力。ネクロの因子を意思で押さえ込めるだけはある

「判った……」

雪片を構えて降下していく一夏と肩で呼吸しているペガサスを見る。ここから先に私に出来る事は無い、ペガサスが最後にやろうとしているのは一夏に覚悟を持たせる事なのだから

「行くぜ」

「来い！悪いが手加減などしない、俺は貴様を殺すつもりで行くぞ!!」
白と黒の閃光が何度も何度も交差するが、ペガサスの方が明らかに劣っている

(ネクロの因子を押しさえ込むのも限界か)

一夏を殺さないように気をつけているのか、大分動きが鈍い。一夏もそれに気づいたのか剣の勢いを緩めようとした瞬間

「ぐはあ!？」

ペガサスの鉄拳が一夏の頬を打ちぬいた。口から血を吐き出す一夏にペガサスは

「舐めるなよ小僧。貴様なんぞが俺の手加減など仕様なんて考える余裕があると思うな」

鋭いかざきり音と共に白式の肩の装甲が切り飛ばされる。しかし一夏も反撃に左手の雪片式型と右手の雪華を振るう。それはペガサスの胸を穿ったが……

「……どの道これが最後だから、教えておいてやる」

ペガサスはさほどダメージを受けた素振りも見せず、握っていたクラウソラスの柄を一夏に見せながら

「この剣が折れない限り死なない……俺を倒すにはこのコアを壊し殺すしかない」

ペガサスはそう言うのと腰溜めにクラウソラスを構えて一夏を見据え

「来い。この一太刀で決着だ」

自分の限界に気付いたか、だからこそ一撃勝負に出たか……同じように剣を構え

「こんな形しかなかったのか?」

仲間として過ぎす事や、もつと別の結末があつたのではないか?そう思い尋ねるとペガサスは一瞬だけ苦笑して

「俺がネクロとなった時点でこの結末は替えることなど出来ないさ」

ペガサスの顔が僅かに和らぐ、この一瞬だけはペガサスは元の人間としての自分を思い出していたのかもしれない

「行くぞ。話している時間はないからな!」

ペガサスが地面を蹴り加速する、一夏はそれから送られて地面を蹴り加速に入る。だがペガサスは神速が使える。態々そんな事もしなくても良い。これはあるいみ一夏に対する、ペガサスの最後の指導と言うことになる。一瞬の交差だったが、私には見えていた。ペガサスがわざと一夏の刀身の方にクラウソラスを向け、あえてコアを砕かせた事を……コアが砕かれ身体が消滅しているペガサスに駆け寄る一夏「ど、どうして」

業と剣を引いたことに気づいた一夏がペガサスにそう尋ねる。ペガサスはその問い掛けに

「ただの……気分だ。良いか良く聞け……小僧」

消えていくペガサスは一夏の手を掴みながら私を見て

「己まで犠牲にする守護は自己満足にしかすぎん。お前はアイツと同じではなく違う守護者になるといい」

皮肉か、最後までやってくれる……だが私はその道しか知らん。だが一夏は違う、今ならまだ自分の道を変える事だって出来るのだから「龍也！なんとか！何とかならないのか！」

それは治療を施せという事か、しかしネクロには治療は出来ない。仮に出来たとしてもそれはネクロになりかけている存在だけだ、ここまでネクロカしているペガサスを治療する手段はない。それにペガサスも

「いい……俺はずいぶん待たせてしまっているからな……そろそろ俺も逝かなきゃ……アイツが寂しがってる」

ペガサスの顔は今までの鬼気迫るものではなく、穏やかな表情をしている……

「龍也さん……もう終わったんですか？」

なのはが上から降りてきてそう尋ねる。ペガサスなのはを見て小さく微笑み

「後悔だらけの人生だったが悪くはない……最後に……アイツじゃない……アイツに会えたしな。一夏……剣をとる覚悟とその理由を忘れ……るな」

ペガサスはその言葉を最後に完全に粒子化し消え去った……

「あ、ああ……」

既に姿のないペガサスの姿を見て涙を流す一夏の肩にてを置き

「帰ろう。ペガサスは最後まで剣士としての誇りを貫いたんだ。涙するくらいなら、その存在を忘れてやるな」

「……うぐ……ああ。判ってる、ペガサスは俺に大事な事を教えてくれたんだ」

涙を拭いながら立ち上がる一夏。その顔は今までの甘えただけの子供の表情ではなかった……とは言え精神的疲労と肉体的疲労のせいで意識を失いかけているが……

(すまん、ペガサス。本来は私のやるべきことだったんだがな)

一夏に戦うこと、護る事の本当の意味を教えるのは私の役目だったんだが……それを自分のみを使って教えたペガサスに頭を下げ私は様子を見に来たのはと戦闘疲れで意識を失った一夏を連れてIS学園へと戻ったのだった……

第117話に続く

第117話

第117話

「やれやれ、つまらない幕引きでしたね」

ステルスを解除して地面に着地しながら呟く。ハーデスの暴走にペガサスの因士の暴走。面白い展開になると思っていたのに蓋を開ければ平々凡々な終わり方……じつにつまらない

「まあ暇つぶしと考えれば上場ですかね。本来の目的と違うわけですし」

私の本来の目的を考えれば、あの戦いの結末などただのおまけ。そう考えれば良いだろう

「やれやれ……永劫に近いときを生きているとどうも刺激を求めて仕方ないですね」

肩を竦めながらゆっくりと歩き出す。とは言え数歩歩けば目的地ですけどね

「やはり私の作り出したコアでは劣化LV5が限界でしたか。データは充分取れたので良いですけどね」

ハーデスが消滅した場所の手を伸ばす。それと同時に魔力の衣がはがれて隠されていた菱形のコアが姿を見せる

「ふむ。純度57%……と言った所ですね」

私がハーデスに渡したコアはネクロの体内の中でその存在を変質させ、そのネクロのレベルを上に取り上げるといふ物だ。私やヘルヴォル達がLV4からLV5に進化した際に使われたコアの複製実験だったのだが、結果は望んでいた物とは程遠い

(選ばれた領域……LV5に到達できる存在はやはりあの方に認められたものだけか……)

まあ当然といえば、当然なのでそこまでの落胆は無い。どこまでいけるのか？の実験だったのですし、惜しむ事があるとすれば

(特異型が消えてしまったのは惜しいですけどね)

LV5はLV4の特異型からしか進化できない。無限にリンカー

コアを体内の溜め込むことの出来るハーデスならば……と思ったので、与えてみた。結果は拒絶反応も中々でないし、もつと純度を上げる事が出来ると思ったのだが……

「ペガサスが強すぎたのか、それともあの小僧の伸び代が大きかったのか……まあどちらでも良いですかね。結果は同じですし」

結局求めたレベルまで純度が上がることは無かった。それだけで良い、また何処かの特異型ネクロでも捕まえてこのコアを植えつけばいいでしょう

(あと30も上がれば擬似LV5レベルはでるでしょうね。まあ暴走するでしょうけど)

LV4と5の差はとんでもなく大きい。恐らくコアには耐えられても、直ぐに暴走を始めるでしょう。戦術としては使えないですが、使い捨ての兵器として考えれば中々の脅威になるでしょう。菱形のコアをマントの中にしまい、近くの切り株に腰掛け

「全盛期のペガサスと私の知るペガサスは大分違いますね」

リーエと共にいるペガサスも確かに強いが、この時間軸のペガサスはそのペガサスよりも数段強い

(なぜここまで差が出るのですか……)

半ネクロとネクロだからと言えばそれまでだが、それだけで片付けられるレベルではない

(一体何が……少し調べておきますか)

幸いまだこの世界にはペガサスの魔力の残像因士は残っている……少し調べておいた方が良いかも知れないと思い、たちがあつたと同時に

「む？これは!？」

凄まじい勢いで周囲の魔力が消えていく、この勢いは流石の私も不味い。慌てて飛びずさりこの周囲から離れる

(……魔力同士のぶつかりのせいですか、これはとんでもないですね)

安全圏まで逃げあの場所を観察する。結果は暴走したハーデス・ペガサス。守護者そしてあの小僧の魔力の生で周囲の魔力バランスが崩れ、一種のブラックホールのような物が発生して魔力を吸い上げて

いるのだ。無論魔力だけではなく近づけば私も吸い込まれてしまうでしょうね……

(やれやれ調査は無理そうですね。とても残念ですが)

少しでも良いのでペガサスの魔力因士を採取できれば、それを元に調べることも出来れば、ペガサスの剣技を持ったネクロを開発する事も出来ると思っただけですが……早々上手くはいかないと言うことですか……

「仕方ありません。この世界でもうやることは無いですね」

ペガサスの全盛期の力を見ることが出来ただけでも良しとしますか……

「ではそろそろ戻るとしますかね」

この世界でいつまでもいてベエルゼ達に見つかっても大変ですし、それに何よりも

「ネルヴィオと盟主の話を見ないわけには行きませんかからねえ」

盟主の下にネルヴィオが戻ったことは感じていた。時間軸の事もあるし、手遅れと言う事にはなりそうには無いですが

「あんな面白そうな事を見逃すわけには行きませんかからねえ」

そのために態々ネルヴィオを炊き付けたわけなんですし……私はくすくすと笑いながらこの世界を後にしようとして

「あまり盗み見は感心しませんね。たかがレベル4如きが今回は特別に見逃しますが……」

完全にその場に溶け込んでいた監視用のネクロを掴み、魔力で焼き払いながら

「次は無いですよ。とは言え貴方達にはつきなんて無いでしょうけどね」

そう呟くと同時にその監視用のネクロを握り潰し。私は今度こそこの世界を後にしたのだ……世界を渡る間私が考えていたのは(惜しいネクロですよまったく)

ベエルゼが妙な騎士道精神など持たなければ、彼も十分にLV5となりえる素質を持っている。それゆえに愚かなことをするベエルゼが惜しいと思いつつながら盟主の城へと戻るのだ……

「はっ！……はっ！……何者なのですか。あのネクロは……」

守護者達の戦いを監視させていたネクロを捕えた。あの謎のネクロ……タキシード姿にマント……その容姿はダークマスターズのヴェノムに酷似していたが、その身に纏っている服はより豪華な装飾が施されていた……

（ハーデス様よりも強いネクロ……一体何者なのですか……）

あの鋭い眼光と魔力で足が痺れていてたつことが出来ない。みつともないが、手の力で身体を引きずり壁を掴んで無理やり身体を起こし、落ちた椅子の上に座りなおし、あのネクロの事を考える

（ベエルゼ様はネクロの中でも最上位。そのベエルゼ様よりも魔力の高いネクロはそうは存在しない）

それにそれだけ力があるのに何故私達に協力してくれないのか？ それにあのネクロが手にしていた菱形のコアは？

（判らない。判らないことだけばかりだ……）

ハーデス様の暴走とペガサスが裏切った事は正直予想外だったが、結果的にベエルゼ様の予測通りだった。ベエルゼ様は仰っていた、ハーデス様はもう戻らないと……しかし最後まで戦いを全うする事ができなかったハーデス様の最後の事をベエルゼ様に話すのは正直気が引ける……しかし報告しないわけには行かない

（少し情報を纏めてからにしましょう）

ネクロの事は報告できるだけの情報が無いので謎のネクロと報告するしかないか。纏めれるのはペガサスとハーデス様のこと、そして織斑一夏が発言した謎のレアスキルの事になるだろう。守護者の戦闘技術は以前のままでがより洗礼されている……映像データと私のみた分析結果をレポートにしていると

「ベリト様？お時間宜しいでしょうか？」

「イナリ？構いませんよ。どうかしましたか？」

私のラボに顔を出したイナリは失礼しますともう一度声を掛けてから部屋の中に入ってきて

「束のラボを襲撃するデイスネクロの調整完了しました」

その報告を聞いて小さく笑みを零す。イナリにデイスネクロの調整をさせてみたが、予想よりも早い時間で仕上げてきた

「こうして報告してきたということは完璧なのですね？」

「はい！」

笑顔で言うイナリ。ここまで言うということは間違いないのだろう……私は纏めていたデータの保存をして

「良いでしょう。確認に行きます。案内を頼めますね？」

「はい！こちらです！ベリト様」

嬉しそうに笑いながら歩き出すイナリ。本当に調整が終了しているのなら束を殺しネクロにする準備は出来ていると考えていい……人間を巧く利用するのは決まっているが

（別に生かしておく価値もないですよ。殺しておきますか）

束を襲わせる人間は恐らくどこの国も切り捨てる人間だろう。束は合理的かつ凶暴な本性を持つ人間だ。自分を襲ってきた人間を生かしておくとは思えない……襲ってきた人間は十中八九殺されるだろう。

（駒を大量に増やす事も出来ません。守護者との戦いを考えれば駒は欲しいですしね）

束だけで襲ってきた人間を全て殺すのは無理だ。アズマやクロエでも無理だろう

（デイスとガルムのテストをして見ますか）

イナリの制御したデイス。そして魔法生物をネクロ化したガルムの実戦投入のデータも取りたい、いや良い機会だから

（デイスガルムを出してみても良いかもしれないですね）

ガルムの進化系。1体で軍を制圧できるあのネクロを出してみるのも良いだろう

「どうですか？ベリト様」

イナリに連れてこられたポットのの中のデイスとその前のコンソールを見て

（少々バランスが悪いですが、悪くないですね。これならば充分に実

戦投入レベルでしょう……普通の戦場ならばですが)

改善点をさつと見て確認する。普通の戦場に投入するのは充分ですが、束に人間に失望させるネクロとしては少々パンチが弱い。私の言葉を待っているイナリに

「初めてにしては中々ですが、まだまだですね。人格を少し調整しておくべきです」

無理やりネクロにするのでは不適合になる可能性もある。少しばかり知性のほうを調整するべきですねと言うと

「そうですか……」

しょんぼりしているイナリ。人間ならばもう少し気の利いたフオローも出来るのですが、私にはそんなことをする知識は無いだから

「次の結果を楽しみにしています。イナリ、貴女に束のラボを襲撃するときには指揮権を与えましょう」

本来は私達は動かさず人間だけに行動をさせるつもりでしたが、ペガサスの事を考えるとやはり指揮官は必要だ。その点イナリなら人間と同じ姿になれる。彼女が適任だとベルゼ様に進言しようと思いつながら言う

「ベリト様！はい！私頑張ります!!!」

そう笑うイナリに楽しみにしていますよと声を掛け。私は自分の研究室へと戻るのだった……戻る途中私は自分でも理解できない胸の温かさを感じ、しきりに首を傾げるのだった。ベリトは知るよしも無いが、その暖かさは親が子を思うものと同じ物であるのだった……

ベリトが使い魔を飛ばして観察していたように、ベール達もあの戦いを見ていた。そして

「あー僕の好きな一夏じゃないよ。つまらない……つまらない」

「ふふっ！良いじゃないかこの世界の一夏も悪くは無い、早く剣を合わせるのが楽しみだ」

「趣味が悪いですわ。動かさず・喋らなくなった一夏さんがもつとも美

しいというのに」

「悪趣味は貴様だ、ヴィステイーラ」

「あたしはどっちの一夏でもいいわよ。あたしになるのなら」

互いに互いを睨みながら話をしている。箒達のネックロ……互いに互いが気に食わず、顔を見ているのも嫌だが、出し抜かれるのもいやと言うことでこうして互いに互いを監視しているのだ

「潰すぞ。小娘」

壁の近くで腕を組んで目を瞑っていたウイントヒルデが目を開き殺気を放つ。それは普通の人間ならショック死するレベルだが、ネックロにとっては微風程度の効果しかないだろう

「やってみたら？あたしが逆に潰してやるだけよ」

「吼えたな？その首……よほどいらぬと見える」

ウイントヒルデが刀を抜き、ベールが落風の拳を展開し、一触即発と言う空気になったが

「やーめた。時間と魔力の無駄無駄。あたしもうちよい寝るわ。じゃね」

ベールは纏っていたさつきと魔力を霧散させて手を振りながら部屋の奥へと消えていく。今のベール達には活動限界がある、ここで暴れればその活動時間を減らすことになるかと判断したベールは挑発するだけ挑発して自分は眠りに落ちたのだ。残されたウイントヒルデは肩透かしを喰らったような物で不機嫌そうな顔をして

「……ヴオドオンと魂狩りにでてくる、暴りたいのならついて来い」

「あら？良いですわねえ？私も付き合いますわ」

「……刻んでも良いんだよね？それなら僕も行くよ」

にやりと邪悪な笑みで笑うヴィステイーラとくひひやひひと怪しい笑い声を上げているルーシエと共にウイントヒルデはヨツンヘイムを後にし、残された桜鬼とラーベルレーゲンは

「もう少し分析しておくか？」

「しておく。私の求める一夏を表に引きずり出すための方法を考えなければならん」

「それは私も同じだ。この世界の一夏はあまりにぬるい。もっと狂気

に満ちてもらわなければ面白くない」

ペガサス・ハーデスが消えたことでこの世界のネクロの戦力は落ちる所か、より充実し始めていた……そしてこの世界の戦いが大きく動く事になるのは、もうほんの先の出来事……終焉のときの始まりは刻一刻と近づいているのだった……

「ハーデス……」

ハーデスが散ったと聞いた場所に直接転移して来た。ネクロとなつた以上遺品なんて物は存在しない、死した者が更に死んだんだ。何も残るわけが無い……

(お前は満足したのか?)

返事が無いと判つてもそう尋ねずにはいられなかった。闘争を好むハーデスが戦えたのはこの1回限り、そして戻る事は無かつた……あいつが最後のとき何を思っていたのか? 私にはそれが判らない。いつまでもここに居るわけには行かない、ここは守護者の膝元。向こうも消耗しているので戦闘にはならないだろうが……それでもいつまでもこの場に居る訳には行かない。ベリトやベルフエゴールもうるさいしな……そう思い引き返そうとした所で月光を浴びて光を放つ何かを見つけ、そちらのほうへ歩き出し私が見たのは

「ヒュプノス……それにモロス……なぜ」

ハーデスの消滅と共に消えたはずのハーデスの愛剣……ハーデスが死んだので消滅したはずのそれが目の前に存在している

「ネクロにも神はいるのか? いやありえんな……」

ネクロを見守る神などいるわけが無い。つまりこれはハーデスの意思だろう

「物言わぬが、最後まで頼むぞ……相棒」

私には私の剣と盾がある。それでもなお、俺はハーデスの遺品とも取れるヒュプノスとモロスを手にした。守護者を打ち倒すならこれしかない。私の勤がそう告げていた……

「ベリトに鞆を作らせるか……」

いくらネクロとは言え生身で剣を持ち歩くわけにも行かない、それ

にこれはハーデスの遺品だ。適当に扱いたくない……

「必ずその首貰い受ける。八神龍也……」

私1人では無理かもしれない、だがハーデスと共になら届くかもしれない。天に最も近いあの男に……

（最後まで頼むぞ。ハーデス）

元々勝ち戦とは思っていない、勝てる可能性が低いのは理解していた。それでもなお戦うのはただの自己満足とも言える、だが俺の誇りを取り戻すためには必要な事なのだ、例え死んだとしても。誇りを取り戻して死んだのなら、それは意味のある死なのだから……ベエルゼはハーデスの遺品のヒュプノス・モロスを抱え現れた時と同じように溶けるように消えていくのだった……

第118話に続く

第118話

第118話

昨晚のハーデス達の襲撃を切り抜けたが、それとは別にある問題が起きている。龍也の言葉で地下のブリーフィングルームで待つていと

「くそ……やってくれたな」

頭を掻きながらブリーフィングルームに入ってきた龍也は酷く不機嫌そうだ。

「何かトラブルでもあったのか？」

私の知る限りでは凰が独断で行動して負傷したくらいのはずだが

……

「トラブルだらけだ。油断していたよ、全く」

溜息を吐きながら更識とユウリのほうに近づいた龍也。あの2人に何か?と思ってみていると龍也は真剣な表情で2人の目を覗き込んでいる

「な、なにか?」

「ワタシに何か言いたい事でも?」

龍也にじつと見つめられていた更識とユウリがそう尋ねるが、龍也は返事を返さず今度は

「な、なにかしら?」

「……」

スコールとオータムの目を見つめる。そして最後に私のほうに来て

「なんだ?何か事情があるのか?」

龍也は私の目を見た後椅子に腰掛け、少し冷めているコーヒを口に含み

「一夏と私を覗いて全員暗示に掛けられている。私でも解けない様な非常に強力な暗示だ」

「「なッ!?!」」

龍也の言葉に私を含めて全員が絶句する。龍也はやれやれと肩を
竦めて

「箒達も全員だ。今確認してきたが何かの記憶に関する封印系だな
……別に急に襲い掛かるや凶暴化するような物では無いようだが
……はやて達も掛かっている事を考えると並みのネクロではないな」
龍也の言葉に全員が顔を見合わせる。いつネクロに暗示を掛けら
れたのか判らない、そして自分達に何が起こっているのかも理解でき
ず、若干の恐怖を覚える

「本当に害はないのか？いきなり同時討ちになっていたなんて洒落に
ならんぞ」

私がそう尋ねると龍也は心配ないと断言してから

「その手の暗示は何らかの出来事をトリガーにして発動する。そう言
うものが無いか精神を見せてもらったが心配ない。ただの記憶封印
だ。ただといえるレベルの安い暗示ではないがな」

ちよつとまて……精神を見た？それってまさか記憶とか私が何を
考えているかもばれたと言うことか？

「龍也さん。そう言うのは普通許可を取ってからやるものなんじゃな
いですか？」

「ええ。感謝はしてるけど、そう言う真似は許容できないわよ」

「……悪いけど一発だけ、一発だけ殴らせてもらえねえか？」

更識やスコールも額に井のマークを浮かべている。私もいつまで
もこんな冷静な振りをしていることは出来ない、とりあえず

「歯を食いしばってもらおうか」

立ち上がり拳を鳴らす。だが龍也は全く意に介した素振りを見せ
ず

「私が見たのは残存のネクロの魔力が無いかの確認だ。下手にそう言
う素振りを見せると隠し事をしています。と告白しているような物
だとわからないのか？」

その言葉で空気が凍った音がした。ユウリは若干ジト目で龍也に
「性格悪いな」

「自覚はあるよ。はやてにも散々怒られた」

怒こられているのにそんな事をしたのかと更に私達の視線が強くなるが、龍也は涼しい顔をしたまま

「暗示で殺した後に目覚めたとかでも良かったかね？それに説明したとして……はい。そうですね？と納得できるか？」

納得できないかもしれない。はいそうですね？と言って納得できるほど人間の感情と言うのは単純ではないからだ

「納得してくれた様で何より、本題に入りたいから座って貰えるかね？」

完全に龍也の手玉に取られ、その事に若干の苛立ちは感じたが、いつまでもこうしている訳にも行かないと思いい椅子に腰掛けたのだが……

(（あのやろう、いつかへこます）)

私やスコールの考えは恐らく同じだっただろう。人を食ったような言動と全てを知っているのに何も言わない。その事で散々苛々させられた上に今日の出来事。私達は絶対そのうちにあいつをへこませてやると心に誓ったのだ……

楯無やスコールが睨んでいるのに龍也は涼しい顔をしたまま

「今回の襲撃でだが、ベルゼ一派と協力してないネクロが1体存在している事と警戒していたハーデスを倒す事ができた。これは非常に大きい」

淡々と今の状況を解説していく龍也。動じないのも程があるとなタシは思う、いやあれだけ濃い面子に囲まれているから動揺しないのか？と考えていると千冬

「協力して無いネクロって言うのは、私達に暗示を掛けた？」

「それしか考えられん。もし協力してるなら、既にIS学園は落ちてるよ」

いくらなんでも一晩やそこらでこのIS学園が落ちるとは思えない。楯無もスコールもそれはないだろうという顔をしながら

「冗談？」

「いや、事実だな。過去の事例だが、ネクロに暗示を掛けられて一晩で

壊滅した要塞もあるぞ」

軽い口調だが、龍也がネクロ関係の事で冗談を言うとは思えないので本当の事だろう

「参考までに聞いておくが、どうなったんだ？」

「仲間同士の殺し合い。疑心暗鬼に陥り、誰も信じることが出来ず……疲弊した所でネクロの襲撃だ」

戦場で最も怖いのは同時討ち。それを意図的に作り出すネクロ……今のところは真つ向から攻めてくるネクロが多いのがせめてもの救いなのかもしれない

「戦術に長けたネクロが少ないわけじゃないのに、態々真正面から攻めてくるのは指揮官のベエルゼの意思？」

スコールの言葉に龍也は少し考える素振りを見せる。龍也はベエルゼと面識があるらしいので、それから考えているのだろう

「可能性はあるが、情報を集めているだけとも取ることもできる。ベエルゼは騎士ではあるが、戦術家だ。こうと決め付けるのは危険だ」「把握しきれないと言うところか？」

ワタシがそう尋ねると龍也はあつと頷いてから、いらついた素振りで髪をかきながら

「正直ベエルゼ単体ならある程度戦術を読むことも出来る。だが配下のネクロのベリトがいると話は別だ。あいつは中々鬱陶しいネクロだからな」

「私は数回はなしたことがあるけど、色々なパターンを考えてるのは良く判ったわ。それに人間に化ける事もできる「イナリ」に分身して人間社会に紛れ込んでる「ラクシユミ」どっちも厄介よね」

ワタシもネクロ側だったが、あまりネクロと接触する機会はなかった。スコールが主にネクロとの交渉を担当していたからワタシが知らないネクロの情報があると言うのは心強い事だ、ある程度能力が判っていれば不意打ちはある程度防げる

「だけどあのネクロ達の情報はないんだろう？なにか対策はあるのか？」

オータムが不機嫌そうに呟く。オータムが言っているのは箒達の

ネクロだろう、確かに知っているネクロよりもあいつらの方が何倍も危険だ

「正直現段階では対策は無い。今打てる手は奇襲に備える事と束に対する情報収集だけだ。何か連絡は無いのか？」

ネクロの今の目的は束のネクロ化。龍也的にはあの自己中心女は1度死に掛けなければわからんとかかなり手痛いコメントをしていたが、ワタシも同意見だ。あいつのせいで劣勢になっているともいえるのだから

「連絡はつかない。直通電話でも駄目だ」

ネクロの目的が束のネクロ化にあると知ってすぐ束に連絡したのだが

「電波ジャックだな。周到に準備しているのは間違いないか……」

龍也は深く溜息を吐きながらこれ以上話していても意味はないなと呟く。今の時点で打てる手は何もなく、後手に回るしかないのだから、ここで結果の出ない話し合いを続ける意味はないと言うことだろう

「寝る前にこれを噛んでおけ。これで少しはネクロの魔力に対抗できるだろう。味は最悪だがな」

ガムを差し出して出て行く龍也。最悪の味と行ってにおいて言ったのは文句を言われる事を考えたからだだろう

「いくらなんでもそこまで酷くないだろ？」

オータムがガムを頬張る。顔色が目まぐるしく変わっていく、そして土気色になってから数秒後

「ごぼあッ!？」

女性としてありえない悲鳴を上げて動かなくなった。スコールがしゃがみ込んで

「……息してない」

それに痙攣している素振りを見ると明らかに危険だ。このガムはどう考えても劇物だ

「龍也アアアアアッ!!!」

こんな物を渡して去って行った龍也を追いかけていこうとすると

「はっ!?気分爽快だ。私はどうしたんだ?」

オータムが突然立ち上がりそう言う。おかしい息をしてなかったのに、どうしてこんなに元気なんだ……

「もしかして1度死んで元気になる?」

だとしたら誰も好き好んでこんな危険物を食べはしないだろう。だが食べないわけにも行かないわけで

「ワタシが先に食べる。気絶したら頼む」

楯無に先に食べさせる訳にも行かない。仮にも男な訳だしな……

「うん。私に任せておいて」

死にかけた後を楯無に任せてワタシはガムを頬張る。辛味・甘み・酸味・鈍痛・激痛ありとあらゆる刺激がワタシをおそい

「ごぼあッ!」

先ほどのオータムと同じうめき声を上げ、意識を失うのだった……これは劇物なんて物じゃない、これは既に兵器のレベルだ

ただおきたら気分は今までに無いくらい絶好調で気力も体力も充実していたので回復道具としては優秀なのかもしれないとおもうのだった……そのあと楯無と千冬も頬張り

「ごぼあッ!」

白目を向いて完全に意識を失った楯無を背中に背負い。ワタシは楯無の部屋に向かった。どうやら目覚めるのはかなり個人差があるらしく、楯無は2時間ほど意識を失ったままだった……楯無を歩いて行くわけにも行かなかった。(いつ起きるかも判らないので近くで見えないと不安だった)ワタシは目覚めるまでの間。ミステリアス・レイデイの調整をしていたのだが……

「うーユウリー」

「ええい。やめろ引つ付くな」

どうも楯無は寝ぼけると抱きつき癖があるらしく、ワタシの腰元に手を伸ばしぐいぐいとベッドに引き込もうとする。寝ぼけているくせになんて力だ。離れようとするのだが、あのガムの効力か信じられない力でベッドのほうに引き込む楯無。だがそこで力尽きた……編に誤解されないうちに抜け出すかと身体を起こした所で

「お嬢……失礼しました」

虚がきてワタシと楯無を見て、顔を真っ赤にさせて出て行く

「さて、行くな!!」

「お。おおおじゃましひゃした!?!」

噛みまくって凄まじい勢いで出て行く虚。ワタシは眠っている楯無の額に割と本気でデコピンを叩き込んだのだが

「むにゃー」

全然気にした様子を見せず眠っている楯無を見て溜息を吐いてから、腕を振りほどき再びISの調整作業に戻りながら

(虚は楯無に任せるか)

あまり面識が無いのに追いかけて行っても話を聞いてくれるとは思えないので、ワタシは楯無に丸投げすることに決めたのだった。

楯無が虚の誤解を解くのにかなり苦労することになるのだが、それはまったくの余談なので語る必要はないだろう……

「ペガサスか……」

IS学園の外れの原っぱで日向ぼっこをしながらそう呟く。ネクロになってもなお、自分の仲間と親友達の仇を取ろうとしたペガサス。ネクロだけど憎む事などできない、そんな不思議なネクロだった(あんな出会いじゃなかったらなあ)

もしペガサスが人間で、ネクロと戦うのに協力してくれていたらと思わずにはいられない。だがもしはない、事実は一っだけ

(俺がペガサスを殺した)

雪片ごしにペガサスのコアを砕いた感触がまだ手の中に残っている。目を閉じて身体を横にする

(あれしか本当になかったのか?)

ペガサスをすくう方法は本当にあれしかなかったのか?もしの可能性を考えずにはいられない

「鬱陶しい!ぐだぐだしてるんじゃないわよ!」

「あいだあ!?!」

聞きなれた幼馴染の声と背中に走る激痛。思いつきり背中を蹴ら

れたので、起き上がることも出来ず寝転んだまま悶絶していると

「ふぎやツ!？」

背中に座られ、動く事も出来なくされた。鈴って結構おも

「殺すわよ」

「ぎゃあああー!ごめんなさい!ごめんなさい!!!」

鈴が体重を掛けた上に関節を極めて来る。そのあまりの激痛に絶叫している

「またぐだぐだと……二十日鼠も大概にしなさいよ」

二十日鼠? どういうことだ? 鈴の顔を見たいが、背中に座られているので俺が見えるのは青々と育った雑草だけだ

「考えても無駄な事を考えても答えは出ないって事。そんなことを考えるなら、命懸けであんたを救ったあたしに何か恩返ししなさい。そのほうがよっぽど健全よ」

その言葉にぐうの音も出ない。鈴はハーデスとの戦いで俺を庇って重傷を負った。もし龍也がいなければ死んでいてもおかしくないレベルの怪我だったらしい

「すまん「だれも謝れなんていつてないわよ馬鹿」

鈴はそう言うのと俺の頭に手を置いて。優しく撫でながら

「ぐたぐたとくだららない考え事してないで、あんたの進む道は決まってるでしょ? 龍也と違う守護者。それを目指せばいいじゃない」

その言葉に息を呑む。それはペガサスの遺言とも言える言葉だったからだ

「龍也の正義は正しいわ。だけど周りにいる人間を皆傷つける、だけど龍也はもう立ち止まれない。だけどあんたはどのようなのよ? あたしとは箒とかを傷つけて独りよがりの正義を貫くの?」

「違うー!」

確かに俺は誰かを護りたいと思う。だけど俺には龍也の様にはなれない……いや、なりたくない。自分の感情も何もかも捨て去ってしまう。確かにそうすれば護れる者も増えるかもしれない、だけどそれ以上に傷つけてしまう人間が増えるからだ。鈴は俺の背中から立ち上がると

「じゃあ龍也と違う守護者になる第一歩。あたし達にデザートを奢る事」

「は？達……ってあれえ!？」

鈴しかいないと思いきや箒にセシリアにラウラにシャル。それにマドカと全員いた、しかも私服で少しだけ苦虫を噛み潰したような顔をして

「鈴。お前偶にすごいな」

「本当ですわ。尊敬します」

「当然。あたしは凄いのよ」

「凄い馬鹿なんだよね？判るよ」

シャルが爆弾を投下して鈴が鬼の形相になる。何もかもがいつも通りで

「あ。あはは」

今まで悩んでいたのが嘘のように晴れやかな気分になり笑みが零れる

「む？どうかしたのか？」

ラウラが怪訝そうな顔で俺の顔を覗きこんでくる。俺はそれになんでもないと返事を返し、しーっと静かにとジェスチャーをしてラウラとマドカ。それにヒートアップしているシャルと鈴から逃げて来た箒とセシリアを連れてある程度はなれた所で

「おーい！アットクルーズに行くんじゃないのかー？おいてくぞーツ!!!」

そう声を掛けてから走り出す。俺に気づいた鈴とシャルが追いかけてくるのを感じながら

（ペガサス。あんたのおかげで少しだけ戦うって事と護るって事が判った気がする）

だから俺が目指すよ。龍也とは違う守護者を、俺がそんな存在になれるかは判らないけど、そうなりたいとおもうから……俺は自分でも驚くような晴れやかな気分です。駅のほうへと走るのだった……

「夏は道が今度こそ決まった見たいやね？」

ステルスで近くに隠れていたはやてがそう呟くと、その隣に龍也が

現れて

「そのようだな」

一夏達を見ていた龍也とはやてが穏やかな笑みを浮かべて呟く

「兄ちゃんみたいなの守護者にならんとさ？」

「それでいい。こんな大馬鹿は私一人で充分だ」

「馬鹿って判ってるなら止めたらどうや？」

「無理だ。むしろこんな馬鹿を構うのは止めたらどうだ？」

「それこそ無理やっ♪」

おだやかに笑うはやてに仕方ないと肩を竦めた龍也は空を見上げてから欠伸をして

「少し昼寝でもするか？良い木陰もあるしな」

「そやねーたまにはいいかもしれないなあ」

龍也とはやてはそのまま木陰に座り込んで、木に背中を預けて眠りに落ちていくのだった。戦いという非日常の中にある日常……それを護る事こそが戦うことの意味なのだ……

第119話に続く

第119話

第119話

最近姉さんの事ばかり考えてしまう。ネクロに狙われていて危険だと判っているのに連絡が取れない。危ないと危険だと伝えたいのにそれが出来ないもどかしさ……確かに姉さんとは距離を置いていた、だけど大切な家族であることには違いはない……

(私はどうしたいのだろうか)

姉さんには生きていてほしいと思う。だけど私は長年感じていた、姉さんが私をちゃんと見てくれているのか？あのどんよりとした隈のある目を見るとどうしても嫌悪感を抱いてしまう。箒ちゃん、箒ちゃんと私を呼んでくれているのに、あの人が私を見ていないような気がずっとしていた……

(かと言って私に出来る事は無い……龍也さん達を頼るしか……)

龍也さんの話では可能性の話だが、人間が敵に回る可能性があると言っていた……そんな戦場に私達を出す事は出来ないと言う龍也さんの判断で私達には詳しい情報は何一つ伝えられていない……それに龍也さんが姉さんを助けてくれるかどうか？と言う不安もある……

「何悩んでるんだ？箒？」

突然声を掛けられて顔を上げると一夏が不思議そうに私を見ていた

「なんでもな「唸りながら時折頭を振って歩いてたぞ？」!？」

慌てて周囲を見るとなにか可哀想な者を見るような顔をしている生徒が数人いて

「く。つくつく！見るな!!！」

気恥ずかしくなりそう怒鳴ると興味津々と言う感じで私を見ていた生徒達はあつと言う間に見えなくなつた。ふ、不覚だ。そこまで考え込んでいる事にすら気づかなかつたとは……

「俺の部屋で少し話でもするか？マドカいるけど」

一夏の言葉に少し考えてから頷く。一夏と2人きりならとても話にはならないが、マドカがいるならそこまで緊張する事も無いだろうから

「それでどうしたんだ？」

麦茶を差し出してくる一夏になんとさえいいのかと考えているとマドカが

「束の事だな？どうすればいいのか？自分が何を出来るのか？と考えているのだろうか？」

「その通りだ」

私の考えている事を言い当てたマドカはふんつと小さく鼻を鳴らしてから

「龍也に頼めばいいだろう？姉を助けてくれと、私ならそうする。一夏でもな」

確かにそれが正しい反応なのだろう。自分が出来ないのなら出来る相手に頼むしかない。だが……

「姉さんが龍也さんの言うことを聞いてくれるとは思えない」

それが最大の懸念なのだ。龍也さんなら頼めば聞いてくれるとおもう。だけど姉さんが問題なんだということ

「まあ束さんの性格を考えるとなあ」

「それもあるが覚えているだろうか？臨海学校のときのことを」

姉さんと龍也さんはかなりピリピリした空気になっていた。龍也さんはそうでもないのだが、姉さんが一方的に嫌っている。助けに来て貰ったとしても龍也さんの手を跳ね除ける可能性がある。むしろその可能性が高い

「くだらん。バカな考え休むに似たりと言う言葉を知らんのか？」

「馬鹿にするなよ。知らないわけが無いだろう」

「下手の考え休むに似たり」と同じ意味の……そこまで考えた所でマドカの言わんとした事を理解した。マドカは私を見て

「今お前のしていることが正にそれだ。今何を考えても妙案など出るわけが無い、だが束が死ねば……少なくともお前はずっと後悔するだろう」

肉親が死ぬのだ、後悔しないわけが無い。それだけは判っている

「ならば今お前の出来る事はなんだ？」

「それは……」

判っている一つしかない、姉さんと龍也さんが喧嘩する事になったとしても……生きていたほうが良いに決まっている

「判ったな？なら行け。龍也は海辺で釣りをすると行っていたぞ。判ったなら早く行け、折角兄さんとゆっくり出来る時間を邪魔するな」

しつしと手を振るマドカに一夏が

「いや、そう言うのは良くないと思うぞ？」

一夏がそう咎めるがマドカは我冠せずと言う顔をして私を少し睨みながら

「知らん」

不機嫌そうなマドカ。一夏とゆっくり出来る時間を邪魔されたので不機嫌なのだろうなと苦笑しながら

「ありがとう。今度部屋に來い・写真を分けてやろう」

「つておい。なんだ写真つて」

「グロスだ」

「グロス単位も何に使う気だ!？」

一夏の悲鳴にも似た突つ込みの声は無視して、私は海辺へと走り出したのだった……

「写真は冗談だよな？」

「♪♪」

「頼むから違うといってくれ!!」

残された一夏は楽しげに口笛を吹くマドカにそう叫んだのだが、マドカは一切返事を返さなかった。写真がどうなったのかは誰にもわからない

はやてやなのはも邪魔しないと言うので釣りに来ていたのだが

……

「釣れんな」

まあ祿に釣れるとは思ってなかったが、2時間竿を出して何のあたりも無い。潮通りは良さそうなので連れてもおかしくないのだが……

(まあ気分転換にはなるか)

置き竿にして近くの岩場に寝転がる。波の音と潮の香り。これだけでも大分気分転換になるなと思っていると

「釣れないですか？」

「ん？簀か？見てのとおりだ」

「簀だけではないですよ」

簀だけじゃなくてエリスもいたのか。それは悪いことをした

「すまん、のんびりしていたので気配を探ってなかったものでね」

普段なら気付くのだが、今は休む事を考えていた。なので2人の気配にも丸で気付かなかつたと謝罪すると

「謝らなくても……いいです」

「急に着た私達が悪いのですから」

「そうか、そう言っつて貰えると助かるよ」

身体を起こして釣竿を見るが投げ込んだままで浮きは何の反応も示さない。仕掛けを回収して、ルアーの準備をする

「ルアーをするんですか？」

「ああ。浮きじゃ駄目みたいだから」

どうも海老を食う魚がいなみたいだから。とルアーに変えて投げ込もうとすると

「教えてくれないですか？」

「釣りをか？構わないが？」

簀が釣りを教えてくれと言うので手にしていた釣竿を渡し、仕掛けの投げ方を教える

「スプールをあけて、指でラインを押さえてだな……」

「こ、こうですか？」

ぎこちなく投げる準備をした簀にそれで良いと言って、目標となる岩を見て

「軽く振りかぶって、遠心力と竿の弾力で投げるんだ」

ゆっくり振りかぶり投げた簪のルアーは
ひよろひよろ……ぼしよ

「あ……」

ふらふらと飛んで殆ど目の前に落ちた。まあ初めてならこんな物
と苦笑しながら

「今度はエリスがやってみるか?」

「私はある程度知っているので」

簪から釣竿を受け取り振りかぶるエリスは慣れた手つきで仕掛け
を投げ込んだ

「ほう、上手い物だ」

「サバイバルの訓練で覚える必要があったので」

ツバキさん仕込みか。確かにサバイバルで釣りが出来ると出来な
いだと生存率が違うなと思いつつながらリーリングをしているエリスを
見ていると

「龍也さん!」

「ん? 簪かどうかしたか?」

膝に手を置いて荒い呼吸を整えている簪にそう尋ねながら、ク
ラーからスポーツドリンクを取り出して渡す

「す、すまない」

「いや別に構わないが?」

簪も釣りがしたい……それはないか、随分と真剣な顔をしてるしな
「束の事か?」

簪の肩が動く、どうやら凶星の様だな……私は釣竿を手に私を見て
いる簪とエリスを見て

「簪とエリスに聞かれると不味いか?」

家族の問題はデリケートだ。嫌ならはなれるか?と尋ねると簪は
構わないと小さく返事を返して

「龍也さんは姉さんを助けてくれるのか? 感謝されなくても」

「別に私は感謝して欲しいわけじゃないしな」

感謝して欲しくて人助けをするわけじゃない。それに経験上助け
たとしても恨まれた事などこれでもかかってある

「なら姉さんを助けてくれるのか？」

「さあ？」

「なっ!? どういうことだ!？」

私の言葉に怒りを露にする箒と信じられないと言う顔で私を見て
いる箒とエリスに

「あの手の人間はな、壊れてるんだよ。ああ、徹底的にな。私もその手
の人間だから判る」

束は感性が死んでいる。自分が楽しむ事だけを考える、その為なら
ばこの世界などどうでもいいと考える人種だ

「助けには行くかも知れない。だが生かす価値もないならば……見捨
てる。判るな？」

助けた所で味方にならない人間を助けるために命を賭ける道理は
無い。私は確かに自分の命を軽んじてはいるが、自殺志望者ではない
「……それでも一応は助けに行くんでしよう？」

箒の言葉に私は少し考えてから頷き

「その価値があるかどうかはその場で考える。これ以上は私に言える
事は無い。見捨てるかもしれないが、全力は尽くす。だから後は……」
俯いている箒を見る。今箒の頭の中では色々と葛藤があるのだろ
うな……私はもう1本釣竿を用意しながら

「お前が信じる事が出来る束を信じてみる。私は今の束しか知ら
ん。あの馬鹿をな、だけとおまえの知ってる束が少しでもまともなら
……まあ考えなくも無い」

返事を返す事無く歩いていく箒を見ながら仕掛けを作っていると
「相変わらずずるい人ですね？」

「大人はそう言うものだ」

エリスの言葉にそう返す。私は今の束しか知らない、今の束なら救
う価値は正直ない。あの手の馬鹿は死ななければ治らない、けれど
「箒さんがしるお姉さんなら助ける？」

「まあそんな所だ。どっちにせよ束しだいと言うことだ」

私はそう呟きながらミノーを岩陰に投げ込み。竿先を小刻みに振
りながらラインを巻き取っている

「見捨てるなんていうだけなんじゃないですか？」

「良い人の龍也さんがそう簡単に見捨てる事ができないとおもうんですけどね」

交互に交代しながら釣竿を投げ込んでいる簪とエリスにそう言われた私は、コートからタバコを取り出して火をつけながら

「ご想像に任せる」

くすくすと笑う簪とエリスに居心地が悪いものを感じながら、足元まで戻ってきたルアーを再度投げ込みながら

(最近考えてる事がばれやすくなったなあ……歳か?)

考えてる事が顔に出ているようではまだまだだなど苦笑しながら。再度ルアーを投げ込んだのだった……

結局この日は一匹も魚を釣ることはできなかったが、まあ中々に有益な時間だったとおもう

「素直じゃないのは良くないと思いますよ?」

「はやて達も言っていましたよ。憎まれ口を叩くけど、多分龍也さんは束さんを助けるって」

「ノーコメント。帰るぞ」

訂正。からかわれたり、生暖かい目で見られたので少し精神的に疲れた1日だった。だがまあそれなりには有益な時間だったとは思う……

「兄ちゃんバレバレやなあ」

「そうだねー」

簪とエリスが龍也の考える事が判つたのは近くでステルスに待機していた、はやてとなのはの念話による物だったりする

「私は邪魔しないって約束したもんな」

「うん。私はね」

自分達は邪魔しないが、他の人間がしないとは約束していないという子供のような屁理屈でそれを回避したはやてとなのははと言えば。満面の笑みでカメラを見つめて

「珍しい写真を沢山撮れたね♪」

「そやなー♪」

知り合いしか判る事の無い、龍也の動揺した顔やうろたえている写真を撮ってにこにこことご満悦だったりするのだった……

「留守番をしてるフェイトちゃんにも分けてあげんとなー」

「電気の魔力変換を出来るから留守番だもんね」

ただしくは高圧の電力でISの改修の手伝いをしているのだが、最後の最後まで渋っていたフェイトの事を考えながら、2人は楽しそうに鼻歌を歌いながらIS学園へと帰ろうとして

「言いたい事はそれで全部か？」

「あ。あははは……」

腕組している龍也に見つかり、乾いた笑みで笑うのだった……その後2人のカメラがどうなったか態々言うまでも無いだろう……

「くそがッ！あの野郎ッ!!」

ヨツンヘイムの壁を蹴りながらそう怒鳴る。思い出すのはあの勝ち誇った盟主の顔とあの言葉

【あの男の価値を見出したのは僕だ。故にあの男は僕の物だ。逆らうのなら、僕と戦うのか？】

にやにやと笑うあの顔を思い出す度に腹が立つ。お父様の価値を見出したのがお前？ふざけるなッ!!

「私のお父様を！良くもッ！」

盟主がお父様を消した。その事に激しい怒りを覚えるだが……まだ生きてるのは判っている

(この時間軸のお父様がまだ消えていない)

未来が消えたら今のお父様にも影響がある。だけどそれが無いと言うことを考えると……お父様はまだ生きている。ただ、どこにいいのか判らないと言うだけのはずなのだが……

「なーに？ネルヴィオ。随分と荒れてるわねえ」

「失せろ。潰すぞ」

にやにやと笑うイナリに本気で殺気を叩きつける。LV3の癖に私を挑発する？身の程を知らないにも程がある。イナリもそれが

判っている様で肩を竦めて後ずさりしながら

「ふ、ふん！今更凄んでも遅いのよ！ベリト様は私に束を仕留めるように命じられた！今更お前に出来る事なんて何もない！」

馬鹿にするかのように言うイナリ。ああ、やつと動く事になったのか。まあ私はその事なんてどうでもいいが、下手な事を言うといナリが絡んでくるのが判っているので

「それは残念ね。まあ貴女ならうまくやるでしょうよ」

私がそう言うといナリは少しだけ驚いた顔をしてから

「私が失敗する事を祈っているのかしら？」

「別に？私は貴女なら出来るって判ってるから」

元々イナリは呪術に長けたネクロでもある。恐らく何の問題も無く、束をネクロ化させる事ができるだろう……

「……調子が出ないわね。まあ良いわ。私はもう出るから」

出撃する前に私を挑発してくる？……珍しく、動じているのかもしれない……背を向けて歩いていくイナリの背中を見つめながら

（まあどうでもいいか……）

束の所で欲しい人材と言えば「アズマ」だけだ。アズマは恐らく攻撃に反抗するはずだ。そうすればいつかは力尽きるだろう、そして戦闘力を充分に見せればイナリが回収してくるだろうから、私が無理に動く事も無いけど……

（あいつが何を考えているか判らないしね）

アズマが何を考えているのか判らない。もしかすると何かとんでもない事を考えているのかもしれない。束を生かすためならば、なんでもするタイプの人間だ。私と同類の人間だから良く判る……

（少し様子を見に行つたほうがいいかもしれないかな）

手を出す理由はないが、アズマはネクロにすると考えればかなり優秀なネクロになると思う。みすみす手放すには惜しい存在だ……かといってイナリが任せられたのだから、私が見に行くのもおかしいような気がする……少し考えてみて……

（私は別に従う理由も無いしね。好きに動くとしましょうか）

別にベエルゼ達の考えに従う理由も無い。それになりよりも……

(今は動かないと苛立ちが収まらない)

あの野郎が何を考えているのかは判らないが、今はじつとしていたくない……

「行きましようか」

本当は盟主のところに行ったからゆつくり休みたいのだが、今はそんな気分じゃない。私は東のラボへと転移することにした、そこならば待っていればお父様にも会えるだろう……今まで近くで顔を見ることは出来なかった。あの女達に邪魔されて会うことが出来なかったから、だけど今回は邪魔者はいない。会って話すことが出来ないとしても、顔を見るくらいはいいだろうと思う……戦いになったとすれば逃げればいいのか……

「モメモノ。行こうか？お父様に会いに」

「うん。行きたい」

笑顔のモメモノを抱え、私はヨツンヘイムを後にしたのだった……そしてこの研究所での戦いがこの世界での争いの始まりになるのだった……

第120話に続く

第120話

第120話

ネクロの攻撃に備え、私ができる準備は全てしたと言える……それでもなお不安は消えない……

(私がどこまで出来るか……)

私にはリンカーコアなんていう器官はない。私に出来るのはISにAMFの加工をISに施すこすだけだった。これでどこまで戦えるのか？それが不安だ……

「むー最近ネルちゃんから連絡ないねー」

東が机の上に伏せて不貞腐れながら言う。毎日のようにあつたネルヴィオの連絡は今はない……それはすなわちもう東に協力を求める必要がないと言うことだ

「ねーアズマちゃんには連絡ないのー？」

「あるわけないだろう？私はネルヴィオは嫌いだ」

向こうは一方的に私をある程度気に入っているようだが……私はあいつはキライだ……

「ふーん……あーあー……暇だねえ……」

ぶつぶつとつまらない、暇だと繰り返し呟いている東にクロエが「東様。今紅茶とメロンパンを焼きました、お召し上がりになりますか？」

東が今までの不機嫌な顔を止めて喜色満面と言う感じで身体を起こして、クロエを見て

「食べるー♪」

本当に嬉しそうにそう笑う東。クロエの料理は最初こそ消し炭だったが、私がある程度教えたことで今では普通に料理が可能になっている。嬉しそうに笑う東に微笑み返ししながら目配せするクロエ、こは任せろという所か……私はその気使いに感謝し、軽く頭を下げてから自分用のラボに向かった。

「……漸くどこまでこぎつけたか」

元々はゴーレムを元に改造したブラッドバニー。それゆえにもう

これ以上の出力の強化は勿論、セカンドシフトをする事も適わない。だから私が出した答えは後付装甲。しかもクアッド・フアランスのように火力と防御力を追求する形にしたのだ、だがあのような欠陥品と違いしっかりと機動力も確保している。通常字の装甲の上にAMFの加工と炸裂装甲を搭載した「アクティブカーテン」のせいでフルスキンにも見えるが、これで防御力は通常の倍以上の物を確保できた、さらに背中には複数の装備を搭載したアームドベース。これで圧倒的な火力を手にした、これならばISなど問題ではなく、楽に殲滅できるだろう

(元よりそのために設計したのだから)

圧倒的な火力による制圧戦。それだけを考えて設計した……AMF弾を打つことのできる銃も搭載した、だが……

(人知を超えた相手にどこまで行けるか……)

どれだけ準備をしても不安になる。八神龍也を呼ぶ為の魔力発生装置はある、だがそれでもすぐ来てくれるわけではない。少なくとも数時間の時間は掛かる……

(それだけの時間を私だけで戦うことが出来るのだろうか)

ネクロ。そして束を捕えようとする人間……そして私自身の身体……不安要素は挙げればきりが無い……そして私の生存率は恐らく0……だがそれでもなお私はやらなければならない……

「束のために?」

突然聞こえた女の声。この声は!? 咄嗟にスカートの中から拳銃を取り出し振り返ると同時に照準を合わせる

「やほー♪元氣?」

ネルヴィオがにやにやと笑いながら私を見つめていた。気配も何もしなかったのに……どこから……

「ああ、そんなに警戒しなくてもいいよ。これは幻像だから、私はアズマには触れられない。OK?」

そう笑うネルヴィオの手はノイズがかかっているかのよう、途切れ途切れになっている……私は拳銃をスカートの中に戻しながら

「何をしにきた」

今更何をしにきたと言うんだ。ネクロは既に束を見限ったのではないのか……

「取引しない?」

「取引だと……」

ネルヴィオはニヤリと邪悪な笑みを浮かべる。外見が人間だから気付かないが、こいつもれつきとしたネクロなのだ……その事を改めて認識する。そしてどんな話だろうと断ると心に決める

「束とクロエ助けてあげようか?別に私が助けるんじゃないからお父様に渡す所までなら手をかしてもいいよ。その代わり……お前を頂戴。その魂も、亡骸も……全部」

くすくすと笑いながら言うネルヴィオ。こいつは随分と私の事を気に入っていたが、まさかここまでとはな……そう苦笑しながら

「断る。束は私が助ける。お前の力など借りない」

それに仮にその場合は良かったとしても後で束の敵になる可能性がある、そんな取引を受ける必要性はない

「ふーん……後悔するよ。絶対に」

考え直せば?と言外に言うネルヴィオ……だが私はそんな罫と判っている取引をする必要性が見出せない

「しない。とつとと失せろ」

私は自分の選択に後悔などしない。死も受け入れた、ならば束を護る事だけだ。それでいい、それだけが私の生きた証拠になる

「あと2時間だよ……あと2時間。しっかり覚悟しておくんだね、死んだら私が回収してあげるよ。アズマ」

そう笑って消えていくネルヴィオの幻影。2時間……それが本当ならもういくばくも時間はない……

「いざと言う時の為に用意しておいて良かった」

恐らく束は八神龍也の話を聞かない。その時を考慮して用意しておいた言葉による遺書データ。それをクロエのPCに転送しておく、これではクロエが上手くやってくれる……あと私がやるべきことは1つ……最後まで倒れない事、そして何をして、自分がどんなケガをしようとも……

「束だけを守り切れればそれで良い……」

私は恐らく、今日この場所で死ぬ。だけどそれで構わない……私の命で束が救えるのならば安い物だ……あの暗い場所ですら死ぬだけを待つ私を光の中に連れ出してくれた束……彼女を護れるのならば……

「この命など惜しくはない……」

知らずの内に手を伸ばし、頭の上の黒いウサ耳に触れる……これが私の生命線であり、これを外せば私と言う存在は急速に壊れていくだろう……来ると判っていた日……それが今日……ならば

「残された時間を全て使いきるのも……また運命だな」

椅子に腰掛け、引き出しの中からカプセルと錠剤を取り出して噛み砕く……禁止薬物だが、これで更にISとの適合力が増す……

「最後まで言うのは自分でおもっていたよりも早いのだな……」

まだ時間はあると思っていた、だがもう私の時間は尽きていたようだ……私はそう苦笑しながら目を閉じた……最後の時まで僅かな時間でも良い……安らかな夢を見たいと祈ったから……

束の隠し研究所の近くで不似合いなテーブルと椅子に腰掛ける金髪の女性。ネルヴィオだ……ネルヴィオは優雅な手つきで紅茶をカップに注ぎながら

「馬鹿だねえ……私は約束は護るのに……」

アズマとの取引は本気だった。アズマは上質なネクロになる……それで考えれば充分に束とクロエを逃がしてもおつりが来る。まあ無論あとで束とクロエも殺すので結果論的にはあの2人は死ぬ運命だったのだが……

「ネル。来た……」

ステルスで隠れているモメメノが両手にクッキーを抱えて呟く、その視線の先にはゆっくりと進軍してきている複数の人間の部隊が見える。中に数人ネクロが紛れているが、恐らくイナリとラクシュミだろう

ガサ！

「ん？」

「こんな所に……女が……」

結界を張っていたのに数人の軍人が私の前に現れた。結界を張っていたもたまたまに波長があつてそのまま素通りできる人間がいる。無論それは言うまでもなく不幸なのだが……品定めをするかのよう私を見る男達……その視線に気付いた私は

「失せろ。私を見ていいのはあの人だけだ」

手を持ち上げて振り下ろす。そして響き渡る不気味な水の音と何かが落ちる音……私の能力でもある不可視の刃。それにより何が起きたか判らないうちに絶命した……

「ふん。人間如きが……」

指を鳴らし、私の配下の下級ネクロを呼び出し、光がないくせに私を見ている肉片に眉を顰め

「食っていいわよ。ただし目障りだから奥でね」

「グルルル」

その肉片を抱えて奥のほうに消えていくネクロ達。まあ多少は糧になるでしょう、多少は……魔力も何もない人間なんて大した糧にはならないが、まあそれでもないよりはましだ

「お父さんは？」

新しいクツキーを両手で抱えているモメモノ。無論今の惨劇を見ているが、その程度で動じるのならば私と一緒に入られない。戦闘時は常にユニゾンしているのだから……私の視界を通じて、外の光景を見ているモメモノはこんな光景にはなれきっている

「もう少しだよ、もう少し待ってしようね」

モメモノの頭を撫でて、紅茶に砂糖とミルクを加える。まだ戦いは始まっていない、だがもし戦いが始まればすぐにお父様は来るだろう。それまではこうしてゆっくりとお茶会を楽しもう……

（ふふ、頑張りなさいよ。イナリ）

LV3にしては優秀だと認めてあげるけど、こうして指揮を取るの
は初めてのはず……どうなるか見物ね。私はそんな事を考えながら

紅茶を口に含んだのだった……

私はラクシユミと協力して、色々な国の軍事関係者そして政治に係する人間の元へ向かった。無論アポイトメントもないのに突然来た私に誰もが顔を顰めたが……

「篠ノ之束の研究所を見つけましたがどうしますか？」

その一言で一気にVIP扱いだ。無論証拠品を持ってきたからのこの待遇だろう

「この情報は頂いても宜しいのですか？ミス・玉藻」

私は最後に訪れた国「アメリカ」と言う国の最高軍事責任者と話をしていた。他の国はあくまで前座、メインはアメリカとドイツの2つの国。この国が一番軍事力が高いと聞いているからだ。

「そのためここに訪れましたわ。無論報酬と……少しばかりのお願いがあります」

私は人間としては玉藻と名乗っている。人間界で有名な狐の妖怪「九尾の狐」からその名前を借りている。同じ狐と言うことでなにかシンパシーも感じたしね……

「報酬のほうはこれくらいでいかがでしょう……」

差し出された小切手を見る0が9個で7が1つ……これは他の国よりも0が2つ多い……

「結構ですわ。どうもありがとうございます」

これでネクロディアシリーズの作成費用に回せる。機動時間がある程度の時間になると操縦者を取り込んでネクロ化させる擬似ISだ

「お願いとしてですが、私達の会社で開発した新作ISシリーズのテストと、私のところのIS操縦者候補を連れて行ってもらえますか？」

私がそう言うのと軍事責任者は眉を顰めて、私を見て

「ISコアには限りがあるはずですが、そのコアはどこから？」

あ、そういえばそうだったわね。ISコアは数に限りがあったのよ

ね……うつかりして忘れていたわ……

「これは試作段階なのでそこまで流通させていないのですが……」

鞆から取り出したのはISコアに似せて生成したデクスコア。無論微調整を施してISにも対応するようにしてある、まあネクロ化のおまけがあるけどね……

「これはまさか……いや、しかし……」

信じられないと言う顔をしている男を見ながらデクスコアを鞆の中に戻す。私が戻したコアをじっと見つめている男

「この試験データが欲しいのです。実用化段階になれば貴方の国に優先的に販売させていただきます。そのためにご協力願えますよね？」

その言葉に目の前の男は悩むまでもなく頷いた。ISコア1つで軍事のバランスが変わるといふこの世界でこれはかなり有効な交渉道具になりえる。暫く交渉を続け、全ての条件を私に有益な物にする事ができたので執務室を出る

「ご苦勞様でした。イナリ」

カソツクの青年……ヴオドオンがそう声をかけてくる。ヴオドオンはLV4で私よりも格上なのだが、指示を出されればそれに従うネクロだった。私の護衛役として連れて行けと言うベリト様の命で一緒に動いているが

(やりやすいのよねえ……)

アヌビスとかと違って、本当にやりやすい。それに戦闘力も高いし、態々最後まで説明しなくても私の考えている事を理解してくれる……難点は

「神の愛を布教するのは難しいですねえ……」

やれやれという感じで肩を竦めるヴオドオン。だけど肩をすくめたいのはこつちだ……私は深く溜息を吐きながら

「あんたさ？こんな中で人殺しとか止めてくれない？」

ヴオドオンの足元に転がっている腐りきった肉片。既にどろどろに解けているが、それはまだ人型を残している。ヴオドオンはネクロ化を神の奇跡と呼ぶ。これだけはどうしてもなれない

「問題ないですよ、記憶消去と結界はちゃんと使いましたから、しかし神に選ばれない人間があまりに多いのは実に悲しい」

とは言え、存在した人間の経歴を消すことは出来ないし、若干の違和感が残る。それがバレれば行方不明として捜索願が出るかもしれない。そうなると不味い事になるのだが、既に殺してしまっているのでは何も出来ない

「はいはい……好きにしてよ。もう……」

ヴオドオンの信仰心は全てネクロにある。より上位のネクロを神とし、そして自分と同類はその命を賭けて護る。これがヴオドオンだ。あとはこの歪んだ信仰心さえなければもつと良いネクロなんだけどねと苦笑しながら

「篠ノ之束の研究所へ向かうわよ。仕上げがあるからね」

人間への擬態を止めて、ネクロとしての姿、狐の耳に尻尾そして着物姿になると同時に浮かび上がる。大分時間が経ってしまった……動きの早い人間なら既に束の研究所に進軍してるかもしれない。時間はあまり残されていないはずだ

「了解です。あの人間ならば尊い神の愛を受け入れる事ができるでしょう」

尊いというか異常者だから受け入れられるんじゃない？とは思ったものの、それを言うとも私も異常者になってしまうので敢えて口にはしない「はいはい。どうでもいいから行くわよ。だけどあんたは戦闘に参加したら駄目だからね」

ヴオドオンの能力を使う上では別の世界のガイアメモリとか言うのが必要なのだが、あいつはこの世界で人間をその姿で殺しすぎた。生身ならまだしも、その姿では有名すぎるので駄目だということ……

「それでは神の愛を伝えることが出来ないではないですか!？」

「知らないわよ！ベリト様の命令なんだから従いなさい！」

ベリト様の名前を出すとむぐうと呻くヴオドオン。私はその姿を見て

「逃走者の排除はOKよ。作戦が始まれば人間が逃げるとおもうから、その排除を任せるわ」

紛れ込ませたデュラハンとディースが活動を開始すれば人間は恐らく逃げ出す。だが目撃者を生かしておけないので排除を頼むと「判りました。その中で神の愛を受け入れる事が出来る人間が存在する事を祈ります」

嬉しそうに笑うヴォドオンに好きにすれば？と声をかけ、私とヴォドオンは東の研究所へと転移した。後は成果を出してベリト様に褒めてもらうだけだが……

(守護者が来ると不味いわね。それも合わせて考えておかないと) 守護者が来れば東は連れて行かれてしまう、そうなれば作戦は失敗だ。だからそうならないように丁寧に事を進めなければ……

「……動く気配はなしと……」

私はそろそろネクロ達が東の研究所を襲う頃だと判断して、ネクロの気配を探していたのだが気配はない

「龍也さん？読みが外れたんじゃないですか？」

同じように索敵しているのはがそう告げる。ハーデスが死んでから数日。ネクロも手痛い打撃を受けたので動かないのでは？と考えるのが普通だが……私には確信があった

「いや、そろそろ仕掛けてくるはずだ」

ベエルゼは慎重に策を講じるネクロだが、電撃戦も得意とする……だからこそ普通は動かないとおもう時期に動くはずなのだ……

「ん？あれ？」

フェイトがしきりに首を傾げながらそう呟く。それを見たはやてが

「どうした？ネクロの気配でもあったんか？」

「うーん……わかんない……でも一瞬何か変な反応が……気のせいだよ」

そう笑うフェイト。私はフェイトのディスプレイを覗き込み、少し前の履歴を見る。確かに変な反応が一瞬現れたがすぐに消えている

「……嫌な予感がする。私が出るからはやて達は待機していてくれ」

気のせいと思えるだけの反応だが、何か嫌な予感がする……この感

じはどこがおかしい

「気のせいやないんか？」

「それならそれで構わない。警戒を続けてくれ」

はやてとなのはとフェイトが残っているならネクロもおいそれと攻撃を仕掛けることは出来ない。それに私1人なら隠密行動も取れる。複数で動けばネクロに発見される確率が上がるのだから

「気をつけてくださいね。もし上位ネクロがいたら危ないですからね」

「そうだよ。龍也は1人だと無茶するから……」

「見張りが必要やな」

……まあ私が無茶をするのは殆ど決まっているような物だが、ここまで言われると若干複雑な気分になる

「大丈夫だ。すぐに戻る」

1人では1人の戦い方と言うの物がある。私はそれを何年もしてきた、そしてこれが今回は必要だと判断したのだ。私を敵対している人間を助けるとなると1人の方が都合が良いと言うものだ

「そつちも気をつけろよ。誘導だと不味いからな」

これがかもし二重作戦で、束の研究所を襲っていると思わせるミスリードかもしれない。普通のネクロならそこまで手の混んだことはしないが、ベエルゼならやりかねない。何故なら私が1人で戦っていた時代を知り、そして今とはまるで異なる戦術を好んでいたことを知る数少ないネクロだからだ……何重にも策を講じて私の動きを束縛してくる可能性は充分に考えられる……となると1人で動くのは得策ではないかもしれない

(少し寄り道していくか)

なのはやフェイトを連れていくことが出来ない判断したのは、I S学園の護りの事もあるが……あの3人に自分達と同じ人間を傷つけさせる。それをさせたくないと言う親心？という物もある。それにあの3人は隠密行動に向いている性格ではない。ここはやはり専門の人間の力を借りるべきだろう

「ツバキさん。アイアス達3人から誰か1人。私に預けてもらえない

だろうか？」

私の言葉にツバキさんは少しだけ眉を顰め、作業を中断して

「束の研究所に連れて行くの？」

「ええ。隠密行動にたけた人材が良いですね」

正直な話。なのはとフェイトも派手な戦闘を得意とする。隠密行動は極めて苦手なのだ。はやては運動神経に若干不安が残るので留守番だ。

「……フレリアかシエルニカが良いわ。アイアスはスナイパーだからそういう行動には向いてないから、私から話を通しておくからログハウスに迎えに行ってくれる？」

思ったよりもすんなりOKが出たな。何か裏があるのか？私がそんな事を考えていると後ろから

「ワタシも着いて行く。束はネクロと通じていた、ワタシの求める情報があるかもしれない」

ユウリの気配はしていたが、まさかついてくると言い出すとは……私は溜息を吐きながら

「ユウリの同行が条件なんですね？」

「その通り。ユウリのスキルは知ってるでしょ？足手纏いにはならないわ」

本当なら駄目だと言いたいが、今回のような相手の出方が判らない上に。短期決戦を目的とする以上……隠密行動と破壊工作に長けた人間は必要だ。それにユウリならあのラボからデータを抜き出すことも出来る……ユウリを連れて行く上で発生するリスクとリターンを考え

「判った、準備を急げ。時間がない」

「判った。ログハウスで合流しよう」

待機状態のアマノミカゲを持ってラボを出て行くユウリ。私は特に準備する物もないので、ログハウスに向かおうとすると

「ユウリには過去を振り切る切っ掛けが必要だわ。今回は良い機会だと思おうの」

確かに強烈な過去を振り切るには、それ相応の経験が必要になるだ

ろう。だがネクロトの実戦ではそれはかなり厳しい条件だ……私はツバキさんの言葉に返事を返す事無くラボを後にしてログハウスへ向かいながら

(鬼が出るか、蛇がでるか……)

ユウリが来ると知ればあのネクロが来るかもしれない、その可能性は極めて高いが、ユウリが過去を振り切るためには必要なことなのかもしれない。その面ではツバキさんの意見には賛成だ、だが正直不安な面もある。普段冷静なユウリが激情する可能性もあるのだから……だが既に賽は投げられた。今更引き返すことなどで気はしない「今回は私が同行する。よろしく頼む」

ログハウスで待っていたのはフレイアだった。冷静と状況判断能力に長けていると聞いている。この場面では一番力を借りたいタイプだ

「ワタシも準備完了だ」

ユウリがログハウスに来た所でステルスで探知できないようにしてから、私はIS学園を後にした。かりに束が襲われていたとして、私を信じるかどうか?など問題はかなり残っているが、それでもなお束がネクロ化する可能性を考えれば、救出するだけの価値はある。協力してくれないのなら申し訳ないが終わるまで軟禁していれば良い。私はそんな事を考えながら束の研究所がある山の中へと向かうのだった……

そして様々な思惑が交じり合う場所で終焉への物語の幕が上がるのだった……

第121話へ続く

第121話

第121話

束の研究所に用意されたセンサーの数々が次々と接近してくる人間の存在を教える

「嘘!?なんでこのラボがわかったの!？」

絶叫しながらPCを確認する束。時間を確認すると丁度ネルヴィオが言っていた2時間だ。まさかここまで正確だと思ってなかったので思わず苦笑しながら

「束。私が出て逃げる時間を稼ぐ。脱出の準備をするんだ」

「だ、大丈夫だよ!アズマちゃん。この束さんのラボはそう簡単には落ちないよ!」

えっへんと胸を張る束。確かに普通の人間相手なら崩れるわけがない、これだけの防衛設備があるのだから人間相手なら何の心配もない。だが

「念の為だ。大丈夫そうなら直ぐに戻る。だが念には念を入れておくだけだ」

あくまで念の為と繰り返し言う束はあんまり納得していないという顔はしたが、何とか納得してくれたようで

「判ったよ。念の為に開発中の紅椿とそのほかのデータを纏めておくよ。だけど念の為だけだよ!束さんのラボはこの程度で陥落しないんだから!!」

自分用のラボに走っていく束を見送り、近くで待っていたクロエに「後の手はずは判っているな?」

「……はい」

悲しそうに頷くクロエの前にしゃがみ込み、私のほうでも纏めておいたUSBメモリをその小さい手に握らせて

「ここに私の意志を残しておく、多分束は怒るだろうし、誰の話も聞かないだろう。だけど、もしかしたら聞いてくれるかもしれないだろう?」

遺言ならばもしかすれば束の心に届くかもしれない。そんな淡い期待を持つ

「あ、アズマア……アズマも一緒に隠れよう？ね？」

クロエがその手で私のスカートを握り締める。私も出来る事ならそうしたい、だけど私は私の進む道を決めた。もう引き返すことは出来ない、ゆつくりとクロエの手を放し

「それはできない。どの道私はもう長くない。もう話したな？私の存在を」

どの道私は長く生きれる身体ではない、束の手術を何回も受けたことで辛うじてここまで生きながらえてきたが

「自分でも判るんだ、もう限界だとな」

自分の中で自分が壊れていく感覚がする。正直な話、もう既に自覚症状もある。吐血に記憶の混濁、それに意識の喪失……

「作られた身体では……まがい物の身体でここまで持っただけでも御の字なんだ」

私は束の遺伝子から作られたクローン。無理に性能を上げられたことで死に掛け、廃棄された所を束に助けられた。だから私は最後まで束のために戦い、そして命を賭ける事が出来る

「アズマ……」

ぽろぽろと涙を流すクロエ。その涙を指で掬いその小さい身体を抱きしめて

「私はもう居なくなるが、頑張れ。大丈夫だ……全てを託すことが出来る人間はいる」

八神龍也。あいつが来てくれればきつと束もクロエも無事に生還できる。そこまで時間を稼ぐ事……それが私に出来る事だ

「だからクロエ。後は任せただ、束を頼む」

束は確かに優秀だが、あまりに精神が幼すぎる。誰かがそばに居てやらないと駄目だ、だからクロエにその役目を託す

「アズマ……アズマ……頑張って」

涙を拭いながら言うクロエノ頭を撫でて、束のラボのほうへ背中を押してやる。名残惜しそうに1度だけ振り返ったクロエだが、直ぐに

前を向いて歩き出した

「さてと私もいくか」

私の研究所に用意してある。魔力発生装置の電源を入れる。後は時間が経てば魔力を放つだろう、これで八神龍也はここに来てくれる筈だ。エネルギーを最大までチャージし、サブタンクを積んだブラッドバニーの装甲を撫でる

「これで最後だが最後までよろしく頼むぞ」

ISスーツは服の下に着こんである。エプロンドレスを脱ぎすてブラッドバニーに背中を預ける。素早く起動していくブラッドバニーから周囲の除法が流れ込んでくる

(画像リンク開始、敵熱源の索敵開始)

このラボの防衛システムとブラッドバニーの回路をリンクさせ、そのままリフトアップし、研究所の外に出る

(やはりイオスカ、しかも拠点制圧用の)

正式な記録を残すわけに行かないのでISが来ることはないと思っていたが、やはりイオスカだったか……ISと比べればお粗末しか言いようがないが、戦争の道具としては充分だ。

(まずは先制攻撃だな)

向こうはこつちを殺す気出ている、私とブラッドバニーに対戦車ロケット弾ジャベリンを叩き込んできた。当然それはラボの防衛設備のガトリングで迎撃されたが

「殺しに来た相手に手加減する理由はない」

まずはこちらにも本気だと理解させるために、アームドベースに搭載したミサイルポット「ハイドロミサイルランチャー」を射出する。これはある程度進むと炸裂し小型のホーミングミサイルを放つ、ISなら牽制程度だが、イオスカ相手なら充分致命傷になるだろう。だがこの初弾はあえて外す、これは最後通告だ。ここから先は本気で攻撃するという意思表示でもある

(あとは八神龍也が来るまでネクロディアが来ない事を祈るだけだな)

操縦者をネクロ化させる機構を搭載した。ネクロ製のISが来れ

ばさすがの私も不利になる。そこまで向こうが追い詰められる前に、八神龍也が来てくれれば良いのだが……私は防衛プログラムを全て起動させ、接近してきている人間全てに標準を合わせる。どうせここに居るのは切り捨てられた軍人達だろう、生き残っても国から処罰されるのだからここで殺してやるのが情けと言うものだ

「先に冥府へ行け。文句はそこで聞いてやる」

どうせ私も死にあいつらと同じ場所に行く、私が殺すのだからきつと同じ場所に落ちるだろう。だから文句はそこで聞いてやると呟き、トリガーを引く……ブラッドバニーとリンクしている防衛設備の全ての火器から焰が奔り、人間の悲鳴と苦痛の絶叫が周囲に木霊し始めるのだった……

東の研究所に攻め込ませてから20分……私は手にしていた懐中時計を懐に収め

「どうみますか？イナリ」

小声でそう尋ねる。イナリは閉じていた目を開き

(予想外よ)

周りに人間がいないことを確認してからイナリは手を広げ、偵察に飛ばしていた式神を回収する

「どういうことになってるのですか？」

私には遠見をするような技術はないので、イナリから聞くしかない。イナリは不機嫌そうに式神の型紙を破きながら

「要塞型のISで近づいてくる相手は片っ端から狙撃してるわ。これじゃあ人間は役に立たない」

シナリオでは人間に攻め込ませる予定だったのに。その人間が攻め込むことが出来ない、これでは人間に憎悪を持たせることが出来ない……指を噛み締めるイナリに

(無能な指揮官のせいでしょうね)

この周囲に来ている各国の軍人が指揮を取っているらしいがどれも有効打にはなりえない。人間とは愚かとしか言いようがないですね。私は溜息を吐き

「イオスを1つ私に回してくれませんか？」

この場の指揮を取っていたアメリカの軍人に頼み込む。特別なオプザーバーとしてこの場に招かれているのだからこれくらいの内は通るはずだ

「……ミスタにイオスの稼動経験は？」

「ありませんが似たようなパワースーツの扱いはありますのでご心配なく。このままでは他の国に出し抜かれますよ」

この言葉に決心したのかハンガーを用意するといってコンテナのほうに歩き出す。私はイナリに

「私がアズマにダメージを与えます。私の能力を使えば容易い事」

腐敗の教義を間逃れた人間はいない。これで体内を攻撃すればアズマは嫌でもラボに引つ込むだろう。

「それでネクロデリアを出せばいいのね？」

イナリの確認の言葉に首を振り。私は周囲を見て

「今のうちにこの周囲の軍人を全て支配下に置いて下さい。どうせ処分される存在なのですから問題ないでしょう」

どの国もこの襲撃作戦に参加した人間は排除する予定らしいのでここで排除して、操り人形にしても問題ない

「……派手に暴れて頂戴、その隙にやるわ」

札を指の間に挟むイナリ。能力は高いのだが、札と言う媒介を必要とするイナリは直接戦闘には向かない。だがこのような策謀戦には強い、だからこそこの場の指揮を任されたのだろう

「はい。よろしくお願いしますね」

イナリと打ち合わせを済ませたところで軍人に呼ばれ、そこでイオスに乗り込む

(出力はまあまあですか。感じは鈍いですけど問題なしと)

この程度でどうこうなっていたらLV4にまで進化できていない。大丈夫ですか？と尋ねて来る軍人に

「問題ないです。ハッチを開けてください」

ハッチが開けられると同時にランドローラーの出力を全開にして密林を強行突破する。出力が少し弱いので魔力でブーストを掛けて

強引に弾幕の中に身を投じる

「この程度ならば避けることなど容易い」

そもそもネクロに重火器なんて通用しない、AMF弾ならまだしも大量生産の鉛玉など恐れるまでもない、イオスの前面のシールドで充分だ。弾幕の雨を強引に突っ切りアズマの前に飛び出す

「お前は!？」

私の顔を見て眉を顰めるアズマ。やはり私の事を知っていましたか、だけでもう遅い

「こうしてお会いできて喜ばしい。早速で悪いですが、引っ込んでもらいましょうか」

左手に腐敗の教義の紫のオーラを纏わせ、一気に突っ込む。ほんのかすり傷でも致命傷を与えることが出来る、それで全てが終わ

「くっさせるか!!」

アズマは私の能力を知っていたらしく、間合いを詰めさせないように両手を向け。そこからエネルギー弾を打ち込んでくるが

「無駄ですよ」

腐敗の狭義に触れたとたんそのエネルギー弾は消失する。どんな物でも腐敗させるそれは実体のないエネルギーでも代わりはない

「貫きました」

間合いを詰め、多少被弾するがそれを無視してアズマのISの左肩を穿つ。凄まじい速度で色を失い、錆びていく装甲。これで終わり

「甘いな！お前がくることは考えていた!!」

金属音と共に私の破壊した装甲がパージされる。だがそれを見て嫌な予感としてイオスをバックさせようとした瞬間

「ここで墜ちろ!!」

アズマが指を鳴らすと同時にパージされた装甲が爆発する

「うぐああ!？」

至近距離の爆発。そしてイオスと言うガラクタが更に爆発し、私は大きく弾き飛ばされ森林の中へと弾き飛ばされた

「くっ……やってくれますね」

即座に態勢を立て直し地面に着地する。あのガラクタがなければ

あの爆発も回避できたというのに……これだから人間の振りは疲れます……私は深く溜息を吐きながらガラクタの残骸を振りほどき

「さてとですがこれで最低限の仕事はしましたね」

退却していくアズマ。完全には決まらなかったが、腐敗の教義の武器はその感染速度と範囲にある、間違いなくアズマは腐敗の教義に感染している

（あとはそれとなくラボに紛れ込みますか）

雪崩のように踏み込んでいく人間の中に紛れ。私も束とやらの研究所の中に足を踏み入れた、当初の予定と折り紛れ込んでいるティースとネクロディアを展開している人間を確認し、これでこの研究所が落ちることは間違いない。

（私は私の出来ることを始めますか）

どこの国も自分の国に束を引き入れようと考えている成果、人間同士で殺し合いをしている。そして

「へたくそ。どこを狙っているのですか？」

肩に鉛玉がめり込む。私も敵だと判断したのでしよう、あながち間違ではないですけどね、ただし束とお前たち両方の敵ですがね

『プロヴィデンス』

カソツクからUSBメモリを取り出しボタンを押す。私から襲うことはないですが、襲われれば反撃する。それは至極当然のこと
「変身」

骸骨をあしらった甲冑と王冠を思わせる仮面。そして全身から溢れる圧倒的な魔力

「その命。神に捧げなさい」

ここからは私の好きにやります。人間でネクロになるのなた迎え入れ、そうでなければベルゼ様の糧として持ち帰る。私の姿を見て逃げ出す人間達を見て小さく笑みを零し

「さあお覚悟を。殺すということは殺される覚悟も当然あってしかるべき。今更逃げるなど許しはしませんよ」

銃剣ルシファアを腰のホルスターから抜き放ち、逃げ出す人間達の後を追いかけて、私はラボの中をゆつくりと歩みだしたのだった……

「まさかあいつが出てくるとは……はー……はーッ!!」

荒い呼吸を何度も深呼吸をして強引に整える。即座にアーマーをパージしたが

(腐り始めている……ぐうっ……)

左肩が徐々に黒くなり腐った嫌な匂いが漂う。私は服を破りそれを口に詰め込み

「ふーっ!!!」

マインゴーシュを呼び出し、腐り始めていた肩の肉を切り離す

「うううっ!!!」

そのあまりの激痛に思わず絶叫しかけるのを噛み締めた布で我慢し、更にブースターの熱で過熱し傷跡に押し当てる

「ぎゅぎゅああああ、あがっーうぐああああ!!!」

流石にこの痛みを我慢することが出来ずそう叫ぶ。肉の焼ける不快な匂いに眉を顰める

「はっ……はっ!はっ……ふー」

切り離れた肉は瞬く間に腐り消失した、焼いた傷跡は出血も止まり腐っていく気配もない。体力はかなり消耗したが、これでよかつたはずだ

「やはり思い切りは……大事だな」

あのまま躊躇っていれば腕を失っていた。この場合はこれが最善だったわけだ、だが予想よりも数段早く人間がラボの中に足を踏み入れてきた。幸いにもこの通りを護っていれば束の所に行くことは出来ない。そして一本も道だから奇襲も出来ない、だが私が撤退すれば敵を束の所に案内してしまう最悪の場所だ。早くこの場を離れなければ

(損傷度は68%。武装消耗率は27%)

弾薬の消耗が少ない、これならまだ戦える。アームドベースの弾薬はまだたっぷり残っている。それにこのラボの地形を理解している私にとっては有利に戦える場所に陣取ること出来る。一番近くの

格納庫で弾薬とSEを補給して、その先の十字路に陣取れば時間を稼げる

(いくか)

まだ八神龍也が来る気配はない。それまでなんとかしても持ち堪えなければならぬ、それに武装の切り替えもしなければこのままではネクロとの戦闘は到底出来ないだろう。あくまで今装備しているのは対イオスと人間用のものだ。ここからはネクロ戦を考慮したAMF弾に換装しなければ勝機はない。私は一番近くの格納庫に入り、装備の変更と新入経路を分析し、待ち構える場所を考え始めた……。僅かながらにも魔力を発生させる機械は稼動している。八神龍也が来る可能性は充分にある……。それまで持ち堪える事ができれば私の勝ちだ……

だがアズマは知らない。既に龍也達はこのラボの近くにまで来ていたのだが

「グルルルル」

「キシヤアアアッ!!」

狼がISを展開したようなネクロに加え、神話のケルベロスと同じく三つ首のネクロ……

「やれやれ、まさかこんなのがいるとは予想外だ」

「ワタシも知らなかった」

予想だにしないネクロの奇襲を受け、攻め込むことが出来ずにいた。無理に突っ切れることは出来るが、狼の外見から考え機動力があると推測した龍也達は無理に突破するのは危険だと判断し、そこで迎え撃つことにしたのだ

「使えフレイア」

唯一AMF加工を施された武器を搭載していないフレイアに投影した武器を貸し与える龍也、一瞬だけ怪訝そうな顔をしたフレイアだが使い慣れた西洋剣と言うことで直ぐに構えなおす、そしてそれと同じ

「ギャオオオッ!!」

雄叫びと共に狼のネクロが群れとなり龍也達に襲い掛かるのだつた……龍也達を知る由もないが、このネクロに与えられた使命は1つだけ、龍也達をこの場に足止めすること、そしてこの近くには邪悪な笑みを浮かべる女性。ネルヴィオだ、ネクロと戦う龍也を見て心底嬉しいという顔をしながら

「ふふ、お父さん。やーと会えたね」

ネルヴィオが潜んでいるという事を龍也達は知らないのだった

……

第122話に続く

第122話

第122話

本国からの指示で篠ノ野束のラボに侵入し、篠ノ野束を探しているのだが

「ちっーさすがはISの開発者の秘密ラボだな」

あちこちから銃器が姿を見せ狙撃してくるし、センサー製の地雷で既に3人死んでいる

「ジャック。先行してくれ」

生身の俺達が先に進むのは危険になってきた。篠ノ野束のラボの場所を教えてくれたという女性が提供してくれたIS。ネクロディアを纏っているジャックに声をかける。彼女が展開しているISを見て俺の脳裏に浮かぶのは、本国が作成したあるIS……暴走事件を起こして凍結処分になった……銀の福音の姿だ

(銀の福音に似ているのは何故だろうか)

イスラエルと共同で作った銀の福音に似ている、そのISに首を傾げる。だが性能は銀の福音よりも上なので、外見が似ているのは偶然だろう

「了解。少し下がって」

4枚の翼からエネルギーを発生させて進んでいくジャック。絶対防御のおかげか、防衛装置のレーザーや地雷も完全に無効化している。これで俺達も先に進む事ができる

「行くぞ。時間がないからな」

他の国も捕獲するために動いている。ここから先は時間との勝負だ、それに……

(他の国にもネクロディアを渡しているようだしな)

あの玉藻と名乗る女は相当な狸のようだ。稼動データを取りたいと言っていたが、まさか他の国も渡しているとはな……性能が同じなら決めるのは操縦者の腕、元々ナターシャと銀の福音の正操縦者の座を争っていたジャックの錬度に勝っているわけがないのだから

「イエッサー」

敬礼して携帯用のアームシールドと銃器を手に走っていく隊員を見ながら、俺も広いラボを走る

(なにか嫌な感じだ)

作戦は何の問題もなく遂行できている。俺達アメリカがかなり深い所まで進んでいるからだ……だが何といえはいいのか判らないが

嫌な予感がする。

(無事に戻ればいいが……)

俺達は言うならば存在しない事になっている軍人だ。戸籍も何もなく、社会的にはもう死人と同じ扱いになっている。だから死んでも本国の腹が痛む事はない、悪く言えば使い捨てとも言える。だが俺達はそんな戦場を幾つも乗り越えてここまで来た

(今回も無事に生き延びてやる！)

そして本国の地で死んだ仲間の墓を作るんだ。誰も知らなくてもいい、俺達が知っていればそれでいいのだから

「急ぐぞー！向こうも動いているからな」

先ほどまで1人で多数の襲撃者を退けていたIS操縦者の事もあ。恐らく篠ノ野束の護衛であり、専用IS持ちなのだろう。EOSの特攻で後退していたが、既に10分近く立っている。確実に態勢を立て直しているはずだ、防衛線を張られるときつくくなる

「了解！派手にいくわよ!!!」

4枚の翼からエネルギー弾と両手のスタンナックルで防衛の機械を粉碎していくジャック。その楽しい背中に笑みを零していると吹き抜けに出る。そして強烈な殺気を感じて

「来るぞー！散会ー！」

そう指示を出して背負っていたハンドキャノンを構える。特殊弾だからISにもある程度のダメージを与える事が出来る一品だ

「……」

声も無く俺たちを見下ろしているネクロディア。どうやら俺達が一番乗りじゃなかったみたいだな。

「貴様達はここで死ぬね！」

挨拶代わりに投げ込まれた手榴弾が戦いの合図となり、重火器の弾丸が同時に放たれたのだった……

(AMF弾の装填完了。装甲の仮修復も済んだ……)

障壁で特定の通路を塞いだので敵は全て私の前に来る筈だ。その証拠にブラッドバニーのセンサーに熱源反応が映っている

「そろそろ行くか」

僅かながらに体力も回復した。SEの補充と弾薬の補給も済んだ……あとは八神龍也が来るまで時間を稼げばいい

(もう少しで発動するな。それまでは持ち堪えるだろう)

魔力を発生させる機械の充填率は65%まで上がっている。予定より時間が掛かっているが、まあ良いだろう。

(ん？熱源が減少しているだ？)

こちらに向かっていた熱源は全部で12。モニターでも確認していたので間違いない。なのに今はドンドン熱源が減っている

「嫌な予感がする」

同時打ちで減ったと考えるのが普通だが、第六感とでも言えばいいのだろうか？とてつもない嫌な予感がする。AMF弾を搭載したハンドガンを両手に持ち、アームドベースのガトリングキャノンをいつでも撃てる様に準備し格納庫から出て十字路に出る。そしてむせ返る血の匂いに眉を顰めた

(何があったんだ)

散乱している人間の肉片と臓器……普通の戦闘の後ではない……まさかネクロか!?周囲を警戒しながら、ISのハイパーセンサーを頼りにこの惨劇を起こしたであろうネクロを探す……だが……

(反応がない。どこから来るんだ)

隔壁は下ろしてきた。私も逃げることはできないが、その代わりネクロも向こう側に行く事は出来ない。ここさえ護り切れれば束とクロエは無事だ……向こうに行くにはここを通るしかないから、ここで待ち構えていれば向こうから姿を見せるはずだ。うるさいまでに音を立てる心臓の音……そして額を流れる冷や汗……そして汗が地面

に落ちた瞬間。金属の床を吹き飛ばしネクロが姿を見せた

「ウルオアアアアアアアアアアアッ!!!」

私を睨んで咆哮を上げるネクロ。その姿は僅かに人型をしていたが、獣同然の姿をしていた……どす黒い身体の後ろに方に見える金髪を見て

(操縦者を取り込んだのか!?)

まさかと思うが、そのネクロはISのパーツのような物を纏っている所を見るとまず間違いない

「くっ、まさかこんなのが相手とはな」

ただのネクロ相手なら大丈夫だと思っていたが、ISの特製を併せ持つネクロ……しかも敵は2体とかなり不利な条件が揃っている

「ルルルルル」

唸り声を上げながら飛び掛るタイミングを計っているネクロ。こういう場合はやはり様子見で威嚇射撃が定石なのだが……

(向こうの出方が判らない以上。下手に攻撃して刺激するのは良くない、ならば)

両手のハンドガンを腰の装甲に格納し、アームドベースのガトリングキヤノンに手を伸ばし構える

「!キツシャアアアアアアアアアア!!!」

私の行動を見て攻撃に出るネクロ。それに合わせる様にガトリングのトリガーを引き

「特注の弾頭だ。持って行けッ!!!」

背部のハイドロミサイルランチャーの弾頭も長いこと時間を掛けて作った、AMF弾の弾頭。これならばダメージを与える事が出来る。無論ガトリングの弾頭もAMF弾だ。

「!?!」

自分達のバリアを貫き炸裂したガトリングとミサイルランチャーの攻撃で吹っ飛ばされるネクロ。ミサイルの威力のせいでラボの壁は一部碎けたが、仕方ない……それにこのラボは廃棄する事になるのだから気にする事もないだろう

「お、オアアアア」

ゆっくりと再生を始めるネクロ。やはり魔力でないとダメージを与える事は難しいか、だが

「回復させる隙は与えん!!!」

全砲門を開く、確かに致命傷を与えるのは難しいだろう。だがこうしてダメージを与え続けられれば、そのうち回復が間に合わなくなる筈だ。

(3発しか使えないが、使うならいまだ)

左右の肩にマウントしてある長距離狙撃砲「グランチャードカノン」の射撃姿勢に入る、これは直撃すれば絶対防御でさえ貫通し、縦者を殺す、一撃必殺のキャノンだが。その反面姿勢制御と弾道予測が難しく、しかも弾も1つの砲塔に3発しか装填できない、そして左右が連動しているので3回しか使用できない

(ターゲットインサイト……照準。弾道予測……良し)

射撃姿勢に入る間もミサイルランチャーとガトリングを放ち続け、ネクロの回復と動きを封じつつ照準を完璧に合わせる

「行けッ!!!」

ISの防御があつてもなお全身に響く衝撃とその爆音。そして

「ギギヤアアアアア!?!」

胴体を打ち抜かれ苦悶の悲鳴共に消滅するネクロ。そして碎け散るラボの天井。大きく息を吐き、軽く咳き込むと口の中に血の味がする。凄まじい衝撃で中がいくつかがやられたみたいだな……だがこれでひとまずは……

「そうそう簡単には行かないか」

ぼそりと呟くと同時に今グランチャードカノンで破壊したラボの天上から、更に2体のネクロが降下してくる、侵入者が使っていたISは全部で8機。残り6機……当然だがグランチャードカノンの弾は足りない

(早く来てくれよ。いつまでも持たないからな)

八神龍也来るまで持つかどうか、かなりギリギリのラインだ……少しだけ不安な気持ちになり、心の中でそう呟き。紅い目を爛々と輝かせ私を睨んでいるネクロに再びガトリングの照準を合わせるのだっ

た……

凄まじい轟音と共に山の一部が吹き飛ぶ。間違いなくラボでは激しい戦いが行われている証拠だ

(ちいー完全に出遅れた！)

心の中で舌打ちする。私達がこの場に来たときはまだ軍人がラボに踏み込んでいないようだったが、EOSの突貫でアズマが後退した事で悪い流れになっている

(どうする。この場をどうやって切り抜ける)

どんだん姿を見せる獣型ネクロ。攻撃力は低い上に知性が無い、しかしその代わり回復能力に特化している。倒しても倒しても完全に倒しきる前に、波状攻撃で距離を取るとその隙にダメージを与えたネクロが回復してしまう。そして広域殲滅を使おうにもユウリとフレシアがいるので使う事もできない……

(私の戦い方を熟知している？何者だ)

私の戦術や戦法を完全に熟知している……私をこの場に足止めするのが目的だろうか……

「龍也。どうする？ワタシとフレシアが先行するか？」

唸り声を上げながら包囲網を作っている獣型ネクロを未ながら尋ねて来るユウリ。確かにそれも1つの手だが……

「戦力を分断するのは危険ではないか？敵はネクロだけではないのだから」

フレシアがマウントしていたマシンガンでネクロを迎撃しながら呟く。確かに……その可能性を考えるとユウリとフレシアを先行させるのは危険だ……ラボの中にネクロがいる可能性を考えると……

「……強行突破する。私の後ろにつけ」

ここで戦力の分断は無謀だ。そしてリスクが高すぎる……ならばユウリとフレシアと共にラボに強行突破するのが得策だ

「強行突破……この状況でか？」

周囲にいるネクロの数は10体以上……普通は強行突破できる状況ではない、獣型ネクロだから機動力もある。普通は突破できないだ

ろうが……

「見てみる。これだけ話しているのに襲い掛かってこない。だが足を少し前に踏み出すと」

「グルルルおおオオオオッ!!!」

ゆっくり足を踏み出す。すると周囲を窺っていた一体のネクロが唸り声を上げてネクロが飛び掛ってくる。そのネクロの顎を蹴り上げると同時に魔力弾を叩き込み、そのネクロを消滅させる

「なるほど……そう言うことか」

「リスクはあるが……行けるか」

ユウリとフレイアも理解したようだ。話している隙に攻撃してこない。恐らく与えられた命令はこの場に私達を足止めすること……だから私達が動かなければ、向こうも動いてこない……ならばあのネクロをラボの中に入れて、混乱に乗じてアズマと合流すればいい
「行くぞっ!!!」

一瞬包囲網が緩んだ瞬間私はフラッシュムーブ、ユウリとフレイアは瞬時加速でその包囲網を抜ける

「ウオオオオオオッ!!!」

雄叫びと共に追いかけてくるネクロの気配を感じながらラボの中に進入し

「止まれ! ユウリ、フレイア!」

私の怒声に停止するユウリとフレイア。それと同時に結界を作りだす、追いかけてきたネクロは私達の姿と魔力を確認できず困惑していたが

「ひい!? 化け物!?!」

引き返して来たであろう軍人を見ると本能に従いその人間を追いかけていく。それを確認してから結界を解除し

「ISを解除しろ、反応で見つかるぞ」

どうもここを襲撃しているネクロは魔力反応などに過剰に反応するタイプのようだ、侵入工作をするなら多少の不安は残るが生身の方が都合がいい、コートの中から武器と緊急用の結界発生装置の準備をしていると

「どうかしたか？」

私を見つめていたユウリとフレイアの視線に気付きそう尋ねる。少し考えてからフレイアが私を見て

「お前があんな事をするとは思わなかった。助けなくて良かったのか？」

さっきの軍人のことを言っているのか……私は苦笑しながらユウリとフレイアを見て

「私は善人じゃあない、人を遅いに来た人間まで助ける道理はない。因果応報だ」

ここにいるということは束を殺人または誘拐しに来た存在だ。そんな人間を助ける道理はない

「はやて達を連れて来なかったのはそう言う面を見せたくないからか？」

「さあ？どうとでも取ればいい、1ついえるのは私は正義の味方なんかじゃないって事だな。さてとでは行くか」

AMF加工を施したブレードと弾丸をセットしたハンドガンをユウリとフレイアに手渡し、私は当然魔法と投影をメインにする

「散会するんじゃないのか？」

まあ普通なら散会して効率よく探すのがベストなのだが、今回は事情が違う

「アズマはネクロの脅威を知っている、束の近くに陣取って防衛している事だろう。ならば態々散会する理由はないわけだ」

態々散会して各個撃破される可能性を増やす必要はない。

「では私とユウリを同行させた理由は？」

フレイアの問い掛けは最もだ、場所が判っているんだから私1人でも大丈夫と思うのは当然だ。視線でユウリとフレイアを促しラボの奥へと進みながら

「これだけの施設。防衛設備も完璧だろう、となれば人手は多いほうがいい」

軍人達もおそらく情報の回収班もいるだろう、その点私たちは3人であり、束の救出メインだ。束自身を救出できれば全て事足りるが

「この様子では進むのも楽ではないだろうからな」

シャッターに加えて、無数の防衛設備が私達に照準を合わせている。ここを越えていくには1人ではリスクがあるのだ

「露払いは私がする、ユウリとフレイヤは防衛設備の突破を頼む」

私でも出来ない事はないが、敵は防衛設備だけではない

「グルルルル」

「キキキ」

影から姿を見せるLV1とデクス。それを相手に防衛プログラムの突破なんて器用な真似はできない

「任された。5分で済ませる、フレイアハッキングツールを貸してくれ、お前はD-Fの障壁を頼む。ワタシはA-Cを解除する」

「お前に指示を出させるのは面白くないが、了解した」

私の背後で防衛プログラムの解除を始めたユウリとフレイアを背にして

「かかって来い、貴様ら如きに討ち取れるほど私の首は安くはないぞ」

「「「キツシャアアアアツ!!!」」」

咆哮と共に襲い掛かってくるデクス目掛け、手にしていた剣を振るうのだった……

「あーあ、お父様行っちゃったよ。どうする?モモメノ」

結界の中でお父様の戦いを見ていたんだけど、強行突破でラボの中に突入されてしまった。うーん、もう少し見ていかっただけだなあ

……

「……追いかける?」

「それもどうかなあ?」

イナリがうるさいだろうし、お父様に見つかってしまうのも不味いんだよね。いや、むしろお父様じゃなくて私の方が不味いんだけど

……

(感情が爆発しそうになるから)

見ているだけなら我慢できるが、顔を見合わせてなお平常心でいられる自信がないのでそれもNGだ……

「ワタシがいこうか？」

突然聞こえた声に振り返る。振り返るとそこには私の部屋で寝ている筈のセリナの姿があった

「セリナ？ どうしてここに？」

調整中だったはずだから出てこれるはずがないのに、どうしてここにいるのか判らず尋ねる。セリナはラボを見つめて

「ユウリ……ユウリがいる」

ぼそぼそと呟くセリナ。そっか……ユウリが来ているのに気付いて本能的に出てきてしまったと言うことね。セリナはユウリともう1度話をしたい、その一念でネックロになったと言えるのだから

「いいよ、セリナ。行っておいでよ」

セリナと私は同じ、だからセリナの気持ちは痛いほど判る。私はこれ以上自分の立場を悪くすることも出来ないでここで待つが、セリナは関係ない。セリナは自分の思いで動いていい

「イイの？」

「良いよ。行っておいで」

嬉しそうに笑ってラボのほうへ飛んでいくセリナの背中を見つめつつ、隣に座っていたモモメノを抱っこして

「早くお父様と一緒にいたいね」

「……うん」

会いたいけど……会いたくない

好きだけど……大嫌い

憎んでるけど……愛してる

この複雑な気持ちはネックロになったせいなのか、それとも私が元から持って来た気持ちなのか？それが私には判らない、だからもしお父様に会うとしたら

(この気持ちは何なのか整理がついてから……)

出会ったとして、気持ちを抑えることができるのか？それともネックロの本能に飲まれてお父様を殺そうとしてしまうのか？それとも私の気持ちは勝り、お父様とゆっくり話が出来るのか？そのどちらになつてしまうのか？それが判らない、だから気持ちは整理がつくまで

は

(見ているだけで良い……)

この狂おしいまでの愛おしさが憎しみから来る物なのか？それとも純粹にお父様を愛しているからなのか？それが判るまでは……私
は見ているだけで良い……それまではお父様に会うのは我慢できる
から……

123話に続く

123話

123話

アズマが1人で侵入者と戦い始めて既に1時間……普通の人間相手なら何の心配もないが、ネクロが相手と言うことを考えると不安になるし、心配になる……

「もうそろそろアズマちゃんも帰ってくるかな♪」

楽しそうに鼻歌を歌いながらプログラムを組んでいる束様。束様はまだネクロが味方だと思っっているようですが

(私はそうは思えません)

束様に意見をするつもりは在りませんが、それでもネクロと言う存在は危険で邪悪だと思う。人間を殺し、その魂や遺体から生まれる悪性の生物。とてもまともとは思えません……

「クロエちゃん、アズマちゃん疲れて帰ってくると思うから、甘いココアでも用意してあげて、勿論束さんもね」

ニコニコと笑いながら言う束様に頷き研究室を出る。3重の障壁で護られているからネクロでも侵入できないだろう。それにアズマがこのエリアの前で陣取っているのだからネクロが侵入できるわけがない……

「アズマ……」

障壁のせいで音も衝撃も何もかもが聞こえない。今アズマがどんな状況なのか判らない……まだ無事なのか、それとも……

「大丈夫。アズマはきつと大丈夫」

自分に言い聞かせるように呟き、束様に頼まれたココアを入れに行く。ポケットの中にあるアズマから託されたUSBメモリ……

(帰ってきて欲しい)

アズマ1人では無理かもしれないけど、八神龍也が来てくれたのなら、もしかすればアズマが助かる可能性もある。だから私は思わず信じてもない神にアズマの無事を祈るのだった……

私とユウリでラボに下ろされた隔壁を解除し、先に進んでいるのだが……

「進めば進むほど酷いな」

思わずハンカチで鼻と口を塞ぐ、私は元は傭兵だから人間の死体になれているつもりだったが、これは酷い。獣に食い殺された後に加えて残った肉片が完全に腐敗している。こんな短時間で腐敗するわけがないので、間違いなくネクロの攻撃だろう

「完全に腐敗している。ヴォドオンだな……奴がいる」

ヴォドオン……確か腐敗させる能力を持つネクロだったはずだ。臨海学校とIS学園の襲撃時に戦ったと聞いている

「しかし奴がいるなら直ぐに襲ってくるんじゃないのか？ 神の教えと言っているんだらう？ ネクロ化を」

「狂っている奴の考えている事は判らん」

身も蓋もないが確かにその通りだ。狂っている人間の考えでさえ判らないというのに、狂っている化け物の考えなんて判るわけがない「確かに、その通りだ」

「だろ？ 奴がいるかもしれないと警戒するだけで充分だ」

そう笑って歩いていく龍也。床や壁の血や肉片に一切顔色を変えず進んでいく龍也。私とユウリは大分見慣れた光景だがさすがに気分が悪い……

「どうしてそうも顔色を変えないで歩く事ができるんだ？」

ユウリがそう尋ねると龍也は前を向いたまま

「ここは敵地だぞ？ あまりペらペら喋るな。自分達の位置を知らせることになる、話があるならプライベートチャンネルを使い」

龍也の言葉にはつとずる。あまりに凄惨な光景の中を歩いていたせいか、不安に思い饒舌になっっていることにプライベートチャンネルを起動させ

【近いのか？ ネクロの気配は？】

ネクロの気配が近いのか？ と尋ねると龍也は怪訝そうな顔をしながら

【気配が良く判らない。死臭が多すぎるせいなのか……それとも普通じゃないネクロがいるのかもしれんな】

龍也でも特定できない……その事に嫌でも緊張感が高まる。周囲の死体もそれを加速させる……いつでもISを展開できるようにしながらゆつくりと血に塗れた通路を進む。さつき障壁を解除したときこのラボの地図も確認し、龍也の感で一番奥の居住エリアを目標している。時折聞こえてくる銃撃音と悲鳴、別の通路ではネクロと戦闘している軍人がいるということだろう

【……近いな。どうする?】

【へたな事を考えるな。今回の目的は束の救出だ、軍人を助ける意味がない。あの手の連中を助けても利点はないぞ】

龍也の言葉一理ある。あの手の連中は自分に与えられた指令を全うする事を第一に考える。かりに助けたとしても敵になると判っている相手を助けても意味がない

【……別に助けようと言いたい訳じゃあない】

ユウリが何を考えているのかは判らない。だが考えられるのは殺された軍人がネクロ化する事の危険性を危惧しているのだろう

【死体は直ぐにネクロ化するのか?】

もしそうなら今私達が来た道も安全ではない筈だ。そう危惧したのだが龍也の返答は

【心配ない、この世界のネクロはネクロ化させる能力が低い。それに腐敗の教義で殺された人間はネクロ化しない】

腐敗の教義……ヴォドオンの能力だったか……この悪臭は肉が腐る物だ。気分が悪くはなるが安全と言うことなら良いか……とは言え気分の良い物ではないが……周囲を警戒しながら進んでいると突然甲高い金属音がする

「飛べーユウリ！フレイヤー！」

それが何なのか気付いた龍也がそう叫ぶ。それと同時に床が抜け闇が足元に広がる

「くっ！」

前回り受身の要領で安全エリアに飛ぶが若干反応の遅れたユウリ

は

「つちい!!」

「ユウリ!」

龍也が手を伸ばすが、間に合わず闇の中に落ちて行った……

「ちっ!分断されたか……」

忌々しそうに舌打ちする龍也。だがこれはネクロの攻撃などではなく、運悪く通路の耐久力が来てしまったのだろう

「大丈夫だ。上手く着地できた、さっきの場所で地図も把握している。この先で合流しよう」

ユウリはその返事を最後に進みだしたようで、暫く声をかけないでくれと言ってプライベートチャンネルをOFFにした。単独行動だから慎重にならざるを得ないと判断したのだろう

「少し急ぐぞ、何かあったら遅いからな」

龍也はそう言うと思いの大型バイクを自身の隣に出現させる

「それは?」

「ベヒーモス。これで強行突破する。壁もな」

壁を?バイクで?正気の沙汰ではないとおもうが、これだけ自信満々の顔を見ると勝機があるのだろう。だが

「私にタンデムしろと?」

タンデムシートしかないバイクだ。必然的にそうなる龍也はそうだが?としれつと返事を返しバイクに跨り、エンジンをふかす
(ハヤテ達の気持ち少し判る気がする)

この男は何もかもがずれている、エリス様がやきもきするのも納得だ。

「早くしろ。時間がない」

龍也に急かされバイクのタンデムシートに載る、大型バイクだから思ったよりも安定しているな

「行くぞ」

「ちよつと待てええエエ!!」

いきなりアクセル全開で走り出すバイク。狭くそして暗い通路を高速移動する恐怖。思わず絶叫してしまった悪くない筈だ……

ネクロ達は一定の距離を保ったまま動く気配を見せない。どう見てもダメージを受けていないのにも関わらずだ

(グランチャードカノンを警戒しているのか?)

2発目が運よく射軸上のネクロを3体纏めて貫き、残りは3機……両手のヘルゲートの照準をその3体に合わせているとISから警告音がし、その警告に従いちらりとその方向を見て舌打ちする

「「お、オアアアア」」

完全にコアを砕く事ができなかつたのか、徐々に回復を始めているのが見える……あいつらが攻めて来ないのは仲間が回復するまで時間稼ぎをするつもりだからか……

(持久戦は不味い)

ハイドロミサイルランチャーはあと2回で全弾撃ちつくす。手持ちの火器の弾丸はまだ大分あるが、数の差で押し切られる……それになによりも

(ちっ……目がが霞む……)

ヴオドオンの腐敗の教義から逃れるためとは言え、肩の肉をごっすり切り落としたのは不味かった。傷口を焼いて止血していたが、失った血液量が多すぎる……閉じかける瞼を必死に開いてネクロを視界に納める。この状況で意識を失うと言う事は自殺行為に等しい……歯を食いしばり意識を保つ、しかしこの状態ではグランチャードカノンの衝撃には耐えられないだろうし……

(不味いな……)

ラボに踏み込んで来た軍人達の第一陣はネクロと防衛設備で大半が全滅したが、センサーには第二陣・第三陣の反応が近づいてきている。今この状況を切り抜けることが出来る確信もない……

(ジリ貧か……)

負けはしないが勝てる要素もない……だが引くことも出来ない。嫌な状況だ……弾薬もSEもかなり減少しているし……

「ジリ貧と言うのは間違いですね。ここで貴女は死に、束と共にネクロと化す。それが正解ですよ?レディ」

突然響くこの場には似つかわしくもない丁寧な口調。ネクロの後ろの通路から姿を見せるのは漆黒の甲冑にマントを纏った異形

「何者だ」

ネクロであるのは間違いない。だが私の知るネクロではない、答えが来るとは思ってたがそう尋ねると

「この姿では初めましてですね、ヴオドオンですよ。お忘れですかな？」

深く頭を下げるヴオドオン。その仕草は楽しくて仕方ないと言う感じだったが、私には絶望的だった。触れたもの全てを腐敗させるヴオドオンの能力の前ではISの防御など何の役にも立たず、束達がいるフロアの前の障壁だつて簡単に破壊されるだろう……

(……)までか!?)

八神龍也は間に合わなかった。正確にはこの場所を伝えるはずの魔力を発生させる装置の起動が間に合わなかった……私は失敗したのか……

「ただの人間にしては素晴らしいですよ、良く(……)まで耐えました。苦しまず逝かせて上げましょう。そして我らの同胞へ」

ゆっくりと近づいてくるヴオドオン……だめもとでAMF弾を放つが

「無駄ですよ」

弾丸はヴオドオンに当たる前に腐敗し消滅する……グランチャードカノンも恐らく効果はないだろう

「では良き同胞の誕生を「うおおおおおッ!!」なあ!?!ぐあ!?!」

ヴオドオンが私に手を伸ばした瞬間。横の壁から黒い影が飛び出しヴオドオンを跳ね飛ばす

「はっ」

突然の事に思考が思わず停止する、私の目の前に止まっている大型バイクの後ろから赤髪の女が倒れこみ

「吐く……吐く……あの野郎……むちやくちやだ」

「お、おい?大丈夫か?」

思わず心配になりそうな顔色をしている女に思わずそう尋ねる。

それほどまでに酷い顔色をしていた

「ぐう・や。やってくれますね……八神龍也」

よろよろと身体を起こすヴオドオンの言葉に八神龍也は返事を返さず、代わりにバイクのエンジンを蒸かし片手に剣を持ち

「ぐはあ!？」

再びバイクで突撃しヴオドオンを跳ね飛ばす。じ、人身事故……そのままアクセルを吹かし続けネクロを跳ね飛ばし、前輪で踏み潰し、後輪で殴る

(あれは間違っている、バイクとしての使い方じゃない)

八神龍也の中ではバイクは物理兵器なのかとんでもない荒っぽい使い方をしている

「ごふう……貴様。そんな戦い方で「黙れ」げぶああ!？」

正面から轢かれついにヴオドオンは動かなくなった、八神龍也はそれからバイクを降り剣を振り下ろしたが

「ちっ逃がしたか」

舌打ちする、良く見るとヴオドオンが倒れていた床は完全に抜け落ちており、それで逃げたようだ

「無事か？」

そう尋ねて来る八神龍也、確かに助かった。助かりはしたが……どこか釈然としない物を感じながら

「ああ。助かった……」

そう返事を返し、私はその場にへたり込んだ。肉体の疲労もあるが、さっきの惨劇を目の前にした精神的疲労があまりに大きすぎるせいで……

龍也とフレイアとはぐれ暗い通路を進む。幸いアマノミカゲにダウンロードしたこのラボの地図があるから迷う事はないが

(神経をすり減らすな)

どこからネクロが現れるか判らない。アマノミカゲのハイパーセンサーの感度を最大にして警戒しつつ進む

(ここがE-7のフロアだから、E-6からD-5に上がれば合流で

きるか)

今ワタシのいるエリアはISの装備などを開発していたエリアなのか、パーツが散乱していて正直歩きにくいと思う。そして隠れ場所が多いので少し進むだけでも以上に疲れる。それでも警戒を緩める事無く進んでいると突然パーツが崩れて落ちてくる、後方に下がり龍也から預かったハンドガンを構える。そしてそれと同時に酷い寒気を感じた

(セリナ……)

パーツの上で腰掛けているネクロ。それはワタシが救うことが出来なかった、そしてワタシとエリスの妹になる筈だった……セリナ。ワタシが救うことが出来なかった家族がそこにいた……判っていた事だった。セリナは敵だと、だがこうして目の前になると手が震え、視界が霞む。それでもなおAMF弾を装填しているハンドガンの照準をセリナの胸に合わせる、ヘッドショットは実戦では愚策といわざるを得ない。もし銃を使うのなら的の大きい胸または機動力を落とす足を狙うのが定石だ。ネクロだからそこまで効果はないはずだが、少しは時間を稼げるはずだと思っっていると

「ユウリ。やっとゆっくり話が出来るね」

「!?」

今までのセリナと違う。知性を感じさせ、そしてワタシの記憶の中のセリナと同じ口調だ

「そんなに警戒しなくてもいいよ、ここは魔力が少ないから何とか表に出れた。私はセリナだよ、ユウリの知っているセリナだよ」

そう笑うセリナの目を見る。普段縦に割れている瞳孔は通常の間と同じようになっていた……手にしているハンドガンを腰のホルスターに戻す。その言葉に、その目に嘘はないと判ってしまったから「どうしてワタシの前に現れた？」

「お願いがあつて、ただあの人がいるとネクロの本能が強くなるから、ユウリだけ来て貰ったんだ。話し終わったら元の場所に送るよ」

そう笑うセリナはパーツの山をどけて下に隠れていたコンテナに座る、ワタシも同じようにコンテナに腰掛けセリナを見つめる。その

姿はやはり楯無に似ているが、いや楯無がセリナに似ているのか？それはワタシには判らない。そして成人間近の姿に成長しているのは恐らくネクロ化の影響もあるのだろう

「私がユウリに頼みたいのは……」

セリナはワタシを真つ直ぐに見つめて、迷う素振りも見せず

「私はもう戻れない。きっとこれが最後になるとおもう、次に合うとしたらそれは私じゃなくて、ネクロとしての私。だからその時は……私を殺して」

その言葉にワタシは自身の血が凍りついたように感じた。ワタシがやらなければならぬと判っていたのに、本人から言われたその一言が……深くワタシの心を蝕むのを感じた……セリナはワタシの今の迷いに気付いていないのか、穏やかに微笑んでいるだけでその目が、何をワタシに言おうとしているのか？ワタシは理解出来ず、今言われた殺してくれの言葉が延々と繰り返えされていたのだ……

第124話に続く

第124話

第124話

「まあー暇つぶしにはなったかなあ」

イスに腰掛けそう呟く、束が人間を憎むようにと襲撃犯に人間を使ったが、もうここまで来たら必要ないので全員殺したのだが……若干後悔している。無論人殺しに後悔しているわけではなく

「勢いに任せすぎたかな」

いい感じで計画が進んでいるのでベリト様に褒めて貰えると思うと、お土産を持って帰って更に喜んで貰おうと思ひ人間の魂を刈り取るうと思つた。だから周囲の人間を皆殺しにしたのは良いんだけど、むせ返るような血の匂いに顔を顰めていると

「……いい、イナリ。早急に……離脱しますよ。この作戦は……失敗です」

茂みを掻き分けてヴオドオンが姿を見せる。だがその姿はボロボロで私は座っていた椅子から立ち上がり

「どうしたのよ!?なにがあったのよ!?」

私達ネクロが人間に負けるわけがない。だけどこうしてボロボロの姿を見ると何かあったのかもしれない

「……守護者が来ています……今の私達の戦力では……勝てない」

「な!?なんであいつがこんな所に来ているのよ!おかしいじゃない!」

ここは中南米の山の中。日本に居るはずの守護者はいる訳がない。だけどヴオドオンの姿を見ると嘘だとは言えない

(いやよー……ここまでやったのに!どうしてあいつ1人のせいで失敗になるの!?)

私がベリト様に任されたのに!なんでこんなときによりによってあいつが出てくるのよ

「戻りましょう。今ならば「嫌よ!私が任されたの!私が完璧に遂行するのよ!ベリト様の為に!」

私はこの世界で生まれたネクロだ。そんな私にこんな大役を任せ
てくれたベリト様に失敗しました。なんて報告は出来ない

「しかし……私とイナリでは守護者に一矢報いる事も難しいですよ。
それこそ捨て身でなければ」

ヴォドオンが顔を顰めながら言う。身体が痛んだいるのだろうか
……守護者の攻撃はネクロには猛毒と等しいからだ

「そんな事は判ってるわよー」

守護者の実力は嫌と言うほど知っている。だけど任されたのに何
も出来ませんでしたで撤退なんかしたくない

「ギリ」

なら私に出来ることをする。指を噛み切り、着物から取り出した紙
に血で文字を描く

「何をするつもりですか？」

怪訝そうな顔をしているヴォドオン。若干回復しているので既に
口調は普通だが限界が近いのか顔色が悪い、恐らく交戦した後なのだ
ろう

「デクスを呼び出す、それにディースガルムも」

ベリト様から預かったデクスもディースガルムもまだ数が残って
いる。狭い通路の中ではデクスとガルムの野生は充分な脅威になる

「いけっ！全てを食い殺せ！」

雄叫びを上げてラボの中に向かっていくデクスとガルム。これで
以下に守護者とは言え無事には済まないはずだ、束に人間を憎ませて
ネクロ化させるのがベストだったけど、この際手段を選んで入られな
い

「イナリ。ヴォドオン……」

突然背後から聞こえたベリト様の声に振り返ると同時に膝を付く。
もしかしたら私の作戦の失敗をお叱りに……

「イナリ。良くやってくれました、守護者が来なければ今回の作戦は
完璧だったでしょう」

叱られると思いきやベリト様の言葉は私を褒めてくださる物だっ
た。思わず顔を上げると

「戻りましょう。この場に残りベエルゼ様の居場所を守護者に教えるわけには行きませんが、早急に戻りますよ」

態々迎えに来てくださったベリト様に深く頭を下げる。だが
「し、しかし束のネクロ化は？」

その為にここに来たのにここで撤退してしまつては束のネクロ化は

「今回は諦めましょう。守護者が来たのですから、恐らく束は無事に連れて行かれるでしょうから」

その言葉に唇を噛み締める、本来の目的を果たせなかった不甲斐なさからだ

「ベリト様。私が残り束の遺体だけでも持ち帰りましょうか」

ヴオドオンがそう進言するがベリト様はいいえと首を振り

「束の知識は充分に得ました。無理にネクロ化する事はありません。戻りましょう……それに少し問題もありますのです。イナリの力を貸してほしい」

繰り返し戻りましょうというベリト様。そして私の力を貸して欲しいと言う言葉に少しだけ暗い気分が払拭されるのを感じながら

「命に従います」

上位レベルの指示は絶対。取り分け私にとってベリト様の指示は絶対だ……逆らおうなんて思えない。私は悔しいのと不甲斐ない気持ちで一杯になりながらベリト様と共にヨツンヘイムの宮殿へと戻るのだった……

(今度は必ず……貴女のご期待に答えて見せますから)

LV3である私に他のLV4がいたのにも関わらず、私に指揮を取らせてくれたベリト様。今回は失敗だったが、今度はこんな無様な真似はしないと心に誓うのだった……

八神龍也は周囲のネクロを片っ端から手にした剣で引き裂いていく、私があれば苦労したのに見る見る間に数が減っていくネクロを見ると思わず舌打ちの1つもしたくなる。なにせ私が命懸けで漸く4対を倒すのがやっとだったのだから……

(これが魔導師の力なのか)

私が苦勞して作り出したAMF弾なんかよりも遙かに強力だ。これが魔法使いの……そしてその中で最高峰と言われる八神龍也の実力……正直言っただけ私の想像をはるかに超えていた。自分とは違っていると判つていても納得できない、その理不尽なまでの力の差に……嘆けばいいのか、嫉妬すればいいのか？わけの判らない感情が私を支配する「ISを解除しろ、手当てをする」

私の隣にしゃがみ込んでいる女。圧倒的な力を前に思わず目を奪われるのは当然のことと言える……力はそれだけで圧倒的な存在感を持つものだから、取り分けあの男の持つ力は強大すぎた。思わず目を奪われるほどに……

「あ、ああ……今解除する」

普段なら自分の身体に触れられるのは嫌だが、今はそんな事を言っている場合ではない、言われた通りISを解除すると

「これはまた随分とひどいな。大丈夫か？」

ウエストポーチから薬品を取り出しながら尋ねて来るので私は「そう見えるならお前の目は節穴だ」

さきほどナイフで抉り取った肩の肉を見てそう呟く女にそう切り返す。少し混乱していたが既に冷静になったのでいつもの口調になっている。女は怒る素振りも見せず、それだけの事が言えるなら平気だなと呟き私の傷の手当てを始めたのだが……私の肩の傷跡を見て「もう腐ってきているぞ？なにか「触れるな！フレイア！」

八神龍也がそう怒鳴るとフレイアと呼ばれた女は驚いたよう振り返りながら

「急に大声を出すな。驚くだろう」

その一喝は確かに驚くほどの大きな声だった。八神龍也は最後のネクロを両断し私の肩の傷を見て

「ヴオドオン相手にISで勝負か？正気の沙汰じゃないな」

呆れた口調で言われ、私は少しだけカチンと来た。私だってヴオドオンの危険性は理解していた、だが襲われた以上逃げる事も出来ないで攻撃するかしかなかったのだから

「お前が遅かったせいだな」

「そりゃ悪かったとでも言うかね？」

ん？と人のいい笑みを浮かべているが、それはとてもではないが、良い人間と言えない笑みだった。全てを見通すようなあの蒼い目も苦手だ。

「まあその侘びだ。傷は治す」

そう笑い私の傷に触れた八神龍也が一言呟くと傷は瞬く間に塞がる。それを見ていたフレイアと言う女が

「何度見ても理解できんな」

それは私も同意する。魔法と言うのは理解できる物ではないと思っていたが、こうして近くで見てもその感想しか思い浮かばない。「口で説明するのも難しいし、魔法使いと言うのはみんなそんな物だ。使えるが、どういう原理化は詳しくは知らない。ただこういう効果があると知っているだけだ」

それはなんともいえないな。だが完全に痛みが消えているので効果はあるらしい

「さてではアズマ。束はどこだ？あの馬鹿者を連れて帰って欲しいと言うのが箒の頼みごとなのだが？」

そう尋ねて来る八神龍也。束が馬鹿と言うのは納得できず黙っていると

「ネクロにISの情報を渡した馬鹿を馬鹿といわず何と言えればいい？知っているなら教えてくれ」

この嫌味っぽい言葉に腹が立つが事実なのでむうつと呻く。それを見ていたフレイアが

「助けに来たのだよな？喧嘩しに来たんじゃないのよな？」

「向こうの出方次第だ。聞き分けのない子供に根気良く話すほど気が長くないのだな。駄々をこねるなら殴つてでも連れて帰る」

「それはいい、ぜひそうしてくれ」

束は人の話を聞かない。それにネルヴィオに色々話をされているので間違いなく八神龍也の話は聞かないだろうから、それがベストだとおもう

「話が早くて助かる。時間もないから急ごうか」

そう言つて歩き出す八神龍也に私は周囲の消滅しているネクロを見て

「もうネクロはいないのでは？」

「監視していた上位レベルの魔力の気配が消えて、代わりに大量のネクロの気配が近づいている。それに生き残りの人間もネクロの終われる形でこつちに来ている。時間はそれほどないぞ？」

そう言われてラボのカメラと直結しているブラッドバニーを起動すると、確かに複数の人間の気配とネクロが近づいてきているのが判る。

「こつちだ着いてきてくれ……うっ」

一瞬視界が揺らぎ倒れかける。束が作ってくれたウサギの耳のりミッターを外しているのです、その反動が出てきている

(まだ、まだ大丈夫だ)

まだ意識を失い程ではない、まだ進める。まだ私の命の灯火は残っている……

「こつちだ」

半ば足を引きずりながら歩いていると八神龍也が小さな声で

(お前のあり方は好ましい。こんな出会いでなければ……そして……いや、言うまい。最後まで自分の足で進め)

私を治した時に私の状態も知ったのか、そんな事を呟く。私は小さく笑い言われるまでもない、と小さく呟く。私もこの男も同類だから判る、己の命の散り場所はどうの昔に決めている……だから言われるまでもないのだ。もはや燃え尽きる寸前のこの命。最後まで私が護ろうと誓った只一人のために使うと……そう誓ったのだから……

目の前で呆然としているユウリ。私の知っているユウリよりも大人になっているけど、こつち言う所は変わらない。自分の予測できない事を前にすると混乱してしまう所は

「な。何を言っているのか判っているのか？」

震えた声で尋ね返してくるユウリ。その問い掛けに私は逆にユウリに

「ユウリこそ判っている？今の私の状態を？」

そう尋ね返した。首を傾げているユウリに今の私状態を説明する。私はこの場所に充満している魔力と守護者の魔力で辛うじて自意識を保つことが出来ている状況だ。ほんの少しのバランスの崩れで私の意識は消えて、ネクロとしての私が表に出てくる

「……それは判った。だが……」

口を開いたり閉じたりして言葉に詰まっているユウリ。私はユウリを見て

「死者は死者。生者の元には戻れない……判るでしょう？」

私は既に死んでいる。こうして話が出来ただけも奇跡なのだ……徐々に私を塗りつぶしていく黒い物を感じながら

「ユウリは生きて自分の思ったとおりにすればいいよ。更識さんだけ？」

肩を竦めるユウリ。私もまさかあんなに自分に似ている人間がいるなんて思ったなかつた。思わず笑みを零すが、ユウリは眉を顰め「ワタシは……刀奈にお前を見ている。嫌逆かもしれない……ワタシは……」

自分を蔑むような口調のユウリ。だけど私はそうは思わなかつた「私は、もしかしたら私が生まれ変わる事が出来たのかもしれないと思う」

歳も合わないし。そんな話ありえないと言えばそれまでだが、ここまで私と似ている楯無さんとユウリが出会ったのは偶然ではないと思う

「生まれ変わり？歳が合わないだろう」

そう呟くユウリ。混乱してても冷静なのはユウリらしいと思いき笑する。だけどそろそろ時間もない……頭の中がぼんやりして考えがまとまらなくなっているからだ……

「それでもそうだと信じたいの……それにもう……むりっぽい」

徐々に呂律が回らなくなり、ネクロとしての自分が出てくるのを感じ

じて立ち上がると同時にネルヴィオから預かっていた転移キーを虚空に投げ、ゲートを作り出す

「もう行くのか?」

私だって出来ればもう少し話をしたいとおもう。これが多分最後になるだろうから、だけどそれは叶わない望み

「うん……もうげんかいだから……」

自分の中に聞こえるユウリを壊せという声が聞こえる。これに呑まれば私はユウリを襲ってしまふ。そんなのは嫌だ、最後まで私のみままでさよならをしたい

「つぎはきつと殺し合いになる……だから約束は守ってね?」

私に最後を与えるのはユウリがいい、これは私の望みであり、そしてユウリを縛る鎖からユウリを解放するための手段でもある。ユウリは悲しそうに頷き

「約束する。お前を殺すのはワタシだ」

悲しみをその目に映してもしつかりとそう答えてくれたユウリ。これでいい、これで良いんだ……私はもう死んでいるんだから、こうしてもう1度話が出来ただけでも良かったんだ

「ありがとう、ユウリ。じゃあね」

私は手を振り返し転移ゲートに飛び込みその場を後にした。離れるに連れて自分が自分でなくなる気配を感じつつも、どこか穏やかな気持ちになるのだった……

「セリナ……ワタシは……」

残されたユウリは複雑そうな顔をしていた。それは当然とも言える、自分の妹になるセリナとそのセリナと瓜二つの容姿をした「楯無」、そして彼女に惹かれていることを自覚しているユウリ。これほど複雑な事もないだろう。そのまま座り込んだまま考え事をするユウリの耳に飛び込んでくる爆発音。

「こんな事をしている場合ではないか」

ユウリは迷いを抱えたままくらい通路を走り出した。あと1ブロック進めば龍也達と合流できる。それに考え込むのは終わってか

らでいいと判断したからだ、だがその胸中が複雑な物であったのは言
うまでもないだろう……

第125話に続く

第125話

第125話

セリナとの話で自身に迷いを感じながらも、今はそんな事を考えている場合ではないと割り切り、龍也と合流するべくくらい通路を走っている

「「キキ!!」」

通路の隙間や廃棄されたISから黒い影のようなネクロ。LV1が姿を見せる

「邪魔だ!!」

龍也から借りてきたAMF加工とやらを施されたブレードで両断し進む。この狭い通路ではISを展開すると機動力が低下してしまう、リスクはあるが生身で進むのが正解だ。腰のホルスターから同じくAMF加工を施されたハンドガンを取り出し

「そこだ!」

完全展開はしていないが、腕と頭の装甲は展開している。ハイパーセンサーによる索敵で奇襲を防ぎ、腕の装甲のブースターを使い剣戟の威力を上げてひたすら走る

(飛行は不味い)

背後から追いかけてくるネクロの気配。両断は出来ても倒すまでにはいたっていない……ここで空を飛べばそこから捕まる

(あと1ブロック!)

ISに読み込んだこのラボの地図。あと1ブロック進めば通常の通路に戻る事ができる。そうすれば完全展開してそのまま離脱すれば良い……だが

(くっ。走りにくい!)

エリアが変わったのはいいが、今度のエリアはさっきのISのパーツが更に細かくされた物が散乱していて非常に走りにくい。ドンドンスピードが落ちているのを感じる、このままでは直に捕まる

(反転して戦闘に持ち込むしかないか)

困まれば圧倒的に不利。迎え撃つ事も考えるが、この状況では長くは持たない。どうやってこの状況を切り抜けるかを考えているとアマノミカゲに搭載した魔力センサーが最大アラートを鳴らす。咄嗟にアマノミカゲを完全展開するが魔力波らしき物は見えない。どういふことか首を傾げているとワタシを追いかけて来ていたネクロ達は影の中に消えるようにして消えていった

「どういふ事だ?」

目の前にワタシがいたのに何故?理解出来ずに首を傾げていると背後に天上が落ちてくる。まさかネクロの攻撃かと振り返ると

「ユウリ早く来い。長くは持たんぞ」

聞こえてきた声と通路の上のブロックから漏れる光に眉を顰める。本来ならハイパーセンサーで直ぐ判るのだが、どうもさっきの魔力のせいで視界が安定しない

「龍也か?」

暗い通路のせいで良く見えず、そう尋ねると直ぐに返事が返される。それに安堵する、下位レベルなら問題ないが、上位が現れたらそこで死ぬと思っていたからだ。

「ああ、遅れて済まん。アズマの治療に手間取っていた。掴まれ」

伸ばされた腕。少しだけアマノミカゲのブースターを蒸かし浮き上がると腕を捕まれ引き上げられる

「状況は?」

通路の上に降り立ち、アマノミカゲを待機状態に戻し、険しい顔をしている龍也に尋ねる。頭をかきながら龍也は

「最悪だ。早急に撤退しないと手遅れになる、ゲートを作り出してそこからどどんネクロが来ているし、ネクロ同士の共食いで進化を始めている。こんな狭い所でデクスが生まれたら、生き残るのは不可能に近い」

デクスと言うのは龍也に説明だけで聞いている。ネクロが共食いにより自然発生する物と、制御するために金属の骨格をベースに作られた人造のネクロ。その戦闘力は当然高いが、恐れるのはその闘争本能と再生能力だと聞いている。龍也でもかなり苦戦すると

「急ぐぞ、東のいるフロアは近い。もはや話している時間はない。強引にでも連れて行く」

そう言って走り出す龍也の隣を走りながら気になっていたことを尋ねる

「さっきの魔力反応は何なんだ？お前なのか？」

「アズマだ。アズマはこのラボを消し飛ばすのに魔力兵器を作成している。その起動の余波だ」

このラボを吹き飛ばす……それは東の研究データを護るためであるだけではない筈だ。恐らく自爆用……

「止めなかったのか？」

ワタシは何度かこのような状況に立ち会ったことがある。とは言えネクロに追われているような状況ではないが、やろうとしていることは同じのはずだ

「自分の死に場所を決めている人間に何を言っても無駄だ。無駄話はこのままでだ、急ぐぞ」

龍也が走る速度を上げる、背後から聞こえてくる不愉快な音。肉を噛み砕く不気味な音と、死にたくないと呼ぶ人間の叫び。ネクロがもう直ぐそこまで来ていることに気付く

「嫌な感じだな」

死の気配とでも言うのだろうか？それがワタシを捕えようとしようとしている気配を感じてそう呟くと

「慣れる。そして止まるな」

龍也の言葉に判っていると返事を返し、ゆっくりと閉まり始めている隔壁の近くで早く来いと叫びながら手を振るフレリアの姿を見つければワタシと龍也はスライディングでその隔壁の間に滑り込んだのだった……

やっと私のラボの入り口が開いた音がしてアズマちゃんだと思いう振り返る。そこにいたのは銀髪にコートを纏った男の姿。そして私のラボにいるはずのない人間の姿

「ど、どうして私の研究所にお前がいるんだ！八神龍也！」

どうしてここにいるのか？この場所は誰も知らないはずなのに……思わずそう怒鳴るが八神龍也は興味無さげに私を見据えて

「私だってこんな場所には来たくなかったが、仕方ないだろう。お前の妹の頼みだ」

「箒ちゃん!？」

この男が何を言っているのかわからない。第一……私と箒ちゃんは姉妹なのだからお前じゃなくて私に連絡が来るはずだ。

(それよりもネルちゃんに連絡しよう)

私はどうでもいいけどネルちゃんは随分とこの男に執着していた、今ここに居るといえば喜ぶと思いきっさりキーボードのしたのボタンを押そうとすると鋭い閃光が走り、キーボードを粉碎する

「戯けた事をするな」

「な、何をするんだよ！私のデータが！」

私の前に突き立っている剣。貴重な私のデータが消し飛んだ……それだけでも世界の大損失だ

「このPCには第五世代のデータがあつたんだぞ！お前なんかよりも遥かに価値のあるな!!」

怒りの余り八神龍也の前に立つ。八神龍也はますますつまらなそうに溜息を吐き

「それで？私にどうしろと？謝れと？それとも消えろと？」

肩を竦める八神龍也に出て行けと叫びそうになると後ろに扉が開き、少年が姿を見せる。確かタスクとかの……ユウリ・クロガネだったか？ネルちゃんに聞いていたので僅かながらに覚えていた

「任せろと言ってそれか?!助ける気はないのか」

その怒鳴り声に更に混乱する。助ける？あいつがこの私を？私が八神龍也を睨んでいると

「八神龍也は私が呼んだ。東……今すぐこのラボを破棄するんだ。ネクロが集団で押し寄せてきている」

ISスーツ姿のアズマちゃんが壁に背中を預けて荒い呼吸のままそう告げる。その頭にはあるはずのウサ耳がない

「アズマちゃん?!リミッターは?！」

アズマちゃんの生命を維持し、そして人間が持っていて当然の脳のリミッターの役割を持つそれが無い。それはすなわちアズマちゃんの寿命は今こうしている間も減っているということの証明だ。どうしてあれは私にしか外せないはずなのに……

「……ネクロはもう束を必要としてない。八神龍也と一緒にIS学園へ向かえ……ここは私が何とかする」

ゆっくりと立ち上がろうとするアズマちゃんだがふらついて倒れかける。するとまた知らない奴が現れてアズマちゃんを支える

「ネクロが私を切るわけがない！私はあんなに協力した！」

ネクロディアにこの世界の情勢。その全てを教えた私を切るはずがない、アズマちゃんはきつと八神龍也に何かされてしまったのだと判断して

「お前がアズマちゃんをおかしくしたんだろう！直ぐに元に戻せ」姉上！これは私の意志だ!!!」

力強い声でそう叫ぶアズマちゃん。アズマちゃんが私の事を姉上と呼んだのはこれが初めてだ……アズマちゃんは私の生まれた病院に僅かに残っていた私の血液サンプルから作られたクローン。どこかの実験施設に居ると聞いてその施設を奪い、連れ出したのがアズマちゃんだ。その時は冗談で姉上と呼んで？と言ったが結局私のことを姉と呼んではくれなかった。そして今のアズマちゃんの鬼気迫る表情を見るときかすると……本当にネクロは私を切り捨てたのかもしれない

「う、嘘だよ……この天才の束さんが利用されるわけがない……いや捨てられるわけがない……」

私は優秀だ。この世界の誰よりも。そんな私がネクロに切り捨てられるわけがない……

「嘘。絶対に嘘……そうでしょ？アズマちゃん？」

私にはアズマちゃんしか見えなかったが、私のクローンであるアズマちゃんはちーちゃんを除いて、私が最も信用できる人間だ

「本当……だ。私も危ない所だった……ネクロはどんだん数を増やしている。もう終わりだ、姉上は利用されていた。それが真実なんだ」

嘘だ……だけど……だけどアズマちゃんがいうのだから本当のことかもしれない

「あ。あははは……この私を利用するだけして切り捨てる……」

もう回りにいる八神龍也もどうでも良い、この束が切り捨てられた、その事実が胸を痛めつける。人間なんて嫌いで愚かだとおもっていた。だからネクロに協力した末路がこれ……あまりに笑えない。だけど……この私を利用するだけして切り捨てる……そんな事を許せるわけがない

「……判った。屈辱的だけどお前に従う。私とクロエちゃん、それとアズマちゃんを……」良い。もう良いんだ。姉上」

私の言葉を遮るアズマちゃん。その顔は疲労だけじゃない、どんどん生気が抜け落ちているのが判る

「八神龍也！早くアズマちゃんに治療を！」

私がそう怒鳴る。だが八神龍也は私のほうを向かずに「来た。時間がない、アズマは見捨てる」

その言葉と同時に何かが爆発する音が聞こえる。あの方向は隔壁の方向だ……まさかネクロの攻撃はもうここまで来ている!?

「束様！早く脱出の準備を！もう時間がありません！」

クロエちゃんが焦って駆け込んでくる。念の為に回収しておくように頼んでおいた、箒ちゃんの新装備を持って来てくれたのだろう。だけど……アズマちゃんをここに残しては……

「どうせもう助からないのは分かっているんだ……だから最後まで私にかっこつけさせてよ……姉上……」

アズマちゃんが私の肩に手を置いた次の瞬間。腹部に強い衝撃が走る……そのあまりの激痛に意識を失いかける

「八神龍也！束を！姉上を頼む!!!」

アズマちゃんはそのまま私を八神龍也のほうに投げつける。軽い衝撃の後耳の近くで

「任せろ。こいつは嫌いだが……最後の頼みくらいは聞いてやる」

私を荷物のように担ぎ上げる八神龍也。薄れ行く意識を必死になぎとめ、力の入らない手で八神龍也の背中を叩きながら

を逃がす事に成功した以上。もう必要のない代物だ

「悪いが退く気はない……くだらないかもしれないが……意地があるんだよ……女にもなあ!」

効かないと判っているが私はネクロに向けて全ての搭載武器を放った……ガトリングが僅かに残っている人間の顔を打ち抜き、接近してきた騎士型のネクロの胴体にナックルスマッシャーを押し当て、反動なんてものを考えず最大出力で放つ。その反動で右肩が千切れて吹き飛んだ……ネクロ達の反撃で足を噛み千切られたが、アームドベースをパージしそれにガトリングを叩き込み爆発させネクロを吹き飛ばす……だがやはり科学ではネクロに勝つことは出来ず、私は1分弱で地面に倒れていた

「はあ……はあ……げぼっ……ごぼっ」

根元から千切れとんだ自身の右肩と膝から下が無い両足、それと胴に深く突き刺さったブラッドバニーの装甲が完全に背中を貫通している。肺を負傷したのか酷く息苦しい……

「良く闘った女。賞賛に値する」

私を見下ろして呟く騎士のネクロ。周囲には牙を打ち鳴らすネクロの数々……結局ISでは2体を倒すのがやっとだった。化け物だというのは知っていたが、こうして戦うと良く判るな……

「そんな……ものは……いない」

残り時間は……90秒……最後の90秒……いやもう60秒か……

「何か言い残す言葉があるなら聞いてやろう、同胞となる物に対する礼儀だ」

剣を抜き放つ騎士。今この場所がどうなるのか知らなくせに……息をするのも苦しいが馬鹿にするように笑う。もう動く事が出来ないのです、これが私に出来る最大の抵抗だった

「気でも狂ったか?ならば仕方あるまい、誇り高き者よ……せめて苦しまぬように……ぬう!?!これは!!」

地下の魔力発生装置。それが完全にオーバーロードしてとんでもない量の魔力を発生させる。その魔力に同調するかのようにネクロ

の身体が膨れ上がり塵となって消えていく……ネクロには魔力が必要だが、限界を超えれば毒と言うのは確かだったようだ。私にトドメを誘うと剣を振りかぶったネクロの姿も消え。周囲の機械が熱をもち爆発していく……業火の中、既にもう何の感覚もない左手を天に伸ばす。当然だが太陽は見えるわけもない、だけど私には見えていた。姉上に連れられ初めて見た太陽の光が……

「ああ……姉上に会えて……本当に……よかつ……た……」

その言葉と同時に私の視界は眩いまでの閃光に染まった。痛みも苦しみもない……とても穏やかな気持ちの中私はゆっくりと目を閉じたのだった……最後の最後に私の瞼の裏に浮かんだのは、もう何年も見ていない束の笑顔だった……私はその束の頬に手を伸ばした……

第126話

第126話

第126話

龍也さんの姿がIS学園になく、そしてはやてさん達もピリピリした雰囲気をしているのでなにかあったんだと思い。今日は自主訓練にすることにした。シエンさんやセシリアさんも誘ってIS学園の近くのグラウンドでしつかりと身体を動かす事にする、本来ISを動かすのに体力や腕力はあるんまり関係ないんだけど、ネクロのことを考えるとしたほうがいいという結論になったのだ

(本当はお姉ちゃんに色々と教わりたかったんだけどなあ)

龍也さんと一緒に行動しているユウリさんの事もあり。ログハウスで待機していると言ってごめんね?と手を合わせていたおねえちゃんの事を考えていると

「簪。遅れていますよ、頑張ってください」

先を走っているエリスがそう声をかけてくるけど、正直これで手一杯だ。シエンさんやクリスさんは平気そうな顔をしてどんどん周回を重ねている。今は考え事をしてるときじゃない、しっかりと自主訓練に集中しないと……

(もつと身体を鍛えないと……)

体力にしてもそうだけど、私は体力が大分少ないようだ。もつと鍛えておかないと……大きく深呼吸をして走る速度を上げようとした所で声を掛けられる

「無理しては意味はないぞ?出来るペースでやればいい」

後ろから追いついてきた弥生さんがそう声を掛けてくれる。一番距離を走っているのが弥生さんと箒さんだ、弥生さんは身体能力を買われてギリシャの代表候補になったと聞いているけど……やっぱり体力があるなあ。それと同じ距離を走っている箒さんも体力が凄い……剣道をしている人ってやっぱり体力があるんだなと思いつつ走り出したときよりも大分遅いスピードでグラウンドを一周すると「簪そこまでだ。トラックからでて身体を休めろ」

グラウンドのそばで愛用のノートパソコンを膝の上に乗せたクリスさんがその声をかけてくる。彼女は基本的に分析をしていてある程度スピードが落ちたり、これ以上無駄だと判断した所で声を掛けてくれる。その言葉に頷きグラウンドから出て近くのベンチに座り

「ふー……」

大きく深呼吸をする。ランニングの距離が少しずつ伸びてきているけど、箒さんとかお姉ちゃんとは比べると全然だ。

「大分記録は伸びて来てると思うよ？今度からは微弱な魔力強化を交えてやって見ようか？」

織斑君の魔力の事もあるので訓練に同行してくれていたなのはさんがそう言ってくれる。だけど私的にはかなりの不安があった……魔力だけなら使える。だけど魔力を使いつつ別の行動をする。と言うことが今の私には出来ないのだ、エリスは元々近接や射撃訓練を軍で行っていた為。私よりも高いレベルのマルチタスクを身につけている……しかし私はそれが出来ないのだ

「最初は皆そんな感じだよ。訓練してこつを覚えて、徐々に出来る事を増やしていくの。だからゆっくり頑張りましょう」

にこにこ笑うのはさんに頷き返し、購買で買って来たスポーツドリンクを冷やしているクーラーボックスからスポーツドリンクを取り出し、訓練をしている鈴さん達を見る。基礎体力の向上か近接訓練を優先するかは自分で決めているので、これと言った特別な訓練ではないんだけど、龍也さんが作ってくれたISの武器を模した特製の木刀を使う事で、自分の武器の間合いや相手とのやり取りを重点的に学ぶための物だ。私のも3分割で作ってくれているから、少し休んでからエリスかシェンさんに頼んで訓練を試みようかな？と考えていると突然空気が重くなる

「一夏！マドカ！早くこつちへ!!!」

隣で笑っていたなのはさんが突然怒声を上げる。もしかしてネックの攻撃なのかもしれない、鞆から待機状態の打鉄式式を取り出すとすると

「無粋ですわ」

静かな女性の声と同時に黒い閃光が走り私の手からISが弾き飛ばされる。私だけではなく箒さんやエリスも同様だ……黒い空間から伸ばされた手が闇の中に消える。それと同時に闇が砕け散り

「ッー」

セシリアさんが息を呑むのが判る。私達も同じだったからだ、私達の目の前にいたのは白い日傘を差した瞳孔が縦に割れた女性の姿「ごきげんよう。そう怖い顔をしないでくれませんか？」

穏やかな口調だが、目が全く笑っていない。それに信じられない寒気を感じる……姿は完全に人なのに、纏う雰囲気が違うだけでこうも恐ろしい物なのか……

「あまり魔力を使うな。面倒な事になるぞ、ヴィステイーラ」

「失礼。ラーベル・レーゲン」

セシリアさんのネクロの影から姿を見せたのはラウラさんのネクロだった。表情や雰囲気はラウラさんと同じだが、その雰囲気は鋭い、まるで首筋に鋭いナイフを突きつけられているかのような感覚だ「何をしに来た？」

なのはさんがデバイスを展開しながら尋ねるとヴィステイーラとラーベル・レーゲンは懐から待機状態のISらしき物を取り出して「どうぞ？お預けしましょう。私のコアはこれですので身につけてなければ魔力を使う事は出来ませんわ」

「正し。破壊しようとするれば私達の手元に来る、今の私達に敵対の意思はない」

何を考えているのかが判らない。なぜなのはさんにISを渡したのか？そして何をしに来たのか？

「何をしに来たの？」

「簡単ですわ。ボールだけが一夏さんとお会いしたというのがどうしても納得行きませんの、敵対する意思はありませんわ。折角の昼下がりに。お茶会などはいかがですか？」

「無論。私も武器は持ってない。完全に無防備だ。ネクロだから身体が武器といわれればそれまでだが……敵対する意思のない人間を敵に回すほど愚かな真似はしないだろう？高町なのは？」

余裕と言う態度を崩さないヴィステイラーとラーベルレーゲン。それに対してなのはさんは渋い顔をしている、龍也さんがいないから決定権ははやてさんにあるが、向こうの真意が判らないので判断に悩んでいるのだろう

『ええで、正しIS学園では駄目や。この場所で1時間。それだけや』
空中に現れたはやてさんの映像がそう言う。どうやら向こうでも2人の出現に気づいていたのだろう

「充分ですわ。参加者としてこちらが指定するのは一夏さんのみ、後の取るに足りない人間は……どうでもいいですわ」

完全に私達を見下す目をしているヴィステイラーにセシリアさんとラウラさんが

「私は同席します！誰に何と言われようと！」

「私もだ。問題ないな？なのは？」

2人の目を見たなのはさんは溜息を吐きながら私達を見て

「一夏とセシリアとラウラを残して全員IS学園へ、私とはやてちゃんじゃ3人が限界だから」

自分も当然と言いかけていたマドカさんと箒さんがうっと呻く。ただどそれだけ危険なのだと判断し、セシリアさんとラウラさんと織斑君を残してIS学園に戻ろうとしたんだけど

(簪、これを)

なのはさんが私の手の中に小さな機械を押し付ける。なのはさんは前を見たまま

(フェイトちゃんの使い方を聞いて。ツバキさんの所で待っているはずだから)

前を見たままで念話で言うなのはさん。ヴィステイラーやラーベルレーゲンに気付かれないように小さく頷き、私達はグラウンドを後にしたのだった……

訓練に来ていたグラウンドに現れた、私と瓜二つの顔をしているヴィステイラーと名乗るネクロ……背は私よりも頭半分ほど高い、すらつとした体型をしていて、ネクロではないと言うことを知らなければ

ばもしかしたら姉と想ってもおかしくはないと思うくらい私に似ている。ラウラさんも同じようで気難しい顔をしている

「お茶のご用意をしても良いですか？」

日傘を畳んで笑うヴィステイラ。なのはさんは表面上は笑いながら

「はやてちゃんが持つて来てくれるから心配しなくていいよ」

「心配ではなく、警戒しているの間違いではないのか？」

ラーベル・レーゲンがやりと笑いながらなのはさんに挑発的な視線を向ける。ただ会話をしているだけなのに空気が重い……残ると言ったのは間違いかもしれない。だけど……一夏さんだけを残して去る事も出来ない。それに平行世界の私と言うのも気になっていた。あの強気な鈴さんがあれだけ落ち込んでいた平行世界の自分の存在。いつかは私も対峙するかもしれないのだからあつておこうと思ったのだ……だけど

(思っていたよりきついですわ)

自分と全く同じ姿をしているネクロ。覚悟はしていたつもりだが、こうして目の前にするとかなりきつい物がある……互いに無言で過ぎているのもつらい。早くはやてさんが来てくれないかと思っ

ていると

「待たせたなあ？ちよつと遅れて待ったわ」

魔法瓶を2つ手にしたのははやてさんが来てくれる。これで少し代わると思い、差し出された紙コップの紅茶を一口飲もうとしたところできよつとした。ヴィステイラもラーベル・レーゲンも砂糖をこれでもかに入れ、更にミルクも大量に紙コップの中に入れていたからだ

「そ、そんなにに入れて味がするの？」

黙っている事のできなかつた一夏さんがそう尋ねるとラーベル・レーゲンは

「むしろこれくらい入れないと味がしない。ネクロの味覚は人間と違う、なまじ人間の記憶があるというのもつらいものだぞ？なんせ記憶で美味しい思っていた物の味がしないのだからな」

ふふつと小さく笑うラーベル・レーゲン。味がしない……どんな物

なのか想像も出来ないが考えるだけでも判る。食べる事は生きる事なのだから

「それで？本当にお茶会をしに来ただけなんか？」

はやてさんにそう尋ねられたヴィステイラは穏やかに笑いながら

「そうですね。イナリやヴオドオンがいないので抜け出してきました。ベールだけと言うのは不公平でしょう？」

一夏さんを見てふふふと笑う。その仕草も私に似ていてそれが更に私を混乱させる……こうして見ると本当に人間と同じだ。敵だと判っているのだが……

「どうしてヴィステイラとラーベル・レーゲンだけなの？他のは？」
「寝ている。私達が目覚めるのが早かったそれだけの理由だ」

寝ている……？言葉短く呟くラーベル・レーゲンは私とラウラさんを見て

「気になるなら聞けばいいだろう？答えてやるぞ？元々は同じ存在、そう敵対する理由もない。いや敵対する理由はあるが、今は殺す理由がない。まだその時ではないからな」

言葉の中に自然と出た殺すという言葉。それは確かに簡単に言葉に出来るが、私達の言う言葉とネクロが言うことではその重みが違う。こうして向かい合って紅茶を手に話をしている、普通の光景だが。少しでも対応を間違えれば瞬きをする間に殺されるかもしれない……私はその殺すの一言で今時分がどんな状況になっているのかと言うことを理解したのだった。流れる汗を見たヴィステイラが「恐れることはないでしょう？今は殺しませんよ？今はね？楽しいお茶会に血は必要ありませんもの……まあ動かなくなつた人形を作るのはやぶさかではありませんが……」

一夏さんを見てくくつと小さく喉を鳴らすヴィステイラ。動かない人形？……その言葉の意味を理解できないではやてさんとラウラさんが

「ネクロフィリア」

死体愛好家……まさか……顔から血の気が引いていくのを感じな

がらヴィステイラを見る。ヴィステイラはにやりと笑いながら「正解ですわ。動く事もなく、喋る事もない。しかし私だけを見てくれる最高の人形。それを欲して何が悪いのですか?」

笑いながら言うヴィステイラだが、その顔は酷く歪み、歪な物だった。見ているだけで嫌悪感を感じるそんな笑み。私はヴィステイラその言葉はどうしても許容できず、文句を言いたかった。だけどそれはできなかった。どんよりと淀んだ目、その瞳に映るのは歪んでいるが真つ直ぐな好意。

(あれは私……私の中にもあんな闇があるというのですか)

死体でも良い。自分を見てくれるなら……今の私にそんな考えはない。だけど……私の心の奥底にある欲求がそうだとしたら?……そう考えると手が震える……私は凄まじい喉の渇きを感じ紅茶を飲んだのだが、その味を一切感じることはなかったのだ……

ヴィステイラとラーベル・レーゲンが出現したと聞き。私も行くと思ったのだけど、はやてからここで待機して欲しいといわれた。その理由は龍也からの連絡もあるだろうし、それに私は近接タイプの魔導師だ。下手に警戒させる状況を作るのは良くないと判断したはやての判断に従う事にしたのだ

「フェイトさん。これなのはさんからです」

「ありがとう簪」

簪から渡された正方形の機械を見る。これは多分スカリエツティが最近開発した新型のサーチャーだろう。新型として配置型ではなく、2つ1組で運用されサーチャーと言うよりは離れた所から監視するカメラとでも言えればいいのだろうか?

「フェイトさんそれは?」

ツバキの問い掛けに私は手にした機会を机の上に置く。説明するよりも話したほうが良い……虚空に浮かぶディスプレイにはヴィづティイラとラーベル・レーゲンの姿が映っている

「これは通信をしているのか?」

マドカの問い掛けに首を振る。最近多い人型ネクロ。本来はそれ

の監視もしくは発見を目的にしたサーチャーなのだが……

「本来はネクロの搜索もしくは人に紛れている人型ネクロの発見用のサーチャーなんだけど、今回はヴィステイラとラーベルレーゲンの目的を知るのに使おうと思ってるね」

本来の使い方とは全く違うし、普通にTVとかデバイスによる監視をすればもつと早い。だけどこれにはこれの利点がある

「態々こういう機械を持ち出したということは何か利点がある?」

ノートPCを立ち上げながら尋ねて来るクリス。分析を得意とするクリスらしい着眼点だ

「そ、これは魔力も発生しないし、電波も発生させない。まあこっちからも完全に通話とかは出来ないんだけど……それなりに便利なのかな?」

「疑問系なのはなんで?」

箒の問いかけに苦笑しながら正直に言う

「いや、私って本当は執行官で、えーと現場の指揮とか法に順ずる操作の権利とかを持つてるんだけど……最近現場に出るのが多くて、最新の装備を使うのってこれが正直初めてで」

あははと苦笑しながら言う。執行官としての仕事を疎かにしているとは自分でも判っているけど、ネクロの事もあるから中々思い通りに行かないのが現実だ。支給はされたが使うのは初めて、多分なのはとはやても同じだと思う

「大丈夫なの?初めて使うんでしょ?」

不安そうな顔をしているツバキさん。だけど私は初めて使うが、なんの不安もなかった

「大丈夫だと思います。ちゃんと正規装備として支給されてるものだから大丈夫だと思う」

正規の手順を踏んで支給された物だ。ネクロとの戦いに関するもので中途半端な物は許されないと、そう考えれば初めて使う機械だとしてもなんの不安もない

「そろそろ会話が始まるみたいだね。向こうの出方も知りたいし……それになによりも……」

向こうから態々出向いてきて、武装を解除した。友好的と言うよりはただ気まぐれとでも言うのだろうか？人が他のネックは極めて人間に近い思考をしている。一夏に会いたくなつたと言われるとその可能性もありえると思う自分がいる。

「一夏やセシリアにラウラは大丈夫なのか？」

弥生の心配そうな声に頷く。向こうも馬鹿じゃない、多分龍也がこの場にいないことは計算のうちだろう……だけどその程度でどうこうなるような甘い戦場を潜り抜けてきたのではない……こういう事態もしつかりと想定している。

「さてと……始めますか」

モニターでなのはやての位置を確認しながら、微調整を繰り返しながら座標軸を入力していく。本当ならばやてならもつと早いんだけど……こればかりは仕方ない

「何をするつもりなんだ？下手に動くときセシリア達が危険に晒される事になるぞ？」

「そりゃなのはとはやてがいるから心配ないって言えばそうだろうけど、一応友達だし、一夏が危険な目に合うのはいやだからね」

「やっぱり今からでも僕は戻るよ。AMF弾を片っ端から装填すれば……」

ぶつぶつと呟いているシャルロットに怪訝そうな顔をしている鈴とヴィクトリア。口にはしていないが文句を言いたそうな顔をしている箒達。私はキーボードを叩く手を1度止めて

「皆が助かる最善の手はあれしかない。判るかな？判ってないんだよ。ネックの脅威って言うのをさ……今やってるのだから増援が来ないように空間を封鎖する結果を作っている。これから箒達は自分のネックに会うかもしれないんだよ？今日先の事じゃない、もつと先のことを見てみたらどうかかな？」

向こうも馬鹿じゃない。龍也が来れば自分たちだけでは不利だと判りきっている。恐らく今回の来訪は独断、その上で負傷をすれば自分の立場が危うい。だから今回は攻撃をして来るはずがない。それに龍也には連絡をしてある、とは言え束の保護に成功したが、束を連

れては転移は出来ないからすぐに来れる訳ではないが今こっちに向かってくれているのだ。それまで時間を稼ぐ事を考えればいい、しまったという顔をしている筈達にツバキが声を掛けてくれる

「判ったら落ち着いて座って話を聞きなさい。少ないけど情報が得れるチャンスなのよ？それを無駄にするのは止めなさい」

こういう時自分の経験のなさを感じる。私はこういう精神的なフォローは正直苦手だ。ツバキがいてくれて良かったと安堵の溜息を吐く。これで自分の作業に集中できる。はやて達とヴェイスティーラ達の会話を全て録音すると同時に封鎖結界を展開する準備を進めるのだった……

127話に続く

第127話

第127話

私はログハウスの前で腕を組んでうろうろと歩き回っていた。I S学園の近くのグラウンドにセシリアちゃんとラウラちゃんのネクロ。ヴィステイラとラベル・レーゲンが現れたと聞いている……

「あーもう！何で早く帰ってきてくれないのよ!!!」

龍也さんとユウリに文句を思わず言う。今帰ってきていると聞いているんだけどその姿は見えない……

(ああ……もうどうすればいいのよ！)

私の力ではとてもではないが、LV4ネクロ相手では何も出来ない。

「落ち着きなさい楯無。ここで慌ても私達には何も出来ないわよ」

スコールさんが私にそう声をかける。それが一番正しいと思う……それでもただ座っていることなんて出来ない

「それでもだ。落ち着け楯無……出来る事をする。それしか出来ないんだよ。相手が化け物だ……人間に出来る事は決まっている」

こういうのは経験の違いと言わざるを得ないのだろう。暗部とは言え人の生き死に関わるような仕事をしなかった私と、表に出る事

のない組織で動いていたスコールさんとオータムさん。その経験の差が出ているのだろう

「焦るのは判るわ。何かしてあげないと思うのも判る、けど何も出来ないの。自分に出来ることをしましょう？恐らく衰弱しているであろう束と負傷しているかもしれないユウリやフレイアの治療。その為に私達はここにいるのよ」

スコールさんの諭す口調。親が子供に言い聞かすような口調だ。そのおかげで冷静になってきた……無論子供と言われている気がして若干いらつとしたが実際子供なのだから仕方ない

「戻って何か飲もうぜ。そのほうが気が紛れる」

そう言ってログハウスに入っていくオータムさんの背中を見てい

ると

「オータムもあれはあれで気にしてるのよ」

スコールさんの眩きに振り返るとスコールさんは小さく笑いながら

「口は悪いけど面倒見がいいからね。ラウラとセシリアを心配してるのよ」

おかしそうに笑うスコールさん。確かに簪ちゃん達の訓練を見てくれていることもあるし、口は悪いけど良い人と言うのは間違いないだろう

「信じて待つてみるのもいいものよ？行きましょう」

そう笑うスコールさんに頷き、私もログハウスの中に足を踏み入れたのだった……ユウリも龍也さんもきつと無事だし、セシリアちゃんとうらちゃんも大丈夫なはずだ。なのはさんとはやてさんがいるのだから……きつと大丈夫なはずだ、自分に言い聞かすように眩くのだった……

砂糖をこれでもかとカップの中に入れてるラーベル・レーゲンとヴィステイーラ。セシリアは顔色が若干悪い……だがそれは無理もない

（ネクロになった自分がネクロフィリアとすればショックも受けるか）

軍の中には稀に存在する死体愛好家「ネクロフィリア」黒兎隊にはいないが、軍に関係する物ならば発症する可能性のある精神病だ……死に近い物で精神に異常を来たした場合そうなる物がある

（一体何があつたのか）

ネクロになったとは言え、何かのきつかけがあつたのかもしれない。とは言え……その事を聞くわけには行かない。下手に聞いて気をそこねたら不味い事になりかねない……

「さて……私よ？何かを考えているのだろうか？聞かないのか？」

ラーベル・レーゲンがやにやと笑いながら尋ねて来る。どうした物かと考えているとなのはが私を見て小さく目配せをする。聞いて

みろって事なのかもしれない……私は目の前の紅茶を一口飲んで気を静めてから

「お前は何がしたくてここに来たんだ？」

ヴィステイーラにしてもそうだ。一夏に残れと言った……それは間違いなくなにか理由がある筈だと思い尋ねるとラーベル・レーゲンは私とセシリアを見て

「なに誰を殺せば一番一夏が私を憎んでくれるのかと思ってな」

くくつと喉を鳴らすラーベル・レーゲンを見てヴィステイーラはやれやれという感じで肩を竦め

「ラーベル・レーゲンは憎悪を向けられたいんですよ。殺意でも構いません、強力な負の感情を向けられるのが好きなのですわ」

その言葉に私はぎよつとした好意ではなく憎悪を向けられたい。それはネクロフィリアと比べてもかなり特殊な物だと判る

「ネクロフィリヤよりかはました。あの時のイチカの憎悪……あれは今思い出しても素晴らしい物だった……」

自分の体を抱くようにして呟くラーベル・レーゲン。その目に正気の色はなく、完全に狂っているのが判る。今まで冷静な言動をしていたので少しはまともかもしれないと期待したが、やはりこいつもまともではなかった……それと同時に私にもそれを望んでいるのかもしれないと思うと苦しくなる……あの光を宿して居ない目が私を見ているとその闇に引きずり込まれそうな気がする……

「お前も判るかも知れんぞ？愛情と憎悪はとても似ている。狂ってしまえばそれさえも愛おしくなるぞ？」

ラーベル・レーゲンが私に手を伸ばしながら告げる。どんどん足元が崩れていくような気がする、それだけじゃない闇が私を飲み込もうとしているのが判る

「止めてくれへんかなあ？無理やり落とそうとするのは」

はやてが手をパンつと叩くとその嫌な感じは全て消えた。だが気持ち悪さと頭痛を感じて倒れかけると

「ラウラー・大丈夫か！」

一夏が素早く立ち上がり私の身体を支えてくれる。その暖かさに

安堵し一夏の手を握り返すと

「……来ましたね。思ったよりも早かったです」

ヴィステイラーが楽しそうに笑う。その目は期待通りの結果になったの言わんばかりに輝いていた……その隣のラーベル・レーゲンは楽しそうに笑っている

「見たか?……今の一夏の顔を……それだ。その目だ、そのその眼だ……怒りを宿したその目……その目をしているお前が最も美しい……私が憎いのだろうか?この距離なら確実に私のコアを砕けるなあ?イチカ」

楽しそうに笑うラーベル・レーゲン。顔を上げると見たこともないくらい怖い顔をしている……一夏……その眼は普段の優しい一夏の物ではなくネクロのそれを連想させる……待機状態の白式が黒く染まっていく、まさか暴走?!咄嗟に一夏を止めようとするが、その凄まじいまでの殺気に身体が動かない……徐々に一夏を覆っている黒い気配が強くなっていく。それを見て笑みを深めているラーベル・レーゲン

「ラーベル・レーゲンツ!!!」

一夏の目が完全に闇に染まり、声のトーンも低くなる。それを見て更に嬉々とした笑みを浮かべるラーベル・レーゲン。私とセシリアを振りほどいて手を伸ばそうとする一夏、これは私の知っている一夏じゃない!暴走か!恐ろしいと思う、だけどこのままにしてはいけないと一夏の身体を押さえた瞬間

「一夏ツ!!しつかりせんかい!!」

はやての強烈な一喝が響く。そのあまりの怒声に思わず、一夏を止めていた両手を放して自身の耳を塞ぐ。近くにいたセシリアは大分ダメージを受けたようで渋い顔をしている

「はっ!?お、俺は……何をしようとした……」

頭を押さえて蹲る一夏。今度は私とセシリアが一夏に近寄る。酷い顔色だ……それに汗も酷い……

「セシリア。ハンカチを私は脈を見る」

一夏の手首を掴むと信じられないくらい脈が高い。それに荒い呼

吸を整えている様子を見るとただ事ではないと思う

「ヴィステイラー・ラーベル・レーゲン！一夏さんに何をしたのですか！」

一夏の額の汗を拭いながら叫ぶセシリア。確かあの2人は怖いんだけどそれ以上に一夏を失うのは恐ろしいのだ。立ち上がって二人に詰め寄ろうとするセシリアに

「落ち着きなさい！下手に刺激したら駄目！そのほうが余計一夏の暴走を早める！」

なのはの怒声に私とセシリアの動きが止まる。どうということなのか理解できない……私とセシリアがはよての顔を見ると

「ここに来たのはこの世界の一夏の存在を消して自分達の知っている一夏を呼び出すことか？随分と回りくどい事をするなあ？」

笑っているが目の笑っていないはやて。その顔は見たこともないくらい険しい顔だった、それくらい危ない状況だったのかもしれない「うっ……」

小さく呻いて意識を失う一夏を私とセシリアで抱きとめる。その身体酷く脱力していて危険な状態だと判る……直ぐにでも医療室に運ばないと行けないと言うのは判っているのに、私はその場を動く事が出来なかった。なのはとはやて、ラーベル・レーゲンとヴィステイラーの間に発生している重い空気を前に私が出来たのは、意識のない一夏を抱き抱え、少しでもラーベル・レーゲン達から引き離す事だけだった……

惜しい所でしたね。もう少しだったのですが……私達がここに来れば私達の世界のイチカさんが出て来てくれると思っただけですが

「油断していました。貴女が高度の精神感応の術を使えるとは思っていませんでした」

あの一喝は只の声ではなかった。念入りに魔力コントロールをされた物……私達には効果はないが、普通の人間ならそれだけで意識を失いかねない物だ

「広域殲滅しか見せてないでなあ？この世界では、私はオールラウン

ダーや、幻術から回復補助まで何でも得意やで」

にやりと笑う八神はやて。話には聞いていたけど、この世界ではあまり戦闘に出てこないのでもそこまでは思っていないなかつたのだ

(分が悪いかもしれないですねえ……)

夜天の女神・雷光の戦乙女・星光の女神……そして夜天の守護者……その中で夜天の女神。すわなち八神はやてがもつとも強敵だと聞いていたが、本当のことだったようだ……索敵タイプの私の感知をすり抜けて発動した精神感応を考えると相手の実力が判ると言う物だ

「貴女が何を考えているのかは知りませんが！ 私達の一夏さんを奪おうとするのは許しません！」

今までの怯えの色はどこへ行ったのか、強い意志の光をその目に宿し叫ぶこの世界の私……仮に同じ立場だとしたら私だってそうするだろう……だけど

「何も知らない貴女に言われたくはないですね。私達が何のためにこの世界に来たのか、そして1度死んでもなお、蘇った私達の想いの深さも知らない癖に」

私達は人として死んだ。そしてネクロとしても死んだ……それでもなおお生きている。だがそれには相当のリスクを背負っているのだ

「今一度死ねば私達の魂は完全に消滅します。転生することはないでしょう……判りますか？ もう私達には道はないのですよ。この世界からすれば私達は異物……ほら……見てください。ただ1人を愛し、死んでもなおその人を追いかけた私達に課せられた罰はこれですよ」

私がこの世界の私に向けて伸ばした腕は徐々にその色を失い、黒く染まっていく……隣のラーベル・レーゲンも同様だ。正し彼女の場合は顔から黒くなっているが

「何が……起こっているんだ」

この世界のラウラが呟く、まあ魔法のない世界の住人では私達に何が起こっているのか理解出来る訳がありませんね

「……世界に喰われてもなお一夏を求める……それはもう愛じゃなくて呪いだよ」

流石は魔道師として高位な高町なのは。私達の今の状態を理解しましたか……世界からの異物は消えるだけ、この世界の私達が存在する以上私達は短時間しか同じ空間に存在する事ができないのだ……だけど今日の前にいるこの世界の私を消せば……

「何と言われようが気にしません。私は私の思いを貫くだけですわ」

この消えていく身体、だけど私のイチカさんへの思いは消えるわけもなく、強くなる

「確かに今の私は消えかけていますが……だけど……こうしたら私は永遠に存在できますわ！」

呆然としているこの世界の私に手を伸ばす。魔力が使えなくてもネクロの力を持つてすれば、人間の首をへし折るなんて容易い。一瞬で間合いを詰め首に手を伸ばそうとして

「ッ！」

体を反転させて無理やりブレイキをかける。直感的に感じた……自分の死のイメージを……

「勘が鋭いな。楽に一体倒せると思ったんだが」

何も無い空間から浮き出るように姿を見せる八神龍也。どうやらイナリの方は失敗したようだ……奇襲を仕掛けて傷をつけることが出来れば御の字だが……

(逃げれそうにないな。如何する？ ヴィステイラ)

完全に臨戦態勢になっている八神龍也の隙を突くなんて不可能に近い。険しい顔をしているラーベル・レーゲンの問い掛けに眉を顰める。

「さて。このような場で血を見せるのは些か本位ではないが、この機会逃すにあまりに惜しい……苦しませよう……一刀で死ね！」

来る！ 咄嗟に飛びのいて交わそうとするが、足は動かない。良く見ると影が私の足を縛り上げている

(しまった！ 八神はやては影使いだった)

影だけではない。光に闇・水に炎。ありとあらゆる属性魔法に長けているのが八神はやて……腕をクロスして防ごうとした瞬間

「ちい！」

舌打ちと同時に八神龍也は自身のコートで炎を防ぐ。そして私とラーベル・レーゲンには怒声が届く

「ヴィステイラー！ラーベル・レーゲン！早く撤退しろ!!」

イナリの怒声と私とラーベル・レーゲンの後ろに現れた桜鬼

「馬鹿が、勝手な事をするからだ」

その言葉に何も言い返すことが出来ない。素直に頭を下げ桜鬼の腕を掴むと同時に私達の姿はこの場から消えたのだった……

桜鬼と言う筈のネクロはどうやら空間を繋ぐ事が出来る様だな、私の結界を何の苦もなく潜り抜けて行った姿に確信する。桜鬼の能力は空間移動にたけた能力なのだろう。一瞬現れたベリトとイナリの姿も見えない……束とクロエをログハウスで待機していた楯無たちに預け直ぐ転移してきたのだが、逃げる事を目的にしていたベリト達を捕らえることは出来なかった

「無事とはいえそうにないな？大丈夫か？」

青い顔をしているセシリアと気絶しているであろう一夏を抱えているラウラ……

「精神攻撃を防ぐのが手一杯で何も出来ませんでした、すいません」

なのはが謝る。ラウラとセシリアを護るのに手一杯で話し合いに参加する余裕がなかったことを謝っているのだろう。だけどそれがなければラウラとセシリアも危険な状態になっていたかもしれないので、それを叱責するのはお門違いだろう

「束は？」

アズマを助ける事は難しいとはやてには話していた。私には判っていたのだ、アズマがクローンだと……だからアズマの事を尋ねてこないはやてに

「保護には成功した。ただ……アズマ・ワンイレイサは死亡した」

あの爆発の中では生き残れないだろう。自分の道を貫き通したアズマには敬意さえ感じる……死んだという言葉に更に青い顔をするセシリア。だがラウラは違っていた……

「龍也……教えてくれ、ネクロになった私が私を狙う理由を……まだ

何か隠しているんだろう？教えてくれ……」

軍人であるラウラは震えてはいるが、既にもう会話の出来る状態だった。確かに私は隠している事があった。まだ教えるには早いと思っていたが、こうしてIS学園の周辺に来た事を考えると時間的な余裕はない。一夏にしてもそうだな

「判った。IS学園に戻ったら話す」

もう隠すのも難しいだろうし、覚悟を決めさせるのにもいいかもしれない。こうして本格的に動いてきた事を考えるとベエルゼが動き出そうとしているのだと判る……私は気絶している一夏を肩に担ぎ

「はやてとなのははラウラとセシリアを頼む」

気丈な素振りを見せているが、2人も相当限界が来ている。なのはとはやてが軽減したがそれでもネックの魔力は人体には有毒だ

「りよーかい、ラウラ。いこか？」

「う、うむ。頼む」

はやてに手を借りて立ち上がるラウラ。軍で鍛えているからか、若干のふらつきは見えるが足取りはしっかりしている

「大丈夫？セシリア」

「だ、大丈夫ですわ」

セシリアは今にも倒れそうな顔色をしている……精神的に来てるのは判るが、それでも前を向いているセシリアの精神の強さには驚く。私は気絶している一夏を落とさないように気をつけ、このグラウンドを後にしたのだった。とりあえず、このグラウンドはもう使えないなど思いながら……こうして転移してきた以上この場所はもう安全ではないのだから……

第128話に続く

第128話

第128話

ヴィステイラとラーベル・レーゲンが消えた後。僕達はIS学園の地下の研究室を飛び出して、門の方に走っていた。一夏の事もあるし、それに見えて気になったこともある。今回ばかりは龍也に全てを教えてもらおう権利がある

(このままだと一夏が遠くに行ってしまう……)

きっとこれは僕だけではない筈だ。ラーベル・レーゲンと一夏の身体が黒くなったのは同じ現象のような気がしてならない、僕と箒と鈴が無言で走る。今回ばかりは何をしても龍也に話を聞かせてもらわないといけない……僕達には知る権利があるはずだ……

「何をしている。もっと早く走れ」

いつの間にか現れて僕達の前を走っている織斑先生に少しだけむつとしながら、僕達は走る速度を速めたのだった……

凄まじい勢いで走っていった千冬達。正直言って止める間もなかった……この場に残っているフェイトさんに

「どういうことか説明してくれる?」

私だけじゃなくて簪ちゃんにエリスちゃん。それに……残っている全員の視線が集中する。束をログハウスで監視している楯無達はこの場にはいないけど、モニターを通じてみているはずだ

「……私も全部を知ってる訳じゃないからね? 龍也はあんまり情報を教えてくれないから」

フェイトさんはそう前置きしてから椅子に座りなおし

「修正力って言ってなんか世界ごとに正しい歴史に治そうとする動きがあるんだって」

修正力……そうして聞くと疑わしいけど、魔法使いが言うのなら本当かもしれない、説明されて理解できるとは思えないけど……

「えーとつまりどういう話なの? 私にも判るように説明してくれない

かな？」

シエンちゃんがそう尋ねる。フェイトさんはうーんと唸りながら「えーとね。シエンがこの場にいるでしょ？それで未来とか過去のシエンが来ると、修正力で過去か未来のシエンは記憶に制限とかが掛かるんだ。最悪の場合、消失とかね？同じ存在の人間は同じ世界には存在できないらしいよ？もちろん例外はあるよ？同じ存在だけど、決定的に何かが違うとかね？」

同じ存在の人間は同じ世界に存在できない……その理由は良く判らないけど、何かあるのかもしれない

「その修正力とやらでセシリアのセシリアのネクロは同じ世界には存在出来ないと言うことなのか？」

ヴィクトリアちゃんの問い掛けにフェイトさんが首を傾げながら呟く。どうも自分でも良く理解できていないようだ

「多分……私はそうだと思う。修正力なんて私達にはわからないし、はやてでも良く判ってないと思う」

つまり詳しく理解しているのは龍也君だけって事なのね……：：：：：どあの黒く塗りつぶされたかのような手足が凄く気になるんだけど……

「じゃあ一夏の手足が黒くなったのはどういう理由ですか？」

エリスちゃんの問い掛けにフェイトさんは直ぐに答えず、考え込む素振りを見せている。その表情を見ると話して良いのかどうなのか？と考えているように見える

「答えるなら答えてくれ。私達にだって知る権利はあるはずだ」

弥生ちゃんが自分の手の平に拳を打ちつけながら言う、勿論子の程度で威圧になるとは思えないが……まどろっこしいのは嫌いだという意思表示にはなっている

「弥生ちゃんの言う通りだと思うわ。いい加減に話してくれても良いと思うわよ」

龍也君は意図的に情報隠している。それは確かに私達のことを考慮してのことだと思うが、ここまで来たのだから私達には聞く権利があるはずだ。それに隠し事をされてはいきぎと言う時の不信感に

なりかねない

「……フェイトさん。違ったらすみません……」

「私と簪なりに考えて見たんですが……一夏の手足が黒くなるのはネクロ化なのではないですか？」

エリスちゃんと簪ちゃんの言葉に思わずまさかと言いかけるが、それが本当と言うことを証明するかのようにクリスちゃんが

「龍也から聞いた情報を纏めてみたが、ネクロ化は黒くなるのが始まりのようだな？正直な所どうなんだ？」

ノートPCの画面を向けながら尋ねるクリスさん。フェイトさんは言いにくそうにしている……まさか本当に

「クリスと簪そしてエリスの言う通りだ、白式が黒くなるのはネクロ化に近い状態と言えるな」

龍也君の声に振り返ると千冬達を連れて地下に降りてきた所だった。楯無とユウリの姿も見える。今IS学園でネクロの事を知っている全員が揃った……フレイア達の姿が見えないのは束の監視をするためだろう

(あ。一夏君だけいない……)

姿の見えない一夏君はよほど酷い状態なのかもしれない。もしくは聞かせる事が出来ないほどに酷い内容と言う可能性もある……龍也君達が椅子に座った所で、同じように地下に降りてきたばかりの千冬が龍也君の方を見て真剣な顔をしながら

「早く教えてくれ、一夏の今の状態を」

焦っているかのように見える千冬。事実焦っているのだろう、自分の弟の今の状態について私達の医療や科学では判らない。知っているのは龍也君達だけなのだから

「今の一夏に起きているのは……魂の浸食。ラーベル・レーゲン達同様。魔道師としての一夏の魂が今の一夏の魂を取り込もうとしている状態だ」

魂……霊的なことは良く判らないけど……今のままでは一夏君が一夏君ではなくなる。それだけは私にも理解できたのだった……そして普段は凛々しい顔をしている千冬と箒ちゃんの顔が一気に泣き

顔に近くなり、鈴ちゃん達は茫然自失と言う感じになる

(確かにこれは隠すわね……)

今まで龍也君が教えなかった理由を理解し、私は深く溜息を吐くのだった……

今までの事からある程度の推測は出来ていた。しかし確信が無かった、だからあえて言わなかったが、今回はそうも言ってもらえない「まず白式が黒くなる理由と仮面が現れる理由だが、恐らくネクロ化と見て間違いないだろう」

これはジェイルの見解でも同じなので間違いない。だがこれに待ったを掛けた者がいた

「しかしそれはおかしくはないか？一夏は確かにネクロと戦った。だがそこまで何度も接触したわけじゃない、ネクロの因士の浸食の条件を満たしてないのではないのか？」

千冬の言葉はそうであってほしいと思っているのが良く判る。確かにおかしいと言われればそれまでだが

「理由はある。この世界の一夏がネクロの因士には感染していない……だがヴィスティーラ達の世界の一夏はどうだ？」

これは私の出した結論だ。話によればヴィスティーラ達の世界の一夏は魔道師としての適性があり、なおかつネクロ化してしまった達を救うという目的の為に戦っていたらしい。となればその戦いの中でネクロの因士に感染していてもおかしくはない

「でも別人なんですよ！あたし達はなんともないじゃない！それはこじつけなんじゃないの！」

机を叩いて怒鳴る鈴。確かに信じたくないと言うのは判る。それに私だってこの話が間違いないと言えるわけではない……あくまで可能性の話だ

「これはあくまで可能性の話だ……信憑性は残念ながらかなり高いが……な」

私だって憶測や推測で話しているわけではないのだ、ある程度確証を得ているから話しているのだ

「ミッドチルダでのネクロになれる訓練で私がしたのを覚えているか？」

私の言葉に肩を竦める箒達。何度も何度も失神していたので苦手意識を持つのは仕方ないが、ここで止まられると話が進まない

「デイランス……だったか？ネクロになる禁呪」

ユウリの呟きに首を振る、ネクロになる禁呪と言うのは間違っている。限りなく近い存在にはなるが、あれはネクロ化ではないのだ

「一時的にネクロの領域に足を踏み入れるだけだ、ネクロになるというのは間違っている」

ネクロになってしまえば自力で元に戻るのとは不可能だ、それは私でも同じ事。あくまで一時的にその領域に足を踏み入れるだけだ

「それが何か関係あるのですか？私には関係があるようには「関係大有りだ。デイランスの時の仮面と一夏の仮面。これを見比べてみる」はやてが以前記録してくれた私のデイランスの時の仮面と一夏の仮面をディスプレイに写す。それを見て箒達が息を呑む

「お、同じ……仮面？」

呆然とした感じで簪がそう呟く。形状は僅かに違うが、材質と色は同じだ。しかしこれは只の仮面ではない……あの仮面はネクロの浸食を防ぐ物であり、簡単に言うのなら魂の防衛本能といえる

「これは防衛本能の結晶なんだ。完全にネクロ化しない為のな」

私とて普通にデイランスを使えばネクロ化してしまう可能性が高い。私はそれをアレンジして、仮面を作り出している。本来はあの仮面は存在していないのだ。私の物と似ていることを考えると、概念は全く違うが、一夏が暴走している時の仮面。あれにも自己を保つ効果があると私は推測している……

「ペルソナと言う心理用語もある。そう考えればあの姿もある意味一夏の姿と言える」

護るべき物を全て失い狂った。それはある意味私に似ていると言えるがな……ペガサスの最後の言葉の私の自己満足と言う言葉が一瞬頭を過ぎる。私自身それは嫌と言うほど理解しているのだから、だが今更過ぎる。私は決めたのだ、この業の道を歩むと……

「それと一夏のネクロ化と何の関係が……」

シャルロットの言葉に我に帰り、私は少し考えてから話す事にした。「仮にだ、ヴィスティーラの世界の一夏がネクロの因子に感染していたとしよう。魂と言うのは肉体に強い影響を与える……平行世界の一夏の魂に影響してネクロ化や性格の変化は充分に考えられる」

あくまで可能性の話だが、これは極めて可能性の高い話だ。ヴィスティーラの世界の一夏の事を考えれば、充分にネクロの因士に感染している可能性はある

「なんとかならないのか!!」

咄嗟に立ち上がり怒鳴る筈。セシリア達も立ち上がり口々に私を見て

「なんとかしてくださるんですわよね? そうだと行ってください」

「龍也だけで難しいというのなら私達も協力する。なんとかしてくれ」

「僕からもお願いするよ。僕は今の一夏がいいんだ」

私に何とかしてくれと言う筈達。ヴィクトリア達も私を見ている……私は頭をかきながら何と言えいいのか考える。私は万能ではない、出来る事と出来ない事がある……無論方法がない訳ではない。しかしこれはリスクが高い上に危険だ……

「何か方法があるんだろ? さっさと教えてやってくれ」

「ああ。セシリア達も悩んでいるんだ」

ヴィクトリアと弥生の言葉に更に眉を顰める。この方法はリスクがありすぎる……一夏にも筈達にもだ……失敗すれば両方死ぬ。果たして話すべきなのか……

「龍也。あたしには覚悟がある。あんまり見くびらないで欲しいわね」

「無論私もだ。私には一夏が必要なんだ」

「家族を失うかもしれないという時に黙ってなどはいれんぞ」

鈴、マドカ、千冬の言葉を聞いて私は深く溜息を吐く。どうして女性と言うのはこうも強いのだろうか? 私はそう思わずにはいられなかったが、こうまで言うのだから教えてもいいだろう……

「方法は1つだけだ……やるかやらないかは話し合って決めろ」

私はそう前置きしてから、一夏を救えるかかもしれない方法を口にした。当然ながらショックを受けた様子で肩を落として出て行く筈達、千冬でさえもそうなのだからその心に受けたダメージは想像するに容易い。だから私も話すのを躊躇っていたのだから……

「中々言えない理由が判ったわ。これは私でも躊躇う」

「ああ。よく言ってくれたと思うぞ」

スコールとオータムの言葉を聞きながら紅茶を口に含む。冷め切って不味いがこれでも気分を落ち着けるのは役立つ

「ほかに方法はないの？そんな危険な方法じゃなくて」

「ない。こればかりは本当にこれしか方法がない」

酷な手段だけどな……こればかりは仕方ない。椅子に深く背中を預け目を閉じた。一夏を救えるかもしれない方法

それはあえて暴走させ……精神世界で一夏と平行世界の一夏を戦わせる事……そしてそれは一夏を1度ネクロにさせるかもしれないという方法だった……

「下手をすれば一夏君はネクロになって龍也君に殺される……」

完全にネクロ化すればどうやろうが殺すしかない。半ネクロに転生する可能性もあるが、その確立は限りなく0だ。高ランクの魔道師でさえ、半ネクロに転生したという記録はない。

「その前に箒達が死ぬ」

一夏に呼びかけるのは私では駄目だ。縁の深い箒で出なければ……その言葉は闇の中に居る一夏には届かない、だがそれは箒達に死の危険があると同意義だ……

(やれやれ間々ならないものだなあ)

本当はそんな事にならないように、言葉と訓練で上手く一夏を誘導するつもりだったのだが、そんなにゆっくりやっている時間がなくなっちゃった……私は心の中でそう呟き、隣のはやてに

「少し寝る。勝手に起きるからほっておいてくれ」

さすがに疲れた。ユウリとフレイアがネクロの因士に感染しないように魔力で護り。なおかつ束とクロエと言う少女の治療。更にI

S学園にきていたラーベル・レーゲン達を閉じ込めるたちに使った結界とかなり魔力・体力を消耗してしまった。さすがに休まないと限界だ。

「りよーかい。お休みな？」

コートを体に巻きつけ目を閉じた。束の研究所の事もあり、精神的肉体的にも疲れている。少しやすまないとこれから辛い……

あつと言う間に眠りに落ちた龍也を起こしてはいけないと全員が地下の研究室を後にする。

「楯無……いや、刀奈」

ユウリが女子寮に向かおうとしていた楯無を呼び止める。刀奈と呼ばれた楯無は真剣な顔をして振り返り

「すまない、どうしても話をしたいんだ、少し時間をくれ」

その顔に迷いと不安……そして恐怖の色を浮かべているユウリを見て

「判った。行きましょう」

そう笑いユウリと共にIS学園を後にしたのだった……IS学園にいる殆どの人間が重要な転換期を迎えているのだった……そしてそれは全ての終わりが近いという事の証明でもあった……

第129話に続く

第129話

第129話

束の研究室から帰って来てからユウリの顔色が良くない、それにその顔には不安の色を浮かべている。話をしたいというユウリの頼みを聞いて、IS学園の近くの海が見える丘に向かう

「ここならゆつくり話が出来るわね」

箒ちゃん達も織斑先生も一夏君の事でかなり落ち込んでいたようだし、龍也さんが寝ているからはやてさん達も動く事はないだろう。

「あ、ああ……そうだな」

覇気の無いユウリの顔を見て心配になる。今までユウリのこんな顔は見た事がなかった……一体束の研究所で何があったのか？それが気になるが、それを無理に聞き出すわけには行かない。ユウリが話してくれるのを隣に座って待つ……

「……」

「……」

互いに無言でお互いの顔を見ないままゆつくり沈んでいく太陽を見ている。ユウリがぼそりと呟く

「何があったのか聞かないのか？」

「聞かないわ。ユウリが話してくれるのを待つから」

無理やり聞いて悩みを聞きだすような真似はしたくない。夕日が沈んで辺りが暗くなって来た所でユウリが

「……束の研究所でセリナに会った……」

セリナ……私に似ているネクロの女性……ユウリは膝の間に顔を埋めて

「殺してくれと……覚悟していたはずなのに……いざそう言われると手が震えた……ワタシには……セリナは殺せない。殺すと約束した……だけどワタシには無理だ」

なんの因果なのだろうか、家族として兄妹だった存在がそれぞれ別の陣営に判れ、そして今は殺しあう関係になってしまった

(神様なんて居ないのね。本当に)

もし神様が居るならこんな事にはならなかったと思う。ユウリもエリスちゃんもセリナも兄妹なのに、殺しあうしかないなんてあまりに酷な運命だ

「ワタシは……怖い。セリナと戦うのも……エリスが全てを知るのも……刀奈を失うのも怖い」

大丈夫なんていえない。ユウリは今真剣に悩んでいるんだ……自分達を取り囲んでいる運命も……そしてこれから起きるかも知れない事も……自分が進んでいる道に何が潜んでいるのか、そして道が通じているのか？その全てが判らない事に悩み、恐怖している

(私はどうすればいいの……)

ユウリを助けたいと思うのに、何をすればいいのか判らない……助けてあげたいと思うのに何をすればいいのか判らない。再び互いに無言の時間を過ごしているとユウリが

「少し話して楽になった。ありがとう」

俯いたまま完全にゆっくりと歩いていこうとする。それは夕日が沈み暗い夜道になっていて、そのままユウリがどこかに行ってしまったので……

「本当に助けたいって思う人がいたらな。考える前に行動してしまうものなんや」

はやてさんの言葉が脳裏に浮かんだ瞬間。私は闇に消えようとしているユウリに背中から抱きついていた

「刀奈？」

覇気のない弱々しい声のユウリ。私はユウリの背中に顔を埋めたまま

「私に何が出来るかなんて判らない。足手纏いになるかもしれない」

正直言つて今でもネクロは怖い。改造されたミステリアス・レイデイでも牽制するのが手一杯だった。入念な準備をしてやっつと対等……そんな化け物と戦うのは正直怖い。だけどそれでも戦わないといけないのは判っている

(ユウリを一人にしたら駄目)

前もそう思った、だけど今回はそれ以上にそう思った。セリナを殺したとしてユウリはどうなるか？自身の罪の意識に耐え切れなくてそのまま死んでしまうのではないか？私はそう思った。だから

「ユウリの罪を半分背負う。全部を一人で抱え込まないで」

セリナ相手にユウリだけで戦わせはしない。私も戦う

「辛い戦いになるぞ……ワタシもお前も死ぬかもしれない」

セリナとは1度会っている。その時に理解している、私とセリナは同じ存在に近い。どちらか1人しか存在してはいけない、箒ちゃん達のネクロと同じ。そんな奇妙な感覚を感じていた……そして私もセリナと戦わなければならないと言うことも感じていた。

「それでも構わないわ」

何の因果か同じ顔を持つことになった私とセリナ。これにも何か意味があるのかもしれない、そう。私とユウリを繋ぐ何かがある。私はそう信じたい……あの暗い研究室で出会ったのも何かの運命だったと今では思う

「……一緒に来てくれるのか？」

確認するかのようなユウリの言葉。私はユウリをより強く抱き締めながら

「貴方とならどこまでも」

私はユウリを1人にしたくない……もしも、代表の座そして更識の当主の座それとユウリが秤に掛かったら、私はきっと迷う事無くユウリを選ぶ。

「ありがとう」

「どういたしまして」

互いに笑い合うユウリと刀奈。その2人を写す満月の下……2人の影はそつと重なるのだった……

ミーティングルームの空気は重く、そして誰も口を開くことはなかった。一夏を別の世界の一夏の干渉から救うには1度意図的に暴走させる。だがそれはネクロ化の危険性を帯びた危険な橋だ……

(出来る事ならば別の手段と考えたい)

私は溜息を吐きながら手を組んだ。姉として、家族として私は一夏を助けたい。だがそれでも今回の話はあまりに厳しい

「姉さんは戦えるのか？」

マドカの言葉に小さく頷く、試作段階だが、打鉄に汎用バックパックを搭載した新型打鉄を使う予定だ

「本当は暮桜の方がいいんだがな。ないもの強請りもできない」

いい機会だから先ほどマドカ達にも見せたが、私のIS「暮桜」はIS学園の地下で封印されている。あれを解除できるのは束くらいのものだろうが

「すいません。力及ばず」

「気にするな、あの馬鹿はあれで頭が固いからな」

先ほど保護された束に会いに行ってみただが、心ここにあらずと言う感じで話を聞いてくれる雰囲気ではなかった

「それよりもだ。暴走させると想定して白式をどうやって止めるか。そこが大事だ」

まずは対策だ。龍也の話では龍也・なのは・フェイト・はやての4人で結界を張り、周囲の被害と僅かながらに動きの束縛をしてくれるそうだが

「それでも私達のISよりも強いのは確実ですわね」

戦力予想としては第4世代、紅椿よりも出力が上なのは確定している。さらにネクロ化の可能性も考慮するとかかなりの戦力差がある……それに

「零落白夜の攻略と複段階式瞬時加速。それにレアスキルの対策、これははつきり言つて無理です」

蒼い顔をしているデュノアが言い切る、IS殺しの零落白夜、そして通常のISでは1回が限界の瞬時加速を段階式で使える。そして更に自身を粒子化させる能力。どれか1つでも脅威なのにそれが3つ……

「ツバキさんのバックパックを搭載し、なおかつ支援として更識・アマノミヤ・ルウ・スミスが入ったとしても勝率は5%以下だ」

龍也とはやての分析だからこれは間違いのない数値だ。問題はこ

これから以下に勝率をあげて行くかだ

「分析と対策。それで少なくとも15%台には持っていく。これは勝つための闘いじゃないからな」

暴走している一夏に勝つ必要はないのだ。かつて龍也をも経験したそうだが、一夏が暴走する。それは一夏が戦わないということではない、精神世界で一夏もまた戦うのだ。それは1つの身体に2つの魂。壮絶な戦いになると龍也は言っていた

「勝つ戦いじゃなくて生き延びる戦いかあ……やっぱり強化装甲よね」

「それが堅実だな。出来ればエネルギータンクも大幅に積んでおこう。機動性は死んでもいい、防御力を重視しよう」

凰とボーデヴィツヒが分析を始めた頃。ミーティングルームの扉が開き

「付き合いが悪いなラウラ。それは私の専門だ」

「クリス。手伝ってくれるのか?」

「言われればな?どうする?」

にやりと笑うファウストにボーデヴィツヒは即座に頼むと返事を返せば、今度は更識とアマノミヤが来て

「お義母さんと試しに開発した装甲があるのでそれを搭載してみませんか?」

「わ、私は管制プログラム……を見直してみた」

ISの製作にツバキさんから学んでいる更識とアマノミヤが大量のCDを持ち込んでくる。

「私達はそう言うのは駄目だが。ISの試験運転には付き合う」

「頭を使うのは苦手だからねえ。私達」

「お前だけだ」

「しくしくしくしく」

スミスと薄野そしてルウが来てそう笑う。さつきまでの暗い雰囲気はどこに行っただのか、徐々に明るさを取り戻している。仲間と言うのは大事だなと私はそう思う。1人で何でも出来る、出来てきた私と束には無縁のものかもしれない。静かにミーティングルームを出よ

うとすると

「姉さん?どこに行くのですか?」

それに気付いたマドカが私を呼び止める。私は携帯を差し出して「ツバキさんに呼ばれている、打鉄のフォーマットをしないとな」

普通の調整では私の反応についてこれない、特別製の打鉄を用意する必要がある。

「そうですか。気をつけて、こっちはこっちで対策を進めるので」

柔らかい笑みを浮かべるマドカ。それはIS学園で友人が出来たおかげだと私は思っている。携帯を胸ポケットにしまいミーティングループを後にして、少し離れたところで振り返る。確かにツバキさんからもメールはあった、だがもう1人メールを送ってきた人物が居る

「なんのようだ」

直接携帯にメールを送ってきた人間。通路の影から姿を見せた銀髪の少女。どことなくボーデヴィツヒに似た雰囲気を持っている

「クロエ・クロニクルと言います。お忙しい中ありがとうございます」杖を手にしている所を見ると目が見えないのかもしれない。先ほどこから視線が私にあつてないところを見ると間違いないだろう

「それで?私だけではなくスクールも呼んだ理由はなんだ?」

「気付いてるなら声くらいかけてくれないかしら?」

ずっと姿を見せたスクール。裏に詳しいだけあり気配を隠すのはお手の物と言う感じだな。まあ私も出来るので人のことは言えないが

「……東様の研究所で死んだ……アズマからの遺言になります、こちらを千冬様へ」

ポケットから差し出されたUSBメモリを受け取る。アズマ……臨海学校のときに束の振りをしていたあいつか……束を逃がすために死んだらしいが……

(胸が痛いな)

人が死んだと聞いて平然と言われるほど私は冷血ではない……胸の痛みを感じている私の隣のスクールへは

「今のところ確認できているネクロが基地をして使っている可能性の高い場所の地図です。恐らくタスクの基地を流用していると思うので確認をよろしくお願いします」

「判ったわ。ありがとう」

同じようにUSBメモリを渡し、クロエは杖を突いて振り返って歩き出す

「どこへ？」

ある程度の身柄の自由は確保されているのに、それでも外に向かうとするクロエに声をかけると

「束様の所です。今の束様を1人には出来ませんから」

少しだけ見た束の顔を思い出す、普段のあいつからは想像も出来ないほどに落ち込んでいた。確かに1人にしては危険と思うのは当然だろう。ゆっくりと歩いていくクロエを見送っていると

「どう？対策は出来た？」

「ギリギリだな。マド力達は問題ないが、私だ、問題なのは」

実戦から離れすぎている、ツバキさんの改造してくれた打鉄の性能は確かに高いだろう。だが暮桜と比べると劣る、それに私の実戦離れも痛い

「短期で実戦の勘を取り戻す？私とオータムが協力するわよ」

スコールの言っていることは判る。感を取り戻すにはギリギリの戦闘がいい

「頼む。半日で仕上げる」

ウォームアップしている時間すら惜しい、最初から全開で調整する。それが一番早い

「……さすが世界最強、無茶をするわね」

茶化するような口調のスコールだが、その目は真剣だ。私が本気だと判っているのだろう

「無茶は覚悟の上だ、急ごう。時間がない」

怪我は龍也に治してもらえばいい、だから多少の無理も効く。死ななければ治せるのだ、自分でやる分にはどんなハードトレーニングでも問題ない。クロエから預かったUSBメモリを自室の金庫の中に

しまい。私は地下の I S ハンガーへと降りていくのだった……

八神龍也に連れてこられたログハウスの壁を見つめる。だけどそれは私の頭の中には入ってこない、私の頭の中を埋め尽くしているのは

(アズマちゃん)

クロエちゃんは私と一緒にだった。だけどやっぱりアズマちゃんの姿はなかった。リミッターを外しているのを見て、頭のどこかで私はもうアズマちゃんが長くないのを悟っていた……だけどそれを認めたくない自分が居る

(これも全部束さんのせい？それともネクロのせい？それとも八神龍也のせい？)

アズマちゃんが死んでしまった理由を考える、他の人間のせいにしたいけど……判っている。束さんのこの天才的な頭脳が言っている、アズマちゃんが死んでしまったのは私のせいだと……だけどそれを認めたくない

(如何してこんな事になってしまったんだろう?)

私は私の頭脳を認めてくれたアズマちゃんとネルちゃんの為に色々としたかもしれない、だけどその結果が家族を失う事に繋がってしまった。

どうして……

どうして……

考えても考えてもこれだけが頭を繰り返し過ぎる、他の人間のせいにしてその人間を憎もうと思っても、私のよすぎる頭が告げる。他の人間のせいになんて出来ない、これは私自身の責任だと

「苦しい……悲しい」

こんなに胸が苦しいと思ったのは何時以来だろうか？

こんなにも悲しいと思ったのは何時以来だろうか？

判らない。判らないけれど胸の痛みは私を締め付け続ける。どうすればいいのか判らない、だから意味もなくログハウスの壁を見つめ

っていると、ゆっくりと扉が開く音がして

「束様」

「くーちゃん」

くーちゃんが私の隣に腰掛ける。それを見て

「普段は隣に座ってくれないのに、今日は特別？」

普段は束様の隣になんてと言って座ってくれないのにと思いつながら
ら呟くと

「どうぞ」

「ふえ？」

差し出されたハンカチを見つめてマヌケな声が出る、どうして私に
ハンカチを？首を傾げているとくーちゃんは私の手を取って

「泣いておられますよ？束様？」

そう言われて顔を触ると確かに涙が溢れていた。くーちゃんから
差し出されたハンカチで涙を拭いながら

「悲しいのに大声を上げて泣けないんだ。束さんはどうしてしまった
んだろうね」

これだけ悲しい、そして涙を流しているのに心がどうしようもなく
冷たい。どうして？と言う言葉が繰り返し頭を過ぎる……小さいと
きの自分はこんな感じじゃなかった筈なのに……

「今お食事を用意します。それから少しお休みになられてください」

くーちゃんの言葉に形だけ頷く、今は眠りたくない。悪夢を見そう
で怖い……今までこんな事を感じた事はなかったのに……

(束さんはどうしてしまったんだろう?)

自分でも理解できない物を感じながらも、私は再び思考の海へと沈
むのだった……

「本当に何とかなるのですか？」

「多分な」

束の居る部屋の外に居た龍也に詰め寄るクロエ。龍也はクロエを
見据えて

「束の精神状態は明らかに異常だ。恐らく……そう。かなり前、IS
を製作するよりも前に既にネクロの干渉があったのだろう」

天才に目をつけて、外的要因で精神を麻痺させる。それはありえないことではない

「ではどうすれば？」

クロエの言葉に龍也は振り返りクロエの目を見つめて

「暴れさせる、徹底的に殴り、蹴り、投げ、叩きつける。お前はそれを黙ってみてられるか？それが出来るなら私が動こう」

その言葉にうっと呻くクロエ。主と敬愛する束が傷つくかも知れないと聞いて判りましたとは言えないだろう

「考えておけ、私は必要以上には干渉しない。束は好かん」

龍也はそう言うのと束の部屋の前で呆然としているクロエに背を向けて、その場を後にしたのだった……

各々がそれぞれの問題と向き合っている頃。一夏もまた迷いを抱えていた

「戦う理由と覚悟かあ……」

ペガサスの遺言がどうしても頭を離れない。俺が戦う理由は仲間を護る為。これは絶対に代わる事はないだろう、だけど覚悟があるかと言われれば

「……」

あるとは言えない。護る事とは壊す事と同意義だ、龍也やはやてさんたちの様な覚悟は俺にはない……それに

「また暴走したら」

それが何よりも怖い。暴走している間俺には意識がない、もしその間に箒達に危害を加えたらと思うと

(くそっ……こんな様じゃあ)

震える右手を左手で掴んで押さえ込む。なんて俺の意思は弱いんだ、あれだけ覚悟を決めたつもりなのに……

「怖い……俺はどうすればいいんだ」

龍也や千冬姉に相談できない、最近感じるのだ自分の中で大きくなっていく何者かの存在を……それは言うまでもなく、別の世界の俺だ……だけどそれは俺にはどうにも出来ない。もし出来るとすれば

「龍也だけか」

相談できる相手は龍也くらいしか居ない、けど今その龍也はIS学園にいない……それに時間も遅いので今会いに行くのは龍也にも迷惑だろう。それにはやてさん達に睨まれるのはごめんだし……

「もう寝よう」

寝るのは怖い。また夢を見れば夢を見るかもしれない、その夢が今は何よりも俺には恐ろしい。多分寝ると言っても布団に転がって身体を休めるだけだろうと思っっていると

「一夏」

ノックもせずに扉を開けたマドカに驚きながら尋ねると

「マドカ? どうした?」

「どうしたじゃない、寝に来た」

数年ぶりに再開した妹が何を言っているのか俺にはさっぱり理解できなかった。何故寝るのに俺の部屋に来たのかが理解できない

「悪夢を見るときは近くに誰かがいると良いと姉さんに聞いた。私も最近悪い夢を見る。だから丁度いい」

枕を置きながら言うマドカ。ああ……俺を心配してきてくれたのか……ははっなんと言うか

「俺って情けねえ……」

「何を言っている。それはいつもの事だ」

マドカの歯に衣を着せないその言葉は千冬姉を連想させる。俺はマドカの隣に座って

「ありがとう」

「……礼を言われる事はない、私が怖い夢を見たくないだけだ」

ふんつと腕を組んでそっぽを向くマドカ。その耳が少し赤くて更にくすりと笑いながら布団に潜り込み、近くに感じるマドカの暖かさを感じて

(今日は何か寝れそうな気がする)

近くに誰かが居る。これは凄く安心する、1人じゃないって言うのはこんなにも心強い物なんだと改めて実感し、あつと言う間に寝息を立てているマドカ。俺は若干意識してしまっていたが、それは心配し

てきてくれたマドカに悪いと思い、心の中で羊を数え眠りに落ちるの
だった……。なお翌朝臨死体験をすることになる、その理由は2人の幼
馴染の暴走であると言っておこう……

第130話に続く

第130話

第130話

一晩で急ピッチで改修したISの試運転を始めたのだが……かなり深刻な問題があった

「くっ。重い……」

それは重量。防衛の為に全身装甲に近い仕上がりになっているせいか、身体を動かすにくいし、若干の重さも感じる。まずはこれになれる必要があるだろう

「で、ですわね。これはかなり厳しい物がありますわ」

通常の装甲に加え、試作型の強化装甲とブースターを装備した紅椿は普段の倍近い重量があった。補助エネルギーのおかげで重さを感じないはずなので今こうして感じている重さはなんなのだろうか

「こなくそっ!!この程度であたしは止まらない!!」

鈴がそう叫んでISの操縦に慣れようとしているとマドカが

「お前には負けん。絶壁」

ふふんと笑いながら鈴を追い抜いていく、鈴は暫く俯いていたが

……

「お前も似たようなものだろうがああッ!!」

そう吼えて、マドカを追いかけ始める。追いかけてつこと言えば遊びのように思えるが、あれは殺る気だ……間違いない。胸の事を言われた鈴がそう簡単に止まるとは思えない

「潰すなら私ではなくあちらではないのか?」

マドカがにやりと笑いながら私とセシリアを指差す。まさか……
プライベートチャンネルで慌ててマドカに叫ぶ

(何をするつもりだ!?)

どうして私とセシリアを巻き込んだと思いながら問いたですとマドカはにやりと笑い

(簡単だ。鈴を焚きつけて暴走させる、生死に関われば維持でも適応できるだろう)

なんて事を!?!ゆらりと両手を向ける鈴の視線が私とセシリアを睨む

「コハアアアア……」

「獣か!?(ですか!?)」

姿は人間だが、もうあれは獣で充分だと言えるだけの威圧感を持っていた。マドカはそれを見て満足そうに頷き

「ラウラも絶壁だな。成長の余地はあるのか?」

にやりと笑いながら言うマドカ。ラウラは眼帯を外してその目に冷酷な光を宿しながら

「遺言はそれだけか」

「絶壁www」

「殺すツ!!!」

ラウラが殺す気だと判る勢いでマドカに突撃していく。さっきまでISを動かすのに苦戦していたのが嘘のようだ

「箒・セシリアア!シャルロットオツ!!!」

「何で僕まで!?!」

暴走状態になった鈴の猛攻撃をかわし、避けている内に重さは感じなくなっていたが

「シアアアアアア!!!」

目に異常な光を宿しているラウラと鈴が少しだけネクロに見えてしまったのは何故なんだろうな……

「ゼーゼーツ」

「ゼーっ!ゼーっ!!!」

鈴とラウラの体力が尽きるまでの2時間45分。私達は尋常じゃない死の恐怖を感じながら必死に攻撃をよける事に集中するのだった……そしてその後は力尽き、全員意識を失うのだった

「ふむ。まざまざ」

1人だけ平気そうな顔をしているマドカを見て、流石千冬さんの妹だと私は思った……

IS学園から離れたアリーナでスコール・オータムを相手に新型打

鉄「三式」のテストをしていた。式式とは違い、打鉄の開発コンセプトである防御力を重視しつつ、機動力を確保するという独自の開発コンセプトを持つが正式製作機にはなっていない。なぜならば（かなりのじやじや馬だな）

防御力を手にするための重装甲。機動力を確保するためのブースター。そしてツバキさん特製のバックパック……性能が高すぎる、第4世代とまでは行かないが、第3世代でもロールアウトされれば有数の機体になっていただろう。もう少し扱いやすければな……

「もう終わりか」

腰の鞆にブレードを収めながらスコールとオータムに尋ねる

「体力馬鹿にこれ以上付き合えない」

その言葉に眉を顰める。だが良く考えれば既にかかなりの時間模擬戦を続けている

「そうだな。そろそろ10時間は動いているな」

感を取り戻すために徹底的に模擬戦を続けた。途中でオータムとスコールが力尽きたのでユウリと楯無とも戦ってみたが

「剣が。剣筋が3つ見えた……」

「く、これが世界最強……か」

本気で向かったので数分と打ち合うことも出来なかった。それから1時間休憩したスコールとオータムと再び模擬戦をしたのだが（まだ本調子には遠い）

大分感を取り戻したと言えるが、これでもまだ不安だ

「！」

背後から高速で飛んでくる何かの気配を感じて飛びずさる、足元に突き刺さっていたのは剣を模した矢

「何をする？・龍也」

これを使う人間を私は1人しか知らない、振り返り視線を上に向けると、アリーナの管制室の上で弓を構えている龍也の姿を見つける「なに、どれほど感を取り戻したか試したのさ」

そう笑って弓を手に飛び降りてくる龍也。普通なら飛び降りる事のできる高さではないが、地面の近くで風が吹いて龍也を浮き上がり

せる。軽やかに着地した龍也は私の前に立ち再び弓を構え
「お相手しよう、世界最強。それとも私では力不足かな？」

剣を矢と作り変え玄を引き絞っている龍也に

「よろしく頼む。手加減は無用だ、無論遠慮もな」

龍也の回復魔法ならば腕を骨折しようが、もがれようが治る。ならば限りなく実戦形式で訓練できる

「そう言ってもらえて何より。では腕と足の1〜2本は覚悟してもらおう」

その言葉と同時に放たれる矢をブレードで弾き突撃する

「近距離なら勝てるだけでも」

「まさか！」

魔法で剣を作り出し私の一撃を受け止める龍也に

「宝具とやらは使わないのか？」

今龍也が手にしているのは打鉄の平均装備の近接ブレード。お得意の剣を使わないのか？と尋ねると

「死にたいのならば？」

「止めておこうか」

ブースターで加速した蹴りを叩き込む。面白いように跳んでいく龍也だが、手ごたえがない

「消力？」

中国の武術に聞いたことがある、打撃の勢いを完全に吸収する受身の極みがあると

「そんな所だ。さあ全力でくると良い。ウォームアップはここまでだ」

コートを投げ捨て捨てる龍也。私も強化装甲の一部をパージする。これでうごきやすくなった

「前のように行かない」

「そうかね。その台詞は何回も聞いたことがある、千冬は違う事を願うよ」

あくまで余裕の色を崩さない龍也。その顔色を変えてやると思いながら再び龍也へと切りかかったのだった……

「満足したかね？」

「嫌味か」

1時間徹底的にいなされ、倒された。ISもデバイスも魔法も碌に使ってないと言うのに信じられない強さだ

「それで態々私の前に来た理由はなんだ」

態々私を鍛えるためなんてことに来る人間じゃないことはわかっている。何が目的だと尋ねると

「可能ならば今夜。一夏を暴走させる」

「早過ぎないか、準備なんて何一つ出来ていない」

私は何とか仕上げたがマド力達がどこまで仕上げれたが判らない

「今日は新月だ。もっとも魔力が落ちる日でもある、この日がチャンスなんだ」

「一夏は？」

最終的な決定権は一夏にある。一夏はどうするんだと尋ねると

「後で時間を見て話すことになっている。恐らく暴走の話になるだろう、覚悟を決めておいてくれ」

言うだけ言って背を向けて歩いていく龍也。相変わらず人の話を聞かない奴だと呆れながらロッカーへ向かう。汗を流して少し休もう……

(私は一夏の意志を尊重するだけだ)

一夏がもう1人と己と戦うと言うのなら私達も戦うだけだ……1度は私は道を間違えてしまった、家族のためと思い行動したことが

裏目に出ってしまった……だけど今度は絶対に間違えたくない、一夏の家族として、姉として……為すべき事をした……

龍也と約束した時間に龍也の部屋に向かう。少し用事があると saying 言ったけど、何をしていたんだろうなと思う

「良いか？」

扉を叩きながら尋ねる。はやてさんとかも居るので慎重になっている自分に苦笑する

「構わない。入ってきてくれ」

龍也の言葉に安堵の溜息を吐いて部屋の中に入る。部屋の中には龍也しかおらず、紅茶のポットが机の上に置かれていた

「砂糖は？」

俺の分の紅茶をカップに注いでいる龍也に「1つで良いと返事を返し向かい合って座る」

「中々いい茶葉なんだ。良い香りがするぞ」

そう笑う龍也に頷き紅茶を口に含む。俺はあんまり紅茶を飲まないが、これが良い紅茶と言うのは判る。お茶請けのクツキーを頬張り、気分が落ち着いたところで

「龍也は知っているんじゃないのか？暴走を収める方法を」

本題を切り出す。龍也はふむつと頷きカップを机の上において

「無い訳ではない、リスクもあるし、死ぬかもしれない。死ぬ覚悟があるか？」

龍也の蒼い瞳と死ぬ覚悟はあるか？と尋ねられる。その蒼い目に見つめられると身体が震える、俺はあの目が苦手だった

「死ぬ覚悟は……」

ここまで口にして言葉が出ない。喉に言葉が詰まったかのような嫌な感じがする。口の中が乾く……脳裏に浮かぶのはペガサスの最後……そして俺は龍也の目を見つめかえして

「無い……だけど生きようと足掻く覚悟はある」

死ねばそれで終わりだ、ならみつともなくても無様でも良い……最後の瞬間まで生き残るために足掻く覚悟ならある。

「ふむ。死ぬ覚悟があると聞いてあると言った人間は信用できない、最後まで生きようと思う心。それが何よりも大事だと思う」

そう笑う龍也、もしかして俺は試されていた……？

「俺を試したのか？」

「まあそうなるかもしれないな。だが暴走を抑えるために死ぬかもしれないというのは本当の話だ」

死ぬかもしれないと言うのは本当の話……俺は龍也を見て

「その方法って何なんだ？」

死ぬかもしれない。だけど何で死ぬのか判らない、龍也に尋ねると

「1度完全にお前を暴走させる。お前の身体を奪おうとしている並行世界の一夏は恐らく、精神世界にいる。その精神世界でお前が平行世界のおまえ自身を倒せば良い」

なんかとんでもない事になってきたような気がする。えつと精神世界って何？

「まあ私も良くは知らん」

知らないのかよ!?なんでそんなに自信満々なんだよ……いや、でもまあ……暴走を収める方法が判っただけでも良いのか？

「そして暴走状態になったお前を私となのはとフエイトとはやての境界で動きを抑える。あとは箒達の頑張り次第だ」

「なんで箒達が出てくるんだよ!?」

俺の問題のはずなのになんで箒達が……龍也は俺の目を見て

「それもまた箒達の覚悟だ。お前が負ければお前はネクロとして私が処分する。判るな?言葉の意味が」

死ぬというのは龍也に殺されるって事なのか……一気に目の前が暗くなるのを感じる

「だが箒達は信じると言った。お前が勝つのを、だから暴走しているお前を抑える結界を展開するのは私達だ、だが暴走するお前を押さえるのは箒達だ。はつきり言おう。お前よりも箒達の方が覚悟が出来る……どうする?やるのか、やらないのか、ハッキリしろ!」

机を叩き俺を見る龍也。確かに死ぬのは怖いさ、だけど何よりも箒達が俺が勝つって信じてくれているなら

「やる……俺は負けない」

何で負けても良い、だけど気持ちでだけなら俺は負けない!ペガサスから剣を取る、信念と意思を受け取った。なら俺はもう負けない「良い返事だ。なら来い、もう皆待っている」

いきなりとかは思わなかった。心のどこかでこうなることが判っていたような気がする。それに何よりも今のこの気持ちが弱くなる前に行動したい。龍也につれられてアリーナに向かう。

「箒達は?」

箒達も居ると思っていたが誰も居らず、若干拍子抜けしながら尋ね

ると

「待機している、気持ち揺らぐといけないからな。お前の」

メンタルが弱いのは自覚しているが、そんなに言わなくても良いだろうと思っていると、とんつと龍也の拳が胸に当てられる

「さあ行つて来い。負けるなよ」

どこかに引きずり込まれる感覚。それと同時に俺の目の前は漆黒に染まった。いきなりかよと思つたが、グダグダするよりもこつちの方が良い。どこまでも落ちて行く感覚、そして浮遊感それが終わると
【よお。また会つたな】

オレが肩に雪片を担いで俺を見ていた。周囲は黒一色で本能的な恐怖を感じる、精神世界つて事で良いんだよな……ここが

【まあ良く来た。歓迎するぜ！てめえの身体はオレが貰う！】

黒い閃光が走りISを展開するオレ。俺もISを展開したのだが視界に入る装甲を見て驚愕した

「白式じゃない!?!」

俺の体を覆っているのは白式じゃなく、黒い無骨なIS「打鉄」だった。

【オレの支配力が増してるのさ!!?!さあ行くぜえッ!!】

二段階瞬時加速で切り込んでくるオレ。俺は慌てて後ろへの瞬時加速でそれを回避しながら

(こんなんでもうやって勝てば良いんだ!?)

ISは旧式。魔力も使えない、それにたいして向こうは白式・雪華に魔力。どう考えても勝てない……. だけど

(気持ちでだけは負けない!!!)

一瞬下を向きそうになつた自分を鼓舞するかのようになりに心の中で叫び。肩に雪片を担いでニヤニヤと俺を見ているオレを睨み返すのだった…….

目の前で両手をだらりと下げて意識のないようにも見える一夏。龍也の説明では数分のラグがあるそうだけど……. 箒やラウラ。バックパックと強化装甲のインストールが済んだ。あたし・箒・ラウラ・

がった瞬間

《オオオオオツ!!!》

地に響く唸り声を上げながら一夏が突進してくる。その凄まじいまでの威圧感に一瞬心臓が止まったかのような威圧感を受ける

「下がれ！私が相手をする！」

動けないあたし達と違って千冬が前に出て一夏の突進を受け止める。その間に呼吸を整えて

「馬鹿一夏ーッ!!!とつと戻ってきなさい！」

あたすは普段使い慣れた武器ではなく、手持ち式の盾を両手に持ち、そう叫んだ……だが一夏に反応はないなら

(何回でも呼ぶまでよ！)

一夏がこの場所に戻って来れるように、闇の中に落ちてしまわないように、何度だつて何十回だつて叫ぶだけ。きつとこの声は一夏に届くはずだから……

第131話に続く

第131話

第131話

アリーナの中を高速で移動している一夏。私はそれを見て眉を顰めた

(結界は正常に作動している)

最高レベルの魔導師が4人で発動させた結界の中であれだけの機動。何かある……魔力だけじゃ無い何かが……

「はやて。フェイト、少し調べてみてくれ」

これは別の観点から見てみる必要があると判断して、はやてとフェイトに声をかける

「りよーかい。私も少し気になってたしなあ」

「だね。あのスピードはおかしいよ」

はやてとフェイトもそれを感じていたのか、直ぐ調べる作業に入ってくれる。私となのはモニターを確認しながら

「周囲にネクロの気配はないですね」

「まだ決め付けるのは早い。警戒を怠るな」

強いネクロの気配にネクロは引き寄せられる。今の一夏の状態はレベル4に近い、引き寄せられる可能性は充分にある。それに箒達のネクロがイチカの気配に惹かれてくる可能性も考えられるのだから「今は動けないんだ。しっかりと調べてくれ」

結界の維持をしなければならぬ、だから必然的に戦うことは出来ない。待機してくれているスコールたちとプレイヤー達が頼りだ

「す、すみません。調べなおします」

こういう時に搜索にたけたティアナとかがいると楽なんだけどな、とは言えクラナガンの戦力を落とす事も出来ないので仕方ない

(どうなるかだな)

戦い始めて5分、限界時間まで1時間弱ある……だがそれを越えようと一夏の身の安全は保障できない

(それまでに決着をつけろよ。一夏)

心の中で一夏を応援し、私は戦闘モニターと周囲のモニターの両方を確認し、周囲の警戒を始めるのだった……

今まで何度か訪れた心の世界。だけどそれは見慣れたものでは無かった……

(クラナガン?)

龍也に連れて行かれた龍也の世界。クラナガンに酷似していた、別の世界の俺は魔導師なのだからおかしくはないが……

(どうして俺の心の中なのに……)

それだけ浸食されている事なのかもしれない……そう思うと一瞬恐怖を感じたが

(大丈夫。まだ何とかなる)

隠れながら移動していたのでわかったが、黒い場所と白い場所そしてグレーの場所がある。恐らく黒があいつの陣地だ、まだ白の方が多い。

(こつちのほうなら大丈夫か)

ISを解除していると向こうは俺を認識できないようなので、ISを解除してビルの間を上手く利用して隠れながら移動する。相手との力量さがあるのならまずは逃げ回ってチャンスを見る。龍也に教えられた事の1つだ

『いつまで逃げ回っているつもりだ? 打ち合いに来いよツ!!』

ビルを両断しながら姿を見せるオレ。俺は舌打ちしながら打鉄を展開して空へ逃れる

『よお。少し振りだな、いい加減戦う気になったらどうだ?』

ニヤニヤと笑うオレ。だが俺はその言葉に返答せずに後ろへの瞬時加速で距離を取る。精神世界だからSEやエネルギーを気にしなくくていいのは良いが……

(このままだと殺される)

平行世界のオレか龍也によって殺される、精神世界の戦いは1時間が限界だと龍也が言っていた。今何分経ったか判らないが、このまま何時までも逃げているわけにも行かない

(なんとかして攻撃できるチャンスを！)

機動力も防御力も劣る打鉄では勝てない。もし攻撃できるチャンスがあるとするれば……

(あれを奪うしかない)

使っているのは雪片だと思っていた。だけどこうして見ると使っているのは雪華だ、雪片じゃ無い。雪華は平行世界のオレのデバイスだ。だけど雪片は違う

(だから今は逃げる！)

ISを解除して空中を落下して行く、精神の世界だから死にはしない。あいつに殺されない限りは……落下している最中にガラス窓を蹴り破りビルの中に転がり込む

「まだ時間はあるはずだ。落ち着け、チャンスを探すんだ」

自分に言い聞かせるように呟き走り出す。今は戦うことが出来ない、ならチャンスを待つしかないのだから

『精神だから死なない。ああ。それは正しいぜ？精神は死なない、気が持ちが負けないならな。だが人間の精神が何度も己の死に耐えられると思うなよツ!!!』

オレの怒声と共にビルが崩壊する。そして砕けた瓦礫が俺の頭を直撃し目の前が真紅に染まる。そして

「う。うがああああああ!?!」

信じられない激痛が走る。頭だけじゃ無い全身にだそれは数秒だったが、その数秒でも気が狂いそうな痛みだった

「無事……でもいてえ」

頭はなんともない、手足もちゃんと動く。だけどさっきの痛みはまだ身体に残っている

(あれが精神の死……)

駄目だ。あれは何回も耐えることなんて出来はしない、見つかったしまうが仕方ない。ISを展開して身を護りながら走り出す、だが直ぐに追いつかれ

『これで2回目。お前は後何回自分の身体をしつかりイメージできるか?』

「がはあ!？」

背後から心臓を一突きにされ、再び気が狂いそうな激痛が俺を襲うのだった……

私は目の前の一夏を見て胸が痛んだ。黒い外骨格に蝙蝠の翼、それに人間のそれとは既に違う大きさをしている一夏を見て

(まるでネクロのようだ)

ネクロになるかもしれないと龍也には聞いていたが、正直目の前にするとショックが大きい

《オオオオオッ!!》

雄叫びと共に放たれた光線を飛んで回避し、そのまま千冬さんと合流する、マドカは私が離脱する時間を稼ぐためにか

「こっちだ!」

当てるつもりのない威嚇射撃で一夏の注意を自分に引き付けている。マドカは回避に徹しているおかげでダメージが少ないが、こうして支援射撃をしているので弾薬の消費は激しいだろう。

「かなり不味い感じですね」

見た目完全にネクロとは言えずそう言うと千冬さんは眉を顰めつつも

「まだ30分だ。時間的な余裕はある」

時間的な余裕はある、だが精神的肉体的余裕は余りない。動く気配がないので紅椿の様子を確認するが

(損傷率25%。強化装甲7割消失、バックパック弾薬8割使用。SE50%)

防御に徹してもこれだ。凄まじい攻撃力と言わざるを得ない

……

「この馬鹿一夏!!!いつもでもそんな所に居ないで出てきなさいよ!!!」

「そうだぞ!早く戻って来い!!」

鈴とラウラがそう叫ぶと一夏の視線が2人に集中する。その瞬間背筋が凍るような殺気を感じて

「離れろ!鈴!ラウラ!!!」

そう叫ぶがもう遅い、一瞬で二人の上空に移動した一夏の拳が2人を穿つ

「がはあ!?!」

凄まじい勢いで地面に叩きつけられた鈴とラウラのバックパックが砕け散り。その口から血が溢れる

「下がれ!これ以上は危険だ!」

千冬さんがそう怒鳴る。最初から最後まで徹底して防御に徹して、一夏に声をかけていた鈴とラウラだが今の一撃で強化装甲が砕けた。これ以上は危険だ……だが鈴は口元の血を拭いながら

「じよーだんきついわ。あたしは最後まで引かないからね」

火花が出ている装甲をパージして残ったのはブースターだけだ。

そんな状態であの一撃を喰らえば間違いなく死ぬ

「鈴さん!危険ですわ!下がってください!」

「そうだよ!そのままだと死んじゃうよ!」

後方支援をしていたセシリアとシャルロットがそう叫ぶ。隣のラウラも

「これ以上は危険だ。教官の言うとおりに下がろう」

肩を掴まれた鈴はその腕を振り払って

「さつきから聞いてれば危険だのなんだの……うるさいのよ!!!怖いなら引つ込みなさい!目障りよ!!!」

鈴は私達を見てそう怒鳴る。その声に反応したのか一夏が鈴に襲い掛かる

「どんな姿をしてようがつ!一夏は一夏ツ!!!危険でもなんでもない!!!」

一撃一撃が髪を顔を掠めるが、それを避けながら鈴は一夏の姿をしつかりと見つめたまま叫ぶ。助けなればと判っているのに身体が動かない

「今は少し声が届かないだけ、なら何度だって何十回だってあたしは一夏の名前を呼ぶ!!攻撃もしない!怖いと思うなら!危険だと思うのなら!早くあたしの目の前から消えなさい!そんな奴が呼んだって!その声は一夏には届かない!!!」

そう言えば鈴は最初からただの1回も一夏に攻撃をしていない。ずつと耐えているだけだ……私は手の中の兩月と空裂を見つめて

「そうだな。鈴の言う通りだ」

それをそのまま粒子に返し、バックパックに手を回して搭載されている盾を掴んで

「一夏！いつまでも暴れているな！早く戻って来い!!」

《うがぁ!!!》

強烈な振り下ろしを盾を斜めにして受け流し、そのまま前に踏み出して

「お前はそんなに弱い奴じゃ無いだろう！だから早く戻ってくるんだ！」

「そうよ！早く戻ってきなさいよ！皆待っているんだからね！」

鈴が一夏に呼びかける。いや鈴だけじゃ無い……

「一夏さん！早く戻ってきてください！」

「待ってるから！いつもの優しい一夏に戻るって判ってるから！」

「力に飲まれるな！一夏は私とは違う！そうだろう！お前は強い！私よりもずつと！」

セシリア・シャルロット・ラウラが叫ぶ。すると少しだけ少しだけだが一夏の動きが鈍る……

「戻って来い！一夏！私達の所へ」

「やっと家族に戻れたんだ……私達の所へ帰ってくるんだ！」

そこにマドカと千冬さんの声が重なった瞬間。一夏の目が紅く輝き

ウガァァァァァァァッ！！！！！！！！！！

2つ声重なったと思った瞬間とんでもない衝撃波が私達を飲み込もうとする。それでも下がる事無く

「！！一夏ッ！！！！！！」

一夏の名前を叫んだ。その瞬間破損していたISの装甲が輝き、その衝撃波を受け流した……

「せ、セカンドシフト……したのか……」

ネクロとの戦闘を考慮したとしか思えない重厚な装甲。そしてよ

り力強さを増したシルエット……

(ありがとう、紅椿)

今なら出来る。きつと一夏を救うことが出来る、攻撃で解けていたリボンを解き、代わりに誕生日に貰ったリボンで素早く髪をまとめる
《オオオオオツ!!!》

叫び声を上げて襲ってくる一夏の両手を私と鈴で掴み

「一夏ツ!!!早く戻って来い!(きなさいツ!!!)」

力強くそう叫んだ。鈴の言う通りだ、何回だって叫ぶ、一夏がまた私達の所に戻って来れるように。この声が枯れたとしても、私は絶対に一夏を呼ぶのを止めない……きつと今の一夏は迷っているんだ、だから戻ってこれるように、道しるべになってくれると信じて……私達は一夏の名前を呼び続ける……

もう何度殺されたか判らない。最初は痛みつつもイメージ出来ていた自分の手足でさえも、おぼろげで左腕と右足が消えてしまっている

(痛い。もう痛いのは嫌だ)

何度殺されても心は死なない。気持ちが負けない限りは……だけでも俺は負けてしまいそうだった。この痛みにも、そして目の前のオレの強さにも

(オレなら皆を護れるのかもしれない)

俺は弱い。だけどオレなら皆を護れるかもしれない。そう思うと抵抗しようと言う意思が消えていく……

『良く頑張ったって褒めてやるぜ。だけどここまでだ、もうお前は自分の死に耐える事が出来ない』

ああ、その通りだ。もうあの痛みには耐える事が出来ない、身体が碎けるあの痛みも、心がバラバラになるようなあの鈍痛にも耐える事が出来ない

『安心しな。お前が護りたいって思っている連中はオレが護ってやるさ。オレだってあいつらは大事なんだ』

そうだろうよ、お前はオレだ。護りたい者だつてきつと同じだろう

よ……

『あばよ』

雪華を振りかぶるオレ。逃げようにも足がないから逃げる事もできない……目を閉じようとした瞬間

『一夏！いつまでも暴れているな！早く戻って来い!!』

箒……？どうして箒の音が……いや、箒の声だけじゃ無い

『そうよ！早く戻ってきなさいよ！皆待っているんだからね!』

珍しい鈴の泣き声が聞こえる……らしくないぜ、俺が心配させてるからか……

『一夏さん！早く戻ってきてください!』

セシリア……ああ、そうだよな。こんな所にいたら駄目だよな……

『待ってるから！いつもの優しい一夏に戻るって判ってるから!』

シャル……優しいかあ……そう言われると何か恥ずかしいなあ……

『力に飲まれるな！一夏は私とは違う！そうだろう！お前は強い！私よりもずつと!』

ラウラ……そんな事はないぜ。お前の方がずつとずつと強いと思うぜ……

『戻って来い！一夏！私達の所へ』

『やつと家族に戻れたんだ……私達の所へ帰ってくるんだ!』

千冬姉……マドカ……ああ、帰りたいな。家族の所に……仲間の所に……

【気持ちで負けるな、一夏。お前は強い……あんな平行世界のお前よりもな、何よりも気持ちで負けなければ精神の戦いで負けはない】
龍也に胸をどんつと叩かれたのを思い出す。その痛みのおかげか、意識がハッキリしてくる。失っていた左腕が一瞬で再生する

「返してもらうぜ！俺の剣を!!」

再生した腕を全力で伸ばす。鞘に収められたままの雪片を掴んで引き抜く。これだけは譲れない、千冬姉から継いだ大事な物だ

『貴様ツ!!』

オレの腰から雪片を奪い取り振り下ろされた雪華を弾く、打鉄が消

えセカンドシフトする前の白式へと変化する

「誰に負けたって良いさ。俺は弱いからな……」

まだ俺は弱い。千冬姉や龍也のように誰かを護る事も出来ないさ……箒や鈴にも迷惑をかけることもあるだろうよ、うだうだ考えても判らない事を考えてさ……自分が弱いって事は嫌ってほど判っている。だけど！

「だけどな！俺は俺には負けねえ！絶対にな!!!」

誰に負けても良い。だけど自分にだけは負けない……負けてはならない

『やってみろ！お前がオレに勝てると思うなよ!!!半人前がツ!!!』

「やるさツ！絶対に俺はお前を倒す!!!」

くるって逃げた俺には負けない。どれだけ苦しくても悲しくても、絶対に俺は狂気になんて逃げはしない。だから俺はお前には絶対に負けない!!!

（大切な者を護る。この誓いは……この願いは絶対に違える事なんてできないッ!!!）

俺は取り返した雪片を両手で握りオレを睨みつけると同時に「いっくぜええええッ!!!」

零落白夜を全開出力で起動し、更に瞬時加速を使いオレ目掛けて斬りかかって行った……絶対に俺は勝つ！外で待っている箒達の所に帰る!!!絶対に帰るのだから

「俺はこんな所で負けられないんだッ!!!」

俺の渾身の一撃はオレを捉え、その姿を掻き消したのだった……

停止している一夏。私はそれを見て眉を顰めた……まだだ。まだ終わってない、私の感が告げている。これはまだ終わりではない、これは始まりだと

【全員距離を取れ！魔力が蓄積している！最大攻撃が来る！】

セカンドシフトをしたのは計算外だが、恐らくセカンドシフトをした機体でも耐える事が出来ないほどの強力な一撃が来る、そう叫んだ瞬間。翼が更に増え、両腕の籠手が開き砲門が姿を見せる

《グルオオオオオオオッ!!!》

アリーナを震わせるような強力な咆哮と同時にただ圧縮されただけの魔力が周囲に叩きつけられる

「楯無。ユウリアリーナに行け、合流してやってくれ！」

返事もせずアリーナに走っていく楯無とユウリ、煙が晴れたそこに居たのは

「最終暴走。ここからが正念場だな」

さつきまでの獣同然の姿ではなく、スラリとした騎士を思わせるその姿……それは間違いなく平行世界のイチカ自身……

【正念場だ。向こうのほうも佳境に入っているだろう……負けるなよ】

ここからは一番酷い暴走になるだろう。後は箒達次第、いや一夏次第だ……

「はやて。なのは、フェイト。難しいとおもうが、この場は任せる。頼んだぞ」

返事を待たず管制室を出て転移する。目的地はアリーナの外

「これはこれは全員で来て何ようかな？」
アリーナの外で飛び出すタイミングを計っている桜鬼達を見据える

「今は敵対する気はない。見ているだけだ」

代表して話してくる千冬のネクロ。確かに殺気や闘気は感じないが、はいそうですかと信じることも出来ない

「そうかい。じゃあ私もここで見ていよう」

腕を組みその場で浮遊する。向こうとて数のほうでは有利だと知っているが、私の特性をベエルゼから聞いていれば動く事はないだろう。嫌そうに眉を顰める桜鬼達を見ながら、アリーナを見下ろしたのだった……

第132話に続く

第132話

第132話

桜鬼達を監視しながら一夏と箒達の戦いを見ていたのだが

(これは予想外だな)

セカンドシフトをした。箒・鈴・ラウラ・セシリア・シャルロットのISは通常のISとは全く違う存在へと変化していた

(ネクロに適応したのか、それともこれもコアネットワークとやらか?)

全てのISはリンクしているそうだが、もしかするとこれもそうなのか? 恐らく一夏のISが取り込んだデバイスの情報がフィードバックされた可能性がある

(まあなんにせよ、戦力の向上は良い事だ)

ベエルゼが勝負をかけてきたら間違いなく乱戦になる。そうなった場合を考えればこの能力が高いほうが安心できる

「あまり動かないで貰おうか、傷がついても良いのかな?」

空中に投影した剣の切っ先を桜鬼達に向ける。結界は通用しないので物理的に停めるしかない

「女性を拘束するとは紳士としてはどうかと思いますわ」

「それは失礼。だが私は紳士と言うよりかは似非紳士と言われる方がしっくり来る、なのでそう言う価値観を求めないで貰おうか」

敵対者に容赦をするような甘い性格ではないつもりだ。それが敵だと判っているのならなおの事

「大人しくしていれば攻撃しない。それをお前は証明できるのか?」

ウイントヒルデの言葉に私は小さく頷き

「向こうも見なければならぬ、その上戦うとなると流石に面倒だ。戦うというのならこの場で滅してやるが?」

投影した剣を両手に握るが、正直言うところにはブラフだ

(乗ってくるなよ)

一夏の動きをある程度束縛する結界と微弱名効果のある回復結界

の同時展開。魔力が凄まじい勢いで減っている中で6体のネクロと戦うのはリスクがありすぎる。無論戦えないわけではないが、それだと結界の維持に支障が出かねない

「ここで消滅するのは私達にとっても望む事ではない」

そう呟いて再び腕を組むウイントヒルデ。ハツタリ勝負では勝てたか……いや向こうも気づいている可能性があるな。仮にも千冬のネクロ。そこまで馬鹿ではない筈だ、互いに互いの隙を窺いつつ、戦いたくない状況

(やれやれ、最近はこの様な事ばかりだよ)

心理戦が多いことに思わず溜息を吐いてしまうのだった……

雪片を……いや白式を取り返す事が出来たおかげである程度は戦えるようになったのだが

『遊びは終わりだ。本気で狩らせて貰う!!』

姿を消し、ありとあらゆる角度から斬り付けて来るオレのもう攻撃に装甲は砕け散り、出力がドンドン落ちて行く

(イメージが弱いんだ。今の俺だと)

この世界は気持ちがなよりの武器になる。だが破損した白式が回復しないのも、攻撃が当たらないのも俺の気持ちが弱いから

「うおおおッ!!!」

気持ちでは絶対負けられない!待っててくれてる箒達の所に戻るために……俺の雄叫びのおかげか判らないが、破損した装甲が回復し、零落白夜の刃が展開される

『それだけで俺に勝てると思っているのか?おめでたい奴だな』

そう笑うオレ確かに雪片だけじゃ勝てないだろう、だけどここは精神の世界。大事なものはあつて当然だと思おう心……

「雪片だけじゃねえ!!雪華もだ!!!」

飛び出しながら左腕を突き出すとオレが持っている雪華と瓜二つの剣が俺の手の中に現れる。それと同時に白式も、セカンドシフトした白式・白雪へと変化する

「くつらえええええッ!!!」

雪片・雪華を交差させながら振るう。飛び出した零落白夜の刃を粒子になって回避するオレ。俺は即座にその場で回転し更に刃を飛ばす。普通ならこんな事はできないが、ここはイメージが重要だ。出来ると思えばなんでも出来る！

『ちいっ!!』

舌打ちしながら交わすオレ。だが零落白夜が足をかすめたせい、明らかに動きが鈍っている

(攻めるならいまだ！)

向こうの方が強いんだからチャンスを見たらリスクを恐れず攻めるべきだ。

『舐めるなあ!!』

魔力を放出しながら雪華を振るうオレ。小さく深呼吸をし俺は力強く踏み込みながら雪華を振り下ろした

『うがあ!?!』

ガツーンと肩を突き抜ける衝撃。実際では使う事のできないペガサスの剣技。だけど……ここならば十分に扱うことが出来る。俺はあの剣筋を何度も何度も見ていたのだから

「確かに俺は弱いさ。お前みたいに覚悟もないだろうよ」

護るために壊す、救うために殺す。それは多分究極の正義の1つだろう。龍也はその正義を貫いた、だけど俺は違う

『あいつと違う守護者になれ』

ペガサスの最後の言葉が頭を過ぎる。俺は龍也やオレのように切り捨てる事なんて出来はしない、きつと甘ちよつろい、現実を見ていないと言われるかもしれない。だけど

「俺は全てを護れる守護者になる!!!」

どれだけみつともなくたって良い

龍也みたいに誰かを導く事なんて出来はしない

1人で何もかも出来もしない

きつと千冬姉や皆の力を借りる事になると思う

「だけどここの胸に抱いた1つの思いだけは揺るがねえ!!!絶対に俺は大切な仲間を護れるようになる!!」

あの時の千冬姉のように……

傷だらけでも進み続ける龍也のように……

俺は誰かを護れるようになって見せる!!!

『何も知らないガキがあ!!!』

「おおおおッ!!!」

俺とオレの叫びと白と黒の零落白夜がぶつかり合ったのだった

……

《ウオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!!!!!》

アリーナ全体を震わせるような咆哮が響き渡る。外見は人型だがその姿は完全にネクロに見える

(これが一夏君の一面)

両目がない漆黒の騎士。目がないのには何か意味があるのだろうか？

《シアアアアッ!!!》

4枚の翼と両足のブースターによる信じられない加速からの上段を飛んで回避し、そのまま後退の瞬時加速に入る。目の前を通過していくく白と黒の刃を見て

「あつぶな」

零落白夜と魔力の刃。直撃すればそれだけでISは機能を失うだろう、その証拠にアクアクリスタルから発生した水のヴェールが再生せず水のままになっている

「気をつける。余り前に出るなよ」

追加装甲の盾を構えて、私の前に出るユウリ。本当は搭載する予定だったんだけど、ミステリアス・レイディとは互換性がなかったらしく、未搭載なのが案外響いていた

「判ってるわよ。ユウリ」

箒ちゃん達のISがセカンドシフトをしたのは良いが、出力が上がりにすぎていると思うように動く事が出来てない。だから私とユウリとマドカちゃんと織斑先生で前に出ているんだけど、正直打ち合うこと

すら出来ていない

(時間稼ぎも出来ないなんてね。参ったわねえ)

箒ちゃん達がセカンドシフトしたISの確認を出来るまでは時間
稼ぎをしようと思っていたんだけど、それすらも厳しい

《オオオオオオオオオッ!!!》

開かれた翼から放たれる。エネルギーと魔力の弾丸の嵐を前に逃
げ回るしかない、そして時折隙を見て瞬時加速で切り込んでくる

(理想系がこれなのかもしれないわね)

広域射撃と1撃離脱のヒット&アウェイ。これはわかかっていても
対処が難しい……

「更識!!」

「楯無!!!」

織斑先生とユウリの怒声に振り返ると避けたはずの魔力刃と零落
白夜の一撃が弧を描いて戻ってきている

「なあ!？」

なんてインチキ。こんなの予想していない!咄嗟にラストイーネ
イルと蒼流旋を盾にするが一秒と持たず両断される。

(やばっ!?!これは死ぬかもしれない!?)

あれだけの攻撃を耐えられるとは思えない、咄嗟に腕をクロスした瞬
間。黒い閃光と青い光が走り、刃を砕く

「悪くない。良い威力だ」

「反動が強すぎますわ」

ラウラちゃんが剣を振りぬいた姿勢で目の前にいて。背後からセ
シリアちゃんの声がする

《ウオオオオオオ!!!》

咆哮と共に飛び出してきた一夏君だが
「いつけええええええ!!!」

重々しい音を立てて鎖が走り刃を止める。振り返ると鈴ちゃんが
鎖を手に

「中々良い武器じゃ無い!これは!!!」

嬉しそうに笑いながら鎖を引っ張り笑う鈴ちゃん。これだけをみ

るとかなり危ない感じだけど

「ありがとう。助かったわ!!」

「気にしないで良いわよ!これは良いわ!あたしに向いてる!!」

鎖を引っ張る鈴ちゃん、だけどそれでも一夏君の手から雪片は離れない

「鈴。手伝うぞ!!!」

「僕も!」

箒ちゃんとシャルロットちゃんが鎖を掴んで引っ張った瞬間、一夏君の手から雪片が飛び出す

「これは私が使う!」

織斑先生が空中で雪片を掴んで構える。展開装甲が開き零落白夜が発動する……それを見て確信した。もう私達に出来ることはない

と

「織斑……いや、千冬さん。一夏をお願いします

「姉さん。一夏を、私達の家族を護って」

「お願いします。織斑先生、一夏さんを……」

皆の言葉に頷き織斑先生が駆け出す。それに合わせるかのように一夏君も残った雪華を構える。その構えは鏡合わせのように構え、1閃2断の構え。白と黒の零落白夜の刃がぶつかり、凄まじいまでの衝撃がアリーナを襲った

「くう!」

その凄まじいまでの衝撃に腕で顔を隠し、目を閉じた。そして目を開いた瞬間。眩いまでの光がアリーナを覆い尽くすのだった……

雪片と雪華がぶつかり合う。だが僅かにオレが押し込まれている

(馬鹿な、何故だ。何故オレが押し負ける)

オレの方が強いはずなのに、何故何故オレがこの世界俺に押し負ける。やっとここまで来たと言うのに、何故最後の最後でこんな事になる

「うおおおおおッ!!!」

雄叫びと共に凄まじい速度で切り込んでくるこの世界の俺。受け止める為に雪片と雪華を振るうが

『ぐうっ!?』

受け止めたはずの雪片はオレの刃をすり抜け肩にめり込む刃。切り落とされるまでは行かないが、深い傷だ

(回復しない!? 気持ちで負けているのか!?)

この世界は精神力が全てだ。あつて当然と思う心……それがあ限り負けはしない、オレは何度も何度も絶望した。だがそれでも諦めなかった……それなのに

(こんな子供に俺が負けるといふのか!?)

こんな甘えた理想を振りかざす子供にオレが負ける!?

『そんな事があるかアアアアアア!!』

この世界にはオレの世界の筈達がいる。オレには彼女達を救う義務がある。それがあの世界で皆を救う事のできなかつた俺の義務だ。上段から渾身の袈裟切りを放つ。だが

「お前は俺に負ける。俺は……負けないッ!!!」

オレの一撃を横薙ぎで弾き即座に構えなおされた一撃が叩き込まれる

(これはチフユ姉の……)

世界は違えど同じオレ。オレもチフユ姉から教わった1閃2断。身体が両断されるが、まだオレは自分の体を認識できる。まだ負けていない

『ウオオオオオオオオオッ!!!』

無理やり回復すると同時に光彩陸離を発動させて、姿を消す。真つ向勝負では勝てない、あのすり抜ける攻撃にオレは対応できていないから、死角から最大攻撃を叩き込もうとした瞬間。この世界の俺が「お前は凄く強い。ああ、判っている俺と比べればお前の方がずっと強いんだろうよ。だけど心は弱い、俺は心では負けない!!!俺には目標がある。あの時の千冬姉のように俺は仲間を、皆を護る!!!」

眩いまでにその輝きを増させていく白式……そしてそれは重厚な騎士の姿となる

「来いよ。隠れてないと戦えないのか？」

安い挑発。判っている、判っているがオレは姿を現し雪華を構える
「行くぜ、俺はお前に勝って皆の所に戻る!!!」

その目には希望を写している。オレにはそれが眩しい物に見えた。
それはかつてのオレの姿その物

『ああ。勝負だ！行くぞ!!!』

判っているもうオレは!心でも負けた……その証拠に雪華も雪片も
刀身に輝が入り今にも消えてしまいそうだ。オレと俺は同時に駆け
出し白と黒の極光が精神世界を埋め尽くし、オレの意識は光の中へ消
えていった

「どうだ？この世界の俺は強いだろうか？」

『なぜ貴様が言う』

俺とオレ。オレはネクロに浸食を受けた、そして目の前の俺はネク
ロと戦う前の俺

「同じ俺だからな。誇っても良いだろうか？」

誇るな馬鹿と小さく眩き、オレも笑う。確かにこの世界俺は強かつ
た。何よりも心で

『だがこれで終わりじゃ無い』

「その通りだ。これからが本当の戦い。力を貸してやってくれ、オレ」
判っているきつとこの世界のオレは俺達のレアスキルに目覚めだ
ろう。だがあれば危険なものだ、サポートがいる

『まだ消え去るには早いかな』

「そう言うことだ。行こうぜ」

俺の言葉に頷き俺達は再び心の深い場所へと戻る。この場所ここ
の世界の俺をサポートする。それもまた悪くないと思いつながら深い
眠りへと落ちるのだった……

眩いまでの光がアリーナを包み込んだ。その瞬間思わず目を閉じ
てしまった

(大丈夫か)

桜鬼達が強襲する事も警戒していたが、その心配はなかったようだ。むしろその光に魅入られたかのように呆然とした顔をしていた。その顔は深い闇にいるものが決して届かない光を望んでいるかのような顔をしていた。視界が回復したので改めてアリーナを見下ろして

(良くやった、一夏)

心の中でそう呟く。箒達のISもセカンドシフトをした、だが一夏はそれを更に越えた。サードシフトでも呼べば良いのだろうか？

肩部・脚部・背中の装甲が一回り大型になり、背中の装甲には折り畳み式のキャノン砲が二門装備されている。

(もはやあれは機動要塞だな)

ブースターの数も増設されているのを見ると、強襲・制圧戦に特化したスタイルなのだろう

「さて、向こうは終わったようだが……どうするかね？」

維持した結界を解除したおかげで戻ってきた魔力。これならばギリギリで戦う事が出来るだろう。投影した剣を取り、切っ先を向ける

「用は済んだ。繰り返すが戦う気はない」

ウイントヒルデの言葉に頷き、桜鬼が指を鳴らすと空間が歪む。だが転移ではない……恐らくは桜鬼特有の能力なのだろう

「ふふふ、楽しくなってきましたわ。あのままでは余りに弱く詰まりませんでしたもの」

「……どうでも良いよ。強かろうが、弱かろうが潰すだけ。これに変わりはないよ」

嬉しそうに笑うヴィステイラとルーシエ。それに対して険しい顔をしているのはベール・ラーベル・レーゲン・ウイントヒルデ・桜鬼だ。恐らくあの一夏の更に変化したISを警戒しているのだろうか(ここで仕留めるか)

背後の空間に投影して待機させてある勝利すべき黄金の剣(カリバーン)に手を伸ばそうとした瞬間

「約束を違えるのはどうかしら？あたし達はなにもしなかったのよ」

挑発するかのようなベールの言葉。私は溜息を吐き、待機させていた勝利すべき黄金の剣を魔力に戻す

「何のことかな？」

「性質の悪い男だ」

ふふんと笑うウイントヒルデ達はゲートの中に消えていく、残された私は腕を組んだまま

「そんなに意地が悪いか？私」

おかしいな、自分ではそれなりに良い人間のつもりなのだが、最近性が悪いと言われることが多い……性格が変わって来ている？咄嗟に右手を見る。虹色の魔力に僅かに混ざっている黒い粒子を見て

「……時間がないのかも知れんな」

思い当たる節はある。そして恐らくこの考えは当たっている……私は溜息を吐き、右手を振るう。それと同時に魔力は霧散して消えていく、視界の隅に僅かに見える黒い粒子は見ないようにする

「さてとまずは手当てでもするか」

箒達も弱っているし、一夏は一夏で意識を失っている。今は考え事をしている時間はない、私はそう判断してアリーナの方へと降りて行ったのだった……

龍也が消えてから空中に現れる黒いタキシードにマント姿のネクロ。ランドグリーズだ

「やはり時は近いようですね、結構。結構」

空中に僅かに残っている聖王の魔力、そしてそれに混じっている黒の粒子を見て笑みを深める

「神の系譜は破壊者の系譜。その血に眠る本質を貴方は理解していない」

くつくつくつと喉を鳴らすランドグリーズ。彼は知っているのだ、神王の系譜に隠されているもう一つの忌み名。そして龍の化身と言われるその理由を

「さてさてこの世界がきっかけなのかどうかは知りませんが、覚醒のときは近い。その時が楽しみですよ」

にやりと笑いランドグリーズの姿は消えていく、言葉の通りこの世界にはもう用はないと言わんばかりに消えていく、最後に一言言い残し

「貴方は救世者じゃない、破壊者なのですよ。黒龍の後継者よ」

その言葉の意味が判った時。全ての世界の滅びが始まるのだ……

第133話に続く

第133話

第133話

アリーナでの一夏の暴走が終わった日の深夜。私と龍也君とはやてさん達はは地下の整備ハンガーにいた……そして目の前のハンガーにはセカンドシフトを終えた紅椿や、白式の分析をするためだ。「二回り大きくなってるわね」

ぱつと見た感じで判る。一回り巨大化し、更に装甲の数も増している、フルスキンと言われても通用するかもしれない……

「可能性としてはコアネットワークの影響かな？ツバキさん」

ISを知っている私にそう尋ねてくるフェイトさん。その可能性は極めて高い……

(一夏君のISの情報を共用した……それが正しいかな?)

尋ねられてすぐに返事を返せない。私もこんな事は初めて見る……少しは分析しないと結果を出すことも出来ない

「もう少し待って、少し分析するから、龍也君達はデバイスって面で分析してくれる?」

龍也君も言っていたけど、恐らくデバイスとISの両方の特性を得ているのだろう。分析はそれぞれの専門者同士で分析し、そしてその結果を統合する。それが一番正しい分析だろう

「了解した。サポートにはやてを回す。頼んだぞ、はやて」

龍也君達の中で一番ISを理解しているはやてさんが私の隣に座る

「どこから見てもいいじゃない?フラグメントマップ?」

ISの成長の証を示すフラグメントマップ。確かにそれを見れば判るかもしれない……だけど

「うん。そっちは私が見るわ、はやてさんは出力とかの機体データをお願いするわ」

オツケーと笑うはやてさんを見ながら、私はフラグメントマップに目を通し

(……これは物凄いわね)

今までのフラグメントマップとは全く違う。複雑に入り混じっている……僅かに前のデータが残っている程度でその殆どは全く異なる物に変わっている

(どこまで分析できるかしら)

私もIS設計士として、それなりに活躍しているつもりだが、今のこのフラグメントマップは私の理解を完全に超えていた……もしこの全てを理解できる人物が居るとしたら、それはクラナガンのジェイル・スカリエツィ博士か、ISを作った束以外は存在しないだろう……

(束の協力を得れたら何か違うのかもしれないわね)

私の理解を超えるIS、もしこの全てを理解できるとしたら束以外にありえないのだが……今もログハウスこもりきりの彼女の力を借りるのは難しいだろう

「龍也君。なんとかして束の力を借りれないかな？」

冗談でそう尋ねると龍也君はふむつと呟き小さく頷きながら

「叩きのめして連れてこようか？」

握り拳を作りながら笑う龍也君。それを見た私はキーボードを叩く手を1度休め

「やめなさい！」

私となのはさん達の怒声が重なる。龍也君は肩を竦めて

「冗談だったのに……」

龍也君が言うのと冗談に聞こえないと心の中で呟き、ISの分析作業に入るのだった……

セカンドシフトをしたISの分析作業を初めて直ぐ感じたのは

(これはもはやISではない……)

私達がこの世界に来る時に持ち込んだ擬似IS、それに酷似している。これは一体どういふことなんだろうなと思ひ観察していると

「これは中々凄いな。龍也」

感心したかのようにフェイトが呟く、正直私もそうとしか言い様が

ない……

(ジェイルが見たら喜ぶだろうなあ……)

完全に異なる技術が1つになっている。あの研究馬鹿が見たら喜ぶだろうなあと思いつながら変化したISを調べる

「これ武装が殆どないですね。龍也さん」

菜の葉の言葉に頷く、何度か一夏達のISを調べた事はあるがその時と姿がまるで違う……武装も残っている事は残っているのだが

「それでも少ないな、これは何故なんだろうか？」

武装が強化されるなら判るのだが、何故武装の数が減っているのだろうか？

「出力の問題かな？」

フェイトがぼそりと呟く。出力か……ノートPCをISに繋いで分析をする。確かに出力は上がっているが、それはあくまで搭載できるSE量や機体の基本レベルの強化だ。武装は関係していない……

(ん？これは……)

目まぐるしく情報を更新しているのを見て……

「それについては判った。まだ完全に強化が終わってないのだろう」

デバイスの情報はとんでもなく膨大だ。いくらこの世界では最高と言える処理速度を持っているISでもデバイスの情報を処理しきるのは大変なのだろう

(まあそうであって欲しいがな)

文明的には私達の方が大分進んでいるのだから早々理解されてしまふのはなんか面白くない……

「まあそう言うわけだから少しはなれて分析しよ」「みぎやああ!!髪！私の髪いいいい!!」手遅れだったか……」

ブルーティアーズが変化してなのはの髪を装甲に巻き込んでいる。フェイトが慌てて引き離そうとしているが

「痛い痛い！フェイトちゃん駄目！髪！髪がああ」

悶絶しているのは、はあ……私は溜息を吐きながらコートの中からハサミを取り出して

「後で整えてやるから我慢しろよ？」

ハサミを向けると泣きそうな顔をしているのはにそう声をかけてから髪を切って引き離す

「ううう……私の髪」

へたり込んで泣いているのはの頭を撫でて離れる。どうも他のISもまだ変化の途中だ。近くに居るとまた巻き込まれるかもしれない……

「……怖い」

髪を掴んで離れるフェイト。自分の髪がなのはと同じ様に装甲に巻き込まれるのを恐れたのだろう。私もコートを掴んで巻き込まれるように警戒しながら離れる

「「なんかグロイ……」」

はやてとなのはとフェイトがそう呟く。めきめきと音を立てて変化していくその姿は正直言つて気持ち悪さもあるが、恐怖心を煽る「こんな変化は初めて見たわね」

若干青い顔をしているツバキさん。どうも完全に変形が終わるまでは分析しても無駄だろう

「1回作業は中断しましょうか?」

ツバキさんの提案に頷く。本当なら今夜のうちに調べたかったが、ここまで変化を繰り返しているなら、完全に変化が終わるまで待つたほうがいいだろう。

「じゃあ今日は休みましょうか?皆も疲れてますしね」

正直結界を張り続けていたので身体も重い。ツバキさんの提案に頷き、私達は自分達の部屋に戻ったのだが

「ううう……私の髪……」

ぐすんぐすんと泣いているなのは。髪は女の命……こればかりは男ではなんとも言えないので

(はやて、フェイト。フォローは頼む)

小声で2人にそう頼のむのだった……任せてと笑うはやてとフェイトがなのはに近づいていくのを見ながら

(ネクロに適応した変化……か)

もしそうだとしたらこの世界では余りに過ぎた力……

(問題にならなければ良いが)

この世界の情勢は余りに厳しい。異常な力を持つ事になってしまった一夏達の身を案じるのだった……

一夏の暴走事件の次の日。私達は地下のハンガーに呼ばれていた。一夏だけは体調が整っていない事もあり、部屋で休んでいる。マドカは心配だからと一夏の部屋で待機している、正直マドカを残すのは不安なので早く用事を終えて戻りたいと思う……ゆつくりとISハンガーへ向かいそこで私達を待っていたのは……

「これが紅椿なのか？」

思わずそう呟いてしまう。目の前の紅椿はあるときよりも更に変化をしている

「……これが僕のラファール？」

「これはどうやって本国に報告すれば良いのでしょうか……」

「まあこれはこれで良いんじゃないか？かなり強くなっているようだしな」

「そうね。これなら足手纏いにはならないかな？」

本国にどうやって報告しようか？と悩んでいるシャルロットとセシリア。それに対してネクロに対して戦力が増したと喜んでいる鈴とラウラ……だけど、私の紅椿だけは他のISと違う変化をしているように見える……

「ツバキ先生。これはどういうことなのでしょう？」

セシリア達のISとは違う、紅椿のシルエットのまま一回り大きくなり、装甲も厚くなっているが、色が抜け落ちている紅椿を見ながら尋ねると

「それは全く違う変化をしているからよ。鈴ちゃん達のがデバイスのデータを元に変化しているのに対して、箒ちゃんのは蓄積したデータを元に変化しているから違う変化をしているのよ」

違う変化……力が増えたのは嬉しいが……何とも言えない気がする……

「元々そう言う機能が紅椿に搭載されていたようだ。だからこそ違う

変化をしたというところだ」

奥の部屋から龍也さんが姿を見せる。いつも一緒なのはさん達の姿が見えないのは何でだろう？

「そして鈴達のISは白式が取り込んだデバイスの情報を元に変化している。デバイスに近くなつたと言えるな」

龍也さんの言葉にラウラとセシリアが

「じゃあ魔法を使えるようになるのですか？」

「もしそうなら興味深い」

2人がそう尋ねると龍也さんは頭をかきながら

「魔法が使えるわけじゃ無い、何といえれば良いのだろうか？ISに僅かながら魔法の力が宿つてくれたと思えば良い」

一夏とか見たいに魔法が使えるわけじゃ無いのか……そう思うと少し残念だ

「それでなんであたし達を呼んだの？これを見せるため？」勿論それだけじゃ無い」

鈴の言葉に笑顔を浮かべながら、龍也は振り返り

「名前をつけるんだ。自分のISに」

名前？それなら紅椿と言う名があるが……私達が首を傾げていると

「ああ、説明が足りなかったな。今までの紅椿やラファールとは違う……魔法的な話で悪いんだが、存在が変わった、名を与える事で姿が固定化されるんだ」

オカルトの話のようで良く判らないが、名前をつければ良いと……そんなの簡単だと思つて見ていると言葉が出ない

「はは、そう簡単には出来ないぞ？新しい存在が生まれる一種の儀式のような物だしな」

儀式……そう言われると背筋が伸びて緊張してくる

「そう力を入れる必要はないんだ、良く耳を澄ませば良い。そうすれば向こうから教えてくれる」

向こうから……それはISからと言う事か

「椅子を用意してある。ISとゆっくり対峙してみると良い」

龍也が用意してくれたパイプ椅子に腰掛ける。なんと表現すれば良いのか判らないが、ISが私を観察しているようなそんな不思議な感じがする。私は大きく深呼吸をして色の抜け落ちた紅椿を見つめるのだった……

「何をしたの?」

パイプ椅子に座ると何の反応も示さなくなった。箒達を見て心配そうに尋ねるツバキに龍也は

「精神的な事ですよ。ISが箒達を知ろうとして、箒達もISを知ろうとしている。それが終わればセカンドシフトは終わるでしょう」

これは本当に一種の儀式だ。ISでもなく、デバイスでもない存在。それは全く異なる存在と言っても良いだろう……故に名を求めている。そしてそれは適当な名前ではなく、唯一の物である存在を示す特別な名前だ。そうそうつけられるものではない

「結構時間が掛かるのね?」

「そう言うわけですね。あんまり邪魔しないで上げてくださいね」

私はその声をかけ地下整備室を後にしようとしたのだった……

箒達が地下の整備室でISと向き合っている頃……

箒達は街に来ていた。気分転換も兼ねているのだが

「なんか出遅れた気がするんだよね」

「ああ。私もそう思う」

一緒に街に来ていたシエンやヴィクトリア達の顔色は浮かない、一夏のISが暴走した時セカンドシフトをした、箒達のISを見て若干出遅れたように感じているのだ

「確かにね。これから戦いは激しくなるかもしれない、力が欲しいと思うのは当然のこと」

「アイスを食べながら言っても違和感しかないぞ?クリスマス」

アイスバーを齧っているクリスマスに弥生が苦笑しながら注意していると

「変な気配……」

列の後ろの方を歩いていた箒が顔を歪めてそう呟く……エリスも

「おかしいですね。人の気配がしない……」

さつきまで聞こえてた車の音や人の話し声が途絶えた事に気づく
「そういえば妙な寒気が……」

「……確かに」

妙な気配を感じクリス達が立ち止まった瞬間。闇が弾け

「へー……いい勘してるわね？褒めて上げるわよ」

着物姿に札を構えたイナリとそして

「まあ気付いた所で何も変わらない。そのIS頂くよ」

Σのマークを手の甲に持つ女性のネクロが同時に現れた

「……龍也さんに連絡をする。合流してくれるまでの時間を稼ぐ……皆協力して」

素早く後ずさりISを展開する簪に続きシエン達もISを展開する。そして簪達は意図しない形でネクロ達との実践が始まった……それはネクロの侵攻が近い証拠でもあった……

素早く陣形を組んで戦う準備を整えているのを見る3つの視線。はやて達だ……なのは髪がボロボロになってしまったので気分転換に街に出かけてきていたのだ。はやて達はビルの上から簪達を見ながら

「さてさてどうしよか？」

助けに行くのは当然だ。だがはやて達は少し悩んでいた……

「実戦だね。危ないところまで様子を見ているのが良いかな」

いずれはネクロとの戦いになる。ならばLV3・4の下位レベル……敵とは充分脅威だが、数としては簪達の方が多いしつかりコンビネーションを組むという事を考えれば充分戦えるレベルといえる

「1度様子を見てみようか？龍也さんには怒られるかもしれないけど……」

龍也がここに居れば怒られる事は判っている。だが常に後ろで龍也やなのはが控えていると判っている状態での実戦に慣れられても困る。だからこそなのはたちは様子を見ることにした。それは褒められた事ではない、だがあえて突き放すことも必要な事だ……なのは

達は直ぐに飛び出せる準備を整えてから、簪達の戦いに視線を向けるのだった。簪とクリスを後衛において、素早く陣形を組みなおし、イナリとラクシユミの攻撃を防いでいる姿があったのだった……

第134話に続く